魔法少女リリカルなのは　永遠の旅人

ガスキン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは　永遠の旅人

【Ｎコード】
Ｎ７８０９Ｋ

【作者名】
ガスキン

【あらすじ】
数多の世界を救ってきた青年は次の世界に渡ろうとしていた。だが彼の力に目を付けたジジイ（神）の手により今までとは少し違う世界に行くことになった。戸惑いながらも青年は人霊剣と共に世界を渡る。※自己満足・設定滅茶苦茶・パクリまくりの超駄文です。そして展開が遅いです。それでもいいという方だけお読みください。ご都合主義の塊です。そういったのが好きでない方は読まれない方がいいと思います。タイトルを少し変えました。無印編完結です。応援して下さった皆様、ありがとうございました！！　日常編も終

了し、いよいよA'ｓ編に突入。無印以上のキャラ崩壊が起こる恐れがありますが、それでもよろしければ読んでやってください。番外編書いてみました。A'ｓ編完結！　みなさん、今まで本当にありがとうございました!!　ｌａｓｔ　ｅｐｉｓｏｄｅであるＳｔｒｉｋｅｒＳ編が始動。最後まで思いっきりとばして書いていきます!!!

プロローグ　終わりと始まり（前書き）

まず初めに、この小説は作者の自己満足の駄文です。故に原作をこよなく愛される方からすれば、原作を冒涜している！と思われる方もおられると思います。そのような方は読まないようお願いいたします。作者の自己満足にわざわざ付き合っていただく必要もございません。それでもいいという菩薩のような方だけお読みください。

それではどうぞ！

プロローグ　終わりと始まり

？

「これでまた１つの世界が守られた」

そう言う男の顔には満面の笑みがあった。だがその男に対している者たちは皆悲しみの表情をしている。

男

「・・・どうした？　これから平和な日々がやってくるのに何故そんな顔をしている？」

一人の少女が泣きながら答える。

少女

「だって！　あなたは消えちゃうんでしょ！　あなたがいなかったらこの世界は滅びていたのに、なのになんで！」

別の女性が続く。

女性

「文字通り全てがな、何故だ！　何故英雄であるはずのお前が消えなければならない！」

仲間たちが次々に口を開く。・・・消える。そう、彼はもうすぐこの世界から消える。人々の記憶の中からも。彼は最初からいなかっ

たことになるのだ。

男
「仕方ない、これが俺という存在なのだから」

彼はこれまで何度も同じ事を繰り返してきた。平和になった世界に彼は必要ないのだ。強すぎる力は新たな災いを呼ぶのだから。

少女
「あなたは！　あなたはそれでいいの？　あなたのしてきたことが全て無かったことになるのよ？」

そういう少女に、男は笑顔で答えた。

男
「みんなが忘れても俺はおぼえている。たとえ最初からいなかったことになっても、俺がおぼえてさえいればそれは事実だ。俺がこの世界に存在していたという確かな事実になるんだよ」

男は言う・・・たとえ忘れられても、自分が憶えていれば絆は失われない・・・と。

男

「皆との思い出がある限り俺はこれからも戦える。だから皆笑ってくれ。最後に皆の笑顔を心に焼き付かせてくれ」

男の体が光に包まれる。とうとう時間のようだ。仲間達は涙を流しながらも笑って見送ろうとしている。

男
「さようなら、皆幸せにな！」

こうしてまた一つの世界が救われ青年は旅立つ。新たな世界を救うために。

？
「良い人たちでしたねマスター」

そう青年に聞くのは人ではなくひと振りの剣。淡く優しい青い光を発している。

男
「・・・ああ、俺は幸せ者だな」

答える青年の顔は、少し悲しそうだった。

？

「そんなことより次の世界はどんなところかのぉ　楽しみじゃ」

また別の剣が赤く淡い光を発しながら青年に語りかける。

剣

「あなたは！　すこしはマスターのお気持ちを・・・」

男

「いいんだ天翔・・・ありがとな神威。励まそうとしてくれたんだろ？」

＜神威＞と呼ばれた剣

「べ、べべべべ別にそのようなつもりではないぞ！　ただ主がいつもの主にもどってくれれば・・・ゴニョゴニョ・・・」

男

「ははっそれが励ましてるっていうんだよ。ありがとな」

神威

「う・・うむ／／」

＜天翔＞と呼ばれた剣

「（神威・・・傷心のマスターに優しくしてポイント稼ごうだなんてなんてうらやまっ・・ゲフンゲフン・・・卑劣な、ここは文句の一つでも・・・）」

男
「天翔もありがとな、俺の気持ちを汲もうとしてくれて」

天翔
「とっとんでもないですマスター！　私がマスターを想うのは当然のことです／／（嗚呼、何も言わなくても私の思いを読んでくれるなんて、やはりマスターは最高です！）

男
「さて、次の世界までまだ時間がかかるから少し眠るか。二人も休んどいたほうがいいぞ」

神威
「妾は主が寝てから寝ることにするぞ。いつ危険が迫るかわからんからの」

天翔
「私もですマスター。お気になさらずお休み下さい」

この時になると決まって二人ともこう言ってきかない。俺としては二人に休んでもらって俺が起きておくべきだと思うんだが。二人とも女性だし、主だからって無理しないでほしい。しかしせっかくの厚意を無下にはできないしな。

男
「わかった、でもつかれたらすぐに代わるから起こしてくれよ」

神威
「了解じゃ」

天翔
「わかりましたマスター。よい夢を・・・」

二人の声を聞きながら俺は意識を落としていく。さて、次の世界ではどうなることやら。二人がいれば問題ないがな。

？
「おお、見つけたぞ、いきのいい者が。ふむ、こやつに決定じゃ」

こうして世界を救った青年は、知らない内に行き先を決められる。そこで運命の出会いを果たすことなど露知らず青年はひと時の安らぎに身を任せていた。

プロローグ　終わりと始まり（後書き）

作者
「ごめんなさい！」

男
「・・・どうした？　いきなり謝るなんて」

神威
「それはもちろん、こんな駄文を人様にさらしたことへの謝罪じゃろう？」

天翔
「いえいえ、生まれてきてしまった事への謝罪でしょう♪」

作者
「重いよ！　ってかなんで♪！？　普通？じゃないの！　俺一応君たちの産みの親だよ？　扱いひどくね？」

天翔
「確かに私たちはあなたから生まれましたが、私たちはマスターさえいればいいんです」

神威
「後は妾たちで物語を作っていくからお主はもう用済みじゃな」

作者
「鬱だ・・・死のう」

男
「おいおい、言い過ぎだぞ二人とも」

二人
「「主（マスター）」」

作者
「おお！　俺の味方は君だけっ「そもそも文才の無いこいつに色々求めるだけ無駄さ。だから俺たちだけでもこのバカを暖かい目で見守ってやろう」・・・やっぱ死のう」

天翔
「あっあのマスター？怒ってるんですか？」

男
「いや、怒ってないさ。そう、俺の名前だけ未だに出てないことなんてちっとも気にしていないさ（黒笑）」

神威
「（ゾクッ）そっそういえば主だけ名前が（男）のまんまじゃな」

作者「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁん！！！　俺なんて、どうせおれなんてぇぇぇぇぇ」

ダダダダダッ！

天翔
「マスター、作者が色々まき散らしながら崖の方へ走って行きまし

た」

神威
「というか、あやつは何がしたかったんじゃ？　話がそれたが何か謝っていた様じゃが？」

男
「何、次の機会にでも俺の名前と一緒に吐かせるさ。・・・もしつまらんものだったら引導を渡してやるがな（ニヤリ）」

神威
「（ビクッ）あっあああ主よ、そろそろ次回予告をしたほうが」

男
「そうだな。次回第一話［名前を呼んｄ「［目の前の惨劇？］お楽しみに！」・・・名前」

天翔
「マスター・・・さすがに今のはアウトです（苦笑）」

第一話　目の前の惨劇？（前書き）

後書きメインです。どうぞ！

第一話　目の前の惨劇?

周りが騒がしい。どうやら次の世界にたどり着いたようだ。だが変だな?いつもなら二人がすぐに起こしてくれるのに今回は何も反応が無い。それどころか、何だか言い争っている声と何かを殴る音が聞こえてくる。またケンカでもしているのだろうか。俺は二人を止めるべく意識を覚醒させていく。すると目の前に・・・いつの間にか人の姿をとってとても晴れやかな顔をした＜神威＞と＜天翔＞の二人と、その傍らでボロ雑巾の様に突っ伏している老人の姿があった。うん、とりあえず一言言わせてくれ・・・

男

「・・・何が起きた?」

第一話　目の前の惨劇？（後書き）

男
「短すぎないか？」

作者
「ギクッ！　ハハハ、ナニヲイッテイルンデスカ？」

天翔
「それよりもマスター」

男
「ああ、作者お前に聞きたいことがある」

作者
「ナッナンデスカ？」

男
「その話し方をやめろ。［獄炎］ぶち込むぞ」

作者
「はい！　申し訳ありません！」

男
「前回の後書きで何故謝ったんだ？」

作者
「いや、俺が小説に目覚めたのは去年の秋頃からなんだけどさ」

神威
「確かに、毎日狂ったように読んでおったのぉ・・・そのせいで大学の単位をいくつか落としたのはどうかと思うがの」

作者
「グサッ」

男
「仕方ない、馬鹿だからな」

天翔
「そうですね。馬鹿ですから」

神威「それにしても何が面白いんじゃ？ただの夢物語じゃろ？」

作者
「（ブチッ！）だってさ！　しょうがないじゃん！　面白いんだもの！　それに、原作で死ぬしかなかったキャラが助かった時の感動が貴様らにわかるか！？　いやわからないだろう俺は泣いたさ嬉しかったからな！　くだらないと笑うやつもいるかもしれん。だが俺にとってはとても素晴らしいものだったんだよ。俺をボロクソに言うのは構わんが、他の作者の方の作品を馬鹿にするような発言は絶対に許さんぞ！！！」

男
「作者・・・」

天翔
「・・・神威、今のはあなたが悪いです」

神威
「うむ・・・すまぬ作者妾が悪かった。許してくれ」

作者
「わかってくれればいいさ。あと、謝るなら俺じゃなくて他の作者さんに謝ってくれ・・・で、話は戻るけど面白い作品はやっぱり更新が遅いんだよ」

男
「そりゃあそうだろう。充分ネタを考えてきっちり構成してから投稿してるんだから面白いんだろ。中には毎日のように投稿している人もいるがそれは文才のある人なんだろうな」

天翔
「あなたのようにその場の思いつきだけで書くような人には毎日なんて一生無理でしょうけどね」

作者
「・・・否定できません（泣）」

神威
「しかし、それと謝罪がどう結び付くのじゃ？」

作者
「続きが気になって連日もやもやするくらいなら、自分で書けばいいと思ってな」

男
「・・・まさか」

作者
「そう、俺が小説を書き始めた理由はそれだ」

三人
「うわぁ・・・」

作者
「で、いざ書き始めるとすげー大変な事がわかってさ。早く更新してくれーと思ってたことが申し訳なくなってな」

天翔
「それで謝ったと？」

男
「呆れて物も言えんな」

神威
「さっきカッコイイ事言ったのに台無しじゃな」

作者
「うううううるさーい！　おもしろいものを書く人が悪いんだ。だから俺がこんな駄文をさらす羽目になったんだちくしょう！」

ぷちん

神威・天翔
「「あ・・・」」

男
「クックック、もう我慢の限界だ。奴を・・・消す」

天翔
「おっ落ち着いて下さいマスター！」

神威
「さすがに［絶炎］はやりすぎじゃ！」

男
「問題無い。あいつは自転車で一回転しても無傷だった男だ。死にはしないさ」

二人
「「（理由になって無い！）」」

作者
「なんだよ！　何か文句でもっ（男の眼を見た）何かご用でしょうか（汗）」

男
「ああ、はなし・・・いやＨＡＮＡＳＩがあるんだが（黒笑）」

作者
「ヒィィィィィィ！　なっなんでしょうか（涙目）」

男
「後書きばっか書いてないで・・・本文書きやがれぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！」

作者
「ぎゃあああああああああああああああ！！！」

ひゅうううううううううう・・・・・・・・ぐしゃっ！

男
「後、俺の名前もな」

神威・天翔
「「（ガクガクブルブル）」」

男
「（どうしたんだ二人とも?）とりあえず次回　第二話　［さすがにやりすぎ・・・いや、なんでもありません］お楽しみに！」

作者
「ガン・・バ・リ・・・マス・・ガクッ」

第二話　さすがにやりすぎ・・・いやなんでもありません（前書き）

やっぱり難しいですね。でも、まぁ自己満だしいいや。ではどうぞ！

第二話　さすがにやりすぎ・・・いやなんでもありません

男が寝入った直後

神威
「天翔、主の様子は」

天翔
「お休みになられました。・・・さて神威、いつも通り抜け駆けは無しですよ」

神威
「解っておる。もう主のお仕置きはゴメンじゃからな」

そういった二本の剣が光に包まれる。途中天翔が「マスターのお仕置き・・・はぁはぁ」と言っているのが聞こえたが恐らく気のせいだろう。

光が治まる。するとそこには剣は存在せず、代わりに二人の女性が立っていた。二人を表すなら赤と青　一人は赤い髪を腰まで伸ばし紅く鋭い瞳はまるでルビーのようで、鮮やかな着物を纏っている。

もう一人は水色の髪に蒼く慈愛に満ちた瞳はサファイアの如き輝きを秘めている。だが何故メイド服なのか?似合ってはいるが浮いている。とにかく浮いている。浮きまくりでっ「しつこいですよ♪」・

・・はい。

二人は男に近づいていく。若干鼻息が荒いのは気にしてはいけない。二人はいつもこうして眠りにつく男の寝顔を見るのが趣味となっているのだ。いつもの凛々しい顔もいいが、寝ている時のあどけない顔もまたいいのだ。ちなみに写真もとっている（本人の許可なし）

神威
「・・・主／／」

天翔
「・・・マスター／／」

そして今まさに寝顔を見ようとしたその瞬間・・・

？「ほっほぅ、ようやく見つけたぞい、選ばれし者よぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！」

神威
「チッ外したか」

天翔
「何をやっているのです神威。そのような不埒者などさっさと消滅させて下さい」

突然話しかけてきた老人に、神威は特大の炎を放つ・・・がその人物はそれを避ける。大抵の敵はこの一撃で消滅したので神威は若干驚いたがすぐに笑みに代わる。

神威「ほぅ、妾の一撃を避けるか・・・ならば当たるまで撃ち続けてけてやろう！」

そう言って、神威は先ほどよりは小さいが大量の炎を呼び出した。いつの間にか天翔も大量の氷の刃を周囲に展開させていた。二人の様子を見て老人は冷汗をながしながら二人に訪ねた。

老人
「あのー、何故話しかけただけなのにそこまで殺る気満々なのでしょうか（汗）」

二人
「「我らの数少ない楽しみを邪魔する者は・・・塵も残さず消滅しろぉぉぉぉぉぉ！！！」」

老人
「おっひょぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！」

その後老人は男が目覚めるまで熱さと寒さに苦しみ続けることになるのだった。

第二話　さすがにやりすぎ・・・いやなんでもありません（後書き）

神威
「おい作者よ」

作者
「ん？　何？」

神威
「なんじゃあの妾の説明は！　短すぎるじゃろ！」

天翔
「私なんてメイド服・・・趣味ですか？　趣味なんですね？　変態ですね。」

神威
「しかも赤と青なんて・・・我等は何処の超〇神じゃ！」

作者
「光になぁれぇぇぇぇぇぇぇ！！！」

天翔
「うるさいですよ。『氷円舞』！」

作者
「ぎゃあああああ！！！」

男
「二人ともそこまでだ」

作者
「ああ！　やっぱり君だK「後は俺がやる」またこのパターンかよぉぉぉぉ！」

男
「俺言ったよな？　次の機会までに俺の名前を決めてなかったら引導を渡すって」

神威・天翔
「「あっ・・・」」

作者
「いや、あの、その、そう！　次です！　次の話でちゃんと明かしますから」

男
「本当だな？」

作者
「はいぃ！　次のサブタイトルを見ていただければ信じていただけると思いますですハイ！」

神威
「どれどれ・・・うむ、主よそやつのいうことはどうやら本当のようじゃ」

天翔
「えーっと・・・第三話　自己紹介は大切なことです・・・との事ですマスター」

男
「そうか、ようやく・・・ようやくこの時が来たんだな。おい作者ここまで引っ張ったんだ。ふざけた名前だったら俺がこの物語を終わらせるからな」

作者
「主人公に終わらせられる小説って何!?　とっとにかく次回お楽しみに!」

神威
「相も変わらずまとめ方が下手じゃな」

作者
「・・・言わないで（泣）」

老人
「・・・・・・・・・ワシの出番は?」

第三話　自己紹介は大切な事です（前書き）

今回から主人公視点が主になります。読みにくくなったらごめんなさい。それと、お気に入り登録して下さった方、本当にありがとうございます！　今回の後書きは短くしようと思っていたのですが、うれしかったので書きまくったらまた長くなりました。もしよかったら見てください。では、どうぞ！

第三話　自己紹介は大切な事です

目が覚めた俺はとりあえず状況を確認するために二人に尋ねた。

俺
「どうしたんだ二人とも？　何かトラブルでもあったのか？　それに、その老人は・・・」

神威
「おお！　主目が覚めたのか」

天翔
「おはようございますマスター。いえ、大したことではございません。ただ私たちの楽しみを奪ったこの者に制裁を与えただけです」

制裁って・・・いや、いくらなんでもやりすぎな気がするが。

俺
「楽しみって・・・そんなに楽しい事なら俺も起こしてくれればよかったのに」

俺がそう言うと二人はなぜか顔を赤くしながら答える。風邪か？

神威

「なっなんでもないぞ主！そっそう、大したものではないぞ」

天翔
「むしろマスターが起きてしまうと楽しめなくなるもので・・ムグッ！」

男
「え？」

神威
「（馬鹿者！何をばらそうとしておる）」

天翔
「（すみません。つい焦ってしまいました）」

老人
「あのー・・・そろそろいいかの？」

俺たちが話していると、さっきから横たわっていたボロ雑巾・・・もとい老人が話しかけてきた。あの二人にやられて立ちあがるなんてタフだな。

俺
「そういえばあなたは？こんなところにいるんだからただのご老人じゃないでしょう？」

よく見ればいつの間にかさっきまで俺たちがいたはずの次元通路で

はなく、一面真っ白の場所に今はいる。おそらく目の前の老人が転移させてきたんだろう。

老人
「ほっほっ、人に名を尋ねるならまず自分からじゃないのかの？」

神威
「ふむ、ジジイよ、そんなに消し炭になりたいのかの？」

天翔
「マスターになんて無礼な・・フフフ・・クダケチリタイノデスネ」

ふむ、確かにそうだな。だがなぜだろう？　名前を名乗るだけなのになんでこんなに心が震えるのだろう？　例えるならようやく待ち望んだ時が来たような感じだ。あと神威よ、話が進まないからおとなしくしていてくれ。天翔は・・・見ていない。俺は何も見ていないぞ。老人が震えているが気のせいだ。そうに決まっている！

俺
「そうですね。失礼しました。ほら二人も何でそんなに殺気立っているのか分からないが落ち着いてくれ」

神威
「ふむ・・主がそう言うなら。妾は神威じゃ」

天翔
「私は天翔と申します・・・命拾いしましたねあなた」

そして・・・

俺

「俺の名前は・・・秋月　一成です」

秋月　一成　この青年と二つの剣が織りなす物語　これから青年がどのような道を歩むのか　まだ誰にもわからない。

第三話　自己紹介は大切な事です（後書き）

一成
「やっと俺の名前が出たな」

天翔
「おめでとうございますマスター」

神威
「しかし、主人公の名前が出るのに四話もかかる小説も珍しいの」

一成
「しかたないだろう。バカ（作者）が勢いだけで書いているんだから」

作者
「フッフフフフフフフフ」

一成
「・・・どうしたんだ？　あいつ？」

天翔
「そうですね。いつもなら反応があるのに、ハッ！　まさか私たちに罵倒される内に目覚めたんじゃ・・・」

一成
「目覚めたって何に？」

天翔

「いえ、マスターはお気になさらずに（マスターに知られるわけにはいきません！）」

神威
「しかし、傍から見ると気味悪いことこの上ないぞ」

一成
「そうだな。神威アレを元に戻すから力を貸してくれ」

神威
「承知したぞ主」

神威、剣の姿に戻る。

一成
「軽くスターダストでも撃つか」

神威
「あっ主よ！　それは上級魔法じゃぞ！」

天翔
「威力が高すぎのような気がしますが・・・」

一成
「問題無い。あいつなら」（とても晴れやかな笑顔）

神威・天翔
「「・・・・（汗）」」

作者
「フフフ・・・（ゾクッ！）なっなんだこのプレッシャーは！？」

一成
「よぉ作者。戻ってきたか」

作者
「あのぉ、なんで神威を構えているんですか」

一成
「何、お前が気持ち悪い笑顔で笑い続けていたから正気に戻してやろうという俺の優しさだ」

作者
「そんな優しさいらんわぃ！　ていうか俺は元から正気だ！　嬉しいことがあったから喜んでただけ！　人として当然の感情！　わかるでしょ！」

一成「なるほど」

作者
「それだけ！？　もう少し突っ込もうよ！　少しは気になるでしょ？」

一成・神威・天翔
「「「全然」」」

作者
「・・・・・（泣）」

一成
「あー・・・泣き顔酷いから泣くな。戻ったけどこのままぶち込むか？　スターダス」」

作者泣き止む（この間０．２秒）

神威・天翔
「「早っ！」」

一成
「で？　何があった？」

作者
「なんだよ結局聞きたいｎ「マナよ・・・」お気に入り登録してくださった方がいるんです！！！」

一成・神威・天翔
「「「・・・・・・・・・」」」

作者
「？　あっあのー「「「えぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！！」」」っくりしたぁ！」

一成
「馬っ馬鹿な・・・こんな駄文が？」

神威
「作者の自己満足のこの駄文が？」

天翔
「文才の欠片もないこの駄文が？」

一成・神威・天翔
「「「お気に入り登録だってぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！」」」

作者
「駄文駄文て・・・もう慣れたけど」

神威
「かっ考え直すのじゃ！　今ならまだ間に合う！」

天翔
「そうです！　今ならまだ浅い傷で済みます！　評価していただくのはとてもありがたいのですが、こんな本文そっちのけで後書きで滅茶苦茶やる小説なんてどうせすぐ書かなくなるのですから後悔しますよ！」

一成
「貴様・・・そこまで腐った奴だったのか」

作者
「ハイッ！？　何が！？」

一成
「どうせ裏で何かやったんだろう？　ヘタレだが不正はしない奴だと思っていたのに見下げ果てた奴だな」

作者
「いやいや！　何もしてないって！　俺自身信じられないんだか「

問答無用！消し飛べ！　スターダスト！！」らぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！」

ひゅうううううううう・・・・キラッ

神威
「おお！　落ちてこんぞ」

一成
「あれを喰らって星になるだけなんて、どんだけ丈夫なんだ？」

天翔
「丈夫で片付けられる事なんでしょうか？」

一成
「そんなことより、改めてお気に入り登録してくれた方々ありがとうございます」

神威
「こんな駄文を評価してくれてうれしく思うぞ！」

天翔
「これからもがっかりさせることが多いと思いますが読み続けていただけたら幸いです」

一成
「よしっ！　俺はこれからあの馬鹿を連れ戻してくる。さっさと本編を進ませないとな。期待して下さる方たちのために」

天翔
「いってらっしゃいマスター。お帰りをお待ちしています」

神威
「主よ、次回予告を忘れておるぞ？」

一成
「今回はパスだ。馬鹿にサブタイトルを聞く前にぶっ飛ばしたから分からんのだ」

神威
「主・・・」（汗）

第四話　世界移動（前書き）

やっと移動させる事が出来そうです。あと、少し残酷な描写があるかもしれません。では、どうぞ！

第四話　世界移動

一成
「それで、あなたは一体？」

目の前の老人に俺は尋ねる。すると老人は軽い口調でとんでもないことを口走った。

老人
「ワシは神じゃ」

は？　今何と言った？　神？　神ってあの神か？　紙じゃないよな？・・・ああ、わかったこの老人は疲れているんだ。だから少しばかりおかしなことを言ってもおかしくないな。・・・あっそうだ

一成
「なぁ天翔、疲労回復の魔法ってあったか？　使えるならこの人にかけてあげてくれないか」

天翔
「そうですねぇ・・・一つあります。一時的に疲労を感じなくなるものです。まぁ副作用として１０日間ほど寝たきりになりますけど」

神
「ちょっとまてぇい！　何物騒な術をワシにかけようとしておる！

ワシは疲れてなどおらん！　何故そんな話になったんじゃ！」

一成・天翔
「「疲れで変な電波を受信した哀れな老人を癒してあげようかと」」

神
「電波など受信しておらん！　ワシは神じゃ！　確かに傍から聞くとちょっとヤバいかもしれんが神なんじゃよぉぉぉ！」

神威
「名乗るのは勝手じゃが・・・少々威厳が足りなさ過ぎではないか？　もっとこう・・・相応しい名があると思うのじゃが」

とりあえず考えてみる・・・

一成
「神（仮）はどうだ？」

神（仮）
「おいいいいいい！　（仮）って！　ワシ本物！　本物じゃから！」

神威
「なら神（笑）はどうじゃ？」

神（笑）
「それも駄目ぇぇぇぇぇぇぇ！　何か神を名乗って悦に浸ってるイタイやつみたいじゃから！！」

天翔
「なら神（爆）はどうですか？」

神（爆）
「死ぬぅぅぅぅぅぅ！！！　ワシ死んじゃうから！　どう考えてもロクな目に［ドパァァァァン］ぎゃぁぁぁぁぁ！！　腕が吹っ飛んだぁぁぁ！　変えて！　早く変えてぇぇぇぇぇ！」

それからもいくつか案がでたが、どれもいまいちだったので結局・・・

一成
「話し合いの結果、神（仮）に決定しました」

理由は吹っ飛んだ腕をくっ付けたりする結構強力な力を使えるが、神が持つであろう威厳がまるでないからである。理由を話すと「どうせワシは下っ端の神じゃ・・・」とつぶやいていた。というか、神に下っ端とかあるのか？

一成
「さて名前も決まったし、そろそろ俺たちを呼んだ理由を聞かせてください」

俺がそう言うと神（仮）は短く、だがハッキリとこう言った。

神（仮）
「ある世界を救ってほしい」

その言葉だけで充分だ。俺が旅人となって自らに課した誓い、全てを救えずとも手の届く範囲のものは救ってみせる。偽善者だと言われようともこれだけは譲れない。そう誓ったのだから。

一成
「わかりました。ではどんな世界なのかを教えてください」

俺がそう言うと神（仮）は何故か唖然としている。変な事を言ったか？

神（仮）
「ずっずいぶんあっさり決めるのじゃな。もっと悩むかと思ったのじゃが」

一成
「俺ならなんとかなると思って俺を呼んだんでしょう？　なら、なんとかしてみせますよ」

俺の言葉に神（仮）嬉しそうにほほ笑んだ。

神（仮）

「やはりお主を選んで正解じゃったな。お主のような者を英雄と言うんじゃろうな」

神威
「当然じゃ！妾の主なのじゃからな」

天翔
「『私たち』のですよ神威。それにそんなのは当然の事です。」

神（仮）の言葉にそれぞれ答える二人・・・俺はそんな大それた者じゃない。俺は・・・

神威
「どうしたのじゃ主？」

神威が俺の顔を見て心配そうに話しかけてくる。情けないな、心配させてしまったか。俺は「なんでもない」と言い神（仮）に尋ねる。

一成
「話がそれましたね。それで自分たちが行く世界とは？」

俺が聞くと神は今度も短くハッキリと答えた。そして今度はこちらが唖然とする番だった。

神（仮）
「お主たちに行ってもらうのは・・・アニメの世界じゃ！」

三人
「「「・・・・ハイ？」」」

神（仮）
「じゃから、アニメじゃよ。ア・ニ・メ。お主も知っとるじゃろ？ガ〇ダムとかドラ〇もんとか。ああいった世界じゃよ」

いや、知ってはいるが。今までとはまたずいぶん違う世界だな。

天翔
「待って下さい。アニメというのは既に結末が決まっているのではないですか？」

そうだ、現実と違ってアニメは終わりが来る。そしてどんな物語が展開するのかも既に決まっているのだ。それを勝手に変えるのはまずいんじゃないのか？

神（仮）
「確かにそうじゃ。じゃがワシには我慢できんのじゃ。つくられた物とはいえ、その中で人々は確かに生きているんじゃ。それが理不尽な目にあってあまつさえ死んでいく。それが許せないんじゃ。じゃがワシには見ていることしかできん・・・ワシは無力じゃ」

・・・確かに、作られたものだろうと関係無い。現実も空想も無い。人の命は等しく尊いものだ。それにしても・・・大した人だ。神というのはこんなにも慈愛にあふれた存在なのか。こんな人が下っ端なんて、納得がいかないな。（仮）どころじゃない。この人こそ真の神だ。ならば俺もその気持ちに応えよう。そう思い声をかけようとした。

一成
「神・・・「ワシの大好きなレ○ちゃんを自爆させる世界なんて、主要キャラだと思っていたキャラを最終回あたりで一気に死なすＳ○ＥＤの世界なんて、ワシは認めん！　認めんぞぉぉぉぉぉ！！！」・・・は？」

沈痛な面持ちをしていた神（仮）は突如叫びだした。何なんだ一体？

神威
「主、こやつもしや」

天翔
「己の自己満足を満たすためにマスターを利用しようとしているのではないでしょうか？」

そうかもしれない。しかし・・・

一成
「いや、行こう。アニメの世界に」

神威
「主？」

天翔
「・・・よろしいのですか？」

一成
「あの人の言うこともっともだ。作られたものだろうと関係ない。そこに助けを求めている人がいるなら俺は助けたい。だから二人も嫌かもしれないけど力を貸してくれないか？」

そう言って頭を下げる。断られたら最悪俺一人だけでも行こう。そう思っていると・・・

神威
「主よ、何故頭を下げるのじゃ？」

顔を上げると、そこには笑顔の二人がいた。

天翔
「私たちがマスターのお願いを断るわけ無いじゃないですか」

神威
「そうじゃ、むしろ喜んでついて行くぞ」

やっぱり二人は優しいな。自分たちより弱い俺なんかの頼みを聞いてくれるなんて。俺は思わず二人に抱きついてしまった。

ガバッ！

神威
「あっあああああ主！？／／」

天翔
「マ、マスター！？／／」

一成
「ありがとう！　二人とも！」

そのまま二人の顔を見る。すると二人とも見る見るうちに顔が赤くなっていく。そして・・・

神威
「・・・へぅ」

天翔
「・・・あぅ」

ガクリ×2

気絶した。

一成

「あれ？　どうしたんだ二人とも？・・・意識が無い！？　なんで？　どうして？　医者ぁ！　医者を呼んでくれぇぇぇぇぇ！！！」

すっかりテンパってしまった一成。自分のせいだと気づいていない。

一成・・・恐ろしい子！！！

十分後・・・

なんとか意識を取り戻した二人。気絶した理由を聞いたらなんでも俺のせいらしい。・・・何かしたか俺？　神（仮）がまだ何か叫んでいる・・・何だろう、ムカついてきた。

一成

「なぁ二人とも。俺さっきまで感動してたんだ。こんなに素晴らしい人が神でよかったと思っていたんだ。なのに何故だろう？　今はあの人を全力でボコりたいんだが」

神威
「主よ、妾も同じ気持ちじゃ」

天翔
「私もです。いっそのことときれいさっぱり消滅させませんか？」

天翔が物騒な事を言っているが何故か否定できない。むしろ賛同している自分がいる。うん、そうしよう。

神（仮）
「そうじゃ！　今こそ原作ブレイクの時なのじゃ！　そうすれば助けた女子が「あなたが私たちを助けてくれるように働き掛けて下さったんですね！」「素敵！」「あなたに付いて行きます！」・・・なぁ～んてウハウハな展開にっ」

ガシッ！

ＯＫ素敵な本音をありがとう神（仮）よ。これで心おきなく貴様を葬れる。二人を見るととても晴れやかな笑みをしている。恐らく俺も今同じ表情だろう。

神（仮）
「なんじゃ！ワシは今急がしっ」クルッ「ヒィィィィ！！！」

肩を掴んだ神（仮）がこっちを向いたと思ったら急に震えだした。
どうしたのか？　何か恐ろしいものでも見たのか？　後ろを見る。
何もない。おかしな人だな。

一成
「どうしたんですか？　そんな世界の終わりを目の当たりにしたような顔は？」

そう尋ねると神（仮）が答える。声が上ずっている。

神（仮）
「おっお主ら何をそんなに怒っておるのじゃ」

怒ってはいない、怒ってはいないさ。ただ・・・

一成・神威・天翔
「「「自分の胸に聞いてみろぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！」」」

そういって力を解き放つ。術でも技でもない。純粋な力の塊が放たれる。赤・青・そして銀色の三つの光が神（仮）に撃ち込まれた。

神（仮）
「ＧＹＡＡＡ

出会って一番の絶叫を聞く。一応神を名乗るなら死にはしないはずだ。どんな世界かも聞いてないのに消滅させるようなことはしないさ。

数十分後・・・

一成
「なんでこんな目にあったか分かりますね？」

駄神
「ハイ、スミマセンデシタ。チョウシニノリスギマシタ」

ふむ、分かってくれたようだ。ん？　名前が変わってる？　ああ、あの後神威が「あのようなもの駄神で充分じゃ！」と言っていたので即採用した。駄神にそのことを伝えると文句を言ってきたが、優しく微笑みながら説得すると泣きながら了承してくれた。まさか涙を流すほど喜んでくれるなんてな。

一成
「アニメの世界と言うけど、どのアニメの世界なんですか？」

すると神はどこからかＤＶＤを持ち出してきた。そのパッケージには・・・

一成
「魔法少女・・・」

神威
「リリカル・・・」

天翔
「なのは・・・」

そう、そのパッケージには確かにこう書かれていた・・・

魔法少女リリカルなのは・・・と。

一成
「タイトルから察するに、魔法のある世界のようだな」

神威
「コソコソと魔法を使う必要がないぶん、楽じゃな」

天翔
「このなのはという少女が主人公なのでしょうか？」

天翔がパッケージに写っている女の子を指さして言う。・・・幼いな。小学生か？

一成
「簡単なあらすじだけでも知っておいたほうがいいな」

どんなことが起きるか知っているだけでもアドバンテージになるからな。

駄神
「そう思って、ホレッ！」

駄神がそう言うと目の前にテレビとＤＶＤレコーダーが現れた。何をするつもりだ？

駄神
「これからリリカルなのはシリーズを全部見てもらう！」

駄神はいそいそとＤＶＤをセットする。

一成
「簡単にで「何を言う！　この作品を［簡単］になど説明できるわけないじゃろ！　みっちり全部みてもらうぞぃ」なっ！」

そういって駄神は俺を何かで拘束した。神威と天翔も同じように拘束されていた。クソッ！　何だこれは!?

駄神
「それは［バインド］といっての、リリなのの世界ではメジャーな魔法じゃ。ちなみにワシの力を全て込めてあるから破壊は難しいぞ。さぁ！　あきらめておとなしく観るのじゃ」

こんなことのために全力出すな・・・と言いたいところだがやめた。せっかくだ、観てみようじゃないか。神威なんてもう食いついてるしな。

観賞中・・・

数時間後

一成
「・・・」

神威
「うぅっグスッ」

天翔
「タイトルと違ってずいぶん重い作品ですね」

天翔の言うとおりだ。この少女にこんな戦いだらけの未来が待っているのか。いや、彼女だけじゃない。他にも多くの少年少女がつらい目に遭いながらも立派に戦っていた。戦いの中で失われた命もあった。それでも彼女たちは前を向いていた。・・・俺なんかよりよっぽど強いな。

駄神
「どうじゃ？　把握したかの？」

一成
「ええ。でもこの世界は最終的に救われているんじゃないですか？」

それなのに救ってほしいとはどういうことだ？

駄神
「正確には救ってほしいのは世界ではなく、彼女たちなのじゃ」

一成
「・・・どういうことです？」

駄神
「分かるじゃろ。世界は救われる。じゃが彼女たちはどうじゃ？幼いころからつらい目に遭っている子が大半じゃ。彼女たちを・・・彼女たちの心を救ってやってほしいのじゃ」

心を救えか。俺に出来るのか？　だが彼女たちの力になってあげたいと思う自分がいる・・・そうだ、出来る出来ないじゃない。やるかやらないかだ。

一成
「分かりました。正直どこまでできるか分かりませんがやらせてもらいます」

駄神
「おお！　やってくれるか。恩にきるぞぃ！」

早速移動の準備だな。

神威
「主！」

神威が話しかけてきた。目が真っ赤だ。さっきまで泣いてたしな。何故か今は目に炎を宿しているが。

神威
「主！　フェイトは絶対に救うのじゃ！　妾も全力でサポートするぞ」

神威が興奮しながらそう言った。そういえば、無印（ていうのか？）を観ている時から泣きまくりだったな。

天翔
「マスター・・はやてちゃんの力になってあげて下さい。神威同様私も全力でお力添えいたしますので」

天翔も若干目を潤ませながらそう言ってきた。

一成
「もちろんだ。彼女たちだけじゃない。他の人たちも助けてみせる」

それが俺の使命であり誓いだ。

駄神
「さて、それじゃあそろそろお主達を移動させるぞ。」

駄神の声と共に俺達の足元に穴が開く・・・ってちょっと待て！

一成・神威・天翔
「穴ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？！？！？」

そのまま俺達は落ちていく。

駄神

「細かい事はこっちでやっとくから安心しろ。それじゃあよい旅を」

一成

「ッ！」

あの駄神、俺が旅人だってこと知ってたんだな。とりあえず次に出会ったら今度こそ消滅させることを決めながら俺の意識は落ちていった。

第四話　世界移動（後書き）

作者
「祝！　俺以外のいじられキャラ登場！」

一成
「何言ってんだ。この後書きには主要な人物しか出ないんだから、2～3話しか出ないチョイキャラは出ないぞ」

作者
「何いいいいい！　これで暴力地獄から解放されると思ったのに」

神威
「お主からそれを取ったら何も残らんぞ」

天翔
「むしろそれがあるからここそこうしてこの場にいられるんじゃないですか？」

作者
「ＯＴＬ」

一成
「さて、毎回毎回だらだらやるのもめんどくさいのでさっさと次回予告やるか」

神威
「次回、第五話　邂逅の時」

天翔
「タイトルから察するに、ようやく原作キャラと絡めそうですね」

一成
「相変わらずひねりの無いタイトルだな」

第五話　邂逅の時（前書き）

介入開始です。設定がひどいです。キャラの口調がおかしいかもしれませんがご容赦ください。では、どうぞ！

第五話　邂逅の時

ひゅうううううううう・・・ドサッ！

一成
「ぐあ！」

神威
「うあ！」

天翔
「きゃっ！」

衝撃が体を襲う。どうやら到着したようだな。

一成
「なんて目茶苦茶な移動の仕方だ」

やっぱりあの駄神は消滅確定だな。周りを見渡す・・・どうやら森の中らしい。辺り一面木に囲まれている。神威と天翔も無事のようだ。

一成
「神威・天翔ケガはないか？」

神威
「主、無事じゃった・・・か」

天翔
「マスター、大事ないです・・・か」

二人がこちらを見て固まる。ん？　気のせいか二人とも・・・

一成
「なあ二人とも、背が伸びてないか？」

さっきまで見下ろしていた二人の顔が今は見上げなくてはいけない。
すると、二人がプルプルと震えだした。

一成
「どうしたんだ？　寒いのか？」

神威・天翔
「「かっ・・・」」

一成
「か？」

神威・天翔
「「カワイイッ！！」」

一成
「うおぉ！」

突然二人が抱きついてきた。

神威
「主！　主！　あるじぃ～♪」

天翔
「マスター・・・上目使いは反則です！　狙ってるんですか？　狙ってるんですね♪」

五分後・・・

一成
「はあっはあっはあっ」

神威
「うぅ・・」

天翔
「むうぅ・・」

何とか二人を引き剥がすことに成功したので改めて状況を確認することにした。二人が不満そうだが・・・何故だ？

一成
「俺もしかして・・・小さくなってる？」

俺がそう言うと二人が首を縦に振る。天翔が鏡を渡してくれた。するとそこには・・・・確かに幼い少年が写っていた・・・が。

一成
「これ、俺じゃないだろ？」

そうだ。俺はこんなに端整な顔立ちをしていない。鏡なんて久しぶりに見るが、平凡な何処にでもいるような普通の顔だったはずだ。

主人公スキルの一つ［無自覚］発動！

神威
「・・・相変わらずじゃな主よ」

天翔
「マスターらしいですけどね」

俺の言葉に二人が苦笑いを浮かべている。相変わらず？　俺らしい？　どういうことだ？　俺が二人の苦笑いの理由を考えていると、

何処からか聞きなれた声が聞こえてきた。

駄神
「あ～聞こえるかの？」

この声は・・・

一成・神威・天翔
「「「駄神・・・」」」

そう、俺達を移動させた張本人の駄神だ。そういえば細かい事はこっちでやっておくとか言っていたな。色々聞いてみるか。

一成
「俺のこの姿は何ですか？」

駄神
「なに、その姿の方が彼女達に接触しやすいと思っての。それにお主ほどの力があれば元の姿にも戻れるじゃろ？」

一理あるな。確かに同年代の方が彼女達も心を開いてくれるかもしれないな。駄神にしてはいい判断だな。

神威・天翔
「「駄神！」」

駄神
「なっなんじゃ？」

神威・天翔「「G・J　（です）！」」

神威と天翔が虚空に向かって親指を立てている。G・J？　どういう意味だ？

駄神
「お主達の家・生活費といった物もこちらで用意したぞ。後で直接頭に情報を送るからの」

一成
「分かりました。色々ありがとうございます」

駄神
「いや、ワシの頼みを聞いてくれたんじゃ。これくらいお安い御用じゃよ。それじゃあ後は頼んだぞ」

その言葉を最後に声が聞こえなくなった。同時に頭の中に今まで知らなかった情報が大量に入ってきた。ふむ、家の場所は・・・

一成
「・・・は？」

神威
「どうしたんじゃ主？」

一成
「いや、今家の場所を確認したんだがな」

天翔
「何処なのですか？」

一成
「・・・翠屋の近く」

神威・天翔
「「えっ？」」

確かに接触はしやすいだろうけど・・・露骨すぎるだろ。

・・・・・・・

さて移動する前に力の確認だな。

神威
「神威、この世界のマナの量は？」

神威
「多い方じゃと思うぞ。主の力もほとんどが使えるじゃろ」

天翔
「ただ・・そのお体で全力が出せるのかは分かりません。マスターのお力にお体が耐えられないかもしれませんし」

確かに子どもの体で全力はきついかもしれないな。

一成
「だが、元の姿に戻れば問題ないだろ」

使えないなら使えるようにするだけだ。

天翔
「確かにそうですが、肉体変化は膨大なマナを消費します」

神威
「そして、もし全てのマナを失ってしまったら・・・」

一成
「消滅する・・・だろ?」

旅人は世界を移動できるように体をマナで構成している。マナさえ

あればどんな世界にも移動できるし生きていける。逆を言えばマナが存在しなければ力も発揮できない上に、ヘタをすれば消える。死ぬのではない、消滅するのだ。何も残さずに。

一成
「分かってる［無理］はしないさ」

俺がそう言うと二人はため息をついた。

神威
「このことに関してはいまいち信用できんのじゃ」

天翔
「ええ、それに［無理］はしなくても［無茶］はしますもんね」

一成
「・・・さぁ確認もできたし、そろそろ移動しよう」

そう言って俺は歩きだした。二人が後ろで何か言っている。

神威
「誤魔化したな・・・」

天翔
「誤魔化しましたね・・・」

一成
「（聞こえない・・・俺には何も聞こえないぞ・・・）」

移動している途中たくさんの視線を感じた。よく見てみると、すれ違ったりする男のほとんどが神威と天翔を見ていた。まぁ確かに二人とも美人だしな、見惚れるのも分かる気がする。

女性の何人かが俺を見ている様な気がしたが、気の所為だろう。

神威
「主よ、何だか視線を感じるのじゃが？」

天翔
「私もです、どこかおかしいところでもあるのでしょうか？」

二人が不思議そうにしている。まったく鈍感だな。「お前が言うな！」・・ん？なんだ今の声は。

一成
「違うよ、二人があまりに綺麗だから皆見惚れているんだよ」

俺の一言に二人の顔が赤くなる。怒ったのか？　何かカンに触るようなことを言ったか？

神威
「そんな・・綺麗だなんて／／」

天翔
「こんな場所で・・マスター大胆です／／」

ブツブツ何か言っているようだが生憎聞きとることはできなかった。

不良
「なぁ彼女達、ちょっと俺達に付き合わない？」

不良Ａ・Ｂ・Ｃが現れた！

一成・神威・天翔
「「「・・・・・」」」

一成達は無視をした。

不良Ａ
「おいおい無視するなよぉ」

不良Ｂ

「一緒に楽しい事しようぜ」

不良C
「ちょっとだけでいいからさ」

突然現れた男たちはなおもしつこく話しかけてくる。

神威
「主、吹き飛ばしていいかの？」

天翔
「マスター、消し去ってよろしいですか？」

二人が声をそろえて物騒な事を言っている。一般人になんてことを言っているんだ。

一成
「何か用があるんだろう。俺が聞いてみるよ」

俺は三人に尋ねた。

一成
「何か御用でしょうか？」

不良A
「ああん！　ガキに用はねえんだよ！」

不良B
「とっとと失せろ！」

不良C
「俺達は後ろのお姉さん達に用があるんだよ！」

三人が口ぐちにそう言ってきた。なるほど、これはナンパというやつか？　聞いたことはあるが実際に見るのは初めてだな。そう思いつつ神威達の方を向くと・・・

神威
「・・・・（ピキピキ）」

天翔
「・・・・（ビキッ）」

そこには、二人の鬼が立っていた。

二人は無言で男達に近づいていく。あの目は殺る気だ。

不良A
「おっ♪　お姉さん付き合ってくれるの？」

神威
「ああ、付き合ってやろう」

天翔
「とりあえず、何処か人気のない所に行きませんか？」

不良Ｂ
「おほっ！　お姉さん大胆だねぇ！」

不良Ｃ
「じゃあなガキ、お姉さん借りて行くぜ。もう会うこともないだろうけどな。ひゃはははははは！」

五人はそのまま路地裏に入って行った。俺は来るべき時にそなえて耳を塞ぐ。

それから数秒後・・・

不良Ａ・Ｂ・Ｃ
「「「ぎゃあああああああああ！！！」」」

・・・・合掌。

神威

「ふんっ、主にあのような口をききよってからに」

天翔
「当然の報いですね」

しばらくして、路地裏からスッキリした顔をした二人が出てきた。・・・何も聞くまい。

そして・・・

一成
「着いたぞ」

神威
「ふむ、なかなかの家じゃな」

天翔
「さっそく入ってみましょうマスター」

俺達の前には立派な家が建っていた。大き過ぎず、小さ過ぎない俺好みの家だった。

一成
「今日からここが俺達の家か」

とりあえずリビングに入る。結構広いな。ソファに座ると二人も腰かけた。

一成
「まずはあいさつだな」

天翔
「そうですね。高町家の方々に御会いしないと」

神威
「翠屋のケーキはどんな味なのかの？」

一成
「ははっ、買い物に行くんじゃないんだがな・・・第一金がない」

天翔
「そういえばお金も用意してあると言っていましたが」

そうだった。でも何処に？

神威
「主、これじゃないのか？」

神威が指すのは金庫・・でかいな。いくら入っているんだ？

天翔
「手紙が置いてありますが」

その手紙を見て愕然とする。その内容は・・・

《とりあえず、当面の生活費として3億ほど入れておくぞ。べつにやましい金じゃない。ゴッドパワーなら宝くじくらいちょちょいのちょいじゃからな。豪遊するもよし。慎ましやかに暮らすもよし。その金庫はお主の魔力に反応して開くから防犯の面でもバッチリじゃ！》

また無駄な事に力を使って、こんなんだから下っ端のままじゃないのか？

一成
「十万ほど財布に入れとくか」

金庫に触れる。するとカチッという音と共に金庫が開く。中には札束の山があった。やり過ぎだろ・・・

一成
「さて、それじゃあ翠屋に行くか」

神威
「よし！　行くぞ主！」

天翔
「お供しますマスター」

一成
「・・・ちょっと待ってくれ二人とも」

神威
「主？」

天翔
「マスター？」

うん、やっぱり・・・

一成
「その呼び方は不味くないか？」

主やマスターなんて普通呼ばない。もしかしたら変な目で見られるかもしれない。

一成
「というか二人のことをどう説明すればいいんだ」

まさか剣の化身だなんて言えるはずもないしな。

一成
「・・・神威は従姉、天翔はメイドさんってのはどうだ？」

これなら無理もないな。天翔なんてメイド服だし。

神威
「わっ妾が主の従姉！？」

天「メイド・・嗚呼なんて素敵な響き。マスターに身も心も捧げる正に私のためにあるような職です！」

神威は慌てだし、天翔は恍惚な表情をしている。正直怖い。

一成
「嫌なら別の「「ぜひそれで！！」」・・分かった」

さて、これで違和感はないはず・・・だよな？

一成
「次は俺の呼び方だな」

神威・天翔
「「呼び方？」」

一成
「二人とも、これからは俺の事を名前で呼んでくれ」

神威・天翔
「無理（じゃ）（です）！」

一成
「即答・・・」

神威
「そのような大それたことできるわけないじゃろ！」

天翔
「そうです！　そんな恐れ多いこと・・・」

一成
「前から言ってただろ。堅苦しいのは嫌だって。それに、これからは同じ家で過ごす家族なんだから名前で呼ぶのは当然だろう」

俺がそう言うと、なぜかいきなり二人が泣きだした。

神威
「主よ・・・妾は一生主に付いて行くぞ！」

天翔
「マスター・・・この身朽ち果てるまでお傍におります」

二人が泣きやむまで待つことにした。

一成
「・・・落ち着いたか？」

うなずくのを確認して再度話をする。

一成
「とりあえず、一成と呼んでくれ」

そう言うと二人はしばらく黙っていたが、やがて意を決したように

神威
「かっ・・・かじゅなり・・・／／／」

天翔
「一成様・・・／／／」

神威よ何故かんだ？　そんなに俺の名前は難しいか？　それに天翔、様ってなんだよ・・・

天翔
「私はメイドですからお仕えする方に様を付けるのは当然です」

そうなのか？　よく分からんが、本人が言いやすいならそれでいいか。それじゃあ最後に・・・

神威・天翔
「「（妾）（私）達の名前？」

一成
「女性の名前が神威と天翔なんて変だろ？　二人はどんな名前がいい？」

本人の希望があればすぐに決まるんだけど。

神威
「一成が付けてくれ」

天翔
「一成様にお任せします」

こんな重大な事を俺任せにしないでほしいんだが。神威・・・天翔・・・神・・天・・・

一成
「・・・神奈（カナ）と天音（アマネ）なんてどうだ？　頭文字をとってみたんだが？」

我ながら安直なネーミングだな・・・

神威
「神奈か・・・うむ！　妾は今から神奈じゃ！」

天翔
「天音ですか・・・さすが一成様！　素晴らしいセンスです」

よかった気に行ってくれたようだな。

一成
「よし！　決めることも決めたし今度こそ出発だ」

俺達は翠屋へと出発した。

女性
「いらっしゃいませ。翠屋へようこそ」

俺達が中に入ると、一人の女性が出迎えてくれた。この人は確か・・・
桃子さんだったか？　そうだ。なのはちゃんに似ているし間違いないだろう。

桃子
「初めての方ですね」

一成
「はい、今日この近くに引っ越してきた秋月　一成です。今日はご挨拶に参りました」

神奈
「妾は神奈。一成の従姉じゃ」

天音
「私は天音と申します。一成様のお世話をさせていただいております。以後お見知りおきを」

俺達が自己紹介すると桃子さんは若干驚きながらも・・・

桃子
「あらあら、これはご丁寧にどうも。私は高町　桃子です。一成君よろしくね」

と返してくれた。しかし、若いな。確か美由紀さんという娘さんも

いたはずだが姉妹といってもおかしくはないだろう。

それからしばらく話していると、また別の女性が現れた。

一成
「（この人は確か・・・）」

桃子
「あら美由紀、どうしたの？」

女性
「お母さん、なのは見てない・・ってお客さん？」

一成
「初めまして。今日引っ越してきた秋月　一成と言います。今日はご挨拶に参りました。どうぞよろしくお願いします」

そう言ってお辞儀をする。顔を上げると何故か唖然とした女性の顔が目に入った。

女性
「えっ、ええ。私は高町　美由紀。よろしくね一成君。・・・ところで君何歳？」

一成
「五歳ですが・・・どうしました？」

俺がそう言うと美由紀さんはまた驚いていた。よく見ると桃子さんも若干驚いている。

美由紀
「ウソッ!?　なのはと同い年!?　なのにその礼儀正しさ・・・あり得ない」

桃子
「ずいぶん大人びているのね。びっくりしちゃったわ」

まぁ見た目は五歳でも実年齢はずっと上だしな。自然とこういう挨拶も身に着く。神奈と天音の自己紹介も終え、話題が移る。

桃子
「そうだ、美由紀私に何か用があったんじゃないの?」

美由紀
「なのはを見てない?　さっきから探しているんだけど何処にもいないの」

一成
「なのは?」

桃子
「あなたと同い年の私の娘よ。いつもならもう帰ってきている時間なのに・・・」

心配そうな桃子さん。美由紀さんも不安そうな顔をしている。

一成
「よかったら俺が探してきましょうか？」

桃子
「いいの一成君？」

一成
「ええ、五歳の子がこんな時間になっても帰らないのは心配ですし、できればその子と友達になりたいですしね」

美由紀
「君も五歳でしょ・・・」

美由紀さん、そこは突っ込んだらいけません。

桃子
「お願いできるかしら？」

一成
「任せて下さい」

美由紀
「栗色の髪を片結びしている子よ」

一成
「分かりました。神奈、天音先に帰っててくれ。ケーキもいくつか買っといてくれよ」

神奈に財布を投げ渡しながら、俺はなのはを捜すために翠屋を後にする。五歳の子が行くような所は・・・公園か？

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

桃子
「大丈夫かしら？」

桃子が心配そうにしている。娘の為とはいえ、出会ったばかりの、しかも娘と同じ年の少年を家の事情に巻き込んでしまったことに罪悪感が募る。それは美由紀も同じようで

美由紀
「お母さん、やっぱり私も探しに行ってくる」

そう言って一成の後を追おうとした。しかし・・・

神奈

「必要ない」

神奈が短く告げる。

天音
「一成様なら必ずなのはちゃんを見つけてきて下さいますから心配ございません」

さらに天音も続く。

桃子
「一成君の事信頼しているのね」

その言葉に二人は・・・

神奈・天音
「「家族　（じゃから）（ですから）」」

と、笑いながら答えた。

ＩＮ　ＳＩＤＥ

とりあえず、近くの公園にやってきたが・・・

少女
「うぅっ・・ヒック・・・」

いた・・・栗色の髪を結んでいる少女。間違いない、あの子がこの物語の主人公、高町　なのはだ。なにやら泣いているようだが、あの子に涙は似合わないな。そう思い俺は彼女に近づいて行く。

一成
「どうしたんだ?」

少女
「ふぇ?」

こうして、俺はこの物語の主人公、高町　なのはに出会ったのだった。

第五話　邂逅の時（後書き）

作者
「二人の名前も決まったし、やっと少し落ち着いてきたな」

一成
「何言ってんだ。落ち着く暇があったら更新しろよ」

作者
「うぐっ！　がんばります」

神奈
「一成～♪」

天音
「一成様♪」

一成
「ん？　なんだ神奈、天音？」

神奈
「もっと名前を呼んでほしいのじゃ！」

天音
「お願いします一成様」

作者
「神奈♪　天音♪」

ビュオン！

作者
「ぎゃばら！！！」

神奈
「気安く妾の名前を呼ぶな。この下郎」

天音
「マスターから頂いた名前が汚れます。ヘタレのくせに」

作者
「ヘタレ関係ないだろぉぉぉぉ！！　考えたの俺だよ！」

神奈
「本編の中では一成が考えたことになっておる」

天音
「私たちにとってそれが唯一の事実です。後のことは知りません」

作者
「ずいぶん都合のいい事実だなオイ！」

一成
「・・・毎回毎回叫んでるが何か？　〇魂のマネか？」

神奈
「かたや超人気作品、かたや自己満足の駄文」

天音
「人気者を真似たって人気が出るとは限りませんよ？」

作者
「お前らが叫ばしてんだろうがぁぁぁぁぁぁ！！！」

一成
「うるさい」

ヒュッ！

作者
「ぶべらっ！」

一成
「よーし、掃除も終わったし次回予告するか」

神奈
「次回第六話　勘違いって怖いよね」

天音
「お楽しみに」

作者
「誰か・・タスケテ・・・」

第六話　勘違いって怖いよね（前書き）

・・・やってしまった。おそらく今までで一番ひどい回です。こんなのなのはじゃない！　と思った方はすぐに戻ってください。ではどうぞ！

第六話　勘違いって怖いよね

なのはＳＩＤＥ

いい子でいよう・・・

お父さんがお怪我をして入院してからお母さんも、お姉ちゃんも、お兄ちゃんも変わっちゃった。お母さんは笑わなくなって、お姉ちゃんもお店のお手伝いで忙しくて、お兄ちゃんはずーっと剣の修業をしてる。なのはも何かお手伝いしようと思ったけど、お母さんが・・・

桃子

「なのはは何もしなくてもいいのよ」

って言って何もさせてくれない。お姉ちゃんも同じ事を言ってくるし、お兄ちゃんは何も言ってくれない。もしかしてなのははいらない子なの？　いらないから何もさせてくれないの？　いらないからかまってくれないの？　なら、いい子になったらかまってくれるの？　いらない子じゃなくなるの？　なら・・・なのははいい子でいるの。一人でも大丈夫なの。誰にも迷惑かけないようにしてたらいい子になれるかな？　なれたらいいな。そしたらみんな褒めてくれるかな。

なのは

「あっ・・・」

気が付いたらもう周りは暗くなってた。どうしよう・・・こんな時間までお外にいたなんて、またお母さん達に迷惑かけちゃう。いらない子になっちゃう。そんなのいやなの。そう思うととても悲しくなってきた。早く帰らないといけないのに涙が止まらない。

なのは
「うぅ・・グスッ」

悲しくて、寂しくて、泣いているだけだったそのとき・・・

男の子
「どうしたんだ?」

なのは
「ふぇ?」

いきなり話しかけられてビックリして変な声が出ちゃったの。そして、声のした方を向くと・・・

男の子
「なんで泣いているんだ?」

一人の男の子が心配そうになのはを見ていた。

なのはＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＩＮ　ＳＩＤＥ

一成
「なんで泣いているんだ」

俺はなのはに理由を聞いた。彼女は不思議そうな目で俺を見ている。
しまった、知らない人間にいきなり話しかけられたら普通驚くよな。

一成
「すまない、いきなり話しかけて、俺の名前は秋月　一成。もも・・
君のお母さんに頼まれて君を迎えにきたんだ」

俺がそう言うとなのはは一瞬嬉しそうな顔をしたが、すぐにまた暗
い顔をした。

なのは
「なのははひとりでもだいじょうぶなの」

そう言ってまた塞ぎこんでしまう。一人？　どういうことだ？

一「なにかあったのか？」

俺が聞くとなのはは答えてくれた。父親の入院。家族の変化。そして自分の存在が家族に迷惑になっている。だからいい子でいようと決心した。

全て話し終えたあと、彼女は・・・

なのは
「だからひとりでもだいじょうぶなの。だいじょうぶにならないといけないの」

と笑った。だが俺には分かる。あの笑顔は偽物だと。その裏で今も彼女は泣いているのだと。俺は気がつくと彼女を抱きしめていた。

なのは
「ふぇぇ／／　なっなに？」

一成
「大丈夫。君はいらない子なんかじゃない」

なのはの体がピクリとするのを感じながら俺は続ける。

一成
「よく今まで我慢したな。えらかったぞ。でも、もういいんだよ。君のお母さんもお姉さんも君のことをとても心配していたよ。いらないって思う子のためにあんなに心配なんかしないよ」

なのはの体が震えだす。

一成
「もう一度言うよ・・・君はいらない子なんかじゃない」

なのは
「うっううう」

一成
「我慢せずに泣いていいよ。そうすればスッキリするさ」

俺の言葉にとうとう限界が来たのだろう。なのはは大声をあげながら泣き出した。

なのは
「ふぇぇぇぇぇぇぇぇぇん!!　さみしかったよぉ!!　つらかったよぉ!!!」

なのはは泣き続ける。だがもう心配はいらない。泣きやむころには心の不安は払拭されているだろう。

十分後・・・

一成
「落ち着いたか？」

なのは
「う、うん。あの・・ありがとう・・・なの」

まだ涙は流れているがそれでも笑顔でお礼を言ってくるなのは。

一成
「やっぱりな」

なのは
「？　やっぱりって？」

一成
「君には笑顔が一番似合うよ」

俺の一言になのはの顔が赤くなる。あれ？　初対面の人間にこんな

こと言われて怒ったのか？

なのは
「ええ／／　そっそうかな？」

怒ってないのか。ならいいが、そろそろ本格的に暗くなってきたな。

一成
「なのはちゃん、暗くなってきたからそろそろ帰ろう」

なのは
「あれ？　なんでなのはのなまえをしってるの？」

首をかしげるなのは。やっぱりさっきのは聞いてなかったのか。

一成
「さっきも言ったけど、君のお母さんに君を捜すように頼まれたんだ。名前はその時に知ったんだよ」

なのは
「そうだったんだ」

一成
「さぁ早く帰ろうか」

そう言って歩き出そうとするが、何故かなのはが歩こうとしない。

一成
「どうしたんだ？　どこか怪我でも・・・」

なのは
「あ、あのねかずなりくん」

怪我の場所を探そうとする俺になのはが話しかけてきた。・・俺の名前は覚えてくれたんだな。

一成
「ん？　どうしたの？」

なのは
「て、てをつないでほしいの」

小さい声で手をおずおずと差し出してきながらなのはが言った。確かに五歳の子にとってこの暗さは怖いものがあるんだろうな。

一成
「いいよ。ホラッ」

なのはの手を掴む。小さい手だ。これからこの手でたくさんの人を

救っていくんだろうな。手をつなぎながら俺はそんなことを考えていた。

なのは
「えへへ・・・かずなりくん♪」

一成
「何だ？」

なのは
「なんでもないの♪」

こうして俺はなのはと一緒に翠屋に帰って行った。

第六話　勘違いって怖いよね（後書き）

作者
「・・・・・・」土下座中

三人
「・・・・・・」それを無言で見つめている。

一成
「何か申し開きは？」

作者
「イエ、ナニモゴザイマセン」

神奈
「ということは認めるのだな？」

作者
「ハイ、ゲンサクヲミテモイナイノニカッテニカキマシタ」

天音
「では、それ相応の罰を受けることに反論はありませんね？」

作者
「ハイ、コンカイハドンナバツデモウケイレマス」

一成
「それでは執行人を呼ぶ。・・来てくれ」

なのは
「はじめましてなの作者さん」

作者
「え？　なのは？　なのはが執行人なの？」

なのは
「そうだよ、私が作者さんに罰を与えるの」

作者
「ほっ（なのはならそんなにひどいことはしないだろう。この小説の中ではまだデバイスも持ってないしな）よかっ「レイジングハートお願い」「Ｏｋ．ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ」たぁぁぁぁぁぁ！！！」

なのは
「どうしたの作者さん？」

作者
「何で！？　どうしてレイハ持ってんの！？　てかよく見たら成長してるし何故！？　ＷＨＹ！？」

一成
「未来のなのはがお前にＳＬＢをかましたいって言うから連れてきた」

作者
「時間を飛び越えるなぁぁぁぁ！！！」

神奈
「というか、なのはの言葉に漢字が入っている段階で気づくじゃろ

普通」

天音
「作者ですからね。仕方ないです」

一成
「それじゃ早速、なのは頼む」

なのは
「うん！　作者さん・・・これが私の・・全力全開！！！」

作者
「待てぇぇぇぇぇ！！　マジに待てぇぇぇぇぇぇい！死ぬから。死んじゃうから！」

なのは
「大丈夫なの。ギャグ漫画では、爆発したりしても次の回にはピンピンしてるの」

作者
「その法則は漫画だけだからぁぁぁぁぁ！！！　おい！　一成、神奈、天音！　助けてくれ！　いやっ助けてください！　お願いします！！！」

一成・神奈・天音
「「「グッドラック」」」（親指を立てながら）

作者
「人でなしどもがぁぁぁぁぁぁ！！！」

なのは
「スターライトォォ・・・ブレイカァァァァァァァ！！！！」

作者
「～～～～～～！！！」（声なき声）

なのは
「・・・ふぅ、スッキリしたの♪」

一成
「お疲れさんなのは」

なのは
「これくらいお安い御用なの♪」

天音
「マスター・・・困った事態が」

一成
「ん？」

神奈
「またあの者に次回のタイトルを聞く前に消滅させてしまったんじゃ」

一成
「別にいいだろ。今回の目的は次回予告じゃなくて作者への制裁だったからな」

なのは

「だから問題無いの」

神奈
「なるほど」

天音
「それなら全く問題ないですね」

一成
「さて、今回はこの辺で」

なのは
「また次回をお楽しみに！」

第七話　話さなければ伝わらないこともある（前書き）

自分の考えた設定で自分が苦しんでます。

第七話　話さなければ伝わらないこともある

なのは
「ただいま～！」

一成
「ただいま戻りました」

無事になのはを見つけ翠屋に戻ると、彼女の姿を見た桃子さんと美由紀さんが駆け寄ってきた。

桃子
「なのは！　無事だったのね」

なのは
「うん！　なんともないの！」

美由紀
「よかった・・・心配したでしょ！」

なのは
「ごめんなさいおねえちゃん」

美由紀さんに怒られてしゅんとなるなのはだったが、心配という言葉をきいて嬉しそうにしている。

一成
「ほらっ、なのはちゃん」
なのは
「う、うん」

帰る途中、俺はなのはに自分の思いをしっかり伝えるように言った。
なのはは最初嫌がっていたが、俺が説得するとなんとかうなずいてくれた。

一成
「桃子さん、美由紀さん。なのはちゃんがお二人に話したいことがあるそうなので、聞いてあげてください」

桃子
「あら、何かしら？」

二人がなのはを見つめる。なのははうつむいたまま話そうとしない。
やっぱり怖いんだろうな。自分の思いを伝えた上で拒絶されるかもしれないという恐怖があるんだろう・・・しかたない、すこし背中を押してあげるか。

一成
「なのはちゃん」

なのは
「かずなりくん・・・」

一成
「大丈夫、なのはちゃんの考えているようなことは起きないから。勇気を出して伝えるんだ。自分の気持ちを」

俺の言葉になのははまだためらっていたが、やがてゆっくりと口を開いた

なのは
「あのね・・おかあさん、おねえちゃん」

そしてなのはは二人に話す。迷惑をかけないようにいい子でいようとした事。本当はもっと構ってほしかったことを時々つまりながらもしっかりと伝えた。

桃子
「・・・ごめんなさいなのは」

桃子さんがなのはを抱きしめた。

なのは
「おかあさん?」

桃子
「あなたの気持ちに気付いてあげられないなんて母親失格ね。いらない子なわけないじゃない。あなたは私の大事なかけがえのない娘よ」

なのは
「お、おかあさぁぁぁぁぁぁん！！」

なのはも桃子さんを抱きしめ返す。また泣いているが、今度は悲しみからではなく嬉し泣きだろう

美由紀
「私もゴメンなのは。でも、私もお母さんと同じ気持ちよ。なのはは私の大切な妹よ」

美由紀さんもそう言ってなのはの頭を撫でた。・・・もう大丈夫だろう。お互いちょっとした誤解があっただけだ。それが解けた今、もうこんなことは起きないだろう。

神奈
「さすがじゃな一成。転移してきた初日にもう三人の心を救ったか」

天音
「さすが一成様ですね。私は信じておりました」

三人の様子を眺めていた俺に神奈と天音が話しかけてきた・・・って

一成
「二人とも、帰ったんじゃないのか？」

神奈
「妾が一成を残して先に帰るわけないじゃろ」

天音
「私もですよ一成様。それに、お好みのケーキが分かりませんでしたので直接お聞きしようかと思いまして」

一成
「別に気にしなくてもよかったのに」

なのは
「かずなりくん・・そのひとたちはだぁれ？」

俺達が話していると、いつの間にか泣きやんでいたなのはが聞いてきた。そういえばこの二人とは初対面だな。

一成
「俺の家族だよ。二人とも自己紹介してくれ」

神奈「
妾は神奈じゃ、よろしくの！」

天音
「私は天音と申します。よろしくお願いしますね」

なのは
「なのははなのはなの！　えっと、こちらこそおねがいします！」

さっそく打ち解けたようだ、これからお互い関わっていく訳だし、よかった。

桃子
「一成君・・ありがとう」

桃子さんが俺に礼を言ってきた。・・はて？　礼を言われるようなことをしたか？

一成
「どうしたんですか？」

桃子
「あなたがいてくれなかったらなのははは何も言わずに我慢して、孤独に心を押しつぶされていたはずよ。でも・・あなたがなのはの心を救ってくれた。分かるわよ。家を出た時と今では全然顔が違うもの」

そこまでたいしたことしてないけどな。

一成
「俺はただなのはちゃんの話を聞いて背中を押してあげただけですよ」

桃子
「それでもよ、本当にありがとう」

まぁ、力になれたのならよかった。

一成
「これからはもっと話をしてあげて下さい。相手の事を想った行動でも、ちゃんと言葉にしないと伝わらないことがありますから」

桃子
「ええ、今回の事で身に染みたわ」

美由紀
「一成君。もう一度聞くけど・・君本当に五歳?」

一成
「はい」

美由紀
「今の言葉、五歳児の発言とは思えないんだけど・・」

美由紀さんが何か言っているが小さくて聞こえない。なんだろう?

気になる。

桃子
「やっぱり・・・あの人の事を引きずっているのは私だけじゃなかったのね」

桃子さんが悲しそうな顔でそう呟く。

一成
「あの人とは？」

美由紀
「私達のお父さんのことよ。今入院してるの。なのはには聞いた？」

一成
「ええ、お父さんがケガをして入院していると」

言い方は悪いが高町家がこんな事になった原因の人だ。

桃子
「そうなの。入院してしばらく経つけど未だに意識が戻らないのよ」

一応大丈夫なのは知っているが、何も言わない。余計な事を言って混乱させたくないからな。

一成
「大丈夫ですよ」

桃子・美由紀
「「え？」」

一成
「こんなに心配してくれる家族の方がいるんです。きっと元気になってくれますよ。だから信じて待ってあげて下さい」

桃子
「ふふっ、そうね。家族の私達が信じてあげなくちゃ」

美由紀
「君が言うとなんでだか信じられるのよね」

そう言って二人は微笑んだ。少しは不安を解消できたか？

天音
「一成様。そろそろ・・」

会話が終わったのを見計らって天音が話しかけてきた。時計を見ると、来た時から三時間も経っていた。こうしてみるとずいぶん長い時間ここにいたことになるな。

一成
「もうこんな時間か、桃子さん、美由紀さん。それでは俺達は帰ることにします」

桃子
「あらもう帰るの？今日は本当にありがとう。またいつでも来てね」

美由紀
「サービスするからね～」

一成
「ははっ、ありがとうございます。神奈、帰るぞ」

なのはと遊んでいた神奈に声をかける。するとなのはもやってきた。

なのは
「かずなりくん・・かえっちゃうの？」

なのはが悲しそうな表情で俺を見つめる。

一成
「また来るよ。それに俺の家は近くなんだ。今度遊びに来なよ」

一転して嬉しそうな顔をするなのは。・・・お菓子とか買っとかな

いとな。

なのは「わかったの！　楽しみなの！」

こうして翠屋を後にする俺達。後は士郎さんと恭也さんに会えば高町家の人全員と知り合える訳だが、恭也さんはいいとして・・・問題は士郎さんか。目覚める事は分かっているが、なのはたちに早く元気になって欲しいしな。

一成
「神奈、天音、士郎さんに会ってくる」

神奈
「ケガを治すんじゃな？」

一成
「ああ、早くなのはちゃん達に本当の意味で元気になって欲しいからな」

天音
「お供いたしますか？」

一成
「いや、多分俺の力だけでなんとかなると思うから、二人は夕食の準備でもしておいてくれ」

天音
「分かりました。それではお先に失礼いたします」

神奈
「妾の手料理を楽しみにしておくのじゃ！」

天音「何を言っているのです！　あなたには何もさせませんよ！」

神奈
「な、何故じゃ！？妾も一成の為に何か作りたいのじゃ！」

天音
「あなたの作るものは料理じゃありません！　そう言って以前一成様を三日間昏睡状態にさせたのは何処の誰ですか！」

神奈
「うぐ、あっあれは・・そう！　材料が悪かったんじゃ」

天音
「そんなわけないでしょう！　とにかく、あなたは何もせずにテレビでもみてなさい！」

昏睡状態？　記憶にないが、そういえば・・以前目が覚めたら神奈に泣きながら謝られたときがあったが・・・あれか？

神奈
「一成！お主からも言ってやってくれ！」

一成
「天音・・・・・頼んだ」

天音
「お任せ下さい一成様」

神奈
「一成～」

すまない神奈、今倒れるわけにはいかないんだ。心の中で謝りながら俺は転移を開始する。目標は士郎さんの病室だ。さて・・・この世界での初めての力の使用だが大丈夫だろうか？　若干の不安を抱きつつ、俺は跳んだ。

おまけ

一成が桃子、美由紀と話している時・・・

神奈
「のぉなのは、一成と何を話したんじゃ？」

自己紹介が終わりお互いの事を話している中、神奈がなのはに尋ねる

なのは
「ほぇ？　なにってなに？」

天音
「桃子さんから聞いていた様子とだいぶ違いましたから。きっと一成様がなにかされたのだろうと思いまして」

なのはは公園での事を思い出す。泣いていた自分に探しに来てくれた男の子。自分の話を真剣に聞いてくれた。それに・・

なのは
「だ、だきしめてくれたの／／」

神奈・天音
「「えっ！？」」

自分達の想像と違った事実に驚く二人。精々頭を撫でるくらいだと思っていたのだが、まさかそこまでするとは思ってもいなかった。

なのは
「かえるときにはてもつないでくれたの♪」

神奈・天音
「手！？」

さらに、自分達はしてもらった事がない行為に二人は軽く落ち込むがすぐに持ち直す。本当に聞きたいのはこれからだ。

神奈
「なのは、率直に聞くぞ・・一成に惚れたか？」

なのは
「ほれる？」

天音
「簡単に言うと好きになったのかということですよ」

天音の言葉に固まるなのはだったが、数秒後・・・

なのは
「ふぇぇぇぇぇぇぇぇ／／　す、すきってそんな！」

なのはは顔を真っ赤にしながら叫んだ。

神奈
「惚れたな」

天音
「ホレましたね」

ここに新たなフラグが立ったことを二人は確信し、自分たちの主はこの世界でいったいいくつのフラグを立てるのか？　未だにあわあ

わしているなのはを見ながらそんなどうでもいいことを考えていたのだった。

第七話　話さなければ伝わらないこともある（後書き）

一成
「ようやく力が使えそうだな」

神奈
「しかし、進み具合が遅いの」

天音
「まだ一日目ですしね。戦闘が始まるのはいつになることやら」

一成
「色々盛り込み過ぎた結果こうなったらしいが、それでこの内容とはな」

天音
「ええ、もって行き方に無理がありますし」

神奈
「特に最後のおまけなんて完全に蛇足じゃろ」

一成
無理やりフラグ立てようとした結果こうなったらしい」

天音
「これが作者の限界でしょう。前回もそうでしたが、そもそも女の子の心情を表現するのに無理がありすぎるんですよ」

一成

「そうだな、改めて他の作者の方の作品のクオリティの高さを再認識することになったな」

神奈
「・・・・」

天音
「神奈、どうしました？」

神奈
「いや・・そろそろ作者が出てきて何か叫ぶのかと思ったのじゃが」

天音
「そういえば今回はまだ一回も出てきてませんね」

一成
「ああ、バカなら今回は出ないぞ」

神奈
「ん？　何故じゃ？」

一成
「前回のスターライトブレイカーを喰らってからまだ復活してない」

天音
「あれはすごかったですね。私も少し鳥肌が立ちました」

神奈
「うむ、生命力だけは評価できるあの者を消滅させかけたあの一撃は大したものじゃ。あの若さであれだけの威力、成長したらどれだ

けのものになるのか・・・空恐ろしいの」

一成
「そうだ、今度ふざけたことほざきやがったらＳｔＳのなのはを呼んで撃ってもらうか」

神奈
「それはいい考えじゃ！」

天音
「どうなるのでしょうか、楽しみです」

一成
「さて、バカの抹殺計画も思いついたことだし、そろそろ次回予告するか」

神奈
「作者がいないが、今回は分かるのかの？」

一成
「まぁ適当でいいだろ。次回、第八話　力は自分が正しいと思った事に使え。お楽しみに」

天「どんどん作者の存在価値が無くなっていきますね・・・」

第八話　力は自分が正しいと思った事に使え（前書き）

ネタが無いです・・・

第八話　力は自分が正しいと思った事に使え

一成
「・・・転移完了だな」

目の前にはベッドに横たわる男性・・・この人が士朗さんだ。

一成
「まずは結界だな」

俺は誰も入ってこないように結界を張ることにした。これで気兼ねなく力を使える。

一成
「とりあえず、アナライズで状態を確認するか」

士郎さんの様子を確認するため、アナライズを使用する俺。これは対象の情報を知ることのできる技である。簡単に使用できる技であるが、唯一の欠点は自分より力を持つものの情報は知ることが出来ない事だ。ちなみに俺は未だに神奈と天音の情報を詳しく知る事ができない。以前その事を二人に話すと「乙女の秘密を知ろう等とは・・主も男じゃったんじゃな♪」「私はマスターになら全て知られても／／」と何故か嬉しそうだった。

話がそれたな。さて、士郎さんの容態は・・

一成
「・・・これは酷いな」

俺はその内容に愕然とする。常人ならとっくに死んでいるほどのケガだ。同時にそれほどのケガを負いながらも生きようとしている士郎さんにも驚く。すごい生命力だな。これなら俺の力でも充分だ。そう思い俺は詠唱を開始する。発動するのは癒しの神技。

一成
「マナよ・・癒しのオーラとなりて彼の者を包め。アースプライヤー」

士郎さんの体を緑色の光が包む。対象の生命活動を促進させ傷を癒すのがこの術だ。まずは意識を取り戻してもらわないとな。

光が鎮まってから数分後、士郎さんの目がゆっくりと開かれる。

士朗
「う・・」

一成

「目が覚めましたか？」

士朗
「君は？　それにここは何処なんだ？」

一成
「俺の名前は秋月　一成。なのはちゃんの友達です。そしてここは病院ですよ士郎さん」

俺の言葉に反応する士郎さん。

士朗
「なのはの？　それに病院とは？　僕はいったい？」

一成
「あなたは大怪我をしてずっと意識不明だったんですよ。俺も詳しくは知りませんが」

士朗
「そうだったのか・・それにしてもなぜ君はここに？」

不思議そうに俺を見る士郎さん。確かにこんな時間にここに子どもがいるのはおかしいな。

一成
「俺の事は後でいいです。それよりも」

俺は士郎さんになのは達の事を伝えた。自分がケガをしたせいで家族がバラバラに成りかけた事を。

士朗
「そんな・・僕のせいでそんなことに・・・」

士郎さんは悲痛な声を出した。

一成
「だからこそ士郎さんの元気な姿を見せて安心させてあげて欲しいんです。俺がここに来た理由もそれです」

士朗
「じゃあ・・僕が目を覚ましたのも君のおかげなのかい？」

一成
「そんな訳ないじゃないですか。俺はただの子どもですよ」

士朗
「ただの子どもはこんな時間に病室に忍び込まないと思うんだけど」
（汗）

一成
「気にしないでください。気にしたら負けです。」

士朗
「あ、ああ、わかったよ」

一成
「それでは俺はそろそろ失礼します。あと、今度お会いしても初対面だということにしておいてください」

士朗
「分かったよ。君がそう言うなら」

こうして俺は士郎さんの病室を後にする。これで高町家の人にも笑顔が戻るだろう。俺の力が役に立ってよかった。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

一成が去ったその後。

ナース
「次の病室は・・と」

一人のナースが病室の見回りをしている。

ナース

「高町さんか・・・ご家族も気の毒ね、入院してしばらく経つのに未だに目も覚まさないんだから」

一人そんな事を言いながら病室のドアを開ける。するとそこには・・・

士朗
「あれ？　看護婦さん見回りですか？　ご苦労様です」

昨日までずっと意識不明だった士郎が目を覚ましていた上、こちらに話しかけて来たのだ。

ナース
「せ・・せ・・・」

士朗
「せ？」

ナース
「先生ぇぇぇ！！　患者さんが、高町さんが目を覚ましました！！！」

ナースは士郎の姿を目の当たりにすると、ここが病院だというのも忘れて叫ぶのだった。

ＩＮ　ＳＩＤＥ

一「ただいま」

家に帰ると、神奈と天音が出迎えてくれた。

天音
「お帰りなさい一成様」

神奈
「その様子じゃと成功したようじゃな」

俺の様子を見て神奈も嬉しそうにしている。

一成
「ああ、意識もハッキリしていたしもう心配ないだろう」

天音
「お疲れさまでした。夕食の準備はできております」

そういえば夕食を頼んでいたな。

一成
「天音・・・・神奈は？」

天音
「ご安心ください。食材には指一本触れさせておりません」

一成
「それなら安心だな」

神奈
「ひどいぞ一成！」

ぼやく神奈をスルーしつつ、俺は食卓についた。二人もそれに続く。

一成
「それでは・・・」

一成・神奈・天音
「「「いただきます」」」

こうして、この世界にやってきて最初の一日が過ぎていく。なんだかとても中身の濃い一日だったな。でも高町家の人に全員会えたからいいか・・・って

一成
「・・・恭也さんにまだ会ってなかった」

高町家にて・・・

恭也
「なんだ？　何か出遅れた感じがする・・・」

第八話　力は自分が正しいと思った事に使え（後書き）

作者
「ふっっっかぁぁぁぁぁつ！！！」

一成
「うるさい」

作者
「グハッ！　ようやく帰ってきたのに何この仕打ち！？」

神奈
「別に帰って来なくてもよかったがの」

天音
「むしろあのまま消滅してくだされればよかったのに」

作者
「何を言う！　俺がいなかったら次回のタイトルが分からんだろう。フッフッフ・・前回も困っただろう」

神奈
「今までも何回かあったじゃろ」

天音
「確かに、困りましたね」

作者
「ようやく俺のありがたさに気づいたか「一成様のおかげで助かり

ましたが」・・・え？」

一成
「適当に考えて勝手に決めた」

作者
「え？　え？　すると・・俺って？」

神奈
「うむ、お主の存在価値はほぼゼロじゃ」

天音
「つまり、いてもいなくても一緒ということです」

作者
「オイィィィィィィ！！　何勝手に決めてんの！　それに、俺の存在価値ってそれだけかよぉぉぉぉぉ！！！」

一成
「これで気兼ねなくお前を消せるな」

作者
「勘弁してください！！！　何でもしますから出させてください！！！」

一成
「ふむ・・・」

神奈
「一成・・」

天音
「どうしますか？」

一成
「まぁいいだろう。何かに使えるかもしれんしな」

作者
「ありがとうございます！」

神奈
「仕方ないのぉ」

天音
「そうですね、次に何かしでかしたらアレが待ってますしね」

一成
「そういうこと」

神奈
「アレじゃな」

作者
「ん？　アレって何？」

一成
「もし、またお前が調子に乗ったり読むにに堪えない文章を書いたりしたら、今度はＳｔＳのなのはにスターライトブレイカーを撃ってもらうことになっている」

作者
「何それ!?　聞いてないよ!!」

神奈
「当然じゃ前回決めた時お主はおらんかったからの」

作者
「いつの間にか俺の抹殺計画が!!　てか、これからもキャラの心情は書いていくつもりだし。アレ?・・・決定事項?」

天音
「さようなら作者。あなたのことは・・・すぐに忘れます」

作者
「そこは忘れないだろぉぉぉ!!」

一成
「それが嫌ならちゃんとご覧になっている方々が納得する文章にするんだな」

作者
「・・・無理です」

一成
「さて、バカに自分の立場を理解させたし次回予告するか。おい、さっそく出番だ。次回のタイトルは?」

作者
「えーっと・・・その・・」

神奈
「どうしたのじゃ？」

天音
「もしかして・・・考えて無かったのですか」

作者
「しかたないだろぉぉ！　今まで死にかけてたんだから」

一成
「つーか、このやりとりも思いついてないからごまかすためにやってんだろ？」

神奈
「そしていつものように飛ばされてうやむやにする」

天音
「ワンパターンですね」

作者
「・・・やめて。もう俺のライフはゼロよ」

一成
「と、いうわけで、今回も次回予告は無し」

天音
「誠に申し訳ありません」

神奈
「次こそちゃんとするので許してくれ」

一成
「それじゃ、今回はこの辺で失礼する」

作者
「マジで頑張ろう」

幕間　待ち望んだ時（前書き）

たまにはこんなのもいいかなと・・・

幕間　待ち望んだ時

なのはＳＩＤＥ

なのは
「おかあさん、おねえちゃん、おにいちゃんもはやくなの！」

桃子
「待ちなさいなのは」

美由紀
「少しは落ち着きなよ」

恭也
「ここは病院なんだぞ」

おかあさんたちがちゅういしてくるけどしょうがないの。だって・・・

なのは
「おとうさんがめをさましたんだよ！」

数十分前・・・

桃子

「はい高町です。あら、先生。いつもお世話になっております」

かずなりくんたちがおうちにかえったあと、みんなでごはんをたべていたらでんわがかかってきたの。たぶんびょういんのせんせいだとおもうの。

桃子
「こんな時間にどうしたんですか？・・・もしかして主人の身に何か？」

おかあさんがふあんそうなかおをしてるの。おとうさんがどうしたの？

桃子
「え・・目を・・・覚ました？」

恭也
「なんだって！」

美由紀
「ウソ！　ホントに！？」

めをさましたって・・おとうさんが？・・・ほんとうに？・・・・・めをさましたの？

桃子
「はい！　はい！すぐにうかがいます」

おかあさんがでんわをきってもどってきた。なんだかなきそうなかおをしてるの。

桃子
「みんな落ち着いて聞いてね・・・あの人が・・お父さんが目を覚ましたって！」

そのあとすぐにみんなでびょういんにいくことになったの。

なのはＳＩＤＥ　ＯＵＴ

士郎ＳＩＤＥ

看護婦さんがいきなり叫んでいなくなったと思ったら、今度は医者と思しき人が入って来た。そして僕の様子を見るなり

医者
「奇跡だ・・」

と驚いていた。奇跡か、そこまで言われるほど自分のケガは酷かったのだろうか。だが、軽い痛みはあるが、ほとんど異常はないように思える。試しに腕を動かしてみるが全く違和感は無い。やはりあの少年が何かしたのだろうか？　秋月　一成君・・・なのはの友達だと名乗っていた。不思議な少年だった。なのはと同じくらいの年だろうに、それよりずっと大人びていた。そして、何よりあの目だ。あれは戦う者の目・・・そして何かを失った者の目でもあった。一体彼は何者で過去に何があったのだろうか？　先生がいなくなった病室で僕は彼について考えていた。

しばらくすると複数の足音が聞こえてきた。また誰かやって来たのだろうか？　足音はだんだん近づいてきて、やがて自分の病室の前で止まった。

ドアが開かれる。そこには・・・

桃子
「あなた！」

恭也
「父さん！」

美由紀・なのは
「「おとうさん！」」

自分の愛する家族が立っていた。

士郎　ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

桃子ＳＩＤＥ

なのは
「おとうさ～ん！」

なのはが泣きながらあの人に抱きついた。無理もないわね。ケガをして一番落ち込んでいたのはあの子だったし。

士朗
「なのは、ごめんな心配かけて」

なのは
「うぇぇぇぇん！　よかった！　よかったよぉ！」

なのはに泣きながら抱きつかれて苦笑いを浮かべている。正直私も抱きつきたかったけど我慢した。

士朗
「恭也、美由紀、お前たちにも迷惑をかけたな」

美由紀
「いいよそんなこと！　お父さんが目を覚ましてくれただけで充分だよ」

恭也
「美由紀の言うとおりだ父さん。そんなことは気にしないでくれ」

美由紀も泣いている。恭也は泣いてこそいなかったけど心なしか瞳が潤んでいる。

桃子
「あなた・・・」

私はゆっくりとあの人に近づいて行く。もしかしてこれは夢なんじゃないか？　そんな不安が頭をよぎる。

士朗
「桃子・・・」

ギュッ

桃子
「あ・・あなた」

あの人は私を抱きしめてくれた。確かに感じるあの人の温もりが、
これが夢ではない事を証明してくれた。

士朗
「君にもずいぶん苦労をかけたね。これからはずっと一緒だ」

桃子
「あなた・・あなたぁ！・・・うっうぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

限界だった。涙が止まらなかった。笑ってお帰りなさいと言うつもりだった。なのに・・あの人の笑顔を見て、ずっと待ち望んだ日を迎えて、何も言えなかった。

・・・・・

士朗
「落ち着いたかい？」

桃子
「えっええ、ごめんなさいあなた泣いたりして」

士朗

「構わないよ。むしろ君の綺麗な涙が見れて嬉しかったかな」

桃子
「もう、あなたったら♪」

子どもたちの前で恥ずかしいじゃない。

恭也
「また始まったか・・・」

美由紀
「まぁ、お約束だよね」

なのは
「おとうさんとおかあさんはとってもなかよしなの！」

子どもたちの言葉に私たちは笑う。失われてしまった時。もしかしたら、もう二度と戻ってこなかったかもしれない。でも・・再びこうして家族全員で笑う事ができて本当によかった。

恭也
「そういえば父さん。体の方は大丈夫なのか？」

恭也が尋ねる。そうだ、目が覚めても傷が癒えていなかったら意味がない。

士朗
「ああ、さっき医者に診てもらったが、ほとんど問題がないそうだ。明日の検査しだいでは近いうちに退院できるらしい」

四人
「「「「え？」」」」

私達はその言葉に驚く。つい先日まで重体だったのに、それが退院？　信じられない・・・

美由紀
「お父さん。それ本当？」

士朗
「ああ、医者も信じられないといった顔をしていたな。奇跡だと。まるで魔法でも使ったのではないかとね」

魔法って・・ありえないわ。でもそんなことはどうでもいい。あの人が元気になってくれた。それで充分だわ。

なのは
「あのねあのねおとうさん！　げんきになったらみんなでおでかけしたいの！」

士朗
「お！　それはいいな。なのはは何処に行きたい？」

なのは
「う～んとね、う～んとね・・・どうぶつえん！」

士朗
「よし！じゃあ動物園にみんなで行こう」

なのは
「わ～い！」

なのはが嬉しそうにはしゃいでいる。ふふふ、しょうがない子ね。

恭也
「ふっ、気が早すぎるぞなのは」

なのは
「だってうれしいんだもん！」

美由紀
「気持ちは分かるけどね」

恭也も美由紀も嬉しそうにしている。

桃子
「あらあら、ならお弁当は気合入れて作らなくちゃ」

もちろん、私も今から楽しみだ。

なのは
「おかあさん！　かずなりくんもさそっていい？」

桃子
「そうね。大勢の方が楽しいし」

士朗・恭也
「「かずなりくん？」」

なのは
「あたらしいおともだちなの」

恭也
「な、なのは！　それは誰だ？　一体いつ知り合ったんだ！？」

なのは
「なのはがこうえんでないてたときになぐさめてだきしめてくれたの」

恭也
「なにぃぃぃぃぃ！！！」

恭也が叫んでいる。それにしても・・彼って思ったより大胆ね。なのはも満更じゃないようだし、これは家族が増えるかもしれないわ

ね。って早すぎかしら?

恭也
「おのれ、かずなりとやら。覚悟していろよ」

桃子
「しょうがない子ね・・・あなた?」

士朗
「やはり、あれは夢じゃなかったのか・・・」

桃子
「あなた? どうしたの? 具合でも悪いの?」

士朗
「ッ! い、いや、なんでもないよ」

どうしたのかしら? 一成君の名前に反応していたようだけれど・・
気のせいよね。彼とは面識が無いし・・・

なのは
「えへへ、かずなりくんとおでかけたのしみだな♪」

恭也
「ぬぉぉぉ!!! 美由紀! やつの家は何処だ?」

美由紀
「知らないよ・・って恭ちゃんそれを知ってどうする気?」

恭也
「決まっているだろう！　なのはをたぶらかす不届きな輩は、俺が成敗する！！」

美由紀
「行かせるわけないでしょ！　それに、彼なのはと同い年だよ」

恭也
「五歳児のくせにもう女に手を出そうとするのか！？　フッフフ・・・死なす！　必ず死なせてやる！」

美由紀
「・・・ダメだこりゃ」

とりあえず・・・まずはこの場を収めないとね。

桃子ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＩＮＳＩＤＥ

一成
「ん？」

夕食を食べ終わってゆっくりしていると、何故か寒気がした。

神奈
「どうしたのじゃ一成？」

一成
「なんだか、いつの間にか誰かに標的にされた気がする。例えて言うと、妹をかどわかされたと勘違いする兄のような人物に」

天音
「やけに具体的な例ですね」

神奈
「しかし、そんな奴に会ったかの？」

一成
「分からない。それにただの気のせいかもしれない」

天音
「まぁ、それが本当だとしても、心配ございません」

神奈
「妾たちがしっかり守ってやるからの」

一成
「ははっ、頼りにしてるよ」

神奈
「うむ」

天音
「はい」

俺はまだ見ぬプレッシャーを与えてくる人物に思いを走らせた。

幕間　待ち望んだ時（後書き）

作者
「あの～、お話があるんですが」

神奈
「なんじゃ？」

天音
「いつものあなたらしくないですね」

一成
「つまらん話だったら分かってるだろうな」

作者
「実は・・・」

一成・神奈・天音
「「「実は・・・？」」」

作者
「この小説のＰＶが１５０００を超えた」

一成
「・・・は？」

作者
「ユニークも２０００を超えて」

神奈
「な！？」

作者
「初の感想も頂いた」

天音
「え・・・？」

・・・・・・・・・

一成・神奈・天音
「「「なんだってぇぇぇぇぇぇぇ！！！」」」

神奈
「し・・信じられん」

天音
「まさか・・また裏で何かしたんですか？」

作者
「またって！　前回のお気に入り登録の時もそうだったけど、俺何もしてないから！・・・そこ！　物騒な詠唱をやめぃ！」

一成
「チッ」

作者
「では改めて、こんな駄文をご覧になって下さった方々、本当にありがとうございます！」

一成
「そして、感想を書いて下さったヨッシィ～♪♪♪様、おかげで、バカが泣きそうになってました」

天音
「そんなヨッシィ～♪♪♪様にはお礼としてささやかな贈り物をさせて頂きます」

作者
「いいねぇ～なになに？」

神奈
「うむ、その名も『次回の後書きでどうやって作者にトドメをさすか決められる』権利じゃ！」

作者
「・・・・・ハイ？」

天音
「お次の中から気に入った物をお選びください」

1　一成による［ライトバースト］で吹き飛ばす

2　天音の［アイシクルアロー］で串刺し

3　神奈の［スターザッパー］で本当の星にする

４　当然全部！

一成
「他にご希望があれば何でもします」

作者
「オィィィィィィィ！！！　なんでお礼が俺への攻撃なんだよぉぉぉ！！！　後半につれて威力が上がってるし！　４なんてほぼ死刑宣告じゃねーか！！！」

一成
「他に何かあるか？」

神奈
「さあ？」

天音
「申し訳ありません。私には思いつきません」

作者
「お前らの中でお礼の定義はどうなってんだよぉぉぉぉぉ！！！」

一成
「ちなみに、ヨッシィ～♪♪♪様から要望が無かった場合・・・・・自動的に４番になる」

作者

「ヨッシィ～♪♪♪様ぁぁぁぁぁ！！！！　せめて！　せめて一番威力の低い1番でお願いします！！」

天音
「これからも感想を頂いた方にはこの権利を差し上げますので」

神奈
「ジャンジャン感想を書いてくれぃ」

作者
「この悪の伝統は続いていくのかぁぁぁぁぁ！！！」

一成
「いっそのこと、この後書きを『みんなで作者をいたぶろう』に変更するか？」

作者
「なにそのタイトルで内容がまるわかりのコーナー！！！！　別にご覧になっている方全員がそう思ってるわけじゃないだろ！！」

一成
「・・・知ってるか？　今のところ、この小説が一番アクセスが多かったのって4月10日なんだぞ」

作者
「え？」

天音
「確かその日は・・・」

神奈
「作者が後書きでなのはにスターライトブレイカーを喰らって消滅しかけたんじゃったな」

一成
「つまり・・ほとんどの読者の方がお前のやられっぷりを楽しみにしてるんだよ」

作者
「待て！　ただその話を気に入ってくれた可能性も・・・」

一成
「・・・お前、なんでなのはに撃たれたのか忘れたのか？」

作者
「え？・・・・・はっ！」

神奈
「なのはの心情を適当に書いたお主に対する報復じゃったろ」

天音
「つまり・・・こうなった原因はあなた自身だということです」

作者
「・・・・・・・・オワタ」

一成
「と、いうわけで次回、作者がどうなるか」

神奈

「全てはヨッシィ～♪♪♪様の手にかかっておるぞ」

天音
「他の方々は、楽しみにお待ちください」

作者
「・・旅に出よう」

第九話　血筋ですねわかります（前書き）

なんでこうなった・・・

第九話　血筋ですねわかります

なのは
「かずなりくん！　はやくはやく！」

一成
「なのはちゃん、そんなに急がなくても動物は逃げたりしないよ」

なのは
「でもでも！　はやくどうぶつさんたちにあいたいの！」

なのはが俺の手を引っ張って動物園の入口に走る。その後ろには、ほほえましそうにこちらを見ている士郎さんと桃子さん。カメラで俺達を撮っている美由紀さん。何故か羨ましそうにこちらを見ている神奈と天音。そして・・・ものすごい形相で俺達、正確には俺を睨んでいる恭也さんがいた。・・・どうしてこうなった？

三日前

一成
「動物園・・・ですか？」

桃子
「そうなの。よかったら一緒にどうかと思ってね」

あれから三週間がたった。士郎さんは順調に回復し、先日ついに退院できたそうだ。それを祝って高町家全員で動物園に出かけるらしい。

一成
「いいんですか？　せっかくの家族水入らずの場に俺なんかがお邪魔して？」

桃子
「あらっ、そんな事気にしなくてもいいのよ。大勢の方が楽しいし、恭也があなたに話があるそうなの。それに・・・なのはがあなたと一緒に行きたいって聞かないのよ。」

そこまで言われたら断るのは逆に失礼だな。

一成
「分かりました。喜んで参加させてもらいます」

桃子「そう！　よかった。なのはも喜ぶわ。そうそう、神奈さんと天音さんも一緒にどうかしら？」

一成
「そうですね、俺が二人に伝えておきます」

桃子
「お願いね、出発は三日後、お弁当はこっちで準備しておくから」

一成
「ありがとうございます。それじゃ三日後にそちらにお邪魔させていただきます」

桃子
「ええ、それじゃあよろしくね」

そういって電話が切れる。さて、二人に伝えるか。

神奈・天音
「「動物園？」」

一成
「ああ、士郎さんの快復祝いに行くらしいんだが俺達も一緒にどうかって、今桃子さんから電話があった」

俺は二人に先ほどの電話の内容を伝える。

神奈
「行きたいのじゃ！」

興奮した様子で参加を決めた神奈。そういえば動物が好きだったな。

天音

「私達までよろしいのでしょうか？」

遠慮がちにそう言う天音だったが、体全体から行きたいオーラが出ている。分かりやす過ぎるぞ天音。

こうして俺達は高町家のみなさんと一緒に動物園に行くことになった。

そして約束の三日後、俺達は準備して翠屋に行った。

なのは
「かずなりく～ん」

ドアを開けるとなのはが抱きついてきた。俺は彼女の頭を撫でた。

一成
「久しぶりなのはちゃん。元気だった？」

なのは
「うん！　なのははずっとげんきだったの」

そういってにっこり笑うなのは。以前とは別人の様だ。

桃子

「いらっしゃい一成君。今日はありがとね」

美由紀
「やほ～、ひさしぶり～」

桃子さんに美由紀さん、そして・・・士郎さんと一人の青年が近づいてきた。士郎さんはすっかり元気そうにしている。ということは、もしかして・・・

なのは
「かずなりくん、なのはのおとうさんとおにいちゃんなの」

なのはが説明してくれた。やっぱり恭也さんか。しかし何故か俺を見つめる・・というか睨んでくる恭也さん。

士朗
「やぁ一成君、初めまして。僕は高町　士郎。君の事はなのはから聞いているよ」

そう言って手を差し出してくる士郎さん。

一成
「はい、秋月　一成です。よろしくお願いします」

士郎さんと握手をする。約束を守ってくれたみたいだ

恭也
「・・・・」

桃子
「恭也？　あなたも自己紹介しなさい」

さっきから何も言わない恭也さんを促す桃子さん。すると、恭也さんが俺の前に立つ。

恭也
「高町　恭也だ・・・一つ確認するが、君が一成君で間違いないな？」

一成
「ええ、そうですけど・・・」

恭也
「ッ！・・フフッそうか。君・・・いやお前が！」

士朗・桃子
「「恭也？」」

美由紀
「恭ちゃん？」

なのは「おにいちゃん？」

俺がうなずくと、恭也さんはいきなり竹刀で斬りかかって来た。・・・何処から出したんだ？

士朗・桃子・美由紀・なのは
「「「「ッ！？」」」」

一成
「俺・・・何かしましたか？」

恭也さんの高速の一閃を、右手でどうにか受け止めた。

恭也
「しらばっくれるな！　傷心のなのはの心につけこもうとしたようだがそうはいかん！　俺の目の黒いうちはなのはにはもう指一本触れさせん！」

つけこむ？　そんなことをした覚えはないんだが、というかこの殺気、以前感じた寒気はこの人のせいだったのか。

一成
「恭也さん誤解です。俺はただ・・」

恭也
「問答無用!!」

再び斬りかかってくる恭也さん。どうする？　傷付けるわけにはいかないし・・・

手をこまねいている俺の前に救いの神・・・もとい悪魔が現れた。

ガシィ!

士朗
「恭也・・・何をしている？」

士郎さんが恭也さんの腕を掴んで止めてくれた・・・恭也さん以上の殺気を醸し出しながら・・・

恭也
「と、父さん。これはなのはのために・・」

桃子
「あらあら、なのはのためになのはの大事なお友達を傷付けるの？
お母さん、あなたをそんな子に育てた覚えは無いわよ」

桃子さんが笑いながら恭也さんに注意する・・・士朗さんに匹敵するプレッシャーを発しながら・・・

神奈
「なんと・・・妾達と同等の覇気じゃと!?」

天音
「そんな・・ありえません!」

神奈と天音がなにやらとんでもない事を言っている。

なのは
「おにいちゃん・・・」

最後になのはが恭也さんにゆっくり近づいて行く。二人ほどではないが、それでも五歳の少女が発するとは思えないほどのオーラを纏っている。

一成
「神奈、天音・・・あの三人旅人じゃないのか?」

神奈
「一成、彼らは人間じゃ・・信じられんがの」

天音

「しかし・・覇気の力は低位の霊剣を遥かに上回っています」

霊剣を上回る？　こんな人たち今まで見た事が無い。

恭也「な・・なのは？」

何も言葉を発しないなのはに、恭也さんの方が先に口を開く。そしてなのはは、兄に対して絶大な効果を発揮するあの言葉を口にした。

なのは
「おにいちゃんなんて・・・だいっきらい！」

恭也
「グハァッ！！！！！！」

恭也は心に∞のダメージを受けた。恭也は目の前が真っ暗になった。

士朗・桃子・なのは
「「「さて恭也　（おにいちゃん）お話・・・いや、ＯＨＡＮＡＳＩしようか」」」

なのはの一言で燃え尽きた恭也さんを士郎さんが奥に引っ張っていく。そのあとを桃子さんとなのはがついて行った。

天音
「美由紀さん・・・今のは？」

美由紀
「いつもの事だから気にしないでください」

いつもって・・あんな覇気をいつも発しているのか？

神奈
「魔王・・・」

神奈がつぶやいた。そういえば、未来の彼女の異名は管理局の白い悪魔。そして二人はそんな彼女の両親・・・いや、考えるのはよそう。

数分後・・・

士朗
「お待たせ！　さぁそろそろ出発しようか」

四人が戻って来た。恭也さん以外の三人はとても晴れやかな顔をしている。恭也さんは・・・説明できない。というか、説明してはい

けない気がする。

神奈
「一成・・」

一成
「ダメだ。あれに触れたら何かが終わる気がする」

神奈が何か言いたそうだったがそれを征する。

こうして、俺達はようやく動物園に出発するのだった。

第九話　血筋ですねわかります（後書き）

一成
「なんだこの展開？」

神奈
「というか、士郎と桃子は何者なんじゃ！」

天音
「人なのにほぼ人外指定ですね」

一成
「なのはもかなりやばかったぞ・・・しかし、恭也さんの扱い方がひどすぎないか？」

天音
「今まで出なかった分思いっきり活躍させると作者は言っていましたが」

神奈
「活躍させる意味が違うじゃろ」

一成
「そのバカなんだが・・・失踪した」

神奈・天音
「「え？」」

一成

「こんな書置きを残して」

『俺は生きる！！！生きて明日をつかむ！！！」

神奈
「どういう意味じゃ？」

天音
「おそらく・・前回のヨッシィ～♪♪♪様への特典に恐怖しての行動ではないでしょうか？」

一成
「ふむ、まだヨッシィ～♪♪♪様からのお返事は無いからな。作者をいたぶるのは次回以降だな」

神奈
「それでは、久々に次回予告でもするかの」

一成
「ああ、次回第十話　無駄な知識は結局無駄に終わる」

天音
「次回は一成様の意外な一面が見れますよ」

第十話　無駄な知識は結局無駄に終わる（前書き）

戦闘・・・か？

第十話　無駄な知識は結局無駄に終わる

なのは
「かずなりくん、あれはなぁに？」

一成
「あれはカモノハシ。カモノハシ科、カモノハシ属の哺乳類で、体長は約３０～６０ｃｍ。尾長は約１０～１５ｃｍ。オスは犬程度の大きさの動物なら簡単に殺せるくらいの毒を持っている」

なのは
「なんだかこわいの・・じゃあ、あれは？」

一成
「あれはアライグマ。アライグマ科、アライグマ属の哺乳類で体長は約５５ｃｍ。アライグマって呼ばれているけど、本当は獲物を捕るために水の中に手を突っ込んでいるだけで、食べ物を洗っているわけじゃないんだ」

なのは
「すごいの！　かずなりくんはものしりなの」

一成
「そうでもないよ」

なのはが見るもの一つ一つに対して質問してくる。そして俺がそれに答える。入園してからずっとこの調子だ。それにしても・・・この動物園マニアック過ぎるだろ。なんでニューギニアヒメテングフ

ルーツコウモリ（和名）や、プエルトリコヒメエメラルドハチドリ（和名）がこんなところにいるんだよ。

一成
「（絶対園長の趣味だな・・・）」

士朗
「・・・何故彼はあんなに詳しいんだ？」

美由紀
「お父さん、一成君の言動をいちいち気にしてたらキリないよ・・」

桃子
「すごいわねぇ、私にも教えてちょうだい」

士郎さんが驚き、美由紀さんが呆れ、桃子さんが楽しそうに俺の説明を聞いていた。恭也さんは・・

恭也「殺殺殺」

なにやらつぶやいているが、士郎さんが睨むと押し黙った。具合でも悪いのか？

そして、神奈と天音は・・・

神奈
「ああっなんじゃこの可愛さは！　妾を萌え死にさせる気か！！」

天音
「はぅ！　モフモフしたいです！！」

・・・悶えていた。

なのは
「かずなりくん、つぎはあっちにいこう」

なのはが俺の手を引っ張ってどんどん先に進んでいく。

一成
「なのはちゃん、そんなに急ぐと迷子に・・・って遅かったか」

なのは
「ふぇ？」

周りを見渡すが、士郎さん達の姿が見えない。

一成
「どうやら・・・迷子になったみたいだ」

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

美由紀
「あれ、なのはと一成君は？」

美由紀が先ほどまで近くにいたはずのなのはと一成の姿が見えない事に気付いた。

桃子
「もしかして・・・迷子かしら？」

恭也
「なにぃぃぃ！？　ならばすぐに探さなければ！！」

さっきまで一言も発していなかった恭也が突然叫びだした。すっかり慌てているようだ。逆に桃子や美由紀は落ち着いている。

美由紀
「まぁ心配ないか・・一成君が一緒だし」

桃子
「そうね。フフッ、あの時と同じね」

士朗
「あの時って？」

桃子
「そういえば、あなたと恭也は知らなかったのよね。実は・・・」

桃子は二人に、なのはが一人でずっと我慢していた事。そして一成がそれを解消してくれた事を話した。

桃子
「だから、一成君がいればきっと大丈夫よ。先に迷子センターに行きましょう」

ＩＮ　ＳＩＤＥ

一成
「さて、とりあえず迷子センターだな」

俺は近くの園内の案内板に目を向けた。

なのは
「かずなりくん・・ごめんなさい」

俺が調べているとなのはが謝ってきた。

一成
「？　なんで謝るんだ？」

なのは「だって・・なのはがかってにさきにいっちゃって、そのせいでかずなりくんもまいごになっちゃって、ぜんぶ・・なのはのせいなの」

今にも泣きそうな顔でそう言うなのは。こんな小さいのに、責任感の強い子だな。

ナデナデ

なのは
「え？」

一成
「気にしないで、止めなかった俺にも責任があるし、それに・・なのはちゃんと二人でいろいろ見て楽しかったし」

なのはの頭をなでながらあやすように言う俺。すると、なのはの顔が笑顔になっていく。

一成
「移動しようか、迷子センターに行けばすぐに士郎さん達が来てくれるよ」
なのは
「うん！」

そうして、迷子センターに向かおうとする俺達だったが・・・

？
「はなしてください！」

・・・なんだか、また面倒な事になりそうだ。

騒ぎのする方へ行ってみると、男が女の子の腕を掴んでなにやら叫んでいる。

一成
「すいません、なにがあったんですか？」

俺は近くにいた人の良さそうな男性に話しかけた。すると予想通り人の良かった男性は嫌な顔一つせずに答えてくれた。

男性
「いや、あの女の子が男にぶつかったらしいんだ。そしたら男がいきなり女の子の腕を掴んでね・・・」

大胆な奴だな。こんな真昼間から未成年者略取か？　女の子はなのはくらいの年の子に見えるし・・・あれか？　ロリコンってやつか？

一成
「助けないんですか？」

男性
「警備員を呼んだし、ヘタに刺激して何かあっても・・ねぇ」

まぁ所詮他人事だと思っているんだろう。こうして周りを囲っているのに誰も手を出そうとしないのがいい証拠だ。

一成
「なのはちゃん、迷子センターに行くの少し遅くなるけどいい？」

なのは「かずなりくん？」

一「ちょっと行ってくる」

そうなのはに言い残し、俺は騒ぎの中心へと進んだ。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

？？？ＳＩＤＥ

きょうはおねえちゃんたちといっしょにどうぶつえんにおでかけです。みんなといっしょにおでかけするのはひさしぶりだったので、きのうのよるはどきどきしてねむれませんでした。でも・・・

？

「・・・おねえちゃん？」

きがついたらひとりになってました。もしかして・・まいご？そうおもうととてもこわくなりました。わたしはおねえちゃんたちをさがしました。このままずっとあえなかったらどうしよう。そんなふうにかんがえていたら

ドンッ

？

「きゃっ！」

なにかにぶつかりました。おそるおそるめをむけると・・・

男
「痛ぇな～お嬢ちゃん。歩くときは前を向いて歩かなくちゃなぁ」

しらないおじさんがいました。このひとにぶつかっちゃったのかな?

男
「ん～?　そっちからぶつかってきたのに謝りもしないのかい?」

?
「ご、ごめんなさい。かんがえごとしてて」

男
「お嬢ちゃん一人?　パパとママは?」

?
「おねえちゃんといっしょにきたんですけど・・まいごになっちゃって」

わたしがそういうと、おじさんはなんだかうれしそうなかおをしました。・・・なんだろう、わらっているのにこわい・・・

男

「それは大変だ！　おじさんが一緒にさがしてあげよう」

おじさんがわたしのうでをつかみました。こわくなったわたしはおもわずさけびました。

？

「はなしてください！」

おじさんはわたしのおねがいをきいてくれません。まわりのひとたちもみているだけでたすけてくれません。

？

「（こわいよ・・・おねえちゃん・・いや、だれでもいいからたすけて！）」

そのとき・・・

ガシッ！

男の子

「・・・その手を離せ」

ひとりのおとこのこが、わたしのうでをつかむおじさんのてをつかみました。そのとき、わたしにはおとこのこのすがたが・・・まるでおとぎばなしのゆうしゃのようにみえました。

???SIDE　OUT

IN　SIDE

一成
「その手を離せ」

俺はそう言って女の子の腕を掴む男の手を掴んだ。

男
「なんだぁ、このガキ?」

一成
「離せと言っている」

メキメキッ！

男

「グァ！」

そのまま力を込めて行く。痛みに耐えきれなかったのか、男は女の子から手を離した。

一成
「大丈夫かな？」

女の子
「はっ、はい！」

俺は女の子を背に隠しながら男に向かい合う。返事から察するに、腕を掴まれただけのようだな。

一成
「貴様・・・この子に何をしようとした？」

男
「アアン？　お前には関係ないだｒ」

一成
「何をしようとしたのか聞いている」

そう言って男に軽く殺気をたたきつける。男は震えているようだ。・・・っと、女の子も怖がらせてしまった。

男
「そ、その子が迷子だって言うから迷子センターに連れて行こうとしただけだ」

男が答える。それでさっきの騒動か？

一成
「そうなのか？」

俺は背中の女の子に尋ねる。

女の子
「そうです・・・でもわたしいやっていったんです！　なのにおじさんがわたしのうでをつかんでむりやり・・・」

なるほど、だからあんなに嫌がっていたのか。

一成
「つまりあんたは、嫌がるこの子を無理やり連れて行こうとした。・・・これは立派な犯罪だな」

俺は吐き捨てるように言った。すると、男の顔がみるみるうちに赤くなる。どうやら相当腹が立っているようだ・・・それはこっちも同じだがな。

一成
「危ないからあの女の子の所まで下がってて」

俺は女の子になのはのいる所まで下がるよう言う。このままいくと巻き込んでしまうからな。

女の子
「でも！　それじゃあなたが」

心配そうにこちらを見る女の子。うーん、この程度の相手なら全く問題ないんだが。

一成
「大丈夫だよ」

ナデナデ

女の子
「え？」

一成
「君は必ず守るからね」

そう言って彼女の頭をなでる。落ち着いたのか、彼女はゆっくりとうなずいてなのはの所まで走って行った。これで準備できたな。

男
「ガキのくせに女の前で格好つけてんじゃねえよ！」

一成
「そんなつもりはない。それより、貴様みたいなやつを世間一般ではなんと言うか知ってるか？」

俺はわざと男が怒るような口調で挑発する。戦いの中で冷静さを失うのは愚者のやることだが。

一成
「・・・このロリコンが」

男
「ッ！！　クソガキ！！！」

案の定、男が拳を振り上げて襲いかかってきた。・・・遅い。そんなもので俺を倒せると思うな。

一成
「ふっ！」

俺は男の足元まで一瞬で移動し、そしてその勢いのまま男の顎に向かって膝蹴りを繰り出した。

男
「ぎゃ！！」

男が吹っ飛び地面にたたきつけられる。それでも勢いは止まらず、そのまま5メートルほど進んでようやく止まった。動かない。どうやら気絶したようだ。

一成
「そのまま寝てろ」

「ワァァァァァァァ！！！！」

周りにいた他の客達は歓声をあげた。たった今目の前で起きた出来事に興奮したからだ。酷い目に遭いそうだった少女を颯爽と現れて助けた少年。まるでヒーローのような少年の行動に人々は称賛を贈った。

一成
「なんだ？」

なぜか歓声をあげる人達の様子を不思議に思いながら、俺はなのはと女の子のところへ向かった。

なのは
「かずなりくん、かっこよかったの！」

なのはが興奮した様子で俺に抱きついてきた。・・どうでもいいが、最近よく抱きつかれる気がする。

そんなどうでもいい事を考えていると・・・

女の子
「あの・・・」

女の子がおずおずといった感じで話しかけてきた。震えが治まっている様だし落ち着いたみたいだな。

女の子
「ほんとうにありがとうございました。あなたがいなかったらわた

し・・・」

と思ったら先ほどの恐怖を思い出したからかまた震えだした。無理もないか。あんな目に遭ったんだから。

ぎゅっ・・・

女の子
「え？」

なのは
「あ～！」

俺は女の子を抱きしめながら優しく頭をなでた。女の子は最初驚いていたが、やがて俺に体を預けてくれるようになった。

一成
「もう大丈夫？」

女の子
「はっはい／／」

・・・本当に大丈夫か？　震えは止まっているが顔が真っ赤だ。若干心配しつつ彼女から身を離す。

女の子
「あ・・・」

離れる時、何故か女の子が名残惜しそうにしていた。どうしたんだろう？

なのは
「む～・・・」

そしてなのは・・・・さっきからなんで不満そうな顔をしているんだ？

二人が落ち着いたのを見計らって、俺は女の子に事情を聞いた。どうやら彼女も迷子になってしまったらしい。

一成
「なら俺達と一緒に来るか？」

女の子
「え？」

なのは
「なのはたちもまいごなの！」

なのはが説明してくれたが、そんなに胸を張って言える事でもないぞ・・・

一成
「これから迷子センターに行くつもりなんだが、どうだ？」

女の子はしばらく考えているようだったが、やがて・・・

女の子
「はい！　おねがいします」

と、元気よく返事をしてくれた。

一成
「じゃあ今度こそ移動するか・・と、その前に」

なのは・女の子
「「？」」

一成
「君の名前は？　さすがにずっと君って呼ぶのもどうかと思うし、ちなみに俺の名前は秋月　一成だよ」

なのは
「なのははたかまちなのはだよ！」

俺の言葉に女の子は一瞬キョトンとしたが、やがて・・・

女の子
「クスッ、わたしはつきむら　すずかです。よろしくおねがいします。かずなりさん、なのはちゃん」

微笑みながら名前を名乗ってくれた。

ん？　すずかって確か・・・

一成
「・・・なのはの親友じゃないか」

なのは
「かずなりくん？」

すずか
「どうかしました？」

一成
「いや、なんでもないよ二人とも。さぁ、早く行こう」

ぎゅっ！

なのは・すずか
「「あっ・・・／／」」

俺はごまかすかのように二人の手を取って歩き出した。嫌かもしれんが我慢してくれ二人とも。

こうして俺は、後になのはの親友なる少女、月村　すずかと出会った。

第十話　無駄な知識は結局無駄に終わる（後書き）

神奈
「妾達の出番が無かった・・・」

一成
「仕方ないな。そういう流れだったし」

天音
「それにしても・・・動物についてお詳しいですね」

一成
「なんでこんな知識をつけたんだ?」

作者
「お答えしよう!」

神奈
「作者!」

天音
「帰ってきていたのですね」

作「ふはははは!ヨッシィ~♪♪♪様からお返事が返ってきていないことは調査済みだ!　つまり!　あの刑の執行は先送りになったということだぁ!」

神奈
「それは・・」

一成
「ストップ、神奈」

神奈
「一成？」

一成
「黙っておこう。その方がおもしろい」（ニヤリ）

神奈
「そうじゃな」（ニヤリ）

作者
「どしたの？」

一成
「なんでもない。それで、なんでだ？」

作者
「こういうところには説明キャラの一人でも必要かと思ってな、カモノハシについてはペ〇ソナ４をプレイした時に知った。ちなみにニューギニアヒメテングフルーツコウモリ（和名）とプエルトリコヒメエメラルドハチドリ（和名）はネットで名前だけ調べた」

一成
「にわかじゃねえか！」

作者
「いいだろ別に！　おかげでなのはに尊敬されてたし」

天音
「すずかちゃんとの出会いも唐突でしたしね」

神奈
「また勝手にして、これから大丈夫なのか？」

作者
「知らん！　勢いだけのこの小説に考えなど無い！」

神奈
「言い切ったぞ・・・」

一成
「やはりバカはバカだな」

天音
「一成様、そろそろ」

一成
「ん？　そうだな。どうでもいい前置きはこれくらいにして」

作者
「は？」

一成・神奈・天音
「「「第一回！『みんなで作者をいたぶろう』のコ～ナ～！」

ドンドン！！　パフッパフッ！

作者
「なにぃぃぃぃ！！！　そんな・・まだ返事は・・」

一成
「前話を投稿した後にヨッシィ～♪♪♪様からお返事を頂いたんだよ」

天音
「なんだか急かすように書いてしまい申し訳ありませんでしたヨッシィ～♪♪♪様」

神奈
「お詫びも込めて、予定より五割増しの力で作者を葬るのでどうか許してくれ」

作者
「え～と・・・つまり？」

一成
「お前は自分からやられに来たんだよ」

作者
「自由への逃走！！！」

ダッ！

一成
「グラスプ」

ビキッ！

作者
「う・・動けん」

一成
「動きを封じる魔法だ。まぁバインドみたいなものだ」

作者
「いやだぁぁぁぁぁ！！！　まだやりたいことがあるのに、しかも自分の小説のキャラに殺られるなんてぇぇぇぇ！！！」

神奈
「落ち着くがいい」

天音
「そこまで絶望することもないですよ」

作者
「え？」

一成
「ヨッシィ～♪♪♪様がな、最初だから軽めにしてやってくれって

よ」

作者
「ヨッシィ～♪♪♪様ぁぁぁぁ！！！　ありがとうございます！！！　一生あなたさまについていきます！！！」

神奈
「いや、迷惑じゃから」

一成
「と、いうわけで、ヨッシィ～♪♪♪様のご要望通り、４の『当然全部！』に決定しました」

作者
「ヨッシィ～♪♪♪様ぁぁぁぁ！！？」

神奈
「一成、順番はどうする？」

一成
「威力順でいいだろ。俺、天音、神奈の順番で」

天音
「分かりました。詠唱開始します」

作者
「あの～・・当然手加減してくれますよね？」

一成
「ヨッシィ～♪♪♪様の頼みだし、軽めにしてやるよ」

作者
「ほっ、よかった「死んだ方がマシだと思う程度に・・・な」ぁぁぁぁぁ！！！」

一成
「せっかくだし、それぞれの技について説明も入れるか」

天音
「そうですね、本編では未だに戦闘の技は出ていませんし」

神奈
「一成、頼むぞ」

一成
「ああ、まず俺のライトバーストは下位の技で、詠唱が簡単な分威力がとても低い」

作者
「お？　ならそこまで痛くは・・・」

一成
「その代わり、術者の望むところで発動・爆発ができる。例えば・・・体の内部とか」

作者
「グロ！　グロすぎるだろ！　そんなことしたら抗議の感想が来るぞ！」

一成

「いや、この小説、残酷な描写ありってタグがあるのに未だにそんなシーンがないからさ、そろそろ入れた方がいいかなと」

作者
「いらんわそんな心配り！！」

一成「次に、天音のアイシクルアローだが・・・これは氷の矢で相手を撃つ中級魔法で、刺さった矢で凍傷をおこし、傷をより深く相手に負わせる技だ。ちなみに、天音が相手をいたぶるときによく使う技でもある」

作者
「そんな物騒な技使わせんなぁぁぁぁ！！！　そして天音！　お前Sだろう！！」

天音
「失礼な！　私はドMです！」

作者
「さらっとカミングアウトしてんじゃねえぇぇぇぇ！！！」

一成
「最後に神奈のスターザッパーだが・・・」

作者
「名前からしてやばそうなんだが・・・」

一成
「異次元につながる穴をこじ開けて、そこから流星を直撃させる超上級奥義の一つだ。発動するたびに多元世界に何かしらの影響を与

えるためあまり使いたくないんだが」

神奈
「ヨッシィ～♪♪♪様のためじゃ。皆も許してくれるじゃろ♪」

作者
「許すかぁぁぁぁ！！！　何ラスボス相手にぶつけるようなヤツをそんな軽いノリで使おうとしてんだぁぁぁぁ！！！」

一成
「さて、説明も済んだことだし、光のマナよ・・・炸裂のオーラとなりて彼のものを包みこめ・・・」

天音
「青き清浄なる力よ・・凍てつく矢へと形を変え、我に仇名す敵を穿て！」

神奈
「闇夜も切り裂く星のきらめき・・・・・流星よ、今ここにその輝きを！！！」

作者
「ちくしょぉぉぉぉ！！！　こうなったら腹くくってやらぁ！！！
みなさん！　こんな作品ですが、これからも・・・」

一成
「ライトバースト！」

天音
「アイシクルアロー！」

神奈
「スターザッパー！」

作者
「おねがいしまぁぁぁぁぁぁぁ・・・・・・！！！！！！」

ボンッ！　グサッ！！　ドッゴォォォォォォン！！！

一成
「ふう、スッキリした」

天音
「ヨッシィ～♪♪♪様、ご満足頂けましたでしょうか？」

神奈
「上級魔法は疲れるのぉ」

一成
「さて、作者にリヴァイヴでもかけておくか」

天音
「さすがに本当に消えられたら困りますしね」

神奈
「一成、その前に」

一成

「そうだ・・・これからも作者をどうやっていたぶりたいかを随時募集しております」

天音
「別に私達だけではなく、ご自身の作品のキャラに殺らせたいという方がいらっしゃいましたらご連絡ください」

神奈
「いつでも貸し出すからの」

一成
「それでは、第一回！『みんなで作者をいたぶろう』はこれにて終了します」

一成・神奈・天音
「「「第二回をお楽しみに！！！」」」

第十一話　考えなしに発言するととんでもない事になる（前書き）

次回予告・・やめた方がいいのかな？

第十一話　考えなしに発言するととんでもない事になる

なのは
「それでね！　おかあさんのつくるケーキはとってもおいしいの！」

すずか
「へぇ～、たべてみたいなぁ」

迷子センターへの道中ですっかり二人は意気投合したようだ。しかし・・・

一成
「なぁ、すずかちゃん」

すずか
「すずかでいいですよ。なんですかかずなりさん？」

一成
「わかった。じゃあすずか・・・なんで敬語なんだ？　それにさんって・・」

そう聞く俺に不思議そうに首をかしげるすずか。

すずか
「え？　だって、としうえのひとにはけいごではなさなきゃいけな

いっておねえちゃんが」

間違ってない。間違ってないが・・・

一成
「すずか・・いま何歳?」

すずか
「5さいです」

一成
「俺も五歳・・・」

すずか
「え!?」

やっぱり驚くか。それにしても・・・

一「俺って、そんなに老けて見えるのか・・・」

すずか
「ち、ちがいます!　そうじゃなくって・・とてもたよりになっておにいさんみたいなかんじがしたから・・・」

俺の様子を見たすずかが慌ててそう言ってきた。そうか、どうやら

俺の勘違いだったようだ。

一成
「そう思ってくれるのは嬉しいけど、同い年なんだし敬語はやめてくれ。あと、さん付けも無しな」

すずか
「はい・・いや、うん。わかりま・・わかったよ。か・・かずなりくん／／」

すずかは納得してくれたのか、噛みながらもそう呼んでくれた。

なのは
「かずなりくん！」

突然なのはが叫んだ。

なのは
「すずかちゃんだけずるいの！　なのはもよびすてがいいの！」

そういえば、いまだにちゃん付けだったな。

一成

「分かったよ、なのは・・・これでいいかい？」

なのは
「うん！」

とても嬉しそうなのは。そんなに喜んでくれるならもっと早く呼んでいればよかったな。

すずか
「クスクス、なのはちゃんったら」

すずかも心なしかうれしそうだ。

・・・・・・

女性
「すずか！」

すずか
「おねえちゃん！」

迷子センターに到着し、係の人に説明をして数分後、一人の女性が駆け込んできた。すずかがそう呼んでいるので恐らくこの人が話に出ていたすずかの姉だろう。

女性
「すずか大丈夫？ケガとかしてない？」

すずか
「うん、こわいおじさんにあったけど、かずなりくんがたすけてくれたんだよ！」

すずかが俺の方を見ながら女性に話す。俺に気付いた女性がこちらに近づいてきた。

女性
「私は月村　忍。すずかの姉よ。・・一成君だっけ？　すずかを助けてくれてありがとう」

そう言って頭を下げてく女性・・・忍さん。汗をかいているあたり必死にすずかを探していたんだろう

一成
「初めまして忍さん。俺の名前は秋月　一成です。気にしないでください。俺はあの男にムカついて勝手に首を突っ込んだだけですから」

忍
「いいえ、あなたがいなかったらもしかしたら二度とすずかに会え

なかったかもしれないもの」

一成

「でしたらすずかの側にいてあげてください。あんな目に遭ったんだから家族の方と一緒にいれば安心できるでしょう」

忍

「ええ、そうね。・・・ところで一成君」

忍さんがいぶしかげにこちらを見てくる。なんとなくこの後の展開が見えたが。

忍「キミ・・・何歳？」

やっぱり・・・

その後、年齢を答えると案の定「ウソ・・・」と驚かれた。

どうやらもう帰るらしい。まぁ、さすがに動物観賞なんて気分じゃないだろうしな。

すずか

「かずなりくん・・・」

一成
「そんな顔をしないでくれすずか。また会えるさ」

そう、同じ海鳴市に住んでいるんだからまた会える。というか、主要キャラだし絶対だな。

すずか「でも・・」

それでも不安そうにしているすずか・・・そうだ、アレがあった。

一成
「すずか、これを」

そういってすずかに渡したのはオーラフォトンの結晶で作った首飾りだった。俺の趣味の一つでもある。

すずか
「うわぁキレイ！　でも、これがどうしたの？」

一成
「この首飾りが俺達をまた出会わせてくれる。約束の証として持っていてくれ」

すずか
「いいの？　こんなすてきなもの？」

一成
「ああ、俺が持っているより君が持っている方がいいだろうしな」

すずか
「かずなりくん・・・ありがとう、わたし・・コレずっとだいじにもってるね。またあえるときまで」

そう言うすずかの顔は・・・今まで見た中で一番きれいな笑顔だった。

忍
「ふふ～ん♪」

忍さんも笑っている。というかニヤニヤしている。

こうして俺達はすずかと別れた。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

忍ＳＩＤＥ

すずか
「♪～♪～」

帰り道、すずかの様子を見るが、さっきからずっと同じだった。彼にもらった首飾りを眺めながら鼻歌を歌っている。

忍
「（一成君か・・・不思議な子だったな。五歳とは思えない大人びた態度、すずかへの心配り、そして・・・大の大人を打ち倒す力・・・）」

すずかを探している時に偶然聞いた、『少年が変質者を倒した』という話。最初は信じられなかったけど、まさかすずかを助けてくれた子だったとはね。

それにしても・・・

すずか
「♪～♪～」

忍
「・・・ねぇすずか？」

すずか
「♪～・・なにおねえちゃん？」

忍
「あなた・・一成君に恋したでしょ？」

あ、固まった・・・五秒、反応が無い・・・十秒、反応が無い・・・
十五秒、反応した。

すずか
「え、えぇぇぇぇぇぇ！！！」

驚くすずか。こんなに大声出すのも珍しいわね。

すずか
「なんで？　どうして！？　おねえちゃん！？」

どうしてって・・・

忍
「あなたの様子を見ていたら誰だって分かるわよ」

すずか
「あぅ／／」

私の指摘に顔を真っ赤にするすずか・・・可愛いわね♪

忍
「頑張りなさいよ。きっと彼これからどんどんモテるだろうし、他の子に出遅れるんじゃないわよ」

すずか
「おねえちゃん・・・うん！　わたしがんばる」

やる気満々のすずか。これからが楽しみね。

忍ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＩＮ　ＳＩＤＥ

すずかたちが出て行って数分後、士郎さん達がやってきた。なのは士郎さんと桃子さんに抱きついて泣いていた。

なぜか俺は神奈と天音に泣きながら抱きつかれたが・・・

しばらくすると、恭也さんが突然頭を下げてきた。何故か士郎さんも一緒に。

一成
「どうしたんですか？」

恭也
「すまない、俺はどうやら君の事を誤解していたようだ」

士朗
「桃子からなのはとの事を聞いてね。君のおかげでなのはは元気を取り戻す事ができた。本当に感謝しているよ」

ああ、どうやらあの公園での事らしい。

一成
「前にも言いましたけど、俺は話を聞いて背中を押しただけですよ。それに彼女が元気になった本当の理由は士郎さん、あなたが元気になったからですよ」

士朗
「・・・美由紀から聞いていたが、君は本当に五歳児とは思えんな」

美由紀さん・・変な事教えないでください。

恭也
「だが！！」

恭也さんが叫ぶ。この人こんなに熱血な人だったか？

恭也
「俺はまだ君となのはの仲を認めたわけじゃないぞ！！！」

なのはとの仲？

一成
「ですから、俺となのははそんな関係「「「「「「なのは！？」」」」」」・・・ん？」

なのは以外の全員が固まった。どうしたんだ？

美由紀
「一成君～いつのまになのはのこと呼び捨てにするようになったの？」

一成
「え？」

桃子

「あらあら、本当に家族が増えるかもね。私の事お義母さんって呼んでもいいのよ」

一成
「はい？」

美由紀さんが興味津々に聞いてくる。桃子さんもとんでもない事を言っている。早すぎだろ！いや、そうじゃなくて

神奈
「一成！　どういう事じゃ！！」

天音
「ちゃんと聞かせてもらいますよ！！」

一成
「二人まで！」

神奈と天音まで詰め寄ってくる。

恭也
「フ、フフフ」

一成
「恭也さん？」

恭也さんがうつむく・・・って、このパターンは・・・

恭也
「やはり貴様は敵だぁぁぁぁぁ」

一成
「やっぱりか！」

恭也さんが竹刀で斬りつけてくる。だから何処から出してるんだ？

士朗
「恭也・・・」

恭也
「止めないでくれ父さん！」

士郎さんが恭也さんを止める。この場を収められるのはこの人しかいない。俺は士郎さんに期待した・・・が

士朗
「止める？・・・何を言っている？・・・俺も手伝う」

なん・・・だと・・・・

一成
「し・・士郎・・さん？」

士朗
「一成君、僕もその辺の事を詳しく聞きたいんだけどね・・・」

ブワッ！

士郎さんの殺気が俺を襲う。前回よりも・・・強い。

士朗・恭也
「「さぁ・・ＯＨＡＮＡＳＩしようか・・・」」

一成
「クッ！」

俺はその場から逃げだした。いくらなんでもあれはまずい。

士朗・恭也
「「まぁてぇぇぇぇぇい！」」

二人が追ってきた。

一成

「どうしてこうなったぁぁぁぁぁぁぁ！！」

必死に逃げながら、俺はそんな事を叫んでいた・・・

第十一話　考えなしに発言するととんでもない事になる（後書き）

作者
「フ、フフフ、ついにこの時が来た！」

神奈
「・・・またか」

天音
「今度は何なんでしょうか？」

一成
「どうでもいい」

天音
「一成様？　どうされました？」

一成
「士朗さんと恭也さんに追いかけられて死ぬかと思った・・」

神奈
「確かに、園内中走り回っておったからの」

作者
「ハーハッハッハッ！　一成よ、少しは俺の気持ちが分かったか？」

一成
「・・・俺は今機嫌が悪い。よって・・お前でウサをはらさせてもらう！！」

作者
「そうはいかん！　月光閃火様、お願いします！」

ブオン！

一成・神奈・天音
「「「ッ！？」」」

作者
「ハーハッハッハ！　これぞ『お仕置きお灸地獄フィールド』！・・・俺の事を不憫に思った月光閃火様が、お前らに文字通りお灸を据えるために展開してくださったのだ！　フフフ・・存分に苦しめ・・・って、あれ？」

一成・神奈・天音
「「「ふ～」」」

作者
「なんで！？　どうしてそんなに気持ちよさそうなの！？」

神奈
「妾にとってこの程度の熱さなどあってないようなものじゃ」

天音
「私もなんとか・・・むしろ、いいです♪」

一成

「知ってるか？　お灸って増血作用や止血作用、強心作用があるんだぞ」

一成・神奈・天音
「「「月光閃火様。素敵なフィールドありがとうございます」」」

作者
「しまったぁぁぁぁ！！　人外には効果が無い！！！」

作者
「せっかくだ・・お前も体験してみろよ」

ヒョイ・・・ズドン！

作者
「ぐえ！」（作者の背に巨大お灸がのしかかる）

一成
「どうだ？」

作者
「あんちゃん熱いよ！　ギギギのギ！！」

一成
「なんというは〇しの〇ン」

神奈

「広島の人間にしか分からんのではないかの？」

天音
「とりあえず、丸一日続くそうですから存分に堪能ください」

作者
「無理ぃぃぃぃ！　死ぬ、死んじゃう！！」

一日経過・・・

一成
「お、お灸が消えたぞ」

神奈
「どうじゃった？人生初のお灸は？」

作者
「・・・」

天音
「感激のあまり声も出ないようですね」

作者
「ええぇ！　次だ！！　朝凪　夜風様お願いします！！！」

一成
「ッ！？　この力は・・・！」

神奈
「まさか・・・オーラ！？」

天音
「そんな！　一成様意外に使える方がいるなんて・・」

作者
「フフフ、朝凪　夜風様が俺にホーリーをかけてくださるそうだ」

朝凪　夜風様
「マナよ・・光の奔流となれ・・・彼の者どもを包み、究極の破壊を与えよ！！」

一成
「ん？　でもこの詠唱は・・」

作者
「さあ！　朝凪　夜風様、お願いしま「オーラフォトンッノヴァァァァァ！！！」すぅぅぅぅ！！！？」

ドゴォォォォォン！！！

一成
「やっぱりオーラフォトンノヴァか」

神奈
「おお！　盛大に吹っ飛んだのぉ」

天音
「あら？　一成様、朝凪　夜風様から作者へのメッセージがあるそうです」

一成
「なんて？」

天音
「ええと、『ホーリーとオーラフォトンノヴァをうっかり間違えてしまいました。ごめんなさい』・・とのことです」

一成
「そうか、うっかりか、しょうがないよな。人間、間違いの一つや二つあるもんなぁ」（ニヤリ）

神奈
「か、一成？　もしかして・・何かやったのか？」

一成
「いいや、『俺』は何もしていないさ」

作者
「まだだ！　まだ終わらんよ！！」

一成
「いいかげんしつこいな」

神奈
「しぶとさだけはG並みじゃな」

天音
「ある意味、Gより性質が悪いですね」

作者
「伊達や酔狂で前回のアレを耐えきったわけじゃない！　最後は・・・コレだ！！」

バァァァーン！

一成
「なんだそれは？」

作者
「これぞ、ヨッシィ～♪♪♪様から頂いたエリクサー×3だぁぁ！！」

一成
「またヨッシィ～♪♪♪様か・・・あまり迷惑かけるなよ」

天音
「感想を頂いたり、贈り物を頂いたり、本当にありがとうございます」

神奈
「で・・それを使ってどうする気じゃ？」

作者
「決まっている！　傷を治して・・・逃げる！！」

一成
「逃げるのかよ！」

作者
「さらばだ！」

ゴキュッゴキュッゴキュッ！×３

一成
「全部飲みやがった・・・」

神奈
「もったいないことするのぉ」

天音
「ですが・・様子がおかしいですよ？」

作者
「ぐぼぁ！！？？」

ドサッ！

一成
「あ・・・倒れた」

神奈
「泡も吹いておるぞ。あ！　痙攣しだしたぞ！！」

天音
「・・・アナライズ終了・・どうやら、あのエリクサーは3～4年前に賞味期限が切れているようです」

一成
「・・・これで終わりか？」

神奈
「そのようじゃな」

一成
「では改めて、月光閃火様、お仕置き地獄フィールドの提供ありがとうございました。・・・ちなみにバカ（作者）への対応はこれからも変わりません」（笑）

神奈
「次に朝凪　夜風様、許可なく後書きに登場させて、あまつさえ勝手にうっかりキャラにしてしまって本当にすまんかったのぉ。じゃが、ぜひとも本人に術を使ってほしかったからあんな風にしてしまった。どうか許してほしい。・・いやだったら書き直すからの」

天音
「そして、ヨッシィ～♪♪♪　様、何度も感想を書いてくださり、本当にありがとうございます。今回頂いた賞味期限切れのエリクサーは使用用途がありすぎて、どうやって使用するかとても悩みまし

たが、結局作者自滅という方法になりました」

一成
「これからも、何か頂いたら、それを使って作者をいびる事にします」

天音
「ご希望の方は、何を使って、どうやっていたぶるかをご意見としてお送りください」

神奈
「もちろん、直接妾達が殺ってもよいぞ♪」

一成・神奈・天音
「では・・お待ちしてます!!」」」

プロローグ最終話　時間を操作できるって便利です（前書き）

無理やり時間を飛ばします。そして・・・またやってしまった

プロローグ最終話　時間を操作できるって便利です

動物園でのひと騒動から早三ヶ月。色々あったが高町家の人々とは友好な関係を築けていた。

士朗さんと恭也さんとは・・・あの後色々あった。

・・・・・・・・

・・・・・・

・・・

桃子
「・・・・・・・・」

士朗
「・・・・・・・」（汗）

恭也
「・・・・・・・」（汗）

俺の前に凄まじい光景が広がっていた。さっきまで俺を追いかけていた士郎さんと恭也さんは滝のような汗を流しながら桃子さんの前で正座していた。その姿は、とてもさっきまであれだけの殺気を放

っていた人と同一人物とは思えない。そして・・・

桃子
「・・・どうしてこうなったか・・・分かるわよね？・・・あなた？・・恭也？」

その前でにこやかに笑う桃子さん・・だが、放つオーラは尋常ではない。というか濃密なオーラのせいで周りの景色が歪んでいる。

なのは・美由紀
「「あわわわわわ・・・」」

なのはと美由紀さんが震えている。しかし、よく気絶しないな。

神奈
「な、なんじゃ？　動けん・・霊剣の中でも高位の存在である妾が・・恐怖を感じておるのか・・・？」

天音
「ふ、震えが止まりません・・・」

当の桃子さんは涼しい顔をしている・・・正直、怖い。

桃子
「子ども相手にムキになって・・・他のお客さんにも迷惑をかけて・・少し調子に乗りすぎかしらね・・・」

恭也
「し・・しかし、母さ・・・」

桃子
「・・・・（ギロリ）」

恭也
「ッ！？」

恭也さんが何か言おうとしたが、桃子さんが無言で黙らせる。士郎さんは涙目だ。

桃子
「少しお説教・・・いえＯＳＥＫＫＹＯＵしましょうか・・・」

士朗
「ま、まってくれ桃子！　僕達が悪かった！！」

恭也
「母さん！　謝るから！！　一成君にも、他のお客さんにもきちんと謝罪する！！・・・だから！！！」

士朗・恭也
「アレは・・アレだけはいやだぁぁぁぁぁ！！！」

そのまま桃子さんに引きずられていく二人・・・・アレってなんだ？

その後、何故か二人はかなり友好的な態度をとってくれるようになった。しかし、未だにあの日の事を思い出そうとすると体の震えが止まらないらしい。トラウマになったみたいだ。

そして、それから三ヶ月たった今、俺は一つの決断をした。

士朗・桃子・なのは・美由紀・恭也
「「「「「「引っ越し!?」」」」」」

一成
「ええ、叔母がせっかくだからこっちに来ないかっていうんで・・・」

もちろん、これはウソだ。本当はある目的のために一度この町から離れる必要があったからだ。

前日の夜・・・

神奈・天音
「「情報収集？」」

一成
「ああ、そろそろ動きだした方がいいと思ってな」

なのはが魔法に目覚めるまでまだ少し時間があるが、少しでも早く動く事に越したことはない。

一成
「考えてみれば、俺達原作は知っていても、この世界の詳しい事までは知らないだろう？」

天音
「そうですね、情報は必要なモノですし」

神奈
「じゃが、どうやって集めるつもりじゃ？」

一成
「それに関してだが・・・ミッドチルダに行こうと思う」

原作でもたびたび名前が出た場所だ。あそこなら色々分かるかもしれない。

一成
「さしあたっては・・・時空管理局の情報だな」

神奈
「しかし・・そうなるとここから離れる必要があるの」

天音
「・・さみしくなりますね。せっかく高町家の人たちと仲良くなれましたのに」

確かにな。でも・・・

一成
「別にもう会えないって訳じゃないぞ。なのはが魔法に目覚めるころには戻ってくるつもりだし」

神奈
「となると、三~四年くらいかの?」

一成
「ああ、それだけあれば十分情報も手に入るだろうし、明日俺が話してくるよ」

こうしてさきほどの場面に戻る。俺の突然の報告に全員驚いているようだ。

士朗
「・・・そうか、いつ出発なんだい?」

一成
「明日にでも向かおうと思っています」

桃子
「ずいぶん急な話ね」

一成
「すみません。なにしろこっちにも突然の事なので・・・」

美由紀
「そっか～、・・・さみしくなるね」

一成
「俺もですよ美由紀さん」

恭也
「体には気をつけるんだぞ」

一成
「ありがとうございます恭也さん」

なのは
「・・・・・・」

桃子
「さぁなのは、あなたもごあいさつしなさい」

桃子さんの言葉にもなのはは反応がない。どうしたんだ?

なのは
「・・・ゃなの」

桃子
「なのは？」

美由紀
「どうしたの」

なのは
「いやなの！　さよならなんていやなの！！」

なのはが泣きながらしがみついてきた。やれやれ、泣かせないために俺がこの世界に来たのに・・俺のせいで泣かせるなんて世話ないな。

一成
「・・・ゴメンなのは。でも、またすぐ会えるよ」

なのは
「うぅ・・ヒグッ・・ほんとう？」

一成
「ああ、実際お世話になるのは三～四年くらいだし、そうしたらまたここに戻ってくるよ」

なのは

「・・・うそじゃないよね？」

一成
「嘘じゃないよ・・・・そうだ」

俺はふところから首飾りを取り出す。以前すずかにも渡したやつだ。

なのは
「・・まえみたのとかたちがちがうの」

前にすずかに渡した首飾りは結晶が月の形をしていたが、今回のは星の形をしている。

一成
「これは、また会うという約束の証、なのはは知っているだろ？
だから君にこれを渡すよ。必ず再会できるように」

そういってなのはに首飾りを渡した。なのははしばらくそれをじっと見つめていたが、やがて

なのは
「うん・・・やくそくなの」

と首飾りをかけてくれた。周りの人たちも笑顔で見送ろうとしてくれた。

このまま終わればよかったのだが、何故かなのはが急にそわそわしだした。

なのは
「あ、あのねかずなりくん・・ちょっとめをつむっててほしいの」

一成
「？」

言われるままに目を閉じる俺。いったいなんなんd・・・

『ちゅっ』

一成
「ッ！？」

士朗
「なっ！！」

桃子
「あらあら♪」

恭也
「!?!?!?!?」

美由紀
「お～、なのは大胆!」

頬に柔らかな感触。目を開けると・・・顔を真っ赤にしているなのはの姿があった。

なのは
「えへへ、ちゅ～しちゃったの／／」

は?・・・何?・・・ちゅ～?・・・あれか?　キスってやつか?・・・誰が誰に?

頬に柔らかな感触→目を開けると真っ赤な顔のなのは→なのはがキスをしたらしい→キスは目の前の人物にするもの。

つまり・・・

なのはがキスした相手＝俺

・・・・・・・・・ドサッ！

なのは
「ふぇ！？　かずなりくん？　どうしたの！？」

士朗
「まさか・・・なのはがそんな」

桃子
「真っ赤になっちゃって・・・ウブねぇ♪」

恭也
「ウソダ、コレハユメダ。ソウダ、ソウニキマッテイル」

美由紀
「へ～、一成君ってこういうの苦手なんだ」

高町家の人々の声を聞きながら俺は意識を失った。

色々あったが、こうして俺達は高町家の人たちと短い別れを告げた。

・・・この一件のせいでミッドへの移動が一日延びたのは余談である。

一成の家にて

キュピ～ン！！

神奈
「む・・・！」

天音
「はっ・・・！」

神奈・天音
「「一成（様）に関係する重要なイベントを見落とした気がする！！」」

プロローグ最終話　時間を操作できるって便利です（後書き）

作者
「なんというロリコ「だまれ」ぶべら！」

一成
「クソッ！　俺はロリコンじゃない！　というか、あのおっさんを殴り飛ばした俺がロリコンであってたまるかぁぁぁぁ！！」

神奈
「一成の場合、ただ耐性がないだけじゃろ？」

天音
「そうですね、だから、自分からするときは意識しないのに、相手からされるとあのような反応をしてしまうのでしょう」

作者
「（いまのうちに）」

コソコソ

一成
「とりあえず・・・ＳｔＳのなのはを呼ぶぞ！！　あの野郎、絶対に許さん！！！」

神奈
「・・・ん？　一成よ、作者が消えたぞ」

天音
「探索魔法にもかかりません、どうやら逃げたようです」

一成
「うがぁぁぁぁぁ！　この鬱憤を何にぶつければいいんだぁぁぁぁ！！　オーラフォトンレイジ！！！」

バゴォォォォォン！！！！

神奈
「うひゃぁぁぁぁ！？　一成よ！！！　妾達を殺す気か！？」

天音
「今の一成様に何を言っても無駄ですよ・・・」

一成
「作者ぁぁぁぁぁ！！　必ず貴様を消してやる！！！　憶えていろよぉぉぉぉ！！！！」

タッタッタ・・・

作者
「ふぅ、なんとか逃げだせたが、次回あたりヤバいな。しかし！！
俺にはまだ秘策がある！！　今度こそやつらに目に物見せてやるぜぇぇぇぇぇ！！！」

無印編突入記念　キャラクター説明（前書き）

次回から無印編に入ります。

無印編突入記念　キャラクター説明

作「さぁ！やってきました、キャラクター説明&俺の後書き以外での場所での初登場！！！」

一「後者は全くと言っていいほど必要無いがな」

神「しかし、ようやく妾達の明確な説明が行われるんじゃな」

天「正直、本編での説明が全くありませんでしたからね」

一「『旅人』とか『霊剣』とか単語ばっかり出て、放置だしな」

作「だから、今回こういう機会を持ったんだよ！それでは、キャラクター説明を始めます。見たくない方は見ないでください。イメージを損なわれる可能性があるので・・・

秋月　一成
人霊剣神威・天翔と契約した旅人の青年。一つの世界を守るたびに別の世界に渡っているが、行く先々の世界でフラグを立てまくるギャルゲ主人公を地で行く男である。（人外にもホレられたことがある）また当然のごとく鈍感である。神威曰く「主はそのうち歩くだけでフラグを立てそうじゃ」天翔曰く「そしてそれに気付かないまま別のフラグを立てていくんですよね。まぁ気付くマスターなんて想像がつきませんけど」（笑）とのこと。旅人としての経験はまだ

低いが、神威と天翔の力と彼自身の特殊な力で他の旅人を上回る力を持つ。今回も次の世界に渡ろうとしたところを、その力に目をつけた駄神に無理やりリリカルなのはの世界に飛ばされる。

姿のイメージ・・・聖なるかなの暁　絶

人霊剣＜神威＞

一成が旅人になるために契約した人霊剣の一本。元々一つの神剣であったが、とある切っ掛けで二つの霊剣になった。意思を持ち、人霊剣の名の通り人の姿をとることもできる（女性化）。一成至上主義であり、彼を傷付けようとするものは例外なく彼女に地獄をみせられる。天翔とは元々一つだったが仲が悪く一成をめぐってよくケンカする。（惑星崩壊の危機になるほどの壮絶な戦いをしたことがあり、一成に思い出すのも恐ろしいお仕置きをされたことがある。ちなみにその世界で倒すべきだった敵は二人の戦いに巻き込まれて瞬殺された。お仕置きの後、二人の間には一成を本気で怒らすなという誓いが立てられた）。が一成の危機には二人で協力するあたり本当は仲が良いのかもしれない。

姿のイメージ・・・真・恋姫無双の黄蓋

人霊剣＜天翔＞

一成が旅人になるために契約した人霊剣の一本。神威と同じく意思を持ち人の姿をとれる。（女性）一成至上主義である。普段は礼儀正しいのだが、たまにヤンデる。さらにM（お仕置きで目覚めたら

しい）一成を主に決めたのは彼女の方であり、実は生まれたときから見守り続けていた。曰く「マスターが私のマスターになるのは生まれたときから決まっていたのですから別におかしくはないでしょう。ウフフフ・・・あらいやだ私としたことが」とのことらしい。

姿のイメージ・・・真・恋姫無双の夏侯淵

霊剣
意思を持つ武器。剣以外に斧や槍、さらには爪など様々な形の物がある。高位の霊剣は持ち主を旅人として多元世界に導く。

人霊剣
高位の霊剣の中でもさらに高い力を持つ剣。人の姿になることができる。

旅人
高位の霊剣に認められ、契約した者を総じて旅人と呼ぶ。旅人には寿命が無く、霊剣が破壊される。もしくは、体を構成するマナが無くならない限り死ぬ事はない。

神剣

霊剣を遥かに上回る力を持つ剣。詳しくは謎に包まれている。

作「以上です」

一・神・天「「「コレはひどい！！！」」

作「ズーン・・・」

神「プロローグ以前に書いていたものを引っ張り出してきたから、何だか本編と違うところもあるようじゃし」

天「そして・・・なんという厨二・・」

一「まんま永遠のアセリアや、聖なるかなの設定の丸パクリじゃねえか」

神「しかも、妾達のイメージもパクリじゃぞ」

天「少しは自分で考えたらどうですか？」

作「いいだろ別に！アセリアやなるかなは世界観とかカッコいいし、俺、祭さんと秋蘭が好きだし」

一「いや、少しはオリジナル要素を入れろよ！！」

作「いつか入れるぞ・・・たぶん」

神「これは・・期待できそうにないの」

作「しか～し。ストーリーにはきっちりオリジナルを入れるぞ！・・・・さしあたってアンケートを取りたいんですが。次のうち、これからどうストーリーを展開させてほしいかを選んで下さい」

1　原作通りに進む

2　全部救うんだろ！だったらプレシアとアリシアも助けてみせろよ！！

作「この二つの内、どちらかをお選びください」

神「1はいいとして・・・2は大丈夫なのかの？」

作「考えとしては、アリシアを失う原因になる事故やプレシアさんの心を操る・・・ぶっちゃけ全ての元凶のオリキャラをでっちあげてぶち殺す」

一「ネタばれしてんじゃねーか！！」

天「オリジナル路線は物語の崩壊を招く危険性がありますが・・・」

作「構わん！だって自己満足だもん」

一「コイツ言い切りやがった・・・」

作「と・・いうわけで、どちらのルートがお望みかを書いてそうですね・・・１６日金曜日の夜１２時までにお送り下さい。では・・・お待ちしてま～す♪」

無印編突入記念　キャラクター説明（後書き）

ぶっちゃけあんまり意味無いです。多分どんどん変えていくと思うので・・・

無印編第一話　再会は突然に（前書き）

ようやく無印です

無印編第一話　再会は突然に

なのはＳＩＤＥ

な「いってきま～す」

そう言って私は玄関を出ていつものバス停に向かう。なんだかみんなニコニコしていたけど、どうしたんだろう？

あれから3年・・・私は小学3年生になりました。・・彼がいなくなって3年、まだ彼は帰ってきません。でもさみしくはないです。だって、約束したから。

女の子Ａ「なのは～」

女の子Ｂ「なのはちゃ～ん」

そうこうしているうちにバス停の近くまで来ると、私の名前を呼ぶアリサちゃんとすずかちゃんがいました。

な「おはよ～二人とも」

す「おはようなのはちゃん」

ア「相変わらずギリギリね」

な「にゃ、にゃはは」

二人とお話していると、バスがやってきたので、私達はそれに乗り、いつもの席に座りました。

ア「そういえば今日よね」

な「え？なにが？」

ア「アレよ、転校生が来るって話」

な「あ、そうだ」

3日前に先生が、クラスに新しい子がやってくると言っていた。それが今日だった。

な「どんな子かな？」

ア「女の子だったら私達が最初に友達になってあげなきゃ、・・・男子だったら、まぁ適当にね」

な「あ、あはは」

相変わらずだねアリサちゃん

す「・・・・・」

な「すずかちゃん？」

ア「どうしたの？　具合でも悪いの？」

さっきからすずかちゃんがずっとしゃべらないので、私は不思議に思って声をかけました。

す「え！？　う、ううんなんでもないよ。・・・ただ、転校生があの人だったらなぁって」

そう言ってすずかちゃんは首飾りを見る。そう、すずかちゃんはあの時動物園で会った子でした。再会した時はビックリしちゃった。・・・ビックリと言えばあれもビックリしたなぁ

最初、アリサちゃんはすずかちゃんをいじめていました。すずかちゃんはずっと泣いていました。そんなある日、アリサちゃんが・・・

ア「あら？　なによコレ」

と言ってすずかちゃんがつけていた首飾りを取りました。すると・・・

す「・・・して」

ア「？・・なによ？」

す「返して！　それだけは絶対に渡さない！！」

そう言ってアリサちゃんにつかみかかった時は驚きました。すずかちゃんっておとなしいイメージがあったから、そんな事をするとは思いませんでした。でも、この事がきっかけで私達は友達になれました。

ア「あの人って・・・ああ、すずかの想い人ね」

アリサちゃんがあきれたような声を出すとすずかちゃんの顔が赤くなりました。

す「お、想い人ってそんな／／」

ア「何言ってんのよ、いつもいつも首飾りを見てため息ついてれば誰でも分かるわよ」

す「あぅ／／」

すずかちゃんはもう真っ赤でトマトのようでした。・・・むぅ～、なんだろう?胸がもやもやします。

ア「なのは?」

す「どうしたの?」

な「な、なんでもないよ!」

二人がこっちを見てくるのでなんとかごまかした。さっきのはなんだろう?

ア「まっ、もしもそいつが転校生だとしたら・・・色々聞く必要があるわね」

そう言って楽しそうな顔をするアリサちゃん、笑ってるのに怖いです（苦笑）

しばらくして、いつも降りるバス停についたので、私達は降りて学校に向かいました。校門を通って自分のクラスに入ると、みんなざわざわしていました。やっぱりみんな転校生の事が気になるようです。

す「みんなも気になってるみたいだね」

ア「全く、ヒマな連中ね」

な「え、でもアリサちゃんもさっき・・」

私がそう言うと、アリサちゃんが私のほほを引っぱりました。

ア「う、うるさい！　そんな事を言う口はこの口か～」

な「いふぁい！　いふぁいよアリふぁふぁん！！」

す「あ、あはは・・・」

すずかちゃん、笑ってないで助けてほしいの！

先「はーい、席について」

チャイムがなってしばらくすると、先生が入ってきました。みんなそわそわしています。

先「みんな知ってると思いますけど、今日からこのクラスに新しいお友達ができます。みんな、仲良くしてあげてくださいね」

全員「は～い！」

どんな子だろう？　私はいつの間にか緊張していました。

先「それじゃ、入って～」

？「はい」

先生の声に返事をする転校生、声からして男の子かな？　でも・・・
どこかで聞いた事がある気がする。

そんな事を考えていると転校生の子が入ってきました。

な「え？」

・・・その姿を見たとき、固まってしまいました。

ちょっと黒の混じった銀色の髪、青色の瞳、その全てが3年前の彼に重なる、まさか？　もしかして！？

なのはＳＩＤＥ　ＯＵＴ

すずかＳＩＤＥ

先「みんな知ってると思いますけど、今日からこのクラスに新しいお友達ができます。みんな、仲良くしてあげてね」

全員「は～い！」

みんな元気よく返事をする。私は気がつかないうちにドキドキしていました。もう、アリサちゃんが変な事言うから！

す「（でも、本当にあの人だったらいいな）」

３年前のあの日、怖い目にあっていた私を助けてくれた男の子、もう会えないと思っていた私にこの首飾りをくれてまた会うと約束してくれた。

あの後、なのはちゃんと再会して遠くに引っ越したと聞いた時は悲しかった。それでも、あの人は必ず約束を守ってくれると今も信じています。

そんな事を思っていると、転校生の子が入ってきました。

す「・・・・え？」

入ってきた彼の姿を見た時、私の頭は真っ白になりました。忘れない、忘れるはずがない。３年前の男の子、顔だちが少し変わっているけど見まちがうはずがない。彼は・・・

先「じゃ、自己紹介して」

男の子「はい、今日からこのクラスの一員になる秋月　一成だ。３年前にこの近くに住んでいたが、ちょっとした理由で引っ越して先日戻ってきた。色々変わっていたので少し驚いたが・・これからよろしく頼む」

女の子Ａ「キャ～、カッコいい！」

女の子Ｂ「すてき・・・」

女の子Ｃ「はう・・・」

ドサッ

女の子達が騒いでいたけどどうでもよかった。私は彼に釘付けだった。まさか・・本当に？・・・本当に！？

な・す「一成君!?」

こうして私はずっと待ち続けていた3年前の男の子、秋月　一成君と再会しました。

無印編第一話　再会は突然に（後書き）

作「ようやく無印編突入！」

神「いや～長かったのぉ」

天「１０話以上かかりましたものね」

一「そんな事はどうだっていい。フ、フフフ・・・作者よ、よくもまぁ俺の前に姿を現せられたな」

神「か・・・一成？」

天「前回の怒りが収まっていないようですね」

一「色々やって結局生かしてきたがもはや躊躇いはせん・・・今度こそ・・・貴様を・・・消す！！！」

作「クッ！だが、さすがにやりすぎて命の危険を感じていた俺が、何も準備してないと思ったか！！」

ブオン

神「！またか！！」

天「今度はなんですかって・・・ヒッ！？」

作「再び月光閃火様に展開していただいた『お仕置き苦手なモノ幻想地獄フィールド』展開！！！自分が一番苦手なモノを見続けるこのフィールド、さらに！俺には効かないという徹底ぶり！！月光閃火様ありがとうございます！！！」

神「ひぁぁぁぁ！！おばけ！！！おばけはいやじゃ～！！！！！」

天「イヤァァァ！！！虫！！！虫だけは許して下さい～！！！！！」

作「ハーハハハ！逃げ惑え！！・・・そして！！！」

おばけ「うらめしや～」

神「ヒィィィィ！！」

ピト（天音の顔に虫が張り付く）

天「！？！？！？！？」

作「神奈と天音には、おまけとしてトラウマ確実の出来事をプレゼントだ～！！」

神「はう」

天「あう」

ドサッ×２

作「・・やった・・・やったぞ！ついに一矢報いてやった！！月光閃火様、あなたのおかげです！！！」

一「・・・・・・・・」

作「ん～？どうした一成？恐怖のあまり声も出ないか？・・・まぁこれに懲りたら少しは俺への態度を改めて（ガシッ！！）へ？」

一「捕まえたぞ、さぁ、覚悟はいいか？・・・俺はできてる」

メキメキ！！

作「いだだだ！！ちょ！？なんで！幻想は！？」

一「確かに見たよ、だがな・・・そんなもので俺の貴様への怒りを止められると思うな！！この幻想ごと・・・貴様を消滅させる！！！」

作「ま、まって！分かった！！俺が悪かった！！！訂正する、お前はロリコンじゃない・・・だから！！！！」

一「光速の連撃・・受けろ！［レインランサー］！！」

作「ぎゃっ！ちょっ！？まっｔ！！」

一「まだだ！原初より終焉まで・・・悠久の時の全てを貫け！！」

ドゥーム・・・ジャッジメント」！！！」

作「ユーフィの最強スキルをこんなところで・・ってギャァァァァァ！！！！」

一「止めだ！！不滅の意志よ・・・刃となれ！！！」

作「そ、それは・・・望の必殺技！！」

一「［イモータル・ウィル］！！！」

作「さようならぁぁぁぁぁ！！！・・・・・・」フェードアウト

一「ハァッ、ハァッ、ハァッ・・・今度こそ、マナの露と消えろ」

ユーフィ・・・聖なるかなに登場するユーフォリアの愛称。［ドゥームジャッジメント］は彼女の神剣『悠久』をサーフボード状に展開し、敵に突撃する技。ＨＰの高い敵ほどに効果を発揮し、一撃でラスボスのＨＰを半分以上奪い取る超鬼畜技。

望・・・聖なるかなの主人公。［イモータルウィル］は元々持っていた神剣『黎明』と新たに契約した『叢雲』を合体させ、さらにそこから光の刃を出して敵を斬り裂く技。これもＨＰの高い敵に効果を発揮する。ラスボス戦は、前作の主題歌のアレンジｖｅｒをＢ

ＧＭにし、この技で主人公のカットインも入り、かなり燃える。（作者も直前でセーブし、何度もラスボスをボコッている）

［レインランサー］・・・聖なるかなに登場するルプトナの技、３回連続で敵を蹴り上げる彼女の基本スキル。

最後の説明いりましたか?ちなみにラスボス戦はＹｏｕｔｕｂｅに動画が載っていたはずなので、興味のある方は聖なるかなで検索してみて下さい。燃えます。

最後に、一成が何を見たかはご想像にお任せします（笑）

アンケート結果報告&追加アンケート（前書き）

決まりました

アンケート結果報告&追加アンケート

作「アンケート結果報告～」

一「・・オイ」

作「何？」

一「お前、消滅したんじゃなかったのか？」

作「まぁ番外編だしね～」

一「チッ・・まあいい、それで結果は？」

作「舌打ちが気になるけど、え～結果は2になりました。アンケートにご協力頂いた皆様ありがとうございます」

一「んな事言ってるけど、仮に1になってたとしても、適当に理由付けて2にするつもりだったんだろ」

作「ギクッ！ハハハ、ナンノコトデセウ」

一「決まってんなら無駄な事するなよ」

作「うるせぃ！1回やってみたかったんだい！」

一「だい！・・じゃねーよ気持ち悪い」

作「ぬーん」

一「それで・・追加アンケートって？」

作「おお！そうそう、いや、オリキャラをでっちあげてブチ殺すってもう決まってんだけど、・・次は倒し方なんだよね」

一「倒し方？」

作「うん、この小説、チートってタグがあるくせに今までチートらしいことしてないだろ？」

一「後書きでは何回もしてるがな」

作「本編の話だよ！・・そこで、この無印編のボスともいえる敵にチートの力を使うか否か、簡単に言うとザコにするかどうかってこと」

一「ザコって、いいのか？仮にもボスだろ？」

作「ボスは読者の方が見てマジでコイツぶっ殺してやりたいって思うような超ムカつく奴にする予定なんだけど、そういう奴ってスカッとするような倒され方した方がいいだろ？」

一「まぁ、確かに」

作「というわけで、また次の内のどちらかを選んで送ってください」

一「お前、読者の方に丸投げしたな」

作「で、ではお願いします！」

1　ボロボロになりながらもなんとか倒す

2　チートなめんな！

作「ちなみに、作者のお勧めは2です。さらにチートな技がでるよ～」

一「さらっと誘導してんじゃねぇ！！」

作「期限は１９日月曜日の夜１２時です」

作「ん？ところで・・・神奈と天音は？」

一「・・・まだ、気絶してる。お前・・・いつ帰ってくるかわからんが、覚悟しといた方がいいぞ。本気で切れたあの二人は俺にも止められん」

作「ぬーん」

アンケート結果報告&追加アンケート（後書き）

もしよろしかったらアンケートお願いします

ちなみに『ぬーん』に意味はありません・・・

第二話　初めての人には第一印象が大事です（前書き）

前話の主人公ＳＩＤＥだと思ってください。

第二話　初めての人には第一印象が大事です

あれから三年が経った。俺達はその間に管理局についての情報を徹底的に集めた。

一「帰って来たな」

神「なつかしいのぉ」

天「ええ、三年しか経っていないのに・・・」

俺達は海鳴市に帰って来た。理由はもちろん、なのはたちの力となるためだ。

一「早速翠屋に行くか」

俺達は高町家の人たちに会うために、翠屋に足を運んだ

カランカラン

桃「いらっしゃいませ・・・あら？」

一「お久しぶりです桃子さん」

神「相変わらず綺麗じゃのう」

天「お変わりないようでなによりです」

翠屋に入ると桃子さんがいた。変わらないな・・・まぁ、三年くらいじゃそこまで変化しないか。

桃「神奈さんに天音さん・・・！？　ということはもしかして、一成君？」

一「ええ、そうです」

桃子さんは最初俺が分からなかったようだが、神奈と天音を見て俺だと分かったようだ。

桃「まぁまぁ！　見間違えたわ・・・！！　そうだ、あなた～ちょっと来て～」

桃子さんがそう言うと、奥から一人の男性が出てきた。

士「どうしたんだ桃子・・・ん？　もしかして・・・一成君かい？」

一「士郎さん、お久しぶりです」

桃「見間違えたでしょ？」

士「ああ・・・大きくなったね・・・」

そう言って士郎さんは俺の肩を叩いてきた。そこまで変わってない気がするが。

桃「あなたがここに来たってことは、もしかして」

一「ええ・・・帰ってきました、この町に」

士「そうか・・・」

桃「それじゃあ、あの言葉を言わないとね」

あの言葉？

士・桃「「三人とも・・・お帰りなさい」」

・・・・・

一「そう言えば・・・残りの人たちは？」

さっきから探しているが、姿が見えない。

桃「恭也と美由紀はまだ学校。なのははお友達と遊びに出掛けたわ」

恭也さんと美由紀さんは仕方ないとして・・・なのはには会えるか？

一「桃子さん、なのはは何処に行きました？あいさつしときたいんですが」

俺の言葉に桃子さんは何か考えているようだった。

桃「・・・ねぇ一成君、あなたこっちに戻って来たってことは転校してきたのよね、何処の小学校？」

一「聖祥大付属小学校ですけど」

桃「あら！　なのはと同じ小学校なのね♪・・・だったら今日は会わない方がいいわね」

桃子さんが不思議な事を言った。会わない方がいい？

一「どうしてですか？」

桃「学校で突然再会したらビックリするじゃない、ドッキリよドッキリ♪」

士「お、それはおもしろいな、なのはのやつ驚くぞ」

士郎さんもノッてきた。・・・自分の娘にどっきりて・・

一「・・・わかりました。じゃあ、今日はこれで失礼します」

こうして、俺達は翠屋を後にした

そして、次の日・・・

一「それじゃ、行ってくる」

神「気をつけての」

天「いってらっしゃいませ、一成様」

二人の声を受け、家を後にする。前に住んでいた家だ。空家になって売られていると思ったが残っていたのは驚いた。おそらく、駄神がまた何かやったのだろう。

それにしても・・・小学生か。いったい何時以来だろう？　旅人となる前、人間だった頃を思い出す。・・・なんだろう？　ロクな思い出が無かった気がする。アレ？涙が出てきた。おかしいな、別に悲しい事なんてないのに。

俺は理由が分からない涙を流しながら学校へ向かった。

先「君が秋月　一成君ね。私が君の担任です」

学校についた俺は、まず職員室へ向かった。すると一人の先生が近づいてきた。どうやらこの人が俺の担任らしい。

一「はい、今日からお世話になる秋月　一成です。色々ご迷惑をおかけすると思いますが、よろしくお願いします」

先「礼儀正しいのね、こちらこそよろしくね」

挨拶を済まし、教室へ向かう。途中いくつかの視線を感じた。何だ？　殺気もないし、敵意も感じない。

女の子Ａ「ねぇ、あの男の子」

女の子Ｂ「カッコいい！！　どこのクラス？」

女の子Ｃ「見た事ないわね」

女の子Ａ「もしかして、転校生？」

そちらに視線を向けると、女の子が数人こちらを見ながら話していた。が、俺の視線に気づくと皆逃げるように俺の前を通り過ぎようとした。

女の子Ｂ「キャッ！」

俺の目の前で一人が足をつまずかせて転びそうになった。すかさず抱きとめる。

一「おっと」

ガシッ

女の子Ｂ「え？」

衝撃に備えていたであろう女の子は目を閉じていたが、いつまでたっても何もないので恐る恐る目を開けた。

一「大丈夫か？」

女の子にケガが無いか確認すると、ポカンとしている表情から一変し、顔が赤くなった。

女の子Ｂ「は、はい、だいじょうぶでしゅ／／」

一「そうか、よかった」

女の子Ｂ「！？！？！？」

顔の赤みに若干の不安をおぼえたが、本人が大丈夫と言っていたので、思わず安堵の笑みを浮かべた。

すると・・・

女の子Ｂ「はわわわ・・・はぅ」

気絶した。

一「ど、どうした？　まさか・・・持病の発作か何かか？　とにかく保健室へ！！」

俺は女の子を抱きかかえ、近くにいた生徒に保健室の場所を聞き急いで向かった。

そんな俺を、先生が「これは・・・とんでもない子が来たわね・・」恐ろしいものでも見るかのような目で見つめていたのに気付くはずもなかった。

・・・・・

先「それじゃ、私が呼んだら入ってきてね」

一「分かりました」

あの後、保健室の先生に女の子を預けた俺は教室のドアの前に立っている。先生が先に入りみんなに俺の説明をしているようだ。

先「それじゃ、入って～」

一「はい」

ドアを開き教卓の前に進む・・・これが俺のクラスメイトか・・・

先「じゃ、自己紹介して」

自己紹介か・・・まぁ、無難にやるか。

一「はい、今日からこのクラスの一員になる秋月　一成だ。３年前にこの近くに住んでいたが、ちょっとした理由で引っ越して先日戻ってきた。色々変わっていたので少し驚いたが・・これからよろしく頼む」

自己紹介を終えるが、みんななんの反応もない。何かマズッたか？

女の子ａ「キャ～、カッコいい！」

女の子ｂ「すてき・・・」

女の子ｃ「はう・・・」

ドサッ

突然、女子が歓声を上げた。カッコいい？　素敵？　そして・・・また一人倒れた。この学校持病持ち多すぎだろ・・・

男の子ａ「ケッ男子かよ」

男の子ｂ「イケメンは氏ね」

男の子ｃ「殺殺殺」

男子は男子で、何故か俺を睨んでいるのが大半だった・・・なぜ初対面でそこまで殺気をぶつけてくる？

そう思っていた時

女の子ｄ・ｅ「「一成君！？」」

俺の名を呼んでくる二人の女の子が目に入った。

一「なのはと・・・もしかして、すずかか？」

俺の目の前には、三年前に約束をした二人の姿があった。

第二話　初めての人には第一印象が大事です（後書き）

神「う、ううん」

天「私はいったい？」

一「気がついたか二人とも」

神「一成」

天「いったい何があったんですか？それに・・・周りのこの荒れ果てようは？」

一「二人は月光閃火のフィールドの力で今まで気絶していた。この周りは・・俺の力の余波でこうなった」

神「すさまじいのぉ、ここまでの力を使ったということは・・・」

一「ああ、あのバカは今度こそ消滅した・・・はず」

天「はず・・・とは？」

一「なんだか、ヤツを消した後にヤツと会話した気がする」

天「それって、おばｋ「ひゃぁぁぁ！！そんなはずはない！！一成は幻覚を見ただけじゃ！！！おばけなんておるわけないんじゃぁぁぁ！！！」・・・とのことですが」

一「気のせいか？やけにリアルだったような・・・」

神「ももも、もういいじゃろその話は！！それよりほら、　朝凪夜風様から頂いたアップルパイでも食べようぞ」

天「いい色ですね、お焦げもちょうどいいですし、頂きましょうか」

一「そうだな・・・力を使って腹も減ったし」

準備中

一「これで切り分けられたな」

神「うまそうじゃのぉ♪」

天「それでは、一成様からどうぞ」

一「そうか？じゃあいただきｍ（ガシッ！！）・・・」

神・天「「な！？」」

一成の顔の前に謎の波動が出現したかと思うとそこから手が出てきて一成の顔を掴む

ギリギリッ！！！

天「これは！　月光閃火様のフェイスクラッシャー！！！」

神「ええい！またあやつか！！！」

天「一成様！今お助けを・・・」

一「・・・が」

神「一成？」

一「・・・パイが」

天「一成・・・様？」

一「俺のアップルパイが・・・死んだぁぁぁぁぁぁ！！！！」

一成パイを口に運ぶ→手が出現→パイ落下

結論　パイ死亡

一「うあぁぁあａＡａＡａＡＡＡａａＡＡＡＡＡＡＡＡａａａａ！！！！！！！！」

神「お、落ち着くのじゃ一成！！」

天「まだありますから！！！」

一「・・フ・・フフフ、そうか、そんなに俺を否定するのか。俺を

否定する世界なんていらないよなぁ」（ニヤリ）

神「かずな・・・ヒイ！！！」

神奈が一成の顔を見る。目に光が無い。そして、笑ったかと思うとまるで能面のような無表情。いつもの優しい主はそこにはなく、ただ恐怖を呼び起こす存在がそこにはいた。

天「忘れていました・・・一成様は甘党！そして、甘いものを食べるのを邪魔されるのを何よりも嫌う！！！」

一「アーヒャヒャヒャヒャHYAHYAHYA！！！こんな世界吹き飛ばしてやる！！！」

神「あ、あああ天音！！！どうにかならんのか！！？」

天「無理です。ああなってしまったら誰にも止められません。この世界は・・・崩壊します！！！」

神「それじゃ、この小説終わってしまうぞ！！」

天「大丈夫ですよ、神奈」

神「天音？」

天「以前なのはちゃんが言っていたじゃないですか。ギャグ漫画では、爆発したりしても次の回にはピンピンしている・・・と」

神「じゃからそれは漫画の話じゃろぉぉぉぉ！！！」

天「あら、この後書きがギャグ以外のなんだというのです、大丈夫、次の回には復活してますよ」

神「そんなわけあるかぁぁぁ！！！ってそんなことしてる内に一成がエライことになっとるぞ！！！？」

天「あら、すさまじいオーラフォトンの塊ですね。あんなもの叩きつけられたら、こんな世界なんてあっという間に消滅ですね♪」

神「♪じゃないわぁぁぁぁ！！！お主現実逃避しておるじゃろう！？」

天「さっきからナイスな突っ込みですね、さすが私の相方」

神「相方ちゃうわぁぁぁぁ！！！！」

一「さようなら腐った世界、こんにちは新しい世界・・・・消滅しろぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！」

神「なんじゃこの終わり方はぁぁぁぁ！！！」

天「世界崩壊なんて、斬新でいいじゃないですか」

神「うわ！ちょっ、光が！きゃぁぁぁぁぁぁぁ・・・・・」

こうして、この物語は幕を閉じた。若き旅人は、誓いを守れないままマナの露と消えた。

ガスキン先生の次回作にご期待下さい！！！

作「（おいいいいいいい！！！人が霊体になってる間に何勝手に終わらせてんだぁぁぁぁぁ！！！！！みなさん！！まだ続きますからね！！！終わりませんからね！！！俺、まだ生きてますからねぇぇぇぇぇぇ！！！！）」

ブツンッ

ＴＨＥ　ＥＮＤ？

第三話　リーダーシップを持つ人は頼りになる（前書き）

戦闘までもう少しお待ち下さい

第三話　リーダーシップを持つ人は頼りになる

な「一成君・・・本当に一成君なの？」

す「私のこと・・・おぼえてる？」

二人が近づいてくる。って、立ち歩いていいのか？

一「当たり前だろ、二人の事は一日だって忘れた事はなかったさ」

大事な友達の事を忘れるわけがない。「クサイセリフ吐いてんじゃねえ！！」・・・ん？　また変な声が聞こえた。

な・す「「一成君！！」」

二人が抱きついてきた・・ってちょっ！？

な「私も、私も忘れなかったよ」

す「ずっと・・ずっと会いたかった」

泣いている二人、そこまで再会を喜んでくれるのは嬉しいんだが、

今の状況を考えてくれ（汗）

困り果てていた俺に、また別の女の子が近づいてきた。

一「（ん？　この子は確か・・・）」

女の子「ずいぶん仲がいいのね」

若干顔をひきつらせながら女の子がそう言った。

一「君は？」

女の子「私はアリサ・バニングス。このクラスを代表して質問するわ・・・アンタたち、どういう関係？」

彼女の質問は、このクラス全員の心を代弁したものだった。

・・・・・

ア「ふーん・・・そういうことだったの」

あれから、俺はクラスのみんなになのはとは昔からの知り合いで、

すずかとは動物園で出会った事を説明した。そのせいで、完全に一時間目の授業はつぶれてしまったが・・・先生、なぜ止めない。しかも「修羅場ね、三角関係ってやつ？　まさか、リアルで見られるなんて・・・」とか言って悶えていた。・・・意味が分からん。

一「これでわかってもらえたか？」

ア「ええ、私からはもうないわ。次はみんなの質問に答えてもらうわよ」

まだ続くのか、というか授業始まってるのにいいのか？

先「何言ってるの、こっちの方が面白いじゃない♪」

教師の言うセリフじゃないでしょう。そして心を読まないでください。

ア「それじゃあ質問のある人「「「「「ハイ！！」」」」」・・・ちょっと」

アリサが言い切る前にクラスの大半が手をあげた。

「好きな食べ物は？」　「趣味は？」　「どんな子がタイプ？」

「彼女いるの？」「つきあってください！」「俺と戦え！」「やらないか？」「バルス！」「目が！　目がぁ～！！」

・・・なんだコレ？　最初の質問はいいとして、後はなんなんだ？　特にそこの生温かい視線で俺を見つめている男子、こっちを見ないでくれ。そして、眼鏡をかけた大佐っぽい雰囲気を出している男子は何をそんなに苦しんでいるんだ？

ア「・・・うるさ～い！！！」

アリサの一喝でさっきまでの騒ぎがウソのように収まった。

ア「いきなりそんなに質問したら答えられないでしょ！　順番にしなさい・・・！！　そしてそこの男子！　アンタたち何がしたいのよ！！？」

どうやらこの子がこのクラスのまとめ役のようだ、みんなもちゃんと従っているし、信頼されているんだろう。さっきの二人の男子もおとなしくなった。

その後、アリサの指示通り一人ずつ順番に質問を受け、それに答える。次の時間からは、通常通り授業を受けた。

そして、昼休み

な「一成君、屋上に行かない？」

昼休みにどうするか考えていると、なのはがすずかとアリサを連れてやってきた。

一「屋上？」

す「私達、いつも屋上でお昼ごはん食べてるの。いっしょにどうかな？」

昼食の誘いらしい。

一「ふーむ」

な「イヤ・・・かな？」

なのはが捨てられた子犬のような目で見つめてくる。

一「いや、誘ってくれるのはとても嬉しいんだが」

す「どうしたの？」

一「・・・弁当忘れた」

な・す・ア「「「え？」」」

そう、弁当を忘れてしまった。てっきり給食が出ると思っていたので持ってきていない。情報収集を怠ったツケか・・・

な「じゃあ・・・私のお弁当食べる？」

す「わ、私のも！」

一「せっかく二人のために作られたものを俺が食べるわけには・・・」

さて、どうするか・・・

ア「あ～もう！　じれったいわね！！」

な・す「「アリサちゃん？」」

ア「アンタはいちいち考え過ぎなのよ！　二人が分けてくれるって言ってるんだから素直に受け取りなさい！！」

な「そうだよ！　そんなこと気にしなくていいよ」

す「お話聞きたいし・・ね？」

ここまで言ってくれてるんだ。甘えさせてもらおう。

一「・・・分かったよ、少し分けてもらってもいいか？」

な「うん！」

す「もちろん！」

二人が嬉しそうに返事をする・・・自分の食べれる量が減るっていうのに優しいな。

ア「まったく、世話が焼けるわね」

一「ありがとう、バニングスさん」

俺はアリサに近づき礼を言う

ア「な、何よ急に・・・」

一「いや、君のおかげで決める事ができたし、それに・・・さっきの質問の時もみんなをまとめてくれただろ？　だから一言お礼を言いたくてね」

あれは本当に助かった

ア「べっ別にアンタのためじゃないわよ！！　ただ・・うるさかったから周りのクラスに迷惑がかからないようにしただけよ！！！」

一「それでもだよ。ありがとう、バニングスさん」

俺はもう一度礼を言う。

ア「あ、アリサでいいわよ。そう呼ばれるの好きじゃないのよ」

一「分かったよ、じゃあ・・アリサ」

ア「ッ～～／／　さ、さっさと屋上に行くわよ！！」

そう言ってズンズンと屋上に向かうアリサ、顔が真っ赤だったがどうしたんだ？名前を呼んだから怒ったのか？　でも本人がいいって言ってたし・・

一「なぁ二人とも、俺何かしたか？」

俺は知らないうちに何かしてしまったのかを二人に聞いた・・・・が

な「・・・知らないの！」

す「知りません！」

なぜか頬を膨らませながら二人も先に屋上に向かって行った。

一「俺・・・屋上の行き方知らないんだけど・・・」

その後、俺は屋上への道を探して校舎をさまようハメになった・・・

・

第三話　リーダーシップを持つ人は頼りになる（後書き）

神「一成、一成！」

一「う・・ん・・神奈？」

天「よかった・・・気がつかれたのですね」

一「気絶してたのか・・・でもなんで」

神「それが、分からんのじゃ」

天「私達も先ほど目を覚ましたばかりで・・・」

一「たしか・・・う、思い出せない」

神「妾達も倒れる以前の記憶がないのじゃ」

天「ただ・・・なにかとんでもない目にあった気がします」

一「俺は・・・幸せのひと時を台無しにされた気がする・・・」

神「妾は・・・何故か叫びまくっておった気がするぞ」

一「何か大事な事を忘れている気がするが、今回の贈り物の紹介でもするか」

天「分かりました。今回は清浦刹那様より、私宛てにロンギヌスの槍、神奈に物干し竿、そして一成様にローレライの鍵（宝珠付き）を頂きました」

一「清浦刹那様、ありがとうございます」

神「しかし、ずいぶん強力な武器を寄越してくれたのぉ」

天「私のなんて神槍ですしね」

一「このまま本編で使うか？」

天「いいのでしょうか？」

一「あのバカ、神奈と天音の人の姿の時の戦闘スタイルの設定する前に逝きやがったし、刀と槍使いでいいんじゃね？」

作「（前回からの様子が気になって見に来てみれば、アイツらぁぁぁ！また勝手に決めやがって！！ちくしょ～俺にも武器があれば・・）」

天「そうですねぇ・・・ハッ！」

ビュオン！！

作「（みぎゃぁぁぁぁ！！かすった！！神の槍がかすったぁぁぁぁ！！！しかもかすったところが消滅してるし！）」

一「どうしたんだ天音？」

天「いえ・・何故か不穏な気配を感じたので」

一「ところで、コレ原作の技使えるのか？」

天「お試しになられては？」

神「じゃあ妾から・・・秘剣！［燕返し］！！・・・なんての」

シュバ！

作「（うおぉぉぉぉ！！斬撃が、斬撃がぁぁぁぁぁ！！！）」

一「じゃあ俺も・・・［ロストフォンドライブ］！！！・・・てか？」

ザン！ザン！！ズバン！！！

作「（ぶるぁぁぁぁぁぁ！！！！）」再びフェードアウト

一「・・・出たな」

神「これは・・・すさまじいのぉ」

天「強力すぎて使いどころが少なそうですね・・・」

一「次は朝凪　夜風様の所の櫻さん製作のヨフアルだ」

神「おお！うまそうなワッフルじゃのぉ♪」

一「ワッフルではない！ヨフアルだ！！」

神「相変わらず甘いものの事になると目の色が変わるの」（汗）

天「ウフフ、一成様ったら♪・・では切り分けますね」

一「前回は邪魔されたが・・・今回こそは！」

神「一成、前回とは？」

一「あれ、俺何か言ったか？」

神「じゃから・・いやなんでもない。何故か聞いてはいけない気がする」

一「？」

天「準備できました」

一「よし、じゃあ櫻さんに感謝しつつ」

一・神・天「「「いただきま～す」」」

現在の作者の体の修復率・・・朝凪　夜風様の［リブァイブ］により＋５パーセント。現在の合計８パーセント。右足の小指再生完了・・・

作「（［リヴァイブ］のパーセント低っ！アレ蘇生魔法だろ！！しかも何で最初に修復したのが右足で・・しかも小指なんだよ！！！他に優先するところあるだろぉぉぉぉ！！！）」

第四話　自分達はそうでなくとも周りから見たらムカつくこともある（前書き）

・・・何このラブコメ？書いていて自分で恥ずかしくなりました

第四話　自分達はそうでなくとも周りから見たらムカつくこともある

一「・・・やっと着いた」

あれから数分、道行く生徒達に道を尋ね、ようやく屋上にたどりついた。どうやら人気の場所らしい。他にも結構な数の生徒がいた。

一「さて・・」

さっそくなのは達を探す。すると・・・

な「一成く～ん！」

す「こっちだよ」

ア「さっさと来なさいよ！」

声のした方を見ると三人がいた。俺はそこに移動する。

な「遅かったね」

す「心配したよ」

ア「なんで来るのにこんなに時間がかかったのよ」

オイ・・・・

一「・・・俺は今日この学校に来たばかりだぞ、屋上への行き方なんて知る訳ないだろ」

な・す・ア「「「あ・・」」」

一「なのに・・三人ともなぜか先に向かって行った所為で、校舎中をさまようハメになった・・・・」

な・す・ア「「「う・・」」」

若干ジト目で三人を見ると・・・目を逸らされた。

一「まぁいいさ、次からは気をつけてくれよ」

な「うん・・・」

す「ごめんなさい」

ア「・・・フン」

落ち込む二人、アリサも態度とは裏腹に少し気まずそうにしている・

・・少し言い過ぎたかな？

ポン

な「え？」

す「あ・・」

ア「ちょ、ちょっと！」

ナデナデ

うなだれる三人の頭を撫でる・・・いかんな、最近クセになってきたようだ。

一「ゴメン、こっちも少し言い過ぎたよ・・・だから、そんな顔をしないでくれ」

そう言って三人の頭を順番に撫で続ける。

な「にゃはは♪」

す「・・・／／」

ア「やめな・・・さいよ・・・」

なのははうれしそうに、すずかは顔を赤くし、アリサはそっぽを向きながらも俺にされるがままだった・・嫌なら抵抗してくれればいいのに。

ア「それじゃ、そろそろ食べましょうか」

撫で続けること数分、アリサの「い、いいかげんにやめなさいよ」の一言で落ち着いた俺達は、ようやく昼食をとることにした。

な「おなかすいたね～」

す「そうだね、それじゃあ」

な・す・ア「「「いただきま～す」」」

一「いただきます」

・・・といっても俺には開けるべき弁当箱はないんだが。

な「ハイ！一成君」

す「これ、どうぞ」

二人が弁当箱のふたの裏におかずをのせて渡してくれた・・・って

一「量が多すぎないか？」

二人の弁当箱の中をみると半分近くが減っている。

な「え、だって」

す「男の子だし、たくさん食べるかなって」

一「いや、さすがに半分ももらうのは悪いよ。二人もそれだけじゃたりないだろ？」

な「だ、だいじょうぶだｙ（グ～ッ）・・ッ／／」

す「私、小食だかｒ（グ～ッ）あ・・／／」

二人が何か言おうとした瞬間、可愛らしい音が二人のお腹から聞こえた。

一「・・・な？」

な・す「「あうぅ・・・／／」」

一「少しでいいよ少しで、今のを聞いてますますもらうわけにはいかなくなった」

食えるだけで充分だしな。

ア「しょうがないわね、ホラッ」

一「アリサ？」

ア「私のも分けてあげる。これだけあればたりるでしょ？」

見るに見かねたのか、アリサが同じようにおかずをさし出してきた。

一「いいのか？」

ア「か、勘違いしないでよ！これは・・・そう！なのはたちがかわいそうだったから仕方なく・・そうよ！！それだけなんだから！！！」

フム、なのは達のためか。優しい子だな。

一「ありがとうアリサ。やっぱり君はやさしいな」

ア「う、うるさい！！さっさと食べなさいよ！！！」

一「そうだな、それじゃあ・・・・」

いざ食べようかと思ったが、手を止める・・・また別の問題が発生した。

な「一成君・・食べないの？」

一「・・・箸が無い」

しかしこればかりは貸してもらうわけにもいかないし・・・手づかみでいくか？

す「か、一成君・・・」

一「すずか？」

俺が直で逝こうか考えていると、すずかが箸でおかずをつかんで差し出してきた。

一「・・・これは?」

す「その・・・あ、あ~ん／／」

な・ア「「なぁ!?」」

箸を俺の口元へ近づけるすずか・・・こ、これは!?

一「す、すずか!?これは?」

す「お箸がないんじゃ食べれないでしょ?だ、だから」

そう言って俺に食べさせようとするすずか、若干手が震えている。
気持ちは嬉しいんだが、何故か恥ずかしい。頬が赤くなっているのが自分でも分かる。

す「あ~ん・・・は、はやく食べて、恥ずかしいよぅ／／」

ならムリするなよ!

な「ずるいよすずかちゃん!・・・一成君、こっちも／／」

ア「ま、まったく、世話のかかる男ね。ほ、ホラッ／／」

なぜかすずかに続いて二人も箸を突き出してきた。ク！俺は、俺はどうすればいい！？神奈！天音！教えてくれぇぇぇ！！！

神「ん？」

天「どうしました神奈？」

神「今・・・一成の声が聞こえた気がする」

天「・・・奇遇ですね、私もです」

神「何かあったのか？」

天「分かりませんが・・・一成様なら大丈夫でしょう」

神「そうじゃな、なにしろ・・・一成じゃしな」

天「そういうことです」

一成が心で助けを求めたのと同時刻、二人の間でこんな会話がおこなわれていたのを一成が知るはずもなかった・・・

？「「「「・・・・もう我慢でき～ん！！！」」」」

俺が心の中で神奈と天音に助けを求めていると、背後・・・というか、周りにいた男子の七割近くが急に立ちあがったかと思うと俺達に近づいてきた。

男子A「さっきから見てりゃ見せつけてくれやがって！」

男子B「しかも、校内でも人気の高い3人と昼食、さらにあ～んだとぉ！」

男子C「このラブコメ星人が！」

男子D「ハーレムでも作る気かコラァ！」

なんだコイツら？ラブコメ？ハーレム？

一「落ち着け、いったい何w「問答無用！野郎ども、かかれぇぇ！！」「「「「オォォォ！！！」」」」」話を聞けぇぇ！！！！」

一斉に俺に向かってくる男子達、このままじゃなのは達も巻き込んでしまう・・・仕方ない・・・

一「風よ・・・」

俺がつぶやくと同時に強い風が吹き、全員の動きが止まった・・・
このうちに

一「・・・逃げる！！」

俺はそのまま入口まで走り校舎内へ逃げ込んだ。一般人、しかも子ども相手に術を使う訳にもいかないし・・今回みたいな軽い力でも充分だ。

複男「「「「まてぇぇぇぇぃ！！！！」」」」

先ほどの男子達が追いかけてくる。は、はやい！この世界の住人は化け物か！？

結局、午後の授業が始まるまでこの逃走劇は続いた。

一成は特性［ラブコメ主人公］　スキル［女難］（消去不可能）を取得した。

第四話　自分達はそうでなくとも周りから見たらムカつくこともある（後書き）

神「・・・なんじゃコレは」

一「俺に聞かないでくれ」

天「というか、作者が消滅したのに何故この小説は続いているのですか？」

一「大いなる意思の力らしい」

神・天「「？？？」」

一「いや、なんでもない」

天「最後に、一成様に新たな力が宿りましたね」

神「戦闘には役に立ちそうにないがの」

一「消去不可能って、スキルというより呪いじゃねーか」

天「しかも、元々もっているようなものですしね」

神「いまさらじゃな」

一「？」

天「知らぬは本人のみ・・・ですか」

神・天「「は～」」

この小説のキーワードに似非ラブコメが追加されました

一「さて、恒例の贈り物報告会だが、今回は朝凪　夜風様にマナ結晶、櫻さんに和服（男性用の黒色、女性用の赤と青の合計三着）を頂いたぞ」

神「妾はよく着るが、これはいい色じゃのう。気に入った♪」

天「私は初めて着ますが・・・よいしょっ・・難しいですね、神奈、手伝ってください」

神「しかたないのぉ」

天音着替え中

神「・・・と、これで完成じゃ」

天「ありがとうございます・・一成様、どっどうでしょう？」

一「へ～、いつも洋服だから新鮮だな、似合ってるよ天音」

天「ありがとうございます♪」

神「一成！妾は？」

一「もちろん、神奈もよく似合ってるよ。その色いいな」

神「う・・うむ／／」

一「じゃあ、俺も着てみるか」

一成着替え中

一「・・・完了っと、どうかな？」

神・天「「・・・・・」」

一「どうした？」

バタ～ン！×２

一「お、オイ！二人ともしっかりしろ！！」

一「いきなり倒れたから心配したぞ」

神「す、すまぬ」

天「申し訳ございません」

一「大事ないならいいが、え～少々慌ただしくしてしまいましたが、改めて、朝凪　夜風様、マナ結晶ありがとうございます。おそらく、無印編のボス相手に力を解放する時か、アリシアを蘇生させる時に使います」

神「また、ネタバレか」（汗）

天「一成様ですから」（苦笑）

一「そして櫻さん、和服ありがとうございます」

神・天「「櫻（様）・・・G・J！！！」」

一「いつも頂いてばかりなのも悪いので、今回は朝凪　夜風様に、神奈製作のポテトチップス（ハッピーターン味）　櫻さんに、自分の望むお菓子のレシピが無限に出てくるレシピ本をお送りします。

神「妾の自信作じゃ！」

天「そのレシピ本を見て、またお菓子を送って頂けたらうれしいです。同じ料理人として、櫻様のお菓子は大変参考になりますので」

一「それじゃ、今回はこの辺で失礼します」

現在の作者の体の修復率・・・月光閃火様の完全再生（パーフェクト・リターン）で完全復活・・・が、何者かの手により再び崩壊。現在１５パーセント。右足の指全ての再生完了。続いて左足の指の再生開始・・・

作「（ちょっとまてぇぇぇぇ！！？何で復活したのにまた崩壊してんだよ！え？大いなる意思？そんなん知るかぁぁぁぁ！！！しかもまた指！てか、そのまま右足から直せよ！！なんで左足の指に移ってんだよぉぉぉぉぉぉ！！！！）」

第五話　ドッキリはかける方は楽しいがかけられる方にしたら迷惑にしかならない

今回の話必要なかったかも・・・

第五話　ドッキリはかける方は楽しいがかけられる方にしたら迷惑にしかならない

先「それじゃあみんな、気をつけて帰って下さいね」

全「は～い！！」

一「ハアッ・・・」

放課後、先生の号令で今日の授業は終わった。あれから男子達の追撃を逃れるために校舎を駆け回った。そのせいで昼食を食いそびれ、俺は今飢えに苦しんでいた。

な「一成君、いっしょに帰ろ」

一「わかった」

なのはといっしょに教室を出る。すずかとアリサは用事があるらしく、今日はいっしょではない・・・車が迎えに来た時は驚いたが。

な「へ～そうなんだ」

一「ああ、家は前住んでいたところと同じだ」

な「じゃあ、また遊びに行くね」

一「そうだな、神奈と天音も喜ぶよ」

帰り道、なのはと軽い話をしながら家路を歩く。

な「それにしても・・・いつの間にか帰って来ててびっくりしたよ」

一「悪いな、連絡したかったんだが」

な「ううん、いいよ。ちゃんと約束を守ってくれたし」

そう言ってなのはは首飾りを見る。

一「・・それ、まだつけててくれたんだな」

星を象ったオーラフォトンの結晶は、３年前と変わらぬ輝きを秘めていた。

な「もちろんだよ！・・・だって、一成君がくれたんだもん・・・」

だんだん小声になっていくなのは

一「なのは?後半の方がよく聞こえなかったんだけど」

な「ふぇ!?な、なんでもないよ!」

なぜか慌てるなのは。ふぇって・・・

家に帰る前に翠屋に寄っていくことにした。

翠屋に着くと、なぜかなのはに入口の前で待っているように言われた。「ドッキリなの!お父さんとお母さんきっとおどろくよ♪」と言ってなのはは入って行った。

な「お父さん、お母さん、お友達つれてきたよ」

桃「なのは、お帰りなさい」

士「お友達?誰だい?」

な「ふふ、二人とも見たらびっくりするよ・・・入っていいよぉ~」

なのはの声を聞き、俺は翠屋に入る。

桃「あら、一成君、お帰りなさい」

士「ああ、一成君か、いらっしゃい」

一「・・・どうも」

二人にあいさつする。

な「え～！なんでおどろかないの！？一成君だよ！？」

桃「だって・・・ねぇ、あなた」

士「僕たちは昨日既に会ってるからね」

そう言う二人の顔はしてやったりという感じの笑みをしていた。

な「・・・ふぇぇぇぇぇ！？」

なのはの驚きの声が翠屋に響いた。ふぇって・・・

な「う～～」

桃「ご、ごめんなさいなのは」

士「悪気はなかったんだよ」

なのはに謝る二人、だが・・・笑いを我慢しているその顔じゃ反省しているようには見えませんよ。

な「・・・一成君は知ってたの？」

矛先が俺になった。ジト目で俺を見るなのは。

一「いや、その・・・スマン」

謝るしかない俺。

な「ぷぅぅぅぅぅぅ」

頬を膨らませるなのは、小動物みたいで和む。

な「ぷしゅぅぅぅぅ・・・な、なにするの！？」

思わずなのはの頬をつついてしまった。

一「いや・・・つい」

余計な事をしたせいで、この後なのはをなだめるのに数分の時間を要した。

？「ただいま～」

しばらく3人と話していると、一人の女性が翠屋に入ってきた。あれ？この人は・・・

一「もしかして・・美由紀さんですか？」

美「おろ？私の名前を知っている君は？」

やっぱりか

一「俺です、秋月　一成です」

美「え!?一成君?いや～大きくなったね・・・てか、いつ帰ってきたの?」

そんなにいっぺんに言われても・・・そして、近いです。

な「もうお姉ちゃん!一成君が困ってるよ!」

美「え?あはは、ゴメンゴメン、つい」

助かった（汗）

その後、帰ってきた恭也さんに「帰ってきたか・・・いずれ君とは決着をつけるぞ」という謎の言葉を受け、晴れて高町家全員と再会した俺は翠屋を後にした。

一「ただいま」

天「お帰りなさいませ、一成様」

神「どうじゃった学校は?」

家に帰ると天音と神奈が出迎えてくれた・・・このやりとりも久しぶりだな。

一「ああ、なのはとすずかの二人と再会したよ」

天「すずかちゃん・・・ですか？」

神「おお！あの時話しておった娘じゃな」

俺は、二人に今日学校で起こったことを話した。

神「一成・・・これから大変じゃな」（苦笑）

一「ああ、近いうちになのはも目覚めるだろうし・・・ここからだな」

戦いの時は近い。

天「そういう意味で言ったのではないと思いますが」（汗）

そういう意味じゃない？

一「じゃあ・・・どういうことなんだ?」

神・天「「ハァ～～・・・・」」

二人はため息をついた。疲れているのか?

こうして、再びこの世界に戻ってきての一日目が幕を閉じた・・・

第五話　ドッキリはかける方は楽しいがかけられる方にしたら迷惑にしかならない

作「恋姫やっぞ！恋姫！！」

一「な！？作者！！」

神「お、おおおお主、消滅したはずじゃろう！？」

作「大いなる意思に3日間土下座して、今回特別に体を借りた」

一「・・・プライドねーのかよ・・・」

作「そんなもの、とっくの昔にドブに捨てたわ！！」

神「えばって言うことじゃないじゃろ！！」

天「ところで・・・先ほどの発言の意味は？」

一「おお！この小説も少数ながら支持をいただいているし・・・このまま第二の小説も書こうと思ってな！！」

一・神・天「「「・・・」」」

作「あれ？どうしたの？」

神「お主・・・とうとう頭がわいたか・・・」

天「もう駄目ですね・・・」

作「ちょっとぉぉぉ！なんでそこまで言われんにゃならんのだ」

一「・・・たりめぇだぁぁぁぁ！！！ただでさえ展開が遅いのに、この上別作品の執筆だとぉ！？テメェ正気とは思えん！！！」

作「ふはははは！！だが、もう止められん！！なのはとは違って、恋姫は無印・真共にプレイしたことがあるのでストーリーはバッチリだ！！・・・最後にプレイしたの1年以上前だけど」

一「ダメじゃねーか！！」

作「と・・・いうわけで、真・恋姫無双　旅人は外史を渡る・・・（仮）近日公開！この小説のネタバレもあるから楽しみにね～」

一「やっぱりネタバレすんのかよ！！！」

第二回アンケート結果報告（前書き）

予想通りでした・・・

第二回アンケート結果報告

作「第二回！アンケート結果報告～」

一「またか・・・」

作「集計の結果・・・2番となりました」

一「・・・一人しか入れてくれなかったがな」

作「グサッ！いや、入れてくれるだけでありがたいのさ！！」

一「お、初めてまともなこと言ったな」

作「ＨＡＨＡＨＡ！！もっと褒め称えたまえ！！！」

一「調子に乗るな」

ブンッ！

作「ガハ・・・」

一「というわけで、俺のチートの力をご希望の方々、楽しみにお待ちください」

作「お・・俺のセリフ・・・」

第二回アンケート結果報告（後書き）

うまく書けるか分かりませんがお楽しみに

第六話　事が起こるのを待っている時の時間の流れは遅い（前書き）

さんざんひっぱってこのデキ・・・ＯＴＬ

あと長いので二つに分けました。

第六話　事が起こるのを待っている時の時間の流れは遅い

なのは達と再会して数日、相変わらず学校中の男子に追いかけまわされる騒がしくも穏やかな日々が続いた。そして・・・

一「いよいよか・・・」

原作通りなら今日、なのはは魔法に目覚め、長い戦いの道に足を踏み入れる。

一「神奈・天音、悪いけど今日は一日家で待機していてくれ」

神「もちろんじゃ」

天「了解いたしました、お早いお帰りを・・・」

さて、俺の介入でどこまで変えられるだろう・・・

いつものように男子から逃げ続け、放課後を迎える。どうでもいいが、最近敵意の視線で俺を見るヤツ以外に熱っぽい視線で俺を見る男子が出現しだした・・・どちらかというと後者の方がヤバい。捕まったら何か大切なものを失う気がする。

ア「ちょっと・・・どうしたのよ？」

アリサの声で我に帰る。そうだった、今はいつもの３人といっしょに下校しているんだった。

す「大丈夫？具合でも悪いの？」

一「いや、何でもないよ。ちょっと考えごと」

すずかが心配そうにしていたので笑って答える。

ア「どうせまたお昼の事でしょ？毎日毎日よくあきないわね、ねぇなのは」

当たってる！エスパーか！！

な「・・・・」

す「なのはちゃん？」

ア「ちょっと、アンタまでどうしたのよ？」

な「え!?う、ううん、なんでもないよ」

あわてて答えるなのは、おそらく夢の事を考えていたんだろう。

な「あれ?」

しばらく歩いているとなのはが立ち止り辺りを見回す。

ア「どうしたのよ?なにか見たの?」

な「う、ううん。なんでもないよ」

ア「そう?・・・ならいいけど」

な「(・・・今、何か聞こえたような)」

な「っ!!!(やっぱりなにか聞こえる!)」

ダッ！

公園の中を通り過ぎようとしたら、いきなりなのはが走り出した。

ア「ちょ、ちょっと！？」

す「なのはちゃん！？」

いきなりの行動に驚く二人、まぁそりゃそうだよな。

一「追いかけよう、あの様子はただ事じゃない」

す「そ、そうだね」

ア「コラァ～なのは～待ちなさ～い！！」

急いでなのはの後を追う俺達、どうでもいいが二人とも足はえーな。

な「や、やっぱり・・・夢で見たフェレットだ」

突然走り出したなのはを追いかけ、探し回る事数分、胸元に何かを抱えたなのはを発見した。

ア「なのは！」

す「大丈夫？・・・アレ？それは？」

すずかがなのはの抱えているものに気付き尋ねる。

な「このフェレットはここに倒れてたの」

ア・す「「フェレット？」」

ここは俺の出番か・・・

一「フェレットはイタチ科の肉食性哺乳動物で、古くからヨーロッパで飼育されていた動物だ。野生のヨーロッパケナガイタチを家畜化、改良したものとされているが、詳しくは分かっていない。電気が普及しだした頃には、フェレットに電線やケーブルに繋いだ紐を繋ぎ、狭い所の配線を手伝わせていたらしい・・・」

俺は眼鏡を懐から取り出し３人に説明する。長年培ってきた知識は伊達ではない！

ア「ず、ずいぶん詳しいのね」

す「へ～そうなんだぁ」

アリサはおどろき、すずかはしきりにうなずいている。フフフ、まだまだ語れるぞ・・・

な「あ！ケガしてる」

説明を続けようと口を開こうとした瞬間、なのはが気付いたように声をあげる・・・説明したかった。

一「すこし見せてくれ」

なのはからフェレットを受け取り具合を見る、どうやら傷よりも衰弱がひどい。応急処置をし、なのはに返す。

な「ど、どうだった？」

一「応急処置をしたから少しは大丈夫だろうが、ちゃんとした処置をしてもらった方がいいな、この辺に動物病院はある？」

す「あ、私知ってるよ！」

一「じゃあそこに連れて行こう。早くしないと衰弱がひどくなって大変な事になる」

ア「そういうことは早く言いなさいよ！」

アリサにツっこまれつつ、俺達は動物病院へ向かった。

先「とりあえず手当ても終わったし、このまま安静にしていたらすぐ元気になるわよ」

全員「「「「ありがとうございます先生」」」」

すずかの案内の下、動物病院に着いた俺達は、受付で事情を説明し、フェレットを預けた。

な「先生、それでこの子の事なんですけど」

ア「そうそう、この子ってフェレットなんですよね？どこかのペットなんですか？」

先「う～ん、フェレット・・・なのかな？変わった種類だけど、そ

れにこの子が着けているの、宝石かしら?」

先生がフェレットが着けていた宝石のようなものに触れようとした時、フェレットが目を覚ました。知らない場所のせいか、少し辺りを見回している。アリサ、すずかと目を合わせ俺を少し見つめた後、なのはに目を合わせずっと見つめている。

す「見てる・・・」

すずかが呟いた後、なのはは戸惑っていたが、おそるおそる指をフェレットに伸ばしていくとフェレットが少し舐めた。それを見たなのは達は大喜びしていた。

急に動いたせいかまた気を失ったフェレットを、ひとまず院長先生が面倒を見てくれると言ってくれたので、また明日見に来ることになった。時間を見ると、けっこうな時間だったので院長先生にお別れを言い、なのは達と帰宅した。なのはがあのフェレットを飼いたいと言っていたが飲食店で動物はいいのか?

その夜

一「そろそろか・・・」

家に帰り、待機していた神奈と天音と共にその時を待つ、原作通りならあのフェレット・・・ユーノがなのはに呼びかけるはずだ・・・

天「一成様、戦闘の反応がありました、なのはちゃんです」

一「来たか！」

よし、行くぞ！！

一「神奈！天音！力を！！」

神「承知したぞ一成！」

天「私の力を存分にお使いください」

二人の体が光に包まれる・・・光が治まるとそこには二人の姿は無く、代わりに二振りの剣が宙に浮いていた。

これが、二人のもう一つの姿、人霊剣・・・神威と天翔である。

一「一気に飛ぶ」

天「（了解しました、ウイングハイロゥ展開）」

天翔の声が頭に響くと同時に、俺の背中から純白の翼が出現する。
飛行・高速戦闘用のこのハイロゥならすぐにたどり着けるはずだ。

神「（展開完了！いつでも行けるぞ！！）」

一「よし、行くぞ神奈！っと・・・今の姿では神威だったよな」

神「（妾は別にかまわんぞ、むしろそっちの方がよい）」

天「（私もそのまま天音とお呼びください）」

二人がそう言ってくる・・・そうだよな、俺達はただの剣と主という関係じゃない。俺達は・・・

一「家族・・・だしな」

神・天「「（うむ）（はい）」」

顔は見えなかったが、二人が笑っているように俺には思えた・・・

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

なのはＳＩＤＥ

みんなと別れた後、お母さん達にフェレットの事を話したら、私がしっかり面倒を見るという条件で飼える様になった事をアリサちゃんとすずかちゃんにメールで伝えました。そういえば、一成君の番号知らないな。ケータイ持ってるのかな?えへへ、今度聞いてみよう。

夜になって寝ようとしたら、突然変な感覚に襲われました。慌てながらも、心を澄ましてみたら夢の中と帰り道の途中で聞こえた声が聞こえてきました。

?「聞こえますか、僕の声が聞こえますか?この声が聞こえる貴方、僕に少しだけ力を貸してください」

頭の中に響く声、これは・・・あのフェレットさんが喋ってるの?

?「お願い、僕のところへ・・・！　じか・・ん・・き・・けん・・な・」

途中から聞こえにくくなり声が止んだ途端、力が抜けてベッドに倒れてしまった。
今のは助けを求めてた・・よね？

私はこっそりあの病院に行く事にしました。

夜道を走り、動物病院の前に着いた途端、またあの変な感覚に襲われ、私は思わず両耳を手で塞ぎました。

な「また、この音…！」

変な感覚に襲われ、目を瞑ってしまう。感覚が消え、目を開けると周りの景色が変になってました。

病院の方から何か、獣みたいな唸り声が聞こえたと思ったら中から凄い音が聞こえてきた。その音で、あの子が心配になり中へ入ろうとすると、窓からあの子が出てくるのが見えました。よく分からない怪物に襲われているあの子が、こっちに跳んできたので私は両手で受け止めました。

な「これなに！？いったいなにがどうなってるの！？」

慌てながらも、この子を抱えて後ろに下がろうとすると怪物がこち

らに向かってこようとしているのが分かりました。

フェ「来て・・くれたの？」

な「えっ・・？しゃ、喋った！？」

いきなり喋りだしたこの子を落としそうになったけど、何とか抱えなおして怪物がこちらに気付く前にその場から私は逃げました。

未だ景色が変になっていて怪物から必死で逃げている中、私は何がなんだか分からなくなりました。あの怪物みたいなの何なの？なんで、この子が狙われているの？私が混乱しているとフェレットさんが

フェ「お願い、僕に少しだけ力を貸して！　君には資質がある」

な「資質？」

フェ「僕はある探し物の為に、ここではない別の世界から来ました。でも、僕一人の力では想いを遂げられないかも知れない。だ、だから・・迷惑だとは分かっているのですが、資質を持った人に協力してほしくて・・」

走りながら、フェレットさんの話を聞いていると不意に私から飛び降り

フェ「お願いです、御礼はします。必ずします！僕の持っている力を君に使って欲しいんです。魔法の力を！」

な「魔法？それって・・」

なにって言おうとしたら今まで逃げていたはずの怪物が突然現れ私を襲ってきました。とっさに私はフェレットさんを抱え、電柱の陰に隠れたんですけど

フェ「お、御礼は必ずしますから！」

な「御礼とか、そ、そんな事言ってる場合じゃないから！」

後ろを見ると、今にも飛び掛りそうな怪物がこちらを見ている。

な「ど、どうすればいいの？」

フェ「これを！」

そう言って、フェレットさんが渡してくれたのは自分が持っていた宝石でした。なんだが暖かい感じがします。

フェ「それを手に、目を閉じて、心を澄まして！僕の言うとおりに繰り返して！」

な「う、うん、ってきゃあ！」

あの子がくれた宝石を手に、目を瞑り心を澄ませようとしたら、さっきまで動いていなかった怪物が動き私を襲ってきました。何とかそれを避けたんですが、地面に倒れこんでしまい体が上手く動かない。それを見た怪物が、チャンスとばかりに空に跳ね上がり私に襲い掛かってきました。思わず、この後の痛みに恐怖して目を閉じる。

一成君！！！

なぜか、一成君の顔が頭に浮かびました。そして、怪物のつめが私を斬り裂き

・・・ませんでした。

？「オーラバリア展開」

聞き覚えのある声が私の耳に届く。それに釣られて瞑っていた目を開ける。そこには、キレイな模様の入った丸い円のようなものが私の前で怪物のつめを防いでいました。

？「大丈夫か？なのは」

その声は空から聞こえました。見上げてみると・・・背中からとてもキレイなつばさを生やして、両手に赤と青の剣を持った・・・

一成君の姿がありました・・・

第六話　事が起こるのを待っている時の時間の流れは遅い（後書き）

作「（後半に続く）」（キートン山田調）

第七話　吊り橋効果って本当にあるんですかね（前書き）

燃え尽きた・・・が戦闘はすぐ終わる・・・

第七話　吊り橋効果って本当にあるんですかね

・・・危ない所だった。ウイングハイロゥで空へと飛び、空からなのはを見つけた。しかし、原作とは違いなのははレイジングハートが起動する前に攻撃を受けた。なのはが倒れ、その隙に攻撃をしてきた怪物を見て、思わず加勢に入った。本来なら、ここは安全になのはが変身するところだったが、仕方ない

一「なのは！後で必ず説明するから、まずはさっきやろうとしていた事を続けるんだ！」

な「ふぇっ！？う、うん！」

なのはを守るようにヤツの前に降り立つ。さて・・・この世界での初の実戦か・・・

一「行けるか？二人とも？」

神「（もちろんじゃ！妾達の力を見せてやろうぞ！）」

天「（いつでもどうぞ！）」

二人の頼もしい返事を聞き、怪物に向かって突っ込む。

一「甘い！」

そのまま突っ込んでくると思っていたであろう怪物のつめの振りおろしを宙に飛びあがり回避した。そのまま怪物の背中に剣を向ける。

一「オーバードライブ！」

双剣の片方にもう一方の力を加えて突撃する。回避しようとしていたが・・・遅い！

ズブシュッ！

無防備になっていたヤツの背中を一閃、まだだ！

一「クロス・・・」

剣を持つ両手を交差させ一気に振りぬく

一「ディバイダァァァ！！」

ザン！！

ヤツの体が縦に別れる。終わりか？

一「倒したか？妙に手ごたえが無さすぎるが」

天「（・・・いいえ、一成様、どうやらまだのようです）」

真っ二つになったハズの怪物が、突如動き、飛び散った肉体がお互いにくっつき始め再生していく。再生能力か・・

神「（面倒じゃのう・・・いっそのこと燃やしつくすか？）」

一「いや、コイツは多分ジュエルシードの怪物だ、封印しなければいけないし、後はなのはに任せよう」

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

なのはＳＩＤＥ

な「すごい・・・」

私は自然とつぶやいていた。白い翼をはばたかせ、流れるような動きで怪物をやっつけた一成君、お父さんやお兄ちゃんの練習してい

るところを見た事あるけど、それと同じ・・・ううん、もしかしたらそれよりもっとキレイな動きだった。私とフェレットさんはそれを呆然としながら見てたんだけど私より早く我に返ったフェレットさんが慌て始める。

フェ「いったい彼は・・あっそれよりも、せっかく彼が作った時間だ。いくよ！準備はいい？」

その言葉で戻ってきた私は頷き、言葉を繰り返す。

フェ「我、使命を受けし者なり」

な「わ、我、使命を受けし者なり」

フェ「契約の元、その力を解き放て」

な「えっと、契約の元、その力を解き放て」

フェ「風は空に、星は天に」

な「風は空に、星は天に」

フェ「そして、不屈の心は・・」

な「そして、不屈の心は・・」

な・フェ「「この胸に！」」

な・フェ「「この手に魔法を！レイジングハート、セットアップ！」」

＞＞スタンバイ、レディ、セットアップ＜＜

宝石から、光りが溢れ天に昇る。

フェ「なんて、魔力だ・・・はっ、落ち着いてイメージして！君の魔法を制御する、魔法の杖の姿を！そして君の身を護る強い服のイメージを！」

な「そんな、急に言われても、えっと～」

急に言われても・・・そうだ！

な「よし！じゃあ、これで」

イメージした瞬間、私は桜色の光に包まれた・・・

なのはＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＩＮＳＩＤＥ

フェ「やった！成功だ！」

フェレット・・・ユーノの声が聞こえたのでなのはを見る。そこには、原作の通り、小学校の制服を模したバリアジャケットを着込み、レイジングハートを携えたなのはの姿があった。

神「（あれがレイジングハートか・・・なかなかのモノじゃのう）」

天「（あのバリアジャケット・・・なのはちゃんはセンスがいいですね）」

なのはの姿に感想を漏らす二人・・・見るところはそこじゃないだろ・・・

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

なのはＳＩＤＥ

光が収まったので目を開けると、イメージした通りの姿になっていました。一成君がこっちを見ています。エヘヘ・・似合ってるかな？

そんな事を考えていると、いつの間にか復活していた怪物がこっちに向かって突っ込んできました。

な「っ！！」

思わず目を瞑り、レイジングハートを前に出した。

＞＞プロテクション＜＜

レイジングハートの声とともに桜色のバリアみたいなものが出て、怪物の攻撃を防いじゃいました。数秒経って、怪物は飛び散り、その破片が電柱に当たり、倒れてしまいました。視界の端にいた一成君は空に飛び上がって破片を避けています。

フェ「僕らの魔法は、発動体に組み込んだプログラムと呼ばれる方式です。　そして、その方式を発動させるために必要なのは術者の精神エネルギーです。そしてあれは、忌まわしき力の元に生み出された思念体。あれを止めるには封印して元の姿に戻さなきゃいけないんです。」

な「よくわからないけど、どうすれば……？」

フェ「さっきみたいに攻撃や防御などの基本魔法は心に願うだけで発動しますが、より大きな力を必要とする魔法には呪文が必要なんです。」

な「呪文？」

フェ「そう、心を澄ませて。心の中にあなたの呪文が浮かぶはずです。」

私はその言葉に従い、心を澄ませようとするとまた怪物がこちら目掛けて飛んできました。目を見開き、さっきみたいにレイジングハートを前へとかざそうとした時

一「マナよ・・邪悪なる者を封じる力を・・・グラスプ!!」

一成君がそう叫ぶと、怪物のまわりに光の鎖が出て来て、怪物を捕まえました。

一「なのは!コイツは俺が抑えておくから、君は呪文を!」

ありがとう一成君、私・・・頑張るよ!

もう一度目を瞑り、心を澄ます・・・よし!

私は目を見開き、再びレイジングハートを怪物に向ける。

な「リリカル、マジカル・・封印すべきは忌まわしき器!ジュエル

シード封印！」

＞＞シーリングモード、セットアップ＜＜

レイジングハートの先端が変わり、音叉状の姿になる。そして桜色の翼が出て、レイジングハートから出る桜色のリボンが飛び出し怪物に巻きついていく。

＞＞スタンバイ、レディ＜＜

な「ジュエルシード！シリアル２１、封印！」

＞＞シーリング＜＜

更に、桜色のリボンがレイジングハートから出て、怪物を包み込む。
すると、目の前に青い宝石がでてきた。

フェ「これが、ジュエルシードです。レイジングハートで触れてみてください」

な「う、うん」

私はフェレットさんの言うとおりにレイジングハートで触れてみると、先端の赤い宝石に入っていきました。それで終わったのか、私の服装も元に戻り、レイジングハートも元の宝石に戻りました。

な「お、終わったの？」

フェ「はい、ありがとう・・貴方達のおかげで大きな被害は・・」

そう言ってフェレットさんはまた気絶しちゃいました。

な「あ、あれ！？だいじょうぶ！？」

一「見せてくれ・・・どうやら気絶しただけのようだ」

私が慌てていると、一成君が近づいてきてフェレットさんの様子を見ます。どうやら大したことじゃなかったようです。よかった・・・

そんな中、サイレンの音が聞こえ、思わず周りを見てみる。周りは電柱が倒れ壁が壊れ、コンクリートは砕けている。

な「も、もしかしたら、私達がここにいると大変な事になるんじゃ…」

一「ああ、間違いなく警察に捕まって、事情聞かれるだろうな」

な「ど、どうしよう一成君!!?」

一「そうだな・・・しっかり捕まってろよ、なのは」

そう言いながら、一成君は私の背中と膝を下から抱えました。

な「えっ!?えっ!?あ、あの一成君!?」

一「とりあえず逃げる!しっかり捕まっててくれよ、なのは」

慌てている私を無視し、一成君は翼をはばたかせ空へと飛んでいきます。こ、コレって・・・お姫様だっこ!?いきなり抱えられてしまい頬が熱くなるのを感じて、一成君に見られないよう首に手を回し、胸元に顔を寄せ隠します。空を飛んでいるせいか冷たい風が、熱くなっていた頬に当たって気持ちいい・・・チラっと一成君を見る。私が見つめているのに気づいた様子はなく、ずっと夜空を見つめていた。

いつも私を助けてくれる一成君。私は何度もあなたに救われた。あなたは気にしなくていいと言うけれど、いつかちゃんとお礼をしなきゃ。でも今は、こうやってあなたの胸の温もりを感じていたい・・・

彼の胸の中で、私はそんな事を考えていた・・・

第七話　吊り橋効果って本当にあるんですかね（後書き）

一「戦闘短ッ！」

神「仕方ないじゃろ・・・あの者の文才じゃこの程度が関の山じゃ・・・」

天「それにしても・・・ようやくなのはちゃんが目覚めましたね」

一「二十話近くもかかってコレかよ・・・」

神「中身を濃くしようとするのは評価できるが、遅すぎたら読者の方も飽きるのじゃないかの？」

一「だよなぁ・・・今回の話を見て、一つ一つの話が無駄に長すぎると思われた方はその旨をメッセージにしてお送りください」

天「ご不満な方が多ければ、次からは短めになるように努力するよう伝えておきます」

神「戦闘に関してのメッセージもあればよろしくの」

一「それじゃ、今回はこの辺で・・・」

作「（あいつらが・・・初めて俺の代わりに読者の方への真面目な呼びかけを・・フ、成長したな・・・と、いうわけで、なにかあり

ましたらメッセージをお願いします。ただ・・・ボロクソに言うのは勘弁して下さい）」（涙目）

第八話　要領の悪い説明は逆に相手を混乱させる（前書き）

ここから先の展開が分からない・・・

第八話　要領の悪い説明は逆に相手を混乱させる

あの場からなのはを抱えて逃げ出した俺は公園に降り立った。いつまでもこの姿でいるわけにもいかないので、ハイロゥを解除し、神奈と天音を腕輪に戻した・・・以前、別の世界で武器を所持しているということで追いかけまわされて以来、何もない時はこの形をとってもらっている。

フェ「すみません・・・」

どうやら気絶していたフェレットが目覚めたようだ。

な「あ、起しちゃった?ごめんね乱暴にして、ケガ・・痛くない?」

なのはが気遣う

フェ「ケガは平気です、もうほとんど治ってますから」

そう言って包帯をほどく・・・器用だな・・

な「本当だ、ケガの跡がほとんど消えてる!」

フェ「助けてくれたおかげで残っていた魔力を回復にまわせましたから」

な「よくわかんないけど・・・そうなんだ、ねえ、自己紹介していい？」

フェ「あ・・・うん」

確かに自己紹介はいいことだが・・・このタイミングでか？

な「えへん・・・私は高町なのは、小学三年生、家族や友達はなのはって呼ぶよ」

フェ「僕はユーノ・スクライア、スクライアは部族名だから、ユーノが名前です」

な「ユーノ君か、可愛い名前だね。じゃあ次は・・・一成君お願い」

俺もするのか？

神「（一成、一発ビシッと決めるのじゃ！）」

天「（すばらしいあいさつを期待してます）」

神奈と天音がはやしたてる・・・自己紹介でどうやって決めるんだ

よ・・

一「俺は秋月　一成、なのはとは昔からの友達だ。あと・・・なのはとは同い年だから間違えないように・・・ユーノ君・・でいいか？」

とりあえず無難にあいさつする。

神「（一成・・・）」

天「（残念です・・・）」

勘弁してくれ・・・

心の中で二人とどうでもいい会話をしていると、またユーノが口を開いた。

ユ「ユーノでいいですよ。あの・・すいません・・あなたを・・あなた達を巻き込んでしまって・・・」

な「なのはだよ」

ユ「あ・・なのはを巻き込んでしまって」

一「俺の事も一成でいいよ。気にするな、巻き込まれる事には慣れてる」

いったい今までいくつの世界でどうでもいい事に巻き込まれた事か・・・アレ？なんだろう・・目から汗が・・・

神「（しっかりするんじゃ）」

天「（お気を確かに・・）」

俺がどんな目にあったかを知っている二人が優しく声をかけてくれた。クソ・・汗が止まらん・・

な「か、一成君！？」

ユ「大丈夫ですか！？」

何故かなのはとユーノが心配そうにこちらを見ている・・・

一「大丈夫・・・ちょっと昔の事を思い出して汗が出ただけだから」

な「汗って・・それは涙じゃ・・・」

一「いや、汗だ」

な・ユ「「・・・」」（苦笑）

一「そろそろ家に帰った方がよくないか?」

もう夜も遅い。早く帰らなければ士郎さんたちが心配するだろう。

な「そうだね、ユーノ君は・・・そうだ!私の家に来ない?実はお父さん達にあなたを飼っていいか聞いておいたの」

ユ「それは助かるけど・・・いいの?」

な「うん!」

こうして原作通りユーノは高町家に行く事になった。

な「ゆっくり入ればバレないかも・・・」

あれからなのはを送り家の前に着くと、なのはが先ほどから考えごとをしているようだった・・・おそらく、黙って家を出たので怒られるのではないかと思っているのだろう。確かに・・・妹思いの恭也さんあたりは黙ってないだろう・・・

な「・・・よし！」

かけ声とは裏腹にゆっくり進んでいくなのは・・・残念ながら手遅れだった。

恭「お帰り、なのは」

な「うにゃ！お、お兄ちゃん!?」

その恭也さんが玄関に立っていたからだ・・・

恭「こんな時間にどこへ行っていたんだ?」

な「えっと・・その・・あの・・」

なにもいえないなのは・・その後ろから、いつの間にか現れた美由紀さんが声をかける。

美「あ、可愛い～♪」

な「お、お姉ちゃん!?」

とっさに後ろに隠していたユーノを見て美由紀さんが声をあげる。

美「この子がさっき言ってたフェレットね？なのははこの子が心配だったから様子を見に行ったのね？」

な「それは・・・」

恭「だからといって一人でというのは感心しないな」

すっかり小さくなってしまったなのは、ここは助け船を出すか。

一「いえ、一人じゃありませんでしたよ」

美「一成君？」

恭「そういえば、どうして君が？」

一「なのはからこのフェレットの事がどうしても気になると電話があったので、天音と三人で様子を見に行ったんですよ。な？なのは？」

な「ふぇ！？」

恭「・・・そうなのか？」

なのはに尋ねる恭也さん、とっさに小声でなのはに声をかける。

一「（話を合わせてくれ！）」

な「（う、うん！）そ、そうだよお兄ちゃん！」

恭「そうか・・・それで、その天音さんは？」

一「夕飯の準備のために先に帰ってもらいました」

恭「わかった、なのは、ちゃんと一成君と天音さんにお礼を言っておくんだぞ」

な「う、うん・・・」

恭「あと、今後はもうこんな事はしないこと。俺達の内の誰か一人にでも声をかけるようにするんだぞ」

な「うん・・・お兄ちゃん、ごめんなさい」

美「・・・よし！なのはも反省してるみたいだし、この話はこれでお終い！それより、この子お父さんとお母さんに見せようよ。一成君も来てくれない？」

一「俺も・・ですか？」

美「うん、君動物の事に詳しいでしょ？だからこの子がどういう動物なのかをみんなに説明してほしいの」

キタ！俺の出番キタ！これで勝つる！！

一「分かりました、任せてください」

なのは達とリビングにむかう。

リビングには士郎さんと桃子さんがいたので、俺は事情を説明した。
改めて高町家の人達にユーノを見せるなのは

桃「あらあら～♪可愛いわね～♪♪」

桃子さんの声が弾んでいる。こういったのが好きなのか？

士「ふむ、なかなか賢そうな・・・イタチじゃないか」

恭「はぁ・・・違うよ父さん」

美「一成君・・・お願い」

一「分かりました・・・士郎さん、これはイタチではなくフェレットです。そもそもイタチとフェレットの違いは～」

俺は士郎さんにイタチとフェレットの違い、フェレットがどういう動物なのかを十分近く説明し続けた。

一「・・・と、いうわけでフェレットは～」

士「も、もういいよ一成君！充分理解したから！！」

一「そうですか？まだまだ語れますけど・・・」

せっかく、これからフェレットの細かい種類について説明しようとしたんだが・・・

士「いや、ありがとう、もういいよ・・・」

そう言って疲れた顔をする士郎さん・・・どうしたんだろう？

恭「・・・彼、こういう時性格が変わってないか？」

美「というか、説明好きなだけじゃないの？」

な「一成君すご～い♪」

桃「相変わらず、何でも知ってるのねぇ」

口々にそういう高町家の面々。確かに説明するのは得意だが・・・自重した方がいいのか？

フェレットについての説明という役目を終えた俺は、夕飯の時間ということで高町家を後にした。

原作と少し違うところもあったが、なんとか無事にレイジングハートを手にしたなのは、これからももしかしたら原作と異なる展開が待っているかもしれないが・・・

一「守って・・・みせるさ」

夜空を見上げ、俺は決意を新たにした・・・あ

一「なのはとユーノに俺の事説明するの忘れた・・・」

一成の説明レベルが1→2に上昇。これにより称号『説明好き』から『説明マニア』に変化。
スキル『説明上手』が『語り上手』に強化・・・

第八話　要領の悪い説明は逆に相手を混乱させる（後書き）

一「俺って・・・こんなに説明好きだったか？」

神「というか、最初のころからキャラが変わっておるの」

天「一成様だけではなく、私たちにも当てはまりますよ」

一「そして・・・これから先のストーリーが分からん！」

天「こういう時、原作を知らないのはつらいですね」

神「なんとかなるじゃろ・・・そもそもこの小説だって、他の作者の方の作品を見まくって書いておるのじゃから」

一「・・・そうだな」

天「そうですね・・・」

一・神・天「「「ハア～」」」

一「これからどうなるか不安で仕方ないが・・・今回の贈り物報告でもするか」

天「はい、今回は櫻様にクロワッサン（中身はチョコ、クリーム、

アップル、餡子、通常）を６つづつ、朝凪　夜風様にバスケットと水筒（中身はダージリン）、紅茶の葉各種を頂きました」

神「さらに月光閃火殿のところの輝刃殿より特製モンブランを頂いたぞ」

一「フ、フフフ・・・お菓子パーティーじゃぁぁぁぁぁ！！！！」

神「・・・本当に性格変わったの」（汗）

天「どのようになられても一成様は一成様です」

一「今回もお返しに、櫻さんには調理器具、朝凪　夜風様には前回と同じく、神奈特製の弾力がありすぎて噛み切れないグミ（レモン味）、輝刃様には俺が執筆した動物図鑑（全１００００ページ）をお返しします」

神「ガム感覚で食べてくれぃ♪」

天「・・・前回もでしたが、なぜあなたは変なモノばかり作るのですか！嫌がらせととられても仕方ないですよ！！」

神「失礼な！妾はいつだって本気じゃ！！独創的と言ってほしいの」

天「朝凪　夜風様、返品していただいても結構ですので・・・」

一「んなことはいいから早く食べよう！」

神「そうじゃな」

天「そんなことって・・・」（苦笑）

現在の作者の体の修復率・・・突然現れたフェニックスの尾と不思議な言霊により現在５３パーセント、下半身の修復及び右わき腹の修復完了・・・

作「（キタ！フェニックスの尾と言霊キタ！！・・これで勝つる！！！復活の時は近いぞぉぉぉぉぉぉ！！！！）」

第九話　一人で無理なら周りを頼れ（前書き）

いつのまにかＰＶが１０００００、ユニークアクセスが１００００を超えていました。感激です。こんな駄文を支持して下さった皆さん、本当にありがとうございます

第九話　一人で無理なら周りを頼れ

なのはがユーノと出会い、魔法に目覚めた翌日、俺はいつものように学校へ向かう準備をする。

天「一成様・・・」

玄関を出ようとすると、天音に引きとめられた。

一「ん?どうした?」

天「これから先、私達がお供にいない時に戦闘が起こるかもしれません・・・ですから、いつものように『器』の方をお持ちになるようにして頂きたいのです・・・」

神「一成ほどの力があれば、妾達の『意志』が無くても充分戦えるしの」

いつの間にか天音の後ろにいた神奈が続いて言う。そうだな・・

一「わかった、じゃあ、『器』を俺に」

神「うむ」

天「はい」

二人が俺の手を握ると、俺の両手首に腕輪が巻かれた。

人霊剣は神奈達剣の『意志』と、それを受け入れる『器』の二つで構成されている。具体的に言うと、剣自体が『器』で、神奈達自身が『意志』だ。人霊剣の本体はあくまで『意志』で、『器』は『意志』と一つになって初めて本当の力が発揮できる。逆を言うと、『意志』がなくても『器』だけでも戦うことはできる。むろん、全力は出せないが・・・

神「これで妾達がいなくても戦えるの」

天「もちろん、戦闘を察知したら、すぐに一成様の下へ向かいますのでご安心を」

一「ありがとう二人とも、じゃあ行ってきます」

二人に感謝しつつ学校へ向かう。

な「おはよ～」

一「おはよう」

今日はなのはと二人で登校した。クラスに入り挨拶をすると、先に来ていたアリサとすずかが声を掛けてきた。

ア「なのは・・昨夜の話聞いた？」

な「ほぇ？　昨夜って？」

す「昨日行った病院で、車の事故か何かあったらしくて・・壁が壊れちゃったんだって」

ア「あのフェレットが無事かどうか心配で・・」

す「うん・・」

二人は本当に心配してるようで元気が無い・・

な「あ・・え～とね・・それは・・その・・」

一「（下手に誤魔化すより黙っといたほうがいいぞ・・・）」

しどろもどろに説明しようとするなのはに、心の中で軽くツッこんでおく。

ア「そっかー、無事でなのはの家に居るんだ」

す「でも凄い偶然だったね、偶々逃げ出したあの子と、道でバッタリ逢うなんて」

ア・す「「ね～♪」」

なのはが事情を説明して、今は家に居ると伝えると二人は嬉しそうに喜び合う。

なのは「あはは・・・えっと・・それでね、なんだかあの子飼いフェレットじゃ無いみたいだったから、家で飼う事になったの」

続いて家で飼う事を話すと二人はまた喜び、名前は決まってるか、決まって無いなら名前を付けないと、と話し合う。

す「そうなんだ～」

ア「名前付けてあげなきゃ、もう決めてるの？」

な「うん、ユーノ君って名前」

ア「ユーノ君？」

な「うん、ユーノ君♪」

ア「へぇ～」

笑いあう三人、これだけ自分の名前で盛り上がるとユーノが知ったらどう思うだろう？　授業が始まるまでの時間、俺はそんな事を考えていた・・・

授業中、黒板に集中していると、突然頭の中に直接なのはの声が聞こえてきた。

な「（一成君一成君、聞こえる？）」

一「（なのはか？・・これはいったい・・）」

な「（念話って言うんだって、今ユーノ君から教えてもらったの）」

一「（こうか？・・・ユーノ、俺の声が聞こえるか？）」

ユ「（うん、聞こえま・・聞こえるよ一成）」

一「（いきなりどうしたんだ？・・・まさか、昨日みたいなことが？）」

な「（え！？　そうなの？）」

ユ「（う、ううん、そうじゃなくて・・二人に話しておきたいことがあって）」

ユーノがこれまでの事情を話し始めた。ジュエルシードの事、何故それが海鳴市に散らばってしまったのか、それが自分の責任であると自分を責めている。

ユーノの話を聞いたなのはは、自分もジュエルシード集めを手伝うと言いだした。

ユ「（なのは・・・がそう言ってくれるのは嬉しいけど、昨日みたいな危険な事があるかもしれないんだよ？）」

な「（だって、話も聞いたしもう関わっちゃったもん、ほっとけないよ。そんな危険なものが街にあるならみんなに迷惑かかるだろうし、ね？　それに）」

ユ「（それに？）」

な「（危険な目にあっても・・・一成君が助けてくれるもん。ね？　一成君♪）」

一「（ん・・ああ）」

俺が助けること決定なのか・・・もちろん助けるが。

ユ「（一成・・・君は一体何者なの？）」

一「（ん？）」

ユ「（君の魔法はミッドチルダ式じゃない、魔法陣が見たことない形だったし、あのバインドの様な魔法・・グラスプって言ったっけ？　あんなのは見たことがない。背中の翼もデバイスとは違う様だし・・・わからないことだらけだよ）」

な「（そうだ一成君、あの時後で説明するって言ってたのに結局帰っちゃったでしょう！　あれからずっと気になってたんだからね！！）」

やっぱりおぼえていたか、まぁ説明する機会が無かったしちょうどいいな

一「（俺は・・旅人だ）」

な・ユ「「（旅人？）」」

俺は旅人について二人に説明した。真実の中に嘘を混ぜ込みながら。

一「（・・・というわけだ）」

ユ「（多元世界を移動する存在・・それが君？）」

一「（ああ、ある目的のためにな）」

な「（目的って？）」

当然のようになのはが聞いてくる。

一「（移動した世界によって違うが・・・今は一つだけハッキリしている事がある）」

な「（それは？）」

一「（なのは・・君を守ることさ）」

な「・・・ふぇぇぇぇぇ！！？」

なのはが突然立ち上がり叫び出した。念話ではなく、声を出して。

先「た、高町さん！？」

ア「何いきなり大声出してんのよ！！」

す「なにかあったの？」

クラスのみんなも何事かとなのはを見つめる。

な「えっと・・その・・なんでもないです・・・」

先「そ、そう？　調子が悪かったら言ってくださいね」

な「はい、すみません・・」

席につくなのは、他のみんなも授業に戻る。

一「（なのは・・いきなりどうした？）」

な「（か、一成君がいきなり変なこと言うから／／）」

変なこと？

一「（ユーノ・・俺はそんなにおかしなことを言ったか？）」

ユ「（いや、僕に言われても）」（汗）

その後もなのは達と念話を続け、気づけば授業も終了していた。

そして昼休み。教室から出ようとしたところをアリサに見つかり、

そのまま屋上に連行された。

一「・・・またあの時間が繰り返されるのか・・・」

このあと起こるであろう逃走劇に、軽く鬱る・・・

ア「なにそんなに疲れた顔してんのよ。アンタは嫌なの？　そんなに私達と一緒にご飯を食べたくないの？」

怒ったかと思うと次の瞬間には悲しそうな顔をするアリサ。なのはとすずかも同じような顔をしている。

一「いや、こうしていつも誘ってくれる三人にはとても感謝してるよ。実際こうして大勢でご飯を食べるのは楽しいからな。ただ・・・この後待っているであろう展開に気分が落ち込むのも確かだ・・」

なんだかんだで俺を気にかけてくれている三人には本当に感謝している。俺が答えると、また三人の顔が明るくなった。

ア「そ、そう？　ならいいわ。・・・そういえば、来週の週末にすずかの家でお茶会をするつもりなんだけどアンタも来ない？」

一「お茶会？」

ア「そ、お茶会。アンタすずかの家に行ったことないでしょう？こういう機会でもないとアンタ行きそうにないし、どうかと思ってね」

す「あ、それはいいね。一成君どうかな？」

すずかも賛成のようだ。

一「なのはも行くのか？」

な「うん！」

そういえば、すずかの家でも何か起きるんだったよな。

一「わかった、ぜひ参加させてほしい。忍さんにも挨拶しときたいしな」

ア「え？　アンタすずかのお姉さん知ってるの？」

一「ああ、動物園ですずかと会った時偶然にな。それよりもアリサ・・」

ア「な、なによ？」

一「いいかげんアンタじゃなくて名前で呼んでくれ。ある程度仲良くなったのに、そう呼ばれるのは少し悲しい」

ア「なっ！？　じゃ、じゃあどう呼べばいいのよ？」

一「一成でいいだろ。名前を呼ぶのに抵抗があるなら秋月でいいし、とにかくアンタは止めてほしい」

友人どうしで呼び合うのは名前が一番好ましい。俺もなるべく名前を呼ぶように心がけているしな。

ア「だって・・・・じゃない」

一「ん？・・なんて？」

ア「恥ずかしいって言ってんの！！」

恥ずかしいって・・・

一「でも、なのはやすずかの名前は普通に呼んでるじゃないか？」

ア「それとこれとは違っ・・・え～い！　うるさいうるさいうるさ～い！！」

一「うるさいって・・そこまで言うことか？」

ア「いいわよ！　言ってやろうじゃないのよ！！・・か・・かず・・かずな・・り」

アリサが俺の名前を呼ぶ・・・かなり小さい声で。

ア「ほ、ほら！　これでいいんでしょう！！」

一「ああ、ありがとうアリサ」

ア「ッ～～／／」

礼を言うとなぜか顔を赤くするアリサ。理由がさっぱりわからない。

な「う～・・」

す「む～・・」

そして、なぜこの二人が不機嫌なのかも・・・

男子「ええぃ！！　またしてもお前か！！　この恋愛ブルジョワジーめ！！！」

一「毎回思うんだが、なんでそんなに連携がいいんだ？」

男子「貴様を葬るためなら俺達はいくらでも一つになれる！　行くぞみんな！！！」

男子達「「「ウォォォォォォ！！！　かかれぇぇぇぇぇ！！！」」」

その後、毎回のごとく男子たちに追いかけられ、昼休みは終了した。

放課後、帰宅途中に昨日と同じ気配を感じ、その場所に向かう。たどり着いたのは神社。階段を駆け上がり目にしたのは・・・

ジュエルシードらしきものが小型犬に取り憑き、光に包まれている光景だった。

一「ふっ」

すぐさま気絶している小型犬の飼い主らしき人を安全な場所へ移動させ、光に向き合う。

光が消え現れたのは、四つ目の鋭い牙と爪を持つ魔物だった。

一「さて、なのはが来るまで時間を稼ぐか・・・」

俺は剣を発現させ、魔物に斬りかかる。生半可な攻撃じゃ再生されるし、かといって大技だとジュエルシードごと消滅させる可能性があるし・・・どうする。

一「デュアルエッジ！」

双剣を縦と横に同時に振り抜き、そのまま連続で魔物に攻撃する。不利だと悟ったのか、一度距離をとる魔物・・・そこへ

な「一成君！」

一「なのはか！」

なのはが乱入してきた。魔物が俺からなのはに標的を変え襲いかかる。

一「エクスプロード！」

剣を地面に突き立て、衝撃で舞い上がった地面の破片を魔物に向か

って放つ。少しでもなのはが変身できる時間を稼がなくては。

ユ「こっちに来る！　なのは！　レイジングハートの起動を」

な「え！？・・起動ってなんだっけ？」

ユ「『我は使命を～』から始まる起動パスワードだよ！」

な「ええ～！？　あんな長いのおぼえてないよ～」

ユ「も、もう一度言うからそれを繰り返して！」

な「う、うん！」

起動パスワードを言おうとするなのはだったが、敵がそれを待つわけもなく、なのはに向かって跳躍する。ヤツに向かって剣を投擲しようとした時、レイジングハートが光りだした。

な「レ、レイジングハート！？」

《スタンバイ、レディ、セットアップ》

光が広がり、収まった時には、なのはの手に起動したレイジングハートがあった。しかし、バリアジャケットだったか？・・が起動していない。あれではマズイ！

ユ「な、なのは！　防護服を！！」

な「え！？」

ユーノが気づき、なのはに伝えるが、魔物が一気になのはに迫る。

《バリアジャケット》

魔物の爪がなのはに振り下ろされる瞬間、バリアジャケットが展開し、プロテクションが張られていた。それにより魔物が弾き飛ばされる。

一「よし、今だ！」

ハイロゥを出現させ、弾き飛んだ魔物に肉薄する。

一「ハッ！」

勢いそのままにヤツの体を斬る。手応えは充分だ。

一「なのは！　頼む！！」

な「うん！　レイジングハートお願い！」

《イエスマスター、シーリングモードセットアップ》

魔物に向けたレイジングハートから桜色のリボンが放たれ、魔物を包み込む。

《スタンバイ、レディ》

な「リリカル、マジカル！　ジュエルシードシリアル１６封印！」

《シーリング》

封印されたジュエルシードがレイジングハートに吸い込まれていった。

な「はあ、これでいいのかな？」

ユ「うん、これ以上ないってくらいに」

な「そっか、よかった」

満足気ななのは。

一「お疲れ様なのは」

なのはをねぎらう、つい先日まで普通の少女だったのに大したもんだ・・・

な「一成君もお疲れ様、ありがとね助けてくれて」

一「当然のことをしただけだよ。俺じゃ時間稼ぎはできても封印はできないし、なのはに任せるしかないからな。これからも頼むぞ」

な「うん！　任せてよ！！」

俺はなのはへの脅威の排除と、サポートがメインになりそうだな。

一「さて、終わったことだし、帰ろうか」

な「そうだね。ユーノ君おいで、帰るよ」

ユ「うん、お疲れ様二人とも」

一「ユーノもな。その小さな体でよく頑張ったよ」

ユ「そ、そうかな？　大したことはしてない気がするけど」

一「なのはが危なくなった時も離れずにずっとアドバイスしてたじゃないか。充分大したことだよ」

ユ「それは・・僕が巻き込んでしまったわけだし・・」

一「それでも、ユーノのおかげでなのはは戦えた。そうだろなのは？」

な「うん！　ユーノ君がずっと声をかけていてくれたから怖くても頑張れたんだよ」

ユ「なのは・・・」

一「いいかユーノ・・責任感の強い君が一人で抱え込もうとする気持ちもわかる。でも、今は俺達がいる。だから少しは俺達を頼ってくれ」

な「私達もう友達でしょ？」

ユ「うん・・うん・・・ありがとう二人とも・・・」

こうして、お互いの絆をより深くした俺達は、改めて三人で頑張っ

ていくことを誓った。

第九話　一人で無理なら周りを頼れ（後書き）

作「お～いみんな～」

一「あれは・・・バカか？」

神「ひ！？　またお化けか？」

天「いえ、足がありますし、幽霊ではありません」

作「いや～ひさしぶり～」

一「おまえいったい・・・」

作「まぁ、なんやかんやいろいろあって復活した。それよりも、また重大なニュースがあるぞ～」

一「お前はいつもそればかりだな・・・ズズッ・・」（茶を飲みながら）

神「今度は何をしでかしたんじゃ？」（ケーキを食べながら）

天「聞くだけ聞きましょう」（ケーキを切り分けながら）

作「この小説のＰＶが１０００００を突破したぞ～」

一「ブハッ！」（吹き出す）

神「ング！？」（つまらす）

天　ザク！「いた！」（手を切る）

作「ははは～驚いたか～？」

一「・・・もったいない」

神「し・・死ぬかと思った・・」

天「思わず手元が狂ってしまいました」（アースプライヤーをかけながら）

作「あれ、もっと驚かないの？　また何かされると思って構えてたのに」

一「いや・・・いろいろありすぎて、もう滅多なことじゃ驚かなくなってしまった」

神「・・・じゃな」

天「慣れとは・・恐ろしいものですね」

作「なんだよ～、ユニークアクセスも１００００を超えたし、それだけこの小説も人気が出てきたってことだろ？」

一「・・・調子に乗らない様に言っておくが、ここまでアクセスがあったのはなのはというブランドのおかげだぞ」

神「じゃな、そうでもなければこの様な結果などありえなかったじゃろ」

天「なのはちゃん達に感謝ですね」

作「・・・なんで君たちは毎回俺の心を抉るような事をいうかな・・・」

一「だって・・・事実だろ」

作「うわ～ん!!　ちくしょ～!!!　おぼえてろ～!!!!」

一「・・・・では、改めて皆さま、このような駄文を見て頂きありがとうございました」

神「正直ここまで評価されるとは思わなかったので、妾達皆驚きと感謝でいっぱいじゃ!!」

天「これからもご期待にそえるよう頑張りますので、もしよろしければ応援の方、よろしくお願いいたします」

一「最後に・・・今まで感想を送って下さったヨッシィ～♪♪♪様、月光閃火様、朝凪　夜風様、龍皇鬼様、清浦刹那様、正直ここまでやってこれたのは皆さまのおかげです。本当にありがとうございました」

神「きれいにまとまったところで、今回はここまでじゃ」

天「また次回を楽しみにお待ちください」

一「・・・本来こう言うのって作者の仕事じゃないか？」

神「よいのではないか？　妾達らしくって」

天「ふふ、そうですね」

一「・・・だな」

第十話　意外な所で意外な人物に会うと何故か気まずい（前書き）

勢いで出してしまった。後悔はしているし、反省もしている。

第十話　意外な所で意外な人物に会うと何故か気まずい

一「ただいま」

ジュエルシードを封印し、なのは達と別れた俺は、特にすることも無かったので帰宅した。

天「お帰りなさいませ一成様」

一「ただいま天音・・・神奈は？」

天「リビングで寝ています。あの娘ったら、相変わらず食べたらすぐ眠るんですから」

一「はは、神奈らしいな」

リビングに向かうと、天音の言うとおり、ソファーで寝ている神奈の姿があった。

一「やれやれ、こんなところで寝ていたら風邪ひくぞ」

人の姿をとっている以上、彼女達も人と同じく寝たり食べたりするのだ・・・神奈は少しやりすぎな気もするが。

天「そういえば・・また戦闘があったようですが」

一「ああ、さっきなのはといっしょにジュエルシードを一つ封印した」

天「そうですか、申し訳ありません。すぐに駆け付けると言っておきながら・・・」

一「いや、俺一人でもなんとかなったし、天音もなにか用事があったんだろ?ならしかたないさ」

天「一成様・・・ありがとうございます」

頭を下げる天音、よほどの事が無い限り個人の都合を優先してほしいんだが、俺達は主従じゃなく家族なんだからな。

神「うう・・ん・・一成・・それは・・妾の肉じゃ・・・」

一「神奈のヤツ、夢の中でも食べてるのか?」

天「ふふ、そのようですね」

神奈の呑気な寝言を聞いて、俺と天音は顔を合わせて笑うのだった・・・

夕食後、先ほどの寝言について天音がからかい、神奈が顔を赤くしながら叫んでいるとそれは起こった。

一「!?」

天「一成様!」

神「これは・・・魔力反応じゃな」

神奈がつぶやく、確かにこれは魔力反応だが・・・

天「なのはちゃんでしょうか?」

一「いや・・・少し違う」

神「ではいったい・・・まさか!?」

一「確かめに行こう。神奈・天音、力を!」

神「おう!」

天「はい!」

神奈と天音が光に包まれ、俺の両腕輪に吸い込まれていった。これで本当の神奈と天音になったわけだ。

一「行くぞ」

ハイロゥを展開し、再び夜空を舞う。目指すはなのはと異なる魔力反応がある場所。いったい誰なんだ・・・

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

？？？ＳＩＤＥ

ジュエルシードの反応があったのでこの公園に来てみたが、辺りにはなんの反応も無かった。

？「・・・もう誰かが持って行っちゃったのかな？」

それでも、わずかな可能性を信じて辺りを探していると、公園の奥の森から突然魔力反応があった。

？「もう発動してる？」

私は急いで魔力の元へ向かう。そこには・・・

私の何倍もの大きさの巨大な鳥のようなものの姿があった。

？「原生生物・・・か」

おそらく、ジュエルシードが鳥に憑いてあのような姿になったのだろう。そんな事を考えていると、鳥が私に向かって突っ込んできた。

？「く・・バルディッシュ！お願い！！」

≪プロテクション≫

とっさに防御魔法を発動させ攻撃を防ぐ。早い！下手したら私よりも・・・

？「それでも・・・私は負けられない！」

お母さんのためにも、私はジュエルシードを集めきゃいけない！

？「やぁぁぁぁぁ！！」

バルディッシュで鳥に斬りかかる。しかし・・・

？「くっ・・」

私の攻撃を難なく避けると、再び私に向かって突っ込んできた。

？「きゃあ！」

プロテクションも間に合わない。私はそのまま吹き飛ばされた。

？「う・・うう・・」

立ち上がろうとするが力が入らない、そうしている間にも鳥がこっちに近づいてくる。恐らく、私に止めを刺すつもりだろう、動きたいのに動けない・・・

？「そんな！？動いて！動いてよぉ！！」

私の叫びも空しく鳥が動けない私に向かって爪を振り下ろそうとする。ごめんなさいアルフ・・ごめんなさい・・おかあさん。私、もうダメみたい・・・

？「ッ！・・・」

痛みに備えて目をつむる。そして、鳥の爪が勢いよく・・・

？「やらせるか！オーラフォトンブレード！！」

突然響いた声に目を開けると、爪を砕かれ苦しんでいる鳥と

？「間に合ったか・・・なんでこう・・ギリギリのタイミングなんだ？」

私を守るように立っている大きな翼を持った男の子の姿があった。

？？？ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＩＮ　ＳＩＤＥ

魔力を辿っていると、また別の魔力を察知した。これは！？

天「（一成様、この反応は！？）」

神「（昨日と同じものじゃぞ！）」

一「ああ、間違いない・・・ジュエルシードだ」

なのはもいないし・・・来てくれるまで戦うしかないな。

反応のあった公園に到着する。そこには・・・

巨大な鳥と、それに立ち向かう少女の姿があった。

神「（一成！あの娘はまさか！？）」

天「（あの金髪にバリアジャケット・・間違いありません！！）

二人が驚きの声をあげる。そうだ・・・あの少女は・・

一「・・マズイ!!」

吹き飛ばされた少女に鳥が迫る。ダメージが抜けきらないのか動かない少女、このままでは・・・

一「やらせるか!オーラフォトンブレード!!」

急降下し、鳥の爪に向かって双剣を叩きつける。爪を砕かれた鳥は、痛みに苦しみ少女から離れた。その間に少女の前に立ち、ヤツに剣を向ける。

一「間に合ったか・・・なんでこう・・ギリギリのタイミングなんだ?」

神「(お約束じゃろ)」

天「(お約束ですね)」

声を揃えて言う二人、お約束ってなんだ?

少女「あの・・・あなたは?」

二人に尋ねようとすると、後ろの少女が声をかけてきた。

一「俺は・・と、その前にヤツをなんとかしないと」

少女「え？」

痛みが収まったのか鳥が起き上がりこちらを睨んでいた。

一「やれやれ、話くらいさせてくれ」

剣を構える。っとその前に

一「ディスペランススフィア」

少女「な、なに！？」

少女のまわりにシールドを展開させる。

一「安心してくれ、その中にいれば安全だから。ついでに傷も治るはずだからじっとしててくれよ」

そう少女に言い残し、ヤツに向き合う。さて・・

一「・・・焼くか？」

鳥だしな

神「（それはいいの！妾の力で丸焼きにしてくれようぞ！！）」

天「（と、いうことは私の出番は無さそうですね。今回は神奈に譲ります）」

二人の賛成も得られたので、早速詠唱を開始する

一「灼熱のマナよ・・燃え盛る炎の槍となり敵を貫け［ライトニングファイア］！」

鳥に向かって槍を放つ・・・が

一「む・・」

神「（避けたじゃと！？）」

それを軽々と避けた鳥は、そのまま上空に逃げた。

少女「気をつけて！！あの暴走体は動きがとてつもなく速いの！！」

そういえば、さっきも少女の一撃を軽々避けていたしな

一「だったら・・・これならどうだ！」

再び詠唱を開始する。先ほどとは違う、さらに強力な術を発動させるために。

一「灼熱のマナよ・・全てを包み込む炎の渦となれ・・火葬してやる、［インシネレート］！！」

『点』がだめなら『面』ごと燃やしてやる！

渦に呑まれた暴走体はやがて姿を消し、残ったのは青い光を発する石・・・ジュエルシードだけだった。

少女「すごい・・・」

シールドを解除し、ジュエルシードを少女に渡す。

少女「え？」

一「君の目的はこの石・・・であってるか？」

少女「う・・うん」

一「ケガは・・・まだ少し傷が残ってるな。失礼・・」

俺は少女の手を握る

少女「な、なにっ／／」

一「君のケガを治す。アースプライヤー」

回復魔法を少女にかける、マナで構成されたものにしか効かないこの魔法を人に使用するためには、こうしてマナ構成体と接触する必要があるからな。士郎さんの時も手を握っていたんだぞ・・・俺は誰に説明してるんだ？

一「これで大丈夫なはずだけど・・・どうだ？」

少女「すごい・・傷跡が全く残っていない・・」

一「それはよかった、それじゃ俺はこの辺で」

少女「ちょ・・まって・・あの！！」

一「ん？」

少女「だから・・その・・あの・・」

ひきとめたのはいいが、なぜか何も言わない少女、こういう時は・・

・

ポン

少女「え？」

撫でるに限る。これで大抵の相手は何かしらの反応をしてくれる。

ナデナデ

少女「あっ・・・」

一「落ち着いて・・どうしたんだ？何か言いたいことでも？」

すると少女はゆっくりと口を開いた。

少女「あの・・助けてくれてありがとう・・・」

そう言って少女は微笑んだ。

一「どういたしまして、間に合ってよかったよ。俺の名前は秋月一成、いきなりだが、君の名前は？」

少女「私はフェイト、フェイト・テスタロッサだよ一成！」

一「そうか、フェイト・・いい名前だな」

フェ「えぇ！？あ・・ありがとう／／」

なぜか顔を赤くしながら、少女・・フェイトは笑っていた。

一「さて、それじゃ今度こそ失礼するよ」

フェ「え・・・・」

俺がそう言うと、とたんに顔を暗くするフェイト。

一「そんな顔をしないでくれ、また会えるさ」

フェ「そう・・そうだよね！また会えるよね！！」

一「ああ、また会おうなフェイト」

フェ「うん！またね一成！！」

こうして、予想外の形で、俺は悲しみを背負う少女、フェイト・テスタロッサと出会った。この出会いが後に何をもたらすのか、それはまだ誰にもわからない・・・

神「（またフラグか・・・）」

天「（一成様はどこまで行くのでしょう・・・）」

第十話　意外な所で意外な人物に会うと何故か気まずい（後書き）

神「・・・いつの間にか、妾がぐうたらキャラになっておる」

天「いいじゃないですか、私なんて・・・未だに明確なキャラ付けがされてないんですよ・・・」

一「そうだぞ神奈、それに、説明マニアなんて厄介なものがついた俺に比べればずっとマシだ」

神「す、すまぬ二人とも、謝るからそのジト目をやめてくれ！」

天「わかりました、軽い冗談ですよ、それにしても・・・このタイミングでフェイトちゃんと接触ですか・・・」

神「生のフェイトに会えてうれしかったぞ♪」

天「そういえばあなた、原作を見てからフェイトちゃんの事が気にいったようですしね」

神「うむ！あの娘のためならあのにっくきプレシアを妾がボコボコに・・・」

天「してはいけないんですよ。この小説ではプレシアさんも助ける予定なのですから」

神「うぬ・・・そうか」

一「そういうこと、だからこうして原作無視してフェイトと会った

んだからな」

神「なるほど・・・」

天「段々原作から離れて行ってますが大丈夫なのでしょうか？」

一「大丈夫だろ・・・だって、アイツ原作見てねぇもん」

神・天「「・・ああ～・・」」

第十一話　全力を出すのはいいことだがやりすぎてはいけない（前書き）

サッカーのルールは知りません！

第十一話　全力を出すのはいいことだがやりすぎてはいけない

フェイトとの予想外の出会いを果たした数日後の日曜日。俺はなぜか川原のグラウンドに立っていた。

な「一成く～ん！頑張れ～！」

ア「一成！しっかり活躍しなさいよ！」

す「ケガはしないようにね」

神「一成！蹴散らしてやるのじゃ！！」

天「ユニフォーム姿の一成様・・・はう」

一「（どうしてこうなった・・・）」

数日前・・・

一「試合・・・ですか？」

夕食を食べ終えてゆっくりしていると、電話がかかってきた。

士「そう、サッカーの試合なんだけど、ヒマなら見に来ないかい？」

相手は士郎さんだった。なんでも今週の日曜日に士郎さんがオーナー兼コーチのサッカーチームの試合があるそうで、それを見に来ないかということだった。

一「はい、特に予定もないですし、ぜひ応援に行かせてもらいます」

士「そうか！　ありがとう、それじゃ待ってるからね」

早速電話の内容を神奈と天音に伝えると、二人も行きたいと言い出した。まぁ、問題ないか。

そして日曜日・・・

一「おはようございます士郎さん」

試合が始まる前に士郎さんに挨拶する。

士「やあ一成君、よく来てくれたね。おや、神奈さんと天音さんも」

神「うむ」

天「おはようございます士郎さん。いいお天気ですね」

士「ええ、絶好の試合日和ですよ。一成君、なのはたちも来てるからいっしょに見ててくれ」

士郎さんが指差す先には、なのは、アリサ、すずかの三人がいた。

一「わかりました。士郎さん頑張ってください」

士「ははは、直接頑張るのは僕じゃないけどね」

士郎さんと別れ、なのは達の下へ向かう。

一「おはよう三人とも」

な「おはよう一成君！」

ア「アンタも来てたのね」

す「おはよう・・・あれ？　その人達は？」

すずかが神奈達を見て言う。

一「俺の家族だよ。二人とも自己紹介して」

神「妾は神奈じゃ。よろしくの」

天「私は天音と申します。以後お見知りおきを」

ア「私はアリサ・バニングス。よろしく」

す「月村　すずかです。よろしくお願いします」

あいさつが終わると、ちょうど試合の方も始まったようだった。

一「生で見ると迫力が違うな・・・」

選手たちの闘志、観客の熱気などが直に伝わってくる。

天「そうですね。これぱかりはテレビでは再現できませんものね」

なのはたちも声を張り上げて応援している。

神「行け！　そこじゃ！・・ええい、何をしておる！　早く動かんか！！」

一「神奈もすっかり応援に夢中だな」

天「私はあの娘が本当に人霊剣なのか最近疑問に思っているのですが・・・」

そんな会話を続けていると、まだ試合時間はあるのにホイッスルが鳴った。

一「なんだ?」

天「・・・どうやら、負傷者が出たようです」

よく見ると選手の一人が倒れ、その周りに人だかりができていた。

すると、なぜか士郎さんがこっちに向かって歩いてきた。

一「士郎さん、どうしたんですか?」

士「見ての通りウチのメンバーの一人がケガをしてしまってね。そこでなんだが・・・一成君、試合に出てくれないか?」

一「ハイ?」

突然とんでもない事を言う士郎さん。

一「いいんですか？　部外者の俺が？」

士「問題ないよ。お願いできるかな？」

一「むぅ・・・」

俺が唸っていると

ア「いいじゃない。出てあげなさいよ」

アリサが参加を促す。

す「そうだよ、見てるだけじゃつまらないでしょ？」

な「やってみてよ一成君！」

二人も続く。

神「おお！　出るのか一成？　ならば、妾が身体強化の魔法を・・・」

天「そんな事をしなくても一成様なら問題ありません」

神奈と天音も同じようだ・・・退路は断たれた。

一「・・・わかりました、実際にするのは初めてですが、それでもよければ」

出る意志を士郎さんに伝える。

士「そうか！　出てくれるかい。ありがとう一成君！！　ユニフォームはあるから向こうで着替えてくれ」

渡されたユニフォームを持って指定された場所で着替え、グラウンドへ向かう。

そして冒頭へもどる。

一「俺はどうすればいいんだ？」

ルールがよくわからない俺はその場で立ちすくんでいた。すると、同じチームのメンバーの一人が話しかけて来た。

メンバー「君、サッカーの経験ある？」

一「いや、初心者だ」

メンバー「そっか・・・じゃあ、味方のキーパーの近くにいて、敵が攻めてきたら守りに入ってくれる？」

一「わかった」

メンバー「うんよろしく！　いっしょに頑張ろうね！」

そう言って自分のポジションに戻って行った・・・さわやかな少年だったな。スポーツをしている人間はみんなああなのか？

試合再開のホイッスルが鳴る。同時に敵がボールを持って攻めて来た。そして、敵が放ったシュートが・・・

一「よ・・・っと」

敵「な！？」

俺の足に阻まれて足元に落ちる。

キーパー「うまいぞ！　そのまま向こうに蹴り上げてくれ！！」

キーパーの言うとおりに、ロングパスをするために足に力を込め、全力で蹴り込む。

一「ふん！」

バコォォォォン！！！

俺の放ったボールは、弾丸のようなスピードでグラウンドを突き進み・・・

ズバン！！！

そのまま敵のゴールへ突き刺さった。

味方「・・・・・・」

敵「・・・・・・」

観客「・・・・・・」

士「・・・・・・」

な「・・・・・・」

ア「・・・・・・」

す「・・・・・・」

神「さすがじゃな♪」

天「素敵です一成様♪」

・・・・・・・

一「しまった・・・やりすぎた・・・」

審「ご・・・ゴール！！」

ワァァァァァ！！！

審判の一声で、止まっていた時間が動き出した。

メンバーA「スッゲー！　なんだよアレ！？」

メンバーB「どうやったらあんなシュートできるんだよ!?」

メンバーC「勝てるぞ！　今日の試合はいただきだ！」

メンバー達「「「「おおおお!!!」」」」

興奮する味方メンバー・・・

敵A「なんだよ・・・アレ・・」

敵B「あんなんどうやって止めればいいんだよ?」

敵C「無理だろ・・・死んじまうよ・・」

反対にすっかり萎縮した様子の敵チームのメンバー・・・

観客A「何あの子?」

観客B「子どもの撃つシュートじゃないわね」

観客C「天才か・・・」

驚きの観客・・・

士「たはは、まさかここまでとはね。一成君、君はいったいどれだけ僕を驚かせるつもりだい？」

苦笑い気味の士郎さん・・・

な「すご～い！！一成君！！！」

ア「へ～・・やるじゃない」

す「カッコいいよ一成君！」

神「天音・・・記録は？」

天「問題ありません、この記憶石にすべて映してあります」

いつも通りのなのは達・・・

その後、なぜか急にパスが回って来るようになり、それをゴールに向かって撃ちこんでいると試合終了のホイッスルが鳴った。結果は１３－０でこちらの勝利。帰り際、相手の一人に「お前のはサッカーじゃない！　ただのイジメだ！」と言われてしまった。はて？そんな事をしたおぼえはないんだが。

そして今、翠屋で祝勝会が行われている。俺に声をかけてくれた一人とキーパーの少年が仲間に囲まれてもみくちゃにされている。実際あの二人の活躍で前半は無失点だったからな。

な「一成君お疲れ様」

そう言ってジュースを渡してくれるなのは。

一「ありがとう」

ア「アンタってなんでもできるのね」

一「いや、ただ全力でボールを蹴っただけなんだけど・・・」

す「すごかったね、あんなに早く飛ぶボール初めて見たよ」

・・・俺も初めて見た。

それからしばらくみんなで騒いだ後、祝勝会はお開きとなった。ちなみに、キーパーの少年が持っていたジュエルシードは、例の首飾

りと交換してもらい後でなのはに封印してもらった。原作ではなのはがこのジュエルシードによって起こる事件で改めて己の意思で集める事を誓うようになっていたが。前回のユーノとの会話後「私も・・これからは軽い気持ちじゃなくて、真剣にジュエルシードを集める事にするの！！」と決心していたので、今回はこのような処置をとらせてもらった。

この選択がどのような未来をもたらすのか？・・・それはまだ誰にもわからない・・・

一成はスキル『集束波動弾』を習得した・・・

第十一話　全力を出すのはいいことだがやりすぎてはいけない（後書き）

一「また変なスキルを手に入れてしまった・・・」

神「じゃが、今回のは戦闘に使えんか？」

天「そうですね、まともな方じゃないですか？」

一「元ネタはは〇か侍だがな・・・」

神「知っておる者はおるのかの？」

天「あの方はキーパーなのにゴールを決めていましたからね。一成様より凄いですよ」

一「そして、ジュエルシード発動前の封印」

天「最後の説明できちんと理解していただいたでしょうか？」

神「なぜ、このイベントを潰したんじゃ？なのはにとって大切な一件じゃったのじゃろ？」

一「・・・この部分を明確に書いているＳＳが見つからなかったからしい・・・」

天「また原作を見ていないことからの弊害ですか・・・」

神「観念して見ればよかろうに」

一「そうする金が奴には無い・・・」

神・天「「・・・・・」」（苦笑）

作「ふう・・・ようやく復活できた。っていうか、人の財政事情を暴露してんじゃねぇぇぇ！こっちだって大変なんだよぉぉぉ！！」

第十二話　自覚無き言葉はワザとじゃない分性質が悪い（前書き）

主人公に殺意がわくってどうなんだろう・・・

第十二話　自覚無き言葉はワザとじゃない分性質が悪い

サッカーの試合から数日、ジュエルシードはあの時の物も含めて、現在６つ集まった。今日は約束していたすずかの家でのお茶会の日だ。

どうでもいいが、試合の後日、俺にあだ名がついた・・・『砲台』である。理由は・・・わかるだろう。あの試合でのシュートだ。あの試合、クラスの何人かも観戦していたらしく、登校して「おはよう『砲台』」「試合見たぜ『砲台』」「すごかったよ『砲台』」と言われた時はなんともいえない気分になった。金輪際サッカーはしないと誓った。

士「そうかい？君なら大活躍できると思うんだけど・・・」

士郎さんにチームに誘われたが丁重に断った。

家を出て翠屋に向かう。すずかの家への行き方を知らないので、まずはなのはと合流して行く事にした。

翠屋に着くと、なぜか恭也さんも翠屋の前に立っていた。

一「おはようなのは、おはようございます恭也さん」

な「おはよう一成君」

恭「ああ、おはよう」

一「恭也さんもお茶会ですか？」

恭「ん？・・ああ、俺は別の用事でな」

別の用事？

恭「まぁ、俺の事はいいだろう。そろそろ行くとしよう」

一「わかりました」

な「私たちについて来てね」

そう言って歩いて行くなのはについて行く。用事ってなんだろう？

神「（忍じゃろ）」

天「（忍さんですね）」

一「（忍さん？）」

神奈と天音が同じ事を言う。二人には『器』と同化して腕輪になってもらっている。

神「（なに、行けばわかる）」

一「（・・・わかった）」

な「一成君、着いたよ～」

なのはについて歩くこと数十分、目の前には豪邸が存在した。

一「・・・デカイな」

神「（デカイの）」

天「（大きいですね）」

アニメで見るのと実際見るのじゃ大違いだ。

俺があまりの大きさに見とれていると、一人の女性・・・メイドさんが出迎えてくれた。

天「（むっ・・・あのメイド服、いいセンスですね。今度作ってみましょう）」

天音がメイドさんの服を見て燃えていた。

メイド「恭也様、なのはお嬢さま、そして・・・秋月　一成様、いらっしゃいませ」

な「こんにちは～」

恭「ああ、お招きにあずかったよ」

一「初めまして、あの・・・あなたは?それに、どうして俺の名を?」

メイド「失礼いたしました。私の名前はノエルと申します。秋月様の事はすずかお嬢さまより存じ上げております」

俺の疑問にすぐさま答えてくれるメイド・・・ノエルさん。

一「わかりましたノエルさん。あと、俺の事は一成でいいですよ」

ノ「承知いたしました一成様。それでは皆様、こちらへどうぞ」

ノエルさんの案内の下、豪邸の中を移動する。外も大きかったが中もそうとう広かった。

神「（一成！妾達の家もこれくらい大きくするか？）」

天「（お金ならありますからね）」

一「（・・・土地が無いだろ）」

そもそも三人しかいないのに無駄に広くしても意味が無い。

神「（むぅ、そうか）」

天「（まぁ、今の家も素敵ですしね）」

一「（そういうことだ）」

神奈達と家の事について語っていると、いつの間にかすずか達のいる場所まで来ていた。先に来ていたアリサとすずか、それに一人の女性がお茶を飲んでいた。

す「あ、なのはちゃん、一成君、恭也さん、いらっしゃい」

な「お待たせ二人とも」

ア「来たのね一成」

一「せっかく誘ってくれたんだ。断るわけないだろ」

ア「まぁ当然よね。私達が誘ったんだから」

す「ふふ、アリサちゃんったら」

言葉とは裏腹になぜか嬉しそうなアリサ。すずかも若干声が弾んでいる

女性「やっほ～一成君。私の事おぼえてる？」

女性が俺に話しかけてきた。

一「もちろんです。お久しぶりですね忍さん」

俺が答えると女性・・・忍さんは嬉しそうに笑った。

忍「おお！おぼえててくれたの？少ししか顔合わせていなかったのに」

一「一度でも関わりあいになった人の顔は忘れませんから」

ウソではない。今まで出会った仲間、友人の事は全員おぼえている。

忍「そういえば君はそういう子だったよね。それにしても・・・三年でまたずいぶん大人っぽさに磨きがかかったわね～。すずかの言う通りだわ」

そういう子？俺は忍さんにどういう風にとられているんだ？それに・・・

一「すずかの？」

忍「そうなの。この子ったら君と再会した日から家に帰ればほとんど君の話ばかりするのよ。『今日は一成君とこういう話をした』とか『今日は一成君がこんな事をしていた』・・・とかね♪」

す「お、お姉ちゃん！」

忍さんの話にすずかが顔を真っ赤にしている。

一「・・・なあ、すずか」

す「な、なに一成君!?」

一「・・・君の目には・・そんなに俺の言動が不思議に見えるのか？」

す「・・・え?」

一「いや、家族に毎日話すほど俺の言動はおかしいのかと・・見苦しいなら言ってくれ。直すようにするから」

す「・・・・・・」

な「・・・・・・」

ア「・・・・・・」

恭「・・・・・・」

忍「・・・・・・」

神「（お主というやつは・・・）」

天「（またですか・・・）」

俺の言葉に場の空気が凍った。こ、これは［サイレントフィールド］!?いったい誰が!?

す「・・・なんでもないです」

な「一成君・・・」

ア「アンタ・・・もしかしなくてもバカでしょう」

恭「これは・・・俺でもわかるぞ」

忍「鈍感もここまでいくと逆にすごいわね」

一斉に俺に向かってあきれた視線を向ける皆。アリサ・・もしかしなくてもって・・・

女性「なのはちゃん、恭也さん、一成君いらっしゃ・・・何この空気？」

そんな中、新たなメイドさんが部屋に入って来た。空気を変えるため、自己紹介をする。

・・・この人はファリンさん。ノエルさんの妹だそうだ。ノエルさん同様すずかから俺の名前を聞いていたらしい。「君がウワサの」とか言われた。ウワサってなんだ？

おかげでなんとか空気を変える事に成功すると、今度は恭也さんと

忍さんが仲睦まじく部屋を出て行った。

ア「・・にしても、恭也さんと忍さん相変わらずラブラブね～」

す「うん、お姉ちゃん恭也さんと知り合ってとても幸せそうだよ」

な「お兄ちゃんはどうかな・・・でも、昔に比べて雰囲気は優しくなったかな」

一「・・・そういえば、二人は恋人同士だったな」

今思い出した。恭也さんの用事とはこの事だったんだな。

神「（ようやく気付いたか）」

天「（相変わらず、色恋沙汰にはめっぽう弱いですね）」

そうなのか？よくわからん。

す「恋人かぁ、いいなぁお姉ちゃん」

俺を見ながらそう言うすずか。

ア「ま、私達にはまだ早いわね。小学生だし」

そっぽを向きつつ、チラチラとこちらを見てくるアリサ。

す「それでも、やっぱり憧れちゃうよ。なのはちゃんもそう思うでしょ？」

な「にゃ？私？う～ん・・・」

悩むなのは。そこまで考える事なのか？

神「（何を言う！女にとっては重要な事なのじゃぞ！！）」

天「（一成様は女心がわかってなさすぎです！）」

一「（す、すいません）」

なぜかすごい剣幕で二人に怒られた。

ア「すずか、鈍いなのはに言っても無駄よ。恋人どころか下手すれば一生独り身かもしれないわよ」

な「む～～！ひどいよアリサちゃん！！」

ア「あはは！ゴメンゴメン」

なのはは鈍いのか？それは大変だな。

神「（なのは・・・哀れな・・）」

天「（一成様に言われるとは・・）」

一「（む、その言い方だとまるで俺が鈍いみたいじゃないか。これでも反射神経には自信があるぞ）」

神「（・・・そういうところが）」

天「（鈍いと言っているんですが・・・）」

？？？

一「なのは、気にするな。屋上の男子が言っていたが、三人とも学校ではかなり人気があるらしいぞ。なのはは屈託のない笑顔、アリサは元気いっぱいな様子、すずかはおしとやかな姿がとても可愛いと好評なんだと・・・実際俺もそう思うし、それ以外の魅力も沢山持っているのも知っている。焦らなくても三人ならいずれいい男性と出会えるさ」

これは俺の正直な気持ちだ。だが、三人の一番の魅力は、転校してきた俺に優しくしてくれたあの優しさだと思う。

な「にゃっ、にゃはは／／そうかな？」

ア「フ、フン！当然よ／／」

す「あ、ありがと・・・／／」

三人の顔が真っ赤だ。しまった、当然の事を言ったから怒ったのか？

神「（・・・自覚なしか）」

天「（鈍感なのにこういうことはハッキリ言うのですからよけい性質が悪いですね）」

なんだ？やっぱり俺が悪いのか？

天「（知りません）」

神「（少しは自分で考えるんじゃな。そして、妾達の苦労を思い知るがよい）」

そう言って黙る二人。

ファ「こ・・・これは、ウワサ以上の子だね」

ファリンさんが驚愕の顔で俺を見ていた。

ア「そ、そういうアンタはどうなのよ!?」

一「俺?」

な「恋人とかどうなのかな~って」

す「学校で気になる子とかいないの?」

興味津々といった感じで聞いてくる三人。

一「気になるもなにも・・・俺は嫌われているからな」

な「え?」

す「どういうこと?」

一「男子には目の敵にされているし、女子には口も聞いてもらえないからな」

ア「男子はわかるけど、口を聞いてもらえないって?」

一「なぜか、話しかけようとすると顔を赤くして逃げられる」

ア「・・・へ？」

一「偶に逃げずに話をしてくれるんだが、俺と顔を合わそうとしてくれない」

す「それは・・・」

一「こちらを見て何か話していると思えば、視線を向けると逸らされるし・・」

な「あ、あはは・・」

一「これで嫌われていると言わないなら他になんて言うんだ」

クラスの女子ではほとんどいなくなったが、それでも学校中の女子が同じ反応をしてくるのだ。

ア「（こ・・・コイツ）」

す「（自分の事をわかっていない）」

な「（女の子たちがただ・・）」

な・ア・す「「「（緊張して顔が見れないだけなのだという事を！！！）」」」

その後、なぜか可哀そうなものを見るような目で俺を見つめる三人と共に場所を変え、改めてお茶を飲む。

ア「それにしても、すずかの家ってほんと猫天国よね」

す「えへへ」

な「うん、子猫可愛いよね」

そう、この家かなりの数の猫がいるのだ。俺の周りでもたくさんの猫が丸まっている。

す「うん・・・でも、里親の決まっている子もいるからお別れしなくちゃいけないけど・・・」

な「そっか・・・ちょっと寂しいね・・」

す「・・・でも、子猫達が大きくなって行ってくれるのは嬉しいよ」

な「そうだね」

ア「・・・そうだ一成！アンタ猫に詳しいの？」

空気を変えようとしたのかアリサがそう言ってきた。

一「ああ、それなりには。それが？」

ア「じゃあ、この周りにいる子達の説明してみてよ」

な「あ、それいいね♪」

す「一成君、お願いできる？」

猫を確認する。これくらいなら余裕だな。

一「わかった・・・だけど」

な・ア・す「「「だけど？」」」

一「全てみっちり説明すると、三日三晩不眠不休になるがそれでもいいか？」

な「・・・・」

す「・・・・」

ア「・・・・やっぱいいわ」

一「そうか、残念」

本当なら五日かかるところを、ギリギリまで削って三日にしたんだが・・・

仕方ないので猫を抱いてモフモフしていると、不意にジュエルシードの気配がした。

一「（ジュエルシードか！）」

な「（一成君！）」

一「（ああ、すぐ近くだな）」

な「（どうしよう・・・）」

ユ「キュッ！」

突然ユーノが鳴き声をあげたかと思うと、気配のした方へ走って行った。すまないユーノ、今まで気付かなかった。

ユ「（ひどいよ一成！）」

ユーノの悲しみの声が聞こえた気がした。

な「あ！ユーノ君！」

す「大変！」

ア「すぐに追いかけないと！」

な「う、うん！」

そう言ってなのはも走って行った。

一「俺も手伝ってくる。すぐに戻るから、二人はここに」

二人に断って俺も向かう。さて、原作なら確か・・

神「（なのはとフェイトの初邂逅じゃな）」

天「（今回は一成様がいますからね。どうなるでしょうか）」

一「わからんが・・フェイトと話くらいはできるか？」

俺は、数日前に出会った一人の少女の事を考えていた・・・

一成は称号『砲台』を手に入れた。これによりスキル『集束波動弾』の威力が３０パーセント上昇・・・

一成の『鈍感』のスキルレベル上限が解除・・・一成はスキル『自覚無き一撃』を習得した・・・

第十二話　自覚無き言葉はワザとじゃない分性質が悪い（後書き）

作「俺・・・復活！」

一「帰ってきやがった」

神「また騒がしい日々が始まるのじゃな」

天「ああ、あの頃が懐かしいです」

作「おい！もっと喜べよ！」

一「だってお前、たびたび帰ってきてたじゃないか」

作「今までは特別だったの！今回で本当の意味で帰って来たの！だからもっと言う事あるだろ！」

一「ワーイ、バカガカエッテキタ。ウレシイナー」

作「おもっくそ棒読みじゃねえか！」

一「それよりも、俺の性格はどうにかならんのか？」

作「ん？」

神「いくら鈍感といっても限度があるじゃろ」

天「さすがに今回のはやり過ぎじゃ・・・」

作「はーっはっはっは！そのままもっと鈍感になって読者の方から反感を買うがいい！！」

一「狙いはそれかよ！」

作「それに・・完全な鈍感ってわけでもないぞ」

神「ん？どういうことじゃ？」

作「だって、お前以前なのはにキスされた時気絶したじゃないか」

一「な！？」

神「なに！それはどういうことじゃ！」

天「一成様！説明してください！」

一「アレの話をするんじゃねぇぇ！！！それがなんの関係があるんだよ！！！」

作「つまりだな、正面から好意をぶつけられるのに弱いということだ。本編では未だに直接好きって言われたわけじゃないだろ？抱きつくにしても、なでるにしても、お前からしてみたら相手を落ち着かせるためにやっているようなものだから別に緊張するわけでもないし」

一「言われてみれば・・・確かに」

作「だろ？そういうわけで・・・神奈！天音！好意を存分にアピー

ルしつつ一成に抱きつけぇ！！」

一「な！？」

神「おう！・・・一成・・妾はお主のことを・・・」

天「一成様・・・御慕いしております・・」

一「いや・・その・・・神奈・・天音・・・」

作「ふはははは！俺の手でどうにもならないのなら二人にやらせる・・・これが今回の作戦だぁ！！！」

一「う・・ううう・・・」

作「どうするどうする？」

一「う・・ううう・・・うがぁぁぁぁぁぁ！！！！」

バコッ！

作「ぎゃあああああ！なんで俺！？」

一「うるせぇ！ち・・畜生ぉぉぉぉぉ！！！」

ダダダダダ！

神「・・・行ってしまったぞ」

天「それにしても・・・新たな発見ですね。これからが楽しみです♪」

作「ガクリ・・・」

神「今回は完全に自業自得じゃな」

天「ですね・・・」

第十三話　ライバルって実際必要なのか？（前書き）

なのはとフェイトが出会います・・・原作とかなり違いますが・・・
あと、ＳＩＤＥがころころ変わってわかり難いかもしれません

第十三話　ライバルって実際必要なのか？

なのはＳＩＤＥ

ユーノ君の後を追いながら私はジュエルシードの反応がした所へ向かう。だけど、近づいている内についにジュエルシードが発動してしまいました。

な「発動したの！？」

ユ「ここだと人目が・・・！　結界を作らなきゃ」

な「結界？」

ユ「最初に会った同じ空間。魔法効果が生じている空間と通常空間の時間信号をズラすもの。僕が少しは・・・得意な魔法」

ユーノ君が結界の説明をしてくれた後、目を瞑り魔力を集中している。やがて魔法陣が浮かび上がり、周りの景色が変わっていく。

ユ「あまり、広い空間は切り取れないけど、この家の付近くらいなら・・なんとか」

魔法が完成し、景色も変わり初めて魔法使いになった日と同じ景色

に変わってます。思わず、周りを見ていたらふいにジュエルシードの発動が強くなり大きな光が生まれ、私はそっちを見たんですが・・・

猫「にゃあああああ」

えっと・・・大きな猫さん?今までジュエルシードに取り憑かれた生き物は、みんな凶暴になってたんですがこれはなんなの?ユーノ君もあまりの事で呆然としています。

ユ「・・はっ！　いけない。た、多分あの猫の大きくなりたいって願いが正しく叶えられたんじゃないかな?」

正気に戻って説明をしてくれたのはいいけど、確証はないみたい。願いが叶ったって事はこの猫は無害なのかな?

ユ「だけど、このままじゃ危険だから元に戻さないと」

な「そうだね。願いは正しく叶ったけどこの状態のままじゃ、すずかちゃんのお家もさすがに困っちゃうだろうし」

大きな猫さんを見てもとくに暴れる事はなく、大きくなった鈴を鳴らしながら辺りを見回している。

な「襲ってくる様子もなさそうだし、ささっと封印しちゃおう」

首にかけてあるレイジングハートを取り、起動をしようとしたんですが、突如背後から、金色の光が飛んできて大きな猫さんに当たりました。

猫「なおぉぉぉ！！」

な「きゃっ！」

猫さんの倒れ、苦しそうな鳴き声を出している。私は金色の光が飛んできた方向に目を向けるとそこには・・・

女の子「・・・・・」

電柱の上に金色の髪をツインテールにして、黒いマントをはためかせた女の子が立っていました。

なのはＳＩＤＥ　ＯＵＴ

フェイトＳＩＤＥ

偶然、近くにジュエルシードが発動した気配を感じたのでそちらに向かう。

やがて緑色の封時結界が眼に映る。

フェ「誰かが発動させたのかな？」

私は少し不安になった。

ジュエルシードの暴走体と戦ったあの夜。迂闊な攻撃を仕掛けた所為で逆に手痛い反撃を食らい、死に掛けたのだ。絶対に油断しないように攻撃魔法の準備をする。今度は全力で暴走体を攻撃する。あの時は一成が助けてくれたけど、今回もそうとは限らない。

フェ「・・・一成」

あの時会った男の子の事を思い出す。私と同い年くらいなのに、私なんかよりもずっと力強い後姿。あの日以来、気が付けばずっと一成のことばかり考えていた。

そのことについてアルフに何度もからかわれてしまったけど・・・

フェ「・・・いけない、真面目にやらなきゃ」

頭を振って、気持ちを戦闘に切り替える。気を抜けばやられるのはこちらの方。しっかりしなければ。そう思い封時結界の中に入る。

視界に入ったのは暴走体と思われる巨大化した猫。か・・可愛い。でも、油断できない。

フェ「フォトンランサー、ファイア」

私は躊躇無く攻撃するが、

フェ「あっ！！」

攻撃魔法を撃った瞬間、暴走体の猫に近寄ろうとする白い服の女の子が居た。危ない、あのままじゃ当たる！！　非殺傷にはしてあるけど、今のはかなり本気で撃った。当たったら怪我をする可能性だってある。

猫「なおぉぉぉ！！」

女の子「きゃっ！」

けれど、幸い白い服の子には当たらず、暴走体にだけ命中する。ほっと胸を撫で下ろして私は近くの電柱の上に降りたった・・・

フェイトＳＩＤＥ　ＯＵＴ

なのはＳＩＤＥ

ユ「あれは、魔法の光？　そんな！・・・」

な「レイジングハート、お願い！」

＞＞スタンバイ、レディ、セットアップ＜＜

レイジングハートの光に包まれ、バリアジャケットを身に着けた私は、猫さんの元へ駆けていく。

＞＞フライアーフィン＜＜

飛行魔法を使い、空へと飛び猫さんを庇う。さっきの女の子がまた、

無数の光を放ってきた。さっきよりも数は多いけど守らなくちゃ！

＞＞ワイドエリアプロテクション＜＜

レイジングハートを前に突き出し、防御する。これで、少しは一安心と思ったけど・・

女の子「魔導師？」

そう呟いた後、防御が届かない猫さんの足を狙われ崩れさせました。危うく、猫さんの下敷きになる所だったけどなんとか空へと上がる。先ほどの女の子は、木の枝に移りこちらを見ている。

女の子「同系の魔導師、ロストロギアの探索者か」

話しかけてくれるけど、何の事か分からない。ロストロギア？　ジュエルシードの事？

ユ「間違いない、僕と同じ世界の住人。そしてこの子・・・ジュエルシードの正体を？」

女の子「バルディッシュと同型のインテリジェントデバイス」

な「バル・・・ディッシュ？」

あの子が持っている杖の名前かな？

女の子「ロストロギア、ジュエルシード」

＞＞　サイズフォーム、セットアップ　＜＜

さっきまでの杖とは違い、今は金色の光が刃となって鎌になってる。
なんで、戦うの？　なんで、そんな悲しい眼をしてるの？

女の子「申し訳ないけど、頂いていきます」

あの子がそう呟いた後、私の方へ斬りかかりにきたけどなんとかそれを避ける。

＞＞　アークセイバー＜＜

鎌を大きく振りかざし、刃がこちらに高速で飛んでくる。

＞＞プロテクション＜＜

咄嗟の反応が出来ずレイジングハートが守ってくれたおかげで、怪我はしなくてすんだけどちょっと不味いかも・・・私は、煙が広がっている中、更に空へ上がり煙から姿を現す。だけど、あの子はそれを読んでいたのか、すぐ近くまで来ていて鎌を振りかざす。なんとか、それをレイジングハートで受け止め、堪える。

な「なんで・・なんで急に、こんな!?」

女の子「答えても、多分・・・意味はない」

私の言葉に、耳を傾けてくれず、距離を取られる。地面に降り、木の枝に戻ったあの子にレイジングハートを向ける。

＞＞シューティングモード、デイバインバスター、スタンバイ＜＜

あの子も杖をこちらに向けている。きっと私と同い年くらいの女の子。綺麗な瞳と綺麗な髪、だけど・・・あの子の瞳は悲しんでる。助けてあげられないかな・・・

猫「にゃぁぁ・・・」

な「えっ?」

女の子「・・・ごめんね」

＞＞ブリッツアクション＜＜

突然の猫さんの鳴き声に気を取られ視線を向けた直後、あの子が謝りながら一瞬で私の頭上まで移動したかと思うと再び杖を鎌に変えて振り下ろしてきた。

な「ッ・・・！」

思わず目をつむって瞬間に備えた。

――ギィィィンッ！！

な「・・・・え？」

何かがぶつかり合うような音に目を開けると・・・

一「・・・いいかげんこのパターンにも慣れたな」

女の子の鎌を剣で受け止めている一成君の姿があった・・・

なのはＳＩＤＥ　ＯＵＴ

フェイトＳＩＤＥ

バルディッシュを変化させ、女の子に斬りかかる。魔導師だと知った時は驚いたけど、ためらってはいけない。母さんのためにも、あのジュエルシードは手に入れなきゃいけない。

女の子「なんで・・なんで急に、こんな!?」

フェ「答えても、多分意味はない」

いったん距離をとるため再び木の枝に戻る。すると、あの子が杖を向けてきたのでこっちも迎え撃とうとすると

猫「にゃぁぁ・・・」

女の子「えっ?」

その時、暴走体の猫が鳴き声を上げる。それに気を取られるあの子。

――――チャンスッ！

フェ「・・・ごめんね」

＞＞ブリッツアクション＜＜

謝っても意味なんて無いのに、つい言ってしまった。短距離限定の超高速移動魔法を発動させ一瞬で白い服の子の頭上まで移動すると、バルディッシュを振り下ろした。

これで終わる・・・筈だった。

――――ギィィィンッ！！

甲高い金属音。眼の前では、キレイな赤と青の剣がバルディッシュを防いでいる。その剣に、それを手に私の攻撃を防いだ人物に、見

覚えがある。

銀色の髪、鋭いけど優しい瞳、大きな純白の翼・・・

あの夜からずっと考えていた男の子・・・

一「・・・いいかげんこのパターンにも慣れたな」

フェ「か・・一成？」

一「やあ・・久しぶりフェイト」

秋月　一成が、そこに居た。

フェイトＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＩＮ　ＳＩＤＥ

一「・・・いいかげんこのパターンにも慣れたな」

またしてもギリギリのタイミングで間に合った。全く・・・広すぎ

るのも考え物だぞ

神「（一成の場合、若干の方向音痴のせいでもあるぞ）」

天「（そうですね、もう少し遅ければなのはちゃん危なかったですよ）」

一「（うぐ・・・反論できない）」

実際俺の所為だし・・・

フェ「か・・一成？」

一「やあ・・久しぶりフェイト」

とりあえずフェイトにあいさつする。

フェ「え、あ、な、一成、な・・んで？」

口をパクパクさせて、何か言おうとして言えないフェイト。前もこうじゃなかったか？

な「か、一成君！　この子と知り合いなの！？」

慌てて近寄って来るなのは。

一「なのは・・・ケガは？」

な「え？　う、うん大丈夫」

無事なようでホッとする。

一「とりあえず・・話でもしようか」

な「う、うん・・・」

フェ「わかった・・・」

デバイスをおろす二人。さて・・・

猫「なぉぉぉぉ！」

一「あ・・・」

忘れてた。この猫をなんとかしないと。

一「二人ともさがってて、俺がなんとかする」

な「え、でも」

フェ「私も・・」

一「大丈夫、俺を信じてくれ」

なんとか二人をさがらせて猫と向き合う。おそらくすずかの猫だろうし、傷付けるわけにはいかない。

天「（一成様、あの猫の額を）」

神「（あれはジュエルシードじゃないのか？）」

言われて額を見る・・・確かにジュエルシードだ。

一「一点集中で攻撃か・・なら」

剣を構え一気に突撃する。

一「オーバードライブ！」

ジュエルシードに剣を突き立てる。

猫「ふにゃぁぁぁぁぁ・・・」

猫が光に包まれ、それが収まると・・・・

その場には子猫とジュエルシードが落ちていた。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

フェイトＳＩＤＥ

フェ「すごい・・」

私は一成の剣技に見惚れてしまった。魔法もすごかったけど剣の腕もすごいんだ・・・

一「ふぅ・・終わった終わった」

一成が子猫を抱いて戻ってきた。

女の子「一成君お疲れ様」

一「すずかの猫だろうからあまり手荒な事は出来なかったんだが・・・なんとかなるもんだな」

女の子「かっこよかったよ」

一「・・・どうも」

仲良さそうに話す二人、どんな関係なんだろう？

チクリ

フェ「え？」

一「どうしたフェイト？　どこかケガでも？」

フェ「う、ううん！　なんでもないよ」

なんだろう？　二人を見てると一瞬胸がチクリとした。

一「それにしても・・・本当に久しぶりだなフェイト」

フェ「うん、そうだね」

一「だから言っただろ？また会えるって」

そう言って笑う一成。

フェ「クス・・そうだね」

つられて笑ってしまった。一成と話していると楽しいな・・

女の子「ねぇ一成君・・いつの間にこの子と知り合ったの？」

女の子が一成に私の事を聞く。

一「ああ、以前ジュエルシードの暴走体と戦っている所に出くわしてな、その時知り合った」

女の子「そうなんだ」

女の子が私の前に立つ。

女の子「えっと・・・高町なのはです。お名前は？」

フェ「フェイト・・・フェイト・テスタロッサ」

思わず返してしまう。

な「フェイトちゃんか・・・よろしくね」

フェ「う・・うん」

明るい子だな・・・私とは全然違う・・・

一「すまないが・・そろそろこれを封印してくれないか」

そう言って一成が私達の前にジュエルシードを差し出す・・・って！

な・フェ「「ふ、封印！！」」

ほとんど同じタイミングだったけどジュエルシードはバルディッシュに吸い込まれていった。

一「御苦労さま」

フェレット「御苦労さま・・・じゃないよ一成！」

なのは・・・でいいのかな？　の肩にいたフェレットがしゃべった。

一「どうしたユーノ？」

ユ「なんでなのはじゃなくてその子に封印させたのさ！？　言ったでしょ！　ジュエルシードは危険なものだって！」

一「わかってるさ・・・」

ユ「じゃあなんで！？」

一成が私を見つめる・・・な、なんだろう、恥ずかしい／／

一「この娘の目を見れば、邪な目的のために集めているわけじゃないと確信できるから・・・かな？」

そう言ってにっこり笑う一成。出会って間もない私を信じてくれるの？

ユ「だからって・・・」

な「まあまあユーノ君、一成君が大丈夫って言ってるんだから心配ないよ」

なのはも笑う。信頼されてるんだな・・・

フェ「あ、ありがとう一成」

一「ん？　いいさ、気にするな」

ポン

フェ「あ・・・」

笑いながら私の頭を撫でる一成・・・なんでだろう？　一成に撫でられるととても落ち着く。そのまま顔をあげて一成を見る。

ドキン！

フェ「ッ・・・／／」

彼の顔を見た瞬間、頭が真っ白になった。心臓がドキドキするし、顔も熱い。

フェ「（な、何で・・・）」

一「フェイト？　顔が赤いが熱でもあるのか？」

ピトッ

フェ「ふぇ！？」

一成が突然おでこをくっつけてきた！　も、もうダメ！　わけがわからない！！

一「おいおい、どんどん熱くなっていってるぞ」

フェ「そ、そそそ、そうかな！？　わ、私もう帰るね！！」

一「そうか、わかった。風邪には気をつけるんだぞ」

な「ま、まって！　まだお話聞かせてほしいのに！」

ユ「なんでジュエルシードを集めているのか教えてよ！！」

なのはとフェレットが何か言っているけど聞こえない。私はその場から可能な限り最大のスピードで飛び出した。

フェ「うう・・・まだドキドキする／／」

私どうしちゃったんだろう？

フェイトＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＩＮ　ＳＩＤＥ

フェイトが飛び去った後、俺はなのはとユーノに尋問された。といっても俺も詳しい事はわからないので答えようがないと言っておいたが・・・

尋問後、アリサとすずかの下へ子猫を連れて戻る。どうやら姿が見えなかったらしくすずかはとても嬉しそうだった・・・焼かなくてよかった（汗）

それから、再びお茶を飲んだり猫と戯れたりしてお茶会は終了した。なのはとフェイトのお互いの関係が原作とかなりかけ離れてしまったが。本来なら名前を知るのはもっと後だったはずだが・・・

神「（名前くらい問題ないじゃろ）」

天「（むしろこれからの展開によい影響を生むと思います）

一「そうだといいな・・・」

帰り道、俺はこれからの流れについて考えることにした・・・・

第十三話　ライバルって実際必要なのか？（後書き）

神「ようやく二人が出会ったな」

天「これで中盤くらいでしょうか？」

神「ここからじゃな」

天「そうですね。ところで・・・一成様は？」

神「まだ戻っておらんぞ、というわけで今回は妾達だけじゃ」

天「珍しいですね一成様がいないなんて」

神「うむ、よほど前回の事を気にしておるようじゃの」

天「それにしても・・・あの時の一成様可愛かったですね♪」

神「そうじゃな、顔を真っ赤にさせて慌てておったな」

天「はあ・・・また見たいですね」

神「・・・やり過ぎると前回の作者のようになるぞ。今も気絶しておるし」

作「・・・・・」

天「・・・そうですね、自重します」

神「さて、次回は温泉じゃったか？」

天「サービスシーンですね、わかります」

神「・・この小説は全年齢対象じゃぞ」

天「大丈夫です・・・多分」

神「いや・・無理じゃから」

第十四話　温泉ではタオルをつけてはいけないが思春期の男子にはキツイ（前書

神奈がオヤジ化します・・・

第十四話　温泉ではタオルをつけてはいけないが思春期の男子にはキツイ

すずかの家でなのはとフェイトが出会った日から数日、連休を利用しての温泉旅行に誘われた。メンバーは高町家に月村家、そしてアリサと結構な大所帯である。もちろん神奈と天音もいっしょだ。二人には色々迷惑をかけているし、この機会に少しでも疲れを癒してほしい。そんなわけで今は温泉に向かうために車に乗っているわけだが・・・

な「・・・・・」

ア「・・・・・」

す「・・・・・」

神「・・・・・」

天「・・・・・」

一「・・・・・はぁ」

俺は今後部座席に座っているのだが、なぜか俺の隣に座るのが誰なのか先ほどからなのは達が睨みあっている。俺の事はほっといて仲良しどうしで話でもしてくれればいいのに、なんでそこまで隣に座りたがるんだ？あと、神奈と天音は何故参加している？

美「順調にハーレムを形成しているわね」

桃「一成君モテモテね♪」

一「・・・笑ってないで助けて下さいよ」

美「面白いから駄目♪」

桃「頑張れ男の子♪」

一「・・・はぁ」

どうやら俺の味方はいないらしい。

恭「ぬぬぬぬ・・・」

忍「落ち着きなよ恭也、心配しなくても一成君なら問題ないよ」

恭「そ、そうだな。彼が鈍感なのは充分知っているし」

忍「そうそう」

恭也さんが唸っていたが、忍さんの一言で大人しくなった。

士「・・・・・」

士郎さんは終始無言だった。逆に怖い・・・

一「・・・俺は温泉で疲れを癒すはずじゃなかったのか？」

なんで疲れているんだろう？

結局、俺の隣には誰も座らないまま旅館に到着した・・・・早く寝たい・・

な「あ～あ、残念」

ア「まだ帰りがあるわ！次は負けないわよ！」

す「わ、私だって」

神「子どもだからとて手加減はせぬぞ！」

天「私も全力でいかせてもらいます！」

早くも帰りの事について話している五人・・・何してたんだ？

士「さて、みんなまずは荷物を置きに部屋に行こうか」

士郎さんの一言で旅館に入るみんな。とりあえず・・・温泉だな。

夕食までは自由時間だということなので早速みんなで温泉に向かう。
途中、ユーノが連れていかれそうになったがなんとか確保した。

ユ「（ありがとう・・・一成）」

一「（気にするな）」

俺は心の中でユーノと握手を交わした・・・

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

女性陣ＳＩＤＥ

な「うわ～すご～い！」

す「な、なのはちゃん！走ったら危ないよ！」

な「だいじょ・・きゃああ！」

ア「なにやってんのよ！」

温泉を見てはしゃぐなのはを抑える二人。年長組はゆっくりと入ってきた。

美「あらら、予想通りだね」

桃「もう、仕方ない子ね」

忍「大丈夫？なのはちゃん？」

神「うむ、これは広いの」

天「気持ちよさそうですね」

そのまま全員で体を流し温泉に浸かる。

な「ふわ～・・気持ちいいね♪」

す「景色もいいし♪」

ア「最高ね♪」

温泉を堪能する三人。が、しばらくすると景色そっちのけで神奈と天音を見る三人・・・正確には二人のある部分を凝視していた。

神「ふ～極楽じゃ～♪」

天「気持ちいいですね～・・・あら？どうしたんですか三人とも？」

天音が視線に気づき三人の方を向く、それに伴いその部分が完全に露わになり。

な・す・ア「「「！？！？！？」」」

天音はその見事な双丘を三人に披露したのだった。

美「それにしても天音さん、思ったより胸ありますね。着やせするタイプ？」

美由紀がそれに触れる。

天「そうでしょうか？自分ではよくわかりませんが・・・それに、私よりあの娘の方が凄いですよ」

忍「あの娘って・・・ああ、納得」

桃「大きいわね～」

全員の視線が神奈に向けられた

神「ふい～・・・ん?皆どうしたのじゃ?そんなに妾を見つめて?」

確かに天音は大きい。が、神奈のそれは天音のそれを大きく上回るものだった。

美「神奈さん・・・いったい何食べたらそんなに大きくなるんですか?」

美由紀が神奈の胸を指して言う。

神「知らぬ。気付いたらこのようになっておった」

こともなげに言う神奈。それによりなのは達はますます落ち込んだ。

な「ううう・・・私達って」

す「しょうがないよ。まだ子どもだし」

ア「そ、そうよ！これから牛乳を一杯飲めばあれくらい・・・」

落ち込んでいる三人に神奈が声をかける。

神「なんじゃ三人とも、胸が無いのを気にしておるのか？心配せずとも成長すればここもしっかり大きくなるわ」

そう言って自分の胸を指す神奈。反動で揺れたのはご愛敬。

な「で・・でも・・」

神「んー・・・ならばとっておきの方法を伝授してやろう」

す「と、とっておきの方法？」

ア「それは何！？」

食いつく三人、よく見れば美由紀と忍も聞き耳を立てている。桃子は・・・笑っていた。

神「簡単な事じゃ、好きな男に揉んでもらえば自然と大きくなるもんじゃ」

・・・・・・・・・

な・ア・す「「「ええぇぇぇぇぇぇ！！？？」」」

三人の声が温泉に響いた・・・

な「す、好きな男に・・・／／」

ア「揉んでもらう・・・／／」

す「そ、それって・・・／／

美「なーんだ、私には無理かな」

忍「私は・・・恭也にお願いしよっと」

桃「あらあら、三人とも真っ赤になっちゃって♪」

天「・・・またあなたはそういうことを・・・」

神「何を言う！あながちウソではないぞ！」

な「で、でもでも・・」

ア「アイツに・・そんな・・」

す「そんな事恥ずかしくて一成君に言えないよ～／／」

神「おや～すずか？妾は好きな男とは言ったが一成とは言っていないぞ？」

す「はう！・・・」

神「なのはとアリサも・・・誰を考えておるかはわからんがの」（ニヤリ）

な「うっ・・／／」

ア「な！？・・・／／」

神「はっはっは！可愛い娘たちじゃの～♪」

神奈の笑い声が木霊した・・・

天「・・・あなた、絶対楽しんでるでしょう？」

神「ん～？何の事じゃ？」

天「・・・いえ、なんでもありません」

結局、なのは達がのぼせるまで神奈のイジリは続いたのだった・・・

女性陣ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＩＮ　ＳＩＤＥ

温泉の効果は色々ある。病気に効いたり、ケガに効いたり、でもやはり一番の効果は疲れやストレスを癒すということだと思う。そんな温泉で俺は今・・・

一「・・・・・・・」

士「・・・・・・・」

恭「・・・・・・・／／」

ユ「（ガクガクブルブル）」

猛烈なストレスで胃に穴が開きそうになっている。原因は・・・

士「・・・恭也」

恭「な、なんだ父さん？」

士「お互いを想うのはいいことだが、節度あるお付き合いを・・・な？」

恭「は、はい！もちろん！！」

士郎さんから発せられているこの凄まじいオーラの所為である。温泉ということで姿は見えないが、お互いの声は聞こえるのだ。そして、神奈の話の辺りから士郎さんからプレッシャーを感じ、現在このような事になっている。

ユ「（か、一成。僕怖いよ！）」

一「（心配するなユーノ・・・俺もだ）」

士「・・・一成君」

一「は、はい」

士「君になら任せられるが・・・成人するまで許さないからね？」

任せる？成人？

一「どういう意味「わかったね？・・・」サー！イエッサー！！！」

駄目だ！口答えしてはいけない！したら・・・殺られる！！

一「お、俺、お先に失礼します!!」

ユーノを連れて脱出する。正直一秒でも早くあのオーラから離れたかった・・・

一「後でもう一度入る事にしよう」

温泉からあがり、体を冷ますために歩いていると。なのは達が一人の女性と話していた。というか、あれは絡まれているのか？

一「なのは、どうしたんだ？」

な「ふぇ！か、一成君！？どうしたの？」

一「いや、何かあったのかと・・・大丈夫か？顔真っ赤だぞ？」

よく見ればアリサとすずかも顔を赤くしていた。

一「すいません、俺の知り合いが何か？」

とりあえず女性に聞く。

女性「え？いや～・・あははゴメンゴメン知ってる子と似てたからついね」

一「そうですか」

女性「いや～ゴメンね、おチビちゃん」

そう言ってなのはの頭を撫でながら謝るが

女性「（今の所は挨拶だけ）」

女性がなのは達に念話で話しかけてきた事によりなのはは表情を変えた。

女性「（忠告しとくよ、あまり私達には関わらないほうがいい。でないとガブっといくわよ）」

そう言い残し女性は去って行った。去り際に俺を見ていた気がするが・・・気のせいか？

ア「もう！なんなのよいったい！」

アリサがご立腹のようだ

な「いいよ、アリサちゃん。気にしてないから」

ア「何言ってんのよ！アンタ何も悪い事してないのに責められたのよ！気にするなという方が無理よ！」

まるで自分の事のように怒るアリサ。相変わらず友達思いだな・・・

ポン

ア「え？」

とりあえず落ち着かせるために頭をなでる。

一「よく我慢したな。旅館だからあんな人もいるさ。気にせずさっさと忘れてしまえ」

ナデナデ

ア「う、うん／／」

落ち着いた様子のアリサ。ふむ、素直だな・・

な「む～・・」

す「いいなぁ、アリサちゃん」

不機嫌な様子のなのはと羨ましそうな顔をしているすずかと別れ、いったん部屋に戻ることにした。ついでにユーノもなのはに預けた。

部屋に向かう途中、先ほどの女性が現れた。

女性「は～い、こんにちは一成」

一「あなたはさっきの・・・何故俺の名を？」

この人とは初対面のはずだ。

女性「おっと、警戒しないでおくれよ、あたしゃ一言感謝したくてね」

一「感謝？」

女性「そう、あたしはアルフ、フェイトの使い魔って言えばわかるだろう？」

一「使い魔云々はわかりませんがフェイトの事は知ってます」

アル「そう、そのフェイトがね、最近アンタの話ばっかりするもんだから一度会ってみたくてね」

そう言って笑う女性・・・アルフ

一「そうですか、フェイトは今？」

アル「あたしのご主人様なら、ここら辺から気配がしたジュエルシードを探してるよ」

一「いいんですか？俺と話してて？」

アル「もう目星は付けてるし、後は封印するだけだからね」

早いな。それだけ必死だということか・・・

一「わかりました、フェイトによろしく言っておいてください」

アル「ちょっと待ちなよ、ヒマならフェイトと会ってやってくれない？」

俺を引き止めるアルフ

一「いいんですか？」

アル「ああ、憧れの王子様に会えりゃ、あの子も喜ぶだろうし」

一「王子？」

アル「いや、なんでもないよ。こっちの話さ」

一「はぁ・・・？」

アル「じゃあ案内するよ。ついといで」

アルフの案内の下、俺はフェイトに会いに行くことにした。

第十四話　温泉ではタオルをつけてはいけないが思春期の男子にはキツイ（後書き）

天「温泉はいいですね」

神「妾の魅力も存分に発揮されたしの♪」

天「あれはセクハラですよ」

神「何を言う！妾は当たり前の事を言っただけじゃ！それに・・一番のセクハラをしでかしたのは、このようなものを書いた作者じゃろ」

天「そうですね・・私が神奈より小さいとも書きましたしね」

神「ふはははは！お主と妾には越えられない壁があるのじゃ！」

天「クッ・・・」

神「ところで・・・一成はまだ帰っておらぬのか？」

天「あそこですよ」

神「ん？」

一「死にさらせぇぇぇぇぇぇ！！！！」

作「ぎゃぁぁぁぁぁ！！！」

神「どうしたんじゃいったい？」

天「あのような目に遭わせた事への報復だそうです」

神「初心じゃのう」

天「一成様ですから」

一「そぉい！！」

作「ちょっ、やめ、アッーーーー！！！」

第十五話　秘密を他人に話す時は信頼できる人じゃないと後悔する（前書き）

これから少しずつオリジナル入れれたらいいな・・・

第十五話　秘密を他人に話す時は信頼できる人じゃないと後悔する

フェイトに会いに行く道中、アルフが楽しそうに話す。

アル「さっきも言ったけど、最近フェイトがアンタの事ばっかり話してさ」

一「はぁ」

アル「「一成が助けてくれた」「魔法もすごいけど剣もすごかった」「頭をなでてくれた」ってね。あたしゃ、あの子の笑顔を見れるのが嬉しくてね♪」

一「ふむ、助けた事にそこまで恩義を感じてくれるとは・・律儀な子ですね」

アル「アンタ・・・そりゃ本気で言ってるのかい？」

一「はい」

俺の言葉に頭を抑えるアルフ。

アル「フェイト・・頑張りなよ。王子様は相当なニブチンだ・・」

一「？」

しばらくすると森に入った。そして・・・

アル「お～いフェイト～！」

フェ「アルフ？　温泉は？」

アル「フェイトに会わせたい人がいてね、連れて来たんだよ」

フェ「会わせたい人？」

アル「お～いこっちだよ～」

一「・・・先に行かないでくださいよ」

迷うかと思った・・・

アル「あはは、ゴメンゴメン」

一「はぁ・・・」

フェ「か、一成！？」

フェイトが驚いている。

一「また会えたなフェイト」

俺はフェイトと二度目の再会を果たした・・・

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

フェイトＳＩＤＥ

この温泉旅館の近くでジュエルシードの気配がする。あとは場所を特定するだけだ。アルフには温泉に行ってもらっているし、もう少し頑張らなきゃ。

アル「お～いフェイト～」

温泉に行ったはずのアルフの声がした。

フェ「アルフ？　温泉は？」

アル「フェイトに会わせたい人がいてね、連れて来たんだよ」

フェ「会わせたい人？」

もしかしてなのはかな？　さっき会ったって念話があったし。

アル「お～いこっちだよ～」

アルフが手招きすると、草むらから人が出てきた。

一「・・・先に行かないでくださいよ」

アル「あはは、ゴメンゴメン」

一「はぁ・・・」

え？　な、なんでここに！？

フェ「か、一成！？」

一「また会えたなフェイト」

また会いたいと思っていた一成の姿が私の前にあった・・・

フェ「一成・・・どうしてここに?」

一「旅館に泊まりに来てな。そこでアルフさんに会ってフェイトの事を聞いたから会いに来たんだ」

アル「アルフでいいよ。あと敬語も止しとくれ」

一「わかった、アルフ」

フェ「そうなんだ（ありがとうアルフ）」

念話でアルフにお礼を言う。

アル「（なに、フェイトの王子様にあたしも興味があっただけさ）」

お、王子様って!

フェ「（あ、あああアルフ!?）」

アル「（あはははは!!）」

何言ってるのアルフ！？

一「・・・どうした？」

一成が不思議そうに見ている。

フェ「う、ううん！　なんでもないよ！！」

一「そうか？」

ふぅ、なんとかごまかせた。

アル「さて、目的も果たしたし、あたしはまた温泉に行ってくるよ」

フェ「え？」

アルフ行っちゃうの？そしたら・・・二人きり！？

フェ「ま、待って・・・」

アル「二人ともごゆっくり～（頑張んなよフェイト♪）」

フェ「（そ、そんな～）」

頑張れって何を!?　ど、どうしよう・・・とにかくお話しなきゃ。

一「そういえば・・・フェイトは温泉に入ったのか?」

そう思ってると一成の方から話してくれた。た、助かった・・・

フェ「え!?　う、ううん、私はまだだよ・・・そういう一成は?」

一「俺か?　俺は・・・一応入った」

フェ「そうなんだ。気持ちよかった?」

一「・・・殺されるかと思った」

フェ「えぇ!?」

殺されるって・・・（汗）

一「俺は確信したよ・・・殺気だけで人は殺せるのだと・・・」

やつれた様子の一成。なんで温泉に入ったのにこんな顔をしてるのかな？

一「あ、殺されるってのは俺限定の話だから、フェイトが入っても問題ないぞ」

勘違いしたのかそんな事を言う一成。

フェ「う、うん・・わかったよ」（苦笑）

それからしばらくとりとめのない話をする私と一成・・・でも、一成は私がなんでジュエルシードを集めているのかといった話を全然しない。てっきりなのはやあのフェレットみたいに聞いてくるのかと思ったのに・・・

ふと、あの時の一成の言葉を思い出した。

《この娘の目を見れば、邪な目的のために集めているわけじゃないと確信できるから・・・かな？》

一成は私を信じていると言ってくれた。だから、私もその信頼に応

えなきゃいけない。

フェ「あのね一成・・・聞いてほしい事があるの」

一「何だ？」

フェ「私がジュエルシードを集める理由」

一「無理に話さなくてもいいぞ。前にも言ったけど俺はフェイトを信じているからな」

そう言って微笑む一成。やっぱり優しい。

フェ「ううん、一成には聞いてほしいから」

一「わかった・・話してくれるか？」

フェ「うん」

私は一成に話した。私がジュエルシードを集めているのは、母さんが求めているから。だから私が母さんのために集めているのだと・・・

一「そうか、よく話してくれたな」

頭をなでてくれる一成・・・気持ちいいな。

フェ「私が頑張れば、きっと前の優しい母さんに戻ってくれるはずだから」

一「前の？」

フェ「うん、少し前までは母さん、とっても優しかったの。一成みたいにいつも頭をなでてくれて、ご飯も作ってくれて、でもある日、変な剣を手に入れてから急に人が変ったようになって・・・」

気になるけど・・母さんの願いが叶えば、きっとまた楽しく暮らせる筈だから・・・

一「剣による人格変化？・・・・まさか」

フェ「一成？」

一成が何かブツブツ言っている。どうしたのかな？

一「ん？　いや、なんでもないよ。とにかく、それがフェイトの理由なんだな？」

フェ「うん」

一「そうか・・・頑張れよ」

え？

フェ「一成は私を止めないの？　なのはの邪魔をする事になるんだよ？」

一「いや、フェイトの理由も聞いてしまったし、俺としては危険が無いとわかった時点でどっちがジュエルシードを手に入れても問題は無いと思ってるんだよ」

フェ「え？」

一「なのはも、最初は巻き込まれただけだったけど、今は自分の意思でジュエルシードを集めているからな。俺はそのサポートみたいなモノだし」

フェ「そうなんだ・・・」

一「お互いの譲れない想いをぶつけあうのを俺には止める事は出来ない。だから、これから二人が戦う事になっても俺は止めないよ。ただし・・」

フェ「ただし？」

再び私の頭をなでながら一成が言う。

一「ケガだけはしないように・・・な？」

フェ「う・・うん／／」

一成は私を止めない。敵にはならないと言ってくれた。それがとても嬉しい。

一「それじゃ、そろそろ俺は戻るよ」

フェ「うん、私もジュエルシードを探さなきゃ」

一「頑張れよ」

フェ「うん！」

私はそのままジュエルシードを探しに森の奥に進んだ。一成が私の後ろ姿を見つめているのを感じながら・・・

フェイトＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＩＮ　ＳＩＤＥ

俺はフェイトの後ろ姿を見送りながら考えていた。

一「どういうことだ？」

原作ではフェイトの母親はフェイトにつらくあたっていたはずだ。
それが少し前まで優しかった？

一「なにかあるな・・」

何者かが干渉しているのか？　だとしたら。

一「フェイトの言っていた変な剣というのがカギだな」

原作にそんなものは存在しない。それに・・・

一「剣によって人が変わる・・・か」

人霊剣の中には持ち主を操るものが存在するらしいが・・・

一「もしそうなら・・俺の出番だな」

俺の手で破壊しなくてはならない。それが旅人としての俺の役目だ・・・

俺は旅館に戻りながら決心を新たにした。

第十五話　秘密を他人に話す時は信頼できる人じゃないと後悔する（後書き）

神「謎の剣か」

天「これからどのような展開になるのでしょう」

神「とりあえず、カギになるのはコレじゃな」

作「ただいま～」

一「ただいま」

天「お帰りなさいませ一成様」

神「なんじゃ？随分と落ち着いておるの」

作「ああ、もう俺達、争わない事にしたんだ」

天「え！？」

作「これまで何回もやられ続けてきたが、この争いが何も生まない事に気づいたのさ！」

神「そうなのか一成？」

一「いや、違うぞ。毎回毎回同じような事繰り返してばっかで飽きたっていうのが本音だ」

作「ちょっ、おまっ、ばらすなよ！」

神「確かにのぉ、いつも作者が一成を怒らせてぶっ飛ばされて終わるという展開じゃしな」

天「ワンパターンですね、わかります」

作「う・・・」

一「そんなんだから感想に「こんなにgdgdでカオスなのはSSは見た事が無い」って書かれるんだよ」

作「でも、面白いとも書かれてたぞ！」

神「『それなりに』・・・じゃろ？」

天「つまらなくもないが、かといってそこまで面白くもない」

一「まさに『それなりに』だな・・・」

作「ズーン・・・」

一「まぁ、これからも『それなりに』頑張るんだな」

作「・・・いいさ！だって・・・自己満足小説だもん！」

神「開き直ったぞ・・・」

天「作者らしいですね・・・」

第十六話　酒は飲んでも飲まれるな（前書き）

前も書いたけど、今回の話いらなかったかも。たぶん読まなくても問題無いです。ただの悪ふざけです。それでもよろしかったらお読みください。天音を壊します。

第十六話　酒は飲んでも飲まれるな

旅館に戻った俺は部屋に戻るために廊下を歩いていた。すると、前からなのはがやって来た。

一「なのは・・・どうしたんだ？」

な「あ、一成君！よかった、やっと見つけた」

一「俺を探してたのか？」

な「うん、みんなで卓球しようと思って、一成君もどうかな？」

卓球か・・・だが、その前に

一「なのは・・・少し話があるんだが」

な「何？」

一「そうだな・・・まずは座ろうか」

近くのベンチを指す。

な「う、うん」

俺の顔を見て何か感じたのか緊張したような顔のなのは。

一「さっきフェイトに会った」

な「え！？」

驚くなのは。

一「この近くにジュエルシードの気配がするから回収に来たらしい」

な「そうなんだ・・・」

一「それでな、少し話をしたんだが、その中でフェイトがジュエルシードを集める理由を聞いたんだ」

な「理由って？」

一「すまないがそれは言えない。彼女が俺を信頼して話してくれたからな。なのはにも言うわけにはいかない」

な「そっか・・・」

悲しげななのは。そんな顔をさせるために話したんじゃないんだが。

一「・・・知りたいんだろ?フェイトの事を?」

な「!?」

一「だったら・・・なのはが直接聞けばいいのさ。お互いに話すことで見えてくるものもある」

な「・・・・・」

一「それに、なのはだって譲れない想いがあるんだろ?」

な「あ・・・」

一「皆を守るためにジュエルシードを集める。そう決心したんだろ?」

な「うん・・・」

一「ジュエルシードを集めるなら、必ずフェイトと会うことになる。その時に聞けばいいさ。彼女の理由を」

俺が言わなくてもこの子なら聞きそうだが、一応背中を押しておく。

な「私・・・知りたい。なんでジュエルシードを集めるのか。なんで・・あんなに悲しそうな顔をしているのか」

一「その結果戦うことになってもか?」

な「本当はイヤだけど、そうしなきゃいけないなら・・・」

決意は固いようだ。

一「わかった、なら俺は何も言わないさ」

な「え？」

一「フェイトにも言ったが、俺は二人が戦うことになっても止めはしない。なのはとフェイト、お互いの想いをぶつけあわなければいけないのなら、そうすべきだ」

な「一成君・・・ありがとう」

なのはの顔に笑顔が戻る。

一「・・・なのはは笑っている方がいいよ」

な「ふぇ！？そ、そうかな？」

一「元気になったようでよかった」

な「うん！私、次にフェイトちゃんにあったら聞いてみる！」

一「ああ！その意気だ！」

な「えへへ、私頑張るね！それじゃ一成君、卓球場に行こう。みんな待ってるよ」

一「そうだな、すっかり待たせてしまったな」

俺は笑顔のなのはと一緒に卓球場に向かった。

なのは達と一緒に卓球を楽しんだ後、夕食の時間になったので部屋に向かった。楽しんだと言っても俺は一回やってすぐやめたが。何故か？・・・前回のサッカーの時と同じだ。本気で打ったら球が壁に跡をつけてしまった。アリサに「なんでピンポン玉であんな事になるのよ！」と言われてしまった。俺は球技は出来ないな・・・

夕食は豪華だった。山の幸と海の幸をバランスよく揃えてあり、今度こそゆっくりできると思った・・・

神「やはり、酒は最高じゃのぉ♪」

神奈が酒を飲み始めるまでは・・・

それは、夕食を半分まで食べた頃に起こった。最初の方こそ自重していた大人達だったが、神奈が周りの人に酒を勧め始めた時からおかしくなってきた。

桃子さんと忍さんが恭也さんに酒を飲ませ、それにより恭也さんがダウン。

美由紀さんは顔を赤くし、上機嫌に酒を飲み続けている。

士郎さんは部屋の隅で黙々と飲んでいた。

神奈はそれを見て笑い。頼みの綱の天音は・・・

天「あはははは!!!おいしいですね～～～♪」

完全に壊れていた・・・

一「・・・しまった」

忘れてた。そういえば天音は酒に弱く、その上極度の笑い上戸だった。

な「あ、天音さん・・・」

す「すごく楽しそう・・・」

ア「ていうか、普段とのギャップあり過ぎでしょ・・・」

なのは達も若干引いている。実際俺もそうだった。

天「あれ～～？かずなりさま～のんでないじゃないですか～～～」

天音が酒を飲ませようとしてくる。

一「待て、やめろ！俺は未成年だ！」

天「なにいってるんですか～～～ほんとうはとっくにせいじんをむかえてるくせに～～～」

な・す・ア「「「え？」」」

一「ちょ！何言ってるんだ！？」

慌てて天音の口を塞ぐ。

神「はっはっは!!情けないの一成♪」

一「・・・神奈」

後でおぼえてろよ・・・

その後、標的をなのは達に変えた桃子さんと忍さんが俺の事も色々イジって来そうだったので士郎さんの所まで避難した。もちろんユーノも一緒だ。神奈と天音?知らん。あの二人には近づかない方がいい。

士「一成君・・・これ・・食べるかい?」

士郎さんが俺に料理を渡してくれた。

一「・・・いただきます」

士郎さんの優しさが伝わる。あれ?なんでだろう?涙が止まらない。

士「・・・君も大変だな」

一「・・・もう慣れました」

士「・・・そうか」

士郎さんと一緒に騒ぎの中心を見て・・・同時にため息をついた。

ユ「（一成・・・あの・・元気出して・・）」

一「（ありがとうユーノ。俺の味方は士郎さんと君だけだよ）」

ユーノも念話で励ましてくれた。いいやつだな・・・

俺は二人と男同士の絆を深めた・・・・

結局、この騒ぎは酒を飲んだ者が全員ぶっ倒れるまでつづいた・・・

神奈を除いて。

神「なんじゃ、もうお終いかの?妾はまだイケるのに・・・」

自重しろ神奈！

こうして、騒がしくも夜は更けて行くのだった・・・

第十六話　酒は飲んでも飲まれるな（後書き）

作「宴会って楽しいよね」

天「私って・・・酒乱だったんですね・・・」

作「前に自分だけキャラ付けされてないって嘆いてただろ?だから今回こうした」

神「よかったのぉ天音」

天「よくないです!なんで私だけこんな」

作「だって、神奈が酒に強い事は前から決めてたし。モデルになった人も酒には強かったからな。だったら天音は逆に酒に弱くしようと思ってな」

天「そんな・・・」

一「・・・・・」

神「ん?どうしたのじゃ一成?」

一「今回の件で、士郎さんとユーノの二人ととても仲良くなれた気がする」

神「・・・あ～」

作「次回はなのはとフェイトの再会!お楽しみに」

天「うう・・扱いが酷すぎます・・・」

第十七話　天才ってうらやましい（前書き）

主人公空気です

第十七話　天才ってうらやましい

酔いつぶれた天音とまだ酒の瓶を持って上機嫌な神奈を引きずって、部屋にぶち込み就寝する。つ、疲れた・・・

時刻は進み、今は深夜。寝ていた俺はジュエルシードの気配を感じ体を起こす。

一「神奈、天音、ジュエルシードの気配が・・・」

神「ぐ～・・・」

天「すやすや・・・」

一「・・・はぁ」

仕方ない、俺だけで行くか。

二人を起こすのも悪いので、俺は一人で部屋を出た。

な「あ、一成君」

部屋を出ると、俺と同じように気配を感じたであろうなのはと鉢合

わせした。肩にはユーノが乗っている。そのまま二人で現場に向かう。

向かったのはフェイトと話した森の中。

な「ジュエルシード・・・この先にフェイトちゃんも」

一「ああ、確実にいるな」

な「うん・・・」

真剣な顔のなのは。

一「話す機会が来たな」

な「うん、私、フェイトちゃんに必ずお話を聞かせてもらうよ・・・戦ってでも」

なのはの目は本気だ。やはりこの子は強い。

一「わかった・・・頑張れよ」

な「うん！一成君、しっかり見ててね！」

なのはと共に森の中に足を進めた。しばらくするとフェイトとアルフの姿が見えた。俺達の気配に気づいて二人が振り返る。

な「レイジングハート、セットアップ」

≪セットアップ≫

バリアジャケットを纏い、対峙するなのは。

アル「は～い、おチビちゃん。また会ったね」

アルフがなのはに声をかける。

ユ「それを・・ジュエルシードをどうするつもりだ！それは危険なものなんだ！」

アル「さぁね、答える理由が見当たらないよ」

ユーノの問いを軽く流し、アルフの姿が女性の姿から、力強い狼の姿に変わる。

ユ「や、やっぱり。あいつ、あの子の使い魔だ」

な「使い魔？」

アル「そうさ、あたしはこの子に作ってもらった魔法生命体。製作者の魔力で生きる代わりに、命と力の全てを掛けて守ってあげるんだ」

高らかに吼えるアルフ。

一「・・・・・」

フェ「一成？」

アル「どうしたんだい一成？あたしのこの姿に驚いたのかい？」

一「いや・・・一つ気になることが・・・」

な「どうしたの一成君？」

全員が不思議そうに俺を見ている。

一「フェイト・・・アルフは君が作ったんだよな？」

フェ「う、うん」

一「・・・その時、どの狼をモチーフにしたんだ？」

フェ「え？」

フェイトが唖然とした声を出した。

一「ぱっと見、ホッキョクオオカミに見えるが、その耳はロシアオオカミの物だし・・・かといってアラビアオオカミに見えなくもないし・・・」

う～～ん・・・わからない。いったいなんなんだ？

一「それで・・・実際はどうなんだフェイト？」

フェ「えっと・・・どうなんだろアルフ？」

アル「あ、あたしに聞かないでおくれよ！イメージしたのはフェイトだろ！？」

フェ「そ、そうだけど・・・ごめん一成、わからないよ」

一「そうか・・・残念」

もしかしたら、俺の知らない種かと思ったんだが・・・

ユ「か、一成！そんなこと言ってる場合じゃ」

一「俺にとっては重要な事だったんだが・・・」

そんなことか・・・・ＯＴＬ

な「相変わらずだね一成君」

なのはが苦笑いしている。

フェ「相変わらず？」

な「そうなの、一成君って動物の事になるとすごく熱が入っちゃうんだ」

フェ「そうなんだ」

な「一緒に動物園に行った時も、私に色々教えてくれたの」

フェ「・・・いいなぁ」

な「フェイトちゃん？どうかしたの？」

フェ「う、ううん！なんでもない！！」

これから戦う者同士とは思えないのどかな会話をする二人。

ユ「な、なのは！正気に戻って！」

アル「フェイト！話してる場合じゃないよ！」

な・フェ「あ・・・」

ユーノとアルフの呼びかけで改めて向かい合う二人・・・このまま仲良く終わってくれればよかったのに。

な「・・・私がジュエルシードを集めるのは、それがユーノ君の探し物だから。そして、私の大切な人達を守るため。魔法に関係ない人達が巻き込まれないようにするため・・・」

なのはが自分の思いをフェイトに伝える。

な「それが・・・私がジュエルシードを集める理由。フェイトちゃん・・・あなたは何故ジュエルシードを集めているの？」

なのはの問いにフェイトが一瞬俺を見る。

フェ「え？一成から聞いてないの？」

一「フェイトが俺を信頼して話してくれた事を他の人に話すわけにはいかないからな」

フェ「一成・・・ありがとう」

フェイトが礼を言ってきた。

一「気にするな、当然の事だ」

フェ「うん・・・」

な「それで・・・聞かせてもらえるかな？」

フェ「・・・ある人が、ジュエルシードを欲しがってる。その人に集めろと言われたから・・理由はわからないけど、私はあの人のためになんでもするって決めたから」

そう言い、なのはにデバイス・・・バルディッシュだったか？を向けるフェイト。

フェ「だから・・・戦う」

な「そっか・・・」

なのはもレイジングハートを構える。

な「お互いが持ってるジュエルシードを賭けて勝負しよう」

フェ「・・・わかった」

二人同時に飛行魔法を発動して空に舞い上がる。

な・フェ「「いきます！！！」」

雲一つ無い夜空に、二人の少女の声が響いた・・・

桜色の光と金色の光が幾度どなくぶつかり合う。

自慢のスピードを活かし、接近戦に持ち込むフェイト。

な「う・・・」

不利だと悟ったのか、なのはが後退しフェイトとの距離を取る。

な「ディバインシューター！」

迫って来るフェイトに牽制の魔力弾を放つなのは。その攻撃を避けるフェイトだが、追尾性の攻撃の所為か、思うように近づけないようだ。

フェ「このっ！」

避ける事を諦めたのか、バルディッシュで魔力弾を斬り裂くフェイト。そこになのはの次の攻撃が放たれる。

な「ディバインバスター！！」

フェ「やらせない！」

≪ブリッツアクション≫

なのはの砲撃が放たれるが、フェイトは以前にも見せた、高速移動魔法を使って回避した。そのまま反撃に移るフェイト。

フェ「フォトンランサー」

≪マルチショット≫

フェ「ファイア！」

金色の光がなのはに襲いかかる。

な「く・・・」

≪プロテクション≫

それをプロテクションで防ぐなのは、もちろんそんな好機をフェイトが逃すはずもなく、再びなのはに接近する。

フェ「やぁぁぁぁぁ！！！」

フェイトの渾身の一撃をそのまま防ぐなのは。そのまま一進一退の攻防が続くが、予想外だったのかフェイトが一度離れる。

な「はあっはあっ・・・やるねフェイトちゃん」

フェ「なのはこそ・・・アレを防がれるとは思わなかった・・・」

一「・・・すごいな」

とても九歳のする戦いじゃないぞ。さすが未来のエースだな。

俺は戦いの邪魔にならないよう戦闘エリア外までさがっている・・・

今回の出番は無いな。

ユ「なのは！今サポートを！」

アル「おっと、あんたの相手はあたしだよ」

ユ「な！？ぐっ！」

なのはのもとへ向かおうとしたユーノにアルフが飛びかかる。間一髪防御魔法を発動させたユーノだったが、そのバリアにひびが入る。

アルフもその場から下がる。

アル「一成！あんたは手を出さないんだろ？」

一「ああ、俺は何もしない。なのはにもフェイトにもそう言った」

ユ「一成!?僕は聞いてないぞ!」

あ・・・

一「・・・すまない」

ユ「一成～～～!!!」

落ち込むユーノ。

アル「その・・・なんだ・・・お気の毒さま」

アルフがユーノに同情の目を向ける。

ユ「ううん、敵対してる相手に慰められるなんて・・・」

さらに落ち込むユーノ。

一「ユーノ・・・元気出せ」

ユ「君の所為でしょぉぉぉぉぉ!!!」

一「うぐ・・・」

そう言われると何も返せない。

アル「あははははは!!面白いねあんたたち!さあ、かかってきな!!」

ユ「くそっ!この行き場のない気持ちを君にぶつけてやる!来い!!」

勇ましく叫んで転移魔法を発動させて、アルフと共に消えるユーノ。

一「頑張れよユーノ」

俺はなのはとフェイトに視線を戻した。

そろそろ決着がつきそうだ。なのはとフェイト。お互い動きを止め攻撃の準備をしている。

な「ディバインバスター!」

フェ「サンダースマッシャー！」

砲撃魔法がぶつかり合う・・・フェイトも相当の技を持っているな。
しかし・・・

フェ「く・・・」

な「え～～～い！！」

なのはの方が威力は上のようだ。徐々に押し戻されていくフェイトの砲撃。それを見たなのはの砲撃がさらに威力を増す。このまま勝負がつくかと思われたが。

フェ「今だ！」

≪ブリッツアクション≫

な「え？」

フェイトの姿が消えたかと思うとなのはの真上まで一瞬で移動していた。

フェ「終わりだよ！」

バルディッシュを振り下ろすフェイト。そして・・・

な「・・・負・・け・・？」

フェ「・・・勝った」

なのはの首元に金色の刃が添えられ、戦いは終わった。レイジングハートからジュエルシードが吐き出されバルディッシュに吸い込まれていった・・・

な「う～負けちゃったよ～」

フェ「残念だったね」

なのはが落ち込み、フェイトが嬉しそうにしている。

一「二人ともお疲れ様」

戦いが終わったので二人に近づく。

な「一成く～ん！負けちゃったよ～」

一「残念だったななのは。でもいい戦いだったぞ」

な「えへへ、ありがとう」

一「フェイトも、最後の動きは見事だったな」

フェ「あ、ありがとう／／」

二人を讃える。実際大したものだった。この子達なら旅人相手にもいい勝負をするかもしれない。

な「あれ？そういえばユーノ君は？」

フェ「アルフもいない」

一「あの二人は勝負するために転移したぞ。こっちも終わった事だし、呼びもどしてみたらどうだ？」

しばらくしてユーノとアルフが戻って来た。お互い大したケガはしていないようだった。

アル「フェイト、どうだった？」

フェ「うん、勝ったよアルフ」

アル「さっすが！あたしのご主人様だね♪」

上機嫌なアルフ。

な「ごめんねユーノ君、負けちゃった」

ユ「いや、僕もサポート出来なかったし、なのはだけの所為じゃないよ」

なのはを気遣うユーノ。

さて、これで今度こそ終わりだな。

一「それじゃ、そろそろ帰ろうか。フェイトも家に帰ってゆっくり休むんだぞ」

フェ「うん、一成。今日はありがとう」

一「お礼を言われるようなことはしてないんだが・・・」

俺が首を傾げるとフェイトが笑う。

フェ「クスッ、一成らしいね。それじゃ、またね」

アル「またね一成、あたしもあんたが気にいったよ。フェイトともどもよろしくね」

一「・・・よくわからんがわかった」

そう言い残し、二人は去って行った。

一「さあ、俺達も帰え・・・どうしたなのは」

な「・・・ずいぶん仲がいいんだね」

一「ああ、なぜか気にいられてしまったが・・・それが？」

な「・・・知らないの」

頬を膨らませて先に旅館に戻るなのは。なにか気に触るような事をしたか？

一「ユーノ、俺は何かなのはを怒らせるような事をしてしまったのだろうか？」

ユ「・・・君ってやつは」

ユーノにも呆れられてしまった。

その事を疑問に思いつつ、俺も旅館に戻ることにした。

第十七話　天才ってうらやましい（後書き）

作「やっと温泉まで終了したな」

神「一成が目立たない回も珍しいの」

天「私達に至っては、すぐ消えましたしね・・・お酒の所為で」

一「たまにはこんな回もいいな・・・楽だし」

作「お前！主人公らしからぬ発言をするな！」

一「毎回毎回出るのも疲れるんだよ。たまには休ませろ」

作「お前に休みなど無い！」

一「ふざけるな、労働基準法に違反だ。俺は戦うぞ」

神「もちろん妾達も」

天「参加しますよ」

作「仕事じゃねぇだろがぁぁぁぁ！！！」

一「最後に、久しぶりの贈り物報告会だ」

神「今回は清浦刹那様からハーブティーを頂いたぞ」

天「助かります、まだ頭が少し痛いんで」

一「あ～美味いな」

神「上等な茶葉じゃな」

天「清浦刹那様ありがとうございます」

一「・・・これ飲んだらますます動きたくなくなった」

神「妾も」

天「私もです」

作「ちょっ！何入ってんのこのハーブティー！？」

第十八話　友達の親に初めて会う時は緊張する（前書き）

オリ敵が出ます。

第十八話　友達の親に初めて会う時は緊張する

なのはとフェイトの戦いの翌日、前日の疲れからぐっすり寝ていた俺は神奈に叩き起こされた。

神「ほれ一成、朝食の時間じゃぞ」

一「う、うん・・・もうそんな時間か」

二人とも準備できているようだった。

天「一成様。旅行とはいえ少し気を抜き過ぎではないですか？」

神「そうじゃぞ一成。寝ている間にジュエルシードが発動したらどうするのじゃ」

一「・・・・・」

神「聞いておるのか一成？」

天「一成様？」

・・・プチン

一「・・・・二人とも、ちょっとそこに直れ・・・」

・・・・・・・・・

一「・・・というわけで、二人が幸せそうに寝ている間にジュエルシードが発動してしまったんだよ・・・」

神「は、はい・・・」

一「起こすのも可哀そうだったから俺一人で出たわけだが・・・よけいなお世話だったか？」

天「とんでもございません！お心遣いに感謝いたします！」

一「さすがに疲れてしまったから多少寝坊してしまっても仕方ないよな？」

神・天「「はい！仕方のない事です！！」」

一「わかってくれたようでなによりだ」

少しお仕置、ゲフンゲフン！・・・お話したら二人も納得してくれたようだった。

三人で朝食会場に向かう。

な「おはよ～一成君」

す「おはよう」

ア「遅かったわね」

一「ああ、少しな・・・」

ア「？」

会場に着くと、三人があいさつしてくれた。

な「あれ？神奈さんと天音さんどうしたの？」

す「顔色が良くないですけど、具合でも悪いんですか？」

神「なんでもないです！大丈夫です！！」

天「悪いのは私達です！一成様は悪くないです！！」

何かに怯えながら謝る二人。

な「か、一成君・・・二人ともどうしちゃったの？」

一「さぁ、悪い夢でも見たんじゃないのか？」

ア「神奈さんの敬語なんて初めて聞いたわよ」

一「俺もだ」

朝食を終え、俺達は旅館を後にした。帰りの車中ではすずかとアリサが俺の横に嬉しそうに座り、なのはは不満そうにアリサの横に座り、神奈と天音はなぜか離れていた。

な「むぅ～～・・・」

す「ふふ、一成君これ食べる？」

一「ああ、ありがとうすずか」

ア「すずか、私にもちょうだい」

す「はいどうぞアリサちゃん」

な「ずるいよすずかちゃん、アリサちゃん」

ア「何言ってんのよ。私とすずかが勝負に勝ったんだから当然でしょ」

す「ごめんねなのはちゃん」

な「ううん、まさかあそこでアレが来るとは思わなかったんだもん」

一「・・・だから何やってたんだ？」

アレってなんだよ。

神「ガクガク・・・」

天「ブルブル・・・」

二人は震えている。寒いのか？

無事に帰って来た俺はフェイトから聞いた話を二人に話した。

一「・・・というわけなんだが、二人ともどう思う？」

何かを考えている様子の二人。

神奈が口を開く。

神「人を変える剣か・・・・間違いないじゃろうな」

天「霊剣ですね。しかも高位の」

二人とも同じ考えのようだった。

一「ということは、それをなんとかすれば」

天「ええ、フェイトちゃんの言っていた優しいお母さんに戻るはずです」

一「そうか、よかった」

神「それにしても、その馬鹿剣の所為でフェイトは・・・・一成！妾にやらせてくれ！跡型も無く破壊してくれようぞ！！」

神奈がやる気を見せる。

天「油断できませんよ、相手もそれなりの力を持つ霊剣のようですから」

神「なに、妾と一成が力を合わせれば霊剣の一本や二本、物の数で

はないわ！」

天「はぁ・・・人の話を聞いてください」

神奈が瞳を燃やし、天音はそれを見て呆れている。気持ちはわかるがな。人を弄ぶようなヤツを許すわけにはいかない。

一「それでなんだが・・・今から会いに行ってみないか？」

天「今から・・・ですか？」

一「ああ、もし操られているのなら少しでも早い時期から手を出した方がいいからな」

神「賛成じゃ、完全に取り込まれれば手遅れじゃからな」

恐らく霊剣は時期を見て姿を現すだろう。ならばそれまで意識を保てるようにしなければならない。

天「ですが、どうやって会いに行くのです？確か場所はフェイトちゃんしか知らないはずじゃ・・・」

一「場所の名前はわかるだろ。確か・・・時の庭園だったか？」

神「なるほど、場所の名前さえわかれば」

一「ああ、後は検索して跳ぶだけだ」

天「しかし、それでは同じ名前の場所全てが候補にあがります。その中から目的の場所を探すのは骨が折れますが」

一「なに、運が良ければすぐに見つかるさ。さっそく跳ぶぞ」

俺は転移の準備をする。二人には同化してもらいついて来てもらう。もし戦闘になれば俺の力だけでは危険かもしれないからだ。

一「準備完了、行くぞ」

俺は転移を開始した。目標は時の庭園。プレシアさんのところだ・・・

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

プレシアＳＩＤＥ

プ「・・・転移反応？」

おかしい、今日はあの子が来る日じゃないのに。もしや・・・侵入者？

プ「この場所まで来るなんて。相当な力の持ち主ね・・・」

反応が大きくなる。私はいつでも攻撃できるよう身構える。

光が部屋を照らす。直接私の前に来るなんていい度胸じゃない。

光が収まる・・・そこには・・・

少年「・・・これで３６箇所目の時の庭園だが・・・今度はどうだ？」

銀色の髪の少年が立っていた。フェイトと同い年くらいかしら？

プ「ッ！？何！！」

この魔力反応・・・全盛期の私を上回っている！？まさか、この年齢で！？

少年「プレシア・テスタロッサさんですか？」

少年が私に尋ねる。どうして私の名を？

プ「ええ、私がプレシア・テスタロッサよ。そういうあなたは何者？小さな侵入者さん」

油断なく身構える。今の私では気を抜けばやられてしまいそうだから。

少年「やっと・・・やっとたどり着いたぞ。目的の場所に！」

なぜか泣いている。そんなにここに来たかったのかしら？でも、何故？

少年「はっ、名乗るのが遅れました。俺の名前は秋月　一成です」

少年が自己紹介する。秋月　一成？確か・・・

プ「・・・あの子が言っていた子ね」

数日前、フェイトが嬉しそうに話していたのを思い出した・・・

プレシアＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＩＮ　ＳＩＤＥ

光が収まり、次の場所に降りたつ。まさかここまで同じ名前の場所が存在するとは。

神「（今度はどうかの？）」

天「（・・・一成様）」

一「（ん？）」

天「（素直にフェイトちゃんに連れて行ってもらった方が早いように思います）」

一「（あ・・・・）」

その手があった。

一「（ここが違ったらいったん戻るか）」

神「（そうじゃな、このままではラチがあかぬぞ）」

天「（ええ、随分時間がかかりましたし、明日に響いてしまいそうです）」

周囲を見渡す。目の前には一人の女性が立っていた。

一「・・・・これで３６箇所目の時の庭園だが・・・今度はどうだ？」

女性「ッ！？何！！」

女性が驚いている。いきなり現れれば当然か。

一「プレシア・テスタロッサさんですか？」

名を尋ねる。今度はどうだ？

女性「ええ、私がプレシア・テスタロッサよ。そういうあなたは何者？小さな侵入者さん」

女性が答える・・・今何と？

神「（一成！）」

天「（もしかして！）」

二人が驚いている。そうか・・・ここが。

一「やっと・・・やっとたどり着いたぞ。目的の場所に！」

なんだこの達成感？なぜか涙が止まらなかった。

一「はっ、名乗るのが遅れました。俺の名前は秋月　一成です」

感動している場合ではない。そう思いプレシアさんに自己紹介する。

プ「・・・あの子が言っていた子ね」

あの子？もしかして・・・

一「フェイトの事か？」

間違いないな。それ以外思いつかない。

プ「それで・・・何をしに来たの？」

一「フェイトの言っていた優しいお母さんを一目見たいと思いましてね」

俺がそう言うとプレシアさんは不機嫌そうな顔になる。

プ「私があの子の母親？ふん、ふざけた事言わないで。私の娘は」

一「アリシアちゃんだけ・・・ですか？」

プレシアさんの顔が驚愕に染まる。

プ「あなた・・・何故それを？」

一「他にも知っていますよ。事故によりアリシアちゃんが亡くなった事。フェイトはアリシアちゃんのクローンである事。あなたがジュエルシードをフェイトに集めさせているのはアリシアちゃんを生き返らせるため・・・でしょう？」

プ「あなた・・・いったい」

一「俺の事はどうでもいいです。それよりも、あなたはフェイトの事をどう思っているのですか？」

プ「どうですって?あの子はただの人形よ。アリシアが生き返るまで私の心を慰めるためのね」

一「・・・本当にそう思っているんですか?」

プ「なんですって?」

一「あなたは本当にフェイトを人形としか思っていないんですか?」

プ「そんなの・・・当然・・・・うっ・・」

プレシアさんが頭を押さえる。何かに苦しんでいるようだ。

神「(一成。おそらく霊剣はプレシアを操っているのではなく、心に干渉しておるぞ)」

天「(フェイトちゃんへの愛情を憎悪に変えているのでしょう。一成様の言葉でその二つがぶつかり合っているようです)」

やはりな、フェイトの言っていた優しいお母さんの感情と、フェイトを嫌悪する偽りの感情がプレシアさんの中に存在している。

一「フェイトが言っていましたよ。あなたに頭をなでられるのが好きだと。あなたの作ってくれたご飯はとても美味しかったと」

プ「な、なにを・・・」

一「自分が頑張ればきっと以前のあなたに戻ってくれると、必死にジュエルシードを集めていますよ。こんなにあなたを思っている子を、それでもあなたは人形と言いますか？」

プ「そ、それは・・・」

一「思い出してください。フェイトと過ごした日々を。その時あなたは彼女をどう思っていたのですか？」

プレシアさんの心に呼びかける。少しでも記憶を取り戻してくれれば・・・

プ「ううう・・・うぁぁぁぁぁぁ！！！！」

突然プレシアさんが苦しみ出した。

神「（一成！あのままでは心が壊れるぞ！）」

天「（歯痒いですがこれ以上は！）」

一「クソッ！」

悔しいがこれ以上は何も出来ない。俺は転移の準備をする。

プ「はあっ、はあっ、はあっ、」

一「・・・失礼します。フェイトの事、ちゃんと見てあげてください。彼女はクローンではなく、フェイトという一人の人間です」

そう言い残し、俺は転移した・・・

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

プレシアＳＩＤＥ

プ「あの子と過ごした日々？そんなもの・・・」

あるわけない。そう思った瞬間。

プ「こ、これは！？」

頭の中にあの子の笑顔が思い浮かぶ。

《お母さんの手、暖かいな》

私に甘えるフェイト。

《ふふ、しょうがない子ね》

その頭をなでる私。

《だって気持ちいいんだも～ん♪》

《そろそろご飯にしましょうか。今日はあなたの大好きなものばかり作ってみたの》

《ホントに!?やった～!お母さん大好き!》

《私もあなたが大好きよフェイト》

《えへへ♪》

《フェイト・・・私の可愛い娘。もうこの温もりを失いはしない・・・》

次々に頭に流れてくるあの子と思い出。まさか、本当に!?

一「思い出してください。フェイトと過ごした日々を。その時あなたは彼女をどう思っていたんですか?」

少年の言葉を思い出す。私は・・・・

？「（おいおい、まさかあのガキの口車に乗せられるわけじゃないよな？）」

プ「ッ！？」

頭に直接響く声。

？「（あの人形にうつつを抜かして、あんたの本当の娘はほったらかしか？アリシアも可哀そうだな。あんな人形に負けるなんて）」

プ「・・・ふざけないで、私の娘はアリシアだけよ。あんな人形の事などなんとも思っていないわ」

？「（へへっ、そうかい）」

プ「それと・・・軽々しくアリシアの名前を呼ばないでちょうだい！」

雷撃を飛ばす。

？「（っとあぶね～。殺す気か？）」

プ「ふん、その程度でどうにかなるあなたじゃないでしょ・・・『悦楽』」

私が睨むと、突如何も無い空間から一本の剣が出てきた。やがて剣は男性へと姿を変えた。

悦「痛いもんは痛いんだよ。あんたの攻撃はシャレになんねぇ」

プ「なら、その口を閉じることね。耳触りでしょうがないわ」

悦「そりゃ失礼」

何が面白いのか笑いだす男。ある日いきなり私の前に現れたこの男は私にジュエルシードの存在を教えた張本人だ。信用ならない男だがこの点だけは評価できる。

プ「私は必ずアリシアを生き返らせてみせる。邪魔はしないでよ」

悦「へいへい、俺は楽しめりゃそれでいいんだよ。あんたが何しようがどうでもいいのさ」

プ「・・・ならいいわ」

男が姿を消す。私はアリシアの生体ポッドのある部屋に向かった。

プ「・・・アリシア」

ポッドの中にはあの時と同じ姿のままのアリシアが漂っている。もう少し、もう少しでまたこの子の声が聞ける。

プ「もう少し我慢していてねアリシア。お母さんが必ず助けてあげるから」

ポッド越しにアリシアの頬をなでた後部屋を後にする。この子のためなら私は何でもしてみせる。

しかし・・・

《ホントに!?やった～!お母さん大好き!》

《私もあなたが大好きよフェイト》

《えへへ♪》

あの映像は何だったの?ありえない事だとわかっていても頭から離れない。私は一体どうしてしまったの?

結局、その日はずっとあの映像について考え続けていた・・・

第十八話　友達の親に初めて会う時は緊張する（後書き）

作「オリジナル入ったな」

一「悦楽・・・こいつが元凶か」

神「名前からしてふざけたヤツじゃの」

天「せっかくプレシアさんも思いだそうとしていたのに」

作「お前らの相手は神奈達と同じ人霊剣だ。と言っても使い手はいないがな」

一「剣自身が自分の欲求の為に行動しているのか」

神「快楽主義者じゃな」

天「悦楽ですもんね」

作「こいつにはとことん悪役になってもらうからな。思う存分ボコるように」

一「もちろんだ、必ず消滅させてやる」

神「おお！一成が燃えておる」

天「ここまで熱血な一成様も珍しいですね」

一「そうか？」

作「お前には最終決戦でブチ切れしてもらうから」

神「悦楽・・・終わったな」

天「一成様を怒らせるとは・・・愚かですね」

一「さて、恒例の贈り物報告会だ」

作「今回は俺が報告させてもらうぞ」

神「お主がか？」

天「大丈夫ですか？」

作「報告くらいちゃんとできるわ！まずは清浦刹那様から前回に続きアップルパイだ」

一「おお、俺の好物！」

神「しかし・・・色んな方からパイを贈られるな」

天「別に一成様の好物だと言ったわけでもないですしね。なぜわかったのでしょう？」

作「そりゃ、前の一成の壊れっぷりを見れば誰でもわかるだろ」

神「前？」

天「いつの話ですか？」

作「・・・そう言えばあの時の記憶が無いんだったな」

神・天「「？」」

作「何でも無い。次は緋水様からエクスカリバーとマナ水晶×１０。あと・・・神奈、天音ちょっと来て」

神「どうしたんじゃ？」

作「いや、一成には見せられなくてな」

天「なんですか？ってこれは！！！」

作「一成の寝顔を隠し撮りした写真」

神「・・・はう」

ドサッ！

作「やっぱり倒れたぁぁぁぁ！」

天「全く、しょうがないですね」ボトボト

作「天音・・・その鼻血をなんとかしてくれ。尋常じゃない量だぞ」

天「え?・・・すいませんつい」

一「おーい、どうしたんだ?」

天「な、なんでもありません。(このことは一成様には内緒で)」

作「(ああ、ろくな目に遭いそうにないしな)」

神「・・・我が生涯に一片の悔いなし」

作「ら、ラ○ウ!?」

天「これで全部ですか?」

作「えっと・・・最後に・・・俺にガジェット×五万ってちょ!?」

ガシャンガシャン×五万

一「おお、こうしてみると壮観だな」

天「よかったですね作者」

作「何に使えばいいんだよ!?ま、まて!こっち来んなぁぁぁぁ!!」

一「あ、呑まれた」

天「機械に好かれる作者ですか」

一「緋水様、たくさんの贈り物ありがとうございます。プレゼント用のマナ水晶は大切に使わせていただきます」

天「あの写真は家宝にさせていただきます」

一「ん？なにもらったんだ？」

天「い、いえ！大したものではありません！」

一「？」

神「ふふふふ・・・一成～」

第十九話　やることはしっかりやっておこう（前書き）

オリ敵への感想を頂きありがとうございます

第十九話　やることはしっかりやっておこう

温泉旅行から帰って来て数日。なのははユーノと共に特訓の日々を送っていた。

な「次は私が勝つんだから！」

と、やる気満々だ。まぁおかげで原作のようにアリサとのすれ違いのケンカも無かったし、なのはもフェイトと話が出来たせいか前向きだ。少しずつだが、確実に良い方向に進んでいる。そんなある日・・・

一「ジュエルシードか？」

いつものように反応をキャッチした俺はさっそく現場に向かった。

な「リリカルマジカル」

フェ「ジュエルシード、シリアル１９」

な・フェ「「封印！」」

到着した俺が目にしたのは、なのはとフェイトがジュエルシードの封印に成功した所だった。

封印が成功し、お互いに向き合う二人。

フェ「また会ったね」

な「うん、今度こそ私が勝つからね！ユーノ君といっぱい特訓したんだから！」

意気込むなのは。

フェ「そう、でも負けない」

微笑むフェイト。こちらも自信満々だ。

神「（いいのぉ！青春じゃのぉ！）」

天「（ぶつかり合うライバル同士・・・燃えますね！）」

興奮した様子の神奈と天音。二人ともそんなキャラだったか？

な「行くよフェイトちゃん！ディバインシューター！」

なのはがディバインシューターを展開する。

フェ「バルディッシュ！」

≪イエス、サー　フォトンランサー・フルオートファイア≫

フェイトが即座に反応し、フォトンランサーを撃つ。しかし、なのははランサーを器用に避けフェイトを攻撃する。

フェ「くっ！」

ランサーでの迎撃を諦め、高速移動魔法を発動し、バルディッシュでディバインシューターを破壊するフェイト。しかし・・・

な「レイジングハート！」

≪イエスマスター　フラッシュムーブ≫

ユーノとの特訓で新たにおぼえた、フェイトの魔法に対抗するため

の高速魔法を発動させ、フェイトの背後に回るなのは。

フェ「え！？」

驚くフェイト。その隙になのはが新たに攻撃を加える。

な「ディバインバスター！」

なのはの攻撃でフェイトが煙に包まれる。

アル「フェイト！」

アルフの悲鳴があがる。

フェ「・・・驚いた。かなり強くなってるね」

煙が晴れ、フェイトの姿が現れる。なのはの砲撃を受けたのにダメージはあまり無さそうだ。おそらくバルディッシュが守ってくれたのだろう。

な「言ったでしょ、ユーノ君と特訓したって」

嬉しそうに言うなのは。お互いが再びぶつかり合う瞬間、一つの光が天に昇った。

な・フェ「え！？」

二人が光の方向を向く。そこには光を上げているジュエルシードがあった。

ユ「マズイ！封印したのになのは達の魔力にジュエルシードが反応してしまっている！なのは！もう一度封印を！」

アル「フェイト！」

慌ててジュエルシードを封印する為にデバイスを向ける二人。そして、お互いのデバイスがぶつかり合った瞬間

な「きゃあ！」

フェ「くっ！」

ジュエルシードから魔力波が放出され、二人を襲う。二人のデバイスにヒビが入り、なのはが俺の方まで吹き飛ばされてきた。

一「よっと・・・無事かなのは？」

な「あ・・・一成君。ありがとう」

一「ユーノ！どうすればいい！？」

ユ「わ、わからない・・・こんな反応初めてだ！」

クソ！こうなれば力ずくで・・・

アル「何やってるんだいフェイト！やめな！！」

アルフの声に目を向けると、バルディッシュを待機状態にし素手でジュエルシードを掴んでいるフェイトの姿が見えた。

フェ「くぅぅ！止まれ、止まれ！」

魔法陣が展開し、封印しようとするフェイトだが、光がさらに激しくなりフェイトの手袋が破け、そこから血が吹き出す。

一「マズイ！」

フェイトの元へ向かう俺。すると、再び衝撃が発生しフェイトが吹き飛ばされた。すかさず受け止める。

フェ「あ、ありがとう・・・」

俺に礼を言い、再びジュエルシードに向かおうとするフェイトにデコピンをかます。

フェ「な、何!?」

一「無茶をするな傷だらけじゃないか」

フェ「で、でも・・なのはのデバイスも傷ついちゃったし、これしか方法がないし、私なら大丈夫だよ」

再びデコピンをかます。

フェ「うぅ・・痛い」

一「そんなに血を出して大丈夫なわけないだろう。俺以前言ったよな?ケガだけはしないようにって」

フェ「あ・・・」

一「君を大切に思っている人達を心配させないでくれ。アルフもなのはも・・・もちろん俺も」

フェ「え?私を?」

驚くフェイト。なんでだ?

一「ああ、もう無理しなくていい。後は俺がやる」

フェイトにアースプライヤーをかけ傷を癒す。

フェ「あ、ありがとう」

一「どういたしまして。アルフ!フェイトを頼む!」

アルフがフェイトを抱きかかえる。なのはとユーノも近づいてきた。

ユ「どうするの一成?君には封印は・・・」

一「確かに封印は出来ないが・・・要はアレを黙らせればいいんだろ?」

ジュエルシードを指差す。

フェ「そ、そうだけど」

アル「いくらあんたでもアレは無理だよ！」

アルフが俺を止めようとする。

な「大丈夫だよアルフさん」

アル「何がだい！？」

な「一成君ならきっとなんとかしてくれるよ・・・ね？一成君！」

なのはが真っ直ぐに俺を見つめる。俺を信じ切っている目だ。ならばその期待に応えなくてはいけない。

一「ああ、俺を信じてくれ」

アル「でも！」

フェ「大丈夫だよアルフ」

アル「フェイトまで！」

フェ「一成は魔法もすごいから、きっとやってくれるよ」

フェイトも俺を信じてくれるようだ。

アル「・・・わかったよ。一成！あたしもあんたを信じるからね！」

一「ありがとうアルフ・・・心配してくれて」

アル「な!?べ、別にいいよ礼なんて／／」

ユ「・・・ごめん一成。本当なら僕が」

一「それまでだユーノ。言ったろ?俺達を頼って欲しいって」

ユ「うん・・・ありがとう」

一「それじゃ・・・行ってくる」

ジュエルシードの元へ向かう。さて・・・今回は剣で攻撃するわけにもいかないし・・・

一「やはり大技で一気に鎮めるか」

神「（了解じゃ一成！）」

天「（サポートはお任せください）」

二人の声を聞き俺は詠唱を開始した。

一「灼熱のマナよ・・・触れるもの全てを貫け！フレイムレーザー！！」

神奈の剣先から放たれた灼熱の熱線がジュエルシードに直撃し光が弱まる。そこへさらに追撃をかける。

一「次だ！青き清浄なるマナよ・・・その形を雄々しい雷へと変え我に仇名すものへ降り注げ！フローズンステイシス！！」

天音を天に向ける。すると、強力な冷気と巨大な雷がジュエルシードへと降り注いだ。

カッ！！

ジュエルシードの物よりはるかに激しい光が辺りを包んだ。

光が収まり、ジュエルシードは完全に沈黙していた。

ユ「す、すごい・・・あのジュエルシードを鎮めるなんて・・・」

な「さっすが一成君！」

フェ「一成も雷魔法使えたんだ・・・なんか嬉しいな」

アル「は、はは・・・大したヤツだねホント・・・」

俺はジュエルシードを持ってみんなの所へ戻った。

一「さて、このジュエルシードはどうするんだ？」

な「一成君。フェイトちゃんに渡してあげて」

一「いいのか？」

な「うん。あんなに傷だらけになってまで頑張ってたんだもん。これはフェイトちゃんが持つべきだよ」

一「そうか」

フェ「あ、ありがとう・・・」

恥ずかしそうに礼を言うフェイト。

フェ「その・・・決着つけられなくてごめんね。あと・・・心配してくれてありがとう」

な「気にしないで、当然だもん。ね？一成君？」

一「ああ、さっきも言ったがあまり無茶をして心配させないでくれよ？」

フェ「うん・・・本当にありがとう。それじゃあ、行こうアルフ」

アル「はいよ。一成となのは・・・だっけ？フェイトを助けてくれてありがとね」

そう言い残し、二人は去って行った。

な「ごめんねユーノ君。ジュエルシードを渡しちゃって」

ユ「いや、今回はしょうがないよ。あの子の頑張りを見たら何も言えないし」

な「ありがとう」

ユ「一成も・・・お疲れ様」

一「ああ、ユーノもな」

封印も終わり、俺達は帰宅することにした。

な「ねぇ一成君」

一「ん？」

な「あのね・・・もし・・私が今日のフェイトちゃんみたいにケガしちゃったら・・・一成君はどうする？」

どうする・・・か

一「とりあえず」

な「とりあえず？」

一「デコピンかます」

な「え？」

一「その後、説教だな。三時間ほど」

な「そっか・・・」

一「なのはが無茶をした所為ならな」

な「え？」

一「もし、なのはを傷つけるようなヤツが現れたら・・・生まれた

事を後悔するほどの苦痛を味あわせた後、なのはの前に引っ張って来て土下座させる」

な「一成君・・・」

一「言ったろ?君を守るって」

な「・・・うん!」

なのはが嬉しそうに腕を組んで来た。

一「どうしたんだ?」

な「えへへ、何でも無いよ~♪」

一「?」

そのままなのはの家に着くまでなのはは腕を組んだままだった・・・

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

???ＳＩＤＥ

？「艦長、エイミィから報告があるそうです」

？「何かしら？」

？「えーとですね、第９７管理外世界『地球』からロストロギア反応と同時に小規模の次元震が観測されました」

？「・・・確かスクライア一族からその世界に捜索願いが出ていなかった？ジュエルシードと呼ばれるロストロギアと、それを発掘した一族の少年の捜索願い」

？「ん～、クロノ君おぼえてる？」

？「エイミィ・・・そのくらいおぼえておいてくれ・・・艦長のおっしゃる通り、二件の捜索願いが出ています」

？「もしかしてビンゴかな？」

？「おそらく」

？「可能性は高いわね」

？「あ、それともう一つ報告があります」

？「何？」

？「次元震が観測される前に約ＡＡＡランクの魔力値を二つ、次元震発生後にオーバーＳランクの魔力値を観測しました」

？「ＡＡＡが二つに、オーバーＳだと!?」

？「さらに、このオーバーＳランクの魔力を観測した数秒後に次元震とロストロギア反応が消失。艦長・・・これって」

？「おそらく・・・そのオーバーＳがロストロギアを鎮圧し次元震を止めたんでしょうね」

？「艦長、これは由々しき事態です」

？「ええ、時空管理局としてはこれを放置はできない。本艦は進路を変更し、第９７管理外世界『地球』へと向かいます」

第十九話　やることはしっかりやっておこう（後書き）

作「謎の組織が地球に向かっているぞ！」

一「管理局だろ」

神「自分達からばらしておるしの」

天「いよいよ対面ですね」

一「そうだな、どうする？」

神「どうするって・・・」

天「どうしましょう？」

作「協力するぞ。組織には入らないが」

一「当然だな」

神「縛られるのは好かんからの」

天「一成様なら、縛られる前に組織を潰せますけどね」

作「駄目だっつの！ストーリー的に彼らがいないと困るから」

一「・・・了解」

神「ま、相手の出方次第じゃな」

天「そうですね。もしなのはちゃん達に危害を加えようものなら」

一「潰す・・・」

作「やべぇ・・・マジだ」（汗）」

一「さて、今回の贈り物報告会だが・・・」

神「清浦刹那様から白いたいやきを頂いたぞ」

一「おお！美味そうだな♪」

天「続いて緋水様から・・・神奈ちょっと」

神「ん？まさか」

天「ええ、一成様の寝顔写真（子どもバージョン）です」

神「う、うむ・・・これは／／」

天「素晴らしい作品ですね・・・あ、また鼻血が」

一「ん？どうしたんだ？また二人だけに贈り物か？」

天「え、ええそうです」

一「いいなぁ、俺も欲しいな」

神「一成には意味の無い物じゃ」

一「？」

天「えっと・・・あ！もう一つあるようですよ」

一「なんだ？」

天「どうやら作者への贈り物のようです」

一「お前もか」

作「なんだろう？嬉しいはずなのに嫌な予感がする・・・」

天「緋水様から作者へ、デストロイガンダム×３０００だそうです」

作「やっぱりなぁぁぁぁ！！！」

一「・・・デカイな」

神「おお！？人型のロボットは初めて見たぞ♪」

天「あとエリクサーを頂きました」

一「ありがたい。ちょうど疲れてたんだよ」

作「ちょっとぉぉぉぉ！！全機が俺に向かってスーパースキュラ向けてるんですけどぉぉぉぉぉ！！！」

一「熱烈なラブコールだな」

神「男なら応えてやるのじゃ」

天「作者の甲斐性の見せどころですね」

作「ストップ！俺ヤタノカガミとか持ってないから！食らったら蒸発するからぁぁぁぁ！！！」

キュイイイイン・・・・バゴォォォォォォォン！！！

一「・・・俺達がしなくてもアイツってこうなるんだな」

神「それだけ愛されておるのじゃろ」

天「作者なのに読者の方に愛されるなんて羨ましいですね」

幕間二　子と親（前書き）

今回はフェイトです

幕間二　子と親

フェイトＳＩＤＥ

フェ「よし、準備完了」

今日は母さんの所へジュエルシードを持って行く日だ。今回は数日前なのはに譲ってもらった物も含めて全部で５つ。

フェ「母さん喜んでくれるかな？」

前回は怒らせてしまったけど、今回は大丈夫だよね？

アル「フェイト～やっぱりあたしも・・・」

フェ「大丈夫だよアルフ。だからお留守番よろしくね？」

アル「・・・フェイトがそう言うなら、でも・・何かあったらすぐ呼ぶんだよ？」

フェ「うん、ありがとうアルフ。じゃあ行ってきます」

アルフにお留守番を頼んで私は母さんの所へ向かった・・・

フェ「・・・これが、今回集めたジュエルシードです」

母さんに報告する。何だか難しい顔をしている母さん。

プ「・・・フェイト・・・」

フェ「は、はい・・・」

ど、どうしよう、少なかったから怒ったのかな?

フェ「ご、ごめんなさ・・・」

プ「よくやったわね。前回より増えているじゃない」

フェ「え?」

プ「さすが・・・その・・・私の娘ね」

母さんが・・・褒めてくれたの?・・・・私を?

プ「この調子で残りもしっかり集めるのよ？」

フェ「は、はい！！」

母さんが褒めてくれた。嬉しい・・・頑張って本当によかった。

プ「・・・もう用はないでしょう？・・・行きなさい」

フェ「うん！期待しててね母さん！！」

母さんにあいさつして、私は戻ることにした。えへへ、褒められたことアルフに教えてあげなきゃ・・・

フェイトＳＩＤＥ　ＯＵＴ

プレシアＳＩＤＥ

フェイトが転移した後も私はその場で立ちつくしていた。

プ「私はさっきあの子になんと言った？」

あの子を褒めた事はまだいい。だが、あれだけ嫌悪していたあの子に対して言った自分の言葉が信じられない。

プ「さすが・・・その・・・私の娘ね」

なぜか全く違和感なく口から出た言葉。娘ですって?あの人形が?

《お母さん大好き~♪》

プ「ッ!・・・まただ」

あの少年と出会った日から度々思い浮かぶ光景。私はこんな光景におぼえは無い。おぼえは無い・・・はずだが。

悦「ククク・・・健気だねぇ」

プ「・・・覗き見なんて、いい趣味してるじゃない『悦楽』」

物陰からあの男が現れた。いつものように笑みを見せながら・・・

悦「おいおい酷ぇな、偶然話し声が聞こえたから気になっただけじ

ゃねえか」

プ「それが覗き見だと言っているのよ」

悦「へいへい、すんませんでしたね」

プ「それで・・・何の用？」

悦「別に・・・ただ、ずいぶんあの人形に情が移ったみたいだな」

プ「それは・・・」

悦「その事は別にどうでもいい・・・だが、忘れたわけじゃないよなぁ？」

プ「・・・・・」

悦「アレはあくまで人形だ。アンタの本当の娘は今もアンタの助けを待っているんだぜ？」

男の一言一言が私の心に水のように染み込んできて、そのたびにフェイトへの憎悪が無理矢理引き出されて行くような感じがする。

悦「アンタの望みは何だプレシア？言ってみろよ」

プ「私の望みは・・・アルハザードに到り・・・アリシアを生き返らせること・・・」

悦「フェイトはアンタのなんだ？」

プ「あの子は・・・私の・・・」

なぜか言葉が出ない。あの子は私の何？

悦「チッ・・あのガキ、余計な事吹き込みやがって。記憶と意識の封印がここまで弱まるとはな」

悦楽が何か言うと同時に、黒い霧のようなものが私を包んだ。

プ「う、うぁぁ・・・」

私の心が闇に染まって行く・・・フェイト・・・

プ「・・・・・」

悦「もう一度聞くぞプレシア・・・フェイトはアンタのなんだ？」

プ「フェイトは・・・ただの・・・人形・・・私の娘は・・・アリシアだけ・・・」

悦「ククク、それでいい」

アリシア・・・フェイ・・・ト・・・

プレシアＳＩＤＥ　ＯＵＴ

悦楽ＳＩＤＥ

悦「ククク、それでいい」

あの人形にはとことん不幸になってもらわなきゃいけねえ。なぜなら・・・

悦「その方が面白れぇからな。人の悲しみ、絶望、それこそが最高の喜劇だぜ」

そう考えると、今回の件はなかなか面白れぇかもな。

悦「認められ、喜んだと思えば、否定され、絶望に染まる・・・ククク、考えただけで笑いが止まらねぇ」

懸念があるとすれば、あのガキ・・・秋月とか言ったか？

悦「なかなかの力を秘めていたし・・・何よりこの女の事情を知っていやがったな」

俺と同じくこの世界外から来やがったのか？まさか・・・旅人か？

悦「・・・まぁいい、仮にそうだとしても、あの程度のガキとそれに従っている霊剣ごときにこの俺・・・人霊剣『悦楽』様が負けるはずがねぇ」

そう言えば、以前あの人形もあのガキの事を話していたな。

悦「ククク、目の前でぶち殺してやるのもいいかもな」

その時、あの人形はどんな反応をするだろうか？怒り狂うか？泣き叫ぶか？はたまた、発狂するか？

悦「楽しみだぜ・・・」

その光景を想像し、俺は笑った・・・

悦楽ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

フェイトＳＩＤＥ

フェ「ただいま～♪」

声が弾む。嬉しさが抑えきれない。

アル「フェイト！あの女に何かされなかったかい！？」

アルフが私の肩を掴んで揺らしてくる。

フェ「あ、アルフ、落ち着いてよ！」

アル「ご、ゴメン・・・」

アルフが肩を離してくれた。もう、心配性だな。

アル「それで・・・あの女はなんて？」

フェ「聞いてよアルフ！母さんがね・・・褒めてくれたんだ♪」

アル「ウソ！？あの女が！？」

フェ「うん！「よくやった、さすが私の娘だ」ってね！」

思い出すだけで嬉しくなる。

アル「そうかい・・・あの女が・・・」

アルフが納得いかなそうな顔をしている。どうしたんだろう？

フェ「アルフ？」

アル「・・・いや、何でも無いよフェイト。フェイトが嬉しいならあたしも嬉しいさ」

フェ「ありがとうアルフ、明日からも頑張ろうね」

アル「ああ・・・そうだね」

フェ「そうだ！一成にも教えてあげなきゃ！」

心配してくれてたもんね。それに、一成が手伝ってくれたからあれだけ集められたんだしキチンとお礼を言わなきゃ。

一成へのお礼を考えながら私は眠りについた。今日はいい夢が見れそうだな・・・

幕間二　子と親（後書き）

作「悦楽が裏でこそこそやってるな」

一「・・・あのクソ野郎・・・」

神「か、一成！抑えるのじゃ！！」

天「いずれ本編で戦う事になりますから、怒りはその時まで！」

一「・・・すまない、つい」

作「アイツには全員の怒りを一身に受けてもらうからな。反応としてはまずまずか？」

神「確かに・・・ここまで腹が立つ者も珍しいのぉ」

天「ええ、許されるなら今すぐにでも消し去りたいですね」

一「おい作者・・・わかってんだろうな？」

作「ああ、お前の全力でアイツをボコってもらうからな。楽しみにしてろよ」

一「ならいい・・・」

一「気を取り直して、今回の贈り物報告会だ」

神「おお、まずは清浦刹那様から火星丼じゃ」

天「これは・・・見た事無い料理ですね」

一「『火星』だしな。後でゆっくり頂くか」

神「うむ、清浦刹那様、感謝するぞ！」

天「次です。緋水様から枯れない桜、オリハルコンの剣、作者にアイルーを頂きました」

一「桜か・・・いいもんだな」

天「そうですね。いつかなのはちゃん達とお花見に行くのもいいかもしれませんね」

神「花見か！いいのぉ、桜の下で飲む酒はまた格別じゃしの♪」

一「・・・やめた方がいいかもしれない」

天「ええ、私もまた醜態をさらしたくありませんから・・・」

作「やったぜアイルー！緋水様、ありがとうございます！さあ！さっそく俺の手伝いをしてもらうぞ」

アイ「嫌ニャ」

作「何いいいいい！？」

アイ「アンタみたいな駄目人間がご主人様なんて死んでも嫌ニャ！僕のご主人様はもっとカッコよくて、気品があって、優しそうで・・・」

一「ん？」

アイ「ちょうどあの人のようなご主人様がいいニャ」

作「クッ！・・・さすが天然たらし野郎。まさか人外までたらし込むとは・・・だがしかし！今回は泣き寝入りせんぞ！力ずくでも言う事を聞いてもらう！」

アイ「むむ！何する気ニャ？」

作「緋水様から頂いたオリハルコンの剣で誰がご主人様か教えてやる！行くぞ！」

アイ「来いニャ！」

作「食らえぇぇぇ！！！」

ブウォン！！

アイ「甘いニャ！」

作「な！？」

アイ「おかえしニャ！」

バキッ！

作「ぎゃあぁぁぁぁ！！」

ズシャアアアア！！！

アイ「ふ・・またつまらぬものを蹴ってしまったニャ・・・」

一「・・・すごいものを見てしまった・・・」

第二十話　他の人が話している時くらいは口を閉じろ（前書き）

クロノ君が出ます。そして戦闘フラグです

第二十話　他の人が話している時くらいは口を閉じろ

な「（一成君！）」

プレシアさんの所へお邪魔してから数日、森の中で結界を張り鍛練をしているとなのはから念話が入った。

一「（どうしたなのは？）」

な「（ジュエルシードの反応があって、封印に向かったらフェイトちゃんに会ったの。そしたら一成君にお話があるって）」

一「（フェイトが？）」

な「（うん）」

なんだ？もしかしてプレシアさんと何かあったのか？

一「（わかった、すぐに向かうからフェイトに伝えておいてくれ）」

な（うん！）」

神奈と天音を呼んでなのは達の許へ向かった・・・

な「へ～、そうなんだ～」

フェ「うん、それが嬉しくて」

ユ「なんで僕達は話してるんだ？」

アル「さぁね、あたしはフェイトが楽しけりゃそれでいいけど」

現場に向かうと前回の様に封印されたジュエルシードと、その近くで楽しそうに話しているなのは達を見つけた。

一「・・・なんともまぁ」

友達みたいに話す二人を見て思わず笑ってしまう。

神「（やはり一成の行動は正しかったの）」

天「（ええ、こんなに早くフェイトちゃんの笑顔を見れるなんて・・・）」

神奈と天音も嬉しそうに言う。確かに、色々介入してしまったが、

あの笑顔を見ればそれでよかったと思えた。

な「あ！一成君！」

フェ「え？あ・・・」

俺に気づいたなのはが手を振る、それに続いてフェイトも俺に気がついたようだ。

ユ「遅いよ一成！」

アル「ようやくお出ましかい」

一「スマン、ちょっとな。二人とも封印お疲れ。それで・・・フェイト、俺に話があるんだろ？」

フェ「うん！聞いてよ一成！母さんがね！！」

やっぱりプレシアさん絡みの話か。

神「（随分嬉しそうじゃな）」

天「（きっとプレシアさんに何かしてもらったんでしょうね）」

一「（だな）」

こんなに嬉しそうなフェイトは初めて見た。

フェ「母さんがね！私の事「ストップだ！　此処での戦闘は危険過ぎる！！　僕は時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。その権限でこれ以上の戦闘行動の停止を命じる。この場に居る全員、速やかにデバイスを収めるように。詳しい事情を聞かせてもらおうか？」えっ！？」

一「・・・・」

突然転移してきて戦闘もしていないのにわけのわからない事を言う少年・・・クロノ・ハラオウンが現れた。

神「（ＫＹじゃな）」

天「（ええ、ＫＹですね）」

ＫＹ？彼のイニシャルか？でも違うような・・・

ユ「・・・・時空管理局」

アル「執務官だって！？」

ユーノとアルフがそれぞれ口にする。

ク「全員武器を下ろすんだ」

再びクロノが警告してきた。

ク「このまま戦闘行為を続けるようなら・・・」

一「そんなことはどうでもいい、それよりフェイト、さっきの話の続きなんだが」

ク「なっ！？」

今の俺には、フェイトから話を聞く事以上に優先することなどない。

フェ「え？で、でも・・・」

一「彼の事は気にするな。何かいい事があったんだろ？」

フェイトに促す。

な「一成君・・・」（苦笑）

ユ「管理局の・・・しかも執務官の警告をどうでもいいって・・・」

アル「あははは！一成！あんたやっぱり最高だよ♪」

なのはが苦笑いし、ユーノが呆れ、アルフが心底楽しそうに俺を見ていた。

神「（さすが一成じゃな）」

天「（私達に出来ない事を平然とやってのける、そこに痺れて憧れます！）」

神奈が感心し、天音が理解不能な事を言ってきた。

フェ「えっとね、一成・・・母さんがね、私の事褒めてくれたんだ」

一「そうか、よかったな」

フェ「うん！さすが私の娘だって・・・私すごく嬉しかった！！」

プレシアさん・・・フェイトとの思い出を思い出したんですね・・・

フェ「一成が助けてくれたおかげだよ。だから・・・お礼が言いたくて」

一「何言ってるんだ、フェイトが頑張ったからお母さんだって褒めてくれたんだろ?俺は何もしちゃいないさ」

フェイトの頭をなでながら言う。

フェ「あ、ありがとう・・・／／」

一「ああ」

ク「いいかげんにしろ!僕の話を聞け!!」

我慢の限界だったのか、クロノが切れた。そうだ、まだ彼が残っていた。

一「人の話を邪魔するなと教わらなかったのか?」

ク「君達の話などどうでもいい!それよりも大人しくついて来てもらうぞ!!」

どうでもいいだと?

一「・・・フェイトにとってはとても大切な話だったんだぞ。それをどうでもいいだと?執務官とは随分偉いのだな・・・」

この少年、常に自分が正しいと思っているな・・・俺が嫌いな考え方をしてくれる・・・

神「(あ~・・・やってしまったの)」

天「(こうなっては止められませんね)」

クロノに殺気をぶつける、恐らくこの世界に来て最大のヤツを。

ク「な、なんだ?震えが止まらない・・・」

な「一成君・・・怒ってる」

ユ「ま、待って一成!執務官に手を出したりしたら!」

一「悪いなユーノ、これぱかりは我慢できない」

フェ「一成・・・」

一「フェイト、アルフを連れて帰るんだ」

フェ「で、でも・・・」

アル「フェイト、一成の言う通りにしよう」

フェ「アルフ！？」

アル「管理局に目をつけられたらこれから動きにくくなる。捕まればそれこそ終わりだよ」

一「そう言う事。後は俺に任せてくれ」

フェ「・・・わかった、一成も捕まったりしないでね。もし一成が捕まって会えなくなっちゃったりしたら・・・」

フェイトが塞ぎ込む。

一「大丈夫、また会えるさ。前にも約束しただろ？」

フェ「・・・そうだね、一成は約束を守ってくれたもんね。だから今度も・・・」

一「ああ、必ずな」

フェ「うん！」

アル「一成、本当に恩に着るよ。行くよフェイト！」

そう言って空へと消えて行くフェイトとアルフ。

ク「待て！逃がさないぞ！！」

クロノが二人に砲撃を放つ。すかさずバリアを展開させる。

一「オーラバリア」

ク「なっ！？」

防がれた事に驚くクロノ。

一「君の相手は俺だ」

ク「君！今の攻撃は管理局に敵対すると言う事か？」

一「俺は知り合いを守っただけだ・・・いきなり攻撃するような人間に言われたくない」

ク「それは、彼女が僕の警告を無視したからだ」

一「君が来た時に彼女は戦闘行為を行っていたか？それに、彼女はジュエルシードを封印してくれただけだ」

ク「ジュエルシード・・・先日も次元震を観測した。アレは危険な物なんだぞ！」

一「その危険な物の近くで砲撃ぶっ放したのは何処の誰だ？」

ク「クッ・・・」

スラスラ言葉が出てくる。いかんな、腹が立った時の俺の悪い癖だ。

な「一成君、容赦無いね」

ユ「彼と口喧嘩しても勝てる気がしないのは僕だけかな・・・？」

そんな事は無いぞユーノ。俺にだって勝てない相手はいるぞ・・・
この世界にはいないけど

神「（はっはっは！いいぞ一成！もっと言ってやれぃ！）」

天「（普段の優しい一成様も素敵ですが、今の一成様も・・・）」

一「・・・どちらにしろ、君は俺の知り合いを傷つけようとした。
それ相応の報いは受けてもらうぞ」

ク「それは明確な攻撃の意思ありと取っていいんだな？」

一「やれやれ、まだ剣を向けてもいない相手に砲撃の準備か？どう
やら随分頭に血が昇っている様だな？」

ク「クッ・・・」

一「執務官と言うものがどんなものかわからないが、そんなことでいいのか?」

ク「うるさい!そんな事は君に言われるようなことではない!」

聞く耳持たずか。

一「なら仕方ない・・・少し頭・・・冷やそうか?」

フライング?知らん

神「(さて・・・暴走体の様に燃やし尽くすわけにもいかんしの)」

天「(非殺傷設定ですか・・・出来ますかね?)」

神「(何、要は死ななければよいのじゃろ?)」

天「(それは違うと思いますけど・・・)」

一「問題無い、殴って止める」

ク「君を拘束させてもらう!」

一「出来るのならな・・・来い」

俺はこの世界での初の対人戦に挑む事になった・・・

第二十話　他の人が話している時くらいは口を閉じろ（後書き）

作「う～ん」

一「どうした？」

作「いや、これからの展開なんだが、シリアス入れるか、それともひたすらギャグに走るのか悩んでな」

神「なんじゃいきなり」

作「悦楽の所為でシリアスが入って来たが、この小説のキーワードは『シリアス？知らん』だからなぁ」

天「中途半端にシリアス書いたらコケますよ。元々あなたにシリアスの才能は無いんですから」

作「それは否定できないが・・・でもなぁ・・・」

一「それ以前に、オリ敵出してちゃんと読者の方が納得するような終わり方出来るか考える方が先決だろ」

作「・・・やる事いっぱいだ」

一「お前が決めた事なんだからしっかりやれよ」

神「数少ない読者の方々のためにの」

天「私はこの件で逆に読者の方々が離れて行ってしまいそうで不安

です」

作「・・・それも否定できない・・・」

一「よし、今後の目標も決まった事だし、贈り物報告会するか」

神「まずは・・・緋水様からリアル鬼ごっこ招待券と無限ランチャー、四次元ポケットを頂いたぞ」

一「・・・来たな、最強のチートアイテム」

天「私はもしもボックスが最強だと思います」

神「インパクトとしては、やはり地球破壊爆弾じゃな。あの回の青狸の顔は見物じゃぞ」

一「神奈・・・彼は狸ではなく猫だ」

神「な、なんじゃと!?」

天「とりあえず、作者には秘密にしておきましょう」

一「そうだな、アイツに渡したらロクな事に使わないに決まっている」

神「ならば、無限ランチャー持たせてリアル鬼ごっこに参加させる

か？」

一「そうだな、ぶっ放してたらその内終わるだろ」

天「あれって、鬼に攻撃したら駄目なんじゃ・・・」

一「あんなふざけたルールに従う必要は無い」

神「なるほど・・・」

天「次は・・・清浦刹那様からバームクーヘンを頂きました」

一「美味そうだな」

神「さっそく頂くと・・・何じゃ？」

一「どうした神奈？」

神「い、いや何でも無いぞ・・・妾だけに贈り物。中身は・・・巫女服か」

一「ふ～、美味かったな」

天「ええ、清浦刹那様には感謝ですね」

神「あ～・・・妾はちと席を外させてもらうぞ」

一「神奈？」

天「どうしたんでしょう？」

神「・・・よし、着替えてみるかの」

神奈着替え中・・・

神「これで完成っと・・・ふむ、なかなか妾好みの衣装じゃな・・・ちと胸元がきついが、清浦刹那様よ感謝するぞ。これで一成も妾の魅力に気付くじゃろ♪」

第二十一話　男は拳で語り合うと言うが実際一方的にボッコボコにして終わるとも言う

たくさんの感想を頂き感謝感謝です！

第二十一話　男は拳で語り合うと言うが実際一方的にボッコボコにして終わるよね

俺は拳を構えてクロノと対峙する。

ク「どういうつもりだ？何故デバイスを使わない？」

一「君相手には拳で充分だ。ちなみにこれはデバイスでは無い」

ク「馬鹿にして！後悔させてやる！！」

砲撃の準備をするクロノ。

一「牽制も無しに大技か？甘いな」

俺はクロノに向かって加速する。

ク「ブレイズカノ・・・」

一「遅い」

そのまま彼を殴り飛ばす。もちろんオーラは使わずただ腕力のみのパンチだが。

ク「ぐはぁ！」

一「どうした？もう終わりか？」

ク「ふざけるな！ブレイズ・・・」

一「ふっ！」

ク「ぐっ！」

殴る・・・

ク「ブレイ・・・」

一「はっ！」

ク「ガフッ！」

さらに殴る・・・

ク「ブレ・・・」

一「甘い！」

ク「ぶっ！」

とりあえず殴る・・・

ク「ブ・・・」

一「しつこい」

ク「か・・・は・・・・ぁ」

とにかく殴る・・・

１０分後・・・

ク「ック・・・ヒック・・・ブ・・・ブレ・・・ブレ・・・」

とりあえずクロノの攻撃を遮って殴り続ける事１０分。クロノは半べそをかいている。

な「もう止めて一成君！あの人のライフはとっくにゼロだよ！！」

ユ「止めるんだ一成！君の方が悪役に見えるぞ！！」

俺を止めようとするなのはとユーノ。

神「（あっはっはっは！！クロノのヤツ泣いておるぞ）」

天「（無言で殴られるのは誰でも怖いですからね）」

大笑いする神奈と冷静に分析する天音。

一「さすがにやり過ぎたか？」

クロノの目が段々虚ろになってきたので、そろそろ終わらせようと再び拳を構える。

？「そろそろ止めてくれないかしら？」

すると、突如何も無い空間から小さな魔法陣とモニターのようなものが現れ、その中の女性が話しかけて来た。

一「あなたは？」

女性「私は時空管理局提督、戦艦アースラの艦長リンディ・ハラオウンです。そこにいるクロノ・ハラオウンの上司であり母親でもあります」

いよいよ出て来たか。

一「それで、何か御用ですか？俺が息子さんにした事に怒っているならまずはその息子さんのした事を咎めるのが先だと思いますが？」

リ「何があったのかは全て理解しています。こちらの非礼はお詫びしますから、改めて事情を聴かせてくれないかしら？」

ク「かあさ・・・艦長！」

リ「クロノ・・・執務官にあるまじき行動だったわね、今回は貴方に責任があるわ」

ク「うっ・・・」

？「あははは！クロノ君ボッコボコだね～♪」

モニターからリンディさんとは別の声が聞こえた。

ク「う、うるさいぞエイミィ！！」

エ「だってその顔・・・ププッ」

ク「くっ・・・」

リ「あなた達はクロノについてこちらまで来て下さい・・・クロノ、今から医療班を転送先に待機させます。此方に戻る際に治療を受けて下さい」

ク「わかりました」

リ「それにしても・・・プッ」

吹き出すリンディさん。おいおい、息子のボコボコにされた顔を見て笑うって・・・

ク「・・・艦長」

リ「ご、ごめんなさい。それじゃクロノ、お願いね」

そう言ってモニターは消えた。

ク「というわけだ、僕に付いて来てくれ」

な「え・・え～と・・・」

ユ「ここは言う通りにしようなのは」

な「ユーノ君・・・」

ユ「少し話をすればいいだけだし・・・一成がいれば大丈夫だよ」

な「あはは、そうだね」

一「よし、話もまとまったし、案内お願いします」

ク「（ビクッ！）あ・・・ああ・・・」

何故か俺を見て体を跳ねさせるクロノが転移魔法を発動させ、俺達は転移した・・・

光が収まると、ブリッジの様な場所に立っていた。おそらくここがアースラの中だろう。
クロノが治療を受けている。

な「ふわぁ～～・・・映画の中にいるみたい」

なのはが物珍しそうに辺りを見渡している。

神「（一成！生アースラじゃぞ！！）」

天「（すごい技術力ですね。さすが管理局と名乗るだけはありますね）」

神奈と天音も感心している。

ク「さて、君達は艦長室に案内するよう言われているから、僕に付いて来てくれ。バリアジャケットは解除していいよ。あと・・・君も元の姿に戻ってもいいんじゃないか？」

な「は、はい・・・え？元の姿って・・・」

ユ「そうですね」

ユーノが緑色の光に包まれ、やがて一人の少年へと姿を変えた。

な「え？・・・えぇぇぇぇぇぇぇぇ！？！？！？」

なのはが素っ頓狂な声をあげた。

一「落ち着いてくれなのは」

ユ「あれ？この姿を見せるのは初めてだっけ？」

一「俺の記憶が正しければ、君は最初から今までずっとフェレットの姿だったぞ」

ユ「そうだったっけ？」

な「ゆ、ゆゆゆゆユーノ君!?人間だったの!?そして・・・なんで一成君は驚かないの!?」

ユ「僕は元々人間だよ」

一「まぁ、変身するようなヤツは腐るほど見て来たからな」

な「そ、そんな・・・」

呆然とするなのは。

ク「・・・どうやら君達の間で見解の相違があったようだな、気持ちはわかるが艦長を任せているので今は大人しくついて来てもらえないか？」

一「ああ、すまない。なのは、行こう」

な「うん・・・」

なのはの手を引いてクロノの後に続いた・・・

ク「ここが艦長室だ・・・艦長！クロノです。入ります」

リ「入りなさい」

ドアが開く。そこには・・・

一「・・・なんだこれは？」

艦長室は畳部屋だった。それだけならまだいいのだが、何故か毛氈に盆栽、さらにはししおどしが置いてあった。

一「間違った知識を身に付けてしまった外国人の部屋のようだな・・・」

神「（これは酷いの・・・）」

天「（日本に対する冒涜じゃありませんか？）」

一「（言うな、本人が満足ならそれでいいだろ・・・）」

リ「わざわざご足労、ありがとうございます。私が艦長のリンディ・ハラオウンです」

抹茶に羊羹を用意して待っていたのは、先程の映像に映っていたのと同じ女性。

エ「私はこのアースラの通信主任兼執務官補佐をしているエイミィ・リミエッタです。よろしくね！！」

もう一人の女性が名乗る。この人は・・・さっき笑っていた人だな。

一「そう言えばこちらは名乗っていませんでしたね。俺は秋月　一成です」

な「えっと・・・高町　なのはです！」

ユ「ユーノ・スクライアです」

とりあえず自己紹介をする。

リ「スクライア？もしかして・・・」

エ「たぶんこの子が捜索願いがあった子じゃないですか？」

一「ユーノ、君捜索願いが出てたんだな」

ユ「僕も今知ったよ」

リ「さて、お互いの自己紹介も終わった事だし、早速お話を聞いてもいいかしら？」

神「（一成！）」

突然神奈が話しかけて来た。

一「（どうした？）」

天「（ユーノ君も正体をバラした事ですし、私達もそろそろ・・・）」

なるほど、確かに。

ユ「えっと・・・」

一「待ってくれユーノ」

ユ「どうしたの一成？」

一「いや・・・紹介したい人がいて」

な「紹介？」

ク「君は管理局に知り合いがいるのか？」

一「いや、俺の家族」

リ・エ「「えっ？」」

一「・・・いいぞ」

俺が言うと同時に腕輪が光だす。そして・・・

神「ふ～・・・やっと出てこれたぞ」

天「やはりこの姿が一番ですね」

神奈と天音が姿を現した。

な「え？・・・神奈さんと・・・天音さん・・・」

神「おお、なのは！驚いたかの？」

天「ふふ、いきなりごめんなさいね」

な「え・・・えぇぇぇぇぇぇぇ！？！？！？」

本日二度目のなのはの驚きの声が響いた。

ユ「ど、どこから出て来たんですか！？」

神「ん？一成の腕輪の中じゃ」

ク「ゆ、ユニゾンデバイスなのか？」

天「いえ、私達はデバイスでは無く霊剣です」

エ「霊剣？」

一「その内説明しますよ。ユーノ、話の腰を折ってすまなかったな。続けてくれ」

ユ「う、うん・・・それじゃ・・・」

ユーノがジュエルシードがばら撒かれた経緯を話す。

ユ「・・・それで、僕が回収しようと」

リ「立派だわ」

ク「だけど、同時に無謀でもある。あれほどの物を一人で回収するなど」

ユ「ええ、でも今の僕にはなのはや一成がいます。二人と一緒だったから今まで頑張れたんです」

な「ユーノ君・・・」

リ「・・・そうですか、ではこちらからも」

今度は、リンディさんから時空管理局という組織について、ロストロギアというものについての説明があった。

ロストロギアとは進化し過ぎた文明の危険な遺産。使用法によっては世界どころか次元空間さえ滅ぼしかねない危険な技術であるらしい。そういった危険物の封印と保管をするのが管理局の仕事の一つだそうだ。

ジュエルシードはそんなロストロギアの一つで『次元干渉型のエネルギー結晶体』で、複数発動させることで次元空間に影響を及ぼす『次元震』と呼ばれるものを引き起し、最悪の場合、幾つもの並行世界を壊滅させるほどの災害『次元断層』の切欠になる、と。

一「・・・世界の崩壊か・・・」

改めて聞くと凄まじい規模だな・・・

ユ「そんな・・・僕はそんなこと知らなかった・・・」

ユーノの顔が真っ青になる。

リ「それで・・・なぜあなた達がジュエルシードを集めるのに協力するようになったのか教えてもらえるかしら？」

一「なら次は俺から・・・」

なのはとユーノが接触したことによって、成り行きのような形でジュエルシードを回収することになった事。

俺となのはとユーノの三人でジュエルシードを回収していた事。

その後、自分達とは別にジュエルシードを集めるフェイトが現れた事。

なのはとフェイトが勝負して勝った方がジュエルシードを手にするようになった事。

先ほどの出来事はジュエルシードを封印し、勝負する前にクロノが

乱入してきたから仕方なく戦った事。

俺は今までの経緯を説明した。

エ「クロノ君・・・」

ク「な、なんだ？」

エ「君・・・空気読もうよ。確かに止めるのも大切だけど、あのタイミングは無かったと思うな～」

ク「う・・しかし・・僕はやるべき事をやっただけで・・・」

エ「まぁ仕方ないか。君、昔からそうだったもんね」

ク「・・・・」

エ「あれ？怒っちゃった？も～～冗談だよ～～♪」

神「なるほど、クロノは昔からＫＹじゃったんじゃな」

天「まぁ、あのＫＹっぷりは昨日今日で出来たものじゃないでしょうしね」

どんどん落ち込んでいくクロノ。

一「その・・・気にするな・・・」

ク「ああ・・・ありがとう・・・」

出会いはアレだったが、彼とは仲良くやれそうだった。

リ「コホン・・・そろそろいいかしら？」

リンディさんがワザとらしく咳をする。

リ「これより、ロストロギア『ジュエルシード』の回収については時空管理局が全権を持ちます」

ク「キミ達は今回のことは忘れて、それぞれの世界に戻って元通りの生活に戻ると良い」

な「でも、それは！！」

ク「次元干渉に関わる事件なんだ。民間人が出る話じゃない」

なのはが反論するが、クロノは聞く耳を持たない。

リ「まあ、急に言われても気持ちの整理も出来ないでしょう？　一度戻って、ゆっくり三人で話し合うといいわ。その上で、改めてお

話ししましょう」

そう言って事情聴取を終わらせようとするリンディさん。

一「・・・待って下さい」

だが、このまま終わらせるわけにはいかなかった・・・

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

リンディＳＩＤＥ

一「・・・待って下さい」

突然の声に目を向けると、先ほどまでとはうって変わって、不信感たっぷりの目で私を見つめている一成君の姿があった。

一「なんで『ゆっくり話し合う』必要があるんですか？」

さらに目つきが鋭くなり、圧倒的な威圧感が私にのしかかる。

一「先ほどクロノは『民間人が出る話じゃない』と言いましたよね？」

ク「あ、ああ・・・」

戸惑いながらクロノが頷く。

一「では、なぜ『ゆっくり話し合った』後、『改めて話す』必要があるんですか？」

な「か、一成君？」

ユ「どうしたんだ？」

なのはさんとユーノ君も彼の態度に驚いている。

一「『民間人が出る話じゃない』のでしたら、俺達の気持ちの整理など必要無いでしょう？」

リ「一成君、私は・・・」

一「質問に答えてください」

私の言葉を切り捨てる一成君。おそらく、先ほどの言葉の真意に気

が付いている。あの目にウソは通じていない。

一「答えられないですか？・・・なら俺が代わりに答えます・・・俺達を使い潰したいんでしょう？」

ク「なっ！？何を言っているんだ！？」

クロノが彼に反論しようとしたが、彼に無言で黙らされた。

一「クロノ・・・何故君は一人でやって来たんだ？」

ク「それは・・・緊急事態だったから」

一「なら、増援が来なかった理由は？」

ク「・・・他の局員は別の任務等があって・・・」

一「次元震を引き起こすかもしれない物よりも優先する事があるのか？あれが危険な物だと言ったのは君達だぞ？」

ク「・・・・」

一「おそらく・・・この艦は圧倒的に人手が足りていない・・・そうでしょう？」

一成君の言う通り、私達には人手が足りない。

一「危機感を煽るような事実を聞かせた上で時間をこちらに与える。そうすれば考える事は今回の件になる。世界が崩壊するなんて言われたんですからね。そんなことを言われて、大人しく元の生活に戻れますか？無理です。そもそも俺達は危機感が足りていなかったとはいえ、ジュエルシードを放置するのは危険だと判断して今までやってきました。今さら知らん顔出来ません。もしかしたら自分にも何か出来るんじゃないのか？大抵の人間はそう考えるんじゃ無いですか？」

私と一成君、神奈さん、天音さん以外の全員がはっとなる。

一「例えばなのはだったらこう思うと思いますよ。家族や友達が危険な目に遭いそうな時、自分にはそれをなんとかする力がある、魔法の力がある・・・と」

な「・・・うん、私はみんなのためにジュエルシードを集めるって決めたから」

なのはさんが答える。

一「なら後は簡単です。もう一度話す機会が与えられたんですから、その時に協力させてくれと自ら申し込めばいい・・・それが狙いでしょう？」

リ「・・・・」

一「タダで手に入れられる協力者、それになのはの魔力はかなりのものだそうですね。さぞかしいい捨て駒になりそうだ・・・」

な「捨て・・駒・・・」

ユ「そんな・・・」

怯えた様子で一成君にくっつくなのはさん。その目には恐怖が込められていた。ユーノ君も彼女を守るように立っている。

ク「か、母さん!!　何か言い返してください!!　このままでは我々管理局が誤解されてしまいます!!」

エ「そうですよ!私達にそんなつもりは無い事を説明してください!!」

クロノとエイミィが声を荒げるが、私には言い返す事ができなかった。

ク「ま、まさか・・・」

エ「ウソ・・・」

二人が崩れ落ちた。この子は一体・・・恐らくクロノより年下だろうけど、この考え、洞察力、威圧感、どれをとっても異常だ。一体どういった育ち方をすればこんな子に育つのだろうか？

一「違いますか？もしそうなら俺達が納得するような理由を教えてください。そうでないならこれで失礼します・・・」

そう言って部屋を出て行こうとする一成君達。

リ「待って！！！」

思わず引き止める私に、一成君の冷たい視線が突き刺さる。私は誠心誠意頭を下げた。

リ「・・・白状します。一成君が言ったように、そうなるように誘導したことは事実です。少なくとも私の立場からは貴方達に協力要請をする訳にはいかないから。こんな卑怯な手段を取ってごめんなさい」

ク「母さん・・・どうして？」

エ「理由を聞かせてください」

リ「一成君が言った通りよ。今の私達には人手が足りない、正直今

の戦力では不安でしょうがないの」

包み隠さず説明する。

リ「そんな時に観測された高い魔力値。しかも管理局で５％も存在しないＡＡＡランクが二つ。なのはさんとフェイトさんのことです。そして、地球に来る前に一度オーバーＳが観測された。おそらく一成君で間違いないでしょう」

一「・・・それで？」

リ「はっきり言って私は喉から手が出る程貴方達が欲しい。でも、貴方達が拒絶を示すようなら無理強いはしません。もし協力してくれていたとしても、危険があれば必ず守るつもりでした。どうかそれだけは信じてください」

もう一度頭を下げる。

リ「・・・お願いします。私達に力を貸して下さい」

長い沈黙・・・やがて

一「・・・頭を上げてください」

先ほどまでとは違い、一成君の優しい声が響いた・・・

一「協力する者同士にとって一番大切な事は何だと思いますか？」

突然一成君がそう言ってきた。

リ「それは？」

一「隠し事をしない事です。お互いが本音で語り合って初めて信頼関係が生まれるんです。信頼できない相手とは協力なんか出来ません」

リ「・・・ええ、そうね」

一「だから俺は真実を言わなかったあなたを信用する事が出来なかった。さっきは失礼な事を言って申し訳ありませんでした」

頭を下げる一成君。

リ「とんでもないわ、謝らなければいけないのは私の方よ。なのはさんもごめんなさい、怖がらせてしまって」

な「は、はい・・・」

一「リンディさん、俺は管理局は信用できない。だが、少なくともこの場にいるあなた達だけは信用します」

リ「それじゃあ・・・」

一「ええ、協力しますよ。俺はね・・・」

そう言ってなのはさんを見つめる一成君。

一「なのは・・・嫌ならこれで」

な「ううん、私も協力するよ。さっきも言ったけど・・・私に出来る事があるなら私は頑張りたい」

一「・・・そうか」

ク「一成・・・いいのか？」

エ「私達、酷い事を・・・」

一「ああ、俺は君達を信じる」

ク「わかった・・・ならば僕は全力で君を守ろう」

エ「どっちかって言うと、クロノ君が守られる立場じゃないの～？」

ク「エイミィ！！」

エ「あははっ！！」

エイミィにつられて笑うみんな。先ほどまでの重苦しい空気は払拭された。

一「あ、そうだ・・・あなた達は大丈夫でしょうけど、もし上層部等がなのはやなのはの周りの人達に手を出して無理矢理従わせようとしたら・・・」

そう言った一成君から凄まじい殺気が迸る。さらに、神奈さんは手から炎を出現させ、天音さんは空中に氷の刃を展開させていた。

一「俺達が・・・」

神「管理局を」

天「潰します♪」

リ・ク・エ「「「は・・・はい・・・」」」

私達は頷くしかなかった。

こうして私達は、一成君達と協力体制をとれる事になった・・・

第二十一話　男は拳で語り合うと言うが実際一方的にボッコボコにして終わるよね

作「クロノボッコボコ」

一「なんであんな風にしたんだ？」

作「お前がオーラ使って攻撃したらシャレにならん事になる」

神「それにしても・・・クロノを泣かすとはの」

天「彼が泣くなんて珍しいですね」

作「・・・想像してみろ、無言で殴られる恐怖を」

神「・・・うわ」

天「想像しただけで怖いですね」

作「だろ？」

一「そして、リンディさん相手に舌戦」

作「思いのほか長くなったな」

神「まあ、無事協力する事になってよかったではないか」

天「最後にきょうは・・・お願いもしましたし」

一「だな」

一「さて、贈り物報告会だが・・・」

神「今回は四名の方から頂いたぞ」

天「まずは・・・金獅子様から萩の月と、作者にオーディンを召喚する権利を頂きました」

一「・・・無理だな」

神「うむ、召喚に肉体が耐えきれずに崩壊するの」

天「宝の持ち腐れですね」

一「でもせっかく頂いたし・・・そうだ！最終回あたりでやらせてみるか」

神「おお！それならば問題は無いの」

天「この物語が終われば用無しですからね」

一「そう言う事」

神「次じゃ・・紅姐さん様から作者にブラックホールとワームホールのスキルを頂いたぞ」

一「・・・最近アイツへの贈り物が増えたな」

天「愛されているんですね」

一「・・・最近俺だけの贈り物が全く無い・・・」

神・天「「あ・・・」」

一「・・・・・・」

神「え～っと・・・作者は今リアル鬼ごっこへ参加中でおらんからの」

天「効果の確認は次回以降ですね」

一「・・・呑まれようかな・・・」

一「次は・・・清浦刹那様からモンブランを頂いたぞ」

天「美味しそうですね・・・あら？」

神「ん？どうしたのじゃ？」

天「いえ、少し失礼します」

神「どうしたんじゃ？」

一「前回の神奈と同じだな・・・贈り物もらったんじゃないのか？」

神「ま、まさか（うぐっ！鋭い！！）」

天「私だけに贈り物・・・中身は・・・！？こ、これは！なんと素晴らしい・・・メイド服！！」

着替え中

天「すごい・・・見た目の華やかさと違ってかなり動きやすい・・・正に完璧！！清浦刹那様！！Ｇ・Ｊです！！！」

天「次は・・・一成様！一成様宛に緋水様から贈り物があります！！」

一「何っ！？」

天「一成様に全ての邪気を見破る鏡を頂きました！」

一「・・・・・」

天「一成様？」

神「どうしたんじゃ？」

一「う・・えぐ・・・ひっく・・・」

神「か、一成・・・もしかして・・・本気で泣いておるのか!?」

一「やっと・・・やっと・・・俺だけの贈り物が・・・緋水様・・・あなたに一生お仕えします!」

神「一成!?何処へ行くのじゃ!?」

天「そっとしてあげましょう。ほかには・・・作者にガンダム試作2号機、神奈と私に写真を入れるバインダーと・・・ブハッ!!」

神「ひあ!?いきなり鼻血を吹き出してどうしたんじゃ!?」

天「こ・・・これを・・・」

神「写真?」

一成のシャワーを浴びている写真だった・・・

神「・・・ブハッ!!」

ドサッ!

第二十二話　最善の方法と最良の行動（前書き）

久々の更新、長めです・・・最近ペースが落ちたな・・・

第二十二話　最善の方法と最良の行動

管理局と接触して数日、アースラを拠点としつつ、俺となのはは残りのジュエルシードの探索と封印を行っていた。

現在、なのはの封印したジュエルシードは今までの物に加え、ここ数日でさらに三つ増えた。いよいよジュエルシード集めも佳境に入って来たと言える。

ク「はあぁぁぁぁぁ！！！」

一「遅い！」

バキッ！

ク「ぐぅ！！」

接近してきたクロノを殴り飛ばす・・・アースラにお世話になってから、なぜかクロノに模擬戦を申し込まれていた。しかも連日・・・

吹き飛ぶクロノを追い、眼前で拳を寸止めする。

一「・・・俺の勝ちだな」

ク「ああ、降参だ」

クロノの宣言を聞き、拳を解く・・・ちなみに、ユーノも参加していたが早々と退場して今は模擬戦場の隅で絶賛気絶中である。

な「一成君、クロノ君、お疲れ様」

そう言ってタオルを渡してくれるなのは。

一「助かるよなのは」

ク「あ、ありがとう・・・」

な「にゃはは、どういたしまして」

微笑むなのは。

ク「・・・／／」

一「どうしたクロノ？」

ク「な、何がだ？」

一「いや、顔が赤いが・・・風邪か？」

ク「い、いや！何でもない！！」

一「そうか？」

神「一成、クロノはなのはの笑顔に見惚れていただけじゃ」

天「なのはちゃんの笑顔は人を引き付けますからね」

神奈と天音が茶々を入れる。

な「にゃ？」

ク「な、何を言うんだ君達は！？」

神「照れんでもよいではないか、このムッツリ」

ク「僕はムッツリではない！！」

天「ムッツリではない？では・・・なぜチラチラと神奈の胸元を見ているのですか？」

ク「う・・・」

神「なんじゃ、お主もやっぱり好きなのか？」

そう言って着ている巫女服（どこから手に入れたんだ？）を若干はだけさせながらクロノに近づく神奈。

ク「ま、待て！近づかないでくれ！！」

神「ん～？どうしたんじゃ～？」

神奈が近付くたびにさがるクロノ。その後ろにはいつの間にか移動していた天音が待機しており。

天「・・・フッ」

クロノの耳に息を吹きかけた。

ク「うわ！？」

驚き飛び上がるクロノ。

フニュン

天「あん♪・・・大胆ですね」

その右手が天音の胸に触れた。

神「ふむ・・・ムッツリは撤回する。お主は・・・ラッキースケベじゃな」

ク「だから僕はムッツリでもラッキー・・・でもない!!!」

天「クロノ君?私に言う事は無いんですか?」

ク「あ、ああすまない。事故とは言え・・・その・・・触ってしまって・・・」

天「そうではなくて・・・さわり心地はどうでした?」

ク「なぁ!?」

天「以前知り合いの方に大きさの事について言われましてね。だったら柔らかさはどうかと思いまして」

ク「そ、それは・・・」

神「ふむ・・・クロノよ、妾のモノも触ってみるか?」

神奈がクロノとの距離を詰める。

神「ほれほれ♪」

天「どうですか♪」

クロノの顔が真っ赤になり、そして・・・

タラリ

ク「う～ん・・・・」

鼻血を出しながら気絶した。

一「はぁ・・・相変わらずだな」

神奈と天音はあのように男の子をからかうのが好きらしい。が、何故か俺には一回もしてこない。

理由を聞くと

神「あ、あんなはしたない事、一成に出来るわけないじゃろ／／」

天「恥ずかしいです・・・／／」

と言われた・・・なんで他のヤツにやるのはよくて俺だと恥ずかしいんだ？・・・よくわからんが、からかわれても困るので気にしない。

な「うう・・・やっぱりすごいな二人とも」

なのはが呟く。なぜか両手を胸に当てながら。

一「なのは・・・どうしたんだ？」

な「えっ！？あの・・・その・・・ねぇ、一成君・・・一成君もやっぱり大きい方がいい？」

一「大きい？」

何がだ？恐らくさっきの一連の流れに関係があるんだと思うんだが。

俺は先ほどの光景を思い出す・・・神奈と天音に弄られるクロノ、背の関係で抱っこされたりやられたい放題だった。

一「（ああなるほど、身長の事か）そうだな、大きい方がいいな」

な「そ、そう・・・じゃ、じゃあ・・・どれくらいの大きさがいいの？」

一「大きければ大きいほどいいな（戦闘じゃそれだけで軽いプレッシャーになるしな）」

な「そうなんだ・・・（と言う事は、やっぱり神奈さんぐらいの大きさじゃないと駄目なのかな？う～～揉んでもらうなんて頼めないし、やっぱり牛乳を飲むしか・・・）はあ・・・」

ため息をつくなのは。高い身長に憧れでもあるのだろうか？女性は身長が伸びるのがあまり好きではないと聞いた事があるが・・・違ったか？

一「ッ！？」

突如緊急事態を告げるアラートが鳴り響いた。

な「な、何！？」

一「わからない、とにかくブリッジに行こう」

ユーノとクロノを起こしてブリッジに向かった・・・

ブリッジに入りモニターを見ると、海上にいくつもの竜巻と雷が荒れ狂っている映像が映し出されていた。

リ「残り六つのジュエルシードは海に沈んでいる可能性が高かった。そして彼女達はそれらを一気に回収しようとして魔力波を送って強制発動させたようね」

ク「無謀ですね、このままでは自滅するのがオチです」

リンディさんが説明し、クロノが冷静に分析した。

モニターの中で、フェイトが必死になって竜巻と雷を避けつつジュエルシードを封印しようとしている。アルフは雷に捉えられて身動きが取れていない。

な「フェイトちゃん！アルフさん！」

そんな二人を見て、なのはが声をあげる。

な「私、今すぐ現場に！」

ク「その必要はないよ、直に彼女は力尽きる、その後で彼女とジュエルシードを保護すればいい」

な「そんな・・・」

リ「残酷かもしれないけど、私たちは常に『最善』の方法を取らないといけないの」

リンディさんの言う事は組織として正しい。最小限の犠牲で最大限の成果を得る。そこに個人の感情や意見を入れてはならない。

一「・・・また無茶をして、今度は拳骨か？」

俺はモニター内のフェイトとアルフを見る。

疲弊しながらも動き回り、何とかして封印作業を行おうとしているフェイト。雷に拘束され苦しそうな、悔しそうな表情のアルフ。

一「神奈、天音、行こう」

神「うむ」

天「もちろんです一成様」

神奈と天音が腕輪に戻り、俺は転移の準備を始めた。

ク「おい一成！何をしている！？」

一「いや、人に心配ばかりかけているあの娘に説教をしようかと・・・」

ク「なっ！？君は僕の話を聞いていなかったのか！？その必要は・・・」

一「確かに必要無いな・・・君達にとっては」

俺はクロノ達を見つめる。

一「クロノの意見は組織としては『最善』の方法だ。だが、俺と彼女は何度も言葉を交わした仲だ。そんな娘が傷ついていくのを黙って見ているのは個人としては我慢ならない」

ク「・・・・」

一「君達が組織にとっての『最善』の方法をとるのなら、俺は俺にとっての『最良』の行動をするまでだ」

さらにハイロゥを展開させる。

リ「あなたは自分が何をしようとしているのかわかってるの？」

一「すみませんリンディさん、協力すると言っておきながらこんな事をしてしまって。ですが、今回ばかりは譲れません」

リ「一成君・・・」

一「俺を止めたいのならどうぞ・・・その場合、全力で抵抗させてもらいますが」

俺の魔力が体から滲みだし、ブリッジ内を荒れ狂う。リンディさん達以外の局員達の顔が驚きに染まった。

一「そう言えばクロノ、君には力を使わず殴ってばかりだったな。どうだ？なんなら今から体感してみるか？」

クロノと視線を交わす。数秒後・・・

ク「ふぅ・・・遠慮しておくよ。まだ死にたくないしな」

一「殺すわけないだろ・・・非殺傷設定は出来ないが」

ク「駄目じゃないか！！」

ナイスツッコミ。

ク「だが・・・確かに君の言う事は人として正しいんだろうな」

リ「・・・そうね。一成君、なのはさんとユーノ君と一緒に現場に向かい、ジュエルシードの封印と彼女の保護をお願いします」

リンディさんの言葉に、さっきから俯いていたなのはが顔をあげた。

な「は、はい！！」

一「いいんですか？」

リ「ふふっ、あれだけ言っておいて今さら何を言っているの？私達だってあの娘の事は心配なのよ。ただ、組織はそれではやっていけない・・・嫌なものね」

リンディさんが悔しそうな顔をする・・・やはり、彼女達は他の管理局員とは違う。

一「すみません、命令を無視してしまって」

ク「命令ならさっき艦長がしただろ。気にする事は無いさ」

リ「そう言う事、フェイトさんの事よろしくね」

一「ええ、もちろん。行こうなのは」

な「うん！ユーノ君お願い」

ユ「任せて」

ユーノの転移魔法の準備が整ったのを確認して俺も転移を開始した・・・

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

アースラＳＩＤＥ

ク「行ったか・・・」

リ「女の子のために命令無視・・・ふふっ若いわね♪」

ク「艦長・・・今はそんな事言っている場合では・・・」

エ「びっくりした～、やっぱり一成君がオーバーＳだったんだね～」

リ「そうねエイミィ、思い出すだけで冷汗が垂れるわ」

リンディの言葉にブリッジ内の全員が頷いた。

エ「しかも、非殺傷が出来ないって言ってたよね・・・クロノ君、命拾いしたね」

ク「・・・ああ、だから彼は拳しか使わなかったんだな」

エ「あんな魔力の攻撃食らったら一発で昇天だね」

ク「・・・彼が味方でよかった」

クロノの言葉に、再びブリッジ内の全員が頷くのだった・・・

アースラＳＩＤＥ　ＯＵＴ

フェイトＳＩＤＥ

いくら何でも残ったジュエルシード六つを相手に、同時に封印しようなんて無謀だった。でも、今更泣き言なんて言ってられない。無理だからやめようと注意してくれたアルフを強引に押し切ってまで始めたことなんだ。途中で投げ出すことなんて出来ない。

今は全力でジュエルシードを封印する。それに集中しないと。

竜巻が荒れ狂い、雷が降り注ぐ中、私は何とかして封印しようと動く。なのに体力が、魔力が持たない。疲労は焦りを生み、焦りは私の集中力を乱す。

アル「フェイト後ろ！！」

アルフの声が周囲の音に掻き消されそうになりながらも届く。振り向けば背後には既に巨大な竜巻が迫っている。回避は無理だ。眼前には一際巨大な竜巻、左は雷、右は竜巻、背後は雷で囲まれている。迎撃も不可能。こんな大きい竜巻相手に今の疲弊した状態の私じゃどうにも出来ない。アルフもさっきから雷に纏わり付かれて身動き出来ない。

絶望的だった。せめて出来る抵抗といえば、全魔力を注いで防御魔法を展開すること。当然、これだけの規模の竜巻に巻き込まれたら無事では済まないのは分かっている。けど、私にはもうこれ以外打つ手が無い。

フェ「ごめんなさい・・・」

最期に出たのは謝罪の言葉。

ごめんなさいお母さん、期待を裏切ってしまって・・・

ごめんなさいアルフ、今まで無理をさせてしまって・・・

そして、最後に彼の顔を思い浮かべる。

フェ「ごめんなさい一成、また約束破っちゃったね・・・・・」

もし目の前にいたら、また怒ってくれるのかな・・・

眼前に迫った竜巻を見て、私は目を閉じた。

フェ「（もう一度・・・一成とお話ししたかったな・・・・）」

覚悟を決めたその時。

？「フレイムシャワー！！！」

もう一度会いたいと思っていた彼の声が聞こえた・・・

フェイトＳＩＤＥ　ＯＵＴ

アルフＳＩＤＥ

突如上空から大量の火弾が降り注ぎ、フェイトに向かっていた竜巻や雷を消滅させていった。

アル「な、なんだい！？」

火弾が飛んできた方向を見ると。

一「ちぇあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！」

咆哮をあげ、剣を構えながらこちらに向かって来る一成の姿が見えた。

一「いいかげんアルフを離せぇぇぇぇぇぇ！！！」

ズバッ！

あたしを拘束していた雷が、一成に斬り裂かれ消滅した。そのままフェイトの下へ向かい、抱きかかえて離脱する。

フェ「か、一成!?なんで・・・」

フェイトが顔を赤くさせながら驚きの表情を浮かべる。無理もない、一成が管理局からあたし達を逃がしたあの日から全く会えなかったし、そんな相手に突然抱きかかえられれば慌てもする。

な「フェイトちゃん!アルフさん!」

ユ「早くこっちへ!!」

なのはと・・・だれだいあの少年は?・・・の誘導に従って移動する。そこへ一成達もやって来た。

一「二人ともケガは?」

フェ「だ、大丈夫・・・」

アル「あたしも大したことは無いよ」

一「そうか、よかった・・・」

フェイトの頭をなでる一成、それだけで笑みを浮かべるフェイト。
全く・・・使い魔のあたしを差し置いてあんたってやつは・・・やっぱり大したもんだよ。

一「これで終わり・・・じゃないよな」

周りを見ると、さっき一成に消滅させられた雷や竜巻が再び姿を現していた。

少年「これは・・・ジュエルシードをなんとかしないといけないね」

少年が言う。ジュエルシードを知っているのかい？

一「ああ、ユーノの言う通りだ」

アル「え？」

ユーノってなのはの使い魔でフェレットじゃなかったのかい？フェイトも驚いてる。

一「さてと・・・」

フェイトを離し、あたし達から距離をとる一成。

ユ「一成、どうするの？」

一「アレを無力化する。なのはとフェイトは封印の準備を頼む。ユーノ、アルフ、二人は防御魔法を展開させてくれ」

フェ「う、うん」

な「一成君、防御魔法って・・・」

一「あれだけの数を相手にするのは初めてだからな・・・少し・・・本気を出す」

ブワッ！！！

な・フェ・ユ・アル「「「「ッ！？！？！？」」」」

一成の体から凄まじい魔力が溢れ出す。今までも一成が力を使うところは見て来たけど、これはレベルが違う。

一「だから、二人には俺の攻撃の余波がなのはとフェイトを襲わないように全力で頼む」

ユ「う、うん！」

アル「わ、わかったよ」

あたしは頷くしかなかった。こんな魔力を使った攻撃、余波だけでも相当なものになる。そんなものをフェイトに受けさせるわけにはいかないからね。

一「なのはとフェイトは俺がアレを黙らせたらすぐに封印してくれ」

な・フェ「は、はい！！」

一「よし、じゃあ行ってくる」

そう言ってさらに離れて行く一成。

フェ「ど、どうするんだろう？」

な「前も同じような事があったよね・・・その時は一個だったけど」

ユ「でも、今回は六個・・・つまり」

アル「まさか・・・あの時より凄まじいものぶっ放す気かい！？」

ユ「・・・多分」

ユーノの言葉に全員の顔が青くなる。思い出すのは激しい熱線と、フェイトの放つものとは比べ物にならない激しい雷と凍える冷気。

それを上回るって・・・

な「あはは、私達助かるのかな？」

なのはの問いに答えられる者はいなかった。

アル「じょ、冗談じゃないよ！！そんなもの防げるわけないじゃないかい！！！」

ユ「お、落ち着いて！！あくまで余波だから！！」

フェ「よ、余波でも相当強力だと思うけど」

ユ「や、やっぱりそうだよね・・・・もう少し離れた方がいいかな？」

アル「同感だね。フェイト、もっと距離をとるよ。なのはもついといで」

フェ「わかった」

な「は、はい」

全員で一成から離れる。

な「どれくらい離れればいいのかな？」

ユ「わからないけど・・・とにかく遠くへ行った方がいい」

フェ「一成・・・大丈夫かな？」

アル「さすがに自分の攻撃で傷つくようなドジは踏まないと思うけどね」

一成の姿がかなり小さく見える所までさがり、止まる。

な「こ、ここまでくれば大丈夫かな？」

一「（ああ、それだけ離れれば充分だ）」

一成から念話が届いた。

一「（準備はどうだ？）」

全員で確認し、あたしとユーノは防御魔法を展開した。

ユ「（一成！準備できたよ！！）」

一「（よし、いくぞ！）」

一成からの念話が途切れた途端、一成から感じる魔力がさらに強くなった・・・

アルフＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＩＮ　ＳＩＤＥ

ユ「（一成！準備出来たよ！！）」

一「（よし、いくぞ！）」

念話を切り、意識を集中する。

一「はあぁぁぁぁぁぁ！！！」

俺の体からオーラが溢れ出す。それを内から湧きあがるものと合わせ手のひらに凝縮する。

やがて、俺の手のひらに小さな光の球が現れた。それは段々大きさを増し、ソフトボールほどの大きさになった。それを両手で抑え、腰元で構える。

神「（一成！ス○ナーサ○シャインじゃ！！）」

天「（一成様！か○は○波です！！）」

一「なんだそれは？」

俺はそんな技は知らないんだが。

一「マナよ・・・オーラと変われ・・・彼の者どもを包み、究極の破壊を与えよ！！！」

俺は海面に向かって光球を放った。

一「オォォォラフォトンッッッノヴァァァァァァァァ！！！！！」

放たれた光球は途中にあった雷や竜巻、触れるもの全てを貫きつつ真っ直ぐ海面に向かう。

カッ！！！

光球が着弾すると同時に爆音が轟き、世界が光に包まれた・・・

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

なのは・フェイト・ユーノ・アルフＳＩＤＥ

ユ「き、来た！」

アル「フェイト！しっかり掴まってるんだよ！！」

フェ「う、うん！！」

ユ「なのはもね！！」

な「うん！！」

やがて凄まじい衝撃と光が四人を襲った。

な「きゃあぁぁぁぁぁぁ！！！」

ユ「ぐぅっ！なんて威力だ！！！」

フェ「アルフ！！！」

アル「大丈夫！フェイトはあたしが守ってみせる！！！」

激しい光に目をつむる四人の耳に、バリアが軋む音と風の吹き荒れる音が聞こえた。

やがて目を開けた四人の目には、先ほどまでのような竜巻や雷が存在しない穏やかな海が見えた。

一「（二人とも、封印を頼む）」

この光景を作りだした張本人から念話が届き、なのはとフェイトは封印作業に入るのだった・・・

なのは・フェイト・ユーノ・アルフＳＩＤＥ

ＩＮ　ＳＩＤＥ

封印し終えたジュエルシードを挟んだなのはとフェイトの様子を窺う。なのはの傍にはユーノ、フェイトの傍にはアルフ、それぞれが付き従っている。すぐに戦いが始まるかと思ったが、お互い疲れているようで見つめ合っているだけだった。

一「さて、今回はどうなるか」

俺がそう思った瞬間。

一「ッ！？」

突如上空から俺達に向かって巨大な紫色の雷が降り注いできた。あまりに突然な事でなのは達は固まっている。

一「まずい！オーラフォトンバリア！！」

四人の周りにバリアを展開させる。が、俺自身に展開するのが遅れ、雷が俺に直撃した。辺りが煙に包まれる。

な「一成君！？」

ユ「一成！！」

フェ「あれは・・・母さんの雷？」

アル「あ、あの女何をするんだい！！」

なのはとユーノが悲痛な声をあげ、フェイトは信じられないと言っ

た声を出し、アルフは怒りの声をあげた。

一「・・・ふう」

大した威力だった。だが、耐えられないものでも無かった。

神「（一成の打たれ強さは旅人の中でも屈指のものじゃからの）」

天「（恐らく、原作のキャラで一成様にダメージを与えられる人物はほとんどいないと思われます）」

そうだろうか？Ｓｔｓのなのはのスターライトブレイカーを食らったら終わりだと思うのだが。

な「一成君！大丈夫！？」

やがて煙が晴れ、なのは達の姿が見えた。

一「ああ、大丈夫だ」

な「よか・・・・」

なのはが俺の姿を見て固まる。なのはだけではなくユーノやフェイト、アルフまでも固まっていた。

一「どうした？」

な「そ・・・それ・・・」

一「ん？」

なのはが俺の頭を指差すので頭を触ると、ゴワゴワした感触がした。

ユ「ぷ・・・くく・・・」

フェ「か、一成・・・髪が」

アル「あはははは！！！なんだいその頭は？」

一「だからどうしたと・・・」

な「一成君・・・これ見て」

なのはが何処からか出した手鏡を見ると。

見事なアフロヘアーの少年がいた・・・

一「・・・なんじゃこりゃぁぁぁぁぁ!?!?!?」

ユ「た、多分・・プッ・・雷の・・くくく・・・所為じゃないかな」

ユーノが笑いを我慢しながら説明してくれた。

な「ゆ、ユーノ君・・・笑ったら・・・ふふっ・・・失礼だよ」

フェ「アルフも・・・プッ・・・駄目だよ・・・クスクス」

なのはとフェイトが注意するが、その二人も我慢しているのがバレバレだった。

アル「あはははは!!む、無理だよフェイト!!こんなもの、笑うなって言う方が無理・・・あはははは!!!」

アルフはさっきから爆笑していた。

神「(おお、一成!随分ソウルフルな髪形じゃの)」

天「（イメチェンですか?私としては以前の方が・・・）」

一「いや違うから」

ユ「も、もう限界だ・・・はははははは!!!」

な「わ、私も・・・あははは!!!」

フェ「ご、ゴメンね一成。でも・・・む、無理・・・あははは!!!」

やがて、なのは達も我慢できずに笑いだすのだった・・・

十分後

一「落ち着いたか?」

な「う、うん」

フェ「ご、ゴメンね一成」

ユ「さすがに笑いすぎたよね」

アル「悪かったね一成・・・でも・・・くく」

このままではラチがあかないので話を進める。

一「さて、肝心のジュエルシードなんだが」

さっきまでジュエルシードが浮かんでいた場所を見るが、そこにはジュエルシードは存在していなかった。

一「おそらく、さっきの雷を放った人物が持って行ったんだろうな」

俺がそう言うとフェイトがビクッとした。

な「どうしたのフェイトちゃん？」

フェ「・・・多分、あれは母さんがやったんだと思う」

な「え？」

プレシアさんか・・・だがおかしい、あの雷はフェイトも襲おうとしていた。今のプレシアさんがそんな事をするとは思えないが・・・

フェ「ゴメンね一成・・・母さんが」

一「いや、きっとお母さんはフェイトが心配だったんだろう。だから、あんな事をしたんだろうな」

フェ「そ、そうかな？」

一「自分の娘を心配するのは親として当然だからな」

フェ「娘・・・親・・・」

一「愛されてるなフェイト」

フェ「うん！」

嬉しそうなフェイト、疑問が残るが今はどうしようもない。

一「さて、やることも無くなったし戻るか」

な「そうだね」

一「それじゃあなフェイト」

な「またねフェイトちゃん」

フェ「うん、またね二人とも」

アル「ありがとうね一成、今回も助かったよ」

一「どういたしまして、アルフもまたな」

アル「ああ、またね一成」

ユ「なのは、転移の準備が完了したよ」

な「わかったよユーノ君」

神「（一成、こちらも準備完了じゃ）」

一「わかった」

俺となのははアースラに戻った・・・

第二十二話　最善の方法と最良の行動（後書き）

作「アフロ一成」

一「アフロ○狩みたいに言うな」

作「わかる人いるかな」

一「さあな」

神「妾達、後半出番少なかったの」

天「ええ、ですが前半でクロノ君を弄れたので良しとしましょう」

一「ところで、俺が使ったオーラフォトンノヴァ・・・原作と違ってなかったか？原作じゃ詠唱後に敵の中心で爆発する技じゃ」

作「いや、やっぱり男なら手から何か出したいじゃん」

一「知るか、お前の願望だろ」

作「ス○ナーサ○シャイン、知ってる人いるかな」

一「真・ゲッ○―はチートロボだ」

神「あのロボは合体からして非常識じゃぞ」

天「質量保存の法則を完璧に無視していますからね」

作「俺は真・ゲッ○ーロボ対ネオゲッ○ーロボが好きだ」

一「知ったのはス○ロボに出たからだろ？」

作「ああ、例のごとく原作は見ていない」

一「またかよ・・・」

一「さて、恒例の贈り物報告会だ」

神「うむ、まずは朝凪　夜風様から・・・」

キーーーーン！！！

一「なんだ！？」

天「何者かが転移してきます！！」

一「なんだって！？」

カッ！

？「・・・・どうも」

一「あ、あなたは？」

？「初めまして、櫻です」

天「櫻様？」

神「確か・・・朝凪　夜風様の所のキャラにそのような名の者が」

櫻「はい、その櫻です」

一「もしかして・・・ヨフアルやクロワッサンを作ってくれたのは」

櫻「私です」

一「やっぱり！その節はどうも・・・・でも、なんでここへ？」

櫻「前回の後書きであなたが泣いていたので慰めに来ました」

一「うっ・・・恥ずかしい」

櫻「と言うわけで、あなたが今食べたいものを言って下さい。それを私が作ります」

一「え？いいんですか？」

櫻「ええ、それが目的ですし」

一「じゃ、じゃあ・・・アップルパイで」

櫻「わかりました、少々お待ち下さい」

一「・・・行ってしまった」

天「驚きましたね」

一「ああ、まさか来てくれるとは」

神「それにしても、何故アップルパイなんじゃ？」

一「わからんが、何故か櫻さんの作ったアップルパイが食べたいと思った」

天「直感ですか？」

一「ああ」

櫻「出来ました」

一「早ッ！」

天「さ、さすがですね」

神「パイってこんな短時間で出来るものなのかの？」

櫻「気にしないでください。気にしたら負けです」

神「う、うむ・・・」

櫻「では、一成さんどうぞ」

一「ああ、頂きます」

パクッ

櫻「どうですか？」

一「美味い！」

櫻「よかった、元気出ましたか？」

一「ええ、すいませんご心配をおかけしてしまって」

櫻「いえ、気にしないでください。では私はこれで」

一「ありがとうございました。朝凪　夜風様にも俺が礼を言っていたと伝えてください」

櫻「わかりました、それでは」

シュンッ！

一「・・・帰ったか」

天「他の作者様のキャラに心配をかけるなんて」

一「・・・反省してます」

天「なら、よいのです」

天「次は・・・緋水様から一成様にマナを貯める事ができる腕輪、私と神奈にマナ水晶でできたペンダント・・・作者にメタルギア全部です」

一「これはいい物をもらったな」

神「しかし・・・どんどん物騒な物が作者に贈られるの」

天「その内どこかへ戦争でも吹っかけそうですね」

一「あのヘタレにそんな度胸は無い。精々観賞用になるのがオチだ」

神「それはそれでもったいないの・・・盗むか？」

一「いや、せっかく作者へと送って下さった物を盗むのは送って下さった方に失礼だ」

神「そうか、つまらんの」

神「最後に・・・清浦　刹那様からアップルパイ、それと・・・一成宛に大量の贈り物が来ておるぞ」

一「え？」

天「どれどれ・・・えーっと、ガンバスターのデバイスにデータドレイン能力、執事服にタキシードを頂きました」

神「櫻と言い・・・余程一成が泣いたのが驚きじゃったのじゃな」

天「ええ、まさかここまで影響するとは」

一「えーっと・・・清浦　刹那様、たくさんの贈り物ありがとうございます。それと同時にここまで気を使わせてしまってすいませんでした」

神「ガンバスターか、これもチートじゃの」

天「武装もそうですが、真の恐ろしさはむしろ防御面ですよね」

一「ああ、宇宙怪獣の特攻に内部爆発、さらには圧縮された木星の重力にも耐えるしな」

神「二万の宇宙怪獣からのビームを弾き返すバスターシールドも脅威じゃぞ」

天「いえ、やはり一番はイナーシャルキャンセラーでしょう。あらゆる物理攻撃を無効化して、限定的とはいえブラックホールからも身を守れるのですから」

一「スピードも凄いぞ。亜光速戦闘が出来るし、最大速度は光速を超えて単機ワープも可能になる速度だからな」

神「まさに奇跡を起こすマシンじゃな」

一「だが、周りへの被害も凄まじくなるな」

天「使えるのでしょうか？」

一「・・・わからん」

神「ならばデータドレインはどうじゃ？これなら大丈夫じゃろ」

一「・ｈａｃｋか・・・スケィスの３ｒｄフォームはカッコいいな」

神「妾はメイガスがお気に入りじゃ」

天「私はイニスですかね」

一「相手の無力化に使えそうだな」

神「悦楽相手に使ってみてはどうじゃ？」

一「あんな下種野郎吸収したくない」

神「そ、そうか・・・」

天「一成様、執事服とタキシードはどうしますか？」

一「着た事無いから似合うかどうかわからないが、せっかくだから着てみるか」

天「一成様、写真取らせて頂いてもよろしいでしょうか？」

神「妾もいいかの？」

一「？別にかまわんが」

天「ありがとうございます！」

神「そうと決まれば早速着替えてもらうぞ！！」

一「わ、わかった・・・」

天「あちらに更衣室があります！さあ行きましょう！！」

一「なんでそんなに興奮してるんだ？お、おい！腕を引っ張るな！」

第二十三話　人を弄ぶヤツはいつか自分が弄ばれる（前書き）

ネタが無い！

第二十三話　人を弄ぶヤツはいつか自分が弄ばれる

一「戻りました」

アースラに転移し、ブリッジに戻る。

リ「三人ともお疲れ様」

リンディさんが労ってくれた。

な「私達、何もしてなかったよね」

ユ「うん」

苦笑いを浮かべるなのはとユーノ。

ク「あの状況じゃ仕方ないさ」

な「クロノ君」

ク「それにしても・・・君には驚かされてばかりだな一成」

リ「そうね、暴走状態のジュエルシードを、それも六つ一片に鎮圧

するほどの魔法を使えるなんて・・・正直恐怖を感じたわ」

一「そうですか？あれでも威力は抑えたつもりですが」

リ・ク「「え・・・？」」

一「なのは達を巻き込む可能性がありましたから、そうですね・・・最大威力の五分の一くらいでしょうか」

リ「・・・本当にあなたが敵に回らなくて良かったわ・・・」

リンディさんが心底安堵した表情を浮かべた。

エ「さっきの雷を放った人物がわかったよ～」

モニターに向かっていたエイミィが振り向いて言った。

エ「名前はプレシア・テスタロッサ。私達と同じミッドチルダ出身の魔導師。登録データとさっきの魔力波動も一致してるから、たぶん本人で間違いないと思うよ。昔、中央技術開発局の第三局長を勤めていて、当時彼女が研究してた次元航行エネルギー駆動炉実験の際、違法なことをしたらしくて失敗。結果的に中規模次元震を起こしたとか何とかで中央を追われて地方に左遷。それにしてもずいぶん揉めたみたいだよ？　事故は結果に過ぎず、実験材料には違法性は無かったとか。辺境に異動後も数年間技術開発に携わってみたいだけど、しばらくして行方不明になってる」

リ「そこから先の情報は？」

エ「どうやら抹消されているようでさっぱりです」

リ「そう・・・」

フェイトの言った通り、やっぱりあれはプレシアさんの仕業だったのか。

な「フェイトちゃんのお母さん・・・」

一「どうしたなのは？」

な「え、うん・・・なんであんな事したのかなって・・・」

一「フェイトを守るためじゃないのか・・・憶測だけど」

な「でも・・・あの雷、フェイトちゃんも狙っていたような気がするの」

一「・・・気付いてたのか」

な「うん、それが少し気になって」

鋭いな。

一「次に会った時にフェイトに聞いてみよう」

な「そうだね」

リ「エイミィ、引き続き調査をお願い。どんな些細な事でも構わないわ」

エ「了解です艦長」

もしかしたら、その事故も霊剣の仕業かもしれないな。

何故かそんな予感がした・・・

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

アルフＳＩＤＥ

アル「フェイト・・・しっかりしておくれよぉ・・・」

あたしは必死になって、ボロボロになったフェイトに回復魔法をかける。ある程度の傷は癒えたが完全とは言えなかった。

一成達と別れた後、フェイトがあの女に聞きたい事があると言ったので会いに来たのだが・・・

プ「どういうつもりフェイト？」

フェ「か、母さん？」

あの女はフェイトをあの部屋に連れて行った。フェイトを傷付けるためのあの部屋に。

プ「どうしてすぐにジュエルシードを手に入れなかったの？あの娘と仲良さげに話なんかして」

フェ「そ、それは・・・」

プ「あの娘とあの少年・・・秋月は敵なのよ？あなたは私を裏切るつもり？」

フェ「ち、違うよ！私は！」

プ「黙りなさい！！」

パシン！！

フェ「あう！！」

あの女がフェイトに鞭を振るった。悲鳴をあげるフェイト。

アル「フェイト！！」

思わず駆け寄る、が・・・

フェ「来ないでアルフ！！」

アル「ふぇ、フェイト？」

フェ「私が悪いの。母さんの言う通り、あの二人とは敵同士なのに、あんな風に話していた私が・・・」

悲しげにそう言うフェイト。

アル「フェイト、なのはが・・・一成が・・・本当に敵だと思っているのかい！？」

フェ「・・・・」

アル「フェイトの為に、ジュエルシードを渡してくれたなのはが！命を救ってくれた一成が！敵だって言うのかい！？」

フェ「私は・・・」

パシン！

フェ「うあ！！」

プ「これ以上話す事は無いわ、あなたには罰を受けてもらうわよ」

再び鞭を振るうプレシア。

アル「止めろぉぉぉぉぉ！！！」

一発殴ってやらなければ気が済まない。そう思い跳びかかったが

アル「な！？しまった！！」

バインドで拘束されてしまった。その間もフェイトは痛めつけられていた。

プ「躾がなっていないわね、フェイト、使い魔の責任は主がとるのよ」

パシン！！

フェ「う、うぅ・・・」

項垂れるフェイト、どうやら気絶してしまったようだった。

プ「ふん・・・」

あの女はフェイトを放置してそのまま地下の研究施設へと向かって行った。なんとかバインドを解除して急いでフェイトの下へ走った。

アル「ゴメンね、フェイト。あたし下手糞だから、一成みたいに癒してあげる事ができないよ・・・」

流れる涙を拭いつつ謝るが、フェイトは応えなかった。その体を抱きしめると共に、怒りが込み上げて来た。

≪聞いてよアルフ！母さんがね・・・褒めてくれたんだ♪≫

前にフェイトが嬉しそうに話してくれたのを思い出す。あんなに慕っている娘をあんな目に遭わせるなんて。

アル「あの女・・・よくも！！」

絶対に許さない。フェイトにしてきた事の十倍、いや、百倍の苦痛を味あわせてやりたい。

フェイトの体を優しく横たえた後、あたしは飛び出した。目指すはあの女がいる地下室。積年の恨み、今こそ晴らしてやる！！

アル「プレシアァァァァァ！！！！」

扉をぶち破り、その勢いのままムカつく面に向かって殴りかかった。

ギィィィン！！

アル「はぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

展開された障壁が拳を止めた。構わず力を込め、それを破る。

アル「あんたは母親で、あの子はあんたの娘だろ!!あんなに頑張ってるのに・・・あんなに一生懸命なのに・・・なんであんな酷いことが出来るんだよ!!!」

力の限り声をあげる。が、あの女は無言であたしを見下すだけだった。

アル「娘に対して、なんで鞭打ちなんて出来んのさ!?　ジュエルシードなんて危険なもん集めさせて、一体何するつもりだい!!!・・・あんたなんかより、何時もフェイトを心配してくれる一成の方がよっぽど家族らしいよ!!!」

そうだ、一成はいつだってフェイトを助けてくれた。守ってくれた。こんな場所でわけのわからない研究をしているこの女と違って。

プ「・・・言いたい事はそれだけかしら?」

アル「なっ!?ぐふっ!!」

腹に手を添えられたかと思えば吹き飛ばされていた。それが魔力弾による攻撃だと気付いたのは壁に叩きつけられた後だった。

アル「はあっ・・はあっ・・・」

気を抜けば意識を失いそうな中、あの女への怒りで意識を繋ぎとめる。

プ「所詮あの子の使い魔、余分な感情が多過ぎる。あの子、使い魔作るの下手ね」

アル「・・・なんだと」

それはあたしにとってこれ以上無い侮辱だった。使い魔にとって主を馬鹿にされる、これを超える侮辱など存在するのだろうか。

アル「あの子は・・・フェイトは!!あんたに笑って欲しくて、優しいあんたに戻って欲しくて頑張ってんだろうがぁぁぁぁぁ!!!」

せめて、せめて一撃入れなければ死んでも死にきれない!そう思いあの女に近づく。

プ「・・・これ以上遊んでいる暇は無いわ・・・消えなさい」

あの女があたしに止めを刺そうとデバイスを振ろうとした瞬間

プ「うっ・・・ゴホッ！」

突然咳込み、デバイスを落とした。

アル「血？」

見れば、あの女の手のひらに血が付いていた。吐血したのかい？

プ「はあっ・・・はあっ・・・アルフ・・・」

あたしの名を呼ぶ女、その声は先ほどまでと違い、優しい声だった。

プ「逃げ・・・なさい・・・私が・・・私でいる内に・・・」

なんだい・・・何を言っているんだいこの女は？

プ「早く・・・もう・・・意識が・・・・」

アル「くっ！」

なんだか知らないが、せっかくのチャンスを逃すほどあたしは馬鹿

じゃない。あたしは転移魔法を発動させた。

アル「一成・・・あんただけが・・・」

フェイトを救えるだろうただ一人の男のいるあの街へ転移した。フェイト・・・もう少しの辛抱だよ・・・

転移の光に包まれて、あたしは意識を失った。

アルフＳＩＤＥ　ＯＵＴ

悦楽ＳＩＤＥ

プ「はあっ・・・はあっ・・・」

悦「チッ・・・せっかくあの使い魔の死に様が拝めると思ったのによ。肝心なところで意識を取り戻しやがって」

プ「ゴフッ・・・」

さらに血を吐き出すプレシア。元々事故の所為で体を病に蝕まれていたのに、無茶な研究が祟った所為で、もはや通常の処置じゃ助かりはしない。

悦「・・・と言っても、あの事故を引き起こしたのは俺だけどな」

あの時のプレシアの娘を失った絶望と悲しみの表情は今思い出してもゾクゾクする。

悦「くくっ、娘の仇に操られていると知ったらこの女はどういう顔をするだろうか。全く、親子共々楽しませてくれるぜ」

さて、次の仕込みに入りますか。

悦「プレシア・・・くたばるのは早いぜ、あんたにはまだ動いてもらわなきゃいけねえからな」

プ「・・・・・」

あのガキをぶち殺すために・・・な。

悦楽ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

フェイトＳＩＤＥ

プ「フェイト、起きなさい」

フェ「・・・はい、母さん」

母さんの声で眼が覚める。気を失ってからどのくらいの時間が経ったのか分からなかったが、そんなことは母さんの前では関係無かった。私は立ち上がって母さんを真正面に見据える。

プ「フェイトが手に入れてきたジュエルシード計九つ・・・これじゃ足りないの。最低でもあと五つ、いえ、出来ればそれ以上、急いで手に入れてきて・・・母さんの為に」

フェ「はい」

母さんの言葉に頷く。

プ「それと・・・一成について話を聞かせて欲しいの」

フェ「一成のことを?」

なんでいきなり一成の名前が出てくるんだろう?

プ「あなたが以前話していたのを思い出してね。それに、さっきフ

ェイトを助けてくれたのも彼でしょう?娘を救ってくれた母親としてはぜひともお礼が言いたいのよ」

フェ「ここに来てもらえばいいんですか?」

プ「ええ、頼めるかしら」

フェ「でも・・・一成は管理局に・・・」

管理局から私達を逃がしてくれてからさっきまで会えなかった事から、恐らく一成は管理局に協力している。私の敵ではないと言ってくれたけど、ついて来てくれるとは思えない。

プ「大丈夫よ。その子、とても良い子なんでしょ? きっと時空管理局に騙されているだけよ。ちゃんと説得すれば、フェイトの言うことを聞いてくれるわ」

フェ「え?騙されている?」

プ「そうよフェイト。彼程の実力者なら、管理局はあの手この手を使って支配下に置きたいと考えるのは当然ね。このままでは彼は管理局に無理難題を押し付けられて潰れてしまうかもしれないわ」

フェ「そ、そんな!?」

一成がそんな目に遭うなんて耐えられない。元はと言えば私の所為なのに・・・

フェ「母さん！どうしよう！？」

プ「安心してフェイト。その子もフェイトのことを大切に思ってくれてるみたいだから、貴方がしっかり説明すれば時空管理局と手を切る筈よ。その後に此処に連れてくればいいんだから」

フェ「私を大切に？」

そうなのかな？もしそうだとしたら・・・嬉しいな。

プ「出来るわね、フェイト？　彼を必ず此処に連れてくるのよ。その前に、彼について聞かせて欲しいんだけど」

フェ「はい！！」

私は一成について知っている事を全て話した。

武器は双剣で、ジュエルシードを一撃で鎮圧できる威力がある事。

剣技だけでなく、強力な魔法も使える事。

背中の大きな翼で空を飛べる事。

ミッドでもベルカでもないオーラという力を使う事。

どんなに傷ついても一瞬で治せる回復魔法も使え、何度も治してもらった事。

初めて会った時に命を助けてもらった事、話を聞いてもらった事、頭をなでてくれた事。

母さんに一成の事を知ってもらうのが嬉しくて、私は時間の経つのも忘れてたくさん話した・・・

フェイトＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＩＮ　ＳＩＤＥ

一「久しぶりに帰れるのか」

リンディさんから新しく情報が入るまで、帰宅してもよいと言う許可をもらったので、早速帰る事にした。なのははとても嬉しそうにしていた。

一「当然か、数日ぶりに家族と会えるんだからな」

神「（じゃが、説教は確定じゃな）」

天「（そこはリンディさんに任せましょう）」

帰る時、リンディさんからなのはの家族への説明を引き受けてくれると言う提案があったのでなのはは飛びついた。まぁ・・・あの家族の説教はかなり凄そうだからな。

一「・・・っと、着いたな」

考えごとをしながら歩いていると、いつの間にか家の前に着いていた。

神「（やはり、家はいいのぉ）」

天「（そうですね、数日しか離れていなかったのに、随分懐かしい感じがします）」

一「そうだな、それじゃあ」

一・神・天「「ただいま」」

久しぶりに寝た布団は気持ちよかった・・・

次の日、久しぶりに登校して、久しぶりにアリサとすずかに会った。

す「あ、一成君」

ア「久しぶりね、ここ数日何やってたのよ？」

一「ん・・・まぁ、色々な」

ア「何よそれ」

な「すずかちゃん！アリサちゃん！久しぶり！！」

す「うん、久しぶりだねなのはちゃん」

ア「あんたも何やってたのよ？」

な「う～ん・・・秘密！」

ア「ちょっと！あんたもなの！？」

す「あ、あはは・・・」

一「・・・やっぱり、あの三人は一緒じゃないとな」

久しぶりに会えて笑顔を浮かべる三人を見ながら俺は席についた・・・

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

なのはＳＩＤＥ

昨日アースラから海鳴市に帰ってきて、久しぶりに家族の顔を見ることが出来ました。お父さん、お母さん、お兄ちゃん、お姉ちゃん。皆が居て、なんだかとっても安心しました。そして今日、アリサちゃんとすずかちゃんの顔を見て、自分でも思った以上に嬉しくなってしまいました。やっぱり、皆と離れ離れは少し寂しいです。アースラに居る間は一成君やユーノ君が居てくれたからあまりそんな風には思わなかったけど、皆とまた会えて、改めて感じます。

私が帰るべき場所は此処なんだ、って。

今はお昼休みの時間。一成君と私とアリサちゃんとすずかちゃんの四人で屋上に上がり、お弁当を広げています。

ア「ねぇねぇ！！　今日は家に遊びに来ない？　久しぶりに」

行きたいけど、いつ呼びだされるかわからないし・・・どうしよう？

な「（どうしよう、一成君？）」

一「（それくらい、いいだろ。なんなら、俺だけ呼びだしに応じればいいだけだしな）」

思わず、念話で一成君に聞いてみたらそんな風に答えてくれました。

な「うん、じゃあお邪魔するね」

ア「よかった、すずか、あんたも来るでしょ？」

す「うん、もちろんだよ」

ア「一成、あんたまだ私の家に来た事無かったわよね？ちょうどいい機会だから来なさい。これは決定事項よ」

一「・・・俺の意思は？」

ア「な、なによ・・・すずかやなのはの家には行ったのに、私の家は嫌なの？」

落ち込むアリサちゃん

一「そんなわけないだろ。誘ってくれてありがとう」

ア「そ、そう・・・ま、まぁ当然よね！私が誘ったんだから！！」

と思ったら、嬉しそうに笑うアリサちゃん。もちろん私も嬉しいです。

す「ふふっ・・・」

ア「な、なによすずか？」

す「アリサちゃん、とっても嬉しそう」

ア「なぁ！？」

す「久しぶりだからたくさんお話したいもんね。もちろん私も一成君とお話したいけど」

ア「ううう・・・／／」

アリサちゃんの顔は真っ赤です。やっぱり、二人といると楽しいな。

ア「そ、それよりこれ見てよ」

携帯電話を取り出し、見せてくれるアリサちゃん。

ア「昨日犬拾ったのよ。凄く大きくてオレンジの毛色で、額に宝石みたいなのが埋まってる子。なんか怪我してたから獣医に診せて治療させたんだけど・・・」

画面に移っている犬を見て私は驚きました。

な「（一成君、これって・・・）」

一「（ああ、間違いない・・・アルフだ）」

ア「一成？」

す「どうしたの？」

真剣な表情で画面を見る一成君に、二人が声をかけます。しばらくして

一「・・・いや、なんでもないよ。知り合いの飼い犬に似ていてつい・・・」

そう言って一成君は携帯電話をアリサちゃんに返しました。

なのはＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＩＮ　ＳＩＤＥ

放課後、早速アリサの家に向かった。執事さんに通されて大きな門を潜る。すずかの家も大きかったが、アリサの家も負けていなかっ

た。

ア「こっちよ、ついて来て」

アリサについて歩いていると、やがて一つの檻の前までやって来た。

そこには、傷つき、包帯だらけのアルフの姿があった。

ア「どう、一成？知り合いの犬に似てるって言ってたけど・・・」

アルフが反応し、立ち上がろうとしたが、力無く倒れる。

アル「（か、一成・・・）」

一「（無理するな）」

念話で話しかけて来たので、大人しくさせる。

一「ああ、どうやら当たりのようだ。飼い主はわかってるから大丈夫だよ」

ア「そっか、よかった～」

俺の言葉に安堵するアリサ。

一「俺はもう少し様子を見てるから、アリサ達は遊んでていいぞ」

ア「え?でも・・・」

な「・・・行こう、アリサちゃん、すずかちゃん」

ア「ちょ、ちょっとなのは!?」

す「なのはちゃん?」

一「（すまない、なのは）」

な「（ううん、アルフさんの事お願いね）」

去っていくなのはに念話でお礼を言い、アルフと向き合う。

アル「（一成・・・フェイトを・・・）」

一「（待ってくれ、まずは君の傷を治す）」

アルフにアースプライヤーをかける。光が収まった後、包帯を解く。

一「（どうだ？）」

アル「（すごい・・・痛みどころか傷跡まで残らないなんて・・・）」

一「（よかった・・・それで、何があったんだ？）」

アルフの頭をなでながら尋ねる。

アル「（お願いだよ一成・・・あの子を・・・フェイトを助けてやっておくれよ・・・）」

アルフが弱々しい声で説明してくれた。プレシアさんのフェイトへの仕打ち、プレシアさんに戦いを挑んだ事、やられる寸前に血を吐き、逃がしてくれた事。

一「（・・・そうか）」

アル「（殺されるかと思ったら急に逃げろなんて・・・もうわけがわからないよ・・・）」

ギュッ

その痛々しい様子に思わず抱きしめてしまった。

アル「（か、一成！？）」

一「（・・・つらかったな。もう大丈夫、必ずフェイトは助けてみせる）」

アル「（・・・・・）」

一「（だから安心して今は休んでくれ）」

アル「（あ・・・ああ・・・・）」

一「（我慢するな。君は今・・・泣いていいんだ）」

アル「（ううう・・うあぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！）」

・・・覚悟しろよ。貴様は絶対に許さん。

未だに姿を見せない霊剣に俺は激しい怒りを覚え、必ず報いを受けさせる事を誓った・・・

第二十三話　人を弄ぶヤツはいつか自分が弄ばれる（後書き）

作「さて、いよいよ無印編も佳境だな」

一「盛り上がって来たな」

神「相変わらず、悦楽のヤツは腹立たしいの」

天「悪役としてはしっかり仕事してますね」

作「ところで、話は変わるんだが」

一「どうした？」

作「先日、某ゲームショップに行ったら、なのはのデモムービーやってな」

神「ふむ」

作「そこで、闇の書との決戦の場面が流れてたんだけど」

天「それがどうしたのですか？」

作「なのはのアニメはそこで初めて見たんだが・・・三人の砲撃の大きさに驚愕した」

一「・・・ああ～」

作「なんだよあの大きさと太さは！？あんなもん食らったらそりゃ

消滅するしかないだろ！！」

一「トリプルブレイカーだな」

神「あの場面でテンション上がらない者はおらんじゃろ」

天「ＢＲＡＶＥ　ＰＨＯＮＩＸ・・・いい曲ですよね」

一「ああやって全員で巨大な敵に立ち向かうのって燃えるよな」

作「ああ、正直鳥肌立った」

神「ちなみに、この小説ではどうするんじゃ」

作「ん？そうだな・・・そもそも、続けるかわからないし」

天「そうなんですか？」

作「正直無印編でも結構難しかったのに、Ａ、ＳとかＳｔｓとか書けそうにないぞ」

一「という事は・・・無印編で終わりか？」

作「続編が望まれたら書きたいけど・・・可能性は低いな」

一「出た、ネガティブ発言」

神「情けないの、それでも妾達の産みの親か？」

天「これが作者ですから・・・」

作「・・・・ズーン」

一「作者のネガティブ発言が出た事だし、贈り物報告会だな」

天「そうですね。まずは・・・」

？「チーーッス」

神「む？誰じゃ？」

？「俺か？俺は仁ってんだ。よろしく」

天「バージル様の所の仁様ですね」

神「また、他の作者の方のキャラか」

一「こうやって尋ねて来てくれるのは嬉しいな。それで、どうしたんですか？」

仁「贈り物届けに来たぞ」

一「わざわざ届けに来てくれるなんて・・・」

天「ありがとうございます仁様」

仁「んじゃコレ、バイタルスターＬ２０個とデビルスターＬ２０個」

神「ＤＭＣの体力と魔力回復のアイテムじゃな」

一「合わせて４０個ももらってしまった」

天「いいのでしょうか？」

仁「気にすんな、じゃ～な～」

一「バージル様によろしく言っておいてください」

仁「おう」

一「こうやってると、こんな駄文でも評価してくれる方がいるんだってわかるな」

神「うむ、ありがたい事じゃ」

天「ご期待にそえるよう、これからも頑張らないといけませんね」

一「次は・・・清浦　刹那様から真ドラゴンを頂いたぞ」

神「真（チェ○ジ）ゲッ○―ロボの主役ロボじゃな」

天「凄い大きさですよね、真ゲッ○―が米粒みたいです」

一「敵の大きさがおかしいからな、あれくらいでちょうどいいんじ

ゃないか？」

神「作者はス○ロボでしか見た事無いと言っておったな」

一「主題歌はカッコいい曲だからな。聞いた事無い人は聞いてみたらいいんじゃないか？」

神「次は・・・朝凪　夜風様から白い変じ・・・恋人を頂いたぞ」

一「ああ、あれは美味いな」

天「作者も、修学旅行で北海道に行った時に周りの方達が買うのを見て、自分は買わないとか捻くれた事を言っていましたが、結局買ったんですよね」

一「アイツの考えはわからん」

神「それより、早く食べようぞ」

一「・・・だな」

一「最後に・・・緋水様から作者宛てに人懐っこいリオレウスとアトミックシールド。俺に直死の眼鏡を頂いたぞ」

神「ん？妾達には無いのか？」

天「・・・神奈、ちょっと。一成様、少し失礼します」

神「な、なんじゃ？」

一「天音？」

神「どうしたんじゃいきなり？」

天「私達にもありましたよ・・・これです」

神「なになに・・・『好きな人を落とせる１００の方法』・・・なんじゃこの本は？」

天「今回も一成様の写真を頂きましたが、それは二人分、ですがこの本は一冊しかありません」

神「ほほう・・・つまり」

天「ええ・・・どちらか一人がこの本を手にする事ができます」

神「ならばやることは一つじゃ」

天「もちろんです」

神・天「「いざ・・・勝負！！」」

バゴォォォォン！！！

一「・・・何やってるんだ二人とも？あっ・・・作者がリオレウスに踏まれた」

第二十四話　自分の主張だけじゃなく相手の言い分も聞こう（前書き）

長い・・・分けたいけど、どこで区切ればいいかわからない。ついでにフェイトがヤンデレっぽい。

第二十四話　自分の主張だけじゃなく相手の言い分も聞こう

アルフを引き取り、アースラに合流するために、俺となのは、ユーノは公園にやって来た。

そこで、俺達以外の魔力反応を感じ、意識を向ける。

神「（一成）」

天「（この魔力は・・・）」

一「（ああ・・・）いるんだろ・・・フェイト?」

フェ「・・・さすがだね一成」

やがて、バリアジャケットを纏ったフェイトがゆっくりと現れた。

アル「フェイト、もうやめよう?あの女の言いなりになってたら、フェイトは何時まで経っても不幸なままだよ!!だから、フェイト!!」

アルフが涙を流しながら訴える。

フェ「それでも・・・私は母さんの娘だから・・・」

しかし、悲しげな表情を浮かべながらフェイトは拒絶した。

フェ「一成・・・私と一緒に来て？」

一「何だって？」

俺に手を差し伸べるフェイト。

フェ「母さんが言ってたんだ、一成は時空管理局に騙されているって。このままじゃ、いつか一成が潰れちゃうって、そんなの私は嫌・・・」

一「・・・・」

なるほど、直接俺を誘い出して始末するつもりか、しかも、プレシアさんとフェイトを利用して・・・

一「（どこまで俺を腹立たせれば気が済むんだ？）」

フェ「だから、お願い一成。いつも助けてもらってたから、今度は私が一成を助けてあげたいの」

一「フェイト・・・」

どうする？いっその事、このまま乗り込んでケリをつけるか？しかし・・・

悩む俺の前になのはが進み出た。

一「なのは？」

な「一成君・・・ここは私に任せてくれないかな？」

そう言うなのはの目には決意が宿っていた。

一「いいのか？」

な「うん、一成君だけに全て任せるわけにもいかないからね。私だって一成君が大切だもん」

微笑むなのは。そうだな、今の俺は一人で戦っているわけじゃない。なのはにユーノ、頼もしい二人の仲間がいるんだった。

一「わかった・・・頼む」

な「任せて！」

なのはなら必ず何とかしてくれる、そう確信して俺は下がった。

フェ「・・・なのは・・・どういうつもり？」

俺に話した時と違い、とても冷たい声でなのはにデバイスを向けるフェイト。対するなのはは一瞬悲しげな顔をしたが、すぐに表情を戻した。

な「フェイトちゃん、少しお話ししない？」

フェ「話す事なんて無い。私は一成に用があるの、邪魔しないで」

な「そうはいかないよ。フェイトちゃんが思っている様に、私だって一成君と一緒にいたいもん。フェイトちゃんは一成君を連れて行こうとしてるんでしょ？そんなの許せないもん」

フェイトにレイジングハートを向けながら不敵に答えるなのは。

神「（慕われておるの一成）」

天「（自分を巡って美少女二人が争うなんて、限られた人間しか体験出来ませんよ？）」

一「（二人とも・・・少し黙ろうな）」

な「全てのきっかけはジュエルシード、だから賭けよう？お互いの全てのジュエルシードと・・・一成君を賭けて！！」

一「・・・おい」

人を賭けの対象物にしないでくれ。

フェ「やっぱりなのはとは戦うしかないんだね。わかった、一成と一緒にいるためにその勝負受ける。そして・・・勝つ！！」

あれ？フェイトもやる気満々っぽいぞ？というか、ジュエルシードはどうでもいいのか？

な「決着をつけよう？フェイトちゃん」

フェ「一成もジュエルシードも、私がもらう・・・」

なのはが空に飛び上がり、フェイトがそれについて行く。そして・・・

な・フェ「「行くよ!!」」

決着をつけるため、二人の少女が再びぶつかり合った・・・

ユ「いいの?なのはに任せて?」

一「ああ、彼女ならきっとやってくれる」

ユーノと共に、空中でぶつかり合う二人に目を向ける。

ユ「なのは・・・勝てるかな?」

一「以前は負けたが、それから今まで特訓していたからな。俺も模擬戦したり、接近する相手の対処法を教えたり、色々協力したしな」

ユ「わからないって事?」

一「ああ」

しかし、この勝負、正直どちらが勝ってもあまり関係は無い。

なのはが勝てば、恐らくプレシアさんが介入してくるだろう。そうなれば、その時に場所を探知して向かえばいい。

逆にフェイトが勝てば、俺が座標をアースラに伝えればいいだけだ。

・・・俺は既に場所を知っているからな。

どちらにしろ、全員でプレシアさんの所に向かうその時が、今回の事件の真の黒幕とケリをつける時だ。

一「（プレシアさん・・・必ず助けてみせます）」

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

フェイトＳＩＤＥ

始めの方は互角だったのに、今では完全に防戦一方。桜色の魔力弾が大量に迫り、私の接近を許さない。

フェ「くっ！！」

一瞬でも動きを止めると砲撃が飛んでくる。遠距離からの攻撃はあっさりと防がれ、避けられ、潰される。スピードでは明らかに私が上。今までその速度を生かして接近戦を挑んできたけど、今のなのはは私のスピードに反応し、私の鎌を防ぎ切る。

フェ「（どうして？少し前までは私のスピードに全くついて来れていなかったのに！？）」

そこで気付く。

フェ「（一成だ！一成に教えてもらったんだ！！）」

私より速くて、なのはに教えられる人間なんて彼以外に思い付かない。それに、一成は接近戦も私よりかなり強い。そんな一成と模擬戦すれば嫌でも私みたいな戦い方をする相手に慣れるはずだ。

フェ「（・・・ずるい）」

なのはは一成の幼馴染・・・

フェ「（ずるい）」

いつも一成と一緒・・・

フェ「（ずるい！！）」

困った時はいつも一成が助けてくれる・・・

フェ「ずるいよ！！なのは！！！」

フェイトＳＩＤＥ　ＯＵＴ

なのはＳＩＤＥ

フェ「ずるいよ！！なのは！！！」

突然大声をあげ、動きを止めたフェイトちゃんに驚いて私も動きを止めてしまいました。

な「ふぇ、フェイトちゃん？」

フェ「なのははずるいよ！いつも一成に守ってもらって！ずっといっしょにいて！私のスピードに追い付いてるのも一成のおかげなんでしょ！？」

な「そ、それは・・・」

フェ「私だって・・・私だって！一成に守ってもらいたい！ずっといっしょにいたい！邪魔しないでよ！！」

な「・・・・」

フェイトちゃんの話を聞いていると、段々ムカムカしてきました。

な「・・・そう言うフェイトちゃんだって、一成君に色々やってもらってるじゃない」

フェ「え？」

な「一成君に傷を治してもらったり、暴走体から助けてもらったり・・・頭をなでてもらったり・・・」

フェ「そ、それは・・・」

な「最近、私なでてもらってないんだよ？私の事ずるいって言うけど・・・私から見たらフェイトちゃんの方がずるいよ！！」

フェイトちゃんに砲撃を放つ。それを避け接近してくるフェイトちゃん。

フェ「なのはは一成と動物園に行ったりしたんでしょ！？私だって一成とお出かけしたいよ！！」

な「それは子どもの頃の話だよ！」

フェ「そんなの関係無いよ！！」

振り上げられた鎌をプロテクションで防ぐ。

フェ「う～～～～！！！」

な「むう～～～～～！！！」

しばらく押しあいをしていたけど、急にフェイトちゃんが離れて行ったので、慌てて追いかけようとした瞬間。

な「え！？」

両手が金色のバインドで拘束されてしまいました。

なのはＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＩＮＳＩＤＥ

フェイトが自らの想いをなのはにぶつける。が、途中からなんだか話の方向が変わっているような・・・

神「（痴話喧嘩じゃのお♪）」

天「（一成様は八方美人過ぎます！）」

一「（・・・そんなにへし折って欲しいのか？）」

神・天「「（ごめんなさい！！）」」

アル「あれは・・・ライトニングバインド！！まずい、フェイトは本気だ！！」

隣に居たアルフが焦ったような声を出す。だが、俺とユーノは黙って成り行きを見守っていた。

アル「このままじゃなのはがやられちまうよ！！それを黙って見ているだけなんてどういうつもりだい！？」

ユ「・・・僕だって、今すぐなのはを助けたい。でも・・・この勝負はなのはが自分から望んで提案したんだ。それを止める権利は僕にも一成にも無いよ・・・」

ユーノが握り込んだ拳を振るわせながらしっかりと答えた。

一「ユーノの言う通りだ。それに・・・なのははまだ負けたわけじゃない」

本当の敗北は心が折れた時だ、なのはの目はまだ死んでいない。

アル「でも、フェイトのアレは本当に不味いんだよ！！」

フェ「アルカス・クルタス・エイギアス」

フェイトが詠唱を始めた。

フェ「疾風なりし天神、今導きのもと撃ちかかれ」

フェイトの周囲にプラズマ球が発生していく。

フェ「バルエル・ザルエル・ブラウゼル」

なのははまだバインドに拘束されて動けない。

フェ「フォトンランサー・ファランクスシフト、撃ち砕け、ファイア！！！」

フェイトの叫びと共に、大量の金の雨がなのはに降り注いだ。

ユ「なのは！！」

連続的な小規模の爆発音。着弾によって煙が発生するが、それでもやまないフェイトの攻撃。

そして響き続ける爆発音。それは間違いなくなのはに直撃している音だった。

やがて、煙が晴れる。そこには・・・

な「いった～～～い！！・・・さすがだねフェイトちゃん。やられちゃうかと思ったよ」

フェ「なっ！？」

バリアジャケットはボロボロだが、ダメージをあまり受けていない様子のなのはの姿があった。

ユ「よ、よかった～」

アル「フェイトのアレを食らって無事なヤツは初めて見たよ・・・」

一「だから言っただろ？」

いつの間にかなのはを拘束していたバインドが解けていた。

な「撃ち終わるとバインドも解けちゃうみたいだね・・・今度はこっちの番だよ！ディバイィィィンッッバスタァァァァァ！！！」

レイジングハートから発射される桜色の光。フェイトはそれに、まだ撃っていなかったランサーを集めて一つの魔力弾として投げつけるが、大した抵抗もせず、一瞬で呑み込まれていった。避ける事も出来ないそれを、咄嗟に防御魔法を展開させて防ぐ。

フェ「くうぅぅぅぅ！！！」

なんとか最後まで耐え切ったフェイト。そんな彼女の四肢を桜色のバインドが拘束し、身体をその場に固定する。

フェ「バ、バインド！？」

何とか抜け出そうともがくフェイトだが、先程の攻撃と防御で体力と魔力を使い果たしたのか、抜け出す事が出来ない。

そんなフェイトに構わず、なのはは巨大な魔方陣を展開させ、着々と自分の攻撃の準備を進める。

な「受けてみて、ディバインバスターのバリエーション。これが私の・・・全力全開！！！」

周囲の魔力をかき集め、収束していくなのは。レイジングハートのデバイスコアが今まで見てきた中で一番強く輝いていた。

一「・・・まさか」

とうとうアレをぶっ放す気か？

これから先、放たれた相手を恐怖の底に叩き落とすあの技を。

神「（おお！いよいよあの技を間近で見られるのか！！）」

天「（今のなのはちゃんでどれくらいの威力が出せるのでしょうか？）」

そして、それは放たれた・・・

な「スターライトォォォ・・・ブレイカァァァァァ！！！」

雄叫びと共に撃ち出されたのはディバインバスターとは比べ物にならない魔力の激流。それが全く無抵抗な状態のフェイトを襲った。

眩しい桜色の魔力光。それが全てを貫き、粉砕し、蹂躙する。桜色の魔力は衰えることを知らず、フェイトを呑み込んでいった。

やがて砲撃が収まり、バインドから解放されたフェイトが、糸の切れた人形の様に落下していく。それを追い、地面に激突する瞬間になのはが抱えあげた。

一「（・・・あんな感じ）」

天「（・・・ええ、理解しました・・・嫌と言うほど）」

神「（非殺傷であれほどとは・・・もし解除したら・・・）」

ゾクッ！！

一「（駄目だ、考えただけでも恐ろしい）」

天「（一成様、くれぐれもなのはちゃんを怒らせないようにお願いします）」

一「（もちろんだ、俺にはまだやるべき事がある。死ぬわけにはいかない）」

最後に恐ろしい物を見たが、これで決着はついた。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

フェイトＳＩＤＥ

？「・・・ちゃん、・・・トちゃん」

・・・何？

？「フェイトちゃん」

この声は・・・なのは？

な「起きてよ、フェイトちゃん！」

フェ「う・・・うぅ・・・」

な「よかった～、やっと目を覚ましてくれたよ～」

朦朧とする意識で何とか眼を開けると、私の顔を心配そうに覗くなのはがいた。

フェ「（そっか・・・私は負けたんだ）」

バインドに拘束されて、砲撃魔法を受けたところから記憶が無い。
私は負けた。でも、不思議と悔しくなかった。私は全力でなのはにぶつかって、なのはも全力で私にぶつかってくれた。

負けたにも関わらず、私の気分はスッキリしていた。

な「フェイトちゃん・・・一成君はね、ずっとフェイトちゃんの事を心配してたんだよ？」

フェ「え？」

な「ほら、この前フェイトちゃんがジュエルシードを六個一片に封印しようとした時があったよね？」

フェ「う、うん」

な「その時ね、管理局の人達はフェイトちゃんが力尽きた後にジュエルシードと一緒に捕まえようとしたの。それが組織として当然だって」

フェ「・・・そうなんだ」

当然だ、私は以前管理局から逃げたんだから。

な「でもね、一成君だけは違ったんだよ」

フェ「一成が？」

な「うん、フェイトちゃんが傷つくのを黙って見ているのは我慢できないって、命令を無視してまでフェイトちゃんを助けに行ったんだよ」

フェ「一成が・・・私のために・・・」

な「そう、なのにフェイトちゃんはそんなこと気付きもしないでさっき一成君に勝手なこと言ってたでしょ？だからちょっと頭に来たんだ」

フェ「・・・・」

考えてみれば、一成は初めて会った時からそうだった。見ず知らずの私を助けてくれた。再会してからも、私のことを気遣ってくれた。温泉の時も、私の話を聞いてくれた。ジュエルシードが暴走した時、私のことを心配して叱ってくれた。時空管理局が出てきた時、守ってくれた。この前だって、死ぬかもしれないと思った時、助けてくれた。

な「どっちが大切かなんて関係ないよ。一成君は私とフェイトちゃんの事を同じくらい大切に思ってくれているよ」

なのはの言葉に抑えていたものが溢れ出す。こんな大事な事に気付く事が出来なかった自分の不甲斐なさに涙が止まらなかった。

フェ「な、なのは・・・か、一成は許してくれるかな?・・・ま、まだ私の事・・・大切に思ってくれてるかな?」

な「大丈夫だよフェイトちゃん」

なのはが私の頭を優しくなでてくれた。

な「一成君は怒っていないよ。だから許すも許さないも無いし、それに・・・ほら」

なのはが指差す方に目を向けると、心配そうにこちらを見ている一成と目が合った。

な「大切に思っていない相手にあんな心配そうな顔はしないよ。ね？だから大丈夫」

フェ「うん・・・うん・・・」

一成が私を大切に思ってくれている。それが嬉しくて、嬉しくて、涙が止まらなかった。

な「もう・・・泣かないでよフェイトちゃん」

フェ「だって・・・嬉しくて・・・」

一「なのは！フェイト！」

な「あ、一成君」

フェ「か、一成・・・」

一「フェイト・・・」

一成が翼をはばたかせてやって来た。

なのははああ言ってくれたけど・・・こうして向き合うとやっぱり不安だ。もし・・・嫌われてしまったら・・・

一「・・・無事でよかった」

ギュッ！

フェ「えっ？」

な「あ～～～～！！！」

いきなり一成が私を抱きしめてきた。暖かい・・・じゃなくて！！

フェ「か、かかかか一成！？何を！？」

一「よかった・・・本当によかった」

フェ「一成？」

一「アルフから全て聞いた。また心配かけて、ストレスで胃に穴が空きそうだぞ」

フェ「あっ・・・」

一成、本当に心配してくれたの？貴方の気持ちを裏切ってしまった私を・・・？

フェ「ご、ごめんなさい・・・」

一「もういいよ」

フェ「ごめんなさい・・・ごめんなさい、ごめんなさい・・・・」

それから私が落ち着くまで、一成は私の頭をなでてくれた。

フェ「ありがとう、一成。ゴメンね服汚しちゃって・・・」

一「いや、フェイトのためならこれくらいどうでもいいさ」

フェ「あ、ありがとう／／」

一「それじゃあ、なのはにジュエルシードを」

フェ「うん、なのは、デバイスを・・・」

な「・・・・」

私と一成を恨めしげに見つめるなのは。な、なんだろう?

な「フェイトちゃん・・・私言ったよね?最近一成君になでてもらってないって?」

フェ「う、うん」

な「それなのに・・・また一成君になでてもらって、さらに抱きしめてもらうってどういう事!?しかも私の目の前で!!もう一度戦う?私は構わないよ!!」

一「な、なのは?落ち着いて・・・」

な「一成君は黙ってて!!」

一「はいっ!!」

フェ「怖い!怖いよ一成!!」

思わず一成にしがみつく。

な「・・・ディバインバスター、スタンバイ」

一「ちょっ!おま・・・!」

なのはが砲撃を放とうとした瞬間。

一「ッ！」

な「きゃっ！」

フェ「一成！？」

いきなりなのはと私を抱き寄せる一成。その直後、私がよく知っている強大な魔力を感じた。

フェ「か、母さん！？」

ギィィィィィィィィン！！！

巨大な白い障壁が私達の周りに展開し、突如現れた紫色の雷を防ぐ。障壁と雷がぶつかり合う光で視界が真っ白になった。やがて、光が収まり、障壁が解除された。

一「・・・なるほど、そう言う事か」

フェ「え？」

一「今のはただの目くらましだ」

な「な、何がどうなったの？」

一「フェイト、ジュエルシードは？」

フェ「え？あ、あれ？」

見れば、さっきバルディッシュから出した筈のジュエルシードが無くなっていた。

フェ「一成・・・これは、母さんが？」

一「ああ、前回と同じだな。あの雷はあくまでフェイク、本当の目的はジュエルシードだったってわけだ」

フェ「そ、そんな・・・」

どうして母さんが？なのはに負けてしまったから？それとも、一成を連れて行けなかったから？

一「とりあえずアースラに戻ろう。フェイトとアルフもついて来てくれ」

一成に手を引かれ、私は管理局の艦に乗り込んだ・・・

第二十四話　自分の主張だけじゃなく相手の言い分も聞こう（後書き）

作「無印編も残すところあとわずかだな」

神「最近、妾の出番が少ない気がするのじゃが」

天「私もです」

作「ああ、二人には時の庭園で充分活躍してもらうつもりだから」

神「ふむ、そうなのか？」

作「だからもう少し我慢してくれ」

天「そう言う事でしたら」

一「今回はなのはとフェイトがメインの話だったな」

神「見事な修羅場じゃったな」

天「これから先の展開が楽しみですね」

一「・・・勘弁してくれ」

作「そして・・・いよいよ登場したスターライトブレイカー」

一「あれは・・・ヤバいぞ」

天「フェイトちゃん、よく無事でしたね」

神「バインドで固定してから直撃させるとは・・・」

作「ちなみに、フェイトの詠唱文句は他の作品のＳＳにあったやつを参考にした。原作見てないから正確にはわからん」

一「さて、贈り物報告会行くか」

ヒラッ

一「ん？なんだ？」

天「お手紙ですね。差出人は・・・神楽様と書いてあります」

神「朝凪　夜風様のところのキャラじゃな」

一「神奈と天音宛ての様だな。内容は・・・『喧嘩が多いと説教に行くぞ』・・・喧嘩してたのか二人とも？」

神・天「「ギクッ！！」」

一「以前、喧嘩はご法度だって言ったよな？・・・・少し、ＯＳＥＫＫＹＯＵしようか？」

神「い、いやいや！妾達は仲良しじゃぞ！！のう天音！？」

天「も、もちろんですよ！喧嘩なんてもってのほかです！！」

一「・・・なんだ、俺はてっきり・・・」

神・天「「ほっ・・・」」

一「にしても・・・誰が送ってくれたんだろう？」

一「次は・・・緋水様から、ウィンダム核装備と神奈と天音に封筒、『悦楽を殺す千の方法』と緋水様のところの貴哉さんお手製のケーキを頂いたぞ」

神「封筒か（恐らく写真じゃな）」

天「封筒ですね（中身は・・・写真でしょうね）」

一「とうとう、核までやって来たか」

神「当然のごとく使えんぞ」

天「観賞用ですね」

一「『悦楽を殺す千の方法』か、参考にさせてもらおう」

天「それでは、私はケーキに合うお茶を入れます」

神「ならば、妾は味見役を・・・」

天「必要ありません」

神「むう・・・」

天「次は・・・清浦　刹那様から茶碗蒸しを頂きました」

一「美味そうだな」

天「清浦　刹那様ご自身、ご自宅で作れた事が嬉しくてこちらに送って下さったそうです」

神「料理が出来る男はモテるぞ」

一「そうなのか？」

天「一成様にはあまり関係ない話ですね」

一「？」

神「最後に・・・金獅子様より、烏龍茶とプーアル茶、一成に名刀千鳥、作者宛てにポテトチップスを頂いたぞ」

作「いえ～い！ポテチ大好き～♪」

一「俺にもくれ」

作「だが断る！！」

ザアァァァァァ！！！

一「・・・全部食いやがった」

作「・・・ぶべらっ！？」

ドサッ！！

神「た、倒れてしもうたぞ！？」

天「何か毒物でも混入していたのでしょうか？」

一「おいおい、せっかくの贈り物に対して失礼な事を言うなよ」

神「ちなみに何味じゃったんじゃ？」

一「え～～っと・・・・うわぁ・・・」

天「ど、どうしたんですか」

一「・・・キュウリ味・・・だと？」

神・天「「・・・うわぁ・・・」」

第二十五話　自分は自分他人は他人（前書き）

今まで裏方だった神奈と天音がついに活躍します。無双です。すぐに終わりますけど・・・

第二十五話　自分は自分他人は他人

俺達がアースラに乗艦してからしばらくして、先ほどの攻撃からプレシアさんの居場所を掴んだ時空管理局がその本拠地である時の庭園に向けて武装局員を送った。

フェ「一成！母さんは・・・母さんはどうなっちゃうの！？」

一「大丈夫、少し話を聞くだけだよ。もし、プレシアさんに危害を加えようとしたら・・・俺が潰すから」

ク「聞こえたぞ！！何を物騒な事を言っているんだ君は！？」

一「冗談だよ・・・半分は」

ク「おいっ！！」

神「やれやれ、冗談の通じぬヤツじゃな」

天「そんな事では女の子にモテませんよ？」

ク「余計なお世話だ！！」

フェ「か、一成・・・この人達は？」

フェイトが二人を見て俺に尋ねる。

一「そう言えばフェイトは初対面だったよな？俺の家族だよ」

神「初めましてじゃなフェイト。妾は神奈じゃ」

天「私は天音と申します。よろしくお願いしますねフェイトちゃん」

フェ「こ、こちらこそ」

神「・・・そりゃ！」

フェ「はぷっ！？」

いきなり神奈がフェイトを抱きしめた。

フェ「な、何ですか！？」

神「う～～ん・・・これが生のフェイトの感触か。堪らんの～～～♪」

フェ「ムグッ！？」

フェイトを自分の胸に押しつける神奈。

一「神奈、フェイトが苦しそうにしてるぞ」

神「む？おお、スマンスマン」

フェ「・・・ぷはぁ！！」

解放され、慌てて息を吸うフェイト。

天「やり過ぎですよ神奈。ごめんなさいねフェイトちゃん。前からフェイトちゃんに会いたがっていたみたいだから、思わずあんな事をしてしまったようです。悪気はありませんので許してあげて下さいね？」

フェ「は、はい・・・」

そう言いつつ、俺の背に隠れるフェイト。

神「フェイト～～～」

天「自業自得です」

神「うう・・・」

挨拶を終え、再びモニターに目を向ける。そこには武装局員達がプレシアさんと対峙している映像が映し出されていた。

フェ「母さん！」

一「・・・・・」

プレシアさんはパッと見、以前会った時と同じ様子だった。ただ一つ違う事は、その目から光が失われ、まるで人形の様な表情をしているところだろうか。

武装局員「プレシア・テスタロッサ、貴方を時空管理局法違反の疑いと公務執行妨害で逮捕します。武装を解除し、ご同行を願います」

武装局員達がプレシアさんを取り囲みつつ、周囲を注意深く探索している。やがて、一人の局員が隠し扉を発見し、それをこじ開けた。

その瞬間、プレシアさんが人形の様な表情から一変、怒りの形相を浮かべる。

プ「私のアリシアに近寄らないでっ！！！」

その場に居た局員全員が、プレシアさんの放った紫電により薙ぎ倒された。

リ「いけない！！彼らをすぐに戻して！！！」

リンディさんが焦った声で指示を出す。一人残らず倒れ伏した局員達それぞれを魔方陣が包み、姿を消す。恐らくアースラに戻って来たのだろう。

そして、局員が開いた扉の中が映し出される。

リ「生体ポッド？」

ポッドの中で、フェイトにそっくりな少女が死んだように眠っていた。愛おしそうにポッドの表面をなでるプレシアさん。

プ「時間がもう無い・・・今手元にあるジュエルシードだけでアルハザードに辿り着けるかはわからないけど・・・」

サーチャー越しに俺達を睨むプレシアさん。

プ「でも、もういいわ。終わりにする。この子を亡くしてからの暗鬱な時間を・・・この子の身代りの人形に記憶を与えて娘扱いするのも・・・聞いていて？貴方のことよ、フェイト」

フェ「えっ・・・？」

プ「フェイト・・・貴方はやっぱりアリシアの偽者よ。折角あげたアリシアの記憶もダメだった」

な「ど、どう言う事なの！？」

なのはが疑問の声をあげる。

エ「以前、事故の事を話したよね？その時、プレシア・テスタロッサは実の娘アリシア・テスタロッサを亡くしているの。そして、彼女が最後に行っていた研究は使い魔とは異なる・・・使い魔を超える人造生命の生成。死者蘇生の秘術。その時の研究につけられた開発コードが・・・」

プ「そう、フェイト。プロジェクトF・A・T・Eよ。よく調べたわね。私の目的は、アリシアの蘇生、ただそれだけよ」

エイミィの言葉にプレシアさんが続く。

プ「だけどダメね・・・ちっとも上手くいかなかった。所詮作り物は作り物。アリシアの代わりにはならない。ただの偽物、贋作でしかないわ」

そう言ってフェイトに向ける視線には、明らかに嫌悪感と憎しみしか無かった。

フェ「嘘だ！そんなの嘘だよ！！だって、母さんは私の事・・・娘だって言ってくれた！！そうでしょ母さん！？」

プ「娘ですって・・・馬鹿な事言わないで。あなたはただの作り物・・・」

な「・・・やめて」

なのはが呟く。

プ「理解出来ないのなら何度だって言ってあげる。フェイト・・・貴方はアリシアを蘇らせるまでの間、私が慰みに使うだけのお人形」

な「やめてよ！！」

プ「だけどもう要らないわ、何処へなりとも消えなさい！！！」

その言葉に、フェイトの瞳に力が無くなる。糸が切れた、それこそ人形のように倒れるところを慌てて抱き締める。

一「（真実を知っているとは言え・・・さすがに今のは・・・）」

プレシアさんを見つめる・・・そこで俺は見た。

ツゥ・・・・

一「（ッ！？）」

光を失ったプレシアさんの瞳から・・・一筋の涙が零れ落ちるのを・・・

ギリッ！！！

歯軋りの音がやけにクリアに聞こえる。怒りで頭がどうにかなってしまいそうだ。

神「一成！！」

天「お気持ちはわかりますが抑えて下さい！！」

無意識の内にオーラを撒き散らしていたようだ。二人の声に冷静さを取り戻す。

プ「そんな人形よりも一成・・・私はあなたに興味があるわ」

一「・・・・」

プ「あなたが使う『オーラ』と言う力、ミッドチルダでもベルカでもない術式で、その二つと比べると遥かに優秀で素晴らしい能力らしいじゃない」

誘っているのか・・・上等だ。

一「いいだろう・・・味わわせてやるよ、俺の力を・・・」

プレシアさんにではなく、霊剣に対して告げる。

一「覚悟しておけ・・・必ず貴様は消滅させてやる」

プ「出来るものならね」

ザアァァァァァ！

モニターが砂嵐に変わる。どうやらサーチャーが潰されたようだ。

エ「庭園内に魔力反応を複数確認、いずれもＡクラス、数は・・・な、何これ！？百、百五十、どんどん増えていきます！！」

エイミィが叫ぶ。

オペレーターA「ジュエルシードの発動を確認！！」

オペレーターB「しょ、小規模ながら次元震の発生を確認しました。徐々にですが規模が大きくなっています！！」

他のオペレーター達も報告をあげる。

リ「まさか、本当にアルハザードへ行くつもり！？」

ク「馬鹿な、あんなものは御伽噺だ！！」

リンディさんとクロノが何か言っている。

一「どうしますか？」

リ「私が現場に出て、次元震を何とかして抑えるからその間にクロノは突入してプレシア・テスタロッサを捕縛、及びジュエルシードを確保しなさい」

ク「了解！！」

リ「それから、一成君達にはクロノのサポートをお願いします！！

武装局員が壊滅した所為で人手も戦力も足りてないの！！」

一「もちろんです」

なのはとユーノを見ると、既にバリアジャケットを展開させ、準備を整えていた。

一「なのは、ユーノ。聞いた通りだ。クロノのサポートを頼む」

な「任せて！」

ユ「一成はどうするの？」

一「俺にはやるべき事がある」

アルフに抱きかかえられながらブリッジを後にするフェイトを見る。

な「うん、わかったよ一成君。フェイトちゃんの事お願いね？」

ユ「一成が来るまで僕がなのはを守ってみせるよ」

一「頼むぞユーノ。神奈、天音。二人も先に行っておいてくれ」

天「承知しました一成様」

神「一成が来る頃には終わっておるかもしれんぞ？」

そう言って笑う神奈。

一「ああ、頼む」

ブリッジを後にする四人。残ったリンディさんが改めて俺に向き直る。

リ「私も現場に向かうわ」

一「リンディさん、お気をつけて」

リ「・・・ごめんなさいね。あなた達みたいな子どもを頼って、最後までこんなことに付き合わせて」

心から申し訳なさそうに謝るリンディさん。きっと今までも自分の立場と良心を天秤にかけながら戦っていたんだろう。

一「リンディさんの選択は組織として正しいです。それよりも、あなたがそう思ってくれているとわかっただけでも嬉しいです」

リ「・・・ありがとう、一成君」

一「それに・・・今回の事件、俺がケリをつけないといけませんか

ら・・・」

リ「え？」

一「何でもありません。とりあえず、俺はフェイトの所に行ってきます」

そう言い残し、俺はフェイトが運ばれていったであろう場所に向かった。

ＳＩＤＥＯＵＴ

フェイトＳＩＤＥ

フェ「（私は・・・人形）」

そう言われた。何処へなりとも消えろ、とも言われた。

私は、母さんに必要とされていなかった。

アリシアのコピー。偽者。贋作。

ずっと母さんが好きで、昔みたいに優しい母さんに戻って欲しくて頑張ってきたけど・・・

記憶の中に居る母さんでさえ、母さん自身に否定されてしまった。

母さんに生み出されて、でも必要とされてなくて、持ってる記憶も偽物で。

フェ「（何のために生まれてきたんだろう？）」

私はただ、昔みたいに母さんに笑って欲しかっただけなのに・・・

連れて来られた部屋にあったベッドに横たわりながら、天井を見つめていると、誰かが私の傍に立つのを感じた。

一「アルフがいないな・・・先に時の庭園に向かったのか？」

一成だった。そのまま、私のいるベッドに腰掛ける。

私はぼんやりとその様子を見つめる。

一「・・・俺はアリシアちゃんの事は知らない。だが、フェイトの事は知っている」

フェ「・・・・・」

一「君は確かにアリシアちゃんのクローンとして生まれたのかもしれない。でも君はアリシアちゃんじゃない。フェイトと言う一人の女の子だ」

一成の言葉の一つ一つが胸に染み込んでくる。

一「誰かのクローンだからって、自分で自分を否定しては駄目だ。それではいくら俺達がフェイトの事を認めても意味がない」

一成は、こんな私を認めてくれるの?私は一成にとって・・・人間なの?

一「フェイト、君は自分自身をどう思っているんだ?」

フェ「私は・・・」

一「自分で考えて、自分で決めるんだ。他人の言う事など気にするな。誰も強制なんかしない。もしそんなヤツが現れたら・・・俺が許さない」

フェ「誰も私を・・・強制しない？」

一「君がどう在りたいかを決めた時、初めて『フェイト・テスタロッサ』が始まるはずだ」

私がどう在りたいか・・・

一「始めようフェイト？これからを・・・俺やなのは達と一緒に・・・」

絶望の心に光が宿る。

フェ「（そうだ、私は生きている）」

でも、私自身は始まってすらいなかったんだ。だったら始めよう。

一成と、なのはと、みんなと一緒に。

私はフェイト・テスタロッサ。アリシアじゃない。

フェ「（私は私、自分の在り方は自分で決めるんだ）」

一「どうだ？もう一度向き合う気があるか？」

フェ「・・・うん、母さんはああ言ったけど、私の中には確かに母さんとの思い出が残ってる。このまま何も伝えずに終わるなんて納得出来ないよ」

バルディッシュのデバイスコアが光る。

一「どうやら、バルディッシュもやる気みたいだな」

フェ「うん、ずっと私と一緒に居てくれたんだもんね。こんな情けない形で何もしないまま終わるなんて、そんな主許せないよね？」

≪Ｙｅｓ，ｓｉｒ≫

私はバリアジャケットを展開させた。

フェ「一成、私行くよ。人形だった私を終わらせて、みんなとこれからを始めるために」

一「ああ、君の想いの全てをぶつけてくるんだ」

フェ「うん！！」

一成に押され、部屋を飛び出した。

全てはここから始まるんだ・・・

フェイトＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＩＮ　ＳＩＤＥ

部屋を出て行くフェイトを見送って、俺は息を吐いた。

一「フェイト、頑張れよ。プレシアさんを助けるには、君の力が必要だ」

先ほどのプレシアさんの涙。あれはまだ完全に支配されていない証拠だ。

フェ「君の言葉を、君の想いをプレシアさんの心に届けるんだ。そうすればきっと・・・」

俺は転移の準備を始める。目指すは時の庭園。

一「後の事は俺に任せろ」

俺の全てをもって、君達を守ってみせる・・・

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

なのは・ユーノ・クロノ・神奈・天音ＳＩＤＥ

な「・・・何これ？」

時の庭園に突入した五人を待っていたのは、おびただしい数の傀儡兵だった。

ク「くっ・・・なんて数だ」

ユ「こんなところで時間を消費するわけにはいかないのに」

三人が焦る。

アル「なのは！！」

な「あ、アルフさん！？」

そんな中、アルフが援軍にやって来た。

な「アルフさん、フェイトちゃんは？」

アル「一成に任せてきたよ。アイツならきっとなんとかしてくれるさ」

な「そっか・・・」

アル「にしても、なんだいこの数は！？これ全部相手してたら魔力がもたないよ！！」

ク「仕方ない・・・一点突破で・・・」

神「クロノよ、妾達を忘れておるのか？」

天「あなたはもっと人を頼るべきですよ？」

神奈と天音が前に出る。

ユ「神奈さん？天音さん？」

ク「一体何を？」

神「ここは妾達に任せるのじゃ」

天「一成様からの命ですからね、全力でサポートさせて頂きます」

な「む、無茶ですよ!!」

アル「たった二人で、死ぬ気かい!?」

神「くくっ・・・」

天「ふふっ・・・」

アル「な、何がおかしいんだい?」

神「何を言っておるのじゃアルフ?妾達の主はあの一成じゃぞ?」

天「あの方に付き従っている私達が、あの程度の敵に後れ取るとでも?」

ブワッ!!

な・ユ・ク・アル「「「「!?!?!?」」」」

刹那、二人の体から膨大な魔力が溢れ出す。

神奈からは全てのものを燃やし尽くそうとする紅蓮のオーラが・・・

天音からはあらゆるものを凍てつかせようとする氷結のオーラが・・・

その様子を見て、四人は冷や汗を流すのだった。

神「どうじゃ？これでも不安か？」

ブンブンッ！！×４

全力で首を横に振る四人。

天「では行って参ります。すぐに終わらせますので、みなさんはここでお待ち下さい」

そう言って、二人は傀儡兵の前に降り立った。

アル「なのは、あの二人は強いのかい？」

な「わからない、二人が戦うところなんて初めてみるもん」

ク「強さに関しては先ほどのアレで充分理解できたと思うが？」

ユ「一成の家族って、一成を含めて滅茶苦茶だよね・・・」

ユーノの言葉に三人は頷いた。

神「さて、天音よ、一つ勝負をせぬか？」

久しぶりに使う愛用の大太刀の感触を確かめながら神奈が提案する。

天「勝負・・・ですか？」

こちらも愛用の槍を振るいながら、天音が聞き返す。

神「勝った方に素敵な褒美を与える・・・どうじゃ？」

天「全く・・・戦いは遊びじゃないんですよ？」

神「なんじゃ？やる気無しか？」

天「当たり前です。これはフェイトちゃんのための大切な戦いで・・・」

神「褒美が『一成と一週間添い寝出来る権利』・・・だとしてもか

？」

天「さあ！勝負の方法は何ですか！？」

神奈の提案に反対していた天音だが、褒美の内容を聞いた瞬間、瞳を燃やす。

神「ルールは簡単じゃ。どちらが多く傀儡兵を倒すか？それだけじゃ」

天「承知しました」

神「では、始めるかの」

天「そうですね、では・・・人霊剣『天翔』改め天音！」

神「人霊剣『神威』改め神奈！」

天・神「「いざ！参ります！！（る！！）」」

名乗りと共に、二人は傀儡兵の大軍に突撃した・・・

神「ほらほら！妾はこっちじゃ！！」

天「あらあら、そんなに固まって・・・余程私に殺られたいのですね」

神奈が薙ぎ払い、天音が貫く。その度に、数十体単位で傀儡兵が地に伏して行く。

神「どうした天音？やはり槍では難しいのではないか？」

天「ご心配なく・・・せいっ！！」

天音が投擲した槍は意思を持っているかの如く次々と傀儡兵を貫いていき、再び天音の手に戻った。

天「・・・っとまあ、この様な使い方も出来ますからね」

神「むっ・・・」

天「あなたこそ、周りの敵は倒せても遠距離への攻撃手段が無いようですが？」

神「それこそ無用な心配じゃ！はあっ！！」

神奈が無造作に太刀を振るう。すると斬撃が飛び、後方の敵を斬り裂いた。

神「どうじゃ？これが妾の力じゃ！！」

天「流石ですね。それでこそ、競う甲斐があると言うものです！！」

再び槍を投擲する天音。負けじと斬撃を飛ばす神奈。

神「一成と添い寝するのは妾じゃぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

天「いいえ！私です！！！」

神・天「「はあぁぁぁぁぁぁぁ！！！」」

な・ユ・ク・アル「「「「・・・・・」」」」

四人は目の前の光景にただただ唖然としていた。

身の丈以上もある刀を振るい、次々に敵を斬る和服美人。

神聖な気を発する槍で敵を貫いていくメイド。

あまりにも場違いな服装の二人が敵を圧倒していた。

エ「クロノ君！大丈夫！？生きてる！？」

突然、エイミィからの通信が入った。

ク「エイミィか！？こちらクロノ。全員無事だ」

エ「よかった～～、死んじゃったかと思ったよ～～」

ク「どう言う事だ？」

エイミィの大袈裟な言い方に全員が違和感を覚えた。

エ「だって、さっきクロノくん達の眼の前で強力な魔力反応をキャッチしたんだもん。オーバーSランクの魔力をね。それも二つだよ。サーチャーも飛ばしてる余裕無かったし、さすがのクロノくんでもやばかったのかと」

ク「お、オーバーSだって！？それも二つだと！？」

エ「うん、今クロノ君達の近くで反応があるよ。最初は敵かと思ったけど、傀儡兵を倒してくれてるから味方じゃないかな？」

ク「・・・ああ、味方だよ」

エ「やっぱりそうなんだ。どんな人なの？」

ク「君も知っている人だよ」

エ「え？」

ク「・・・神奈さんと天音さんだ」

エ「・・・・・えぇぇぇぇぇぇ！？！？！？」

神「これで！」

天「お終いです！」

神奈と天音がそれぞれ一体ずつ傀儡兵を倒す。あれだけいた傀儡兵も今の二体を倒した事で全滅した。

神「結果は・・・」

天「・・・どうやら同じ数の様ですね」

天音の言う通り、二人が倒した数は全く同じだった。

天「引き分け・・・ですか」

神「天音よ・・・お主、それで納得出来るか？」

天「そんなわけないじゃないですか」

神「ならば、やる事は一つじゃ」

天「そうですね」

武器を構え対峙する二人。そして

神「天音ぇぇぇぇぇ！！！」

天「神奈ぁぁぁぁぁ！！！」

愛する主との幸せな一時を手にするために、二人の美女がぶつかり合った・・・

ク「な、何をやっているんだあの二人は!?」

アル「敵はもう倒しただろ!?なんでやりあってんだい!?」

突如、お互いに刃を向け合う二人を見て、クロノ達は驚愕する。

ユ「ど、どうしよう?止めないと・・・」

アル「何言ってんだい!?あんなバケモノ同士の戦いに割り込んだりしたら、あたし達なんて瞬殺だよ!!」

ク「しかし、このままでは・・・」

な「私に任せて!!」

なのはが躍り出る。

ユ「な、なのは!?」

ク「無茶だ!危険すぎる!!」

な「大丈夫だよ、二人とも」

慌てる三人とは違い、妙に冷静なのは。

アル「どうする気だい？」

な「あの二人がすぐにケンカをやめてくれる魔法の言葉を知ってるの」

ク「それは？」

な「見ててね・・・神奈さん！天音さん！二人がケンカしてた事一成君に言っちゃいますよ！！！」

なのはが叫んだ瞬間。

神・天「「ごめんなさい！！それだけは勘弁してください！！！」」

瞬時に戦闘をやめ、土下座する二人。

な「・・・・ね？」

ユ・ク・アル「「「「（こ、怖い・・・）」」」」

なのはの笑顔に何故か恐怖を感じる三人だった・・・

な「そう言えば・・・結局一成君は来なかったね」

アル「フェイトもだよ、もしかして・・・」

神「何、一成の事じゃ、心配いらん」

天「主人公は遅れてやって来るのが基本ですからね」

神「妾達はただ先に進む事だけを考えればよい」

な「はい」

ク「確かに、今はそれしかないな」

ユ「一成が来るまでに少しでも敵を減らさないと」

神「その意気じゃユーノ」

な「よぉぉぉし!!いっくよ～～～!!!」

なのはを先頭に、残りのメンバーも走り出す。目指すはプレシアのいるあの場所だ。

第二十五話　自分は自分他人は他人（後書き）

作「次回、いよいよプレシアと対面だ」

神「悦楽のフルボッコまで後少しじゃな」

一「やっとこの時が来たか」

天「プレシアさんの涙を見てからさらに怒りが増しましたね」

一「ああ、あんな優しい人を操るなんざ許せん」

神「あのフェイトへの言葉は聞いていて辛かったの」

天「直後のフェイトちゃんは痛々しくて見ていられませんでしたからね」

一「彼女は大丈夫だ。もう自分を見失ったりはしないはずだ」

神「フェイトの言葉はプレシアに届くのかの？」

一「届くさ、きっと・・・」

作「無印編も残すところ後わずか、テンション上がって来たぜぇぇぇぇ！！！」

一「あ、そうだ、俺達最終決戦に向けて集中したいから次回からしばらく後書きお前一人に任せるからな」

作「・・・え？」

神「内容はお主に任せるからの」

天「頑張ってくださいね」

作「無理っ！！俺一人なんて無理だから！！」

一「何とかしろ」

神「決戦が終わるまでの辛抱じゃ」

天「いつまでかかるかわかりませんけど・・・」

作「そ、そうか。なら短くすれば・・・」

一「言っておくが、もし手を抜いたりしたら・・・わかるよな？」

作「ですよね～～～！！！」

一「さて、贈り物報告会するか」

神「この会ともしばらくお別れじゃな」

天「少し寂しいですね・・・」

一「何、全てにケリをつけたらまた開けるさ」

神「そうじゃな」

天「最初に朝凪　夜風様から青い桜ゼリーを頂きました」

一「これ食って気合入れなおすか」

神「何だか食べるのがもったいないの」

天「綺麗ですね」

一「え～～っと、次は・・・清浦　刹那様からＡＮＵＢＩＳの主人公機のジェフティーを頂いたぞ」

神「おお、カッコいいロボットじゃな」

天「オービタルフレーム・・・でしたっけ？」

一「収納型のパドルブレードがカッコいいんだよな」

神「物語終盤でのアヌビスとのハンデ戦はきつかったの」

天「イベントでほとんどの機能が使えなくなって、辛うじて生き残ったブレードとゼロシフトと少しのシステムだけで戦わなければならない場面ですね」

一「あれはあれで燃えたけどな」

神「最後に・・・緋水様から、妖刀村正とトールハンマー、貴哉殿が作った指輪を頂いたぞ」

一「武器も充実してきたな」

天「いつか本編で出せたらいいですね」

一「難しいな・・・恋姫の方なら出来そうだけど・・・」

神「ん？何か言ったかの？」

一「いや、何でも無いよ」

天「妖刀ですか・・・危険ですね」

一「なぁに、いざとなったら・・・へし折ってやるって脅してやればいいさ」

神・天「「ひっ・・・！！」」

一「どうしたんだ二人とも？」

第二十六話　たまには感情に任せて行動してもいいと思う（前書き）

どうでもいいが、後書きのネタがありません・・・

第二十六話　たまには感情に任せて行動してもいいと思う

なのはＳＩＤＥ

ク「あの穴のようなものは虚数空間。次元断層によって引き起こされる次元空間に空いた穴だ。魔法は全てキャンセルされてしまうから、飛行魔法や転移魔法が使えない。だから落ちたら二度と上がってくることは出来ない。全員、落ちないように気を付けるんだ」

クロノ君が地面に出来た穴について説明してくれました。

神「♪～～♪～～」

天「クロノ君？何か言いましたか？」

それに対し、神奈さんと天音さんは躊躇いもせずに穴を飛び越えて行きます。神奈さんなんて鼻歌を歌っていました。

ク「いや・・・何でもない・・・」

その様子を見て呆れた顔をするクロノ君。

ク「彼女達に常識を当てはめるのが間違いだった」

ユ「神奈さん達の非常識さは今に始まった事じゃないよ」

な「それを言うなら一成君だってそうだよ」

アル「オーラ・・・だったよね?そんな力聞いた事無いよ」

ク「一体彼は何者なんだ?」

ユ「旅人・・・」

ユーノ君がぽつりと呟きました。

ク「何だって?」

ユ「以前一成が教えてくれたんだ。自分は旅人だって」

アル「どう言う意味なんだい?」

ユ「確か・・・ある目的の為に世界を移動する力を持つ存在・・・だったかな?」

ク「その目的とは何だ?」

ユ「この世界に来たのは、なのはを守るためだって言ってたよ」

アル「へぇ、一人の為に世界を渡るなんて・・・幸せ者だねぇなの

は？」

な「ううう・・・／／」

アルフさんの言葉に顔が赤くなるのがわかります。

アル「ついでにフェイトも守ってくれたら嬉しいんだけどねぇ」

ユ「その点なら心配無いんじゃないかな？」

ク「ああ、彼の方は守る気満々の様だしな」

確かに、一成君は今までフェイトちゃんのピンチを幾つも救っています。もちろん私もフェイトちゃんの事が大切です。

な「（でも、一成君とフェイトちゃんが仲良くしてるのを見ると胸がモヤモヤする。ううん、フェイトちゃんだけじゃない、アリサちゃんやすずかちゃんとお話してるのを見ても胸が苦しくなる）」

フェイトちゃんとの勝負の時、何故あんな事を言ってしまったのか今でもわからない。

ユ「なのは？どうしたの？」

な「え？」

ユ「さっきから何か考えごとしてる様だけど・・・」

な「う、ううん！何でも無いよ！！」

ユ「そっか」

な「（いけない、集中しなくちゃ）」

やがて、飛行魔法が使いにくい場所に出たので、私達は自分の足で走って進みます。私達が進む先にも傀儡兵がいましたが、私達は何もしません。

神「ふっ！」

天「はっ！」

私達の前を進む神奈さんと天音さんが残さず倒してしまっているからです。

神「ほれ、早く来ぬか」

天「もたもたしていると置いて行きますよ」

そう言う二人ですが、少し進んで敵を倒すと私達が追いつくのを待っていてくれます。やっぱり優しい人達だなと思いました。

やがて、少しひらけた場所で階段を発見したので、いったんそこで止まる事にしました・・・

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

クロノＳＩＤＥ

ク「みんな聞いてくれ、此処から先は二手に分かれる。キミ達は駆動炉を封印してくれ」

僕は上に続く階段を指差しながら伝えた。

神「駆動炉？」

天「それを何とかすればよろしいのですね？」

ク「ああ、そうすれば少なくともこの庭園は完全に停止することが出来る」

神「ならば、妾達が行こう」

天「あなた達は先にプレシアさんの所に向かって下さい」

神奈さんと天音さんが階段に向かう。

ク「二人だけ・・・で充分だな」

神「そう言う事じゃ」

天「急ぎましょう。時間をかければ・・・こうなります」

な「え？」

その瞬間、僕達を包囲するようにいくつもの転送魔方陣が現れ、先ほどから何度も目にした傀儡兵が次々姿を現す。

ク「な！？まだ残っていたのか！！」

神「やはり来おったか！」

天「此処と駆動炉は私達に任せて、行ってください！」

二人の言葉に反応して僕達は駆けだしたが

ユ「な、何だ！？」

僕達の進路を遮るように、通常の数倍はある大きな転送魔方陣が現れ、そこから今までとは比較にならない程巨大な傀儡兵が召喚された。高さは優に十メートルは超えていて、あまりの巨大さに今までの傀儡兵がおもちゃの様に見えた。

その大型傀儡兵が手に持つ剣を真っ直ぐ振り下ろして来る。慌てて左右に散って回避した。

な「ディバイィィィンバスタァァァ！！！」

なのはの砲撃魔法が傀儡兵の胴体部に直撃する・・・が

な「き、効いてない！？」

何事も無かったかのように再び剣を振り下ろしてきた。

ユ「あの大型はきっと今までのものと比べると魔法に対する耐性が強いんだ！」

アル「強いなんてレベルじゃないと思うけどね・・・」

ク「こうなれば、全員で一斉に攻撃して・・・」

魔力をチャージする。だが、大型傀儡兵は僕達には眼もくれず、少し離れた所で戦っている神奈さんと天音さんに向かって走って行く。

ユ「まさか、最初から神奈さんと天音さんを狙って!?」

普通の傀儡兵よりも速いスピードで二人に迫る大型傀儡兵。

な「神奈さん!天音さん!」

ク「後ろだ!」

アル「クッ!あたしでも間に合いそうにないよ!」

急いで神奈さんと天音さんの元へ向かう。僕達の声が聞こえたのか神奈さんと天音さんがこちらを振り向く。そして

神「邪魔じゃ!」

天「消えなさい!」

神奈さんが傀儡兵の四肢を斬り裂き、天音さんが胸を貫く。切り口

を燃やし、空いた穴を中心に凍りつきながら、ゆっくりと倒れる傀儡兵。

神「まだ進んでおらんかったのか！」

天「早くしないと・・・今の傀儡兵と同じ様な目に遭ってもらいますよ？」

ク・な・ユ・アル「「「「ごめんなさい！！！」」」」

天音さんの言葉に慌てて引き返す。こ、怖い・・・

ク「・・・進もうか？」

全員が頷くのを確認して、僕達は先に進んだ・・・

クロノＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ユーノＳＩＤＥ

神奈さんと天音さんと別れて走り続ける事数分、目の前に大きな扉が姿を現した。なのはとクロノが同時に砲撃を放って扉を破壊する。

ク「プレシア・テスタロッサ!!あなたを拘束する!!」

突入し、クロノが叫ぶ。

プ「来たわね、管理局・・・」

ク「僕は、時空管理局執務官のクロノ・ハラオウンだ。プレシア・テスタロッサ、次元震は母さ・・・提督によって抑えられている。駆動炉にも人を向かわせた。あなたが目指す忘れられし都アルハザードは、曖昧なただの伝説だ!!」

プ「違うわ。アルハザードは確かに存在する。次元の狭間にあるのよ。時間と空間が砕かれた時、道はそこにある」

ク「貴方はそこに行って一体何をする?失った時間でも取り戻すつもりか?」

プ「そうよ。私は取り戻す。アリシアを、こんなはずじゃなかった世界の全てを」

ク「世界は・・・」

ドゴォォォォォォン!!!

クロノが何か言おうとした瞬間、爆発音が室内に響き渡った。

な「な、何!?」

アル「ッ!上だよ!!」

アルフが天井を指差した刹那、巨大な穴が開き、そこから見知った人物が降りてきた。

な「神奈さん!?天音さん!?」

神「話は聞いておったぞ」

天「プレシアさん・・・あなたは考え違いをしています」

二人がプレシアさんを睨む。

神「世界は何時だってこんなはずじゃないことばかりじゃ!昔から何時だって、誰だってそうじゃ!!!」

天「不幸から逃げるか戦うかは個人の自由です。ですが・・・他人を巻き込む権利は誰にもありはしません!!!」

神奈さんと天音さんが叫ぶ。

ク「・・・・」

な「どうしたのクロノ君？」

ク「いや・・気のせいかな？ここは僕にとって一番の見せ場だった様な・・・」

な「？」

ク「・・・何でもないよ。忘れてくれ」

クロノが少し落ち込んだ様子だった。どうしたんだろう？

プ「・・・何者？」

神「妾は神奈！一成の家族じゃ！！」

天「私は天音、同じく一成様の家族です」

プ「そう・・・それで、肝心の一成はどうしたのかしら？」

神「ふんっ。お主程度、妾達だけで充分じゃ！」

天「大人しく投降していただきますよ」

プ「面白いじゃない・・・相手になってあげるわ！！」

言葉と同時に、プレシアさんから雷球が飛んできた。

神「この程度！」

天「甘いですね！」

一成の使うのに似たバリアを展開する二人。

プ「やはりこれくらいじゃ防がれるか・・・ならば！！」

神「ッ！？しまった！！」

天「なのはちゃん！！」

残りの雷球が軌道を変え、一斉になのはに襲いかかった。

な「きゃあぁぁぁぁぁ！！」

ユ「なのはぁぁぁぁ！！」

ク「なのは！プロテクションを！！」

アル「駄目だ！間に合わないよ！！」

そして、雷球がなのはに直撃する瞬間・・・

？「プロテクション！」

ギィィィィィン！！

なのはの目の前に展開される障壁。そして

フェ「・・・間に合った」

な「ふぇ、フェイトちゃん！？」

なのはを守るように立ちはだかるフェイトの姿があった・・・

な「フェイトちゃん！！」

アル「フェイト！！」

なのはが近づき、アルフが抱きしめた。

な「フェイトちゃん・・・大丈夫？」

フェ「ごめんね心配かけて。もう大丈夫だから」

アル「フェイトぉ・・・よかった・・・よかったよぅ～～」

アルフが涙を流す。

神「おお、フェイト！助かったぞ！！」

天「やはり一成様にお任せして正解でしたね」

一成？

ユ「そ、そうだ！フェイト！一成はどうしたの！？」

フェイトがここにいるという事は一成だって近くにいるはずだ。

フェ「え？」

しかし、帰って来たのは戸惑いの声だった。

ユ「え?・・・って、一緒じゃなかったの!?」

な「そうだよフェイトちゃん!一成君は!?」

ク「彼がいればすぐに片がつきそうだが・・・いないのか?」

アル「フェイト、一成と話したんだよね?」

一斉に尋ねる。

フェ「う、うん。でも私、一成に励ましてもらってすぐに飛び出して来ちゃったから・・・た、たぶん後から来るんじゃないかな?」

ク「クッ!こんな肝心な時に!!」

ユ「僕達だけで何とかなるのかな・・・?」

アル「やるしかないよ・・・どっちみち、あの女は逃がしてくれそうになさそうだしね」

フェ「母さん・・・」

プレシアさんを見つめる。

プ「・・・お話は終わったかしら?」

ク「ああ、待たせたな」

プ「人形一人増えたところで変わらないわ。今度こそ・・・」

プレシアさんが再び魔力をチャージし始めたその時

・・・ズゥゥゥゥゥン

突如、建物全体を揺らすほどの衝撃が僕達を襲った。

な「こ、今度は何!?」

ユ「わからない」

フェ「な、なんだか近づいて来てない？」

ク「まさか、新たな傀儡兵か？」

アル「ま、まだ来るってのかい!?」

ズゥゥゥゥゥン

プ「・・・・何？」

ズゥウウウウン！！

神「・・・やっとお出ましかの」

天「迷った時のこの癖、何とかして欲しいですね」

神奈さんと天音さんが苦笑いを浮かべる。そして・・・

バゴォオオオオオオン！！！

な・ユ・フェ・ア ル・ク・プ「「「「「「ッ！？」」」」」」

いきなり僕達のいる部屋の壁が何かによって破壊され、そこに人影が見えた。

ユ「こ、こんな滅茶苦茶する人物は一人しか知らない・・・」

ク「・・・僕もだ」

な「待ってたよ！」

フェ「来てくれたんだね・・・」

アル「ようやくお出ましかい」

全員で確認する。間違いない、彼だ。

一「・・・・・」

な・ユ・フェ・アル・ク「「「「「一成ッ（君ッ）！！！」」」」」

僕達が待ち望んでいた一成がゆっくりと歩いてきた・・・

プ「ようこそ一成。待っていたわ」

プレシアさんが一成に話しかける。

一「・・・・・」

な「か、一成君・・・？」

全く反応しない一成を怪訝に思ったのか、なのはが声をかける。

一「・・・・・わ」

な「え？」

一「広いわぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

な・ユ・フェ・ア・ル・ク「「「「「！？！？！？」」」」」

突然叫び出す一成。ど、どうしたんだろ？

神「やっぱりの」

天「ここに入った瞬間に予想してましたが、的中しましたね」

ユ「ど、どう言う事ですか？」

思わず尋ねる。

神「迷ったんじゃよ」

フェ「え？」

天「一成様は少し方向音痴の気がありまして、初めて入る建物では必ずと言っていいほど迷うんですよ」

神「今回もそうじゃ。しかし、一成としては早く妾達と合流しなければならん。その結果があれじゃ」

そう言って破壊された壁を指す神奈さん。

天「目的地までの最短ルート・・・それは直進の道」

神「じゃが建物のみならず、直進できる道はほとんど存在せん。ならばどうするか？答えは簡単じゃ・・・作ればよい」

天「見てください」

天音さんに言われて壁の先を見る。破壊された壁の先の壁も、さらにその先の壁も破壊されていた。

天「建物内を移動している内に迷ってしまわれたのでしょう。そこで私達の魔力反応をキャッチして障害物を破壊しながら真っ直ぐ向かってきた・・・で正解ですか？」

一「・・・・ああ」

ばつが悪そうに顔を背ける一成。

一「それよりフェイト・・・話したのか？」

フェ「え？う、ううん・・・まだ」

一「頑張れ、見ていてあげるからな」

フェ「うん」

プレシアさんに向かって歩いて行くフェイト。何をする気なんだろう？

ユーノＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＩＮ　ＳＩＤＥ

フェイトがプレシアさんと向かい合う。

フェ「・・・母さん、貴方に言いたいことがあってきました」

プ「何をしに来たの・・・？」

射殺さんばかりの視線でフェイトを睨むプレシアさん。

フェ「私はアリシアじゃありません。確かに母さんにとって私は人形でしかなかったかもしれません。ですが、私はあなたに生み出されて、あなたに育ててもらったあなたの娘です」

プ「・・・・・」

フェ「あなたは否定しましたけど、私は覚えています。あなたの笑顔を・・・あなたの手の温もりを・・・あなたと過ごした穏やかな日々を・・・」

プ「う・・・うう・・・・・」

フェ「あなたが私を娘と思ってくれるのなら、私はあなたと共にあり続けます。たとえ誰が来ようと、どんな苦難が待とうと、あなたを守ります」

さらに一歩踏み出す。

フェ「私があなたの娘だからじゃない。あなたが私の母さんだから・・・」

しっかりとプレシアさんを見つめながら手を差し出すフェイト。

プ「くだら・・・な・・・ううっ!!」

前回と同じく、頭を抱え苦しむプレシアさん。

フェ「か、母さん？」

慌ててプレシアさんに近づくフェイト。

一「フェイト！！聞かせるんだ！！君の声を！！君の想いを！！」

フェ「か、一成？」

一「プレシアさんの心に！偽りじゃない、本物の心に！！」

プレシアさんを取り戻すチャンスは今しかない。

な「一成君！！」

ユ「一体何が！？君は何か知ってるの！？」

一「訳は後で話す！今はフェイトを信じろ！！」

ク「信じろと言ったって・・・」

アル「フェイト・・・」

心配そうにフェイトを見つめるなのは達。

フェ「母さん・・・」

プ「う・・・うう・・・・・」

フェ「もしかして・・・私のせいで苦しんでいるの？」

プ「ううう・・・・」

フェ「もしそうなら・・・私は消えます。そして、もう二度とあなたの前に現れません」

プ「ふぇ、フェイト・・・・」

フェ「母さんと会えなくなるのは悲しいけど・・・私のせいで母さんを辛い目に遭わせるのは嫌だから」

プ「フェイト・・・」

フェ「だって・・・私は母さんが大好きだから！」

プ「ううう・・・うあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

絶叫するプレシアさん。その体から黒い靄の様なものが吹き出す。

フェ「母さん！！」

プ「ふぇ・・・フェイト・・・・逃げなさい。早く・・・」

フェ「え？」

フェイトが聞き返そうとした刹那

？「やれやれ・・・結局意識を取り戻しやがったか。つまんねぇな・・もういいよ、あんたに用は無ぇ」

突如響き渡る声と共に、プレシアさんの腹部から剣が突き出した。

プ「かは・・・あ・・・」

血を吐きだすプレシアさん。それがフェイトに振りかかる。

フェ「え？」

事態が呑みこめていないフェイト。自分に振りかかった血を見て呆然としている。

な「いやぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

なのはの悲鳴が室内に木霊した・・・

ク「な、何が起こったんだ!?」

ユ「ッ!?あれ!!」

ユーノが指差した先には一人の男が立っていた。

男「いよぅ・・・初めましてみなさん」

顔をニヤつかせながら男が話しかけてきた。

ク「誰だ貴様!?」

男「俺か?俺は悦楽ってんだ。よろしくなクロノ君?」

ク「な、何故僕の名前を?」

悦「他にも知ってるぜ。高町　なのはにユーノ・スクライア。そこで無様な姿をさらしているのがプレシア・テスタロッサ。それに引

っついて呆然としている人形がフェイト・テスタロッサ。そしてアルフ・・・」

な「わ、私達の名前まで・・・」

ユ「どうして、あなたとは初対面のはずだ!!」

悦「なんでも知ってるさ。何故なら・・・」

一「貴様が今回の一連の黒幕だからだろ?・・・人霊剣『悦楽』ようやく名前と顔が拝めたぞ」

俺がそう言うと、男はまた顔をニヤつかせた。

悦「そっちもな。旅人・・・」

フェ「母さん!!」

悦「ああん・・・?」

悦楽の声を遮り、フェイトの泣き叫ぶ声が聞こえた。

フェ「母さん!!血が!!こんなにいっぱい血が!!誰か!!母さんを助けてよ!!」

錯乱するフェイト。

プ「ふぇ・・・フェイト・・・・・」

フェ「母さん!?」

プレシアさんが弱々しくフェイトの頬をなでる。

プ「ごめんなさい・・・操られていたとはいえ、あなたには随分と酷い事をしてしまった」

フェ「え?」

プ「全ては私の心の弱さが招いた事。あなたは何も悪くない・・・・」

フェ「か、母さん・・・・」

プ「こんな私を・・・まだ母と呼んでくれるの?」

フェ「当たり前だよ!!私の母さんは母さんだけだもん!!」

プ「ありがとう・・・フェイト。ふふっ、さっきのあなたの言葉・・・嬉しかったわ」

フェ「私も・・・私も母さんが優しい母さんに戻ってくれて嬉しいよ」

プ「・・・死ぬ前にもう一度あなたとこんな風に話せてよかった」

フェ「何言ってるの母さん!?」

プ「いいの、どっちみち私の命は長くなかったもの」

フェ「え?」

プ「昔の事故の所為でね、私の体は病に蝕まれていた。さらにアリシアを失い、私は生きる気力を失っていた。それを救ってくれたのがフェイト・・・あなたよ」

フェ「私?」

プ「あなたの存在が、あなたの笑顔が、私の生きる活力になった。アリシアのクローンじゃない、フェイトと言うもう一人の娘のお陰でね」

フェ「・・・・」

プ「罪を犯した私にとって、あなたとの日々はかけがえの無いものだった。もう充分よ。心残りがあるとすれば・・・あなたの花嫁姿が見れない事かしら」

フェ「なら生きてよ!生きて私の花嫁姿を見てよ!!」

プ「それができたら、なんて素敵な事かしらね・・・」

フェ「出来るよ!一成がいれば!一成!母さんを・・・」

悦「・・・つまらねえ」

フェ「え？」

先ほどまでのニヤけ顔と違い、不機嫌そうな顔をする悦楽。

悦「俺が見たかったのはこんなお涙頂戴の三流悲劇じゃねえんだよ。親が子を憎み、決して報われない子どものあがきが展開される喜劇が見たかったんだよ」

悦楽の体から魔力が吹き出す。

悦「途中までは面白かったんだがな、そこのガキが妙な事吹き込みやがった所為で台無しになっちまった」

俺を睨む悦楽。

悦「使えねぇ役者に用は無ぇ、つーわけで、消えてくれ」

プ「フェイト！逃げなさい！！」

フェ「嫌！母さんを置いて逃げるなんて出来ないよ！！」

悦「・・・ほんっとつまらねえ親娘だな。あばよ・・・生まれ変わって俺に会ったら今度こそ楽しませろよ?」

悦楽から凶暴な魔力の奔流が迸り、フェイトとプレシアさんに襲い掛かった。

アル「フェイトおおおおお!!!」

な「プレシアさん!!!」

一「・・・ディスペランススフィア」

ギィィィィィィン!!!

俺が展開させたバリアが悦楽の攻撃から二人を守る。

一「天音・・・プレシアさんを頼む」

天「お任せ下さい」

天音がプレシアさんに回復魔法をかける。

フェ「あ、天音さん・・・母さんを・・・母さんを助けてください

！！」

天「大丈夫ですよフェイトちゃん。この程度の傷、すぐに治してみせます」

天音から発せられた光がプレシアさんを包む。光が収まると、プレシアさんの腹部の傷はすっかり消えていた。

天「・・・これでもう大丈夫ですよ」

フェ「母さん！」

プ「ふぇ、フェイト・・・」

フェ「母さん！！」

プレシアさんに抱きつくフェイト。

天「フェイトちゃん、このバリアから出ないでくださいね？」

天音が戻って来た。

悦「テメエら・・・ふざけ・・・」

一「黙れ」

バキィ！！！

悦「ぐはっ！！」

プレシアさんも助けだしたし。もう我慢する事も無い。悦楽の顔面を思い切り殴り飛ばす。

ドゴンッ！！！

壁に叩きつけられる悦楽。

一「戦闘力5・・・ゴミだな」

神「妾達・・・穏やかな心ではらわた煮えくりかえっておるぞ・・・」

天「なんだかワクワクしてきました」

アナライズで確認し、急に頭に思い浮かんだ言葉を口にする。戦闘力って何だ？

一「立てよ、これからだぞ・・・」

悦「・・・いいねぇ、さすが旅人。何時以来だ?殴られたのは・・・」

ゆっくりと立ち上がる悦楽。

悦「テメエにも借りがあるからな・・・返させてもらうぜ!」

一「黙れ雑魚、今までの報いを受けさせてやる。覚悟しろ」

さあ・・・全ての決着をつけてやる・・・

第二十六話　たまには感情に任せて行動してもいいと思う（後書き）

作「さあ！いよいよ決戦だ！！」

・・・・・・・・

作「果たして一成は悦楽を倒し、フェイトに幸せをもたらす事が出来るのか！？」

・・・・・・・・

作「・・・・そして、ついに一成の真の力が発揮されるぞ」

・・・・・・・・

作「こ、こうご期待・・・・」

・・・・・・・・

作「さ、寂しい・・・・」

作「・・・贈り物報告会・・・」

・・・・・・・・

作「うう・・・まずは・・・」

？「こんにちは」

作「え？」

？「初めまして作者様」

作「あ、あなたは！朝凪　夜風様のところの八口　踊孤さん！？」

八「ええ、八口　踊孤です」

作「ど、どうしたんですか？こんなところに来て？」

八「朝凪様から作者様の話し相手になるよう頼まれて参りました」

作「おお、マジですか！？」

八「ええ」

作「いや～～こんな美人さんとお話出来るなんて嬉しいな～～。朝凪　夜風様ありがとうございます。八口さんもお忙しいところすいませんね～～」

八「ええ、全くです」

作「・・・・え？」

八「私は弘太様とお買い物に行く予定でした。なのに・・・あなたの所為で中止になりました」

作「や、八口・・・さん？」

八「というわけで、この怒りをあなたとのＯＨＡＮＡＳＩ（やつあたり）で晴らさせてもらいます」

作「ちょ！？今やつあたりって！！」

八「気のせいですよ・・・はっ！！」

作「ぎゃあぁぁぁぁぁ！？薙刀が、薙刀がぁぁぁぁぁ！！」

八「避けないでください！」

作「避けなきゃ死ぬでしょぉぉぉぉぉ！！！つーか、他の作者様のキャラに殺されるって前代未聞だろぉぉぉぉぉ！！！」

八「殺しはしません・・・せいぜい半殺しです」

作「変わりはせんわぁぁぁぁぁぁ」

十分後・・・

八「ふうっ・・・スッキリしました」

作「・・・・・」

ピクピクッ

八「あ、忘れる所でした。朝凪様から贈り物です。アップルグミ、レモングミ、ミックスグミ、ミラクルグミを１５個ずつ、エクスシールとライフボトルを５個ずつです。さっそく使用する機会が来ましたね」

作「ボコった後に回復って・・・性質の悪いＰＫユーザーみたいだな・・・」

八「・・・何か？」

作「い、いえ！！何でもありません！！！」

八「そうですか。では私はこれで失礼します」

作「は、はい・・・」

作「次は・・・緋水様から花火一式と悦楽フルボッコ方法その一と貴哉さんが作ったマナ水晶の腕輪を頂いたぞ・・・花火でもするか」

ブワァァァ！！

作「お～～綺麗だな～～～・・・って！？やべっ！！引火した！！」

ボオォォォォォ！！！

作「熱ッ！！熱い！！！死ぬ！！死んじゃうから！！！」

作「はあっ・・・はあっ・・・・何とか消火出来た。えっと・・・最後は清浦　刹那様からナデシコA、B、Cと夜天光を頂いたけど・・・こうして見ると壮観だな～～～」

？「弱き者よ・・・」

作「げっ！？あんたは・・・北辰！？」

北「貴様如きに我が機体を渡すわけにはいかん。よって・・・消えてもらう」

作「これあんたのじゃないから！！清浦　刹那様から頂いた別物・・・」

北「問答無用・・・滅っ！」

作「アッ～～～～～～！！！」

第二十七話　本当に頭に来ると逆に冷静になる（前書き）

最後の最後にチートです。

第二十七話　本当に頭に来ると逆に冷静になる

ク「この男が・・・黒幕だと?」

な「人霊剣って確か・・・」

ユ「神奈さん達と同じ存在なのか?」

神「確かに妾達も霊剣じゃが、あの様な下賤な輩と一緒にするでない」

天「同類にされるのは不愉快です」

悦「嫌われてるねぇ。同じ霊剣同士、仲良くしようぜ」

ク「一成・・・君は真相を知っているのか?」

一「それは・・・」

悦「おっと!それはこの俺が説明してやるぜ」

そして悦楽は語り出した。

悦「プレシアの引き起こした事故、フェイトへの憎しみの感情、全ては俺が仕組んだ事だ」

悦楽の言葉に全員が息を呑む。

悦「暇潰しにこの世界にやって来た時、何やら面白そうな事をやってたからな、機材にちょっとした細工をしてやったら簡単に壊れやがった。その時のプレシアの絶望ったら凄かったぜ?なんせ・・・娘を失っちまったんだからなぁ」

プ「ま、まさか・・・」

プレシアさんが信じられないといった顔をした。

悦「それから数年、悲しみに暮れているだろうプレシアの顔を拝みに行ったら、どうしたことか笑っていやがった。新しい娘とそりゃあ幸せそうにな」

フェ「もしかして・・・私?」

悦「この女に笑顔は似合わねえ、絶望こそが相応しい・・・だから与えてやったんだよ、ジュエルシードの情報と、フェイトへの偽りの感情をなぁ」

ユ「ど、どうしてあなたがジュエルシードの事を!?」

悦「んな事はどうでもいいんだよ・・・最初の内は抵抗してたんだがな、少しずつ心に干渉していったら簡単に堕ちやがった。いやぁ最高だったぜ? 娘の仇に操られて、新たな娘を虐待しながら心の中で泣いている様子を見るのはな」

プ「き、貴様・・・」

ク「狂ってる・・・」

悦「ありがとうよ。俺にとっちゃ最高の褒め言葉だ」

心底嬉しそうに笑う悦楽。

フェ「・・・あなたが」

悦「あん？」

フェ「あなたが母さんを不幸にした・・・母さんを傷つけた・・・」

悦「それがどうした？」

フェ「なんで！？　どうしてこんな事が出来るの！？　母さんは何も関係ないのに！　どうして！？」

悦「どうしてだぁ？　理由なんてあるわけねえだろ」

フェ「え？」

悦楽の答えに唖然とするフェイト。

悦「強いて言うなら・・・そうだな、俺が楽しむため・・・だな」

フェ「なっ！？」

悦「俺にとっちゃ面白いか詰まらないか・・・全てはそれだけだからな」

悦楽が告げる。

ユ「な、なんてヤツだ・・・」

ク「プレシアも被害者だったのか・・・」

アル「こんなヤツの所為で今までフェイトは酷い目に遭ってたっていうのかい・・・？」

な「酷い・・・こんなの酷すぎるよ・・・」

神「クズめ・・・」

天「本当に久しぶりですね・・・ここまで怒りが込み上げて来るのも・・・」

フェ「・・・・さない」

悦「何？」

フェ「許さない！　あなただけは！！」

フェイトがバリアから飛び出し悦楽に斬りかかった。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

フェイトＳＩＤＥ

許さない・・・許さない、許さない！　母さんを酷い目に遭わせたこの人だけは！！

フェ「うあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

怒りのままにバルディッシュを振り下ろす。

悦「甘えよ」

ギィィィィィィィィン！！

しかし、悦楽の展開したバリアによって簡単に防がれた。

フェ「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

それでも諦めずに力を込める。

悦「ははっ！　いいぜ！　感じるぞ、お前の怒り、悲しみ、憎しみをなぁ！！」

フェ「クッ！！」

悦「だが・・・言った筈だ、使えねえ役者に用は無え・・・ってなぁ！！」

フェ「えっ！？・・・きゃあ！！」

突然の衝撃に吹き飛ばされる。

ガシッ！！

一「大丈夫かフェイト？」

そんな私を、一成が受け止めてくれた。

フェ「あ、ありがとう」

悦「随分その人形の肩を持つじゃねえか旅人？」

悦楽が一成に話しかける。

一「フェイトは俺の大切な友達だ、助けるのは当然の事。それと・・・二度とこの娘を人形と呼ぶな。この娘はフェイト・テスタロッサ・・・一人の人間だ」

フェ「一成・・・」

一成の言葉に涙が出そうになる。

悦「はっ！　今まで他人の言う事を聞いて生きてきた様なヤツが人間だと？　笑わせるぜ」

一「確かに今まではそうだったかもしれない。だが、この娘は自分で決めたんだ。アリシアちゃんのクローンでも人形でもなく、フェイトとしてのこれからを始める事を」

そうだ、私は始めるんだ。一成やなのは達といっしょにこれからを・・・

悦「下らねぇ考えだな・・・おいフェイト、お前、本当にそれで生

きていけると思ってんのか？」

フェ「え？」

悦「お前がどう足掻こうと、お前が作られた存在だという事に変わりはねぇ。そんな存在が・・・本当に受け入れられると思ってんのか？」

フェ「そ、それは・・・」

悦「いずれお前は否定される。そしてお前はこの世界を憎みながら生きて行くんだ・・・」

フェ「そ、そんな事・・・」

な「そんな事ない！！」

なのはが叫ぶ。

な「フェイトちゃんはフェイトちゃんだもん！　作られた命だからって関係無い！！」

ユ「そうだ！　お母さん想いのただの優しい女の子だ！！」

ク「ああ、僕達からすればそれで充分だ」

アル「あんたなんかに・・・フェイトを否定させたりなんかしないよ！！」

神「偉そうに言うが、そう言う貴様こそ作られた存在じゃろうが」

天「私は喜んであなたを否定しますけどね、悦楽」

フェ「みんな・・・」

プ「フェイト・・・あなたは私の大事な娘よ。それだけは偽りない事実・・・」

フェ「母さん・・・」

一「フェイト、生まれなんか関係無い、大事なのはどう在るべきかだ。それに・・・」

一成がなのは達を見た後、もう一度私に告げる。

一「少なくとも・・・ここにいるみんなは君の事を受け入れている。もちろん、俺もね」

フェ「一成・・・一成～～～～！！」

一成に抱きつく。限界だった・・・涙が後から後から湧いて来て止まらなかった・・・

悦「チッ！　人形なら人形らしく言う事を聞いてりゃよかったもの

を！」

悦楽の言葉なんてもう気にしない。私を受け入れてくれる人達がいる限り、もう私は揺らぎはしない！

プチン

フェ「えっ？　何の音？」

何かが切れる音がした。一成から聞こえた気がしたけど・・・

フェ「か、一成・・・？」

一「・・・・・」

フェ「・・・ヒッ！？」

一成の目を見た瞬間、心臓が止まりそうになった。そこに光は無く、顔は全くの無表情。いつも優しく私を見守っていてくれた一成は存在せず、別の誰かがいると錯覚してしまう。

フェ「（か、一成・・・だよね？）」

一「貴様・・・またフェイトの事を人形と呼んだな・・・？」

悦「だから・・・？」

一「・・・殺してやるよ・・・」

瞬間、一成から暴力的なまでの魔力が吹き出した・・・

フェイトＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＩＮ　ＳＩＤＥ

一「クロノ、頼みがある。今すぐ全員を連れてアースラに戻ってくれ。もちろん、アリシアちゃんのポッドもな」

クロノに告げる。

ク「全員って・・・君はどうするつもりだ？」

一「決まっているだろう？　あのクズ剣を破壊する・・・」

悦「随分な言い方するじゃねぇか」

一「クズをクズと言って何が悪い？」

悦「・・・上等だよ」

悦楽からオーラが吹き出す・・・この程度か？

一「急げ！」

な「そんな！」

ユ「一成一人だけを置いて行くなんて！！」

アル「そんな事出来るわけないじゃないかい！！」

一「ありがとう心配してくれて。俺は大丈夫だから」

ク「し、しかし！！」

神「クロノよ、一成の指示に従うのじゃ」

ク「神奈さん！？」

神「一成のあの目・・・本気で怒っておる。もはや止める事は出来ん」

天「ここにいればあなた達にも被害が及びます。ですから早く」

な「天音さんまで・・・」

ク「・・・行こうみんな」

ユ「クロノ!?」

ク「正直、僕達は足手纏い以外の何者でもない。そんな僕達に出来る事は、精々一成が全力で戦えるようにする事だけだ」

な「・・・そうだね、みんな、アースラに戻ろう?」

ク「エイミィ!!　一成達以外の全員を転移させてくれ!!」

エ「(了解!!)」

エイミィから念話が届く。

な「一成君・・・信じてるからね!!」

ユ「あんなヤツぶっ飛ばしちゃえ!!」

ク「君に全てを託すぞ!!」

アル「あんただけが頼りだからね!!」

転移して行くなのは達。

プ「一成・・・ごめんなさい。私の所為で・・・」

一「それは違いますプレシアさん。全てはあのクズ剣の所為です。あなたは何も悪くありません」

プ「ふふっ、あなたは優しいわね・・・フェイトが惹かれたのもわかるわ」

一「？」

そう言い残し、転移するプレシアさん。

フェ「一成・・・」

一「フェイト・・・」

フェイトと向き合う。

フェ「一成、お願い・・・必ず帰って来て」

一「当然だ。約束する」

フェ「そっか、なら安心だね。それでね・・・一成、あなたが帰って来たら私・・・あなたに伝えたい事があるの。聞いて・・・くれるかな？」

一「わかった、帰ったら聞かせてもらうよ」

フェ「約束だからね？」

一「ああ」

そう言ってフェイトも転移していった。アリシアちゃんのポッドも回収され、ここにいるのは俺と神奈と天音。そして、悦楽だけだった。

一「何時以来かな・・・守るためではなく、ただ倒すために戦うのは・・・？」

誰かの為ではない、ただ己の為にヤツを倒す。

悦「さあ始めるか！　俺とお前で・・・死の輪舞曲（ロンド）をよぉ！！」

天井に空いた穴から飛び出して行く悦楽。

一「黙れよ厨二」

神「リアルで聞くと寒いの」

天「本人はカッコいいと思っているんでしょうね・・・」

一「知らぬは本人のみ・・・か」

軽口を叩きながら精神を集中する。

神「では・・・行くか、一成！」

天「絶対的な力の差というものを教えてあげましょう！」

一「ああ！　神奈！　天音！　力を！！」

二人を同化させハイロゥを展開する。そのまま悦楽を追い、俺も飛び出した・・・

時の庭園上空、俺はヤツと対峙する。

悦「改めて自己紹介させてもらうぜ。俺は人霊剣『悦楽』他者を操り、悲しみと憎しみの連鎖を広げる者・・・」

一「・・・秋月　一成。人霊剣『神威』と『天翔』の主。貴様の様な者に歪められた世界を正す旅人・・・」

悦「一成ね・・・パッとしねえ名前だな」

一「よく覚えておけ、貴様の最期を見届ける者の名前だ・・・」

悦「テメエみたいなガキが俺を倒す？　笑えねぇ冗談だな」

一「外見で判断する時点で貴様の実力の底が知れるな」

悦「おい・・・あまり俺を怒らせるなよ？」

一「事実だろ？」

悦「殺す！　俺を見下すヤツは全員ぶっ殺してやる！！」

悦楽が巨大な剣、ラム・ダオ状の器で斬りかかって来た。刀身の両側の目の模様の食刻が俺を見つめているようで気味が悪い。

受け止めるのも面倒なので回避する。

一「意思も無い器ごときで俺が倒せると思うなよ」

悦「へっ！　ご忠告どうも。心配しなくても、この中には別のモノを入れてるんでな！」

一「何？」

悦「見せてやるよ」

悦楽が俺から離れる。

悦「行け！　死霊ども！　テラー！！」

悦楽の叫びと共に、器から何かが吹き出す。

悦「テメエも死霊の仲間になっちまえぇぇぇぇぇ！！！」

真っ直ぐに俺に襲い掛かってくる何か

一「オーラフォトンバリア！！」

ギィィィィィィン！！！

バリア越しにそれを見る。

一「・・・・人？」

それは人の顔の形をしていた。一人ではないたくさんの人の顔。性別も年齢も違う。一つだけ共通しているのは

一「苦しんでいるのか？」

全員が苦悶の表情を浮かべているところだった。

一「貴様・・・この人達は何だ？　死霊と言ったな・・・まさか・・・」

頭の中に一つの仮説が浮かぶ。もしかして・・・

悦「そうさ、今までに俺が殺したヤツらの魂さ」

俺の仮説は見事に的中した。

悦「正確には俺が操ったヤツとそれに殺されたヤツらの魂だがな。生きていた時は俺を楽しませて、死んだ後も俺の役に立つ。全く便利なヤツらだぜ」

一「・・・・・」

神「（この外道がぁぁぁ！！）」

天「（何処まで・・・何処まで人の命を弄ぶ気ですか！！）」

神奈と天音の怒りが器を通して俺に伝わって来た。

悦「今のは挨拶代わりだ、次はもっとデカイの行くぜぇぇ！！」

悦楽が再び死霊を呼び起こす。その時、俺の耳に届く声があった

？「・・・お母さん・・・」

一「ッ！？」

その声を聞いた瞬間、俺の中の何かが砕け散った・・・

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

アースラＳＩＤＥ

アースラに戻ったなのは達は、モニターで一成の戦いを見守っていた。いや、なのは達だけではない、アースラに搭乗している全ての人間が一成を見ていた。

な「一成君！！」

ク「どうして動かないんだ!?」

フェ「まさか・・・さっきの攻撃で!?」

ユ「で、でも・・・しっかり防いでいた気がするけど・・・」

アル「じゃあどうして動かないんだい!?」

ユ「ぼ、僕に言われてもわからないよ!!」

プ「肉体ではなく、精神への攻撃だと言うの?」

リ「エイミィ!! 彼のバイタルデータは!?」

エ「正常です!」

リ「どうしたっていうの一成君?あなたがやられてしまったらあの男に対抗できる人間はいない。全てが終わってしまうのよ・・・」

その時、再び悦楽が持つ剣から黒い何かが噴き出した。

ユ「さっきより大きい!?」

ク「あんなものを食らえば、いくら彼でも!!」

な「一成君! 逃げてぇぇぇぇぇ!!」

フェ「私、助けに行く！！」

アル「無茶だよフェイト！！」

フェ「でも！　このまま見殺しになんて出来ないよ！！」

だが、そうしている間に無情にもそれは放たれた。そして

ユ「そ、そんな・・・」

一成は完全にそれに飲み込まれてしまった。

な・フェ「「い、嫌ぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」」

なのはとフェイトが悲鳴をあげながら崩れ落ちた・・・

アースラＳＩＤＥ　ＯＵＴ

悦楽ＳＩＤＥ

悦「クハハハハ！！　何だよ！！　あれだけ大口叩いておきながら瞬殺かよ！？」

秋月の姿は死霊達によって完全に見えなくなっていた。

悦「これでヤツも死霊の仲間入り。どうしてやろうか？ヤツを使って残りの雑魚共を片付けるか？」

ヤツらの悲しみの顔が目に浮かぶ。

悦「そうと決まれば、早速転移して・・・」

ピキッ・・・

悦「ん？　何だ？」

亀裂が入る音に目を向ける。

悦「ば、馬鹿な！？」

秋月を覆っていた死霊の壁に次々に罅が入って行く。そして・・・

パリィィィィィィン！！！

甲高い音を残して死霊達は完全に消滅した。

一「・・・・・」

悦「て、テメェ・・・何を・・・何をしやがったぁぁぁぁぁぁ！？」

悦楽ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＩＮ　ＳＩＤＥ

俺は死霊の奔流にあえて身を任せた。あっという間に俺を飲み込んで行く死霊達。

神「（一成！？　何を！？）」

天「（危険です！！　すぐに脱出してください！！）」

それでも動かない俺の耳に、またあの声が聞こえてきた。

？「・・・お母さん・・・・」

幼い少女の声、それに続いて他の声も聞こえてきた。

？「やめて・・・やめてよぉ・・・・」

？「どうして!?　なんで体が勝手に!?」

？「に、逃げて・・・・」

？「殺したくない。殺したくない!」

？「ごめんなさい・・・ごめんなさい・・・・」

一「（これは・・・悦楽に殺された人達の心の声か?）」

痛々しい声、戸惑う声、許しを請う声、後悔、無念、悲しみが伝わってくる。

一「（生前だけでなく、死して尚苦しみを味わい続けているのか・・・）」

？「・・・お母さん・・・・」

俺の目の前に少女の顔が浮かんだ。

？「お母さん・・・何処？　私を置いて行かないで・・・」

一「（この子の母親は悦楽にとらわれていないのか）」

？「お母さん・・・私の事嫌いになっちゃったの？　だから私を置いて行くの？」

一「・・・それは違うよ」

？「え？」

少女の頭を優しくなでる。

一「お母さんはキミの事を大切に思っているよ。今は別の場所でキミを待っているんだ」

？「・・・本当？」

一「ああ、だからキミも、お母さんが待っているあの場所に行くんだ」

そう言って空を指す。

？「わかった。ありがとうお兄ちゃん」

一「お母さんによろしくな」

？「うん！」

笑顔で消えていく少女。

天「（一成様・・・）」

神「（お主・・・）」

一「あなた達の無念は必ず俺が晴らします。だから、安心して逝ってください」

残りの死霊達に語りかける。

？「本当に・・・本当に私達の無念を晴らしてくれるのか？」

一「約束します」

？「ありがとう・・・」

？「私達の想い、君に託す。必ずヤツを・・・」

一「ええ、砕いてやりますよ」

？「頼むぞ、少年よ・・・」

一人、また一人と昇天する死霊達、やがて完全に消え去り、俺は解放された。

悦「て、テメェ・・・何を・・・何をしやがったぁぁぁぁぁ！？」

悦楽が何か叫んでいる。正直、もうヤツの声は一秒たりとも聞いていたくない。

一「神奈、天音・・・神剣解放だ」

神「（一成！？）」

天「（危険すぎます！！　下手をすれば一成様を構成するマナが！！）」

一「頼む・・・」

ゾクッ！！

神「（か、一成・・・）」

天「（本気・・・なんですね）」

一「ヤツだけは・・・ヤツだけは、俺の全てを以て破壊する。約束したあの人達の為にも」

あの人達の存在が俺の決心を固めた。

神「（・・・わかった）」

天「（そこまでのお覚悟があるのでしたら、もう止めません）」

一「すまないな」

神「（貸し一つじゃぞ？）」

天「（私もですよ？）」

一「ああ、何でも聞いてやるよ」

懐からマナ結晶を取り出し、砕く。

パリン！

悦「な、何をしている？」

答えず次々に結晶を取り出し、砕いていく。

悦「何をしているって聞いてんだよ！！」

一「今から俺の力を見せてやる、貴様の様なチャチな力じゃない、本当の力というものを・・・」

悦「何を言って・・・」

悦楽の言葉は続かなかった。俺の体から今までとは比べ物にならないほどのオーラが吹き出し、マナ結晶を砕いた事のよって周囲に溜まったマナが凄まじい勢いで俺に吸収されていく様子を見て言葉を失ったからだ。

一「はあぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

もっと・・・もっとだ・・・！！

周囲だけではなく、大地からもマナを吸収する。マナが枯渇し、崩れていく時の庭園。

神「（いけるぞ一成！！）」

天「（発動後は急いでください！　あまり時間をかけ過ぎると本当に消えてしまいます！！）」

全ての準備が整ったのを確認し、俺は力を解放する。俺の本当の姿、本当の力を発揮するために。

一「神剣・・・解放！！！！」

刹那、俺の体を銀色の光が包んだ。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

アースラＳＩＤＥ

一「神剣・・・解放！！！！」

咆哮と共に一成の体を銀色の光が包んだ。先ほどから感じていた魔力がさらに高まり、計測機器のメーターはとっくに振りきれていた。

やがて、光が消え失せると、そこになのは達の知っている一成はいなかった。

代わりにそこに立っていたのは、一人の男性だった。身長はかなり高く、１８０後半くらいだろう。

美しい銀髪、鋭い瞳、背中からは四枚の翼が生えていた。

な「・・・・誰？」

なのはの疑問も最もだった。しかし、全員が同じような事を考えていた。

まるで、一成が成長した姿みたいだ・・・と。

その男は一成と違い、一振りの白銀の剣を手にしていた。

男「これが神剣解放・・・これが俺の本当の力・・・これが神奈と天音の・・・・真の姿だ！！」

悦楽に向かって剣を向ける男。その声も、全員が聞き覚えのあるものだった・・・

第二十七話　本当に頭に来ると逆に冷静になる（後書き）

作「あ～～、やっと一成の真の力を解放できたな。長かった・・・マジで長かった・・・ん～～・・・前半部分・・・というか、死霊とのやり取りは必要無かったかな？　どうなんだろ・・・？」

作「一人で話すのも寂しいので、贈り物報告会に移ります」

？「失礼します」

作「あなたは・・・朝凪　夜風様のところの弘太さん！？」

弘「初めまして作者様」

作「あの・・・どうしたんですか？　また何か邪魔を？」

弘「いえ、今回は謝罪に参りました」

作「謝罪？」

弘「・・・踊孤」

八「・・・前回ぶりですね、作者様」

作「げえっ！　八口さん！？」

八「・・・なぜそんなに怯えているのですか？」

弘「踊孤のせいだろ？　だから謝罪に来たんじゃないか」

作「八口さんが」

弘「ええ、前回の作者様への仕打ちに対してのです」

作「・・・ああ」

八「作者様、申し訳ありませんでした。苛立っていたとはいえあの様な事をしてしまって」

作「い、いえ！　こちらこそ、買い物の邪魔をしてしまったようで・・・」

八「許して頂けるのですか？」

作「許すも何も、俺は気にしてないですから」

八「ありがとうございます」

弘「よかったな踊孤」

八「はい」

作「これで一件落着ですね」

弘「そうですね。それでは、私達はこれで失礼します」

八「またいつかお会いしましょう」

作「ええ、さようなら・・・」

作「えっと・・・次は・・・」

？「こんにちは」

作「あなたは・・・緋水様のところの貴哉さん！！」

貴「一人じゃ寂しいだろうと思って話し相手になりに来ました」

作「ううう・・・ありがとうございます」

貴「その前に、緋水から贈り物です。死者蘇生と治療の神ディアンケト、人懐っこいリオレウスです」

作「回復のオンパレードですか・・・あれ？リオレウスって以前にも・・・」

リ「ギャオォオオオオ！！！」

作「来たぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

貴「大丈夫ですよ、人懐っこいですから」

作「んな事言ったって・・・ぎゃあぁぁぁぁぁぁ！！　ブレスキタァァァァァァ！！！」

貴「あれ？」

十分後・・・

作「・・・・・」

ピクピク

貴「大丈夫ですか？」

作「前回も同じような目に遭ったんですよ・・・」

貴「ディアンケト・・・使います？」

作「・・・お願いします」

ディアンケト使用

作「ふぅ・・・助かった」

貴「元気出ましたか？」

作「はい、元気以外のものも出ましたけどね・・・」

貴「？」

作「何でもないです。ありがとうございました」

貴「はい、それでは失礼します」

作「次は・・・清浦　刹那様から、一成にナナジン、神奈にダンバイン、天音にビルバインのデバイスを頂いたぞ・・・使うやつが今いないけど。オーラバトラーか・・・いっけぇぇぇぇ！！　ハイパーオーラ斬りだぁぁぁぁぁ！！！・・・・何やってんだ俺・・・」

作「最後に・・・初めての方だな。リトラ様から一成に疲労回復薬、神奈と天音にカセットテープか・・・内容は聞かない方がいいな。勝手に聞いたら二人に殺されそうだし・・・それにしても・・・この薬、疲労回復って割にはなんだか妙にピンク色をしているけど・・・これが普通なのか？」

第二十八話　あまりにも実力に差があり過ぎると笑うしかない（前書き）

前回は若干シリアスが入りましたが、今回は皆無です！！　さーて・・・お仕置きの時間だ。

第二十八話　あまりにも実力に差があり過ぎると笑うしかない

一「この感覚・・・久しぶりだな・・・」

力が漲り、子どもの姿の時とは比べ物にならない激烈なオーラが周りの景色を歪めている。

？「（我が君・・・）」

俺の頭に、神奈でも天音でもない第三者の声が響いた。

？「（久しぶりだな我が君よ。我を解放するとは・・・余程の事だな）」

威厳のある美しい声。

一「そうだな・・・『刹那』・・・」

彼女と最後に会話したのは何時だろう？

刹「（むっ、我が君よ、忘れてしまったのか？）」

一「何を？」

刹「（我を呼ぶ時は刹っちゃんと・・・そう呼ぶように決めただろう？）」

一「そ、それは・・・」

刹「（まさか・・・約束を破るのか？　我は・・・我は、我が君にそう呼ばれるのを楽しみに待っていたのだぞ）」

一「しかし刹那・・・」

刹「（刹っちゃん）」

一「ぐ・・・せ、刹っちゃん」

刹「（それでこそ我が君だ♪）」

この軽い性格・・・さすが神奈と天音の元の意識だけあるな。

刹「（それで・・・我が君の怒りを買った愚か者は何処にいる？）」

一「ああ、あいつだ」

悦楽を指す。

刹「（なんだ、霊剣ではないか。我が君の力なら我を使わなくても瞬殺できるのではないか？）」

一「ヤツは俺の全力をもって消滅させる。約束したんだ」

刹「（聞かせてくれないか？　その約束というものを・・・）」

俺は刹那に先ほどの出来事を話した。

刹「（なるほど、我が君の一番嫌いなタイプだな）」

一「力を貸してくれ刹那。君の力が必要なんだ」

刹「（ふふっ、我が君よ、それこそ愚かな質問だぞ？）」

刹那の器が光り出す。そして

刹「我の全ては我が君に為に、我が君はただ我に命令してくれればいいのだ」

俺の前に、西洋甲冑を纏い、腰まで伸びた銀色の髪を靡かせながら、赤と青の瞳で悦楽を不敵に見つめる女性が現れた・・・

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

アースラＳＩＤＥ

な「ま、また新しい人が出てきたよ！」

ユ「あの人も霊剣なのかな？」

エ「う、ウソ・・・！？　艦長！　た、大変です！！」

ブリッジにエイミィの驚きの声が響く。

リ「どうしたのエイミィ！？」

エ「あ、あの女の人からロストロギア反応！！　な、何これ・・・ジュエルシードよりずっと強い！！」

リ「なっ！？」

ク「何だと！？」

フェ「ロストロギア反応って・・・」

アル「あの女、ロストロギアを持ってるのかい！？」

プ「それは・・・どうかしらね」

フェ「ど、どう言う事、母さん？」

プ「そもそもロストロギア反応とは、今の技術では解析出来ない未知のエネルギー反応のことを言うのよ」

プレシアが全員に説明する。

プ「失われた古代遺物と呼ばれるロストロギアは、みな例外無く、それ単体で未知のエネルギーを発しているわ。それが観測されたと言う事は、彼女がロストロギアを所持している。もしくは、彼女自身がロストロギア・・・つまり、生体ロストロギアの可能性があると言う事よ」

ユ「生体・・・ロストロギア・・・」

ク「そ、そんなもの聞いた事ないぞ！！」

リ「過去のデータにもそんな物は存在していないわ」

フェ「母さんは知ってたの？」

プ「あくまで仮説、こんな存在私も初めてよ」

改めて女性を見る。大剣を構え男に従う様子は、甲冑姿も相まって、さながら騎士の様だ。

な「綺麗・・・」

その様子に、全員が目を奪われていた。

アースラＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＩＮ　ＳＩＤＥ

刹「さて、我が君よ。久しぶりに解放されたのだ、少しばかり我も暴れさせてもらうぞ？」

そう言って悦楽に対峙する刹那。

悦「なんだよ・・・何なんだよテメェ等は！？　秋月は・・・あのガキはどうしたぁぁぁぁぁ！？」

刹「貴様の目は節穴か？我が君はそこにいるではないか」

汚物でも見るかのような目で悦楽を見る刹那。

刹「貴様の様な下賤な輩に我が君の手を煩わせるわけにはいかない

のでな、我・・・神剣『刹那』が相手をしてやる」

悦「し、神剣だと!?　なんで高位存在があんなガキの元に・・・」

刹「・・・黙って聞いていれば、先ほどからの我が君への数々の暴言、到底許される物ではないな・・・」

悦「ッ!?　ガハッ!!」

一瞬で悦楽の眼前に移動し、首を掴む刹那。

ギリギリッ!

悦「か・・・は・・・」

刹「どうする・・・このまま首をへし折ってやろうか?」

悦「ぐ・・・」

刹「・・・ふんっ」

バゴン!!

悦「ぎゃっ!?」

僅かに残っていた地面に叩きつけられ、苦しげに息を吸う悦楽。

悦「はあっ、はあっ、はあっ・・・」

刹「ライトバースト・・・」

悦「ぎあぁぁぁぁぁ！！！」

爆発と共に、悦楽の右腕が吹き飛んだ。

悦「腕が！！　俺の腕がぁぁぁぁ！？！？！？」

刹「ふんっ、腕一本ぐらいでガタガタ喚くな」

一「いや、普通腕が吹っ飛んだら痛いから」

刹「むっ、そうなのか？　経験が無いからわからないな」

一「経験する方がおかしいがな・・・」

悦「殺す！！　ぶっ殺してやらぁぁぁぁぁ！！！」

刹「やれやれ、ここまでの実力差があるのに向かって来るか・・・頭も弱いのだな」

悦「テメエエエエエ！！！」

刹「いいだろう、我が引導を渡して・・・」

一「刹那」

刹「・・・・」

一「刹那?」

刹「・・・・」

一「・・・刹っちゃん」

刹「何だ我が君?」

何時の間にスルーなんて覚えたんだ?

一「後は俺がやる・・・」

刹「別に、このまま我が始末してもいいぞ?」

一「さっきも言ったが、こいつは俺がケリをつけなければいけないんだ」

刹「・・・そうか」

器に戻る刹那。

刹「（ならば、我が君の戦い、しっかりと見せてもらうぞ）」

一「ああ」

悦「何処だ！？　あの女は何処に行きやがったぁぁぁ！！」

一「彼女は器に戻った」

悦「だったらまずはテメエをぶち殺してやる！！　その後であの女を殺す！！」

一「無理だ。貴様は俺に倒される」

悦「ほざけぇぇぇぇぇ！！！」

最早理性の欠片も無く、獣の様に俺に迫る悦楽。

一「戦いに重要なのは冷静な心、今の貴様など全く脅威ではない」

俺は神剣解放により四枚に増えたハイロゥを羽ばたかせた。

一「オーラフォトンフェザー！」

オーラを纏った数枚の羽が悦楽に突き刺る。

悦「グハッ!!・・・ま、まだだぁぁぁぁぁ!!!」

血を吹き出しながらも俺に向かって来る悦楽。

一「ブレイク・・・」

トリガーとなるワードを呟いた瞬間、羽に内包されていたオーラが臨界を迎え、次々に爆発していった。

悦「ぎゃあぁぁぁぁぁ!!!」

先程の刹那のライトバーストの爆発と相まって、悦楽の体からは煙が噴いていた。

悦「クソッ！　クソッ！　何でだ!?　何で俺がこんな目に遭ってんだ!?　俺の力は・・・俺の力はぁぁぁぁぁぁ!!!」

一「それが貴様の限界だ。罪も無い人々を操り、命を弄んで得た力など・・・所詮はその程度・・・こんな下らない力の所為であの子は・・・」

母親を探して泣いていた少女を思い出す。

一「今度は・・・貴様が狩られる番だ。さぁ・・・己の罪を数えろ・・・」

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

アースラＳＩＤＥ

な「凄い・・・」

圧倒的だった。必死に攻撃しようとする悦楽を、赤子の手を捻る様に容易く流して行く男の姿になのはは見惚れていた。

エ「か、艦長！　今度はあの男の人からロストロギア反応が！！」

リ「・・・もう驚く気も失せたわね・・・」

そんな中、アースラに通信が入った。

？「聞こえるかアースラ？」

それはモニターに映るあの男からだった。

男「リンディさん、聞こえていますか？」

リ「え、ええ・・・」

突然呼ばれ、慌てるリンディ。

男「プレシアさんはそこにいますか？もしいたら話をさせてもらいたいんですが」

プ「わ、私？」

プレシアも狼狽える。

な「ま、待ってください！！」

なのはが声をあげる。

な「一成君・・・ですか？」

ほぼ確信しつつ、なのははは尋ねた。

男「なんでそんな事・・・って、この姿は初めて見せるよな。そうだよなのは、俺は正真正銘の秋月　一成だ」

な「やっぱり・・・」

フェ「ど、どうして大人の姿になってるの？」

一「話すと長くなるんだがな・・・」

苦笑いを浮かべる一成。

ク「一成！！　君からロストロギア反応が出ている！　なんらかのロストロギアを所持しているのか！？」

一「ロストロギア？俺は知らないが・・・」

ク「しかし！　エイミィや他の局員も確認しているんだ！！」

一「そう言われても・・・俺はただ、元の姿に戻っただけだぞ？」

ク「なっ！？」

ユ「元の姿だって！？」

アル「という事は、あんた本当は大人だったのかい！？」

驚愕の事実に全員が声を失う。

リ「なるほどね・・・なら、今までの彼の言動も納得できるわね」

プ「フェイトと同い年とは思えない頭の回転に魔力の強さ、不可解だと思っていたけど、まさか・・・ね」

納得するリンディとプレシア。

な「一成君・・・ううん、一成さんって呼んだ方がいいのかな？」

フェ「ど、どうしよう・・・私ずっと呼び捨てにしちゃってたよ・・・」

あまり重要では無い事に頭を悩ませるなのはとフェイト。

一「いや、別に今まで通りでも・・・」

な「本当に？」

一「ああ」

フェ「よ、よかった～～～」

一「それで、プレシアさん。お話があります」

プ「な、何かしら?」

一「おそらく・・・時の庭園は完全に崩壊します。ですから、先に謝っておきます」

プ「え?」

一「リンディさん」

リ「は、はい」

一「すぐにアースラを防御態勢に移して下さい。俺の攻撃の余波が及ばないようにシールドを展開するのも忘れないように・・・」

リ「あ、あなた何を!?」

一「急いでください。非殺傷設定をする気はありませんので」

その言葉を最後に、通信は切れた。

リ「エイミィ、全乗組員にいつでも対ショック防御が出来る様通達、それと共にシールドの展開を急いで!」

エ「了解!!」

ク「何をする気だ・・・？」

ユ「非殺傷設定をする気は無いって言ってたよね？」

アル「あたしゃあの男が許せない。でも・・・少しばかり同情するね」

ユ「まぁ・・・一成を怒らせた時点であの男の未来は決まっていた様なものだしね」

な「ねえねえフェイトちゃん。一成君のあの姿を見てどう思った？」

フェ「・・・カッコよかった／／」

な「やっぱりそう思うよね！？　いつもの一成君もカッコいいけど、今の一成君も素敵だよね！」

フェ「一成が大人になるとあんな風になるんだ・・・凄く頼もしく見える・・・」

ク「・・・君達は何を言っているんだ・・・」

二人の会話を聞き、クロノが呆れた声を出す。

な「何言ってるの！？　クロノ君はあの姿を見て何も思わなかったの！？」

あまりの剣幕に、若干狼狽するクロノ。

ク「ぼ、僕は別に・・・」

ユ「僕はカッコいいと思ったけどね」

ク「ユーノ!?」

ユ「彼みたいなお兄さんがいたらきっと頼りになるんだろうなぁ」

アル「あたしゃフェイト達と同じだよ。正直・・・惚れちまいそうだよ／／」

ク「アルフまで・・・」

エ「クロノ君わかって無いね～。優しい性格、ルックスは抜群、強さは充分、女の子が惚れる理由としては充分だよ」

ク「そ、そうなのか?」

リ「・・・彼ともう少し早く出会っていたら・・・」

ク「母さん!!」

リ「じょ、冗談よクロノ」

プ「フェイト・・・彼、好きな娘っているのかしら?」

フェ「え？　た、たぶんいないと思うけど・・・」

プ「そう・・・狙っちゃおうかしら・・・」

フェ「か、母さん！？」

プ「ふふっ・・・」

アースラＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＩＮＳＩＤＥ

ゾクッ！

一「ッ！？」

刹「（どうした我が君？）」

一「急に寒気が・・・」

刹「（風邪か？　我が添い寝して温めてやろうか？）」

一「いや、遠慮しておく」

悦「俺が狩られる番だと？　ふざけるな！　俺は常に狩る側の存在だ！！」

悦楽が左手のみで器を振り下ろしてきた。

ガキィィィィィン！！

刹那を叩きつけ、そのまま鍔迫り合いを続ける。

一「狩りをする者は常に自分が狩られる事を覚悟しておかなければならない。貴様にその覚悟はなさそうだがな・・・」

ピキピキ・・・

悦楽の器にヒビが入っていく。

一「覚悟の無い者が勝てる道理など・・・無い！！」

バキィィィィィィン！！

限界を迎えた器が音をたてて砕け散った・・・

悦「ば、馬鹿な・・・俺の・・・俺の器がぁぁ！？」

シュウゥゥゥゥ・・・

器に取り込まれていた残りの人達の魂が解放され、天に昇って行く。

一「生まれ変わったら・・・今度こそ幸せになってください」

殺された人達に黙とうを捧げる。

一「・・・・さて」

悦「ヒィッ！？」

突如踵を返し、逃げ出そうとする悦楽。

一「何処へ行くつもりだ・・・？」

グラスプで縛り上げる。鎖に拘束され、全く身動きがとれない悦楽。

一「さぁ・・・そろそろ終わらせようか・・・」

悦「ま、待ってくれ!!　あんた、俺と契約しないか!!」

一「何だと?」

悦「俺の能力とあんたの力があれば何でもできる!!　全てをあんたの思うがままに出来るぜ!!」

一「・・・何でも?」

悦「ああ!何でもだ!!」

何を思ったのか、いきなり契約を迫る悦楽。

一「・・・いいだろう、契約してやる」

刹「(我が君!?)」

悦「さすが!話がわかるぜ!!」

一「ただし・・・貴様が殺した人達を生き返らせる事が出来たらの話だ・・・」

悦「え?」

俺の出した条件に唖然とする悦楽。

一「どうした・・・何でも出来るんじゃなかったのか？」

悦「そ、それは・・・」

一「貴様には不可能・・・なんだろ？」

悦「ま、待ってくれ！！　それ以外なら何でも・・・」

一「もう黙れ・・・」

悦楽の口を塞ぐ。

一「契約？多くの人を殺し、プレシアさんの人生を弄び、フェイトを泣かせた貴様と契約だと？・・・冗談でも笑えんぞ」

悦「～～～～～！！」

一「それに言った筈だ・・・貴様は殺す・・・と」

俺はその場に悦楽を固定し、詠唱を始めた。

一「闇夜も斬り裂く星のきらめき・・・・・流星よ、今ここにその輝きを！！」

瞬間、空が割れた・・・

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

アースラＳＩＤＥ

エ「か、艦長！！」

リ「今度は何！？」

エ「時の庭園上空に超高エネルギー反応！！　何かが現れます！！」

な「な、何あれ・・・」

フェ「空が・・・割れてる・・・？」

それは異様な光景だった。空に巨大な穴が開き、その中から巨大な流星が姿を現した。

ク「まさか・・・あれをぶつけるつもりか！？」

リ「総員！　対ショック防御！！　あなた達も急いで！！」

な「は、はい！！」

しかし、そう言うリンディを含めた全員がその光景に目を奪われ、固まっていた。

そして・・・

一「スタァァァァ・・・ザッパァァァァァ！！！」

一成の叫びと共に、流星は悦楽を巻き込みながら庭園を破壊していった・・・

アースラＳＩＤＥ　ＯＵＴ

悦楽ＳＩＤＥ

悦「～～～～～～！！」

マズイ！　マズイ！！　マズイ！！！　早くこの拘束から脱出しなければ！！

秋「（狩られる気分はどうだ悦楽？）」

焦る俺に秋月から念話が入った。

悦「（た、助けてくれ！！　俺が悪かった！！　もう人を操ったりしない、だから！！）」

必死に命乞いをする。

秋「（そうやって命乞いをする人が殺されるのを見て楽しんでいたんだろう？なら最期は自分自身の死で楽しむんだな）」

しかし・・・帰って来たのは死の宣告だった。

秋「（じゃあな、来世ではまともに・・・そうだった、霊剣の貴様に来世は無く、ここで完全な消滅を迎えるんだったな）」

悦「（い、嫌だ！　死にたくない！！　消えたくない！！！）」

秋「（さようなら悦楽、貴様の事は・・・すぐに忘れる）」

念話が切れると同時に、凄まじい衝撃が俺を襲った。

悦「！？！？！？！？」

何が起こったのか理解できないまま、俺は永遠に意識を失った・・・

悦楽ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

アースラＳＩＤＥ

エ「・・・艦長、戦闘終了、一成君の勝利です・・・ついでにジュエルシードの反応も消失、次元震も今のので沈静されました。もう、次元断層の危険はありません」

リ「ええ・・・あれを見れば一目でわかるわ・・・」

エイミィが報告するが、結果はモニターでの映像で一目瞭然だった。正直、全員ジュエルシードや次元震の事など頭から消え去っていて、今思い出した。

アル「て、庭園が・・・」

庭園と呼ばれていたものはもう存在していなかった。何一つ残って

無い。全て光と共に消え失せてしまっていた。

な「一成君・・・大丈夫かな？」

ユ「心配する必要ないんじゃないかな？」

ク「ああ、彼の事だ、その内通信でも・・・」

一「終わりました」

突然一成から通信が入った。

ク「・・・ほらな」

な「あ、あはは・・・」

一「これより帰還します。着いたらアリシアちゃんのポッドの所まで案内してください」

リ「何をするつもりかしら？」

一「アリシアちゃんを・・・蘇生させます」

プ・フェ「「えっ・・・？」」

アースラＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＩＮ　ＳＩＤＥ

一「さて・・・最後に一仕事しなくてはな」

アリシアちゃんの蘇生。難しいが不可能ではない。

刹「（我が君よ、大丈夫なのか？　我を解放して大量のマナを失った上に、蘇生魔法など使えば・・・）」

一「それでも・・・やらなければならないんだ」

霊剣の始末は旅人がつけなければならない。

刹「（我が君の頭の固さには困ったものだ。まぁ・・・そこが我が君の良き所だがな）」

一「ありがとな・・・刹っちゃん」

刹「（ッ！？）」

一「どうしたんだ？」

刹「（我が君よ・・・不意打ちは卑怯だぞ・・・／／）」

一「？」

刹那の様子を不思議に思いながら、俺はアースラに帰還した。

この物語を大団円にするために・・・

第二十八話　あまりにも実力に差があり過ぎると笑うしかない（後書き）

作「ここに来て新キャラ・・・神剣『刹那』です！！」

刹「よろしく頼む」

作「ちなみに、永遠神剣シリーズに永遠神剣地位の『刹那』と言う神剣がありますが、全く関係ありませんのであしからず」

刹「しかし・・・何故我はこんな所にいるのだ？　我が君は何処にいる？」

作「一成達は最終決戦中と言う事で、最近ここには来ていない」

刹「では、何故我を呼んだ？」

作「そりゃあ、読者の方に紹介しておこうと思って・・・」

刹「我の事は本編を見れば理解できるだろう」

作「そ、そうだけど、お前だって自分の事知ってもらいたいだろ？」

刹「我は我が君に理解してもらえればそれで充分だ・・・失礼する」

作「・・・行ってしまった。すみませんみなさん、彼女ツンデレなもので・・・」

刹「ライトバースト！」

作「ぎゃあぁぁぁぁぁぁ！！」

刹「聞こえているぞ・・・余計な事を言うな」

作「す、すみません・・・」

作「さて、贈り物報告会でもするか。まずは・・・朝凪　夜風様からきょうかの禁書を四冊頂いたぞ。なになに・・・強化、狂化、杏花、鏡霞の四冊で、効果はそれぞれ、暴走する『狂化』身体強化、物質強化の『強化』魔力で出来た花びらを操れる『杏花』鏡による魔法反射、霞による攻撃回避の『鏡霞』・・・か。開いた瞬間に印が刻まれるのか、一成達が帰って来たらロシアンルーレット方式で全員に開かせるか」

作「次は・・・緋水様からか」

貴「こんにちは」

作「貴哉さん！　また来て下さったんですね」

貴「また届けに来ました。今回は栄養剤とマナ水晶×３０、俺が作ったマナを回復させるペンダントを送ります」

作「おお！　ありがとうございます！！」

貴「前回は大変でしたね」

作「ええ、でも今はすっかり仲良しですよ」

リ「ぐるるるる・・・」

貴「おお！　懐いてる！！」

作「いや～～～最初は怖かったけど、こうしてみたら可愛いもんですよ」

ペロペロ

作「オイオイ、くすぐったいって♪」

ペロペロ

作「止めろって・・・」

ペロペロ

作「ちょ、おま・・・」

貴「もしかして・・・味見してるんじゃないですか？」

作「ははは・・・まさか・・・」

パクッ

貴「あ、食われた・・・」

・・・・・・

作「こ、今度こそマジで死ぬかと思った・・・いつの間にか貴哉さんも帰った様だし・・・続けるか。最後は・・・清浦　刹那様からフルーツパフェを頂いたぞ。美味そうだが、食ったら一成に殺されるに決まってるし・・・どうしよう・・・？」

無印編最終話　ご都合主義だろうが何だろうがハッピーエンド以外は認めん（前

いよいよ最終話・・・今回のサブタイトルは俺の心からの思いです。
こんな駄文を今まで読んで下さった皆様、本当にありがとうございました。

アースラに帰還すると、全員が俺を待っていた。

一「戻りました、早速アリシアちゃんの所へ・・・」

リ「その前に、ちょっといいかしら？」

一「なんですか？」

ク「君には聞きたい事が山ほどあるんだ」

な「一成君、あの女の人は誰？」

フェ「神奈さんと天音さんは？」

プ「アリシアを蘇生って・・・どう言う事！？」

次々に俺に質問してくるなのは達。

一「落ち着いてくれ、順番に説明するから」

その時、器が光り、再び刹那が現れた。

刹「何だ？　我が気になるのか？」

一「刹那」

刹「我が君よ、さっき刹っちゃんと呼んでくれたではないか」

一「今は勘弁してくれ」

な「あ、あの・・・あなたは？」

刹「我は神剣『刹那』よろしく頼むぞなのは」

な「え？　私の名前・・・」

刹「汝等の事は神奈と天音の記憶を通して知っていたからな」

アル「ど、どう言う事なんだい？」

刹「神奈と天音・・・人霊剣『神威』と『天翔』は我、神剣『刹那』が砕かれて出来た剣なのだ。故に、二人の記憶、意識、感覚は全て我にも伝わっている」

ユ「砕かれた？」

刹「はるか昔・・・ある者との戦いに敗れてな。それからずっと我は封印されていた・・・我が君に出会うまで」

フェ「一成と？」

刹「我を解放できるほどの力を我が君は秘めていた。神剣解放が可

能な程の膨大なオーラをな」

一「俺ってそんなに凄かったのか？」

刹「我が君はもっと自分に自信を持った方がいいぞ。我を使っている時点で充分証明されているのだからな」

な「それじゃあ・・・一成君のその姿は？」

刹「どうせなら我が君の凛々しい姿を見ながら戦いたいと思ってな。我を解放する時は常にこの姿になる様にしてもらっている」

一「え？　確か・・・子どものままではオーラに体が耐えきれないから、刹那を解放する時は元の姿に戻る様に・・・じゃなかったか？」

刹「・・・とまぁ、そう言う事だ」

一「流すな！」

ユ「さ、さすが神奈さんと天音さんの元になった人だな。さっきまでの様子と全然違う・・・」

ユーノが渇いた笑いを浮かべた。

プ「それで一成、アリシアの事は・・・」

一「ええ、プレシアさん、アリシアちゃんは事故で亡くなったんで

すよね？」

プ「・・・そうよ・・・私の所為で・・・」

一「悦楽が言っていたでしょう？あの事故はプレシアさんの所為ではありません」

プ「・・・ええ」

一「寿命等の自然な死でしたら不可能ですが、事故等の他の原因で亡くなった人の蘇生は可能です」

プ「ほ、本当に！？」

一「はい」

プ「お願い一成！！　私に出来る事は何でもするわ！！　だから・・・だからアリシアを！！」

一「わかってます、その為にアリシアちゃんのポッドを回収してもらったんですから」

プ「じゃあ！」

一「ですが・・・一つだけ約束してください。フェイトを・・・あの娘を決して蔑ろにしないと」

フェイトを見つめる。

フェ「母さん・・・」

もし、プレシアさんがフェイトを捨てる様な事があれば俺は・・・

プ「・・・馬鹿な事を言わないで一成」

そう言って優しくフェイトを抱きしめるプレシアさん。

プ「自分の娘を蔑ろにする親が何処にいるの？この子は私のもう一人の娘よ」

フェ「か、母さん・・・」

プ「ふふっ、アリシアに紹介しなくちゃね。あなたの妹だって・・・」

フェ「母さん！！」

プレシアさんの胸で涙を流すフェイト・・・これなら大丈夫だな。

刹「親子か・・・いいものだな」

一「そうだな」

刹「我が君よ、我等も子どもを作ってみるか？・・・っと、その前に夫婦にならなければな。早速婚姻の儀を・・・」

一「性質の悪い冗談は止めてくれよ・・・」

刹「むっ、我は本気だぞ。神奈と天音もそう思っているのだからな」

何考えてるんだあの二人？

リ「死者の蘇生・・・本当にそんな事が」

ク「本気なのか一成？」

一「もちろんだ。それと・・・この事はここにいる人達だけの秘密にしてくれ」

刹「心配するな我が君、いざとなれば我がこの艦を・・・」

リ「・・・わかりました」

ク「母さん！？」

リ「クロノ・・・刹那さんの目は本気よ」

刹「理解が早くて助かる」

一「脅すなよ・・・」

刹「何を言う？　我はただお願いしようとしただけだ」

俺は全員を引き連れて、アリシアちゃんの元へ向かった。

一「それじゃあプレシアさん、アリシアちゃんをポッドから出してあげてください」

プ「わかったわ」

俺の指示でプレシアさんがアリシアちゃんをポッドから出し抱えあげる。

一「プレシアさん、このシーツを」

プ「ええ、ありがとう」

何も身につけていないアリシアちゃんの体をシーツで包む。

ク「・・・・・／／」

ユ「・・・・・／／」

その様子に何故か顔を赤くするクロノとユーノ。

刹「・・・・スケベ」

ク・ユ「「ッ！？」」

刹那が何か言うと二人ともかなり狼狽していた。何言ったんだ？

一「そのままベッドに寝かせてください」

アリシアちゃんがベッドに横たわる。死んでいるようには見えず、まるで眠っているようだった。

一「刹那・・・」

刹「うむ」

刹那が再び器と同化したのを確認する。

一「さて、アリシアちゃんの前に・・・プレシアさん、あなたの病を治します」

プ「わ、私？」

一「せっかくまた娘さん達と暮らせるようになるのに、あなたが先に亡くなったら意味が無いでしょう？」

プ「でも・・・私は不治の病を・・・」

フェ「そんな！？」

不治の病か。まぁ、関係無いけど。

一「大丈夫です。今の俺に不可能は大体ありません」

ク「だ、大体って・・・」

アル「本当に大丈夫なのかい？」

一「任せろ」

右手に清緑のマナを凝縮する。

一「プレシアさん、俺の手を握ってください」

プ「え、ええ・・・」

おずおずと俺の手を握るプレシアさん。

一「癒しのマナよ・・・彼の者に安らぎと癒しを、ヴァイタルエクステンション！」

プレシアさんの体が緑色の光に包まれる。

一「・・・・どうですか？」

プ「何だか体の内側から暖かくなってきたわ・・・」

プレシアさんの顔に徐々に生気が戻って来た。

一「これで治療完了です」

フェ「ど、どうなの・・・母さん・・・？」

プ「・・・ええ、まるで生まれ変わったみたい。体の気だるさが無くなってる・・・」

一「念の為に、後で検査を受けてください」

プ「わかったわ・・・ありがとう一成」

フェ「一成！　母さんを助けてくれて本当にありがとう！！」

一「礼を言うのは早いですよ。これからが本番です」

再び清緑のマナを手のひらに凝縮する。

一「はあぁぁぁぁぁぁぁ・・・・」

先程よりも大量のマナが俺から失われていくのがわかる。

一「ぐぅ・・・！」

な「一成君！？」

ユ「かなり苦しそうだけど大丈夫なの！？」

一「まだ・・まだだ・・・！」

これでは足りない・・・もっとだ！

刹「（我が君！　無理をするな！　これ以上は！！）」

一「ぐはっ！！」

血を吐きだす。急速にマナが失われた事による弊害が起こりだした。

ク「一成！　止めるんだ！！」

リ「このままじゃアリシアちゃんを助ける前にあなたが・・・！！」

一「大丈夫・・・大丈夫です」

俺の手のひらのマナが徐々に結晶化してきた。

一「もう少しだ・・・」

血涙が頬を伝う。体中が悲鳴をあげていた。

一「はあぁぁぁぁぁぁ！！」

最後の力を振り絞る・・・やがて俺の手のひらに、小さなマナ結晶が出来上がった。

一「か、完成だ・・・」

プ「これは・・・？」

一「命を司るマナを結晶化した物です。俺が神剣解放の時に砕いた結晶とは純度が全然違います」

フェ「命・・・」

ユ「それをどうするの？」

一「この結晶をアリシアちゃんに打ち込んで再び命を宿らせる。つまり俺の命をアリシアちゃんに分け与える」

プ「命を分け与えるって・・・まさか！？」

プレシアさんが気付いたようだった。

一「簡単に言うと寿命ですね。ざっと五十年分くらいかな？」

な・ユ・フェ・アル・リ・ク・プ「「「「「「「「「「なっ！？」」」」」」」」」」

俺の言葉に全員が驚愕する。

ユ「五十年分だって！？」

アル「あんた死ぬ気かい！？」

一「問題ない。俺、普通の人より長生きだから」

と言うか霊剣がある限り死ぬ事は無いしな。

刹「（チートだな）」

一「（ああ、我ながら都合のいい話だ）」

プ「どうしてそこまでして・・・」

フェ「そうだよ一成！　なんでそこまで無茶するの!?」

一「霊剣の始末は旅人がつける。それに・・・」

プレシアさんとフェイトを見つめる。

一「友達の幸せの為ならこれくらい何でもないさ」

気にしないでと言う意味を込めて微笑む。

一「よし、仕上げだな・・・」

アリシアちゃんの胸元にマナ結晶を置くと、徐々に体に取り込まれ

ていった。しばらくすると、淡い光が彼女を包んでいった。

光が収まると、そこには先程までと変わらないアリシアちゃんの姿があった。

一「・・・・」

全員が固唾をのんで見守る中、一つの変化が起こる。

ピクッ・・・

プ「ッ!?」

アリシアちゃんの瞼が僅かに動いたのだ。さらに

ア「う・・ううん・・・」

閉じられていた口が開き、声が聞こえた。

プ「アリ・・・シア・・・・?」

フェ「姉・・・さん・・・・？」

その声に反応したのか、ゆっくりと瞼を開くアリシアちゃん。そして

ア「あれ？　母様だ・・・おはよ～～～」

満面の笑みでプレシアさんに挨拶するアリシアちゃん。

プ「アリシア・・・アリシアァァァァ！！」

涙を流しながらアリシアちゃんを抱きしめるプレシアさん。

ア「うわわ！？　ど、どうしたの母様！？」

フェ「姉さん！！」

フェイトもアリシアちゃんに抱き付く。

ア「え？　あなたはだあれ？」

フェ「私は・・・」

プ「あなたの妹よアリシア」

ア「えぇ！？　本当に！？」

プ「ええ、本当よ」

ア「わ～～い！！　うれしいな～～～！！　ねえ、あなたのお名前は？」

フェ「ふぇ、フェイト・・・」

ア「かわいい名前だね。よろしくねフェイト！！」

フェ「うん・・・うん・・・！！」

こちらも涙を流すフェイト。

一「よかった・・・これで・・・すべ・・・て・・・・」

その様子を見届けながら、俺は意識を失った・・・

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

刹那ＳＩＤＥ

刹「やれやれ・・・気絶するまで力を使うとは・・・」

意識を失い、倒れる我が君を支える。

な「一成君!!」

慌ててなのはが近づいてきた。

刹「心配するななのは。気を失っただけだ」

ユ「大丈夫なんですか?」

刹「ああ、力を使いすぎた後はいつもこうなる」

我が君の顔を見る。満足そうな顔をしていた。

刹「・・・今なら襲っても・・・」

な「刹那さん?」

刹「はっ!!・・・何でもない。とりあえず我が君を休ませてやりたいのだが?」

リ「そうね・・・落ち着いた事だし、いったん家に帰ってもらった方がいいわね」

な「私もいいですか？」

リ「もちろんよ。フェイトさん達はこのままアースラで休んで頂いて構いません」

フェ「あ、ありがとうございます」

リ「何かあったらこちらから連絡しますから、一成君に伝えておいてください」

刹「了解した。失礼する・・・」

我は転移魔法を発動させた。目指すは我が君の家。

刹「・・・そうか、我の家でもあるのだな」

帰ったら早速我が君と・・・

キィン！

刹「むっ、もう時間切れか・・・」

解放の限界が近づいてきた。もう少しすれば、再び我は神奈と天音にわかれる。

刹「久しぶりに我が君と過ごそうと思ったのだが・・・残念だ」

今度は何時会えることやら・・・

刹那ＳＩＤＥ

ＩＮ　ＳＩＤＥ

一「（ああ、これは夢だな・・・）」

気がつけば、俺は夢の中を彷徨っていた。

刹「我が君・・・」

そんな俺の前に刹那が現れた。

一「刹那？　どうしてここに？　それに・・・俺は一体・・・？」

刹「我が君は力の使いすぎで倒れたのだ。我は我が君に別れを言いに来た」

一「そうか・・・今回も助かったよ。ありがとうな」

刹「礼など不要だ。我が我が君に尽くすのは当然の事だからな」

一「そうか・・・」

刹「しかしこのまま終わるのもなんだな・・・我が君よ、少しお願いがあるのだが」

一「何だ?俺に出来る事なら喜んでするけど」

刹「むしろ我が君にしか出来ない事だ」

一「俺にしか・・・?」

瞬間、刹那の目が優しいそれから獲物を狙うそれに変わった。

刹「我が君よ・・・我と契ってはくれぬか?」

一「契る?」

俺と刹那はすでに契約しているはずだが・・・?

刹「我が君が想像しているのとは違う。我が言っているのは男女の契りだ」

一「・・・何いいいいいい!?」

男女の契りって・・・あれだよな?

一「な、何でいきなりそんな事!?」

刹「我が君が悪いのだぞ。あんな無防備な姿を我に見せて・・・正直、もう我慢の限界だ」

俺に迫る刹那・・・正直言ってもの凄く怖い。

一「クッ!!」

とりあえず逃げる。

刹「逃がさんぞ・・・」

・・・拘束された。

一「や、止めろ！！」

刹「緊張しているのか？　安心しろ、我がリードしてやる・・・我も初めてだがな」

一「そう言う問題じゃない！！」

マズイ！！　早く夢から覚めなければ！！

一「あ・・・」

祈りが通じたのか意識が薄れてきた。

刹「なんだ・・・時間切れか」

とても残念そうな刹那の顔を見ながら俺は再び意識を失った。

刹「我が君を頼むぞ神奈、天音・・・」

刹那の最後の呟きは俺の耳には届かなかった・・・

・・・・・・・・・

？「・・・り」

一「ん・・・」

？「・・・様」

聞こえてきた声に目を開ける。

天「一成様！」

神「ようやく目覚めたか」

俺の顔を覗き込んでいる神奈と天音の姿が見えた。

一「ここは・・・？」

天「私達の家です」

神「刹那のヤツが一成をここまで運んで来たのじゃ」

一「刹那が・・・」

神剣解放の時間が切れ、俺の体は子どもの姿に戻っていた。

一「俺は何日寝ていた？」

天「三日です」

神「リンディから言伝があるぞ、「プレシアさんの事は私に任せて、悪いようにはしないから」・・・だそうじゃ」

天「全ての原因は悦楽ですからね、プレシアさんも被害者と言う事で、罪はほとんどないそうです」

一「そうか・・・よかった」

神「そうじゃ一成、フェイトがお主に会いたがっておったぞ」

一「そう言えば、俺に話があるって言ってたな」

天「今から会いに行ってみますか？」

一「そうだな、行こう」

天「では連絡しておきます」

フェイトと・・・何故かなのはに連絡して、俺は集合場所の公園に向かった。

フェ「あ、一成！」

な「もう体は大丈夫なの？」

公園に着くと、先に来ていたフェイトとなのはが話をしていた。

一「ああ、心配かけたな」

な「もう、無茶しないでよね！」

フェ「私・・・本当に不安だったんだから」

一「むっ・・・すまん」

心配させた事は事実なので何も言い返せない。

プ「ふふっ、あんなに強かった一成も、女の子の前じゃ形無しね」

一「プレシアさ・・・」

プレシアさんの姿を見た瞬間に固まってしまった。

プ「どうしたのかしら？」

一「プレシアさん・・・若返ってません？」

見れば、プレシアさんはかなり若返っていた。それこそ別人のように。

プ「ええ、理由はわからないけど、事故が起きた時の年齢くらいに戻ったみたいなの」

一「・・・・」

ヴァイタルエクステンションの効果が強すぎたみたいだな。

プ「私としては嬉しい限りなのだけれどね」

そう言って微笑むプレシアさん。

一「・・・まぁ、いいか・・・」

本人が喜んでるし。

な「一成君、私達もう少しお話してるから」

フェ「後で私の話も聞いてね？」

そう言って近くのベンチに座る二人。

プ「そうだわ、もう一人あなたに会いたがっていた子がいるんだけど」

一「え？」

俺が聞き返そうとした瞬間

？「兄様～～～！！」

一人の少女が俺に抱きついてきた。

一「あ、アリシアちゃん！？」

ア「兄様～～～～♪」

俺の胸に顔をうずめるアリシアちゃん。

プ「あらあら、大胆ね」

一「ぷ、プレシアさん。兄様って・・・？」

プ「あら、アリシアはあなたの命を分けてもらって生き返ったのでしょう？　つまりあなたとアリシアは繋がっている・・・だからあなたはアリシアの兄というわけよ」

一「意味がわかりません！！」

ア「兄様・・・私が妹じゃ嫌・・・？」

笑顔から一転、捨てられた子犬の目で俺を見つめるアリシアちゃん。

一「ぐっ・・・！！」

ア「ウルウル・・・」

一「・・・いや、嬉しいよ」

無理だ。あの目には勝てない。

ア「本当！？」

一「・・・ああ」

ア「わ～～い！！　兄様～～～♪」

プ「よかったわねアリシア」

ア「うん！！」

一「・・・プレシアさん」

ジト目で見つめる。

プ「さあ、次はフェイトが一成に話があるそうだから私達は離れていましょう」

スルーされた。

ア「は～～い」

そう言ってベンチに座る二人、それと同時にフェイトとなのはがやって来た。

な「一成君」

一「もう話はいいのか？」

な「うん、フェイトちゃんとお友達になったの」

一「え？」

今さら？

な「私達、知り合って随分経つけど、お互いちゃんとお友達になろうって言って無かったから」

フェ「改めてお願いしたの「私とお友達になってください」って」

な・フェ「「ね～～♪」」

そう言って笑う二人。

一「そうか・・・」

な「もちろん、一成君もお友達だからね？」

フェ「いい・・・かな・・・？」

一「俺は前からフェイトの事は友達だと思ってたぞ」

フェ「ほ、本当に？」

一「ああ・・・そうだ」

俺は懐から首飾りを取り出した。

一「フェイトに渡そうと思ってたんだ。友達の証に受け取ってくれ」

オーラフォトン結晶で出来た首飾りを渡す。今回は稲妻の形をした結晶がついている。

フェ「綺麗・・・本当にもらっていいの？」

一「ああ」

な「私ももらったんだよ」

懐から首飾りを取り出すなのは。どうでもいいが、スタンバイ状態のレイジングハートを首にかけるなら腕輪にした方がよかったな。

フェ「・・・ありがとう」

満面の笑みで受け取るフェイト。

一「それでフェイト、俺に話って？」

気になっていたので尋ねる。

フェ「う、うん・・・えっとね、一成・・・」

な「あ、じゃあ私はベンチに戻ってるね」

そう言って席を外すなのは。

一「気を使ってくれたんだな」

フェ「ありがとうなのは・・・」

改めてフェイトと向き合う。しばらくの沈黙の後、ゆっくりと口を開いた。

フェ「一成・・・本当にありがとう。あなたのおかげで母さんも元気になって、姉さんも生き返る事が出来た」

一「俺は当然の事をしただけだよ」

フェ「そう言っていつも私を助けてくれたよね？初めて会った時も・・・再会した時も・・・いつだって一成は優しかった」

一「・・・・・」

フェ「私がクローンだって知った時も、私は私だって言ってくれたよね？・・・本当に嬉しかったんだよ？」

一「フェイト・・・」

フェ「一成といると楽しい。胸が温かくなる。ずっと不思議に思ってたけど、今なら分かるの」

一「フェイト？」

俺に近づくフェイト。そして

チュッ

一「なっ！？！？！？」

そのまま俺の頬にゆっくりとキスをした。

フェ「私は・・・あなたが好きです。初めて会ったときからずっと・・・／／」

そう言ってはにかむフェイトを見て、俺は素直に可愛いと思った。

一「・・・・」

フェ「・・・一成？」

バタン！！

フェ「え？」

だからと言って耐えられる筈もなく、せっかく目覚めたと言うのに、
俺はまた意識を失った・・・

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

フェ「か、一成！！」

な「どうしたのフェイトちゃん！？」

フェ「なのは！！　一成が・・・！！」

な「か、一成君!?」

フェ「母さん!!　一成が・・・一成が・・・!!」

プ「あらあら、あの程度で倒れるなんて・・・情けないわね」

ア「どうしたの兄様!?」

慌てて一成の周りに集まるなのは達。

天「・・・行かないんですか?」

神「ふっ、今あの場に乱入するのは無粋と言うものじゃ」

天「ふふっ、そうですね」

それを草葉の陰から見守る神奈と天音。

アル「フェイト～～～!　よかった・・・本当によかったよぅ～～～～!!」

先程からずっと泣いているアルフ。

しかし、全員の心には嬉しさが込み上げていた。

な「は、早くお家に連れて行かないと！！」

少女は孤独から解き放たれた・・・

フェ「一成！！　しっかりして！！」

造られし娘は家族の絆を取り戻した・・・

プ「ふふっ、これから面白くなりそうね」

母は二人の娘との新たな時間を得た・・・

ア「兄様～～！！」

無垢な子は二度目の生を授かった・・・

アル「フェイト～～～～！！」

使い魔は再び主の笑顔を見る事が出来た・・・

旅人の手により、彼女達は新たな明日を迎える。それがどういうものになるかは誰にもわからない。

しかし・・・少なくとも、幸せな日々は約束されるのではないだろうか？

そう・・・愛する者と過ごす幸せな日々を・・・

魔法少女リリカルなのは　永遠の旅人無印編・・・・・・完

無印編最終話　ご都合主義だろうが何だろうがハッピーエンド以外は認めん（終）

作「・・・終わった・・・終わったぜぇぇぇぇぇぇ！！」

一「ただいま～・・・って、また作者が喚いてるぞ」

天「変わりないようですね」

神「少しは成長して欲しいものじゃがな」

作「おお、帰って来たか！！　お前らがいなかった間大変だったんだぞ。他の作者様のキャラに殺されかけたり、リオレウスに食われたり、原作キャラに勘違いされたあげく、アッーー！！　されたり」

一「どうせお前が原因だろ？」

神「やれやれ・・・仕方の無いヤツじゃな」

刹「ああ、全くだ」

天「え？」

刹「我等の産みの親なのだからもう少ししっかりして欲しいものだな」

神・天「「・・・・・」」

刹「ん？　どうしたのだ？」

神「せ、刹那!?」

天「どうしてあなたがここに!?　神剣解放はしていないでしょう!?」

刹「問題ない。何せ・・・」

一「この後書きは何でもありだから・・・だろ?」

刹「さすが我が君。その通りだ」

作「思いのほか好評でな、本編じゃあまり出せないから後書きに出すようにした」

刹「と言うわけで、今回から我もレギュラーだ。よろしく頼むぞ先輩方」

神「そうじゃったのか・・・」

天「作者にしては考えましたね」

作「さて、無印編も無事にハッピーエンドを迎えた事だし、次回から日常編でもやるか」

一「あれ?　続けるのか?」

作「ああ、続編を望まれる方がいたからな。その期待には応えたい」

神「大丈夫なのかの?」

天「Ａ，ｓもＳｔｓも無印編以上に複雑な話ですよ？」

刹「特に、Ｓｔｓなんか全く知識がないのだろう？」

作「何とかするさ」

一「・・・大丈夫なのか？」

神「日常編と言ったな・・・では是非、妾と一成のデートを！！」

天「何を言っているのです！！　私と一成様の時間が先です！！」

刹「ふむ・・・我と我が君のめくるめく官能の日々を・・・」

一「ちょっと待て！！　何だよそれ！？　特に最後！！　駄目に決まってるだろ！！」

刹「むぅ・・・」

作「とりあえず、全員のデートはやりたいな。最近すずかやアリサの出番も無かったし」

一「デートって・・・誰と誰が？」

作「お前とみんな」

一「・・・・・」

一「・・・・・」

神「現実逃避しておるの」

天「では僭越ながら私が贈り物報告会の進行を」

刹「まずは・・・清浦　刹那様から、我に王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）と浴衣を頂いたぞ」

天「ああ！！　刹那ずるいです！！」

刹「何がだ？・・・ん？　手紙か・・・「刹姉と呼んでいいですか？」・・・いいだろう」

一「いいのかよ！！」

神「おお、復活したぞ」

刹「我を好いてくれているのだろう？　ならば喜んでそう呼ばれよう。しかし・・・刹っちゃんは許してくれ。我が君専用の呼び名だからな」

天「・・・本当に軽いですね」

刹「汝等の元だからな」

天「次は・・・緋水様からです」

貴「また来ました」

一「貴哉さん!?・・・またって?」

貴「最近作者さんが寂しそうだったのでお邪魔させてもらってたんですよ」

一「そうですか・・・あの野郎・・・また気を使わせやがって・・・」

貴「一成さん?」

一「何でもないですよ」

貴「そうですか?　今回の贈り物は俺の作ったクッキーと青いペンダント、赤い指輪です」

天「ありがとうございます」

貴「ちなみに、クッキーの中には一つだけわさび漬けが入っています」

神「むぅ・・・パッと見じゃわからんの」

刹「我に任せろ・・・これだ」

貴「え?　わかるんですか?」

刹「神剣に不可能は無い」

貴「はぁ・・・」

刹「むっ、信じていないな・・・おい作者、これを食ってみろ」

作「いいの？　頂きま～す」

神「どうじゃ？」

作「ぎあぁぁぁぁぁぁ！？！？！？」

一「・・・当たりの様だな」

刹「ふっ、当然だ」

刹「最後に・・・アルフォンス殿から霊剣撃滅用に核弾頭と波動砲を頂いたぞ」

一「質量兵器じゃねえか！！」

天「なのはの世界では使えませんね」

刹「なに、こっそり使えばバレはしないさ」

神「そうじゃな、せっかく頂いたんじゃし、使っても別に・・・」

一・天「「却下！！（です！！）」」

神・刹「「むぅ・・・」」

一「これで贈り物報告会は終わるが、最後にもう一度挨拶しておくか」

神「うむ、この様な稚拙な小説を最後まで見てくれた皆に礼を言うぞ」

天「感想も沢山頂いてとても嬉しかったです」

刹「特に、更新するたびに感想を送ってくれた数人の方々には最上の感謝を・・・」

一「贈り物も沢山頂きありがとうございます。いつか改めて全て紹介したいと思います」

天「これから先、どうなるかわかりませんが」

神「続けて応援してくれる事を願っておるぞ」

一「それでは、再び皆さまと会える日を願って・・・」

一・神・天・刹「「「「さようなら～～～～！！！」」」」

作「おいいいいいい！！　俺にも言わせろよ！！　ちくしょおおおお！！！　結局最後もこうなるのかよおおおおおおおおおお！！！！！」

秋月一成の優雅でも穏やかでもない日常編第一話　転入生が入ったクラスにまた

予告通りしばらく日常編やります。今まで以上にグダグダに馬鹿やって行きます・・・不評なら止めますけど。

あと、アリシアとフェイトは同い年と言う設定にしています。その方が都合がいいので。

名前についてですが、アから始まるキャラが三人になりましたので、それぞれ少し変えます。

アリサ→ア

アルフ→アル

アリシア→アリ

・・・とまあこの様に。

悦楽との戦いから一週間、俺達はそれぞれの暮らしに戻った。

なのははすずかやアリサと今まで会えなかった分を取り戻すかの様に一緒に過ごし・・・

ユーノは再び高町家でお世話になっている。

フェイト・アルフ・プレシアさん・アリシアちゃんは、以前からフェイトが使っていたマンションで家族みんなで幸せに過ごしていた。

戦いの後、結局プレシアさん罪に問われなかった。あの時のフェイトの喜び様は今でも鮮明に思い出せる。

そんなある日、俺はいつもの様になのは達と一緒に学校へ向かった。

まさか・・・あんなとんでもない事が俺を待ち受けているとも知らず・・・

ア「ねぇなのは。前に話してた友達の・・・えっと・・・」

な「フェイトちゃん？」

ア「そうその子。いつになったら紹介してくれるの？」

な「それなんだけど・・・何だか最近忙しいらしくて時間が取れないらしいの」

す「そっか。残念だね」

な「フェイトちゃんのお母さんに聞いたら手続きがどうだって・・・」

す「手続き？」

な「何の手続きかって聞いても、秘密って言って教えてくれなかったし・・」

ア「わかんないわね。一成、あんた何か知らないの？」

一「いや、俺もわからない」

何してるんだプレシアさん？

その時、予鈴が鳴り、先生が教室に入って来た。

先「みなさん、お早うございます」

全員「お早うございま～～す！！」

先「いきなりですがみなさんに報告があります。なんと・・・秋月君に続き、このクラスにまた新しいお友達が増えま～～す♪」

一「・・・何だって？」

先生の言葉に、クラスがどよめいた。

ア「ど、どう言う事？」

す「ずいぶん急な話だね」

一「と言うか、続けて同じクラスに入れるってどういうつもりだ？」

な「どんな子かな？」

男子Ａ「先生！　野郎ですか？　それとも女の子ですか？」

先「女の子よ。しかも・・・とびっきりの美少女！　さらに・・・双子！！」

男子達「ウオォォォォォォォ！！！　キタァァァァァァァァァ！！！！」

先生からもたらされた情報に狂喜乱舞する男子・・・こいつら本当に小学生か？

先「外国から来た子達だから、日本についてよくわからないところがあるかもしれないの。もし困ってたらみんな助けてあげてね？」

男子達「サーー！！　イエッサーーー！！！」

後に、このクラスの女子の一人が「あの時、初めて男子全員が一つになった」と語ったそうだ。

一「・・・」

な「どうしたの一成君？」

一「・・・嫌な予感がする」

な「？」

先「それじゃ、入ってください」

？「は～い！」

？「は、はい・・・」

な「え？　この声って・・・」

その声を聞いた瞬間、予感は確信に変わった。

扉を開いて入って来た二人の少女は、俺がよく知っている二人だった。

男子Ａ「うおぉぉ！　マジで可愛い！！」

男子Ｂ「やばい・・・これはやばいって！！」

男子Ｃ「今日からこの娘達と同じクラス・・・俺死ぬかも・・・」

・・・男子はもう黙れ。

先「じゃあ、自己紹介をしてください」

アリ「アリシア・テスタロッサです！　よろしくね～～♪」

フェ「ふぇ、フェイト・テスタロッサです・・・よろしくお願いします・・・／／」

一「・・・なんでだよ・・・」

手続きって・・・転入手続きの事だったのか。

女子Ａ「見て見て、あの子赤くなってる」

女子Ｂ「可愛い～～～♪」

女子Ｃ「うわ～～、きれいな金髪」

二人の様子に、女子もすっかり夢中になっていた。

す「フェイトちゃん・・・って」

ア「なのはが言ってた子じゃない」

な「フェイトちゃん！　アリシアちゃん！」

フェ「な、なのは！？」

アリ「あ～～！　なのはちゃんだ～～～♪」

先「あら、高町さんお知り合い？」

な「は、はい。お友達です」

先「それはちょうどよかったですね。何かあったら頼りになってあげてくださいね？」

な「はい！」

先「それじゃあ席は・・・」

先生がクラスを見渡す。数人の男子が、隣にいる別の男子を退かせようと必死になっていた。

先「ちょうど秋月君の両隣が空いてるわね。二人とも、とりあえず今日はあそこに座ってください」

先生が俺の横の空白の席を指す。

フェ「秋月って・・・えっ！？　一成！？」

アリ「兄様だ～～～！」

一「・・・お早う」

手を上げ、あいさつする。

アリ「兄様の隣♪」

フェ「一成もこのクラスだったんだ・・・嬉しいな」

俺も二人と同じクラスで嬉しい。嬉しいが・・・

全男子「あ～～き～～づ～～き～～～～・・・・」

一「はぁ・・・」

やっぱりこうなるか。

男子A「俺達の言いたい事は・・・わかるよな？」

一「・・・ああ」

男子B「なら、この後俺達がしようとしてる事も・・・わかるよな？」

一「なんとなくな」

男子C「覚悟は・・・出来てるよな？」

一「いや別に」

ガタン！

男子が一斉に立ち上がり、俺の周りを囲った。

ア「ちょ、ちょっとあんた達！」

す「落ち着いて・・・ね？」

アリサとすずかが止めてくれようとしたが、意味は無かった。

男子Ａ「やれい！！」

男子達「うおぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！」

一人の男子の号令で、全員が俺に飛びかかって来た。

一「どうしても・・・やるか？」

最後通告を出す。

男子達「すいまっせんでしたぁぁぁぁぁぁ！！！」

すると、全員空中で土下座するという離れ技を見せてくれた。

アリ「あはは♪　みんな面白いね」

フェ「な、何？」

な「気にしないでフェイトちゃん。いつもの事だから・・・」

改めて、全員が席に着くと同時に始業チャイムが鳴り、本日の授業が始まった・・・

フェ「ねぇ一成、これはどう言う意味なの？」

一「これは、こうして・・・こうすればいいんだ」

フェ「あ、なるほど。ありがとう一成」

アリ「兄様、これはどうすればいいの？」

一「これは・・・こうだな」

アリ「ありがとう兄様」

授業中、フェイトとアリシアちゃんは、わからない所を逐一俺に聞いて来た。それをゆっくり丁寧に教えていく。

男子A「ぐぐぐ・・・なんてうらやましい」

男子B「くそっ、実力行使の道が閉ざされた今、どうすれば・・・」

男子C「・・・呪いって本当に効果あるのか？」

なにやら不穏な会話が聞こえた気がするが、とりあえず流す。

な「いいなぁ、フェイトちゃんとアリシアちゃん・・・」

す「一成君・・・楽しそう・・・」

ア「何よ・・・あんなにデレデレしちゃって・・・」

なのは達も何か話しているようだったが、声が小さく、聞きとる事は出来なかった。

フェ「一成、これは？」

一「ああ、これは・・・」

そんな感じで午前中の授業は進んで行った・・・

昼休み

弁当を持ったフェイトとアリシアちゃんに殺到する男子。

男子A「フェイトちゃん！　いっしょに弁当食べない？」

男子B「アリシアちゃん！　俺とおかず交換しない？」

男子C「むしろ俺を食ってくれ！！」

フェ「え、えっと・・・ごめんなさい。私は・・・」

アリ「兄様、一緒に食べよ？」

男子全滅・・・最後のヤツとは少し話をしなくてはならないな・・・

一「ああ、もちろん」

アリ「やった～～♪」

一「フェイトもどうだ？」

フェ「う、うん・・・／／」

な「一成君」

なのは達もやって来た。

一「なのは、フェイト達も一緒だがいいよな？」

な「もっちろん♪」

フェ「あ、ありがとうなのは」

す「それじゃあ行こっか」

ア「話したい事がたくさんあるから早くしないと時間が無くなっちゃうわ」

俺達は全員で屋上に向かった・・・

男子A・B・C「「「・・・・・・」」」

女子「・・・哀れ」

ア「へ～～あのマンションに住んでるんだ」

アリ「うん」

す「今度遊びに行ってもいいかな？」

フェ「う、うん。もちろん！」

屋上で弁当を食べながらお互いの事を話すアリサ、すずか、フェイト、アリシアちゃん。

最初の方こそ緊張している様子だったフェイトも、今はすずかの話に笑みを浮かべている。

一「ふふっ・・・」

その様子に思わず笑みがこぼれる。

な「嬉しそうだね一成君」

一「いや、フェイトもアリシアちゃんも馴染めたみたいでよかったと思ってな」

な「・・・そうだね」

なのはも笑みを浮かべた。

一「（父親ってこんな気持ちなんだろうか・・・？）」

ア「さて・・・そろそろ本題に入るわよ」

そんな中、アリサが神妙な面持ちで告げる。

ア「一成、あんたに聞きたい事があるわ」

一「・・・何だ？」

あまりの真剣さに、自然と背筋が伸びる。

ア「何で・・・アリシアはあんたの事『兄様』って呼んでんのよ？」

一「・・・はっ？」

予想を思いっきり斜めに行った質問に開いた口が塞がらなかった。

ア「はっ？・・・じゃないわよ！　何で家族でもないあんたの事をこの子が兄呼ばわりしてるのよ！」

す「あ、それ私も気になるな」

一「それは・・・」

どう説明しようか？

アリ「それはね～私と兄様が繋がってムグッ！？」

な「わ～！　わ～！」

慌ててアリシアちゃんの口を塞ぐ。

す「か、一成君!?」

ア「何やってんのよあんた・・・」

一「す、すまないアリシアちゃん。つい・・・」

アリ「も～何するの兄様！」

ア「それで・・・どうなのよ?」

な「え、えっとねアリサちゃん・・・」

フェ「・・・昔、一成と出会った時にそう呼んでもいいって言われたからそう呼んでるの・・・だよね姉さん?」

アリ「え?　違っ・・・」

フェ「だよね！」

アリ「う、うん・・・」

一「（ナイスだフェイト！）ああ、フェイトの言う通りだ」

ア「昔って・・・」

す「あっ！　もしかして、引っ越した後の事？」

ア「そう言えばあんた、前にここに住んでて何かの事情で引っ越した後、またここに帰って来たって言ってたわよね」

一「そう、その時にアリシアちゃんが俺を年上と勘違いしてな、こんな風に呼ぶようになったんだよ」

す「ふふっ、仕方ないよ。あの頃の一成君、とっても大人びて見えたもんね」

一「納得してくれたか？」

ア「なんかイマイチだけど・・・まぁいいわ」

こうして、いつもより賑やかだった昼休みは終了した・・・

そして放課後・・・

な「ここが翠屋。私のお家だよ」

屋上のメンバー全員で翠屋に向かう。プレシアさんに学校が終わったら翠屋に行くように言われていたフェイトとアリシアちゃんを案

内する為だ。

すずかとアリサは今日は何の予定も無いらしく、どうせならと一緒について来てくれた。

な「ただいま～～」

なのはが翠屋のドアを開く。

？「いらっしゃいませ。翠屋にようこそ♪」

すると、エプロンドレスを纏い、両手に注文されたであろう料理を持ち、満面の笑みで俺達を迎える・・・

な「あ、アルフさん!?」

アルフがいた。

アル「お帰りなのは、フェイト、アリシア、ついでに一成。そっちの二人は友達かい？」

ア「あぁ！　この人・・・！」

す「確か温泉で・・・」

アル「もしかして・・・あの時の子達かい？　いや～～あの時は済まなかったね～～。あたしはアルフ、よろしくね」

フェ「あ、アルフ・・・何で？」

アル「あたしだけじゃないよ。ほらっ・・・」

プ「お帰りなさいフェイト、アリシア」

アリ「母様？」

アルフの視線の先には、紅茶を飲みながら桃子さんと楽しそうに話しているプレシアさんの姿があった。

一「・・・・・」

アル「どうしたんだい一成？」

一「・・・何だその格好？」

アル「似合ってるかい？」

その場で一回転するアルフ。おいおい、先にその両手の料理を何とかしろよ・・・

アル「桃子さんに頼まれたんだよ。ケーキもごちそうになったし、礼をしなくちゃと思ってね」

そう言ってテーブルに料理を運びに行ってしまった。

桃「ほらほら、いつまでもそんな所にいないでこっちにいらっしゃい」

桃子さんとプレシアさんの元に移動した。

桃「あなた達がフェイトちゃんとアリシアちゃんね？　私は高町桃子。なのはの母親です。よろしくね？」

フェ・アリ「「はい！」」

桃「すずかちゃんとアリサちゃんもいらっしゃい」

す・ア「「こんにちは～～」」

プ「あら、あなた達は？」

プレシアさんが二人を見つめる。

ア「私はアリサ・バニングスです」

す「月村　すずかです。私達、フェイトちゃんとアリシアちゃんのお友達になったんです」

プ「私はプレシア・テスタロッサ。フェイトとアリシアの母よ。仲良くしてあげてね？」

微笑むプレシアさん。

ア「綺麗な人・・・」

す「フェイトちゃんとアリシアちゃんのお母さんだもんね・・・」

プ「ふふっ、ありがとう」

フェ「か、母さん。何でここに・・・？」

プ「あらっ、ご近所付き合いは大切よ？　これから仲良くさせてもらうんだから、訪ねるのは当然でしょう？」

桃「嬉しいですわ。こんな綺麗な方とお知り合いになれたんですから」

プ「そう言う桃子さんだってお綺麗じゃないですか」

桃「お上手ですね」

すっかり仲良くなった様子の二人。

アリ「母様楽しそう」

プ「それにしても・・・」

な・フェ・アリ・す・ア「「「「「？」」」」」

プレシアさんが順番になのは達を見渡す。

プ「大人気じゃない一成。こんなにたくさんの女の子と一緒にいるなんて」

一「ええ、大事な友達です」

プ「友達ねぇ・・・本当にそうかしら」

一「どう言う事ですか？」

プ「あなたはそうでも、この子達はそうは思っていないかもしれないわよ？」

一「え？」

な・フェ・す・ア「「「「ッ・・・！」」」」

アリ「？」

プレシアさんの言葉に、アリシアちゃん以外の全員が反応した。

プ「あなたがみんなに抱いている感情と、みんながあなたに抱いている感情が同じとは限らないでしょう？」

俺の抱いている感情と違う？

一「・・・・・」

意味深に笑うプレシアさん。

な「ッ・・・／／」

フェ「わ、私は・・・／／」

ア「そ、そんな事・・・／／」

す「あうあう・・・／／」

プ「なんだかんだ言ってアルフも満更じゃ無さそうだし・・・罪な男ね」

一「・・・・」

桃「どうしたの一成君？」

一「みんな・・・正直に答えてくれ」

な・フェ・す・ア「「「「な、何・・・？」」」」

一「俺の事・・・嫌いか？」

な・フェ・す・ア「「「「・・・・へ？」」」」

一「俺はみんなの事を大事な友達だと思ってる。でも、プレシアさんの言う通り、みんなも同じとは言えない」

当然だ。俺と彼女達は違う。

一「もし、嫌々俺に付き合ってるんだったら、無理せずに正直に言ってくれ」

・・・・・・

沈黙・・・・

プ「・・・桃子さん。彼って・・・」

桃「ええ・・・いつもこんな感じですよ」

プレシアさんと桃子さんがヒソヒソ話している。

ア「・・・・こんのぉおおおお・・・」

突如、アリサが何処からか取り出したハリセンを思い切り振りかぶり

ア「馬鹿ぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

スパァァァァァン！！！

一「痛いぞアリサ」

ア「あんたが馬鹿な事言うからでしょ！！」

な「そうだよ！！　嫌いなわけないじゃない！！」

す「私達だって・・・一成君の事大事に思ってるんだよ？」

そのまま俺の脳天に叩きつけるように振り下ろした。

フェ「うう・・・私の気持ちはあの時伝えたはずなのに・・・」

フェイトの言うあの時とはおそらく公園での事だろうが、何故か俺の頭からはあの時の記憶がすっぽり抜け落ちていた。

医者曰く「何か強いショックを受けた事による記憶欠如」との事らしい。

気になってフェイトに尋ねても顔を赤くして教えてくれなかった。

アリ「よくわからないけど・・・私は兄様の事大好きだよ」

一「ありがとうアリシアちゃん」

アリ「えへへ～～～♪」

頭をなでると気持ちよさそうに目を細めるアリシアちゃん。

一「みんなもありがとう。どうやら俺の勘違いだったようだ」

な「どういたしまして♪」

ア「ふ、ふん。前にも言ったけど、あんたは考えすぎなのよ」

す「ふふっ、一成君の悪い癖だよね」

フェ「一成って結構おっちょこちょいだったんだね・・・少し意外・・・」

言われてみれば確かに。直した方がいいのか？

プ「この鈍感さ・・・最早病気ね」

桃「ええ、それもとびっきりの重病だわ」

一「？」

こうして、俺達の日常にまた新たな仲間が加わった・・・

神「・・・・遅いの」

天「そうですね・・・・と言うか、私達の出番これだけですか？」

作「さあ、みんな大好き日常編だ」

一「何だよこのサブタイトル・・・」

作「お前に安息の日々は無い！」

神「おい作者！　妾達の出番があれだけとはどういう事じゃ！！」

天「たった二行って・・・舐めてるんですか？」

刹「我など名前すら出ていないではないか」

作「学校メインの話だからな。刹那は・・・仕方ないだろ」

刹「ほう・・・そんなに死にたいか？」

作「お、落ち着け！！　ちゃんと後から出すから！！」

刹「約束しろ。違えたら・・・わかっているな？」

作「はいっ！！」

神「妾もじゃぞ？」

天「当然・・・私もですよね？」

作「わ、わかってるって」

刹「それにしても・・・久しぶりに我が君の鈍感っぷりが発揮されたな」

神「プレシアも言っていたが、最早病気レベルじゃぞあれは・・・」

天「しかもフェイトちゃんの告白を忘れるなんて・・・」

作「ふはははは!!　簡単にはいかせない。それが俺クオリティ!!」

一「・・・最低だな」

神「そろそろ『第二回　みんなで作者をいたぶろう』でも開催するか？」

天「それはいい考えですね」

刹「ふむ、今回は我がいるからな。バリエーションが増えるぞ」

作「ちょっ!?　またずいぶん懐かしい企画を・・・てか、悪いのは一成だろ!!」

一「書いたのは貴様だろうが」

神「フェイトの勇気ある告白を流しおってからに」

天「女の子の心を無下にした罪は重いですよ？」

刹「楽しみにしているがいい」

一「さて、日常編でも贈り物報告会は続けるからな」

神「最初は・・・清浦　刹那様じゃな。今回は、ハヤシソースオムライスを頂いたぞ」

作「食った事ねぇ！　美味そうだな・・・」

一「やらんぞ」

作「頼む・・・一口だけ！」

一「仕方ないな・・・ほらっ」

作「な、何だこれ！？　無茶苦茶美味い！！」

天「次です。緋水様からウィンダム核装備と無限ランチャー（核装備）Ｎジャマーキャンセラーを頂きました」

一「何だか最近核関係の贈り物が増えたな・・・」

神「いつ誤爆するかわからんぞ」

刹「問題ない。我が結界を張っておいた」

天「さすがですね。これで安心して鑑賞できます」

刹「次だ。トッキー殿から抹茶バームクーヘンと豪華客船で行く世界一周旅行を頂いたぞ」

一「世界・・・か」

神「これまた豪勢じゃのう♪」

天「楽しみですね♪」

作「・・・どうせ俺には無いんだろ？」

刹「喜べ作者。お前だけに贈り物がある」

作「ま、マジで！？」

刹「ほらっ、リポビタンＤ一箱」

作「ＯＴＬ」

一「最後だな。金獅子様からホットケーキ（どれか一つだけ唐辛子入り）。神奈達にそれぞれ赤・青・白のピアス。作者宛てにキムチキャラメルを頂いたぞ」

刹「ふむ・・・綺麗なピアスだな」

神「当然妾は赤じゃ」

天「私は青を頂きます」

刹「ならば我は白か」

作「き、キムチ・・・」

一「何やってんだよ、せっかく頂いたんだからさっさと食えよ」

作「でもよ、キムチって・・・」

一「お前、北海道でジンギスカンキャラメル食っただろうが」

神「あれが食えたんじゃから大丈夫じゃろ」

天「さあ、どうぞ」

刹「なんなら我が口に流し込んでやろうか？」

作「止めい！！・・・よし、逝くぞ！！」

一「字が違うぞ」

神「ある意味合っておるがな」

作「ぎえぇぇぇぇぇ！？！？！？」

バタン!!

天「・・・白眼剥きましたね」

刹「むっ、魂(ウィル)が抜け出ているぞ」

一「・・・そっとしておこう」

第二話　主人公って巻き込まれていると言うより自分から首を突っ込んでいる気がする

デート編にプレシアさんを入れるか悩んでます・・・

第二話　主人公って巻き込まれていると言うより自分から首を突っ込んでいる気がする

一「さて、次は・・・」

ある日の夕方、俺は買い物をする為に街に出ていた。

一「・・・はぁ」

何故か・・・元の姿で。

数分前・・・

天「あら、お醤油が切れていたのを忘れていました」

学校から帰ると天音が困ったようにそう言っていた。

一「ただいま天音。どうしたんだ？」

天「あっ、お帰りなさいませ一成様。それが・・・お醤油が切れてしまって」

どうやら料理中だったようだ。

天「どうしましょう。買いに行きたいですけど、料理の続きもしなくてはいけませんし・・・」

一「何だ、それなら俺が買って来るよ」

天「よろしいのですか？」

一「ああ、俺も買いたい物があるからな」

天「助かります・・・こんな時に神奈がいればいいのですが」

そう言えば姿が見えない。

一「どこにいるんだ？」

天「わかりません。先程出かけてしまって・・・あの時気付いていればよかったです」

一「仕方ないさ。じゃあ行って来るよ」

玄関に向かう。

天「お待ちください一成様」

が、天音に止められてしまった。

一「何だ？　もしかして、まだ買う物があるのか？」

天「いえ、違います。一成様、行かれるのでしたら元の姿にお戻りになってください

一「・・・はっ？」

天「神剣解放するためではなく、ただ元の姿に戻るだけでしたらそこまでマナを消費する事もないでしょう？」

一「いや、肉体変化も充分きついんだが・・・」

この世界に来た時に確認した事だ。

天「お願いします」

一「なんでだ？」

理由がわからない。なんで買い物するだけで力を使わなければならないんだ？

天「・・・以前補導されかけた事をお忘れですか？」

一「あ・・・」

天音の言う通り、昔この姿で出歩いていたら補導員に声をかけられてしまった事がある。

一「あれは平日の昼間に出歩いていたからであって、今の時間なら別に・・・」

天「いいですね！？」

一「わ、わかった・・・」

あまりの剣幕に思わず頷く。

天「ではお願いします」

一「理不尽だ・・・」

不本意だが、元の姿に戻る。

天「ああ、このお姿を見るのも久しぶりですね♪」

食い入る様に俺を見つめる天音。

一「もしかして・・・ただ見たかっただけじゃ」

天「そ、そんなわけないじゃないですか！　私はただ一成様の事を思って・・・」

一「じ～～っ・・・・・」

天「うう・・・」

たらたらと汗を流す天音。

一「・・・まぁいい。とりあえず行って来る」

天「ほっ・・・それでは行ってらっしゃいませ一成様」

今度こそ、俺は玄関に向かった・・・

一「天音の考えがわからない」

先程の会話を思い出す。たまにあんな感じになるが、未だに理由は

不明だ。

一「それにしても・・・・・多いな」

あちこちから視線を感じる。子どもの姿の時も感じる事はあったが、今はそれ以上の視線が俺に突き刺さっていた。

一「落ち着かんな、早く用事を済まそう」

俺は足を速めた。

？「あ～～！　私の風船が～～～！？」

一「ん？」

その時、後ろから女の子の声がしたので振り返ってみると、空を見上げている少女と、その手から離れて行ったであろう風船が空に向かって浮かび上がっていた。

母「あらあら残念ね。また新しいのを貰いに行きましょう」

女の子「やだやだ～～！　あの風船がいいの～～！！」

母「困ったわねぇ・・・」

母親が宥めようとしたが、女の子は聞かなかった。

一「あれくらいなら大丈夫か？」

跳躍して風船の紐を掴む。

一「よっ・・・と」

そのまま地面に着地する。

女の子「すご～～～い！！」

女の子がキラキラした目で俺を見つめる。

一「はいこれ。もう離さないようにね」

女の子「ありがと～～お兄ちゃん♪」

母「あ、ありがとうございます」

一「お気になさらずに。それじゃあ失礼します・・・」

俺はその場を後にした。

女の子「ばいば～い！　お兄ちゃん！！」

母「ポ～～ッ・・・・／／」

女の子「どうしたのお母さん？」

母「・・・はっ！　な、何でもないわ・・・」

女の子「？」

一「さて、そろそろ店に・・・」

？「ひ、引ったくりよ～～！　誰か捕まえて～～！！」

一「今度はなんだ・・・？」

前方からバイクが猛スピードで近付いて来た。その後方には跪いている女性、どうやらバイクに乗っている男が引ったくり犯らしい。

引ったくり犯「退けぇぇぇぇぇぇ！！」

俺に向かって突っ込んでくるバイク。

一「お前がな」

横にずれ、擦れ違い様にラリアットをかます。

一「ふんっ！」

ゴキャッ！

引ったくり犯「ぎゃあ！？」

男が後方に吹き飛び、主を失ったバイクはしばらく進んだ後ゆっくり倒れた。

引ったくり犯「ピクピク・・・・・」

一「やり過ぎたか？」

変な音がしたが・・・まぁいいか。

女性「あ、あの・・・」

被害者の女性がやって来た。

一「盗られたのはこれですか？」

男が持っていたバッグを渡す。

女性「はい。あの・・・ありがとうございました」

頭を下げる女性。

その後、警察がやって来て、男は連行されていった。

一「さて・・・と」

女性「あ、あの・・・お礼を・・・」

一「いいですよそんな、当然の事をしただけですから。それじゃあ俺はこれで・・・」

女性「待ってください！　せめてお名前を・・・」

一「名前ですか？秋・・・」

待て。普通に名乗ってもいいのだろうか？

一「・・・・名乗る程の者じゃありませんから」

結局、名前を教えずに女性と別れた。

女性「行っちゃった。でも・・・素敵な方／／」

その後も・・・

男の子「お母さ～～ん！！　どこ～～～！？」

一「どうしたんだ？」

迷子の男の子を近くの交番に連れて行き・・・

老婆「本当にすみませんねぇ」

一「いえ、これくらい」

横断歩道で立ち往生していたおばあさんを反対側まで背負っていったり・・・

男性「すみません、この場所にはどうやっていけばよろしいでしょうか？」

一「この道を真っ直ぐ行ってもらった後、突き当たりを右に・・・」

道に迷っていた男性に道を教えたり・・・

気がつけば、家を出てから一時間以上が経過していた。

一「何でこの姿に戻った途端こんな事になる・・・」

何かの呪いじゃないか？

一「天音も困っているだろうしこれ以上は・・・」

走り出そうとしたその時

？「離してって言ってるでしょ！！」

突如、聞き慣れた女性の声が俺の耳に入った。

一「この声は・・・」

声のした方に目を向けると

一「美由紀さん・・・？」

美由紀さんが数人の男と話をしていた。が、その雰囲気はお世辞にも穏やかとは言えなかった。

一「やれやれ、時間が無いってのに・・・」

俺は美由紀さんの元に向かった・・・

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

美由紀ＳＩＤＥ

男Ａ「ねえねえ、君可愛いね～」

男Ｂ「ちょっと俺達に付き合わない？」

男Ｃ「絶対楽しませる自信があるから。ねっ？」

運が悪い。翠屋の手伝いの為に急いで帰ろうとしたら、この男達に絡まれてしまった。

美「すみません。私急いでますから・・・」

もちろん付き合うつもりは無い。すぐにその場を去ろうとしたが

男Ｂ「いいじゃん、ちょっとくらい」

男の一人が私の腕を掴んだ。

美「離して下さい」

イライラする。いっその事、全員倒してやろうかしら？

男C「君が付き合ってくれたら離してあげるよ」

あ～～～もう！話にならない。

美「離してって言ってるでしょ！！」

パシンッ！

カッとなって手を振りほどくと、勢い余って男の一人の顔を叩いてしまった。

美「あっ・・・」

男B「・・・ってえなこのアマ！！」

すると突然口調が変わり、私を睨みつけて来た。

男A「こっちが下手に出てりゃあ調子に乗りやがって！」

男C「もういい。さっさと犯っちまおうぜ！」

やっぱりそういうつもりだったのね。

美「あら闘る気？　こう見えても私強いわよ？」

男A「それは楽しみ・・・だな！！」

プシューーー！！

美「きゃっ！？」

男が私の顔に向かって何かを吹きつけた。

美「な、何！？　目が見えない！」

男A「へっへっへ、催涙スプレーだよ～～ん♪」

ガシッ

別の男が私を羽交い絞めにする。

美「は、離して！！」

男Ｂ「それは出来ねえ相談だなぁ」

美「くっ・・・！」

悔しい。こんなヤツらに！

男Ｃ「失礼しま～～す♪」

最後の男が私の制服に手をかける。

美「や、やめて・・・」

嫌っ！こんな・・・こんな卑怯者達に・・・

美「誰か！　誰か助けて！！」

ありったけの大声で助けを求めた。

男A「無駄だ。助けなんて来るわけ・・・」

？「・・・やれやれ、どこの世界にも同じ様な下衆はいるもんだな・・・」

美「えっ？」

私の耳に男達ではない別に人の声が届いた。

男B「何だテメエ！？」

？「その人から離れろクズ共・・・」

ブワッ！

男A・B・C「「「ひっ！？」」」

恭ちゃん・・・いや、ひょっとしたらお父さんを上回る程の殺気を出すその人の言葉に、男達は短い悲鳴をあげた。

？「大丈夫ですか？」

その人は男達に向けたのとは百八十度違う優しい声で私に話しかけ

て来た。

美「は、はい・・・」

？「よかった・・・」

美「ッ・・・／／」

再び男達を見据える鋭い瞳に・・・その綺麗な銀髪に・・・私は見惚れてしまった・・・

美由紀ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＩＮ　ＳＩＤＥ

一「さて・・・」

改めて男達を睨みつける。

一「五秒やる・・・さっさと失せろ。俺は醤油を買いに行かなければならないんでな」

美「しょ、醤油ですか？」

一「ええ、醤油です」

早くしないと、最悪飯抜きになってしまう。

男A・B・C「「「・・・・っざけんなぁぁぁぁぁぁぁ！！！」」」

男達の声がハモる。

一「時間切れだ・・・終わらせてもらう」

男B「何を言って・・・」

一「そい！」

男の一人に膝蹴りを食らわす。

男B「ぎゃあ！？」

美「は、早い・・・！」

一「そい！！」

続けて二人目の男の首筋に手刀を放つ。

男A「あっ・・・」

音も無く崩れ落ちる二人目の男。

一「そぉい！！！」

最後の男には八つ当たりの意味も込めて渾身の回し蹴りを叩きこんだ。

男C「ぬるぽっ！？」

謎の言葉を残し、三人目の男は彼方に消えていった。

一「ふぅ・・・今日も飛んだな」

この間、約十秒。

美「す、凄い・・・・」

美由紀さんが呆然とした顔で俺を見ていた・・・

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

美由紀ＳＩＤＥ

美「す、凄い・・・・」

今の動き・・・ほとんど見えなかった。この人・・・恭ちゃんやお父さんよりずっと強い！

？「さっきも聞きましたが、本当に大丈夫ですか？」

私の様子を見る為に、少し屈んで顔を近づけて来た。

美「は、はい。まだ少し目がひりひりしますけど、それ以外は特に・・・」

？「そうですか。よかった」

美「ッ・・・・／／」

ドキッ！

そう言って笑う彼に、心臓が跳ね上がる。

？「家はどこですか?送っていきますよ」

その言葉に下心は全く感じられなかった。

美「えっ?でも・・・用事があるんですよね?」

？「醤油の事ですか?後でどうにでもなりますよ」

そう言っておどける彼。

美「じゃあ、お願いします。あの・・・私は高町　美由紀って言います」

？「俺は・・・秋山　一矢って言います」

私は秋山さんに家まで送ってもらう事になった・・・

美「私の家は翠屋って言う喫茶店を営んでるんですが、知ってます

か？」

秋「名前だけは・・・」

美「今度お時間のある時にでもいらして下さい。今日のお礼をさせて欲しいんです」

秋「そうですか、では今度お邪魔させてもらいますね」

美「はい！」

普通に話してはいるが、さっきからドキドキしっ放しだった。学校の男子と話してもこんな風にはならないのに・・・

美「ところで秋山さん」

秋「一矢でいいですよ。どうしました高町さん？」

美「じゃあ一矢さん、私の事も美由紀でいいです。それで・・・どうして敬語なんですか？」

一「え？」

美「私の方が年下ですよね？それが普通なんですか？」

一「いや、子どもの時のクセで・・・」

美「はい？」

一「何でも無いです。気になるなら直しますけど？」

美「お願いします。何だかこそばゆくって」

一「わかったよ美由紀さん」

美「さんもいいですよ」

一「じゃあ・・・美由紀」

美「ッ！？」

ドキッ！！！

一矢さんに名前を呼ばれた瞬間、心臓が爆発したんじゃないかと思うほどの大きな音をたてた。

もしかしたら一矢さんにも聞こえたかもしれない。

美「（どうして・・・なんで名前を呼ばれただけでこんな・・・）」

一「どうした美由紀？　顔が赤いけど・・・」

美「な、何でも無いです！・・・あっ！み、見えてきましたよ！」

その時、ちょうど翠屋が見えたので慌てて指差す。

一「いい店だな」

美「ありがとうございます」

二人で店の前に立つ。

一「一応目は洗っておいた方がいいぞ」

美「はい。一矢さん、今日は本当にありがとうございました。絶対お店に来て下さいね?私・・・待ってますから!」

一「ああ、約束するよ。それじゃあまたな」

美「はい、また今度」

去って行く一矢さんの姿が見えなくなるまで、私は店の前に立ち続けていた・・・

美由紀ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＩＮ　ＳＩＤＥ

一「疲れた・・・」

美由紀さんに言われ、咄嗟に偽名を名乗ってしまった。

一「まさか他人のフリをするのがあんなに大変だったとは・・・」

俺は疲れた体に鞭打って醤油を買いに街に戻った・・・

一「ただいま・・・」

三十分後、ようやく帰宅する事が出来た。

神「おお！　本当に元の姿に戻っておる！」

天「随分時間がかかった様ですけど、何かあったのですか？」

一「神奈・・・天音・・・俺は当分この姿にはならないからな・・・」

神・天「「？」」

おまけ

高町家にて・・・

美「はぁ・・・一矢さん」

恭「どうしたんだ美由紀のやつ？」

桃「帰って来てからずっとあの調子なのよね」

な「一矢さんって誰なのかな？」

桃「もしかして彼氏かしら？」

恭「美由紀に？」

士「そんな・・・なのはに続いて美由紀まで・・・」

な「にゃ？　私がどうしたの？」

桃「ふふっ、どんな人かしら？」

美「一矢さん・・・」

第二話　主人公って巻き込まれていると言うより自分から首を突っ込んでいる気がする

作「まさかの美由紀フラグ！」

一「何してんだよお前・・・・てか、すずかとネタが被ってるじゃねえか」

神「まあ当然じゃな」

天「一成様のあのお姿を見て何とも思わない方などいません」

刹「さすが我が君。美由紀だけなく通行人まで落とすとは」

一「今回巻き込まれっ放しでもの凄く疲れた・・・」

作「何言ってんだ。主人公が巻き込まれるのは基本だろ？」

一「限度があるだろ！！」

天「でもおかしいですね。美由紀さん程の実力があれば、あの程度の方達など余裕だったのでは？」

刹「彼女も鍛えているのだろう？」

作「そうだけど・・・そしたら今回の話成立しなかったからな」

神「また改変したの」

一「まあ、もうキャラ崩壊起こしまくってるから今さらな話だけど

な」

作「言うな！　俺だって気にしてるんだから！！」

天「それで、一成様と美由紀さんの関係はどうするのですか？」

作「未定だが・・・とりあえずデート編には入れる予定だ。ちなみにプレシアさんとのデートは要望があれば書くつもりだ」

一「それこそ無理だろ！！」

作「いいじゃないか。若返ったんだから」

一「そう言う問題じゃない！！」

一「もういい。さっさと贈り物報告会始めるぞ」

神「まずは・・・朝凪　夜風様からパイシューの詰め合わせを頂いたぞ」

天「ホイップにチョコ、チーズにカスタードと色々な味がありますね」

刹「そして・・・カスタードの中にマスタードが一つ」

一「作者用だな」

天「一つだけハズレというのが最近多いですね」

神「それが全部作者に行っとるわけじゃが・・・」

刹「ふむ、愛されているな」

天「次は・・・緋水様からです」

貴「こんにちは」

一「貴哉さん」

神「もうすっかりお馴染じゃな」

貴「今回はノイエジールと神奈さん達にペンダントを持ってきました・・・後これ、一成さんの秘密写真です」

神「むっ、いつも済まぬな」

天「今回はどんな写真ですか？」

貴「動物と触れ合ってるを撮りました」

刹「これは・・・我が君の笑顔がこんなにも鮮明に・・・！！」

一「どうしたんだみんな？」

貴「何でも無いですよ。そうだ、聞きたい事があるんですが、『第二回　みんなで作者をいたぶろう』いつやるんですか？」

一「ああ、それですか。まだ未定なんですよ。どうやって作者をいたぶるかまだ考え中でして」

神「今までに頂いた贈り物の中にもいい物がたくさんあるからの」

天「正直、迷っているんですよ」

刹「ふむっ、貴哉殿。なんならあなたがやってもいいのだが」

貴「お、俺ですか？」

一「それはいい考えだな」

神「そうじゃな、別に妾達がやらなければならぬというわけでもないしの」

天「どうですか貴哉様？」

貴「・・・・緋水と相談してきます」

刹「次だ・・・バージル殿の所の仁殿から我が君に贈り物だ」

一「何だ？」

刹「これだ」

神「なんじゃこれは？」

天「水・・・ですか？」

刹「鈍感が直る様に念じた水・・・だそうだ」

一「え？」

神「一成！　すぐに飲むのじゃ！！」

天「さあさあ！！　一気にいってください！！」

一「ちょっ！　待っ！　モガッ！？」

作「そうだ、最後に皆さまにちょっとしたお願いが・・・」

一「何だよ改まって」

作「実は私・・・明日自動車学校の卒業試験なのです！！　ですから皆さま！！　私が合格できるように祈っておいてください！！」

神「無駄じゃな」

天「無駄ですね」

刹「無駄だな」

作「何だよ！？　その言葉のトリプルブレイカーは！！」

一「だってお前、今日も担当の先生にボロクソに言われてたじゃねえか」

神「中央線はみ出して運転したり、前から来た自転車と接触しそうになったり」

天「明らかにアウトな事をたくさんしましたよね」

刹「特に、中央線を越えたらその時点で試験終了だって言われていただろう」

一「そんなお前が受かるわけがない」

作「だから読者の皆さまに祈っておいて貰いたいんだよ！」

一「お前は人の厚意を無駄にする事に関しては天才的だからな」

刹「祈ってもらってもお前の腕が全てを台無しにするのがオチだ」

作「ＯＴＬ」

第三話　デートって何処に行けばいいのかさっぱりわからない　すずか編（前書

デート編始めます。

デート場所は適当です・・・・・行った事ないもの・・・・・ｏｒｚ

第三話　デートって何処に行けばいいのかさっぱりわからない　すずか編

ア「ねえ一成。あんた休みの日って何してるの？」

昼休み、いつものメンバーで弁当を食べていると、アリサがそう切り出して来た。

一「何だいきなり？」

ア「だってあんた、自分の事ほとんど話さないじゃない。だからちょっと興味があるのよね」

一「休日か・・・」

少し思い出してみる。休日・・・休日・・・

一「何もしてないな」

す「え？」

一「いや、何もしてないってのは語弊があるな。全力で休んでいると言った方がいいか」

ア「一緒じゃない！」

フェ「何処かに遊びにいったりとかしないの？」

一「そうだな、翠屋に行くくらいだな」

な「そう言えば、よく神奈さんと天音さんと来てくれるよね」

大体翠屋で昼食を済ませた後、買い物をして帰宅するのが恒例のパターンになっている。

アリ「じゃあ兄様、今度のお休みに私とお出かけしない？」

一「俺と？」

アリ「うん。色々案内して欲しいな～～と思って」

確かに、フェイトもアリシアちゃんもまだこの街の事に詳しくないしな。

一「わかった。俺でよければ案内するよ」

アリ「わ～～い！　兄様とデートだ～～～♪」

一「デート・・・？」

俺は街の案内をするだけだが。

な・フェ・ア・す「「「「ちょっと待ったーーーー！」」」」

アリシアちゃん以外の全員が異議を申し立てる。

フェ「ずるいよ姉さん！　私だって一成に案内して欲しいのに！」

な「私だって久しぶりに一成君とお出かけしたいよ！」

ア「あんたも何ＯＫしてんのよ！？」

一「いや、案内するだけだぞ？」

す「でも、二人っきりなんて・・・」

理由はわからないが、どうやら俺とアリシアちゃんが二人で出掛けるのが気に食わないらしい。

一「じゃあみんなで行くか？　正直、女の子が興味を持ちそうな場所はよくわからないからな」

なのは達なら俺よりこの街に詳しいだろうし。

な・フェ・ア・す・アリ「「「「「「・・・・・・はぁ」」」」」」

賛同を得られるかと思ったが、何故か全員に溜息を吐かれてしまった。

ア「あんた・・・何もわかってないわね」

な「仕方ないよ。一成君だもん」

アリ「も～～、私はみんなじゃなくて兄様とお出かけしたいの！」

フェ「わ、私も！」

す「一成君は女の子の気持ちがわかって無さ過ぎだよ」

一「・・・・俺は男なんだが」

俺がそう言うと、また溜息を吐かれてしまった。

ア「・・・・決めた！　一成、あんたこれからしばらく休日は私達に付き合いなさい！」

アリサが閃いた様に言う。

一「どう言う事だ？」

ア「鈍いわね。私達全員とお出かけしなさいって言ってるの。どうせヒマなんでしょ？」

一「確かにヒマだが・・・」

ア「決定ね♪」

一「・・・・拒否権は」

ア「無いわ」

一「・・・・・」

ア「というわけで、まずは今度の休日私と・・・」

な・フェ・す・アリ「「「「異議あり！！」」」」

アリサの案に賛成の全員だったが、最後の一言に猛反発した。

す「何勝手に決めてるのかなアリサちゃん？」

フェ「そう言うのはみんなで決めないと・・・ね？」

アリ「駄目だよアリサちゃん。抜け駆けしちゃ・・・」

な「少し・・・お話ししよっか？」

四人の後ろに何かが見えるが・・・・気にしてはいけない。

ア「じょ、冗談よ。だからなのは、物陰に連れて行こうとするの止めてよ！」

な「やだなぁアリサちゃん。何もしないよ」

ア「なら私の腕を掴んでいるその手をすぐに離しなさいよ！」

アリサに言われ、ようやく手を離すなのは・・・目が本気だった・・・

フェ「でも、どうやって決めるの？」

す「ジャンケンでいいんじゃないかな」

アリ「さんせ～～い」

輪を作るなのは達。当然俺は蚊帳の外だ。

な「行くよ？　ジャ～ンケ～ン・・・・・」

そして戦いの火蓋は切って落とされた。内容は言えないが、俺が見て来た中で最高の戦いだった・・・とだけ言っておく。

な「あ～～あ、四番目か～～」

フェ「や、やった、二番目」

アリ「私が最初に言い出した事なのに、どうして三番目なの～～～？」

ア「・・・最後」

な・フェ・アリ「「それは仕方ないよ」」」

ア「うう・・・・」

順位は二位　フェイト。三位　アリシアちゃん。四位　なのは。五位がアリサの順番だった。

す「ふふっ、楽しみだね一成君」

一「・・・・そうだな」

と言うわけで、俺は栄えある一位のすずかと、今度の休日に出かけ

る事になった・・・

そして・・・休日がやって来た。

一「神奈、天音。出かけて来る。多分夕方まで戻らないから」

神「何処に行くのじゃ？」

一「公園」

天「お一人でですか？」

一「いや、すずかと」

神・天「えっ・・・？」

一「じゃあ行って来る」

何故か固まった二人にもう一度声をかけ、俺は待ち合わせ場所に向かった・・・

神「一成が・・・あの一成が・・・・・デートじゃとぉ！？」

天「そんな！　私達があれだけアプローチしても全く乗ってくださ

らなかった一成様が・・・」

ｏｒｚ×２

神「天音・・・飲むか？」

天「ええ、お付き合いします・・・壊れるまでね！！」

俺が待ち合わせ場所に着くと、すでにすずかはやって来ていた。

一「お早うすずか。もしかして待たせてしまったか？」

す「お早う一成君。ううん、私も今来たところだから」

一「そうか、よかった。それにしても・・・随分早いな」

一応予定の時間の３０分前に来たのだが、まさかその俺より早く来ていたなんて。

す「えっ？　そ、そうかな・・・？」

一「ああ、まだ予定の時間より３０分も早いぞ」

す「・・・だって、待ち切れなかったんだもん」

一「ん？　何か言ったか？」

す「う、ううん！　何でもないよ！！」

一「そうか。結果として予定より早くなったが・・・行くか？」

す「そうだね」

今回出かけるのは、隣町にある大きな植物公園。

前からすずかはそこに行きたかったらしく、せっかくだからと行く事にした。

さすがに歩いて行ける距離では無いので、電車を利用する。

一「とりあえず切符だな」

二人分の切符を買う。

す「か、一成君。切符くらい私も・・・」

一「いや、誘ってくれたんだ。これくらい出させてくれ」

す「あ、ありがとう・・・・／／」

改札をくぐり、電車に乗り込んだ。

一「今日行く所ってどんな所なんだ？」

す「最近出来たところで、珍しいお花や木がたくさん見られるんだって。大きな広場もあって、そこでも遊べるみたい」

一「ふむ、楽しみだな」

す「うん♪」

なるほど、すずかは花が好きなのか。

？「ねえねえあの二人」

一「ん？」

俺達の前に座っている美由紀さんと同い年くらいの女性二人組が、俺とすずかを見て話をしている。

女性Ａ「随分可愛らしいカップルね」

女性Ｂ「イケメンに美少女・・・・お似合いね」

女性Ａ「あ～あ、私も彼氏欲しいな～～」

女性Ｂ「私も・・・・」

その時、電車が駅に停止し、女性達はそのまま降りていった。

す「か、カップルだなんて・・・・」

一「すずか？」

す「私と一成君が・・・・カップル／／」

一「お～～い、すずか～～？」

す「・・・・はっ！」

何故かトリップしていたすずかを正気に戻す。

す「ね、ねえ一成君。あの人達私達の事、か、かか・・・カップルって・・・・」

一「ああ、勘違いも甚だしいよな。すずかみたいな器量のいい美少

女に、俺みたいな男が釣り合うわけがないってのに」

全く、何処をどう見ればそんな結論に至るんだ？

す「び、美少女・・・」

一「あれ？すずか・・・？」

す「ポ～～ッ・・・・／／」

一「・・・またか」

この後、降りる駅の寸前ですずかは再び正気を取り戻し、何とか降りる事が出来た・・・・

す「うわぁ・・・・綺麗・・・・・」

植物公園の門をくぐった瞬間、すずかは感嘆の息をもらした。

一「これは・・・大したものだな」

見渡す限りの花、花、花。

す「一成君・・・凄いね・・・・・」

一「ああ・・・・」

あまりの光景に思わず見入ってしまう。

一「とりあえず・・・・進もう」

す「そ、そうだね」

俺達は公園の奥に向かった・・・

一「すずか、大丈夫か？」

す「う、うん」

休日と言う事もあり、公園内は多くの人で賑わっていた。

一「逸れたら大変だな」

す「ね、ねえ一成君・・・・手・・・」

一「すずか、手を繋ぐぞ」

ギュッ

す「え？」

一「これなら逸れる心配も無いからな。嫌だろうけど我慢してくれ」

す「い、嫌じゃないよ」

一「そうか」

しかし、手を繋いでからすずかは顔を俯かせてしまった。

一「（う～～む。不機嫌にさせてしまったか？）」

す「（ど、どうしよう手に汗が。一成君、気持ち悪いって思ってないかな？）」

一「（さっさとこの人混みを抜け出さなくては）」

す「（そう言えば、一成君と手を繋ぐのってあの時以来だよね）」

一「とりあえず、落ち着ける場所を探そう」

す「そ、そうだね」

一「そう言えば広場があるって言ってたな。そこに行ってみよう」

す「うん」

俺達は広場に向かった・・・

十分後、目的の広場に到着した。

一「さて、これからどうす・・・」

グウ～～～

一「あっ・・・・」

その時、俺の腹の虫が音をたてた。

す「ふふっ、お腹空いたんだね？」

一「そう言えば・・・・もう昼時だな」

時計の針は正午を少し過ぎていた。

一「とりあえず、適当に店にでも入って・・・」

す「あ、あのね一成君・・・・」

一「ん？」

す「お、お弁当作って来たの」

すずかが取り出したのは二人分の弁当箱。

一「俺のも作って来てくれたのか？」

す「う、うん・・・どうかな？」

一「ありがとう。喜んで頂くよ」

す「よかったぁ」

一「開けてもいいか？」

す「うん♪」

弁当箱の中はとても美味しそうなおかずで溢れていた。

一「頂きます」

早速口に運ぶ。

す「ど、どうかな・・・・？」

一「うん、美味いよ」

す「ほ、本当？」

一「ああ、俺の好きな味だな」

す「よかったぁ。頑張って作った甲斐があったよ」

一「え？　すずかが作ってくれたのか？」

す「ノエルとファリンにも手伝ってもらったんだけどね。ちなみに今一成君が食べたのは私が作ったんだよ」

すずかも弁当箱を開く。中身は俺と全く同じだった。

一「二人分も大変だったろ？」

す「そうでもないよ。楽しかったし」

そう言ってすずかは微笑んだ。

一「・・・・すずかはきっといい奥さんになるんだろうな」

す「ふえっ!?」

カチャン

箸を落とすすずか。

一「どうしたんだすずか?」

す「か、一成君が変な事言うから・・・／／」

一「変な事って・・・・俺は思った事をそのまま言っただけなんだが」

す「ううう・・・／／」

弁当を食べ終えるまで、すずかは俺と目を合わせようとしなかった。

一「ごちそうさま。美味かったよ」

す「お、お粗末さまです」

そのまま芝生に寝転ぶ。

一「むっ・・・・」

瞼が重くなって来た。

す「どうしたの一成君？」

一「いや、満腹になったら眠くなって来た」

す「そ、それじゃあ・・・わ、私、膝枕してあげるよ」

自分の膝を指すすずか。

一「いや、それは悪いよ。それに、せっかく来たんだからもっと回らないと」

す「枕無しで寝たら首が痛くなっちゃうよ？　私も少し疲れちゃったし、このままここで休んじゃおうよ」

一「しかし・・・・」

す「いいからいいから」

半ば強引に俺の頭を膝に乗せるすずか。

一「・・・・やわらかいな」

す「も、もう！　そんな恥ずかしい事言わないでよ」

一「すまん・・・・」

話している間もどんどん眠くなる。

一「すまな・・・すずか・・・・俺・・・眠・・・・・」

す「いいよ寝ても。お休み一成君・・・」

一「・・・・・・」

すずかの優しい声を聞きながら、俺は意識を失った・・・・・・

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

すずかＳＩＤＥ

一「・・・・・」

す「ふふっ、寝ちゃった」

一成君の頭をなでながら寝顔を見る。

す「可愛い寝顔。いつもはあんなにカッコいいのに」

普段とのギャップにまた惹かれる。

す「一成君知ってる？　私・・・あなたが大好きなんだよ?動物園で出会った時からずっと・・・」

再会してからはその気持ちがますます強くなった。

す「あなたと話していると楽しい・・・あなたの事を考えるとドキドキする・・・こんな気持ち初めてなの」

一成君に顔を近づける。

す「私・・・なのはちゃん達には負けないから」

チュッ

そのまま一成君のおでこにキスをする。

す「・・・・み、見られてないよね／／」

周りに人はいない。

す「あ、あれ・・・？」

何だか私も眠くなって来た。

す「ね、寝ちゃっても大丈夫かな？」

一成君を膝枕したまま、私もゆっくりと瞼を閉じた・・・・

・・・・・・・・

す「う、うん・・・・・」

意識が戻って来る。私一体・・・・

一「お早うすずか」

一成君の声が聞こえる。

す「そうだ・・・私寝ちゃって・・・・・」

そこで違和感に気付く。何だか地に足がついていない様な・・・・

す「えっ・・・・・」

目の前には一成君の後頭部。も、もしかして・・・

す「か、一成君!?」

一「どうしたんだ?」

す「な、何で私、一成君におぶさってるの？」

一「何時の間にか夕方になっててな、帰ろうとしたんだがあまりにも気持ちよさそうに寝ていたから起こすのも忍びないと思って」

す「そ、そうなんだ・・・・」

一「もう少しで家に着くからな」

周りには見知った風景が広がっていた。

す「ご、ごめんね一成君。重かったでしょ？」

一「全然。むしろ軽過ぎだ。ちゃんとご飯食べてるか？」

す「よかった・・・」

重いって言われたらどうしようかと思った。

一「今日は楽しかったよ。ありがとなすずか」

す「ううん、こちらこそ。ねえ一成君・・・・また一緒にお出かけしてくれるかな？」

一「もちろん。その時はまたすずかの弁当が食べたいな」

す「うん！　今度はもっと美味しく作るからね！！」

一「ははっ、それは楽しみだな。約束だぞ？」

す「うん♪」

私はお家に着くまで一成君の好きな食べ物について聞き続けた・・・

すずかＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＩＮ　ＳＩＤＥ

一「ただいま」

すずかを送った俺はそのまま帰宅した。

一「神奈？　天音？」

いつもなら出迎えてくれるはずなのに。

一「出かけたのか？」

不思議に思いつつ、リビングに向かうと

神「はっはっは！もっと飲めぃ♪」

天「いただきま～～す♪」

そこには混沌が広がっていた。

酒の缶が積み立てられており、神奈がつまみに買っていた物の袋が至る所に散乱していた。

天「うう～～～かずなりさま～～～～！　わたしたちというものがありながら～～～～！！」

神「全くじゃ！　こんな美女を差し置いて他の女とデートするなど！！」

天「しかもしょうがくせいとなんて・・・・もしかして・・・・ろりこんなんでしょうか？」

神「まさか・・・しかし、そうだとしたら妾達に勝ち目は・・・・・」

天「うわ～～～～ん！！　かずなりさま～～～～～！！」

神「なのは達に警告しておいた方がよいの・・・・」

一「・・・・・おい」

おまけ

月村家にて・・・・

忍「すずか、今日は楽しかった？」

す「うん♪」

ファ「お弁当の反応はどうだった？」

す「美味しかったって言ってくれたよ」

ノ「そうですか。それはよかったですね」

す「二人のおかげだよ」

忍「それで・・・・どこまで行ったの？」

す「どこまでって？」

忍「一成君と進展はあったの？　まさか、何も無かったって事はな

いでしょ？」

す「えへへ、手を繋いでくれたよ」

忍「あらそれだけ？　てっきりキスの一つでもしたのかと・・・」

す「ふえっ！？　な、何で知って・・・・・」

忍「あらぁ・・・・その反応・・・・何か隠してるわね？」

す「そ、それは・・・・／／」

忍「逃がさないわよ」

ガシッ！×２

す「ノエル！？　ファリン！？」

ノ「申し訳ありませんすずかお嬢さま」

ファ「私達も気になって気になって」

す「そ、そんな・・・」

忍「さあ・・・観念して話しなさ～～～い♪」

す「た、助けて一成く～～～ん！！」

第三話　デートって何処に行けばいいのかさっぱりわからない　すずか編（後書

作「デート編第一弾はすずか嬢だ」

一「本当に書きやがったな。デートした事ない癖に」

作「妄想なら何でも有りさ」

天「思わず自棄酒しちゃいました」

神「いやぁ、なかなかの飲みっぷりじゃったぞ」

刹「天音。お前あんな風になるんだな」

天「言わないでください・・・」

作「あ、そうだ。要望があったからプレシアさんとのデートもやるからな」

一「何処行くんだよ?」

作「大人の女性って何処に行ったら喜ぶかな?」

一「知るか・・・・」

一「さて、贈り物報告会に移るか」

貴「一成さん」

一「貴哉さん。こんにちは」

貴「この前の返事と贈り物を届けに来ました。いつもの様に神奈さん達に封筒（中身は写真）とバズーカとＰ９０とＡＫ－４７です」

神「うむ、すまぬな」

天「銃火器が充実していますね」

刹「後で試し撃ちでもするか」

貴「それで・・・作者さんに話が」

一「おい作者！　貴哉さんがお呼びだぞ」

作「何ですか？」

貴「緋水が自分と俺のどっちに殺られたいか聞いて来いって」

作「えっ？」

一「ああ、あの話ですか」

作「ど、どう言う事だよ！？」

一「『第二回　みんなで作者をいたぶろう』の事だよ」

天「今回は貴哉様にお任せしようと言う話になりまして」

作「き、聞いてないぞ！！」

刹「言ってないからな」

作「・・・・・」

貴「それで、どうします？・・・・・正直、緋水のやつかなり切れてますよ」

作「な、何でですか？」

貴「緋水は大の美由紀ファンなんです」

一「・・・・納得だな」

神「完全にお主の自業自得じゃな」

作「貴哉さん・・・・あなたの方でお願いします」

貴「わかりました。そう伝えておきます」

一「何で緋水様にしなかったんだよ？」

作「自分から死にに行く様な事が出来るか！！」

神「次じゃ。金獅子様からケーキ詰め合わせに一成宛に眼鏡。作者に交通安全と合格祈願のお守りを頂いたぞ」

作「ありがとうございます金獅子様！」

刹「そう言えば試験の結果はどうだったんだ？」

作「後で報告するよ・・・」

一「眼鏡か・・・・」

スチャッ

一「どうだ？」

神「似合っておるぞ」

天「眼鏡一つでだいぶ印象が変わりますね」

刹「我が君よ、今度は元の姿でかけてみてくれ」

一「・・・・今度な」

天「月光閃火様からはスーパーピンチクラッシャーとクッキーを頂きました」

神「スクライドじゃな」

一「クーガー兄貴は最高」

天「漫画とアニメで扱いがかなり変わってますよね」

刹「漫画だとすぐに死ぬしな」

一「アニメのＯＰは神曲だ」

天「確か三番までありましたよね。アニソンでは珍しいんじゃないですか？」

刹「朝凪　夜風殿からは我等全員にお守りを頂いたぞ」

一「１００％お前の発言のせいだよな」

作「ギクッ」

刹「我と神奈、天音に恋愛成就。作者に交通安全と合格祈願と厄除け。我が君にも厄除けだ」

一「厄除けか。これはたすか・・・」

ジュワッ！

一「なっ！？」

神「な、何じゃ！？　一成が触った途端燃え尽きたぞ！」

刹「我が君の災厄を呼ぶ力は神の加護をも超えるのか・・・」

一「そ、そんな。せっかく安心して暮らせると思ったのに・・・」

一「最後・・・清浦　刹那様から神奈にアルトアイゼン・ナハト。天音にヴァイスリッター・アベント。刹那に羅刹機アルクオンを頂いたぞ」

神「孤狼か・・・見事な物じゃな」

天「ヴァイスのランチャーって構造が複雑そうですよね」

刹「我の覇気で扱えるのか？」

一「今回は質問も来てるぞ『三人の一成との馴れ初めについて教えてください』・・・だそうだ」

天「一成様を最初に見つけたのは私でしたよね」

神「うむ、天音にしては上出来であったな」

刹「まさか我を解放できるほどの力を秘めているとは思いもしなかったがな」

一「何で俺に決めたんだ?契約する前の俺ってただの一般人だったろ」

天「何ででしょう?ただ・・・惹きつけられる何かを感じたのです」

神「そうじゃな。まるで、この者に従うのは当然の事じゃと妾達に思わせる何かが一成からは感じられたのじゃ」

刹「それが何かは未だにわからないがな」

作「お答えしよう!」

一「作者?」

作「と言っても詳しい事は言えないがな。一つだけ言えるのは、お前と言う存在に関係する事だ」

一「俺の?」

作「ふっ、いずれわかるさ・・・・」

作「さて、ここでみなさまにご報告。自動車学校の試験ですが・・・・みなさまのおかげで見事合格しました!!」

一「なっ！？　馬鹿な！？」

作「いや～～あんな会話があったからてっきり落ちたかと思ったが、まさかな～～～」

以下、あんな会話・・・・

試験官「それじゃあ車を路肩に止めてください」

作「はい」

試験官「・・・作者さん（もちろん試験中は本名）反対車線にも車が止まってるのに、その横に止めたら後の車が通り難くなりますよねぇ？」

作「は、はい・・・・」

作「ここは見通しが悪いな。減速して確認を・・・・」

試験官「・・・作者さん。優先道路だからさっさと進みましょう」

作「あっ・・・・」

作「目的地に着いたので停止します」

試験官「・・・・作者さん。ギア・・・」

作「え？　でも停止する時はギアはローかバックにするって」

試験官「そうですね。では坂道に停車する時はどっちにします？」

作「ローです」

試験官「では・・・今止まっている場所は？」

作「・・・・坂道です」

試験官「あなたが入れたのは？」

作「・・・・バックです」

試験官「・・・・では変えてください」

作「オワタ・・・・」

試験官「最後にアドバイスですが・・・減速チェンジが出来てないですね。右折や左折をする時はもっと減速しないと」

作「はい・・・・」

試験官「全体的に判断が遅いです。もっと機敏にするように」

作「・・・・・・」

作「・・・とまあこんな風に」

神「・・・よくこれで受かったの」

作「方向変換もやったんだけど、そっちの方は過去最高の出来だったからな。多分、そっちのおかげだろうな」

天「後は免許センターで学科試験を受けるだけですね」

作「ああ、もう少しで念願の免許取得だ」

刹「大丈夫なのか？」

作「勉強すれば大丈夫さ」

刹「・・・我が言っているのは取得後の運転の事なのだが」

一「一年以内に事故を起こすのに二万」

神「半年に一万」

天「三か月に四万」

刹「一か月に五万」

作「賭けるな！！」

一「んな事より、礼を言えよ」

作「・・・・こうして俺が合格出来たのも、みなさまが祈ってくださったおかげです。感想で励ましてくださったみなさま。おかげで勇気が持てました。学科試験も一発合格を目指して頑張ります！」

一「二ヶ月後に取得に二万」

神「四ヶ月に一万」

天「半年に四万」

刹「期限切れに五万」

作「だから賭けるなってぇの！！」

第四話　デートって何処に行けばいいのかさっぱりわからない　フェイト編（前

やべえ・・・フェイト編なのに全然フェイトが目立たない・・・

第四話　デートって何処に行けばいいのかさっぱりわからない　フェイト編

一「それじゃあ行って来る」

前回から始まったなのは達との外出。今回はフェイトだ。

神「・・・・またか」

天「うう・・・行ってらっしゃいませ」

一「ああそうそう。帰って来た時にもしまた前回みたいな事になってたら・・・ＯＨＡＮＡＳＩするからな」

神・天「「はい！！」」

一応釘を刺しておく。

一「待ち合わせ場所は・・・・確かフェイトのマンションだったよな」

俺はフェイトの住むマンションに向かった・・・・

一「あれ？」

マンションの前にフェイトが立っている。しきりに辺りをキョロキョロし、何かを探している様だった。

一「お早うフェイト。どうしたんだこんな所で？」

フェ「お、お早う一成！　ご、ごめんね、一成とお出かけするって思ったら待ちきれなくて・・・／／」

顔を赤くするフェイト。

一「ははっ、ありがとう。冗談でも嬉しいよ」

フェ「・・・・冗談じゃないんだけどな」

一「フェイト？」

フェ「何でもないよ。それより、今日は何処に行くの？」

一「そうだな・・・・案内するって言っても何処から行けばいいかわからないしな。フェイトは何処か行きたい所はあるか？」

フェ「わ、私？」

一「ああ、今日はフェイトの為に出かけるんだからな。可能な限りの要望は聞くぞ」

フェ「ありがとう一成。じゃ、じゃあね・・・私、水族館に行きたいな」

一「水族館？」

フェ「うん。なのはとは動物園に行ったんでしょ？だったら私は一成と水族館に行きたい」

一「なるほど・・・・」

フェ「駄目・・・かな・・・？」

一「わかった。行こう」

フェ「ほ、本当に！？」

一「ああ、だからその上目使いを止めてくれ。俺が酷い人間に思えて来る・・・」

フェ「？」

全く、自覚が無いのも困り物だな・・・

一「目的地も決まった事だし、早速行こうか？」

フェ「うん♪」

ギュッ！

俺の手を握るフェイト。

一「フェイト？」

フェ「あっ・・・」

声をかけると俺の顔と握った手を交互に見つめ

フェ「ご、ごごごごメンなさいぃぃ！！！」

顔を真っ赤にし、ブリッツアクション並みの早さで俺から離れた。

フェ「あ、あのね！　今のはついうっかりしちゃった事で！　前から一成と手を繋いでみたくて！　気付いたら握っちゃってて！　うう・・・私何言ってるんだろう・・・・」

すっかりテンパっているフェイト。

ギュッ

フェ「え？」

そんな彼女の手を優しく握る。

一「何謝ってるんだフェイト？　ほら、早く行こう」

フェ「う、うん・・・・／／」

手を繋いだまま、俺達は水族館に出かける事にした。

フェ「・・・・温かい」

一「何か言ったか？」

フェ「ふふっ、何でもない♪」

・・・・・・

一「やれやれ、まさか移動だけで一時間もかかるとは・・・・」

到着した俺の胸には妙な達成感があった。

一「フェイトも疲れただろ。入る前に何処かで休むか？」

フェ「大丈夫だよ・・・・むしろ、ずっと一成と手を繋げてて嬉しかったし・・・」

一「ん？」

フェ「う、ううん！　それよりほらっ、早く行こうよ！」

俺の手を引き、駆け出すフェイト。

一「わ、わかったから引っ張らないでくれ」

フェ「あ、ごめんね（わわわ！じ、自分から手を繋いじゃったよぉ！）」

俺達は水族館の門をくぐった・・・

フェ「うわぁ・・・・」

一「随分大きい水槽だな」

アクリルガラスの向こうでは、小型や大型の魚、エイやサメ等多くの種類の海中生物が活き活きと泳いでいた。

フェ「凄い・・・・」

一「どうだフェイト、実際見ての感想は？」

フェ「凄い！　凄いよ一成！　あんなにたくさんのお魚さんがいるよ！！　あ、あの小さいの可愛い！　ねぇ一成、あのお魚さんこっち見てるよ！　何て言うお魚さんなのかな？　一成知ってる？」

一「そこのパネルに詳しく載ってるよ」

フェ「あっ、本当だ！えっと・・・・」

初めて見る光景に興奮するフェイト。普段の大人しい様子と違い、今は年相応の姿を見せていた。

一「この姿が見れただけでも、ここに連れて来た甲斐があったな・・・」

他の客達もフェイトに優しい視線を向けていた。

一「フェイト、何の魚かわかったか？」

フェイトの横で一緒にパネルを眺める。

フェ「うん！　えっとね・・・・・」

説明しようとしたフェイトだが、俺の顔を見るなり固まってしまった。

一「フェイト？」

フェ「か、一成・・・・・顔が／／」

気がつけば、お互いかなりの至近距離で見つめ合っていた。

一「むっ、すまない（こんなに近づいたらそりゃ怒るよな）」

フェ「べ、別にいいよ（もうちょっとでキ、キ・・・・うぅ、何考えてるの私！？）」

一「そろそろ移動するか？」

フェ「そ、そうだね・・・／／」

一「お、フェイト、アザラシに触れる場所があるらしいぞ、行ってみるか？」

フェ「うん！」

早速ふれあいコーナーに向かった・・・

？「みなさんこんにちは～～！　アザラシの飼育員の斉藤　美樹です。今日はアザラシさんとたくさん触れ合ってくださいね～～～！！」

フェ「うわ～～！　一成、アザラシさんがいっぱいだよ！！」

一「・・・・・」

斉「あれ、どうしたのかな？」

一「何で俺達以外誰もいないんだ・・・・」

ふれあいコーナーには俺とフェイト、飼育員の斉藤さん、そして三十頭近くのアザラシ達しかいなかった。

斉「いや～～ウチのアザラシってかなりアグレッシブでね、最初の

頃はお客さんもたくさん来てくれたんだけど、今は怖くて誰も近づかないのよ」

フェ「えぇ！？」

あっけらかんと言う斉藤さん。

一「大丈夫なんですか斉藤さん？」

斉「美樹でいいよ～～。大丈夫大丈夫、優しくしてあげれば大人しいから」

すると、一頭のアザラシが俺に近づいて来た。

一「ん？」

俺に体をすりつけるアザラシ。

美「あら珍しい。その子の方から近付いてくるなんて」

フェ「そうなんですか？」

美「ええ、ちなみにその子はメスよ。今妊娠してるの」

見ればお腹が少し膨らんでいた。

美「優しくなでてあげて。そうすれば喜ぶから」

一「こうですか？」

アザラシ「♪～～」

腹をなでると、嬉しそうに目を細めた。

フェ「可愛い～～♪」

美「あなたも触ってあげて」

フェ「はい！」

フェイトが触れると、また嬉しそうに声をあげた。

フェ「この子達って何アザラシなんですか？」

美「ゴマフアザラシよ。知ってる？」

フェ「私は知らないです。一成は？」

一「アザラシ科、ゴマフアザラシ属に属する海棲哺乳類の一種だ。アザラシとしては中型で、体長はオスで１７０ｃｍ前後。メスが１６０ｃｍ前後で体重は７０～１３０ｋｇほどになる。ベーリング海やオホーツク海を中心に分布し、日本海や太平洋にも生息していて、個体数は全体で約４０万頭。うち２０万頭がオホーツク海に分布している。繁殖は一夫一妻で、交尾して１年後に流氷上で出産する。新生児は白色から、ややクリーム色をした産毛に包まれて生まれて来るが、これは流氷上で保護色になるんだ。寿命は３０年前後だが、３０歳を超えたメスが出産した例もある。広食性で口に入る魚は何でも食べる。タラ類やカレイ類、秋刀魚等だな・・・・ですよね美樹さん？」

ふぅ、久しぶりだからつい熱が入ってしまった。

美「せ、正解・・・・てか君詳し過ぎ！！　何でそんな事知ってんの！？」

一「動物好きなんですよ」

美「ねぇ、将来ここに就職しない？　君ならいい説明お兄さんになれるよ」

一「・・・考えておきます」

フェ「凄いね一成。なのはが言ってた通りだよ」

一「なのはが？」

フェ「うん。一成は動物に詳しくって、気になったら色々教えてくれるって」

ああ、動物園での事か。

美「なになに～～？　こんな可愛い彼女がいるのに他の娘とデートしたの？」

フェ「か、彼女！？」

一「彼女は友達ですよ。それに、昔の話です」

美「な～～んだ。つまんない」

つまんないってあんた・・・・

フェ「む～～～・・・・」

一「どうしたフェイト？そんなに頬を膨らませて・・・」

フェ「何でもないもん・・・」

一「？」

アザラシ「♪～～～」

一「何だ？」

さっきのアザラシがまた近付いて来た。

一「またなでて欲しいのか？」

アザラシ「～～～」

コクン

・・・頷いたぞ。

一「仕方ないな」

再び腹をなでる。

アザラシ「♪～～～」

クイッ

一「あれ？」

引っ張られる感触に振り向くと、別のアザラシが俺の服を咥えていた。

一「君もなでて欲しいのか？」

アザラシB「～～～」

コクン

また頷いた・・・・

一「やれやれ・・・」

二頭目のアザラシの腹をなでる。

アザラシB「♪～～～」

アザラシC「～～～～」

アザラシD「～～～～」

一「ちょっと待て・・・・・」

気付けば大量のアザラシに囲まれていた。

美「モテモテね～～♪　その子達みんなメスよ」

一「・・・・何でだよ」

アザラシA「ッ～～～～！」

その時、最初のアザラシが他のアザラシを威嚇するように声をあげた。

美「あらら、ずいぶんミオに気に入られたみたいね」

一「ミオ？」

美「そのアザラシの名前よ。ちなみに残りの子の名前はレン、アイ、マナよ」

ミオ「～～～～！」

レン「～～～～！」

アイ「～～～～！」

マナ「～～～！」

一「何言ってるかさっぱりわからん・・・・」

フェ「ケンカしてるのかな？」

美「う～～ん・・・・多分ね～～～・・・・・」

以下、副音声でお楽しみください。

ミオ「あんた達！　この人から離れなさい！！」

レン「何言ってんのよ！　その人は私達に会いに来てくれたんでしょうが！！」

アイ「一人占めはずるいですよミオさん！！」

マナ「そ～だそ～だ！　マナだってお兄さんになでなでされたいのだ！！」

ミオ「お子ちゃまは黙ってなさい」

レン「あんた夫がいるじゃない！」

ミオ「ふっ、私は妻である前に一匹のメスよ」

レン「黙りなさいこのアバズレ！」

ミオ「何ですって!?」

アイ「け、ケンカは駄目ですよ～～！」

マナ「今のうちなのだ」

アイ「あっ！　マナちゃん!?」

マナ「へへーん、早い者勝ちなのだ♪」

副音声終了・・・・

美「・・・・なんて会話がされているに違いないわ！」

フェ「アザラシさんの言葉がわかるんですか!?」

美「うんにゃ、適当」

フェ「・・・・・・」

一「大した想像力ですね・・・・一度病院に行く事をお勧めします」

美「酷っ！」

一「それよりどうするんですか?このままじゃ本当にケンカが始まりますよ」

美「大丈夫。私の予想通りなら君が『止めろ』って言ったらすぐに

止めると思うから」

一「なわけないでしょう」

美「いいから言ってみて？」

一「・・・・みんな止めるんだ」

ピタッ！

俺の一言に一斉に大人しくなるアザラシ達。

フェ「ほ、本当に止めちゃった・・・・」

美「ほらほら、言う事聞いてくれたんだからなでてあげて」

一「・・・・・」

一頭ずつ腹をなでて行く。

ミオ「♪～～～」

レン「♪～～～」

アイ「♪～～～」

マナ「♪～～～」

満足げな様子の四頭。

美「は～～いみんな。離れて離れて」

美樹さんの言葉に従い、アザラシ達は俺から離れて行った。

一「何にせよ、これで解放され・・・」

？「グゥゥゥゥゥ・・・・・」

一「ッ！？」

突然感じた背後からの殺気にその場から飛び退く。

フェ「一成！？」

美「あっちゃあ・・・・忘れてた」

俺を襲撃したのは、右目の傷が印象的な一頭のアザラシ。

一「なんだこいつ？」

美「その子はジン。ミオの旦那さんよ」

一「そのジンが何で俺を襲うんですか？」

美「君とミオのやりとりを見て嫉妬しちゃったんじゃないかな？」

一「嫉妬って・・・・」

アザラシだぞ？

ジン「ッ～～～！！」

一「くそっ！」

アザラシとは思えないスピードで突っ込んで来るジンに対し、急いで回避行動をとる。

ジン「フッ！」

一「なっ！？」

ありえない角度からの尾の一撃を何とか回避した。

美「大変！　急いで他の飼育員を呼んで来なきゃ！　君、頑張ってね！！」

一「頑張ってと言われても」

フェ「危ない！！」

一「チッ！余所見もさせてくれないのか！」

その時、ジンがフェイトの方を向いた。

フェ「え？」

ジン「～～～！」

そのままフェイトに標的を変え、迫るジン。

一「まずい！　逃げろフェイト！！」

フェ「う、うん！」

逃げようとするフェイトだったが、水に濡れ滑りやすくなっていた床の所為で転んでしまった。

ジン「～～～！」

フェ「ッ！！！」

目をつむるフェイト。

ガシッ！

ジン「～～～！？」

一「・・・・調子に乗るなよ鰭脚類」

尾を掴む。

一「大丈夫かフェイト！？」

フェ「な、何とか・・・・」

一「よかった」

ジン「～～～！！」

必死に逃れようとするジンを力ずくで押さえつける。

一「さて、少し・・・・ＯＳＩＯＫＩしようか？」

ジン「～～～！？」

俺は他のアザラシ達が顔を覗かせているプールに向かって

一「どっ・・・せぇい！！」

ジンを思いっきりぶん投げた・・・

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

美樹ＳＩＤＥ

飼育員Ａ「ジンが暴れているって！？」

飼育員Ｂ「しかも相手は少年だと！？」

飼育員Ｃ「何をやっているんだ君は！！」

美「ひ～～ん！　ごめんなさ～～い！！」

飼育員Ｂ「早くその少年を助けないと！」

飼育員Ｃ「行くぞ！！」

他の飼育員に事情を話し、急いでふれあいコーナーに戻る。

美「君！　無事！？」

息を切らせて戻った私を待っていたのは

ジン「・・・・・・」

アザラシ達「・・・・・・」

美「え・・・・？」

ひれ伏す様に地面に横たわっているアザラシ達と

一「お帰りなさい美樹さん。御覧の通り、みんな大人しくなってくれましたよ」

その前に立ってこちらを見ているあの男の子だった・・・

美樹ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＩＮ　ＳＩＤＥ

美「ねえ君、いったい何があったの？」

美樹さんが数人の飼育員を連れて近づいて来た。

一「美樹さんがいなくなった後、ジンがフェイトを襲おうとしたんです」

美「なっ！？」

一「さすがに腹が立ちましてね、ジンの尾を掴んで思いっきり・・・」

美「お、思いっきり・・・？」

一「ぶん投げました」

美「えっ！？」

一「プールに向かって投げましたからジンにケガは無いですよ。そ

れで終わりかと思ったんですが、またプールから出てきましてね、もう一度投げてやろうとしたら何故かあんな事を・・・」

伏せているジンを指す。

一「他のアザラシ達も同じ様な事をし始めまして、結果ああなりました」

理由がわからん。何がしたいんだ?

飼育員A「おそらく、君が自分より強い事を認めたんだろうな」

一「俺がですか?」

飼育員C「だろうな。そして、ジンはここのアザラシの中で一番強いんだ。そのジンを負かした君に他のアザラシも従う事にしたんだろう」

飼育員B「おめでとう。君は人間にしてここのアザラシのトップに立ったんだよ」

一「・・・全然嬉しくない」

フェ「あ、あはは・・・・」

俺達はふれあいコーナーを後にし、金輪際あの場所には行かない事を誓った・・・

フェ「ちょっと怖かったけど、楽しかったね」

一「・・・・酷い目に遭った」

フェ「次は何処に行こっか？」

一「フェイトに任せるよ」

フェ「じゃあ・・・・イルカショーを見に行かない？」

一「わかった。行こう」

フェ「うん♪」

・・・・・

イルカショーを見に会場に向かった・・・

フェ「イルカさん可愛かったね」

一「ああ・・・・俺にばかり水をかけて来なかったら最高だったな」

あのイルカ、いの一番に俺に向かって来たが、何でだ？

一「さて、そろそろ帰るかフェイト？」

フェ「えっ！？　もうそんな時間なの？」

腕時計は十七時を指している。

フェ「じゃあ最後にお土産コーナーに行っていいかな？母さんや姉さん、アルフに何か買って帰りたいの」

一「もちろん。そうだな、俺も神奈と天音に何か買って帰るか」

最後にお土産コーナーに立ち寄る事にした。

一「何を買うんだ？」

フェ「母さんと姉さんにはストラップかな。アルフはお菓子の方が喜ぶだろうし・・・」

一「それが無難だな。俺もそうしよう」

ストラップ売り場にはたくさんの魚のストラップが並んでいた。

一「へぇ、ヨーロピアンロブスターやタスマニアオオガニのストラップまであるのか」

珍しいな。これにするか

フェ「一成は決まった？」

フェイトの手には、ペンギンとラッコのストラップと魚形のサブレの箱があった。

一「ああ、これだ」

ロブスターとカニのストラップを見せる。

フェ「そ、それ？」

一「珍しいからな」

きっと二人も喜んでくれるだろう。

フェ「一成は何も買わないの？」

一「特に欲しい物も無いしな」

フェ「せっかく来たのにもったいないよ。そうだ！一緒に来た思い出におそろいで何か買わない？」

一「おそろい？」

フェ「うん！」

思い出か・・・

一「そうだな。せっかくだし俺も何か買うか」

フェ「やったぁ♪」

一「何にするかはフェイトに任せるよ」

フェ「そ、そう？じゃあ・・・・・これ！」

そう言ってフェイトが差し出したのはイルカのストラップだった。

一「じゃあ会計して来るから貸してくれ」

フェ「そんな、悪いよ」

一「気にするな。プレゼントさせてくれ」

フェ「あ、ありがとう・・・・／／」

土産を買った俺達は水族館を後にした・・・

フェ「今日はありがとう一成。とっても楽しかったよ！」

フェイトのマンションの前で別れのあいさつをする。

一「俺も楽しかったよ。また今度一緒に出かけような？」

フェ「うん♪」

一「それじゃあ、また学校でな」

フェ「またね一成。ストラップありがとう」

一「ああ」

フェイトに見送られ、俺は帰宅した・・・

一「ただいま」

天「お帰りなさいませ一成様」

神「どうじゃった、フェイトとのデートは？」

一「だからデートじゃないって・・・そうだ、二人にお土産があるぞ」

神・天「「えっ！？」」

一「大した物じゃないけどな」

神「構わぬ！　一成からもらえる事に意味があるんじゃ！！」

天「私達なんかの為に・・・うう、感激です！！」

袋から取り出し、二人に渡す。

一「はいこれ。ヨーロピアンロブスターとタスマニアオオガニのストラップ」

神・天「「・・・・・・」」

一「あれ？どうしたんだ二人とも？」

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

フェイトＳＩＤＥ

フェ「ただいま～」

アリ「お帰りフェイト～」

プ「一成とのデートは楽しかった？」

アル「フェイト～～、寂しかったよ～～」

フェ「きゃっ、お、落ち着いてアルフ」

アリ「アルフったらずっとこんな調子だったんだよ」

アル「ううー・・・」

フェ「アルフ、お土産があるから機嫌直して。ね？」

アル「ほ、ほんとかい！？」

アリ「いいな～～アルフ。私達には～～？」

フェ「もちろん二人にもあるよ」

母さんと姉さんにストラップ。アルフにお菓子を渡す。

アリ「可愛い～～♪　ありがとうフェイト！」

プ「あら、私にもくれるの？嬉しいわ」

アル「美味しそうだね。食べてもいいかい？」

フェ「もちろん。アルフの為に買ったんだから」

アル「頂きま～～す！」

凄い勢いでお菓子を平らげていくアルフ。

アリ「あれ、フェイトは何も買わなかったの？」

フェ「う、うん・・・・」

プ「勿体無いわね。私達の事は気にせずに買えばよかったじゃない」

フェ「そ、そうだね。あの・・・私お部屋に戻ってるね！」

逃げる様に部屋に向かう。

アリ「どうしたんだろう？」

プ「・・・・怪しいわね」

アル「う～～ん、美味しいねぇ♪」

バタン

部屋に入り、ゆっくりとドアを閉める。

フェ「・・・・・」

取り出したのはイルカのストラップ。大切な今日の思い出の品。

フェ「一成と・・・・おそろい／／」

これだけは母さん達にも見せるわけにはいかない。

フェ「二人だけの秘密だもん♪」

一成は称号「トップ・オブ・アザラシ」を手に入れた。

第四話　デートって何処に行けばいいのかさっぱりわからない　フェイト編（後

作「さて、デート編二回目はフェイトだ」

一「何でアザラシとガチで戦わなきゃいけないんだよ！」

作「いや、偶には趣向を凝らしてこんなのもいいかと」

神「というか、あの土産のセンスはおかしいじゃろ！」

天「ペンギンとかアシカとかもっと可愛い物があるでしょう！」

作「ふっ、完璧な人間よりちょっとおかしな所がある人間の方が人気が出るんだぞ？」

刹「ふむ、一理あるな。人間味があるという点では後者の方が好感が持てるな」

作「だろ？」

一「そのせいで段々変人みたいになって来たんだが・・・」

神「久しぶりに説明モードが出たしの」

作「正直、自分でも何書いてるか途中でわからなくなった」

天「そう言えば、スランプなんですって？」

作「ああ、軽く鬱ってたんだよ」

刹「その状態でよく書けたな?」

作「奈々様パワーのお陰だ」

一「何言ってんだ?」

一「作者の最後の一言が気になるが、贈り物報告会にうつるか」

神「まずは、朝凪　夜風様からじゃが・・・」

一「・・・何だこのダンボール?」

ガタッ!

天「う、動きましたよ!?」

一「何入ってんだ?」

刹「面白い、我が開けてやろう」

パカッ

？「た、助かったー！！」

ダキッ！

一「さ、櫻さん！？」

天「どうしてダンボールの中に！？」

櫻「・・・・夜風に無理矢理入れられたんです」

刹「我が君、何だこの可愛らしい少女は？」

一「ああ、この人は・・・って刹那！？」

神「何故鼻血を吹き出しておるのじゃ！？」

刹「こんな可愛らしい者に抱きつかれて鼻血を出さない方がおかしい」

櫻「ひっ！？」

一「いいから止めろ！櫻さんが怯えてるだろうが！」

刹「むっ、これは失礼・・・・」

櫻「すみません、急に抱きついたりして。私、狭い所が苦手で・・・」

刹「いや、可愛かったから許す」

櫻「この事は忘れてください・・・／／」

刹「だが断る！」

櫻「え？」

一「大丈夫です。後できっちり忘れさせておきますから」

神「刹那・・・ちょっとこっちに来い」

刹「何だ？そっちには何も無いぞ？」

天「いいですから」

刹「？」

スタスタ×３

・・・・・・・

ゴンッ！！

一「・・・・ね？」

櫻「は、はい・・・・」

刹「何だ?妙に頭が痛いのだが?」

天「気にしないでください。次は緋水様からです」

貴「こんにちは」

一「いらっしゃい貴哉さん」

貴「今回はラグナロクにジェネシス。俺の作った薬煙草を持って来ました。あと、作者さんとのＯＨＡＮＡＳＩ用にオベリスク、オシリス、ラーの神のカードを持って来ました」

一「そろそろあの会を始めるか」

刹「そうだな。次回辺りが丁度いいんじゃないか?」

一「ああ、貴哉さん。そのカードを持って次回もお越し下さい。その間に俺達も準備を整えておきます」

貴「わかりました。では次の機会に・・・」

神「神か・・・妾達も結界の準備をしておいた方がいいの」

天「ですね」

刹「最後だ、清浦　刹那殿からニルヴァーシュｔｙｐｅ3を頂いたぞ」

一「映画見てえ」

神「確かｓｐｅｃ?が出るんじゃろ?」

天「リフって気持ちよさそうですよねぇ」

刹「トラパーは無いが、オーラでやってみるか?」

神「面白そうじゃな」

一「いや、無理だから・・・」

第五話　デートって何処に行けばいいのかさっぱりわからない　アリシア編（前

緋水様、ゼロ様、ご意見ありがとうございます。さっそく使わせて頂きました。なんか前回と似た感じの話になりましたが、現在軽く鬱状態なんで許してください。

ちなみに前回から名前のあるキャラが結構登場していますが、あくまでわき役なのでもう出ません。

最後に一言・・・・何このライ○ンキ○グ？

第五話　デートって何処に行けばいいのかさっぱりわからない　アリシア編

アリ「兄様～～！！」

マンションの前でアリシアちゃんが手を振っていた。

一「お早うアリシアちゃん。どうしてここに？」

アリ「だって、早く兄様に会いたかったんだもん」

なるほど、流石姉妹。

一「考える事は一緒か」

アリ「？」

一「何でもないよ。それより、今日は何処に行きたい？」

アリ「動物園！」

一「動物園？」

アリ「うん！　一度行ってみたかったの」

一「よし、わかった。じゃあ今日は動物園に決定だな」

アリ「やったぁ！　ありがとう兄様！」

一「それじゃ急ごう。結構遠いからな、早くしないと楽しむ時間が無くなってしまう」

アリ「は～い！」

元気よく俺に腕を絡めて来た。

一「アリシアちゃん？」

アリ「デートなんだから腕を組むのは当然だよね～」

一「動き難くないか？」

アリ「そんなことないよ」

一「そうか、ならいいけど」

当然・・・・なのか？

一「・・・・わからん」

アリ「えへへ～～～♪」

・・・・・・・

電車を乗り継ぎ約二時間、俺達は動物園に到着した。独特な獣臭が鼻に突き刺さる。

アリ「わぁ！　動物さんがいっぱいだ～～～！！」

アリシアちゃんは目をキラキラさせていた。

一「さて、何から見に行きたい？」

アリ「大きい動物さんが見たい！！」

一「大きいって言うと・・・ゾウ等だな」

向かったゾーンではゾウやキリン、ライオンと言った大型の動物が、檻や広場の中からこちらを見ていた。

アリ「大き～～い！！」

ゾウを見たアリシアちゃんが驚きの声をあげる。

アリ「本物ってこんなに大きかったんだ。あっ、兄様あそこ見て」

見ると、二頭の子ゾウがじゃれあっていた。

一「仲がいいな。兄弟じゃないか？」

アリ「じゃあ私達と一緒だね」

一「俺達と？」

アリ「私と兄様だって仲良し兄妹だもん」

笑顔のアリシアちゃん。

一「ふっ、そうだな」

アリ「うん♪」

こういう関係もいいものだな。

アリ「兄様、次はライオンさんだよ」

一「そんなに慌てなくてもいいよ」

アリ「だってだって、早く見たいんだもん！！」

ふふっ、仕方ないな・・・

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

？？？ＳＩＤＥ

私が此処に連れて来られて一体どれだけの時が過ぎただろうか・・・

ただいたずらに時を消費する日々に別に不満は無い。傷ついた私を拾ってくれたあの方達にはいくら感謝しても足らない。このまま此処で一生を過ごす事も納得している。

ただ、一つだけ・・・たった一つだけ心残りがある。一度でいい、私と肩を並べる程の強者と死合ってみたかった・・・・

？「わ～～！　ライオンさんだ～～～！！」

現れたのは一人の少女。汚れを知らない澄んだ瞳をしている。

少女「兄様～～！　早く早く～～！！」

なるほど、兄妹でやって来たのか、楽しんでいって欲しいものだな。

？「待ってくれよアリシアちゃん」

くくく、振り回されているのか。そんな事では駄目だぞ少年。

やって来た少年に目を向ける。

ゾクッ！！

その姿を見た瞬間、心臓が止まったかと錯覚してしまった。

アレは何だ？　彼の纏っている覇気、とても幼い少年が持つものとは思えない。私にはわかる、彼は何度も修羅場をくぐり抜けて来た本物の戦士だ。これほどの者を私は見た事ない。

見つけた・・・ついに見つけたぞ・・・・私が待ち望んでいた強者を！！

？「ガオォォォォォォォォォン！！！」

歓喜の咆哮を上げ、あまりの喜びに体も震える。

少女「きゃっ！？」

少年「何だ？」

むっ、すまない少女よ。怯えさせてしまったか？

少女「びっくりしたぁ！　ライオンさんってこんなに大きな声が出せるんだね」

・・・全然怯えていなかった。

？「ど、どうしたシーザー！？」

長年私を世話してくれている上条殿が驚いている。

上「ここ数年、全く鳴かなかったのにどうして・・・」

去って行く少年を見送りつつ、私は決心した。

？「（私はシーザー、誇り高き百獣の王。待っていろよ少年！！）」

？？？ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＩＮ　ＳＩＤＥ

アリ「凄かったね兄様」

アリシアちゃんが言っているのは、先程のライオンの咆哮の事だ。

一「・・・・・」

あのライオン、俺の事を見ていた様な気がしたが・・・

アリ「兄様？」

一「いや、何でもないよ」

気のせいか？

園内を歩く俺達の前に大きな広場が見えて来た。近くの看板には『ふれあい広場』の文字。

アリ「ふれあい広場だって、行ってみようよ兄様！」

一「あ、ああ・・・」

アリ「兄様元気ないよ。疲れちゃった？」

一「大丈夫。行こう」

『ふれあい』と聞くとどうも嫌な予感がするが

一「大丈夫・・・ここにはあのアザラシはいない・・・」

意を決し、広場に入った。

アリ「きゃ～～！　可愛い～～♪」

広場にはウサギやイヌ、ワラビー等の小型動物がそれぞれの場所でのびやかに過ごしている。

アリ「アルフと同じ子っているかな？」

一「アリシアちゃん、アルフは狼だぞ」

アリ「あ、そうだった・・・」

・・・めげるなアルフ。誰が何と言おうと、キミは間違い無く狼だ。

アリ「ねえ兄様、この子ってどんな種類なの？」

子犬を抱きながらアリシアちゃんが聞いて来た。

一「その犬はシベリアン・ハスキーだな。昔から犬ゾリの牽引を担う犬として重用されてて、ある病気が大流行した時には氷点下五十度の中５４４ｋｍをリレーしながら血清を運んだ功績で像が建てられた犬だよ」

アリ「へ～～、キミ凄いね！！」

ハ「アンッ！」

嬉しそうに返事をするハスキー。

一「お、フリスビーがあるな。アリシアちゃん、投げてごらん」

アリ「うん！　よ～～し・・・・それっ！」

ハ「アンッ！」

パクッ

小さい体で必死に追いかけ、見事にキャッチし戻って来た。

アリ「ナイスキャッチ♪」

ハ「クゥ～ン♪」

なでられ、甘える声を出すハスキー。

一「ずいぶん懐かれたな」

アリ「あはは、くすぐったいよ！」

ハ「ペロペロ」

楽しげにじゃれあうアリシアちゃんとハスキー。

？「クゥ～～ン」

一「おっ」

一匹の柴犬が俺の手を舐める。

一「かまって欲しいのか？」

柴「ワンッ！」

一「仕方ないな」

頭を優しくなでてやる。どうやらこの子はメスの様だ。

一「あれ？　前にもこんなパターンがあったような・・・」

柴「ワンッ！」

一「ああ、すまん」

止まっていた手を再び動かす。

柴「クゥ～～ン♪」

余程嬉しかったのか、俺にのしかかり顔を舐めて来た。

一「ははは、くすぐったいって」

柴「クゥ～～ン、クゥ～～ン」

一「おいおい、舐め過ぎ・・・」

柴「クゥ～～ン・・・・ハッハッハッ！」

一「ちょっ！　おまっ！？」

柴「ハッハッハッ！！」

息遣いがおかしい。なんだか興奮している様な・・・

柴「ハッハッハッ！！！」

一「ええい、変な所を押し付けるな！！」

なんとか抜け出す。

アリ「どうしたの兄様？」

一「アリシアちゃん、ここは危険だ。すぐに出よう」

アリ「ふえ？」

可愛らしい声を上げる彼女の手を引いて出口に向かう。

アリ「に、兄様！？」

一「まさか、ここでも同じ事が起こるとは・・・」

柴「アオ～～～～ン！！」

柴犬の声に、広場中の動物が反応した。

一「あいつがボスだったのか・・・」

てか、他の動物まで従えるってどれだけのカリスマがあるんだ？

柴「ワンッ！」

柴犬の号令と共に、様々な動物が迫って来た。

アリ「あはは！　見て見て兄様！　みんな私達を追いかけて来てるよ！　おもしろ～～い！！」

一「俺はちっとも面白くないよ！！」

追いつかれたら終わりだ。

一「仕方ない、ゴメンよアリシアちゃん！」

アリ「えっ？　きゃっ！？」

アリシアちゃんを抱きかかえ、さらに加速する。

アリ「いきなりお姫様抱っこなんて・・・・兄様大胆なんだから／／」

一「なんだって！？」

アリ「えへへ、何でもないよ♪」

こうして、命からがら俺達はふれあい広場から脱出した。

一「ふう・・・ここまで来れば・・・」

アリ「楽しかったぁ！また行きたいね」

絶対嫌だ。

一「さて、降ろすよ」

アリ「え～～、もう？」

不満げに頬を膨らませるアリシアちゃん。

一「いつまでも抱きかかえられてても嫌だろ？」

アリ「・・・兄様ならずっとでもいいもん」

一「え？」

アリ「何でもないよ。兄様のニブチン」

一「？」

アリ「しょうがないな。その代わり、また腕を組んでよね」

一「あ、ああ、わかった」

再び腕を絡ませる。

一「そろそろお昼ご飯でも食べに行こうか？」

アリ「さんせ～～い。兄様、私があ～んしてあげるね」

一「いや、勘弁してくれ」

こんな所であんな恥ずかしいマネ出来ん・・・

昼食後、まだ見ていない動物を見て回り、気付けば夕方になっていた。

アリ「あっという間だったね兄様」

一「そうだな」

アリ「兄様にあ～んも出来たし」

一「・・・・・」

いつも思うが、女性の上目使いは卑怯だと思う。理由はわからんがその状態でお願いされたら断る事が出来ない。

アリ「あとはお土産だね。フェイトにお返ししなくっちゃ」

一「俺は・・・どうしよう？」

以前のお土産は何故か不評だった。あんなにいいものだったのに・・・

アリ「フェイトにはぬいぐるみかな。母様にはマグカップで～、アルフは・・・やっぱりお菓子だよね」

一「・・・・いいなこれ」

手に取ったのは、背中に『動物番長』と書かれたTシャツ。その隣には『哺乳類最高！』と書かれた物もある。

アリ「兄様・・・それはないと思うよ」

一「そ、そうか？」

アリ「女の人にプレゼントする物じゃないよ～。兄様もマグカップにしたら？可愛いのいっぱいあるよ」

一「いいと思ったんだがな」

まあ、せっかく勧めてくれたんだし、マグカップにするか。

一「ん？　アリシアちゃんは何も買わないのか？」

アリ「えへへ、みんなの分買ったらお金無くなっちゃった」

ペロッと舌を出して笑うアリシアちゃん。

一「だったら、俺が何かプレゼントするよ」

アリ「えっ、いいの？」

一「アリシアちゃんだって欲しい物があるだろ？」

アリ「わ～い！　ありがとう兄様！！」

自分の事よりまず家族か。優しい娘だな。

一「で、何が欲しいんだ？」

アリ「えっとねぇ・・・・これ！」

アリシアちゃんが見せたのは、動物の姿が彫られた指輪だった。

一「縁日で売られてるやつみたいだな。こんな物でいいのか？」

アリ「うん。むしろ、これじゃないと駄目なの」

一「わかった。それじゃあ会計しに行こう」

アリ「は～い♪」

会計を済ませ、土産屋を後にした。

ピンポンパンポン

店を出ると同時に、園内放送が流れた。

一「ん？」

放「ご来園の皆様にお知らせします。ただ今、一頭の動物が檻から

逃げ出しました」

一「・・・・・は？」

客Ａ「おいおい、またかよ～」

客Ｂ「今度は何が逃げ出したのかしら？」

他の客達は何故か落ち着き払っていた。

一「あの、すみません」

客Ｂ「あら、何かしら？」

一「ここでは動物が逃げ出すのはよくある事なんですか？」

客Ｂ「ええ、しょっちゅうね。だからみんな馴れちゃったのよ」

一「馴れるって・・・おかしいだろ」

アリ「大丈夫なんですか？」

客Ｂ「心配無いわ。逃げると言っても小さい動物だけ・・・」

放「今回逃げ出したのはライオンのシーザーです。かなりヤバイのでみなさん気をつけてくださいね」

ピンポンパンポン

一「軽っ！」

客Ｂ「あらら大変。ライオンですって」

アリ「もしかして、あの吼えたライオンさんかな？」

一「なんでそんなに落ち着いてるんですか！？」

客Ｂ「大丈夫、ここの動物達はみんないい子だから」

客Ａ「いたぞ！　シーザーだ！！」

客Ｃ「やっべえ！　こっちに来るぞ！！」

一「全然大丈夫じゃないじゃないですか！」

歯を剥き出しにしてこちらに向かって来ている。

客Ｄ「面白え！　俺が止めてやる！　来いシーザー！！」

一人の男性がライオンに向かって行った。

シ「グルアァァァァァ！！」

ズシャア！！

客Ｄ「ぎゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

が、あっさりと吹っ飛ばされた。

客Ｃ「馬っ鹿野郎！　お前には無理だって言っただろうが！！」

客Ｄ「へ、へへ・・・・流石だぜシーザー。俺の完敗だ」

客Ａ「俺がお前の仇を取ってやる！　次は俺が相手だシーザー！！」

客Ｂ「頑張れ～～！」

アリ「負けるな～～！」

一「なんでこんなにアグレッシブな客が多いんだよ！？　アリシアちゃんも応援しない！！」

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

シーザーＳＩＤＥ

隙を見て檻から脱出したのはいいが、肝心の少年の姿が見えない。

シ「（すでに夕刻。時間が無い・・・）」

？「（旦那！　シーザーの旦那！！）」

ゾウのケルビンが私を呼ぶ。

シ「（どうしたケルビン？　すまないが急いでいるんだ）」

ケ「（わかってやす。旦那の愛しい人は今土産屋にいますよ）」

シ「（ッ！？　どうしてそれを？）」

ケ「（あっしの情報網を甘く見てもらっちゃあ困りますよ旦那）」

シ「（すまない、恩に着る！！）」

ケ「（ご武運を）」

土産屋か、待っていろよ少年！

ケ「（あの目・・・・久しぶりにゾクゾクしたぜ。へへっ、あっしも見に・・・）」

飼「ケルビン、ご飯だぞ～～～」

ケ「パオ～～ン♪（うっひょ～～、待ってました～～～～♪）」

シ「（見つけた！！）」

ケルビンの情報通り、少年は土産屋にいた。すぐに駆け寄ろうとしたが

客D「面白え！　俺が止めてやる！　来いシーザー！！」

そんな私の前に、一人の男が立ち塞がった。

シ「グルアァァァァァ！！（今日の私の相手は貴殿ではない！！）」

ズシャア！！

客D「ぎゃあぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

そのまま吹っ飛ばす。

シ「（すまない、いつか必ず相手をしよう）」

目と鼻の先にあの少年がいる。私ですら畏敬の念を抱くほどの覇気を纏って。

客A「俺がお前の仇を取ってやる！　次は俺が相手だシーザー！！」

シ「ガオォォォォォォン！！（邪魔をしないでくれ！！）」

ズシャア！！

客A「ちっくしょぉおおおおおおお！！」

最後の邪魔者も片付け、ついに少年の元にたどり着いた。

少年「どうやら、目的は俺らしいな」

少年の言葉に頷く。

少年「アザラシに続いてライオンまで・・・この世界の動物はみんな人の言葉を理解できるのか？」

この世界？

少年「で・・・わざわざ俺に会うために脱走までして、何がしたいんだ？」

シ「グルルル・・・ガァ！！（答えは・・・・これだ！！）」

少年「ッ！？」

少年に向かって爪を振り下ろす。

少女「兄様！？」

少年「大丈夫。かすっただけだ」

私の爪が斬り裂いたのは、少年の頬の薄皮一枚だけだった。

シ「グゥゥゥゥゥゥ（やはり私の目に狂いは無かったな。あの一

撃を避けられたのは初めてだぞ）」

少年「はあ・・・なんでいつもこんな目に遭うんだよ・・・・」

瞬間、少年の雰囲気が変わった。

シーザーＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＩＮ　ＳＩＤＥ

一「アリシアちゃん、危ないから下がってて」

アリ「う、うん」

正直面倒臭い。動物とのタイマンなんて一回すれば充分だ。

一「一撃で仕留めてやる・・・」

もちろん殺しはしない。あくまで気絶させるだけだ。

シ「グルルルル・・・・」

拳を構えると、シーザーも体勢を低くした。

一「・・・・・」

シ「・・・・・」

時が止まったかのような世界・・・それを破ったのはヤツだった。

シ「ガオォォォォォン！！」

先程よりもさらに速いスピードで俺に迫るシーザー

一「はぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

お互いの距離がどんどん縮まり、そして・・・

ガッ・・・！！

夕日が沈み始める中、二つの影が交差する。

一「・・・・・」

シ「・・・・・・」

客A「ど、どっちが勝ったんだ?」

アリ「兄様・・・・・」

全員が固唾を飲んで見守る中、先に倒れたのは・・・

シ「・・・・・・フッ」

ドサリ

一「・・・・・これで帰れる」

シーザーの方だった。

客C「ま、マジかよ・・・あんな子どもがシーザーを・・・・・」

客D「俺は夢でも見ているのか?ちょっと殴ってみてくれ」

客C「おう」

バキッ！

客Ｄ「痛え！・・・ってことは！？」

客Ｃ・Ｄ「「すげえぇぇぇぇ！！　シーザーがやられたぁぁぁぁぁ！！」」

ワアァァァァァァァ！！

園内が歓声に包まれる。

アリ「兄様！」

アリシアちゃんが俺に抱きつく。

アリ「無事でよかったよぉ・・・」

一「心配かけてゴメン」

客Ｂ「カッコよかったわよ。獅子殺しの誕生ね」

一「なんですかその厨っぽい異名は？それに殺してません。気絶し

ているだけです」

アリ「兄様優しいね」

一「いや、そうしないと後でどんな請求が来るかわからないからな」

獅子殺しのコールの中、俺達は逃げるように動物園を後にした・・・

アリ「ありがとう兄様」

帰り道、唐突にアリシアちゃんが口を開く。

一「楽しんでくれたのなら何よりだよ」

アリ「ううん、今日の事だけじゃないの」

一「え？」

アリ「兄様が私を生き返らせてくれたから、今こうやって私は笑っていられる。母様達と一緒に暮らせている。私、本当に幸せ」

一「アリシアちゃん・・・・」

アリ「だから、本当に兄様には感謝してるの。ありがとう兄様、私

を幸せにしてくれて」

本当に幸せそうに微笑むアリシアちゃん。

一「何言ってるんだ。俺はキミの兄さんだろ?妹の為に動くのは当然の事だ」

アリ「えへへ、兄様らしいね。でも・・・」

俺に顔を近付けるアリシアちゃん。そして

チュッ

一「ッ!?」

俺の頬にキスをした。

アリ「私はいつまでも妹でいるつもりはないからね♪」

いつの間にかにマンションに到着していた。

アリ「バイバイ兄様！　また学校でね！！」

一「・・・・・・」

俺はおぼつかない足取りで帰宅した・・・・

一「ただいま・・・・」

神「お帰り一成」

天「ずいぶんお疲れの様ですね。そんなに楽しかったんですか？」

一「何でもない・・・・これ、お土産・・・・」

神「これは・・・・マグカップか？」

天「可愛らしいデザインですね」

一「アリシアちゃんが選んだ・・・」

神・天「「アリシア（ちゃん）Ｇ・Ｊ！！」」

一「・・・・・」

頬に触れる。まだ感触が残っている気がした・・・

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

アリシアＳＩＤＥ

アリ「ただいま～～！」

フェ「お帰り姉さん」

アリ「はい、この前のお返し」

フェ「あ、可愛い！　ありがとう姉さん！！」

アリ「母様にはこれ」

プ「ありがとうアリシア。素敵なマグカップね」

アリ「アルフには限定のお菓子だよ」

アル「お～！　ありがとうアリシア～～！！」

よかった、みんな喜んでくれたみたい。

アリ「あ、そうだ。みんなこれ見てよ」

兄様が買ってくれた指輪を見せる。

フェ「姉さんはそれを買ったんだね」

アリ「ふふん、違うよフェイト。これはね、兄様がプレゼントしてくれたんだよ」

フェ・アル「「え？」」

左手の薬指につける

プ「あらあら、そこは結婚指輪をはめる指よ。まだ早いんじゃないかしら？」

フェ・アル「「け、結婚！？」」

アリ「私は兄様と結婚するんだから大丈夫だも～～ん♪」

えへへ、これでみんなより一歩リードかな？

フェ「そんな・・・一成と姉さんが結婚・・・・」

アル「そ、そうかい。よかったねアリシア。ま、まあ、あたしには関係ないけどね」

プ「ふふっ、無理しちゃって」

アル「べ、別に無理なんてしてないよ！」

フェ「うう・・・一成～～～」

アリ「早く大人になりたいな～～」

一成は称号『獅子殺し』を手に入れた。

一「久しぶりに更新したな」

神「一成・・・なんじゃその服は？」

一「動物番長Tシャツだ」

天「買ったんですか！？」

一「一応みんなの分も買ったけど、着てみるか？」

神・天「「遠慮する！（します！）」」

一「そ、そうか・・・」

刹「なんだ二人とも、こんなにいいものを受け取らないのか？我が君よ、一枚もらえるか？」

神「刹那！？」

一「どれにする？　あと『草食より肉食』『野生王国』『水族館はデストロイ！』の三つがあるけど」

刹「野生王国Tシャツをくれ」

一「はい」

刹「さっそく着てみるか・・・・どうだ我が君？」

一「ああ、よく似合ってるよ」

刹「ふふっ、当然だな」

天「そ、そういえば、作者がいませんね」

一「あいつは今出張中だ」

神「どこ行ったんじゃ？」

一「聞かない方がいい・・・」

神「？」

一「帰って来たらぶちのめす必要があるがな。あいつ、やってはならない事をやってしまったからな」

刹「何があったんだ？」

一「あの野郎、話のネタが思いつかないからって活動報告で読者の方にすがりつきやがったんだぞ。ちなみの今回の動物園とライオンとの戦いは緋水様の意見を参考にさせてもらったらしい」

天「他力本願ですか、最低ですね」

一「あと、ゼロ様からもいくつか案を頂いたらしいが、正直テメエでなんとかしろって話だよな」

刹「緋水殿、ゼロ殿、作者に代わり謝罪と感謝を・・・」

一「そうだ、お詫びの印にお二人に『草食より肉食』と『水族館はデストロイ！』のTシャツを送ろう！」

神「よ、止すんじゃ一成！！」

一「さーて、チャキチャキ進めるぞ。次は贈り物報告会だ」

神「緋水様からエリクサーとフェニックスの尾をそれぞれ１００頂いたぞ」

天「今回は貴哉様はおいでにならないんですね」

一「それは仕方ない」

刹「何か知っているのか？」

一「いや、別に。それと、せっかく頂いたけど・・・たぶんすぐに使い果たすと思うぞ」

神・天・刹「「「？」」」

天「朝凪　夜風様からは狐と吸血鬼と鬼、鵠と竜のぬいぐるみを頂

きました」

刹「ずいぶん可愛らしいが、このチョイスはなんなんだ？」

天「なんでも、朝凪　夜風様の所のキャラクターの方々を動物に例えたものだそうです」

一「鵠ってなんだ？」

神「鴉の事じゃよ」

刹「清浦刹那殿からは贈り物ではなく、我が君への質問を頂いたぞ」

一「なんだ？」

刹「『ぶっちゃけ今か過去に好きな人はいましたか？　ちなみに女性のタイプも言っちゃってください！』だそうだ」

神・天「「ッ！？」」

一「タイプってなんだ？　炎とか雷みたいな属性の事か？」

神・天・刹「「「・・・・・はぁ」」」

一「あれ、違うのか？」

刹「我が君よ、この場合のタイプとはどんな女性が好みなのかと言う事だ」

天「髪が青いとか、メイド服が似合うとか、Mだとか、そういった事です」

神「全部お主の事じゃろうが！」

一「なるほど、う～～ん・・・・特に無いな」

天「そうですか・・・」

一「強いて言うなら、そうだな・・・・一緒にいて楽しい人だな。外見で判断したりはしない」

神「さすが一成。外面ではなく中身を重視するか」

一「そういう意味では、俺のタイプは神奈達って事になるのか？」

神・天・刹「「「え？」」」

一「ずっと一緒にいて、お互いの事理解してるしな。それに・・・・俺、みんなの事（家族として）好きだし」

神・天・刹「「「す、好き！？」」」

一「ああ、（家族として）大好きだ」

ボンッ！×３

一「でも、お互いを理解しているって所はなのは達にも当てはまるな・・・・って何の音だ？」

神「か、一成が・・・・妾の事を好きって・・・・／／」

天「えへ、えへへ・・・・もう死んでもいいですぅ・・・／／」

刹「ふふっ・・・・我が君よ、ようやく我を受け入れてくれる気になったのだな・・・・／／」

ドサリ×３

一「ど、どうしたみんな！？　特に刹那、理科室の蛇口並みの勢いで鼻血が出てるぞ！！」

神「ポワ～～ン・・・・」

天「えへへ・・・・」

刹「ふ、ふふふ・・・・・」ドバァァァァァ！！！

一「な、なんでいきなりこんな・・・・」

第六話　デートって何処に行けばいいのかさっぱりわからない　なのは編（前書

今回は清浦刹那様の案を使わせて頂きました。

そして、ラブコメっぽくしてみましたが、私自身、ラブコメってよくわからないのでなんか変な感じです。書いてて寒くなりました・・・

第六話　デートって何処に行けばいいのかさっぱりわからない　なのは編

夕食が終わり、テレビを見ていると、なのはから電話がかかってきた。

な「あの、なのはですけど、一成君いますか？」

一「なのは、どうしたんだ？」

な「あ、一成君だったんだ。実は今度のお休みの事なんだけど」

一「何かあったのか？」

な「あのね、お母さんが知り合いの人にプールの無料チケットを貰ったの。それでね、せっかくだから一成君もどうかなって」

一「そうだな、最近暑いし、いいかもしれないな」

な「じゃあ」

一「ああ、ぜひ参加させて欲しい」

な「よかった～、断られたらどうしようかと思ったよ」

電話越しでもなのはが喜んでいるのがわかる。

な「楽しみだね」

一「雨が降らない事を祈らないとな」

な「う～ん、てるてる坊主でも作ろうかな」

一「（いざとなったら雲を吹き飛ばせばいいか）」

な「それじゃあお休み一成君、また明日ね」

一「ああ、お休み」

なのはが電話を切るのを待つ。

一「・・・・・」

な「・・・・・」

一「・・・・切らないのか？」

な「か、一成君こそ・・・」

一「俺は相手から先に切ってもらうようにしてるからな」

な「わ、私もだよ」

一「・・・・・」

な「・・・・・」

一「・・・・一緒に切るか？」

な「そ、そうだね」

一「それじゃ、せ～ので切るぞ」

な「うん」

一「せ～～の・・・」

な「・・・・・」

一「・・・・・」

な「き、切ってよ・・・」

一「なのはこそ・・・・」

結局、同じ様な事を三回繰り返した後、ようやく受話器を置く事が出来た。

一「ふぅ・・・すぐ切ればいいのに、どうしたんだなのはは？」

神「むむっ、凄まじいラブコメ臭がしたぞ」

天「どなたからのお電話でしたか？」

一「なのはからだ、今度の休みにプールに誘われた」

神「ううん、またかの」

天「最近お休みの日はずっとお出かけされていますよね・・・・寂しいです」

一「すまないな、必ず埋め合わせはするから」

神「それは本当かの？」

天「後で無かった事にしてくれというのは無しですよ？」

一「もちろんだ」

神「ならば、我慢するか」

天「何をするか、今の内に考えておきましょう」

この二人にも何かしてあげないとな。

一「そういえば・・・水着って持ってたかな？」

後で調べておくか・・・・

そして約束の休日、俺はなのは宅に向かった。

一「・・・なんだこれは？」

なのはの家には至る所にてるてる坊主が吊るされていた。ハッキリ言って怖い。

な「おはよう一成君！」

なのはが出迎えてくれた。

一「なのは、この大量のてるてる坊主はいったい？」

な「にゃ、にゃはは、絶対晴れてほしかったからいっぱい作っちゃった」

一「そんなに楽しみだったのか？」

な「うん、だって・・・久しぶりの一成君とのお出かけだもん」

一「なのは？　最後の方がよく聞こえなかったんだが？」

な「な、なんでもないよ！」

慌ててるその様子じゃ説得力無いぞ。

桃「おはよう一成君」

桃子さんが玄関から出て来た。

一「おはようございます桃子さん、今日は誘って頂いてありがとうございます」

桃「こちらこそ、今日はなのはの事お願いね」

一「え？」

どういう事だ？

な「あ、あのね一成君、本当はお母さんも一緒に行く事になってたんだけど・・・」

桃「ごめんなさい、どうしても外せない用事ができちゃって、本当に残念だわ～～」

残念と言っている割にはずいぶん楽しそうだが・・・

桃「本当は中止にしようかと思ったんだけど、それだとチケットが勿体無いじゃない？一成君なら安心して任せられるし、せっかくなら二人っきりで楽しんでもらおうと思ってね」

一「はあ・・・・」

な「ご、ごめんね一成君」

一「いや、俺は別にかまわないが、なのはの方こそ俺なんかと二人でもいいのか？」

な「も、もちろんだよ！」

一「そうか」

だったら迷う必要はないな。

一「よし、二人で行こう」

な「やったぁ♪」

桃「よかったわねなのは」

な「うん！」

一「それじゃあ行くか」

桃「はい、これがチケットよ」

桃子さんにチケットを貰い、俺達はプールに向かった・・・

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

桃子ＳＩＤＥ

桃「行ってらっしゃい」

二人を見送り、私はほくそ笑んだ。

桃「ふふっ、作戦通り♪」

本当は用事なんて無い、これで今日はずっと二人っきりで過ごす事になる。そうすれば二人の距離は確実に縮まるはず。

桃「頑張りなさいねなのは」

私っていい母親ね♪

桃子ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＩＮ　ＳＩＤＥ

プールに向かう道中、なのはに質問する。

一「どんなプールなんだ？」

な「ついこの前出来たばかりのところなんだって。流れるプールや波が出るプール、温水プールもあるらしいよ」

一「へぇ、結構大きいみたいだな」

な「クラスのお友達が行ったらしいんだけど、遊園地みたいな大きさって言ってたよ」

一「・・・・大き過ぎだろ」

な「たくさん遊べそうだね、早く着かないかな～～」

一「迷子にならないように気をつけないとな」

まぁ、いざとなったら念話があるから大丈夫か・・・・

一時間後、ようやく目的のプールに到着した。

な「うわ～～、ホントに大きいね」

一「オープンしたばかりだから仕方ないとはいえ、人多過ぎだろ・・・」

あそこのプールなんて、ほぼすし詰め状態だ。

一「更衣室はあっちみたいだな、早速着替えに行こう」

な「うん」

一「多分、俺の方が早いだろうから、更衣室の前で待ってるよ」

な「へへ～ん、大丈夫、もう水着着てるからすぐに着替え終わるよ」

なのはが胸を張る。

一「それはいいが・・・下着を忘れたってオチじゃないよな？」

な「心配ご無用！　去年の水泳の授業で失敗してから常に準備しておくようにしてるから」

すでに経験済みだったのか・・・

一「そ、そうか。じゃあ、また後でな」

な「うん」

俺は更衣室に入り、すばやく水着に着替えた。

一「さて、なのはを待・・・・」

な「お待たせ一成君！」

一「・・・つ必要もなかったか」

な「にゃ？」

俺が更衣室を出て数秒後、なのはも出て来た。

一「それがなのはの水着か」

なのはは淡いピンク色のワンピースタイプの水着を着ていた。腰周りについているフリルが可愛らしい。

な「う、うん、本当は学校の水着を着ようと思ったんだけど、お母さんがわざわざ買ってくれたの。ど、どう・・・かな？」

一「似合ってるよ」

な「ほ、ほんとに？」

一「ああ、なのはらしくていいんじゃないかな」

な「あ、ありがとう・・・・／／」

あれ？褒めたのに何故か顔を俯かせてしまったぞ。心なしか顔も赤いし、どうしたんだ？

一「なのは？」

な「（一成君に褒めてもらっちゃった♪）」

今度は二ヤケだした。

一「おーい、なのは～～」

な「えへへ・・・はっ！な、何一成君？」

一「さっきから顔を俯かせたり、二ヤケたりしてどうしたんだ？」

な「な、なんでもないよ！それよりほらっ、早く行こうよ！」

なのはが俺の手を引く。

一「待つんだなのは、プールでそんなに走ったりしたら」

な「きゃあっ！？」

案の定、足を滑らせて転倒するなのは。

一「・・・だから言っただろう」

地面に倒れる前に、体を支えてやった。

な「あ、ありがとう・・・」

一「はしゃぐ気持ちもわかるが、少しは落ち着いてくれ」

な「う、うん」

一「それで、最初は何処に行こうか？」

近くの案内板に目を向ける。

な「たくさんあって迷っちゃうな～～・・・あ、見て見て一成君『血の池地獄』なんてあるよ、変な名前だね・・・あっ、こっちには『ローションプール』だって。ところで、ローションって何かな？」

一「なのはは知らなくていいよ、絶対行ったら駄目だからな」

な「？」

アイディアを出した人間は確実に変態だな、ＯＫ出す方も充分変態だが・・・

な「・・・決めた！　一成君『海っぽいプール』に行ってみようよ」

一「ネーミングセンス無さ過ぎだろ・・・」

若干の不安を感じつつ『海っぽいプール』に向かう事にした・・・

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

なのはＳＩＤＥ

な「わ～～、ほんとに海っぽ～～い」

一「大したもんだな、砂浜まで再現してるのか」

一成君の言う通り、私達の目の前には砂浜が広がっていた。

一「さて、入る前に準備体操だな」

な「そうだね」

ちゃんとしておかないと大変な事になるかもしれないしね。

一「・・・・よし、行くか」

な「うん！」

一成君と一緒にプールに入る。

な「つめた～～い♪」

一「しょっぱ！　もしかして・・・・海水か？」

な「（そうだ・・・）ねえ、一成君」

一「ん？　なん・・・・」

な「えいっ！」

パシャ！

振り向く一成君の顔に水をかける。

な「にゃはは、びっくりした？」

一「・・・・」

な「一成君？」

一「・・・・」

な「もしかして・・・・怒っちゃった？」

顔が俯いてるし、体も振るわせている。

な「ご、ごめんなさい、でも、怒らせるつもりはなかったの。私はただ・・・」

一「・・・・てい！」

パシャ！

な「きゃっ！？」

突然水をかけられ、今度は私がびっくりする番だった。

一「・・・・」

な「か、一成君？」

ゆっくりと顔を上げる一成君。そして・・・

一「・・・油断大敵だぞなのは」（ニヤリ）

してやったりという顔で私を見て笑っていた。

一「どうした？　もう終わりか？」

もう、心配して損しちゃったよ。

な「やったね～～～！」

パシャ！

一「おっと、甘いぞ」

パシャ！

な「きゃっ！」

一「ははっ、どうだ？」

な「ええ～～い！！」

バシャ！

一「ぶっ！？」

な「にゃはは、油断大敵だよ一成君」

一「ああ、そうだ・・・・な！」

バシャ！

な「ふわわ！？」

バシャ！

一「うわっ！？」

な「あはは、楽し～～い♪」

私達は時間も忘れてはしゃぎ続けた・・・・

客Ａ「なんだあのラブコメ空間・・・」

客Ｂ「う、羨ましい！」

客Ｃ「俺、彼女が出来たら絶対水のかけあいっこするぞ！！」

客Ａ「俺も・・・」

客B「俺もだ・・・」

なのはSIDE OUT

IN SIDE

な「はあ、はあ、疲れちゃった」

一「少し休もうか？」

な「そうだね」

グ～～

な「あっ・・・／／」

なのはの腹の虫が鳴った。

一「ちょうど昼飯時だな、お昼にしようか」

な「そ、そうだね」

一「なのは、何か食べたい物あるか？」

な「あ、大丈夫だよ、私お弁当持って来たから」

一「そうなのか？」

な「一成君のもあるよ」

一「それはありがたいな、じゃあ、更衣室に取りに戻るか」

な「うん」

弁当を取りに更衣室に戻った・・・

一「さて、何処で食べようか」

幸い、ベンチやテーブルはいたる所にあるので、場所には事欠かない。

な「あそこが空いてるよ」

なのはが見つけたテーブル付きのイスに座った。

な「はいこれ、一成君のお弁当だよ」

一「ありがとう」

なのはが俺に弁当箱を渡してくれた。

な「あ、あのね・・・実はそのお弁当、私が作ったんだ」

一「なのはが？」

な「う、うん、それでね、もしかしたら、あんまり美味しくないかもしれないから、嫌だったら食べなくていいよ」

一「せっかく作ってくれた物を残すつもりはないさ」

ふたを開ける。

一「これは・・・」

弁当箱の中には所々焦げ付いたおかずが並んでいた。

な「ごめんね、お母さんにも手伝ってもらったんだけど、焦がしち

やったの」

落ち込むなのは。

一「頂きます」

おかずを口に含む。

一「・・・・」

な「ど、どう？」

一「・・・・」

な「や、やっぱり、美味しくないよね。こんな焦げたお弁当なんて・・・」

一「・・・・美味い」

な「え？」

一「美味いよこれ、不味いなんてとんでもない」

な「ほ、ほんと・・・？」

一「焦げなんて気にならないし、味付けも丁度いいよ」

な「・・・よかった」

一「というか、なのはの気持ちが込もった物が不味いわけないしな」

料理は愛情と誰かが言っていた。まぁ、なのはの場合、友情だろうけど。

な「か、一成君・・・・」

ポロ

一「え？」

突如、なのはの目から涙がこぼれ出した。

一「ど、どうしたなのは！？　俺、何か悲しませる様な事を言ったか！？」

な「ち、ちがうの・・・一成君が美味しいって言ってくれて、私、嬉しくって・・・」

一「そ、そうか・・・」

な「えへへ、ありがとう一成君、次はもっと美味しく作るからね」

一「・・・・ああ、楽しみにしてるよ」

な「うん♪」

残りの弁当を食べている最中も、なのはは涙を流しながら笑っていた・・・

一「さて、お昼も済ませたし、次は何処に行こうか？」

な「ねぇ一成君、あれ何かな？」

なのはの示す先には細長いチューブの様な物が渦巻いていた。

一「あれはウォータースライダーだな」

な「面白そうだね」

一「行ってみるか？」

な「うん！」

スライダーに向かった。

職員「ここのスライダーを滑るにはこれを使ってね」

職員の人が大きな浮き輪を渡して来た。

職員「滑り終わったら下の職員にちゃんと返してね」

一「浮き輪一つでどうするんですか？」

職員「キミが浮き輪に乗った後、彼女を抱っこするのよ」

な「ふえ！？」

一「なんですか、そのふざけたシステムは？」

職員「あら、これでもカップルのお客さんには大人気なのよ？　だからキミ達も滑りに来たんでしょ？」

なるほど、どうりで若い客ばかりなわけだ

職員「ほらほら、後ろがつかえてるんだから、早く滑って滑って」

一「仕方ないか」

浮き輪に乗る。

職員「お姫様抱っこが一般的よ」

一「あなたはもうしゃべらないでください」

職員「酷っ！」

一「ほら、なのは」

な「し、失礼します・・・・／／」

なのはの胴を支え、膝の下に手を差し入れ、抱えあげる。

一「首の後ろに手を回してくれ」

な「は、はい・・・（近い！顔が近いよ～～～／／）」

一「よし、準備完了だな」

職員「それじゃ、行ってらっしゃ～～い♪」

トン

職員の人が俺の背を押す。

一「うお！？」

な「きゃっ！？」

そのまま一気に滑り出した。

な「きゃあぁぁぁぁぁぁぁ！？」

一「は、速い！？」

このスピード、明らかに異常だ。

一「くっ！　バランスが・・・！」

な「か、一成く～～ん！！」

一「な、なのは！落ち着いてくれ！！」

な「きゃあぁぁぁぁぁぁぁ！！」

バシャアアアアン！！

あっという間に下までたどり着いた。

な「こ、怖かった～～～」

一「滑るのも速ければ、終わるのも早かったな・・・」

職員「はい、浮き輪を返してくださいね」

一「さて、なのは、次は何処に行く・・・」

な「も、もう一度滑ろうよ一成君！」

一「え？」

な「楽しかったからもう一度滑りたいの」

一「・・・さっき、怖かったって言ってなかったか？」

な「い、いいから！　ね？　行こうよ！」

一「まぁ、なのはが滑りたいならいいけど」

な「決定だね！（よ、よし、これでまた一成君にお姫様抱っこしてもらえる／／）」

再びスライダーの階段を上る。

職員「およ？　また来たんだね、そんなに気に入ったの？　それとも・・・お姫様抱っこにはまっちゃった？」

な「ギクッ！」

一「次にふざけた事言ったら、俺があなたを蹴り落としますよ？」

職員「それだけは勘弁してください！！」

一「ならさっさと浮き輪を渡してください」

職員「はい・・・・」

先程の様に浮き輪の上に乗っかり、なのはを抱える。

一「行くぞなのは」

な「うん♪（一成君、温かい・・・）」

バシャァァァァァン！！

な「もう一回滑ろうよ！」

バシャァァァァァン！！

な「も、もう一回・・・・」

バシャァァァァァァン！！

な「最後！　これで最後にするから！！」

バシャァァァァァァン！！

結局、この後休憩を挟みつつ十回ほど滑り、ようやくなのはは満足した様だった。

な「楽しかったね一成君（えへへ、一成君にいっぱいお姫様抱っこしてもらっちゃった♪）」

一「・・・・尻が痛い」

その時、十七時を告げるチャイムが鳴り響いた。

一「もうこんな時間か、そろそろ帰ろう」

な「そうだね、いっぱい遊んで疲れちゃったよ」

着替えを済ませ、俺達はプールを後にした・・・

な「今日はありがとね一成君、とっても楽しかったよ」

帰りのバスの中、隣のなのはが口を開く。

一「礼を言うのはこっちだよ、誘ってくれてありがとな」

な「また行きたいね」

一「もうスライダーは勘弁な」

な「あはは、そうだね、私も充分楽しんだし」

一「一生分は滑った気がするぞ」

な「今度は神奈さん達やフェイトちゃん達と一緒に行きたいな・・・みんなで・・・一緒に・・・・」

コテン

なのはが俺にもたれかかって来た。

一「なのは？」

な「くぅ～～、すぅ～～～～」

一「眠ったのか」

無理も無い、あんなにはしゃいでいたんだからな。

一「お休みなのは、いい夢を・・・」

起こさない様に注意しつつ、俺も目を閉じた。

な「一成君・・・大好き・・・・」

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

なのはＳＩＤＥ

な「（う、ううん・・・・）」

あれ、私どうしちゃったの・・・

な「（そうだ、バスの中で寝ちゃったんだ）」

ゆっくり目を開ける。

な「あれ？」

見覚えのある風景。

な「私の・・・お部屋？」

そうだ、間違いない、でも・・・どうして？

な「一成君はどうしたんだろう？」

とりあえず、リビングに向かった。

桃「あら、起きたのなのは？」

リビングにはお母さんがいた。

な「お母さん、私いったい・・・・」

桃「バスの中で眠っちゃったあなたを一成君が運んでくれたのよ。幸せそうな寝顔してたわよ」

な「あう・・・」

また迷惑かけちゃった、今度お礼を言わないと。

桃「それで、どうだったの？」

な「どうって？」

桃「決まってるでしょ、一成君との事よ」

な「え？」

桃「何があったか包み隠さず話しなさい。全部話すまで寝かせないわよ」

な「お、お母さん、なんか怖いよ」

桃「さあさあさあ！」

な「うう・・・わかったよぅ・・・」

今日の出来事をお母さんに話した。

桃「いいわね～～、いい感じにラブコメってるじゃない♪」

な「ラブコメ？」

桃「それにしても、そんな気障な台詞を平然と言うなんて・・・・さすが一成君ね、将来が恐ろしいわ」

な「ねえお母さん」

桃「なに、なのは？」

な「私、もっとお料理上手になりたい、一成君は美味しいって言ってくれたけど、もっと美味しい物を食べさせてあげたいの」

桃「ふふっ、よく言ったわなのは、お母さんに任せなさい、あなたを一流の料理人にしてあげるわ♪」

な「ありがとうお母さん！」

桃「頑張って一成君の胃袋をゲットするのよ、男は胃袋から攻めろって昔の偉い人が言ってたわ」

な「うん！」

待っててね一成君、私・・・頑張るから！！

第六話　デートって何処に行けばいいのかさっぱりわからない　なのは編（後書

神「今回はいつもより甘甘じゃったな」

天「そうですね、とくにトラブルも無かったみたいですし」

一「そう何度もあんな目に遭ってたまるかよ」

刹「我が君のたらしっぷりは健在だったがな」

一「俺、何かしたか？」

神「・・・そう言えば今回も作者の姿が見えんの」

天「そうですね、何処で油を売っているのでしょう？」

刹「このまま帰ってこないのではないか？」

一「スルーするのは止めてくれないか？」

一「若干傷ついたが、贈り物報告会に移るぞ」

神「清浦刹那様からＶＦ－２５メサイアバルキリー（アルト機最終仕様）を頂いたぞ」

一「清浦刹那様には今回の話の案も頂いたし、お世話になりっ放しだな」

天「こちらからも何かお礼をした方がよろしいですね」

刹「ああ、しかし、清浦刹那殿に何を送ったら喜んでもらえるだろうか？」

一「そうだ、この前見つけた『象が踏んでも壊れないはずだった筆箱』を送ろう」

神・天・刹「「「却下じゃ（です）（だ）」」」

一「駄目か・・・」

神「というか、その筆箱粉々ではないか！」

一「いや、本当に踏んでも壊れないのか気になってな、試しに踏ませてみたんだが、踏んだ瞬間バキっと逝ってしまった」

天「そんなもの送れるわけないでしょう」

刹「我が君のセンスは独特過ぎて、万人には向きそうにないな」

天「バージル様の所の楓様からは、贈り物ではなく称号を頂きました」

一「称号？」

天「『称号王』だそうです」

神「王か、一成に相応しい称号じゃな」

天「『色々無駄な称号を持っているからこの称号を贈ります』・・・・だそうです」

刹「むっ、名前の割には大した事ない称号だな」

天「次は、緋水殿からだな」

貴「お久しぶりです」

ズルズル

一「貴哉さん、ん？　その引き摺ってるボロ雑巾みたいな物体はなんですか？」

貴「作者さんです」

神・天・刹「「「え？」」」

作「・・・・」ピクピク

神「この締りの無い顔・・・・間違いない！」

天「ど、何処で見つけたのですか！？」

貴「えっと・・・その辺で拾って来ました」

刹「何があったんだ？」

貴「さ、さあ？　と、とりあえず、今回はガジェットを四十万程送ります、そ、それじゃ！」

神「・・・行ってしまった」

天「なんだか慌てているようでしたが、どうしたんでしょう？」

刹「急ぎの用事でもあるんじゃないのか？」

一「・・・・・くく」

刹「ん？　なんだあれは？」

ゴソゴソ

刹「こ、これは・・・我が君の写真!?　それも・・・立体版だと!!」

神「どうしたんじゃ刹那？」

刹「な、なんでもない！（これは見せるわけにはいかないな）」

一「朝凪　夜風様からは、以前書かれていた小説の主人公が持っていた雷刻剣を頂いたぞ」

刹「ふむ、かなりの業物だな」

一「これすごいぞ、なにせ設定だけでフロッピーディスク一つが一杯になったそうだ」

神「これだけの物、紹介だけでは勿体無いの」

天「本編では出せないのでしょうか？」

一「まあ、すべては作者の考えしだいだがな」

神「こちらは初めてじゃな、白玉蓮華様の所のアンバー殿作、まきゅーXバージョン1．01bを頂いたぞ」

天「メッセージがありますよ『巨大化すれば一成君相手に勝つかもですよー？』・・・ですって」

刹「ほう、我が君に挑むか、面白い」

一「いや、面白くないから」

刹「何を言う！あんな事を言われて悔しくないのか？」

一「別に・・・」

刹「ええい！　ならば我がやってやろうではないか！　来い！　まききゅーとやら！！」

一「・・・・行ってしまった」

天「よろしいのですか？」

一「刹那なら大丈夫だろ、ちゃんと節度ある行動をとってくれるはずだ」

刹「はあっ！」

ドゴォォォォォォン！！

神「・・・・あれでもか？」

一「見てない、俺は何も見てないぞ！！

第七話　デートって何処に行けばいいのかさっぱりわからない　アリサ編（前書

ようやく折り返しなわけですが・・・俺はいったい何を書きたい
のだろうか？

あと、色々あり得ない事書きましたが、気にしないでください。

第七話　デートって何処に行けばいいのかさっぱりわからない　アリサ編

なのは達に付き合って出掛ける日々も今日で最後。元々、フェイトとアリシアちゃんを街案内しようとして始まった事だが、思い出してみると結構楽しかったな。彼女達も満足してたみたいだし、よかったよかっ・・・・

ア「さっきから何ボーっとしてるのよ、一成？」

一「いや・・・なんでもない」

アリサの声に意識を戻す。俺は今、執事の鮫島さんの運転する車で彼女と共に遊園地に向かっていた。

それにしても驚いた。何せ、いきなり家に押しかけて来たと思ったら「一成！　遊園地に行くわよ！！」・・・だもんな。

鮫「申し訳ありません秋月様、急に押しかけてしまいまして」

一「いえ、一緒に出かける事は約束してましたし、気にしないでください」

鮫「そう言って頂けると助かります。お嬢様は今日と言う日を楽しみにされておりましたから」

ア「さ、鮫島！？」

一「そうなんですか？」

鮫「昨日の夜はなかなか寝付かれなかったようですし、朝方も随分ソワソワされておりましたから」

カラカラと笑う鮫島さん。

一「アリサがそんなに楽しみにするなんて、かなりの遊園地みたいですね」

行った事ないからよくわからないが、これは期待できそうだ。

ア「べ、別に私は遊園地に行くのを楽しみにしてたわけじゃなくて・・・ゴニョゴニョ・・・・」

一「なんだって？」

ア「なんでもないわよ・・・・・バ一成」

一「その略し方は止めてくれ・・・」

鮫「ほっほっほ♪」

車内に、鮫島さんの穏やかな笑い声が響いた・・・

三十分後、俺達は遊園地に到着した。

一「やっぱり車だと早いな」

鮫「それではお嬢様、私はこれで・・・」

ア「ありがとね鮫島、帰る時にまた電話するわ」

鮫「かしこまりました」

うやうやしく一礼した後、鮫島さんは去って行った。

一「それじゃあ、早速入場券を・・・」

ア「いらないわ」

一「え?」

ア「ふっふっふ・・・これを見なさい!」

アリサが懐から何か取り出した。

ア「じゃーーん！　フリーパスぅ～～♪」

何処ぞの青ダヌキ（正確にはネコだが）の様な口調で見せて来たのは、ここの遊園地のフリーパスだった。

一「・・・・・」

ア「・・・・ちょ、ちょっと、何か反応しなさいよ・・・」

恥ずかしいならやるなよ・・・

一「あ、ああ、すまない。それにしても、用意がいいな」

ア「当然よ！　今日は目一杯楽しむんだから！・・・・あ、あんたといっしょに・・・／／」

一「ん？」

ア「い、いいからほらっ！　早く行くわよ！！」

一「ああ」

アリサとゲートをくぐろうとしたその時・・・

パンパカパ～～～ン！！！

突如、ファンファーレが鳴り、俺達は足を止めた。

一「なんだ？」

スタッフ「おめでとうございます！　あなた達がオープンして丁度一万組目のお客様となりましたーーー！！」

ア「う、うそ・・・・」

アリサが信じられないといった顔をした。恐らく、俺も似た様な表情をしているだろう。

スタッフ「みなさま！　この幸運なカップルに盛大な拍手をお願いしま～～す！！」

客達「わあぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

スタッフの言葉に、周りの客が歓声をあげた。

ア「か、かかかかカップルですってぇ！？」

スタッフ「あれ？　違うんですか？」

ア「そんなわけないでしょ！　だ、誰がこんなヤツと・・・！」

チラッ

一「ん？」

ア「ッ～～～～～／／」

未だに状況が理解出来ない俺を、アリサがチラ見してきた。が、何故か顔を真っ赤にしながらすぐに目を逸らした。

スタッフ「ツンデレですね、わかります」

俺とアリサ以外の全員が頷いた。

一「ツンデレ？」

ア「う、うるさいうるさいうるさ～～～い！！！」

アリサが叫んだ・・・というか吼えた。

客A「なんという釘〇ボイス」

客B「はあはあ、ル〇ズたん可愛いよ、はあはあ・・・・」

客C「それは作品が違う！！」

一「落ち着けアリサ、何をそんなに興奮してるんだ？」

ア「逆に聞くけど、どうしてあんたはそんなに落ち着いてるのよ！？」

スタッフ「さあ！　今からこのクール&ツンデレカップルに我が遊園地の大人気マスコットキャラクターからプレゼントが贈られま～～す！！」

ア「まだ言うかぁ！！」

一「話が進まないから抑えろ」

ア「ぐっ・・・・」

スタッフ「それでは登場して頂きましょう！　みんな大好き・・・・ラッシー君です！！」

客達「可愛い～～～！！！」

歓声の中現れたのは、かなりデフォルメされた熊？の着ぐるみだった。顔の半分以上を占めている巨大な目が不気味だ。

ラ「やあ、おめでとう二人とも♪」

ア「・・・こういうのってしゃべっていいのかしら？」

ラ「今の時代、しゃべるのは当然の事さ。それよりほらっ、僕の腹筋を見てくれ、こいつをどう思う？」

一「・・・・割れてるな」

ア「割れてるわね・・・」

ラ「違う違う！　そこは「すごく・・・割れてます」でしょう！？」

一「そうなのか？」

ア「私に聞かないでよ」

ラ「どうだい？　惚れ惚れするだろう？」

ア「気持ち悪いわ」

ラ「ぐはっ！？」

熊が崩れ落ちた。

一「アリサ、もう少しオブラートに包む様に言った方が・・・」

ア「何よ？　あんただってそう思ってるんでしょ？」

一「それは、まぁ・・・・否定はしない」

ラ「・・・・」ピクピク

スタッフ「もう止めて！　ラッシー君のＨＰは０よ！！」

ア「それより、プレゼントって何？」

ラ「おぉっと！　すっかり忘れてたよ」

そう言って取り出したのは・・・

ラ「はいこれ、僕の肉体美を余すことなく表現した限定フィギュア」

ア「ふんっ！！」

バキィ！！

フィギュアを即行でへし折るアリサ。

ラ「うわあぁぁぁぁぁぁ！？　僕のフィギュアがあぁぁぁぁぁぁぁ！！」

一「脆過ぎだろ・・・」

ア「時間の無駄だったわね、行きましょ一成」

一「そうだな」

ラ「待って！　冗談！　今のは冗談だから！！」

ア「ちょ、ちょっと！　離しなさいよ！！」

ラ「行かないで！　僕の話を聞いて！！」

ア「離しなさいってばぁ～～～！」

ゲシッ！

ラ「ポチョムキンッ！？」

アリサの腰にしがみ付く熊だったが、彼女の蹴りを受け崩れ落ちた。

一「ん？　なんだ？」

その拍子に、熊の懐から何かが転がり落ちる。

一「ワッペン？」

ラ「そ、それが・・・キミ達に本当に贈りたかった『王の印』さ・・・」

ア「王の印？」

ラ「それを付けた者は、文字通りこの遊園地の王になれるんだ。全てのマスコットキャラクターがキミ達の言う事に絶対服従する様になる」

一「なるほど・・・だから『王』か・・・」

ラ「ふふふ・・・素晴らしいだろう？」

一・ア「「いら（ん）（ないわ）」」

ラ「なっ！？」

一「どうせ他のキャラクターも変態ばかりなんだろ？　そんなヤツらに従われても嬉しくもなんともない」

ラ「何を言う！！　変態は僕だけだ！　他のみんなは全員まともだよ！！」

ア「・・・自覚あったのね」

ラ「それに、その印の効果はそれだけじゃないよ？なんと・・・・園内のレストラン等が全て無料で利用できるようになるのだ！！」

一「付けてくか」

ア「そうね、せっかく貰ったんだし」

ラ「変わり身早ッ！？」

よし、これで昼飯代が浮いたぞ。

スタッフ「それではお二人とも、素敵な一日を！！」

ラ「園内で見かけたら遠慮なく声をかけてね！」

一「断固として拒否する」

ラ「もう・・・照れ屋さんなんだから♪」

プチン・・・

一「・・・マナよ、オーラと変われ・・・・・」

ア「ちょ、ちょっと一成？」

一「彼の者どもを包み・・・・はっ！？」

ア「ど、どうしたのよ？そんなに怖い顔して・・・・」

気付いたら、熊の顔面にオーラフォトンノヴァを叩き込もうとする自分がいた。

一「なんでもない」

ア「そ、そう？　それじゃ、行きましょ。もう三十分も経っちゃったわ」

一「ああ」

俺達は、今度こそ歩みを進めた・・・

ア「あんなのが大人気なんて・・・私には理解できないわ」

一「安心しろ・・・俺もだ」

ア「まぁいいわ。それより、どれに乗ろうかしら」

一「アリサに任せるよ」

ア「じゃあ・・・あれね」

視線の先にはジェットコースター。

一「大丈夫なのか？」

ア「あんた、ああいうの苦手なの？」

一「俺じゃなくて・・・・いや、なんでもない」

ア「？」

俺達はジェットコースター乗り場に向かった・・・・

ア「む～～～～・・・・・」

一「残念だったな」

乗り場に着いたはいいが、結局俺達は乗らなかった。というか、乗れなかった。

原因は・・・・

一「まさか・・・・身長制限に引っ掛かるとな」

ジェットコースターは危険防止の為に、一定の身長以下の子どもは乗る事が出来ない様になっている。そして、アリサはそれに引っ掛かってしまった。

ア「２ｃｍくらい大目に見なさいよ～～～！！」

さっきからずっとこの調子だ。よっぽど悔しかったんだろう。

一「身長が伸びたらまた来ればいいさ」

ア「それはそうだけど・・・・私はあんたと乗りたかったの」

一「え？」

ア「なんでもない、次に行くわよ」

一「わかった」

次って言うが、もう決めてあるのか？

ア「次はここよ」

目の前には一軒の古ぼけた館。

一「死者の館？」

所謂お化け屋敷というやつか。

ア「なかなか人気のアトラクションらしいわよ」

一「うーーーん・・・・」

本物を見るどころか、闘りあった事すらある俺はこのアトラクションに全く興味を持てなかった。所詮作り物だしな。

ア「どうしたのよ？」

一「いや、何も・・・」

ア「もしかして・・・・・怖いの？」

一「は？」

ア「ふ～～ん、そっかそっか、あんたにも苦手なものってあったのね。しかも・・・お化けだなんて」

アリサがやけにニヤニヤしている。

一「だから、俺は別に・・・」

ア「いいからいいから♪」

一「話を聞け」

ア「あんたの情けない姿をバッチリ見てあげるわ」

一「・・・・・」

彼女に背を押され、俺は館の中に入った・・・

ア「け、結構雰囲気あるじゃない・・・」

一「暗すぎて前が見えん」

あっ、あそこの照明壊れてるな。

ア「ちょ、ちょっと！　もっとゆっくり歩きなさいよ！！」

一「いや、アリサが遅すぎるんだよ」

ア「だ、だって・・・・」

バリバリ！！

その時、突如壁を突き破り、人間の手が現れた。

ア「キャアァァァァァァァ！？！？！？」

悲鳴を上げながら俺にしがみ付くアリサ。

ア「て、手が！　手がたくさん！！　壁からたくさん！！！」

一「落ち着けアリサ、もう消えたから」

ア「えっ？」

そのまま恐る恐る壁を確認し、ゆっくりと俺から離れた。

ア「・・・・な、なかなかだったわね、ちょっとビックリしちゃった」

一「・・・・・」

ア「な、何よその目は？」

一「別に・・・」

ア「言っとくけどね！　私はこんな子ども騙しちっとも怖「ぶるあぁぁぁぁぁぁ！！」ヒッ！？」

一「なんだ今の渋い声は？」

何故か唇のぶ厚い会社員と、回復魔法をかけようとしたらブチ切れてカウンターぶちこんで来る英雄殺しが頭をよぎった。はて？　俺にはこんな知り合いはいないはずだが・・・

ア「ううう・・・・」

アリサはすっかり畏縮してしまったようだ。わずかだが、震えている。

一「（仕方ないな・・・）」

ギュッ

ア「あ・・・・・」

そんな彼女の手をしっかり握る。

ア「な、何すんのよ・・・・」

一「これなら怖くないだろ？」

ア「さ、最初から怖くなんてないわよ！」

一「俺が怖いんだよ。嫌だろうけど、ここを出るまでは我慢してくれ」

ア「・・・・し、しょうがないわね。怖がりのあんたの為に、しっかり握っててあげるわよ」

一「すまないな」

ア「離すんじゃないわよ！」

一「もちろん。俺は臆病だからな、絶対離さないさ」

ア「・・・・ありがと／／」

一「ん？」

ア「なんでもない。それより、早く出るわよ。怖がりのあんたの為にもね」

一「ふっ、そうだな・・・」

再び館の中を進む俺達、アリサの震えもすっかり治まっているようだ。

ア「（不思議ね、こいつの手を握っただけで、全然怖くなくなった・・・）」

一「あっ、あそこの照明も壊れてる・・・仕様なのか？」

ア「（それに胸がドキドキする。こいつといる時はいっつもそう、屋上でお昼ご飯を食べる時も、一緒に遊んでいる時も・・・）」

一「そういえば、結局さっきの声はなんだったんだろうな？　他の客の悲鳴か？」

ア「（やっぱり私、一成の事・・・）」

一「アリサ？」

ア「ふえっ！？　な、何・・・？」

先程から一言も喋らないのが気になったので声をかける。

一「さっきから黙ってるが、どうしたんだ？」

ア「だ、大丈夫、ちょっと考えごとしてただけだから」

一「そうか・・・・・ッ!?」

バキィ!!

?「ぐはっ!!」

ア「あ、あんた何やってんのよ!?」

目の前で全身に包帯を巻いた人間が倒れていた。理由は言わずもがな、俺が放った拳の所為だった。

一「いや、つい・・・・」

ア「つい・・・じゃないわよ!! ああ、ピクリとも動かないわ・・・」

一「どうしようか?」

ア「・・・逃げるわよ」

一「了解」

俺達は急いでその場を後にした。

一「（それにしても・・・あの殺気はいったい・・・）」

いくら客を驚かす為とはいえ、あそこまで明確な殺意を抱くものなのか。しかも、俺にだけ向けてくるなんて・・・

一「（思わず迎撃してしまったが・・・俺の気にし過ぎだろうか？）」

・・・・・・

？「・・・・失敗ですか。まあいい、次があります」

・・・・・・

逃げ出した勢いのまま走っていると、いつの間にか出口に辿り着いていた。

ア「はあっ、はあっ、はあっ・・・まったく、あんたの所為で大

変な目に遭っちゃったわ」

一「すまん・・・」

ア「別に謝らなくていいわ。結構楽しかったし（あんたと手も繋げたし・・・）」

一「そうか、よかった」

ア「それより、ちょっとお腹空かない？」

一「ああ、もう昼時だしな、今の内に済ませておくか」

昼食をとる為に、近場のレストランに入った・・・

ウェ「いらっしゃいませ・・・って、そのワッペンは！？」

ウェイトレスの女性が俺達の胸元を指す。

一「そういえば、これがあればタダになるんだよな」

ア「本当に効果あるのかしら？」

一「今の反応を見る限り、ちゃんと使えると思うが」

ウェ「し、失礼しました。それではお二人ともこちらへどうぞ」

案内された席に着き、メニュー表を開く。

ア「そうね・・・・私はオムライスにするわ。あんたはどうするの？」

一「サバ味噌定食お願いします」

ウェ「オムライスにサバ味噌定食ですね、かしこまりました。しばらくお待ちください」

そう言い残し、厨房の方へ去って行った。

ア「・・・ある方もおかしいけど、あんた・・・レストランでサバ味噌定食って・・・」

一「変か？」

ア「もっとハンバーグとかスパゲティとか色々あるじゃない。なんでそのチョイスなのよ？」

一「好きだからな、サバ」

ア「・・・あんたって、やっぱり変よね」

なんで好きな物選んだだけでそこまで言われなければならんのだ・・・

ウェ「お待たせしました、こちらオムライスとサバ味噌定食になります」

一・ア「「早っ！」」

ウェ「そのワッペンをお持ちの方をお待たせするわけにはいきませんからね」

一「これ凄いな」

ア「ほんとに王様になった気分ね」

ウェ「それでは、ごゆっくりどうぞ」

一・ア「「いただきます」」

早速、サバを口に運ぶ。

一「うん、美味い」

勢いよく箸を動かしていると、不意にアリサの視線を感じた。

一「どうした？」

ア「それ、そんなに美味しいの？」

一「絶品だな」

ア「そ、そうなんだ・・・」

一「なんだったら一口食うか？」

サバの身を箸で挟み、口元に差し出す。

ア「い、いいいいわよ！」

一「遠慮するなって。ほらっ」

ア「で、でも・・・（これって、間接キスじゃない！！）」

一「そうか・・・まあ無理に勧めるのも悪いし、止めとくか」

俺が箸を引っ込めようとしたその時・・・

ア「ッ～～～～！　ええい！！」

パクッ！

一「あ・・・」

アリサが大きな口を開け、身を飲み込んだ。

ア「もぐもぐ・・・ほ、ほら！　これでいいんでしょ！？」

一「別に無理して食わなくてもよかったんだが・・・」

ア「無理なんてしてないわよ！」

一「そうか・・・それで、味はどうだった？」

ア「（正直、味なんてさっぱりだったけど・・・）そ、そうね、美味しかったわ」

一「だろ？」

ア「（なんでこいつこんなに落ち着いて・・・もしかして、気付いてないの？）」

一「（さっきから俺の箸をずっと見つめてるが、そんなに気に入ったのか？）」

・・・・・

一「ふぅ・・・ごちそうさん」

ア「すいませ～ん」

ウェ「はい、どうされました？」

ア「チョコレートパフェ一つ下さい」

ウェ「はい、少々お待ち下さい」

一「まだ食うのか？」

ア「い、いいでしょ、甘い物は別腹よ」

俺もコーヒーくらい頼めばよかったな。

ウェ「お待たせしました、チョコレートパフェになります」

ア「あはっ♪　来た来た」

早速パクつくアリサ。

ア「美味し～～～～い♪」

頬に手を当て、幸せそうな顔をしている。

一「幸せそうだな」

ア「う、うっさい！！」

一「ん？・・・・アリサ、頬にクリームがついてるぞ」

ア「え？　何処？」

クリームの付いているのとは反対の頬を触るアリサ。

一「違う違う、こっちだよ」

手を伸ばし、クリームを取ってあげた後、そのまま口に入れる。

一「うん、甘いな」

ア「な、なななな・・・何してんのよあんた～～～！！」

一「大声出すな、周りのお客さんに迷惑がかかるぞ」

ア「あんたの所為でしょぉ！！」

一「俺の所為って・・・クリーム取っただけだぞ？」

ア「その後よその後！！　わ、私の頬に付いてたのを口に入れるなんて・・・」

一「勿体無いじゃないか」

ア「き、汚いじゃない。私、汗かいてたし・・・」

一「アリサは汚くないだろ」

ア「ッ～～～～／／　なんであんたはそういう恥ずかしい事を・・・」

アリサの顔が尋常じゃないくらい真っ赤だ。そんなに俺に触られたのが腹立たしかったのか？

一「すまん・・・」

ア「馬鹿・・・」

パクパク

一「・・・・」

ア「・・・・」

パクパク

一「・・・・」

ア「・・・・」

パクパク

一・ア「「（気まずい（な）（わね））」」

アリサが食べ終わるまで、俺達は終始無言だった・・・

ウェ「ありがとうございましたーー」

ア「・・・これからどうする？」

一「そうだな・・・」

ラ「あれ？　王様に姫様じゃないか～～」

熊（という名の変態）が現れた。

一「なんだその呼び方？」

ラ「そのワッペンの名前を忘れたの？　王の印だよ？　だからキミ達は王様と姫様なんだ」

ア「意味わかんないわよ・・・」

ラ「それよりどうしたの？　なんだか気まずい雰囲気だけど？」

ア「べ、別になんでもないわよ」

ラ「う～～ん、仮定、もしくはメイビーだけど・・・お腹が空いてそこのレストランに入って、姫様がチョコレートパフェか何かを注文して食べてたら、ほっぺにクリームが付いちゃってなかなかとれないから、王様が代わりに取った後恥ずかしいセリフを口走った所為で気まずくなって、お互い無言で店を出た・・・ってところかな？」

ア「な、なんで知って・・・・」

一「見てたのか？」

ラ「ははは、まさか、仮定の話さ」

絶対ウソだ。

ラ「そんな顔しないで、ほら、スマイルスマイル」

一「お前が消えてくれたらすぐに笑顔になるんだがな」

ラ「もう、このい・け・ず♪」

一「ふんっ！」

ゲシッ！！

ラ「カペ！？」

一「行くぞアリサ」

ア「え、ええ・・・・」

熊に渾身の回し蹴りを叩き込み、その場を後にした・・・

変態を撃退した後、俺達は様々なアトラクションを楽しんだ。

ア「ちょっと！　回し過ぎよ！！」

一「そうか？」

コーヒーカップを回し過ぎて気分を悪くしたり・・・

ア「ほらほら、ちゃんとこっち向きなさい」

一「ぐっ・・こんな辱めを受けるとは・・・・」

ア「あはははは！　最高～～～♪」

ジャンケンで負け、一人でメリーゴーランドに乗せられたり・・・

ラ「王様～～～～♪」

一「・・・・・」

バキッ！！

ラ「ポニョ！？」

向かう先向かう先に現れる変態を無言で返り討ちにしたり・・・

気付けば昼食をとってから四時間が経っていた。時間的に次のアトラクションで最後だ。

ア「一成、最後はあれに乗るわよ」

一「・・・観覧車？」

ア「今の時間なら、きっと夕日が綺麗に見えるはずよ」

一「確かに・・・」

ア「決定ね、行きましょ」

ギュッ

一「アリサ？　なんで手を？」

ア「何よ？　今さら気にする事じゃないでしょ？」

一「それはそうだが・・・」

ア「グチグチ言わない！」

アリサに引っ張れながら、観覧車に向かった・・・

一「ところで・・・なんで怒られたんだ？」

ア「あはっ♪　ほらほら一成！　私の家が見えるわ！！」

観覧車に乗り込んで数分、俺達の乗ったゴンドラは頂上に辿り着いた。

一「そりゃ、あれだけ大きければ見えるだろ」

ア「さすがにあんたの家は見えないわね」

一「あそこに見えるぞ」

ア「どこよ？」

一「だからあそこ・・・」

ア「わかんないわよ」

一「変だな、俺にはハッキリ見えるんだが」

ア「あんた・・・視力いくつ？」

一「両目とも3．0だが？」

ア「・・・・ほんとに人間？」

本気で考え込むアリサを尻目に、街を見下ろす。

一「それにしても・・・・この街も昔と変わらないな・・・・」

ア「昔・・・・」

一「どうしたアリサ？」

ア「・・・・なのはもすずかも、昔のあんたを知ってるのよね。それに・・・フェイトとアリシアも・・・・知らないのは私だけ・・・・」

厳密には、フェイトとアリシアちゃんは違うがな。

ア「それがどうってわけじゃないけど・・ただ・・・あんた達が昔の話をするたびに思うの・・・私はその中には入れないんだって・・・」

一「・・・・」

ア「あ、あはは・・・・私、何言ってるんだろ？　今の話は忘れてちょうだい」

一「・・・確かに、彼女達とは昔からの知り合いだが・・・だか

らといって、アリサがそんな風に思う必要はないんじゃないか？」

ア「え？」

一「過去は過去、今は今・・・・だろ？」

ア「・・・・うん」

一「時間なんか関係ない。アリサだって俺の掛け替えの無い友達だ」

ア「一成・・・・」

スッ・・・

アリサが身を寄せて来た。

一「どうしたんだ？」

ア「・・・・肩くらい黙って貸しなさい」

一「あ、ああ・・・」

ア「・・・・ありがと、一成」

一「礼を言われる様な事言ったか？」

ア「クスッ・・・バ～～カ♪」

一「？」

結局、下に降りるまで彼女に肩を貸し続けた・・・

ア「（あ～～もう！　勢いに任せて何やってんのよ私。あんなくっついて、これじゃまるでほんとに恋人同士みたいじゃない！！）」

一「アリサ」

ア「ひあっ！？　い、いきなり話しかけないでよ！！」

一「さっきからずっと呼んでたんだが？」

ア「あ、そう・・・あの、私おトイレ行って来るわね！！」

タタタタ・・・・

一「どうしたんだ急に？」

とりあえず・・・待つか。

そう思い、俺は近くのベンチに腰を下ろした・・・

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

アリサＳＩＤＥ

ア「はあ・・・何やってんだろ私？」

一成の顔を見るのが恥ずかしくて、つい逃げ出してしまった。

ア「とにかく戻って・・・・」

？「アリサ・バニングスさんですね？」

突然、私の前に黒服の男が現れた。

ア「だ、誰よあんた？　どうして私の名前を・・・」

男「私の事などどうでもいいじゃないですか。それより、大人しく私について来て頂きたいのですが」

ア「私を誘拐する気？」

男「とんでもございません、私はただついて来て欲しいのです」

ア「断るって言ったら？」

男「そうですね・・・あなたのお友達・・・確か一成君でしたよね？　彼に少々痛い目に遭って貰いましょうか・・・」

ア「なっ！？　ふざけないで！　あいつは関係ないじゃない！！」

男「お願い・・・出来ますか？」

ア「・・・わかったわ。ただし！　一成に手を出したら絶対許さないんだから！！」

男「もちろんです、私の目的はあなた。彼に用はありません」

ア「（一成・・・・）」

私は男の言葉に従うしかなかった・・・

私が連れて来られたのは、遊園地の片隅にある小さなホールだった。

男「ここは以前、キャラクターショーが行われていたホールでしてね、今は別のホールが建てられて、お払い箱になっていたのを利用させて貰っているんですよ」

？「ボス！　お疲れ様です！！」

？「首尾はどうでしたか？」

奥から、さらに二人の男が出て来た。

ボ「ふふっ、バッチリですよ。御覧なさい」

ア「・・・・」

男達が私を見つめる。

男A「おお！　さすがですボス！！」

男B「すみませんボス、俺がヘマしたばっかりに、ボスのお手を煩わせてしまいまして」

ボ「本当ですよ。全く、おかげで余計な労力を消費してしまいました」

男B「う・・・・」

ア「どういう事よ？」

ボ「実はですね、あなたがここに来てから、度々連れて来ようと画策していたんですが・・・そのことごとくが失敗してしまいまして

ね」

ア「もしかして・・・お化け屋敷の時に一成が殴ったのって・・・」

ボ「ええ、この男です」

そっか、だから一成はあんな事・・・

ボ「その後も何回かチャンスがあったんですが、今度は変な着ぐるみに邪魔されましてね」

ア「着ぐるみって・・・」

私の頭に、ラッシー君の姿が浮かんだ。

ボ「ああ！　思い出すだけで忌々しい！！」

ア「それで・・・そんなにまでして私を連れて来た理由は何？　やっぱり身代金目当てなの？」

その理由で、今までだって何度も誘拐されそうになった。最近は大人しかったけど、まさかこんな所で攫われるとは思っても無かった。

ボ「身代金？　そんな物、微塵も興味ありませんよ」

ア「え？」

ボ「私達の目的はあなた自身ですよ！　アリサ・バニングスさん！！」

ア「わ、私！？」

ボ「その愛らしい顔！　華奢な体！！　鈴の様な声！！！　私達『幼女を愛でる会』はあなたの様な美幼女を探していたのです！！！！」

ア「・・・・はい？」

一瞬、こいつの言っている事が理解出来なかった。えっと・・・つまりこいつら・・・

ア「ロリコン？」

ボ「そうとも言いますね」

ア「そうとしか言わないでしょ！　この変態！！」

ボ「はうっ！？　こんな美幼女に変態呼ばわりされるなんて・・・感じちゃう！！」ビクンビクン！！

男Ａ・Ｂ「「ボスぅぅぅぅぅ！？」」

気持ち悪く悶える男に寄り添う二人。

ア「（い、今の内に！）」

私は急いで逃げ出そうとしたが

ガシッ！

ア「なっ！？」

ボ「・・・・逃がしませんよ」

いつの間にか、私の腕を掴んでいる男によって阻まれた。

ア「離なさいよ変態！！」

ボ「そうはいきません、あなたにはやってもらわなければいけない事がありますからね」

ア「な、何をさせる気よ！？」

ボ「その前に・・・まずはこれに着替えて頂きましょうか」

そう言って男が取り出したのは

ア「・・・水着？」

ボ「ただの水着ではありません、これはスクール水着です！！」

ア「見ればわかるわよ！　というか、なんで私がそんな物着なきゃいけないのよ！？」

ボ「幼女と言えばスク水でしょう！！」

ア「絶対嫌よ！！」

ボ「・・・そうですか」

ア「な、何よ・・・近付かないで！」

ボ「こうなったら・・・力ずくで着替えて頂きますよ！！」

ア「い、嫌ぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

アリサＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＩＮ　ＳＩＤＥ

一「・・・・まだか？」

アリサがトイレに向かってから既に二十分近く経過していた。

一「様子を見に行ってみるか」

俺はトイレに向かった。

一「ん？　あれは・・・・」

道中、一枚のハンカチが落ちているのを発見した。

一「これは・・・アリサのか？」

この柄、間違いない。彼女が使っていたのと同じだ。

一「なんでこんな所に・・・・まさか・・・」

ラ「王様～～～～！！」

一「またお前か・・・」

ラ「あれ、姫様はどうしたの？」

一「すまないが、今はお前に構ってるヒマは・・・・」

待てよ、こいつはアリサの事を知っているよな。

ラ「何かあったの？」

一「熊・・・・頼みがある」

俺は熊に事情を話した。

一「・・・・というわけだ。だから、彼女を探すのに協力して欲しい」

ラ「そんな事しなくても、僕は姫様の居場所わかるよ」

一「なんだって！？」

ラ「キミ達がつけてる王の印には超小型発信器がついてるんだ。それを追えば、すぐに見つかるよ」

一「・・・・今、聞き捨てならない事言わなかったか？」

ラ「邪な理由じゃないよ？　僕達は王様の言う事をいつでも聞ける様に、居場所を把握しておく必要があるからね」

一「まさか・・・お前が至る所で俺達の前に現れたのは」

ラ「そのまさかさ♪」

一「・・・今すぐ殴りつけてやりたいが、お前に頼るしかないようだな。頼む・・・」

ラ「任せて！」

熊が小型の端末を取り出した。

ラ「ふむふむ・・・この場所は・・・あそこかな？」

一「何処だ？」

ラ「僕が案内するよ。ついて来て！！」

一「急いでくれよ熊！」

ラ「僕はラッシーだよ！」

アリサ・・・無事でいてくれ！！

ラ「反応はこの中からだよ王様」

一「ここは？」

ラ「以前、僕達がショーをしていた所さ」

一「よし、行くぞ・・・」

俺が突入しようとしたその時

？「い、嫌ぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

一・ラ「「ッ！？」」

耳を劈く様な悲鳴が、中から聞こえて来た。

ラ「王様、今のって！」

一「アリサぁ！！」

最悪の結果が頭をよぎる。それを振り払いながら、俺は無我夢中で走りだした。

やがて、俺の目に三人の男と、その一人に組み敷かれているアリサの姿が見えた。

一「貴様等ぁぁぁぁぁぁ！！」

怒りのままにアリサの元に向かう。

ア「か、一成！？」

男Ａ「な、なぜキミがここに！？」

一「死にさらせぇ！！」

グシャッ！！

男Ａ「あべし！？」

走る勢いそのまま、男の顔を全力で蹴り飛ばした。

男Ｂ「ボス！？　貴様！！」

男Ｃ「許さんぞ！　覚悟しろ！！」

一「それはこっちの台詞だぁ！！」

バキッ！×2

男B「がはっ！？」

男C「そ、そんな・・・・・」

一「そのまま寝てろ」

ア「一成！」

一「大丈夫かアリサ！？」

ア「う、うん。ギリギリだったけど、あんたのおかげで助かったわ」

一「よかった・・・・」

ア「でも・・・どうして私がここにいるってわかったの？」

一「それはこいつのおかげさ」

ラ「姫様！　無事でよかったよ～～」

ア「ら、ラッシー君！？」

一「こいつが俺をここまで導いてくれたんだ」

ア「そうだったの・・・ありがと、ラッシー君」

ラ「姫様の為なら当然さ」

ボ「き、貴様・・・・」

先程、俺が蹴り飛ばしたボスと呼ばれていた男が、大量の鼻血を流しながら立ち上がった。

一「やれやれ、また蹴り飛ばされたいのか？」

ボ「・・・まさかキミがここまで強いとは思いませんでしたよ。こうなったら、こちらも全力でいかせてもらいます！」

パチン！！

男が指を鳴らすと、奥から大勢の人間が出て来た。その数、約三十人。全員が黒服にサングラスといった井出達だった。

ア「・・・なんだか、あの映画のエージェントみたいね」

黒服「何を言っているんだねアン〇ーソン君？」

一「いいかげんパロネタ自重しろよ」

ボ「ふふふ、さすがのキミでもこれだけの数は相手出来ないでしょう？　大人しくアリサさんを渡しなさい」

一「断る。大事な友達を貴様等の様な得体の知れないヤツらに渡せるか阿呆」

ア「一成・・・」

ラ「ひゅうひゅう！　王様カッコいい～～～♪」

一「・・・お前は後でボコる」

ラ「Ｗｈｙ!？」

ボ「そうですか・・・ならば相応の目に遭っていただきましょう！」

黒服達「うおぉぉぉぉぉぉ!!」

ラ「王様！　とりあえず外に出よう!!」

一「わかった!」

グイッ！

ア「ちょ、ちょっと一成!?」

一「急いでここから出るぞ!」

アリサを抱え上げ、来た道を全速力で戻る。

ボ「追いなさい！　逃がしてはなりませんよ！！」

ア「追いかけて来たわよ！」

一「どうする気だ熊？」

ラ「外で味方が待ってるはずさ、そこで勝負をつける」

ア「味方って・・・・？」

ラ「それは見てのお楽しみって事で」

ア「？」

一「出口が見えたぞ」

ラ「よし、もう少しだ！！」

出口を抜け、外に出た俺達を待っていたのは・・・

？「王様！　ご無事ですか！？」

？「姫様！　お怪我は！？」

八体の着ぐるみだった。

一「なんだこいつら？」

ア「味方って・・・他のマスコットキャラの事！？」

ラ「そう！　僕を含めた全員でキミ達を守ってみせる！」

ア「何言ってんのよ！　あんた達でどうにかなる相手じゃ・・・」

？「ご安心ください姫様、我等九人、命をかけてあなた様方をお守りします故」

サメっぽいキャラクターが話しかけて来た。

ラ「彼はホホジロザメのジロ吉、僕達の中で一番真面目な男さ」

ジ「ジロ吉と申します。どうぞお見知りおきを」

ア「よ、よろしく・・・」

ラ「さて、他のみんなも紹介してあげたかったんだけど、どうやらそんな時間は無さそうだね」

ジ「ああ、来るぞ！」

ホール内から黒服達が姿を現した。

ボ「おや、なんですかその着ぐるみ達は？　まさか、私達と闘うつもりですかな？」

ラ「その通り、キミ達の相手は僕達だ」

ジ「我が王と姫様には指一本触れさせはせんぞ！」

ボ「はーっはっはっは！！　笑わせてくれますね。いいでしょう・・・まずはあなた達から始末してあげましょう！！」

ジ「出来るものならな」

睨みあう両者。そして、戦いの火蓋は切って落とされた。

ボ「行きなさいみなさん！！」

黒服達「うおぉぉぉぉぉぉぉ！！！」

ラ「マスコットキャラを・・・無礼るなぁぁぁぁぁぁ！！」

マスコット達「いぃぃやっほぉうぅぅぅぅ！！！」

甲高い声で黒服に向かうマスコット達の姿に若干の不安を感じた・・・

ラ「ジロ吉！　キミは姫様の護衛を！！」

ジ「心得た！」

一「さて・・・闘るか」

ラ「よーし、いっくぞぉぉぉぉ！」

俺は黒服達に向かって行った。

？「食らえ！！　サウザンズ・二一ドル！！」

黒服Ａ「ぐわっ！？」

黒服Ｂ「な、なんだこいつ！？」

？「『激烈なる針使い』とは俺の事だぁ！！」

一「・・・なんだ今の？」

ラ「僕達はそれぞれ、必殺技と二つ名を持ってるんだ。ちなみに彼はハリネズミのマーリン君だよ」

一「なんでそんな無駄な設定があるんだよ？　てか、明らかに殺傷レベルの攻撃じゃないか・・・」

ラ「今の時代、マスコットは闘わなきゃ生き残れないのさ・・・」

黒服C「いたぞ！！　こっちだ！！」

ア「き、来た！！」

黒服D「逃がすなよ！　全員で囲むんだ！！」

ア「どうすれば・・・」

ジ「姫様、ご安心を。この程度の雑兵『堕ちた聖騎士』ジロ吉が全て斬り捨てて御覧にいれます」

黒服E「笑わせるな、そんな着ぐるみ着たままで何が出来る？」

ジ「試してみるか？」

黒服F「やれぇぇぇぇ！！」

ジ「・・・破邪魔滅斬」

ズバッ！！

黒服達「うおぉぉぉぉぉ！？」

ジ「私は着ぐるみではない！　ジロ吉だ！！」

ア「凄い・・・手のヒレでみんなやっつけちゃった・・・」

予想外の展開だった。マスコット達はその圧倒的な力で黒服達を次々に地に伏せていく。最早全滅させるのも時間の問題だった。

一「このままあの男を潰しに行くぞ！」

黒服G「待て！　ボスの所へは行かせんぞ！」

一「しつこいな」

ラ「王様！　ここは僕が引き受けるよ！！」

一「いいのか？」

ラ「ま～かせて頂戴♪」

一「頼む！」

囲まれる前にその場を抜け出す。

黒服H「そのガキを止めろ!!」

ラ「おっと!　邪魔はさせないよ」

黒服I「チッ!　さっさとこの着ぐるみを始末して追いかけるぞ!!」

ラ「僕を始末?　ふふっ、面白い冗談を言うね」

ブワッ!!

黒服達「ッ!?」

ラ「王様をお手伝いしなきゃいけないからね。『全てを超越せし勇者』ラッシーがキミ達を逝かせてあげるよ・・・」

ボ「何をやっているのです!!　そんな着ぐるみ相手に何を手こずっているのですか!?」

一「その点に関しては俺も驚いてるんだがな・・・」

ボ「ッ!?　まさか、ここまで来るとは・・・」

一「また殴りに来たぞ」

ボ「ふっふっふ。これを見ても同じ言葉を吐けますか？」

ボスは懐から拳銃を取り出した。

一「そんな豆鉄砲が当たるとでも？」

ボ「抜かしなさい！」

パンッ！

ボスの攻撃！　ボスは拳銃を発砲した！

一「ふんっ・・・」

パシッ！

Ｍｉｓｓ！　一成は弾を掴んで止めた！

ボ「なっ！？」

一「だから言っただろ？」

ボ「ま、まぐれに決まってます！！」

パンッ！　パンッ！　パンッ！

ボスの攻撃！　ボスは三連射した！！

一「やれやれ、無駄な事を・・・」

パシッ！　パシッ！　パシッ！

しかし、弾は全て防がれた！

カチッ！　カチッ！　カチッ！

ボ「弾切れ！？　そんな！？」

ボスの手元には代えの弾が無い！　ボスは逃げ出した！

一「・・・何処へ行くつもりだ？」

しかし回り込まれてしまった！

一「今度はさっきより強めにするからな、しっかり腹に力を入れてろよ？」

ボ「あ、あの～～～・・・・すぐに消えますので許して頂けたら嬉しいのですが？」

一「却下」

ボ「ですよね～～！！」

一「歯ぁ・・・食い縛れ！」

一成は腰を深く落とし、真っ直ぐに相手を突いた！

ボ「グゥレイトォォォォォ！！！」

会心の一撃！　ボスに三万のダメージ！　ボスをやっつけた！

一「終わった・・・ん？　なんだこれ？」

一成は８の経験値と１２０ゴールド手に入れた！

一「いらん・・・」

一成は１２０ゴールドを捨てた！

ラ「王様～～～！！」

一「熊、あいつらは？」

ラ「みんな逝かせてあげたよ」

一「物騒な字を使うな！」

ラ「？」

ア「一成～～～～！！」

アリサがこちらに走って来るのが見えた。その後ろにはジロ吉の姿があった。

一「アリサ！　ケガは無いか？」

ア「うん、ジロ吉が守ってくれたから」

一「そうか・・・ありがとなジロ吉」

ジ「礼は不要です。姫様を守るのが私の使命であり、存在意義なのですから」

ラ「ちょっと、王様！　どうして僕は熊呼ばわりなのにジロ吉は名前で呼んでるのさ！？」

一「だって、お前変態じゃないか」

ラ「そ、そんな・・・・」

一「ふっ、冗談だ。ありがとなラッシー。お前がいてくれたから俺はアリサを助ける事が出来た」

ラ「お、王様が僕の名を・・・・よっしゃあぁぁぁぁ！　今夜は飲みに行くぞぉぉぉぉ！！」

一「・・・他のみんなも助けてくれてありがとう」

俺が礼を言うと、全員が跪いた。

ジ「王よ、この者達の事は我々に任せてお帰り下さい」

ラ「そうだね、もうすっかり夜だ。子どもはお家に帰る時間だよ」

ア「夜って・・・・ああ！　もう八時じゃない！！」

一「確かに、そろそろ帰らないとまずいな」

ア「そうね、鮫島に連絡しなきゃ」

一「それじゃあな。ラッシー、ジロ吉、それにみんな」

ア「今日は本当にありがとう。また来るわね」

ラ「マジで！？　約束だからね！」

ジ「我等一同、再びお会い出来る日を楽しみにしております」

マスコット達に別れを告げ、俺達は遊園地を後にした・・・

ラ「・・・・いい子達だったね」

ジ「ああ、真っ直ぐな目をしていた」

ラ「旅人・・・・か」

ジ「何か言ったか？」

ラ「ううん、別に」

ジ「そうか？」

ラ「（王様、辛くなったらいつでも遊びに来てね。僕はいつでも王様の味方だから・・・）」

ア「今日は楽しかったわね・・・最後に色々あったけど・・・」

一「そうだな」

ア「ラッシー君達の中の人達って何者なのかしら？」

一「・・・・気にしたらいけない」

あいつらに聞こうものなら「中の人などいない！！」って言われるのがオチだろうしな。

鮫「秋月様、到着いたしました」

一「すみません、わざわざ送っていただいて」

鮫「いえ、お気になさらず」

一「それじゃあ、お休みアリサ」

ア「ね、ねえ一成、また今度一緒に・・・」

一「また一緒に行こうなアリサ」

ア「・・・も、もう、仕方ないわね。寂しいあんたの為に、また私が一緒に行ってあげるわよ」

一「約束な？」

ア「うん・・・／／」

鮫「ほっほっほっ、それでは失礼いたしますね」

去って行く車を見送った後、俺は玄関の扉を開いた・・・

一「・・・土産買うの忘れた」

第七話　デートって何処に行けばいいのかさっぱりわからない　アリサ編（後書

作「いや～～、やっと書けた。まさか、本編で一万五千字を超えるとはな～～」

一「ずいぶん長いな。今までで最長じゃないか？」

作「執筆に四日もかかっちゃったぜ。おかげで達成感はハンパじゃないけどな」

天「面倒臭がりのあなたがよくここまで書けましたね？」

作「書きたい事全て書いたからな。ほらっ、本編でもアリサって若干出遅れてる感じがあるだろ？だから今回のデートで一気に距離を縮めようと思ってな」

神「うむ、なかなかの出来じゃったぞ・・・前半はな」

作「え？」

刹「後半の厨二満載のバトルはハッキリ言って蛇足じゃないか？というか、デート編全般に言える事だが、サブキャラに力入れ過ぎだろう」

作「アリサと言えば誘拐だろ？　他の小説でも度々攫われそうになってるし」

一「しかも誘拐犯がロリコンって・・・台無しだろ」

作「はっはぁ！　この小説にシリアスは必要ない！！」

天「ラッシー君のキャラが濃すぎですよ。しかも、意味深な発言してますし・・・」

作「あいつはもう出んぞ、所詮脇役だしな」

神「ではあんな発言させるべきではなかろうが！！」

作「書きたい物を書く！　反省も後悔もしない！！」

刹「だめだこいつ、早く何とかしないと・・・」

作「今回はパロネタをふんだんに盛り込んでみましたので、ヒマな方は探してみるのも面白いかもしれませんね」

一「明らかにやり過ぎだと思っているのは俺だけじゃないはずだ・・・」

一「長すぎて疲れた、今回の贈り物報告会はお休みと言う事で・・・」

天「駄目ですよ、せっかく贈って頂いたんですから」

一「・・・はい」

神「それでは始めるぞ、朝凪　夜風様から真・雷刻剣、真・雪縁刀、真・樹心剣、真・鉄暗刀を頂いたぞ」

天「前回頂いた雷刻剣と同じく、以前書かれていた小説に出ていた剣のようです」

刹「雷刻剣は鍔迫り合いには向かないらしくてな、今回こうして別の剣を贈ってくれたらしいぞ」

一「朝凪　夜風様って凄いよな、贈ってくれる全ての物に細かい設定を加えていて・・・どこぞの馬鹿とは大違いだ」

作「ぶえっくしょ～～い！！」

天「次は緋水様からですね・・・」

作「ビクッ！」

刹「どうした作者？　何をそんなに震えている？」

作「べ、別に・・・」

？「こんにちは～～～」

神「ん？　また貴哉殿か？」

緋「初めまして、緋水です」

一「本人来たぁぁぁぁぁ！？」

作「ひいっ！？」

緋「おやおや、どうしたんですか作者さん？」

作「ど、どうしてここに？」

緋「ちょっと作者さんとＯＨＡＮＡＳＩしようと思いましてね・・・」

作「自由への逃走ぉぉぉぉぉ！！！」

ダダダダ！！

緋「ふふっ、逃がしませんよ・・・・」

ダダダダ！！

天「・・・行ってしまいましたね」

刹「しかし、とうとう本人までやって来たか」

貴「一成さん！」

一「いらっしゃい貴哉さん」

貴「あの、緋水がお邪魔しませんでしたか？」

一「緋水様ならうちの馬鹿を追いかけてあっちに行きましたよ」

貴「くそっ！　一足遅かったか！！」

神「いったい何があったんじゃ？」

貴「すみません、俺行ってきます！　あとこれ、今回の贈り物の今までの一成さんのデート写真と、フェニックスの尾です！！」

一「おおい！　最後の最後にとんでもない物置いて行ってくれたな！！」

一「最後だな、清浦刹那様からエクセリオンブレードとサイクロンバスター、クラウンシールドに、バーニングランス、そしてボルティックアックスを頂いたぞ、さらに、神奈達には抱き枕も頂いた」

神「こ、この柄は・・・」

天「一成様の・・・寝顔！？」

一「なんだって！？」

刹「この完成度、正に匠の技だな。早速夜にでもこれを使って・・・」

一「待て、何をする気だ？」

刹「それを我の口から言わせる気か？　我が君は思ったよりSなのだな」

一「貸せ！　絶対使わせんぞ！！」

第八話　知らない所で評価するのは止めて欲しい（前書き）

前回頑張り過ぎたので、今回短めです。今までの振り返りみたいな物だと思って下さい。

最近、わき役たちの強さがインフレ起こして困ってます。どうしてこうなった・・・？

第八話　知らない所で評価するのは止めて欲しい

先「それでは、この時間の授業を終わります」

女子「きりーつ！　れーい！！」

全員「ありがとうございました～～！」

終了の礼と共に騒がしくなる教室。昼休みということで、各々机をくっつけあったりして弁当を開けている。

一「さて、俺も屋上に行くか」

な「一成君・・・」

一「お、なのは。一緒に屋上に行くか？」

な「あ、あのね、一成君。今日は女の子だけで大事なお話があるの。だから、一成君と一緒にお昼ご飯が食べらないの・・・」

一「え？」

な「本当にごめんね？　でも・・・とても大切な話なの」

なのはの顔は真剣そのものだ。よっぽど込み入った話らしいな。

一「そうか、なら今日は教室で食べる事にするよ」

な「ありがとう、一成君」

一「それよりみんなの姿が見えないが・・・早く行った方がいいんじゃないか？」

な「あ、本当だ！　じ、じゃあ、私行くね！」

慌てて教室を飛び出していくなのはを見送りつつ、席に座り直した。

一「（考えてみれば、ここ最近ずっと一緒に行動してたしな。女の子同士の話も俺がいた所為で出来なかったって事か。全く、それくらい察しろよ俺・・・）」

男子Ａ「・・・聞いたか？」

男子Ｂ「秋月のヤツ・・・とうとうフラれたか」

男子Ｃ「めげずに呪い続けた甲斐があったぜ・・・」

男子Ｄ「これであいつも俺達側の人間だな」

男子Ｅ「それじゃあ早速、新たな同志を迎えてやろうじゃないか・・・」

ガタン！×５

女子Ａ「あれ？　秋月君、今日は屋上じゃないの？」

一「ああ、ちょっとね。今日はここで食べる事にしたんだ」

女子Ｂ「じゃあさ、私と一緒に食べようよ！」

女子Ｃ「吉野ちゃんずるいよ！　ねえ秋月くん、私と食べない？」

女子Ｄ「はいは～～い！　私も私も～～～！！」

女子Ｅ「あ、あの・・・私もご一緒していいですか？」

女子Ａ「ちょ、ちょっとみんな！　私が最初に秋月君に声かけたのに！」

俺はあっという間に女子に囲まれてしまった。

一「（・・・そうか、一人で食べるのは寂しいだろうと思ってこうして誘ってくれているんだな。優しい娘達だ・・・）」

女子だけというのが不思議だが、せっかくの厚意を無下にするわけにはいかない。

一「ありがとう。じゃあ・・・ご一緒してもいいかな？」

女子Ａ「決まりだね！」

女子Ｂ「私、秋月君の隣ね～～♪」

女子Ｃ「駄目だよ！　こういう時はジャンケンしないと！」

女子Ｄ「秋月君、このからあげ食べる？」

女子Ｅ「あ、秋月さん・・・私のもどうぞ・・・」

一「ありがとう・・・うん、美味いよ」

女子Ｄ「え、えへへ、どういたしまして・・・／／」

女子Ｅ「・・・／／」

顔を赤くする二人を気にしつつ、弁当を食べる。

男子Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅ「「「「「「謀ったな秋月ィィィィィィィ！！！」」」」」」

一「・・・なあ、昼休みの教室って、いつもこんなに賑やかなのか？」

女子Ｅ「い、いえ・・・普段はもっと静かなんですが・・・」

一「そうなのか？　じゃあなんで・・・？」

男子Ｂ「わからいでか！？」

一「・・・すまん」

男子Ｃ「ぐぎぎぎ・・・」

男子Ａ「落ち着け！　体から変な煙出てるぞ！！」

男子Ｃ「・・・はっ！？　俺とした事が、あまりの怒りに封印されていた力を解放しかけてしまった・・・」

ああ、ここにも感染者が一人・・・

女子Ｃ「私知ってるよ。あれって中二病って言うんでしょ？」

女子Ａ「真面目な顔して何言ってんのって感じだよね」

女子Ｂ「駄目だよ、本人はカッコいいって思ってるんだから、そっとしといてあげなくちゃ・・・」

女子Ｄ「堂々とあんな事言って恥ずかしくないのかな～～？」

女子Ｅ「・・・妄想と現実の区別はつけるべきだと思います・・・・」

男子Ｃ「・・・鬱ダ、死ノウ・・・」

女子に集中砲火を浴びた男子が窓に手を掛ける。

男子Ｅ「ま、待て！　早まるな！！」

男子Ｃ「あはは・・・俺みたいな痛い人間は消えた方が社会の為だ・・・」

男子Ａ「やっべえ！　目がマジだ！！」

男子達の漫才を横目で見つつ、お茶を飲む。

一「・・・うん、今日も平和だ」

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

屋上組ＳＩＤＥ

な「・・・・・」

フェ「・・・・・」

アリ「・・・・・」

ア「・・・・・」

す「・・・・・」

無言で弁当を口に運ぶなのは達。一成の姿が見えないので一緒に食事をとろうと近付いた男子もいたが、彼女達から発せられている「こっち来んな」オーラを受け、全員断念するしかなかった・・・

そんな中、アリサが口を開く。

ア「・・・・それじゃあ『一成とのデート報告会』・・・始めるわよ？」

コクン・・・・×４

なのは達が一成を外した理由・・・・それは、この会を開く為だった。

ア「デートをした順に話してもらうわ。まずは・・・すずかね」

す「はい・・・」

・・・・・（この間に各デートの内容が説明されていると思って下さい）

す「・・・結局、お家に着くまで一成君におんぶしてもらっちゃった」

な「一成君に膝枕・・・・・羨ましいよ～～」

フェ「一成の寝顔・・・どうだった？」

す「・・・・可愛かった／／」

アリ「兄様の背中って温かいもんね。ずっとおぶさりたくなる気持ちもわかるな～～」

ア「そうね。その点に関しては同意するわ」

フェ「つ、次は私だね・・・」

・・・・・

フェ「帰る前にお土産を買ったんだけど、その時に一成がこのストラップをプレゼントしてくれたの（本当はおそろいで買ったんだけどね）」

ア「・・・あいつ、アザラシ相手に何やってんのよ・・・・・」

す「あはは・・・相変わらずだね一成君」

アリ「・・・・あれ？　フェイトは何も買ってないって言ってたような・・・」

フェ「そ、それは・・・（どうしよう、思わず言っちゃったよぉ・・・）」

な「そのストラップ・・・確か一成君も同じ物持ってたよね・・・」

フェ「あうあう・・・／／」

ア「フェイト～～？　大人しく白状した方がいいわよ～～？」

フェ「うう・・・わかりました～～」

・・・・・

な「やっぱりおそろいで買ったんだね」

す「私も何か買えばよかったな～～」

アリ「今度は私の番だね！」

ア「アリシア・・・隠し事は無しよ？」

アリ「もちろんだよアリサちゃん。私はね～～～・・・」

・・・・・

アリ「凄かったんだよ～！？　兄様とライオンさんがすれ違ったと思ったら、ライオンさんが倒れちゃったんだもん」

ア「ライオンって・・・どこまでデタラメなのよ！！」

な「（一成君に傷を負わせるなんて・・・そのライオンさん、もしかしたらあの霊剣の人より強いのかも・・・なんて）」

す「ねえフェイトちゃん、結婚指輪って本当？」

フェ「姉さんが言ってるだけだと思うけど、もしかしたら・・・」

アリ「次はなのはちゃんだよね？」

な「うん、私はプールに行ったんだけど・・・」

・・・・・

な「私、バスの中で寝ちゃって・・・気が付いたらお部屋で横になってたの」

ア「・・・どこのラブコメよ?」

な「にゃはは・・・お母さんにも同じ事言われたよ・・・」

す「桃子さん・・・もしかしてわざと?」

フェ「私もそのスライダー滑ってみたいな（そして一成に、お、お姫様抱っこを・・・／／）」

アリ「結局、ローションってなんなのかな? 今度母様に聞いてみよっと」

ア「最後は私ね・・・」

・・・・・

ア「・・・で、最後はマスコット達が助けてくれたってわけ」

アリ「二人っきりで観覧車なんて、ロマンチックだよね～～♪」

す「うん、憧れちゃうな」

な「アリサちゃん、怖くなかったの？」

ア「あいつの事信じてたからね。まあ・・・あんなに早く来てくれるとは思ってなかったけど」

フェ「（ラッシー君・・・何者なんだろう？　会ってみたいな）」

ア「・・・色々あったようだけど、とりあえずみんな楽しめたみたいね」

す「またこういう機会があったらいいね」

な「その時は一人ずつじゃなくてみんなで遊びに行こうよ」

アリ「一日じゃもったいないからお泊りとかもいいかもね。もちろん兄様も誘って」

フェ「か、一成とお泊り！？・・・・はう／／」

ア「それいいわね。よ～し、今度はみんなで一成の家にお泊りに行くわよ！」

アリ「さんせ～～い！」

フェ「わ、私も・・・！」

す「か、勝手に決めてもいいのかな？」

な「にゃはは、アリサちゃんって一成君の事になると結構強引だよね」

屋上組ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＩＮ　ＳＩＤＥ

一「すまない、もう一杯もらえるかな？」

女子Ｅ「は、はい・・・どうぞ・・・・」

一「ありがとう」

男子Ａ「うわぁぁぁぁぁ！！　佐藤のヤツが窓から落ちたぞーーー！！」

男子Ｂ「ううう・・・惜しい男を亡くしちまった・・・」

男子Ｄ「・・・待て！　あいつ・・・起き上がったぞ！？」

男子Ｃ「ふっ、つい受け身をとっちまったぜ・・・」

男子Ｅ「さすが佐藤！　やってくれるぜ！！」

男子Ｂ「今日からお前のあだ名は『ターミネーター』だ！！」

男子C「さっさと失せな、ベイビー！」

男子A「名台詞ｋｔｋｒ！」

お茶を口に含む。

一「・・・・やっぱり平和だ」

第八話　知らない所で評価するのは止めて欲しい（後書き）

ア「ちょっと・・・なんで私達が後書きに出てるのよ？」

す「作者さんからお手紙が来てるよ『たまにはこんなのもいいんじゃないかと思ってな、あとはよろしく！！』・・・だって」

フェ「こんな事したら、また一成に酷い目に遭わされるんじゃ・・・」

ア「そんなの自業自得でしょ？」

な「というか、なんでフェイトちゃん一成君が作者さんにお仕置きするの知ってるの？」

アリ「駄目だよなのはちゃん、ここは基本なんでもありの場所なんだから細かい事は言いっこ無しだよ？」

ア「そうそう、ここは本編とは全く関係ないんだから」

す「いくらなんでも限度があるんじゃ・・・」

フェ「うう、せめて一成にはいて欲しかったな」

アリ「あれ？　もう一枚お手紙があるよ？　えっと・・・『お泊りの話が出て来たが、実現する可能性は低いぞ』・・・だって」

ア「何よそれ！？」

す「仕方ないよ。これから神奈さん達のデート編を書くのにこれ以上増やしたらいつまでたってもA'ｓ編に入れないもん・・・」

な「早くA'ｓ編が見たいって感想もあったもんね。これ以上グダグダやっても詰まらないと思ったんじゃないかな？」

フェ「作者さん・・・大丈夫かな？」

ア「ずいぶん作者の事心配するのねフェイト？」

フェ「だって・・・私と一成のラブラブな話を書く前に死なれても困るもん」

な「ふぇ、フェイトちゃん？　なんだか性格が・・・」

フェ「後書きだから無問題・・・だよ？」

な・す・ア・アリ「「「「「（え、笑顔が怖い・・・）」」」」」

す「えっと・・・贈り物報告会をやります」

ア「何それ？」

す「読者の人から貰った贈り物を紹介するコーナーなんだって」

な「へ～～、面白そうだね」

す「まずは、朝凪　夜風さんだね。甘酒を送ってもらったよ」

アリ「なんで甘酒なの？」

す「なのはちゃんのお話にてるてる坊主が出てきたでしょ？　晴れたら甘酒をあげなきゃいけないんだって」

フェ「物知りだねすずか」

す「・・・裏に書いてあったの」

アリ「次はね～～、緋水さんからだよ～～。ラッシー君達のぬいぐるみと作者さん宛てにお団子だって～～」

フェ「これがラッシー君・・・か、可愛い！」

ア「（フェイト・・・多分本物見たら卒倒するわね）」

す「他のマスコットのぬいぐるみも揃ってるね」

な「ジロ吉ってこれかな？　凄いヒレだね」

アリ「作者さん宛てだからこれは食べちゃ駄目だね。そこに置いておこっと」

な「最後だね。清浦刹那さんから海鮮丼を貰ったよ」

ア「さすがに生ものは置いといたら駄目よね・・・」

アリ「じゃあ食べちゃおうよ！」

す「腐らせちゃうのも申し訳ないもんね」

フェ「あ、都合よく全員分の箸が置いてある！」

な「じゃあ早速・・・」

な・フェ・ア・す・アリ「「「「「いただきま～～す！！」」」」」

フェ「これで全部だよね？　それじゃあそろそろお別れ・・・」

？「こんにちは～～」

な「え？」

？「あれ？　作者さん達いないのか～～」

ア「・・・誰よあんた？」

？「初めまして、月光閃火です♪」

アリ「うわ！？　また作者さん自身が来ちゃったよ！！」

？「待ってよ閃火～～～！」

す「こ、今度は誰？」

？「も～～！　一人で先に行かないでよ！」

閃「あはは、ごめんごめん」

？「・・・うえ！？　な、なんであなた達がここに！？」

な「今回は私達が後書きを任されたんです」

？「そ、そうなんだ・・・」

フェ「・・・・・」

？「な、何か・・・？」

フェ「私達、会った事ありませんか？」

な「あ、それ私も思った！」

？「き、きき気のせいよ！！　そ、それじゃあ私、先に帰るね！！」

ア「え？　もう帰っちゃうの？」

？「よ、用事思い出したの。それじゃあね！！」

す「行っちゃった・・・」

閃「あ～あ、仕方ないな。それじゃあ僕も帰るよ」

フェ「は、はい・・・」

アリ「・・・何しに来たんだろう?」

な「一成君達に用があったんじゃないのかな?」

A'ｓ編前の唐突アンケート（前書き）

今回はきっと協力してくれる人がたくさんいる・・・はず。

A' s編前の唐突アンケート

作「さて、三回目のアンケートだ」

一「今回の内容は？」

作「A' s編でもオリジナルストーリー展開させるかどうかと、オリキャラのアンケートだ」

一「無理だろ」

作「男、いや、漢には無理だとわかっていてもやらなければいけない事があるのさ・・・」

一「・・・カッコよく言ったつもりだろうが、今の発言、自分から無理だって言ってる様なもんだぞ」

作「・・・・あ」

一「・・・抜け作」

作「え～～、次の中からお選びください」

1　オリジナル上等！

2　A' sを汚すなボケ！

作「さあ、どうなることやら・・」

一「人事みたいに言うなよ・・・」

作「次はオリキャラだな、アンケートとる前に募集してみたら結構なキャラが送られて来たぞ」

一「予想より多すぎて若干後悔してたよな、お前・・・」

作「それでは・・・次の候補の中から気に入ったキャラに一票お願いします」

一「だから、流すなよ・・・」

1　二重人格娘（おどおど&オレっ娘）

2　無口娘（恋姫の恋みたいな）

3　男の娘（け、決して趣味というわけじゃないですよ！！）

4　変態七割、馬鹿三割の頼れるアニキ（思いっきりぶっ飛んだバカキャラ）

５　超ツンデレお嬢様　（ルイズですねわかります）

６　人を疑う事を知らない若干電波な女の子（清浦刹那様案）

７　悪戯好きで愛すべき馬鹿（朝凪　夜風様案）

８　シグナムの胸を見て興奮するヘタレ

９　デバイスを持たず、足と拳で戦う漢

１０　管理局嫌いの少年？

１１　男女分け隔てなく殴り飛ばす九歳児（８～１１まで、全て鴉の翼様案）

作「・・・十一人か」

一「お前、キャラの説明下手過ぎだろ・・・こんな文章じゃ他の作者様のキャラの魅力が伝わらないだろうが」

作「だ、だって・・・長々書くわけにもいかないし・・・」

一「仕方ないな・・・他の作者様のキャラの詳細情報が知りたい方

はメッセージを送って頂ければこちらからお送りしますので、気になった方はどうぞ・・・」

作「うう・・・自分の文才の無さが恨めしい・・・」

一「・・・何を今さら」

作「・・・えー、期限は日常編が終わるまでです。まだ当分先ですね・・・」

一「一ヶ月・・・・下手したら二ヶ月以上かかるかもな」

作「それだけあれば結構な票が集まりそうだな」

一「だといいがな・・・」

A-s編前の唐突アンケート（後書き）

清浦刹那様、朝凪　夜風様、鴉の翼様、魅力的なキャラをこの程度の文章でしか表現できなかった愚かな私をお許しください・・・

第九話　余計な所で運を使ったら後でとんでもないしっぺ返し来るぞ（前書き）

二週間ぶりの更新。皆様、お待たせしました！！

今思ったけど、美由紀もいるんだよな・・・どうしよう・・・

第九話　余計な所で運を使ったら後でとんでもないしっぺ返し来るぞ

神「こうして二人で買い物に出るのもいいものじゃな」

一「そうだな」

ある日の夕方、俺は神奈と一緒に買い物に出ていた。

神「ん？　あれはなんじゃ？」

神奈の視線の先には人だかりができ、何やらかなり盛り上がっているようだ。

？「さあ！　福引きやってるよ～～！　券のある方はぜひチャレンジしてくださいな～～～！」

神「福引きか・・・」

一「そういえば、さっき店で券貰ったな」

神「やってみるかの？」

一「そうだな、せっかくだし」

俺達は福引き会場に向かった。

店主「いらっしゃい！　やってくかい！？」

一「はい、とりあえず一回お願いします」

店主「はいよ！　それじゃあ一等目指して頑張りな！」

景品の書かれた看板に目を通す。

一「・・・なんで三等がラッシー君人形なんだよ・・・」

神「一成！　妾にやらせてくれぬか？」

一「神奈・・・三等だけは絶対当てないでくれ」

神「？」

ガラガラ！・・・・コロン

神「・・・金色じゃ」

一「何等だ？」

店主「・・・出たぁぁぁぁぁ！！　一等の温泉旅館ペアチケッ

トだぁぁぁぁぁ！！」

野次馬「お～～～～！！」

一「なん・・・だと・・・？」

神「ふふん、妾が回したんじゃから当然じゃ！」

店主「いや～～！　まさか持ってかれるとはね。おめでとう、しっかり楽しんできなよ？」

神「うむ！」

チケットを受け取り、上機嫌な神奈と共に帰宅した。

一「ただいま」

天「お帰りなさいませ一成様」

神「ふふ・・うふふふ・・・」

天「・・・どうしたんですか神奈？」

一「今はそっとしておいてやってくれ」

天「はあ・・・？」

神「天音よ、明日から二日ほど妾と一成は家を留守にするからの」

夕食後、唐突に神奈が告げる。

天「何を言ってるんですかあなたは？」

神「ふっふっふ・・・これを見るのじゃ！」

チケットを天音に見せる神奈。

天「旅館の無料チケット！？　ど、どうしたんですかこれ！？」

神「妾が福引きで当てたのじゃ」

天「・・・そういえばあなた、昔から運だけはいいですもんね」

神「チケットは二枚あるからの、当然妾は一成を選ぶぞ」

天「くっ・・・まさか、そんな手があったとは・・・」

一「神奈、俺じゃなくて天音を連れて行くべきだ。二人とも疲れてるだろうし、この機会にリフレッシュして来たらどうだ？」

神「何を言う一成！　せっかくの温泉になぜ天音を誘わねばならんのじゃ！？」

天「さりげに酷い事言いますねあなた・・・」

一「しかし・・・」

神「それとも・・・一成は妾と温泉に行きたくないのか？」

一「む・・・」

神「そうじゃの・・・いくら人の姿をとっておると言っても、所詮妾は霊剣。そんな得体の知れんモノと一緒に温泉など・・・」

一「ぐ・・・」

神「いいんじゃよ、こればかりはどうしようもないしの。霊剣は霊剣らしく、天音でも誘って・・・」

一「・・・よ、よし！　早速準備しないとな！　あ～～楽しみでしょうがない！！」

神「一成・・・妾と一緒に行ってくれるのか？」

一「当然じゃないか！　俺達は家族なんだからな！！」

神「さすがは一成じゃな！　妾は信じていたぞ♪」

一「ははは！・・・はは・・・・はあ・・・」

天「・・・腹黒」

神「なんじゃ？　何処からか負け犬の遠吠えが聞こえるぞ？」

天「くっ・・・・覚えていなさい！」

一「準備・・・するか・・・」

翌日・・・

神「一成！　早く起きんか！！」

一「ん・・・神奈・・・？」

神「もう昼じゃぞ！　早くせねば夜までに旅館に着けんぞ！」

一「（そうだった。今日から神奈と温泉旅館に行くんだったな）」

とりあえず着替えてリビングに向かうと、天音がかばんを持って立っていた。

天「はい一成様、昨日の物は全てこの中に入っています」

一「ありがとう天音。お土産買って来るからな」

天「いえ、お気遣いなく・・・むしろ神奈が買うべきです」

一「わかった。それじゃあ神奈、行こうか」

神「一成よ、もう一つ忘れておるぞ・・・」

一「え？」

神「さあ、元の姿に戻るのじゃ！」

一「・・・・なぜ？」

神「お主がその姿で行ったら姉弟にしか見えんじゃろうが！」

一「いや、元々従姉の設定だろ・・・」

神「いいから早くするのじゃ！」

一「・・・またマナが失われる・・・」

神「心配せんでも、後で妾が補給してやるぞ」

神奈に言われ、仕方なく元の姿に戻る。

神「うむ♪　これでどこから見ても新婚の夫婦にしか見えんの！」

天「まさか・・・最初からそのつもりで！？」

神「くくく・・・・どうかの？」（ニヤリ）

天「神奈・・・・恐ろしい娘！」

一「・・・・はあ」

出発前から俺の体力は限りなくゼロに近かった・・・

？「当旅館にようこそおいで下さいました。私、ここの女将を務めさせて頂いております源と申します。どうぞよろしくお願い致します」

神「うむ、世話になるぞ」

一「神奈、こういう時くらい敬語を使ってくれ・・・」

神「じゃが断る！」

一「・・・言い切ったよ」

源「うふふ、仲がよろしいんですね。ご夫婦ですか？」

一「いや、俺達は・・・」

神「やはりそういう風に見えるのじゃな？　くくく、これで自他共に認める夫婦になったの一成」

一「（俺・・・認めたか？　記憶にないんだが・・・）」

源「やはりそうでしたか、でしたら、こちらも相応のサービスをさせて頂きますので楽しみにお待ちくださいね」

神「それは楽しみじゃのぉ♪」

一「・・・・」

こういうパターンは絶対ロクな目に遭わない事を、今までの経験から俺は知っている。

源「それでは、お部屋の方にご案内させて頂きますね」

神「何をしておる一成？　早く行くぞ」

一「（とにかく、いつでも対処できるように気を張っておかないとな・・・）」

若干緊張しつつ、俺は源さんに案内され部屋に向かった。

源「こちらのお部屋になります」

神「おお、なかなかの広さじゃな」

一「無料だから小さいかと思ったが、いい意味で裏切られたな」

源「先にお食事をお持ちしましょうか？　それとも・・・」

神「妾は温泉に入りたいぞ」

源「かしこまりました。それではお夕食は温泉からあがられた後という事で」

一「お願いします」

源「では、失礼いたします・・・」

そう言って、源さんはゆっくりと襖を閉めた。

神「それでは、早速向かうかの」

一「そうだな」

部屋を出て、温泉に向かう。

神「・・・覗きたかったらいつでもよいぞ？」

一「・・・・・」

神奈の言葉を無視して、男湯に入る。

一「本気なのか冗談なのか・・・」

本気だとしても覗くわけがないがな。

？「ウホッ！？　イイ男！」

一「ん？」

服を脱いでいると、隣の人から視線を感じたので顔を向ける。

一「あの・・・・何か？」

？「・・・はっ！　いえ別に。それしても・・・いい体してますね」

一「そうですか？」

？「ええ、とても美味し・・・羨ましいですよ」

一「ありがとうございます」

なんだろう、この言い様も無い危機感は？　頭の中で警鐘が鳴り響いている。

？「お一人ですか？　もしそうなら私と一緒に・・・」

一「いえ、連れがいますから」

逃げる様に脱衣所を後にした。

一「ふう・・・・」

体を流し、湯に浸かる。あまりの気持ちよさに自然に息が漏れた。

一「あの時はゆっくり浸かれなかったけど、今回は充分堪能出来そうだな」

あの時の士郎さんの殺気は今でも忘れられない。

一「それにしても・・・人が少ないな」

先程俺を見つめていた男性以外に三人くらいしかいなかった。

一「ちょうど人が少ない時期に来れたのかな？　だとしたらかなり運が良かったな」

まったく、神奈様様だ。だからこそ、天音を連れて来れなかった事を後悔する。

一「・・・二人にチケット渡して、俺は自腹で来るようにすればよかったんじゃないか？」

そうだ、どうしてこんな簡単な事に気付かなかったのだろう。

一「すまない天音、この埋め合わせは必ず・・・」

？「どうされたんですか？」

先程の男性が何時の間にか隣にいた。

一「あなたは・・・」

？「名乗るのが遅れました。私は住谷と申します」

一「あ、どうも。俺は秋月　一成といいます」

住「一成さん・・・ああ！　素敵な名前ですね！！」

一「はあ・・・？」

なんだこの人？　悪い人には見えないが・・・

一「あの、住谷さん」

住「なんですか？」

一「なんで・・・サングラスかけたまま温泉に入ってるんですか？」

そう・・・確かに悪い人には見えない。見えないが・・・怪しすぎる。

住「これは私のポリスィーですからね。外すわけにはいかないんですよ」

一「そ、そうなんですか？」

住「そうなんです！！」

力説する住谷さんのあまりの剣幕にたじろぐ。

住「そう言えば、お連れの人がいるとおっしゃってましたよね？もしかして・・・彼女ですか？」

一「いえ、従姉ですよ。福引きでここの旅館のペアチケットが当たりましてね、俺を誘ってくれたんですよ」

住「そうですか。彼女ではないんですね？」

一「はい」

なんでこんなに確認するんだ？

住「実はですね、私は一人でここに泊まりに来たんですが、思いのほか一人は寂しくてですね、もしよかったら私の部屋で一杯やりませんか？」

一「誘ってくれるのはありがたいですが、俺は酒は・・・」

住「大丈夫です！　お茶でもジュースでも何でもそろってますから！！」

一「（ここまで言ってくれるのに断るのも悪いな。さて・・・どうするか？）」

1　せっかくだし、お誘いを受けるか

2　いくらなんでも会ったばかりなのに図々し過ぎるな・・・

一「（やっぱり1か・・・）そうですね、では・・・」

ゾクゥッ！！

一「ッ！？」

先程脱衣所で感じた以上に第六感とでも言うべきものが訴えかける。
『目の前の男に気を許すな』・・・と。よくわからないが、ここは従っておいた方がいいだろう。

一「すみません、せっかくですが連れを一人にするわけにはいきませんから」

住「・・・そうですか」

一「本当にすみません。せっかくの厚意を・・・」

住「いえ、私の方こそ、出会ったばかりの方に言う様な事じゃありませんでしたから」

そう言って住谷さんは俺から離れていった。

一「・・・悪い事したかな？」

彼の言葉は真摯だった。純粋に厚意で誘ってくれたであろう彼を何故拒んでしまったのだろう?

一「そろそろ出るか」

満足した俺は脱衣所に向かった・・・

住「・・・ああ、あれほどの肉体を持つ男性はなかなかお目にかかれないというのに。少しばかり焦り過ぎたか? しかたない、別の人を探すか・・・」

男性「ふう・・・やっぱり温泉はいいな」

住「ですよね!」

男性「うお!? だ、誰ですかあなた?」

住「おっと失礼、私の名は住谷です。もしよかったら、この後私の部屋で一杯、や・ら・な・い・か?」

この日の夜、ある部屋から男性の呻き声が聞こえ続けていたらしいが、その事は本編には全く関係無いので割愛する・・・

一「ふう・・・ごちそう様でした」

部屋に戻ると源さんが夕食を用意して待っていてくれた。俺の後に戻って来た神奈と一緒に夕食に舌鼓を打ち、あっという間に平らげてしまった。

源「お味は如何でしたでしょうか？」

一「ええ、とても美味しかったです」

神「うむ、これほどの物が食べられるとはの、妾は満足じゃ」

源「うふふ、ありがとうございます。料理人達も喜ぶでしょう」

さて、後は寝るだけだが・・・

源「お客様、もしかして、もうお休みになられるのでしょうか？」

一「え？　はい、そのつもりですが。どうかしたんですか？」

源「私としては、もう一度温泉に入られる事をお勧めしますが」

一「え？」

源「最初に申しました、ご夫婦の為のサービスをさせて頂きたく思いまして」

≪やはりそうでしたか、でしたら、こちらも相応のサービスをさせて頂きますので楽しみにお待ちくださいね≫

源さんの言葉を思い出す。そういえば、そんな事を言っていた様な・・・

神「一成、せっかくの厚意じゃ。無下にするのはどうかと思うぞ？」

一「・・・そうだな、それじゃあ、もう一度入らせて頂きますね」

源「はい、それでは旦那様はお先に、私は奥様にお話がありますから」

一「いや、だから俺達は・・・」

神「ほらほら、早く行くのじゃ、だ・ん・な・さ・ま♪」

一「はあ・・・」

源さん、いったい何をするつもりなのだろうか？　温泉でするサービスってなんだ？

疑問に思いながらも、温泉に向かった。

神「・・・それで、話とは？」

源「実はですね・・・ゴニョゴニョ・・・」

神「なんとっ！　それは本当か！？」

源「はい♪　ご宿泊頂くご夫婦には必ずさせて頂いている事です」

神「まさか・・・この様な素晴らしい旅館があったとは・・・」

源「お気に召して頂いたようで何よりです。それでは奥様・・・」

神「うむ！　今度こそ一成に妾の魅力を存分に見せつけてくれようぞ！！」

・・・・・

一「まさか、一日に二回も温泉に浸かる事になるとな」

客は一人もいない。まさに貸し切り状態だった。

一「・・・一人になるのも久しぶりだな」

最近はずっとなのは達と一緒だったから逆に新鮮だ。

ガラガラ

その時、脱衣所と温泉を繋ぐ扉が開く音がした。

一「（誰か入って来たのか？）」

何の気無しにそちらを向くと。

神「ふむ、女湯とそう変わらんのじゃな」

一「・・・・・」

うん、少し落ち着こう。なんだかあり得ない物を見た気がするが、気のせいだ。そうに決まってる。深呼吸して見ればほらっ、ただの見間違い・・・

神「どうしたんじゃ一成？　そんな呆けた顔をしよってからに」

どうやら見間違いじゃなかったようだ。神よ、これはなんの試練ですか・・・？

駄神「ぶえっくしょん！！　うぬ、誰かワシの噂でも・・・・と言うか、久しぶりに出たかと思えば出番これだけかの！？」

・・・何やら懐かしい声がしたが、軽くスルーしていると、神奈が俺の隣に腰を下ろして来た。

神「ふう～～、何度入っても温泉はいいのお。しかも・・・隣には一成。完璧じゃな♪」

一「・・・それはよかったな。ところで神奈、一つ聞きたいんだが・・・」

神「ん？　なんじゃ？」

一「なんでキミが男湯にいて、あまつさえ俺の隣に腰掛けてるんだ！？」

神「うむ、実はの、これがサービスなんじゃ」

一「え？」

神「夫婦限定での、こうして混浴させてくれるらしいのじゃ。じゃから妾はここにいる」

一「他のお客さんが入って来たらどうする気だよ？」

神「心配無用じゃ。あの女将が妾達だけの貸し切りにしてくれたからの」

一「何してるんですか源さん・・・」

神「納得したかの？」

一「・・・先にあがらせてもらう」

ガシッ！

神「逃がさんぞ♪」

一「離せ！　混浴なんてしてたまるか！！」

神「・・・そんなに嫌なのかの？」

一「・・・・」

神「妾はただ、家族として一緒に入りたかっただけなのじゃが・・・そうじゃよな、所詮妾は霊剣じゃしの・・・」

一「う・・・」

神「この世界にやって来て、一成が家族じゃと言ってくれて本当に嬉しかった。じゃからこそ、妾なりに家族として距離を縮めようと思ったのじゃが・・・」

一「うう・・・・」

神「すまんの、少し調子に乗り過ぎてしまった。すぐに出ていくからの・・・」

ハラリ・・・

一「ッ！？」

その時、彼女の目から涙が零れ落ちたのを俺は見逃さなかった。

一「神奈！」

気がつけば、俺は彼女を後ろから抱きしめていた。

神「一成・・・？」

一「すまない、キミがそんなに真剣に思ってくれていたのに、俺はなんてひどい事を・・・本当にすまない・・・」

神「じゃあ・・・一緒に入ってくれるかの？」

一「ああ！」

神「一緒の布団で寝てくれるかの？」

一「ああ！」

神「抱きついて寝てもいいかの？」

一「ああ・・・？」

神「嬉しいぞ一成♪」

満面の笑みを浮かべる神奈。

一「か、神奈？　泣いていたんじゃ・・・」

神「ふむ、一成を騙せるとは、妾の演技もなかなかのものじゃな」

一「演・・技・・・？」

神「当然じゃ、妾があの程度の事で泣くわけがないじゃろ」

一「・・・・」

やられた、最初から彼女は俺に約束させるためにあんな事を・・・

神「さあ一成、約束は守ってもらうからの♪」

一「くっ・・・仕方ない。いくら誘導されたとはいえ、約束を違える様な真似は出来ん・・・」

俺は温泉に浸かり直した。当然隣には神奈。

神「見よ一成、星が綺麗じゃぞ」

一「そうだな」

神「・・・・」

一「・・・・」

神「・・・・平和じゃな」

一「ああ・・・」

神「じゃが、これから益々闘いは激しくなるじゃろうな」

一「闇の書・・・だったな。それに・・・また新たな介入者が現れるかもしれない」

神「なに、お主には妾がついておる。心配する事は何も無いぞ」

一「ふっ、そうだな。頼りにしてるぞ神奈?」

神「うむ!」

一「（・・・こういうのもいいかもしれないな）」

神奈と二人で星を眺めながら、俺はそんな事を考えていた・・・

神「気持ちよかったの一成」

一「ああ」

神「それに・・・あんな事も出来たしの♪」

一「誤解される様な言い方は止せ。体を洗っただけだろう」

神「（なのは達に話せばどうなるか・・・楽しみじゃの）」

スッ・・・

部屋に戻ると布団が敷いてあった。恐らく、俺達が温泉に入っている間に敷いてくれたのだろう。

一「・・・・」

ありがたい。ありがたいのだが・・・

一「・・・なんで一組しかないんだよ」

そう、何故か布団は一組しか敷かれていなかった。ご丁寧に枕は二つ。枕元のティッシュボックスの存在は謎だが、気にしてはいけない気がする。

神「うむ、流石じゃ女将」

そうか、これを準備したのは源さんか。なんのつもりだあの人？

一「ん？」

部屋の机に手紙が置いてあった。その横には小ビン。

一「なになに・・・」

『サービスは楽しんで頂けたでしょうか？　それでは、旦那さま、これを飲んで頑張ってくださいね♪』

ビンのラベルには『どんな人でもこれで一発!!　超マムシドリンク』の文字。

一「・・・・・」

俺は無言でビンを掴み、部屋の窓を開け

一「ふんっ!!」

勢いよく空の彼方に放り投げた。

神「どうしたんじゃ一成?」

一「なんでもない。それより、神奈はその布団で寝てくれ。俺は適当な場所で・・・」

神「何を言っておる?　一緒に寝ると約束したではないか」

一「・・・本気か?」

神「もちろんじゃ」

一「はあ・・・わかったよ」

観念して布団に横になると神奈もそれにならう。

神「一成～～♪」

ギュッ

一「どうした？」

神「なんでもないぞ♪」

一「そうか・・・？」

温泉での言葉通り抱きついて来た神奈だったが、幸せそうなのでそのまま好きにさせる事にした。

一「（俺なんかに抱きついても暑苦しいだけだろうに・・・もしかして、何かに抱きついてないと寝れないとか？）」

抱き枕でも買ってあげた方がいいだろうか？

一「む・・・」

そんな事を考えつつ、俺はゆっくりと意識手放した・・・

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

神奈ＳＩＤＥ

神「一成」

一「・・・・」

神「寝てしまったか」

起こさないように様子をうかがうと、瞼は閉じられていた。

神「すまんの一成、妾の我儘に付き合わせてしまって。温泉での涙は演技じゃったが、あの時の言葉は本心じゃからな」

霊剣と主。そのほとんどは利用し、される関係でしかない。しかし、一成は違う。この優しき主は妾を利用しようとした事は一度も無い。それればかりか、霊剣である妾をまるで本物の人間であるかのように扱ってくれる。

だからこそ力になりたい・・・

だからこそ一緒にいたい・・・

だからこそ・・・心の底から惚れてしまった。

神「本当に変な主じゃよ、お主は・・・」

一「ん・・・・」

眠り続ける愛しき主にそっと口づけをする。

神「こ、こうでもせんとお主と出来そうにないからの／／」

一「・・・・」

神「いつか・・・お主の方からしてくれる事を願っておるぞ・・・」

もう一度一成の寝顔を見つめ、妾は目を閉じた・・・

神奈ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＩＮ　ＳＩＤＥ

一「お世話になりました」

源「またのお越しをお待ちしております」

神「妾はここが気に入ったからの、近い内にまた世話になりに来るぞ」

源「うふふ、ありがとうございます。どうやら、サービスがずいぶんお気に召したようで」

神「うむ！　最高じゃったぞ♪」

一「・・・言っておくが、もしまた来る事があってもあのサービスは受けんぞ」

神「なん・・・じゃと・・・・」

源「あらあら、照れなくてもいいじゃないですか旦那さま」

この人の中で、俺と神奈は夫婦として決定なんだな・・・

？「ああ！　どうして別れなくてはいけないんだ！？」

一「ん？」

あまりにも悲痛なその声に、思わず目を向けると

住「私もキミと別れたくない！　しかし・・・私には帰る場所があるんだ！！」

男性「だったら・・・だったら俺も付いて行く！！」

住「し、しかし！」

男性「頼む！　もう俺の目にはあなたしか見えないんだ！！」

住「ッ！？・・・わかった。ともに進もう、茨の道を！！」

男性「住谷さん！！」

住「まっつん！！」

住谷さんと男性が熱い抱擁を交わしていた。

神「・・・なんじゃあれは？」

一「（あれ？　確か住谷さんは一人で来たんじゃ？　だったらあの男性はいったい・・・）」

神「それでは、帰るかの一成」

ギュッ

一「神奈・・・なんで腕を？」

神「よいではないか。妾達は夫婦なんじゃから」

一「まあ、神奈がそれでいいんなら別にいいが」

神「それでこそ一成じゃ♪」

結局、帰宅するまで神奈は腕を離そうとはしなかった・・・

第九話　余計な所で運を使ったら後でとんでもないしっぺ返し来るぞ（後書き）

作「帰ぇって来たぞ、帰ぇって来たぞ～～～！！」

一「お前何してたんだよ？」

作「大変だったんだぞ？　テスト勉強したり、アイドルをプロデュースしたり、聖杯戦争に参加したり、バルドナドライブを停止させたり」

神「テスト以外全部ゲームじゃろうが！！」

天「遊んでただけでしょう？」

作「失礼な！　小説の為に勉強してたんだぞ！　台詞回しとか武器とか技とか・・・」

刹「下手な言い訳だな」

作「キャス狐最高～～～！！　結婚してくれ～～～！！」

一「やれやれ、とうとう湧いたか・・・」

神「手遅れじゃな」

天「神奈、それは違いますよ？　元々手遅れなんですから」

刹「そうだな。今さらどうなろうと変わりは無い」

作「そうそう、アンケートもかなりの方に投票して頂いたぞ」

一「いきなり話を変えるな・・・まあ、確かに前回に比べるとかなり増えたな」

神「それだけこの小説を読んでくれている方がいるという事じゃな」

天「そうですね、少なくとも今現在、３６２人の方には気に入って頂けていると思いますよ」

刹「なんだその数字は？」

天「この小説をお気に入り登録してくださっている方の人数です」

作「今の所、ストーリーは全員オリジナルご希望で、オリキャラは１番が今の所一番人気だな」

一「どうなるんだろうなオリキャラ」

作「とりあえず、俺の考えたオリキャラはお前より強くするぞ」

一「え？」

作「だって、お前永遠神剣の技しか使えないだろ？　だから、もっと色々出来る様にするつもりだ」

一「マジかよ・・・」

作「ちなみに、ストーリーがオリジナルになった場合、オリ敵もラスボスとオリキャラにボコられる噛ませ犬的な雑魚キャラの二人を

出す予定だ」

天「一成様より強かったら主人公変わってしまうでしょう！？」

作「大丈夫大丈夫。最終的に一成もパワーアップさせるから」

刹「そうなのか？」

作「じゃないと恋姫の小説に繋がらないからな」

一「さて、近況報告も終わったし、贈り物報告会に移るか」

神「朝凪　夜風様に三味線を頂いたぞ」

一「三味線の皮って、確か猫の腹を使ってたんだよな」

天「お詳しいですね」

一「作者がやっていたゲームに少し出て来てな」

刹「なんのゲームだ？」

一「確か・・・魔装機神だったか？」

神「ところで、誰か弾けるのかの？」

一「無理だ」

天「私もです」

神「妾も、琴なら弾けるのじゃが・・・」

刹「我は弾けるぞ」

一・神・天「「「え？」」」

刹「とあるアニメに触発されてな、いろんな楽器に手を出しているのだ」

一「アニメって・・・」

天「次です、名無しの権兵衛様から作者宛てにアイギスを頂きました」

作「ウホッ！　いい防具！！」

天「作者以外が使おうとすると放電するそうです」

作「はっはぁ！　これならお前達も手が出せまい？」

一「そうだな。どうしようもない」

作「これで俺が何をしようと・・・ぐふふ」

一「ああ、金輪際お前には絡まないよ」

作「え？」

天「そうですね。あれほど強力な防具を着けられては手の出しようがありませんし」

神「放っておくのが一番じゃな」

作「ちょ、ちょっとまてよ。そんなあっさり・・・」

刹「なんだ？　せっかく我等の暴力から解放されたのだからもっと喜んだらどうだ？」

作「それはそうだが・・・」

一「それじゃあ、今回はこの辺で」

天「また次回にお会いしましょう」

ポツン・・・

作「・・・何この放置プレイ？」

第十話　突発的な出来事で人の有難味がわかる（前書き）

ちくしょう！　また落ちた！！　この憤りを小説にぶつけてやる！！

第十話　突発的な出来事で人の有難味がわかる

コンコン

一「入るぞ、天音」

ノックをし、部屋に入ると、天音が力無くベッドに横たわっていた。

天「あ、一成様・・・」

一「いいから横になってろ」

おもむろに起き上がろうとするのを制し、ベッド横の椅子に腰かける。

天「すみません・・・」

いつもなら学校へ行っているはずの俺が何故天音の部屋にいるのか？　それは今日の朝の出来事が発端だった・・・

≪ぽ～～～っ・・・≫

≪お早う天音≫

≪・・・・≫

≪天音？≫

≪・・・・はっ！　一成様、お早うございます≫

≪どうしたんだ？　なんだか妙に頬が赤いが・・・≫

≪な、なんでもありませんよ。すぐに朝食の用意を・・・≫

フラッ

≪おっと≫

ガシッ

≪あ・・・≫

≪やっぱり様子が・・・って！　凄い熱じゃないか！？≫

≪大丈夫です・・それよりも朝食を・・・≫

≪そんなのはいいから、早く部屋に戻って横になるんだ≫

≪で、ですが・・・≫

≪い・い・な？≫

≪は、はい・・・≫

・・・・・

一「・・・というわけで、天音の看病のために俺は学校を休んだというわけだ。神奈はすでに家を出ていたから今は俺と天音だけだな」

天「あの、一成様？　どなたとお話しされているのですか？」

一「状況説明は大事だからな。それより調子はどうだ？」

天「少し・・・楽になりました」

一「そうか、よかった」

朝方より少しだけ元気を取り戻した様子に安堵する。それと同時に彼女に対して申し訳ない気持ちが湧いて来た。

一「・・・すまない、天音」

天「え？」

一「キミがここまで体調を崩していたのに、俺は全く気付けなかった。ただでさえ家事の負担があったのに・・・自分が情けないよ」

天「いえ、お気になさらないでください（多分、お二人が旅館に泊まりに行っている間に、あまりにも寂しくなって一成様のお部屋に勝手に侵入して、一成様の温もりを少しでも感じたいからと下着姿でお布団に包まっていたのが原因でしょうけど・・・言えませんね）」（汗）

とにかく、彼女にはしっかり療養してもらわないといけない。そのためにも・・・

一「よし、今日の家事は俺が全てやるよ」

天「そんな、一成様のお手を煩わせるわけには・・・ゴホッ、ゴホッ・・・」

一「こんな時くらい素直に甘えろ。俺達は家族なんだ、迷惑くらいかけて当たり前だろ？」

天「一成様・・・そうですね、お願いしてよろしいでしょうか？」

一「ああ、任せてくれ」

とりあえず、まずは洗濯でもするか。

天「あ、一成様。洗濯物はご自分のだけで私と神奈のは置いておいてください」

一「おいおい、だから遠慮は・・・」

天「い、いえ・・・遠慮とかではなくてですね」

一「だったらどうして？」

天「その・・・し、下着はさすがに恥ずかしいです／／」

一「なんだって？」

天「と、とにかく、お願いします」

一「まあ、そこまで言うならそうするけど」

天「ほっ・・・」

一「とりあえず、ササッと済ませて来るから・・・ちゃんと寝てろよ？」

天「クスッ、心配性ですね一成様」

一「大切な人を心配するのは当たり前だろう」

ボンッ！

俺の一言に天音の顔がさらに赤くなり、頭からは煙が立ち上り始めた。

一「うお！？　ど、どうした天音？」

天「（一成様が私の事を大切って。これってもしかして・・・告白！？　ど、どうしましょう、とにかくお返事を・・・・ってなんて答えればいいんでしょうか？　ううん、何回も妄想したシチュエーションですのに、いざ本番になると何も思い浮かばないなんて・・・）」（熱の所為で色々ネジがぶっ飛んでいる）

一「（返事も出来ないくらいつらいのだろうか）」

これ以上ここにいては彼女を辛くするだけだ。そう思い、俺は部屋を後にした。

天「（よ、よし！　天音行きます！！）か、一成様！　わ、わた、私も一成様の事が！・・・ってあれ？」

・・・・・

一「よし、後は干すだけだな」

洗濯機から洗濯物を取り出し、庭に向かう。

一「ん？　何か忘れている様な・・・」

いざ干そうとした時に、ある事を思い出す。

一「・・・そうだ、干す前にしわ伸ばしするんだったな」

洗濯物を持ち、天音のやり方を見よう見まねで実践する。

一「確か左右に引っ張って・・・」

パンッ！　パンッ！！　パッ・・ビリッ！！！

一「・・・やってしまった」

シャツは綺麗に二つ裂けていた。どうやら力を入れ過ぎたようだ。

一「やれやれ、これじゃあ干す前に洗濯物が無くなってしまうな」

二枚目のシャツを手に取り、加減をしながらしわを伸ばしていく。

一「（そういえば、冷蔵庫にリンゴがあったよな。これが終わったら持って行ってあげよう）」

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

天音ＳＩＤＥ

天「うふふ、一成様ったら」

窓からは四苦八苦しながら洗濯物を干している一成様が見える。先程もシャツを破いてしまっていた。表情には出ていないが、きっと慌てているはずだ。

天「ああ、私が元気ならすぐにあそこに行って二人で家事を行う仲睦まじい夫婦の雰囲気を味わえる所でしたのに！・・・って、私が元気だったら一成様はあそこにはいませんよね」

いけない、熱の所為で思考が変だ。（ずっと前からすでに変）

天「それにしても、暑いですね。汗で寝巻がぐっしょりです。気持

ち悪いですし、体でも拭きましょう」

一成様が置いて行ってくださったタオルを手に取り、ハッとする。

天「・・・これは、一成様に体を拭いて貰えるチャンス！？」

そうだ、お優しいあの方の事。きっと嫌な顔せずに引き受けてくれるだろう。

天「それで、私の体を拭いている内に一成様は・・・」

ポワワ～～ン・・・・

天「あの、一成様。体を拭いて貰ってよろしいでしょうか？」

一「ああ、もちろん」

天「では準備しますね」

スルスル

一「・・・・ゴクッ」

天「一成様？　私の背中に何か付いていますか？」

一「い、いや、なんでもない！！　ただ、天音の背中が綺麗だったからつい・・・」

天「うふふ、ありがとうございます。では、お願いしますね」

一「あ、ああ・・・」

ピトッ

天「ンッ・・・！」

一「ど、どうした？」

天「すみません、くすぐったくて。お気になさらず続けてください」

一「わ、わかった・・・」

ゴシゴシ

天「ん・・はあ・・・」

グイグイ

天「んあ・・・んん・・・・・」

一「ドキドキ・・・」

ギュッギュッ

一「・・・お、終わったぞ天音」

天「ありがとうございます。それでは・・・前もお願いしますね」

一「なあ!?」

クル

一「プルプル・・・」

天「一成・・様・・?」

一「あ、天音ぇ!」

ギュッ!!

天「きゃあ!?　か、一成様!?」

一「天音、俺・・・俺・・・・・!!」

天「一成様・・・いいですよ。ただ・・・・優しくしてくださいね？」

一「天音～～～～～!!」

天「あ～～れ～～～～」

・・・・・・・

天「・・・・なんて事になったりしちゃったりするかも♪」（もう一度言うが、熱の所為で色々ネジがぶっ飛んでいる）

コンコン

一「天音?　起きてるか?」

天「ひあ!?　か、一成様!?」

一「どうした?　そんな声出して」

天「な、なんでもありません」

一「そうか、とりあえず入るぞ」

ガチャリ

一成様がお部屋に入って来た。手にはリンゴが乗ったお皿。

一「ほらこれ、食欲があるなら食べてくれ」

天「あ、ありがとうございます」

どうしよう。こんなチャンス、もう二度と巡って来ないかもしれない。

天「（ファイトです私！）か、かかか一成様！！　お、おね、おねがががが・・・」

一「落ち着け天音。何言ってるかさっぱりわからんぞ。ほら、深呼吸して」

天「スーー・・・ハーーーー」

一「落ち着いたか？　それじゃあもう一度言ってくれ」

天「あの・・・ですね。私、汗をたくさんかいてしまってですね・・

・拭きたいんですけど・・・」

一「ああ、さっきタオルを持って来ておいてよかったな。それを使ってくれ」

天「それで・・・その・・・・一成様に拭いて貰いたいな～～～なんて・・・」

一「俺？」

天「駄目・・・でしょうか？」

一「いいぞ、拭いてやるよ」

天「ありがとうございます（よ、よし！　これで後は・・・）」

計画は完璧だった。しかし、私は重要な事を忘れていた。そう・・・相手はあの一成様なのだという事を・・・

一「それじゃあ、上を脱いでくれ」

天「ぬ、脱ぐ！？」

淡々と言う一成様。それとは対照的に大慌てする私。

一「そうしないと拭けないだろ」

天「そ、それはそうですが」

一「早くしないと余計熱が上がるぞ？」

天「ううん、わかりましたぁ」

スルスル

一「・・・・」

天「（み、見てる・・・一成様が私の背中を～～～）」

ピトッ

天「ンッ・・・！」

一「どうした？」

天「す、すみません、くすぐったくて。お、お気になさらず続けてください」

一「わかった・・・」

ゴシゴシ

天「ん・・はあ・・・」

グイグイ

天「んあ・・・んん・・・・」

一「・・・・」

ギュッギュッ

天「（こ、これは・・・刺激が強すぎです！！　一成様は全然気にしてなさそうですし、うう・・・こんなはずでは）」

一「・・・やっぱり拭き難いな。天音、下着も外してくれ」

天「ふえ？」

一瞬、一成様の言葉が理解出来なかった。え？　今下着って・・・

一「いや、だから下着を・・・」

天「・・・・な、なななな何でですか～～～～！？」

一「隠れている部分も拭かないといけないだろ？　他意は無い」

一成様の目は本気だ。そうだ、この方は頼まれた事や決めた事は全力でやり遂げる方だったのを忘れていた。

一「キミにはいつも助けてもらってばかりだからな。恩返しというわけではないが、しっかり取り組ませてもらうぞ」

天「（そ、そんな澄んだ目で見ないでください・・・）」

その瞳に負け、私はゆっくりと下着を外した。込められていた胸が解放され、大きく弾む。

天「ぜ、絶対見ないでくださいよ！！」

一「見ないと背中拭けないだろ」

天「せ、背中ならいいですけど」

フキフキ

天「ふあ！？」

一「・・・よし、これで背中はオッケーだな」

天「はあっ、はあっ・・・あ、ありがとうございました」

一「それじゃあ俺は外に出てるから、終わったら呼んでくれ。さすがに前を拭くわけにはいかないからな」

天「は、はい・・・」

パタン

一成様が出て行ったのを確認し、私はタオルを手に取った。

天「・・・・どうしてこうなったんでしょう」

・・・・・

天「ごちそうさまでした」

一成様が持って来て下さったリンゴを食べ、再び横になる。

一「まだ何か食べるか？」

天「いえ、もう充分です。ありがとうございました一成様。とても美味しかったです」

一「俺は切っただけだよ」

天「クスッ、一成様が私の為に用意してくださったという事が重要なんですよ」

一「？　まあ喜んでもらえて何よりだ」

心底不思議そうな一成様。相変わらずの鈍感っぷりに思わず笑みがこぼれる。

天「・・・ふわ・・・ぁ・・・・」

一「ん？　眠いのか？」

天「か、一成様。女性の欠伸を見るなんてデリカシーが足りませんよ」

一「すまん」

視界がぼやける。本格的に眠くなって来た。

天「一成様、すみませんが眠らせて頂きます」

一「ははっ、いちいち断らなくていいよ。ゆっくり寝てくれ」

天「はい。それで・・最後にもう一つお願いが・・・」

一「なんだ?」

天「手を・・・手を握っていてください。私が眠るまででいいんです」

一「眠るまでなんて言わないよ。俺はずっとここにいるから」

ギュッ

天「あり・・が・・・とう・・・ございい・・・・・」

右手に一成様の温もりを感じつつ、私はゆっくりと意識を手放した・・・

一「お休み天音・・・」

・・・・・・

天「ん・・・・」

徐々に意識が覚醒して来る。確か私は・・・

ギュッ

天「え？」

寝る前と同じく、右手に感じる温もりに目を向ける。

一「す～～す～～～」

天「か、一成様？」

そこには、私の手を握りながら船を漕いでいる一成様がいた。

≪眠るまでなんて言わないよ。俺はずっとここにいるから≫

天「まさか・・・本当にずっと私の手を？」

トクン・・・

胸が温かい。あまりの嬉しさに涙が出そうだ。

天「本当に・・・どこまで優しいんですかあなたは？　おかげでますます好きになってしまったじゃないですか・・・」

一「ん・・・」

天「私は幸せ者ですね。こんなに優しくて素敵なマスターに出会えたのですから」

一「ぐ～～」

天「これからもずっと、お傍にいさせてくださいね。愛しています、マイ・マスター・・・／／」

天音ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＩＮ　ＳＩＤＥ

？「・・・様・・・り様」

一「ん・・・」

天「一成様。起きてください」

一「天音？　俺は・・・」

天「私の手を握ったまま眠っていましたよ」

そういえば、天音が眠ったすぐ後に俺も眠くなって・・・

天「素敵な寝顔でしたよ」

一「（俺の寝顔なんて見てどこが面白いんだ？）」

ピンポ～ン

来客を知らせるチャイムが鳴り響いた。

天「どなたか来たみたいですね」

一「見て来るよ」

部屋を出て玄関に向かう。

一「はい、どちら様・・・」

アリ「やっほ～～、兄様～～」

玄関を開けると、いつものメンバー（なのは、フェイト、アリシアちゃん、アリサ、すずか）が立っていた。

一「みんな・・・どうしたんだ？」

な「天音さんのお見舞いに来たんだよ」

そういえば、学校に連絡した後、なのはにも休む事を伝えていたんだったな。

一「そうか、ありがとう。天音も喜ぶよ」

フェ「天音さん・・・大丈夫？」

一「今日一日寝たおかげでだいぶ元気になったみたいだ」

す「よかった～～」

ア「それで、会ってもいいの？」

一「ああ、とりあえずみんな入ってくれ」

アリ「お邪魔しま～す」

五人を連れ、天音の部屋に戻る。

天「一成様、どなたでしたか？」

一「天音、キミに見舞いだ」

天「え？」

な・フェ・アリ・ア・す「「「「「こんにちは～～」」」」」

天「え？　どうしてあなた達が？」

突然の来訪客に戸惑いの声をあげる天音。

な「一成君に教えてもらったんです。それで、みんなでお見舞いに行こうって」

す「これ、みんなでお金を出し合って買ったんです。後で食べてください」

すずかの持っている袋には果物がたくさん入っていた。

天「みなさん・・・ありがとうございます」

？「今帰ったぞ～～」

一「あの声は・・・神奈か？」

天「いったい、今までどこに出かけていたのでしょうか・・・」

ガチャッ

神「おお！　やはりなのは達じゃったか。玄関に見慣れない靴があったからもしやと思ったが、当たりだったようじゃな」

フェ「こんにちは神奈さん」

神「うむ・・・ところで、なぜ皆天音の部屋にいるんじゃ？　それに天音よ、寝とらんで茶くらい出さぬか」

天「・・・あなたって人は・・・」

一「神奈、実はな・・・」

・・・・

神「なんじゃ、風邪かの。ならばいい薬があるぞ」

天「なんですか？」

神「これじゃ！」

神奈取り出したのは酒瓶だった。

神「酒さえ飲めば大抵の病は治るもんじゃ」

ア「あ、天音さんにお酒はまずいんじゃない？」

一「・・・アリサの言う通りだ。却下」

神「むう・・・」

アリ「ねえねえ、なんで天音さんにお酒は駄目なの？」

フェ「すぐに酔っちゃうとか？」

な「あはは、それだけならいいんだけどね・・・」

フェ・アリ「「？」」

天「どうしたんですかみなさん？　生憎、私はお酒を飲むと記憶が飛んでしまうのでわかりませんが、何かあったんですか？」

す「・・・知らない方がいいと思いますよ」

天「？」

なのは達の見舞いを受けた天音は、翌日すっかり元気を取り戻し、楽しそうに洗濯物を干していた。

第十話　突発的な出来事で人の有難味がわかる（後書き）

作「え～、いかがだったでしょうか？　第十話改め、天音の妄想劇場は？」

天「違います！　あれは全て熱の所為です！！　私はあんなふしだらな妄想はしません！！！」

神「じゃが、普段はしておるのじゃろ？」

刹「我が君の告白か・・・・断言しよう、ありえないと」

作「一成と天音の温度差に注目して読んでもらえたら面白いと思うぞ」

神「しかし・・・いくら天音の体が魅力的では無いとはいえ、あそこまで反応せんとは・・・一成のヤツ、大丈夫なのか？」

天「・・・いくらなんでも酷すぎませんか今の？」

作「もちろん、あいつだって男だからな。ただ・・・今回は頑張り過ぎたんだ」

刹「よいではないか。我が君の方から触れてもらえたのだから」

天「そ、そうですね。これで一歩リード・・」

神「妾は抱きしめられたぞ・・・しかも裸で」（前回参照）

天「・・・・」

刹「次は我か。どうなるか楽しみだな」

神「ところで、一成はどうした？」

作「今回はお休みだ。こういう会話、あいつがいると出来ないだろ？」

作「というわけで、今回は俺が贈り物報告会の開催を宣言するぞ」

神「清浦刹那様から一成にイクスブラウ。天音にガンダムＤＸ（Ｇファルコンとビット付き）。妾にガンアーク。刹那にはバスターアーク。作者にグレイブアークを頂いたぞ」

作「ＡＣＥの機体だな」

天「そういえば、ＰＳ３で新作が出るんでしたよね」

刹「店頭ムービーを見たが、かなり期待できそうだな」

神「お主は買わんのか？」

作「・・・ＰＳ３持ってない」

天「朝凪　夜風様からはマルミアドワーズを頂きました」

神「なんじゃそれは？」

天「フランス版のアーサー王伝説でアーサー王が使っていた剣だそうです。作中ではエクスカリバーは部下に貸し与え、さらにエクスカリバーでは斬る事が出来なかった敵の鎧をこの剣で斬ったそうです」

刹「おそらく、前回の後書きでＦａｔｅの事を話したからわざわざ贈ってくれたのだろうな」

作「後書きをしっかり読んでくださっている証拠だな。そんな朝凪夜風様に痺れる憧れるぅ！！」

刹「・・・夜風殿、流してくれ」

刹「緋水殿からは仙豆にムチ（対作者専用）と作者宛てにプレゼントボックスだ」

作「おほっ！　マジで！？　いやあ、緋水様には美由紀の件で恨まれてると思ったがそうでもなかったみたいだな」

神「何が入っておるのじゃ」

作「早速開けてみるか」

チュドーーン！！

作「ハブ・ア・ナイスデェェェェェェイ！！！」

・・・キラッ☆

天「ば、爆発しましたよ！？」

刹「やはりまだ恨まれているようだな」

天「作者がいなくなったので、最後も私が。二次元最高様から刹那に一成様と夢で会える券。私に一眼レフカメラ。神奈に一成様の姿がプリントされた抱き枕カバー。作者には毒入・・・健康ドリンクを頂きました」

刹「おお、これはいい（夢でなら誰にも邪魔される事は無い。これで我が君と存分に・・・）」

天「これでいつでも一成様を盗さ・・・撮影できますね。アルバムがまた増えそうです」

神「うむ、市販の抱き枕は味気ないからの。これがあれば・・・くくっ」

第十一話　子どもらしくで行こう（前書き）

思いの外時間がかかってしまった。まさかここまで手間取るとは、
刹那・・・扱いにくい娘！！

第十一話　子どもらしくで行こう

ピピピピピ！

一「ん・・・・」

目覚まし時計の音で目を覚ます。今日は土曜日。本来なら鳴らないはずだが、どうやら間違えてセットしてしまった様だ。

一「・・・たまには起きるのもいいか」

部屋を出て洗面所に向かう。そして手早く顔を洗い、歯を磨き、リビングに向かう。

一「おはよう」

シーン・・・・

一「天音？　神奈？」

シーン・・・・

いつもならいるはずの二人の姿が無い。不思議に思いつつ、喉が渇いたので冷蔵庫を開け、牛乳を取り出す。

一「（神奈はともかく、天音が寝坊するのも珍しいな。まあ休日だし、気にする事でもないか）」

？「おはよう」

飲み終わると同時に後ろから声をかけられた。どうやら起きて来た様だな。

一「ああ、おは・・・」

振り向いた俺は固まってしまった。何故なら・・・

少女「ふむ、いつもの我が君もいいが、その姿の我が君にもそそるものがあるな」

目の前にまったく見覚えの無い少女が立っていたからだ。俺と同じ銀色の髪に、赤と青のオッドアイ。真っ白なワンピースに身を包んでいる。年は・・・七歳くらいだろうか？

一「キミは誰だ・・・？　それに、なぜこの家に？」

少女「実はな・・・」

グゥ～～～！

一「・・・・・」

自重しろ俺の腹！

少女「ははは、どうやら腹が空いている様だな。しかたない、他ならぬ我が君の為だ、我が作ってやろう」

一「え？」

少女「ベーコンエッグでいいだろう？　ああ我が君、コーヒーメーカーをセットしてくれ。それが終わったらテレビでも見ていてくれて構わない」

一「あ、ああ・・・」

言われるがままにコーヒーメーカーをセットし、ソファに腰掛ける。テレビをつけると、ニュース番組が流れだした。

一「（・・・って、何あの子の言う通りにテレビ点けてるんだ俺？）」

少女「♪～～♪～～～」

少女は鼻歌を歌いながら料理をしている。その手際は神奈以上、天音未満といったところか。

一「（この子は何者だ？　敵意は無いから心配はないだろうが。それにこの既視感・・・俺はこの子を知っている？）」

少女「・・・よし、出来たぞ我が君」

テーブルにはパンとコーヒー。そしてベーコンエッグが並んでいた。

一「・・・・」

少女「どうした？　食べないのか？」

一「あ、ああすまない。頂きます」

少女「うむ、たんと召しあがってくれ」

少女は俺の向かいに座り、まるで微笑ましい物でも見るかのような表情で俺を見つめていた。

少女「こうしているとまるで新婚夫婦だな。どうだ我が君？　このあとベッドで夜の共同作業でも・・・」

一「ブバッ！」

少女のとんでもない発言に、思わず含んでいたコーヒーを吹き出す。その様子を見た少女はニヤニヤしていた。

少女「ふふ、冗談だよ。この姿では我が君を満足させる事は出来なそうだからな」

一「この姿？」

少女「まだ気付かないのか？　我だよ我」

一「いや、そんな某サギみたいな言い方じゃわからな・・・」

待てよ、この子はさっきから自分の事を我が君と呼んでいる。そんな呼び方をするのは知っている限り一人しかいない。

一「もしかして・・・刹那か？」

少女「やれやれ、ようやく名を呼んでくれたな。そうだ。我は刹那だよ」

俺の答えに少女・・・刹那は嬉しそうに微笑んだ。

一「とりあえず一言言わせてくれ」

刹「何だ？」

一「・・・どうしてこうなった」

刹「我が君よ、ここ最近ずいぶんお楽しみのようだな？」

一「お楽しみ？」

刹「何人もの少女とデートをしていたじゃないか。相変わらずこの世界でも絶好調の様だな」

一「だからデートじゃなくて・・・って、何で刹那が知ってるんだ？」

刹「忘れたのか？　神奈と天音の記憶は我も共有しているのだぞ？」

一「そうだったな。本編で出すのも久しぶりだから作者自身忘れて

いたようだ」

刹「本編？　作者？　何を言ってるんだ我が君？」

一「え？　俺何か言ったか？」

刹「・・・いや、何でもない」

一「それより、何でキミが？　俺は神剣解放をした憶えは無いし、それに・・・その姿は一体・・・・」

刹「悦楽と戦った時の我が君のマナの残滓が残っていてな、それを使って自ら解放したわけだが・・・いかんせん量が少なくてな、この姿になるのが精いっぱいだったのだ」

確かに、あの時は全力を出す為にマナ結晶も砕いたし、周囲からマナも吸収したおかげで俺のマナ総量はかなりのものになったが、まさかこんな事が出来るなんて・・・

刹「おかげで本来の力も発揮出来ん。まあ、一般人如きに後れは取らないだろうがな」

一「そうか。しかし、よく神奈と天音が了承したな」

刹「二人には夢の中でお願い（という名の実力行使）したら喜んで協力してくれたぞ」

一「なるほど。でも、そこまでして現れた理由って？」

刹「それが先程の話に繋がるわけだ」

一「さっきのって・・・なのは達と出かけた事か？」

刹「そうだ。他の娘とデートする我が君に我慢出来なくなってな」

一「えーと・・・つまり？」

刹「我ともデートしろ」

俺に向かって指をビシッと指す刹那。

一「・・・・・」

刹「さあ、さっそく出かけるぞ」

一「よし、落ち着こう。とりあえず纏めさせてくれ。えーっと、刹那は俺のマナの残滓を使って解放されたわけだが、量が少なくて完全な姿には戻れなかった。そして、そこまでした理由は俺とデートする為・・・・でいいのか？」

刹「さっきからそう言っているではないか」

一「・・・そこまでするか普通？」

刹「何を言う我が君。ただでさえ出番が少ない上に、最近神奈や天音に差をつけられている以上、なりふりかまってなどいられないの

だ」

一「差？」

刹「神奈とは温泉に行き、天音の看病をしていたじゃないか」

一「天音の看病は当然だろ？　神奈は・・・まあ、頼みこまれたし・・・」

刹「ならば我の頼みも聞いてくれるのが筋だろう？」

一「それは・・・・」

刹「駄目・・・なのか？」

一「ぐ・・・」

刹「うるうる・・・・」

一「・・・・・わかった」

刹「それでこそ我が君だ（我が君が『子ども』『上目使い』『涙』に弱い事は調査済だ。この姿なら全ての条件がそろう。ふっ、計画通りだ）」

一「それで、行きたい所はあるのか？」

刹「こういう時は男が決めるのではないか？」

一「・・・じゃあ昼になったら翠屋に行くか。いつもそうしてるし」

刹「わかった。ではそれまで一緒にテレビでも見ながら愛について語り合うか」

愛云々はさておき、先に解決しなくてはならない問題がある。

一「桃子さん達に刹那の事どう説明したらいいんだ？」

刹「そうだな・・・一日だけ預かった親戚の子でいいんじゃないか？」

一「なるほど。よし、それでいこう」

刹「ならば、我が君の事をお兄ちゃん（はぁと）とでも呼ぼうか？」

一「（はぁと）はいらん。というか、これってどうやって言葉にするんだ？」

刹「気にしたら負けだぞお兄ちゃん」

刹那と共にソファに腰掛けテレビを見る。やがて昼前になったので、俺達は予定通りに翠屋に向かった・・・

な「いらっしゃいませ！　翠屋にようこそ♪」

一「なのは、手伝いか？」

な「あ、一成君！　うん、そうだよ。と言っても、今日はなぜかお客さんが全然来ないからする事ないんだけどね」

桃「一成君いらっしゃい。あら？　後ろの子は？」

一「こんにちは桃子さん。この子はですね・・・」

刹「初めまして！　私は刹那っていいます！　いつもお兄ちゃんがお世話になってます！」

桃「初めまして刹那ちゃん。・・・それにしても一成君に妹がいたなんてね」

刹「いえ、私はお兄ちゃんの従妹です」

桃「あらそうなの？　それにしては随分似ているわね。特に髪の色とか」

刹「えへへ、よく言われます」

一「（・・・誰だあれは？）」

刹那のそのあまりにナチュラルな演技に、俺は開いた口が塞がらなかった。事実を知っている俺でさえ一瞬普通の少女の様に思ってしまう程だった。つーかえへへなんて普段絶対言わない！！

な「一成君・・・あの子・・・」

一「・・・刹那だ」

な「えぇ!?　ど、どうしてあんな姿に!?」

一「聞かないでくれ・・・」

な「う、うん（な、何があったんだろう?）」

なのはと話している間も、刹那と桃子さんの会話が聞こえて来る。

桃「あらそう。今日だけ一成君のお家に?」

刹「はい。だから今日はお兄ちゃんといっぱい遊ぶんです!」

桃「うふふ、刹那ちゃんは一成君が（素敵なお兄ちゃんとして）大好きなのね」

刹「はい!　私はお兄ちゃんが（男性として）大好きです♪」

な「・・・本当に刹那さん?」

一「言わないでくれ。不安になって来た・・・」

桃子さんはすっかり刹那の事が気に入った様だ。その証拠に、カウンターに腰掛けた刹那の前には頼んだ覚えのないケーキが置かれて

いた。

桃「お味はどうかしら？」

刹「とっても美味しいです」

桃「それはよかったわ。ならもう一ついかが？」

刹「本当ですか！？　やった～～～♪」

桃「うふふ、可愛い」

一「刹那・・・恐ろしい子！！」

な「ど、どうしたの一成君？」

一「いや、何故か言わなければいけない気がして・・・」

な「？」

その後、昼食を済ませ、俺達は翠屋を後にした。

刹「美味しかったなお兄ちゃん」

刹那の口調は元に戻っていた。なんだろう、このホッとした感じは？

一「何であんな喋り方を？」

刹「さすがにこの口調では違和感があると思ってな。ちゃんと少女に見えただろう？」

一「（・・・忘れよう。それが一番だ）」

刹「さて、次は何処に行こうかお兄ちゃん？」

一「腹ごなしに散歩でもするか？　それと・・もうお兄ちゃんって呼ぶ必要無いだろ」

刹「わかった（ふむ、我が君は『妹萌え』では無い様だな）」

思案顔の刹那を連れ歩き出す。とりあえず公園でも目指そう・・・

一「ふう・・・」

ベンチに座り息を吐く。園内には心地よい風が吹いていた。

刹「ただ歩くだけというのもいいものだな」

一「だろ？　俺はこうしてゆっくり時間を過ごすのが好きなんだよ」

刹「ふふ、我が君らしいな」

それっきりお互い無言になる。だが、居心地の悪さや気まずさは感じなかった。

一「（考えてみれば戦い以外で彼女と過ごす時間は初めてだよな）」

刹「（既に半日が経過した。これからどうやって我が君をベッドに誘い込むか・・・）」（実は諦めていなかった）

一「（出来ればこれからこういった時間を増やしてあげたいな。刹那だって大事な家族なわけだし）」

刹「（やはり積極的に行くべきか？　しかし、あまりに露骨過ぎると引かれる可能性が。・・・かといってさりげなく言っても我が君が気付くはずもない）」

一「（しかし、彼女の場合制約が多いからな。どうにかしてずっと神剣解放する方法は無いだろうか・・・）」

刹「（むう、長い年月を過ごして来たが、ここまで悩むのは初めてだ。いったい、我はどうすれば・・・）」

一・刹「「はあ・・・・」」

俺と刹那は同時に溜息を吐いた。

一「・・・そろそろ帰るか？」

刹「・・・そうだな」

そして、公園で充分まったりした俺達は帰宅するのだった・・・

一「もう夕方か、夕飯の準備しないとな」

天音がいない以上、俺が作るしかない。久しぶりだが・・・何とかなるだろう。

一「刹那、夕飯は俺が作るが、何か食べたいものあるか？」

刹「我が君の手料理か。とても魅力的だが・・・味わえそうにないな」

一「え？」

見れば、刹那の体は淡い光に包まれていた。

刹「どうやら時間切れの様だ。まあ、ここまでよくもったものだがな」

一「そうか・・・」

刹「そんな顔をするな我が君。我は楽しかったぞ。こんな穏やかな時間を過ごしたのは初めてだ」

一「・・・ああ、俺も楽しかったよ。また一緒に散歩しような？」

刹「うん・・・約束だ・・・・・」

刹那を包む光がさらに強くなる。そして・・・・

神「ふう・・・ようやく満足した様じゃな」

天「まさか夢の中にまで出て来るなんて。まあ、私が彼女の立場になっていても同じ事をするでしょうけどね」

光が収まったそこには、神奈と天音が立っていた。

天「あら、もうこんな時間？　急いで夕食の準備をしないと」

天音が慌ただしく動く。

一「いや、今日は俺が作るよ」

神「おお！　一成が作るのか。ならば妾も手伝ってやろう！！」

天「せっかくの一成様の手料理を台無しにする気ですか！　一成様、お手伝いならこの私が・・・！」

一「そうだな。じゃあ、二人とも手伝ってくれ」

神・天「「うむ！（はい！）」」

一「（今はまだ無理だが、いつかは刹那も一緒に・・・）」

遠くない未来、この輪の中に刹那が加わる。何故かそんな確信めいた予感があった。

・・・ちなみに夕飯だが、俺が神奈につきっきりだったおかげで何とか無事に完成した。調理中、何故か神奈はご機嫌で、天音は不満そうにしていた。

天「（くっ、まさか料理が出来ない事を逆手に取るなんて！）」

神「（ふはははは！　短所すら利用する・・・それが妾じゃ！）」

翌日・・・

ピピピピピ！

一「ん・・・・」

また間違えてセットしてしまった様だ。目覚ましを止め、布団から這い出す。

一「むう・・・」

いつもの様に洗面所で用を済ませ、リビングに向かう。

刹「おはよう我が君」

一「ああ、おはよ・・・う？」

そしていつもの様に刹那にあいさつを・・・って！？

一「どうして・・・」

刹「また一緒に散歩しよう・・・そう言ったのは我が君だろう？」

一「た、確かに約束したが・・・昨日の今日だろう？」

刹「細かい事は気にするな。さあ、今日も楽しもうではないか！」

マナは大丈夫なのか？　今日はどれくらい過ごせるのか？　聞きたい事は山ほどあった。

一「（・・・いや、そんな事は後でも聞ける。今はただ、刹那と過ごす時間を大切にしよう）」

刹「どうした？　置いて行くぞ我が君！」

一「（それに、こうして彼女の笑顔が見れるんだからな）」

俺は玄関に向かう刹那を追いかけた・・・

第十一話　子どもらしくで行こう（後書き）

刹「ようやく真のヒロイン登場だな」

神「何を言っておる。ヒロインは妾じゃろ？」

天「え？　私じゃないんですか？」

神・天・刹「「「・・・・・・」」」

一「三人とも何見つめあってるんだ？」

神「一成、この小説のヒロインは誰じゃ？」

一「俺に聞くなよ・・・」

刹「ところで、何故我だけ子どもの姿なんだ？　それに、何故刹那ＳＩＤＥが無かったのだ！」

作「だってよー、そんなほいほいやってたら神剣解放のありがたみというか、凄さが薄れるだろ？　ＳＩＤＥが無かったのは面倒・・・じゃなくて、単純に入れる場面が無かったからな」

天「今さらって感じですけどね。元の姿には何度も戻っている事ですし・・・」

作「普段出せない分思いっきりインパクトを残せるように結構無茶苦茶したからな。読者の方の反応が楽しみだ。・・・若干不安でもあるが」

神「そういえば今回の話で一つ思ったのじゃが、妾達の関係性が曖昧の様な気がするのじゃ」

天「確かにそうですね。その辺りをキッチリしておいた方がいいのではないですか？」

作「ああ、その点は俺も思ってたからな。A's編前にまたキャラ説明するつもりだからその時に書くよ」

刹「キャラ説明？　我のか？」

作「刹那はもちろんだが、日常編に出て来たサブキャラとかのも書こうとは思ってる。具体的にはラッシー君とかラッシー君とかラッシー君とか」

一「マジか・・・」

作「人気投票とかやりたいな。他にも読者の好きなシーンベスト10とか」

天「漫画じゃないんですからそんな事出来るわけないでしょう」

神「じゃな。それに、もしやったとしても参加してくれる人数などたかがしれておるじゃろうな」

刹「投票といえば、新キャラのアンケートはどうなった？」

作「多分日常編はあと3～4話くらいだから、もう少しで締め切りだな」

一「さて、どうなることやら・・・」

一「よし、贈り物報告会に移るぞ」

神「まずは緋水様からじゃな。ブルーアイズクッキーにブルーアイズパフェ。ブルーアイズケーキと・・・作者にはＦＦの召喚獣を頂いたぞ」

天「とても美味しそうですね。早速準備しますね」

刹「ん？　向こうで作者が召喚獣にズタボロにされているが・・・・気にするまい」

天「清浦　刹那様からは私宛てに一成様セットを頂きました」

一「・・・何だそれ？」

天「デフォルメされた一成様や一成様の色々な状態の写真集のセットです」

神「ぐぐ・・・なんと羨ましい」

刹「天音は清浦殿に気に入られているからな、まあ我も刹姉と慕われているがな」

神「・・・何じゃその勝ち誇った顔は？」

刹「ふふ、別に・・・」

刹「二次元最高殿からも天音宛てに我が君の写真集を頂いたぞ。どうやら前回の話は好評の様だな」

神「わからんもんじゃな。ただの妄想話じゃったろ？」

天「うう、言わないでください～～」

一「妄想？」

天「な、何でもありません！！」

一「えーっと、名無し様からは神奈と天音宛てに好きな人に一日だけ何でも言う事を聞いて貰える飲み薬を頂いたぞ」

神「これさえあれば・・・はっ！　いやいや！　こんな物に頼ってはいかん！！」

天「そ、そうですよ！　人の心を操るなんて・・・」

刹「だったら何故懐に仕舞っている？」

天「せ、せっかく頂いた物を捨てるわけにはいかないじゃないですか！」

神「そ、その通りじゃ！　他意はないぞ！」

刹「やれやれ・・・気をつけろよ我が君？」

一「？」

天「最後ですね。名無しの権兵衛様から作者宛てにエクスカリバーを頂きました」

作「おっしゃあ！　最強の剣に最強の防具が揃った！　今の俺ならお前らに勝つる！！」

一「面倒臭い」

作「ふふふ・・・これでも同じセリフが吐けるか？」

ブワ！！

刹「何だ？周りの景色が・・・」

作「これぞ『死の空間』！！　この空間内では俺に攻撃しないと嫌な記憶が抉り出される様になっているのだ！！」

一「なるほど、何もしなくても辛い目に遭うのは俺達だという事か」

神「ならば遠慮する事は無いの」

天「そうですね。正当防衛みたいなものですし・・・」

刹「向こうもやる気みたいだしな」

一・神・天・刹「「「「・・・・・・・・・・ニヤリ」」」」

作「お、おい・・・？　何で一斉に武器を持ってにじり寄ってくるんだよ？」

一「お前が言い出したんだろ？」

作「こういう時は一対一だろ！！　ちょっ！　やめてとめて！！アッーーーーーーーー！！！！」

・・・・・・

一「・・・というわけで、久しぶりに作者の断末魔で終わりましたとさ。めでたしめでたし・・・」

作「ちっとも・・・めでたく・・・な・・・・ガクリ」

第十二話　金や権力だけでは人の心は動かせない（前書き）

今回はプレシアの話ですが、ちょっと話の持って行き方が強引か？
そして最早オリキャラと言ってもいいかもしれない程の性格改変。
どうしてこうなった・・・

あと、お忘れかもしれませんが、この小説ではプレシアは若返っています。その事を踏まえてお読みください。

第十二話　金や権力だけでは人の心は動かせない

プ「ごめんなさいね一成。急に呼び出したりして」

放課後、フェイトからプレシアさんが俺に用があると聞いたので、マンションにお邪魔した。

一「いえ、気にしないでください。それで、話があるという事ですが・・・」

プ「ええ、あなたにお願いしたい事があるの」

一「お願いですか？」

プ「実はね・・・」

ピンポーン！

突如チャイムの音が鳴り響く。

プ「・・・はあ」

溜息と共にプレシアさんが玄関に向かう。その足取りは何故か重そ

うだった。

ガチャ

男「こんにちはテスタロッサさん。ああ！　今日もなんてお美しい！！」

玄関の先には大きな花束を持った男性が立っていた。年はおよそ三十台前半だろう。初めて見る人だ。プレシアさんに向け満面の笑みを浮かべている。

プ「またあなた？　毎日毎日よく来るわね」

男「愛しい女性に会いに行くのは男として当然でしょう？」

この口振り、どうやら知り合いのようだ。それにしてはプレシアさんの顔は不機嫌そうな気がするが・・・

男「いよいよ明日ですが・・・例の彼はまたいないようですね」

プ「そうね。けど、明日にはちゃんと会えるから問題は無いわ」

男「ふふ、そういう事にしておきましょう。まあ、その話はひとまず置いて・・・実は今から僕の家でパーティーがあるのですが、も

しよろしければテスタロッサさんにもぜひお越し頂きたく思いまして」

プ「結構よ。話はそれだけ？　用が済んだのならお引き取り願おうかしら。私は夕飯の準備で忙しいの」

男「それは残念。では、明日の夜を楽しみにしておきますよ。はーっはっはっは！！」

プレシアさんに花束を渡し、高笑いと共に男性は去って行った。・・・近所迷惑を考えて欲しい。

プ「ふう・・・見苦しい所を見せちゃったわね」

一「いえ、それより今の男性は？」

プ「そうね・・・何から話したらいいかしら・・・・」

プレシアさんの話に黙って耳を傾ける。

プ「彼と出会ったのは全くの偶然よ。彼は何処かの御曹司で、偶然この街に来ていたの。そこで私と出会って・・・その・・・・どうやら一目惚れされてしまったようなの」

一「一目惚れ？」

プ「どうやってかは知らないけど、この家を着き止めてね。それから連日のごとく今みたいに押しかけて来ては結婚しよう結婚しようってしつこいのよ。しかも私が聞く耳を持たないとわかると、今度はフェイトやアリシアに近づいて来てね。自分の良さを私に伝えて欲しいって。おかげで二人ともすっかり怯えちゃって」

一「・・・何ですって？」

静かな怒りが込み上げる。俺の友達に手を出そうするとは・・・・上等じゃないか。

プ「あらあら、あの娘達の名前を出すだけでそんな顔しちゃって」

一「当然です。俺の友達に手を出そうとする者は誰であろうと許しません」

プ「友達・・・ねえ」

一「プレシアさん？」

含みのある笑みに思わず聞き返す。

プ「何でもないわ。話を戻すけど、もちろん結婚する気なんてこれっぽっちも無いの。それでもあまりにしつこいから、つい言っちゃったのよ。『私には結婚を前提にお付き合いしている人がいる』ってね。そしたら彼、会わせろなんて言うのよ。多分、私が出まかせ

を言っているって気付いているんでしょうね。そして、その約束に日が明日」

≪それは残念。では、明日の夜を楽しみにしておきますよ。はーっはっはっは！！≫

一「・・・そうか。だからあんな事を」

プ「そう。そして、あなたへのお願いは今の話に関係しているの」

わからん。今の話のどこに・・・

プ「一成・・・私の夫になってくれないかしら？」

ガタン！！

アリ「ちょ、ちょっとフェイト！　押さないでよ～！」

フェ「ご、ごめんなさい・・・」

物音に目を向けると、部屋の入り口で重なって倒れている二人がいた。

一「フェイトにアリシアちゃん。そんなところで何してるんだ?」

フェ「か、一成・・・。これは、その・・・・」

プ「あなた達、聞いてたのね。全く・・・部屋にいなさいって言ったのに」

アリ「か、母様・・・」

気まずそうに目を背ける二人。とりあえず、彼女達を交えて話を進める事にした。

フェ「母さん、さ、さっきの話だけど。一成を夫にするって・・・!」

アリ「本気なの母様!?」

凄い勢いでプレシアさんに迫る二人。それを軽く流し、プレシアさんが口を開く。

プ「話を最後まで聞きなさい。私は夫のフリをして欲しいって言ってるの」

フェ・アリ「「・・・・え?」」

プ「やる事は簡単。明日の夜、私と一緒に彼に会ってくれるだけでいいの。お願いできるかしら？」

一「・・・理由はわかりました。けど、何で俺なんですか？　俺は子ども・・・」

プ「あら、本当のあなたは私の夫と言っても差し支えない筈じゃなくて？」

フェ「あ、そっか。一成って本当は大人の人だもんね」

アリ「？　どういう事フェイト？」

フェ「実はね・・・・」

アリ「・・・えぇ！？　本当に！？」

一「本当に俺でいいんですか？　演技なんて出来ませんよ？」

プ「心配しないで。口裏を合わせてくれれば後は私が何とかするから」

真剣な目のプレシアさん。そうだよな、せっかくまた娘と暮らせるようになったのに、いきなり現れた人間に邪魔されたくはないよな・・・

一「わかりました、夫役引きうけさせてもらいます」

プ「うふふ、あなたならそう言ってくれると思ったわ。ありがとう一成」

アリ「もう、人騒がせだよ母様！」

フェ「そ、そうだよ！　私、てっきり・・・」

プ「早とちりしたあなた達が悪いんでしょ？　それに、心配しなくても娘のお婿さん候補を母親が取るわけないでしょう」

アリ「そうだよね、兄様は私と結婚するんだもんね」

フェ「わ、私だって・・・！」

プ「あらあら、一夫多妻の国でも探しておこうかしら？　ねえ一成？」

一「・・・え？　すいません、考えごとしていて・・・何か言いましたか？」

プ「・・・・はあ」

溜息を吐かれてしまった。ついでにフェイトとアリシアちゃんは頬を膨らませていた。俺、何かしたか？

・・・・

気付けば、外は薄暗くなっていた。どうやら結構な時間を過ごしてしまった様だ。

一「それでは、明日の夜にまた来ますね」

帰る前にもう一度確認をする。が・・・

プ「いいえ、出来るだけ早く。そうね・・・昼前には来て頂戴」

一「え？　でも、会うのは夜ですよね？」

プ「あなたには夫になりきってもらわないといけないの。だから、自然な演技が出来る様に夜まで私と一緒に過ごしてもらうわよ」

一「（さっきと言ってる事が違う・・・）」

プ「幸い、明日は祝日。時間は取れるでしょう？」

一「わ、わかりました」

プ「待ってるわね」

アリ「バイバイ兄様。また明日ね～」

フェ「お休み一成」

一「ああ、お休み二人とも。それじゃあ失礼します」

マンションを後にする。そこでハタと気付く。

一「そういえば・・・・アルフは？」

・・・・

アル「・・っくしゅん！　ううう、風邪でも引いちまったかね？　さっさと買い物終わらして、帰るとしようか」

・・・・

そして翌日、元の姿に戻った俺に驚く神奈と天音に事情を説明し、再びマンションに向かった。

ピンポーン

アリ「は～い！　どちら様・・・」

一「おはようアリシアちゃん」

アリ「だ、誰・・・ですか・・・？」

元気よくドアを開けたアリシアちゃんが、俺の姿を見るなり固まってしまった。

一「俺だよアリシアちゃん」

アリ「もしかして・・・兄様？」

一「ああ、そうだよ」

アリ「すご～い！　ホントにフェイトが言ってた通りだ」

フェ「あ、おはよう一成」

アル「よ、よく来たね一成。話はプレシアから聞いてるよ」

一「おは・・・アルフ、何で顔を背けるんだ？」

アル「あ、あたしの勝手だろ！」

そう言って奥に引っ込むアルフ。どうしたんだ？

アル「（アイツは一成で、あの姿だって前に見ただろ。なのに、どうしてこんなにドキドキして・・・。まさか、本当にあたし・・・）

」

プ「いらっしゃい一成。どうしたの、そんな顔して？」

一「おはようございますプレシアさん。いえ、何だかアルフの様子が・・・・」

プ「あら・・・ふふ、アルフも可愛い所があるじゃない」

アル「ッ・・・・／／」

一「？」

プ「それじゃあ早速出かけましょうか。三人とも、留守番頼むわね？」

アリ「は～い」

フェ「いってらっしゃい。一成、母さんをよろしくね」

アル「も、もう行くのかい？　ま、まあ・・・どうでもいいけどね」

プ「あなたはもう少し素直になりなさいな」

アル「う、うるさいよプレシア！」

プ「ふふ・・・」

一「ちょっと待ってください。出かけるって？」

プ「あら、せっかくの機会だから楽しまないと損でしょう？　それとも、私とのデートは嫌かしら？」

一「そういうわけでは・・・」

プ「ならいいじゃない」

よくわからんが、プレシアさんの事だ、何か考えがあるのだろう。
だったら大人しく従った方がいいな。

一「わかりました、お付き合いします」

プ「ふふ、ありがとう。あなたのそういう所、好きよ」

こうして、何故かプレシアさんと出かける事になったわけだが・・・

一「・・・どうしてこうなった」

最近、この言葉を口にする事が多くなった気がする。

・・・・

アリ「いいな～母様。兄様とデートなんて」

フェ「うん。でも、今回は仕方ないよ。母さんをあの人から守るためだもん」

アル「・・・・はあ」

フェ「どうしたのアルフ？」

アル「な、何でもないよ！」

フェ「？」

・・・・

一「これからどうするんですかプレシアさん？」

プ「一成、あなたは私の夫なのよ？　さんは不要よ」

一「わ、わかりました。プレシア」

プ「敬語も駄目。怪しまれそうなところは徹底的に矯正するわよ」

一「・・・・わかった。これでいいのかプレシア？」

プ「まだ少し固いところがあるけど、まあ、いいでしょう」

美由紀さんの時もそうだったが、やはり慣れないな。

プ「それじゃあ改めて・・・行きましょうかあなた」

一「ああ、そうだな」

そうだ、今の俺はプレシアさんの夫。だから、プレシアさんが俺の事を『あなた』と呼ぶのも当然の事なんだ。うん、納得しろ俺！

プ「どうしましたあなた？」

一「な、何でもない・・・」

プ「ふふ、変な人」

プレシアさん、何でそんなに活き活きとしているんですか？

一「（いや、これも演技か。凄いなこの人）」

プレシアさんの演技力に驚きつつ、街中を歩く。すれ違う男全員に敵意の込められた視線を向けられているのを感じた。

一「（何故学校外でもこんな目に遭わなければならないんだよ・・・）」

その後も理不尽な視線に晒されつつ、ウインドウショッピングを楽しみ、プレシアさんの奢りで少し高価そうなレストランで昼食をとり、『街で見つけた素敵なカップル』とかいうわけのわからない雑誌のコーナーのカメラマンに写真を撮られたりする事数時間、約束の時間が迫っていたので、俺達は男が約束の場所に指定した公園にやって来た。

男「お待たせしましたテスタロッサさん」

俺達が公園に到着して数分後、例の男が現れた。

プ「時間を指定した本人が遅れるなんてね」

男「すみません。なにぶん忙しい身でして。それで・・・その隣の男性があなたが言っていた方ですか？」

プ「秋月　一成。・・・私の夫になる人よ」

本名言わないでください・・・。まあいい、それより、俺も何か言った方がいいのだろうか・・・

一「（・・・そうだ、確か・・・）」

ギュッ

プ「え？」

一「そういう事だ。俺がいない間彼女にちょっかい出していたそうだが、プレシアは俺の女だ。わかったらもう近付かないでくれ。迷惑だ」

プレシアさんの肩を抱き寄せながら男に言い放つ。以前見たテレビドラマの真似だ。

プ「ちょ、ちょっと・・・一成？」

しまった、演技とは言えやり過ぎたか？　プレシアさんは肩を震わせながら俯いてしまった。しかも素が出てるし。

男「ずいぶんな言い方ですね。あなたとテスタロッサさんの関係はまだ夫婦ではないのでしょう？」

一「いずれはそうなる。だろ、プレシア？」

プ「え、ええそうよ。だからあなたも諦めて・・・」

男「やれやれ、強情な方だ。秋月さんでしたね・・・いくらですか？」

一「・・・何？」

男「いくら積めばテスタロッサさんを譲って頂けますか？　一億？　三億？　あなたのお好きな金額を言ってください。テスタロッサさんを手に入れられるなら糸目はつけませんよ」

譲る？　手に入れる？

男「テスタロッサさんの美しさは最早芸術です。それこそ、あなたには勿体無いほどにね。そして、その美しさは僕にこそ相応しい。さあ、早く金額を・・・・」

一「黙れ・・・」

男「なっ！？」

一「譲るだと？　手に入れるだと？　貴様、プレシアさんを物の様に・・・」

俺の胸には悦楽に向けたのに勝るとも劣らない怒りが渦巻いていた。男を睨みつけ、さらに続ける。

一「今の言葉で確信した。貴様の様なクズにプレシアさんを渡すわけにはいかない。この人は俺が守る」

プ「あなた・・・」

この場合、守るって言い方は変か？　まあ、どうでもいいか。

男「・・・はあ、仕方ないですね。これだけはやりたくありませんでしたが・・・・」

パチン！

ザッ！×１０

男が指を鳴らすと、物陰から黒服を纏った男達が現れた。このパターン・・・アリサの時と同じだな。

男「僕は欲しい物は絶対に諦めない。もう一度確認しますが、プレシアさんを譲る気は無いのですね？」

一「くどい」

男「そうですか。・・・・・やれ」

黒服×１０「はっ！」

男の合図で一斉に俺に向かって来る黒服達。

一「プレシアさん。これは正当防衛になりますよね？」

プ「そうね。誰が見てもそうだと思うわよ」

一「だったら・・・遠慮する事もないですよね？」

プ「ええ、正当防衛ですもの」

一「では・・・・」

バキッ！　ドカッ！　グシャッ！　メメタァ！！

黒服Ａ「ガハッ！」

黒服Ｂ「く、くそ・・・出番これだけかよ」

黒服Ｃ「仕方無えよ。所詮モブだからな俺達」

黒服Ｄ「へへ、兄ちゃん。ナイスＪＯＪＯだった・・・ぜ」

ドサッ！×１０

一「・・・・ふん」

男「な・・・な・・・・・・」

一「さて、次は貴様の番だな」

男「ヒィ！？」

腰を抜かしながらも俺から逃げようとする男に向かってゆっくりと歩みを進める。

プ「待ちなさい一成」

そんな俺を引き止めるプレシアさん。そんな彼女を救いの女神だと思ったのだろう。男は慌てて近付いて行った。

男「た、助けてくださいテスタロッサさん！」

プ「あなたの気持ちはよくわかったわ。そして、あなたが私の事をどう思っていたのかもね・・・」

男に向かって手を差し伸べるプレシアさん。

男「じゃ、じゃあ・・・！」

プ「・・・・死になさい」

バチッ！！

男「あぎッ！？」

ドサッ！

差し伸べられた手から放たれた激しい紫電と共に、男は崩れ落ちた。
その様子に、プレシアさんは満足そうな笑みを浮かべていた。

一「何やってるんですかプレシアさん・・・」

プ「スッキリしたわ。さすがにあの言い方には腹が立ったし、殺されない分ありがたいと思ってもらいたいわね」

気絶する男を一瞥するプレシアさん。まあ、俺ですら怒りが湧いたのだから、言われた本人がそうなるのも当然か。

プ「これで彼も私に近付いてはこないだろうし、帰りましょう一成」

一「わ、わかりました。じゃあ、送りますよ」

無事？　に問題を解決した俺はプレシアさんを送る事にした。

数分後、マンションの入り口に到着した。

プ「ここでお別れね。一成、今日は本当に助かったわ。ありがとう」

一「いえ、お役に立てたのなら何よりです」

プ「何かお礼をしたいのだけれど、あいにくあなたが喜びそうな物が思いつかなくてね」

一「そんなの気にしないでくださいよ」

プ「でもねぇ・・・そうだ、ちょっと目を瞑ってくれないかしら」

一「？　はい・・・」

あれ？　この流れって・・・

プ「ん・・・・」

一「!?!?!?」

そう思った瞬間、唇に押しあてられる柔らかい感触に全身が強張る。
ま、まさか・・・

プ「・・・はあ。少しは喜んでもらえたかしら?」

一「ぷ、プレ・・・プレプレ・・・・・」

プ「それじゃあ、お休みなさい。あなた」

ここで倒れるわけにはいかない。落ちそうになる意識を必死に繋ぎ止めつつ、マンションの中に消えていくプレシアさんを見送る。

一「・・・やっぱり・・・む・・り・・・・」

ドサッ!

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

プレシアＳＩＤＥ

プ「ふふ・・・さっきの一成の顔、可愛かったわね」

家に向かうエレベーターの中で、先程のやりとりを思い出す。

プ「それにしても、まさかあんな事するなんてね。それに・・・あの言葉」

≪ギュッ≫

≪え?≫

≪そういう事だ。俺がいない間彼女にちょっかい出していたそうだが、プレシアは俺の女だ。わかったらもう近付かないでくれ。迷惑だ≫

≪譲るだと?　手に入れるだと?　貴様、プレシアさんを物の様に・・・≫

≪今の言葉で確信した。貴様の様なクズにプレシアさんを渡すわけにはいかない。この人は俺が守る≫

あの時、演技する事も忘れ、彼に見惚れてしまった。彼の目を見て、本気で私の為に怒ってくれていた事がわかったからだ。

プ「本当にいい男ね。フェイトやアリシア、それに他の娘達が夢中になるのもわかるわ」

≪フェイト・・・彼、好きな娘っているのかしら？≫

≪え？　た、たぶんいないと思うけど・・・≫

≪そう・・・狙っちゃおうかしら・・・≫

≪か、母さん！？≫

≪ふふっ・・・≫

以前そんな事を言ったのを思い出す。あの時はもちろん冗談のつもりだったのだが・・・

プ「少し・・・頑張ってみようかしら。なんて・・・」

？「キャアァァァァァ！」

エレベーターの扉が開いた瞬間、女性のものらしき悲鳴がマンションに響き渡った。

プ「？　何かあったのかしら？」

少し気になったが、関係の無い事にはあまり関わりたくなかったので私はそのまま家のドアを開けた。

？「どうした！？」

？「ひ、人が倒れてますーーーー！！」

？「なっ！？　おいアンタ！　大丈夫か！！」

こうして、一連の騒ぎは幕を閉じた。

翌日知ったが、どうやらマンションの前で人が倒れていたらしい。
物騒な話ね。

第十二話　金や権力だけでは人の心は動かせない（後書き）

作「さて、何人の方に需要があったかわからないが、今回はプレシアさんの話だ」

一「・・・・」

神「未だに気絶しておるぞ」

天「今回は終始振り回されていましたね一成様」

刹「ああ、新鮮だったな」

作「一成に振り回される人間は多いが逆に振り回す人間がいなかったからな。立ち位置としては『年下をからかって楽しむお姉さん』って感じか。・・・まあ、お姉さんって年ではな・・・」

バチッ！

作「ピギャッ！？」

神「な、何じゃ今の紫電は？」

天「余計な事を言いましたね」

刹「自業自得だ阿呆」

作「ま・・・まだだ！　まだ倒れんよ！！」

天「それ、言いたかっただけでしょう？」

刹「しかし、今回の我が君の行動には目を見張る物があったな」

神「じゃな。演技とは言え、まさかあんな事をするとは・・・」

作「こいつはこいつなりに頑張ったんだよ。おかげで新たなフラグが立ちかけたがな」

一「・・・・・」

刹「さて、では贈り物報告会に移るか」

天「まずは清浦刹那様からです。私にサファイア、神奈にルビー、刹那にダイアモンドの指輪と白いワンピースを頂きました」

神「何じゃ？　はめた途端、体が軽くなった様な・・・」

天「所持者の身体能力を向上させる効果があるそうです」

刹「これは・・・そういうことか」

パアァァ・・・

刹「ふむ、やはり幼女用か。サイズがピッタリだな」

神「うお！？　何小さくなっておるのじゃ！？」

刹「ありがとね清浦お姉ちゃん！　にぱ～♪」

天「・・・止めてください」

刹「？　何故顔を引き攣らせる？」

神「次は朝凪　夜風様じゃな」

？「こんにちは・・・」

刹「ん？　あの時の少女ではないか」

櫻「ど、どうも・・・」（びくびく）

刹「どうした？　何をそんなに怯えている？」

天「己の所業を憶えていないのですか？」

刹「何かしたのか？　生憎あの時の事はうろ覚えなのだが」

神「（そうじゃった。櫻殿の名誉の為に力ずくで忘れさせたのじゃったな）」

天「そ、それで、今回はどうされたのですか？」

櫻「あの・・・贈り物を・・・」

天「まあ、わざわざありがとうございます！」

櫻「じゃあコレを、マナ結晶とアル・マヒクです」

神「『破壊者』もしくは『敵を皆殺しにするもの』と言う意味持つ名の剣じゃな。一振りで山をも砕き、魔人や妖怪をも木っ端微塵にしてしまう物騒な剣じゃ。さらに、刀身から発せられる光は、相手の目を眩ませ恐怖心を植え付ける事が出来るそうじゃぞ」

刹「解説ご苦労。・・・よく知っていたな」

神「説明書付きじゃったからの」

櫻「それで、実は一成さんにお願いがあるんですが・・・」

一「・・・・・」

櫻「・・・どうやら無理そうですね」

天「どうされたのですか？」

櫻「実は、夜風に一成さんと手合わせして来るよう言われたのですが・・・」

刹「ふむ、ならば我が相手をしてやろうか？」

櫻「え!?」

刹「このまま帰らせるのも悪いしな。どうだ?」

刹「え、えっと・・・」

刹「何を躊躇う?　・・・・優しくするぞ?」

櫻「い・・・嫌~~~~~!」

シュン!

刹「・・・帰ってしまった。一体どうしたんだ?」

神「何をやっておるんじゃお主は!!」

天「ただでさえあなたに怯えていたのに、ダメ押ししてどうするんですか!?」

刹「いや、我はただあの可愛らしい少女とキャッキャウフフしたかっただけ・・・」

神「アホかお主は!!」

天「櫻さん・・・トラウマにならなければよいのですが・・・」

刹「おい、何故我は縛られているのだ？」

神「しばらく反省しておれ！」

天「次は緋水様からです。一成様のボイス入り目覚ましと抱き枕です。誰宛てか書かれていませんが、多分刹那宛てでしょうね」

刹「なら解いてくれ。そして、我にも見せてくれ」

神「駄目じゃ。今回はお預けじゃ」

刹「横暴だぞ神奈。我をいたぶって楽しいか？」

神「こ、こ奴・・・・」

天「これくらいじゃ意味は無さそうですね・・・」（汗）

作「おっと、最後に報告しなければならない事があったのを忘れてた」

天「また唐突ですね」

神「何じゃ？　布団のシーツでも破けたか？」

作「そんな下らない事報告するわけないだろ！！　てか何で知ってんだよ！？」

刹「いいからするんならさっさとしろ」

作「えー、先日、ようやく試験に合格し、免許を取得する事が出来ました！」

一「・・・・何だって！？」

神「お、目覚めた様じゃな」

作「いや～、落ちる事三回。ようやくだぜ。おかげで六千円も無駄にしてしまった」

刹「とうとう問題集まで買っていたからな。これで落ちる方がおかしいだろう」

作「感想で励ましてくださった方々、ありがとうございました。これから行動範囲が広がりそうで今から楽しみです」

一「まさか・・・そんな・・・・・・」

天「・・・よっぽど衝撃的だったんですね」

第十三話　夕方に匂って来るカレーの香りは危険すぎる（前書き）

クソっ！　まさかパソコンを奪われるとは・・・・不覚！！

第十三話　夕方に匂って来るカレーの香りは危険すぎる

な「じゃあまた明日ね一成君」

一「ああ、気をつけてな」

放課後、途中までなのはと下校し、別れ道で別れる。いつもならこのまま帰宅するのだが、今日は寄り道しなくてはならない。

一「さて、早く買い物を済ませよう」

放課後ならこの姿でも不審では無い筈だ。俺は早速スーパーに向かった。

？「おや、一成じゃないかい。こんな所で珍しいね」

スーパーに到着し、買い物かごを持つと同時に後ろから声をかけられた。

一「アルフ？」

アル「どうしたんだい？　そんなポカンとした顔して」

一「あ、ああすまない。アルフこそどうしたんだ？」

アル「あたしはプレシアに頼まれて夕飯の買い物だよ。今日は用事があったらしくてね、買い物に行く暇が無かったそうだから代わりにあたしがってわけさ」

一「そうか、偉いなアルフ」

アル「よしとくれよ。こんなの当然の事じゃないか」

一「ははっ、当然か」

アル「そういうあんたはどうしてここに？」

一「アルフと一緒だよ。天音に頼まれてな」

アルフと話しながら目的のコーナーに向かう。頼まれた物はニンジンに玉ねぎ、その他諸々。どうやら今夜はカレーのようだ。

アル「もしかして、あんたの家って今日カレーかい？」

一「え？　何でわかるんだ？」

アル「だって・・・ほらっ」

アルフの買い物かごには俺のかごとまったく同じものが入っていた。

一「ということは・・・」

アル「ああ、ウチもカレーだよ」

そういえば、プレシアさんの手料理ってどんな感じなんだろう？
少し気になるな。

アル「次は肉だね。あんたはどうするんだい？」

一「俺も行くよ」

どうせ同じものを買うのなら一緒に行動した方がいいだろう。そう思い、アルフの後を追う。

アル「うーん・・・肉って言っても何買えばいいんだい？」

一「カレーならこの肉がいいと思うぞ」

アル「ならそれにしようかね。それにしても、あんたってこんな事にまで詳しいんだね」

一「まあ、少しだけどな」

パックを二つかごに入れ、次の場所に向かおうとすると・・・

？「ねえあなた。今日の夜ごはんは何食べたい？」

俺達の隣にいた夫婦の会話が聞こえて来た。

夫「何でもいいよ。キミの作った料理は全部美味しいからね」

妻「も～う。そう言ってくれるのは嬉しいけど、何でもいいが一番困るのよ」

夫「じゃあ・・・肉じゃががいいな」

妻「それだけでいいの？」

夫「ああ。食後のデザートの為に少し空けておかないといけないからね」

妻「？　デザートなんてあったかしら？」

夫「何言ってるんだい。目の前にあるじゃないか」

妻「え？」

夫「夕食の後は・・・キミを食べちゃうぞ！」

妻「や～ん♪　もう、あなたったらぁ♪」

夫「ハッハッハ！！」

何とも形容し難い空気を醸し出しながら、二人は去って行った。

客「・・・・・」

周りの客は引いていた。

アル「・・・・何だったんだろうね」

一「・・・・・さあ」

アル「ていうか、店でする会話じゃないだろう」

アルフの言葉に俺を含む全員が頷いた。今の光景は記憶の引き出しに入れ二度と取り出さないようにしよう。

一「・・・・行くか？」

アル「そうだね・・・」

そそくさとその場を去りつつ、残りの材料を探した後、レジに向かい会計を済ませる。

アル「・・・なあ一成。少し付き合ってもらっていいかい？」

スーパーを出て、帰ろうとしたが、アルフに引き止められた。

一「？　別に構わないが」

アル「すまないね。じゃあ、公園に行こうか」

一「わかった」

少しくらいなら食材も痛まないしな。そう思い、アルフと共に公園に向かった・・・

公園に到着した俺達はベンチに腰掛けた。

アル「ほらコレ、飲みなよ」

一「ありがとう」

来る途中の自販機で買ったジュースを渡してくれるアルフ。そんな

彼女に礼を言い、早速飲む。正直喉が渇きっぱなしだったので助かった。

アル「凄い勢いだね。そんなに喉渇いてたのかい？」

一「ああ、だから助かったよ」

アル「じゃあ、あたしのも飲むかい？」

一「いいのか？」

アル「飲みかけでいいんならね」

手に持つ缶を俺に渡そうと近付き・・・

アル「・・・や、やっぱり駄目だ！」

かと思えば、いきなり慌てながら缶を遠ざけるアルフ。受け取ろうとした俺の右手は空しく空を切った。

一「どうしたんだ？」

アル「いや・・・その・・・・そ、そう！　あたしも喉が渇いてしょうがないから、コレは渡せないよ！」

一「？」

アル「（あ、危なかった・・・。もう少しで間接キ・・・・ああ！　無し無し！　こんな事考えるなんてあたしらしくないじゃないか！　ううう・・・こいつが関わると調子が狂っちまうよぉ・・・）」

一「（さっきから顔を赤くしたり、両手を振り回したり、落ち込んだり・・・どうしたんだ？）」

アルフが落ち着くまで公園内を見渡す事にした。といっても見知った場所なので新しい発見は無く、人も俺達の対面にあるベンチに座っている男女くらいしかいなかった。

アル「ふう・・・」

一「落ち着いたか？」

アル「あ、ああ。すまないね」

一「謝る事じゃないさ。それで、こんな所で何なんだ？」

アル「・・・あんたにお礼が言いたくてね」

一「え？」

アル「あんたのおかげであたしはまたフェイトの笑顔を見る事が出来た。今のあの子は以前とは別人のようだよ。毎日毎日とても幸せそうに笑ってるんだ。あんたがプレシアとアリシアを救ってくれた

おかげさ」

一「・・・そうか」

アル「多分、二人が助かってなくてもあの子は立ち直ったはずさ。でも、今みたいに心から笑えるようになるのはもっと先の話だったろうね」

一「・・・・・」

アル「あんたはそこまで思ってないかもしれないけど・・・本当に凄い事をしてくれたんだよ」

一「アルフ・・・」

そう言って立ち上がり、正面から俺を見据えるアルフ。

アル「だから・・・ありがとう一成。フェイトを・・・あたしの主を助けてくれて」

真摯な声。それだけで彼女がどれほどフェイトを大切に思っているかがわかる。

一「アルフは本当にフェイトの事が大好きなんだな」

アル「当たり前じゃないか。あたしだってフェイトの家族なんだか

らね」

一「ははっ、そうだな。家族だもんな」

笑顔で答えるアルフにこちらも笑ってしまった。

アル「ッ！？」

一成の微笑みを正面から見てしまったアルフ。こうかはばつぐんだ！

一「？　アルフ？」

変な声が聞こえた気がしたが、軽く流す。

アル「な、何でもないよ！」

再び慌てた様子でベンチに座るアルフ。どう考えても何でもないって感じじゃ無さそうだが・・・

アル「あっ・・・」

一「どうしたんだ？」

アルフの視線の先には先程見た男女の姿があった。どうやら恋人同士だったみたいだ。なぜわかるか？　理由は簡単だ。

男「・・・・・」

女「・・・・・」

人目もはばからずに堂々とキスしていたら誰でもわかる事だ。スーパーでの件といい、この街の男女のモラルはどうなっている！

アル「な、なななな何やってるんだよアイツら！？」

アルフが小声で文句を言っている。気持ちはわかるがガン見は止めた方がいいと思うぞ。

一「何って・・・キスだろう？」

アル「そんな事はわかってるよ！　あたしが言ってるのは何でこんな場所でしてるのかって事だよ！」

一「さあな、俺には理解出来ん」

アル「何でそんなに冷静なんだい！？　ああ！　あんなに激しく・・

・って、ど、どこに手を入れてるんだいあの男は！？」

一「だから見るなって・・・」

先程から首を横に向けている俺には視界からの情報は入って来ないが、隣のアルフの実況の所為でいらん状況が見えてしまった。

アル「は、話も終わった事だし、か、帰るよ一成！」

買い物袋を持ち、勢いよく立ちあがるアルフ。が、結構な重さの袋にバランスを崩す。

一「危ない！」

アル「え？　うあっ！？」

急いでアルフを支えようとしたが、今の俺の姿で彼女を支える事は出来なかった。俺は倒れる彼女の下敷きになってしまった。

ズキュウウウウウウウウン！！！

アル「！？！？！？」

一「ん・・・」

唇に感じる柔らかな感触。正体のわからないそれを意識した瞬間、重さと共にその感触は無くなった。

一「痛っ・・・大丈夫かアルフ？」

アル「う・・ああ・・・・・・」

ゆっくりと体を起こすと、目の前に顔を真っ赤にさせ、唇に手を当てているアルフの姿があった。

一「どうしたアルフ？　どこかケガでも・・・・」

アル「・・・・野郎」

一「え？」

アル「バカ野郎ォォォォォォォ！！」

ズドン！！

一「ぐおっ！？」

ユーノのバリアすら打ち砕く強力な拳が凄まじい音と共に俺の腹に突き刺さった。

アル「う、うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁん！！！」

蹲る俺を尻目に走り去るアルフ。い、意味がわからない・・・・

男「今の見たかいハニー？」

女「もちろんよダーリン。やあねえ、こんな所であんな事するなんて・・・・」

例の男女が何か言ってるが、生憎聞きとる事が出来なかった。

一「・・・あ、痣になってる」

その後、ふらつきながらも何とか帰宅する事が出来た。ちなみに、痣は一週間消えなかった・・・・

おまけ『その後のテスタロッサ家』

ガチャッ！

アル「フェイト～～～～！」

フェ「ど、どうしたのアルフ！？」

アル「あたし・・・汚されちゃったよぉ・・・」

フェ「えぇ！？」

アリ「何があったのアルフ？」

アル「一成が・・・一成が～～～」

プ「大丈夫よアルフ。落ち着いて、ゆっくり話してごらんなさい」

アル「ううう・・・それが・・・・」

・・・・・・

フェ「そっか・・・一成が」

プ「あらあら、災難だったわねぇ」

アリ「それにしても・・・しょうがないなぁ兄様は。私達にはし

てくれないのにアルフにはするんだ」

フェ「そうだね姉さん。そこの所をキッチリ聞きたいね」

アリ「明日のお昼、なのはちゃん達と一緒に聞いてみよっか」

フェ「うん」

アル「フェイト？　アリシア？」

フェ・アリ「「どうしたのアルフ？」」

アル「いや・・・気のせいか雰囲気がいつもと違う様な・・・」

フェ・アリ「「気の所為だよ」」

アル「そ、そうかい。気のせいかい」

アリ「明日が楽しみだねフェイト。クスクス・・・」

フェ「そうだね姉さん。クスクス・・・」

プ「（どう考えても事故でしょうけど・・・頑張りなさい一成）」

次の日、一成がどうなったか・・・それは神のみぞ知る。

駄神「え？　いや、ワシ知らんし・・・」

第十三話　夕方に匂って来るカレーの香りは危険すぎる（後書き）

作「ふう・・・ようやく帰って来れたぜ！」

一「ここ最近何やってたんだ？」

作「待たせたな。不甲斐ない事だが監禁されていた（パソコンが）」

天「監禁って・・・何したんですか？」

作「親曰く「やり過ぎだテメエ！」って事で離れ離れになってた」

神「結局お主の所為じゃないか！」

刹「で、どうやって返してもらったんだ？」

作「ぶちのめして（土下座して）だ！！」

一「嘘だな。お前にそんな根性は無い」

作「な、何故バレた！？」

天「・・・わからないとでも思ったんですか？」

作「ま、まあいいじゃないか。終わった事だし。それより今回の内容について話そうぜ」

神「ここに来てようやく一成に明確な傷を負わせる者が現れたな」

刹「しかもそれが味方だとはな。さすが我が君、相変わらず型破りだな」

一「褒めてないだろ」

作「はっはぁ！　お前にはクロノに続き『ラッキースケベ』の称号を与えよう！」

一「貴様は黙ってろ」

作「つ、ついに呼び名が貴様に・・・」

天「最後にフェイトちゃんとアリシアちゃんが病みましたね」

作「ああ、あれはあくまでおまけだけの病みだからな、次回からは元に戻すぞ」

神「そうして欲しいの。正直フェイトの病みは妾は見たくないぞ」

刹「病みといえば、天音はヤンデレじゃなかったのか？」

作「ヤンデレってよくわからないからな。もうこの際無かった事にしようかと。それに、そんなものなくても今の天音は色々持ってるからな。酒に弱いとか妄想癖があるとか・・・」

天「ああなるほど・・・って素直に喜べませんよ！」

刹「ところで作者、実際アルフはどうなんだ？」

作「どうって？」

刹「彼女は我が君に惚れているのか？　それとも違うのか？」

作「モロチン・・・じゃなかった。もちろん」

シーーーーーン

作「あれ？　どうしたんだ？」

一「・・・くだらん」

神「下種が」

天「ここに来て下ネタですか。最低ですね」

刹「・・・・」（無言で見つめている）

作「・・・ごめんなさい。調子に乗りました。許してください。特に刹那さん、無言で睨むの止めてマジで」

一「さて、あんな最低野郎はほっといて贈り物報告会に移るか」

作「ズーン・・・・」

神「まずは朝凪　夜風様からじゃ。クロワッサンを頂いたぞ。なん

でもバイト先で焼いているそうじゃ」

一「へえ、手作りか。美味しそうだな」

天「そうですね。後でゆっくり頂きましょう」

刹「クロワッサンか・・・その内我も作ってみるかな」

天「清浦刹那様からはアップルパイを頂きましたよ」

神「うむ、こちらも美味そうじゃな。感謝するぞ刹那様」

刹「なんだ？　礼を言っても何も出ないぞ？」

神「お主じゃないわ！」

一「パイか・・・久しぶりだな。早く食べたいが・・・まだ贈り物が残ってるからな」

刹「緋水殿からは我が君にお手製のハンバーガーとクドわふたーを頂いたぞ」

一「何だコレ？　ゲームなのか？」

天「そうですが、今の一成様ではプレイできませんよ」

一「え？　どうして」

神「禁則事項じゃ」

一「？」

刹「我が君よ、このゲームはな・・・」

天「言わせませんよ！！」

一「最後だ。ナオ様から作者宛てにシューティングとリカバーのエレメントを頂いたぞ」

刹「初めての方だな。喜べ作者、お前の免許取得のお祝いにわざわざ贈ってくださったみたいだぞ」

作「ウホッ！　いいエレメント！・・・・じゃなかった。ナオ様、ありがとうございます」

神「お主、そのネタ好きじゃな」

作「気のせいさ」

天「クロノクロスというゲームに出ていた物らしいですね。シューティングは相手一人に小隕石当てるもので、リカバーは体力を回復させるもののようです」

作「なるほど・・・よし、シューティング発動だ！」

ゴォォォォォ！

作「おお！　本当に出て来た！　よし、目標は一成だ！」

一「やれやれ、こりないヤツだな」

刹「我が君、このバットを使え」

一「よし・・・・ふん！」

ガキーーーーーン！

作「返されたぁぁぁぁぁ！？」

チュドーーーーン！！

一「・・・また詰まらぬ物を打ってしまった」

天「お見事です一成様」

神「それにしても、学習せんヤツじゃの」

作「あぼーん・・・・」

刹「あの男にそれを言うのは酷というものだぞ神奈」

秋月一成の優雅でも穏やかでもない日常編最終話　約束を守るという事は相手が

前回感想を送って下さった方々、お返事出来なくて申し訳ありません。金輪際、こんな事が無いように致しますのでお許しください。

な「ただいま～」

桃「お帰りなさいなのは。あら、一成君も一緒だったのね」

一「こんにちは桃子さん。なのはに誘われまして」

なのはが着替える為に奥に入って行ったので、傍の席に座って待っていると、代わりに美由紀さんが出て来た。

一「こんにちは美由紀さん」

美「はあ・・・・」

一「あの、美由紀さん・・・？」

美「へ・・・？　あ、一成君。いらっしゃい」

一「どうしたんですか？　何か悩み事でも？」

美「ううん、何でも無いの・・・・」

何を思ったか、いきなり俺に顔を近付ける美由紀さん。

美「じ～～～」

一「あの、俺の顔に何かついてますか？」

美「・・・やっぱり似てる」

一「え？」

美「ねえ一成君。あなた、お兄さんっている？」

一「兄ですか？　いえ、俺に兄弟はいません」

美「そっか・・・ごめんね、いきなり変な事聞いちゃって」

そう言ってまた奥に引っ込む美由紀さん。

一「桃子さん。美由紀さん何かあったんですか？」

桃「それが私にもわからないのよ。少し前からあんな調子でね、本人は何でも無いの一点張りで話してくれないし」

一「そうですか・・・」

桃「やっぱり、一矢って人に関係があるのかしらね」

一「誰ですか？」

桃「名前しかわからないの。多分、学校の先輩か誰かだと思うけど・

・・」

そんな人物原作にいただろうか？　まさか・・・またイレギュラーか？

一「（・・・警戒しておくか。もし、美由紀さんに危害を加えようとしているのなら・・・）」

それにしても・・・一矢か。どこかで聞いた憶えが・・・・

≪俺は・・・秋山　一矢って言います≫

一「・・・・俺じゃないか」

桃「どうしたの？」

一「い、いえ。何でも無いです」

なんて事だ。美由紀さんのあの様子は俺が原因だったとは。あの時何か彼女を怒らせる様な事をしてしまったのか？

一「（よし、約束していたし、もう一度あの姿で美由紀さんに会ってみよう）」

な「お待たせ一成君。あれ？　どうしたのそんな顔して」

その時、着替え終えたなのはが戻って来た。

一「何でも無いよ。それより、なのはもこっち来て座りなよ」

な「うん」

桃「じゃあ一成君、ケーキでも食べていく？」

一「いいんですか？　じゃあ、お願いします」

な「お母さん、私も食べる！」

桃「ふふ、わかってるわよ」

その後、ケーキと紅茶を頂き、代金をしっかり払って（タダでいいといわれたが、頑として払った）俺は家路に就いた。

一「さて・・・行くとしたら休日かな」

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

美由紀ＳＩＤＥ

今日は土曜日。休日という事でお客さんがたくさんやってくる。もちろん、私も手伝うのだけれど・・・

美「はあ・・・・」

これで何度めの溜息だろう。お客さんの前で溜息なんて駄目だけど。・・・原因はわかってる。

美「（一矢さん・・・）」

思い出すのは、先日会った男性。絡まれていた私を助けてくれて、家まで送ってくれた。今度翠屋にお邪魔すると言っていたけどあの日から彼はまだ一度も姿を見せていない。

美「（いつまで期待してるのよ私。あんなの社交辞令に決まってるじゃない。そうよ、そうに決まってる）」

桃「美由紀。なのは一人じゃ大変だからあなたも注文取って来てくれるかしら」

美「はーい」

お母さんに言われ、お客さんの元へ向かおうとすると、新しいお客さんがやって来た。

美「いらっしゃいませ！　翠屋にようこ・・・そ」

そのお客さんを見た瞬間、私はオーダー票を落としてしまった。だって、その人は・・・

美「か、一矢さん!?」

一「久しぶり美由紀。約束通りお邪魔しに来たよ」

私がずっと会いたいと思っていた、秋山　一矢さんだったのだから・・・

美由紀ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＩＮ　ＳＩＤＥ

美由紀さんの様子がおかしい。何故か俺の姿を見るなり固まってし

まった。何か落としたみたいだけど、いいのか？

一「美由紀？　どうした？」

美「・・・はっ！　な、何でも無いです！」

一「そうか。ところで、俺はどうすればいいんだ？」

美「あ、すみません！　すぐに案内します！」

落とした物を拾い、美由紀さんに案内されて席に着く。

美「お水持ってきますね」

早足で去って行く美由紀さん。むう、やっぱり嫌われているのか？

な「・・・・」

気配に振り向くと、なのはが俺を見つめていた。・・・・ジト目で。

一「えーっと・・・初めまして。俺は秋・・・・」

な「何してるの一成君・・・」

やっぱり気付かれた・・・

一「実はな・・・」

とりあえず、先日の出来事を話すと、どうにか納得してくれたみたいだった。

な「そうだったんだ。・・・ありがとう一成君。お姉ちゃんを助けてくれて」

一「当然の事をしただけだよ」

な「当然か・・・一成君らしいね」

美「お、お待たせしました！」

美由紀さんが凄い勢いで戻って来た。水をこぼさないあたりは流石だ。

一「い、いや、待つも何も水なんだからそこまで急いで持って来なくてもいいよ」

美「あっ、そ、そうですね」

な「お姉ちゃん。前から言ってた一矢さんってこの人なんだね」

美「よ、余計な事言わないでよなのは！」

な「にゃはは。じゃあ後はお姉ちゃんにお任せするね」

そう言って、なのはは他の席にオーダーを取りに向かった。

美「もう・・・。あ、一矢さん。今の子は私の妹でなのはっていいます」

一「なるほど。だからお姉ちゃんって」

美「はい。あと恭ちゃ・・・兄がいます」

一「三人兄妹なのか。賑やかそうでいいな」

美「あはは、たまに賑やか過ぎて困る事もありますけどね」

さて、もう少し話していたいが、これ以上は美由紀さんにも他の客にも迷惑がかかるし、何か注文するか。

一「注文していいかな？」

美「はい、何にしますか？」

一「フレンチトーストとコーヒーを一つ」

美「フレンチトーストとコーヒーですね。少々お待ち下さい」

さて、品が来るまで何をしていようかな・・・

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

美由紀ＳＩＤＥ

美「（ううん、緊張した。変に思われちゃったかな？）」

でも、本当に来てくれた。一矢さんは約束したからって言ってたけど・・・あの時の事憶えていてくれたんだ。それがとても嬉しい。

美「お母さん！　フレンチトーストとコーヒー入ったよ！」

自分でもわかるくらい弾んだ声。いつもと違うその声にお母さんが気付かない筈が無かった。

桃「ふふ、よかったわね美由紀。ずっと会いたかった人が来てくれて」

美「なぁ！？」

士「彼が一矢君か。一度話がしたいものだな」

桃「・・・あなた」

士「じょ、冗談だよ桃子！」

美「お父さんまで・・・どうして」

桃「あなた、さっき一矢さんって思いっきり叫んでたじゃない」

美「ッ～～～～／／」

桃「あらあら、赤くなっちゃって♪」

美「と、とにかく！　伝えたからね！」

桃「はいはい。それじゃあ、美由紀の為にも腕によりをかけて作らなくちゃね」

美「お母さん！」

桃「うふふ♪」

いけない、ここにいたらずっとからかわれ続けてしまう。

客「すみませ～ん！」

美「は、はい！　今行きます！」

私は逃げる様にお客さんの元に向かった。

数分後・・・

桃「美由紀～。一矢さんの分出来たわよ～」

美「な、何で私が持って行くの！？」

桃「あら、そうすれば少しは話せるでしょう？」

美「で、でも・・・」

な「あ、じゃあ、私が持って行くよ」

美「ま、待って！　私が行く！」

トーストとコーヒーをトレイに乗せ一矢さんの元に向かう。

桃「頑張りなさいよ美由紀」

美「（うう・・・頑張るって何よぉ・・・・）」

美由紀ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＩＮ　ＳＩＤＥ

美「お、お待たせしました。フレンチトーストとコーヒーです」

注文して数分後、頼んでいた品がやって来た。

一「早いな。まだ数分しか経ってないぞ」

美「お客さんをお待たせしないように心がけてますから」

確かに、桃子さんの調理スピードは目を見張るものがある。今も少し見えるが、士郎さんと会話しながらも手は止まっていない。

一「じゃあ早速・・・」

トーストを一口。丁度良い甘さが口に広がる。うん、やっぱり翠屋

の料理は美味しい。

美「ど、どうですか・・・？」

一「美味しいよ」

美「そ、そうですか！　よかったぁ！」

パァっと顔を明るくさせる美由紀さん。普段と違うその様子が新鮮だった。

美「で、ではゆっくりしていってくださいね」

かと思えば慌てた様子で戻って行く美由紀さん。どうしたんだろう？

一「気にしてもしょうがないか・・・」

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

美由紀ＳＩＤＥ

桃「もう、帰って来るの早すぎよ美由紀」

美「か、一矢さんばっかり相手するわけにもいかないでしょ。他のお客さんもいるんだから」

桃「あら、お客さんのピークも過ぎたし、気にしなくてもよかったのに」

美「お母さん・・・楽しんでるでしょ？」

桃「まさか♪」

美「♪って何よ♪って・・・」

桃「それよりほら、これを持って行きなさい」

そういってお母さんがトレイにケーキを二つ乗せる。

美「これは？」

桃「サービスよ。彼とあなたの分」

美「え？　私の？」

桃「ずっと働きっぱなしだったでしょ。少し休みなさい」

美「でも、なのはが・・・」

な「私ならさっき休憩したから大丈夫だよ」

美「いいの？」

な「うん！」

美「ありがとう、なのは」

私はトレイを持ち、再び一矢さんの元に向かった。

美「一矢さん」

一「ああ、美由紀。ご馳走様。美味しかったよ」

美「い、いえ。あの・・・これ」

机にケーキを置くと、一矢さんが不思議そうな顔をした。

一「あれ？　俺ケーキ頼んだっけ？」

美「母からのサービスです。食べてください」

一「ありがとう、嬉しいよ。でも、二つはもらい過ぎな気が・・・」

美「も、もう一つは私のです。ピークも過ぎたから休憩しろって言われて」

一「そうなのか？　じゃあ、一緒に食べないか？」

美「え？」

一「もちろん嫌なら別に・・・」

美「い、いえ！　ご一緒させてください！」

慌てて向かいの席に座る。

一「そ、そうか。じゃあどっちにする？」

美「一矢さんからどうぞ」

一「なら、ショートケーキの方をもらうよ」

私はもう一方のチョコレートケーキを取った。

一「うん、これも美味しいな」

美「気に入ってもらえたのなら何よりです」

一矢さんは苺に手を出さず、周りから食べている。気になった私は尋ねてみた。

美「あの、苺嫌いなんですか？」

一「え？　ああ、違うよ。俺は好きな物は最後にとっておく性質でね」

美「そうなんですか」

一「子どもっぽいかな？」

美「ふふ、可愛いですね」

こんな大人っぽい人が苺が好きなんて・・・そのギャップに思わず笑みがこぼれる。

一「か、可愛い・・・か」

美「ご、ごめんなさい。失礼でしたね」

一「いや、よく言われるよ。「お前は見た目と中身のギャップがあり過ぎだ」ってね」

美「ああ、それわかる気がします」

その後も、お互いの事を話し合って、気がつけば一時間経っていた。

美「あ、もうこんな時間。そろそろ仕事に戻らないと」

一「そうか。じゃあ俺もそろそろ失礼するよ」

美「あ、じゃあお会計しますね」

一矢さんと共にレジに向かい、清算する。ちょうど払ってもらったのでレシートだけお返しする。

一「本当に美味しかったよ。またお邪魔していいかな？」

美「もちろんです。ぜひまた来て下さいね！」

一「それじゃあ、またな美由紀」

美「ありがとうございました～！」

そして、一矢さんは扉の向こうに消えていった。

美「・・・よし、残り時間も頑張ろうっと！」

今度はいつ来てくれるんだろう？　って、今帰って行ったのに気が早すぎだ。

客「すいません、注文お願いします」

美「は～い、今行きま～す」

・・・この時の私は知る由も無かった。彼と次に会うのは数年後。
しかも全くの予想外の形で再会する事を・・・

作「さて、懸念のあった美由紀の話も終わったし、これで日常編も終了だな」

一「やれやれ、やっとかよ」

神「まさか、A-s編までに六十話近くかかるとはの」

天「長すぎですね。全く、だらだらと書き過ぎです。読者の方に飽きられても知りませんよ」

作「A-s編はもう少しコンパクトにやりたいな。それに、シリアスも多めで無印編みたいにすぐに決着をつけるつもりも無いし」

刹「確かにA-s編はシリアス部分が多いが・・・本当に大丈夫なのか？」

一「そうだな。お前、シリアスなんか書けないだろ」

作「やってやるさ。俺のモットーは『やるときはやる！　ふざける時は周りが引くくらいふざける！』だから」

神「・・・初めて聞いたぞ」

天「『ふざける』の部分は・・・日常編を読んでいただければ一目瞭然ですね」

刹「だな。主人公をアザラシやライオンと戦わせたり、遊園地のマ

スコットがチートな小説など我は読んだことが無いぞ」

一「未だに『やる』の部分が書かれてない様だが」

作「ちょっ！　無印編のラスト頑張ったよ俺！」

一「あの程度で頑張った？　笑わせるなよ」

作「あ、相変わらずキツイお言葉で」

神「A'　s編ではお主の扱いの酷さもパワーアップする予定じゃぞ」

作「んなっ！？」

刹「そうだな。後書きにも何かしらの変化が欲しいからな。いいかもしれない」

作「そんな変化誰も望んでねえぇぇぇぇぇ！！」

一「さて、では贈り物報告会に移ろうか」

神「まずは清浦刹那様じゃな。妾に王の財宝。作者にマスターソードを頂いたぞ」

作「ゼルダの伝説か。時のオカリナは名作だぜ！」

一「選ばれた者にしか抜けないんだろ。お前じゃ無理に決まってる」

作「ふ、甘いな。こういうのは実はって可能性が・・・」

シーーーン

作「・・・そう思ってた時期が僕にもありました」

天「やっぱり」

刹「それに引き換え・・・」

神「おお！　これは便利じゃな！」

刹「あっちはすっかり使いこなしているみたいだな」

天「緋水様からはケーキと仕込み杖を頂きました」

作「座頭市ヒャッハーー！」

一「・・・確か欧州に似た様な武器のソードケインってヤツがあったな」

神「昔は護身用だったみたいじゃな。杖のほかにも扇子や煙管の形をしたヤツもあったそうじゃぞ」

刹「明治時代に廃刀令が発布された後にも使われていたそうだぞ」

天「お詳しいんですね。あ、ケーキ斬り分けちゃいましょう」

作「おおう・・・ここまでスルーされると逆に清々しいな」

刹「最後はナオ殿だ。またエレメントを頂いたぞ。今度はコメット、ヒールの二つだ。それと、我達三人に写真だ」

神「何じゃ、何も写っていないではないか」

天「これは一体・・・」

刹「それはな・・・『自分達が思い浮かべる姿が写る』写真だそうだ」

神・天「「と、ということは・・・」」

刹「そうだ、これで我達が妄想していた我が君とのあんな事やこんな事が・・・」

神・天「「ナオ様！　G・J！！」」

刹「では・・・」

神「いざ・・・」

天「夢を現実に！」

神奈・・・一成と自分が抱き合っている写真。

神「はう・・・」

ドサッ！（顔を赤くし倒れる）

天音・・・一成とキスしている写真。

天「はわわわ！　きゅう～～」

ドサッ！（目を回し倒れる）

刹那・・・一成と○○○で○○な○○の写真（あまりに過激な内容の為、伏せさせて頂きます）

刹「見事・・・だ・・・・」

ドバァァァァァァァ！（大量の鼻血を吹き出しながら倒れる）

一「回復のエレメントか。さて、効果のほどは・・・って!?　な、何が起きたんだ!?」

神・天・刹「「「・・・・・」」」

一「そうだ、ヒールを!　な、対象は自分だと!?　使えないじゃないか!」

作「さ～て、騒がしいヤツらは放っといて、月光閃火様がいらっしゃるって言ってたから準備でもするか」

準備中・・・

作「よし、これで後は・・・」

月「こんちは～～、来ましたよ～」

？「私もいるわよ」

作「ああ、いらっしゃいお二人とも。とりあえず向こうにお茶の準備してありますから」

月「どうも～」

？「ね、ねえ・・・あっちほっといていいの？」

一「し、しっかりしろ三人とも！」

作「ああ、アレは気にしないでください。いつもの事なんで」

？「そ、そうなんだ・・・」

作「クッキーもありますから遠慮せずにどうぞ」

月・？「「頂きます」」

作「・・・・偶にはこんな終わり方してもいいだろ」

アンケート結果報告＆A'ｓ編の予告っぽいヤツ（前書き）

更新が遅れたのはポケモンの所為です！！・・・・・すみません、自分の所為です。

アンケート結果報告＆A'ｓ編の予告っぽいヤツ

作「さあ、お待たせしました！　長くなりましたが、いよいよアンケートの結果を皆さんにご報告したいと思います！」

一「やっと知る事が出来るのか。長かったな」

作「進行はワタクシ作者と、『歩くフラグ製造機』こと秋月　一成の二人でお送りします」

一「おい、そのふざけた異名は何だ？」

作「気にするな、みんなが思ってる事だから」

一「なん・・・だと・・・・」

作「さて、掴みはバッチリですし、そろそろメインに移りましょう」

一「別に掴めてないだろ」

作「そこは流せよ！　さ、さて今回のアンケートは二つ。A'ｓ編もオリジナルストーリーにするかどうかが一つ。もう一つは新たに登場させるオリキャラの投票でした」

一「まずはストーリー展開だな。結果は？」

作「満場一致でオリジナルストーリーに決まりだ。いやあ、まさか投票して下さった方全員に支持してもらえるとは思わなかったぜ」

一「それは凄いな。無印編のあの滅茶苦茶なストーリーが受け入れられたという事か」

作「俺も驚いたよ。だからこそ、ご期待にそえる様に頑張らないとな」

一「そうだな。数少ない読者の方を減らさないようにしっかりやるんだな」

作「うう・・・離れていったらどうしよう」

一「今から気にしてもしょうがないだろ。それより続けろよ」

作「そ、そうだな。えっと、オリキャラは・・・・一番の二重人格娘（おどおど&オレっ娘）に決定しました！」

一「・・・また、難しそうなキャラになったな」

作「俺のキャラ含め、全員に票が入ってたから嬉しかったよ。まさか変態アニキにまで入るとは思ってなかったが・・・」

一「他のキャラはどうするんだ？」

作「設定とかは使わせてもらって、名前はA'ｓ編の最後に使わせてもらうつもりだ。最終決戦でお前に・・・」

一「ストップだ。これ以上ネタバレさせるわけにはいかん」

作「お、おっと。危なかった」

一「お前は本当に物騒なヤツだな」

作「す、すみません・・・」

作「さて、アンケートの報告も終わったし、次はA's編の予告っぽいヤツやるぞ」

一「予告？」

作「映画っぽくやるぞ」

一「おい、説明しろ」

作「見てればわかるさ。それじゃあ、3・・・2・・・1・・・スタート！」

少女達を定められた運命から解放した旅人。・・・だが、次の戦いはすぐそばまで迫っていた。

？「一成君か・・・よろしくな！」

新たなる出会い・・・

？「貴様に恨みは無いが、我等が主の為だ。悪く思うな」

心優しき主の為に立ちあがる四人の騎士・・・

？「闇の書・・・今度こそ終わらせる」

復讐に燃える男・・・

な「これが・・・レイジングハート・エクセリオン・・・・」

新たなる力・・・

ア「アンタ達・・・いったい」

す「何が・・・何が起きてるの!?」

巻き込まれていく友達・・・

？「お、お久しぶりです一成さん・・・」

？「この世界でも相変わらずみてえだな」

再会するかつての仲間・・・

？「また会えましたね・・・刹那お姉さま」

刹「お前は・・・！」

過去からの因縁・・・

？「私は手に入れる・・・神剣の中の神剣を！」

そして現れる新たなイレギュラー・・・

？「秋月　一成・・・私からお姉さまを奪った脆弱な人間」

？「一成君は私を助けてくれた。せやから・・・今度は私が助ける番や！」

？「まさか・・・君が、君こそがそうなのか？」

フェ「一成はいつだって約束を守ってくれた。だから今度もきっと大丈夫」

？「一成さんがいなかったら、私達はここにはいなかった。だから・・・！」

？「アイツを傷付けるヤツは・・・オレ達がぶっ潰す！」

天「一成様。お願いします・・・私を、私達を・・・・消滅させてください」

神「妾達が・・・妾達でいられる内に・・・早く・・・・・！」

一「俺は諦めない。必ず二人を助けてみせる！」

苛烈する戦いの中、力を失いながらも足掻き続ける旅人は、己の存在の意味を知る。

≪目覚めよ・・・『原初存在』よ≫

一「それが・・・俺？」

手にするは新たな力。しかし、それは両刃の剣。理解しながらもそれを振るう旅人。全ては大切な人を守るために・・・

一「神奈、天音、そして・・・刹那。力を貸してくれ。みんなの未来を繋げるために！」

魔法少女リリカルなのは　永遠の旅人A'　S編・・・近日スタート

一「さようなら・・・なのは」

な「一成君ーーーーーー！！！」

命を懸けてでも、守るべきものがある・・・・

一「・・・・何だコレ？」

作「うう、感動だ。これだけで俺の涙腺は崩壊だぜ！」

一「それはお前が結末知ってるからだろ。正直意味がわからん。しかもネタバレしかかってるし」

作「あ、そうだ。最後に一言。えー、この予告は勢いで書きました。ですから実際の内容とは異なる部分が出て来るでしょうが、そこはお許しください」

一「じゃあ書くなよこんなモン！！」

作「書きたい物を書いて何が悪い！」

一「こ、この野郎・・・」

アンケート結果報告＆A'ｓ編の予告っぽいヤツ（後書き）

と、いうことなので、あまり気にしないでくださいね。

無印編　日常編までにおけるキャラ紹介（前書き）

前回あれだけの事をやっておきながらＡ'ｓ編は次回からです。あ、止めて、石投げないで・・・

無印編　日常編までにおけるキャラ紹介

作「さて、やると言っておきながらすっかり忘れていたキャラ紹介。進行は前回と同じ作者と・・・」

一「『作者が殺意を持つキャラ？1』の秋月　一成がお送りします」

作「今回はお前達を含めてサブキャラ達も紹介していくからな。それじゃ、張り切っていこうか！」

一「・・・絶対ロクなものにならないな」

秋月　一成

この小説の主人公にしてフラグ王。当初はどんな事にも動じないクールなキャラのつもりだったが、物語が進行するにつれ『説明好き』『甘い物を奪われると壊れる（後書きにて）』『無言で人を殴り続ける』『キスされると気絶する』等々、完全に設定がずれてしまった。現在、話の流れをすっ飛ばして別の世界でも活動中。無印編ではラスボスを瞬殺したが、A'ｓ編では果たして・・・

一「どうしてこうなった・・・」

神奈

一成と契約している人霊剣の一本（人）。一番目立つキャラになると思われたが、最近他の二人のキャラが濃くなってきて三人の中では一番大人しい感じになっている。日常編において、温泉で一成をからかったかと思えば、一成からのストレートな言葉　（好き等）で気絶するという初心なのかどうなのかわからない性格。最早モデルである真・恋姫の祭とは完全にかけ離れている。（まあ、あくまで容姿だけなので問題は無い・・・はず）。

神剣刹那の『意思』が封印されている。

神「むう、また胸元がキツくなった気がするの・・・」

天音

一成と契約した人霊剣の一本（人）。恐らく、一番改変されたキャラ。忘れられているかもしれないが、メイドという事でしっかり者のお姉さんを目指したが、自らMだと暴露、酒を飲めば壊れ、主の部屋に無断で侵入し、妄想癖を持つ事まで判明し、どうしようも無い所まで来ている。モデルは真・恋姫の秋蘭なのだが、以前「天音が秋蘭って・・・想像出来ません」という感想を頂いたが、こちらも容姿だけなので問題無い・・・よな？

神剣刹那の『器』が封印されている。

天「海・・・アイス・・・・・はっ！　良いシチュエーションが浮かびました。これで一カ月はイケます！」

刹那

神剣解放により神奈と天音が一つになった神剣。銀髪のロングヘアーに赤と青のオッドアイ。本編では無印編最終決戦に登場。悦楽の腕を吹き飛ばし、続く台詞で若干のSっ気を披露。あまりにインパクトのある登場だった所為か、初登場の会で『刹姉』という愛称を獲得。日常編ではまさかのロリ化、一成と読者を大いに驚かせる。他の二人と同じく、一成に好意を寄せているが、表現が露骨過ぎていつも失敗している。

元々神奈（神威）と天音（天翔）という霊剣は存在せず、刹那が砕かれた事によって偶然生まれた霊剣である。さらに、神剣解放という現象も刹那だけが起こせるものである。何故なら、本来砕かれた神剣が消滅せず、あまつさえ二つの霊剣に分かたれる事などあり得ないからである。この事に関して、刹那は深く語らない。一成は彼女から話してくれるのを待っている。A's編では因縁深い人物が出て来る・・・かもしれない。

髪や目以外の容姿及び甲冑のイメージは聖なるかなのヒロイン、カティマ・アイギアス。

刹「さて、妹が駄目なら・・・次はツンデレで攻めてみるか」

作「次はサブキャラです」

斉藤　美樹

アザラシの飼育員。アザラシの言葉を訳せる（適当）。子どもの頃海で溺れていたのをイルカに助けられ、それがきっかけで水族館の飼育員を目指すようになった。夢が叶い充実した毎日を過ごしている。

美「いや～～、最近はジンも大人しいし、世話が楽になったな～～」

ミオ

水族館で出会ったゴマフアザラシの一頭。一成が来るまでアザラシのトップだったジンの妻。一成に撫でられた瞬間、温かいモノを感じ、虜となった。レンとはよく口喧嘩するが、それも仲がいいからである。

ミ「（あの人また来てくれないかしら）」

レン

水族館で出会ったゴマフアザラシの一頭。四頭の中では一番の年上でまとめ役。が、夫はいない。一成の優しげな雰囲気を感じ、虜となった。その日以来、溜息が多くなったらしい。（アザラシが溜息するのか？　ってツッコミは受け付けません）

レ「（はあ・・・どうしちゃったんだろう私・・・）」

アイ

水族館で出会ったゴマフアザラシの一頭。大人し目の性格で、ミオとレンのケンカの仲裁役でもある。一成の笑顔を見て虜となった。その性格からか他のオスアザラシに大人気だが、アイ自身、まだ夫を迎える気はないようだ。

ア「（ううん、皆さんの視線が怖いです）」

マナ

水族館で出会ったゴマフアザラシの一頭。天真爛漫な子どもアザラシ。他の三頭と違い、ただじゃれつきたいと思い一成に近づいた。スタッフ曰く「一番可愛らしいが、一番疲れる子」らしい。

マ「（む〜〜、ご飯はまだなのだ？）」

ジン

ミオの夫にして元ボス。フェイトを襲おうとして一成にぶん投げられた。さらにその後、一成を怒らせたという事でミオにボコボコにされた。

必殺技は強靭な尾を相手に叩きつける『テイル・クラッシャー』

ジ「～～～！」

ミ「（残念だけど、あなたに台詞は無いわ）」

シーザー

誇り高き百獣の王。数年前、海外で大ケガをしていた所を保護され動物園に送られた。以前とは違う闘いの無い穏やかな生活を満喫していたが、心の中では強者との闘いを望んでいた。そんな日々の中、偶然やって来た一成を生涯最後の相手と認め、檻から脱走。一成と闘い敗北する。満足した彼は現在も動物園で人々にその凛々しい姿を見せている。必殺技はその強力な爪と牙で相手を力づくでねじ伏せる『王の一撃』

シ「（ふっ、所詮は私も井の中の蛙だったという事だ）」

ケルビン

ゾウの情報屋。シーザーを旦那と呼んで慕っている。食う事が大好きだが、その所為でシーザーの戦いが見れなかった事を後悔している。何故彼が一成の居場所を知っていたか・・・謎である。

ケ「（情報かい？　なら、リンゴの一個でも持ってきな）」

上条

シーザーの飼育員。別にイマジンでブレイカーな力は持っていない。

「その床汚れをそぎ落とす！！」

ラッシー

変態。

ラ「ちょっ！？　何で僕だけ一言なの！？」

ジロ吉

『堕ちた聖騎士』の異名を持つ額に傷を持つホホジロザメのマスコット。過去に守るべき者を守れず、自分の力の無さを嘆いていた所をラッシーに誘われ遊園地でマスコットになる事を選ぶ。未来の担い手である子ども達を心から愛し、その笑顔を奪おうとする輩には鉄槌を加える。必殺技の『破邪魔滅斬』は使うと自分も傷を負ってしまう。しかし、これは無力だった自分を忘れない為の戒めであり、戦闘後も手当てをしたりはしない。

ジロ「眩しい笑顔・・・それを守るために私はここにいる」

マーリン

ハリネズミのマスコット。通称『激烈なる針使い』普段は大人しい好ハリネズミだが、戦闘になると性格が一変。いの一番に敵に突っ込む猪突猛進型。バトルマニアでよくラッシーに挑むが、未だに白星無し。二人の戦いは遊園地の大人気イベントでもある。自分を覆う針を相手に飛ばす『サウザンズ・ニードル』が必殺技。

残りのマスコット

『妖艶の魔女』ポチ子。『狂気の仕事人』タマノスケ。『背教者』マグナ。『神速の貴公子』ケリオス。『慈悲無き戦乙女』ラピス。『鉄壁の清掃員』ゲンゾウの六体。先の三体も含め、それぞれ固い絆で結ばれている愛すべき人気者達。

ボス

国際犯罪組織「幼女を愛でる会」海鳴支部長。アリサを脅し、スクール水着を着せようとしたが、一成とラッシーに防がれる。その後、大量の黒服を呼び出し、アリサを奪い返そうとしたが、現れたマスコット達によって黒服は全滅。本人も一成の正拳突きを受け倒れる。その際、１２０ゴールドを落とすが、捨てられた。その後の行方は『後始末』をしたラッシー達以外知る所が無かった・・・

ボ「１２歳以上は対象外です」

男

無謀にもプレシアに手を出そうとした名前すらない哀れな人物。フェイト達を使ってプレシアを振り向かせようとするなどやる事が陰湿。全てを金で解決出来るという考えを持ち、その所為で一成の怒りを買い、プレシアに電撃を食らった。その後、逃げる様に海鳴市を去った。

男「電撃怖い・・・電撃怖い・・・・」

作「・・・とまあ、これで一応全員かな」

一「またお前は無駄な設定を・・・」

作「気になっていた読者の方もいただろうし、頑張っちゃいました。テヘッ」

一「つーか、サブキャラの方が力入ってないか？」

作「ほら、ゲームとかでメインのキャラより脇役に惹かれる事ってあるだろ？　あれと同じ原理さ」

一「そ、そうなのか？」

作「そうなのです！」

一「・・・とりあえず、これでやる事やったし、次回からようやくスタートって事でいいんだな？」

作「ああ。今度こそ本当にスタートさせるぞ。これ以上延ばしたらマジで石投げられそうだし」

一「いっそ投げられてしまえ」

作「それでは今回はこの辺で。進行はワタクシ作者と・・・」

一「『フラグもチート野郎』こと秋月　一成が・・・さっきもだが何だよこの紹介文」

作「あ、前回頂いた贈り物は次回の後書きでちゃんと紹介させて頂きますので」

一「では、また・・・」

無印編　日常編までにおけるキャラ紹介（後書き）

よし、今回もいい仕事したぜ。

A'ｓ編第一話　覚醒の片鱗（前書き）

いよいよ始まったA'ｓ編、今回はプロローグ的な部分で短めです。

A' s編第一話　覚醒の片鱗

≪・・・目覚めよ≫

一「ん・・・」

≪目覚めよ≫

一「誰だ・・・」

≪目覚めよ、我が力を受け継ぎし・・・〇〇〇〇よ≫

・・・・・

ピピピピピ！

突如鳴り響く目覚ましの音に意識を引き戻される。上体を起こし、ゆっくりと息を吐いた。

一「・・・またあの夢か」

悦楽との戦いの後から、同じ様な夢を見るようになった。以前は一週間に一回くらいだったのが、ここ最近は三日に一回の頻度になっている。

一「（力を受け継ぐ？　それに、いつも最後の部分がうまく聞き取れない。・・・一体何なんだ？）」

疑問は尽きないが、そうしている間にも時間は経過していく。とにかく学校へ行く準備をしなければ。

一「（今の俺の力は神奈と天音と契約して得たものだ。という事は、二人の力を受け継いだという事か？）」

だが、実際には二人がいなければ精々ハイロゥを展開するくらいしか出来ない。いくらなんでもこれでは受け継いだとはいえないだろう。

一「・・・と、時間に余裕が無くなってきたな。急がなければ・・・」

手早く準備を済ませ、リビングに向かう。

一「おは・・・」

天「だから、違うと言ってるじゃないですか！」

神「いや、絶対そうに決まっておる！」

朝から大きな声で争っている二人。元気だな・・・

一「どうしたんだ？」

天「あ、おはようございます一成様。実は神奈が・・・」

神「違うぞ一成、悪いのは天音の方じゃ！」

天「なんですか！」

神「なんじゃ！」

どんどんヒートアップしていく二人。そろそろ止めた方がよさそうだ。

一「おいおい、何を言い争っているのかわからないが、朝っぱらからケンカなんて『止めろ』って」

ピタッ！

今の今まで言い争っていた二人が、俺の一言に押し黙る。

天「・・・申し訳ありませんでした一成様」

神「朝から不快な思いをさせてしまったの。どうか愚かな妾達を許して欲しい」

心から申し訳そうな表情で跪く二人。あまりに過剰な態度に焦る俺。

一「い、いや、気にしてないから。だからそんな事しなくていいから」

天「ですが・・・」

一「いいから」

二人の手を引っぱり立たせる。朝食の準備は出来ていたので、急いで食べ終え、俺は学校に向かった・・・

天「何でしょう・・・一成様の口から『止めろ』と聞こえた瞬間、心が鷲掴みにされた気がしました」

神「『この者に逆らってはいけない』・・・その思いに全身が支配

されていた。一成が妾達の主である以上、別におかしな事ではないが・・・それにしても、あんな感覚は初めてじゃぞ」

天「この感じ・・・初めて一成様にお会いした時と似ています。だからこそ、私は契約して頂く事に決めたのですから」

神「ふむ・・・」

・・・・・

一「今日も寒いな・・・」

季節は移り変わり、吐く息もすっかり白くなった。・・・つまりは冬だ。

一「（何か暖かい物でも買って帰るか）」

通学路を外れ、いつもと違う道・・・といっても、二、三回通った事のある道を歩く。

？「あっ・・・！」

困ったような声・・・目を向けると、車イスに乗った少女が買い物

袋を落としていた。どうやら車輪が溝にはまりその衝撃で落としてしまったみたいだ。にも関わらず、周りの人間は誰一人手を貸そうとしない。

一「やれやれ・・・」

見た以上無視出来ない。俺は少女に近づいた。

ガコン

少女「え?」

まずは車イスを立て直させ、続いて落ちている買い物袋を拾い上げる。チラッと確認するが、どうやら割れている物等は無いようだ。

一「大丈夫かい?　とりあえず、袋の中身は無事みたいだ」

少女「は、はい・・・ありがとうございます」

一「運が悪かったな。気をつけて行きなよ?」

注意するよう促してその場を去ろうとしたが・・・

少女「あ、あの！・・・これ、もしよかったらどうぞ」

そういって差し出されたのは一つのリンゴ。

一「これは？」

少女「助けてもらったお礼です」

一「そうか、ありがとう。大事に食べさせてもらうよ」

受け取ったリンゴを鞄に入れ、今度こそ少女と別れた。

少女「・・・ええ人やったなあ・・・っと、みんなが待っとるし、早う帰らんと・・・」

・・・・

一「ただいま」

天「お帰りなさいませ一成様。寒かったでしょう？　お風呂の準備出来てますよ」

一「ありがとう。じゃあ、早速入らせてもらっていいかな？」

天「もちろんです」

風呂場に直行し、手早く体を流して湯船に浸かった。

一「今日も色々あったな・・・」

謎の夢、神奈達の不思議な態度、そして・・・

一「・・・まさか、あんな所で出会うとは思わなかったな」

これから深く関わって行くであろう、過酷な運命に立ち向かう三人目の少女・・・

一「八神・・・はやて」

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

少女ＳＩＤＥ

少女「ただいま～」

？「お帰りはやて！」

少女「ヴィータ、ちゃんといい子でお留守番しとったか？」

？「もちろん！　それではやて、アイスは？」

少女「もちろん、買うて来たで」

？「やった～～！」

？「お帰りなさいはやてちゃん」

？「主はやて！　よくぞご無事で・・・！」

少女「も～、シグナムは心配し過ぎや。買い物くらいこうして私一人でも大丈夫なんやから」

？「で、ですが・・・」

少女「・・・なんてな、心配してくれてありがとなシグナム」

？「い、いえ、私は当然の事をしただけでして・・・」

少女「ふふ・・・」

？「あら、ずいぶん機嫌がいいわねはやてちゃん。何かいい事でもあったの？」

少女「ちょっとな」

？「・・・・」

少女「ザフィーラもただいま」

？「・・・・（コクン）」

少女「さて、すぐに夕飯の準備をせんとな」

？「あ、じゃあ、私もお手伝い・・・」

少女「却下や。シャマルは台所に入ったらあかん」

？「うう・・・」

少女ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

思ってもいない出会いを果たした旅人。しかし、彼にとっての予想外はこれだけではなかった。

場所は変わり、ここは市の外れの森の中。いつもは深い闇に覆われ、立ち寄る人間などいないのだが・・・

？「きゃあ！」

突如、何も無い空間から一人の少女が現れた。そのまま受け身も取らずに落下し、痛々しい声を上げる。

？「うう・・・痛い」

＜変な所に飛ばされちまったな・・・本当にここにアイツがいるのか？＞

？「で、でも、あのおじいさんがここにいるって言ってたし・・・」

＜今さらだが、あんな自称神の言う事なんか信じてよかったのか？＞

？「・・・多分」

＜まあいいさ、見つからなかったらボコればいいだけの話だしな。つーわけで、さっさと探しに行こうぜ＞

？「・・・ね、ねえ、やっぱり止めようか？」

＜はあ！？＞

？「だ、だって、急に押しかけたら迷惑になるかもしれないし・・・」

＜アイツがそんな事気にするタマかよ＞

？「で、でも・・・」

＜・・・ああ！　じれったい！＞

？「え？　ちょ、待っ・・・」

それっきり押し黙る少女。だが、次の瞬間・・・

？「ならオレが探してやるよ！　お前は寝てろ！」

＜うう、いきなり代わらないでよぉ・・・＞

先程までの弱々しい雰囲気から一変、力強い表情を醸し出す少女。
野性味溢れる瞳が夜空を捉える。

？「待ってろよ、すぐに見つけてやるからな～～！」

＜大丈夫かな・・・＞

A' s編第一話　覚醒の片鱗（後書き）

作「おい、聞いてくれ、A' s編が始まったばかりだと言うのに、やるかどうかもわからないStrikerS編の結末が浮かんでしまったぞ！」

一「なんだ？　結局続けるのか？」

作「だからわからんと言ってるだろ・・・望まれたらやるけど」

神「というか、そんな先の話より今の心配をせんか」

天「未だにA' s編のまとめが出来ていないんですよね。その場の勢いで書くから仕方ないですけど・・・」

刹「予告を書いた事も後悔しているみたいだしな」

作「俺・・・見切り発車がどれだけ危険か、身を以って知ったよ」

一「ところで・・・とうとう新キャラが出て来たな」

作「ああ、だけど再登場は結構先になるな。・・・まだ名前すら決まってないし」

一「・・・大概にしろよお前」

神「どうせ今回も読者の方に頼る気なんじゃろう？」

作「ハハハ、ナニヲコンキョニソンナコトヲ・・・」

刹「最早お約束みたいなものだからな」

天「すでに鴉の翼様とＳＩＮ様のお二人に案を頂いていますしね。お二人とも、ありがとうございます」

作「ふ、ふん！　俺にネーミングセンスを求める方がおかしいんだ！」

一・神・天・刹「「「「確かに」」」」

作「・・・見事な即答ありがとうございます」

一「さて、記念すべきＡ-ｓ編第一回目の贈り物報告会だ」

神「朝凪　夜風様から一成に称号を贈られたぞ。『全方向完備愛砲撃』だそうじゃ。ちなみに、読み方はオールフィールじゃと」

天「あら？　まだ何か送られて来るみたいですけど・・・」

？「Ｚｚｚｚ・・・・」

刹「・・・誰だ？」

一「これ・・・夜風様じゃないのか？」

作「マジで！？　いやぁ、いろいろお話したいと思ってたんだよな～～」

刹「どこから湧いて来た？」

作「って、寝てるし！　あの！　夜風様？　起きてくださいよ夜風様！」

夜「・・・黙れ」

バキッ！

作「へぶッ！？」

夜「我が眠りを妨げる者は誰だ・・・」

一「そこの男です」

作「おまっ・・・」

夜「・・・殺」

作「みぎゃあぁぁぁぁぁぁ！？」

天「・・・凄いですね、速過ぎて拳が見えませんよ」

神「ん？・・・なるほど、夜風様は眠りを妨げられるのが嫌いならしいぞ」

刹「なんだ、結局自業自得ではないか」

１０分後・・・

夜「ふう・・・すっかり眠気が覚めてしまった」

作「デローン・・・」

一「こんにちは夜風様。よく来てくれましたね」

夜「ああ、どうも。・・・そうだ、丼作りに来たんでした。早速作るんで少し待っていてください」

天「送ってくだされればいいのに、わざわざ作りに来てくださったんですね」

刹「好感の持てる男性だな。ああいうのはポイント高いぞ」

夜「出来ました、今回は天丼です。作者さんの分もありますので、後で食べさせてあげてください」

一「わかりました。ありがたく頂きますね」

夜「では・・・」

一「ふう、美味しかったな」

天「次は清浦刹那様からです。私達四人にイデオン。作者にバイラル・ジンを頂きました」

神「・・・・大きいの」

刹「『みんな星になっちゃえーーー！』・・・だったか？」

キィィィィィン！！

一「お、おい！　イデが反応してるぞ！」

刹「おお、まさか反応するとは」

天「のんきに言ってる場合ですか！　このままじゃバッドエンドまっしぐらですよ！」

神「ええい！　作者に何とかさせい！」

一「あの野郎ならバイラル・ジンで逃げて行ったぞ」

神「何じゃと！？」

キィィィィ・・・ン・・・・・

天「・・・お、治まったのですか？」

刹「やれやれ、どうにか命拾いしたな」

神「元はと言えばお主の所為じゃろうが！」

一「一件落着だな。とりあえず・・・あの馬鹿にイデオンソードでも放っておくか」

刹「最後は緋水殿からだ。ケーキにクッキー、アイスを頂いたぞ」

神「ふむ、計らずも食後のデザートになったの」

天「あなた、あれだけ食べたのにまだ食べるんですか？」

神「甘い物は別腹じゃ」

刹「なるほど、そうして得た栄養が全てそのはち切れんばかりの胸に取り込まれているのだな」

神「その通り・・・って、何を言わせるか！」

一「・・・美味いなこのクッキー」

第二話　初めてのお宅にお邪魔する時は土産くらい用意しろ（前書き）

関西弁がわからん・・・

そして、また感想返しが出来なかった・・・・何様だ俺・・・

第二話　初めてのお宅にお邪魔する時は土産くらい用意しろ

一「図書館に着いたぞ」

どこぞの霞さんの様なセリフを言いながら目の前の建物を見上げる。
前々から来てみたいと思っていたが、ようやく時間が取れた。

一「へえ、中はこんな風になってるのか」

特に目的があるわけではないが、面白そうな本があったら読んでみよう。

・・・・

一「ふむ・・・なるほど」

『何度言っても懲りない人間を×××する本』をゆっくりと閉じる。
偶々見つけた本だが思いの外勉強になった。いつか実践したいものだな。

？「あはは、そうなんだ」

棚に戻し、新しい本を探そうと別の場所に向かおうとすると、聞き憶えのある声が俺の耳に入った。

一「あの声は・・・」

声のした方に向かうと、予想していた人物を発見した。

一「こんにちはすずか」

す「え？　あっ、一成君。こんにちは、こんな場所で会うなんて・・・何か調べ物？」

一「いや、時間があったから来てみたんだが・・・まさか知り合いに会うとは思ってなかったよ」

す「ふふ、そうだね、私もびっくりしちゃった」

？「あ、あの・・・」

その時、すずかの隣にいた少女がおずおずと話かけて来た。

一「あれ？　キミは確か・・・」

少女「やっぱり、あの時助けてくれた人ですよね？」

その少女は数日前に関わった車イスに乗ったあの少女だった。

す「はやてちゃん、一成君の事知ってるの？」

少女「うん、さっき話した私が困っていた所を助けてくれたのがこの人や」

す「そうなんだ。優しいね一成君」

一「当たり前の事をしただけだよ」

少女「あの時は自己紹介出来なくてすいませんでした。八神　はやてです。あの、お名前は？」

一「俺は秋月　一成。すずかとは友達だ。あと・・・すずかと同い年だから敬語も必要ないよ」

は「え！？」

一「・・・予想通りの反応ありがとう」

す「あはは・・・」

は「そ、そうだ秋月君」

一「一成でいいよ。どうした八神さん」

は「じゃあ一成君。私もはやてでええよ。あのな、この前のお礼をちゃんとしたいんやけど」

一「お礼ならあのリンゴで充分だよ」

は「それじゃあ私の気がすまへんの。それでな、一成君さえよかったら夕食ごちそうさせて欲しいんやけど・・・どう？」

一「夕食？」

は「こう見えても料理の腕には自信があるんや」

一「ふむ・・・」

は「迷惑・・・かな？」

一「とんでもない、ぜひともごちそうになりたいな」

は「ほんまに！？　よかったわ～」

す「よかったねはやてちゃん」

は「すずかちゃんが一成君と友達やったおかげや。おおきにな」

す「クスッ、どういたしまして・・・でいいのかな？」

いったん外に出て、携帯で天音に夕飯がいらない事を伝え、再びすずか達の元へ戻った。

その後、用事があるというすずかが一足先に帰宅し、俺達もはやての家に向かう事になった。

は「あ、一成君、迎えが来とると思うから少し待っといてな」

一「迎え？」

？「お待たせはやてちゃん」

？「主はやて、お迎えにあがりました」

図書館前に立つ俺達に、二人の女性が近づいて来た。

？「お前は誰だ？」

桃色の髪の女性が眼光鋭く俺を見据える。何だか今にも襲いかかって来そうだ。

？「もう、シグナム、いきなりそんな態度は失礼でしょ」

は「シャマルの言う通りや、あかんでシグナム」

？「し、失礼しました主はやて」

は「謝るんは私やなくて一成君やろ？」

？「一成君？　はやてちゃんの知り合いなの？」

一「初めまして、秋月　一成と言います。はやてとは偶然出会いまして・・・」

数日前の出来事を話すと、ようやく俺を睨んでいた女性が警戒を解いてくれた。

？「そうだったの・・・はやてちゃんを助けてくれてありがとう一成君」

？「その・・・すまなかったな。てっきり主はやてを狙う者だと・・・」

一「狙う？」

？「い、いや、何でもない」

は「ほらほら二人とも、自己紹介がまだやで」

？「私はシャマル。よろしくね」

？「シグナムだ・・・」

一「外国の方ですか？　はやての親戚か何かで？」

シャ「ま、まあ、そういうものよ」

は「今日はこの前のお礼に一成君を夕食に招待したからな。一緒に二人を待ってたんや」

シ・シャ「「え!?」」

は「どしたん？　そんな驚いて」

シ「な、何でもありません」

は「じゃあ一成君、私の家まで案内するな」

一「ああ、よろしく」

こうして、何故かはやての家にお邪魔する事になった。・・・・どうしてこうなった。

シ「（シャマル・・・この少年）」

シャ「（ええ、微量だけど魔力を感じる。巧妙に隠してるけど、多分・・・）」

シ「（警戒しておくか）」

シャ「（そうね、もし管理局の人間だとしたら、いろいろまずい事になりそうだし）」

一「あの、何か？」

シャ「え？　ええっと・・・一成君ってカッコいいな～と思って・・・」

は「シャマルって年下趣味やったんか？」

シャ「そ、それは・・・」

は「それは？」

シャ「・・・そ、そう！　私は年下好きなの！」

は「・・・一成君、あまりシャマルに近寄らん方がええかも」

一「わかった・・・」

シャ「（ううう・・・余計な事言わなければよかった・・・）」

シ「・・・・・」

は「ひょっとして、シグナムも？」

シ「いえ、違います」

・・・・

は「ただいま～！」

？「お帰りはやて！・・・・誰だお前」

玄関を開け、はやてが声をあげた瞬間、奥から一人の少女が飛び出して来た。はやてに抱きつきながら俺を睨んで来る少女。

は「私の友達や。あいさつし」

？「・・・ヴィータだ・・・じゃなくて、です」

一「秋月　一成です。よろしくヴィータ」

ヴィ「ふん・・・」

？「・・・・・」

一「ん？　この犬は」

は「ザフィーラって言うんや」

一「よろしくなザフィーラ」

ザ「・・・・（コクン）」

シャ「ほらほら、いつまでも玄関で話してないで、リビングに行きましょ」

は「そうやな。こっちや一成君」

リビングに向かうと、はやてはそのままキッチンに引っ込んでしまった。

は「すぐ作るから少し待っててな」

一「何か手伝う事あるか？」

は「何言うてんの、一成君はお客様なんやからゆっくりしとき」

と言われてしまったので、とりあえず適当な場所に腰をおろしたのはよかったのだが・・・

シ「（ジロ・・・）」

シャ「（ニコニコ・・・）」

ヴィ「（ジロ・・・）」

ザ「（ジーーッ）・・・」

何故か俺を囲むように座り込む三人と一匹。シャマルさんはニコニコと微笑んでいるが、後の二人は相変わらずだ。ザフィーラの表情？　読めるわけない。

一「どうしたんだ?」

ヴィ「・・・何でもねーです」

一「無理して敬語使わなくてもいいぞ」

ヴィ「・・・わかった」

一「この座り方に意味は?」

シ「私達がどこに座ろうと関係ないだろう」

一「・・・・」

予想してはいたが、どうやら歓迎されてはいないようだな。下手な事をしたらロクな目に遭いそうにない。

は「出来たで~!・・・って、何しとるんみんな?」

シャ「何でもないわよ。それじゃあ、料理を並べなくちゃね、シグナムも手伝って」

シ「ああ」

シグナムさんとシャマルさんの手により、テーブルに次々と料理が並べられていく。

一「・・・あの短時間でこれだけ作ったのか？」

は「下準備はしてあったからな。それに言うたやろ？　料理には自信があるって」

やがて、全ての料理が並べ終えられ、全員が席に着いた。

は「それじゃあ・・・頂きまーす！」

全員「頂きます！」

とりあえず、目の前の煮物に箸を伸ばす。

は「どうや、一成君？」

一「ああ、とても美味しいよ」

は「そう？　よかったわ～」

ヴィ「当たり前だ、はやての料理はギガウマだからな、不味いなんて言ったらアタシがブッ飛ばす！」

は「もう、何言うてんのヴィータ」

一「いや、本当に美味しいよ。はやてはいい奥さんになるな」

は「そ、そんな事あらへんよ・・・／／」

シャ「うふふ、私もそう思うわよはやてちゃん」

は「あ～もう！　この話は終いや！」

ヴィ「あっ！　おいシグナム！　そのおかずはアタシんだ！」

シ「先に取っておかなかったお前が悪い」

ヴィ「うう、最後の一個だったのに・・・」

一「ヴィータ、俺のでよかったらあげるよ。取り過ぎてしまってな」

ヴィ「ホントか！？　な、なら仕方ねえな、アタシが食ってやるよ」

一「ありがとう」

ヴィ「ふん・・・」

口調とは裏腹に嬉々として受け取るヴィータに、思わず笑みがこぼれる。

は「おおきにな、一成君」

一「何の事だ？」

は「ふふ・・・」

こうして、団欒の時間は過ぎて行った・・・

一「今日はありがとう。本当に美味しかったよ」

は「な、なあ一成君、もしよかったら、また来てもええよ」

一「それは駄目だ」

は「え？」

一「今度は俺の家に招待するよ。いいだろ？」

は「ええの・・・？」

一「俺達、もう友達だろ？」

は「・・・うん！」

シ「それでは主はやて、私は秋月を送っていきますので」

一「え？　別に大丈夫ですけど」

シャ「男の子とはいえまだ子どもなんだから、危ないでしょ」

一「それはそうですが、シグナムさんはいいんですか？」

シ「？　どういう意味だ？」

一「俺を送った後一人で帰る事になりますけど、それこそシグナムさんの様に綺麗な女性の一人歩きは危険じゃないかと・・・」

シ「なっ・・・／／」

一「ほら、顔を赤くして熱もありそうですし」

シ「う、煩い！　さっさと行くぞ！」

グイッ！

一「うおっ！？」

凄い力で腕を引っ張られそのまま家を飛び出してしまった。

は「シグナムがあんなに焦るんも珍しいな」

シャ「あんな風にストレートに言われちゃったら仕方ないわよ。ただでさえ言われ慣れてないんだから」

は「・・・一成君自身はあまり自覚してないみたいやったけど」

シャ「将来が恐ろしいわね・・・」

ヴィ「な、なあはやて、あいつ、次はいつ来るんだ？」

は「なんや、ヴィータも一成君の事気に入ったんか？」

ヴィ「べ、別にそうじゃないけど、あいつ、おかずくれたし、多分いいヤツだと思うし・・・」

は「そうやなぁ、近い内に一成君のお家に・・・あ！」

シャ「どうしたのはやてちゃん？」

は「・・・家の場所聞くの忘れてしもうた」

シャ「大丈夫よ、後でシグナムに教えてもらいましょ」

は「あ、そっか」

・・・・

一「ここが俺の家です」

はやての家を出てから数十分後、自宅に到着した。

一「ありがとうございましたシグナムさん」

シ「・・・秋月」

一「はい？」

シ「お前が何者なのか、今は詮索しない。だが・・・主はやてに危害を加えるつもりならば・・・私は容赦しないぞ。例え、お前が主はやての友人だとしても」

一「・・・・・」

シ「それだけだ・・・ではな」

一「本当に一人で大丈夫ですか？」

シ「よ、余計な心配は無用だ！」

先程の様に顔を赤らめて走り去って行くシグナムさん。やはり無理をさせてしまったようだ。

一「（本当にプログラムなのか？・・・・いや、はやてのおかげか）」

彼女達が感情を持つようになったのははやての影響だ。シグナムさん達をプログラムではなく、家族として接しているからこそあそこまで感情豊かになったのだ。そして、そんなはやてだからこそ、みんな心から慕っているのだろう。

≪お前が何者なのか、今は詮索しない。だが・・・主はやてに危害を加えるつもりならば・・・私は容赦しないぞ。例え、お前が主はやての友人だとしても≫

出会ってまだ間もないが、俺の決意を固めさせるには充分だった。

一「失う辛さや悲しみを・・・二度も味わう必要は無い」

第二話　初めてのお宅にお邪魔する時は土産くらい用意しろ（後書き）

作「グフフ・・・今回もフラグが立ったな、回収する時が楽しみだ」

一「また貴様は余計な事を・・・」

天「私としてはシャマルさんにショタコン疑惑が浮上した事が可哀そうで仕方ないんですが・・・」

神「それを言うなら、全くセリフが無かったザフィーラの方が哀れではないか」

作「しょうがないだろ、今は犬モードなんだから」

刹「あれが合法ロリと言うやつか、ヴィータ・・・勉強になるな」

神「メタな発言は控えろ刹那」

作「顔合わせも終わったし、いよいよ本格的なスタートなわけだが・・・最近本編以外のネタばっかり浮かぶんだよな」

刹「例えば？」

作「夢ネタとか、バレンタインデーネタとか」

天「バレンタインデーはわかりますけど、夢って？」

作「普段絶対言わないようなセリフやあり得ないシチュエーションで女性陣が一成に迫られるんだが、実は夢で、飛び起きた後悶える

っていう・・・」

一「うん、心底どうでもいいネタだな」

作「だよなぁ・・・何やってんだろ俺」

神「・・・そんなにすぐ否定せんでもよいのではないか？」

天「・・・そうですね、何事もチャレンジしてみるのが大切ですよ」

刹「・・・ふむ、つまり夢とはいえ作者公認で我が君と○○○や××できるわけだな。夢ならば我が君に拒まれる事も無いだろうし」

一「お、おい、みんな・・・」

刹「というわけで作者、やってみろ。というかやれ」

作「おお、賛成してくれるのか。ならその内書いてみるか」

一「なん・・・だと・・・・」

一「・・・贈り物報告会に移るぞ」

神「まずは緋水様からじゃな、ブラックホールと命の果実（バトルスピリッツ仕様）を頂いたぞ」

一「・・・俺、バトスピ知らないんだが」

天「私もです」

刹「同じく」

神「もちろん妾も知らぬ。おい作者、お主ならわかるじゃろ？」

作「・・・・」

一「まさか・・・」

作「・・・ソノマサカディス」

神「使えんの・・・」

天「使えませんね・・・」

刹「使えないな・・・」

作「・・・じょ、上等だ！　次回までに調べてキッチリ説明してやるからな！　覚悟してろ！」

天「次は朝凪　夜風様からです。蒸しパンと・・・これは、手紙ですか？」

作「その蒸しパン・・・俺が頂く！」

一「何勝手に食ってんだお前！」

刹「手紙の方にはなんて書いてあるんだ？」

天「えっと・・・『コレを読んだ方へ　この蒸しパンはただの蒸しパンです。ただし、一人を決めてこの蒸しパンを食べさせて、その人の存在が無いように振る舞って下さい。その後、このドッキリ成功と書かれた札を掲げてください　朝凪より　ＰＳコレを食べた人が妙な事をしようとした場合、上からマネキンが落ちて来ます』・・・ですって」

神「ほう・・・これはまた面白そうじゃな」

天「一成様、このお手紙を・・・」

一「なになに・・・へえ」

作「なんだよ、俺にも見せてくれよ」

刹「さて、では次の贈り物に移るか」

一「そうだな、次は何方からだ？」

天「えっとですね・・・」

作「おいおい、無視するなよ～～～」

神「ん？　ところで、作者のヤツはどこに行ったんじゃ？」

一「作者？　誰の事を言ってるんだ神奈？」

刹「ここには最初から我等しかいないではないか」

神「おお、そうじゃったな」

作「・・・いいだろう、そこまでするならこっちも考えがあるぞ」

ゴソゴソ

作「まずは一成、この油性マジックで顔に落書きしてやる」

ヒューー・・・ガツン！

作「痛っ！？　ま、マネキン？　何で上から・・・ええい！　ならば神奈に膝カックンを・・・」

ヒューー・・・ガツン！

作「ぐはっ！　だ、だったら・・・天音の耳に息を吹きかけて・・・」

ヒューー・・・ガツン！×２

作「二個ッ！？　こうなったら、刹那にキスを・・・」

ヒューー・・・・ガツン！×１０

作「か・・は・・・・・」

一「・・・・そろそろいいか」

神「作者よ、この札を見るがよい」

作「・・・ドッ・・・キ・・・リ？」

刹「ふふ、なかなか面白い物を見せてもらったぞ。まあ、我にキスしようとしたのは許せんがな」

作「・・・ナンテコッタイ」

一「どうやらよっぽど堪えたみたいだな」

天「無視されるのは誰でも辛いですからね」

刹「そうだな、だからこそ・・・」

一・神・天・刹「「「「イジメ、駄目絶対！」」」」

一「さて、綺麗に纏まったところで、今回は終わりか？」

天「いえ、あとお一人残ってます」

神「清浦刹那様じゃな。じゃが、今回は・・・」

？「おお！　ホントに来ちゃったよ！」

？「落ち着きなさい大和、みっともないですよ」

刹「ん？　あなた達は・・・清浦刹那殿と、その持ちキャラで謝り上手の大和殿じゃないか」

清「ご説明ありがとうございます刹姉」

大「ちょ、俺の紹介おかしくないですか！？」

天「詳細は感想を見てくださいね」

大「うわ！　生天音さんだ！　やっぱ綺麗だな～～」

天「うふふ、ありがとうございます」

一「刹姉？・・・そういえば、その愛称は清浦刹那様から頂いたんだったな」

刹「そうか、あなたが・・・ふふ、あなたの様な可愛らしい人からそう呼ばれるとは・・・光栄だな」

清「え、あの・・・」

刹「ふふ、本当に可愛らしい・・・」

清「あわわわわ・・・」

神「何しとるんじゃお主はぁ！！」

スパァァァァァン！！！

刹「・・・おお、我とした事が、ついムラムラと」

天「つい・・・じゃありません！　トラウマになったらどうするつもりですか！」

カシャ！

一「何してるんですか大和さん？」

大「いや、せっかくなんで写真でも撮ろうかと」

作「大和さん、後で俺にも一枚頂けますか？」

大「モチです」

グシャ！

大「うお!?　俺のカメラが・・・・！」

清「ナニシテルノカナ・・・ヤマト?」

大「ヒィッ!?」

刹「貴様もだ・・・」

作「お、落ち着け！　俺は冗談で」

大「あ！　ずるいですよ作者さん！」

清・刹「「問答無用!!」」

大・作「「ぎゃあぁぁぁぁぁぁ!?!?!?」」

一「・・・飛んだな」

神「あんな事しでかしたのじゃから当然じゃ」

天「私だって勝手に写真撮られたら怒りますよ」

清「せっかく作者さんとお話出来るかと思ったのに・・・これじゃあ無理そうですね」

刹「なに、また来ればいい話だ」

清「そうですね、またいつかお邪魔しに来ます。帰るよ大和」

大「ピクピク・・・」

清「・・・立たないとまたオハナシするよ」

大「サーイエッサー！！」

清「それでは、失礼しますね」

ヒュン！

一「・・・賑やかな人達だったな」

第三話　動き出す闇（前書き）

リーゼアリアとリーゼロッテ・・・いちいち入力するのがめんどいです。

ちなみに口調が違うという苦情は受け付けませんのであしからず。

第三話　動き出す闇

はやてとの再会から数日、俺は暇さえあれば彼女に会いに行っていた。おかげで守護騎士の四人とも多少は打ち解ける事が出来た。

そんな中、俺となのは、フェイトの三人はリンディさんに呼ばれ、再びアースラへと足を運んだ。

一「お久しぶりですリンディさん」

リ「ええ、みんな元気そうで何よりね」

な「はい」

フェ「あの、リンディさん、遅くなっちゃいましたけど・・・色々ありがとうございました」

プレシアさんの処遇について一番尽力してくれたのはリンディさんだった。彼女がかけあってくれなければ面倒な事になっていただろう。

リ「ふふ、気にしないで。親子は一緒にいるのが一番なんだから」

ウインクするリンディさんにフェイトは微笑んだ。

ク「やあ一成、よく来てくれたな」

エ「久しぶりだね、元気してた？」

一「ああ、二人も変わりない様だな」

久しぶりの再会という事で、しばらく雑談を交わす俺達だったが、リンディさんが本題に入った。

リ「実はね、ここ最近魔導師やリンカーコアを持つ一般人、野生動物が襲われ魔力を奪われる事件が多発してるの。先日も管理局員が数名襲われたわ。あなた達にも関わる事だからこうして話しを聞きに来てもらったの」

ク「被害者はみんな例外無くリンカーコアから魔力を奪われている。犯人の目的が魔力である事は間違いないだろう。そうなればキミ達ほどの魔力を持つ者が狙われる可能性は高いだろうからな」

一「・・・さっきから気になるんだが、リンカーコアとは何だ？」

エ「リンカーコアっていうのは魔導師が持つ魔力の源の事だよ」

なるほど、俺にとってのマナと同じものか。

な「でも、何でそんな事を？」

ク「・・・恐らく、あるロストロギアが関わっている」

フェ「それは？」

リ「そのロストロギアの名は・・・闇の書。第一級捜索指定ロストロギアよ」

一「闇の書・・・」

ク「闇の書は魔導師のリンカーコアから魔力を蒐集し、それに応じてページが増えていく。そして、最後のページが埋まる事によって闇の書は完成するんだ」

な「完成するとどうなるの？」

なのはの問いに顔を俯かせるクロノとリンディさん。そして、そんな二人を悲しそうに見つめるエイミィ。

フェ「クロノ？」

ク「あ、ああすまない。そうだな・・・少なくともロクな事にならないだろうな」

一「そうか・・・わかった。警戒しておくよ。なのははユーノに、フェイトはプレシアさんとアリシアちゃんに伝えておいてくれ」

な・フェ「「うん」」

ク「これで話は終わりだが、実はキミ達にもう一つお願いがあるんだ」

一「何だ？」

ク「キミ達に会いたがっている人がいるんだ。よかったら僕と一緒に今から本局に向かって欲しい」

一「俺は別に構わないが、二人はどうする？」

な「私も行くよ」

フェ「なのはが行くなら私も」

一「・・・・という事で、案内を頼む」

ク「ありがとう。それじゃあ艦長、行ってきます。エイミィ、キミもついて来てくれ」

エ「了解～～」

リ「行ってらっしゃい。提督によろしくね」

総勢五人で転送装置を利用して本局に向かった・・・

一「ここが本局か・・・」

ク「じゃあ、僕の後について来てくれ」

クロノとエイミィの後を三人で追う。初めて来る場所という事で、二人とも辺りをキョロキョロと見渡している。

しばらく通路を歩いていると、ある部屋の前に到着した。

一「ここは？」

ク「無限書庫・・・管理局が管理している世界の情報が収められている場所さ」

説明しつつクロノが扉を開けた。すると、二人の女性がこちらを見ていた。顔が似ているので姉妹だろうか。

ク「やあ、やっぱりここにいたか二人とも」

？「クロすけじゃない！　久しぶり～～♪」

片方の女性がいきなりクロノを抱きしめた。何とか脱出しようともがくクロノだったが、無駄な抵抗になっていた。

ク「や、止めろ！」

？「ほ～う、師匠に対して随分な態度じゃない。そんな生意気にはお仕置きだぞ～～！」

ク「うわ～～～～！」

女性がクロノに熱烈なキスの雨を降らせ始めた。その様子に、エイミィは「またか・・・」と声を漏らし、なのはとフェイトは顔を真っ赤にしていた。

一「・・・色々突っ込みたい気分だが、とりあえず・・・あの二人は誰だ？」

エ「あの二人はクロノ君に魔法と近接戦闘を教えたリーゼアリアとリーゼロッテ。クロノ君の執務官研修を担当したギル・グレアム提督の使い魔だよ」

一「なるほど、だから師匠か。それにしても・・・あの人達はあれが普通なのか？」

エ「うん」

いつの間にかもう一人の女性にも抱きしめられているクロノと目が合った。

ク「（助けてくれ一成！）」

一「（・・・すまん）」

ク「（薄情者ぉ！！）」

クロノとの心の会話、五秒で終了。

？「ん？　ところで・・・キミ達は？」

標的が俺達に切り替わり、ようやくクロノは解放された。よろよろと体を揺らしながら戻ってくるクロノ。

一「初めまして、秋月　一成です」

な「高町　なのはです」

フェ「フェイト・テスタロッサです」

？「私はリーゼアリア、よろしくね」

？「リーゼロッテよ。それにしても、やるねクロすけ、こんな可愛い女の子と知り合いなんて」

リア「ホントよ、まったく、私というものがありながら」

ク「誤解を生むような発言はしないでくれ！」

クロノへのいじりが終わり、せっかくという事で無限書庫を案内してもらう事になった。

一「・・・・凄いな」

無限書庫とはよく言ったもので、膨大な数の本が本棚となっている壁に並べらている。さらに広さも異常で天井が見えない。奥域も相当な物だ。それだけ管理局が関わっている世界は多いのだろう。

ク「驚いたかい？　僕も最初に来た時は圧倒されたからな」

一「なあ、ここなら闇の書の事も詳しく知る事が出来るんじゃないか？」

ク「確かに可能だろうが、実はほとんどが未整理のままなんだ。本来なら年単位で調査する場所だからな」

一「それは大変だな」

ク「ああ、だから少しでも人の手が欲しいんだが、生憎都合のつく局員がいなくてね」

一「・・・・ならユーノに頼んでみたらどうだ」

ク「ユーノ？　なぜ彼が」

一「なんとなくこういうのが得意そうだと思ってな」

原作に沿わせるため・・・とは言えない。

ク「そうか、彼はスクライア一族の・・・これは期待してもいいかもしれないな」

一「なら頼んでみよう。なのは！　ちょっと来てくれ」

向こうでフェイトと一緒に本を読んでいたなのはを呼び、事情を説明する。

な「うん、わかった、ユーノ君に頼んでみるよ」

ク「ありがとう、助かるよ」

な「でも、こんな事になるならユーノ君も連れてくればよかったな」

一「そういえば、なんで来なかったんだ？」

な「わからないの、「どうせ僕なんて日常編でも出番なしさ」って言ってケージから出て来ないんだもん」

ク「どういう意味だ？」

一「・・・・さあ」

多分、いや、ほぼ確実にユーノは協力してくれるな。

何故か確信が持てた・・・

適当に時間を過ごした俺達は入口に戻っていた。

一「そういえば、俺達に会いたいっていうのはこの人達なのか？」

ク「違うよ。グレアム提督さ」

一「グレアム？」

？「やあ、待たせたね」

その時扉が開き、新たに初老の男性が室内に入って来た。

ク・エ「「提督！」」

リア・リロ「「父様♪」」

リーゼアリアさんとリーゼロッテさんが満面の笑みで男性に抱きつき、クロノとエイミィは畏まった態度を取っていた。

な「誰だろう？」

フェ「クロノ達の態度からして、あの人がグレアムって人なんじゃないかな」

一「だろうな」

？「キミ達は・・・」

一「初めまして、秋月　一成です。そして、この娘は高町　なのは。こっちの娘がフェイト・テスタロッサです」

な・フェ「「は、初めまして」」

？「おお！　キミ達がクロノが言っていた民間協力者だね。私はギル・グレアム、よろしく頼むよ」

グレアムさんが穏やかな声で手を差し出して来る。俺はその手をゆっくりと握り返した。なのはとフェイトも握手を交わす。

グ「ここにいるという事は、もしかして私に会いに来てくれたのかな？」

一「はい、あなたが俺達に会いたがっているとクロノから聞きまして」

グ「そうか、すまないね、本来なら私の方から訪ねるのが礼儀なのだが、提督という肩書きがそうさせてくれなかったのだよ。許して欲しい」

物腰丁寧なその態度に、最初は畏縮していたなのはとフェイトもすっかり落ち着いたようだった。

グ「キミ達にはぜひとも感謝と謝罪をしたいと思ってね、若い身でありながらよく協力してくれた、本当にありがとう。そして、巻き込んでしまって本当に申し訳ない」

な「い、いえ・・・／／」

フェ「そんな・・・／／」

深々と頭を下げるグレアムさん。まさかそんな事を言われるとは思っていなかったのだろう、二人は顔を赤らめ照れていた。

一「・・・・」

優しい人・・・それがグレアムさんの印象だった。だが、忘れては

いけない、この人の心の中では今も復讐の炎が燃えている事を。

グ「ん？　どうかしたのかい？」

一「・・・・いえ」

その後、適当な会話で時間を潰し、俺達は帰る事にした。

一「それでは、俺達はこれで」

グ「そうか、また来なさい。今度は私の部屋で紅茶でも飲もうじゃないか」

ク「では提督、僕達も戻ります」

リア「クロすけもまた来なよ。今度もたっぷり可愛がってあげるから♪」

ク「断固拒否する！」

エ「失礼します」

な・フェ「「さようなら」」

クロノ、エイミィ、なのは、フェイトの順で部屋を出ていくが、俺はその場に佇んでいた。

リロ「どうしたの？　みんな行っちゃったよ」

一「・・・・グレアムさん」

グ「何だい？」

一「復讐は・・・何も生みませんよ」

グ「ッ・・・・！？」

俺の言葉にグレアムさんは目を見開いた。リーゼアリアさんとリーゼロッテさんも表情を変えて俺を見つめている。

一「それでは・・・」

俺は部屋を後にした・・・

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

グレアムＳＩＤＥ

グ「彼は一体・・・何故知っているのだ」

まさか、感づかれたのか？　だとしたら彼を野放しにしておくわけにはいかない。だが、彼の戦闘力の前では私など塵芥に過ぎない。戦えば敗北は必至だ。どうすれば・・・

リア・リロ「「父様・・・」」

？「悩んでいるようだな、グレアム・・・」

一成君と入れ替わる様に一人の男・・・ゼノンが現れた。

ゼ「彼が一成君か・・・確かに強力な力を秘めているようだな」

？「・・・所詮剣の力のおかげ、彼自信は大した事ない」

その背後からゴシックドレスを纏った少女・・・無明が顔を覗かせる。

ゼノンと無明・・・彼らと関係を持つようになったのはつい最近の事だ。いきなり目の前に現れたと思えば、私の計画について話し始めたのだ。

当初、計画を阻止するために現れたのだろうと思い、始末しようと思ったのだが、いざ戦ってみると、彼らの圧倒的な力の前に屈するしかなかった。

そのまま殺されると思っていたのだが・・・

≪何か勘違いしているようだが、私達はキミに協力する為にやって来たのだよ・・・≫

正直信用出来なかったが、彼等ほどの力を利用しない手はない。そう結論づけた私は、古くからの友人という事で、二人を本局に置く事にした。

グ「どうやら、彼は私の計画に気付いているらしい」

ゼ「だろうな（なにせ、彼も私達と同じ異邦人だからな）」

無「別にいいじゃない、どうせ消すんだから」

リア「簡単に言うけど、あいつの強さはハッキリ言って異常だよ。いくらアンタ達でも・・・」

無「アンタ達でも・・・何？　まさか、私があんな雑魚にやられるとでも？」

リア「ヒッ・・・・・!?」

無明の凄まじい殺気の込もった視線を受け、アリアは短い悲鳴と共に崩れ落ちた。

ゼ「落ち着きたまえ無明。それ以上やると彼女が死んでしまうぞ」

無「・・・・・ふん」

何故か一成君に対し異常な反応を示す無明。彼との間に何かあったのだろうか。

ゼ「さて、それでは失礼するよ。そろそろ恒例のオセロの時間だからね」

無「・・・今度こそ私が勝つ」

ゼ「ふっ、そう簡単には勝たせてやれないな」

グ「待ってくれ、前から聞きたかったんだが、なぜキミ達は私に協力してくれるのだ?」

ずっと気になっていた事を二人に尋ねる。

無「私はあの男を殺せればそれでいい・・・」

そう言い残し、無明は出て行った。

ゼ「やれやれ、せっかちで困るな」

グ「ゼノン、キミは・・・」

ゼ「理由かい？　簡単な事だよ」

扉の向こうでゼノンが振り向いた。

ゼ「私も・・・復讐者だからさ」

そのまま扉が閉まり、彼の姿は見えなくなった・・・

第三話　動き出す闇（後書き）

作「始まったばかりだが、物語は一気に加速するぜ！」

一「だからオリキャラをポンポン出すなっての」

天「そういえば、最近本編でユーノ君の姿を見てませんでしたね」

神「そうじゃな、無限書庫に通う事になったらますます出番が減るのではないか？」

刹「仕方ないだろう。それが彼の運命なのだ」

作「さて、導入部も終わった事だし、そろそろ守護騎士たちと一戦やらかすか」

一「結局、俺の立ち位置はどうなるんだ？」

作「さあな、だが気合入れろよ。今回はお前大変な目に遭いまくるからな。無印みたいにスラスラ進むと思うなよ」

神「オリキャラ紹介はどうするんじゃ？」

作「あ～～・・・その内やるよ」

天「・・・絶対やりそうにないですね」

一「さて、じゃあ贈り物報告会に移るか」

神「緋水様から一成に彼岸花と百合の花を頂いたぞ」

天「綺麗ですね。確か花言葉は・・・彼岸花が『情熱』や『再会』。百合の花は色によって色々ですね。黄色なら『飾らぬ美』、白なら『純潔』といった具合に」

刹「我が君にはピンクが似合うのではないか？」

一「ピンクの花言葉って何だ？」

刹「『思わせぶり』」

神・天「「・・・・ああ」」

一「？」

天「次はナオ様からです。作者宛てにMイレイザーとPイレイザー、私と神奈、刹那に思い描いた姿が写る写真を頂きました」

作「おお！　物理と魔法両方を無効化する素敵エレメントじゃないか！」

刹「ふむ、これでまた我が君のあんな姿やこんな姿が・・・」

天「あ、言い忘れてましたけど、今回はそういったものは出ない仕様になっているそうです」

刹「なん・・・だと・・・・・」

神「・・・・何故この程度の事で崩れ落ちるのじゃ」

刹「清浦刹那殿からは特製のショートケーキを頂いたぞ」

一「美味そうだな。頂きます」

作「ん？　何だ一成、苺に手を出してないじゃないか」

一「ああ、俺は・・・」

作「嫌いなのか？　じゃあ俺が食ってやるよ」

一「ッ！？」

神・天・刹「「「あっ・・・・！」」」

作「ん～～、美味い！　あれ、どうしたんだ三人とも・・・・」

一「・・・・キサマ、イマナニヲシタ」

作「何って、苺を・・・ど、どうしたんだ一成？　目が虚ろだぞ」

一「ソレハオレノイチゴダロウ。ナニシテクレテンダキサマ」

作「だ、だって、お前苺嫌いなんだろう？」

一「ダレガソンナコトヲイッタ？　ミミワイテンジャナイカ？」

作「・・・もしかして俺、自ら死地に足を踏み入れちゃった？」

神・天・刹「「「・・・・・（コクン）」」」

作「あ、あはは・・・・オワタ」

一「・・・・ネジキル」

作「何処を!?　お、おい止めろ!　そこだけは勘弁してくれぇぇぇぇぇ!!!」

プチュ♪

神「・・・本来なら一成の番じゃが、代わりに妾が・・・刹那様からジェネシックガオガイガーのデバイスとＯＯクアンタを頂いたぞ」

天「来ましたね、最強の勇者王にして究極の破壊神」

刹「正に我が君に相応しいデバイスだが・・・今は渡せんな」

神「じゃな、今渡せば跡形も無く作者が消え失せてしまうぞ」

天「では、一成様が正気に戻るまではＯＯクアンタの方を鑑賞して

いましょう」

神「ん？　これで終わりではなかったのか？」

天「実はですね、作者の思いつきで私達のＣＶのイメージを募集してみたら二つ程ご意見を頂いたので紹介しようと思いまして」

刹「ＣＶ　？　我達は原作キャラのイメージが使われているのだから声も同じではないのか？」

天「作者曰く「最早別人だから原作と同じ声優さんじゃ違和感あるんじゃね？」とのことです」

神「またくだらん事を考えたなあやつ」

天「まずは永遠の翼様からです。「一成の優しい感じは『あやかしびと』というゲームの主人公の声がしっくりくるかな」とのメッセージを頂きました」

神「調べてみたら保村真という声優だとわかったぞ。他にも、とある化学の超電磁砲やＭＡＪＯＲといった作品にも出演しておる様じゃな」

刹「次はナオ殿からだな。「自分的には一成は機動戦士ガンダムＳＥＥＤのキラ・ヤマトの声優さんがいいですかね」とのことだ」

天「保志総一郎さんですね。これは例を出さなくても皆さんの方がお詳しいんじゃないでしょうか」

神「それにしても、妾達のイメージは送られて来なかったみたいじゃな」

天「まあまあ、いいじゃないですか。こうして送って下さった方もいるんですから」

刹「それに、こうして紹介すればまた送ってくれる方がいるかもしれないだろうしな」

神「言われてみればそうじゃな。次回以降に期待するとしようかの」

第四話　こっそりやればバレないわけでもない（前書き）

A-S編二十話かからないかも。

第四話　こっそりやればバレないわけでもない

先「それじゃあみなさん、気をつけて帰ってくださいね」

お決まりのセリフと共に先生が教室を出て行く。今日も平和に学校生活を送る事が出来た。

な「一成君、お疲れ様」

なのは達がかばんを持って集まって来た。

アリ「兄様、一緒に帰ろ？」

一「すまない、今日は寄る所があってな、五人で帰ってくれ」

ア「また？　アンタ最近付き合い悪いわね」

一「また誘ってくれ。それじゃあな」

俺は一足先に教室を出た。

フェ「行っちゃった・・・」

す「何かあったのかな？」

・・・・・

ピンポーン！

？「は～い、どなたですか？」

一「俺ですシャマルさん」

シャ「一成君？　どうぞ、入っていいわよ」

放課後、ほぼ連日俺はこうしてはやての家に向かう様になった。特に何かしようというわけではなく、ただ彼女の顔を見る為だ。おかげでシャマルさんを始めとする三人と一匹ともすっかり顔馴染みとなった。

ザ「・・・・」

玄関を開けるとザフィーラが出迎えてくれた。その頭を撫で、一緒にリビングに向かう。

は「いらっしゃい一成君」

リビングでは、はやてとシャマルさんが仲良くお茶を飲んでいる最中だった。

一「こんにちははやて。悪いな、こうして連日押し掛けて」

は「そんなん気にせんといて、一成君やったら大歓迎やから」

シャ「そうよね、今日も一成君が来てくれるかずっと気になってたみたいだものね」

は「よ、余計な事言わんとって！」

シャ「ふふ・・・」

一「ありがとうはやて、そう言ってもらえると嬉しいよ」

は「う、うん・・・／／」

一「ところで、シグナムさんとヴィータはどうしたんだ？」

シャ「あの二人なら買い物に出てるわ、そろそろ帰ってくると思うけど・・・」

ヴィ「ただいま～！」

玄関の方からヴィータの声が聞こえて来た。

シ「主はやて、ただ今戻りました」

は「お帰り二人とも」

ヴィ「なんだ、今日も来たのかよ一成」

一「ああ、お邪魔してるよ」

二人も席に着き、とりとめのない会話をしながらお茶を楽しむ。

ヴィ「にしても、お前毎日のように遊びに来るけど・・・もしかして友達いねえのか？」

一「そんな事はない・・・と思うが」

この世界で出来た友達は・・・なのはにフェイト、アリサやすずか、アルフもそうだし、はやても友達になってくれた。それにアリシアちゃん・・・は妹か。プレシアさん・・・友達と言っていいのか？

一「（・・・女の子ばかりじゃないか）」

いやいや落ち着け・・・そうだ、ユーノとクロノがいるじゃないか！　他に男友達は・・・えっと・・・

一「（え、もしかして二人だけ？　しかも全員合わせて最大でも指で数えるくらいしかいない・・・？）」

ヴィ「お、おい、何でそんな泣きそうな顔してんだよ？」

シ「・・・お前の所為に決まっているだろう」

シャ「げ、元気出して一成君！　友達なんて作ろうと思えばすぐ作れるんだから！」

は「そ、そう、シャマルの言う通りや。それに、私と一成君も友達やろ？」

俺の手を優しく握りながら微笑むはやて。が、次の瞬間表情が一変した。

は「ううう・・・」

突如として胸を抑え、苦しげに顔を歪ませるはやて。

一「はやて？」

は「う・・ああ・・・・」

俺の声にも反応せず、ただただ呻くばかりだ。

シャ「はやてちゃん!?」

シ「くっ！　また発作か！」

ヴィ「はやて！　はやて！　しっかりしろよ！」

一「シャマルさん救急車を！　シグナムさん、はやてを寝かせてください！」

シャ・シ「「え?」」

一「早くしてください！　彼女を死なせる気ですか!!」

シャ・シ「「わ、わかった（わ）！」」

俺の一喝でシャマルさんは受話器を取り、シグナムさんははやてを抱きかかえゆっくりと横たわらせた。

一「はやて、俺の声が聞こえるか?」

は「か、一成君・・・」

一「ああそうだ、安心してくれ、もう少しで救急車が来るからな」

は「う・・ん・・・・」

弱々しく微笑むはやて、とにかく少しでも楽にしてあげないと・・・

シ「ヴィータ！　何処へ行くつもりだ！」

シグナムさんの怒声に振り向くと、ヴィータが玄関に飛び出そうとしていた。

ヴィ「決まってんだろ！　少しでも蒐集してはやてを楽にしてやるんだ！」

シ「馬鹿者！　声が大きい・・・！」

ヴィ「もがッ！？」

慌ててヴィータの口を抑えるシグナムさんだが、バッチリ聞こえていたので正直後の祭りだ。

は「はあっ・・・はあっ・・・・」

一「（なりふりかまっていられないか）」

はやての手を握り、心の中で詠唱を開始する。

一「（・・・アースプライヤー）」

俺の手を通じてはやてに回復魔法をかける。正直、シグナムさん達の前で使いたくはなかったが、今ははやての事が最優先だ。

は「はあっ・・はあっ・・・ふう・・・・」

少しずつだが呼吸が落ち着いて来た。何とか効果はあったようだな。

一「落ち着いたか？」

は「うん、何やポカポカしたと思ったらスーッと痛みが治まったんよ」

一「そうか・・・」

ヴィ「はやて、大丈夫なのか？」

は「ゴメンなヴィータ、心配かけて」

数分後、到着した救急車ではやては病院に運ばれていった。シャマルさんとヴィータも一緒だ。

家には俺とシグナムさん、そしてザフィーラだけが残された。

一「心配ですね」

シ「ああ・・・」

一「じゃあ、俺はそろそろ失礼しますね」

シ「・・・そうか」

初めて顔を合わせた時と同じような視線に見送られつつ、俺ははやての家を後にした。

シ「秋月　一成・・・・やはり見極めなくてはな」

・・・・・

一「はやて、大丈夫だろうか・・・」

発作は治まったみたいだが、あれはあくまで一時しのぎ、根本的な問題を解決しない限り彼女はこれからも苦しみ続ける事になる。

俺は真っ直ぐ家に帰ろうとしたが・・・予定を変更して公園に寄る事にした。

一「（・・・つけられているな）」

到着した直後、公園全体の雰囲気が一変した。ユーノのものとは違うが、これは結界だ。今の今まで遊んでいた子ども達の姿がいつの間にか消えていた。

一「・・・そろそろ姿を見せたらどうだ？」

？「やはり気付いていたか」

あまり焦った様子では無い声。俺はゆっくりと目を向けた。

一「シグナムさん？」

目の前に、先程までと違う格好、恐らくバリアジャケットだろう・・・に身を包み、デバイスらしき剣を持ったシグナムさんが立っていた。

シ「ほう・・この姿や剣を見ても驚かないのか。・・・やはり、

お前もこちら側の人間だったか」

一「いや、ただ状況について行けていないだけで・・・」

シ「ふん、そのような下手な誤魔化しが通用すると思っているのか？」

一「（ナンテコッタイ）」

っと、ふざけた事を言っている場合ではない。俺はシグナムさん達と闘りあう気は全くないのだからな。何とかして逃げないと。

シ「妙な考えは起こすなよ？　この距離ならばお前が動く前にこの剣でお前を貫くのは造作も無いのだからな」

どうやら俺が丸腰だと思っている様だ。ならば、そこを突くしかないな。

一「それで、そんな物騒な格好で俺を追って来た理由はなんですか？」

シ「・・・先程の主はやての発作、治めたのはお前だろう？　あの時、お前の魔力が主はやてに流れ込んだのを感じた」

一「・・・・」

シ「その件に関しては礼を言う。だが、これでお前をそのままにしておくわけにもいかなくなったのだ。答えろ秋月、お前は管理局の人間か？」

一「・・・確かに俺は管理局に協力しています。ですが・・・」

シ「やはりそうか。ならば・・・貴様は敵だ！」

一「ッ！？」

俺が言い切る前にシグナムさんは剣を振り下ろして来た。まずいな、完全に誤解されてしまったみたいだ。

一「シグナムさん、俺の話を聞いて下さい」

シ「問答無用！」

一「遮ったのはあなたでしょうが！」

こうなったら仕方がない、不本意だが力づくで話を聞いてもらおう。

ガキィィィィィン！！

シ「なっ！？」

再び振り下ろされる一撃を、双剣を交差させて受け止める。全くの予想外だったのだろう、シグナムさんの顔が驚愕に染まる。

一「はあっ！」

そのまま強引に押し返すと、シグナムさんはそのままバックステップで俺から距離を取った。

シ「なるほど、それが貴様のデバイスか。二刀流とは面白い」

一「これはデバイスじゃありませんよ。まあ、似たような物ですが」

シ「ここからが本当の戦いだ。改めて名乗ろう、我が名は『烈火の将』シグナム。そして、この剣の名はレヴァンティンだ」

一「・・・秋月　一成。旅人です。ちなみに、あなたから見て右の剣が神奈、左の剣が天音です」

何故か名乗らなければいけない気がしたので、とりあえず返す。そういえば、彼女達は『騎士』だったよな、そういった礼義にもこだわるってことか。

シ「いざ、尋常に勝負！」

一「・・・どうしてこうなった」

嘆いても仕方ない。こうなったら腹を括ろう。そうこうしている間にもシグナムさんが迫って来ていた。

シ「はあぁぁッ！」

一「甘い！」

振り下ろし、横薙ぎ、突き、その全てを打ち払う。その度に剣がぶつかり合う甲高い音と、大きな火花が迸る。

一「せあぁぁッ！」

ガギン！

シ「ぐッ・・・！」

反撃として繰り出した横薙ぎを防がれたが、強引に押しこむとシグナムさんの体勢が崩れた。

一「もらった！」

すぐさま剣を振り下ろしたが、シグナムさんは上空へと逃げた。しまった、飛行魔法の事をすっかり忘れていた。

シ「・・・レヴァンティン、カートリッジロード」

ガシュン！

シグナムさんの呟きと共にレヴァンティンから薬莢の様な物が吐き出され、直後、シグナムさんの魔力が大きく高まるのを感じた。

一「（あれがカートリッジシステムか）」

シ「行くぞ！　秋月！」

剣を構え、凄まじい速度で降下して来るシグナムさんに俺も切っ先を向けた。

一「オーバードライブ！！」

シ「斬り裂けレヴァンティン！！」

ギィィィィィィン！！！

何度目になるかわからない剣のぶつかり合い。そのあまりの衝撃に地面が大きく抉られた。

一「ちぇあぁぁぁぁぁぁ！！」

シ「ぐうぅぅ・・・うあッ！？」

苛烈する鍔迫り合い・・・それに打ち勝ったのは俺の方だった。レヴァンティンを弾かれたシグナムさんはそのまま大きく吹き飛ばされた。

ドゴン！

シ「が・・は・・・・」

体勢を整える間もなく地面に叩きつけられるシグナムさん。剣を杖にしてよろめきながらも何とか立ち上がった。

一「そろそろ落ち着いて俺の話を聞いてくれませんか？」

シ「だ、黙れ！　主はやては必ずお守りしてみせる！！」

近寄ろうとする俺に剣を向けるシグナムさん。やれやれ、この人もホントに人の話を聞いてくれないな。

シ「レヴァンティン、もう一度カートリッジロードだ！」

ガシュン！

再び吐き出される薬莢。それによりまたシグナムさんの魔力が高まった。

シ「（次が最後の一撃になるだろう。ならば・・・！）」

一「（・・・来る、恐らく今までで一番の攻撃が）」

シグナムさんは剣を大きく振りかぶった。対する俺も、双剣を交差させ身構える。

シ「紫電・・・一閃！！！」

一「クロス・・・ディバイダァァァァ！！！」

振り下ろされたレヴァンティンと左右から振り抜いた双剣が激突した。最初は拮抗していたが、徐々にシグナムさんの体が後退していく。

シ「まだだ！　レヴァンティン！！」

ガシュン！×２

レヴァンティンからさらに二つの薬莢が弾き飛ばされた瞬間、シグナムさんの力が爆発的に強まり、今度は俺が圧され始めた。

シ「これで・・・終わりだ！」

一「そうですね・・・終わりにしましょう」

スッ・・・・

神奈でレヴァンティンを受け止めつつ、天音を振り上げる。

シ「何を・・・・！」

一「はあぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

ガツン！

そして、レヴァンティンにではなく、神奈に全力で叩きつける。すると神奈の刀身から発せられていた光がさらに強まった。

シ「こ、これは！？」

一「押し切れぇぇぇぇぇ！！！」

共鳴する事によって威力を倍以上に高める。元々一本だった神奈と天音だからこそ出来る反則技だ。

カートリッジを三つロードしたシグナムさんもこれには耐え切れなかったようだ。先程と同じように地面に叩きつけられていた。

シ「・・・・・」

いつまで経っても起き上がって来ないので様子を見ると、意識を失っていた。シグナムさんの気絶によって公園を覆っていた結界も解けたみたいだ。

一「しまった、やり過ぎた・・・」

話を聞いてもらうために戦ったのに気絶させてどうする。というか、結界が解けた今、この場所でこんな状況じゃいらん誤解を受けてしまう。

一「・・・ん？」

視界の端に移ったのは大人一人が寝転んでも大丈夫な大きなベンチ。

一「・・・よし」

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

シグナムＳＩＤＥ

シ「う・・・ん・・・・・・」

一「気が付きましたか？」

シ「秋月？　私は一体・・・・・って！？」

目を開けた私の眼前に秋月の顔が至近距離であった。

シ「な、なななな何をををを!?!?!?」

一「気絶したまま放置するわけにもいかなかったですからね、ちょうどいいベンチがありましたんで横たわらせたのはよかったんですが、ほら、ベンチって固いじゃないですか？　そのままじゃ首を痛める事になりますから勝手ですが膝枕させてもらいました。あの辛さは俺もよく知ってますからね」

シ「そ、そうか、世話をかけたな。もう大丈夫だ」

そう言って私は上体を起こそうとしたが・・・

一「駄目ですよ、目覚めたばかりなんですからもう少し横になっていてください」

再び寝かせられてしまった。結構強引な所もあるのだな・・・・じゃなくて!!

シ「お、お前、わかってやっているのか?」

一「?　どういう意味ですか?」

シ「いや、何でもない」

何だ、私が気にし過ぎなのか？　し、しかし、膝枕など・・・／／

一「ふふ・・・」

シ「な、何がおかしいのだ？」

一「ああ、すみません。呼び方が戻ってよかったなと思いまして」

シ「呼び方？」

一「ほら、さっき貴様じゃなくてお前って呼んでくれたじゃないですか」

確かに、こいつの態度に毒気を抜かれたのか、自然と口から出ていた。

一「何にしても、これでゆっくり話が出来そうですね」

シ「・・・そうだな」

一「まず初めに、俺は管理局に協力していますが、管理局の人間というわけではありません」

シ「どういう意味だ？」

一「俺は俺の目的の為に動いているだけです。もし管理局が邪魔しようものなら俺は容赦なく潰しますよ」

シ「・・・そうか、しかし、そこまでするお前の目的とは何だ？」

一「友達を守る・・・ただそれだけです」

躊躇い無く答える秋月、その真っ直ぐな瞳、堂々たる答えに私は騎士の姿を垣間見た。

一「はやても俺の大切な友達です。守る事はあっても害するようなことは絶対にしません」

この少年は信用に足る人物だ。・・・私の騎士としての心がそう訴える。

一「なんて、簡単には信用出来ませんよね。だったら・・・」

突然秋月は辺りを見渡し始めた。そして、先程見せた剣の内の一本を再び手に取っていた。

一「この剣をシグナムさんに預けます。もし、この先俺がはやてを傷つけようとした場合・・・」

シ「（ゴクリ・・・）」

私は息を飲んだ。秋月が続けるだろう言葉がなんとなくわかったからだ。

一「その剣で俺を斬ってください」

シ「ッ・・・・！」

私は確信した。文字通り己の剣に命をかける・・・この少年は正真正銘の『騎士』だ。

シ「・・・いや、それには及ばん。お前の誠実さは今までの会話で充分理解した。私は・・・お前を信じよう」

一「シグナムさん・・・ありがとうございます」

ドキッ！

本当に嬉しそうに笑う秋月、その笑顔に・・・今まで感じた事のない何かが心の中に生まれたようなそんな気がした。

一「？　シグナムさん？」

ピト

シ「ひあッ！？」

何を思ったのかいきなり私の額に手を当てる秋月。その行動に私は間抜けな声を出して固まってしまった。

一「顔が赤いですけど・・・熱はないみたいですね。風邪とかじゃないようだな」

シ「わ、私は風邪など引かん！」

限界だった。私は秋月を押しのけ、強引に立ち上がった。

一「ああ、急に立ち上がったら駄目ですよ」

シ「と、とにかく！　私はお前を信じる！　わかったな！？」

一「はい、何かあったら連絡下さい。力になりますから」

シ「し、失礼する！！」

私は逃げるように公園を立ち去った。ヤツが味方なのはありがたいが・・・これから大丈夫だろうか？

第四話　こっそりやればバレないわけでもない（後書き）

作「よし、これでシグナムフラグはＯＫだな」

神「そんな事より本編に妾達を出さんか！」

天「そうです！　いいかげん我慢の限界ですよ！」

刹「・・・我は本当に出番があるのだろうか？」

一「結局、俺はどっちに付くんだ？」

作「お前は全員を助ける為に戦ってんだぞ？　両方に決まってるじゃないか」

天「一番難しいパターンですね」

神「なに、一成なら可能なはずじゃ」

刹「そうだな、我がいるのだから問題ないだろう」

作「さて、それはどうかな・・・」

一「さて、方針も決まったし、贈り物報告会に移るか」

神「緋水様からホワイトグリントとガンダムを頂いたぞ」

天「元祖ＭＳですか。全てはここから始まったんですよね・・・」

刹「何を感慨にふけっているのだ天音？」

一「このホワイトグリントって確か・・・ＡＣの機体だよな」

神「作者はラストレイブンくらいしかプレイしとらんらしいぞ」

一「ＰＳ３持ってないから仕方ないさ」

天「朝凪　夜風様からは苺の詰め合わせを頂きました」

一「おお、俺の好物じゃないか」

神「間違いなく前回の後書きの所為じゃな」

刹「・・・だな」

一「？」

刹「清浦刹那殿からは苺のタルトを頂いたぞ」

大「そして、そのタルトを持って来たのはこの俺、大和です！」

天「あら大和さん、また来てくれたんですね」

大「おお、天音さん！　いやぁ、今日もお美しいですね！」

神「（何じゃ、こやつもしや・・・）」

一「こんにちは大和さん、わざわざご苦労様です」

大「いえいえ気にしないでください。ただ・・・飯食う前でしたから腹減ってんですよね」

一「じゃあ、このタルト一緒に食べませんか？」

大「いいんすか！？　さすが一成さん、やっぱり器がでかいですねぇ！　じゃあ遠慮なく・・・」

パクッ！

神「な！？　半分以上食いおったぞ！」

刹「まずい！　我が君が・・・！」

一「・・・・」

天「か、一成様・・・？」

一「オチツケ、ヤマトサマハオキャクサマジャナイカ。ソウダ、ワルギハナインダ。オチツケ、オチツケ、モチツケ・・・」

天「や、大和さん！　すぐにお帰り下さい！」

大「いいじゃないですか、もう少しお話しましょうよ」

天「いいから早く帰りなさ～～～い！！」

大「はいぃぃ！！」

刹「我が君！　ほら、苺だぞ」

一「・・・はっ、俺は何を・・・」

神「・・・・助かったの」

一「最後は刹那様だ。俺宛てに苺タルトとディス・アストラナガンのデバイス。神奈達三人には欲望枕　（これで寝ると想い人と自分にとって最高の夢が見れる）。作者には人懐っこいＥＬＳを頂いたぞ。

天「・・・神奈、刹那、行きますよ」

神・刹「「応ッ！」」

一「お、おい、どこに行くんだよ？」

作「多分、寝に行ったんじゃないか」

一「またお前はいきなり出て来るな」

作「だって俺にも贈り物を頂いたんだから出るのが当然だろ。それにしても・・・人懐っこいって言っても何故か俺は襲われるんだよな」

一「お前が人間って認められてないんじゃないか？」

作「だ、だったら何だって言うんだよ？」

一「・・・・餌とか？」

作「洒落になんねぇぇぇぇーーーー！！」

神「前回の後書きでもやったイメージＣＶの発表じゃ」

天「たくさんの方から頂きましたね。それだけ多くの方に後書きを見てもらっているわけですね」

刹「そうだな、本編だけでも充分ありがたいのに、こんな無駄な部分まで・・・頭が上がらんな」

天「今回はまとめて表記させていただきますね。それではどうぞ」

秋月　一成・・・神のみぞ知るセカイの桂木桂馬　（下野紘）。遊戯王５Ｄ'ｓの不動遊星　（宮下雄也）。伝説の勇者の伝説のライナ・リュート　（福山潤）

神奈・・・デモンベインシリーズのアル・アジフ　（神田理恵）。バカとテストと召喚獣の木下秀吉　（加藤英美里）。

天音・・・Ｆａｔｅシリーズの遠坂凛　（植田佳奈）。ゴッドイーターのアリサ・アミエーラ　（坂本真綾）。

刹那・・・銀魂の猿飛あやめ　（小林ゆう）。戦国ＢＡＳＡＲＡ３の雑賀孫一　（大原さやか）。学園黙示録の宮本麗　（井上麻里奈）。

ゼノン・・・Ｆａｔｅシリーズのアーチャー　（諏訪部順一）。機動戦士ガンダム００シリーズのグラハム・エーカー／Ｍｒ．ブシドー　（中村悠一）。

無明・・・デモンベインシリーズのクラウディウス　（今井由香・・・ここではＰＳ２番の声優さんの名前を表記します）。

神「うむ、今回は妾のイメージもちゃんとあるの」

天「こうしていろんな風にイメージして頂けるのも何だか嬉しいですね」

刹「まさか敵のイメージまで送られて来るとはな・・・予想外だ」

天「これからも募集しますので、どんどん送ってくださいね」

刹「出来れば声優の名を書いて送ってくれ。調べるのが思いの外大変で作者が死にそうだからな」

神「間違っておった場合の訂正もよろしくの。さすがに名前の間違いは洒落にならんからな」

第五話　届かぬ手（前書き）

急展開させます。あと、設定がおかしいかもしれませんが、今さらですので気にしないでください。

それと、初めてバトンを頂きました。あまりに嬉しくて舞い上がっていたら足の子指を机にぶつけるというベタな事をやらかしてしまいました。

第五話　届かぬ手

シグナムさんと一戦を交えた日から、事件の頻度がさらに増えた。
はやての発作で守護騎士達も必死なのだろう。

ちなみにシグナムさんとの事は誰にも話していない。事情を知れば
なのは達は力を貸してくれるだろうが、俺の勝手に巻き込みたくは
ないからだ。

そのなのはとフェイトだが、ここ数日アースラによく顔を出してい
る。何でもデバイスをパワーアップさせるつもりらしい。襲われた
管理局員の中にはかなりの実力者もいたらしいので、少しでも力を
身につけておきたいとの事だ。

ユーノも無限書庫に引きこもって闇の書について調べているそうだ。
なのはから聞いたが、この話を持ち出された時のユーノの喜びよう
は凄かったらしい。

そんな中、家でまったりしていた俺に通信が入った。

≪一成君、すぐにアースラに来て！≫

エイミィからだった。焦ったような声だ、何かあったのだろうか？

一「了解、すぐに向かう」

神「一成、妾達も行くぞ」

天「何だか、嫌な予感がするんです」

一「わかった、じゃあ器に・・・」

転移魔法を発動させ、二人と共にアースラに向かった。

一「お待たせしました！」

急いでブリッジに向かうと、目の前のモニターに広大な砂漠で巨大な生物を狩っている人物達の姿が映っていた。

一「エイミィ、リンディさんとクロノは？」

エ「今本局の方にいるの。なぜか連絡がつかないから私が指揮しているわ」

一「そうか、それで、モニターの人物は？」

エ「多分、彼女達が一連の事件の犯人よ。意識を戻した局員の話し

た人物像と合致してるから」

その時、新たな人物がモニターに映った。

一「なのはとフェイト？　なぜ？」

エ「二人とも自分から出るって言って来たわ。デバイスの改修も完了したし、逃がしたくなかったからお願いしたの」

一「なるほど、よし、俺も出る」

エ「気をつけてね！」

エイミィから座標を教えてもらい、俺は再び転移した・・・

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

なのはＳＩＤＥ

転移した私の目の前に広大な砂漠が広がっていた。モニターで見たけど、ここまで広いとは思わなかったな。

フェ「凄い・・・」

隣のフェイトちゃんも驚いている。

？「おらぁぁぁぁーーーー！！！」

叫び声に目を向けると、向こうでデバイスと思わしきハンマーを持った女の子が巨大な生物にそれを振り下ろしていた。

フェ「あれが蒐集？　襲われた人達ってあんな痛そうな事されてたのかな？」

な「とにかく、話を聞いてみようよ」

私達はゆっくりと女の子に近づいた。

？「おっし、次はどいつだ？」

？「待てヴィータ、どうやら客のようだ」

？「管理局かしら？」

？「・・・・」

気付かれたようだ、女の子の他に新たに二人の女性と男の人が現れた。男の人には犬耳と尻尾が生えている。もしかして、アルフさんと同じ使い魔かな?

な「あの、こんな所で何をしているんですか?」

?「それを知ってどうする?」

フェ「答えてください!」

?「うるせえな、おいシグナム、やっちまおうぜ」

?「シャマル、この二人の魔力は?」

?「凄いわ・・・今までで一番の反応よ」

?「そうか・・・」

桃色の髪の女性が剣を向けて来た。私もパワーアップしたレイジングハート・エクセリオンを構える。

?「我等が主の為、お前達の魔力を頂く」

な「やっぱりあなた達が犯人だったんですね」

?「シグナム、お前は金髪のガキをやれ、アタシはこっちのヤツを

やる」

？「承知した。ぬかるなよヴィータ」

？「お前もな」

話がどんどん進んでいっていますが、どうやら私の相手はあの女の子のようです。

な「ヴィータちゃん・・・でいいのかな？」

ヴィ「ちゃん付けするなーー！」

≪プロテクション≫

ズドンッ！！

いきなり襲いかかって来たヴィータちゃんのハンマーをプロテクションで防ぐ。かなりの圧力だけど耐え切れないものでもない。

フェ「なのは！」

？「お前の相手は私だ」

フェ「くっ・・・」

？「我が名はシグナム、そして、この剣の名はレヴァンティンだ」

フェ「フェイト・テスタロッサ。デバイスはバルディッシュ・アサルト」

シ「ではテスタロッサよ、いざ尋常に勝負！」

フェ「わかりました・・・いきます！！」

フェイトちゃんとシグナムさんがその場から消えた。たぶん、別の場所で戦うつもりなのだろう。

？「俺達はどうするシャマル？」

？「二人なら大丈夫だろうけど・・・いざという時は頼むわねザフィーラ」

？「承知した」

シャマルさんとザフィーラさんか、これで全員の名前がわかった。

ヴィ「余所見してんじゃねえ！」

な「うわわわ！？」

なのはＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＩＮ　ＳＩＤＥ

一「これは・・・」

転移した俺の目の前で、なのはとヴィータ、フェイトとシグナムさんがそれぞれ激しい戦いを繰り広げていた。

シャ「一成君！」

そして、少し離れた所にシャマルさんと初めて見る男性が立っていた。

一「シャマルさん、それに・・・」

男性「ザフィーラだ、この姿を見せるのは初めてだな」

一「やっぱりザフィーラか」

シャ「一成君、話はシグナムから聞いてるわ。私もあなたを信じる」

ザ「俺もだ」

一「ありがとうございますシャマルさん、ザフィーラ」

ザ「ところで、お前は何をしに来たのだ？」

一「あの二人は俺の友達なんだよ。心配で急いでやって来たんだが・・・案の定だったな」

シャ「え、そうなの？　じゃあ止めないと・・・」

シ「貴様！　何者だ！！」

突如、シグナムさんの凄まじい怒声が聞こえて来たので顔を向ける。

一「・・・・え？」

その光景を目にした瞬間、俺の思考は完全に停止した。

そこには、シグナムさんと、いつの間にか現れていた仮面をつけた男の姿。

そして・・・・

フェ「う・・あ・・・・・」

その男に胸を貫かれ、リンカーコアを抜き出されたフェイトが力無く腕を下ろしていた。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

シグナムＳＩＤＥ

シ「（強いな・・・）」

フェイト・テスタロッサ・・・この少女は今までで出会った者の中でもかなりの強さを持っていた。

テ「はあぁぁぁぁぁぁ！！！」

ガキィィィィィン！！

テスタロッサのデバイスとレヴァンティンがぶつかり合う度に心が沸き立つ。こんなに楽しい勝負は久しぶりだ。

シ「（出会いが出会いなら・・・・良き好敵手になれたやもしれんな）」

そんな愚にもつかない事を考えてしまう。だが、所詮は夢物語に過ぎない、私達は敵同士なのだからな。

シ「レヴァンティン、カートリッジロード！」

テ「バルディッシュ、カートリッジロード！」

ガシュン！×２

シ「（ほう、あのデバイスもカートリッジシステムを搭載しているのか）」

そして、再びぶつかり合おうとした瞬間・・・・

？「いつまで遊んでいるつもりだ」

ズブ・・・・

突如、テスタロッサの背後に現れた仮面の男が彼女の胸からリンカーコアを抜き出していた。

シ「貴様！　何者だ！！」

男「私の事などどうでもいいだろう。それより早く蒐集したらどうだ？」

シ「何だと！？」

この男、何故知っている！？

男「どうした？　お前達の大切な主を助けたくはないのか？」

シ「貴様・・・どこまで・・・・」

男「ククク・・・・ッ！？」

ゾクッ！！！

シ「ッ・・・・！？」

笑っていた男の顔が凍りつく。おそらく私も同じ様な表情をしてい

るだろう。背後から感じる気が狂いそうなほどの凄まじい殺気・・・いっそ死んでしまった方が楽だと思えるようなそれは、およそ人が放てるものとは思えなかった。

秋「・・・離れろ」

シ「（あ、秋月？　何故あやつが・・・）」

男「な、何だ！？」

秋「離れろと言っているだろうがァァァァァァァァーーーーーー！！！！！」

周囲で次々と爆発が巻き起こる。それは怒りによって膨張した秋月の魔力が引き起こしている物だった。

シュン！

シ「なっ！？　消え・・・」

男「ぐあぁぁぁぁぁぁ！？！？！？」

男の絶叫に振り返ると、秋月がテスタロッサを優しく抱きかかえていた。男は地面に叩きつけられ苦しそうに息を吐いている。砂とはいえ相当な痛みだろう。

シ「・・・・知り合いだったのか」

秋「ええ・・・・大切な友達です」

シ「そうか・・・・」

秋「すまない・・・すまないフェイト・・・・・」

友達・・・それは秋月が何より優先するものだ。それを目の前で傷付けられた彼の心中を察するのは想像に難くない。

少女「一成君！　フェイトちゃん!!」

ヴィータと戦っていた少女が慌てた様子で近づいて来た。どうやら彼女も知り合いらしい。

秋「なのは・・・フェイトを頼む」

少女「え？」

秋「あの男・・・・絶対に許さん」

初めて見る秋月の怒りの形相。私と戦っていた時には見せなかった

その表情は今までの彼の様子からは信じられないものだった。

ヴィ「ど、どうなってんだよシグナム!?　何で一成がここにいんだよ!」

シ「その話は後だヴィータ、急いでここから撤退するぞ」

ヴィ「はあ!?」

私達がここにいては邪魔になる。そう思い撤退する旨を伝える。すると、すぐにシャマルが転移魔法の準備を始めた。

シ「秋月・・・なんと言えばいいか・・・・ただ、私達とあの男は何の関係も無い。それだけは信じて欲しい」

秋「ええ、わかってますよ・・・・」

底冷えするかのような声で答えながらも視線を男に向ける秋月、今の彼には何を言っても無駄かもしれんな。

シャ「シグナム!　準備出来たわ!」

シ「わかった」

発動した転移魔法により、私達はその場を後にした・・・

シグナムＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＩＮ　ＳＩＤＥ

一「なのは、急いで俺から離れてくれ」

な「え？」

一「巻き込みたくない」

な「わ、わかった・・・・」

なのはがフェイトを抱え、ゆっくりと遠ざかって行った。

男「き、貴様・・・」

ふらふらと立ち上がる男に、ふたたび黒い感情が湧きあがる。駄目だと思っていても抑えられるものではない。

一「・・・殺しはしない。だが、フェイトの受けた痛みの何万分の一でも貴様に味わわせてやる」

男「くッ・・・・」

踵を返し、逃げ出そうとする男。

一「デュアルエッジ！！」

男「ぐあッ！？」

双剣による打ち上げで男の体が宙を舞う。間髪入れずに攻撃魔法を発動させる。

一「フレイムレーザー！！！」

俺の怒りに呼応してか、いつもより強力な熱線が直撃し、男は一瞬で火達磨になった。

男「ぎゃあぁぁぁぁぁぁぁ！？！？！？」

一「まだだ・・・・」

再び詠唱を開始しようとしたが、上空からの殺気にいったん中断する。

男Ｂ「それ以上はやらせんぞ！！」

そこには似たような姿をした別の男が浮かんでいた。放たれた魔力弾を冷静に回避する。

一「もう一人いたのか・・・」

神「（一成、わかっておると思うがあの二人は・・・）」

一「（リーゼアリアさんとリーゼロッテさんだろ？　わかっている）」

天「（よ、よろしいのですか？　一成様は女性を相手にするのはあまり・・・）」

一「（二人とも・・・男女平等って言葉知ってるか？）」

神・天「「（・・・・・）」」

男Ｂ「何をブツブツ言っている！！」

何が腹立たしいのか、男が襲いかかって来た。

一「ふんっ！」

懐に潜り込み、渾身の右拳を放つと、男は体をくの字に曲げ吹き飛んだ。

男Ｂ「ぐばっ！？」

一「グラスプ！」

そのまま二人を地面に固定し、俺は今度こそ詠唱を始めた。

一「マナよ・・・オーラと変われ・・・彼の者どもを包み、究極の破壊を与えよ！！！」

天「（か、一成様！　オーラフォトンノヴァはやり過ぎです！！）」

神「（無駄じゃよ天音、今の一成は止めようがないわ）」

男Ａ・Ｂ「「ヒッ！？」」

俺は右手に現れた光球を容赦なく放った。

一「オーラフォトン・・・・ノヴァァァァァ！！！」

カッ！！！！

凄まじい閃光と爆発音が辺りに響き渡り、ゆっくりと視界が戻って行く。

一「・・・やったか？」

？「クスクス・・・なかなかの威力だけど、それじゃあ私の障壁は壊せないわよ」

一「なっ！？」

突如聞こえて来る透き通った声・・・オーラフォトンノヴァが直撃した場所では、拘束されている二人の男と、今まで見た事ない強固な障壁を展開させている少女が微笑んでいた。

一「（何者だ・・・・？）」

黒い髪に瞳。纏っている服まで闇色と、全身が黒ずくめという井出達の少女。右目は眼帯に覆われ、残る左目だけが怪しく輝いている。

男A「ま、まさかお前に助けられるとはな」

男B「助かったぞ。礼を言・・・」

少女「助ける？　何で私があなた達を助けなきゃいけないのよ。私はあの男の強さが知りたかっただけ。あなた達が死のうがどうでもよかったわ」

男A「な、何だと！」

少女「それより、さっさと消えてくれない？　私はあの男に用があるの。あなた達にウロチョロされたら目障りだわ。それとも・・・一回死んでみる？」

男B「くっ・・・戻るぞ！」

男達の姿が消えた。おそらく転移魔法を発動させたのだろう。

な「一成君ーー！」

なのはが戻って来た。フェイトは相変わらず気絶したままだ。

な「終わったの？」

一「いや・・・むしろこれからのようだ」

な「え？」

少女「初めまして、私は神剣『無明』。よろしくね旅人さん」

神「神剣じゃと！？」

突然、神奈と天音が姿を現した。

無「あら、あなた達が旅人さんの剣ね。ふふ、弱そう」

天「な、なんですかあなた！　いきなり失礼ですね！」

無「あなた達に用は無いわ。お姉さまを・・・刹那を出しなさい」

一「刹那を？　何故だ、キミは一体・・・」

神「一成！　こんな小娘の話に耳を傾ける必要はない！」

神奈が太刀を手に俺の前に立った。

無「もしかして戦う気？　霊剣の分際で私に勝てるとでも？」

天「あら、私達をただの霊剣と思っていると大怪我しますよ？」

天音も槍を手に無明を見据える。

一「落ちつけ二人とも！　らしくないぞ！」

神「すまんの一成、じゃが、コケにされたまま我慢できる程妾は大人しくないのでな」

天「私達が弱いかどうか・・・その身で確かめなさい！！」

俺の制止を振り切り、二人は無明に飛びかかった。

無「ふふ・・・・」

ガキィィィィィン！

神・天「「なっ！？」」

だが、無明が突如手にした身の丈の倍以上はあるかと思われる鎖付きの巨大な戦斧によって見事に防がれていた。

無「これが私の器よ。どう？　素敵でしょう？」

神「くっ・・・！」

無「それにしても、こんな馬鹿正直に突っ込んでくるなんて・・・よっぽど主の教育が悪かったのかしら」

天「一成様を侮辱する事は許しません！！」

無「許さない？　それは私の方よ！！」

ブオン！！

神「うわぁ！？」

天「きゃあ！？」

な「神奈さん！　天音さん！」

無「もう一度言うわ、刹那を出しなさい・・・」

一「（強い・・・躊躇っている場合じゃない）」

無「・・・あら、ようやくやる気になってくれたのね」

な「一成君・・・」

一「大丈夫だ・・・」

不安げな声を漏らすなのはに微笑み、俺は力を解放した。

一「神剣・・・・解放!!」

銀色の光が俺を包み、体が変化していく。そして、右手に刹那が握られる。

無「ふうん・・・・それが神剣解放ね、大した見世物だわ」

無明の声に反応するように剣が輝き、刹那が姿を現した。

無「お姉さま・・・・」

刹「・・・・光明」

無「お姉さま・・・ああ、お姉さま!!!」

無明が両手を広げ満面の笑みで刹那に駆け寄る。だが、対する刹那は何故か剣の切っ先を彼女に向けていた。

無「お姉さま、久しぶりの再会なのに酷いです」

刹「光明・・・何故お前がここにいる」

無「もちろん、お姉さまを迎えに来たに決まってるじゃないですか。あと、今の私の名は無明ですお姉さま」

刹「迎え？　無明？　何を言っているのだ光明？」

無「私の目的は、お姉さまを縛り付けているこの男を殺してあなたをあの世界に連れ戻す事です」

刹「なっ！？」

無「愛するお姉さまの為です。目の前でグチャグチャにして差し上げますね♪」

刹「また我を封印するつもりか？」

な「ど、どういう事なんですか？」

刹「以前話しただろう？　あの時話した我を封印した張本人がこいつだ」

≪はるか昔・・・ある者との戦いに敗れてな。それからずっと我は封印されていた・・・我が君に出会うまで≫

一「（そうか・・・この少女が刹那を。だが、何故・・・？）」

無「封印だなんてそんな、私はただお姉さまと一緒にいたかっただけです」

刹「何も無い真っ白な世界で雁字搦めに縛り上げていたくせにどの口が言っている」

無「だって・・・お姉さま、あれだけ私の事を大切にしてくれていたのに急に捨てるんですもの。いくら私がお姉さまが大好きでも許せなかったんです」

刹「だから、それは誤解だとあの時言っただろう！」

無「言い訳なんて聞きたくありません！　お姉さまは私だけのお姉さまでいてくれればいいんです！！」

刹「くっ、相変わらず人の話を聞かないなお前は」

この二人、過去に一体何があったんだ？

無「これ以上話しても埒が明きませんね。なら・・・当初の目的通りこの男を殺します」

一「ッ・・・・！？」

刹那に向けたものとは真逆の冷めきった目で俺を睨みつける無明。
今まで感じた事のない殺気に全身が強張る。

明確な『死』のイメージが頭をよぎる。これは・・・本気でやらなければ容赦なくやられる。

一「刹那！」

刹「わかっている！」

すぐさま刹那を器に戻し、なのはとフェイトを抱きかかえその場を飛び退く。

ブン！

無「あら、避けられちゃった」

冷や汗が頬を伝う。あと少し判断が遅れていたらあの戦斧で叩き潰されていただろう。

一「なのは、急いでアースラに戻るんだ」

な「え？」

一「この先、キミを守りながら戦う余裕はなさそうだ。それに、フェイトの容態も気になるしな」

な「で、でも・・・」

一「頼む、もしキミまで傷ついてしまったら、俺は一生自分が許せなくなる」

な「・・・・わかった」

名残惜しげに俺から離れたなのはがフェイトと共にゆっくりと消えて行った。こうして、この場には俺と無明だけが残った。

無「あら、帰しちゃうの？　二人がかりの方がよかったんじゃない？」

一「神剣の戦いに彼女を巻き込むわけにはいかない」

無「あらそう・・・どうでもいいけどね」

改めて対峙すると、彼女のオーラの強大さに戦慄する。相手は刹那を倒した神剣だ、一瞬でも気を抜けない。

無「・・・・行くわよ」

ジャラジャラと鎖を鳴らしながら無明がゆっくりと近づいてくる。ただそれだけで空気が大きく揺れる。

一「（何だ？　やけに無防備だな）」

刹「（油断するな我が君！　あの動きは・・・！）」

無「・・・・クス」

ブン！

突如投擲された戦斧が俺に迫る。回避し切れなかった俺の右腕から血が噴き出す。

一「ぐあッ！」

無「ふふ、油断したわね・・・・」

無明の右手に戦斧が戻る。なるほど、あの鎖は斧を引き戻すのに使うのか。

刹「（だから油断するなと言っただろう！）」

一「（すまない）」

すぐさま体制を整え、今度はこちらから攻撃を仕掛ける。

一「オーラフォトンブレード！！」

刹那にマナを流し込み、渾身の力で剣を振り下ろした・・・・が

パシ！！

無「・・・・何それ？　手加減でもしてるつもり？」

一「なっ！？」

その一撃を、無明はあろうことか片手で受け止めてしまった。

ガシ！

無「ふふ、つ・か・ま・え・た♪」

一「しまッ・・・」

ザンッ！！

一「ぐあぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

容赦無く振り下ろされた戦斧が俺の体を大きく斬り裂いた。

天「きゃあ！？」

神「し、神剣解放が・・・解けた！？」

神剣解放が解除され、神奈と天音が投げ出された。

一「ぐ・・ふ・・・・」

天「一成様！！」

神「天音！　すぐに治癒魔法を・・・！」

無「させないわ」

黒い鎖が神奈と天音の体に絡みつく。あれは・・・グラスプか？

神「は、離さんか！」

無「気分が変わったわ。あの男はいずれ力尽きるだろうし、お姉さまを取り戻すためにあなた達には協力してもらうわよ」

天「どういう意味ですか！！」

無「あなた達の中に眠るお姉さまの『意志』と『器』・・・それを取り出してお姉さまを完全に復活させるの。そうすればお姉さまはずっとお姉さまでいられるはずよ」

神「妾達が素直に協力するとでも？」

無「私の目的はお姉さま、あなた達が大人しく協力してくれれば彼を助けてあげる。そして、二度と彼には手を出さないわ。どうする？　お互いにとって悪い話じゃないでしょう？」

一「ふ・・ざけ・・るな・・・！」

無「・・・まだ立ち上がる元気は残ってたのね」

一「おぉぉぉぉぉ！！！」

ハイロゥを羽ばたかせ、再び無明に斬りかかったが、そんな破れかぶれの一撃が通じるはずも無く、背後に回られた無明にハイロゥを掴まれた。

グイッ！

一「くっ、離せ！」

無「綺麗な翼・・・・あなたには勿体無いくらい」

一「何を・・・」

無「ねえ、これ私に頂戴？」

ブチブチブチ！！

一「ぐあぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

無「素敵な断末魔・・・ゾクゾクしちゃう」

耳障りな音と激しい痛みが俺を襲う。喪失感と共に、俺の体はゆっくりと落下し始めた。

天「嫌ぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

神「一成！？　おのれ！　おのれぇぇぇぇぇ！！！」

ドン！

一「かは・・・」

余りの痛みに数秒意識を失っていた様だ。受け身も取れず地面に落

下し、肺に溜まっていた空気が一気に吐き出される。

無「さてと・・・そろそろ止めでも刺しちゃおうかな」

天「止めてください！　あなたの言う通りにしますから、これ以上一成様を傷つけないでください！！」

無「ふふ、最初からそう言えば・・・」

一「・・・・行かせない」

朦朧とする意識の中、剣を杖に必死に立ち上がる。

無「・・・・しつこいわね」

神「一成もういい！　立ち上がってはいかん！」

一「そうは・・・いかない」

天「どうして、どうして私達なんかの為に・・・」

一「家族だろう！！！！」

神・天「「ッ・・・・！！」」

あらん限りの声で叫ぶ。そうだ、例えどんな強敵だろうと諦めるわ

けにはいかない。

一「神奈も・・・天音も・・・そして刹那も・・・俺のかけがえのない家族だ！　その家族を守るために・・・俺は今、倒れるわけにはいかない！！！」

背中の痛みを感じなくなって来た。そろそろ本気でまずいかもしれないな。

無「・・・で、どうするつもり？」

一「決まっているだろう、キミを倒し、二人を解放する！！」

無「そう、そんなに死にたいのね」

双剣を構える。おそらくこの一撃が限界だ。だからこそ、全てをかける！！

一「オーバー・・・ドライブ！！！」

無「・・・・！」

ズブシュ！！

痛々しい音と共に俺と無明の動きが止まる。

神「あ・・ああ・・・・」

天「嘘、そんなの嘘です・・・・」

無「・・・・だから言ったのに」

一「ご・・・ぼ・・・・・・」

俺の決死の一撃は空を切り、反対に無明の戦斧の刃が深々と俺の腹に食い込んでいた。吐きだした血が辺りに広がる。

ブン！

そのまま振り抜かれ、俺は大きく吹き飛ばされた。

無「あら、真っ二つになると思ったのに、運がよかったわね」

天「一成様ぁぁぁぁぁーーーー！！！」

神「貴様ぁ！！　殺してやる！！　殺してやるぞ！！！」

僅かに聞こえる二人の声、立ち上がろうとしたが力が入らない。

無「呆れたしぶとさね、そこだけは認めてあげるわ」

一「ぐう・・・」

無「でもそれもお終い。今度こそ殺してあげる」

無明の右手に光が集まる。あれはまさか・・・

無「マナよ・・・オーラと変われ・・・彼の者どもを包み、究極の破壊を与えなさい」

神「まさか・・・止めろ！　止めてくれぇ！！」

天「一成様、逃げてぇぇぇぇぇぇ！！」

一「（動け！　動いてくれ！！）」

だが、意思に反して体はピクリとも動かない。

無「さようなら・・・旅人さん」

そして、無明の右手がゆっくりと・・・

？「ディバインバスター！！！」

無「ッ！？」

ドオォォォォォォン

突如、桜色の光が無明を襲い、それにより、右手の光が霧散した。

神・天「「・・・・・え？」」

な「それ以上・・・一成君を傷付けさせない！！」

一「な、なの・・は？」

救ってくれた人物の姿に愕然とする。何故彼女がここにいるんだ・・・

な「ごめんね一成君、でも、一成君が私を大切に思ってくれているように、私だって一成君が傷付けられるのを黙って見ているわけにはいかないの！！」

一「駄目だなのは！　俺の事はいいからすぐに戻るんだ！！」

無「ふうん・・・あなた、彼の事が好きなのね。じゃなければ戻ってなんか来ないもの」

な「ふえ!?　そ、それは・・・」

無「そっかそっか・・・・なら、一緒にあの世に送ってあげる」

な「え?」

無明が矛先をなのはに向けた。その右手に再び光が宿る。

な「ディバインバスターーー!!」

なのはが必死に砲撃魔法を放つが、全く意に介さずに詠唱を続ける無明。

な「えぇぇぇぇぇぇい!!!」

一「もう止めろなのは!　今すぐ逃げるんだ!!」

無「残念・・・完成しちゃった」

無明が高々と右手を上げる。

一「止めろ・・・」

無「・・・・オーラフォトンノヴァ」

周りの景色がスローモーションに映る。光球がゆっくりとなのはに向かって突き進んでいく。

一『止めろぉぉぉぉぉーーーーッ！！！』

フッ・・・・

な「・・・・え？」

瞬間、なのはに迫っていた光球が跡形も無く消え失せていた。

無「な、何で・・・何が起こったの！？」

ここで初めて無明の表情が変わった。どうやら彼女が気を変えて消したわけではないようだ。

一「よ、よかった・・・・」

理由はどうでもいい。とにかくなのはが無事で本当によかった。

無「な、何よ、あなた何をしたの!?」

無明が狼狽した様子で俺を見下ろしている。聞きたいのはこっちの方なんだがな。

一「（しまっ・・・血を流し過ぎたか・・・）」

ドサッ！

なのはが無事だった事で緊張の糸が切れたのか、とっくに限界を迎えていた俺は意識を手放してしまった・・・

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

なのはＳＩＤＥ

な「か、一成君!?」

急に倒れ込んだ一成君の元へ急いで向かう。よく見ると背中からは今も血が流れ出している。

な「（酷い傷、はやく手当てしないと・・・）」

神「・・・なのは、一成を頼むぞ」

な「え？」

天「無明、私達はあなたに従います。ですから、一成様となのはちゃんは見逃してあげてください」

無「あら、やっと決心してくれたのね。わかった・・・二人は見逃してあげるわ」

三人の周りが歪み始めた、多分、あの人の転移魔法なんだろう。

な「神奈さん！　天音さん！」

天「私達の代わりに一成様に謝っておいてください」

神「心配せんでもすぐに帰って来るわ。じゃから気にするな」

そう微笑んで三人はゆっくりと消えて行った。

な「そんな・・・」

もしかして私の所為？　一成君の言う事を聞かなかった私が悪かったのかな？　私がもっと強かったら二人だって行かなくてすんだのかな？

少しデバイスがパワーアップしたからどうしたの？　私・・・何も出来なかったじゃない。

な「ごめん・・・ごめんね一成君」

きっと一成君はそんな事ないと言ってくれると思う。でも、どうしてもそんな風に考えてしまう。

早く戻らなければいけないのはわかっているのに、私はしばらくその場で泣き続けていた・・・

？「やれやれ、後始末をして来いと言われはしたが・・・またずいぶんと相手にし難い子達だな」

な「え？」

いつの間にか、私の目の前に男の人が立っていた。

な「あなたは・・・？」

男「私はゼノン・・・さっきまでここにいた無明の保護者・・・といったところかな」

な「ッ！？」

ゼ「彼女の人使いの荒さには困ったものでね、急に帰って来たと思ったら自分の不始末を私に押しつけて来たのだよ。酷いと思わないかい？　まあ、従う私にも責任はあると思うがね」

な「・・・何をしに来たんですか？」

ゼ「キミ達を殺しに来た・・・と言ったら驚くかい？」

や、やっぱり・・・この人も敵なんだ。私はレイジングハートを構えて一成君とゼノンさんの間に立った。

ゼ「闘う気かね？　自分で言うのも何だが、私は強いぞ？」

な「それでも、諦めるわけにはいかないから！」

真っ直ぐにゼノンさんを見据える。すると、ゼノンさんの表情が崩れた。

ゼ「その目・・・余程その少年の事が大切なのだな」

な「・・・・・」

ゼ「・・・・行きたまえ」

な「え？」

ゼ「無明には私からうまく言っておこう。なに、心配はいらん、一発もらえば許してくれるだろう」

な「ど、どうして・・・」

ゼ「私が殺すべき相手はキミ達ではないからだよ。さあ、早く行くんだ、急がないとその少年が死んでしまうぞ」

な「・・・ありがとうございます」

ゼ「ははは、まさか礼を言われるとは思わなかったよ。一成君にもよろしく言っておいてくれたまえ」

な「え？　何で名前を・・・」

思わず尋ねようとした瞬間、体が光に包まれ、私と一成君はアース

ラに転移した・・・

ゼ「さて・・・ああは言ったが、どう言い訳すべきかな・・・？」

第五話　届かぬ手（後書き）

作「うおっ、誰もいねえ。・・・まあしょうがないか、神奈と天音は連れ去られたし、一成は絶賛気絶中だしな」

？「なら私がお相手してあげるわ」

作「げッ・・・無明!?」

無「あら、せっかく来てあげたのにずいぶんな態度ね」

作「ま、まあいいや。とりあえず自己紹介しろよ」

無「初めましてみなさん、無明といいます。好きな物はお姉さま、趣味はお姉さまを観察する事、好物はお姉さまの作ってくれた手料理、夢はお姉さまと身も心も一つになる事・・・きゃ、言っちゃった♪」

作「寒っ・・・」

無「・・・・何ですって?」

作「いやあ！　素敵な夢ですね！　いつか叶う事を祈っておきます！！」

無「ふふ、ありがとう・・・」

作「は、話は変わるけど、お前、ずいぶんえげつない事するな」

無「それはハイロゥをもいだ事かしら？　あれくらいどうってことないじゃない」

作「・・・・さいですか」

無「今も持ってるけど・・・見る？」

作「断固として拒否する！」

無「あらそう・・・」

作「さて、気分を変えて贈り物報告会に移ろうか」

無「面白そうね、私が紹介してあげる・・・・まずは清浦刹那さんね、ラズベリーソーダを頂いたわ」

作「よし、あの四人がいない今俺が頂いて・・・・」

無「は？　何を言ってるの？　この至高の一品はお姉さまにこそ相応しいわ、戻ってくるまでとっておくのよ。そうすれば・・・お姉さまはきっと私を褒めて下さるわ。フフ・・・ウフフフ・・・」

作「（こ、怖ぇ・・・）」

作「次は緋水様からだな・・・パルヴァライザーとゴジラを頂いたぞ」

無「・・・下品ね、お姉さまには相応しくないわ」

作「ちょ、おまっ！　せっかく頂いた贈り物に対してなんて事を・・・！」

無「うるさいわね、だったらお姉さまに合うような怪獣やロボットを持って来なさいよ。そしたら喜んでお礼を言ってあげるわ」

作「・・・・何が何でも刹那第一主義なんだなお前・・・」

作「それじゃあ今回も最後にイメージＣＶを紹介するか」

無「今回送ってくれたのは・・・ラグネルさんね、ふふ、ありがとう」

作「こんな感じです」

一成・・・テイルズオブグレイセスのアスベル・ラント（櫻井孝宏）

神奈・・・学園黙示録の毒島冴子（沢城みゆき）

天音・・・Ｆａｔｅの遠坂凛（植田佳奈）

刹那・・・とある魔術の禁書目録の神崎火織（伊藤静）

作「天音の声のイメージは植田さんが一番近いのかな？　二回目だし・・・」

無「さあ、それはイメージした人の自由でしょ」

作「それもそうか。にしても、櫻井さんボイスの一成か・・・いいな！」

無「そんな事よりお姉さまよ、お姉さまのイメージをもっと紹介しなさいよ」

作「こ、今回はこれで終わりだよ」

無「なん・・・ですって・・・・」

作「次回以降に期待しろ。それでは今回はこの辺で・・・」

第六話　悩み事はさっさと相談した方が楽（前書き）

もはやチートじゃないな。

第六話　悩み事はさっさと相談した方が楽

一「ここは・・・」

俺は何も無い真っ白な空間に立っていた。目の前には神奈と天音の姿がある。

神・天「「一成（様）・・・」」

一「神奈、天音、ここは何処だ？」

天「一成様・・・お別れです」

一「え？」

神「妾達の事は忘れるのじゃ、よいな？」

一「ど、どうしたんだよ二人とも、何でいきなりそんな・・・」

天「さようなら、一成様・・・」

俺に背を向け歩き始める二人。

一「待ってくれ！」

すぐさま追いかけたが、何故か距離が全く縮まらず、やがて二人の姿はゆっくりと消えて行った。

一「神奈！　天音！　どうして・・・」

無「それはあなたが弱いからよ旅人さん」

冷めた声、振り向くと無明が宙から俺を見下ろしていた。

一「無明・・・」

無「あなたが私に負けたから、あの二人は私の要求を呑んだの。可哀そうに、あなたが強かったらこんな事にはならなかったのにね」

一「くっ・・・」

無「あなたは何も守れない。家族も友人も・・・何もね」

言い終わると同時に無明の体がゆっくりと透けていった。

無「さようなら旅人さん、翼をもがれたあなたはそこで無様に這いつくばっていなさい」

一「待て無明！」

無「ふふ・・・」

・・・・・・・・・

・・・・・・

・・・

一「待てと言っているだろう！！」

ガバッ！

一「・・・え？」

無明の姿は何処にもない。今のは・・・夢？

一「ここは・・・アースラか」

以前フェイトと話した部屋によく似ている。しかし、何でこんな所に・・・

一「・・・そうか、俺は意識を・・・痛っ・・・・・」

鋭い痛み。よく見ると、体の至る所に包帯が巻かれていた。

シュイン！

な「え・・・」

状態を確認していると、扉が開き、なのはが姿を現した。

一「ああ、ちょうどよかった、なのは、聞きたい事が・・・」

な「一成君・・・一成君!!」

ギュウ～～～!!

俺の姿を見て数秒固まっていたなのはだったが、ハッとするなり力いっぱい抱きしめて来た。

一「ぐおっ!?」

傷を押さえられ、思わず呻き声が漏れる。

一「な、なのは！　離れ・・・」

な「よかった・・・よかったよぉ・・・・」

一「なのは？」

な「わ、私・・・このまま一成君が目を覚まさないんじゃないかって・・・」

一「・・・すまない、心配させてしまったみたいだな」

な「うう・・・」

胸元で涙を流すなのは。そんな彼女の頭を、俺は落ち着くまで優しく撫で続けた。

・・・・・

な「ご、ごめんね、もう大丈夫」

まだ少し目を潤ませながら、なのははそっと離れた。

一「なのは、さっき俺がこのまま目を覚まさないんじゃないかと言っていたが、実際あれからどれくらい経ってるんだ？」

な「あれからって一成君が倒れた日からだよね。えっと・・・三日だよ」

一「そんなに寝てたのか。そうだ、フェイトは・・・彼女は大丈夫なのか？」

な「うん、もう意識も戻ってるし、しばらく魔法が使えない事以外は特に問題ないって」

一「そうか・・・よかった」

な「あ、そうだ、一成君が目覚めた事みんなに知らせなくちゃ！」

そう言ってなのはは部屋を出ていった。

一「・・・・」

一人になるとじわじわと思いだして来る。無明・・・あそこまで圧倒的な力の差を見せつけられたのは初めてだ。それに、あれほどまでに刹那にこだわる理由は何なんだ・・・

フェ「一成！」

物思いに耽っていると、今度はフェイトが部屋に飛び込んで来た。

一「（ん？　このパターンは・・・）」

フェ「一成～～！」

ギュウ～～～～！！

一「やっぱりなぁぁぁ！」

全力で抱きついてくるフェイト。それにより襲い来る痛み。

アリ「兄様！」

一「あ、アリシアちゃん!?　何で・・・」

アリ「兄様～～！！」

ギュウ～～～～！！

一「～～～～！！（声にならない声）」

ク「・・・何をやっているんだキミ達は」

リ「ふふ、仕方ないわ、大好きな人がやっと目を覚ましたんだもの」

エ「なのはちゃんはやらないの？」

な「私はさっきやりましたから」

ユ「あれ、一成凄い汗だよ、大丈夫？」

アル「何だか心配して損した気分だね」

プ「あら、この三日間ずっと落ち着きがなかったのは誰だったかしら？」

ぞくぞくと部屋に入って来る一同。それにしても、何でプレシアさんとアリシアちゃんがここに？

一「みんな、どうしたんだ？」

ク「どうしたって・・・キミの様子を見に来たに決まっているだろう」

エ「私達もずっと心配してたんだからね」

一「・・・すまない」

ク「何故謝るんだ？　友達を心配するのは当然の事だろう？」

一「ははっ、そうだな。この場合はありがとう・・・かな」

俺の言葉に、みんなは微笑みながら頷いた。

一「そうだ、みんなに聞きたい事がある」

ク「わかってる、キミが眠っていた間の事だろう？」

一「ああ、教えてくれないか」

エ「私から説明するね。まず、なのはちゃん達が交戦した人物達だけど、容姿、及び会話の内容からほぼ犯人と断定。次に、途中で現れた仮面の男だけど・・・残念ながら詳しい事はまだわかってないの。そして最後に・・・無明と名乗った少女と、ゼノンという男性の事だけど・・・」

一「ゼノン？」

エ「一成君が倒れた後に現れた人物の名前だよ。自分の事を無明の保護者だと言っていたから、おそらく彼女の仲間だと思う・・・だよねなのはちゃん？」

な「は、はい」

一「なのは、もしかしてその男と戦ったのか？」

な「ううん、見逃してくれたの」

一「どういう事だ、俺を始末するには絶好の機会だったはずだ」

な「私達は自分が殺す相手じゃないって言ってたよ」

一「（何にしても、これでイレギュラーが二人か・・・）」

エ「なのはちゃんの言う通り、彼は特に何もせずに去って行ったわ。それでね一成君・・・神奈さんと天音さんの事なんだけど・・・」

一「・・・ついて行ったんだろう？　無明に」

エ「・・・うん」

な「私が・・・私がもっと強かったら二人を助ける事が出来たはずなのに・・・・」

一「なのはの所為じゃない。相手の力を見誤った俺が悪いんだよ」

な「一成君・・・」

重々しい空気の中、リンディさんが口を開く。

リ「すでに二人の捜索は始めています。一成君は体を癒す事に専念してください」

一「いいんですか？」

リ「こうなった責任は私達にもあるわ。これくらいしないと申し訳が立たないもの」

ク「艦長の言う通りだ、気にせずキミは休んでくれ」

一「・・・お願いします」

リ「それでは、話はこれくらいにしましょうか。目覚めたばかりで辛いでしょうし」

一「はい」

リ「それじゃあみんな、行きましょう」

全員が部屋を後にし、俺はベッドに横になった。

翌日・・・

な「本当にいいの？」

一「ああ、大丈夫だ」

アースラをあとにし、一人で帰ろうとした俺を心配したなのはが家に来るよう言ってくれたが、迷惑をかけたくなかったので遠慮しておいた。

ガチャ

玄関の扉を開ける。当然だが家の明かりは点いていない。

一「ただいま・・・」

返ってくる声は無い。そのまま無言でリビングに向かう。

一「・・・・」

神奈がいつも座っていたソファ・・・

≪おお、帰って来たか一成≫

天音がいつも立っていた台所・・・

≪お帰りなさいませ一成様。もう少しで出来ますから少々お待ち下さいね≫

一「・・・・腹減ったな」

そういえばこの四日間何も口にしていない。冷蔵庫から適当な食材を取り出しサッと炒める。

一「いただきます・・・」

ロクに味わいもせず、ただただ機械的に料理を口に運ぶ。食べ終わった食器を洗い、ソファに腰掛けテレビをつける。

『さあ、次の問題は・・・』

テレビには神奈が好きだったクイズ番組が映っていた。

一「・・・Bか」

『正解は・・・・A！』

一「・・・・・」

テレビを消す。それにより再び部屋が沈黙に包まれる。

一「・・・・広いな」

二人がいないだけで部屋の広さが二倍にも三倍にもなった気がした。
俺と神奈が温泉に行った時の天音も同じ様に感じていたのだろうか・
・・

一「・・・・寝るか、明日からまた学校だしな」

風呂にも入らず、俺は早めに就寝した。

・・・・・・

先「ではこの問題を・・・秋月君にやってもらいましょう」

一「・・・・・」

先「秋月君?」

一「は、はい、何でしょうか?」

先「この問題を解いてもらえますか?」

一「わかりました」

先「・・・・大丈夫ですか?　今日は朝から調子が悪そうですが」

一「問題ないです、心配をおかけしてすみません」

先「そ、そうですか・・・」

席を立ち黒板の前に進む。いかんな、集中しないと・・・

ア「どうしたのかしら一成？」

す「うん、気になるね」

な・フェ・アリ「「「・・・・・」」」

授業が終了し、昼食をとるため屋上に上がる。

す「ねえ一成君、何か悩みでもあるの？」

一「え？」

す「だって、今日は朝からずっと暗い顔のままだよ？　一成君のそんな顔今まで見た事ないもん」

一「・・・・」

す「話してみてよ。もしかしたら力になれるかもしれないし」

優しい口調、だがしっかりとした目で俺を見据えるすずか。

一「・・・何でもないよ」

ア「ウソね」

間髪入れずにアリサが続く。

ア「アンタ、自分が今どんな顔してるかわかってんの？　そんな顔して何でもないわけないじゃない」

一「俺は元々こんな顔だが・・・」

ア「茶化さないで！」

一「・・・・」

な「あ、アリサちゃん、落ち着いて」

ア「・・・アンタは私達よりずっとしっかりしてるし、アンタから見れば私達は頼りないかもしれない。でも、まったくの役立たずって事はないでしょう？」

一「アリサ・・・」

ア「だから話してよ・・・少しは私達を頼りなさいよ・・・・」

一「・・・ありがとうアリサ、でも本当に何でもないんだよ」

こんな心優しい娘に心配をかけたくない。ボロを出さない内に先に教室に戻る事にした。

な「アリサちゃん、どうしてあんな事・・・」

ア「許せないのよ、私達には遠慮なく踏み込んで来るくせに、自分には全然近寄らせない事が！」

フェ「・・・そうだね、一成は私達が困ってたらすぐに助けてくれるけど、自分の事は全部自分で何とかしようとするもんね」

ア「お互いを助け合うのが友達でしょ？　なのに・・・あいつは全然私達を頼りにしてくれない」

アリ「それは、私達に迷惑をかけたくないから・・・」

ア「迷惑って何よ！　何も知らないくらいなら迷惑をかけられる方がよっぽどマシだわ！」

す「・・・そうだね、私もそう思う」

ア「そしてあいつ以上に許せないのは・・・何の力にもなれずにただ見ているだけしか出来ない私自身よ！」

な「アリサちゃん・・・・ハンカチ」

ア「へ？　何で・・・」

な「・・・涙」

ア「えっ、あっ、これは・・・その・・・・そう！　目にゴミが入っただけよ！」

す「・・・本当に？」

ア「と、当然よ！　何で私が一成の為に泣かなくちゃいけないのよ！」

す「あれ？　私、一成君とは一言も言ってないよ？」

ア「・・・はっ！」

アリ「アリサちゃんって本当に優しいんだね」

フェ「うん、私もアリサみたいになりたいな」

ア「う、うるさいうるさいうるさ～～～い！！！」

・・・・

一「ふう・・・」

放課後、寄り道もせず真っ直ぐに家に帰った。

一「（そういえば、はやてはどうしているだろうか）」

あれから四日経ったんだ、蒐集もそれなりに進んでいるだろう。シグナムさん達の様子も気になるし、また訪ねに行った方がいいかもしれない。

一「そうと決まれば早速・・・」

ピンポーン！

静かなリビングにインターホンの音が鳴り響く。

一「なのは・・・」

ピンポン！　ピンポン！　ピンポーン！

一「・・・じゃないな」

彼女はこんなハタ迷惑な事は絶対しない。同様の理由でフェイトも除外だ。

ピンポン！　ピンポン！　ピンポーン！

一「・・・いいだろう、そんなに連打するほど火急の用事があるのなら聞いてやろうじゃないか・・・・拳を交えてな！！」

俺は拳を握りしめて玄関に向かった。

？「だから大丈夫だって！　ここ以外に秋月って表札はないんだし、間違いねえって！」

玄関に近づくにつれ、外から声が聞こえて来る。それにしても、何だ？　一人じゃないのか？

？「今度は何だよ？　え？　インターホンをそんなに連打するなって？　そんなのすぐに出て来ないあいつが悪いんだろ」

一「（ほお・・・ずいぶん面白い事を言ってくれるな）」

？「それに、こっちはあいつを探すのにあっちこっち走り回って大変だったんだ、これくらいの嫌がらせは当然の権利だろ。はっ？　オレがいちいち寄り道しなければもっと早く見つかったって？　う、うるせえ！」

一「（それにしてもこの声・・・どこかで聞いた憶えが・・・・・）」

懐かしさを感じながら玄関を開ける。

？「おお！　やっぱりここで合ってたか、久しぶりだな一成！」

一「・・・・え？」

そこには一人の少女が立っていた。俺の名を呼びながら笑みを浮かべるその少女の前で俺は間抜けな声を出しながら固まってしまった。

少女「ん？　どうしたんだよ一成、そんなあり得ないものを見たような顔して」

実際そうだ、何で彼女がここに・・・この世界にいるんだ！？

一「り、龍・・那・・・？」

少女「へへ・・・」

少女の名は仙道　龍那　（センドウ　リュウナ）・・・かつて偶然出会い、共に肩を並べて戦っていた大切な仲間の一人だ。

一「とりあえず・・・あの一言を言わないとな」

龍「？」

一「・・・・どうしてこうなった」

第六話　悩み事はさっさと相談した方が楽（後書き）

作「はっはあ！　今回の話で一成の評価はダダ下がりのはずだ！」

？「やれやれ、ずいぶん小さい事をするのだなキミは」

作「今度はお前かよ・・・ゼノン」

ゼ「酷いな、無明からキミが寂しがっていると聞いてわざわざやって来たのだが」

作「べ、別に寂しくなんかないやい！」

ゼ「そうか、では帰るとしよう」

作「ちょ、ちょっと待てよ！　せっかく来たんだし、もう少しいればいいだろ！」

ゼ「ほお・・・まさかキミにツンデレ属性があるとは思わなかったな」

作「ば、馬鹿じゃないの！　そんな事あるわけないじゃない！」

ゼ「今の台詞・・・まさにツンデレだな」

作「・・・はっ！　つい乗ってしまったぜ。やるなゼノン」

ゼ「ふ・・・」

作「しっかしまあ・・・やっぱりシリアスは難しいな。早く馬鹿やりたいぜ」

ゼ「そうだな、この小説のキーワードは『シリアス？　知らん』なのだろう？　どうするつもりだ？」

作「しばらくはシリアスが続くが、後半は萌える・・・じゃない、燃える展開にするからな。シリアス嫌いな方には少しだけ我慢して頂こう」

ゼ「それは楽しみだな」

作「・・・お前、自分が敵だという事忘れてないか？」

ゼ「・・・・あ」

作「そうだ、今回の話のメインは誰だと思う？」

ゼ「いきなり話を変えるなキミは・・・アリサという少女じゃないのか？　あの言葉は感動したぞ、とても小学生が言う台詞とは思えないな」

作「正解、これから出番が少なくなるだろうし頑張らせてみました」

ゼ「将来は素敵な女性になりそうだな」

作「お前・・・まさか」

ゼ「言ってみただけだよ、私は既婚者だからな」

作「へ～～・・・って、サラッと本編で出ていない情報を口に出すな！」

ゼ「いいではないか、後書きは何でもありなのだろう？」

作「限度があるだろ！」

ゼ「そんなに言うなら私からも言わせてもらおう。新キャラをあんなにあっさり出してよかったのか？　もっとこう・・・ちゃんとした場面で出した方が良かったのではないか？」

作「新鮮だろ？」

ゼ「・・・まあ、キミにも考えがあるのだろうな」

作「（あれ？　突っ込まれるかと思ったのに）」

ゼ「ちなみに、あの名前は・・・」

作「読者の方の案を使わせていただいたぜ。ＳＩＮ様！　ありがとうございます！」

ゼ「やはりそうか・・・では、ＳＩＮ君にはお礼にオセロを差し上げよう」

作「な、何でオセロ？」

ゼ「あれほど心躍るゲームは他にないぞ？　私もよく無明と対戦してるからな。ちなみに未だ彼女には負けた事が無い」

作「へえ、じゃあ今度対戦してみるか？」

ゼ「面白い、ぜひやらせてもらおう」

作「じゃあ、今回の贈り物報告会に移ろうか」

ゼ「では今回は私が・・・緋水君からコジマ兵装とキングギドラを頂いたぞ」

作「前回に続いてＡＣとゴジラ関係か」

ゼ「これは・・・」

作「な、何だよ、お前も無明と同じで下品とか言うのか？」

ゼ「素晴らしい！！」

作「・・・へ？」

ゼ「こんなに素晴らしい生物がこの世にはいたのか・・・私は今猛烈に感動している！！」

作「そ、そうか・・・よかったな」

ゼ「こんな素晴らしいものを贈ってくれた緋水君にはオセロをプレゼントだ」

作「お前、いくつオセロ持ってんだよ！！」

ゼ「次は清浦刹那君か・・・無明宛てにＦａｔｅエクストラのセイバー（ネタバレになるので真名は伏せます）のドレスを頂いたぞ」

作「頂いたのはいいが、肝心の本人がいないな」

ゼ「これは私が責任を持って無明に渡しておこう。では清浦刹那君にもお返しにオセロをプレゼントだ」

作「お前・・・まさか全員にオセロ渡すつもりか？」

ゼ「ちなみに、三つ集めると金のオセロと交換できるぞ」

作「一色じゃゲーム出来ないだろうが！」

ゼ「さらに、清浦刹那君には無明のＣＶも考えてもらったぞ」

作「誰だ？」

ゼ「新井里美という方だそうだ」

作「確か・・・とある科学の超電磁砲の白井黒子の人だよな」

ゼ「詳しいな」

作「当然だ」

第七話　一方的な関係は友達とはいえない（前書き）

今回出てくる新キャラの名前はあるゲームから拝借しました。わかる人いるかな。

それと、もしよろしければ活動報告を見てやってください。

第七話　一方的な関係は友達とはいえない

龍「とりあえず、邪魔するな」

呆けている俺を余所に、家にあがり込んで来る龍那。

龍「リビングってどっちだ？」

一「あ、ああ、そのまま真っ直ぐ行った所だ。それより龍那、何でキミがこの世界に・・・」

龍「慌てなくてもちゃんと説明してやるって。それよりずっと外にいて体が冷めきってんだから早く行こうぜ」

一「わ、わかった・・・」

とりあえず場所をリビングに移し、適当な場所に座ってもらった。

龍「ほえ～～・・・お前、いい家に住んでんな」

一「そうかな？　そうだ、コーヒーでも淹れようか」

龍「ブラックな」

カップを二つ用意し、一つはそのまま、もう一つは注いだあとに少し砂糖を入れる。

一「お待たせ」

龍「んぐっ・・・ふう、温まるな～～」

一「落ちついたか？」

龍「おかげさまでな、んじゃそろそろ話しでもするか」

正直、彼女には聞きたい事が山ほどあった。

一「まずは、キミがこの世界に来た理由を教えてくれないか」

龍「ん～とだな・・・久しぶりにお前の顔でも見ようと思ってたらいきなり変なジイさんが現れてな、アニメＤＶＤを大量に見させられた挙句この世界に跳ばされたってわけだ」

一「・・・・は？」

龍「だから・・・ん？　そんな説明じゃわかってもらえないって？　しかたねえだろ、オレこういう説明苦手なんだよ」

すると突然、俺ではない誰かと会話を始める龍那。傍から見れば少し危ない人だが、彼女に関していえば別におかしな事ではない。

龍「あ～わかったわかった、ならお前から話してくれよ『雲母』」

そう言うと同時に龍那の纏う雰囲気が鋭いものから柔らかいものに変わった。それこそ別人のように・・・

龍？「・・・・もう、龍那ったら都合が悪くなったらすぐ代わるんだから」

頬を膨らませる龍那・・・いや、今の彼女は龍那ではない。彼女は・・・

一「相変わらず振り回されてるみたいだな・・・・雲母」

彼女は仙道　雲母　（センドウ　キララ）・・・とある事情で龍那と体を共有する事になったもう一人の少女だ。

彼女達との出会い・・・彼女達が一つの体に二つの魂を宿す事になった理由・・・今でも鮮明に思い出せるが、まあそれは置いておこう。

雲「お、お久しぶりです一成さん」

一「ああ、キミも元気そうで何よりだ」

顔が綻ぶ。予想外とはいえ、こうして二人と再会出来たことは素直に嬉しい。

雲「あ、あう・・・・／／」

すると、雲母は顔を真っ赤にさせ俯いてしまった。

一「はは、照れ屋な所は相変わらずみたいだな」

二人の性格は１８０度違う。龍那は何事にも積極的で男勝りな性格をしている。対する雲母は引っ込み事案で周りの人間を立てるタイプだ。一見合わなそうな二人だが、実際はお互いを尊重しあって良い関係を築いている・・・というのが俺の見解だ。

だが、やはり合わないものもあるようで、例えば・・・

雲「こ、コーヒー頂きますね！」

慌てた様子でカップに口をつける雲母。

一「待て、それは・・・」

雲「むぐっ！？」

一「・・・・遅かったか」

雲「・・・に、苦いれふ～～」

・・・とまあ、一方がこの様な目に遭う事もしばしばらしい。

一「砂糖入れようか？」

雲「お、お願いします・・・」

そのままでは可哀そうと思い、砂糖を取るために席を立とうとすると・・・

＜ちょ、待てよ！　勝手に甘ったるいモン入れるなぁ！＞

一「え？」

今のは龍那の声だ、だが何故・・・今は雲母が主人格のはずだ。

＜どうしたんだよ一成？＞

一「何でキミの声が聞こえるんだ？」

＜念話だよ念話、お前も使えるんだろ？＞

一「・・・まさか、念話で魂と話が出来るとは」

＜ご都合主義ってヤツだ＞

一「なるほど」

＜とにかく、オレの目の前で砂糖なんて甘ったるい物を入れるな＞

一「わかったよ、じゃあ新しいのを淹れるから待っててくれ」

新たに淹れたコーヒーに多めに砂糖を入れ席に戻る。

一「じゃあ、今度こそ話してもらえるかな」

雲「はい、実はですね・・・」

コーヒーを一口飲み、雲母はゆっくりと口を開いた・・・

曰く、俺を探していた二人の前に神を名乗る怪しい老人が現れ、俺

がこの世界にいる事を教えられた。そこで自分達を跳ばしてくれるよう頼んだところ快諾、その際大量のアニメＤＶＤを強引に鑑賞させられたらしい。そしてこの世界に跳ばされ、今日ようやく居場所を突き止めたそうだ。・・・・間違いなく駄神の仕業だな。

雲「そういえば・・・神威さんと天翔さんがいませんね、出掛けてるんですか？」

一「ッ・・・・」

二人の名を聞いた瞬間、顔が強張るのがわかった。

雲「一成さん・・・・？」

一「それは・・・」

＜・・・何かあったみたいだな＞

一「・・・・ああ」

雲「話して・・・くれませんか？」

俺はこの世界での今までの出来事を全て話した。それこそなのはとの出会いから無明に敗北したまでの全てを・・・

雲「そんな・・・神威・・じゃなかった、神奈さんと天音さんが・・・」

＜お前が手も足も出ないなんて・・・なかなか骨がありそうな相手だな＞

一「ああ、神剣解放もまるで意味がなかった。・・・完敗だよ」

雲「・・・これからどうするんですか？」

一「もちろん、二人の居場所が判明次第助けに行く」

＜まさかとは思うが・・・・一人でか？＞

一「全ては俺の弱さが招いた事だ、なのは達を・・・友達を巻き込みたくない」

雲「だ、駄目ですよそんなの！」

＜・・・・雲母、ちょっと代われ＞

雲「え？」

＜いいから＞

雲「う、うん・・・」

再び龍那に代わるようだ。

龍「・・・一成、お前が仲間を大切に思ってんのはオレも雲母もよくわかってる。けど、その考え方はちょっといただけねえな」

一「どういう事だ・・・？」

龍「例えばだ・・・明らかにイジメられている友達がいたとする、お前はそいつに話を聞くが、遊んでいるだけだとしか答えない。さて、お前はどう思う？」

一「『何で本当の事を言ってくれないのか？』『俺では力にはなれないのか？』・・・多分、悔しさや悲しさでいっぱいになると思う」

龍「なら、友達の方は何でウソをついたのか・・・」

一「『巻き込みたくないから』『自分といたら一緒にイジメられてしまうかもしれないから』・・・そんな感じじゃないのか」

龍「まあそうだろうな。だからこそ、その友達は本当の事を言わなかった。・・・だけど、この場合友達がとるべきだった行動は何だ？」

何となくだが彼女の言いたい事がわかってきた。おそらく、この話に出て来る友達は・・・

一「それは・・・本当の事を話す事だと思う」

龍「何でだ？　もしかしたら自分を心配してくれている人間を巻き

込んでしまうかもしれないんだぞ」

一「それでもだ。一人ではどうにも出来なくても、二人なら何とかなるかもしれない。それに、もし現実でそんな事があったら、イジメられるより友達の力になれない方が俺は辛い」

龍「お前の場合、イジメを目撃した瞬間、相手をボコボコにすると思うけどな」

一「・・・・そうかもな」

龍「さてと、我ながらおかしな例え話だったけど・・・・お前ならわかってんだろ？」

一「ああ・・・・」

龍「お前は何でもかんでも一人で背負い込み過ぎなんだよ。ちょっとくらい他人に任せても罰は当たりゃしねえよ」

≪いいかユーノ・・責任感の強い君が一人で抱え込もうとする気持ちもわかる。でも、今は俺達がいる。だから少しは俺達を頼ってくれ≫

以前ユーノに言った台詞を思い出す。偉そうに言っていたくせに、わかっていなかったのは俺の方だったみたいだな・・・・

ピンポーン！

その時、再びインターホンが鳴り響いた。

龍「行ってこいよ、お前が今一番話さなきゃいけないヤツらだ」

龍那に促され、玄関に向かい扉を開ける。

な・フェ「「こ、こんにちは・・・」」

一「二人とも、どうしたんだ？」

な「あ、あのね、ちょっとお話があって・・・」

フェ「一緒に公園に来て欲しいんだ」

二人の緊張が伝わってくる、どうやら重要な話のようだ。

一「・・・わかった、行こう」

留守を龍那と雲母に任せ、俺は二人と共に公園に向かう事にした。

龍「やれやれ、世話の焼けるヤツだぜ」

＜あの顔・・・少しは吹っ切れたみたいだね＞

龍「（ああ・・・にしても、何でさっき一言もしゃべらなかったんだ？）」

＜だって、珍しく龍那がカッコいい事言ってるのに口を挟むのも悪いと思って・・・＞

龍「（一言余計だっての。まあ、アイツの沈んでる顔なんて見たくねえしな）」

＜そうだね、一成さんにはあんな表情似合わないもの＞

龍「（アイツは馬鹿みたいに突っ走ってればいいんだよ。そんで、もし道を踏み外したら・・・そん時はオレ達が引き揚げてやればいい）」

＜なんだろう・・・今の龍那、いつもより輝いて見えるよ＞

龍「（ふ・・・）んぐっ」

＜あっ！　そっちのコーヒーは・・・！＞

龍「ぶはっ!?　あ、甘い・・・・」

＜・・・台無しだよ龍那＞

・・・・・

公園に着いた俺は、そこで二人に昼休みの事について聞かされた。

一「・・・そうか、アリサがそんな事を」

さっき俺が思った事と一緒だ、そこまで真剣に考えていてくれたなんて・・・

な「一成君、私達もアリサちゃんと同じ気持ちだよ。今まで一成君にはたくさん助けてもらった、だから今度は私達が・・・」

フェ「私達じゃ足手纏いかもしれない、もしかしたら、また迷惑をかけてしまうかもしれない、でも・・・！」

な・フェ「「私は・・・あなたの力になりたい」」

一「・・・・・」

俺はどこまで馬鹿だったんだ・・・何で今まで気付かなかったのか・・・ここまで言ってくれる友達を何故頼ろうとしなかったのか・・・・

≪お前は何でもかんでも一人で背負い込み過ぎなんだよ。ちょっとくらい他人に任せても罰は当たりゃしねえよ≫

龍那の言葉が頭をよぎる。あの時だってそうだ、一人で戦わず、なのはと力を合わせれば結果は違っていたかもしれない・・・

一「（いや、過ぎた事を悔やんでもしょうがない、今は・・・）」

な・フェ「「一成（君）・・・」」

一「・・・今の俺には大した力は無い。このまま無明と戦う事になったら今度こそ死ぬかもしれない」

な「ッ・・・」

一「けど、それは一人で戦った場合だ。一緒に戦ってくれる仲間がいれば必ず突破口は開ける」

フェ「え、それって・・・」

一「俺一人では何も出来ない。だから二人とも、どうか俺に力を貸してくれ。神奈達を・・・俺の家族を助ける為に！」

な・フェ「「・・・うん！」」

俺の想いに、二人は笑顔で以って応えてくれた。この時の笑顔を俺は決して忘れる事はないだろう。

一「（待っていてくれ、神奈、天音、刹那、俺達が必ず助けてみせるからな）」

家にいた時がウソのように、俺の心は晴れきっていた。

・・・・・

その後、二人と別れた俺はアリサの家に向かった。

鮫「お嬢様、秋月様がお見えになられました」

鮫島さんに案内され、アリサの部屋に通された。

ア「どうしたの一成、ずいぶん急じゃない」

一「すまない、どうしてもキミに言いたい事があってな」

ア「言いたい事？」

一「実は、昼休みの事をなのはとフェイトに聞いたんだ。キミが俺の為に泣いてくれた事を・・・」

ア「なっ！？　あ、あのおしゃべりめ～～！　黙っときなさいって言ったのにぃ！！」

顔を真っ赤にさせ、なのはとフェイトに不満を爆発させているアリサにゆっくり近づく。

一「アリサ・・・」

ア「ち、違うわ！　二人が何言ったかわかんないけど、あの時は目にゴミが入っただけで・・・！」

ギュッ・・・・

ア「・・・ふえ？」

万感の思いを込め、アリサの手を取る。

一「ありがとうアリサ、俺は・・・キミのような友達を持てて本当に嬉しい」

ア「ちょ、ちょっと・・・一成？」

一「今はまだ全てを話せないけど、いつか必ず話す。だからそれまで待っていてほしい」

ア「う、うんわかった、わかったから、ね？　手を・・・・」

一「・・・・キミに出会えてよかった」

ア「ッ～～～～～！？」

ボンッ！

一「あ、アリサ！？　どうしたんだ！？」

ア「ふにゃあ・・・／／」

一「鮫島さん！　アリサが・・・あれ？」

さっきまで後ろに控えていたはずの鮫島さんが何処にもいない。

鮫「（鮫島はクールに去りますぞ）」

結局、何故か気絶してしまったアリサの意識が戻るまで、俺は彼女の傍についていた。

ア「こ、この馬鹿犬～～～！」

目覚めた直後にいきなり引っ叩かれた。しかも犬って・・・・なんでだ？

第七話　一方的な関係は友達とはいえない（後書き）

龍「後書きに・・・オレ、参上！」

作「ちょ、勝手に出て来るな！」

龍「オレだけじゃないぞ、ほら」

作「え？」

雲「あ、後書きに・・・私、参上です／／」

龍「なに恥ずかしがってんだよ雲母」

雲「だ、だって・・・」

作「・・・後書きだから二人がいてもおかしくはない。だが、一言言わせて欲しい・・・萌え」

龍「汚ない目で雲母を見るな！！」

ゲシッ！

作「ぬるぽ！？」

龍「ふう、汚物は消え去ったぜ」

雲「い、いいのかな、作者さんがいないと私達の紹介が出来ないんじゃ・・・」

龍「どうせその内纏めてやるから大丈夫だって。オレ達と一成の出会いも本編で書かれるだろうしな」

雲「そうなの？　なら今回の後書きは顔見せみたいなものなのかな」

龍「そういうこった」

龍「おっと、そういえば贈り物報告会ってヤツがあるんだったな」

雲「今回は私達が紹介します。えっと・・・緋水さんからパルヴァライザー（タンク型）とモスラを頂きました・・・って、ええ！？」

龍「おお、でっけえな～～。ちょっと戦わせてみるか」

雲「ま、待って龍那！　きゃあ～～～！？」

雲「うう、死ぬかと思った・・・」

龍「次は清浦刹那って人からだ、作者にメロンパンをもらったぞ」

雲「え？　でも、作者さん今いないよ」

龍「・・・食うか」

雲「だ、駄目だよ！　人のもの勝手に食べたりしたら」

龍「いいって、この場にいないアイツが悪いんだから」

雲「（・・・自分の所為なのに）」

雲「あ、そうだ、今回もイメージＣＶを考えてもらったから紹介しなくちゃ」

龍「今回は誰だ？」

雲「えっと・・・龍那のイメージＣＶだよ、倉田雅世さんって人みたい」

龍「『スクライド』のシェリス・アジャーニ役の人だな。他には・・・『ガン×ソード』のファサリナとか、『コードギアス』のラクシャータとかだな」

雲「今回は月光閃火さんに送ってもらいました、それでは次回以降をお楽しみに」

龍「ああそうそう、次回くらいには一成も復活するそうなんで」

第八話　新キャラのお披露目は出来るだけ派手に（前書き）

元気（感想）が足りません。みなさん、どうか私に元気（感想）を与えてください！

第八話　新キャラのお披露目は出来るだけ派手に

翌日、俺は二人をアースラに連れて行き、そこで全員に紹介をした。

一「・・・というわけで、彼女達も協力してくれる事になった」

龍「仙道　龍那だ、よろしくな」

＜せ、仙道　雲母です、よろしくお願いします＞

二重人格という事で多少驚かれたが、みんな快く彼女を受け入れてくれた。

顔合わせを終え、現状の確認だけ済ませようと思ったのだが、クロノのある一言で事態は思わぬ方向へ進む事となった。

ク「一成、実際彼女達の力はどれくらいなんだ？」

一「ん？」

ク「キミの仲間なら実力は充分なんだろうが、味方の戦力をちゃんと知っておくのは重要だからな」

一「そうだな、二人は・・・」

俺よりずっと強い・・・そう続けようとした俺を遮り、龍那が口を開く。

龍「クロノだっけ？　確かにお前の言う通りだ、なら模擬戦でもすっか？」

ク「え？　いや、僕は別に・・・」

龍「遠慮すんなって～」

ガシッ！

全てを言い切る前に龍那がクロノの襟を掴む。

龍「誰か模擬戦出来る所まで案内してくれ」

エ「あ、じゃあ私が・・・」

ク「お、おいエイミィ！」

エイミィの案内の元、龍那はクロノを引き摺りながら部屋を出て行った。

な「行っちゃった・・・どうする一成君？」

一「俺達も行こう、クロノが心配だ」

なのは達を連れ、俺も三人のあとを追った。

龍「へえ、なかなかのモンだな」

模擬戦用の部屋を見た龍那が開口一番そう洩らす。

ク「それは・・・よかった・・・・な」

龍「あれ？　何でそんなに息が絶え絶えなんだよクロノ？」

ク「キミが有無を言わさず僕を引き摺って来たからに決まっているだろう！」

龍「え、あ、悪い悪い、すっかり忘れてた」

ク「わ、忘れ・・・」

龍「で、すぐに始めていいのか？」

エ「あ、準備しないと・・・」

エイミィがパネルを操作すると、部屋の雰囲気が一変した。

エ「よし、これでどんな魔法を使っても大丈夫だよ」

ク「またキミは勝手に・・・」

龍「何だ？　やらないのか？」

ク「・・・いや、やるよ。ここまでお膳立てされて逃げるなんて男らしくない」

龍「言うじゃねえか、そういう男は好きだぜ」

ク「なっ・・・・／／」

何の気無しに放たれた言葉にクロノの顔が赤みを増した。

龍「へへ、照れんなって」

ク「て、照れてなどいない！！」

龍「そうやってムキになるのがいい証拠だぞ～～」

ク「ぐっ・・・・！」

ユ「クロノ・・・遊ばれてる」

ユーノの言う通り、完全に龍那のペースにはまってしまったクロノ。
しかしまあ、ああいう所も変わってないみたいだな。

ク「も、もういい、さっさと始めよう」

一「待つんだクロノ」

デバイスを持ち、位置に着こうとするクロノを引き止める。

ク「どうしたんだ一成？」

一「いいか、最初から全力でやるんだ。じゃないと・・・潰されるのはこっちだ」

ク「え？」

一「いいな？」

ク「わ、わかった・・・気をつけるよ」

そう言って今度こそクロノは位置に着いた。

龍「さ～て、模擬戦とはいえこの世界での初の戦いだ、楽しみだぜ」

＜どうするの龍那？＞

龍「（そりゃあもちろん全力全壊・・・）」

＜だ、駄目だよ！　クロノ君を殺す気！？＞

龍「（じょ、冗談だって）」

＜もう、龍那のそれは冗談に聞こえないんだよ＞

龍「そうだな・・・よしクロノ、オレから一つ提案なんだが」

ク「提案？　何だい？」

龍「今からオレはお前の元まで歩いて向かう。そして、その間オレからは一切攻撃しない。オレを止められたらクロノの勝ち、止められなかったらオレの勝ちって事でどうだ？」

ク「な、何だそのルールは、キミには不利しか残らないじゃないか」

龍「いいんだよ、その代わり、オレが勝ったら罰ゲームな」

ク「・・・いいだろう、僕を甘く見た事を後悔させてやる！」

クロノが勇ましくデバイスを構える。一瞬だが、瞳に炎が映っていた気がした。

フェ「だ、大丈夫なのかな龍那さん、あんな事言って・・・」

一「彼女ならあれくらいしないと意味が無い。何せ・・・・俺なんかよりずっと強いからな」

な・ユ・フェ・アル・エ「「「「「「・・・・・・え？」」」」」」

一「？　どうしたんだみんな？」

ユ「い、今サラッととんでもない事聞いたんだけど・・・」

アル「アンタより強いって・・・・ホントかい！？」

一「ああ、彼女とは何度か勝負した事があるけど、神剣解放して刹那と二人がかりでもまるで歯が立たなかった」

俺の言葉に全員が冷や汗を垂らした。

な「そ、そんな人と戦うんだクロノ君・・・」

エ「・・・・骨は拾ってあげるからね」

龍「それじゃ、行くぜ」

そうこうしている内に始まってしまったようだ。龍那がクロノに向かってゆっくりと歩み始める。

ク「（まさか、本当に歩いて来るだけのつもりなのか？）」

龍「ほらほら、早く止めないと終わっちまうぞ～～」

ク「くっ・・・なら遠慮しないぞ！　スティンガーレイ！！」

複数の魔力弾がもの凄い速度で龍那に襲い掛かる。何故か避ける素振りも見せない龍那に、その全てが直撃した。

龍「・・・・何かしたか？」

ク「何っ！？」

痛みすら感じていないのか、歩く速度はまったく変わっていない。その様子にクロノの顔が驚愕に染まる。

龍「どうした～？　まさか、今のが全力じゃないよなぁ？」

ク「（防御シールドを展開したのか？　なら、次は貫通力の高いアレで・・・！）」

再びクロノが動く。さっきとは違い、一つだけ放たれた魔力弾が変則的な動きで龍那に迫る。

龍「誘導型か・・・！」

ク「スティンガースナイプ！！」

死角からの攻撃が見事ヒットした。だが、クロノは攻撃の手を緩めず、さらなる追撃に入った。

ク「まだだ！　ブレイズカノン！！」

以前見せた強力な砲撃が龍那の姿を掻き消した。今の一撃に相当な魔力を費やしたのだろう、クロノの息があがっている。

ク「ハアッ・・ハアッ・・・これで、どうだ・・・・」

沈黙と共に砲撃によって生じた煙が辺りを包む。

龍「・・・・ふう、やるなクロノ、今のは少し驚いたぜ」

ク「そんな・・・！？」

そんな中、煙を掻きわけ龍那がゆっくりと姿を現した。対するクロノは全力の砲撃をまったく意に介されていないのがショックだったのか固まっている。

一「しっかりするんだクロノ！　諦めたらそこで終わりだぞ！！」

声をかけるがクロノは動かない。そして、とうとう龍那がクロノの元に辿り着いてしまった。

龍「オレの勝ちだな」

ク「・・・ああ」

龍「これで、オレの強さはわかってもらえたか？」

ク「充分だ、とても心強いよ。これからよろしく頼む」

龍「おう」

握手を交わす二人。何はともあれこれで終わりだが・・・何か忘れているような・・・・・

龍「まあ、それは置いといて、最初に言った通り罰ゲームを受けてもらうぞ」

ク「約束だから今さらどうこう言うつもりはないが・・・何をさせるつもりだ？」

龍「さっきあれだけ攻撃したんだ、今度はそっちが痛い目に遭っても文句はないよな？」

ギュ・・・！

ク「え・・・・」

いきなり龍那がクロノを抱き締めた。余程驚いたのかクロノの体が跳ね上がった。

ク「な、何をするんだ！？」

龍「安心しな、ちゃんと手加減してやっから」

ニヤリと笑う龍那に嫌な予感しかしなかった。

一「まさか・・・アレをする気か？」

な「アレって何なの？」

一「以前、俺も同じルールで勝負した事があってな、クロノ同様俺も彼女を止められなかった。そして、その後受けた罰ゲームで俺は地獄を見た」

フェ「じ、地獄・・・？」

一「そう、その罰ゲームは・・・・」

龍「龍那・・・ブリーカーーー！」

ギリギリギリ！！

ク「ぐあぁぁぁぁぁぁ！？」

クロノの絶叫が室内に木霊した。

ユ「クロノ！？」

アル「な、何をしてるんだいあの女は！？」

一「彼女の技を問答無用でかけられる・・・それが罰ゲームだ。ちなみに、あの技で俺は背骨と肋骨を砕かれた」

エ「ええ！？　そんな、早く止めないと！！」

一「大丈夫、さっき手加減すると言っていたし、そもそも子ども相手にそんな・・・」

ミシミシミシ！！

ク「くぁｗせｄｒｆｔｇｙふじこｌｐ；@：」

な「軋んでる！　何か軋んでるよぉ！！」

フェ「く、クロノの顔が青紫色に・・・」

ユ「絶対まずいって！　泡まで吹き出してるよ！！」

アル「何とかしなよ一成！　あの体の痙攣はどう考えても異常だろ！！」

一「雲母ァ！！　龍那を止めろぉぉ！！！」

＜は、はいぃ！！＞

その後、強制的に入れ替わった雲母のおかげで、クロノはどこも骨折する事なく解放された。

余談だが、それから三日間、龍那は表に出る事を雲母に禁止されたらしい。まあ、当然と言えば当然か。

＜・・・何でこんな目に＞

雲「（自業自得だよ・・・）」

＜納得いかねぇ・・・・＞

第八話　新キャラのお披露目は出来るだけ派手に（後書き）

ク「作者はいるか！」

作「おお、後書きにクロノが出て来たぞ」

一「どうしたんだクロノ、かなり御冠のようだが・・・」

ク「言わなくてもわかるだろう！　今回の僕の扱いの酷さに文句を言いに来たんだ！！」

作「は、何言ってんだ？　読者の方はお前が酷い目に遭う方が面白いと思ってるんだぞ」

ク「そ、そんなデタラメ信じないぞ」

作「ホントだって、無印編でお前が一成にボコボコにされた時だって『クロノざまぁ』みたいな感想が結構あったし」

ク「なん・・・だって・・・・」

作「だから、お前はこれからもこんな目に遭っていくんだよ。今回はジー○ブリーカーを出したから次はマッ○ド○ルでも出すか」

ク「鋼○ジー○ネタはもう止めてくれ！」

作「だが断る。龍那と雲母は一成と違って制約が無いからな、今まで出せなかった趣味丸出しの戦いが出来るってわけさ」

一「それはいいが、何でよりによって鋼〇ジー〇なんだよ」

作「ん、今スパ〇ボやってるから」

一・ク「「・・・・なるほど」」

作「それはそうと、そろそろ無明やゼノンの話も書かないとな、何であそこまで刹那に執着するのかとか、過去に何があったのかとか」

ク「神奈さんと天音さんの事も気になるしな」

一「ああ、無事ならいいんだが・・・」

一「さてと、じゃあ贈り物報告会に移るか。クロノも参加してくれ」

ク「ぼ、僕もか？　わかった」

一「まずは清浦刹那様からだ、龍那と雲母に午後ティー（ストレート）と手作りの梨のタルトを頂いたぞ」

作「よし、俺が食うぞ」

ク「お、おい！　それはあの二人宛てに送られた物だぞ！」

作「いいんだよ、アイツらの物は俺の物だ！」

ク「・・・一成、キミは毎回こんなヤツと絡まなくてはいけないん

だな」

一「もう慣れたよ・・・」

ク「次は・・・緋水さんからだな、ガンダムとシャア専用ザクを頂いたぞ」

作「おお、ガンダム神話を作り上げた最初の機体とそのライバル機、こうして並べてみると壮観だな～～」

一「・・・あのツノが三倍速の秘密だと聞いたが」

ク「出鱈目じゃないのか？　やっぱりパイロットの腕だろう」

一「そうか、ところでクロノ、何で知識の無い君がそんなに話せるんだ？」

ク「後書きだからだよ」

一「二次元最高様からは、ユニコーン・・・もとい、ロリコーンガンダムを頂いたぞ」

作「おおい！？　二文字変わっただけでずいぶんおかしくなったな！」

ク「やはり、ユニコーンみたいにモードチェンジしたりするんだろ

うか？」

一「対ロリコン用になったりしてな」

作「対ロリコンってなんだよ！！」

ク「最後だな、マーボーさんの所のキャラ（名前がわからなかった）から一成宛にマフラーと手袋を頂いたぞ」

一「おい！　メッセージなり何なり利用して聞いとけよ！　失礼だろうが！」

作「だって・・・恥ずかしかったんだもん」

一「ええい、この役立たずが」

ク「一成、それよりお礼を・・・」

一「そ、そうだな、えっと・・・素敵なプレゼントありがとうございます。身も心も暖かく過ごせそうです」

作「喜べ、名前はわからんが女性からの贈り物だとは断言できるぞ」

一「何でだよ」

作「手編みの贈り物なんて女性に決まってる！　それに、感想のセリフ部分に『／／／／』があったし」

一「今すぐそのふざけた偏見を捨てされ」

ク「偏見というか幻想じゃないか？」

作「そういえば、またまたキャラのイメージＣＶが送られて来たぞ。今回は雲母だ」

一「『涼宮ハルヒの憂鬱』の朝比奈みくるか、確か・・・・後藤邑子さんだっけ」

ク「ああ、確かに合ってるな」

作「これでオリキャラ全員のＣＶイメージが揃ったな。にしても・・・豪華過ぎだろ」

一「あ、おい作者、期限が過ぎてるが初夢ネタのアンケートはどうなったんだ？」

作「ギクッ・・・」

ク「・・・どうやら芳しくなかったようだな」

作「二票だよ二票。もう少しあると思ったんだがな」

一「まあ、あれだ、そんな寄り道せずにさっさと本編進めろやって事だろ」

ク「しかし、キミのアンケートは相変わらず票数が少ないな、他の作者のみなさんのアンケートはかなりの数なのに」

一「つまらないからだろ」

作「言うな！　俺だって気にしてんだよぉ！」

第九話　追憶　～無明～（前書き）

こっちもこれが最後の更新・・・かな。

第九話　追憶　～無明～

一成が龍那と雲母に再会する少し前、神奈と天音は無明によって本局のとある部屋に連れて来られていた。

無「ここがあなた達が過ごす部屋よ」

神「何故貴様が本局に自由に出入りできるのじゃ？」

無「協力者がいるのよ。・・・名前は教えないけどね」

天「協力者？」

その時、天音の声に重なるように扉が開き、ゼノンが姿を現した。

ゼ「戻ったぞ」

神「何者じゃ？」

ゼ「私はゼノン・トライハルト。お嬢さん方、お名前を聞かせてもらってよろしいかな？」

神「・・・神奈じゃ」

天「天音と申します」

ゼ「ふむ、素敵な響きの名前だな。私の事は気安くゼノンと呼んでくれたまえ」

無「それよりゼノン。ちゃんと始末してくれたの？」

ゼ「その事なんだが・・・すまない、夕飯の事を考えていたら逃げられてしまった」

無「・・・・ワザとね」

ゼ「まさか」

無「・・・・・」

ゼ「・・・・・」

無「・・・いいわ、そういう事にしておいてあげる」

ゼ「ありがとう無明」

ナデナデ

無「ちょ、ちょっと、事あるごとに頭を撫でるの止めてよね」

ゼ「ははっ、すまない」

神「ちょっと待て！　始末とはどういう意味じゃ！」

天「まさか約束を破ったのですか！！」

無「あら、『私』は見逃すと言ったけど、他の人物に関しては何も約束してないでしょ」

神「そんな屁理屈！」

無「黙りなさい・・・」

ブワッ！！

神「なっ・・・！？」

天「う、動けない・・・・」

見えない何かが神奈と天音を拘束する。神剣と霊剣の絶対的な差、それがプレッシャーとなって襲い掛かる。

無「自分の立場を考えなさい、あなた達は黙って私に従えばいいの」

神・天「「くっ・・・」」

無「ゼノン、二人の事は任せるわ。私は少し休ませてもらうから」

ゼ「お姫様の仰せの通りに・・・」

無「そうそう、この部屋は特殊な結界に覆われてるから逃げようとしても無駄よ。まあ・・・運良く逃げだせたとしてもまた連れて来るだけの話だけど」

そう告げて、無明は振り返る事なく部屋を出て行った。

ゼ「・・・さて、何か欲しいものはあるかね？　可能な限り用意しよう」

神・天「「結構　（じゃ）（です）」」

ゼ「そうは言うが何も無いとヒマだろう・・・そうだ、後でオセロを持って来てあげよう」

神「・・・お主、一成を逃がしたというのは真か？」

ゼ「ん？　ああ、彼の事なら心配いらない。あの様子ならすぐに元気になるだろう」

神「そうか・・・」

天「よかった・・・」

ゼノンの言葉に神奈はホッと息を吐き、天音は安堵からか涙を流す。

ゼ「にしても、こんな美女二人に心配してもらえるなんて・・・彼

も中々スミに置けないな」

神「ふん、当然じゃ、一成は妾の全てじゃからの」

ゼ「羨ましいよ・・・私にはそこまで想ってくれる相手はいない。いや、厳密には『今は』か・・・」

天「ゼノン・・・さん？」

ゼ「ふっ、変わっているなキミは、敵に『さん』付けとは」

天「何となく・・・あなたは悪い人には見えませんから」

ゼ「・・・違う、私は大罪人だ。守るべきものを守れず、愛した者の想いも踏みにじり、復讐に身を燃やす私など・・・」

天音の指摘に表情を歪ませるゼノン。そのあまりの変化に神奈が思わず尋ねる。

神「お主・・・過去に何があったんじゃ？」

ゼ「聞きたいかい？　全てを失った一人の男のつまらない道のりを・・・」

ゼノンがゆっくりと口を開く・・・己が人生、己が罪を告白する為に・・・

無明ＳＩＤＥ

無「ふう・・・」

私は自分の部屋に戻りベッドに腰掛けた。ここととあの二人がいる部屋、そしてゼノンの部屋は全てグレアムに用意させたものだ。おかげで毎日快適に過ごせている。

無「あの男は生きてる・・・。ならいずれまた戦う事になるわね」

かかってくるならそれでいい。今度こそきっちり殺してみせる。

無「秋月　一成・・・脆弱な旅人の分際でお姉様を縛っていた罪深き男。私は決して許さない・・・・」

ズキッ・・・

無「ッ・・・・」

胸が痛い。ずっと前にお姉様につけられた傷が疼く。私は胸元をは

だけさせ、その部分にそっと触れた。

無「こうしていると、お姉様との思い出がたくさん浮かんでくる・・・」

私は記憶の引き出しに手をかけた・・・

・・・・・・・・・

・・・・・

・・・

霊剣『光明』・・・それが昔の私。私は特殊な霊剣で、単純な力の強さなら神剣にも劣らない程だった。それ故に、その力を狙う者達によって常に狙われ続けていた。

けれど、そんな大それた力はあっても使い方がわからなかった。だから、私は逃げ続けた。街を、国を、世界を・・・

孤独だった・・・最初は好意的でも、正体を知られた途端迫害を受

けた。本気で命の危険を感じた事も多々あった。

遠い年月の中、私は何も信じられなくなった。お姉様に会うまでは・・・

光「はあっ、はあっ、はあっ・・・・」

とある世界、油断しているつもりはなかったが、私は二人の男に追い詰められていた。

男A「逃がすな！　あの力は俺達の物だ!!」

男B「食らえ!」

ビシュッ!!

光「うあッ!?」

男の放った矢が私の足を掠める。鋭い痛みに足をとられ、私は転倒してしまった。

光「い、痛い・・・」

男Ａ「鬼ごっこは終わりだぜお嬢ちゃん」

男Ｂ「へっ、大人しく捕まりゃいいのに手こずらせやがって」

光「こ、来ないで・・・！」

ジリジリと近寄って来る男達、私は恐怖で固まってしまっていた。

男Ａ「・・・にしても、こうして改めて見ると上玉だな」

男Ｂ「確かに、これは力以外にも役に立ちそうだ」

二人の下卑た視線が突き刺さる。何かよからぬ事を企んでいるのは明白だった。

男Ａ「どうする？　一発ヤっとくか？」

男Ｂ「だな、そうすりゃ素直に言う事聞くだろう」

ビリィィィ！！

光「嫌ぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーーッ！！！」

服を破かれ、私は悲鳴をあげた。男達はそんな私の様子を見て笑っている。

男A「おら、大人しくしろって！」

光「止めて！　離してよぉ！！」

男B「うるせえ！」

パチン！

光「きゃあッ！？」

男　B「次騒いだらその可愛い顔がグチャグチャになるぞ？」

光「ひっ・・・」

男A「そうそう、そのままじっとしてろよ」

男B「なあに、すぐに気持ち良くしてやるからな」

光「助けて・・・誰か助けてよぉ・・・・・」

絶望の中、私は最後の助けを求めた。そして、その求めは確かに届いたのだ。

？「・・・・ライトバースト」

ボン！！

男Ａ「ぎゃあぁぁぁぁぁぁぁ！？！？！？」

光「・・・・え？」

透き通るような声が聞こえたと思った瞬間、爆発音と共に男の右腕が吹き飛んだ。付け根部分から盛大な血が噴き出す。

？「助けを求める声が聞こえたので来てみれば・・・何ともお決まりなシチュエーションだな」

男Ａ「痛え！！　痛えよぉぉぉぉぉ！！」

？「そうか痛いか。だがな、その少女が受けた傷は貴様のものよりはるかに痛いのだぞ」

男Ｂ「て、テメエ！　何者だ！？」

？「我は刹那・・・神剣刹那だ」

それが・・・刹那お姉様との出会いだった。

男達は勝てないと悟ったのかすぐに逃げて行った。その場には未だに固まっている私とお姉様だけが佇んでいた。

刹「さて・・・大丈夫か？」

お姉様は優しく声をかけながらゆっくりと近づいて来た。そんなお姉様に私は・・・

光「こ、来ないで！！」

お姉様を拒絶する私。まったく、もし今の私がその場にいたら思いっきり張り倒しているだろう。

刹「・・・ああ、こんな物々しい格好では怯えるのも無理ないな。少し待ってくれ」

そう言って、お姉様は着ていた甲冑をゆっくりと脱ぎ、私の目の前に珠の様な肌が晒された。

刹「どうだ、これなら怖くないだろう？」

光「来ないでって言ってるでしょう！！」

ブワッ！！

無意識に放ったオーラの刃がお姉様を斬り裂いた。にも関わらず、お姉様は笑顔を絶やさずに近づいて来た。

ギュ・・・・

光「あ・・・・」

そして、私の前に立ったお姉様は優しく私を抱きしめた。その瞬間、何か暖かいものが胸に燈ったのを感じた。

刹「大丈夫、大丈夫だ。我はお前の味方だ」

光「味・・方・・・？」

刹「今までずっと辛い目に遭って来たのだろう。よく頑張ったな・・・」

光「あ、ああ・・・」

刹「・・・・泣いてもいいんだぞ」

光「う・・うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

私は泣いた。泣いて泣いて泣きじゃくった。辛い日々の中、『味方』と言われたのはこれが初めてだったのだ。お姉様はそんな私の背を優しく撫でてくれた。

一時間は経っただろう。ようやく落ち着いた私はお姉様の胸元からゆっくり離れた。

光「あ、あの・・・助けてくれてありがとうございました」

刹「礼には及ばない。我は当然の事をしたまでだ」

光「でも、本当に嬉しかったんです。私・・・今まで助けてもらった事なんて一度ありませんでしたから」

刹「・・・・お前、名は？」

光「え？　光明ですけど・・・・」

刹「そうか、光明・・・・お前さえよければ我と共に来ないか？」

光「え・・・・」

刹「こうして出会ったのも何かの縁だろうしな。それに・・・・お前

はなぜか放っておけない」

光「い、いいんですか？　私なんかが」

刹「お願いしているのは我なんだがな・・・」

お姉様の言葉に、私は再び涙を流していた。

刹「・・・泣くほど嫌だったのか？」

光「ち、違います！！　嬉しいんです！！」

刹「そ、そうか。なら、いいのだな？」

光「はい！　よろしくお願いしますお姉様！」

刹「お姉様？」

光「だ、駄目ですか・・・？」

刹「・・・好きに呼べばいい」

光「嬉しいですお姉様！！」

こうして、私はお姉様について行く事になったのだ。新たな日々は新鮮な事ばかりで、私はお姉様をどんどん慕う様になっていった。

光「お姉様、あっちに素敵なお店がありますよ。行ってみませんか？」

刹「光明、今は買い物の最中だぞ。寄り道は駄目だ」

光「え～～、でもでも、美味しそうなケーキや紅茶がたくさんですよ！」

刹「お前が食べたいだけじゃないのか？」

光「うっ・・・・・」

刹「・・・・ふっ、仕方ないな。今回だけだぞ」

光「やったぁ！　お姉様大好き！」

苦手だった戦いも、お姉様に鍛えられ徐々にこなせるようになっていった。

光「やあぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

刹「甘いぞ」

ガキン！

光「きゃあ！？」

刹「我の勝ちだな」

光「うう、お姉様に勝つなんて無理に決まってるじゃないですか・・・・」

刹「そんな弱気でどうする。お前の力は我より上なのだから、その気になれば我を負かす事など造作も無いはずだぞ」

光「と、とんでもないですよ！　私がお姉様より上なんて！！」

刹「やれやれ・・・」

気付けばお姉様の存在が私の全てになっていた。

刹「光明、お前と契約するのはどんな人物だろうな」

光「わ、私は契約するつもりはありません！」

刹「・・・すまない、お前にとって契約とは忌まわしい事でしかなかったな」

光「それもありますけど・・・」

刹「？　他に何かあるのか？」

光「（契約したらお姉様と離れ離れになっちゃうじゃないですか。

そんなの嫌です）」

最早お姉様のいない日々など考えられなかった。けれど・・・そんな時間は唐突に終わりを告げる事になった。

光「お姉様・・・今なんて？」

刹「別れの時が来たのだ光明」

一瞬頭が真っ白になった。けれど、すぐに乾いた笑いを浮かべる。

光「あ、あはは・・・もう、お姉様ったら、笑えない冗談ですね」

刹「冗談ではない」

私の期待は木っ端微塵に砕かれた。気付けばお姉様の肩を掴んでいた。

光「どうしてですかお姉様！　私、何かお姉様を怒らせる事をしてしまったんですか！？　なら謝ります！　謝りますから！」

刹「そうではない、これはお前の為なのだ」

光「私の為？　どこが私の為だって言うんですか！」

私は初めてお姉様に声を荒げた。そんな私と対照的に冷静に話を続けるお姉様。

刹「光明・・・お前が我を慕ってくれるのは本当に嬉しい。まるで本当に妹が出来たみたいで新鮮だった」

光「だったら・・・」

刹「だが、こうも思うのだ、『我が光明を縛っているのではないか』。『せっかくのお前の可能性を、我が潰しているのではないか』・・・と」

光「私がお姉様に依存している・・・そういう事ですか？」

刹「そこまでは言っていない。ただ、お前の事を想うからこそ、我は別れるべきだと言っているんだ」

光「（別れる？　お姉様と私が？　また一人ぼっちになるの・・・？）」

刹「光明・・・」

光「・・・・ゃ」

刹「え？」

光「嫌！　絶対嫌！！　お姉様と離れるなんて考えられない！！！」

温もりを知ってしまった・・・・

幸せを知ってしまった・・・・

愛を・・・知ってしまった。

光「もう一人は嫌！　耐えられない！　耐えられる筈がない！！」

刹「落ちつけ光明！　何も永遠の別れだとは言っていない！！」

光「・・・・行かせない」

刹「何？」

光「力づくでも・・・行かせないんだからぁぁぁぁぁぁ！！！！」

私は激情に駆られてお姉様に向かって器を振り下ろした。

ガキィィィィィィィン！！！

刹「ぐうっ・・・・・！」

光「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

ギリギリ！！

刹「何のつもりだ光明！？」

光「行かせない・・・行かせないんだからぁ！！」

刹「くっ！　聞く耳なしか！！」

ギン！　ガン！　ギャリィィィィン！　ガツン！　ブオン！

交わされる刃、最初の方こそ私が圧していたが、感情に任せて戦う様な愚策がいつまでも通じるはずも無く、徐々にお姉様のペースになっていった。

ズバッ！

光「うあっ！？」

そして、ついにお姉様の一撃が私の胸元を斬り裂いた。

光「お・・姉・・・様」

刹「ッ・・・・・！」

私の声に体を固まらせるお姉様。その隙を、私が見逃すはずもなかった。

ズシュ！

刹「ぐあっ・・・・・！」

私の器がお姉様のお腹に深々と食い込み、鮮血が飛び散る。私はオーラフォトンで作った鎖でお姉様を拘束した。

光「油断大敵ですよ、お姉様・・・」

刹「こ、光明・・・・」

光「お姉様？」

お姉様の呼吸がどんどん弱くなっていく。見れば斬り裂かれたお腹からマナが漏れ出していた。

光「お、お姉様！　何で!?　どうして!?」

刹「はあっ、はあっ・・・・」

光「（考えてるヒマはない！　何とかしなくちゃ!!）」

私はお姉様と共に転移した。辿り着いたのは何も無い真っ白な世界。
追手から身を隠す時によく利用していた場所だ。ここなら襲われる心配も無い。

光「お姉様、待ってて下さいね！　すぐにマナを集めて来ますから！」

お姉様をその場に残し、私は別の世界に転移した。

男「ひ、ひいいいいいい!!」

女「きゃあぁぁぁぁぁぁぁ!!」

光「マナを・・・マナをよこしなさい!!」

マナを多く持つのは人間だ。だから私は・・・人間を殺し回った。

男、女、子ども、老人、目につく者全てを殺し、その奪ったマナを

器に溜めていった。そして気づけば、その世界の人口の十分の一もの人間を殺していた。

光「これだけあれば・・・」

大丈夫、そう思い、再びあの白い世界に跳んだ。

光「・・・・え」

しかし、戻った先にお姉様の姿はなく、ただお姉様を縛っていた鎖だけが落ちていた。

光「逃げ・・・られた・・・？」

・・・プチン

思えば、私はこの時壊れてしまったのだろう。いや、あれだけの数の人間を躊躇なく殺した時点で壊れていたのだ。

光「あは・・あはは・・・あはははははははははははは！！！！」

白い世界に私の笑い声だけが響き渡る。どこまでも、どこまでも・・・

光「鬼ごっこですかお姉様！　いいですよ、必ず捕まえてあげますからね！！」

そして、お姉様に与えるはずだったマナを全て吸収する事により、私は神剣に『神化』した。

・・・・・・・・・

・・・・・・

・・・

無「・・・・ちょっと耽け過ぎたかしら」

それからはあらゆる世界を巡りお姉様を探し回った。そんな中、ゼノンと出会い、さらにようやくお姉様のいる世界を突き止める事が出来たのだ。霊剣に分かれていたのは驚いたが、それも大した問題ではない。

無「お姉様という『光』を失ったあの時から私は『無明』になった・・・」

けれど、それもあと少しの辛抱だ。私が光明に戻れる時も近い。

無「誰にも・・・誰にも邪魔はさせないんだから・・・・・」

私は知らずの内に拳を握っていた・・・

第九話　追憶　～無明～（後書き）

作「さて、忌まわしいイベントも終わって今年も残すところあと僅かだな」

一「それってクリスマ・・・・」

作「今回は無明の過去について書いてみたが、これが結構難しかったんだよな」

一「まあ、ありきたりなストーリーだな。可も無く不可も無くって所か」

作「益々シリアス分が増してしまった。どないしよう・・・」

一「知るか」

作「次回はゼノンの過去話だ。こっちも重いから覚悟してろよ」

一「それにしても・・・刹那は事あるごとに腕を吹き飛ばすんだな」

作「そういう仕様です」

一「じゃあ、今回も贈り物報告会始めるか」

作「二次元最高様からなのはとフェイトに等身大一成抱き枕（通常状態と神剣解放状態）俺にいい夢を見られる枕を頂いたぞ」

一「とりあえず、なのはとフェイトには俺から届けておこう。自分で自分のプリントされた物を届けるのもアレだが・・・」

作「よし、これでいい初夢が見れそうだぜ」

一「それまで我慢できるのか？」

作「無理ッ！」

一「次は緋水様からだな、直死の魔眼の能力がついた眼鏡を頂いたぞ」

作「またヤバそうな物が来たな。ちょっとかけてみろよ」

一「ん・・・おお、視える、視えるぞ！」

作「するなよ！　何もするなよ！！」

作「月光閃火様からはオリジナルのガンダムを頂いたぞ。砲撃特化型、長距離バーストレール砲『デュクィース』搭載のガンダムアグニスだそうだ」

一「カッコいいな、お前も何か考えてみろよ」

作「そうだな・・・」

一「あ、やっぱり止めろ、どうせ厨二満載の期待になる事明白だからな」

作「・・・・否定はしない」

一「清浦刹那様からはお前宛てに鋼鉄ジーグ、龍那と雲母にはビッグシューターを頂いたぞ」

作「龍那ブリーカーの元ネタだな。他にもわかる人いるかな？」

一「ス〇ロボ好きならわかるだろう」

作「最後だな、マーボー様の所の瑠璃さんから手作りのみかんゼリーを頂いたぞ」

一「ああ、前回名前がわからなかった人だな」

作「なっ？　やっぱり女性だったろ？」

一「威張るな阿呆。そもそもお前が名前を聞いておけばよかっただけの話だろうが」

作「ぐっ・・・」

一「というわけで、全員分用意して頂いたがお前のは無し！」

作「いいだろう、今回だけは納得してやる！」

作「そうそう、今話題の『あなたの声優は誰？ったー』ってのをやってみたんだが、これがなかなか面白い結果が出たぞ」

一「へえ、どうなったんだ？」

作「こうなった」

秋月　一成・・・吉野裕行

神奈・・・緒方恵美

天音・・・大塚明夫

刹那・・・喜多村英梨

仙道　龍那・・・新谷良子

仙道　雲母・・・山寺宏一

無明・・・吉野裕行

ゼノン・・・梶裕貴

作「・・・以上だ」

一「うん、おかしいな。性別違うし、被ってるし」

作「ダンディボイスな天音にマーフィーボイスな雲母か・・・イケる！！」

一「イケないだろどう考えても！！」

新年特別番外編　一富士　二鷹　三茄子・・・んな夢見れるわけがない　前編

あけましておめでとうございます、番外編やっちゃいました。

あと、いないはずのキャラがいますが、あくまで番外編だと言う事を理解しておいて下さい。

新年特別番外編　一富士　二鷹　三茄子・・・んな夢見れるわけがない　前編

ゴーン・・・ゴーン・・・ゴーン・・・

除夜の鐘が鳴り響く。それは一年の終わり、そして新たな年がやって来るのを示している。

一「今年ももう終わりか・・・」

神「色々忙しない一年じゃったな」

天「そうですね、けれど楽しくもありましたね」

刹「我としては今年も我が君と結ばれなかったのが心残りだがな」

龍「ＺＺＺ・・・・・」

雲「ね、寝ちゃ駄目だよ龍那！　もう少し頑張って！」

な「ふわあ～～・・・・」

桃「あら、眠たいのなのは？」

士「無理して起きてなくていいんだぞ」

な「ううん、大丈夫だよ」

美「恭ちゃんみかん取って～」

恭「ああ、なのはも食べるか？」

な「うん」

ユ「（なのは、僕にも食べさせてくれないか）」

な「（いいよ）」

フェ「今ので八十七回だね」

アリ「全部で百八回鳴るんだよね。何でだろう？」

プ「一般的には人間の煩悩の数を表してるといわれているわね。それを鐘をつく事によって一つ一つ打ち消していく意味を持っているそうよ」

アル「へえ・・・って、何で知ってんだい？」

プ「ちょっと興味があってね」

は「みんな～～年越しそば出来たで～～」

ヴィ「おお、美味そう♪」

シ「では、私はお茶を用意します」

シャ「ザフィーラ、あなたの分もあるから元の姿に戻りなさい」

ザ「・・・ああ」

は「リィンフォース、運ぶの手伝ってくれへん」

リ「わかりました」

ア「そろそろ寝るわ、鮫島、あなたも休んでちょうだい」

鮫「承知いたしました。お嬢様、よいお年を・・・」

ア「あなたもね」

忍「すずか？　すずかってば～～」

す「すう・・・すう・・・・」

ファ「ありゃりゃ、寝ちゃってる・・・」

ノ「では、私が部屋まで運びましょう」

忍「お願いねノエル」

今年最後の時間を、それぞれ過ごす人々。そして、百八の鐘が鳴り終わり、新たな一年が幕を開けた・・・

一月一日、この日に見る夢は初夢と言われ、ある意味新年を占う大事な夢である。果たして、彼らの見る初夢とはどんなものだろうか。

なのはの場合・・・

？「・・・・は」

な「ん・・・・」

？「・・・のは」

な「え・・・？」

一「起きろなのは、そろそろ時間だぞ」

まどろみの中、ゆっくりと目を開けると、大人の姿の一成君が微笑みながら私を見ていた。

な「か、一成君!?　どうしたのその姿!!」

一「一成君?　またずいぶん懐かしい呼び方だな、昔の夢でも見てたのか?」

な「昔?」

一「そういえば、結婚してからもしばらくは一成君だったよな。いつ『あなた』って呼んでもらえるかずっと待ってたのを憶えてるよ」

な「け、結婚!?」

見れば、一成君の左手の薬指には指輪がはめられている。それに、私の薬指にも・・・

一「それよりなのは、早く準備してくれ。翠屋の開店まで時間が無い」

士「はは、二代目は熱心で助かるよ」

桃「ホント、これで翠屋も安泰ね」

いつの間にかお父さんとお母さんが立っていた。二代目って・・・一成君の事?　そっか、ホントに結婚したんだ私達。

士「これで心配事が一つ減ったな。あとはいつ初孫が見れるかだが・

・・」

桃「そうね、楽しみだわ」

な「ま、孫ってそんな・・・／／」

二人の言葉に顔が赤くなるのがわかる。

な「一成君も何か言ってあげてよ」

一「あー・・・その、俺はなのはさえよければいつでも・・・・」

な「ふえぇぇぇぇぇぇぇぇ!?」

一「なのは・・・」

な「か、一成君・・・・？」

一成君の顔がゆっくりと近づいて来る。これって・・・も、もしかして・・・

一「愛してるよ・・・なのは」

・・・・・・・

・・・・・

な「にゃあぁぁぁぁぁぁぁーーーーーー!!・・・・・・ゆ、夢・・・・？」

・・・

美由紀の場合・・・

美「一矢さーーーんっ!!」

待ち合わせ場所に着くと、先に来ていた一矢さんが私に向かって手を振ってくれた。今日は一矢さんとの初デートの日だ。

一「おはよう美由紀、可愛い服だね」

美「あ、ありがとうございます・・・・／／」

顔が火照る。この日の為に用意したのだ、そう言ってもらえてとても嬉しい。

一「じゃあ・・・行こうか」

美「はい！」

自然に差し出される手に私も自然に返す。そのまま一矢さんと手を繋ぎながらウインドウショッピングを楽しんだ。

一「あれ美由紀に似合いそうだな」

美「そうですか？　ちょっと大人っぽ過ぎる気がしますけど」

一「美由紀は充分大人な女性だよ」

美「も、もう、一矢さんったら・・・」

一「ははっ！」

その後も、一緒にお昼ご飯を食べたり、映画を見たりして過ごした。
そして、日が傾いて来た今、私達は公園のベンチに座って休んでいた。

美「あ～～楽しかった～～～！」

一「そうか、そう言ってもらえると嬉しいよ」

美「でも、全部奢ってもらっちゃって本当によかったんですか？」

一「もちろん・・・好きな女性の為ならあれくらい（ボソッ）」

美「え？」

一「い、いや！　何でもないよ！」

聞き返したけど実は聞こえていた。今、好きって・・・

美「か、一矢さ「おうおう！　見せつけてくれるじゃねえか！」・・・え？」

ガラの悪そうな二人の男が近づいて来た。もう、せっかくいい所だったのに。

男Ａ「お姉さん可愛いね～～！　そんなヒョロ男放っといて俺達と遊ばない？」

美「・・・行きましょう一矢さん」

男Ｂ「ちょ、待てよ！」

グイッ！

男が私の肩を掴む、けれど、次の瞬間にはその手は一矢さんによってねじ曲げられていた。

男B「痛ってぇ!!　何しやがる!!」

一「それはこっちの台詞だ」

男A「テメエ!　調子に乗るんじゃねえ!!」

バキ!　ドガ!　グシャ!

男A・B「「う・・うう・・・・」」

一「美由紀に手を出すヤツは俺が許さん!　わかったらさっさと消えろ!!」

男A・B「「は、はい～～～!!」」

一矢さんの一喝に男達は慌てて逃げ出した。相変わらずとんでもない強さだ。

一「ふん・・・」

美「ありがとうございました一矢さん」

一「当然の事をしただけだよ」

美「当然・・・ですか」

一「ああ、だって俺は美由紀の事が・・・・・」

美「私の事が・・・何ですか？」

一「いや・・その・・・・・」

美「言ってください。さっきみたいに」

一「き、聞こえてたのか！？　なら・・・」

美「ちゃんと聞きたいんです。一矢さんの気持ち・・・」

一「み、美由紀・・・」

美「はい」

一「お、俺はキミの事が、す・・す・・・・」

・・・・・・・

・・・・・

・・・

美「あ～あ、あと少しだったのにな～～～」

フェイトの場合・・・

フェ「うわあ、美味しそう・・・」

一成に連れられ、私は高級レストランで食事をする事になった。目の前には見た事も無い料理が並んでいる。

一「フェイト、乾杯しよう」

フェ「あ、そうだね」

カチン

グラスを軽くぶつけ、口をつける。何だろうコレ？　よくわからないけどとても美味しい。

フェ「あ、一成、ほっぺにソースがついてるよ」

一「え？」

フェ「取ってあげるよ」

ハンカチで一成の頬を拭うと、照れくさかったのか一成の顔が赤くなった。

一「す、すまない・・・／／」

フェ「ふふ、どういたしまして」

それからしばらく料理を楽しみながら会話をしていると、ふいに一成の雰囲気が変わった。

フェ「どうしたの一成？」

一「・・・俺達が付き合う様になってもう三年が経ったんだな」

フェ「そうだね・・・」

一成の言う通り、告白が受け入れられてからもう三年が経過していた。今日だってその記念にこのレストランにやって来たのだ。

一「この三年、とても充実していたけど、そろそろ決断の時だと思うんだ」

フェ「決断？」

一「これを受け取って欲しい」

そう言って、一成は小さな箱を取り出した。その中身は・・・

フェ「指輪？」

一「フェイト・・・俺と結婚してくれないか」

フェ「・・・・・え？」

一「俺はキミと一緒になりたい。これからも同じ道を歩いて行きたいんだ」

フェ「え？　え？　えぇ！？」

け、結婚？　私と一成が？　ふ、夫婦になっちゃうの！？

フェ「じょ、冗談・・・だよね？」

一「冗談で指輪を贈ったりしない。俺は真剣だ」

フェ「ほ、本当に私でいいの？　後悔しない？」

一「キミ『で』じゃない。キミ『だから』だ・・・俺は、フェイト・テスタロッサを心から愛している」

フェ「あ・・・・」

限界だった。嬉しくて涙が止まらない。返事をしなくちゃいけないのに声が出ない。一成はじっと私の目を見て待っている。

フェ「・・・嬉しい。本当に嬉しいよ一成」

一「じゃあ・・・！」

フェ「私を・・・私を、あなたのお嫁さんにしてください・・・」

一「そ、そうか！　やった！！」

ガッツポーズをする一成。全身で喜びを表現するその様子に私も笑顔になる。

フェ「ふふ・・・ねえ、はめてみてもいいかな？」

一「もちろん」

左手の薬指に指輪を通す。サイズはピッタリだった。

一「これからもずっと、一緒にいようなフェイト・・・」

フェ「はい・・・」

・・・・・・・

・・・・・

・・・

フェ「（うわ～～うわ～～！　何て夢見ちゃったんだろ私！！）」

アリシアの場合・・・

カラーン！　カラーン！　カラーン！

鐘の音が鳴り響く。とうとうこの日がやって来た。そう、兄様と私とフェイトの結婚式が・・・

な「おめでと～～！　三人ともお幸せにね～～！！」

ア「一成！　二人を泣かせたら承知しないんだからね！！」

す「ふふ、両手に花だね一成君」

なのはちゃん達が祝福の言葉をかけてくれる。ここまで来るのに大変だったけど、そんな苦労もあっという間に吹き飛んでしまった。

プ「まさか本当に二人とも嫁にするなんて・・・大した男ね」

アル「ううう・・・フェイト～～！　幸せになっておくれよぉ！！」

その後ろで母様が感嘆の声を漏らし、アルフが号泣していた。

神「一成！　いつでも戻って来てよいからの！」

天「私達、いつまでも待ってますから！！」

刹「むしろこっちから会いに行ってやる」

神奈さん達はさっきからずっとあの調子だった。

一「しかし、まさか別の世界で結婚式を挙げる事になるとはな・・・」

アリ「仕方ないよ、地球じゃ三人で結婚なんて許されないし」

フェ「でも、これでずっと一緒にいられるね」

一「そうだな、これから三人での新しい生活が始まるんだ。アリシアちゃん、フェイト、よろしくな！」

フェ「うん！」

アリ「もう、兄様、妻をちゃん付けで呼ぶなんておかしいよ」

一「そういうキミだって未だに兄様じゃないか」

アリ「あ、そうだった・・・じゃあ、今日からあなたって呼ぶね」

フェ「わ、私もあなたって呼びたい！」

一「わかったわかった。好きに呼んでくれ。俺も呼び捨てにさせてもらうよアリシア」

アリ「うん♪」

ずっと・・・一緒だよ、あなた・・・

・・・・・・・・

・・・・・・

・・・

アリ「夢か～～～まあ、いつかはそうなるんだし、別にいっか」

プレシアの場合・・・

プ「一成、あなたの本命は誰なのかしら？」

昼下がり、遊びに来た一成に興味本位で質問してみた。

一「本命・・・ですか」

プ「ええ、あれだけ魅力的な女の子達が周りにいるんだから意識する事はあるでしょう？　ウチの娘達も含めてね」

一「・・・はい、います」

プ「あら、本当に？　告白とかしないの？」

一「しません、きっと断られるに決まってますから。俺は傍にいるだけで満足なんです」

よっぽど惚れ込んでいるのね。いつも堂々としている一成がこんなに弱腰になるなんて・・・

プ「そんな事ないわ、きっと応えてくれるわよ」

一「そうでしょうか？」

断言できる、あの娘達は一成に告白されたら絶対ＯＫするだろう。

プ「ええ、だから勇気を出して告白してみなさい。応援してあげるから」

一「・・・わかりました。俺、やります」

一成の目に光が燈った。

プ「それで・・・あなたは誰に告白・・・」

一「好きです・・・プレシアさん」

プ「・・・・・へ？」

間抜けな声が出る。今一成は何て言った・・・？

一「俺が好きなのはプレシアさん・・・あなたです」

プ「わ、私!?　フェイトやアリシアじゃなくて私なの!?」

一「はい」

真っ直ぐな瞳で見つめて来る一成。冗談ではない、本気で言っているのだ。

一「ずっと、あなたを見ていましたプレシアさん。それこそ・・・初めて会ったあの時から」

プ「なっ・・・・／／」

直球な言葉に顔が赤くなる。あまりにも予想外だ。

一「プレシアさん・・・・」

プ「わ、私は・・・・」

・・・・・・・・

・・・・・・

・・・

プ「・・・・我ながら馬鹿な夢を見ちゃったわね」

アルフの場合・・・

アル「ほらほら、早く来なよ一成!!」

一「待ってくれよアルフ」

雲一つない晴天の中、アタシと一成は二人っきりで海に遊びに来ていた。磯の香りが鼻に刺さる。

アル「時間が惜しいんだよ。アタシは着替えて来るからアンタはシート敷いて待ってなよ」

一「わかったよ」

更衣室で着替えを済ませて戻ると、一成も水着一枚になっていた。

アル「どうだい？　アタシの水着姿は？」

一「あ、ああ、とても綺麗だよ」

しどろもどろに答える一成の姿が可笑しくて、アタシは吹き出した。

アル「ん～～～！　冷たくて気持ちいいね～～～♪」

沖に向かってゆっくりと泳ぐ。一成はアタシのやや後方を泳いでいる。

一「気をつけろよアルフ」

アル「大丈夫だよ、いざとなったら魔法で・・・」

ビキッ！！

アル「ッ・・・！？」

鋭い痛みと共に足が動かなくなった。まさか、攣っちまったのかい！？

アル「か、一成・・・助け・・・・・！」

一「アルフ！！」

アタシに向かって必死に泳いで来る一成の姿を最後に見て、アタシはゆっくりと沈んでいった・・・

・・・・

アル「（ん・・・・・）」

唇に押しあてられる温かい感触に意識が呼び戻される。確か、アタシは溺れて・・・

アル「（・・・・・なぁ！？）」

うっすらと目を開けると、一成がアタシにキスをしていた。慌てて押しのける。

アル「な、なななな何をしてんだいアンタは!?」

一「アルフ！　よかった、意識が戻ったんだな!!」

アル「え?」

一「沈んだキミをすくいあげて、どうにか岸にあげたけど息をしてなかったから必死に人工呼吸したんだぞ」

アル「そ、そうか、人工呼吸だったんだね」

なのに突き飛ばすなんて、悪い事しちゃったね。

ギュ・・・・

反省するアタシを、一成が抱きしめる。服を着ていない分、感触がダイレクトに伝わってくる。

アル「ど、どうしたんだい一成?」

一「すまない、キミの温もりを感じたかったんだ」

アル「温もりって・・・・」

一「怖かった・・・キミを失うのが怖かったんだ。あのままキミが

目を覚まさないのかと思って・・・」

アル「一成・・・」

一「失いかけて初めて気づいた。俺は・・・キミを何よりも大切に思っている。愛しているんだ・・・・」

アル「・・・アタシも、アタシもアンタを愛してるよ一成」

・・・・・・・

・・・・・

・・・

アル「ありえない！　ありえないよ!!　というか、アタシのキャラからしておかしすぎだろ!!」

はやての場合・・・

一「いらっしゃいはやて、さあ、あがってくれ」

は「お邪魔します」

一成君に促されて玄関をくぐる。今日は一成君にお昼ご飯を振る舞う為にやって来た。何でも、今日は一日一人で過ごすらしい。

一「重そうだな、何買って来たんだ？」

一成君が私の両手の買い物袋を指す。

は「それは出来てからのお楽しみや」

一「そっか、じゃあ期待しておくかな」

リビングの机に袋を置き、さっそく台所に向かう。すると、一成君も台所に入って来た。

一「はやて、俺も手伝・・・」

は「あかん、一成君は大人しくテレビでも見とき」

一「わ、わかった・・・」

一成君はすぐに手伝おうとする。心遣いは嬉しいけど、私の役目なんやから取らんとって欲しい。

一「何か新鮮だな。俺、家で女の子に料理作ってもらえるなんて初めてだよ」

は「そうなん？　一成君くらいカッコよかったら女の子の一人くらい引っ張り込んでる思うたけど」

一「酷いなはやて」

は「あはは、冗談やって」

会話を続けながらも手は止めない。数分後、全ての料理が完成し、机に並べる。

一「おお、美味しそうだな」

は「美味しそうやなくて美味しいんや。ほら、食べてみて」

一「頂きます」

すると、一成君はもの凄いスピードで箸を動かし始めた。あまりの速さに手が何本にも見える。

一「むぐっ！？」

は「あ～もう、そんながっついて食べるからや。ほら、お水」

一「んぐっ・・・んぐっ・・・ぷはあ！！」

は「そんな慌てんでも誰も取ったりせえへんで？」

一「いや・・・あまりに美味くてな。自分でも止められなかったんだ」

は「そ、そうなん。そこまで言ってもらえるんなら作った甲斐があったわ」

一成君は再び箸を動かし始め、気付けばあれだけあった料理が全て無くなっていた。

一「ふう・・・ごちそうさま」

は「よ、四人前はあったはずやのに・・・それをたった数分で・・・・」

一「こんな美味い物を作ってもらって何もしないのもな・・・・何かお礼でも」

は「ええよそんな、美味しいって言ってもらえたのが何よりのお礼や」

一「しかし・・・」

は「ん～～なら抱きしめてもらおうかな・・・なんて」

からかい半分にそんな事を言ってみる。すると・・・

一「何だ、そんな事でいいのか？」

ギュ・・・

は「へ・・・」

一「これでいいか？」

温かい・・・やなくて！！

は「か、一成君！？　急に何やの！？」

一「何って、抱きしめてくれって言ったのははやてじゃないか」

は「あ、あれは冗談で・・・・」

一「？」

は「と、とにかく離れてや！」

一「あ、ああ・・・」

一成君から離れ、息を整える。

一「どうしたんだはやて？」

は「か、一成君はお礼やったら誰にでもそんな事するんか？」

一「え？」

は「好きでもない相手にあんな事が出来るんかって言っとるんや」

もしそうやったとしたら・・・何やろう、胸が痛い。

一「はあ・・・あのなはやて、俺だって嫌なものは嫌ってちゃんと言うぞ」

は「？　どういう意味なん？」

一「だから・・・ああもう！　ハッキリ言うよ、はやてだから抱きしめたんだよ」

は「私・・・だから？」

それって、一成君が私の事を・・・・？

一「と、とにかく、この話はこれで終わり・・・」

は「い～や、もっと詳しく話してもらうで」

一「なっ！？」

は「にゅふふ・・・」

・・・・・・・

・・・・・

・・・

は「あ～～もう夢かぁ！　せっかくいいとこまで行ったのに！！」

ヴィータの場合・・・

一「ヴィータ、某有名チェーン店のアイス食べ放題のチケットがあるんだが、一緒に行かないか？」

ヴィ「行く！！」

はやて達が買い物に行き、一人で留守番していると一成がやって来た。とりあえず家にあげると、何とも魅力的な提案を持ち出され、アタシはすぐに食いついた。

書き置きをして家を出る。十数分後、アタシと一成は店内の席に着いていた。

店員「いらっしゃいませ。あら、今日はお連れさんがいるのね」

店員が親しげに一成に話しかける。気になったアタシは尋ねてみた。

ヴィ「何だお前、ここに来た事あんのか？」

一「ああ、ちょっとな・・・」

店員「何言ってるのよ、ポイントでチケットを手に入れる為にほぼ毎日来てたじゃない」

ヴィ「え？」

店員「なるほどなるほど・・・この娘の為だったのね。男の子してるじゃない♪」

一「ちょっ！？　少し黙ってくださいよ！」

店員「あはは、じゃあごゆっくり～～」

ニヤニヤしながら店員は去って行った。

ヴィ「一成、今の店員の話・・・」

一「そ、それよりヴィータ！　せっかくの食べ放題なんだから注文しないと勿体無いぞ！」

ヴィ「お、おう・・・」

一成に圧され、それ以上は尋ねる事が出来なかった。

・・・・・・

ヴィ「あ～～美味かったぁ！！　あんなにたくさんのアイスを食べたのは初めてだ！！」

上機嫌に帰り道を歩く。そんなアタシの後ろを、一成はゆっくりとついて来る。

一「よかったなヴィータ」

ヴィ「にしても、何でアタシを誘ったんだ？　誘う相手なら他にもいるだろ？」

一「何でって・・・ヴィータ、アイス好きだろ？」

ヴィ「そ、そうだけど・・・」

一「どうせなら一番喜んでくれる相手と行きたかったからな、ヴィータは俺と一緒じゃ嫌だったか？」

ヴィ「だ、誰もそんな事言ってねえだろ！！　ホントはアタシだって一成に誘ってもらって嬉しかったんだからな！！」

一「え？」

ヴィ「・・・・はっ！」

今アタシ、勢いに任せてとんでもない事言わなかったか！？

一「・・・・ふっ」

ヴィ「な、何笑ってんだよ！」

一「何でもないよ。それよりほら、早く帰ろう」

ヴィ「あ、こら待ちやがれ！！」

駆け出す一成を、アタシは慌てて追いかけた。

・・・・・・・・

・・・・・・

・・・

ヴィ「あ、アホくさ、さっさと寝なおして別の夢でも見るか」

シグナムの場合・・・

シ「はあぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

ガギン！！

秋「うあっ！？」

渾身の一撃で、秋月の剣が吹き飛ぶ。そのまま首筋にレヴァンティンを当て、勝負は私の勝ちに終わった。

秋「これで三戦三敗か・・・・やっぱり強いですねシグナムさん」

シ「・・・・」

秋「シグナムさん？」

シ「秋月・・・どうしたのだ。今日のお前は隙だらけだぞ。いや、今日だけではない、最近のお前は勝負の最中にも関わらず別の事に意識を向けているようだが・・・」

秋「そ、それは・・・」

シ「何か悩みでもあるのか？　よければ話してくれ、力になれるやもしれない」

秋月には助けられている。その恩に少しでも報いてやりたい。

秋「いや、その・・・相談というか、原因はシグナムさんにあるというか・・・」

シ「私？　私が何かしたのか？」

秋「えっと・・・その・・・・・」

シ「煮え切らないヤツだな。ハッキリ言え」

秋「だから・・・戦っているシグナムさんが綺麗でつい見惚れてしまって、集中できないんですよ」

シ「なあっ!?」

私が原因とは・・・そういうことなのか!?

シ「ば、馬鹿かお前！　相対している相手に見惚れて動きを鈍らすなど・・・」

秋「シグナムさんが魅力的過ぎるのが悪いんですよ!!」

シ「み、魅力的？　この私が・・・？」

秋「そうです！　美しい容姿、凛とした声、堂々とした立ち振る舞い、主への忠誠心、全てが俺のどストライクなんです!!」

シ「ッ～～～～／／」

ボンッ！

秋月の言葉に、顔から火が吹き出したのかと錯覚するほど熱くなるのがわかる。それと同時に、心臓が早鐘の如く鼓動を速めるのを感じた。

秋「シグナムさん・・・・」

シ「よ、よせ、近寄るな秋月！」

秋「俺の想いを・・・受け取ってください！！」

シ「う、うわぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

・・・・・・・

・・・・・

・・・

シ「・・・・ぁぁぁぁぁぁぁぁあ！！！　はあっ、はあっ・・・ゆ、夢か・・・・」

シャマルの場合・・・

シャ「ど、どうかな一成君・・・」

一成君がゆっくりと箸を置く。一成君との料理特訓、今日はその最終日だ。今まで習って来た全てを駆使して完成させた料理・・・自信はある。

一「・・・頑張りましたねシャマルさん」

シャ「それって・・・」

一「ええ、とても美味しいです。お店で出してもいいレベルじゃないですか」

シャ「やったぁ！！」

思わず万歳してしまった。確認の為に一口食べてみると、確かに美味しかった。

一「特訓して来た甲斐がありましたね。おめでとうございます」

シャ「ううん、一成君が付き合ってくれたおかげだよ。ホントにありがとう！！」

一「い、いえ、お役に立てたのなら何よりです」

照れくさそうに頭を掻く一成君。普段は見せないその表情が新鮮だった。

一「とにかく、これで安心して料理が出せますね」

シャ「ええ、きっと『彼』も喜んでくれるわ」

私がそう言うと、一成君の表情が変わった。喜んでいるような悲しんでいるような複雑な顔をしている。

シャ「どうしたの一成君?」

一「いえ・・・シャマルさんにここまで想ってもらえる人ってどんな人かなって・・・」

シャ「羨ましいの?」

一「・・・・少し」

シャ「・・・・・」

ギュ・・・・

明らかに気落ちしている一成君。そんな彼を、背後からそっと抱きしめる。

一「シャマル・・・さん？」

シャ「もう、相変わらず鈍いんだから」

一「え？」

シャ「何で私があなたに味見役をお願いしたかわかる？」

一「さ、さあ・・・・・」

シャ「・・・あなたの好みの味を知りたかったのよ。少しでも喜んでもらいたくてね」

抱きしめる腕に力を込める。すると、一成君は私の手にゆっくりと自分のを重ねて来た。

シャ「好きよ・・・一成君」

一「・・・・俺もです、シャマルさん」

・・・・・・・

・・・・・

・・・

シャ「（ゆ、夢とはいえ私なんて事を・・・！　ううん、ゴメンね一成君）」

リィンフォース（？）の場合・・・

リ「一成、感謝している。お前のおかげで、私は主達と生きる未来を得る事が出来た」

主を救うため、消えるしかなかった私を、この男は救ってくれた。
私の運命を断ち切ってくれたのだ。

一「キミは今までたくさん苦しんで来た。その最後が消滅なんて、許せるわけないだろ」

守護騎士達を通じて見て来たがこの男はいつもそうだ、納得出来ない事にはとことん逆らい、アッサリと結末を変えてしまう。

リ「けれどこの幸せも・・・いつかは終わりを迎えるのだな」

主は人間だ。いずれ寿命を迎えその生涯を終える。そうなれば、ま

た私は孤独になるのだ。

一「終わらないさ・・・俺がいる」

リ「え？」

一「俺がずっと傍にいるよ。もうキミを一人にはしない」

リ「ほ、本当に？　本当に一緒にいてくれるのか？」

一「ああ、約束する」

リ「・・・・嬉しい」

もう私は一人ではない。感極まり、私は永遠の伴侶とも言うべき存在にそっと肩を寄せた・・・

・・・・・・・

・・・・・

・・・

リ「（お、お許しください主はやて、私は何という夢を・・・）」

新年特別番外編　一富士　二鷹　三茄子・・・んな夢見れるわけがない　前編

まだ終わりじゃないですよ！

新年特別番外編　一富士　二鷹　三茄子・・・んな夢見れるわけがない　後編

まさかの二話構成。だってキャラ多過ぎなんだもん・・・

新年特別番外編　一富士　二鷹　三茄子・・・んな夢見れるわけがない　後編

アリサの場合・・・

ア「・・・何処よここ？」

私は見知らぬ部屋に立っていた。私の部屋の倍以上の広さで、高そうな絵や置物がたくさん並べられている。

ア「あれ？　でもこの感じどこかで・・・・」

そうだ、物語に出てたお姫様の部屋にそっくりなんだ。けど、何で私がここにいるのよ。

コンコン

ノックの音が広い部屋に木霊する。入って来たのは鮫島だった。

ア「鮫島、ここはどこなの？」

鮫「はて、妙な事をおっしゃいますね。ここはアリサお姫様のお部屋ではございませぬか」

ア「はい？」

鮫「それより姫様、一成王子がお見えになられています。お連れいたしますので少々お待ち下さい」

ア「ちょ、ちょっと鮫島！」

私の制止も聞かず、鮫島は部屋を出て行った。

ア「私が姫？　それに一成王子って・・・まさか、アイツ？」

ああそうか、これは夢だ。じゃなきゃこんな状況あり得ないもの。

？「姫！　あなたの一成が参りましたぞ！！」

勢いよくドアを開け、一人の男が部屋に入って来た。少し背丈が大きくなってるけど間違いない、この男は・・・・

ア「か、一成・・・」

一「今日は一段とお美しいですね、一目見た瞬間全身に電気が走りましたよ」

ア「アンタ・・・キャラ変わってない？　そんな事言うヤツだったっけ？」

一「キャラ？　何を言ってるんですか姫、私は何も変わってはいませんよ」

なるほど、この世界でのコイツはこんな性格なんだ。

一「姫・・・お会いしとうございました！！」

ギュウ！！

ア「ッ！？」

何を思ったのか、一成がいきなり抱きしめて来た。しかも、全身が密着するほどの激しいヤツを・・・

ア「い、いきなり何してんのよアンタ！？」

一「何を言っているのです！　あなたと一週間も会えなかったのですよ！　この一週間が私にとってどれだけの地獄だったか・・・！」

ア「一週間って・・・何してたのよ？」

一「ドラゴン退治に出掛けておりました。あなたのお父上、つまり王にあなたと婚姻を結びたいのならドラゴンの一匹くらい退治してみせろと言われまして」

ア「ど、ドラゴン！？」

おかしい、私が読んだ物語にはドラゴンなんて出て来なかった。よく見れば、一成の顔や腕に傷がたくさん出来ている。

一「しかし、私は成し遂げました！　これで、やっと姫と一緒になる事が出来るのです！！」

ア「ほ、ホントに退治したの？　私と結婚する為に・・・」

一「はい！」

ドキッ！

笑顔で返事をする一成に、心臓が大きく跳ね上がる。傷だらけになってまで私の事を想ってくれる彼の気持ちが胸に響く・・・

一「姫・・・」

一成が私のあごに指を添え、そっと上に向けさせる。私は目を閉じ、

来るべき瞬間に備えた。

ア「（これは夢・・・夢なんだから・・・・・）」

・・・・・・・

・・・・・

・・・

ア「あ、あの馬鹿・・・・何勝手に人の夢に出て来てんのよぉ！！」

すずかの場合・・・

す「あなたぁ！　早く起きないと会社に遅れますよ～～～！！」

朝ご飯を用意しながら愛するあの人を呼ぶ。すると、彼はゆっくりと姿を現した。

一「ふわぁ・・・おはようすずか」

す「おはようあなた、すぐに朝ごはん出来ますからね」

そう、私は一成君と結婚した。中学の卒業式の日に私から告白し、そして、高校の卒業式の日に今度は一成君からプロポーズされたのだ。大勢の人に見られながらのプロポーズは恥ずかしかったけど、嬉しくもあったのを憶えている。

す「・・・あら？　あなた、寝癖が直ってませんよ」

一「え？　何処だ？」

す「動かないでください、私が直してあげますから」

一「い、いいよ別に・・・」

す「駄目です、せっかくのカッコよさが台無しですよ」

恥ずかしそうに体をよじらす一成君を言い聞かせ、丁寧に寝癖を直す。至近距離にある彼の頬は若干赤くなっている。

す「・・・はい、直りましたよ」

一「あ、ありがとう／／」

す「クス、どういたしまして。それよりほら、早く食べないと本当

に遅刻しちゃいますよ？」

一「おっと、そうだった」

あっという間に朝食を片付けた一成君は、一旦寝室に戻り、クローゼットから取り出したピシっとしたスーツを身に纏う。もう何度も見た姿だが、未だに見惚れてしまう。

一「じゃあ、行って来るよすずか」

玄関先で一成君を見送る私。

す「あっ、あなた、忘れ物ですよ」

一「え？　でも、ハンカチも財布も確認したし・・・」

す「もう、これが残ってますよ」

一「・・・・ああ」

目を閉じ、顔を突き出す。すると数秒後、私の唇に暖かいものが押し当てられた。

す「ん・・・・」

一「・・・・・」

やがて、どちらともなく唇を離す。けれど、感触はまだ残っていた。

す「・・・・行ってらっしゃいあなた」

一「うん、行って来ます」

私、本当に幸せだよ、一成君・・・

・・・・・・・

・・・・・

・・・

す「素敵な夢だったな・・・・・／／」

神奈の場合・・・

神「急ぐのじゃ一成！　早うせんとＨＲに間に合わんぞ！！」

一「ま、待ってくれよ神奈姉さん！！」

義弟の一成と共に、通学路を全力疾走する。いつもより三十分も遅く家を出たのだ。走らなければ間に合うはずもない。

一「はあっ、はあっ、な、何で朝からこんな目に・・・・」

神「お主が寝坊したのが原因じゃろうが！！」

一「う・・・・」

神「ほれ、ぐちぐち言わずに走らんか！！」

一「わかってるよ！　ちくしょお～～～～！！」

やがて、妾達以外の生徒達がチラホラ見えて来たので、走るのを止める。ここまで来れば遅刻の心配も無いだろう。

神「ふう・・・まったく、お主の所為でとんだとばっちりを食う羽目になってしもうたではないか」

一「そう言うんなら、俺を放っておいて先に行ってくれてもよかったのに」

神「そ、それは駄目じゃ」

一「何で？」

神「何でって・・・・」

お主と登校したいから・・・・とは言えない。

神「わ、妾はお主の姉じゃからな！　弟がちゃんと登校するのを見守る義務があるのじゃ！！」

一「はあ・・・さいですか」

下駄箱で一成と別れる。妾は三年、一成は二年なので、教室の階が違うのだ。

女子Ａ「おはよう神奈ちゃん」

女子Ｂ「今日も弟クンと登校？　相変わらず仲いいわねアンタ達」

神「や、やかましい！」

数人のクラスメイトと挨拶を交わし、席に着く。それと同時にチャイムが鳴り響いた。

神「（さて、今日も一日頑張るかの・・・）」

その後、特に何かあるわけでもなく四時限目まで終了し、昼休みとなった。二人の友と一緒に中庭で昼食をとる。

女子A「・・・あれ、あそこにいるの一成君じゃない？」

神「ん？」

女子B「あ、ホントだ、やっぱりカッコいいな～～」

目を向けると、友人と思わしき男子数名と仲よさげに談笑している一成の姿が見えた。

女子A「いいよね神奈ちゃん、一成君と一つ屋根の下なんて」

女子B「いつになったらアタックするの？」

神「な、何を馬鹿な事を、一成は弟じゃぞ」

女子B「義理の・・・でしょう？　それに、満更でもないんじゃない」

女子A「神奈ちゃんの態度見てたら丸わかりだよね。一成君は気付

いてないみたいだけど・・・」

神「ッ・・・・／／」

女子A「あ～～！　赤くなってる～～！」

神「う、うるさい！　少し黙らんか！！」

女子B「あははは・・・・・ん？」

女子A「どうしたの？」

女子B「あの娘・・・・誰？」

一成に一人の女子が話しかけている。そして、一枚の手紙らしき物を渡し、そそくさと去って行った。

女子A「あれって・・・・ラブレターかな？」

神「ッ・・・・！」

ダダダダ！

女子B「どうかな・・・って、どこ行くの神奈！？」

何故かいたたまれなくなった妾は、逃げるように中庭を後にした・・
・

・・・・・・

一「ただいま～～！」

帰宅して十数分後、一成も帰って来た。

神「・・・・帰ったか」

一「どうしたんだ姉さん？　ずいぶん顔が暗いけど」

神「一成・・・・お主、昼休みに女子から恋文をもらったろ？」

一「恋文？」

神「とぼけなくてよい、この目でハッキリ見たのじゃからな」

一「・・・・ああ、アレか、違うよ姉さんアレは・・・・」

神「・・・・妾では駄目なのか？」

一「え？」

神「わ、妾は、お主の為なら何でもしてやるぞ！　朝だって優しく

起こしてやるし、宿題だって代わりにやってやる、な、なんなら風呂に一緒に入ってやってもよい」

一「姉さん、急にどうしたんだよ？」

神「お主が好きなんじゃ！！」

一「なっ！？」

神「ずっとずっと、昔から好きじゃったんじゃ！　でも、義理とはいえお主は弟、妾は姉じゃ、じゃから、この気持ちは胸の奥に秘めておった」

一「・・・・」

神「しかし、昼休みにお主が恋文を受け取る所を見た瞬間、胸が張り裂けそうになった。もうこの気持ちを抑える事など出来はしない！」

一「姉さん・・・・」

神「妾は、お主を誰にも渡しとうない！　お主は妾の・・・妾の・・・・」

一「・・・ぷっ、あはははははは！！」

神「な、何がおかしいんじゃ！！」

一世一代の告白を笑われ、思わず一成に掴みかかった。しかし、一

成の笑いは止まらない。

一「あのね姉さん、あの娘は先生の遣いで俺にプリントを届けてくれただけだよ」

神「・・・・・へ？」

一「だから、恋文じゃなくてただのプリントだったの」

神「な・・な・・・な・・・・」

一「そう言おうと思ったのに、姉さん人の話を聞かないんだから」

で、ではなにか・・・全部、妾の勘違い・・・・？

神「・・・・・ね」

一「？　どうしたの姉さ・・・」

神「死ねぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！」

バキッ！　グシャ！　ドゴォォォォォーーーーン！！

一「何でだぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？！？！？」

・・・・・・・・

・・・・・・

・・・

神「今時ギャルゲでもありえん展開じゃったな・・・・」

天音の場合・・・・・

天「精霊の涙、確かに頂きました」

私は怪盗天音・・・世界に名を轟かせる大怪盗。今回もターゲットの盗みは大成功だ。

一「おのれ！　今日こそ逃がさないぞ、怪盗天音！！」

そんな私に迫る彼は秋月　一成刑事・・・最近私を追いかけ回している新米刑事だ。

天「しつこいですね、いいかげん諦めたらどうですか？」

一「そうはいかん！　お前は俺から大切なものを盗んだんだからな！！」

天「何言ってるんですか、あなたから盗んだ憶えなんてありませんよ？」

一「お前が盗んだのは・・・・俺の心だ！！」

天「・・・・・はい？」

何を言ってるんだ彼は・・・・心？

一「お前を初めて見た時から、寝ても覚めても浮かんで来るのはお前の事ばかり、俺は確信した、俺を夢中にさせるお前こそ、我が最大の敵だとな！！」

天「寝ても覚めても・・・・それってつまり、私に一目惚れしちゃったって事ですか？」

一「ば、ばばばば馬鹿を言うな！！　何で俺が犯罪者に一目惚れせにゃならんのだ！！」

天「あらあら、赤くなっちゃって・・・可愛い」

一「だ、黙れぇ！　必ずお前を捕まえてやる！　覚悟しろ！」

天「ふふ、出来るものならやってごらんなさい」

夜の空に私と彼の声が響き渡る。彼にはこれからも楽しませてもらえそうだ・・・

・・・・・・・・

・・・・・・

・・・

天「なかなかいい夢でしたね、今後の妄想の参考にさせて頂きましょう」

刹那の場合・・・

赤ん坊「おぎゃあ！　おぎゃあ！」

腕に抱く赤ん坊が力強く泣き声をあげる。遂に得た我が君と我との愛の結晶だ。

刹「よしよし、いい子だ・・・」

赤ん坊「おぎゃあ！　おぎゃ・・・・すう・・すう・・・」

刹「ふふ・・・」

一「眠ったのか？」

刹「たった今な」

ベッドに赤ん坊を寝かせ、我が君の隣に座る。そんな我を、我が君はそっと抱き寄せた。

一「・・・愛する者が増えるって、こんなに幸せなんだな」

刹「ん？　我が君はこの程度の幸せで満足するのか？」

一「そんなわけないだろ、俺、野球チームが作れるくらいは子どもが欲しい」

刹「我はサッカーチームだ」

一「そっか・・・なら、頑張らないとな」

我が君が我をお姫様抱っこする。向かう先はもちろん寝室だ。

刹「我が君、まだ昼前だぞ？」

一「嫌かい？」

刹「・・・・いや、望むところだ」

そして、我が君はゆっくりと我をベッドに下ろした・・・

・・・・・・・・

・・・・・

・・・

刹「この夢・・・正夢にしてみせる。待っていろ我が君！」

龍那の場合・・・

龍「ぐあっ！？」

世界総合格闘技大会決勝、ここまで勝ち進んできたオレは最後の相手に大苦戦していた。

解説「おおっと！　龍那選手ダウン！　唯一の女性選手としてここまで善戦してきましたが、ここで終わってしまうのかぁ！！」

男「諦めろ、お前は俺には勝てん」

龍「へ・・言ってろ・・・」

ふらつきながらも何とか立ち上がる。会場がどよめきに包まれた。

男「何故だ？　なぜ立ち上がる？」

龍「アイツが見てんだ・・・カッコ悪いトコ見せられっかよ！！」

一「頑張れ龍那！　キミなら勝てる！！」

背後から聞こえる一成の声、アイツが応援してくれる限り、オレに負けはない。

男「ならば・・・今度こそ沈めてやる！！」

龍「やってみろぉ！！」

両手を広げながら迫る男の背後に、最後の力を振り絞って回り込む。

男「なっ！？　しまっ・・・・！！」

龍「おらぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

ゴキゴキゴキ！！！

解説「出たぁぁぁぁぁぁぁ！！！　必殺の龍那ブリーカーだぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

男「ぬわぁぁぁぁぁぁぁ！！」

白目をむきながら、男はゆっくりとマットに沈んだ。

解説「き・・・決まったぁぁぁぁぁ！！！　世界総合格闘技大会、優勝は・・・・仙道　龍那選手だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

龍「よっしゃ～～～～！！！」

一「龍那！！」

龍「一成！　オレやったぜ！　優勝したんだ！！」

・・・・・・・・

・・・・・・

・・・

龍「にへへ・・・オレが・・最強・・だ・・・・ＺＺＺ」

雲母の場合・・・

春のうららかなある一日、私は一成さんやなのはちゃん達とお花見をする事になった。そして当日、飲み物が足らなくなったので、ジャンケンに負けた私と一成さんで買い出しに行く事になった。その帰り道、桜並木の道を二人で歩く。

雲「でも、本当に綺麗ですね。こんなにたくさんの桜を見たのは初めてです」

一「俺もだよ。まさか家の近くにこんないい場所があったとはな、何で今まで気付かなかったのか不思議だよ」

雲「そうなんですか？　ちょっと勿体無い気がしますね」

一「ああ、だから今日は目一杯桜を見ておかないとな」

雲「そうですね」

ピロリ～ン！

一「メール？　神奈からだ・・・」

雲「なんて書かれてるんですか？」

一「『酒がなくなった、早く戻って来い！』・・・・だとさ」

雲「ふふ、花より団子みたいですね」

一「・・・だな」

雲「なら、急ぎましょうか」

もう少し一成さんとゆっくりお話したいけど、待たせるわけにもいかない。私は若干足を速めた。

一「やれやれ、これじゃあじっくり桜の鑑賞なんて出来そうにないな」

雲「大丈夫ですよ、また来年があります」

一「そうだな、場所も憶えたし、来年こそは・・・」

雲「はい」

一「けど・・・」

雲「？」

すると、一成さんは私の耳元で小さく呟いた。

一「今度は・・・二人っきりでな」

雲「はわっ！？」

・・・・・・・

・・・・・・

・・・

雲「は、はう～～～／／（目覚めた直後に再び気絶）」

ユーノの場合・・・

ユ「ふう、たまには外出しなくちゃね」

人間の姿で街に出る。最近はずっとフェレットのままだったから少しストレスが溜まってたので、今日はそれを解消するのが目的だ。

？「ユーノじゃないか、奇遇だな、こんな場所で会うなんて」

ユ「え？」

僕の名を呼ぶ声に振り向くと、銀色の髪をしたとても可愛い女の子と目が合った。

ユ「ど、どちらさまでしょうか？」

女の子「何ボケてるんだユーノ？　一成に決まってるだろう」

ユ「・・・・えぇぇぇぇぇぇぇ！？！？！？」

街中にも関わらず、僕は思いっきり声をあげてしまった。

一「ユーノ、いきなり大声出さないでくれ、びっくりするだろ」

ユ「だ、だって、え？　一成が女の子？　ええ！？　意味わかんないよ！！」

一「むっ、失礼なヤツだな、なら確かめてみなよ」

フニュン

ユ「ッ・・・・！？」

僕の手をとった一成が、そのまま自分の胸に押し当てる。女の子独特の柔らかさが手を通して伝わって来た。

一「どうだ、信じてもらえたか？」

ユ「む・・・胸が・・・」

一「それよりユーノ、この前の返事を聞かせてくれないか？」

ユ「こ、この前って・・・何かあったっけ？」

一「・・・そんな事まで忘れたのか？　俺と付き合ってくれるって話だよ」

ユ「ぼ、僕が一成と!?」

一「そうだ、俺はキミが好きだ、キミの彼女にして欲しい」

ユ「そ、そんな・・・僕はどうすればいいんだぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!」

・・・・・・・

・・・・・

・・・

ユ「あれ？　夢でよかったはずなのに、何で残念って思ってるんだろう僕・・・」

ザフィーラの場合・・・

一「ザフィーラ!!」

ザ「任せろ!」

俺の盾が一成に迫る一撃を防ぐ、そして、その一瞬をつき、一成は相手に止めを刺した。

一「助かったぞザフィーラ、キミがいてくれてよかった」

ザ「気にするな、友を助けるのは当然の事」

一「ふっ・・・」

拳をぶつけあう、この男と力を合わせれば勝てない敵などいない。

一「ザフィーラ！」

ザ「おう！」

一・ザ「俺達の戦いはこれからだ！！」」

・・・・・・・・

・・・・・

・・・

ザ「・・・・・・滾る！」

そして、新年最初の朝がやって来た・・・・

一「・・・・変な夢だったな、鷹に乗って富士山を茄子で爆撃する夢なんて・・・・運がいいのか悪いのか・・・・」

自分の見た夢を思い出しながら、一成は皆が待っているであろうリビングのドアを開けた。

一「みんな、あけましておめで・・・」

神「一成！　妾が従姉というのはあくまで設定じゃからの！　勘違いするでないぞ！」

天「一成様、私はいつでも捕まえてもらって結構ですからね！」

刹「我が君、起きて早々悪いが今すぐ寝室に向かうぞ」

龍「おう一成、今度新技の特訓に付き合ってくれよ」

雲「か、一成さん、春になったらお花見に行きませんか！　そ、その・・・・二人っきりで／／」

一「・・・・・・・・は？」

新年特別番外編　一富士　二鷹　三茄子・・・んな夢見れるわけがない　後編

作「ア・ハッピーニューイヤー嫌ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！（ソリに乗って）」

一「同じネタをやるのは止めろ！　そして字が違う！！」

作「やってやったぜ初夢話！！　周囲の反対を押し切ってな！！」

一「本編じゃシリアス真っ最中なのに、こんなふざけた物書きやがって・・・」

作「これが・・・ワシから読者の方へのお年玉じゃあぁぁぁぁぁぁ！！！」

一「ここまで貰って嬉しくないお年玉も他にないな」

作「お、お前・・・何人分の話書いたと思ってんだよ！！」

一「なのはに美由紀さんだろ・・・あと、フェイトにアリシアちゃん、プレシアさんにアルフ、はやて、ヴィータ、シグナムさん、それとシャマルさん、リィンフォース、アリサとすずか、神奈、天音、刹那、龍那、雲母、そして、ユーノにザフィーラ・・・二十人か」

作「勢いに任せて龍那と雲母を別々にしたり、本編にはまだ出ていないリィンフォースを登場させたり、前編に比べて明らかにネタに走った後編とか色々やったが、後悔はしていない！！」

一「・・・まあ、一応頑張りは褒めてやるよ」

作「さて、このお話を読んで下さった親愛なる読者の皆様、今年も楽しんで頂ける作品作りに励みますので、応援のほどをよろしくお願い致します」

一「そういえば・・・明らかにネタバレの部分があった様な気がしたのは気のせいか」

作「おいおい、これはあくまで番外編だ。本編とは全く関係が無い事を忘れるな」

一「・・・・・なるほど」

作「あと、番外編では全員にフラグ立ってるから、本編であまり絡んでなくてもここでは夢に出るくらいベタ惚れ状態ってわけ」

一「うん・・・どうでもいい情報だな」

第十話　追憶　～ゼノン～（前書き）

番外編、中々好評でした。やってよかったです。

第十話　追憶　～ゼノン～

ゼ「さて、昔話の前に、一つ尋ねたいことがあるのだが」

天「何ですか？」

ゼ「キミ達・・・『原初存在』という言葉に聞き覚えはあるかい？」

神「原初存在？・・・・いや、妾は知らぬぞ」

天「私もです」

ゼ「・・・そうか」

天「ですが・・・何でしょう、その言葉、どこか懐かしいような・・・」

神「妙な感覚じゃな。・・・それで、その原初存在とやらがどうかしたのかの？」

ゼ「直接的にではないが・・・私から全てを奪った存在だよ」

・・・・・・

・・・・・

・・・

それは、私がまだ人間だった頃の話だ。私はとある世界の王族だった。先祖代々から続いていた国と国との争いも終結し、世界は平和に包まれていた。

少女「お父様～～～！！」

女性「エミリア、そんなに走るとこけてしまいますよ」

娘のエミリアが駆け寄って来る。その後ろを、最愛の妻であるマリアがゆっくりと追う。

ゼ「お帰りエミリア、花畑は綺麗だったかい？」

エ「はい、とっても！　蝶もたくさん飛んでて、お父様にもお見せしたかったです」

ゼ「ううむ、それは見たかったな」

エ「そうだ！　お父様、お土産があります」

そう言って、エミリアは花冠を見せて来た。

エ「お母様に教えて頂いて作ったんです、かぶってみてください」

ゼ「ははははっ、これはいい物を貰ったな、どれどれ・・・」

頭を下げ、冠を乗せてもらう。

ゼ「ありがとうエミリア、これは家宝として子孫達に残して行くとしよう」

エ「えへへ・・・」

マ「よかったわねエミリア」

エ「はい！」

満面の笑みを浮かべるエミリア、妻に似て優しい娘に育っているようで安心した。

マ「そういえば・・・子どもの頃はよく二人で首飾りや冠などを作っていましたね」

ゼ「そうだな、幼馴染だったキミとはほぼ毎日一緒に過ごしていたな。あの時も、キミは私に冠の作り方を教えてくれたな」

マ「気付いてなかったみたいですけど、私、あの頃からずっとあなたの事が好きでしたのよ？」

ゼ「むっ、そうだったのか?」

マ「ええ、色々アプローチしたのに、鈍感だったあなたは全く反応してくれませんでしたし」

ゼ「まさか・・・朝起きたら隣で寝ていたり、風呂に入っている時に乱入して来たのは・・・」

マ「そのまさかですよ」

ゼ「・・・ここに来てまさかの真実発覚だな」

マ「幻滅しましたか?」

表情を曇らせるマリア。そんな彼女を優しく抱き寄せる。

ゼ「とんでもない、むしろそこまで想ってもらえて幸せだよ」

マ「あなた・・・」

ゼ「マリア・・・」

いい雰囲気の中、私とマリアはゆっくりと口づけを交わし・・・

エ「おっほん!」

ゼ・マ「「ッ・・・！」」

エミリアのわざとらしい咳にハッとなる。

エ「お父様もお母様も、他の人が見ているかもしれないのに変な事しないでください！」

ゼ・マ「「ご、ごめんなさい・・・」」

エ「もう・・・」

プクっと頬を膨らませるエミリアに、私は吹き出してしまった。

ゼ「ふ・・・」

エ「お父様！」

ゼ「す、すまない・・・クク・・・・」

マ「ふふ・・・」

エ「お母様まで～～！！」

・・・・・・

ゼ「・・・・とまあ、美しい妻と愛らしい娘に囲まれて幸せだったんだよ」

神「何じゃそのリア充物語は・・・」

天「自慢ですか？　自慢なんですね？」

どんな重い過去が話されるかと緊張していた二人だったが、惚気を見せられたと思い不満を漏らす。

ゼ「ずっとその幸せが続くと思っていた・・・ヤツ等が現れるまでは・・・・」

神「ヤツ等？」

ゼ「・・・・話を続けよう」

・・・・・・

ゼ「ノースガルドが滅びただと！？」

異変は突然始まった。北方で一番の強国だったノースガルドが魔物の軍勢によって壊滅したのだ。情報をもたらしてくれたノースガル

ド兵は、伝える事を伝えると静かに息を引き取った。

ゼ「ノースガルドは昔からの親交国・・・・それを滅ぼすとは許さん!!」

私はすぐに他国に使いを送り、討伐軍を結成した。そして、応えてくれた各国の王たちと共に北の大地に攻め入った。

それが・・・全てを失う原因とも気付かずに・・・・

ゼ「怯むな!!　一気に攻め立てよ!!」

北の大地で私達を待っていたのは今まで見た事も無い凶暴な魔物達だった。浮き足立つ兵達を鼓舞し、私も剣を振るう。

ゼ「・・・・おかしい、手応えが無さ過ぎる」

この程度の軍勢にノースガルドが滅ぼされるとは思えない、私は言い様のない不安に襲われた。そして、その不安は現実の物となる。

兵「で、伝令!!　我が国の周囲に突如魔物が出現!　侵攻を開始したとの事です!!」

ゼ「何だと！？」

まさか、最初から私達を国から引き離すために・・・！？

ゼ「くっ！　急いで戻るぞ！！」

すぐに撤退を宣言し、全力で馬を走らせた。民の・・・妻の・・・
娘の顔が浮かんでは消えて行く・・・・・

ゼ「（皆、無事でいてくれ・・・・！）」

半日経ち私達が国に戻ると、そこには地獄絵図が広がっていた。家
は崩れ、至る所で火災が発生し、何人もの民が地に伏していた。

ゼ「な、何という事だ・・・・」

魔物「ギャアァァァァァ！！」

上空から一匹の魔物が襲い来る。私は怒りのままに剣を一閃させた。

ゼ「はぁッ！！」

ザシュ！！

魔物「クキャァァァァァ！？」

倒れる魔物を一瞥し、私は城を見る。崩壊こそしていないが、それも時間の問題だろう。

ゼ「一番隊二番隊は私と共に城に向かう！　残りの者達は城下の魔物退治及び民の救出に全力を尽くせ！！」

兵達「はっ！！」

兵を引き連れ、燃え盛る街中を疾走する。やがて、城に辿り着いた私は一直線に玉座の間を目指した。

ゼ「無事か二人と・・も・・・・・」

そこで私が見たものは・・・・

マ「か・・は・・・・・・」

魔物によって胸を貫かれている最愛の妻と・・・・

魔物「オマエモチガウ・・・・」

マリアに向かい、不満げにそう洩らしている魔物の姿だった。体躯は私の倍以上はあるだろう、巨大な羽に丸太のような尾、マリアを貫いている手には鋭い爪が生えている。

ズボッ！

マ「あう・・・」

ゼ「マリアァァァァァ！！！」

抜き取られた個所から大量の血が噴き出す、崩れ落ちるマリアの元へ私は急いで駆け寄った。

ゼ「マリア！　しっかりしろマリア！！」

マ「あ・・あな・・・た・・・・」

ゼ「そうだ私だ！　待っていろ、すぐに治してやるからな！！」

マ「私の・・事・・は・・・いいですから・・・・エミリアと逃げ・・・・」

ゼ「喋るな！」

マ「あなた・・・愛していま・・・す・・・どうか・・・生きて・・・・」

マリアの目がゆっくりと閉じる。もう・・・目を覚ます事は無い。永遠に・・・・

ゼ「マリア・・・マリアァァァァーーーーッ！！！」

玉座の間に私の絶叫が木霊する。妻との思い出が走馬灯のように頭をよぎっていた。

魔物「チガウ・・・チガウ・・・・ゲンショソンザイハドコダ・・・・」

私の存在を無視し、魔物は壁に開いた穴から出て行こうとした。

ゼ「許さん・・・・貴様だけはぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

激情に身を任せ、私は必殺の一撃を放った。

ゼ「クロス・スラッシャーァァァァァ！！！」

聖なる力の込められた十文字切り、それが容赦なく魔物の体を斬り裂く・・・・はずだった。

バキィィィィン！！

ゼ「なっ！？　宝剣が！？」

初代国王が使用し、受け継がれてきた宝剣が木っ端微塵に砕け散った。呆然とする私を魔物の爪が襲う。

ザシュ！

ゼ「ぐあぁぁぁぁぁぁぁ！？」

右胸から左の腰辺りまで切り裂かれ、鮮血が迸る。あまりの痛みに逆に意識がハッキリするくらいだ。

ガタン！

その時、玉座の陰から物音がした。その音に反応した魔物の尾が玉座を砕くと・・・

ゼ「エ、エミリア！？」

そこには、体を震わせへたり込んでいるエミリアがいた。おそらく、マリアが隠れるように言っておいたのだろう。

ゼ「に、逃げるんだエミリア！！」

エ「あ、ああ・・・・・」

魔物「オマエ・・・ゲンショソンザイ？」

シュルシュル！

エ「きゃあッ！？」

逃げ出そうとするエミリアに、魔物はその太い尾を巻きつけた。

ギリギリ・・・・

エ「痛い・・・痛いよお父様・・・・・・！」

締め上げられ、痛々しい声を漏らすエミリア。

ゼ「エミリア！」

魔物「・・・・チガウ、オマエモゲンショソンザイジャナイ、オマエイラナイ」

ゼ「まさか・・・止めろ！　止めてくれ！　殺すなら私にしろ！エミリアは・・・娘は助けてくれ！！」

魔物「・・・・・・」

私の必死の懇願は・・・・受け入れられなかった。

ボキボキ！！　グシャ！！

エ「あ・・・う・・・・・・」

何かが砕ける音と共に、助けを求めるように伸ばされてた手がダラ

リと垂れ下がる。エミリアの双眸からは光が失われ、床には血が滴っている。

ゼ「あ・・・ああ・・・あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！」

守れなかった、妻に続き、私は娘まで失ってしまった。血涙が頬を伝い、心がグシャグシャに掻き乱される。

ゼ「殺す！　殺す！　殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺してやるぞぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！！」

呪いをかけるように叫ぶ私だったが、血を流し過ぎたせいか、段々と意識が薄くなっていった。

魔物Ｂ「タイチョウ・・・ホカノトコロニモイナカッタ・・・・」

魔物Ａ「ワカッタ、ナラモウコノセカイニヨウハナイ」

すると、新たな魔物が姿を現し、二体は今度こそ穴から出て行った。

ゼ「（タイチョウ？　隊長という事か・・・憶えたぞその名を・・・

・！）」

憎むべき敵の名を胸に刻みこみ、私は意識を失った・・・・・

・・・・・・

私が目を覚ました時、全ては滅び去った後だった。他の国も全て壊滅し、この世界で生き残ったのは私だけだった。

ゼ「・・・・・これで最後か」

私は、マリアとエミリア、そして、全ての民に墓を作り、全員を埋葬した。気の遠くなるような作業だったが、時間は充分にあった。

ゼ「最早失うものは何も無い。ならば・・・この身はただ復讐を果たすのみ」

≪あなた・・・愛していま・・・す・・・どうか・・・生きて・・・・・≫

ゼ「すまないマリア・・・だが、キミ達を奪われ、のん気に生きながらえるなど私は耐え切れない」

私は禁術であった時と次元制御の魔法を使い、私自身の時間を止め世界を跳び出した。愛した者達の無念を晴らすために・・・

・・・・・・・

・・・・・

・・・

ゼ「ヤツが言っていた原初存在・・・それを追っていれば必ずヤツにたどり着く。その時私は・・・」

神・天「「・・・・・・」」

ゼ「ん？　どうしたのかね？」

天「申し訳ありません、辛い事を思い出させてしまって」

ゼ「気にしないでくれたまえ、私が勝手に話した事なんだからな」

神「・・・ゼノンよ、腑に落ちぬ事が一つあるのじゃが」

ゼ「何かね？」

神「お主が復讐の為に生きているのはわかった、じゃが、それならなぜ無明と行動を共にしておるのじゃ？　一人の方が動きやすいのではないか？」

ゼ「むっ、それは・・・」

天「それは？」

ゼ「ああっと・・・我ながら情けない理由とは思うのだがね」

神「言い難ければ無理して言わんでよいぞ」

ゼ「そういうわけではないのだが・・・」

神・天「「？」」

ゼ「・・・似ているんだよ娘に・・・エミリアにね」

天「無明がですか？」

ゼ「容姿ではないんだ、ただ・・・何となく雰囲気がね」

神「なるほど、じゃからあんな事を・・・」

≪ちょ、ちょっと、事あるごとに頭を撫でるの止めてよね≫

≪ははっ、すまない≫

ゼ「もちろん、その時が来たら彼女とは別れるつもりだが、それまでは彼女の力になってやりたいのだ、自己満足みたいなものだがね」

天「ゼノンさん・・・」

ゼ「さて、詰まらない話は終わりにして、さっき約束した通りオセロを持って来て上げよう、少し待っていてくれたまえ」

そう言ってゼノンは部屋を出て行く。そんな彼の背を、神奈と天音は黙って見送るのだった・・・

第十話　追憶　～ゼノン～（後書き）

作「書いた自分が言うのもなんだがこういうのはやっぱ嫌だね。暗い話より明るい話が一番さ」

一「おい、敵なのにこんな話書くなよ、おかげで倒しにくくなっただろうが」

作「どうかな？　倒すだけが道じゃないと思うがな」

一「それはそうだが・・・どうする気だ？」

作「さあ、それは読者の方の反応次第だ」

一「グダグダ話しても仕方がない、贈り物報告会に移ろう」

作「前回は番外編だったから、その前に頂いた物の紹介だな」

一「まずは緋水様からだな、歪曲の魔眼の眼鏡とケーキを頂いたぞ」

作「これって型月かな？　正直型月の話はよくわかりません」

一「そうだな、お前、まともにプレイしたのはＰＳＰのエクストラだけだもんな」

作「面白そうなんだけど、何故か手が出ないんだよな」

一「あれ？　今回はこれで終わりか？」

作「いや、清浦刹那様がいらっしゃる事になってる」

一「え、何でだ？」

作「無明と話がしたいらしい、というわけで無明を呼んでみました」

無「ちょっと、いきなり呼び付けて何の用よ？」

一「無明・・・」

作「（あ、しまった！　本編で敵対中の二人を会わせたりしたら・・・）」

無「あら一成、元気そうね、安心したわ」

一「そういうキミもな」

作「へ・・・？」

一「どうしたんだ？」

作「お、お前ら何でそんなにフレンドリーなんだよ！？」

無「私達が敵対してるのはあくまで本編よ、後書きでまでそうする理由は無いわ」

一「そういう事だ、いいかげん後書きのフリーダム加減を理解しろ」

清「こんにちは～～」

作「そんなことしてる内に来ちゃったよ！！」

清「？　どうしたんですか？」

一「気にしないでください」

大「おい離せ！　天音さんがいない今、ここに来る理由はない！」

作「や、大和さん、不機嫌そうですね」

清「ちょっと大和、そんな言い方失礼でしょ」

大「うるせ～～離せ～～！」

無「あらあら・・・私がいるというのに不満そうね」

大「お前みたいなヤンデレに用は無い！　天音さんを出せ」

無「・・・もがれたいの？」

大「ヒィッ！？」

無「清浦刹那さんだっけ？　ちょっと彼借りるわね」

大「た、助けて刹那！」

清「どうぞどうぞ」

大「薄情者ぉぉぉぉ！！」

一「・・・・・いいんですか？」

清「もちろんです、彼女とはいい友達になれそうですね」

作「（大和さん・・・あなたも大変ですね（泣））」

作「そうそう、番外編は好評だったぞ、あれだけたくさんの感想を頂けたのも久しぶりだったな」

一「それはよかったな、頭痛に悩まされながら執筆した甲斐があるってものだ」

作「この調子でバレンタインデーも何かやりたいな、無明やゼノンも巻き込んで」

一「止めとけ、あれ以上増やしたら今度こそ書けなくなるぞ」

作「でもよ、感想にも無明やゼノンの初夢も見たかったって意見があったし、やった方がいいかなと・・・」

一「まあ、最終的な判断はお前に任せるがな」

作「おう・・・あ、バレンタインの前に節分があったな」

一「節分って・・・書きようがないだろ」

作「豆まきバトルロイヤルとか」

一「何だそのタイトルでまるわかりなイベントは・・・」

第十一話　期待と不安は表裏一体（前書き）

また間があいてしまいました。やっぱりオリジナルストーリーは大変ですね。

第十一話　期待と不安は表裏一体

≪・・・目覚めよ≫

一「（ああ、またこの夢か）」

≪目覚めよ≫

一「（あなたは誰だ？　俺に何を訴えているんだ？）」

≪目覚めよ、我が力を受け継ぎし・・・原〇〇在よ≫

一「（え？）」

・・・・・・・・

・・・・・・

・・・

ピピピピピ！

一「・・・・ノイズが消えた」

いつも聞き取れなかった最後の部分を少しだけ聞き取る事ができた。
とはいっても、未だに意味はよくわからないが。

一「はあ・・・」

溜息を吐き、俺はベッドから起きようと手を動かした。

フニュン

一「ん？」

何だ？　このベッドこんなに柔らかかったか？　不思議に思い、手を伸ばした先を見つめる。

龍「あ・・ん・・・・」

一「・・・・・え？」

龍那が艶めかしい吐息を漏らす。俺の右手は、彼女の胸をおもいっきり鷲掴んでいた。

一「あ・・ああ・・・・」

龍「んあ？　一成？　おはよう・・・」

一「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

およそ寝起きの人間が出す音量とは思えないくらいの大きさで、俺は絶叫した。

・・・・・・

龍「いやあ、悪い悪い。寝ぼけて部屋間違えちったよ」

何故俺の部屋で寝ていたか尋ねると、龍那は事もなげにそう答えた。

一「そ、そうだったのか・・・」

＜ご、ゴメンなさい一成さん！　私も寝ぼけちゃってて止められませんでした＞

一「（いや、気にしないでくれ）」

龍「まあいいじゃねえか。役得もあったんだしよ」

一「ッ・・・・」

龍「どうだった？　神奈や天音ほどじゃねえが、オレも結構自信あるんだけどな」

一「いや、その・・・」

＜ちょ、ちょっと龍那！　止めなよそういう事！＞

龍「（何言ってんだよ、こういう耐性つけないといつか困るのは一成だぜ？）」

一「・・・・朝食を作って来る。龍那・・・キミは朝飯抜きだ」

龍「なん・・・だと・・・・」

＜うえ～ん、龍那の所為で私までとばっちりだよぉ・・・＞

ガクリと項垂れる龍那を無視し、俺は洗面台に向かった。雲母には悪いが、一蓮托生という事で我慢してもらおう。

・・・・・・

朝食を済ませた俺は、手早く準備して学校へ向かった。

な「おはよう一成君」

一「・・・おはようなのは」

な「ど、どうしたの？　朝からずいぶん疲れてるみたいだけど・・・」

一「ちょっと龍那にな」

な「龍那さん？」

一「いや、何でもない。忘れてくれ」

な「う、うん。わかった」

フェイト達とも合流し、いつものメンバーで登校する。神奈達の行方は未だにわからないが、だからといって日常をおろそかにしてはいけない。今はとにかくリンディさん達に任せるしかないのだ。

そんな事を考えている内に授業は進み、いつの間にか昼休みになっていた。

『三年生の秋月　一成君。ご家族の方がお見えになっています。至急職員室まで来て下さい』

一「え？」

スピーカーから聞こえる呼び出し。家族？　誰だ一体・・・

一「みんな、先に屋上に行っておいてくれ」

俺は急ぎ足で職員室に向かった。

一「失礼します」

職員室の扉を開け中に入る。そこで俺を待っていたのは・・・

雲「あっ、一成さん・・・」

一「き、雲母！？」

そこにいたのは雲母だった。手に小さな袋を持って先生と何やら話をしている。

一「どうしてキミが学校に・・・」

雲「あ、あのですね・・・これを作って来たんです」

そう言って袋を渡してくれた。ほんのり温かいそれを開けると、中には弁当箱が入っていた。

雲「余計なお世話かもしれませんが、この前お弁当の事を悩んでらしたので作らせてもらいました」

一「それでわざわざ届けてくれたのか・・・嬉しいよ雲母。本当にありがとう」

雲「い、いえ・・・どういたしまして／／」

＜オレも少しは手伝ったんだからな＞

一「（龍那もありがとう。しっかり味わわせてもらうよ）」

＜へへへ・・・＞

先「秋月君、優しいお姉さんを持って幸せね」

一「そうですね。俺は幸せ者です・・・」

二人を見送り、俺は屋上へと向かった。

一「お待たせ」

す「何だったの？」

一「ああ、弁当を届けてもらったんだ」

フェ「え、でも・・・」

一「（雲母と龍那に作ってもらったんだ）」

フェ「（あ、そうなんだ）」

アリ「じゃあ早く食べようよ。時間もそんなに無いし」

一「悪いな、待たせてしまって」

弁当箱を開ける。中にはからあげや玉子焼きなど美味しそうなものがたくさん入っていた。

一「（雲母の料理はとても美味しいからな。龍那も中々の腕だし・・・作ってもらってよかったな）」

ちなみに、みんなの料理の腕を表すと・・・天音≧雲母＞＞刹那＞＞＞龍那＞＞＞俺＞＞＞＞（越えられない壁）＞＞＞＞神奈だろうか。

俺が頭の中でそんな評価をつけている間に、なのは達はクリスマスの話題で盛り上がっていた。

ア「そういえば、もうすぐクリスマスね」

な「う～、今年も忙しくなるのかな・・・」

す「ふふ、翠屋のクリスマスケーキは大人気だもんね」

フェ「そうなんだ、食べてみたいな」

アリ「母様に頼んでみようよ！」

それぞれが想いを馳せる中、俺は別の事を考えていた。

一「（クリスマスか・・・確か、原作では闇の書の発動の時期もそれくらいだったな。今の俺で暴走体と戦えるのか？）」

龍那と雲母がいれば事は足りるかもしれないが、だからといって何もしないというわけにはいかない。

一「（いっその事無明の方から攻めて来てくれればいいのだが・・・わざわざ出て来る理由もないだろうし・・・・）」

な「一成君は何か予定はあるの？」

一「・・・・・」

フェ「一成？」

一「・・・え？　あ、何だ？」

す「クリスマスはどうするの？」

一「どうだろうな・・・多分、家でひっそりかな」

ア「・・・寂しいわね」

一「そうかな？」

どっちみちゆっくり過ごす事など出来そうにないしな。

放課後、例によって俺は八神家に向かった。あの戦いから訪れるのは初めてだ。向こうも俺に聞きたい事があるだろう。

ピンポーン！

シャ「・・・一成君？」

一「はい」

シャ「どうぞ、入って」

リビングに向かうと、全員が揃っていた。

は「一成君、久しぶりやなぁ」

一「やあ、はやて。すまないな、最近忙しくて」

は「そうやったんか・・・あ、今お茶入れるな」

一「ありがとう」

シャ「はやてちゃん、私も手伝うわ」

はやてとシャマルさんがお茶の準備の為に離れる。俺はシグナムさん達と顔を合わせた。

シ「秋月・・・あの少女は、テスタロッサは大丈夫なのか？」

一「はい。しばらく魔法が使えませんでしたが、それも回復してます」

シ「そうか・・・」

ホッと息を吐くシグナムさん。敵同士だとはいえやはり心配だった

のだろう。

ヴィ「あれから何があったんだよ一成。あいつらやっつけたのか？」

一「・・・逃げられたよ。新しく介入して来た人物の所為でな」

俺は無明の事をシグナムさん達に話した。

一「もしかしたらシグナムさん達の前に現れるかもしれません。気をつけておいてください」

シ「わかった・・・だが秋月、お前は大丈夫なのか？」

一「？　どういう意味ですか？」

ヴィ「どういう意味って・・・お前悲しくないのか？　家族が攫われたんだろ？」

シ「主はやてのおかげで私達も家族の大切さを学んだ。だからわかるのだ、家族を失うのがどれほど辛いのかを・・・」

一「辛くない・・・と言ったら嘘になります。けど、悲しんでもどうにかなるわけでもありませんし。それに・・・」

シ「それに？」

一「俺には仲間がいます。みんなと一緒なら必ず助けだせると信じ

てますから」

不安も恐れもない。あるのは絶対に助け出すという覚悟だけだ。

シ「そうか・・・強いなお前は」

一「楽天的な考えですけどね」

ヴィ「いいんじゃねえの。暗く考えるよりそっちの方が気が楽だろうし」

一「はは、ありがとうヴィータ」

は「お待たせ一成君。はい、お茶」

シャ「お菓子もあるわよ。遠慮せずに食べてね」

一「頂きます」

シャ「（シグナム、後で何を話したか教えてね）」

シ「（ああ、わかっている）」

は「何話しとったん？」

一「秘密だ」

は「え～～。教えてくれてもええやんか～～」

食い下がるはやてをなんとか宥め、二時間ほど過ごして俺は八神家を後にした。帰る前に念話でシグナムさんに尋ねると、はやては今の所発作も無く安定しているらしいが、蒐集自体はうまくいってないそうだ。

一「とにかく、今はその時が来るのを待つだけだな・・・」

待つ事しかできない現状にもどかしさを感じつつ、俺は家路を急いだ・・・

第十一話　期待と不安は表裏一体（後書き）

作「A-S編もクライマックスに近づいて来たな」

一「無印編に比べてずいぶん展開が早いな」

作「A-S編はシリアス分が多いからな。おふざけが入れられない分コンパクトになるんだよな」

一「いいじゃないか。そっちの方が受け入れられるかもしれないぞ」

作「しかし、それではこの小説のコンセプトに反してしまう！」

一「こんな駄作にコンセプトも何も無いだろうが」

作「一成の言葉に傷ついたので贈り物報告会に移ります」

一「俺の所為なのか？　ええっと・・・まずは清浦刹那様から俺宛てにサイバスターのデバイス。無明宛てにグランゾン（ネオ・グランゾン変身可）のデバイスを頂いたぞ」

作「知ってるか？　サイバスターの必殺技にアカシックバスターってあるだろ。あれって相手の因果率書き換えて存在自体を消去するってマジキチ技なんだぞ」

一「それを言うならグランゾンのワームスマッシャーだって凄いぞ。なにせ最大６５５３５の目標を同時に攻撃できるんだからな」

作「・・・・恐ろしすぎて使えねえよ」

一「・・・・だな」

一「緋水様からは作者にＳＬＢをぶっ放してもらったぞ」

作「ちょッ！？　何で砲撃！？」

一「さあ？　お前またなんかしたんじゃないのか？」

作「ま、待て！　本当に心当たりがないんだけど！！」

一「いいじゃないか、せっかく撃ってもらったんだから大人しく受けろよ」

作「軽く受けられる威力じゃないだろうが！

一「グッドラック」

作「爽やかにサムズ・アップすんな！！　ギャアァァァァァァ！！！」

第十二話　明かされる事実　迫り来る期限（前書き）

決戦に持って行くのがこんなに難しいとは・・・

第十二話　明かされる事実　迫り来る期限

一「はやてが入院!?」

シャマルさんからの電話に、俺は驚きの声をあげた。

シャ「ええ・・・昨日の夜突然倒れてね。救急車で病院に運ばれてそのまま入院する事になったの」

一「・・・そうですか。なら明日お見舞いに行きますから場所を教えてもらえますか?」

シャ「ありがとう一成君・・・」

シャマルさんから病院の場所を聞き、俺は受話器を置いた。

龍「誰からだった?」

一「シャマルさんからだ。はやてが入院したらしい」

＜心配ですね・・・＞

一「とりあえず、明日お見舞いに行って来るよ」

翌日、学校に向かいつつも、俺は放課後の事を考えていた。

な「え？　お友達が入院しちゃったのすずかちゃん？」

なのはの声にハッとなる。

す「うん・・・昨日の夜に家族の人から電話があって、そんなに具合は悪くないそうなんだけど、検査とかでしばらくかかるって・・・」

シャマルさん、すずかにも連絡してたんだな。さすがに倒れた事は隠したみたいだが。

ア「その子ってもしかして、前に私達に紹介してくれるって話してた子？」

す「うん。八神　はやてちゃんって名前の女の子だよ」

アリ「じゃあさ、みんなでお見舞いに行こうよ！」

フェ「みんなって・・・私も？」

ア「そうね。賑やかな方がいいでしょうし、顔合わせの意味も込めてみんなで行きましょうよ」

一「それは止めておいた方がいいぞ」

ア「何でよ？」

一「入院している相手にそんなに大勢で押し掛けるのは逆に迷惑になるんじゃないか？」

な「そっか・・・確かにそうだね」

一「それに、すずかの話じゃ検査とかで大変なんだろ？　もう少し落ち着いてからお見舞いに行けばいいんじゃないか？」

と、自分の事を棚にあげて言ってみる。すると、みんなしぶしぶ納得してくれた。

そして放課後、俺はすぐさま病院に向かった（お見舞いの品を買うのを忘れずに）。

一「ここか・・・」

受付で病室を尋ね、俺ははやての病室に辿り着いた。

一「失礼します」

は「え？　か、一成君!?」

俺の姿を確認したはやてが唖然とした声を出した。その横ではシグナムさんが椅子に座ってこちらを見ていた。

シ「来たか秋月・・・」

は「ど、どういう事なんシグナム？」

シ「実は、昨日主はやてがお倒れになられたあと、シャマルが秋月に電話をかけていたのです」

一「それで、病院の場所を聞いてお見舞いに来たってわけだ」

は「そうやったんか・・・おおきにな一成君」

一「礼はいらないよ。はやては俺の大切な友達なんだから」

は「う、うん・・・／／」

一「そうだ、これお見舞いの品なんだけど、よかったら食べてくれ」

持っている袋を見せる。中にはリンゴやバナナ等が入っている。

は「嬉しいな。私、ちょうど小腹が空いてたんや」

シ「では、私が切り分けましょう」

そう言ってシグナムさんは何処からか取り出したナイフでリンゴの皮をスルスルと向き始めた。

一「（流石、刃物の扱いには慣れているな）」

シ「お召し上がりください主はやて」

差し出されたリンゴを、はやては早速口に入れた。

は「美味しい」

一「そうか。よかった」

もう一つの椅子に腰掛け、はやてと雑談を交わす。

一「すずかも心配してたぞ」

は「ちゅうことは、すずかちゃんにも連絡したんやな・・・」

シ「ええ。秋月に連絡した後に」

一「今度お見舞いに行くって言ってたからな、近い内に来ると思うぞ」

は「ホンマに？　うわぁ、嬉しいなぁ」

ニコニコと笑うはやて。・・・余計な事言わずに今日お見舞いに来させてあげればよかったな。

は「どしたん一成君？」

一「い、いや、何でもないよ」

コンコン

その時、病室の扉をノックする音が聞こえた。

は「どうぞ～～」

入って来たのは医者の先生だった。何故わかるかって？　病院で白衣着ていたら誰だってわかるさ。

医「調子はどうかしらはやてちゃん」

は「バッチリ。なんなら退院してもいいくらいや」

医「ふふ、もう少し我慢してね」

一「はやて、この人は？」

は「この人は石田先生。私がお世話になってる人や」

一「そうなのか。っと、自己紹介が遅れました。秋月　一成です」

石「初めまして。はやてちゃんの主治医の石田です」

そう言って、石田先生は優しく微笑んだ。

は「石田先生、何か用なん？」

石「特にはないけど、はやてちゃんの事が気になっちゃって」

は「なんやのそれ～～」

楽しそうに話すはやて。それだけで、彼女がどれくらい石田先生を信頼しているのかがよくわかる。

石「それにしても、はやてちゃんにこんな素敵な彼氏がいるなんてね」

一「彼氏？」

は「な、何言うてんの石田先生!?」

石「あら、ずいぶん仲がよさそうだし、てっきり・・・」

は「わ、私と一成君はそんな関係じゃ・・・!」

石「ねえ一成君、はやてちゃんの事（女の子として）好き?」

一「はい。（大切な友達として）好きです」

は「ッ～～～／／」

石「よかったじゃないはやてちゃん」

シ「石田先生、あまりからかわないで頂きたいのですが」

石「ふふ・・・」

その後、はやてが涙目になりそうになった所で、ようやく石田先生は去って行った。どうやら本当に様子を見に来ただけのようだ。

一「・・・っと、もうこんな時間か」

気付けば、面会時間ギリギリになっていた。

は「今日は楽しかったわぁ。また来てな一成君?」

一「もちろん」

は「シグナム、一成君を送ったげてな」

シ「承知しました」

病院を後にし、シグナムさんと俺の家・・・ではなく、八神家に向かう。

シャ「いらっしゃい一成君」

ザ「よく来たな」

ザフィーラが人間の姿になっていた。

ヴィ「シグナム、はやては大丈夫だったのか？」

シ「ああ。今のところは落ち着いておられる」

シグナムさんの言葉にホッとする一同。ヴィータに至っては泣きそうな顔をしている。

シ「今日の蒐集はどうだった？」

シャ「ヴィータとザフィーラの二人に任せたけど・・・成果はよくなかったわ」

シ「そうか」

ザ「スマン・・・」

シャ「仕方ないわ。最近は管理局の目も厳しくなってきたし、高い魔力を持つ相手も見つからないんですから」

重苦しい空気が漂う。事態はそこまで切迫していたのか・・・

ヴィ「な、なあ・・・」

シ「どうしたヴィータ？」

ヴィ「闇の書を完成させてさ、はやてが本当の主になったら・・・はやては幸せになれるんだよな？」

シャ「闇の書の主は大いなる力を得る・・・それは守護者である私達が一番よくわかってるでしょ？」

ヴィ「そうなんだよ。そうなんだけどさ・・・アタシは何か大切な事を忘れてる気がするんだ・・・」

ザ「大切な事？」

ヴィ「うん・・・」

シ「とにかく、主はやての為にも、今は蒐集を続けるしかない」

シャ・ヴィ・ザ「「「・・・・（コクン）」」」

一「シグナムさん、俺も手伝いましょうか？」

人手は多い方がいい。そう思っての提案だったが・・・

シ「・・・いや、満足に力を使えない今のお前を巻き込むわけにはいかない」

断られてしまった。確かに今の俺には神奈と天音の器、そして修復が完全ではないハイロゥの二つしかないが・・・

一「ですが、囮くらいにはなれます」

ヴィ「足手纏いだって言ってんだよ。いいから大人しくしてろ」

一「ヴィータ・・・」

シャ「ごめんなさい一成君。ヴィータはあなたの事が心配なのよ」

ヴィ「ち、違っ・・・」

一「・・・わかりました」

そう言われては仕方ない。俺は蒐集の手伝いを諦めた。

シャ「その代わりと言ってはなんだけど、これからもはやてちゃんへのお見舞いを続けて欲しいの。もちろん、あなたの都合がいい時だけでいいから」

一「それはもちろん・・・最初からそのつもりでしたから」

シャ「ありがとう・・・」

そう約束し、その日は帰宅した。

二日後、病院に向かおうとした俺に、アースラから呼び出しがかかった。なんでも、無限書庫で闇の書についての情報が見つかったらしい。同じく呼び出しを受けたなのはとフェイトの二人と共にアースラに向かった。

ク「来たか三人とも」

一「クロノ、いったい何がわかったんだ?」

ユ「それは僕から説明するよ」

扉が開き、ユーノが入って来た。

フェ「ユーノ、久しぶりだね」

ユ「そうだね・・・本当に久しぶりだよ。てっきり忘れ去られてるのかと思ってた」

一「・・・・作者ェ」

急に頭に浮かんだ言葉を口にする。

ユ「リーゼアリアさんとリーゼロッテさんに手伝ってもらってわかったんだけど、闇の書って言うのは本当の名前じゃないみたいなんだ」

な「本当の名前じゃない？」

ユ「うん。正式名称は『夜天の魔導書』。本来は偉大な魔導師達の技術を蒐集して研究する為に作られた魔導書で、それが今みたいになってしまったのは、歴代の持ち主の誰かが無理にプログラムを改変した所為らしい」

フェ「何でそんな事を・・・」

一「手にした力に満足せずに、それ以上の力を得ようとした結果だ

ろう。そういう人間がいるのは今も昔も変わらないさ」

ユ「その改変の所為で、世界を旅する機能と破損したデータを修復する機能が暴走してるんだ」

ク「なるほど、闇の書の転生と無限再生はそれが原因か」

ユ「そして・・・これが一番重要なんだけど、一定期間蒐集がないと、持ち主自身の魔力や資質を侵食し始めるんだ。完成したらしたで持ち主の魔力を際限なく使わせる」

な「ど、どうして？」

ユ「・・・破壊の為だよ。だから、これまでの主はみんな、闇の書が完成してすぐに・・・」

ク「停止や封印方法ついて何かわかってる事は？」

ユ「今調べてるよ。けど・・・完成前の停止は難しいと思う」

ク「何故？」

ユ「闇の書は主と認識した人物でないとシステムへの管理者権限が使えないんだ。無理に操作しようとすると自動的に転生するシステムも入ってるから」

ク「そうか・・・」

悔しげに俯くクロノ。彼の場合、特別な事情があるしな、やりきれ

ない思い出でいっぱいなんだろう。

ユ「少し休んだらまた調べに戻るから、何かわかったらまた教えるよ」

な「無理しないでねユーノ君」

ユ「大丈夫。それに、結構楽しいんだよ」

そう言ってユーノは扉の向こうへ消えて行った。おそらく、無限書庫に戻ったのだろう。

ク「それにしても、あれだけの情報の中から見つけ出すとは・・・彼にはそういった才能があるのかもしれないな」

ユーノの意外な才能に、クロノは素直に賞賛していた。

その後、解散し、俺はそのまま病院に向かう事にした・・・

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

様々な事実が明らかになる中、各々に動き始める人物達。

グ「・・・・」

自身の執務室に籠り、グレアムはモニターをジッと眺めていた。映し出されているのはもちろん闇の書である。

リア「父様、あまり根を詰め過ぎると体に毒ですよ？」

リロ「そうだよ。電気も点けずにさ」

部屋に入って来たリーゼアリアとリーゼロッテが声をかける。

グ「ああ二人とも・・・様子はどうだい？」

リロ「ん～～・・・これといって動きはないですね」

グ「そうか・・・すまんな、お前達までつき合わせてしまって」

リロ「何言ってんの父様」

リア「私達は父様の使い魔。父様の願いは私達の願いです」

リロ「うん、その通り！　例のデバイスも完成したし、大丈夫だよ！」

リア「闇の書の封印、今度こそ成功しますよ」

グ「そうだな・・・」

今は亡き友の無念を晴らす為に考えた計画・・・それがいよいよ実を結ぶ。一人の少女の犠牲の下に・・・

そして・・・

神「貴様・・・いきなり何をする」

神奈と天音は無明の手により拘束されていた。

無「あなた達をここに連れて来たのはおしゃべりする為じゃないの。そろそろ目的を果たさせてもらうわ」

何かを詠唱した無明の両手が淡く光り始めた。

天「その魔法は・・・？」

無「今からあなた達の中のお姉様を構成する部分を抜き取らせてもらうわ。下手に動かない方がいいわよ」

ズブズブ・・・

無明の手が二人の胸元へ突き刺さる。その途端、神奈と天音を激しい痛みが襲う。

神・天「「あ・・あぁぁぁぁぁぁぁ！！！」」

二人の悲鳴と、グチュグチュと生々しい音が室内に響き渡る。

無「痛いわよね・・・自分の一部を無理矢理抜き取られるんですもの。でも、死んだら駄目よ？　取り出せなくなっちゃうから」

二人の痛々しい様子に無明は笑みを浮かべ、手の動きを激しいものに変えた。

神「が・・あ・・・・！！」

天「あう・・・・！！」

拷問とも言える時間が過ぎ、抜き取られた無明の手にはそれぞれ赤と青の光球が握られていた。

無「これがお姉様の意志と器・・・うふふ、綺麗・・・・」

神・天「「・・・・・」」

無「ご苦労様、拘束を解いてあげる」

無明がパチンと指を鳴らすと、拘束していた鎖が消え、二人はその場に崩れ落ちた。

無「ゼノン、二人は任せるわ。私は今から意志と器を結合させる準備に入るから」

ゼ「・・・・承知した」

部屋の隅で黙って見ていたゼノンは、出て行く無明を見送り、二人をベッドに運んだ。

神「はあ・・はあ・・・」

天「う・・うう・・・」

ゼ「・・・すまない。だが、これが彼女の望みである以上、私には止める権利は無い・・・」

謝罪の言葉を述べつつ、ゼノンは二人の汗を優しく拭った。

運命の時は刻一刻と迫る・・・

第十二話　明かされる事実　迫り来る期限（後書き）

作「急展開に次ぐ急展開。・・・だが、これでめんどくさかった部分を終わらせる事が出来たぞ」

一「そうだな、今回の話を書くのに他の作品を見まくってたもんな。それでこの程度だが・・・」

作「あと一、二話で決戦に入るからな。はやての運命。神奈と天音、刹那との再会。そして、龍那と雲母の激チートっぷりをお楽しみに！」

一「納得いく終わり方になればいいんだが・・・」

作「さて、更新が長引いた所為で溜まった贈り物を一気に紹介するぞ！！」

一「まずは、清浦刹那様からラッシュバードとストレイバードの二機を頂いたぞ」

作「スパロボＬの主人公機とライバル機だな。結構バランスの取れた良機体だったのを覚えてるぞ」

一「次元干渉っぽい技持っていたし、中々のチートロボだったな」

作「合体攻撃がやけに熱かったな。気になる方はぜひプレイしてみてください」

一「・・・だから、ここで勧めるなよ」

作「緋水様からはまんじゅうを頂いたぞ」

一「お前宛てだな。前回のお詫びらしい」

作「では遠慮なく頂きますかな」

一「そういえば、何でＳＬＢ撃ったか気になってたが・・・理由は無いらしい」

作「なん・・・だと・・・・」

一「月光閃火様からは・・・・『エンドレス・ピコハン』を俺に向けて・・・ってておい！？」

作「よっしゃぁ！！　久しぶりにお前への嫌がらせが来たぜ！！」

一「ほお・・・」

作「な、何だよ？」

一「・・・・作者ガード！！」

作「なっ！？　ちょっ！　止め・・・・！」

一「ふう、これでしのげるな」

作「うわっ！　中途半端に痛い！！」

一「・・・よし、止んだな。続けるぞ」

作「特に気遣う事もなく進行するお前に乾杯」

一「何言ってんだ？　っと、ＡＴＤ－Ｘ様からは戦闘糧食コンテストで一位を獲得した自衛隊の戦闘糧食？型と、作者宛てにＡＭＦ付きの防弾盾とＡＭＦ付きの防弾チョッキ。さらにバイザー付きヘルメットとベルカ式カートリッジ使用型のピストルを頂いたぞ」

作「す、凄ぇ・・・本格的な装備一式だ。これなら大抵の敵には勝つる」

一「戦闘糧食なんて初めて食べるな。楽しみだ」

作「よし！　俺、今から戦って来る！！」

一「誰とだよ！？」

作「おっしゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

ダダダダ・・・・！

一「・・・・行ってしまった」

第十三話　絶望のクリスマス・イブ（前書き）

A's編最終決戦、始まります。

第十三話　絶望のクリスマス・イブ

アースラ・・・

アースラの管制室、クロノは一つの記録映像を繰り返し見ていた。
それは、フェイトを襲った仮面の男の映像である。

ク「・・・やはり、そうなのか・・・・」

初めて見た時から感じていた予想・・・それを否定する為に何度も
見直していたが、彼の予想はほぼ確信へと変わっていた。

エ「あれ？　クロノ君どうしたの？」

エイミィの登場に、クロノはさりげなく映像を切った。

ク「あ、ああ。少し調べ物をな」

エ「そうなの？　手伝おうか？」

ク「いや、大丈夫。少し気になっただけだから」

エ「そっか。じゃあ私は行くね。邪魔してごめんなさい」

ク「ああ・・・」

執務室を出て行くエイミィ。彼女を見送ったクロノは深い溜息を吐いた。

ク「僕は・・・どうすればいいんだ・・・・」

海鳴大学病院・・・

は「・・・・」

はやてはベッドに横になり、ジッと天井を眺めていた。

入院生活の中で、はやては夜が嫌いになっていた。静寂の中、まるで世界に自分だけしかいないような錯覚に陥り、自分が孤独だという事を認識してしまうからだ。

は「・・・なんて、私らしくないな。せっかく今日もシャマルや一成君がお見舞いに来てくれたんやし、寂しい事なんかあらへん」

先程まで自分の傍にいてくれた家族と友人の顔を思い出しながら、はやては瞳を閉じた。

八神家・・・

シ「頁も、残す所あと僅かだな」

シャ「ええ、ここまで来るのにずいぶんかかっちゃったけどね」

シグナムの持つ闇の書に、全員の視線が集中する。

あと少し・・・あと少しで自分達の主が救える。自分達を家族と呼び、感情を・・・温かさを・・・喜びを与えてくれた心優しい主を。その想いが守護騎士達を突き動かす。

ヴィ「うし！　アタシ今からまた蒐集に行って来る！！」

ザ「俺も付き合おう」

シ「ならば私も」

シャ「ちょ、ちょっとみんな・・・さっき帰って来たばかりなのに」

ヴィ「だってよ、あと少しではやてが幸せになれるんだぜ！　落ち

着いてなんていられねえよ！」

シ「そういう事だ。疲れているならお前は残っていていいぞシャマル」

シャ「誰がそんな事言ったのかしらシグナム？　もちろん私も付き合うわよ」

シ「ふっ・・・では行くぞ！」

ヴィ・ザ・シャ「「「おうっ（ええ）！！」」」

主の笑顔を守るため、守護騎士達は夜の世界へ飛び出した。

月村家・・・

す「これで送信・・・と」

すずかは自室でメールを打っていた。

『例の件、みんな準備出来てますか？』

そう送られたメールに、次々と返事が帰って来る。その全てが『も

ちろん』や『大丈夫』といった肯定の内容だった。

す「ふふっ、はやてちゃん驚くだろうなぁ・・・」

入院している友人へのサプライズプレゼント。彼女達の優しい心づかいが、後にとんでもない事態を引き起こす事を、すずかは知る由もなかった。

時空管理局本局・・・

無「あら、元気そうで安心したわ」

部屋に入った無明はベッドから起き上がっていた二人を見てそう言った。

神「ふん、よくもまあいけしゃあしゃあと・・・」

天「あんな痛みと屈辱を受けたのは初めてです」

無明を睨みつける神奈と天音。それを軽く流し、無明は備え付けのソファに腰掛けた。

無「結合作業は順調よ。このままいけば、そうね・・・クリスマス・イブにはお姉様のお姿を見る事が出来るでしょうね。ふふっ・・・聖なる夜がお姉様の復活祭になるのよ」

ウットリした表情で話す無明に、二人は怒りを通り越して呆れた声を出した。

神「それで・・・そんな事を妾達に教えてどうするつもりじゃ？」

無「正直、お姉様の器と意志が手に入った以上あなた達は用済みなんだけど、それじゃあいくらなんでも可哀そうだと思ってね。・・・あなた達の大切なご主人様に会わせてあげる」

天「ほ、本当ですか！？」

神「乗せられるな天音。どうせ嘘に決まっておる」

無「あらあら、ずいぶん警戒されたものね」

神「貴様には前科があるからの」

未遂に終わったとはいえ、約束を破り一成を殺そうとした無明の言葉を信じない神奈。

無「今度は守るわ。イブの夜に必ず会わせてあげる。素敵な光景と

共に・・・」

神「光景じゃと？」

無「そう・・・愛する者が自らの手で殺められる所をね・・・」

天「え・・・？」

ズブ！

どういう意味だ？　そう天音が聞く前に、無明は再び二人の胸に腕を突き刺した。

天「きゃあっ！？」

神「き、貴様・・・！」

無「ふふっ・・・」

己の何かが変わって行くのを感じながら、二人は意識を手放した。

秋月家・・・

一「・・・・」

雲「どうしたんですか一成さん？」

一「ん？　ああ、今度のクリスマス・イブにはやてにプレゼントを贈るんだが、これで喜んでくれるか不安でな」

＜何買ったんだよ？＞

一「マジックだ」

雲「ま、マジック・・・ですか？」

一「ただのマジックじゃないぞ。赤色なのに青、黄色なのに紫のインクが出るその名もずばり『マジック』だ」

＜・・・あー、なるほど、書く『マジック』と手品の『マジック』をかけた所謂ネタグッズってヤツだな＞

一「何を贈ればいいか悩んでいたら親切な店員さんが勧めてくれてな。詳しい人の勧めなら間違いないと思って買って来たんだ」

雲「あ、あの・・・これはちょっと・・・・」

＜相変わらずセンスねえなお前・・・＞

一「え・・・・」

期待や不安を抱きつつ、それぞれの時を過ごしていく者達。そして・・・ついに運命の日が訪れた。

十二月二十四日・・・・絶望と悲しみのクリスマス・イブが幕を開ける。

ア「それじゃ・・・病院へ出っ発～～！」

な・フェ・アリ・す「「「「お～～～！！」」」」

一「・・・・お～～」

放課後、バスに乗り込んだ俺達は、そのまま病院へ直行した。それぞれプレゼントを持ちながら、喜んでくれるかどうか話している。

一「（とうとうこの日が来たか・・・）」

結局、神奈と天音を助け出す事が出来ずにイブを迎えてしまった。龍那（雲母）には家で待機してもらっているが、最悪彼女達の手を借りなければならない可能性もある。

一「（出来れば二人の力を借りることなく終わらせたいな・・・・

あの力は強大すぎる）」

龍那と雲母のご都合主義そのままな能力を思い出し、俺は体を震わせた。

アリ「どうしたの兄様？　寒いの？」

一「何でもないよアリシアちゃん」

停留所に停車したバスを降り、俺達は病院へ辿り着いた。そのままはやての病室に向かい、扉の前に立つ。

コンコン

は「はーい」

中からはやての声がする。代表してすずかが扉を開けた。

な・フェ「「え・・・・・」」

室内を見た瞬間、なのはとフェイトは固まった。・・・正確には室内にいたある人物の姿を確認した事で。

ヴィ「ッ！？」

シ「お、お前たちは・・・・」

シャ「何でここに・・・！？」

お見舞いに来ていたヴィータとシグナムさん、シャマルさんも信じられないといった表情を浮かべている。そんな五人に気付く事なく、残りの人物達は挨拶を交わす。

は「そちらの人達はもしかして・・・」

ア「初めまして、私はアリサ・バニングスよ」

アリ「アリシア・テスタロッサです。よろしくね！」

は「私は八神　はやてです。こちらこそよろしくお願いしますね」

ア「もう、そんな丁寧な言い方しなくていいわよ」

は「え？」

アリ「そうだよ。同い年だし、それに、お友達に敬語はないんじゃないかな」

は「友達・・・？」

ア「そう。今日から私達は友達よ。私の事はアリサでいいから、あなたの事ははやてって呼ばせてもらうわよ」

アリ「私もアリシアでいいよはやてちゃん」

は「・・・ありがとう二人とも。私・・・めっちゃ嬉しい」

す「よかったねはやてちゃん」

は「うん！」

新たに出来た友達に、はやては満面の笑みを浮かべている。これだけで済んでいたら万々歳なのだが・・・

ア「ところで・・・あんた達さっきからどうしたのよ？」

未だに固まっている二人にアリサが声をかける。

な「え？　な、何でもないよアリサちゃん」

フェ「う、うん。なのはの言う通り」

ア「ならそんな所に立ってないで自己紹介しなさいよ」

な「そ、そうだね・・・」

なのはとフェイトがはやてに近づく。それに反応したヴィータが動こうとしたが、シグナムさんに制されて引き下がった。

な「こんにちは、高町　なのはです」

フェ「フェ、フェイト・テスタロッサです・・・」

は「あれ？　もしかしてフェイトちゃんとアリシアちゃんって・・・」

フェ「うん。姉妹だよ」

は「やっぱりそうかぁ・・・っとと、私も自己紹介せんとな。八神はやてです。よろしくななのはちゃん、フェイトちゃん」

ア「一成、次はアンタの番よ」

一「いや、俺は・・・」

は「あっ、一成君も来てくれたんやな！」

一「ああ、こんにちははやて」

なるべく目立たないようにしていたが、意味がなかった。

ア「・・・ちょっと、何でアンタがはやての事知ってんのよ？」

一「図書館ですずかと一緒にいた所で知り合ってな。それからちょくちょく家に遊びに行ったりしてたんだ」

ア「どうしてそんな大切な事黙ってたのよ！」

一「・・・スマン」

ア「ア・ン・タ・ねぇぇぇぇ・・・・！」

は「と、ところで、今日はみんなどないしたん？」

はやての助け船により、アリサの意識はそっちに向かっていた。

ア「ふふーん・・・それはねぇ・・・・」

す「行くよみんな？」

すずかの合図で、全員がプレゼントを差し出す。

な・フェ・アリ・ア・す「「「「「メリークリスマス！　はやて（ちゃん）！！！」」」」」

一「メリークリスマス」

は「え？・・・ええ！？」

目の前に突き出されたプレゼントに、はやては驚きの表情を浮かべる。

す「今日はクリスマス・イブでしょう？　だからはやてちゃんにクリスマスプレゼントだよ！」

は「ほんまに・・・ほんまに貰ってええの？」

な「もちろんだよ！」

アリ「今出されると恥ずかしいから、後で開けてみてね？」

は「うん！　みんな、ほんまにありがとう！！」

状況が掴めていなかったはやての表情が、ゆっくりと笑顔に変わって行った。

ア「喜んでもらえてよかったわ」

はやて、アリサ、すずか、アリシアちゃんが和気藹々と話している中・・・

な・フェ・シ・シャ・ヴィ「「「「「・・・・・・」」」」」

互いを敵として認識している五人は、水面下の中で警戒を続けていた。

フェ「（アースラ・・・聞こえますか、アースラ？）」

念話を使ってアースラに連絡を試みるフェイトだったが、何故か念話が通じなくなっていた。

シ「無駄な事は止めておけ。この程度の通信妨害はシャマルにとって造作もない事だ」

そんなフェイトに、シグナムさんが小声で話しかける。

な「えっと・・・あの・・・・そんなに睨まなくても・・・・」

ヴィ「・・・・睨んでねーです。こういう目付なんです」

ずっと睨んで来るヴィータにいたたまれなくなったのかなのはが話しかけたが、ヴィータは逆に睨みを強めた。

な「あ、あう・・・」

そして、俺にはシャマルさんが話しかけて来た。

シャ「一成君・・・何であの二人がここに？」

一「すずかからはやての事を聞いたんです。それで、みんなでお見舞いに行こうという話になりまして」

シャ「そ、そう・・・管理局に知られたわけじゃないのね」

一「それより、あの二人を何とかしてください。なのはとフェイトは純粋にお見舞いに来ただけですから」

シャ「わかったわ」

シャマルさんが二人を諭し、シグナムさんはフェイトから離れ、ヴィータはようやく睨むのを止めた。

その後、面会時間が終わるまで病室で過ごした俺達は、病院の玄関に下りていた。すずかとアリサ、アリシアちゃんの三人を帰し、俺はなのはとフェイトと向き合った。

な「ところで一成君」

一「何だ？」

な「はやてちゃんと知り合いだったって事は・・・はやてちゃんが夜天の書の主だって知ってたの？」

一「・・・・ああ」

フェ「やっぱり・・・どうして教えてくれなかったの？」

一「今回の件には何か裏がありそうだったんでな、危険な目に遭う恐れがあったから教えないでおいたんだ」

な「裏？」

一「ああ・・・おそらく無明達も絡んでいる」

フェ「無明・・・神奈さんと天音さんを連れて行った人だね」

一「だが、こうなった以上もう隠していても意味がない。・・・虫のいい話だと思うが、キミ達の力を貸して欲しい。はやてを・・・いや、はやて達を助ける為に！」

な「もちろんだよ一成君！」

フェ「私達だってはやての友達だもん！」

一「・・・・ありがとう」

万感の思いを込め、俺は頭を下げた。この娘達がいてくれて本当によかった。

俺達は去り際にシグナムさんから伝えられていたビルの屋上に向かった。そこには三人とともにザフィーラが立っていた。

シ「・・・・悲願はあと僅かで叶う」

シャ「邪魔をするなら・・・いくらはやてちゃんのお友達でも・・・・！」

な「待って下さい！　駄目なんです、闇の書が完成したらはやてちゃんは・・・・」

決意の表情を浮かべる四人になのはは必死に呼びかけるが・・・・

ヴィ「おらぁぁぁぁぁぁーーーーッ！！！」

それを掻き消すかのように、ヴィータはデバイスをなのはに向かって振り下ろした。辛うじて防いだなのはだったが、勢いは殺せずそのままフェンスに吹き飛ばされた。

フェ「なのは！！」

フェイトが急いでフォローに入ろうとするが・・・

シ「やらせん！！」

フェ「ッ！？」

シグナムさんのレヴァンティンの一閃に思うように近づけないでいた。

シ「管理局に・・・我らの主の事を知られるわけにはいかないのだ！」

シャ「私の通信妨害範囲から出すわけにはいかないわ！」

迷いなく・・・だが、どこか悲しそうな声色でそう叫ぶ二人。

ヴィ「・・・邪魔すんなよ」

な「ヴィータ・・・ちゃん・・・・？」

ヴィ「あとちょっと・・・あとちょっとで助けられるんだ・・・。はやてが元気になって・・・アタシ達の所に帰って来るんだ・・・。今までずっと苦しんで来たけど、あとちょっとで幸せになれるんだ・・・。だから・・・だからっ！　邪魔をすんじゃねぇぇぇぇぇぇ

ぇぇーーーーーッ！！！！！」

カートリッジが排出され、デバイスを大きく振り上げたヴィータの目から・・・一筋の涙が流れていた。

ドガァァァァァン！！！

なのはに向かって振り下ろされたデバイスは凄まじい爆発を引き起こし、なのはの姿は爆発で生じた炎の中に消えた。

ヴィ「はあっ・・・はあっ・・・はあっ・・・・・」

肩で息をするヴィータが見たのは・・・・

な「・・・・」

バリアジャケットを展開させ、無傷で姿を現したなのはの姿だった。

ヴィ「悪魔め・・・・！」

な「悪魔でいいよ・・・」

確かな決意を瞳に宿し、なのははレイジングハートを起動させた。

な「悪魔らしいやり方で・・・話を聞いてもらうから・・・・！」

それは、戦ってでも止めるというなのはの決意。それに応えるかのように、レイジングハートは淡い光を発していた。

シ「シャマル、お前は離れて通信妨害に集中していろ」

シャ「わかったわ」

フェイトとシグナムさんの方にも動きがあるようだ。

フェ「闇の書は悪意ある改変の所為で壊れてしまっている。そんな状態で完成させたらはやては・・・！」

シ「我々はある意味で闇の書の一部だ！」

ヴィ「だから、アタシ達が一番闇の書の事を知ってんだ！」

な「だったら・・・どうして闇の書なんて呼ぶの！？」

ヴィ「え・・・？」

な「何で・・・本当の名前で呼ばないの？」

ヴィ「本当の・・・名前？」

≪そうなんだよ。そうなんだけどさ・・・あたしは何か大切な事を忘れてる気がするんだ・・・≫

なのはの言葉に戸惑いの表情を浮かべるヴィータ。

フェ「バルディッシュ・・・」

フェイトがバリアジャケットを纏う。しかし、今までの物とは形が変わっていた。

シ「薄い装甲をさらに薄くしたか」

フェ「その分、さらに速く動けます」

シ「緩い攻撃でも当たれば致命傷だぞ？　正気か？」

フェ「あなたに勝つ為です。強いあなたに立ち向かうにはこれしかないと思ったから・・・」

シ「・・・この様な出会いをしていなければ、私をお前はいったいどれほどの友になれただろうか・・・」

フェ「まだ・・・まだ間に合います！」

シ「止まれん！」

フェ「ッ・・・！」

シ「我ら守護騎士・・・主の笑顔の為、騎士の誇りさえ捨てると決めたのだ！　もう・・・止まれん！！」

悲痛な叫びと共に、シグナムさんの頬を涙が伝う。

フェ「止めます・・・止めてみせます！　私とバルディッシュで！」

≪Ｙｅｓ　ｓｉｒ≫

それは、悲しみを止めるというフェイトの決意。その決意にバルディッシュも応えるかのように輝く。

ザ「・・・止めないのか？」

四人の戦いを黙ってみている俺にザフィーラが話しかけて来た。

一「止めようとすれば・・・キミが俺を止めるんだろ」

ザ「・・・・」

この戦いが始まり、正直何度飛び出そうと思ったか覚えていない。
だが、俺が止めるべき相手は彼女達では無い。俺が止めるのは・・・

ヴィ「ぐうッ!?」

な「あっ・・・!?」

ヴィータとなのはの声に目を向けると、二人は鎖によって拘束されていた。

な「ば、バインド!?」

ヴィ「てめえ・・・」

ヴィータの睨む先には・・・

男「・・・・」

そこにはあの砂漠世界でフェイトを襲った仮面の男が佇んでいた。

シ「ヤツは・・・！」

フェ「仮面の・・・男」

シ「レヴァンティン！」

その姿を確認するやいなや、シグナムさんはレヴァンティンの形状を変化させ、男に狙いを定めた。

フェ「ッ！　シグナム！」

シ「ッ！？　がッ・・・・！」

その数瞬後、シグナムさんは二人目の仮面の男によって捕えられていた。

フェ「あうッ！？」

シ「テスタロッサ！」

動きを止めていたフェイトも、いつの間にか拘束されていた。

シャ「待ってて！　すぐに助けて・・・！」

男A「お前もだ湖の騎士」

シャ「え・・・きゃあッ！？」

助けに向かおうとしたシャマルさんまでもが捕えられる。

男A「こう人数が多くてはバインドも通信妨害も長くは保てん。急いでくれ」

男B「わかっている」

一「・・・・させると思うか？」

男達を睨みつける。

男A「くっ・・・！」

男B「落ちつけ、今のヤツには戦う力は無いはずだ」

一「・・・・・」

俺は無言で器を構えた。その途端、男達は大いに慌てだした。

男A「ど、どういう事だ!?　報告では確かに・・・・！」

無明が何か教えたのだろうが、今の俺でもあの二人と戦う力はある。

一「オーバー・・・・ドライブ!!!」

双剣を構え、男に向かって突撃する。そして、男に刃が届きそうになったその瞬間・・・

ギィィィィィィィィン!!!

俺の一撃は、長刀と槍によって防がれていた。

一「ど、どうして・・・・」

防がれた事はどうでもよかった。それよりも、防いだ人物の姿に俺は驚愕した。頭が真っ白になり、思わず器から手を離しそうになった。

な「あれは・・・！」

フェ「な、何であの二人が!?」

二人の声に正気に戻る。だが、目の前で起きた事が未だに信じられなかった。

神「・・・・・」

天「・・・・・」

一「神奈・・・！　天音・・・・！」

仮面の男を守ったのは・・・・俺の大切な家族だった。

絶望は加速する・・・

2023

第十三話　絶望のクリスマス・イブ（後書き）

作「いよいよ始まった最終決戦！　いやあ、さすがにコレ予想できた方はいないだろうな」

一「・・・・積んだな」

作「おい！　主人公の言うセリフじゃねえだろ！」

一「言ってみただけだ。何もしてないのに諦めるつもりはない」

作「そ、それならいいんだが」

一「しかし・・・またごちゃごちゃして来たな。ちゃんと纏められるのか？」

作「任せんしゃい！！」

一「じゃあ贈り物報告会に移るか。今回はお一人だけだからすぐ終わるぞ」

作「どなたからだ？」

一「緋水様からだ。お前にネオグランゾンとゼオライマーをぶつけるとの事だ」

作「ぶつける！？　贈るじゃなくてぶつけるなの！？」

2024

一「どうあってもお前を消したいらしいな」

作「クッ・・・こうなったら、前回ＡＴＤ－Ｘ様から頂いた装備一式で立ち向かってやる！！」

一「よっぽど気にいったんだなそれ」

作「よし！　ＢＧＭはダーク・プリズンで頼む！」

一「・・・本気か？」

2025

第十四話　歪められた絆（前書き）

こんな時にのんきに更新なんてするべきではないと思われるかもしれませんが・・・私は私に出来る事をします。

2026

第十四話　歪められた絆

＜ッ！　龍那・・・！＞

龍「ああ・・・『視えてる』よ」

＜どうしてあの二人が一成さんと・・・＞

龍「おおかた、魂（ウィル）を支配でもされてるんだろ。闇の書に加えてアイツらを相手にするとなると・・・やっぱり行くしかねえよな」

＜じゃあ・・・＞

龍「これでまた一成に借りを返せるな・・・行くぜ雲母！」

＜うん！＞

ＩＮ　ＳＩＤＥ

一「くっ・・・・！」

その場から下がり、改めて二人を見据える。偽物だと信じたかったが、二人の体から感じるオーラは間違いなく本人だという事を示していた。

ヴィ「な、何だよアイツら・・・」

な「神奈さん！　天音さん！」

シ「知っているのか？」

フェ「一成の・・・家族です」

シ「なっ・・・！？」

男達を守るように立ちはだかる神奈と天音。二人の真意を知るため俺は尋ねた。

一「何故だ・・・何故キミ達が・・・」

？「私がそう命じたのよ」

一「その声は・・・！」

無「久しぶりね旅人さん。感動の再会はどうだったかしら？」

視線の先では、無明が笑顔でこちらの様子を見ていた。

一「無明・・・二人に何をした？」

無「せっかく会わせてあげたのにずいぶんな態度ね」

一「質問に答えろ」

無「せっかちな男は嫌われるわよ？・・・そうね、二人の魂（ウィル）に干渉して、支配権をあなたから私に移した・・・と言ったら？」

一「なっ！？　そんな事が・・・」

無「あら、彼女達は霊剣。そして私は神剣よ？　その二人、霊剣の中でも高位の存在みたいだけど、それはあくまで霊剣という枠組みの中での事よ。神剣に比べればその力も微々たるもの、そんな二人に干渉する事は、私にとって造作もない事ですもの・・・」

一「二人を操って何をする気だ？」

無「とりあえず、お世話になった相手に借りを返そうと思ってね。・・・あなた達、彼は二人が抑えておくから、やりたい事があるならさっさと終わらせなさい」

男Ａ「わ、わかった・・・」

一「待て！　やらせはしな・・・」

無「あなたの相手はこっちよ」

ヒュン！

一「ッ！？」

神奈の長刀が俺に迫る。それを何とか回避し、男達に迫ろうと試みたが・・・

ブオン！

天「・・・・・」

一「くっ・・・・・！」

そんな俺に、天音の槍が容赦なく突き出される。これまで頼りにしていた二人の力が、今は俺を追い詰めていた。

男A「始めるぞ・・・蒐集」

男の手には、周囲に禍々しい魔力を放っている闇の書が握られていた。

シ「ぐ・・あ・・・・・！！」

シャ「あうっ・・・・！！」

ヴィ「うあぁぁぁぁぁぁぁ！！」

シグナムさん達からリンカーコアが取り出され、三人の顔が苦痛に歪む。

男Ａ「最後のページは不要となった守護者が差し出す・・・・これまでもそうだったはずだ」

蒐集され、シグナムさんとシャマルさんの姿は闇に消えて行った。

男Ａ「壊れ狂ったロストロギア・・・こんな物で誰も救えるはずがない」

ヴィ「何なんだ・・・何なんだよテメエらは！？」

男Ａ「プログラム風情が知る必要はない」

先に消えた二人と同じように、徐々にヴィータの体が薄れていく。

一「それ以上やらせるか！　神奈！　天音！　どいてくれ！！」

せめてヴィータだけでも・・・そう思い、必死に声をかけるが。二

人が構えを解く事は無かった。

な「止めて・・・止めてぇぇぇぇぇぇぇ！！！」

バインドを外そうと必死にもがきながら、なのはは悲鳴ともとれる叫びをあげた。

ザ「おぉぉぉぉぉぉぉ！！」

ヴィータが消えようとしたまさにその時、咆哮と共にザフィーラが男達に向かって跳躍した。

一「頼むザフィーラ！　ヴィータを・・・！」

男Ｂ「そうか、もう一匹いたな」

ギィィィィィィン！！

ザ「ッ！？」

ザフィーラの放った拳は、もう一人の男が展開した障壁によって届く事は無かった。

ザ「ぐあぁぁぁぁ！！」

その隙を狙われ、蒐集されたザフィーラはその場に崩れ落ちた。

一「くそ・・・くそぉおおおおおお！！！」

自分の不甲斐なさを呪い、俺は吼えた。

男Ａ「これで完了だな・・・あの二人は？」

男Ｂ「問題無い。念入りにバインドを重ねた上にクリスタルケージに閉じ込めたんだ、抜け出すには時間がかかるだろう」

男Ａ「そうか。あの男もヤツが入れば手を出せないだろうし、次の行動に移るぞ」

そう言うと、男達は変身魔法で姿を変えた。

な・フェ「「え・・・」」

一人はなのはに・・・そして、もう一人はフェイトへと姿を変える。

無「旅人さん、あなたもそこで見物してなさい」

一「しまっ・・・・！」

気付いた時には手遅れだった。無明にグラスプで俺は動きを封じられてしまった。

男A「さあ、闇の書の主よ・・・目覚めの時だ」

男B「いや・・・因縁の終焉と言った方がいいかもしれんな」

フェイトに変身した男が、転移魔法を発動させた。瞬間、その場に呼び出されたのは・・・

は「ここは・・・・？　え・・なんなん・・・・？」

突然の出来事に混乱するはやて。そんな彼女に偽者のなのはとフェイトが近づく。

は「なのはちゃんにフェイトちゃん？　な、何なんこれ？　なんで、ザフィーラが倒れとるん？」

な（偽）「キミは病気なんだよ。闇の書の呪いっていう病気なんだ」

は「え・・・？」

フェ（偽）「もうね・・・治らないんだよ。闇の書が完成しても助からない。キミが救われる事は・・・ないんだ」

は「う・・うう・・・」

二人の言葉に、はやては胸を押さえて苦しみだした。

フェ（偽）「苦しいの？　でも、もう少しの辛抱だよ。もう少しでキミは・・・」

は「こんなん・・・なんともあらへん。それより、ザフィーラに何したん？」

な（偽）「・・・・・」

は「シグナムは・・・シャマルは・・・ヴィータは・・・何処に行ったん！！」

フェ（偽）「壊れた機械は役に立たないんだよ」

な（偽）「だから・・・壊しちゃおう」

そう言って構えをとる二人。これから何をするのか悟ったのか、は

やては必至で懇願し始めた。

は「ッ！　だ、駄目！　止めて！！」

な（偽）「止めて欲しかったら・・・」

フェ（偽）「力づくでどうぞ？」

本物が決して浮かべる事はないだろう冷たい笑みと共に、二人は手を掲げた。

な（偽）「ねえ、はやてちゃん・・・」

フェ（偽）「運命って・・・残酷なんだよ・・・・」

は「お願い！　止めてぇぇぇぇぇ！！！」

閃光が辺りを包み込む。それが消えた時、残っていたのは、はやてと彼女の前に浮いている闇の書だけだった。

は「あ・・ああ・・・・」

一「はやて！　しっかりしろ！　気をしっかり持つんだ！！」

無「無駄よ。あなたの声はあの子に届いていないわ」

一「ッ・・・キミはどこまで！」

無「ふふ・・・・・」

は「うあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

絶叫と共に、彼女の足元に展開していた白い魔法陣が紫へと変化する。彼女から溢れだした魔力が爆発を引き起こし、魔力柱が形成される。

一「はやて！」

は「・・・・我は闇の書の主なり。この手に力を・・・封印・・・・解放」

俺の呼びかけに応えず封印解放を執り行うはやての瞳は・・・赤くなっていた。

その途端、はやての体が大きく変化を始めた。少女から女性の体つき。銀色の長髪。そして・・・背中から生じる対になっている六枚の黒い翼。最早、はやてとは別人と化していた。

女性「また全てが終わってしまう・・・いったい幾度、こんな悲しみを繰り返すのか・・・・」

魔力柱が消え、姿を現した女性は空を仰いで涙を流した。

な・フェ「「はやて（ちゃん）！！」」

女性「我は闇の書・・・我が力の全ては・・・・」

闇の書と名乗った女性は、腕を天高く掲げた。

闇「主の願い・・・そのままに・・・・」

彼女から放出される魔力は・・・・全てを包み込もうとする闇の色そのものだった。

彼女の視線の先には・・・未だに拘束が解けていないなのはとフェイトの姿。

一「まさか・・・！」

無「あらあら、動けない相手に容赦無いわねあの人・・・」

一「くそ・・・・！」

ガチャガチャ！！

グラスプから抜け出そうと、必死に体を動かす。

無「あなたも使えるならわかってるでしょ？その鎖は一定の力以上でないと抜け出す事は不可能よ」

そうしている間にも、闇の書は魔力の凝縮を続けている。

闇「闇に・・・沈め」

≪デアボリック・エミッション≫

そして・・・臨界を迎えた魔力が、無情にも二人に放たれた。

一「（・・・・ふざけるな）」

俺はどうしてここにいる？　なのはを・・・フェイトを・・・はやてを・・・彼女達に連なる人達を救うためじゃないのか？

一「（ふざけるな）」

そんな彼女達が今まさに危機に直面しているのに、たかが“この程度”の力で動きを封じられている場合じゃないはずだ・・・

一「（ふざけるな！）」

彼女達を守る・・・それがお前の『誓い』だろう！！！

ガチャガチャ！

無「だから無駄だと・・・」

ピキ・・・

無「え・・・・」

ピキピキ・・・

無「そ、そんな・・・」

一『砕けろぉぉぉぉぉぉーーーーっ！！！！！』

ピキピキピキ・・・・バキィィィィィィィン！！！

咆哮と共に、俺を拘束していた鎖は木っ端微塵に砕け散った。

一「オーラフォトンッッッバリアァァァァァァ！！！！」

すぐさまなのは達の前に立ちはだかり、障壁を二重三重に展開していく。瞬間、凄まじい衝撃が俺を襲った。

一「ぐう・・・！」

俺の力だけでは強力な障壁は展開できない。だが、なんとしても防ぎ切ってみせる！

一「はあぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

十秒・・・二十秒・・・三十秒・・・・やがて、俺達を襲う闇はその威力を失っていった。

一「はあっ・・はあっ・・・くっ・・・・・」

な・フェ「「一成（君）！！」」

膝をつく俺を、二人は優しく支えてくれた。

一「二人とも・・・よかった、抜け出せたんだな」

な「ごめん・・・ごめんね一成君」

フェ「私達を守るために・・・」

一「ははっ、何で謝るんだ？　友達を助けるのは当然だって・・・前から言ってるだろ？」

無「どうして・・・あなたごときの力で私の拘束を破れるはずが・・・」

一「友達を守る為なら・・・限界以上の力だろうと出してみせる」

闇の書、そして無明をそれぞれ見据える。一方の瞳には哀しみ・・・もう一方の瞳には戸惑いが宿っていた。

一「行くぞ二人とも・・・仕切り直しだ」

第十四話　歪められた絆（後書き）

作「ついに闇の書が発動したな」

一「本当は防ぎたかったんだが・・・俺の力が足りなかったばかりに・・・・」

作「お前の所為じゃないぞ。最初から発動させる事は決定事項だったからな」

一「むしろお前が原因かよ！」

作「じゃあ、今回の贈り物報告会始めるぞ」

一「まずは清浦刹那様からだ。お前宛てにパイルバンカー。無明にラピスラズリの指輪を頂いたぞ」

作「おお！　ドリルと並ぶ浪漫武器じゃないか！」

無「また急に呼び出して・・・何の用？」

一「清浦刹那様からキミに贈り物だ。ほらっ」

無「ふ、ふうん・・・またあの人からなの。しょうがないわね、貰ってあげるわ」

作「へ～、んな事言っていいのか？」

無「な、何よ？」

作「ゼノンから聞いてるぞ。お前・・・以前頂いた赤いドレス気に入ってるんだろ？　暇さえあれば鏡の前で体に当てているって話してたけどな」

無「ッ！？　あ、あの男・・・余計な事をぉ・・・！！」

一「いつ聞いたんだよ？」

作「秘密だ」

一「次は緋水様からだ・・・ガオガイガーにゴルディオンハンマーを作者に・・・って、恒例化してきたな」

作「ふっふっふ。今回は大丈夫だ・・・月光閃火様からディス・アストラナガンを送って頂いたからなぁ！！」

一「・・・よし、逃げよう」

作「何だよ～～。一緒に見物しようぜ」

一「ふざけろ！　こんな所でチートロボと勇者王がぶつかったら俺達なんか一瞬で消え失せるぞ！！」

作「それがいいんじゃないか」

一「アホか！！」

一「はあっ・・・はあっ・・・どうにか無事逃げられたな」

作「ちぇ、つまらん」

一「さてと・・・落ち着いたし、二次元最高様から頂いたチーズケーキでも食べるか」

作「そ、そうか。じゃあ俺は向こう行ってるよ」

一「？　何でだ？」

作「それは・・・その・・・・・」

一「え・・・・？」

作「（コソコソ）」

一「・・・・マテ」

ガシッ！

作「ッ！？」

一「オカシイナ・・・オクッテイタダイタケーキガカゲモカタチモ

ナインダガ・・・・ナンデダロウ？」

作「は、ははは・・・何でだろうなぁ。僕にはさっぱり・・・」

一「・・・・・」

作「すんまっせぇぇぇぇん！！　俺が食っちゃいましたぁぁぁぁぁ！！」

一「ソウカ・・・ヨクショウジキニハナシテクレタナ」

作「じゃ、じゃあ許して・・・」

一「ダガコトワル」

作「ヒィ！？　即答！？」

一「・・・・オブツハショウドクダ」

作「ヒャッハァァァァァァ！！！」

第十五話　託されし力（前書き）

感想を送ってくださった方々、ご無事なようで心の底からホッとしました。

第十五話　託されし力

地球の衛星軌道上に待機しているアースラのブリッジでは、先程からアラート音が鳴り響いていた。

クルーA「対象区域の通信妨害が消滅！！」

クルーB「映像、来ます！！」

次の瞬間、ブリッジの大型モニターに海鳴市の映像が映し出された。

リ「クロノは！？」

エ「すでに向かっています！」

現場に向かった息子を思いながら、リンディはモニターをジッと見つめていた。

・・・・・・

男A「よし・・・結界は張れた。デュランダルの準備はどうだ？」

男Ｂ「出来ている」

一成達から離れた二人は、計画の最終段階に移っていた。男の一人が手を掲げると、そこには一枚のカードが現れる。それは、クロノのデバイスの待機状態とよく似ていた。

男Ａ「ほお・・・あの攻撃を防ぐか・・・・」

男Ｂ「このままヤツの注意をひきつけておいて欲しいものだがな」

闇の書の空間攻撃を防ぎきった一成を、二人は静かに見つめていた。

？「いや・・・これ以上キミ達の思うようにはさせない」

男Ａ・Ｂ「「ッ！？」」

自分達にかけられる声。すぐに辺りを警戒する二人の足元に魔法陣が出現し、そこから現れた水色のバインドが二人を縛り上げた。

男Ａ「こ、これは！？」

男Ｂ「くっ・・・抜け出せん！」

もがく二人の前に、一人の少年が姿を現した。

ク「ストラグルバインド・・・相手を拘束しつつ強化魔法を無効化する。・・・あまり使いどころの無い魔法だけど、こういう時には役に立つ」

男A「お前は・・・！」

ク「変身魔法も・・・強制解除するからね」

男A・B「「ぐっ、ぐあぁぁぁぁぁぁ！！」」

絶叫と共に、二人の体が光に包まれた。やがて光が消えると、そこにいたのは男ではなかった。

カラァァァァン！！

二人の顔を覆っていた仮面が、ゆっくりと地面に落ちた。

ク「やはり・・・キミ達だったか」

リロ「クロノ・・・！」

リア「こんな魔法・・・教えてなかったんだけどな」

ク「一人でも精進しろ・・・・そう教えてくれたのはキミ達だろう。アリア・・・ロッテ・・・・・」

・・・・・・

ＩＮ　ＳＩＤＥ

な「一成君、本当に大丈夫なの？」

未だに息を整えている俺を気遣ってくれるなのは。

一「ああ。この程度で音をあげるわけにはいかないからな」

三対四・・・力も数もこちらが不利だ。せめてあと一人でもこちらにいてくれれば・・・

ユ「なのは！　一成！」

アル「フェイト！」

その時、夜を切り裂いて、二人の頼もしい仲間がやって来た。

な「ユーノ君！　アルフさん！」

フェ「来てくれたんだね！」

ユ「アースラから映像を見て急いで来たんだ」

アル「あたしは、フェイトが中々帰って来ないから心配になってね。探しに出てみれば・・・案の定とんでもない事になってたようだね」

闇の書、そして無明を睨みつつ、アルフはそう言った。

ユ「一成・・・神奈さんと天音さんは・・・・・」

一「今の二人は無明に操られている。こっちの言葉は届いていない」

ユ「そんな・・・・・」

闇「主よ・・・貴女の望みを叶えます・・・愛しき守護者達を傷付けたあの者達を・・・今、破壊します・・・・・」

涙を拭い、闇の書は再び漆黒の魔法陣を展開させた。

な「な、何！？」

ユ「これは・・・結界だ！」

アル「なるほど、あたし達を逃がすつもりはないみたいだね」

一「元より逃げるつもりはない。彼女達を助ける為に」

フェ「そうだね、最初からそんな選択肢はないもんね」

闇「スレイプニール・・・羽ばたいて」

結界を発動させた闇の書は、その大きな翼をはためかせ、そのまま上空へと上がって行った。

一「なのは、フェイト。ユーノとアルフを連れて闇の書を・・・」

な「フェイトちゃん、アルフさん、はやてちゃんをお願いね。ユーノ君も手伝ってあげて」

一「え・・・」

フェ「うん、わかった」

ユ「任せて！」

アル「アンタもしっかりね」

そう言って、三人は闇の書を追って行った。

一「な、なのは？　何を・・・」

な「・・・決めてたの。もし、無明さんが出て来たら、私が一成君と一緒に戦うって」

一「一緒に？」

な「約束したよね？　一緒に神奈さん達を助けるって」

≪俺一人では何も出来ない。だから二人とも、どうか俺に力を貸してくれ。神奈達を・・・俺の家族を助ける為に！≫

な「もう一人で戦わせない・・・一成君の背中は私が守ってみせる！」

一「なのは・・・」

守るべき少女はそこにはいなかった・・・そこにいたのは、何よりも頼りになる仲間の姿だった。

一「・・・俺はまた同じ間違いを起こす所だったな」

な「一成君？」

一「神奈達を助けよう。俺と・・・キミの二人でな！」

な「ッ！　うん！！」

無「・・・・お話は終わったかしら？」

神奈と天音を従え、無明はゆっくりと俺達の前に降り立った。

一「ああ。待たせたな」

無「それじゃあ始めましょうか。・・・・っと、その前に、もう一人のゲストを呼ぶわね」

な「ゲスト？」

無「ふふ・・・」

空間が歪み、一人の女性が姿を現した。

一「・・・・え？」

その女性を見た瞬間、今度こそ俺は器を落としてしまった・・・

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

クロノＳＩＤＥ

アリアとロッテを捕まえた僕は、すぐに本局のグレアム提督の私室に向かった。

ク「二人の行動はあなたの指示ですね・・・グレアム提督」

リア「違う！」

リロ「私達の独断だ！　父様は関係ない！！」

グ「アリア、ロッテ・・・いいんだ」

庇おうとする二人を、提督は優しく制した。

グ「クロノ・・・キミはもう全てを掴んでいる。違うかい？」

ク「全ての始まりは十一年前・・・ですよね提督？」

グ「やはりな・・・」

ク「十一年前に起こった闇の書の事件・・・それ以降、提督は闇の書の転生先を独自に探していましたね？　そして・・・ついに闇の

書のありかと主を見つけた」

モニターに映し出されたのは・・・主である八神　はやての姿。

ク「けれど、完成前の闇の書と主を押さえても意味がない。闇の書には転生機能がありますからね」

グ「・・・・・」

提督は無言だった。それに構わず、僕はさらに続ける。

ク「だから、監視をつけて闇の書の完成を待っていた。・・・・見つけたんですよね？　闇の書の永久封印方法を・・・・」

グ「・・・・そうだ」

少し間を置き、提督は静かに答えた。

グ「両親に死なれ、体を悪くしていたあの子を見て心は痛んだが・・・・運命だとは思った。孤独な子であれば、それだけ悲しむ人は少なくなる」

ク「・・・・あの子の生活援助をしていたのも提督ですね？」

グ「永遠の眠りにつく前に、せめて幸せにしてやりたかった・・・・ただの偽善だがね」

自嘲的に笑う提督。

ク「封印の方法は・・・主ごと凍結させて次元の狭間か氷結世界に閉じ込める・・・といったところでしょうか」

グ「そうだ・・・それならば転生機能も働かないからな」

リロ「これまでの闇の書の主だって、アルカンシェルで蒸発させたりしてたんだ！　それと何も変わらない！！」

リア「クロノ、今からでも遅くない。私達を解放して。凍結がかけられるのは暴走が始まる瞬間の数分だけなの！！」

ク「その時点ではまだ闇の書の主は永久凍結をされる犯罪者じゃない！　明らかに違法だ！！」

リロ「その所為で・・・そんな決まりの所為で・・・・今まで何度悲劇が繰り返されて来たかわかってんの！？　クロノ、あんたの父さんだって・・・！」

グ「ロッテ！」

リロ「あっ・・・・・」

ロッテの言う通り、これまでの闇の書事件で多くの犠牲者が生まれた。そう・・・・僕の父も。

ク「・・・・現場が気になるのでもう行きます。提督・・・・仮に凍結が成功しても、いずれは誰かに解除されるでしょう。欲望の為・・・力を得ようとする者の手によって・・・・」

グ「クロノ・・・・」

ク「けど・・・そんな心配もないかもしれませんね。僕の友達なら・・・きっとこの悲劇を止めてくれるはずです」

そうだ・・・仲間の為なら運命さえも捻じ曲げてしまう『彼』がいる限り、これ以上悲しみは広がらないだろう。

グ「・・・・キミはいい友達を持っているんだな」

ク「はい。友でもあり、目標でもあります」

グ「ならば私も、その友達を信じてみよう・・・アリア、デュランダルを彼に」

リア「と、父様!?」

リロ「そんな・・・・」

グ「もう、私達が持っていても役に立たんよ」

リア「・・・・わかりました」

そう言って、アリアが僕に一枚のカードを寄越した。

グ「氷結の杖デュランダル・・・どう使うかはキミ次第だ」

ク「提督・・・」

グ「私は・・・間違っていたのだろうか」

？「それを決める権利は誰にもないさ・・・」

ク「誰だ!?」

突然の第三者の声。バッと振り向いた僕の前には・・・

男「やあ、初めましてクロノ君」

ク「お前は・・・！」

グ「ゼノン・・・」

映像でしか見ていなかった男・・・ゼノンが立っていた。

ゼ「失った辛さは失った者にしかわからない・・・グレアム、キミが間違っていたかどうかはキミが決める事だ」

ク「て、提督！　この男と知り合いなんですか!?」

グ「彼は私の計画に手を貸してくれていたのだ」

ク「なっ!?」

ゼ「結局、大して役には立てなかったがね」

グ「私の方こそ、せっかくの協力を無駄にしてしまった」

ゼ「無駄でいいのさ。キミは復讐ではなく、託す事を選んだ。己の過去を振り切ったキミを、私は尊敬する」

そう言って提督に優しい表情を向けるゼノン。その表情に、僕は一瞬この男が敵だという事を忘れていた。

グ「・・・そうか、キミも」

ク「?」

キミも?　どういう意味だろう?

グ「行くのか？」

ゼ「お姫様に呼ばれていてな・・・・もう戻って来る事も無いだろう」

グ「そうか・・・無明君によろしく言っておいてくれ」

ゼ「わかった。では・・・行こうかクロノ君！」

ガシッ！

ゼノンが僕の右肩を掴む。

ク「い、行くって何処へ！？」

ゼ「キミも現場に行くのだろう？　どうせなら共に行こうではないか」

ク「ば、馬鹿を言うな！　僕とあなたは敵同士・・・！」

ゼ「ＨＡＨＡＨＡ！　細かい事を気にしてはいい男になれないぞ！」

ク「余計なお世話だ！　ちょっ！　引っ張るなぁぁぁぁぁぁ！！」

抵抗する暇も無く、僕は提督の部屋から引きずり出されてしまった・・・

第十五話　託されし力（後書き）

作「いやあ、久々にクロノが活躍すると思ったら、後半でゼノンに食われたな」

一「クロノ・・・」

作「無印じゃボコボコにされたり名台詞を奪われたりして散々だったから、今回は頑張らせようと思ったんだが・・・まあ、これがクロノだな」

一「お前、クロノに何か恨みがあるのか？」

作「別に」

一「じゃあ何で・・・」

作「面白いから」

一「・・・・・」

作「よし、贈り物報告会に移るぞ。今回は何故か無明関係の贈り物が多いから、また呼んで来たぞ」

無「はあ・・・またなの？」

一「まずは緋水様からだ。ゴジラとモスラ、そしてキングギドラを

頂いたぞ」

作「どうせ俺にぶつけるつもりだろ！　だがな、今回は裏ルートで入手したオキシジェン・デストロイヤーが・・・・！」

無「それって、もしかしてあっちに置いてあったヤツ？　邪魔だったから消しといたわよ」

作「ちょっ!?　俺の作戦が一瞬でパーに・・・・！」

一「・・・早速やってくれたな無明」

一「さて、作者が逃げ回っている内に次の贈り物を紹介するぞ」

無「助けなくていいの？」

一「いや、キミの所為だろう・・・月光閃火様から無明宛てに赤ロリドレスを頂いたぞ・・・凄い名前だな」

無「ふ～～ん・・・・中々のデザインね。気に入ったわ」

一「ああ、それと・・・・・」

ナデナデ

無「な、何？」

一「遠隔技法でキミの頭を撫でてるそうだ。しばらくジッとしてるんだな」

一「えっと、次は・・・」

清「こんにちは」

一「ああ、清浦刹那様、こんにちは」

大「俺もいるぞ！」

一「大和さんもいらっしゃい」

無「・・・・（コソコソ）」

一「？　どうして俺の後ろに隠れるんだ？」

無「べ、別に隠れてないわよ」

一「・・・ああ、前回作者が余計な事言ったから恥ずかしいんだな」

無「う、うるさい！　消すわよ！」

清「無明」

無「な、何よ？」

清「今回の贈り物です。受け取ってください」

無「これは・・・お姉様？」

清「私も愛用している刹姉のぬいぐるみです」

無「そ、そう・・・一応礼を言っておくわ」

清「それで、その・・・無明にお願いが」

無「お願い？」

清「・・・わ、私の膝の上に乗ってください！」

無「なっ！？　ふざけた事言わないで！　何で私があなたの膝の上に乗らなきゃいけないのよ！」

清「駄目ですか・・・・（ウルウル）」

無「う・・・」

一「無明、わざわざ来て下さったんだからそれくらいしてあげなよ」

無「・・・ああもう！　わかったわよ！」

ポフッ

無「ほ、ほらっ！　これでいいんでしょう！」

清「可愛い・・・」

無「ッ・・・・／／」

大「シャッターチャーンス！！」

パシャパシャ！

無「あ、あなた！　何勝手に撮ってるのよ！？」

大「いいじゃねえか。照れてる無明の顔ゲットだぜ！　ププッ、ウケる」

無「（プチン）・・・ねえ、あなたは何で来たの？」

大「俺か？　俺は天音さんに戦衣装を贈ろうと思って」

無「そう・・・じゃあ、呼んであげるわ」

天「・・・・・」

大「おお、天音さん！　これ、受け取ってくださ・・・」

無「・・・・殺れ」

ビュン！

大「ぬおぉぉぉぉ！？　槍が！　槍がぁぁぁぁぁ！！」

無「下らない事してんじゃないわよ・・・・ってあなた！　どさくさに紛れて撫でないでちょうだい！」

清「♪♪♪」

一「最後だな、二次元最高様から作者にこち亀全巻。俺宛てにオリハルコンとミスリルを頂いたぞ。・・・これで何作ろうか」

無「この漫画・・・最初の頃と今とじゃずいぶん画が違うわね」

一「そりゃあ、これだけ長く続けたら変わりもするだろ」

無「そうね・・・・この小説も、最初の頃とかなり変わってるものね」

一「・・・・それは言っては駄目だ無明」

第十六話　本当の気持ち（前書き）

一気に進めようと思ってます。

第十六話　本当の気持ち

フェイトＳＩＤＥ

フェ「アルフ、ユーノ、サポートお願い！」

アル「任せな！　何があろうとフェイトは守ってみせる！」

ユ「僕だって！」

三方向に散り、それぞれが闇の書に向かう。一成が心配だけど、なのはがいればきっと大丈夫。

フェ「私は絶対にはやてを助ける・・・大切な友達を！」

バルディッシュを構え、闇の書に斬りかかる。

フェ「やあぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

闇「ッ・・・・！」

ギィィィィィィン！！

フェ「えっ！？」

渾身の一撃を、闇の書は素手で受け止めていた。

ユ「さがってフェイト！」

アル「タイミングを合わせなよユーノ！」

ユ「キミこそ！」

離脱した瞬間、闇の書の四肢をバインドが拘束した。

ユ「よし！　うまくいった・・・」

闇「・・・砕け」

すぐさまバインドを破壊する闇の書・・・けれど、時間を稼ぐには充分だった。

フェ「撃ち抜け、轟雷・・・・サンダースマッシャー！！」

放たれた砲撃が一直線に闇の書に向かって行く。そして、直撃しよ

うとした正にその時・・・

闇「・・・甘い」

シールドを展開した闇の書は、難なく砲撃を受け止めた。

フェ「くっ・・・！」

何とか突破しようとさらに力を込めたけど、結局破る事は出来なかった。

ユ「な、なんて堅いシールドだ。あれじゃまるで、一成のバリアなみじゃないか！」

アル「確かにね・・・あれはなのはの砲撃でも破れないんじゃないかい？」

闇「刃を以て・・・血に染めよ」

詠唱と共に、闇の書の周りに紅い刃が現れた。

闇「穿て・・・ブラッディダガー」

アル「フェイト！」

ユ「間に合えぇ！！」

砲撃発射直後でスキのあった私を、アルフとユーノが障壁を展開させて守ってくれた。

フェ「あ、ありがとう二人とも・・・」

ユ「どういたしまして。それより、次はどう攻める？」

アル「接近戦は捌かれる・・・バインドは破られる・・・砲撃は防がれる・・・八方ふさがりとはこの事かねぇ・・・」

フェ「でも、諦めるわけにはいかない！」

ユ「もちろんさ！　破られるのなら・・・もっと強いバインドをかけてやる！」

アル「一対一で無理なら・・・アタシも一緒に殴ってやるよ！」

フェ「行くよ二人とも！」

アル・ユ「「おうっ！！」」

バルディッシュを構え直し、私は再び闇の書に飛びかかった・・・

フェイトＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＩＮ　ＳＩＤＥ

無「うふふ・・・さすがに予想外だったでしょ旅人さん？」

一「そ、そんな・・・どうして・・・・」

な「神奈さん達はそこにいるのに・・・」

現れたのは、神奈と天音と同じく、俺の大切な家族の一人・・・

刹「・・・・・」

一・な「「刹那　（さん）！！」」

刹那だった。

刹「・・・・・」

神奈達と同じく、刹那もまた無言で宙から俺達を見下ろしていた。

無「長かった・・・本当に長かったわ。お姉様が私の前から消えて、気の遠くなるような年月を過ごしてしまった。けれど、それも今日でお終い。今度こそ、私とお姉様が離れる事は無い。永遠に一緒なの」

一「・・・・」

無「私が何をしたのか気になってるようね？　いいわ、教えてあげる。といっても簡単な事だけれどね。その娘達の内に分けられていたお姉様の器と意志を取り出して結合させた・・・ね、簡単でしょう？」

一「馬鹿な！　彼女達はある意味同一存在なんだぞ！　それを無理矢理分けるような事をしたら・・・！」

無「引き裂かれるような痛みに襲われる・・・事実、取り出す時に二人はかなり痛がっていたけどね」

一「それを知っていながらキミは・・・！」

無「二人がどうなろうと関係ないもの。私はお姉様さえ戻って来てくれればそれで・・・」

な「そんな・・・どうして、どうしてそこまでするんですか！？」

無「話した所であなた達には理解出来ないわ。孤独と無縁に生きて来たあなた達に・・・私の気持ちなんて・・・」

な「そんなの、わかる訳ないじゃないですか！　どんな風に思っているか話さなきゃ・・・ちゃんと言葉にしなきゃ・・・伝わるはずないじゃないですか！！」

一「なのは・・・」

そうか、初めて会った時のこの娘も・・・

無「・・・黙りなさい」

一「ッ！？　危ないなのは！」

ギィィィィィィィィン！

一「ぐっ・・・！」

神「・・・・・」

天「・・・・・」

支配された二人の刃を、バリアと双剣で何とか防ぎきった。

無「もう話す事はないわ。神威、天翔・・・あなた達の手で主に引導を渡しなさい」

無明の指示を受け、神奈と天音が距離を取る為に下がる。

一「なのは、攻撃じゃなく避ける事に集中するんだ。あの二人の武器に非殺傷設定などありはしないからな」

な「う、うん！」

天「・・・・様」

その時、無表情だった天音の口元が僅かに動いた。

一「天音？」

神「一・・・成・・・・なの・・・は・・・・」

な「神奈さん！」

無「ふうん・・・自我を取り戻したってわけ？　まあ、念入りに施したお姉様と違って、あの二人の支配は適当だものね」

一「キミは刹那まで・・・！」

無「そうよ。今のお姉様には私以外視えていない」

な「そんなの・・・大切な人を支配するなんて、そんなのおかしい

です！」

無「大切な人だからこそ、自分だけを見て欲しいって思うんじゃない？」

な「それは・・・」

無「ほらっ、それよりその二人の言葉を聞いてあげれば？」

神「か、一成・・・」

天「なのは・・ちゃん・・・」

一「二人とも！　意識が戻ったんだな！？」

神「ああ・・・妾達が・・・しでかしてしまった事も・・・覚えておる・・・」

天「私達・・・何という事を・・・・」

な「二人は悪くないです！　無明さんが二人を操って・・・！」

神「じゃが・・・妾達がした事は・・・事実じゃ・・・・」

天「今も・・・動き出そうとする体を・・・必死に抑えているんです・・・・」

神「最早・・・自力で支配を抜け出す事は・・・叶わぬ・・・・」

な「そ、そんな・・・」

神「一成・・・妾達の最期の頼みを聞いてくれ」

天「お願いします一成様・・・私を、私達を・・・消滅させてください・・・・！」

神「妾達が・・・妾達いられる内に・・・早く・・・・・！」

一「ッ・・・！」

な「馬鹿な事言わないでください！」

天「主を手にかけようとする霊剣など・・・存在してはならないのです」

一「・・・・わかった」

な「一成君!?」

無「へえ・・・」

神「そうか・・・感謝するぞ一成・・・」

一「それが・・・二人の本当の望みならな」

天「え・・・・？」

一「二人が本気で消滅を願っているのなら、俺は躊躇いはしない。だが、もしそれが本意ではないとしたら・・・俺は怒るぞ」

天「わ、私達は本気です！　本気で消滅を・・・！」

一「それは『霊剣』としての望みだろう？　俺が聞いているのは『家族』としての望みだ」

神「家・・族・・・？」

一「『神威』と『天翔』に聞いていない・・・『神奈』と『天音』として答えろ・・・キミ達の本当の望みは何だ？」

神「妾達の・・・」

天「本当の望み・・・」

押し黙る二人。だが、数秒後・・・

天「・・・・たいです」

一「聞こえないぞ天音・・・もう一度言ってくれ」

天「私・・・一成様と一緒にいたいです！　私達を家族として扱ってくれる優しいあなたと・・・もっと一緒にいたいです！」

神「妾だって・・・妾だってそうじゃ！　これからもお主と共に在りたい！　お主と共に・・・生きたい！」

大粒の涙と共に、二人は思いの丈を俺にぶつける。

一「そうか・・・ならもう一度聞くぞ・・・・キミ達は俺に何を望んでいる？」

神「一成・・・妾達を・・・・・」

天「私達を・・・・・」

神・天「「助けて（くれ）（下さい）！！」」

一「任せろ！！！」

消滅させろと聞いた時、俺は尋常でない怒りを抱いていた。本当の事を言わなかった二人に。そして、そんな風に二人を追い詰めてしまった自分自身に。

無「カッコいいわね。まるで物語の主人公みたい。けど・・・私の支配から逃れる事は不可能・・・」

一「それがどうした」

無「え・・・？」

一「二人は必ず助ける・・・不可能だろうと何だろうとな！！！」

大切な家族を取り戻す為、俺は双剣を構えた・・・

第十六話　本当の気持ち（後書き）

作「名シーンｋｔｋｒ！」

一「何だか久しぶりにまともな発言した気がするな」

作「最近裏方に回ったりする事が多かったからな、満足したか？」

一「満足って・・・」

作「わかってるよ。神奈達を助けて初めて満足って事だろ？」

一「ああ、その通りだ」

一「さて、じゃあ今回の贈り物報告会に移るか」

作「今回も無明宛ての贈り物があったんだが・・・あいにく彼女は欠席だ」

一「何でだ？」

作「・・・前回イジリ過ぎて拗ねた」

一「なるほど」

作「というわけで、今回頂いた贈り物は後で私が彼女の所に送っておきます。その代わりといっては何ですが、今回はクロノ君を呼ん

でみました」

ク「ど、何処だここは？　僕は確か、ゼノンと一緒に・・・」

作「やあクロノ」

ク「作者？　という事は・・・ここは後書きか？」

作「その通り。今回はお前宛ての贈り物もあるからな。勝手だが呼ばせてもらった」

一「月光閃火様だな。特製のフルーツキャンディーケーキだそうだ」

ク「あ、ありがたい。色々あり過ぎて疲れてたんだ」

一「疲れた時は甘い物が一番だからな。・・・お前は手を出すなよ」

作「も、もちろんです！」

ク「？」

一「次は清浦刹那様からだ。無明宛てにアップルパイを贈って頂いたぞ」

ク「何気に人気があるんだな彼女」

作「よし、これは後で俺が・・・」

一「お前には任せん。これは後で俺が届けておく」

ク「どうしたんだ一成？」

一「実はな・・・・」

ク「なるほど・・・最低だなキミは」

作「ぐはっ！　視線が痛い！！」

一「次は緋水様からだな・・・」

？「初めまして」

作「あ、あなたは・・・緋水様の所の御門さんじゃないですか」

一「新しい人だな」

ク「そうなのかい？」

御「贈り物を届けに来ました。ガンダム試作機シリーズです」

一「俺は３号機が好きだな」

ク「僕は１号機かな」

作「俺は２号機！・・・って、わざわざこれを届ける為にいらして

くれたんですか？」

御「いえ、実は無明君に話があったんですが・・・」

作「すみません、アイツ今回は欠席でして」

御「そうですか・・・」

一「もしよろしければ、会いに行きますか？」

御「いいんですか？　お願いします」

一「わかりました。じゃあ作者、クロノ、あとは任せた」

シュン！

ク「ぼ、僕にどうしろと・・・」

作「しょうがないな。クロノ、せっかくだから一緒に『うどんにかける時に七味がドバっと出る確率』の計算でもしようぜ」

ク「・・・キミは本当にどうでもいい事に熱心だな」

第十七話　折れた剣とご都合主義（前書き）

ここまで集中して更新するのも久しぶりです。

第十七話　折れた剣とご都合主義

一「まずは二人の動きを封じる！　行くぞなのは！」

な「うん！」

無「さあ、行きなさい二人とも」

神・天「「くっ・・・！」」

な「ディバインシューター！」

なのはの放った五発の光球が、それぞれの軌道を描きながら二人に迫る。だが、弾速の遅いそれを、神奈達はバリアを展開させて防いだ。

一「クロス・ディバイダァァァァーーー！！」

しかし、元から防がれる事はわかっていた。俺は死角から天音の槍に向かって双剣を振り下ろした。

一「（武器さえ取り上げれば・・・！）」

神「マナよ、無形の力となれ。疾く、彼の者どもをなぎ倒せ！」

一「ッ！？　なのは！　すぐにそこから飛び退くんだ！！」

な「え・・・？」

神「イグニッション！」

なのはの足元に紅い魔法陣が展開し、そこから激しい炎の波が発生した。

な「きゃあぁぁぁぁぁぁ！！」

一「なのはぁ！！」

天「マナよ、我が求めに応じよ。雷となりて、敵を打て！」

一「しまっ・・・！」

天「ライトニングブラスト！」

一「ぐあぁぁぁぁぁぁ！！」

激しい雷が直撃し、俺は黒煙を吹き出しながら吹き飛ばされた。

な「一成君！」

一「な、なのは・・・無事だったか」

バリアジャケットが少し焦げ付いているが、それ以外に目立った所は見受けられない。

な「私の事より一成君は大丈夫なの！？」

一「これくらいなら大丈夫だ。しかし・・・俺とした事が、魔法の事をすっかり忘れていた」

自分が使えなくなっているからといって、なんとも間抜けな事だ。しかも、その所為でなのはを危険に晒してしまった。

無「クスクス・・・お馬鹿さん」

一「む・・・」

正にその通りだが、こうハッキリ言われると気分が悪いな。

無「そんな事で二人を助けだせるのかしら？」

一「なんなら、直接キミを狙ってやろうか？」

無「別に構わないけど、その瞬間二人の命はないわよ？　私に何かあった時、二人には自決するよう命令してるから」

やはりな、妙に落ち着いていた理由はそれか。それに、例えその理由がなくても、今の俺が無明に勝てるわけがない。

一「言ってみただけだ。それより、刹那は戦わせないのか？　彼女が加わればその時点で俺達の負けだが・・・」

無「お姉様のお手を煩わせるわけにはいかないもの」

一「・・・そうか」

体の痺れが抜けて来た。これでまた戦える。

無「もう時間稼ぎはいいの？」

感づかれていたか。にも関わらず許すとは・・・どこまでもこちらを侮っているようだな。

な「時間稼ぎって・・・やっぱり一成君、体が・・・・」

一「大丈夫。痺れも取れたしダメージも軽い」

以前酔っぱらった天音にもっと強力なモノを打たれた記憶がある。

あの時に比べれば先程の威力など大した事はない。

一「なのは、スターライトブレイカーは撃てるか？」

な「・・・難しいと思う。魔力収束中に攻撃されちゃうかもしれないし」

一「ならディバインバスターは？」

な「それなら大丈夫。でも、当てられるかどうかはわからない・・・」

一「そうか。なら・・・・」

俺は思いついた作戦をなのはに伝えた。

な「ええ！？　そ、そんなの出来ないよ！」

一「頼む。あのバリアを突破するには俺の剣だけじゃ不可能だ。だが、キミの魔法と合わせればあるいは・・・」

な「・・・わかったよ一成君。私、やってみる！」

一「頼んだぞ」

なのはと共に上空へと上がり、そこからさらになのはが高度をあげ

る。

無「何をするつもり？」

なのは、俺、そして神奈と天音が斜め一直線に並ぶ。それを確認し、俺は双剣を水平に構えた。

一「（頼むぞなのは・・・）オーバードライブ！！」

ハイロゥを羽ばたかせ、俺は二人に向かって突撃した。

無「学習しないわね、そんな技じゃあのバリアは・・・」

一「撃て！　なのは！！」

な「ディバイィィィン！　バスタァァァァーーー！！」

シューティングモードのレイジングハートから放たれた桜色の砲撃が、一直線に俺の背後へと迫る。

無「あはははは！　とんだお笑い草ね！　こんな時に味方への誤射だなんて！」

なのはが誤射したのだと思い、高笑いする無明。だが・・・これこそが狙いだった。

一「オーラフォトンバリア！！」

背面にバリアを展開する。その瞬間、凄まじい衝撃が俺を襲った。

一「ぐうっ・・・！！」

ディバインバスターをバリアで受け止め、推進力へと変える・・・我ながら滅茶苦茶な方法だが、確実に命中させ、なおかつバリアを突破する威力を得る為にはこれしかない。

一「（これならいける！！）」

狙い通り、神奈達との距離が目に見えて縮まっていく。おそらく、完全なハイロゥでもここまでのスピードは得られないだろう。

無「ッ！？　二人とも！　急いでバリアを・・・！」

一「ディバインッッドラァァァァァイブ！！」

即興でつけた技名を叫びつつ、バリアに向かって剣を突き立てる。

ギィィィィィィィィン！！！！

神・天「「くうっ・・・・・・！！」」

少しずつ・・・少しずつ・・・剣先がバリアに食い込んでいく。

な「「えぇぇぇぇぇーーーーいっ！！！」」

一「「はぁぁぁぁぁーーーーっ！！！」」

さらに強まる砲撃。それに負けじと、突き立てる腕に限界まで力を込める。

バキィィィィィィィィン！！！！

そして、限界を迎えたバリアが、甲高い音と共に砕け散った・・・

無「そんな・・・こんな滅茶苦茶な方法で・・・いや、それよりも・・・即興であそこまで完璧にタイミングが合うはずが・・・・」

一「言っただろう・・・不可能だろうと何だろうと、二人は必ず助けるとな・・・・」

無「くっ・・・！」

一「それにな、俺となのはならあれくらい当然だ。そうだろ、なのは？」

な「にゃはは・・・うん、そうだね。私と一成君なら・・・きっと何だって出来ちゃうよ」

俺の隣に降り立ったなのはが、照れくさそうに微笑んだ。

無「・・・・正直、あなた達がここまで健闘するとは思ってなかったわ。その頑張りに免じて、二人を助ける方法を教えてあげる」

一「何だと？」

無「方法は一つ・・・あなたの剣で二人を斬る事」

な「そ、そんな事したら二人が・・・！！」

一「・・・いや、ありえない話じゃない」

な「え？」

無「その剣がその娘達の器なんでしょう？　強制的に器に戻せば助

けられるかもね」

一「だが、その保証もない」

無「それはそうよ。誰も試した事がないんですもの」

一「そもそも、キミの言葉を鵜呑みにするほど俺は馬鹿じゃない」

無「なら他に方法はあるの？　さっきは勇ましい事言ってたけど、本当は何も思いついてないんでしょう？」

一「・・・・・」

無「図星ね」

悔しいが何も返せない。二人を無力化させるまでは考えていたが、その先についてはまったくだった。

神「やってくれ一成・・・」

一「神奈、しかし・・・」

天「お願いします・・・例え、その結果どうなろうとも・・・一成様の手にかかれるなら私は構いません・・・・」

一「天音・・・」

無「ほらほら、早くしないと二人が動き出すわよ？」

どうする・・・・どうすればいい・・・

一「・・・・・」

悩みに悩んだ末・・・・俺は二人に剣を向けた。

神「そう・・・それでいいのじゃ・・・・・」

天「一成様・・・いらしてください・・・・・」

一「・・・・デュアル・・・エッジ・・・・・」

そして・・・俺は二人に向かって剣を振り下ろし・・・

≪一成・・・≫

≪一成様・・・≫

一「ッ・・・・・！」

ザシュ・・・・・・！！

な「そ、そんな・・・」

神・天「「あ・・ああ・・・・」」

無「・・・・だから言ったのに」

一「が・・・は・・・・・・」

剣を落とした俺の胸に、長刀と槍が深々と突き刺さっていた。

な「一成君ーーーーーー!!!」

神「一成！　一成ぃぃぃぃ!!」

天「どうして！　どうして止めたのですか!?」

一「はあっ・・はあっ・・・振り・・下ろす・・・・ぐっ・・・・直前・・・二人の笑顔が・・・ゴホッ・・・浮かんだんだ・・・」

神・天「「え・・・」」

一「その時・・・ぐっ・・・思ったんだ・・・・ガハッ・・・・どういう理由があろうと・・・二人を斬る事なんて・・・はあっ・・・・出来ないって・・・」

神「ッ！　お主という男は・・・！」

天「馬鹿っ！　一成様の馬鹿っ！！」

一「はは・・・ゴメ・・ン・・・・」

その言葉を最後に、俺は意識を失った・・・・

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

なのはＳＩＤＥ

無「あらら、気絶しちゃったのかしら？」

な「一成君！　しっかりして一成君！」

崩れ落ちる一成君に懸命に声をかけたけど、一成君はピクリとも動かなかった。

無「せめて痛みを感じる事なく逝かせてあげるのが慈悲でしょうね・・・やりなさいあなた達」

神「止めろ！　もう止めてくれ！」

天「これ以上、私達の手で一成様を傷付けないでください！！」

涙を流し、必死にお願いする神奈さんと天音さん。けれど、二人の願いとは裏腹に、命令を受けた二人は詠唱を始めてしまった。

な「止めてぇぇぇぇぇぇ！！！」

やがて・・・詠唱を済ませた二人が、一成君に向かって魔法を放とうとした正にその時・・・

？「そこまでだ」

な「え・・・？」

突然の声と共に、二人の魔法は放たれる事なく消え去った。

無「誰！？」

空に向かって声を荒げる無明さん。それになんらって、見上げた私の目に映ったのは・・・

な「あ、あなたは！」

龍「オッス、なのは！」

＜ケガはない？＞

私に向かって笑顔で手を振っている龍那さん（雲母さん）だった。

な「龍那さん！　雲母さん！　一成君が・・・！」

龍「ヒロインは遅れて登場ってのが基本だが・・・ちっとばかし遅すぎたみたいだな」

＜・・・大丈夫。出血は激しいけど、命に別状はないみたい。もちろん、今の所だけど・・・＞

龍「わかってるよ。なのは、一成はオレ達に任せて、お前はフェイトを助けてやりな」

な「で、でも・・・」

＜フェイトちゃん達だって、あなたの大切なお友達なんでしょ？＞

な「・・・わかりました。一成君をお願いします」

龍「任せときな！」

龍那さんの力強い言葉に押され、私はフェイトちゃん達の元へ向か

う事にした・・・

なのはＳＩＤＥ　ＯＵＴ

龍那（雲母）ＳＩＤＥ

女「いきなり現れてなんなのあなた？」

龍「オレの名前は仙道　龍那」

＜お、同じく、仙道　雲母です＞

女「私は無明。それにしても・・・一つの体に二つの魂なんて・・・面白いわね」

龍「そいつはどうも」

無「それで、その龍那さんが何の用？」

龍「そこで倒れてる男には借りがあってな、助太刀に来たってわけだ」

無「そう・・・敵ってわけね」

そう言うや否や、無明は手を掲げ詠唱を始めた。

無「消えなさい・・・オーラフォトンノヴァ」

放たれる光球。オレはすぐさま虚空からバットを取り出し・・・

龍「あらよっと！」

カッキィィィィィィン！！

天空に向かって思いっきり打ち返した。打ち返された光球は数秒後、凄まじい光で夜空を照らした。

龍「た～まや～～～！　ってか？」

＜ちょ、ちょっと龍那！　何するの！？＞

龍「いいじゃねえか。ちゃんとなのは達とは反対方向に向かって打ち返したんだから」

＜そういう問題じゃないよぉ！＞

無「な・・・あ・・・・え・・・・？」

無明は口をあんぐりと開けて爆発の中心部を見つめていた。

龍「あはは、なんて顔してんだよお前」

無「・・・はっ！　あ、あなた！　今何をしたの!?」

龍「バットで打ち返した」

無「バッ!?　嘘言わないで！　私の魔法がバットごときで・・・！　というか、どこから出したのよ!?」

龍「出来るんだよ。オレの・・・オレ達の力ならな」

バットを突き付け、オレは高らかに宣言した。

龍「泣かされる準備は出来てるか？　オレは・・・一成みたいに甘くねえぞ」

第十七話　折れた剣とご都合主義（後書き）

作「さて、気絶してしまった一成に代わって、今回はこの二人に来てもらいました」

龍「久しぶりだな作者」

雲「こ、こんにちは・・・」

作「はいこんにちは。そうだな、ここ最近ほとんど出番なかったしな。ここに来てようやく日の目を浴びたってわけか」

龍「スカッとしたぜ～～。ずっと出番なくてストレス溜まってたからな」

雲「あれはやり過ぎだよ・・・」

作「ＨＡＨＡＨＡ！　何を言ってるんだ雲母？　キミ達は一成を超えるチートキャラだぞ。あんなもの序の口に過ぎん」

雲「え・・・・」

龍「しっかし・・・主人公ぶっ倒れたけど大丈夫なのか？」

作「心配いらない。あの程度でくたばる程やわなキャラ設定してないからな」

作「さて、今回は二人に贈り物を紹介してもらおうかな」

龍「しかたねえな・・・まずは緋水って人からだ。イナズマイレブンの技の書をもらったぞ」

作「小学生に大人気のサッカーゲームだな」

雲「あ、あれってサッカーなのかな?」

作「細かい事は気にするな!!」

雲「ひゃうっ!?　い、いきなり大きな声出さないでください・・・」

雲「次は清浦刹那さんだね・・・あっ・・・」

作「どうした?」

雲「一成さん宛てにりんご飴を頂いたんですけど・・・」

龍「本人がいねえから渡しようがないな」

作「じゃあ、俺が渡しといてやるよ」

龍「そうか?　じゃあ頼む」

雲「作者さんなら大丈夫だね」

作「・・・・ククッ」

龍「二次元最高って人からは、一成に作者捕獲用のバインドと、作者にジオング（頭のみ）をもらったぞ」

作「やらせはせん！　やらせはせんぞぉ！！」

雲「・・・・それ、キャラが違うと思うんですけど」

作「ッ！」

龍「とりあえず、バインドで縛っとくか」

作「この流れで！？　ちょ、止め・・・アッーーー！！」

第十八話　少女達の想い（前書き）

原作の流れを消化します・・・と言いつつ、なのはの蒐集を忘れた所為でスターライトブレイカーが撃てない・・・・

デバイスの口調も安定しないし・・・どないしよう・・・

第十八話　少女達の想い

なのはＳＩＤＥ

な「フェイトちゃん！」

フェ「な、なのは！？　どうしてこっちに！？」

な「龍那さんが来てくれ・・・」

カッキィィィィィィン！！

な・フェ・ユ・アル「「「「ッ！？」」」」

甲高い音が聞こえたと思った次の瞬間、眩しい光が夜の空を照らした。

闇「・・・何だ？」

ユ「い、今の・・・一成のあの魔法に似てると思ったのは僕だけかな・・・」

フェ「なのは・・・本当に何があったの？」

フェイトちゃん達に事情を伝える・・・・一成君が倒れた事は秘密にして。

な「（これでいいよね・・・フェイトちゃん絶対助けに行こうとするはずだし）」

アル「とにかく、なのはも来てくれたし、これで仕切り直しだね」

ユ「うん。なのはの砲撃とフェイトのスピードがあればやれる！」

ユーノ君の言葉に頷き、闇の書さんと向きあったその時・・・

≪Ｍａｓｔｅｒ．Ｔｈｅｒｅ ａｒｅ ｎｏｎｃｏｍｂａｔａｎｔｓ ｏｎ ｔｈｅ ｌｅｆｔ ａｔ ｔｈｒｅｅ ｈｕｎｄｒｅｄ ｙａｒｄｓ．（マスター、左方向３００ヤードに一般人がいます）≫

な「え！？」

レイジングハートが一般人の存在を私達に伝えた。

フェ「ど、どうして！？」

ユ「多分、結界の発動時に巻き込まれたんだと思う」

アル「のん気に言ってる場合かい！　さっさと助けに行くよ！」

な「は、はい！」

闇「逃がさない・・・」

ユ「なんとか僕が抑えておく！　なのは達は一般人の保護を！」

アル「ならアタシも！　そっちは頼んだよフェイト！」

フェ「うん！　行こうなのは！」

闇の書さんを二人に任せ、私とフェイトちゃんは巻き込まれた人の元へ急いだ・・・

なのはＳＩＤＥ　ＯＵＴ

アリサ・すずかＳＩＤＥ

す「誰もいない・・・急に人がいなくなっちゃった・・・・」

人影の無い街・・・その中を、アリサとすずかは彷徨っていた。

ア「辺りは暗くなるし、変な爆発は起こるし・・・一体何が起きてるのよ・・・・」

す「アリシアちゃん・・・大丈夫かな？」

ア「あの後プレシアさんが迎えに来てくれたし、きっと大丈夫よ」

す「うん・・・」

ア「それより、今は自分達の事心配しなきゃ。とりあえず、さっき爆発したのと反対に逃げるわよ」

す「そうだね」

互いに手を握り、二人は駆け出した・・・

アリサ・すずかＳＩＤＥ　ＯＵＴ

フェイトＳＩＤＥ

な「見つけたよフェイトちゃん！」

捜索する事数分、なのはが二つの人影を発見した。

な「そこの人すみません！　危ないですからじっとしてて下さい！！」

なのはの注意に、二人はゆっくりとこちらを振り向いた。

？「え？　今の声って・・・」

？「もしかして・・・」

土煙が晴れ、二人の顔が露わになった時・・・私達は固まってしまった。だって、そこにいたのは・・・

ア「な・・のは・・・・？」

す「フェイトちゃん・・・なの？」

な「アリサちゃん・・・すずかちゃん・・・」

私となのはにとって、とても大切な友達である、アリサとすずかだったのだから・・・

≪なのはちゃん！　フェイトちゃん！　聞こえる！？≫

な「エ、エイミィさん・・・？」

≪通信妨害がやっと解除されたの。状況は理解してるわ。すぐにその二人を安全な場所に送るから≫

二人の足元に、転送の為の魔法陣が展開された。

ア「アンタ達・・・一体・・・・・」

す「何が・・・何が起こってるの！？」

フェ「ゴメンね・・・後で必ず説明するから」

そして、次の瞬間には二人の姿は消えていた。

な「にゃ、にゃはは・・・見られちゃったね」

渇いた笑いを浮かべるなのは・・・落ち込んでいるのは明らかだった。今までずっと秘密にしていた事が知られてしまったのだから当然だと思うけど・・・

≪二人とも！　そっちに向かってるクロノ君から連絡が入ったわ！
闇の書の主・・・ううん！　はやてちゃんに停止を呼びかけてって！≫

な「わかりました！」

フェ「なのは・・・」

な「落ち込んでるヒマなんてないもの。はやてちゃんを助けなくっちゃ！」

・・・そうだね、なのははいつだってそうだよね。だったら私も・・・！

フェ「うん！　必ずはやてを助けよう！」

な「もっちろん！！」

私達は、全速力で闇の書の元へ戻った。

ユ「なのは！　一般人は！？」

な「大丈夫！　エイミィさんが安全な場所に転送してくれたから！」

アル「そうかい。そいつは何よりだね」

フェ「クロノもこっちに向かってるって」

闇「何人来ようが同じ事・・・私は全てを破壊する」

な「聞いてはやてちゃん！　ヴィータちゃん達を傷付けたのは私達じゃないの！」

フェ「あれは仮面の男が変身した姿だったの！　私達とシグナム達は・・・！」

私となのはは、闇の書の中にいるはやてに向かって必死に呼びかけた。あの光景は、闇の書の発動を狙った者の手によって作られたものだと。

けれど・・・

闇「我が主は・・・自分の愛する者達を奪ったこの世界が悪い夢であって欲しいと願った・・・故に、我はただ主のその願いを叶えるのみ・・・主には穏やかな夢の中で永遠の眠りを・・・そして、愛する騎士達を奪った者達には・・・永久の闇を・・・！！」

な「そんなの間違ってる！　はやてちゃんの願いは・・・・そんな悲しいものじゃない！！」

フェ「シグナム達と一緒に楽しく暮らす事・・・それが本当の願い

のはずだよ！！」

闇「そんなはず・・・」

な「だったら・・・だったら！　どうして泣いているんですか！」

闇「何・・・？」

なのはの言う通り、闇の書は静かに・・・けど、確かに泣いていた。
涙が頬を伝い、ゆっくりと落ちていく。

な「その涙は・・・はやてちゃんの本当の願いを叶えられない事への悔しさじゃないんですか！」

闇「私は・・・ただの道具だ・・・涙など・・・・」

フェ「ただの道具に涙は流せない！　はやて達の事を想って涙を流すあなたは道具なんかじゃない！　心が・・・感情がないと・・・泣く事なんて出来ない！！」

闇「これは・・・主の涙だ。私のものでは・・・ない」

な「わからずや！」

その時、世界が大きく震え、街の各所から火柱が上り始めた。

闇「・・・崩壊が始まった・・・私もじきに意識を無くす・・・そうなればすぐに暴走が始まるだろう・・・・だが、その前に・・・主の望みは叶えたい・・・・」

闇の書の周りに、再び紅い刃が姿を現した。

フェ「気をつけてなのは！」

闇「今度こそ・・・闇に沈め」

迫り来る刃。けれど、一度見た技である以上、対処だって思いついている。私は冷静に回避し、なのははプロテクションでしっかり防いでいた。

フェ「このぉっ！！」

私はバルディッシュを振りかぶり、闇の書に向かって突っ込んだ。

闇「お前も・・・我が内で眠るがいい・・・」

フェ「え・・・？」

私の一撃を片手で受け止めた闇の書が、もう一方の手を私に向かっ

て伸ばす。その手が、私の体に触れようとした瞬間・・・

ギィィィィィィィィィン！！

闇「ッ！　何だと・・・！」

フェ「これは・・・」

眼前に現れたバリアが、闇の書の手を受け止めた。アルフが守ってくれたのだと思ったけど、アルフのバリアとは色も形も違っていた。

フェ「（ユーノでもなのはでもない・・・一体誰が・・・）」

キラッ！

首飾りが光る。それは・・・なのはと一成と友達になったあの日、彼が私にプレゼントしてくれたあの首飾りだった。

フェ「あなたが・・・守ってくれたの？」

もちろん答える声はない。けど・・・私はほぼ確信していた。一成が・・・私を守ってくれたんだと・・・

闇「くっ・・・・！」

予想外の展開に、闇の書が私から大きく距離をとった。

な「フェイトちゃん！」

アル「無茶しないでおくれよフェイト！」

フェ「ご、ゴメンね・・・」

ユ「でも、よく無事だったね。あのバリアは一体・・・」

フェ「この首飾りが私を守ってくれたんだ」

な「それは・・・一成君の・・・」

フェ「うん」

アル「はは・・・どこまでも抜け目がないねアイツは」

ユ「言われてみると、確かに一成のバリアに似てたね」

闇「愚かな・・・我が内で眠り、終わりなき永遠の夢に身を任せればよいものを・・・」

な「永遠なんてないよ・・・みんな変わっていく・・・」

フェ「変わっていかなきゃいけないんだ・・・私達も・・・あなたも！！」

私だって変われたんだ。はやてだって・・・闇の書だって絶対変われる！

フェイトＳＩＤＥ　ＯＵＴ

はやてＳＩＤＥ

は「ここは・・・何処なんやろ」

確か・・・どっかのビルの屋上でザフィーラが倒れとって、それから・・・

？「主・・・・」

は「え？」

首を傾げる私の前に、銀色の髪に紅い眼をした女の人が立っていた。

は「（一成君の髪色に似とるなぁ・・・）」

？「主・・・どうかお休み下さい」

は「主って・・・私の事？」

？「はい・・・我が主、貴女の望みは全て私が叶えてみせます。ですから、どうかお休みになって下さい。心穏やかに夢を見てください」

は「ん・・・・」

女の人の優しい声を聞き、私は急に眠たくなってしまった・・・

はやてＳＩＤＥ　ＯＵＴ

なのはＳＩＤＥ

な「ディバインッバスターーー！！」

フェ「アークセイバー！！」

ユ「チェーンバインド！！」

闇「ブラッディダガー・・・！」

アル「おっと！　やらせはしないよ！！」

私が撃ち、フェイトちゃんが斬りかかり、ユーノ君がバインドをかけ、闇の書さんの攻撃をアルフさんが防ぐ・・・そんな流れがさっきからずっと続いていた。

な「はあっ・・・はあっ・・・」

カートリッジも三つ使い果たし、体力も限界に近付いていた。こんなに長く戦うのは初めてだった。フェイトちゃん達も同じ様に肩で息をしている。

ユ「被害が出ないように、海上に場を移したけど・・・」

≪安心して、市街地の火災には局員が向かっているわ≫

リンディさんの通信にホッとする。これで心配事が一つ減った。

な「なら心配はいらないね！　行くよレイジングハート！！」

≪Ｙｅｓ．ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ．≫

フェ「私達も頑張ろうバルディッシュ！！」

≪Ｙｅｓ．ｓｉｒ．≫

私とフェイトちゃんのかけ声に、それぞれ応えるレイジングハートとバルディッシュ。カートリッジを取り出し、新しい物と交換する。

な「フェイトちゃん・・・カートリッジの残りは？」

フェ「私は十二発・・・」

な「私は今交換したから十八発・・・スターライトブレイカー・・・撃てると思う？」

≪Ｉ　ｈａｖｅ　ａ　ｍｅｔｈｏｄ．（手段はあります）≫

な「え・・・？」

≪Ｃａｌｌ　ｍｅ　Ｅｘｃｅｌｉｏｎ　ｍｏｄｅ．≫

な「だ、駄目だよ！　あれは本体の補強が済むまで使っちゃいけないって！　私がコントロールに失敗したら・・・レイジングハートが壊れちゃうんだよ！」

レイジングハートが言ったのは、フルドライブ状態であるエクセリオンモードの事だった。けど、今のまま使えばレイジングハート自身が壊れる可能性があるので、エイミィさんに止められていた。

≪Ｃａｌｌ　ｍｅ．ｃａｌｌ　ｍｅ，ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ．≫

な「レイジングハート・・・」

≪Ｓｉｒ，ｐｌｅａｓｅ　ｃａｌｌ　ｍｅ　Ｚａｍｂａｅｒ　ｆｏｒｍ．≫

フェ「バルディッシュ！？」

バルディッシュまでもが、フェイトちゃんにフルドライブを使うように言って来た。

ユ「デバイスが・・・自壊の危険を無視して進言するなんて・・・・」

アル「こいつらなりに・・・一生懸命主に応えようとしてるんだね・・・」

な「そうなの・・・レイジングハート？　私の為に・・・力を貸してくれるの？」

≪Ｃａｌｌ　ｍｅ．ｃａｌｌ　ｍｅ．≫

フェ「バルディッシュ・・・あなたも？」

≪Ｃａｌｌ　ｍｅ．ｓｉｒ．≫

な「・・・わかったよレイジングハート。私・・・必ず扱いきってみせるから！！」

≪Ｙｅｓ．ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ！≫

フェ「私もやるよバルディッシュ・・・覚悟は出来た！！」

≪Ｙｅｓ．ｓｉｒ！≫

闇の書さんの背後に見える海鳴市からは、今も火柱が上がっている。

もう、迷っている時間もない。

闇「崩壊は止められない・・・お前達も眠るがいい・・・」

な「いつかは眠るよ・・・」

フェ「けど・・・それは今じゃない」

な「今は、はやてちゃんを助ける。そして・・・」

な・フェ「「あなたも!!」」

レイジングハートを掲げ、私は大きく叫んだ。

な「レイジングハート！　エクセリオンモード!!」

フェ「バルディッシュ！　ザンバーフォーム!!」

な・フェ「「ドライブ!!」」

≪≪Ｉｇｎｉｔｉｏｎ.≫≫

カートリッジをロードした瞬間、レイジングハートは大きく形を変えていった。長さが増し、杖の先が槍の様な形へと姿を変える。

バルディッシュの方も、斧の部分が二つに分かれ、そこから金色の刃が姿を現した。

な「繰り返される悲しみも・・・」

フェ「悪い夢も・・・きっと終わらせられる」

な「私達が、終わらせてみせる!!」

なのはＳＩＤＥ　ＯＵＴ

龍那（雲母）ＳＩＤＥ

龍「・・・あんな恥ずかしいセリフよく言えるな」

聴こえて来るなのはとフェイトの台詞にこっちが恥ずかしくなって来る。

＜茶化さないの！　なのはちゃん達は真剣に思ってるんだよ！＞

龍「茶化してねえよ。オレだってああいうノリは嫌いじゃないしな」

無「さっきから何をブツブツ言ってるのよ？」

龍「気にするな。お前には関係ねえよ」

天「り、龍那・・・さん？」

龍「よお天翔・・じゃなくて天音。久しぶりの再会がまさかこんな形とはなぁ」

神「な、なぜお主がこの世界に・・・？」

龍「久しぶりにお前らの顔が見たくなってな。変な爺さんに跳ばしてもらったんだ」

天「変な爺さん・・・もしかして、駄神の事ですか？」

龍「駄神？　あの爺さん神様だったのか？」

無「なに仲良く会話してるのよあなた達！」

龍「うるせえな。別にいいだろ」

無「どこまでも無礼な女ね・・・神威！　やりなさい！」

神「ッ！　逃げろ龍那！　今の妾達は・・・」

龍「逃げる？　はっ・・・冗談言うなよ」

ピタッ！

無「えっ！？」

龍「お前ら相手に・・・逃げるなんて選択肢は、はなから持ってねえんだよ！」

オレの目の前で、神奈の長刀がピタリと止まる。まるで、見えない何かに防がれたように。そのままカウンターで神奈の腹を殴る。

神「がはっ！？」

龍「ちょいと乱暴だが・・・大人しくしてなよ」

天「龍那さん！　避けてください！」

龍「はいよ！」

影から迫る天音を、背負い投げの要領で思いっきりぶん投げる。受け身も取るヒマもなく、天音は地面に叩きつけられた。

天「うあっ！？」

龍「殴る～殴る～オレ～た～ち～♪　倒れる二人をそのま～ま～に

～♪」

それを一瞥し、オレはバットを構えて無明に跳びかかった。

龍「おらぁぁぁぁぁぁ！！」

ガツン！！

無「きゃあぁぁぁぁぁぁ！！」

クリーンヒットしたかと思ったが、無明の持っていた変な斧に防がれた。

無「私に器を使わせるなんて・・・！」

龍「格好に似合わず、ゴツイ武器持ってんなぁ」

無「う、うるさい！　余計なお世話よ！」

龍「オレもバットじゃなくて、ドリルくらい出せばよかったな」

＜な、何でドリル？＞

龍「ドリルは男の浪漫だろ？」

＜あなた女の子でしょ・・・＞

無「わからない・・・あなたのその非常識な力は一体・・・」

龍「例え相手が何人いようが・・・例えどんな力を使おうが・・・
オレ達はそれを『乗り越える』」

＜例えどんな事をされても・・・例え何かに巻き込まれても・・・
私達はそれを『乗り越える』＞

龍「それがオレ達の・・・」

＜それが私達の・・・＞

龍・雲「「『越える者』としての力　（だ）（です）！！」」

無「越える・・・者・・・」

龍「お前が百の力を振るうなら、オレ達は千の力で迎え撃つ。お前
が千の魔法を使うなら、オレ達は万の魔法で叩き潰す」

＜あなたがどんなに強くても・・・私達は乗り越えます！＞

無「な、何よそれ・・・」

龍「だから最初に言ったじゃねえか・・・泣かされる準備は出来て
るか・・・ってな」

無「ッ・・・！」

オレはバットを構え直した。

龍「・・・これでもはらわた煮えくり返ってんだぜ」

＜一成さん達を傷付けたあなたを、私達は絶対に許しません！！＞

怒りを力に変え、オレは再び無明に向かって跳びかかった・・・

第十八話　少女達の想い（後書き）

作「はいどうも。今回はゲストになのはさんをお呼びしました」

な「よろしくお願いします」

作「いやあ、カッコよかったよ。主人公みたいなセリフだったね」

な「ど、どうも・・・ってあれ？　原作じゃ私が主人公・・・」

作「いや、言ってみただけだからスルーしてもらえると助かるんだが・・・」

な「あ、すみません・・・」

作「・・・・・」

な「？　どうしたんですか？」

作「いつもなら一成達から容赦無い突っ込みが入るんだが・・・やっぱり原作キャラは優しいねぇ」

な「そうなんですか？　じゃあ、私も何か言った方がいいのかな？」

作「おっ、面白いな。言ってみなよ」

な「えっと・・・んっと・・・・作者さん」

作「はい？」

な「こんな駄文に力入れないで、もっと別の事を頑張った方がいいと思うの・・・」

作「たわばっ！？」

な「ど、どうしたんですか！？　私、変な事言っちゃいましたか！？」

作「いや・・・キミの・・・言う通り・・・・だ」

な「作者さん、まだ贈り物報告会が残ってますよ」

作「あ、ああ。わかってるよ・・・まずは月光閃火様だな。贈り物持って直接こっちに来られるそうだ」

月「うっす～～、月光閃火だぞ」

？「私もいるわよ♪」

な「あ、あなたは・・・」

作「おお、無印編できれいさっぱり消滅したかと思ったら、月光閃火様の所で調き・・ゲフン！　お仕置きされて性格どころか性別まで変わってしまった悦楽じゃないか」

悦「お久しぶりね作者。元気してた？」

な「ほ、ホントにあの時の人なんですか？」

悦「ええそうよ。まあ、後書きだから許されてるんだけどね」

作「キョン子みたいなものだと思ってくれていいぞ」

な「キョン子？」

作「おっと、こっちの話だ」

月「ほいコレ。特製のスイーツだ。後で食ってくれ」

作「いつもいつもすみません」

月「いいって事よ・・・さて、渡すモンも渡したし、帰るぞ悦楽」

悦「はいは～い。それじゃあ、またね」

な「・・・ねえ作者さん。悦楽さんってあなたのキャラですよね？」

作「面白いから許す」

な「・・・・・」

作「次は初めての方だな。マサ様にフォンダンショコラと付け合わせのコーヒーと紅茶セットを頂いたぞ」

な「うわあ、美味しそう・・・」

作「食べるか？」

な「え、でも・・・これは一成君達への」

作「なのはなら許してくれるさ。ついでだから俺も食うけど」

な「いいのかなぁ・・・」

作「緋水様からは白と黒のワンピースと、赤いドレスを頂いたぞ」

な「誰宛てだろう？」

作「多分、ワンピースが龍那と雲母、ドレスが無明だな。暴露して以来、無明への贈り物が増えてるな」

な「でも、その所為で拗ねちゃったんですよね？」

作「その内顔見せるさ。なんなら強制的に呼びだしてもいいし」

な「（そんな事したら、大変な事になりそうだけど・・・）」

作「最後だな。清浦刹那様にグランザム（自爆装置付き）を頂いたぞ」

な「な、何で自爆装置？」

作「押せってフリなんだろう。だが・・・その手には乗らんぞ！」

な「・・・・・」

作「・・・・・（ウズウズ）」

な「・・・・・」

作「・・・・・（ウズウズ）」

な「・・・・・押したいんですね」

作「ッ！」

第十九話　夢の終わり（前書き）

わ～い！　感想がいっぱい来たぞ～～・・・やっぱバットはふざけ過ぎたか・・・・

第十九話　夢の終わり

はやてＳＩＤＥ

は「（私は・・・何を望んでたんやったっけ・・・）」

意識が遠くなるなか、私はぼんやりと考えていた。

女性「夢を見る事・・・悲しい現実は全て夢となり、安らかな眠りを・・・」

は「（そう・・・なんか？　私の望みは・・・）」

女性「健康な体・・・愛する者達との幸せな暮らし・・・・眠って下さい。そうすれば・・・貴女はずっと、そんな世界にいられます」

は「確かに・・・そんな世界におれたらどんなに幸せなんやろうか・・・」

女性「でしたら・・・」

は「せやけど・・・それは夢や。ただの夢なんや！」

意識がはっきりして来る。

女性「主・・・？」

は「私、そんなん望んでない！　あなただって同じはずや！」

女性「・・・私の心は、騎士達の感情と深くリンクしています。だから、騎士達と同じように、私も貴女を愛おしく思っています・・・だからこそ、貴女を殺してしまう自分自身が許せない・・・」

は「ッ・・・・」

目の前で涙を流す女の人に、私は胸が締め付けられる思いがした。

女性「自分ではどうにもならない力の暴走・・・貴女を侵食する事も、暴走して貴女を喰らいつくしてしまう事も・・・私には止められないのです・・・・！」

は「・・・・・」

女性「私は・・・・私は・・・・・！」

は「もうええよ・・・」

私は女の人を抱き締めた。暖かさが伝わって来る。

は「今までの事、少しだけわかったんよ。望むように生きられへん

悲しさや辛さ・・・私にも少しわかるよ。シグナム達と同じに、ずっと悲しかったし・・・寂しかった」

女性「主・・・」

は「せやけどな・・・忘れたらあかん。辛かった事・・・悲しかった事・・・何度も諦めそうになった・・・せやけど、そこで諦めへんかったから今の私がおるんや」

女性「・・・・・」

は「私はあなたのマスターなんやろ？　マスターの言う事はちゃんと聞かなあかんで」

女性「あ・・・・」

まっすぐの女の人を見つめる。すると、私達の足元に、光と共に不思議な図形の様なものが浮かび上がった。

は「名前をあげる。もう闇の書とか言わせへん・・・私が絶対に呼ばせへん!!」

女性「名・・前・・・」

は「私は管理者や。私なら出来る」

女性「無理です・・・自動防御プログラムが止まりません。管理局の魔導師が戦っていますが・・・それも・・・」

は「止まって」

足元の光がさらに強くなる。私は外に向かって呼びかけた。

は「外の方！　じゃなくて・・・管理局の方！」

≪≪え・・・・？≫≫

？　どっかで聞いた事がある声やな。

は「こちら、えっと・・・そこにいる子の保護者の八神　はやてです！」

≪≪は、はやて（ちゃん）！？≫≫

は「えっ！？　も、もしかしてなのはちゃんとフェイトちゃん！？」

≪うん、私達だよ！≫

≪意識を取り戻したんだね！≫

は「ゴメンな、迷惑かけたみたいで・・・」

≪何言ってるの、私達友達でしょう？≫

≪そうだよ、気にしないで≫

は「おおきにな二人とも・・・それでな、迷惑ついでにもう一つお願いしてもええかな？」

≪何？≫

は「二人の前にいるその子・・・何とか止めてあげてくれるかな」

≪止める？≫

は「魔導書本体からはコントロールを切り離したんやけど、その子が走っとると管理者権限が使えへん。今そこにいるのは自動行動のプログラムだけやから」

≪え・・・えっと・・・≫

≪とにかく魔力ダメージで吹き飛ばせばいいって事だよ。そうすれば彼女も外に出て来られるはずだ。全力全開・・・手加減無しで！！≫

戸惑う二人に、別の人がわかりやすく説明する。

は「そう！　その人の言う通りや！」

≪さすがユーノ君！　すっごいわかりやすかったよ！≫

≪うん！≫

なんやろう・・・弾んだ声を出す二人に、頼もしさだけやなくて軽く恐怖を感じた・・・

はやてＳＩＤＥ　ＯＵＴ

なのはＳＩＤＥ

ユーノ君が言うには、とにかく全力で吹き飛ばせばいいらしい。それなら私の得意分野だもん！

な「エクセリオンバスター、バレル展開！　中距離砲撃モード！」

≪Ａｌｌｒｉｇｈｔ．Ｂａｒｒｅｌ　Ｓｈｏｔ≫

フェ「プラズマスマッシャー、セット！」

≪Ｙｅｓ，ｓｉｒ≫

闇「ッ！？　う、動けん・・・・！」

レイジングハートから発せられた衝撃波が、闇の書さん・・・いや、自動プログラムをその場に固定する。

な・フェ「「ブレイクッ！　シューーーーーット！！！」」

そして・・・収束を終えた砲撃が、一気に解き放たれた。

な「戻って来て！　はやてちゃーーーーん！！！」

フェ「いっけぇぇーーー！！！」

闇「ッ・・・・・！？」

成す術もなく、プログラムは砲撃の直撃を受けた・・・

なのはＳＩＤＥ　ＯＵＴ

はやてＳＩＤＥ

は「夜天の主の名において、汝に新たな名前を贈る・・・強く支え

る者、幸福の追い風、祝福のエール・・・『リィンフォース』」

女性「新名称『リィンフォース』を認識。管理者権限の使用が可能になります」

女の人・・・リィンフォースの声が、空間に響き渡る。

は「よし、これで防御プログラムとの分離は済んだな」

リ「ですが、暴走が止まりません。管理から切り離された膨大な魔力が暴れ出します」

は「まあ、何とかなるやろ。行こか、リィンフォース」

リ「はい、我が主！」

目の前に現れた夜天の書を、私はしっかりと握り締めた・・・

はやてＳＩＤＥ　ＯＵＴ

フェイトＳＩＤＥ

な・フェ「「はやて（ちゃん）！！」」

白い光と共に、取り込まれていたはやてが私達の前に姿を現した。

は「ただいま・・・二人とも」

な「お帰りなさい・・・はやてちゃん」

は「全部見とったよ。二人とも・・・私の為に、こんなに傷だらけになって」

フェ「こんなのへっちゃらだよ」

は「私・・・二人みたいな友達を持ってホンマに幸せや」

な「に、にゃはは・・・／／」

フェ「・・・・／／」

はやての真っ直ぐな言葉に、私となのはは顔を赤くして照れてしまった。

≪みんな気をつけて！　闇の書の反応、まだ消えてないよ！≫

な・フェ・ユ・アル「「「「ッ！」」」」

エイミィからの通信にハッとなる。海上には、はやての優しい光と対になるように、闇色の光が浮かんでいた。

≪あの黒い淀みが暴走の始まる場所になる！　クロノ君が到着するまで近付いちゃ駄目だよ！≫

な「わ、わかりました！」

は「・・・・リィンフォース、管理者権限発動」

フェ「はやて？」

は「戦いの前に・・・私の家族を呼び戻さんとな」

そう言うと、はやては私達から少し離れ、何かを始めた。はやての周囲に、四つのリンカーコアが現れた。

ユ「あれは・・・・」

は「リンカーコア送還。守護騎士システム、破損修復」

輝きを増していくリンカーコア。その直後、はやてを中心に四つの魔法陣が出現した。

フェ「ッ！？　何！？」

眩い光が私達の目を覆う。やがて、ゆっくりと目を開けた私達の視線の先には・・・

な「ヴィータちゃん！」

フェ「シグナムも・・・！」

はやてに寄り添うように立つシグナム達がいた。消滅したと思っていた四人が、はやての手により復活を果たしたのだ。

シ「我等、夜天の主の下に集いし騎士」

シャ「主ある限り、我等の魂尽きる事無し」

ザ「この身に命ある限り、我等は御身の下にある」

ヴィ「我等が主、夜天の王・・・八神　はやての名の下に！」

誓いの言葉と共に、四人ははやての前に跪いた。

は「リィンフォース、私の杖と甲冑を」

≪はい！≫

は「夜天の光よ、我が手に集え！　祝福の風、リィンフォース・・・セーーットアァァァップ！！」

はやてが、防衛プログラムが纏っていた物と同じ甲冑を身につける。金色の杖を手に取り、天高く掲げる。髪の色が変わり、帽子をかぶり、背中にはスレイプニールと呼ばれていた翼が現れる。

は「似合っとるかな？」

な「うん！　カッコいいよはやてちゃん！」

は「えへへ、嬉しいな」

ヴィ「・・・はやて」

なのはの言葉に照れるはやてに、ヴィータが声をかける。

は「どしたんヴィータ？」

シ「主はやて・・・申し訳ありませんでした」

シャ「私達・・・黙って蒐集を・・・」

は「ええよ」

ヴィ・シ・シャ「「「え？」」」

は「全部知っとるよ。リィンフォースが教えてくれたからな。せやけど、そんなんは後回しや。今は、この言葉だけ言わせて」

はやては間を置き、微笑みながら口を開いた。

は「お帰り・・・みんな」

ヴィ「はやて・・・はやてぇぇぇぇぇぇぇ！！」

ヴィータがはやてに抱きつき、大きな声で泣き始めた。そんなヴィータを、はやては優しく抱きしめ返す。

フェ「よかった・・・本当によかった」

な「うん・・・」

ユ「家族って・・・いいものだね」

アル「ううう・・・あたしゃこういうのに弱いんだよぉ」

ユ「あれ？　アルフ泣いてるの？」

アル「な、泣いてなんかいないよ！」

ユ「でも・・・」

バキ！

アル「泣いてないって言ってるだろ！　それ以上言ったら殴るよ！」

ユ「も、もう殴ってる・・・」

な「にゃはは！」

フェ「クス・・・」

二人のやりとりに、思わず吹き出してしまった。大変だったけど、諦めないで本当によかった。

ク「すまない、水を差すようで悪いんだが・・・」

フェ「え・・・？」

再会を喜ぶ私達の前に、クロノが現れた。

ク「時間がないので簡潔に説明する。あそこの黒い淀み・・・闇の

書の防衛プログラムが後数分で暴走を開始する。僕等はそれを何らかの方法で止めないといけない」

クロノの言葉を黙って聞く。

ク「彼女の方は・・・・龍那さん達に任せよう」

クロノが指すのは、未だに海鳴市の上空でぶつかりあっている龍那さん（雲母さん）と無明だった。

ク「一成が倒れた今、頼みの綱は龍那さん達だけだ。僕等はこっちに集中しよう」

フェ「え・・・？　今なんて・・・」

は「一成君もおったん!?　いや、それよりも倒れたって・・・・!?」

ク「一成は・・・・神奈さん達を助けようとして倒れた・・・・そう聞いている」

フェ「でもなのはは・・・・!」

な「・・・・ゴメンねフェイトちゃん。余計な心配かけたくなかったの」

フェ「そんな・・・」

沈黙が場を支配する。そんな中・・・はやてがゆっくりと動き出す。

は「リィンフォース・・・」

≪防衛プログラムの進行に割り込みをかけました。数分程度ですが、暴走開始の遅延が可能です≫

は「それだけあったら充分や・・・行くでみんな」

シ「承知しました」

ク「ま、待て！　どこへ行くつもりだ!?」

は「もちろん、一成君の所です」

ク「なっ!?」

は「一成君の事です・・・きっと私の為に色々動いてくれとったんやと思います」

ク「それは・・・」

は「だから・・・今度は私が一成君を助ける番です！」

な「・・・私も行くよ」

フェ「私も・・・」

ユ「僕も行く」

アル「なら、アタシも行こうかねぇ」

ク「キミ達まで・・・」

な「私の目の前で一成君は倒れた・・・もうあんなのは嫌なの！」

なのはがクロノをしっかりと見据える。

ク「・・・キミ達は馬鹿だ。闇の書の暴走がどれほど恐ろしいものかまるでわかっていない」

な「・・・・・」

ク「・・・だが、どうやら僕も馬鹿らしい」

フェ「クロノ・・・！」

ク「許可できるのは数分だけだぞ」

な「ありがとうクロノ君！」

ク「そうと決まれば早く向かおう。時間がない」

フェ「うん！」

頷き、私達は海鳴市へと舞い戻った・・・

フェイトＳＩＤＥ　ＯＵＴ

龍那（雲母）ＳＩＤＥ

龍「避けて避けて避けて避けて避けて避けて避けて避けて避けて避けて～～♪」

ヒュンヒュン！

無「くっ・・・当たらな・・・・・」

龍「殴って殴って殴って殴～る～～♪」

ドガガガガガガ！！

無「あうっ！？」

＜ね、ねえ、前から聞こうと思ってたんだけど・・・＞

龍「何だよ？」

＜何で・・・戦う時いつも変な替え歌歌うの？＞

龍「ＢＧＭないと盛り上がらねえんだよ」

＜普通に歌いなよ・・・＞

龍「そんなん面白くねえだろ」

無「く、屈辱だわ・・・あんなセンスの欠片もない替え歌を歌う女にいいようにあしらわれるなんて・・・」

龍「聞こえてるぞコラァ！」

？「いや、私は気に入ったがね」

龍「あん？」

変なおっさんが現れた。

おっさん「おっさんと呼ばれる年では・・・いや、ある意味正しいか」

龍「よ、読まれた！？」

おっさん「顔に出ていたよ」

無「遅いわよゼノン！」

おっさん「すまんな、クロノ君と話が盛り上がってしまって」

おっさん・・・ゼノンは悪びれもせずにそう答えた。

無「馬鹿なの？　敵と話してて遅れるなんて・・・馬鹿なの？」

ゼ「何故二回言うのだね・・・」

急に漫才を始める二人に、オレはあえてツッコまなかった。

龍「・・・ん？」

複数の魔力反応が近づいて来る。これは・・・なのは達だ。

龍「おいおい、闇の書は放っておいていいのかよ・・・」

＜みんな、一成さんが心配なんだよ＞

龍「アイツ・・・この世界でも相変わらずみてえだな」

倒れている一成をチラッと見る。フラグ立ては順調なようだ。

龍「にしても・・・肝心の本人はいつまで倒れてるつもりだ」

お前の大切なものは・・・お前自身が守らないと意味ないんだぞ・・・

龍那（雲母）ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＩＮ　ＳＩＤＥ

夢を見ていた・・・強大な敵に立ち向かう一人の女性と・・・・それに付き従う八人の男女の夢を・・・・

一「（この光景は・・・・・）」

これは間違いなく夢だ・・・だが、遠い世界のどこかで、これと同じ状況が繰り広げられていた・・・何故か、そう確信出来た。

？「これはワタシの記憶・・・主と共に戦っていたワタシの記憶・・・」

一「え？」

振り向いた俺の前に・・・純白の衣に身を包んだ壮年の男性が立っていた。

？「ようやく話をする機会が来たな・・・秋月　一成よ・・・」

一「あなたは？　どうして俺の名を・・・」

？「ワタシは・・・主によって生み出された原初存在・・・その内の一柱だ」

一「原初・・・存在・・・・？」

原「ワタシは・・・ずっとそなたと共にあった・・・そう、そなたが生を受けたその時からずっと・・・・」

そう言う彼の表情は・・・・どこまでも優しかった。

第十九話　夢の終わり（後書き）

作「今回のゲストは夜天の主ことはやてさんだ」

は「どうぞよろしゅうな」

作「よかったな、無事に家族を取り戻せて。自分で書いてて泣きそうになったぞ」

は「まだ終わってへんよ。防衛プログラムも止めなあかんし、一成君だって助けな」

作「クライマックスだな。漲って来たぜぇ！！！」

は「熱血やね」

作「このテンションのまま贈り物報告会に移るぞぉぉぉ！！」

は「ちょ、ちょっと落ち着いたらどうや」

作「わかった」

は「切り替え早いなぁ・・・」

作「緋水様から遊戯王のデッキを二つ頂いたぞ。早速デュエルするか？」

は「私、ルール知らんもん」

作「じゃあ後で教えてやるよ」

作「清浦刹那様からは、一成宛てに弓と矢を頂いたぞ」

は「・・・・何で弓なん？」

作「天音の武器を弓にしようと思ったけど、贈り物で槍頂いたし、なによりホントに秋蘭になっちまうから止めたっていう裏話を今暴露します」

は「な、何でこのタイミングで？」

作「今しか言うタイミングがなかったからさ！」

作「二次元最高様からは龍那にグレンラガン。俺にネオゲッター。無明にゴスロリ衣装を頂いたぞ」

は「うわあ・・・見事なまでのドリルやな・・・」

作「ドリルは男の浪漫！　これは絶対不変だ！」

は「私はこっちの服の方がええなぁ」

作「惜しいな・・・キミも男だったらこの素晴らしさを共に分かち

合えたものを・・・」

は「キャラ変わっとるよ作者さん・・・」

第二十話　この現在　（いま）のために（前書き）

徐々にシリアスが抜けて行く・・・・あと少しだ。

第二十話　この現在　（いま）のために

なのはＳＩＤＥ

な「龍那さーーん！！」

私がいた時とは状況が違っていた。神奈さんは蹲り、天音さんは仰向けに倒れ、無明さんが強そうな斧を持ってて、ゼノンさんがいた。

一「・・・・・」

けれど、一成君だけは倒れたままだった。

龍「団体さんのご到着ってか。初めて見る顔もあるが・・・どうやらあいさつする時間もないみてえだな」

ク「龍那さん！　闇の書の暴走まで時間がない！　それまでにその二人を無力化出来るか？」

龍「やろうと思えばやれるが・・・・無明の相手はお前らに任せるわ」

ク「え？」

龍「おっさん、場所を変えるぞ」

ゼ「私の相手をしてくれるのかね？」

龍「アイツの相手は飽きたんでな」

無「ゼノン！　その女、絶対に叩きのめしなさい！」

ゼ「おいおい、キミを簡単に追い込む相手に私が勝てるわけないじゃないか」

無「これは命令よ！」

ゼ「やれやれ・・・承知したよお姫様。そこまで言うなら頑張ってみるさ」

フェ「龍那さん！」

龍「気張れよお前等。ついでにあそこでのん気に寝てるヤツも起こしてやってくれ」

そう言って、龍那さんとゼノンさんは私達から離れて行った。

無「それで・・・あなた達は何をしに来たのかしら？」

無明さんが冷たい目で私達を見つめる。それに怖気づく事なく、私達は一成君の前に立ち塞がった。

な「一成君を・・・助けにきました」

無「助けに？　その男は死ぬ・・・これは決定事項よ」

は「死なせへん！　私達が助けてみせる！！」

シ「シャマル、秋月に回復魔法を・・・」

シャ「任せて！」

無「そんな事をしても無駄よ。もうその男に戦う力は・・・」

ユ「あなたは・・・一成の事を何もわかっていない」

無「何ですって？」

アル「コイツはねぇ、友達の為ならどんな無茶な事だって成し遂げちまうヤツなんだよ」

ク「どんな不可能な事だって・・・一成は今まで可能にしてきた」

フェ「一成は絶対に立ちあがってくれる。だからそれまでは・・・私達が彼を守る！」

全員「（私）（僕）（アタシ）（俺）達は、一成（君）（秋月）を信じている！！！」

なのはＳＩＤＥ　ＯＵＴ

龍那（雲母）ＳＩＤＥ

龍「ここら辺でいいだろ」

なのは達のいる場所から充分な距離をとり、ゼノンと対峙する。

ゼ「何故私を誘ってくれたのだね？」

龍「オレ達は脇役だ・・・脇役は脇役らしく主役の陰でひっそり戦うべきじゃねえか？」

ゼ「なるほど・・・確かにキミの言う通りだ」

龍「さってと、おしゃべりはこれくらいにして・・・そろそろ始めっか」

オレはバットを構え・・・

＜待って龍那＞

龍「どした雲母？」

＜今度は・・・私が戦うよ＞

龍「え？」

＜みんな一生懸命戦ってる。なのに、私だけ何もしないままじゃ嫌なの＞

龍「で、でもお前は・・・」

＜お願い！＞

龍「・・・ああもう！　わかったよ！」

＜ありがとう龍那！＞

龍「ただし・・・やり過ぎるなよ？」

＜うん！＞

龍「（これだけに関しては信用できねえんだよな）」

少しだけ不安に思いつつ、オレは雲母と交代した。

龍那（雲母）ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

雲母（龍那）ＳＩＤＥ

雲「あなたの相手は私です！」

ゼ「ん？　ずいぶん様子が変わったようだが」

雲「えっと、私達は一つの体に二つの魂が入っていまして・・・」

ゼ「なるほど、先程の少女と違い、穏やかな雰囲気だなキミは」

雲「そ、そんな事ないですよ！　龍那はあんな性格だから誤解されちゃうけど、本当はとっても優しい娘なんです」

＜ちょっ！？　何言ってんだお前！＞

ゼ「ははは・・・いいコンビのようだな」

雲「あ、ありがとうございます」

ゼ「キミ達とは一度腰を据えて話がしたいものだが・・・お互いの立場が許してくれそうにないな」

雲「はい・・・あなたと私達は敵・・・・」

ゼ「手加減はしないぞ」

雲「それは私も同じです！　来て、ケルベロス！　オルトロス！」

虚空から現れる二丁拳銃。私はグリップを握りしめた。

ゼ「ほう・・・二丁拳銃とは面白い」

雲「私の全力全開・・・見せてあげます！」

二丁拳銃に魔力を流し込む・・・最高の一撃を放つ為に。

雲「光よ！　我に仇なす敵を、その身に包み罰せよ！！」

＜まさか・・・おい、待て雲母ぁ！！＞

ゼ「ッ！　まずい！」

雲「ジェノサイド・・・パニッシャ～～～～！！！」

放たれるのは銃口の何十倍もの大きさの二つの極大レーザー・・・
それが大気を大きく震わせながらゼノンさんに迫る。

ゼ「ぬおぉぉぉぉぉぉぉ！？！？！？」

空の彼方へと消えて行くレーザー。それと同じように、ゼノンさんの姿も消えていた。

雲「全ては・・・光の中に・・・・」

＜なに満足げにキメゼリフ言ってんだお前はぁ！！＞

雲「ひゃう！？」

＜結界も無しにジェノサイドパニッシャー撃ちやがって！　闇の書の暴走の前に、お前の所為で世界が滅びるわぁ！＞

雲「だ、だって・・・手加減したら相手に失礼・・・」

＜極端すぎるんだよお前は！＞

≪みんな、気をつけて！　たった今、小規模の次元震を観測したの！　タイムリミットはすぐそこまで迫ってるよ！≫

エイミィちゃんから通信が入る。原因は・・・やっぱり私？

＜雲母ぁぁぁぁぁぁ！！＞

雲「ご、ごめんなさーーーい！！！」

？「・・・謝るくらいなら撃たないで欲しかったのだがね」

雲「え？」

ゼ「さすがに、今のは死ぬかと思ったぞ」

雲「ゼ、ゼノンさん！」

ゼ「確かに手加減は感じなかったが・・・・限度というものがあるだろう」

＜悪いなゼノン。コイツ本気と全力の区別がつかねえんだよ＞

雲「そ、そんな事ないもん！・・・・多分」

＜・・・・本気で言ってんのか？＞

雲「う・・・」

ゼ「・・・・・」

雲「そ、そんな目で見ないでください～～！」

雲母（龍那）ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＩＮ　ＳＩＤＥ

一「これがあなたの記憶？　あなたは俺に何を・・・？」

原「そなたに全てを伝えよう。そなたには・・・その権利がある」

俺は口を閉じ、目の前の男性の言葉を一字一句聞き逃さないよう神経を集中した。

原「遥か昔・・・ワタシは主の手により創造された。『彼の者』を討ち滅ぼすため」

一「創造・・・」

原「今からワタシの真の姿を見せよう・・・」

一「え・・・・」

男性の体が光を発する。やがて光が収まると、そこにいたのは男性ではなく、一本の短剣だった。

原「これが・・・ワタシの真の姿だ。原初存在とは、主によって生み出された八つの武器の総称なのだ」

一「・・・どういう事だ？　それじゃまるで、人霊剣や神剣と同じじゃないか」

原「当然だ。霊剣や神剣を作りだしたのは・・・他でもないワタシ達自身なのだからな」

一「なっ・・・」

原「話を続けよう・・・『彼の者』との戦いは数百年に及んだ。主とワタシ達は数え切れないほど傷つき、倒れた。だが、主は諦めなかった。無論・・・ワタシ達もな。そして、戦いの果てに、ついに『彼の者』を討ち滅ぼす事に成功した」

一「凄いな・・・その主という人は」

俺にもわかる・・・数百年もの間、戦い続ける事の辛さ、大変さが・・・俺は主と呼ばれている人物に畏敬の念を抱いた。

原「だが・・・それでは終わらなかった。『彼の者』は最後の力を使い、己の体を幾万もの欠片に変え、多元世界へと逃走したのだ」

一「そんな・・・」

原「主は倒れ、傷が癒えていなかったワタシ達には、欠片を追う力は残っていなかった。そこでワタシ達は、自分達の分身を作りだし、欠片の破壊を命じたのだ」

一「まさか、それが・・・」

原「そう・・・それこそが霊剣であり、神剣だ」

一「ッ・・・！」

原「そなたのような旅人も・・・元々は欠片の破壊が使命だった。

だが・・・悠久なる時の中で、霊剣や神剣はその使命を忘れ、旅人も己が目的の為に動くようになった」

一「（確かに、悦楽なんて思いっきり放棄していたな）」

原「原初存在八柱で、一番早く動けるようになったワタシは、すぐに欠片を追い世界を渡った・・・そなたに出会ったのはその時だ」

一「ちょっと待ってくれ、俺にはそんな記憶は・・・」

原「無理もない。そなたとワタシが出会ったのは・・・・そなたが生まれたその時だったのだからな」

一「教えてくれ、俺とあなたの関係は一体・・・」

原「そなたの生まれた世界にも、欠片は存在していた。それを察知したワタシは、その欠片を破壊する為にそなたの世界へとやって来た」

一「・・・・・」

原「欠片の破壊には成功したが、傷が完全に癒えていなかったワタシは消滅しかかっていた。やむを得ずワタシは、偶然見つけた生命力溢れる赤子の内で傷が癒えるのを待った。その赤子こそ・・・そなただったのだ」

一「・・・それで？」

原「そなたの内で傷を癒したワタシは、すぐにそなたから離れようとした。だが、そこで誤算が生じた」

一「誤算？」

原「そなたは生命力だけでなく、精神力も強かったのだ。離れる事も出来ず、ワタシはそなたの魂（ウィル）に取り込まれてしまった」

一「我ながら滅茶苦茶な赤ん坊だな・・・」

原「ワタシを取り込んだ事により、そなたの運命は一変した。人として・・・短いが幸せな一生を過ごす事なく、旅人として・・・永遠の戦いに身を投じる事に・・・」

一「ではなにか？　俺が神奈達と出会ったのも、今までの戦いも、こうしてあなたと話しているのも・・・全ては偶然だと？」

原「・・・・そうだ」

たった一つの偶然・・・それが、俺の運命を大きく変えてしまった。あの世界に残して来た人達の顔が、浮かんでは消えて行く。

原「恨んでくれて構わない。むしろ当然だ、そなたはただ巻き込まれただけなのだからな」

一「・・・・いや、恨みはしない」

怒りも悲しみも恨みも・・・不思議と湧いて来なかった

原「何故だ？　ワタシはそなたの運命をねじ曲げてしまったのだぞ」

一「だが・・・そのおかげで神奈達と出会えた」

原「ッ・・・！」

一「神奈達だけじゃない。なのは達や、今までの世界で知り合った人々・・・あなたがいなければ、俺はみんなに出会う事なく一生を終えていた」

原「そなた・・・」

一「辛い事も、悲しい事もたくさんあった・・・だが、それ以上に、楽しい事がたくさんあった。だから・・・恨みはしない。むしろ、感謝している」

自棄でも嘘でもない。これが・・・俺の正直な気持ちだ。

原「・・・こんな事を言える立場ではないのはわかっている。だが、それでも言わせて欲しい・・・そなたを選んで本当によかった」

一「ははっ、ありがとう」

原「そんなそなただからこそ・・・ワタシの最後の力を躊躇いなく使う事が出来る」

一「最後の力？」

原「そなたには二つの道がある。一つは・・・ワタシを捨て過去を遡り、そなたの世界で静かに暮らす事。そして、もう一つは・・・」

突然、目の前の光景が変わり、そこでは、なのは達が無明と激しい戦闘を繰り広げていた。

一「みんな・・・！」

原「ワタシを完全に取り込み、そなた自身が原初存在となる事だ。さすれば、そなたの大切な者達を救う事が出来るだろう」

一「迷う必要なんてない！　俺はみんなを・・・」

助ける・・・そう言おうとした俺を、原初存在は制した。

原「だが、本来ワタシの力は人に扱い切れるものではない。この戦いが終われば、そなたはマナを全て失い・・・消滅する」

一「ッ！？」

原「よく考えろ・・・そなたの時間を取り戻すか、それとも・・・一時の力を得る為に消滅を選ぶか・・・今のワタシに出来るのは、これくらいしかないのだ」

消滅・・・過去の戦いでも何度も消滅しかけたが、何とか乗り越えて来れた。けれど、今回は違う。確実な消滅が待っているのだ。

な「きゃあっ！？」

目の前で無明に吹き飛ばされるなのは。だが、それでも彼女は立ち上がる。

無「まだやる気？　そろそろ諦めた方がいいんじゃない？」

な「諦めない・・・絶対に！」

フェ「一成が諦めない限り・・・私達も諦めない！」

一「なのは・・・フェイト・・・・」

ユ「心が折れる時が本当の負けだ・・・僕達の心は、まだ折れていない！」

アル「アタシ等の諦めの悪さは筋金入りでねぇ、まだ付き合ってもらうよ！」

ク「一成は僕達の希望だ・・・その灯りを、消させはしないぞ！」

一「ユーノ・・・アルフ・・・クロノ・・・・」

は「何であなたは一成君を殺そうとするん！」

無「その男はお姉様を縛っていた。それが私には許せない」

は「お姉様やかなんか知らんけど、そんな理由で一成君を殺させへん！　行くでみんな！」

シ「秋月ほどの騎士を・・・むざむざやらせはせんぞ！！」

シャ「傷は塞がって来たわ！　一成君の事は私に任せておいて！」

ヴィ「お前をブッ飛ばして一成を助ける！　覚悟しやがれ！」

ザ「止めてみせる・・・我が友の為に！」

一「はやて・・・シグナムさん・・・シャマルさん・・・ヴィータ・・・ザフィーラ・・・・」

神「・・・・」

天「・・・・・」

刹「・・・・」

一「神奈・・・天音・・・刹那・・・・・」

雲「一成さんがいなかったら、私達はここにはいなかった。だから・

・・！」

＜アイツを傷付けるヤツは・・・オレ達がぶっ潰す！＞

一「雲母・・・龍那・・・・」

ポロッ・・・・

俺は泣いていた。圧倒的不利な状況にも関わらず、俺を信じ、俺を守ろうとしてくれている仲間達の姿に、無意識の内に涙を流していた。

原「・・・・決まったか？」

一「ああ・・・俺はあなたを受け入れる。そして・・・みんなを守る！！」

消滅がどうした。俺にとっては目の前で仲間を失う方がよっぽど恐ろしい。

原「本当にそれでいいのか？」

一「彼女達を守る・・・それが俺の『誓い』だ！」

原「それは、そなたの旅人としての『誓い』か？」

一「違う！」

原初存在の言葉を即座に否定する。

原「では、その『誓い』は誰の者だ？」

一「俺はなのはが好きだ！　フェイトが好きだ！　ユーノもアルフも好きだ！　クロノもエイミィもリンディさんも好きだ！　はやてもシグナムさんもシャマルさんもヴィータもザフィーラも好きだ！　アリサもすずかも好きだ！　プレシアさんとアリシアちゃんが好きだ！　士郎さんも桃子さんも美由紀さんも恭也さんも好きだ！　忍さんもノエルさんもファリンさんも好きだ！　クラスのみんなが好きだ！　神奈が・・・天音が・・・刹那が好きだ！　龍那と雲母が好きだ！」

原「・・・・」

一「みんな俺の大切な人達だ！　だから守ってみせる！　旅人としてじゃない・・・秋月　一成としての『誓い』だ！！！！」

俺の『誓い』に黙って耳を傾ける原初存在。

？「お～お～！　女の子だけじゃなくて男にまで告白かよ。どこまで節操ねえんだお前？」

一「え？」

俺でも原初存在でもない声。振り向いた俺の先にいたのは・・・

少年「よお一成！　久しぶりだな！」

一「と、十種（とくさ）！？」

十「俺だけじゃねえぞ・・・ほら」

少年Ａ「やっほ～一成♪　僕の事覚えてる」

少年Ｂ「そりゃあ覚えてるだろ？　何せ・・・男のくせに女の子みたいな名前だしな」

少年Ａ「それ・・・次言ったら殺すって警告したよね？」

少年Ｂ「お、落ち着け！　せっかくの再会を血みどろにする気か！？　ぎゃぁぁぁぁぁぁ！！」

一「弥生・・・知治・・・」

少年Ｃ「煩いな・・・一成、黙らせようか？」

一「い、いや、別に放っておいていいよ悠輔」

少女「私もいるよ～～～！」

一「世界！　お、おい、いきなり抱きつかないでくれ」

世「何言ってるの～～。私達恋人同士だったじゃない」

悠「そう妄想していただけ」

世「ち、違うもん！」

そこにいたのは、かつて共に戦ったかけがえのない仲間達だった。
その後ろにも、さらにその後ろにも見覚えのある顔が見える。

一「な、何でみんながここに！？　というか、何で俺の事を覚えているんだ！？」

世界を出れば、その世界の住人の記憶から消え去る・・・それが、旅人としての力を得る代償だったはずだ。

悠「一度絆を結んだ相手の事を、簡単に忘れるわけない」

一「え・・・？」

世「私達、ぜ～んぶ覚えてるよ！」

十「お前が・・・俺達と一緒に戦ってくれた事も・・・」

弥「キミが・・・僕達の事を守ってくれた事も・・・」

知「一緒に・・・女風呂を覗いた事も・・・」

弥「キミは黙ってな」

知「ま、待て！　俺なりに場を和ませようと思って軽いジョークをだな・・・！」

弥「一人でやってろ♪」

知「メギャァァァァァァ！」

未だに状況がわからない俺に、原初存在が口を開く。

原「この者達は・・・世界を超え、そなたの心に語りかけに来たのだ」

？「その通り！」

鎧を着た女性が前に出る。その隣には、幼い少女。

一「ルキアにセレン・・・キミ達まで」

それは、なのは達の世界に跳ぶ前の世界で出会った。ルキアとセレンだった。

ル「お前が私達の前から消えた後、私達はいつお前との思い出が消えるのかずっと怯えていた」

セ「けどね、いつまでたっても消えなかったの！　だから、今でもあなたとの思い出は全部憶えてるよ！」

ル「お前には計り知れない恩がある・・・今度は私達がお前を助ける番だ！」

原「失われる事の無い記憶・・・絆を大切にするそなただからこそ成し得た奇跡かもしれんな」

一「奇跡・・・」

奇跡は自分の手で起こすもの・・・だが、今はこの奇跡を起こしてくれた誰かに感謝しよう。二度と見れないと思っていた仲間達の顔を、再び見る事が出来たんだからな。

？「王様～～～！」

一「そ、その呼び方はまさか・・・」

ラ「僕だよ僕！　みんなのアイドルラッシーだよ♪」

懐かしい顔ぶれの中、一際違和感のある着ぐるみが近づいて来た。

一「何でお前がここに！？」

ラ「詳しい事は言えないけど、僕も『こっち側』の住人だって事さ」

一「そもそも・・・お前と絆を結んだ憶えはないんだが」

ラ「相変わらずキッツイな～～！！」

そう言って、ラッシーは引っ込んだ。

十「行くんだろ・・・」

一「ああ、俺はなのは達を助けたい。例え・・・別れる事になっても」

十「だとさ・・・原初存在さんよ。言っとくけど、一度決めたらコイツは絶対に変えないぞ」

原「・・・わかった、そなたの選択に従おう」

原初存在の体が、再び光り始めた。

原「ワタシが司るのは『支配』・・・その力をそなたに託す」

一「『支配』？」

原「そなた自身は気付いていないだろうが・・・これまでも幾度か無意識の内に使っていたのだぞ」

一「え？」

原「以前の霊剣との戦い・・・そなたは操られていた死霊達を言葉だけで昇天させた。不思議に思わなかったか？　格下とはいえ、霊剣の支配下にあった魂を言葉だけで昇天させた事に・・・」

≪あなた達の無念は必ず俺が晴らします。だから、安心して逝ってください≫

原「他にもあるぞ・・・」

≪おいおい、何を言い争っているのかわからないが、朝っぱらからケンカなんて『止めろ』って≫

≪『止めろぉぉぉぉぉぉーーーーッ！！！』≫

≪『砕けろぉぉぉぉぉぉぉーーーーっ！！！！』≫

一「そうか・・・二人の大げさな態度や、無明のオーラフォトンノ

ヴァを消したり、グラスプが砕けたのは・・・」

原「そうだ・・・そなたが『支配』したからだ。ワタシ達から作られた以上、霊剣も神剣も原初存在には決して逆らう事は出来ない」

一「何て力だ・・・」

原「これが原初存在の力だ。それを知ってなお・・・求めるか？」

一「もちろんだ」

原「そうか・・・では秋月　一成よ！　全ての剣を従え、そなたの愛しき者達を見事救ってみせろ！！」

ドクン！

原初存在の光が俺の胸に吸い込まれていく。心臓が大きく鼓動し、今までに感じた事の無いような力が溢れる。

この瞬間・・・俺は原初存在となった。

十「さってと、こっちも始めるか」

十種の合図で、仲間達が俺の前に並んだ。

一「何を・・・」

十「おいおい、俺達はただしゃべりに来たわけじゃないぞ。これから戦いに向かうお前にちょっとした贈り物だ」

世「武器がないと戦えないでしょ？　だから・・・私達の武器を貸してあげる！」

ル「お前なら、きっと使いこなせる筈だ」

全員が武器を掲げる。すると、その一つ一つが光となって混じり合い、俺の前にゆっくりと降りて来た。

全員「さあ、掴（め）（んで）一成（君）（王様）！（俺）（私）（僕）達と（お前）（あなた）（キミ）の・・・絆の力を！」

一「・・・ああ！！！」

俺は迷うことなく手を伸ばした。原初の力と絆の力・・・その二つを手に、俺は空間を飛び出した。

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

なのはＳＩＤＥ

無「もうあなた達の相手も飽きたわ。次の一撃で終わりにしてあげる」

無明さんが大きく手を掲げた。あれは・・・まさか！？

フェ「オーラフォトンノヴァ！？」

フェイトちゃんの言う通り、無明さんが撃とうとしているのは、一成君も使っていたあの爆発魔法だった。

は「あ、あれは何なんフェイトちゃん？」

フェ「一成も使っている魔法。発動したら・・・海鳴市は確実に消滅する」

シ「何だと！？」

ユ「と、止めないと！！」

一斉に攻撃を仕掛ける私達。けど、無明さんの展開したバリアはその全てを受け止めた。

な「何とか・・・何とかしないと・・・・・！」

無「残念・・・時間切れよ」

な「ッ！」

無明さんの片手には、小さな光球が現れていた。けど、私は知っている、それが、全てを破壊する最悪の魔法だと。

無「さようなら・・・」

振り下ろされる手。光球はゆっくりと私達に迫って来た。

な「（一成君・・・・！！）」

私は目をつむり、大好きな人の名前を叫んだ・・・・正にその時・・・・

？『消え失せろ・・・』

な「え・・・・？」

ずっと聞きたいと思っていた声が聞こえたと思った次の瞬間、私達に迫っていた破滅の光は姿を消していた。

ブワッ！

シャ「きゃあっ！？」

ザ「シャマル！？」

一成君の倒れていた場所に、銀色の光の柱が伸びていた。傍にいたシャマルさんが吹き飛ばされ、ザフィーラさんに受け止められていた。

？「俺が守っていたんじゃない・・・俺がずっと守られていたんだ」

ヴィ「こ、この声って・・・」

アル「は・・・はは、やっとお目覚めかい」

ク「今までの分、しっかり働いてもらいたいものだがな・・・」

は「なのはちゃん・・・！　フェイトちゃん・・・！」

フェ「うん・・・！」

な「信じてたよ・・・・！」

私達の視線が集中する中、光の柱はゆっくりと消えて行った。そして・・・そこから姿を現したのは・・・

一「ありがとう・・・みんな・・・・」

全員「一成（君）（秋月）！！！！」

一成君だった・・・その姿を大人に変え、背中からははやてちゃんと同じく、対になっている六枚の純白の翼が生えていた。

ポロッ・・・・

嬉しいはずなのに・・・喜ばしい事なのに・・・・私は涙が止まらなかった・・・・

なのはＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＩＮ　ＳＩＤＥ

みんなが俺を見ている。誰も彼も傷だらけで、どれだけ激しい戦闘だったかが容易に想像出来る。

無「ま、また消えた・・・一体・・・一体何が起こってるのよ！！」

オーラフォトンノヴァを無効化され、戸惑う無明。

一「もう・・・キミの好きにはさせない。俺の家族を・・・返してもらうぞ！」

無「だ、黙りなさい！　丸腰のくせに、私に勝てると思ってるの！？」

確かに、俺は器を持っていない・・・だが、俺には新たな力がある。仲間達から受け取った・・・絆の力が！

一「勝つさ・・・俺は、一人で戦っているんじゃない」

右手を掲げ、俺は世界に広がるように大きく叫んだ。

一「絆の力・・・今こそこの手に！！！」

現れたのは、余計な装飾を省いた一本の剣。それをしっかりと握り、俺は無明を見据えた。

無「器じゃない!?　そ、その剣は一体・・・」

一「これが俺の・・・俺達の力だ!!!」

さあ、決着をつけるぞ無明・・・

第二十話　この現在　（いま）のために（後書き）

作「ひゃっほう！　伏線の回収に成功だぜ！　やっべ、俺って天才じゃね？」

一「アホか、これくらい考えれば誰にでもわかるだろ」

作「うるせえ！　今回ばかりは自慢してもいいだろ！！」

一「さあな、それは読者の方が決める事だ」

作「つーかお前！　サラッと復活したと思ったらいきなりボロクソかよ！」

一「それより、他に言う事があるんだろ？」

作「おっと、そうだった。今回出て来た一成の仲間・・・実は、オリキャラ募集の時に送って頂いたキャラなのです！」

一「そういえばお前、いつか本編で出すって前に言ってたな」

作「温めて温めて・・・ついに出す事が出来たぜ！　ちなみに、ルキアとセレンはプロローグに出てた二人です」

一「よく出したな・・・五話以前は黒歴史扱いして、全然見ようとしなかったくせに」

作「言うな！！」

作「よし、贈り物報告会に移るぞ。まずは月光閃火様だ。スーパーウェスト無敵ロボ全シリーズを頂いたぞ」

一「レムリアァァァァ・・・インパクトォォォォォォ！！！」

作「おいいいいいいいいい！！　頂いた端から壊すなぁぁぁぁぁぁ！！！」

作「清浦刹那様からは、俺宛てにマクロスを頂いたぞ」

一「レムリアァァァァ・・・・」

作「止めろぉぉぉぉ！　つーか作品が違う！！！」

作「緋水様からは白式と紅椿を頂いたぞ」

一「何だこれ？」

作「多分・・・インフィニット・ストラトスに出て来るヤツなんだろうけど・・・読んでないから俺もわかんね」

一「とりあえず、着けてみろよ」

作「着方がわからん！！」

一「・・・・駄目だなコレは」

第二十一話　欲望はあらゆるものを凌駕する（前書き）

気付けば一週間連投・・・どんだけ頑張るんだよ俺・・・

第二十一話　欲望はあらゆるものを凌駕する

雲母（龍那）ＳＩＤＥ

ゼ「何だあの光は・・・」

雲「な、何これ・・・？　一成さんの力が増幅するのと反比例に、凄い勢いでマナが消えて行く・・・」

＜チッ！　あの馬鹿！　一体何をしやがったんだ！＞

ゼ「どうかしたのかね？」

雲「あ、あの・・・失礼します！」

ゼ「お、おい、待ちたまえ・・・！」

雲母（龍那）ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＩＮ　ＳＩＤＥ

一「はやて・・・よく戻って来てくれたな」

は「う、うん・・・というか、ほんまに一成君？」

一「ああ、そういえばこの姿を見せるのは初めてだったよな」

シ・シャ・ヴィ「「「・・・・・／／」」」

一「どうかしましたか？」

シ「い、いや！　何でもないぞ！」

シャ「え、ええ！　何でもないわ！」

ヴィ「こ、こっち見んな！」

一「？」

ザ「いい体つきだ・・・今度手合わせを願いたいものだな」

一「はは・・・俺でよければ付き合うよ」

な「一成君・・・私、何も出来なかった・・・」

一「何言ってるんだ。キミははやてを助けてくれたじゃないか。そうだろフェイト？」

フェ「うん、なのはがいなかったら多分助けられなかった」

ユ「あの砲撃は凄かったもんね」

アル「フェイトだって充分凄かったさ」

ク「一成、キミの無事を喜んでいたいが・・・今は時間がない。やれるか？」

一「問題無い。すぐに終わらせてみせるさ」

全員と言葉を交わし、改めて無明と向かい合う。

無「ふ、ふふ・・・絆の力だかなんだか知らないけど、あなたの大切な家族はまだこっちにいるのよ？」

蹲り、倒れていた神奈と天音がゆっくりと立ち上がる。何でそうなっていたかはわからないが、おそらく龍那が何かやったのだろう。

一「（容赦無いからな彼女は・・・）」

神「か、一成・・・！？」

天「よくぞ・・・よくぞご無事で！！」

一「待たせたな二人とも・・・今、助けるから」

無「今度こそ終わりよ！」

無明の指示で、再び襲い来る二人・・・だが、俺は全く焦ることなくその場に立ちつくしていた。

シ「何をしている秋月!?　早く逃げろ!」

一「大丈夫ですよシグナムさん」

≪そうだ・・・うろたえる事はない。そなたはただ言葉を発すればよいのだ≫

直接語りかけて来る原初存在の言葉に従うように、俺は静かに口を開いた。

一「二人とも・・・『武器を下ろしてくれ』」

神・天「「え・・・・・」」

スッ・・・・

俺の言葉に、二人は静かに武器を下ろした。

無「な、何をしているの二人とも!　どうして武器を下ろすのよ!?」

神「な、何じゃ今のは・・・」

天「無明の支配・・・それを上回る何かが私達を・・・」

戸惑う二人に、俺はゆっくりと近づいた。

一「すまなかったな二人とも・・・俺の所為で辛い目に遭わせてしまった」

天「か、一成様！　近づいてはいけません・・・！」

一「大丈夫・・・」

ギュッ・・・

右腕で神奈、左腕で天音を優しく抱き締める。

一「今度こそ守ってみせる。だから・・・『帰って来い』・・・神奈・・・天音・・・・」

パキィィィィィィィィン！！

その瞬間、二人を支配していた何かが粉々に砕け散った音がした。

一「二人とも・・・体を動かしてみな」

神「・・・う、動く・・・体が・・・！」

天「自由に・・・自由に動きます！」

≪二人の支配は、そなたの『支配』に上書きされた。もう・・・操られる事もないだろう≫

俺は、二人を抱き締める腕に力を込めた。家族の温もりを・・・感触を・・・しっかり確認する為に。

神・天「「あ・・・ああ・・・・！」」

一「お帰り・・・神奈、天音・・・・」

神「一成ぃぃぃぃぃ！！　うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

天「一成様・・・一成様ぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

俺の胸で大粒の涙を流しながら、二人も俺を抱き締め返してくれた。

無「何でよ！　何で支配が解けるのよ！　ありえない・・・ありえないわ！！」

一「俺の『支配』がキミの支配を上回った・・・それだけだ」

これで二人は大丈夫。次は・・・

刹「・・・・」

一「キミの番だ刹那」

神「・・・・一成、刹那は妾達に任せてくれぬか？」

一「え？」

俺からそっと離れた神奈が刹那を見つめつつそう言った。

天「ご迷惑をかけてしまったお詫びをさせて頂きたいのです。幸い、彼女相手なら奥の手が使えそうですから」

一「わかった。二人に任せるよ」

自信満々に答える天音。俺は任せる事に決めた。

無「やらせないわ！　お姉様だけは絶対！！」

一「キミの相手は俺だ」

ガキィィィィィィィン！！

無「邪魔しないで！」

一「さっきまでの状況と逆だな無明」

無「うるさい！　どけぇ！！」

一「だが断る」

ガキィィィィィィィィン！！

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

なのはＳＩＤＥ

神「なのは・・・お主達にも迷惑をかけたの」

私達の所へやって来た神奈さんが頭を下げた。

な「そ、そんな、頭を上げてください！」

フェ「そうですよ！　私達、迷惑なんて思ってませんよ！」

天「ありがとうございますフェイトちゃん」

は「なのはちゃん、フェイトちゃん、この人達は？」

な「一成君の家族だよ」

フェ「ずっと無明に操られていたの」

は「そうやったんか・・・」

神「お主が八神　はやてじゃな？　妾の名は神奈じゃ」

天「私は天音と申します」

は「は、初めまして」

神「実はの、今から刹那の目を覚まさせてやろうと思っておるのじゃが、お主達にも協力して欲しいのじゃ」

な「もちろんです！　ね？　みんな！」

私が聞くと、みんなはしっかりと頷いた。

天「ありがとうございます。では・・・」

天音さんの口から出た作戦は、私の予想とは大きく違っていた。

な「そ、そんな事でいいんですか？」

天「ええ、彼女には一番の気つけになるはずです」

神「では、頼むぞ・・・」

そう言って、二人は刹那さんの元へ向かって行った。

ユ「ほ、ホントに効果があるのかな？」

ク「二人が言うなら間違いないだろう。元々一つの存在だったらしいしな」

アル「そうだね、今は信じるしかないよ」

シ「わ、私達もですか、主はやて？」

は「もちろんや」

なのはＳＩＤＥ　ＯＵＴ

神奈・天音ＳＩＤＥ

刹「・・・・」

神「刹那よ・・・こうして現実で顔を合わせるのは初めてじゃな」

天「一つだった私達が、それぞれ独立した存在になるなんて・・・この点に関しては無明に感謝するべきなのかもしれませんね」

神「そうじゃな。そして・・・これからも三人で一成の傍に居る為にも、お主の目を覚まさなければならん」

天「私達は霊剣・・・あなたは神剣・・・・普通に戦えば私達が負けるでしょう。あくまで・・・戦えばの話ですけど」

二人は武器も構えず、大きな声で話し始めた。

神「天音よ！　今回の件では一成に大変な迷惑をかけてしまったの！」

天「はい！　この戦いが終わったら、これまで以上にご奉仕しなければなりませんね！」

神「ほう！　具体的には？」

天「そうですね～～・・・毎日お風呂で背中を流して差し上げましょうか！」

刹「・・・・（ピク！）」

神「妾は寝る時に抱き枕にでもなってやろうかの！　もちろん、妾の胸に顔を埋めてのぉ！」

刹「・・・・（ピクピク！）」

天「でしたら！　私はマッサージを・・・！」

神「ならば！　妾は耳掃除じゃ！」

刹「・・・・（ピクピクピク！）」

な「だ、だったら！　私は翠屋で一成君にケーキをあーんしたいです！」

神奈達に続くように、なのは達も大きな声でしゃべりだす。これこそが、天音がなのは達に伝えた作戦だった。

フェ「わ、私は・・・また一成とデートしたい！」

ユ「ぼ、僕は、フェレットの姿でモフモフされたいな！」

アル「なら、アタシは散歩にでも付き合ってもらおうかねぇ！」

ク「僕は、仕事を手伝ってもらうか！」

は「ずるいでみんな！　そんなら、私は一成君に手料理でもご馳走

しようかな！」

≪私もお付き合いします主！≫

シ「で、では・・・私は手合わせを！」

シャ「料理特訓に付き合ってくれるかしら！」

ヴィ「アイス食いに行くぞ！」

ザ「シグナムと同じく・・・俺も手合わせを願う！」

一成にしたい事、して欲しい事を告白する一同。すると、刹那に小さな変化が生じた。

刹「・・・・ぞ」

僅かに口を動かす刹那、それを見て神奈はさらに続ける。

神「刹那は一成に何をしてやるのじゃ？」

天「あ、ごめんなさい！　操られているあなたには関係ありませんでしたね！」

神「一成は妾達が満足させてやるからの！　お主は無明と仲良くやっとれ！」

刹「・・・・さんぞ」

天「何ですか刹那？　もっと大きな声で言ってくださらないと聞こえませんよ？」

そして、刹那の表情が無表情から怒りに変わったと思った次の瞬間・・・

刹「許さんぞ・・・我を差し置いて、我が君とのそのような嬉し恥ずかしイベントなど・・・我は許しはしないぞぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！」

雄叫びと共に、刹那は無明の支配から解き放たれた。

無「お、お姉様！？」

無明の目が見開かれる。完璧な支配だった刹那が正気を取り戻した事実に、明らかな動揺が見てとれる。

一「刹那！」

無明に向き合っていた一成も、三人目の家族が戻って来た事に喜び

の笑顔を浮かべている。

無「お姉様！　何で！？　どうして・・・！？」

神「無明よ・・・確かにお主の支配は完璧だったのじゃろう」

天「ですが・・・あなたは刹那を甘く見過ぎていたのです」

無「ど、どういう意味よ！？」

刹「我が君！　我も奉仕してやるぞ！　もちろん・・・（ピー）でも（ピー）でも（ピー）でも、何でもな！！」

天「それはあなたのやりたい事でしょう・・・」

神「一成への収まる事の無い欲望・・・それを甘く見たお主の負けじゃ！」

神奈・天音ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＩＮ　ＳＩＤＥ

一「刹那！」

呆然としている無明をしり目に、俺は刹那に向かって六枚になったハイロゥを羽ばたかせた。

刹「我が君！　さあ、すぐに家に戻るぞ！」

一「ちょ、刹那！？」

神「いいかげん落ち着けぃ！」

パッカァァァァァァァン！！

刹「・・・むっ、我は一体・・・」

天「成功ですね・・・ちょっと効果が強すぎたみたいですが」

一「しかし、あんな方法があったとは・・・」

神「妾達と違って、刹那は神剣じゃ。抵抗する事自体は簡単だったはずじゃろう」

天「支配を押し返す強い意志・・・それを呼び起こしてあげるだけでよかったんです」

神「まあ、こんな事が通用するのは刹那だけじゃろうがな」

俺と刹那が深い絆で結ばれていたおかげだな。だが・・・なんでだ

ろう、素直に喜べない自分がいる。

刹「何だか・・・長い夢を見ていた感じだな。妙にスッキリしている」

天「私達と違って、何が起こっていたかは憶えていないようですね」

刹「確かに憶えていないが・・・ヤツが元凶だとは理解している」

無「・・・・お姉様」

俺達の前に、ゆっくりと無明が降り立った。

刹「おいたが過ぎたな光明・・・・お仕置きの時間だ」

無「お姉様のお仕置き・・・・はい、喜んで！」

刹「え？」

無「・・・はっ！」

シーーーーン・・・・・・

無「こ、コホン・・・とても魅力的なお誘いですが、お断りさせて頂きます」

刹「ああ・・・今ので我もやる気が失せた」

無「そ、それよりお姉様。正気を取り戻した今、改めてお聞きします・・・私の所へ、戻って来てもらえませんか？」

刹「くどい・・・今の我は我が君の神剣だ。それに、我といたらお前は・・・」

無「・・・そうですか。やはり、その男が私の邪魔をするんですね」

無明が俺を睨みつける。その視線を真っ直ぐ受け止め、俺は前に躍り出た。

無「決着をつけましょう旅人さん・・・小細工なしで、正々堂々と・・・勝った方がお姉様を迎える事が出来る」

一「ああ・・・受けて立とう」

俺は剣を構えた。

一「一対一だ・・・みんなは下がっていてくれ」

神「わかった・・・武運を祈る」

天「勝利をお祈りしております」

刹「頼んだぞ我が君。光明の・・・あの娘の闇を払ってやってくれ」

無「いくわよ・・・・！」

器を構え、一気に距離を詰めて来る無明。

一「オーラフォトンブレード！」

ガギャン！！！！

無「きゃあっ！？」

受け止めようと剣をぶつけると、予想に反し、無明の体が大きく吹き飛んだ。

一「これは・・・」

剣を見る・・・オーラフォトンを纏った刀身は、今までに見た事ない強力な光を発していた。その余りの強さに、剣自体が震えている。

≪『支配』だけが力ではない・・・そなたのオーラも、爆発的に強まっているはずだ≫

ドクン！

一「ぐっ・・・！」

≪だが、時間をかけているひまはないぞ。こうしている今も、そなたのマナは失われているのだからな≫

一「（ああ、わかっている）」

無「だったら・・・これならどう！」

詠唱を始める無明・・・やがて、彼女を囲うようにオーラフォトンで出来た漆黒の槍が浮かび上がる。

無「避けられるかしら・・・オーラフォトンレイ！！」

剣では全て防げない・・・だったら！

一「（ルキア・・・キミの力を貸してもらうぞ！）」

剣が消え、俺の手に握られていたのは、一振りの刀だった。

一「飛燕の太刀！！」

放たれた五つの斬撃・・・それが、迫り来る槍を全て撃ち落とした。

天「ふ、普通に使ってますけど・・・あの力は一体・・・・」

神「妾達が居らぬ間に何があったんじゃ・・・」

刹「あの刀・・・確かルキアという者が同じ物を使っていなかったか？」

神「そうじゃったか？」

天「言われてみると・・・確かに見憶えが・・・・」

一「はあぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

ギィィィィィィィィン！！

ぶつかり合う刀と器・・・その瞬間、武器を通して何かが伝わって来た。

一「（これは・・・無明の記憶？）」

刹那と出会う前・・・刹那との出会い・・・そして別れ・・・・鮮明な映像と、感情が、伝わって来る。

≪感応現象か・・・そなたとこの神剣は相性がいいのかもしれんな≫

追撃に備えつつ、その場から下がる。だが、無明はその場から動こうとしなかった。

無「・・・・見たの？」

記憶の事だろう。俺は無言で頷いた。

無「わかったでしょう？　私がお姉様に固執する理由。気の遠くなる年月の中、私に手を差し伸べてくれたのはお姉様だけだった。お姉様だけが・・・私を助けてくれた！」

一「・・・・」

無「あなたが私の記憶を見たように、私もあなたの記憶を見たわ。仲間に囲まれて、幸せそうにあなたは笑っていた・・・それに、この世界でも・・・」

なのは達をチラッと見て、無明は言葉を続ける。

無「あなたと違って私にはお姉様しかいないのよ！　お姉様を失ってしまったら、私は一人ぼっちになっちゃう！　もう一人は嫌！　嫌なのよ！」

刹「光明・・・」

無「ずっとお姉様を想い続けた！　ずっとお姉様を探し続けた！　なのに・・・お姉様はあなたと契約していた！　どうしてよ！　どうして契約なんてしたのよ！」

俺は黙って聞き続けた。これは彼女の心からの叫びだ、絶対に聞き逃してはならない。

無「あなたさえいなければ・・・あなたさえいなければ！　消えてよ！　お願いだから消えてよーーーーっ！！！」

一「ッ・・・・！」

想いを爆発させ、涙を流しながら器を振り上げる無明。

ザシュ！

神・天・刹「「「なっ！？」」」

無「え・・・・」

一「ぐうっ・・・！」

その一撃を・・・刹那への想いが込められた一撃を・・・・俺は黙って受け止めた。

無「ど、どうして・・・こんな破れかぶれな一撃・・・・」

一「避けたら・・・キミはその想いをどこにぶつければいいんだ？」

無「ッ！？」

一「全て吐き出してくれ・・・その為なら、何度だって受け止めてみせるよ」

無「何で・・・何で敵である私の事を・・・・」

刹「・・・それが、我が君だからだ」

無「お姉様・・・」

神「天音！　回復魔法を！」

天「わかっています！」

神奈に支えられ、天音に回復魔法をかけてもらう。数秒後、傷は塞がり、痛みも治まった。

刹「悲しみを背負っていれば敵であろうと手を差し伸べる・・・もはや甘いという言葉では収まりきらんな」

無「・・・・」

刹「だがな・・・そんな甘い我が君だからこそ、我は契約してよかったと心から思っている。・・・一つ教えてやろう、我が君はな、敵に対して『キミ』という言葉は決して使わない」

無「・・・そういえば、出会ってから今まで、この人は私の事をずっと『キミ』って・・・」

刹「我が君は・・・最初からお前を敵とは思っていなかったのだ」

一「はは・・・刹那にはお見通しだったか」

無「で、でも・・・私、あなたにいっぱい酷い事を・・・」

一「確かに、神奈達を奪われ、操られ、戦わせられ、怒りを感じたのは確かだ。だが、対峙するたびに、瞳に悲しみを宿しているキミを見て、俺はどうしても敵とは思えなかった」

神「一成はそういう事に敏感じゃからな」

天「その敏感さを、他の事でも発揮して頂きたいものですけどね」

一「？」

刹「なあ光明・・・我が君を信じてみないか？　我が君なら、お前を必ず受け入れてくれる」

無「・・・駄目。そう言うお姉様だって、結局私から離れていったじゃないですか」

刹「それは・・・」

一「刹那・・・本当の事を教えてあげたらどうだ」

無「本当の・・・事？」

刹「我が君・・・」

一「話さないと・・・伝わらない事もあるんだぞ」

刹「・・・わかった」

少し間を置き、刹那はゆっくりと語り出した。

刹「光明・・・お前と別れようとしたのは、お前を危険から遠ざける為だったのだ」

無「ど、どういう事ですか？」

刹「あの時、我は何者かに狙われていた。我と共にいたお前がいつ襲われるかもわからなかった以上、お前を傍に置いておく事は出来なかった」

≪おそらく・・・狙っていたのは欠片だろう。ワタシ達が欠片を追っていたように、欠片もワタシ達を滅ぼそうとしていたからな≫

一「（本当に多くの世界に跳んでいるんだな・・・）」

≪散らばった欠片は幾万・・・そう教えたはずだ≫

無「どうして本当の事を言ってくれなかったんですか！」

刹「言えばお前は離れようとしなかっただろう。だから、我は本当の事を言わなかった」

無「だったら・・・だったら私のした事は・・・・」

フルフルと震える無明。そんな彼女を、刹那は優しく抱き締めた。

ギュ・・・・

無「離してください！　私、お姉様に抱き締めてもらう資格なんて・・・！」

刹「全ては過去の事だ・・・それに、お前の気持ちを考えなかった

我にも責任がある」

ほんの少しの擦れ違いが、二人の仲を大きく離していた。だが、それももう終わりだろう。

刹「我はお前を許す・・・だから、お前も我を許してくれないか光明・・・？」

無「お姉様ぁ・・・お姉様ぁぁぁぁぁぁぁ！！　ごめんなさい！ごめんなさい！！　うわぁぁぁぁぁぁん！！！」

そこにいたのは強力な神剣の意志ではなかった。そこにいたのは・・・大切な人にしがみついて泣いている、一人の寂しがりやな少女だった。

神「終わったの・・・」

一「ああ、後は・・・」

天「闇の書だけ・・・ですね」

愁いは無くなった・・・後はもう一つの問題を片付けるだけだ。

ドクン！

一「（俺の力が・・・尽きる前にな）」

第二十一話　欲望はあらゆるものを凌駕する（後書き）

作「ついに・・・ついに三人が帰って来たぞ～～～！」

神「こやつの声も久しぶりに聞くの」

天「ふふ、以前はうるさかっただけなのに、今はなんだか嬉しいですね」

刹「そうだな。だが、いずれまたうるさく感じるようになるのだろうな」

一「お帰り三人とも」

神・天・刹「「ただいま（じゃ）（です）（だ）！　一成（様）（我が君）！！」」

作「うん、相変わらずの対応の違いで安心したぜ」

神「今回で無明との決着がついたが・・・まさかこんな終わり方をするとはの」

天「賛否両論でしょうね。あれだけ好き勝手やったんですから」

作「関係ねえ！　つまらないと言われようと、期待はずれと言われようと、俺は俺の書きたいように書く！」

刹「だが、今回ばかりは我は感謝するぞ。光明を助けてくれたのだからな」

一「しかし・・・段々シリアス分が薄くなって来たな」

作「シリアス？　知らん！」

天「贈り物報告会に移ります・・・このセリフも久しぶりですね」

神「まずは緋水様からじゃ。オリハルコンの剣に盾、鎧を頂いたぞ」

刹「我が君よ、装備してみたらどうだ？」

一「俺が？　ん・・・どうだ？」

刹「うむ！　よく似合っているぞ！」

刹「次はマサ殿だな。全員分の手作りドーナツのセットと、付け合わせのコーヒーに紅茶、ココアを頂いたぞ」

神「おお！　正に今回にピッタリじゃな」

刹「ん？　もう一つあるぞ。これは・・・」

？「うう～ん・・・はっ！　ここは何処だ!?　汝等は誰だ!?」

作「おお！　キミはデモンベインのアル・アジフ（フィギュア販売されている大人バージョン）じゃないか!!」

天「お客様ですか？　では、もう一つ用意しますね」

アル「うむ、頂こう」

作「即行でくつろいでる！？」

一「清浦刹那様からは、雲母宛てにブラックキャットのハーディスを頂いたぞ」

作「前回やり過ぎたからな・・・ちなみに、今の一成でも龍那と雲母には勝てません」

天「どこまで強いんですか彼女達・・・」

作「『越える者』はだてじゃないって事だ」

第二十二話　闇と欠片（前書き）

ラストまで突っ走ります！

第二十二話　闇と欠片

無「あ・・・・」

無明に変化が生じる。眼帯が消え、纏っている服と髪が、闇色から純白に変わる。そして、禍々しい気を発していた器が、斧からレイピア状の物に形を変えていった。

刹「ようやく我の知っている光明が戻って来たな。やはり、その姿がよく似合っている」

天「か、変わり過ぎでしょう・・・」

神「最早別人じゃな」

一「けど、俺もこっちの方が似合ってると思うぞ」

無「あ、ありがとう・・・／／」

一「もう無明とは呼べないな。俺も光明と呼ばせてもらうよ」

無「あ、あの、旅人さん・・・」

一「ん？」

無「今までの事、本当にごめんなさい。許してもらえるとは思ってないけど、どうか謝らせてください」

そう言って、無明・・・いや、光明は頭を下げた。

一「そうだな・・・俺の言う事を一つだけ聞いたら許してあげるよ」

光「な、何・・・？」

俺は一呼吸置き、笑顔で口を開いた。

一「旅人さんじゃなくて、名前で呼んでくれないかな。もう、俺とキミは敵じゃないんだからな」

光「そ、そんな事でいいの？　今なら脱げって言われても躊躇いなく脱ぐけど・・・？」

一「キミの中での俺のイメージって・・・」

刹「光明、我が君はそのような露骨な事を命じたりはしないぞ」

神「それをお主が言うのか・・・」

刹「それにな・・・そういうのは我の専売特許だ」

天「見事にオチもつけましたね」

光「えっと・・・・」

一「・・・彼女は無視してくれ」

刹「ひどいぞ我が君」

神「話が進まんから引っ込んどけ！」

グイ！

刹「むっ、そんなに引っ張ると服がバラバラになってしまうぞ」

天「どれだけ耐久性の無い服着ているんですか！！」

神奈と天音によって、刹那は引き摺られていった。

一「それで・・・どうかな？」

光「な、名前で呼べばいいのよね？」

一「ああ、なんだったら愛称とかでもいいぞ」

冗談でそう言ったのだが・・・

光「じゃ、じゃあ・・・一兄って呼んでいい？」

一「なん・・・だと・・・・・」

光明は、変化球どころか、魔球を全力で放り投げて来た。

光「あ、あなたはお姉様の契約者でしょ。だ、だから、私にとっては兄みたいなもので・・・」

一「すまない・・・その主張は色々突っ込みどころがある気がするんだが・・・」

光「駄目・・・・？（ウルウル）」

一「（こ、これは・・・アリシアちゃんの時と全く同じ展開だ！）」

光「駄目・・・なの・・・・？」

一「そ、それでキミが呼びやすいなら、俺は何も言わないよ」

光「やったぁ！！」

性格変わり過ぎだろう・・・・いや、これが彼女の本来の姿なんだろうな。孤独の辛さを知っているからこそ、手を差し伸べてくれる相手を何よりも大切にする。歪んでしまったのも、その想いが強すぎたのが原因だろう。

な「一成君！」

一「なのは、こっちは全て終わったよ」

ユ「そ、その子が無明？」

アル「どうなってんだい。さっきまでと全然雰囲気が変わってるじゃないか」

一「彼女は本当の名前を取り戻したんだ。今の名前は光明だよ」

光「あなた達にもずいぶんひどい事をしてしまった・・・ごめんなさい」

な「いいですよもう。こうして謝ってくれましたし」

フェ「うん。それに、一番辛かった一成が許したのに、私達が許さないのは違うと思うし」

シ「私達は、先程の戦い以外で何かされたわけでもないからな」

は「シグナムの言う通りや。一成君が許したんなら、私らは何も言わんよ」

光「あなた達・・・」

一「みんな優しいな・・・というか、甘くないか？」

ク「ふっ、キミだけには言われたくないな一成」

全員「あはははははは！！」

クロノのツッコミで、場には笑顔が溢れた。

光「暖かい・・・人って、こんなに暖かいものだったんだ・・・」

一「よかったな光明」

光「うん！　一兄ぃ！」

な・フェ・は「「「一兄？」」」

三人の笑い声がピタリと止まる。

一「？　どうしたんだ三人とも」

な「一成君・・・今の呼び方は何？」

フェ「姉さんという妹がいるのに・・・どういう事？」

は「キッチリ説明してもらおか」

詰め寄って来る三人。心なしか不機嫌なような気が・・・

ユ「な、なのは？」

アル「ど、どうしたんだいフェイト？」

シャ「落ちついてはやてちゃん、ね？」

な・フェ・は「「「（ユーノ君）（アルフ）（シャマル）は黙っ（てて）（といて）！！！」」

ユ・アル・シャ「「「はいぃ！！」」」

ク「き、キミ達・・・今は時間が・・・・」

な「・・・・エクセリオンバスター」

ク「何でもない！！」

まだ戦いは終わっていないんだが・・・・何だこの状況・・・・

？「ははは、何とも楽しそうな輪だな」

一「え？」

上空からの声に顔を上げると、初めて見る男性がこちらに向かってゆっくりと降りて来た。

龍「おっさん、オレ達より後から向かってたはずなのに、何で先についてんだよ！」

その後を追って、龍那も姿を現した。

男性「なに、これでも速さには自身があるのでね。先程も雲母君の一撃を避けてみせただろ？」

＜も、もう言わないでくださいよ～～＞

光「ゼノン・・・」

一「あの人が・・・」

男性「やあ、顔を合わせるのは初めてだな一成君。私はゼノン・・・名前くらいは知っていてくれていたかな？」

光「ゼノン・・・私・・・・」

ゼ「いい顔をしている・・・・どうやら、キミを包んでいた闇は払拭されたようだね」

光「・・・・うん」

ゼ「キミの願いは成就した。もう・・・戦う理由もないな」

ゼノン・・・さんは、両手を上げ、降参の態度を示した。

龍「どういうこった？　まだ決着はついてねえだろ」

ゼ「私は彼女の為に戦ってきた。その彼女が願いを果たした今、キミ達と戦う理由はないよ」

一「ゼノンさん・・・あなたは」

ゼ「ッ！　ははは！　さすが天音君の主だな、キミも私にさん付けかね！」

一「？」

ゼ「ククク、いや、こっちの話だよ」

神「戻ったぞ」

ユ「神奈さん、どこ行ってたんですか？」

天「ちょっと用事がありまして」

な「あ、あの・・・何で刹那さんそんなにボロボロなんですか？」

刹「なに、少し大地の声に耳を傾けていただけだ」

ク「みんな、そろそろ纏めさせてくれないか。まだ全てが終わったわけじゃないんだぞ」

クロノの言葉に意識を切り替える。そう、最後にして最大の問題がまだ残っている。

ク「防衛プログラムに対する手段は二つある。一つは・・・極めて強力な氷結魔法で停止させる事。そしてもう一つは・・・軌道上で待機しているアースラの魔導砲『アルカンシェル』で消滅させる事。これ以外に方法があるか、夜天の書の主とその守護騎士達に聞きたい」

シャ「ええっと・・・最初のは多分難しいと思います。主のない防衛プログラムは、魔力の塊みたいなものですから」

シ「凍結が成功しても、コアがある限り再生機能は止まらん」

ヴィ「アルカンシェルも絶対駄目だ！　こんな所で撃ったらはやての家までぶっ飛んじゃうだろ！！」

な「そ、そんなに凄いの？」

ク「わかりやすく説明するとだな、アルカンシェルとは発動した場所を中心に百数十キロ範囲の空間を歪曲させながら対象を反応消滅させる魔導砲なんだ。周辺への被害も甚大なものとなる」

な・フェ「「反対！　絶対反対！！」」

刹「ふむ・・・まさに、「アルカンシェル　駄目絶対！」といったところか」

天「どこの標語ですか！」

ゼ「うまいな・・・後でオセロセットを進呈しよう」

光「あ、あなた、そういうキャラだったかしら？」

ク「僕も艦長も使いたくはないよ・・・けど、暴走が始まれば、それ以上に被害が大きくなるのは間違いない」

＜じゃ、じゃあ！　私がジェノサイドパニッシャーで・・・＞

龍「アホか！　それより、オレがそのコアとやらをボコボコに・・・！」

一「オーラフォトンノヴァも使えそうにないな」

≪みんな！　暴走臨界点まで十五分を切ったよ！　会議の決断はお早めにね！！≫

エイミィからの通信で、タイムリミットが伝えられた。

ク「何か・・・何かないのか？」

ザ「・・・スマン、あまり役に立てそうにない」

シ「暴走に立ち会った経験は、我等にもほとんどないのだ」

シャ「でも、何とか止めないと・・・はやてちゃんのお家が吹き飛

んじゃうのは嫌ですし」

ク「い、いや、そういうレベルの話じゃないんだが・・・」

神「しかし、この冬真っ盛りな時期に、家を失うのは死活問題じゃぞ」

アル「ああもう！　まどろっこしいのは苦手なんだよ！　みんなでズバッとぶっ飛ばしちまうわけにはいかないのかねぇ！！」

やはり、ここはあの手しかないか・・・

一「・・・エイミィ、アルカンシェルは宇宙空間でも撃てるか？」

フェ「一成？」

≪アースラを嘗めてもらっちゃ困るよ一成君！　宇宙だろうとどこだろうと、発射ＯＫだよ！！≫

一「そうか、ならいけるな・・・」

ク「一成、一体何の話を・・・」

一「転送魔法でコアを衛星軌道上に転送し・・・・アルカンシェルを撃ち込む！」

全員「ッ！？」

ゼ「なるほど、たしかにそれなら周りの被害を気にしなくて済むな」

ク「そ、そんな無茶苦茶な方法聞いた事がないぞ！」

一「だが、これが『最善』であり、『最良』の方法だ」

ク「しかし・・・」

な「やろうよクロノ君！」

悩むクロノに、なのはが声をかける。

な「私達は、ただ防衛プログラムを止めればいいんじゃない。私達の大切な人が住んでいるこの街を守らないと意味がないの！」

ク「なのは・・・」

な「お願いクロノ君！　私は、少しでも可能性があるなら、懸けてみたいの！」

押し黙るクロノ。やがて、その口がゆっくりと開かれる。

ク「まったく・・・キミ達と一緒にいると、一生体験出来ないような事が次々に舞い込んでくるな」

な「・・・・・」

ク「・・・・やろう。この街を・・・キミ達の街を守るために！！」

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

アリサ・すずかＳＩＤＥ

ア「収まったわね・・・」

す「うん・・・何だったんだろうあの銀色の柱」

転送された二人は、先程出現した光の柱について話していた。

ア「ホントに何だっていうのよ・・・まさか、こんなのがずっと続いたりしないわよね」

珍しく弱音を漏らすアリサ。そんな彼女とは対照的に、すずかは落ち着いていた。

す「私は、大丈夫だと思うな・・・何となくだけど」

ア「？」

す「きっと・・・今も戦ってくれてるはずだから」

ア「なのはと・・・フェイトが？」

す「うん。そして・・・」

首飾りを握り締めるすずか。

す「一成君も・・・・」

ア「・・・そうね、何でかわからないけど、アイツが戦ってくれてるのが私にもわかる」

す「だから、今は一成君達を信じよう。私達に出来るのは、それくらいしかないから・・・」

ア「うん・・・・」

頷き、アリサは海に見える黒い淀みに視線を移した。

ア「（三人とも・・・ちゃんと帰って来ないと許さないんだからね！！）」

アリサ・すずかＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＩＮ　ＳＩＤＥ

≪ホントに、彼の言う事には毎回驚かされてばかりね≫

≪計算上では充分実現可能って所がまた怖いですね・・・クロノ君！　こっちのスタンバイは完了！　暴走臨界点まであと十分！≫

ク「みんな、準備は今の内に済ませておいてくれ！」

は「シャマル」

シャ「はい、みなさんの治療ですね。クラールヴィント、あなたの本領発揮よ」

≪Ｊａ．≫

シャ「静かなる風よ、癒しの恵みを運んで！」

な・フェ「「ふわあ・・・・」」

優しい風が二人を包む。すると、二人の傷があっという間に消えていく。

な「すごい・・・力が溢れて来る」

フェ「カ、カートリッジも補充されてる！」

シャ「湖の騎士シャマルと、風のリング『クラールヴィント』・・・癒しと補助が本領です！」

な「ありがとうございますシャマルさん！」

≪暴走開始まで後二分！≫

ドクン！

一「（どうにか保ってくれそうだな・・・）」

≪・・・・・≫

一「（どうした？）」

≪あの反応・・・まさか≫

≪暴走開始！　来るよみんな！！≫

全員の視線が集中する中、黒い淀みの周囲から闇色の光が立ち昇り始める・・・それが、暴走開始の合図だった。

ク「夜天の魔導書を・・・呪われた闇の書と呼ばせるようになった闇の書の『闇』・・・」

その瞬間、淀みは急激に膨れ上がり、一気にはじけ飛んだ。

闇「～～～～～～～！！！」

そこから現れたのは、銀の髪をたなびかせ、謳うように声をあげる女性の上半身。そして・・・様々な生物が混じり合った醜悪な下半身。

な「あれが・・・闇」

ゼ「ふむ、中々面白い姿だな」

光「ちょ、ちょっとゼノン！」

ゼ「はは、冗談だ・・・」

闇「・・・ゲンショ・・・ソンザイ」

ゼ「ッ！」

フェ「しゃ、しゃべった！？」

闇「ミツケタ・・・・ゲンショソンザイ・・・・ホロボス・・・ホロボス・・・・」

一「（あれは・・・まさか・・・）」

≪欠片の気配を感じる・・・ヤツの狙いはそなただ！≫

闇「アァァァァァァァァァァ！！！」

絶叫と共に、女性の体が弾け飛ぶ。そして・・・そこから現れたのは、巨大な翼に鋭い爪を持つ、まさに化物という言葉が相応しい上半身だった。

≪な、何これ！？　上半身から全体に向かって何かが変わっていってる！≫

な「な、何が起きてるのヴィータちゃん！？」

ヴィ「聞くな！　アタシだってわかんねえんだよ！！」

は「リィンフォース！　何が起きとるん！？」

≪防衛プログラムの内部から、何かが浸食を施しています！！≫

闇「ホロボス・・・ホロボス・・・・」

ゼ「その声・・・その姿・・・・忘れない・・・忘れるはずがない・・・・」

光「ゼノン？」

ゼ「・・・・見つけたぁ」

光「ッ！？」

喜悦を顔に張り付けるゼノンさん。その表情は・・・先程までの彼からは想像出来ないほどの歪なものだった。その変容に、光明まで驚いている。

ゼ「この世界に来てよかったよ！　ついに・・・ついに我が悲願を果たす時が来たぁ！」

光「な、何を言ってるのゼノン！？」

ゼ「貴様を殺す！！　隊長ぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！！」

凄まじい咆哮と共に、ゼノンさんは防衛プログラムに突撃した。

アル「い、いきなり何なんだいあの男は！？」

神「隊長・・・まさか！」

一「何か知ってるのか神奈？」

天「アレは・・・ゼノンさんが追っていた仇です」

二人の口から語られた彼の過去は、俺達を驚愕させるのに充分の内容だった。

光「私・・・そんな話聞いた事ない・・・・」

ユ「な、何でそんなヤツが防衛プログラムの中に！？」

シ「おそらく、過去に私達のいずれかが蒐集したのだろう」

ヴィ「で、でもよ！　何で今になってそんなヤツが出てくんだよ！？」

≪欠片はあらゆるものを利用する・・・蒐集とやらを受けた時に、意識と力を潜り込ませていたのだろう≫

確かに、様々な世界を移動し、強力な力を持つ者に出会う機会が多

い闇の書は、欠片にとってまさに最高のゆりかごというわけか。

フェ「そ、そんな事より、今はあの人を止めないと！」

ク「フェイトの言う通りだ！　相手の正体もわからないのに突っ込むなど自殺行為に等しいぞ！」

ゼノンさんを止める為、俺達は防衛プログラムの元へ急いだ・・・

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ゼノンＳＩＤＥ

ゼ「うおおおおおおおおおおおお！！！」

あの時とは違う。今度こそ、我が愛しき者達の無念を晴らしてみせる！！

闇「オマエ・・・チガウ・・・ゲンショソンザイ・・・チガウ・・・」

ゼ「貴様の狙いが私じゃなくとも、私の狙いは貴様だぁぁぁぁぁぁ

！！！」

グシャ！！

闇「ギャアアアアアアアアア！！！」

ヤツの顔面に渾身の拳を叩きこむ。歯、そして骨が砕ける感触が手を通して伝わって来る。

ゼ「まだだぁ！！」

振りかぶり、もう一方の拳を叩き込もうとした瞬間・・・

ガシッ！

ゼ「ッ！？」

闇「オマエ・・・チガウ・・・・」

ザシュ！！

ゼ「ぬあっ！」

爪による一閃が、私の胸を大きく切り裂いた。だが、それを無視し、私は掴まれていた腕を振りほどいた。

ゼ「くっ・・・・！」

息を整える為、一度大きく離れる。すると、私を追って来たであろう一成君達が姿を現した。

光「ゼノン！」

ゼ「やあ無・・光明。そんなに血相を変えてどうしたんだい？」

光「どうしたじゃないわよ！　あなた、仇を探しているってどうして言わなかったのよ！」

ゼ「どうしてそれを・・・ああ、神奈君と天音君が話したのだな」

光「あなた一人で何が出来るっていうのよ！　ここはお姉様達と協力して・・・！」

ゼ「それは出来ない。ヤツは・・・ヤツだけは私の手で倒す！」

光「ッ！」

パシィィィィィィィン！！

光明の平手が私の頬を打つ。あまりに予想外の行動に、私の胸に宿っていた炎が瞬く間に消えていった。

光「あなたが、自分の娘に似ていたから私に協力していた事も聞いたわ。結局、あなたも私自身を見てはいなかった」

ゼ「・・・・」

光「でも！　そんなあなたに、今まで助けてもらっていた事も事実よ！　そんなあなたを・・・むざむざ死なせるわけないでしょ！」

ゼ「ッ・・・」

光「こ、これでもちゃんと感謝してたんだからね！」

顔を真っ赤にさせ、告白する光明。そんな彼女の姿に、復讐に支配されていた私の心が変わっていく・・・

光「いいから私達と一緒に戦いなさい！　これは命令よ！」

≪私と遊んで下さいお父様！　これは命令です！≫

ゼ「（エミリア・・・）」

そして・・・光明とエミリアの姿が完全に重なったその瞬間、私の心は完全に解き放たれた。

ゼ「・・・やれやれ、仕方ない。お姫様の命令は絶対だからね」

光「じゃあ・・・！」

ゼ「キミ達と共に戦おう・・・復讐ではなく、これ以上マリアやエミリアのような犠牲者を出さないために！」

マリア・・・エミリア・・・私の戦い、どうか見守っていてくれ！

ゼノンＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＩＮ　ＳＩＤＥ

神「・・・強いな」

天「ええ、ゼノンさんは見事に乗り越えられました」

復讐ではなく、守るために戦う・・・今のゼノンさんに敵はいないだろう。

≪え？　これって・・・≫

ク「どうしたエイミィ！？」

≪ぼ、暴走が沈静化！　今そこにいるのはただのプログラムだよ！≫

全員「ッ！？」

龍「オレにもわかるぜ・・・あの野郎が強引に侵食した所為で、全ての機能が働かなくなってやがる」

＜うん、再生機能も無くなってるみたい！＞

一「という事はつまり・・・」

龍「今なら・・・何も気にする事なく思いっきりボッコボコに出来るってこった！！」

最後の最後にイレギュラーが発生したが・・・逆にこっちにとって都合がよくなったな。

な「・・・ふうん」

フェ「・・・へえ」

は「・・・そうなんやぁ」

全員「・・・・・・・・・・・（ニヤリ）」

龍那と雲母の言葉を聞いたなのは達は・・・まさにニヤリという擬音が相応しい笑みを浮かべた。

闇「ッ！？」

その笑顔を見て、プログラムが恐怖に身を震わせたように見えたのは・・・俺の気のせいではないだろう。

第二十二話　闇と欠片（後書き）

作「ゼノンも引き込んだし、次回はいよいよフルボッコタイムだ！　ちなみに、ゼノンが「・・・・見つけたぁ」と言った時の表情は、ガン×ソードのヴァンが『カギ爪の男』を発見した時に見せたあのオリジナル笑顔を想像してみてください」

一「後半の強引な展開は何とかならなかったのか」

作「もう、ラストまで振り向かない！　みなさん！　次回に備えてお気に入りのＢＧＭをご用意ください！」

一「何でだ？」

作「それ聴きながら読んでもらおうとおもって！」

一「何だよそれ・・・」

神「ん？　刹那はどうしたのじゃ？」

天「あ、彼女なら迎えに行ってますよ」

神「迎え？」

刹「待たせたな。連れて来たぞ」

光「こんにちは！」

神「おお、光明ではないか」

一「しかし、最終話までもう少しなのに、ここに来て味方が増えるか」

作「仲間はいっぱいの方が楽しいだろ」

一「それはまあ・・・」

光「一兄～～～♪」

ギュ！

一「どうしたんだ光明？」

神「おい光明！　妾達を差し置いて一成に抱きつくなど許さんぞ！」

光「だったら、あなた達も抱きついたらいいじゃない」

天「そ、そのようなはしたない真似出来ません！」

作「むう・・・俺はとんでもないキャラを作りだしてしまったかもしれんな」

刹「懐く相手が一人増えただけであれほどとは・・・光明、恐ろしい娘！」

一「じゃあ、そろそろ贈り物報告会に移るか」

天「緋水様からネギまの魔法球を頂きましたよ」

作「ネギまか・・・新作としてゼロ魔とどっちにしようか悩んでいたのが懐かしいな」

神「あの世界に跳んだりすれば・・・今度こそ刺されるぞ」

作「原作もあまり読んでないし、結局ゼロ魔になったんだよな」

刹「マサ殿からはシュークリームを頂いたぞ」

光「たくさんありますね。一つ一つ味が違うみたいですよ」

一「・・・よし、作者、これ食べてみろ」

作「いいのか？　頂きま～す！」

一「よし、俺達も食べ・・・」

作「ぶぼッ！？」

神「いきなり吹き出すな！」

天「一成様、何を・・・」

一「い、いや、今回ばかりは何もしてないぞ！」

一「二次元最高様からはパーティー用のケーキを五つ頂いたぞ」

刹「我が君に神奈、天音に、我、そして光明・・・ちょうどだな」

作「え？　俺は・・・」

神「ふむ、今回はこれで終わり・・・」

？「天音っさぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁん！！」

神「な、何じゃ！？」

大「天音さぁぁぁぁぁぁぁぁぁん！」

天「あら、お久しぶりです大和さん」

大「はい！　ずっと心配してましたよ！」

天「ふふ、ありがとうございます」

清「ちょっと大和！　せっかく再会したのにお邪魔したら悪いでしょう！」

一「あ、清浦刹那様」

大「うるさい！　俺の天音さんへの想いは止められないのだ！」

清「はあ・・・しょうがない、力づくで止めますか」

一「大変そうだな、刹那、光明、手伝ってあげてくれないか」

刹「承知した。いくぞ光明」

光「はい！　お姉様！」

清「お願いしますね刹姉、光明」

刹「さあ、我と光明の器を取れ」

清「すごい力・・・これならいける！」

大「天音さん！　今から俺とデートしませんか！？」

天「い、今からですか？」

清「いいかげんにしなさい大和！　クロス・・・ディバイダー！！」

ザシュ！！

大「な、何で一成の技をぉぉぉぉぉぉ！！！」

清「ふう・・・お騒がせしました」

一「・・・・大変ですね」

清「慣れです慣れ」

第二十三話　決戦時に流れる挿入歌ほどテンションを上げるものはない（前書き

ぜひとも、お気に入りの音楽を聞きながら読んでみてください。

第二十三話　決戦時に流れる挿入歌ほどテンションを上げるものはない

ク「エイミィ！　プラン変更だ！　懸念すべき事が無くなった今、ヤツは僕達が倒す！」

≪了解！　援軍も送ったし、思いっきりやっちゃって！！≫

一「援軍？」

？「どうやら、間に合ったようね」

？「フェイト！　兄様！　お待たせ～～！」

フェ「か、母さんに姉さん！？」

現れたのは、プレシアさんとアリシアちゃんだった。

な「な、何でアリシアちゃんが！？」

アリ「えへへ～、こんな時の為に、母様に頼んで魔法の特訓してたんだよ！」

プ「今のこの子なら力になれるはずよ。無論、私もね。大魔導師と呼ばれる所以を見せてあげる」

頼もしい援軍に、なのは達の熱もさらに上昇する。・・・しかし、よく考えると凄いメンバーだな。

≪不思議だな・・・ワタシが欠片相手に憐みの感情を抱くとは・・・≫

一「（そりゃあ、今からこのメンバー全員にやられるわけだからな。・・・正直、俺がヤツの立場だったら泣いてるぞ）」

な「全力全開でいくよ！」

フェ「母さんと姉さんがいれば絶対負けない！」

ユ「力づくなら得意だもんね！」

アル「いいねえ、こういうシンプルなのを待ってたんだよ！」

ク「多くの人の人生を狂わせて来たツケを・・・今ここで払わせてやる！」

は「アレを倒せば今度こそ終わりや！　やるでみんな！」

≪はい！≫

シ「我が剣の切れ味・・・味あわせてやろう！」

シャ「私も全力でサポートするわ！」

ヴィ「ぶっ潰してやる！」

ザ「主達は俺が守る！」

神「妾も全力を出させてもらうかの！」

天「では、私も久しぶりに暴れさせてもらいましょうか！」

刹「光明、しっかりついて来るのだぞ？」

光「はい！　お姉様！」

龍「さてと、何歌おっかな～」

＜ま、また歌うの！？＞

ゼ「はは・・・こんなに頼りになる味方は初めてだよ」

一「（・・・・な？）」

≪・・・ああ、同感だ≫

そして・・・史上稀に見るスーパーフルボッコタイムがついに幕を開けた。

ユ「チェーンバインド！」

アル「ストラグルバインド！」

まずはユーノとアルフ。二人が発動させたバインドが、プログラムの前方に伸びていた触手を纏めて縛り上げ、切り裂く。

ザ「でぇぇぇぇぇぇやぁぁぁぁぁぁ！！！」

さらにザフィーラが続く。魔力で作られた鞭が、残った触手を全て粉砕する。

闇「ギャァァァァァァァ！！」

ク「どうやらバリアを展開する機能は残っているようだな。まずはアレを全て破壊するぞ！」

ヴィ「ちゃんと合わせろよ、高町　なのは！」

な「ヴィータちゃんこそ！　ミスしないでよ！」

ヴィ「へっ！　言ってろ！」

な「にゃはは！」

名前で呼ばれたのが嬉しいのだろう。なのはの表情は、真剣な中にも喜びが見てとれた。

ヴィ「鉄槌の騎士ヴィータと・・・鉄の伯爵グラーフアイゼン！！」

≪Ｇｉａｎｔ　Ｆｏｒｍ.≫

高らかに名乗り、カートリッジをロードするヴィータ。すると、彼女のデバイスであるグラーフアイゼンがその姿を大きく変える。

さらに、ヴィータが振り上げると同時に、それはプログラムとほぼ同じ大きさにまで巨大化した。

ヴィ「轟天粉砕！！　ギガントォォォォ・・・シュラァァァァァァーーーーック！！！！」

バキィィィィィィィィン！！！

叩きつけられる必殺の鉄槌。展開されたバリアがいとも簡単に砕け散った。

まずは一枚・・・・

な「高町　なのはとレイジングハート・エクセリオン！　いきます

！！」

≪Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ．≫

足元に魔法陣を展開させたなのはが、レイジングハートを天高く掲げる。合計四発のカートリッジがロードされ、レイジングハートの翼が力強く羽ばたく。

な「エクセリオンバスター！！」

≪Ｂａｒｒｅｌ　Ｓｈｏｔ．≫

砲撃を防ぐためか、触手がなのはに襲い掛かる・・・が、レイジングハートから発せられた衝撃波が全てを吹き飛ばす。

な「ブレイクゥゥゥゥゥ・・・・・」

先に放たれた四つの砲撃がバリアに命中する。そして、本命である一発が撃ち出された。

な「シューーーーーーーーット！！！！」

バキィィィィィィィン！！！

スターライトブレイカーに勝るとも劣らないその凄まじい砲撃に、
バリアが耐えられる筈もなかった。

これで二枚目・・・・

シャ「次！　シグナムとテスタロッサちゃん！」

シ「任せろ！」

フェ「は、はい！」

プログラムの後方へ飛んで行くシグナムさん。

シ「剣の騎士、シグナムが魂・・・炎の魔剣、レヴァンティン！
刃、連結刃、そして・・・もう一つの姿・・・・」

レヴァンティンの鞘と柄を合わせ、カートリッジをロードするシグナムさん。すると、鞘が刃部分と溶け合い、その形を弓へと変えていった。

≪Ｂｏｇｅｎ　Ｆｏｒｍ.≫

矢が添えられ、玄が極限まで引かれる。魔法陣からは真紅の炎が立ち昇る。

シ「駆けよ！！　隼ぁ！！！」

≪Ｓｔｕｒｍ　Ｆａｌｋｅｎ.≫

バキィィィィィィィィン！！！

解き放たれた矢が一直線にバリアへと突き進む。おそらく、音速を超えているだろう。命中と同時に爆発し、バリアが消滅する。

三枚目も突破・・・・

フェ「フェイト・テスタロッサ！　バルディッシュ・ザンバー！いきます！！」

カートリッジロードで、自身の身長を超える大剣になったバルディッシュを回転させながら振り抜くフェイト。

フェ「はぁっ！！」

振り抜かれた刃から真空破が放たれ、プログラムを大きく包み込む。
さらに、フェイトがバルディッシュを掲げると、そこに蒼い雷が落ちる。

フェ「撃ち抜け、雷神！！！」

≪Ｊｅｔ　Ｚａｎｂｅｒ．≫

バキィィィィィィィィン！！！

振り下ろされた金色の魔力刃。それが、バリアを一刀両断する。

四枚目・・・・

闇「アアアアアアアアアア！！！　ジャマヲ・・・ジャマヲスルナアアアアアアアアアア！！！！」

明らかな怒りを含んだ絶叫と共に、プログラムの体から小さな生物

が大量に湧いて出て来た。その姿は、上半身の魔物とよく似ている

≪自身のコピーを産み出したか・・・・案ずるな、数は多いが一つ一つに大した力はない≫

一「（そうか、なら俺が・・・）」

プ「いくわよアリシア」

アリ「は～い！　母様！」

一「プレシアさん？」

プ「一成、雑魚は私達に任せなさい、あなたには最後に大仕事があるんですから」

アリ「見ててね兄様！」

並び立つ二人が何やら詠唱を開始する。紫色の魔法陣が展開され、魔力が暴れ狂う。

プ「消えなさい・・・ツイン・サンダァァァァァ・・・・」

アリ「レェェェェェェェイジ！！！！」

一「あ、あれは・・・！」

間違いない、以前俺の髪を爆発させてくれたあの魔法だ。だが、病を克服し、さらにアリシアちゃんの力も加わったその魔法は、以前とは規模も威力も桁違いになっていた。

一「（今のを喰らったら・・・間違いなく黒コゲだな）」

事実、雷に撃たれたコピー達は、一瞬で消し炭となっていった。せっかく出て来たと思ったら、僅か数分で退場か。

≪・・・憐れ≫

龍「んじゃあ、次はオレ達だな。仙道　龍那！　いくぜ！！」

＜わ、私の出番無いかもしれないけど・・・仙道　雲母！　いきます！！＞

五枚目のバリア。それを破壊するのは龍那と雲母・・・やり過ぎない事を祈ろう。

龍「よおっく狙って・・・っと！」

龍那は投擲の構えを見せる。握られているのは・・・もちろんバットだ。

龍「突き抜けろ!!　ペネトレイト・バットォォォォォォーーーーッ!!!」

バキィィィィィィィィン!!!

射出・・・正にその言葉が相応しかった。放たれたバットは一筋の光となり、五枚目を破壊するだけに留まらず、六枚目のバリアにまでダメージを与えていた。

龍「へっ!　どんなもんだ!」

＜うう・・・やっぱり出番無かったよぉ・・・・＞

五枚目破壊・・・・

神「最後は妾達じゃな・・・人霊剣、神奈!　参る!!」

天「同じく、人霊剣、天音!　お相手致します!!」

刹「神剣、刹那!　我が君の為に道を開く!!」

光「私を受け入れてくれた人達の為に・・・神剣、光明!　やります!!」

赤、青、銀、白・・・・四色のオーラを纏った四人が、絶対的な力を以て最後のバリアに挑む。

神「灼熱のマナよ！　業火の熱線により全てを焼き尽くせ！！」

天「凍てつく輝きよ！　敵を戒め、その力を打ち消せ！！」

刹「集えマナよ！　我に従い・・・敵を爆炎で包みこめ！！」

光「マナよ！　我が求めに応じよ！　一条の光となりて、彼の者を貫け！！」

初めて見る四人の同時攻撃。それが一斉にプログラムに向けて放たれた。

神「プロミネンス・・・レーザーーーーーー！！！」

天「アイス・・・バニッシャァァァァァーーーー！！！」

刹「オーラフォトン・・・ブレイクッ！！！」

光「オーラフォトン・・・ビィィィィーーーーームッッッ！！！」

バキィィィィィィィィン！！！

焼き尽くされ、凍りつき、爆発し、撃ち貫かれるバリア。この瞬間、プログラムを守っていた全てのバリアが消滅した。

闇「アァァァァァァ！！　ホロボス！　ゲンショソンザイ・・・・ホロボス！！！」

最後の悪あがきか、新たな触手を作り攻撃の準備に入ろうとするプログラム。だが・・・

ザ「盾の守護獣、ザフィーラ！！　砲撃なんぞ撃たせん！！！」

ザフィーラが発動させた魔法により、その全てが串刺しにされた。

シャ「はやてちゃん！」

は「彼方より来たれ、宿木の枝！　銀月の槍となりて、撃ち貫け！！」

夜天の書を開き、詠唱するはやて。彼女を中心に白い光が広がり始める。

は「石化の槍・・・ミストルティン！！！」

撃ち出された槍がプログラムに突き刺さり、そこから石化が始まっていく。

闇「ゲンショ・・・ソンザイ・・・・」

アル「チィ！　しぶといったらありゃしないね！！」

ク「だが攻撃は通っている！　いくぞデュランダル、次は僕達の番だ！！」

≪ＯＫ，Ｂｏｓｓ．≫

ク「悠久なる凍土、凍てつく棺の中にて永遠の眠りを与えよ！」

クロノが魔法陣を展開させると同時に、辺りに白い結晶が舞い始める。それが海に触れると同時に、海が凍り始めた。

ク「凍てつけ！！！」

≪Ｅｔｅｒｎａｌ　Ｃｏｆｆｉｎ．≫

石化の上からさらに凍りついていくプログラム。だが、それでも動きは止まらない。

闇「ゲ・・・ゲン・・・・ショ・・・・・」

一「これで終わらせる・・・・三人とも、力を貸してくれ」

な・フェ・は「「うん!!」」

三人が最大魔法のチャージに入る。それにならい、俺も準備に入った。

な「全力全開!!　スターライトォォォォォ・・・・・」

周囲の魔力をかき集めるなのは・・・

フェ「雷光一閃!　プラズマザンバー!!」

雷を刃に宿し、大きく構えるフェイト・・・

は「最後まで辛い目に遭わせてゴメンな・・・ゆっくり休みや・・・・!　響け終焉の笛!　ラグナロク!!」

過去の主の所為で改変され、最後はわけもわからない存在に浸食されてしまったプログラムに別れを告げるはやて・・・

一「神奈、天音、刹那・・・力を貸してくれ。みんなの未来を繋げるために！」

神「無論じゃ！」

天「私の力・・・全てをあなたに！」

刹「ふっ、愚問だな！」

三人から発せられた光が、俺の掲げる剣に注がれ、刀身状の光が天へと伸びていく。

光「一兄！　私の力も使って！！」

光明からも白い光が注がれ、俺は四人の想いをしっかり感じながら剣を振り上げた。

≪全ての事象を超越するもの・・・それは、現在(いま)を生きる者達の強い意志・・・いかなる存在も、諦めない心の力を宿した剣を防ぐのは不可能・・・！！≫

一「不滅の意志よ・・・刃となれ!!　イモータル・・・・」

そして、俺達の・・・いや、ここにいる全員の想いが乗せられた三つの砲撃と、一つの斬撃が、プログラムへと放たれた。

一・な・フェ・は「「「「ブレイカァァァァァァァァーーーーーーッ!!!!!」」」」」

闇「〜〜〜〜〜〜〜!!」

断末魔の声を聞く事無く、プログラムは光の中へと消えていった・・・

光が収まると、そこには何も存在していなかった・・・かに見えたが・・・・

≪ま、待って!　まだコアの反応が残ってるよ!≫

ク「何だと!?」

ユ「そ、そんな・・・今の一撃で倒せなかったなんて」

な「だ、だったらもう一度・・・！」

一「いや・・・その必要はないよ」

フェ「え？」

一「ゼノンさん・・・・あとはお願いします」

ゼ「・・・・心得た」

ゼノンさんの視線の先・・・・そこには、プログラムの上半身が浮いていた。

闇「ホロボス・・・ホロボ・・・・」

ゼ「やれやれ、それしか言えないのかね？」

闇「ホロボス・・・」

ゼ「あの時は防がれてしまったが・・・・今度こそ受けてもらうぞ。キミも・・・もう休みたまえ」

闇「ゲンショ・・・ソンザイ・・・・」

ゼ「クロス・・・スラッシャーーーー！！」

ザン！

闇「ギャァァァァァァァァ！！！」

ゼノンさんの最後の一撃により、プログラムは今度こそ消滅した。
これで、蘇る事は二度とないだろう。

ゼ「これで終わりか・・・・はは、呆気ないものだね」

光「ゼノン・・・」

ゼ「・・・・ぐっ！」

蹲るゼノンさん。その顔からは急速に生気が失われ、体が徐々に薄くなっていく。

ヴィ「ど、どうしたってんだよ！？」

な「まさか、どこかケガでも！？」

は「シャマル！」

シャ「は、はい！！」

ゼ「いや・・・気にしないでくれたまえ。来るべき時が来ただけだからね」

ク「来るべき時？」

ゼ「私は・・・復讐の為に己の時間を止めていた。それが果たされた今、その効力も失われ、今までの時が一気に襲って来たのだ。じきに・・・私は消滅する」

全員「ッ！？」

そう言っている間にも、ゼノンさんの姿はどんどん薄れていく。

アル「な、何とかならないのかい！？」

ゼ「時を止めるという反則をしたんだ・・・代償は払わなくてはいけない」

な「そんな・・・」

ゼ「しかし・・・復讐に身を堕とした時点で、ロクな死に方はしないと思ったが・・・まさか、これほどの美人、美少女に囲まれて逝けるとはね・・・はは、私は幸せ者だ」

ゼノンさんは、自身の消滅を受け入れているようだ。彼の顔に恐怖はなく、むしろ晴れ晴れとしている。

？「あ～、お母様、お父様が浮気してますよ！」

？「あらあら、困ったわね。お仕置きしないと」

ゼ「え・・・」

シ「ッ！　上だ！」

シグナムさんの声に空を見上げると、ドレスを纏った妙齢の女性と、それに寄り添ってこちらに笑顔を向けている少女が浮かんでいた。

一「あれは・・・」

ゼ「マ、マリア・・・エミリア・・・・」

天「え？」

ゼ「な、何故キミ達が・・・私は幻を見ているのか・・・・？」

少女「お父様を迎えに来たんです」

ゼ「迎え・・・？」

女性「あなた・・・もう休みましょう。民達もあなたを待っていますわ」

手を差し伸べる女性。それを見て、ゼノンさんはフッと微笑んだ。

ゼ「・・・そうだな。色々あって疲れてしまった。久しぶりにキミの淹れてくれたお茶が飲みたい」

女性「ふふ・・・仕方のない人」

少女「ほら、お父様！　早く早く！」

手を握り合う三人。

女性「これで、もう離れる事もありませんね」

ゼ「ああ・・・これからはずっと一緒だ」

俺達が見守る中、ゼノンさんは家族と共にゆっくりと消えていった。彼の最後の言葉通り、あの三人が離れ離れになるような事は永遠に起こらないだろう。

光「・・・何よ、全然似てないじゃない」

ぶっきらぼうにそう漏らす光明。その声は・・・どこか悲しそうだった。

ク「彼は満足して逝った・・・これ以上は僕達がとやかく言う事じ

ゃない」

フェ「・・・・うん」

ク「とりあえず一旦アースラに戻ろう。すまないが、キミ達も来てくれ」

は「わかりました」

クロノの先導で、転送の準備に入るなのは達。だが、俺はその場から動かなかった。

ク「？　どうした一成。早く行くぞ」

一「そうしたいのは山々だが・・・・どうやら、俺も時間切れらしい」

刹「何を言っているのだ我が君・・・」

一「・・・・・」

全員「ッ！？」

無言で右腕を上げると、なのは達の表情が驚愕に染まった。何故なら・・・

な「か、一成君・・・腕が・・・・・！！」

俺の右腕が、先程のゼノンさんのように徐々に薄くなっていっているからだ。とうとう、俺も『消滅』とやらが始まったようだ。

一「まあ・・・・よく最後まで保ってくれたけどな」

別れの時は、すぐ目の前まで迫っていた・・・

第二十三話　決戦時に流れる挿入歌ほどテンションを上げるものはない（後書き

作「決戦終了。次回かその次辺りで最終話だな」

神「作者ぁ！！　一成が消滅とはどういう事じゃぁ！！」

天「認めません！　私は絶対に認めません！！」

作「仕方ねえだろ！　これは決まってた事なんだからな！」

光「そんな・・・・せっかく私を受け入れてくれた人が現れたと思ったのに・・・・」

刹「しっかりしろ光明！」

一「みんな・・・黙っててすまない。あと少しだけ、俺に付き合ってくれ」

一「ほら、気を取り直して贈り物報告会に移るぞ」

天「・・・清浦刹那様からＦＡＴＥのセイバーリリィの騎士甲冑を無明宛てに頂きました」

光「・・・・ありがとうございます」

作「おいおい光明。礼くらいもっと明るく・・・」

光「ッ・・・・（ギロ！）」

作「な、何でもないです・・・」

作「緋水様の所からはお客様が来てくれたぞ」

御「やっほ～、お兄さんだよ」

一「ああ、いらっしゃい御門さん」

御「？　光明ちゃん達どうしたの？」

一「ちょっと・・・」

御「・・・・何やら事情がありそうだね。とりあえず、今回の贈り物を渡しておくよ。持っていると大事な人が写るペンダントだ」

一「ありがとうございます。あとで渡しておきます」

一「二次元最高様からは、俺宛てに荷電粒子砲。神奈、天音、刹那に・・・・俺の寝顔写真？　光明に、作者の自腹でプレゼントを頂いたぞ。ほら、領収書」

作「おい！　何で俺！？」

一「ここは大人の余裕を見せてみろよ」

作「万年金欠の俺に何を言う！」

作「マサ様の所からもお客様だ」

？「初めましてだな。マサのサーヴァントのアーチャーだ」

一「ああ、前回は贈り物のシュークリームにマーボを入れて頂いてありがとうございました。おかげでアルに興奮していたウチの馬鹿が大人しくなりました」

ア「なに、もとはといえば私のマスターが原因だからね。気にしないでくれたまえ」

作「やっぱりお前の差し金か！」

一「違うぞ。アーチャーさんが気を利かせて入れて下さったんだ。ちゃんとお前も感謝しろよ」

作「なん・・・だと・・・・」

ア「さて、せっかくお邪魔したんだ、私に何か出来る事はないかね？」

作「じゃあ・・・・」

神「・・・・アーチャーとかいったの。お主の力でそこの愚か者を滅してくれ」

作「ちょ、いきなり何を・・・」

ア「任せたまえ」

作「ま、待って！　今の無し！　ぎゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

第二十四話　別れ（前書き）

私の作風からどんどんずれていってます・・・

第二十四話　別れ

フェ「ど、どうして一成まで・・・・！」

一「そうだな・・・何から話せばいいかな」

原初存在から聞いた真実、仲間達との再会、代償と引き換えに得た力・・・話す事はたくさんあった。

ユ「そんな・・・じゃあ、一成は全て知った上でその力を・・・」

アル「ふざけんじゃないよ!!　アンタってヤツは・・・・どこまで馬鹿なんだい!!」

一「後悔はしていない。こうしてプログラムも倒せたし、光明も救う事が出来た」

光「そ、そうよ・・・元はと言えば私があんな事をしたから・・・・！」

一「それは違うよ。選んだのは俺だ。キミが気にする事は何も無い」

顔面蒼白になる光明を落ち着かせ、俺はみんなを見渡した。怒りの表情を浮かべる者、信じられないと言った表情を浮かべる者、今にも泣き出しそうな者・・・それぞれがそれぞれの表情を見せている。

神「・・・ふざけるな一成！」

天「何故黙っていたのですか！　そうと知っていたら私は・・・！」

刹「我が君！　我のマナを受け取れ！　そうすれば・・・！」

光「私のマナも全部あげる！　だから消えないでよ一兄！」

一斉にマナを俺に送ろうとする四人。だが、俺は『支配』の力でそれを拒否した。

光「どうして！？　マナが送れない！？」

一「『止めてくれ』・・・そんな事をしたら、キミ達が消えてしまうじゃないか」

神「構わぬ！　お主が居らぬ世界など、存在する価値は無い！！」

一「駄目だ。キミ達は『生きてくれ』」

天「ッ！　あなたは、どこまで酷い命令を私達にするのですか！」

一「はは・・・すまない。最初で最後の命令がこんなので」

謝りつつ、俺は神奈と天音、刹那の三人とのリンクを切った。

刹「これは・・・我と我が君の契約が・・・！」

一「契約も破棄した。これで・・・キミ達は自由だ」

右腕に続き、左足も徐々に消え始めた。もう、時間はそんなに残っていない。その前に、今まで一緒に戦って来た大切な仲間達に別れのあいさつをしなければ。

ユ「一成！　僕こんな別れ方嫌だよ！」

一「泣かないでくれユーノ・・・なのはの事、これからも助けてあげてくれ」

アル「許さないよ一成！　一発殴らせな！！」

一「ああ、それでキミの気持ちが少しでも軽くなるなら、いくらでも殴ってくれて構わない」

アル「ッ～～～～！！　馬鹿だよ・・・アンタ馬鹿だよぉ・・・」

プ「あなた、自分がどれほど残酷な事をしているかわかっているの？」

一「・・・はい、俺は最低です。ですが、これが一番の終わり方なんです」

プ「確かに、これで日常は戻って来る。けど・・・そこにあなたはいない・・・」

ク「キミとは出会いが最悪だったが、今なら胸を張って言えるよ。僕は・・・キミと言う友人を持てて誇りに思う」

一「ありがとうクロノ。俺も、キミと出会えてよかったよ」

ク「だからこそ・・・何も出来ない自分の無力さが許せない！」

シ「秋月、私はお前を尊敬する。友の為、家族の為に命をかけたお前を、私は決して忘れない」

一「シグナムさん・・・これからも、はやての家族として仲良く暮らしてくださいね」

シ「・・・くっ、お前はこんな時まで私達の事を・・・！」

シャ「あなたと出会って、はやてちゃんは変わったわ。本当にありがとう一成君」

一「はは、それはシャマルさん達も同じじゃないですか」

シャ「けど・・・そんなあなたがいなくなったらはやてちゃんは・・・」

ヴィ「何でだよ一成！　お前が一番傷ついて頑張ってきたんじゃねえか！　なのに、何でお前がこんな目に遭わなきゃいけないんだよ！！」

一「いいんだヴィータ。これが・・・俺の選んだ道だから」

ザ「・・・スマン一成。俺には言葉が見つからない」

一「ザフィーラ・・・」

ザ「だが、これだけは言わせてくれ。主も俺も、お前がいてくれたから今ここにいる。それだけは断言できる」

一「そう言ってくれるだけで充分だよ」

龍「お前のマナが急速に消えていったのを感じた時点で、こうなるとは思ってた」

一「やっぱり、二人にはお見通しだったか」

龍「・・・別れは言わねえぞ。どうせ、その内ひょっこり帰って来るに決まってる」

一「ふっ・・・そうだな。そうだといいな」

＜一成さん・・・本当に消えちゃうんですね＞

一「雲母、最後の頼みを聞いてくれ。キミの『超える者』の力で、リィンフォースの修復に力を貸してあげて欲しい」

＜・・・わかりました。必ず・・・必ず直してみせます！＞

一「頼んだぞ」

≪一成君。管理局・・・いいえ、全ての世界の代表としてお礼を言わせて下さい。本当に、ありがとう・・・≫

一「はは、これは凄いお礼を言われたものですねリンディさん・・・」

≪今までいっぱい迷惑かけちゃったね。ゴメンね一成君≫

一「迷惑だなんて思っていないよエイミィ。俺自身が望んで動いていたんだからな」

これで、ほぼ全員とあいさつが出来た。後は・・・彼女達だけだ。

アリ「嫌だよ！　私、兄様と離れたくないよぉ！」

一「最低な兄でゴメンな。けど、キミにはフェイトという妹がいる。大切にしてあげてくれ」

一「はやて、リィンフォースと話をさせてくれないか」

は「え？　う、うん・・・」

≪ど、どうした一成？≫

一「キミの修復を雲母に頼んである。これで・・・キミが消える必要はない」

≪ッ！？　な、なぜそれを・・・≫

は「ど、どういう事なんリィンフォース！？」

≪防御プログラムは停止しましたが、歪められた基礎構造はそのままなのです。私は・・・夜天の魔導書の本体は、その内新たな防御プログラムを生成し、また暴走を始める事になるでしょう・・・≫

は「そんな・・・」

≪だ、だが一成。管制プログラムである私の中からも、夜天の書本来の姿は消えてしまっている。元の姿がわからなければ戻しようが・・・≫

一「その程度・・・『超える者』にとっては問題にすらならない。もう一度言うぞ・・・キミが消える必要はどこにもない」

≪私は・・・私は！　ここまでしてくれるお前に何も報いる事が出来ないのか！≫

は「私だってそうや・・・結局、私は一成君に何も恩返し出来ない・・・！」

一「だったら、これからいっぱい幸せになってくれ。それが、一番の恩返しだ」

は「そんなん無理や！　一成君がおらんかったら・・・私もシグナムも、シャマルもヴィータもザフィーラも、リィンフォースも幸せになんかなれへん！！」

一「・・・すまない」

フェ「こんなの・・・こんな終わり方ってないよ・・・・」

一「フェイト、キミの物語はこれからも続いていく・・・最後までしっかりな」

フェ「私の物語はあなたがいないと完成しない！　一成がいないと・・・完成しないんだよ！！」

一「それは困ったな・・・」

フェ「行かないでよ一成！　私と・・・私達とずっと一緒にいてよぉ！！」

な「一成君・・・私と同じだったんだね」

一「ああ、キミと同じく、俺も偶然力を得て戦うようになった」

な「にゃはは、何だか嬉しいな・・・・ねえ、一成君。私達、色々あったよね」

一「そうだな・・・泣いているキミを公園で見つけたのが始まりだったな」

な「動物園に行って・・・・お別れして・・・・そうだと思ったら再会できて・・・ユーノ君と出会って・・・・フェイトちゃんと友達になって・・・・はやてちゃんを助ける事が出来た・・・・考えてみると、いっつも私は一成君に助けてもらってたよね」

一「俺だって、なのはにはいつも助けてもらっていたぞ」

な「そ、そうかな？　何にも出来てなかったと思うけど」

一「なのはと一緒だったから毎日が楽しかった。なのはの笑顔が俺を元気づけてくれた。なのはがいてくれたから・・・・俺は戦えた」

な「や、止めてよ一成君。恥ずかしいよ・・・／／」

一「ははっ！」

な「何でだろう・・・私、全然悲しくないんだ。もうすぐ、一成君とお別れしなくちゃいけないのに、今だって笑ってる」

一「俺は笑っていてくれた方が嬉しいけどな」

な「私ね、またいつか、一成君に会える・・・・そんな予感がする

んだ。だから、悲しくも辛くもないの」

一「・・・・ああ、俺もそう思うよ」

泣きじゃくるフェイトとアリシアちゃんを、なのはとはやてが支えながら下がる。両足がすっかり消えてしまう中、俺は家族と向き合った。

一「泣き過ぎだぞみんな・・・最期くらい、笑って見送ってくれ」

神「うるさい・・・うるさい・・・・・」

一「俺はここで消えるけど・・・これからもなのは達の力になってあげてくれないか」

天「知りません！　マスターでなくなったあなたの言う事など聞きません！！」

一「はは・・・これは手厳しいな」

刹「恨むぞ我が君！　我に対するこの仕打ち・・・・絶対に忘れぬからな！」

一「そうだな・・・俺は恨まれて当然だ」

光「一兄！　一兄ぃ！　せっかく・・・せっかく、お姉様以外で私を受け入れてくれる人に出会えたのに・・・・！」

一「大丈夫・・・これからは、たくさんの人がキミを受け入れてくれるはずだ」

最後に、もう一度エイミィを呼びだした。

一「エイミィ、この映像録画してるかな？」

≪う、うん、もちろん・・・≫

一「じゃあ・・・今からアリサとすずかにメッセージを送るから、後で見せてあげてくれ」

≪え？≫

な「さっき保護した二人の事です」

≪わかった・・・・必ず見せるから≫

一「ありがとう・・・・・アリサ、すずか、黙って消える事を許してくれ・・・といっても、アリサなんかは絶対許してくれそうにないけどな」

ここにはいない大切な友達へ、最後の言葉を送る。

一「最後に・・・・二人に出会えてよかった・・・これが俺の正直な気持ちだ」

伝えたい事を全て伝え、俺はゆっくりと息を吐いた。もう・・・思い残す事は無い。

一「さようならみんな・・・・今まで、こんな俺と仲良くしてくれて本当にありがとう」

仲間達の姿を目に焼き付け、俺は静かに瞳を閉じた。徐々に意識が薄れていく・・・

な「・・・・あ、あれ？　何で涙が・・・・・」

一「（なのは・・・）」

な「嫌・・・やっぱり嫌だよ！　一成君！！　行かないで！！！」

そして・・・・

俺は・・・・

仲間達に見守られ・・・・

この世界から・・・・

静かに・・・・

・・・消滅した。

な「一成君ーーーーーーッ!!!」

消え行く意識の中で、なのはが俺の名を呼んでいたような気がした・・・

第二十四話　別れ（後書き）

一「俺、消えてしまった・・・」

作「何でいるんだよ!?」

一「後書きだからな。この物語が終わるまではここにいるさ」

神「ううう・・・こうしてまた一成の姿を拝めるとは・・・」

刹「よし、我は本編に戻らず後書きで生きていくぞ！」

光「私も！」

作「駄目に決まってんだろ！　次で最終話だし、最後まで頑張れや！」

天「あなたがこんなストーリーにしなかったらこんな事にはならなかったのでしょうが！」

作「ぐ・・・・」

一「よし、贈り物報告会だ」

天「緋水様からＩＳの機体を全て贈って頂きました」

刹「ふむ・・・これを装備して、作者のヤツをボコボコにしてやろ

う」

光「さんせ～い！」

神「そうと決まれば早速装備じゃ！」

作「し、しまっ・・・！　今のこいつらにこんなモン渡したら・・・・！」

光「清浦刹那さんからは作者にマクロス・クォーターを頂きました」

一「クォーターと言ってもかなり大きいけどな」

天「マクロスの戦艦は大きさが滅茶苦茶ですからね」

神「艦が大き過ぎて全体にバリアが張れんのじゃろ？」

刹「ピンポイントバリア・・・だったか？」

作「中々浪漫あるバリアだと思うけどな」

A's編最終話　そして彼が遺したもの（前書き）

最終話です。みなさん、今までありがとうございました。

A's編最終話　そして彼が遺したもの

なのはＳＩＤＥ

一成君・・・あなたがいなくなってから一ヶ月が経ちました。新たな年を迎え、私達の日常が戻って来ました。けれど・・・そこにあなたはいません。

あの戦いから、私達がどう過ごしているか教えてあげるね。

まずはユーノ君。闇の書の事を調べている内にすっかり無限書庫の虜になっちゃったみたい。将来はあそこで勤めたいって言ってたよ。

フェイトちゃんは、ついこの前までずっと塞ぎ込んでいました。けど・・・いつまでも悲しんでいたら一成君に怒られちゃうって・・・今は、しっかり受け止めて前を向いています。アリシアちゃんやプレシアさん、アルフさんの支えのおかげでもあるけどね。

そのアリシアちゃんも落ち込んでいたけど、フェイトちゃんがそれ以上に落ち込んでいたから先に立ち直ったんだよ。さすがお姉ちゃんだよね？

プレシアさんは相変わらずです。けど・・・たまに遊びに行くとどこか寂しそうな表情で窓から外を眺めているのを見かけたのを覚えてる。

アルフさんは今も怒ってます。ふふ、大変だね一成君。

クロノ君は、相変わらず毎日忙しそうです。後から聞いたけど、私達の前に現れた仮面の男の人って、実はリーゼアリアさんとリーゼロッテさんだったんだって！　ビックリだよね？　なんて・・・一成君だったら気付いてたんだろうけどね。

グレアムさんは管理局を止めて故郷でひっそり暮らすそうだよ。いつか、はやてちゃんが受け止められるようになった時に、全てを話すんだって。

そうそう、実はリンディさんにとてもお世話になった事があるの。後で教えてあげるね。

エイミィさんとも連絡を取り合ってます。何だか、最近クロノ君といい雰囲気みたい。もしかしたら・・・・なんて。

アリサちゃんとすずかちゃんには全てを話しました。一成君の事、私が今まで秘密にしていた事、それこそ、ユーノ君との出会いから今までの事を全てね。あの時の映像もちゃんと見せたよ。

一成君は怒るって言ってたけど、アリサちゃん、泣いてたよ。私、アリサちゃんがあんなに泣いてるの初めて見た。それだけアリサちゃんも一成君の事が好きだったんだよ？

すずかちゃんも泣いてたけど、「一成君は絶対帰って来てくれる」って言ってすぐに立ち直っちゃった。こういう時、すずかちゃんは強いよね。

はやてちゃんは・・・あれからまた病院に戻りました。先生からすっごく怒られたみたい。でも、体はすっかり元気になって、今はリハビリの毎日なんだって。もちろん、私もお見舞いに行ってるよ。

シグナムさんは、事あるごとにフェイトちゃんに勝負を挑んでいます。決着がつけれなかった事が心残りみたい。まあ、フェイトちゃ

んの方もやる気みたいだけど・・・。あ、一成君との勝負もつけたかったらしいよ。

シャマルさんは、よく翠屋に来ます。お母さんから料理の特訓を受けてるみたい。けど、ちゃんと食べられるまでまだまだかかるみたい（苦笑）。

ヴィータちゃんとは仲良くしてるよ。ちゃんと名前で呼んでくれてるしね。・・・今だから言うけど、ヴィータちゃんに睨まれた時ちょっと怖かったんだ。

ザフィーラさんは、犬の姿でいるのをよく見かけます。たまに私も散歩に付き合わせてもらってるんだよ。

リィンフォースさんもちゃんといるよ。雲母さんに修復して貰ったんだって。難しい事はわからないけど、終わりよければ全てよしってね！

それで終わればよかったんだけど・・・シグナムさん達が蒐集した件はどうしようも無くて、はやてちゃん達は数年の保護観察・・・

？　の処分を受ける事になったらしいの。でも、これくらいで済んだのは、クロノ君やリンディさんが色々かけあってくれたおかげなんだよ？　これが、リンディさんにお世話になった事の一つ。

龍那さんと雲母さんは、今は一成君のお家で暮らしてるよ。この前遊びに行ったけど、一成君のお部屋、すっかり占拠されてたよ・・・ドンマイ一成君。

それから・・・ゼノンさんの事なんだけど、ユーノ君が、昔突然滅びた世界の情報を見つけたの。その世界のある国の王様の名前が『ゼノン・トライハルト』・・・これってやっぱりそうだよね？

さてと・・・そろそろ一番気になってる人達の事を教えてあげるね。・・・あなたの大切な家族のみんなの事を・・・

当然だけど、神奈さん達が一番酷かったんだよ？　みんなが立ち直っていく中で、神奈さん達だけがずっと塞ぎ込んでて・・・毎日様子を見に行ったけど、神奈さんも天音さんも部屋から出て来なかったし、刹那さんは話しかけても何も応えないし。そんな三人を光明さんと龍那さんと雲母さんが何とか立ち直らせようと頑張ってたけど、全然効果がなくて・・・

このままじゃ衰弱して死んじゃう・・・そう思って、神奈さんと天音さんを強引に部屋から引き摺り出したの。もう、一生分は泣いたんじゃないかっていうくらいの顔をしてた二人だけど、私の胸元で光る首飾りを見た途端に様子が変わって・・・

神「な、なのは・・・その首飾りは・・・・」

な「え？　こ、これは、一成君にもらった首飾りですけど・・・」

神「は・・・はは・・・・はははははははは！！」

突然笑いだした神奈さんに、私はちょっと怖いと思いながら尋ねたの。

神「妾とした事が・・・・何故こんな簡単な事を見落としていたのじゃ！！　あははははははは！！！」

な「か、神奈さん・・・一体何を・・・・」

神「生きておる・・・・一成は生きておるぞ！！！」

な「え・・・・？」

要約するとこうです。個人のオーラフォトンで出来た物は、製作者の命が続く限り欠けも壊れもしない・・・・逆を言うと、その物が存在しているという事は、製作者は今も生きているという事なんだ

そうです。

神「その首飾りを見てみろ！　新品同然ではないか！　一成は・・・
一成は消えてはおらぬ！！　今も何処かで生きておる！！」

天「か、一成様が・・・生きて・・・・」

刹「・・・・何だと？」

光「一兄が！？」

すぐにその事をみんなに伝えたんだけど・・・・それからが凄かっ
たんだよ？　一成君のお家で『一成君が生きていた記念パーティー』
なんてものが開かれたんだから！　もちろん、私も参加しちゃった♪

だから、もう誰も悲しんでなんていないよ。私達、一成君が帰って
来るのをいつまでも待ってるからね！！！

・・・・・・・

・・・・・・

・・・

な「これでよし・・・っと」

ノートをパタリと閉じる。いつか、一成君が帰って来た時に、私達がどれだけ悲しんでいたか思い知ってもらうために書き留めているノートだ。

桃「なのは～～、リンディさんがいらっしゃったわよ～～！」

お母さんが私を呼ぶ声が聞こえる。私は部屋を出て玄関に向かった。

今日・・・私は、家族に秘密を明かそうと思っている。その為に、リンディさんにお願いして、今から全員でアースラへと向かう。アリサちゃん達にも話したし、そろそろお母さん達にも話した方がいいと思ったから。これが、お世話になった事の二つ目。

な「（ねえ、一成君・・・いつか、将来の話をしたよね？　私、ちょっと考えてる事があるんだ）」

偶然手にしてしまった魔法の力・・・・けど、そのおかげでたくさんの人と繋がる事が出来た。ユーノ君やフェイトちゃん。クロノ君にはやてちゃん。そして・・・一成君。

な「（今の私があるのは魔法のおかげ・・・だからね、この力で人の役に立ちたいの。具体的には決まっていないけどね）」

いっその事管理局に入ろうかな？　そうすれば、ユーノ君やクロノ君達とずっと一緒にお仕事できると思うし・・・

≪頑張れよ・・・なのは≫

な「え？」

今確かに一成君の声が聞こえた・・・そうだね、一成君なら絶対応援してくれたはずだもんね。

な「よぉぉぉし！　頑張るぞ～～～！！」

まずは・・・お母さん達にちゃんと説明しなくちゃね・・・・

なのはＳＩＤＥ　ＯＵＴ

悲しみを乗り越え、少女達は歩み始める。再会の為の別れ・・・いつか、『彼』が帰って来たその時、胸を張っていられるように・・・

・

？「・・・・・」

そんな少女達の姿を、一人の老人がジッと見つめていた。その表情は、予想外の事に直面した時の、何とも言えない表情だった。

老人「むう・・・まさかこれほどまでとはのぉ」

チラッと横を見る老人。そこには一人の青年が倒れていた。

青年「・・・・・」

まるで死んでいるように横たわる青年。だが、呼吸をしている辺り、ちゃんと生きているのは確かだ。

老人「どうやら・・・ワシはお主の事を甘く見ておったようじゃ・・・・のう、秋月　一成よ？」

一「・・・・・」

彼の物語は・・・・終わらない。

魔法少女リリカルなのは　永遠の旅人A's編・・・・・・完

A'ｓ編最終話　そして彼が遺したもの（後書き）

作「というわけで、A'ｓ編は、なのはの独白で幕を閉じたわけです」

一「終わった終わったぁ。これでしばらくは楽出来るな」

作「は？　これからお前は恋姫の世界に直行だぞ」

一「なん・・・だと・・・・・」

神「次はＳｔｒｉｋｅｒＳじゃが・・・・どうするつもりじゃ？」

作「それなんだが・・・・続けたいとは思ってるけど、止めた方がいいとも思ってんだよな」

天「どうしてですか？」

作「・・・・ぶっちゃけ、この小説人気ねえんだよ。恋姫の方が人気あるし、一成が帰って来た話でも書いて、『俺達の戦いはこれからだ！』的な終わらせ方した方がいいかもしれん・・・」

刹「ふむ・・・グダグダ続けるより、そっちの方がいいかもしれんな」

光「そんなぁ！　私、まだちょっとしか出番ないのに！」

龍「それはオレ達も同じだぞ！」

雲「そ、そうですよ！　いくらなんでも酷いですよ！」

作「とりあえず、読者の方の反応を見て、続けるか止めるかは決めるつもりだ」

一「そうか・・・まあ、俺達はお前の決定に従うまでだ」

作「じゃあ、そろそろお別れのあいさつを頼むわ」

一「みなさん、今までこんな駄文を読んで頂きありがとうございました」

神「無印編からA'ｓ編まで約一年・・・よくぞ付き合ってくれたの」

天「感想や贈り物もたくさん頂き、とても嬉しかったです」

刹「作者の度々のアイディア募集にも協力してくれたな。感謝するぞ」

光「この小説でたくさんの方と繋がれた事が本当に嬉しかったです！」

龍「ま・・・これからどうなるかわかんねえけど」

雲「よ、よければ、たまに読み返してみてください」

一・神・天・刹・光・龍・雲「「「「「「「では・・・さようなら！！」」」」」」」

A-s編終了時におけるキャラ紹介（前書き）

すっかり忘れていました。今さらですがどうぞ。

A'ｓ編終了時におけるキャラ紹介

作「さあ、帰って来ました！　今回の進行は私、作者と、ヤンデレから妹へ華麗なる転身を果たした光明でお送りします」

光「よろしくお願いしま～す！」

作「光明ちゃんよ、アンタ無明だった時に比べてかなり人気が出てるぞ」

光「えへへ～」

作「和む・・・とと、おしゃべりはこれくらいにしてそろそろ始めるか」

光「一兄達のもあるよ」

秋月　一成

A'ｓ編最終決戦において新たな力に覚醒し、その代償として消滅してしまった主人公・・・が、最終話にて生存が確認され、なのは達は彼が帰って来るのを心待ちにしている。

彼の手にした『絆』の力は、かつて共に戦った仲間達の武器を発現させて戦う力である。だが、何人もの『想い』の込められた力は、オリジナルを軽く凌駕する。

原初存在と完全な同一を果たす事により、『支配』の力を操る事が可能となった。これは、霊剣及び神剣に対する絶対的な命令権であり、極端に言えば「砕けろ」と命令した時点で、支配された剣は自ら崩壊するという超チート能力。しかし、霊剣や神剣以外には全く意味がないので、正直使用機会が少ない。

プログラムに放った『イモータルブレイカー』は、一成の最大奥義にして最強の技。原初存在が言っていた通り、決して諦めない『意志』を宿した光の刃は、回避も防御も不能である。今の所、龍那に対する唯一の手段となるだろうが・・・発動する前にやられると思う。

現在、別の世界でたくさんの美女に囲まれたり、ツンデレな少女に振り回されながら活動している。いつ戻って来れるのか・・・

一「早く戻りたいが・・・戻ったら戻ったで大変そうだな（汗）」

神奈

一成と契約していた人霊剣の一本（人）。刹那復活の為無明に攫われ、最終的には魂を支配され一成と望まぬ戦いを強いられた。だが、『支配』の力を得た一成に助けられ、プログラムとの戦いでは最後のバリアの破壊を担った。一成が消滅し、絶望の日々を送っていたが、なのはの首飾りを見て彼が生きている事を悟り、ようやく前に進む事が出来た。

刹那の『意思』を取り出され完全な別存在となり、人霊剣『神威』

ではなく、本当の意味で『神奈』となった。
最近料理特訓を始めたらしい。
神「シャマルには負けられん！　一成が戻って来た時に最高の一品を出せるよう今から特訓じゃ！！」

天音

一成と契約していた人霊剣の一本（人）。神奈と同じく無明に弄ばれ、一度は消滅を願った。しかし、それは偽りの願いだと一成に見抜かれ、『天音』としての本当の気持ちを伝えた。そして、一成によって助け出され、プログラム戦で一成の為に力を振るった。
刹那の『器』を取り出され、彼女も本当の意味で『天音』となった。

一成の生存が確認され、後に開かれた「一成が生きていた記念パーティー」では、あまりの嬉しさに酒を何杯も飲み、ベロベロに酔ったあげく、リビングの壁を破壊した。

天「あはははははははは♪　かじゅなりしゃまがいきていらっひゃいまひたよ～～～～！！」

刹那

一成と契約していた神剣。無明によって『意思』と『器』を結合さ

せられ、神剣解放なしで復活した。その際、神奈と天音の施された支配の何倍も強い支配を受けていたが、彼女のある部分を突く作戦で、自ら支配を打ち破る。そして、無明と決別する事になった事件の真実を語り、ようやく和解を果たした。一成の道を開く為、バリアを完膚無きまでに破壊した。

神奈と天音のように、彼女もまた、これで本当の『刹那』となった。

契約を破棄され抜け殻のようになっていたが、今は一成が戻って来た時の為に何やら作戦を練っているらしい。

刹「最早時間を心配する必要もなくなった・・・我が君よ、再会を楽しみにしているぞ」

光明（無明）

刹那を姉と慕う霊剣。霊剣にして神剣に勝る力を持ち、その所為で悪意ある者達に狙われ続けた。とある世界で乱暴されそうになった所を刹那に助け出される。彼女の優しさに触れ、初めて自分を受け入れてくれる存在に出会った。

その後、刹那に同行し、幸せな日々を過ごしていた。しかし、ある日突然別れを告げられ、感情の爆発した光明は自らの手で刹那を斬る。だが、強力過ぎる光明の一撃は刹那を消滅寸前まで追い込み、彼女は刹那の為にマナを集めた。充分にマナを集め戻った時、そこに刹那の姿は無く、捨てられたと思った光明は精神に異常をきたし、刹那に与えるはずだったマナを全て取り込み、神剣『無明』へと『神化』した。

刹那を探す中でゼノンと出会い、協力する者、される者の関係となる。そして、刹那の居場所を突き止めると、グレアムの前に協力者として姿を現した。砂漠の世界において、その圧倒的な力で一成を追いこみ、ついには撃破する。神奈と天音を連れ去り、悲願であった刹那復活を果たす。だが、龍那の妨害、なのは達の奮闘、そして、一成の『支配』とによって神奈と天音を奪い返され、さらにはその二人によって刹那まで支配から解き放たれた。

一成との決着において、自らの思いを受け止めてくれた一成の姿に戸惑い、さらに刹那から真相を伝えられ、自身の過ちに気付く。そんな自分を優しく抱き締めてくれた刹那と、許されない仕打ちをしたにも関わらず、笑って許してくれた一成の優しさに、『無明』は『光』を取り戻し、再び『光明』としての姿を取り戻した。

『光明』に戻ってからは、『無明』だった頃の性格から大きく変わり、一成を『一兄』と慕うようになる。プログラムとの最終決戦では、仇と再会し暴走するゼノンを叱りつけ、彼を復讐から解き放った（この時発したセリフでツンデレ疑惑が浮上）。そして、自分を受け入れてくれた人達の為に、全力でバリア破壊に臨んだ。

しかし、『光明』に戻ってすぐに、自分を受け入れてくれた一成という『光』を失ってしまう。嘆く彼女だったが、彼が今も生きているという事を知り、今は『光』が戻って来るのを待ちわびている毎日を過ごしている。

光「こうしてお姉様のお隣にいられるなんて・・・・幸せです♪」

仙道　龍那

無明に敗北した一成の前に現れた少女。一つの体に二つの魂を宿している。一人で戦おうとする一成を説き伏せ、自身も協力する。男勝りで、竹を割ったような性格なので、男女問わず自然と慕われる。戦いにおいてはまさに反則級の強さで、クロノの攻撃を全て無傷で突破、一成を負かした無明をバット一本で圧倒　（ついでにオーラフォトンノヴァも打ち返す）、プログラムのバリアすらバットで砕く。過去に一成も手合わせをした事があるが、一度も勝っていない。

ちなみに、彼女との勝負に負けると、問答無用で技をかけられる。

全てを『超える者』であり、彼女の前ではいかなる存在も脅威足りえない。例え全てを救う勇者だろうと、例え全てを滅ぼす魔王だろうと、例え全てを司る神だろうと・・・彼女はそれらを『乗り越える』。

『病』を『乗り越える』から病気にかからない。『痛み』を『乗り越える』から傷つかない。『時』を『乗り越える』から老いる事もない。つまり不老不死である。それ故に孤独であり、同じ存在である雲母だけが心の支えだった。

そんな孤独だった二人を救ったのが一成だった。彼もまた、永劫の時を生きる旅人であり、そんな彼だからこそ、二人を躊躇いなく受け入れてくれたのだ。一成と出会った時、雲母は当然だが、龍那も号泣した（あの時の話を持ち出すと、顔を真っ赤にさせて殴られる）。

自身の恩人である一成を傷付けようとする相手には一切の容赦がない（龍那がボッコボコにして、一成が止めに入り、最終的に雲母が

強制的に入れ替わるパターンがほとんどである）。似たような境遇であった無明とぶつかりあったのは偶然ではないかもしれない。

一成消滅時には泣いてこそいなかったが、瞳は潤んでいた。現在は一成の家で生活し、主のいなくなった彼の部屋を占拠している。

龍「さってと・・・何か面白いモン見つかんねえかな～」

仙道　雲母

龍那と体を共有しているもう一人の少女。龍那とは対照的に、引っ込み思案で大人しい性格。何事にも一生懸命でひたむきな姿勢はとても素晴らしいのだが、それが強過ぎて抑えるという事が苦手。それは対ゼノン戦でも発揮され、彼女の放った『ジェノサイドパニッシャー』は小規模の次元震を引き起こした。

龍那が接近戦を好むのに比べ、彼女は銃などを使った遠距離戦を得意としている。また、回復や補助も彼女の担当で、リィンフォースの修復も雲母が担当した。

龍那に振り回されつつ、一成の帰りを待っている。

ちなみに、例に漏れず一成の事が大好きだが、傍にいられるだけで満足だとして、想いは胸の内に秘めている。

雲「や、止めなよ龍那！　一成さんに怒られちゃうよぉ！」

ゼノン・トライハルト

無明に協力していた、元王にして復讐者。トライハルトは国名でもある。かつて、欠片の軍勢によって妻や娘、民を全て滅ぼされ、復讐の為に禁術を用いて世界を飛び出した。仇を追う日々の中で無明と出会い、娘に似ていた彼女に協力を申し出る。基本、彼女の命令には従うが、自身の復讐対象ではない一成達を見逃したり、神奈や天音を介抱したりと、紳士な一面を見せる。

復讐の旅の中で戦闘能力も上がったらしく、雲母のジェノサイドパニッシャーを見事回避した。

無明の闇が取り払われた事を確認し、戦わずして降伏した。だが、直後に現れたプログラムが仇である事が判明し、素敵笑顔を見せながら襲い掛かった。

傷だらけになりながらも復讐を果たそうとしたが、自分の身を案じる光明の姿が娘と重なり、復讐ではなく守るために戦う事を決意する。

一成達によるフォースブレイカーを耐え切ったプログラムに止めを刺し、迎えに来た妻と娘と共にこの世を去る。再会を果たした彼の顔はとても晴れ晴れとしていた。

設定当初は、龍那と雲母の力を見せる為の噛ませ犬キャラとして考えられていたが、何がどうしてこうなったのか、こんなキャラになってしまった。

オセロが大好き。

ゼ「そういえばマリア、面白いゲームを見つけてね・・・オセロというのだが」

マリア・トライハルト

ゼノンの妻。故人。欠片の軍勢に攻め入られた時、隊長によって胸を貫かれ、ゼノンに抱かれつつ、最後まで彼の事を想いながら亡くなった。最終決戦を終えたゼノンの前に姿を現し、彼を労わりながら共に消えて行った。

元々、ゼノンの国の隣国の姫であり、彼とは幼馴染。幼少の頃からゼノンに惚れており、あの手この手で誘惑していた・・・リア充爆発しろ。

素晴らしいボディと慈愛に満ちた性格を持つ、まさに最高の女性・・・リア充爆発しろ。

マ「オセロ？　何だか不思議な響きの名前ね」

エミリア・トライハルト

ゼノンの娘。故人。欠片の軍勢に攻め入られた時、隠れていた所を発見され、ゼノンの目の前で無残な死を遂げた。マリアと共にゼノンの前に姿を現し、しっかりと手を握りながら共に消えて行った。

両親の愛を一身に受け、明るい子に成長する。無明というより、むしろ光明に似ているかもしれない。

生きていれば、母のような素敵な女性になっていたであろう・・・・実に惜しい。隊長死ね！　あ、もう死んでた。

エ「面白そう！　お父様、私にも教えてください！」

十種

一成の心象世界に現れたかつての仲間の一人。集まった仲間達の纏め役。オリキャラ募集の時に送って頂いたキャラだが、性格が大きく変わっている（ぶっちゃけ全員変わっている）。

十「お疲れさん、一成」

知治

一成の心象世界に現れたかつての仲間の一人。一番改変されたキャラである。ヘタレというか、馬鹿になってしまった。よく弥生と漫才をする。

知「なあなあ、あのシグナムって人、オッパイ凄くね？」

弥生

一成の心象世界に現れたかつての仲間の一人。女性みたいな名前だがれっきとした男。その事を弄ると処刑される（本編参照）。ドSである。

弥「やれやれ、これだから歩く猥褻物は・・・」

悠輔

一成の心象世界に現れたかつての仲間の一人。物静かで、あまりしゃべらない。静かな場所が好きで、騒音をまき散らす知治が苦手。

悠「うるさい」

世界

一成の心象世界に現れたかつての仲間の一人。人を疑う事を知らない、頭の中が若干お花畑な少女。一成の元カノとか言っていたが、別にそんな事はなかったぜ！

世「ほ、ホントだもん！　だって一成、私が付き合ってって言ったら「わかった、どこに付き合えばいいんだ？」って言ってくれたもん！」

ルキア

なのはの世界に来る前の世界で出会った仲間の一人。女性で、性格はシグナムのような武人気質で、正々堂々を好む。女を捨てていたが、一成に出会い、徐々に彼に惹かれていく中で、しだいに女らしさを取り戻していった。故に、別れる時には悲しみの涙を堪え切れなかった。

ちなみに、神奈に迫る巨乳の持ち主である。

ル「お、おい！　最後の部分は必要ないだろう!!／／」

セレン

なのはの世界に来る前の世界で出会った仲間の一人。幼いながら、あらゆる魔法を扱う所謂天才少女。とある事件で一成に出会い、共に戦うようになった。ルキア同様一成に惹かれていて、彼との思い出が失われる事を一番恐れていたのは彼女だった。

セ「いいな～ルキア。そんな風にイジってもらえて。私は、イジられるほど無いし・・・」

ラッシー

変態。

ラ「おいいいいいい！！　だから！　何で僕だけこの二文字で表すのさ！！」

原初存在

『彼の者』を倒すため、『主』と呼ばれる存在によって生み出された八つの武器の総称。一成に宿っていたのは『支配』を司る原初存在であり、他はそれぞれ『創造』『破壊』『時間』『空間』『運命』『事象』『闘争』を司っている。この原初存在との出会いが、一成の戦いの始まりだった。

『彼の者』の分身である欠片の破壊を使命とし、霊剣や神剣を作り上げた。

ちなみに、ＣＶイメージは速水　奨さん。もしくは若本さん。

欠片

『主』と原初存在によって打ち倒された『彼の者』が、最後の力を使って自身の体を欠片に変化させた姿。様々な世界に跳び、破壊を行う。ゼノンの世界に侵攻したのも、この欠片である。かつて、霊剣や神剣が欠片を追っていたように、欠片もまた霊剣や神剣を滅ぼそうと活動していた。

ＳｔｒｉｋｅｒＳが始まれば、ラスボスは間違いなくコイツになる

だろうと思われる。

隊長

ゼノンの追っていた仇であり、『彼の者』の欠片の化身である。以前、闇の書が別の主の手にあった時蒐集を受け、その際意識と力を闇の書に潜り込ませておいた。それからは、自身の敵が姿を現すまで眠り続け、A's編最終決戦においてついに一成と遭遇。防衛プログラムを侵食し、己が力と変えた・・・が、それが死亡フラグとなった。

強引な浸食の所為であらゆる機能が働かなくなり、それを見抜いた龍那と雲母に伝えられた一成達によって、凄惨極まりないスーパーフルボッコを受け瞬殺。あっさりと退場した。

一成曰く・・・「あの時、なのは達が浮かべた笑み・・・俺は決して忘れないだろうな」との事である。

作「以上だ」

光「うわあ・・・相変わらず無駄に細かい設定入れてるね」

作「考えるのが面白いからな。自分でも止められない」

光「あれ？　でも、容姿のイメージがないよ？」

作「ああ・・・正直思いつかなくてな、もう読者の方々に自由にイメージして頂いた方がいいかなって」

光「ええ!?　何それ～～！　一兄や刹那お姉様にはあるのに私にはないの～～!?」

作「なら募集したら?」

光「あ、なるほど・・・って！　元はといえば作者さんが・・・！」

作「はいはい。そろそろ終わらせるぞ」

光「て、適当過ぎる。お姉様のおっしゃってた通りだわ・・・」

作「それでは、これでキャラ紹介を終わります。次は・・・座談会とかやるか?」

光「お悩み相談コーナーとかは?」

作「ラジオかよ・・・」

光「じゃあ、質問コーナーとか?」

作「同じだから!」

光「むう・・・」

作「と、とにかく、今回はこれでお別れだ。ちゃんとあいさつしろよ」

光「さようなら！　次は戦場で会いましょう！」

作「何するつもりだぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

A-s編終了時におけるキャラ紹介（後書き）

ちゃんと紹介になってただろうか・・・

彼女達の日常編第一話　刹那お姉様のドラマチックな一日（前書き）

再び日常編を始めます。

彼女達の日常編第一話　刹那お姉様のドラマチックな一日

刹「うむ、今日もいい天気だ」

家を出た我を、太陽が照らす。絶好の外出日和だ。

我が君との別れ、そして生きている事が判明してからはや一ヶ月。
せっかく手に入れた自由な時間を無駄に過ごしたくなかった我は、
こうして毎日海鳴市を散策している。おかげで、主要な場所は全て
把握する事が出来た。

刹「さて・・・今日は何処へ行く事にしようか」

とは言うが、目的地など無い。適当に歩き回るのが我の楽しみ方だ。

男Ａ「お・・・」

男Ｂ「うわ・・・凄え美人・・・」

男Ｃ「おい、声かけてみろよ！」

男Ｄ「ば、馬鹿野郎！　んな事出来るわけないだろう！」

女性Ａ「素敵・・・／／」

女性Ｂ「うう・・・同じ女性として羨まし過ぎる」

街を歩くと、周囲の人間からの視線が我に向けられる。街に出ればいつもこんな感じだ。

刹「（何だ？　我の格好がそんなに変か？）」

光明に勧められて、スーツを着てみたはいいが・・・やはり仕事もしていないのにこの格好はおかしいのだろうか？

≪す、素晴らしいですお姉様！　まさに『出来る女』って感じです！！≫

刹「（光明・・・お前はそう言ってくれたが、どうやら違っているみたいだぞ）」

男「あの・・・少しよろしいでしょうか？」

同じくスーツを着た男が話しかけて来た。

男「お仕事中ですか？」

刹「いや、そういうわけではない」

男「そうですか。では、お話を聞いて頂いてよろしいですか？」

刹「いいだろう。それで、話とは何だ？」

男「あなた・・・芸能界に興味ありませんか？」

刹「・・・・何？」

男「実は私、とある芸能界プロダクションの社員でして、あなたの姿を見て確信したんです！　あなたは必ず成功すると！！」

興奮した様子で話しだす男。

男「どうですか？　一緒に芸能界のトップを目指しませんか？」

どうでもいい・・・だが、いい退屈しのぎにはなるだろう。

刹「・・・わかった、詳しい話を聞かせてくれ」

男「わかりました！　では早速事務所まで案内しますね！！」

嬉々とした表情で我を先導する男。その表情に、我は若干の嫌悪感を抱いた。

男「（くくく・・・いい『商品』ゲットだぜ・・・・）」

数分後、我が案内されたのは一軒の古いビルだった。

男「こちらです」

階段を上り、事務所らしき部屋の扉を開ける。

男「連れて来たぞ」

中には八人の男がいた。そいつらは、我の姿を見るなり、下卑た笑いを浮かべ始めた。

男B「ひゅう♪　えらい美人じゃねえか」

男C「これは売れるぞ」

男D「ひひ、楽しませてくれそうだ」

刹「何だこいつらは？」

我の問いに、連れて来た男が答えた。

男Ａ「スタッフですよ・・・ビデオ撮影のね」

刹「ビデオ？」

男Ａ「といっても・・・大人なビデオですけどね」

そう言って男が部屋の奥を指す。そこには、大人が十人くらい余裕で寝られるくらいの巨大なベッドと・・・

女性Ａ「い、いや・・・」

女性Ｂ「助けて・・・」

女性Ｃ「帰して・・・帰してよぉ」

その上で震えている三人の女性の姿が見えた。服を着ておらず、下着姿だった。

男Ａ「今からあなたには、あそこにいる三人と一緒に私達の相手をしてもらいます」

刹「騙したのか？」

男A「これが終われば、あなたはすぐに有名になれますよ。それに・・・騙される方が悪いんです」

刹「・・・・・」

男B「へへ、お姉さん、精々楽しませてくれよ」

グイ！

近寄って来た男が我の腕を掴んだその瞬間・・・・我は我慢の限界を迎えた。

刹「・・・・触れたな」

ボン！！

突然の爆発が、置かれていた機材を吹き飛ばした。男達が目をむき、慌てだす。

男A「な、何だ！？　機材の故障か！？」

刹「貴様等は三つの過ちを犯した。一つ目は・・・我を騙した事。二つ目は・・・いたいけな美少女達を辱めようとした事・・・・」

発せられたオーラが室内を暴れ回る。それを抑える事もなく、我は三つ目を口にした。

刹「そして三つめ・・・我に触れていいのは我が君だけだ!!!」

男達「ひっ!?」

ドゴォォォォォォォォォォン!!!!

その日、とあるビルが謎の爆発を起こしたが、原因は不明だったそうだ・・・

女性A「本当に・・・本当にありがとうございました!」

女性B「何てお礼を言ったらいいか!」

女性C「もう、あんな誘いには絶対に乗りません!」

刹「そうだな。お前達のような美少女を狙う者は多い・・・気をつけるのだぞ?」

微笑みながら告げると、三人は顔を真っ赤にさせながら何度も首を

縦に振った。

刹「では、我はそろそろ行くぞ」

女性A「あ、あの！　お名前は？」

刹「刹那だ・・・機会があればまた会おう」

三人に背を向け、我は歩き出した。

女性A・B・C「「「刹那お姉様ぁ！！　本当にありがとうございました～～～！！！」」」

・・・・・・

刹「とんだ騒ぎに巻き込まれてしまったな」

気付けば、駅前に到着していた。せっかくだし、このまま電車にでも乗ってみようか。

刹「隣町にでも行くか・・・」

切符を買い、ホームで待つ事数分、やって来た電車に乗り込んだ。

刹「（多いな・・・）」

電車内は肩がぶつかり合うほど混雑していた。

サワ・・・

刹「むっ・・・」

尻に何か触れた。

刹「（これだけ混雑しているからな、仕方あるまい）」

サワサワ・・・

今度は触れるだけでなく、撫でまわして来た・・・どうやら偶然ではないようだな。

刹「（ほお・・・我相手に大した度胸だな）」

男「はあ・・・はあ・・・・」

背後から聞こえる男の荒い息。我は男の腕を掴み・・・

ゴキィ！！！

・・・・・・

プシューーー！！

電車が駅に到着し、我はすぐに降りた。

男「ぎゃあぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

後ろから何やら聞こえてくるが、我には関係の無い事だ。

刹「小腹が空いたな、適当な店で何か買おう」

店を探して歩く事数分、コンビニを発見した。

刹「よし、ここで・・・」

コンビニに入ろうとした我は足を止めた。何やら数人の男が店の前に座り込んで大声で会話をしていたからだ。

男A「マジかよそれ！」

男B「おう！　マジもマジ！　大マジよ！！」

男C「ぎゃはは！　アホ過ぎるだろ！！」

刹「（あれか・・・若気の至りというやつか）」

見れば、小学生や老人が店の前で立ち往生していた。どうやら、あいつらの所為で入店出来ないようだ。

刹「退け」

ゲシ！

我は男達を蹴り飛ばした。

刹「さあ、これで通れるだろう」

小学生「ありがとうお姉ちゃん！」

老人「だ、大丈夫なんですか？」

刹「問題無い」

男A「い、いきなり何しやがる！？」

男達が立ち上がり、我を睨む。

刹「入店の邪魔だ。さっさと失せろ」

男B「ああ！？　んな事俺達には関係ねえんだよ！！」

男C「ヤッちまうぞコラァ！！」

刹「やれやれ・・・今日はゴミが多い日だな」

男A「んだとぉ！」

刹「綺麗好きな我としては見過ごせん・・・貴様等を掃除する」

掃除中・・・・

刹「・・・・よし、これで完了だな」

男A・B・C「「「・・・・・（ピクピク）」」」

最後にゴミ箱に放り込み、我は悠々とコンビニで買い物を済ませた。

空腹を満たした我はその後も散策を続け、気付けば日が傾き始めていた。

刹「もうこんな時間か、そろそろ帰・・・」

？「火事だーーーーッ!!」

突然聞こえて来た叫び声。そちらを向くと、黒煙が空に向かって立ち昇っていた

刹「はあ・・・まだ帰れそうにないな」

刹那ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

野次馬「消防車はまだか！！」

野次馬が叫ぶ。彼等の目の前に民家は、激しい炎に包まれ、その形を少しずつ崩し始めていた。

母親「離して！！　離してください！！！」

一人の女性が家に跳び込もうとし、それを数人が必死に取り押さえていた。

男「何考えてんですか奥さん！！　死ぬ気ですか！？」

母親「娘が！　娘がまだ中にいるんです！！！」

男「何だって！？」

あの中にまだ人が残っている・・・・その言葉に周りの人間が息を呑む。

男「奥さん・・・言い難いけど、これだけの火事だ。きっと娘さん

は・・・・」

母親「そんな・・・誰か!!　誰か娘を助けてください!!!　お願いよぉ!!!!」

出来るならすぐに助けに行きたい・・・そう思う者は大勢いたが、実行に移す者はいなかった。

？「・・・・任せてもらおう」

母親「え・・・・？」

そんな彼らの前に・・・一人の女性が現れた。銀色の長髪をたなびかせ、凛々しいスーツ姿のその女性は、燃え盛る家を一点に見つめていた。

女性「娘は何処にいる？」

母親「二階です！　二階の一番奥の部屋です!!」

女性「わかった・・・待っていろ、必ず助ける」

そう力強く言った女性は、水も被らず玄関を蹴破り突入した。

男「な、何考えてんだあの女!?」

母親「ああ・・・神様！　あの人と娘をどうか助けてください！！」

一分・・・二分・・・三分・・・中からは何も反応が無い。やはり、無茶だったのだろうか？　絶望感が漂い始めようとしたその時・・・

パリィィィィィィィン!!!

二階のベランダのガラス扉が砕け散り、少女を抱きかかえた女性が姿を現した。

女性「娘は無事だ！」

その言葉に、野次馬達は歓声をあげた。だが、まだ脱出が残っている。

男「どうするつもりだ!?」

女性「階段が炎で塞がれてな、多少乱暴だがここから飛び降りる」

そう言って、女性はひらりと身を翻し、二階からジャンプした。

全員「ッ！？」

そして、突然の事に驚愕する野次馬達の前に悠々と着地するのだった。

女性「あの程度、我にとっては造作もない」

どう考えても無事じゃすまない高さから飛び降りたにも関わらず、女性はひょうひょうと答えた。

娘「お母さぁぁぁぁぁぁん！！！」

母親「愛美ぃ！！！」

抱き締め合う母娘。その様子に、女性は満足げに微笑んだ。

女性「ふっ・・・この光景を守れてよかった」

母親「ありがとうございます！！　ありがとうございます！！　あなたは娘の命の恩人です！！！」

何度も頭を下げる母親に、女性は当然の様に答えた。

女性「気にするな。我は全ての美少女の味方だからな」

笑みを浮かべる女性・・・それは、ここにいる全員を魅了する笑顔だった。

野次馬「お姉様・・・」

野次馬の一人がポツリとつぶやく。『お姉様』・・・まさにその呼び方がピッタリの女性に対し、徐々にお姉様コールが起こり始めた。

野次馬Ａ「凄いぞお姉様～～～！！」

野次馬Ｂ「写真撮っていいですかお姉様！！」

野次馬Ｃ「きゃあぁぁぁぁ！！　素敵ですお姉様～～～～！！」

母親「ありがとうございますお姉様！！」

娘「助けてくれてありがとうお姉様！！」

お姉様コールの中、女性は再び髪をたなびかせながらゆっくりと去って行った・・・

刹那ＳＩＤＥ

刹「戻ったぞ」

光「お帰りなさいお姉様・・・って、ど、どうしたんですか！？スーツが焦げてますよ！？」

刹「なに、少々炎と戯れただけだ。とりあえず、我は風呂に入らせてもらうぞ」

光「わかりました（また新しいの買わなきゃ）」

今日も退屈しなかったな。明日はどんな事が起こるか楽しみだ。

翌日、新聞の片隅に我の写真が掲載されていた。

彼女達の日常編第一話　刹那お姉様のドラマチックな一日（後書き）

作「再びの日常編。第一回は刹那だ」

刹「久しぶりだな」

作「しかし・・・お前凄い一日過ごしてるな」

刹「あの程度大した事はない。この前は銀行強盗に遭遇したし、その前は車に轢かれそうになった少年を助けたぞ」

作「・・・なんか、一成より主人公っぽくね？」

刹「何を言っている？　過去に我が君がやって来た事に比べれば、我のした事など物の数にもなりはしないぞ」

作「何したんだよあいつ・・・」

第二話　神奈さんの必殺料理特訓（前書き）

何話ぐらい書こうかな・・・

第二話　神奈さんの必殺料理特訓

その日、喫茶翠屋に少女達が一堂に会していた。ある二人の人物の為に・・・

天「天音と！」

雲「雲母」

は「そしてはやての！」

天・雲・は「「「『ドキドキ！　お料理教室』～～～～♪」」」

な・光「「わ～～～～！！」」

ドンドン！　パフパフ！

天「お二人ともありがとうございます」

雲「で、では・・・本日の生徒さんをご紹介します」

は「まずは・・・神奈さん！」

神「おう！」

は「そして・・・シャマル！」

シャ「はい！」

名前を呼ばれ、力強く返事をする二人。

天「今回のお料理教室は、三日前神奈からお願いされて開催する事になりました」

≪頼む天音！　妾に料理を教えてくれ！≫

≪どうしたんですか急に？≫

≪一成が戻って来た時に、妾の手料理で迎えてやりたいのじゃ！≫

≪そうですか・・・わかりました。私でよければお教えします≫

天「・・・まさか、あんな風に頼まれるとは思ってませんでしたけどね」

は「ついでやから、シャマルも参加してもらったで」

雲「ちなみに、今回は桃子さんのご厚意で翠屋の厨房をお借りする事が出来ました」

天「では、本日の毒味・・・もとい、味見役をご紹介します。一人目は・・・ユーノ君！」

ユ「ど、どうも」

天「二人目は・・・クロノ君！」

ク「・・・今不穏な単語を聞いた気がしたんだが」

天「気のせいですよ。三人目は・・・ザフィーラさん！」

ザ「俺の意見など役に立たないと思うが、精一杯務めさせてもらう」

天「最後は・・・刹那！」

刹「胃薬の準備は万全だ」

席に着く四人。突然呼び出されたクロノは未だに状況が掴めていないようだ。

は「応援にはなのはちゃんと光明さんが駆け付けてくれたで」

な「にゃはは、頑張って応援するね」

光「いざとったら・・・私がお姉様を守ります！」

応援につきもののポンポンを持つなのはと、静かな決意を燃やす光明。

＜（・・・どうなっても知らねえぞ）＞

そんな中、龍那だけが、この先に待ち受けている地獄絵図を想像してげんなりしていた。

雲「あの、天音さん。まずはどんな料理を作りましょうか？」

天「そうですね・・・では最初は『目玉焼き』を作りましょうか」

神「め、目玉焼きじゃとぉ！？」

シャ「そんな！？　私には荷が重すぎます！！」

は「・・・・卵割って焼くだけやけど」

天「まずは私がお手本をお見せしますね」

天音が卵を手に取る。

天「卵はあらかじめ室温に馴染ませ、割って器に出しておきましょう」

片手で次々に卵を割り、器に入れていく天音。その手際に、なのは達が称賛を送る。

な「すご～い天音さん！　片手で卵を割るなんて！」

天「ふふ、これくらいは慣れれば誰にでも出来ますよ・・・・さて、卵はこれくらいにして、次はフライパンをよく熱します。油を小さじ一杯ほど入れ、中火か弱火にしてよく広げてください」

神「ふむふむ・・・」

天「充分に熱したら、割った卵を優しく流し込みます」

流し込まれた卵の白身部分が徐々に固まってきた。それを確認し、天音は水の入った容器を手に取った。

天「このように、白身がうっすら固まってきたら、お水を大さじ一杯入れて蓋をします・・・本当はお湯の方がいいんですけどね。そして、蓋をしたらすぐに火を止めます」

シャ「どうしてですか？」

天「あとは余熱で充分焼けますから。ほら、表面に薄くて白い膜が出来たでしょう？　これが完成のサインです」

フライパンから皿に移された目玉焼きは、まさに完璧な焼き具合と形をしていた。

天「今回は半熟で作ってみましたが、普通や固焼きがお好きな方はもう少し焼き時間を延ばして頂くようお願いしますね」

は「さすが天音さん。最後までしっかりとしたアドバイスありがとうございます。では・・・この目玉焼きはなのはちゃんに食べてもらいましょう」

な「いいの？　やったぁ！」

早速目玉焼きを口に運ぶなのは。すると、その顔が見る見るうちに蕩けていく。

な「おいし～～～～い！！」

天「ふふ、ありがとうございます」

な「卵の味がしっかりしてるし、半熟具合もバッチリだよ！！」

天「本当は、バターや牛乳などの隠し味を入れたらもっと美味しいのですが、今回は食材の味をしっかり味わって頂こうと思いまして」

は「さあ！　では、今の天音さんの調理を参考に、二人にも作ってもらいましょう！」

神「よ、よし・・・いくぞシャマル」

シャ「はい・・・まずは、卵を割って・・・」

そう言って、二人は同時に卵を持ち・・・

グシャ！

同時に潰した。

天「力を入れ過ぎです、もっと優しく」

神「う、うむ」

グシャ！

シャ「ま、また・・・」

天「落ちついて下さい。次はもっと優しく」

グシャ！

神・シャ「「・・・・・」」

天「だ、大丈夫です！　卵はまだたくさんありますから！」

それから数回同じ事を繰り返し、ようやく二人は器に卵を入れる事が出来た。

神「次は確か・・・フライパンを熱するんじゃったな・・・灼熱のマナよ・・・」

天「コンロを使って下さい!!」

シャ「油を入れて・・・」

天「入れ過ぎですシャマルさん!!」

神「卵をフライパンに流し込む・・・」

天「そんなに強く流したら黄身が潰れちゃいます!!」

二人が何かをするたびに、天音の悲鳴にも似た注意が出される。

ユ「だ、大丈夫なのかな・・・」

ク「天音さんがついているんだ・・・信じよう」

ザ「・・・胃薬をわけてもらって構わないだろうか?」

刹「もちろんだ」

厨房からの声に不安を抱く四人・・・だが、もはや逃げ場などなかった。

天「はあ・・はあ・・・。あ、あとは、卵が固まるのを待つだけですね。これから先はお二人に任せます。好きな調味料を使って味付けしてみてください。焼き時間も考えてくださいね」

最後くらいは好きにさせてあげよう・・・天音のこの判断が後に悲劇を生む事になる。

神「うむ！　ここまでくれば何とかなるじゃろう！」

シャ「そうですね！　後は私達の腕の見せ所です！」

天「（そうです。料理は楽しく作らないと意味がありませんからね）」

数分後、目玉焼きを完成させた二人が味見役の前に立った。

雲「では、まずは神奈さんからお願いします」

神「克目せよ！　これが妾の作った目玉焼きじゃ！！」

叩きつけるように皿を置く神奈。

ク「・・・見た目は美味しそうだな」

刹「見た目はな・・・」

は「では、この目玉焼きはユーノ君とザフィーラに食べてもらおか」

ユ「う、うん・・・」

ザ「まずは俺から食おう」

パク

神「ど、どうじゃ・・・」

ザ「・・・・・」

は「ザフィーラ？」

ザ「・・・・・味がしない」

全員「え！？」

ザ「無味だ・・・こんな料理、初めて食ったぞ」

ユ「ぼ、僕も」

パク

ユ「ほ、本当だ・・・・卵の味すらしない！！」

神「な、何故じゃ！？　そんなはず・・・！」

天「何をしたんですかあなたは！」

神「何と言われても・・・ただ、そこら辺にあった調味料を片っ端からぶちこんだだけじゃが？」

は「それが混ざって無味に・・・・んなアホな」

天「謝りなさい！　卵に謝りなさい！！」

雲「お、落ち着いて下さい天音さん！」

天「・・・・はっ！　す、すみません。私とした事がつい・・・」

は「ほ、ほな、気を取り直してシャマルの目玉焼きを食べてもらおか」

雲「次は、クロノ君と刹那さんですね」

ク「刹那さん・・・」

刹「わかっている。後でお前にも胃薬を分けてやる」

ク「お願いします」

シャ「私のは・・・これです」

シャマルが差し出した皿にのせられていたのは・・・目玉焼きなどとはかけ離れた漆黒の物体だった。

天「・・・何ですかこれは?」

シャ「目玉焼きです」

天「どこがですか!!　某ツッコミ眼鏡君のお姉さんが得意なダークマターじゃないですか!!」

シャ「つ、ツッコミ眼鏡君?」

は「ではクロノ君・・・どうぞ」

ク「これを食えと言うのかキミは!?」

は「それがキミの役目や」

シャ「目一杯焼いて固焼きにしてみました♪」

ク「固焼きじゃない!　焦げていると言うんだこれは!!」

刹「落ちつけ、案外こういった物が美味いという法則があってな・・・」

パク

刹「・・・・・」

光「お、お姉様・・・？」

刹「・・・ああ、我が君。ようやく我の気持ちに気付いてくれたのだな？」

光「幻覚症状!?」

刹「なに？　今からだと？　ふふ、しょうがないな我が君は・・・」

天「帰って来て下さい刹那!!　そこから先は禁則事項です!!」

・・・・・

は「え～～っと・・・・刹那さんは治療の為、なのはちゃんの家に運ばれました。なので、次からは三人で味見をお願いします」

ユ「まだ続くの!?」

は「当然や。憶えた料理が目玉焼きだけとか寂しいやろ？」

ク「（父さん・・・もしかしたら、もうすぐあなたに会えるかもしれません）」

ザ「シグナム・・・ヴィータ・・・リィンフォース。俺がいなくなっても、主はやてをしっかりお守りしてくれ」

雲「で、では次は、私が麻婆豆腐の作り方をお教えしますね」

シャ「お願いします！」

雲「えっと、まずは長ネギ、ニンニク、生姜をみじん切りにします」

トントントン！！

神「おお！　見事な手捌きじゃな！」

雲「あ、ありがとうございます／／　それで、次はお豆腐をさいの目に切って、予め沸騰させておいたお湯の中に入れます。そして、お豆腐が揺れ出すのを待ちます」

シャ「・・・あっ！　揺れ出しましたよ！」

雲「この状態になったらお豆腐をざるにあげます。それから、フライパンに油を敷いて、先程みじん切りにしたネギ、ニンニク、生姜を弱火で炒めます。本来は中華鍋で炒めるのが一番なんですが、あ

いにく用意出来なかったのでフライパンを代用します。しばらく炒めて香りが出て来たら、豆板醤を入れます。辛さの調節は後でも出来ますから、最初は軽く入れてください」

シャ「わかりました」

雲「さらに挽き肉を入れて、ほぐしながら炒め続けます。お肉の色が変わったら、合わせ調味料を入れて、最後にお豆腐を加えます」

神「段々それっぽくなってきたな」

雲「ここまで来たら完成まであと少しです。一分ほど煮たら火を止めて、フライパンを傾けます。そこに水溶き片栗粉を入れて・・・最後にごま油を回しながら入れれば完成です」

天「では、光明に食べてもらいましょう」

光「いただきま～～す！」

雲「ど、どうですか・・・？」

光「辛～～い！！　けど、とっても美味しいよ！！」

雲「あ、ありがとうございます！」

は「さあ、さっきの目玉焼きに比べて難易度は格段にアップしました！　果たして、二人は無事に完成させる事が出来るのでしょうか！？」

神「今度こそ美味いと言わせてみせる！」

シャ「私だって！」

瞳を燃えさせながら、二人は再び厨房に立った。

神「まずはみじん切りじゃあ！！」

ズドン！！

雲「ひゃう！？　か、神奈さん！　まな板まで切れちゃってますよ！」

シャ「次はお豆腐をさいの目に！！」

雲「そ、そんなに乱暴に切ろうとしたらお豆腐が砕けちゃいます！」

神「切った物を炒める！！」

雲「ま、待って下さい！　そんなに油を敷いたりしたら・・・」

ボワッ！

雲「きゃ～～～！　引火してますぅ～～～～！！！」

シャ「豆板醤を入れて挽き肉を混ぜるのね！！」

雲「入れ過ぎです！　そんなに入れたら辛過ぎて食べられませんよ！」

神「水溶き片栗粉とごま油を加えて・・・・出来上がりじゃ！！」

シャ「こっちも出来たわ！！」

雲「（ね、ねえ龍那・・・私、頑張ったよね？）」

＜ああ・・・お前はよくやったよ＞

こうして、完成した二人の麻婆豆腐が、席に運ばれた。

は「今度は二つ同時に食べてもらおか」

ク「・・・なあユーノ。麻婆豆腐とは普通どんな色なんだい？」

ユ「・・・・赤だよ」

ク「なら・・・この目の前に並んでいるどす黒い物はなんだ？」

ユ「・・・麻婆豆腐になるはずだった物・・・・かな」

ザ「な、何だ・・・この目に突き刺さるような痛みは・・・・」

神「さあ、たんと食すがいい！」

シャ「豆板醤をたっぷり入れましたから絶対美味しいですよ！」

ユ「だ、だからこんな色なんだ・・・」

は「さあ・・・どうぞ」

ユ・ク・ザ「「「・・・・・南無三！！！」」」

パク×３

ユ・ク「「くぁｗせｄｒｆｔｇｙふじこｌｐ！？！？！？！？！？」」

な「にゃあ！？　二人が痙攣しながら奇声を！？」

ザ「・・・・・ふっ」

天「ザフィーラ・・・さん？」

ザ「・・・・・」

天「（す、スプーンを持ったまま気絶している！）」

光「味見役が全滅！？　三食もたずに！？」

は「ま、まだや！　まだ終わらへん！！　こうなったら、私が絶対に失敗しない料理・・・・カレーを教えたる！！」

神「ふっ、見くびるなよはやて。いくらなんでもカレーくらい、妾だって作れる」

シャ「そうですよ。あまり私達を嘗めないでください」

天「どの口が言ってるんですか！！」

神「ちゃっちゃと作ってやろう・・・今度はお主達に味見をしてもらうぞ」

は「なん・・・やて・・・・・」

シャ「待っててくださいね」

その言葉は・・・・死刑宣告に等しかった。

・・・・・・

それから十数分が経過した。相変わらず、神奈とシャマルは厨房でカレー作成を続けていた。

な「な、何だろう・・・私、さっきから目がヒリヒリする」

光「私は鼻がムズムズしてる・・・」

天「くっ・・・換気扇や窓を全開にしているのにこの威力なんて」

は「あかん・・・体の震えが止まらへん」

ガチャ！

フェ「こんにちは～！」

アリ「あれ？　みんなどうしたの？」

アル「な、何だい・・・厨房の方から怪しい気が・・・・」

ヴィ「お～っす、ヒマだから遊びに来たぞ～～」

シ「主はやて、どうされたのですか？」

リ「うっ、何だこの臭いは・・・」

ア「目が！　目が～～～！！」

す「だ、大丈夫アリサちゃん！？」

何も知らない憐れな生贄達が、地獄への門を開き姿を現した。

天「ッ！　駄目です！　みなさん、すぐに逃げてください！！」

フェ「え？」

神「おお！　お主達、ちょうどよかったな！」

シャ「私と神奈さんでカレーを作ったの。どうぞ食べてくださいな」

シュウウウウウウ・・・・

神奈とシャマルが厨房から顔を覗かせる。二人が持つ鍋からは凄まじい瘴気が発せられ、中には混沌が広がっていた。

神「もちろん・・・・」

シャ「食べてくれるわよね・・・・」

全員「あ・・・ああ・・・・・」

パク

全員「ぎにゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？！？！？！？！？！？」

この日を境に、神奈とシャマルが厨房に立つ事は二度となかった・・・

第二話　神奈さんの必殺料理特訓（後書き）

作「必ず殺すと書いて・・・必殺と読む！！」

神「むう・・・ちょっと失敗してしまったな」

作「ちょっとじゃねえだろ！！　立派な殺人未遂だよ！！」

神「そ、そこまで言う事ないではないか」

作「今回の犠牲者の人数数えてみろや！！」

作「そういえば、また贈り物を頂いたぞ」

神「ほお、それは嬉しいの」

作「二次元最高様から神奈、天音、刹那、光明宛てに、一成の肉声が出る写真。俺宛てに三倍速くなるペイントを施してもらったぞ」

神「一成・・・うう、早く本物に会いたいのぉ」

作「うおぉぉぉぉ！！　速過ぎて止まらねえ！！」

作「マサ様からは、好きな英霊を召喚してサーヴァントに出来る召喚魔導具と、ユーフィからお花見用のお菓子セットと、付け合わせ

の緑茶を頂いたぞ」

神「やはり、花見の席での一杯は格別じゃな」

作「そうだな・・・って！　お前それ酒じゃねえか！！」

神「チッ・・・ばれたか」

第三話　天音嬢の妄想日記（前書き）

ネタが・・・

第三話　天音嬢の妄想日記

天音ＳＩＤＥ

天「はあっ・・・はあっ・・・・・！」

私は走る。とにかく走る。両手の買い物袋の中身が気になるが、事態はもっと深刻だ。

天「私とした事が・・・『アレ』を出しっぱなしにしておくなんて！」

一成様がいないのが唯一の救いだが、それでも、神奈あたりに見られたら何を言われるだろうか。

天「とにかく、急いで帰らないと・・・！」

焦る気持ちを落ち着かせながら、私は速度を上げた・・・

天音ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

光「あれ、何だろうこれ？」

天音が必死に走っている頃、秋月家では、光明が一冊のノートを手に取っていた。

刹「どうした光明？」

光「お姉様。このノート何でしょうか？」

神「妾にも見せてくれ」

光「はい」

神奈は、渡されたノートの表紙に書かれた文字を読み上げた。

神「『私と一成様の愛の日記』・・・じゃと？」

雲「もしかして、天音さんのじゃないですか？」

＜だろうな。アイツの事そう呼んでるの天音だけだし＞

神「・・・読んでみるか」

光「い、いいのかな？　日記を勝手に読むなんて・・・」

刹「だが、このタイトルは無視できるものではないぞ」

雲「で、でも・・・」

＜面白そうだな。早く開いてみようぜ＞

神「二人も、本当は気になっておるのじゃろ？」

光・雲「「・・・・・（コクン）」」

神「では・・・・いくぞ」

全員が覗きこむ中、神奈はゆっくりと日記を開いた・・・

今日から日記をつけようと思います。マスター・・・いいえ、一成様は、私に『天音』という素敵な名前をつけてくださいました。この日、私達は『家族』となったのです。

神「これは・・・妾達がこの世界に来て最初の日に書いたようじゃな」

光「へ～、二人の名前って一兄がつけてくれたんだね」

＜・・・・安直だよな＞

雲「それは言っちゃ駄目だよ龍那！」

刹「そういえば、我の名前はそのままだな」

神「そもそも、妾達が名前を変えたのは、そのままでは女性の名前として違和感があるという事で一成が提案した事だったのじゃ。刹那はそのままでも違和感なかろう？」

それぞれ思った事を口にしつつ、次のページに目を移す。

高町家のみなさんと動物園にでかけました。しかし、動物に目を奪われている間に、一成様となのはちゃんが迷子になってしまいました。うう、一生の不覚です。

あと、すずかちゃんに出会ったそうです。こんな早い段階からフラグを立てるなんて・・・やっぱり一成様は一成様です。

光「動物園か～～。私も行ってみたいな」

刹「なら、今度我と行くか光明？」

雲「せっかくならみんなで行きませんか？」

＜そりゃいいな。そうしようぜ＞

神「ふむ・・・ここで一度この街を去ったからの。次は帰って来た所からの様じゃな」

やっと海鳴市に帰って来れました。桃子さんは相変わらずお美しかったです。羨ましい限りですね。明日は一成様の初登校日ですが、イジメなどに遭ったりしないでしょうか。今から心配で眠れません。

刹「イジメか・・・我が君には無縁の言葉だな」

一成様から学校でのお話を聞きました。なのはちゃんやすずかちゃんと再会出来たようでよかったです。でも、アリサちゃんや他の女の子達にも目をつけられたようです。そして・・・やっぱり男の子達には追いかけられたようです。

光「あはは・・・一兄って人気者なんだね」

なのはちゃんがユーノ君と出会い、魔法に目覚めました。これから大変な道のりが彼女を待ち受けていますが、一成様がいれば絶対大丈夫ですね。

一成様にお姫様抱っこされたなのはちゃんが羨ましかったのは秘密です。

雲「（お、お姫様抱っこかぁ・・・いいなぁ）」

突然の魔力反応を感じて現場に向かうと、なんとフェイトちゃんと出会ってしまいました。間一髪、ジュエルシードの怪物からフェイ

トちゃんを守る事が出来ましたが・・・やっぱりフラグも立てていました。

＜原作とずいぶん違ってたみたいだな＞

その後も読み続ける一同だったが、これといって面白い内容は見つからず、だんだんと興味を失っていった。

刹「タイトルに釣られて読んでみたが・・・ただの日記じゃないか。これのどこが愛の日記なんだ？」

神「そうじゃのぉ・・・」

パラ・・・

神「・・・・ん？」

適当にページを飛ばす神奈。その目が、とあるページで止まる。

一成様にデートに誘われました。今日は体をよく洗って、勝負下着も準備しておかないと。

雲「ええ!?　こ、これって・・・」

刹「馬鹿な!!　あの我が君が自分からデートの誘いだと!?」

光「どうしたんですかお姉様？　別に、それくらい普通じゃ・・・」

神「甘い!!」

光「ッ!?」

神「一成からのデートの誘いなど・・・たとえ天地がひっくり返ってもありえん!!

光「そ、そこまで言うの？」

＜お、おい神奈!　それより続きを・・・＞

神「わかっておる!」

今日は最高でした!　一緒にお買い物をして、一緒に映画を見て、最後は夕日の中、手を繋ぎながらお家に帰りました。あの時の一成様の手の温もり・・・私は一生忘れません♪

神「手を繋ぐじゃと!?　ぐぐぐ、妾ですらまだだというのに、天音の奴めぇぇぇぇ!!」

雲「ひゃう!?　か、神奈さんから真っ赤なオーラが・・・」

うう、お風呂に入ろうと思ったら、脱衣場で一成様と鉢合わせして・・・わ、私の生まれたままの姿を見られてしまいました。一成様は手で顔を隠しながらも、指の間からチラチラとこちらを覗いていました。の、望まれるのなら、私はいつでもお見せしてもよろしいのですが・・・

刹「おのれ天音ぇ！！　我より先に、我が君に見られるとは・・・何とも羨ましい！！」

光「お、落ち着いて下さいお姉様！！　そんなに興奮したら鼻血が・・・」

昨日の夜、突然寂しくなったので、一成様のお部屋にお邪魔しました。事情を話すと、一成様は私が寂しくならないように、一緒に寝ないかと誘ってくださいました。寂しくはなくなりましたが、ドキドキが止まらなくて、結局一睡も出来ませんでした。

でも、寝ている一成様を好きなだけ抱き締める事が出来たので、大満足です。

雲「い、一緒に・・・抱き締め・・・・あう／／」

龍「・・・って、急に入れ替わるなよ雲母・・・・ん？」

＜・・・・・＞

龍「き、気絶してやがる・・・」

ああ、一成様・・・もうこの気持ちを抑える事は出来ません。よって、今から私の想いを伝えに行こうと思います。

神「こ、告白までしたのか・・・・！」

光「じゃ、じゃあ、次のページには結果が？」

全員「・・・・ゴクッ」

震えながら、神奈がゆっくりとページを捲・・・ろうとしたその時！！

バァン！！

全員「ッ！？」

玄関が大きく開かれ、続いて神奈達のいるリビングに向かって何者かが走って来た。

天「駄目ですーーーーーーッ！！！」

バッ！！

神奈に跳びかかった天音は、その手からノートを奪い取ると、しっかりと両腕で抱き締めた。

天「はあっ・・・はあっ・・・・やっぱり読んでしまったのですね」

神「天音よ・・・・そのノートを渡せ・・・・」

天「お断りします。これは私の大切な日記です」

刹「その日記に書かれている事・・・・全て事実なのか？」

天「そ、それは、その・・・」

光「ふ、二人とも・・・目が怖いよ・・・・」

龍「どうなんだよ天音？」

詰め寄る二人に対し、天音がとった行動は・・・・

天「か、買い忘れた物があるのでまた出て来ます！！」

逃走だった。

神・刹「「逃がすかぁ！！」」

ビシッ

天「ぐ、グラスプ！？」

刹「観念しろ天音！」

天「この程度でぇ！」

バキン！

光「え！？　お姉様のグラスプを・・・」

龍「よっぽど話したくないみたいだな」

天「家族に対して魔法を使わないでください！！」

神「お主はたった今から敵じゃあ！！」

刹「大人しくそのノートを渡せぇ！！」

外に逃げた天音を、二人は全力で追いかけ始めた。

天「（きっと、デートや脱衣所、一緒に寝た事などを読んでしまったんでしょうね。けど・・・）」

天音は二人から逃げつつ、手に持ったノートに目を向けた。

天「（あれは全て私の妄想・・・この日記は、私の妄想日記なのです！）」

当初、真面目に日記を書いていた天音だが、いつしか、日ごろの妄想をこの日記に書き留めておくようになったのだ。

天「（一成様がいない今、この日記を綴る時だけが私の安らぎなのです。誰にも渡しません！！）」

神・刹「「待てぇぇぇぇぇぇぇぇい！！！」」

天「待てと言われて待つ人はいません！！！」

その日、天音の逃走劇は夜中まで続いた・・・

第三話　天音嬢の妄想日記（後書き）

作「サブタイそのままの内容だったな」

天「私の妄想癖はもう決定事項みたいですね」

作「いいじゃないか。妄想は悪い事じゃないぞ」

天「限度があるでしょう・・・」

作「勝手に限界を決めるんじゃない！」

天「ＳＹＵＵＺＯみたいな事言わないでくださいよ」

作「んじゃあ、贈り物報告会始めるか」

御「やあ・・・お兄さんだ」

天「あ、緋水様の所の御門さんじゃないですか」

御「今回は大福十人前を持って来たよ。ところで・・・神奈くんはどこかな？」

天「神奈でしたら今回はお休みですよ」

御「そうかい・・・前回の件でちょっと説教しようと思ったんだが」

作「説教？」

御「料理を大切にしない者は許さない・・・これお兄さんの鉄則」

天「はあ・・・やっぱり前回のはやり過ぎたみたいですね。では、私が代わりに注意しておきます」

御「そうか・・・頼んだよ」

作「・・・・神奈ェ」

天「グラムサイト2様からは、一成様の事が好きな方全員に、十分の一サイズの一成様ぬいぐるみと、美由紀さんに一矢状態の一成様のブロマイド十枚と、声入りの目覚ましを頂きました」

作「ぬいぐるみには、自分の声で録音したテープを背中に入れると、一成の声で再生される機能がついてるぞ」

天「で、では早速・・・」

作「何て入れたんだ？」

天「これです！」

『天音・・・キミの作った味噌汁が毎日飲みたいな』

天「は、はい！　もちろんです！！」

作「今と変わらねえだろ」

天「・・・はっ！」

奇跡のコラボ特別編　天に惚れた男（前書き）

まさか、このようなものを書かせて頂ける日が来ようとは・・・

奇跡のコラボ特別編　天に惚れた男

これは、決して出会うはずのなかった二人の男女の物語である。

深夜、海鳴市の隣に位置する街に、一人の男が舞い降りた。

男「ふっふっふ・・・ついに、ついにこの世界にやって来れたぞ！」

空に向かい、男は高らかに吼えた。

男「待ってて下さい！　天音さぁぁぁぁぁぁん！！！」

天音ＳＩＤＥ

天「・・・迷ってしまいました」

刹那に勧められ、隣街まで足を伸ばしたのはよかったけれど、初めてという事もあってアッサリ迷ってしまった。

≪あの街は次から次にイベントが起こって飽きないからな、楽しん

で来い≫

天「これもイベントの一つという事なんでしょうか・・・はあ・・・・」

男性「おほっ、メイドがいるぞ」

二人組の男性が近づいて来た。

男性A「お姉さん、何でそんなカッコしてんの？　コスプレ？」

天「コスプレではありません。これは私の正装です」

男性B「てことは本物のメイドさん？　うはっ、初めて見た」

男性A「俺達にもご奉仕してよ。ご主人様～～～ってか？」

天「お断りします。私のマスターは一成様ただお一人ですから」

男性B「そんなつれない事言わないでさ、俺達に付き合ってよ」

グイッ

一人が私の腕を掴む。穏便に済ませようと思ったけれど、そろそろ我慢の限界が近い。

天「あなた達・・・いいかげんに・・・・」

？「何やっとんじゃお前等ーーーーッ！！」

ゲシッ！

男性Ｂ「チョケプリィィィィィィ！？！？！？」

天「え？」

突然、私の腕を掴んでいた男性が、奇声を発しながら吹き飛んだ。

男性Ａ「な、何だテメエは！？」

新たに現れたのは、黒い長髪に、中性的な顔が特徴的な一人の男性だった。

男性Ｃ「うっせえ！　この人に触れようとするヤツは俺が許さん！！」

ドガッ！

男性Ａ「たわばっ！？」

鳩尾に拳を受け、もう一人の方もその場に崩れ落ちた。

男性Ｃ「ふう・・・大丈夫ですか？」

天「はい。どうもありがとうございました」

男性Ｃ「い、いえいえ！　当然の事をしただけですから！」

照れたように頭を掻く男性。その姿が可笑しくて、私は笑ってしまった。

男性Ｃ「・・・・」

天「？　私の顔に何かついていますか？」

ジッと見つめて来る男性を不思議に思い、首を傾げる。

男性Ｃ「いや、その・・・綺麗だな～～・・・なんて」

天「ふふ、ありがとうございます。私、天音を申します。あなたの

お名前を教えて頂けますか？」

男性Ｃ「大和です。荒神　大和」

天「では、改めてお礼を申し上げますね大和さん。助けて頂いてどうもありがとうございました」

大「（天音さんが・・・天音さんが俺の名を！！　今なら誰が相手だろうと勝つる！！）」

天「大和さん？」

大「・・・はっ！　な、何でもないです。それと、さっきも言いましたが、俺は当然の事をしただけですからお礼なんていいですよ」

天「お優しいんですね」

謙虚な姿勢を崩さない大和さんに、私は好感を持った。

大「（やばい・・・あの笑顔は兵器だ！）と、ところで、こんな所でどうしたんですか？」

天「それが・・・お恥ずかしい話なのですが、迷ってしまって・・・」

大「そうなんですか・・・もしよかったら、俺がこの街を案内しましょうか？」

天「よろしいのですか？」

大「こうして出会えたのも何かの縁ですし、困った時はお互い様じゃないですか」

微笑む大和さん。ここは彼の厚意に甘えた方がいいだろう。

天「・・・・では、お願いしてよろしいですか？」

大「お任せください！」

こうして、私は大和さんと共に街の散策を始めた・・・

天音ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

大和ＳＩＤＥ

大「（幸せ過ぎる・・・）」

天音さんと一緒に街中を歩く。これってデートって言ってもいいよな？

大「（海鳴じゃなくて、この街で出会えるとは思ってなかったが、むしろ早く出会えた分よかった）」

俺がこの世界に来たのはこの人に会うためだったんだからな。色々頑張ってよかった。

大「天音さん、どこか行きたい所ありますか？」

天「大和さんにお任せします」

大「なら・・・公園に行きましょう」

天「はい」

天音さんの速度に合わせて歩く事数分、目的の公園に到着した。

天「広いですね」

大「中央にある噴水目当てに、カップルや親子連れも多いですからね。いくつか出店もありますし」

天「お詳しいんですね」

大「これくらいは常識ですよ（・・・昨日、歩き回ってよかった）」

店員「アイスクリームいかがですか～～」

大「天音さん、アイスでも食べますか？」

天「いいですね」

アイスを二つ購入し、適当なベンチに腰掛けた。天音さんは自分の分の代金を出そうとしたが、俺が二人分の代金を出した。大した額じゃないし、アイスを受け取った時の天音さんの笑顔を見れただけで充分すぎるほどおつりがくる。

大「美味しいですね」

天「そうですね・・・・あら？　ほっぺにアイスがついてますよ」

大「え？　どこに・・・」

天「私が取ってあげますね」

天音さんはポケットからハンカチを取り出し、俺の頬を優しく拭いてくれた。

天「・・・はい、拭けましたよ」

大「なっ・・・あ・・・その・・・・／／」

天音さんの手が！　手が！！　俺の思考回路はショート寸前ですよ
天音さん！！！

天「大和さん？　お顔が真っ赤ですけど、どうかされましたか？」

大「そぉぉぉぉぉぉぉぉい！！！」

バシャァァァァァァン！！

俺は全速力でダッシュし、噴水に飛び込んだ。

天「や、大和さん？」

大「いやあ！　今日は暑いですね！　思わず飛び込んじゃいましたよ！！」

まずい、天音さんに変人扱いされてしまう前に、もちつけ・・・じゃなくて、落ち着け俺！

天「ふふ、面白い人ですね大和さんは」

大「は、ははは・・・はあ・・・・」

幸い、天気がよかったので服はすぐに乾いた。俺達は公園を後にし、次の場所へと向かおうとしていた。

大「それじゃあ次は・・・」

ドンッ

天「あ・・・」

前方から歩いて来たガラの悪い二人組の男の片方に天音さんの肩がぶつかった。案の定、その二人は俺達に絡んで来た。

男A「痛えな。どこに目をつけてんだ」

天「申し訳ありません。私の不注意で」

男B「大丈夫ですかアニキ？」

アニキと呼ばれた男は、下卑た視線で天音さんを見つめると、ぶつかった方の腕を押さえて呻きだした。

男A「ううん、こりゃ駄目だ。骨にヒビが入っちまった」

男B「おう姉ちゃん！　どうしてくれんだよ！」

天「あの、どうすれば・・・」

男A「なに、ちょっと俺達について来てくれればいい。そうすれば許してやるよ」

天「それは・・・」

男B「嫌とは言わせねえぞ！　お前の所為でアニキはケガしたんだからな！」

男A「俺が満足したら帰してやるよ。さあ、来な・・・」

グイッ！

天「あ・・・！」

男が天音さんの腕を乱暴に引く。それを見た瞬間、俺の何かが切れた。

・・・・・プツン。

大「その手を離せ・・・・」

男Ａ「あん？」

大「離せって言ったんだよ！！」

ドゴッ！

男Ａ「ぎゃあぁぁぁぁぁぁぁ！？！？！？」

手甲を『創造』し、天音さんを掴んでいた男を吹き飛ばす。今はまだ完全に扱い切れていない力だが、それでもチンピラ相手には充分だ。

男Ｂ「アニキ！？」

天「大和さん・・・その武器は・・・・・」

大「後で教えます。今は・・・こいつ等を片付ける！！」

ドカッ！　バキッ！　メメタァ！！

男Ｂ「あ、あべし・・・」

ドサ！

大「天音さんに危害を加えるヤツは俺が潰す！」

男Ａ「て、テメエ・・・俺達が『如月組』だとわかってんのか！」

大「お前等ヤクザか・・・よし、お前等のボスに下っ端の不始末を詫びてもらうか。というけで、ボスの所まで案内しろ」

男Ａ「ふ、ふざけんな！　誰が・・・！」

ザクッ！

男の目の前に剣を突き立て、もう一度命令する。

大「案内しろ」

男Ａ「は、はい・・・」

大和ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

『如月組』の組長は自宅に幹部を集め、会合を開いていた。そんな中、突然の轟音が彼等を襲った。

ドゴォォォォォォォン！！

幹部Ａ「な、何だ！？」

組員「た、大変です！　カチコミです！！」

幹部Ｂ「何だと！？」

幹部Ｃ「人数は！？」

組員「二人です！　一人はガキ。もう一人は・・・メイドです！！」

全員「はあ！？」

・・・・・

大「どけどけぇぇぇぇぇぇ！！」

ズバ！

組員「のわ！？」

次々に組員を倒していく大和。その後ろで、天音は先程絡んで来た男を拘束しながら引き摺っていた。

大「おい、組長はどこにいる？」

男Ａ「そ、その向こうです・・・」

大「よし、天音さん。キッチリ詫びさせますからもう少し待っててくださいね」

天「（どうして彼は、ここまで私の為に怒ってくれるのでしょうか・・・）」

スパン！

大和が勢いよく襖を開けると、奥には数人の男を従えた壮年の男性がいた。他の男達と違い、圧倒的な存在感を醸し出している。

大「あんたが組長か？」

組長「・・・・そうだ」

大「そうか、なら・・・」

幹部Ａ「テメエ！　何者だ！？」

一人の幹部が大和に襲いかかった。

大「邪魔だ」

だが、あっさりと返り討ちに遭い、倒れた。

大「用があるのは組長だけだ。大人しくしてろ」

幹部B「はいそうですかと従えるか！！」

残った幹部達が一斉に拳銃を向ける。しかし、対する大和も拳銃を『創造』し、その全てを弾き飛ばした。

幹部B「ぐあっ！？」

幹部C「ど、どこから出しやがった！？」

大「言ってもお前等には理解出来ないさ。さあ、今度こそ話を聞いてもらうぞ」

組長「話？」

大「天音さん・・・」

大和の合図で、天音は拘束している二人を組長の前に立たせた。

幹部B「そいつらはウチの・・・」

大「この二人が天音さんに乱暴しようとした。その二人のボスであるあんたに詫びてもらおうと思って俺達はここに来た」

幹部C「お前等・・・堅気の人間に手を出したのか!?」

男A・B「「す、すみません!!」」

幹部B「すみませんで済むか馬鹿野郎!!　覚悟は出来てんだろうな?」

組長「お前さん・・・それだけの理由でヤクザの家に攻めて来たのか?」

大「俺にとっては充分過ぎる理由だ」

組長「ふっ・・・今時の若い者も捨てたもんじゃなさそうだな」

組長は姿勢を正し、深々と頭を下げた。

組長「すまんかった・・・こいつ等は責任を持って処罰しておく。許してくれ」

大「どうしますか天音さん？」

天「はい。こうして謝って頂いたのでもう充分です」

大「そうですか」

こうして、大和と天音のヤクザ宅襲撃は幕を閉じた。

組長「しかし小僧。勇敢なのは結構な事だが、あまりこっちの世界を甘く見ない方がいいぞ。二度と同じような真似はするなよ」

大「関係無い。天音さんを守るためなら、俺は誰とでも戦う」

組長「ふん・・・お前ほどの男にそこまで想われるとは・・・そのお嬢さんは幸せだな」

大「それは違う。天音さんを護る事は俺にも出来るけど・・・幸せに出来る人は別にいるんだよ」

組長「？」

大「・・・何でもない。それじゃあ俺達は帰らせてもらう」

立ち去る大和と天音。止めようとする者は一人もいなかった・・・

・・・・・

二人は、公園に戻っていた。

大「さて・・・約束通り、俺の力についてお話しますね」

大和は、天音に自身の力について話した。

天「まるで、あの時の一成様みたいな力ですね」

大「まだ完全には扱い切れていないんですけどね」

天「でも、戦っている大和さん、カッコよかったですよ」

大「あ、ありがとうございます！」

その時、十七時を告げるチャイムが大きく鳴り響いた。

天「あら、もうこんな時間ですね。早く帰ってお夕飯の準備をしないと・・・」

大「なら、ここでお別れですね」

寂しそうに大和は呟いた。

天「そうだ、もしよかったら私の家に来ませんか？　今日のお礼にお夕飯をご馳走しますよ」

大「天音さんの手料理か・・・とても魅力的ですけど、すみません。ちょっと用事がありまして」

天「そうですか・・・」

大「本当にすみません」

天「では、今度お会い出来た時に改めてお礼をさせて頂きますね」

大「はは、楽しみです」

最後にもう一度頭を下げ、天音は立ち去った。

大「今度・・・か。また会えたらいいな」

大和の体が徐々に透けていく。彼の世界に帰る時が来たのだ。

大「次は・・・・一成と三人で何処かに行きましょうね天音さん」

その言葉を最後に、大和はこの世界から消え去った。己の戦いを続けるために・・・

これは、決して出会うはずのなかった二人の男女の物語である。

奇跡のコラボ特別編　天に惚れた男（後書き）

作「というわけでぇぇぇぇぇぇ！！　今回はぁぁぁぁぁぁ！！　清浦刹那様とのコラボだぜぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！」

天「嬉しいのはわかりますが落ち着いて下さい」

作「そしてぇぇぇぇ！！　今回のゲストはもちろんこの方・・・大和さんだぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

大「天音っさぁぁぁぁぁぁん！！」

天「お、落ちついてください大和さん」

大「・・・はっ！　すみません。後書きになるとどうしてもテンションがこうなってしまって」

作「いやあ、まさか俺みたいな駄文作者の作品とコラボして下さる方がいらっしゃるとは・・・清浦刹那様には頭が上がりません！」

天「そうですね・・・何かお礼をしなくてはいけませんね」

作「そうだな・・・天音、お前ちょっと出張して来い」

天「わ、私ですか！？」

大「おお！　大歓迎ですよ天音さん！」

作「それと、本編中には明かされなかった大和さんの力については、

清浦刹那様の作品『まひるの昼休み（仮）』をご覧ください」

天「宣伝ですね」

作「これくらいさせて頂かないと俺の気持ちが収まらんからな」

作「さて、大和さんも交えて贈り物報告会始めるか」

天「まずは緋水様からですね。私宛てに、絶対に他人に見られないノート。神奈宛てに料理本を頂きました」

作「よかったな天音。これで読まれる心配もなくなったな」

大「神奈の料理か・・・怖いもの見たさで一度食べてみたいな」

天「それだけは駄目です！」

大「あ、そうだ。ウチの作者からも贈り物がありますよ。光明宛てにセイバーリリィの騎士服風のドレスです」

天「素敵なデザインですね。あの子に似合いそうです」

大「俺としては天音さんに来て欲しかったんですが・・・（ボソ）」

天「はい？」

大「な、何でも無いですよ」

作「最後だな。二次元最高様からチーズケーキを十個ほど頂いたぞ」

天「では、早速頂きましょうか。大和さんの分もすぐに準備しますね」

大「お、俺もいいんですか？」

天「もちろんです」

大「ありがとうございます！」

作「天音、俺は・・・」

天「あなたは前科がありますので今回も駄目です」

作「ですよね～～！」

大「ふう・・・じゃあ、そろそろ俺は失礼しますね」

作「清浦刹那様に俺がとても感謝してた事伝えてくださいね」

天「またいつでもいらしてくださいね」

大「はい。では、さようなら」

作「・・・・なあ、天音」

天「何ですか？」

作「俺さ・・・マジで嬉しいんだけど、この気持ちをどうやって表現したらいいかわからないんだ」

天「とりあえず・・・いつもみたいに叫べばいいんじゃないですか？」

作「なるほど、よし・・・・・ひゃっほぉぉぉ

第四話　光明ちゃんの秘密の楽しみ（前書き）

もう迷わん。俺は俺の好きなように書いてやる。

第四話　光明ちゃんの秘密の楽しみ

刹「光明の様子がおかしい？」

夜、光明が風呂に入っている間を見計らい、刹那達は顔を突き合わせた。

天「そうなんです。最近毎日のように外出していますし、何処に行くのか聞いてもごまかしますし」

神「そういえば・・・妙に嬉しそうな顔をしておったな。まるで、焦がれる相手に会いに行くような・・・」

龍「まさか・・・男か？」

＜ええ！？＞

刹「それはない。光明はすでに我が君にメロメロだからな。ヤツの性格上、他の男に目がくらむ事はありえん」

天「では、一体誰に・・・」

神「・・・つけてみるか」

全員「ッ！？」

神奈の提案に全員がハッとなる。

＜か、神奈さん。さすがにそれは・・・＞

神「話してくれん以上仕方なかろう。光明もすでに妾達の家族じゃ。悪い虫をつかせるわけにはいかんじゃろ？」

刹「神奈の言う通りだ。もし、不埒な考えを持って光明に接しているのなら・・・我が生まれて来た事を後悔させてやる」

天「ふふっ、刹那。あなた、光明に対してちょっと過保護な所がありますよね」

刹「むう・・・別にそんな事はないぞ」

その時、風呂からあがった光明がリビングに入って来た。

光「は～～、気持ちよかったぁ♪　あれ？　どうしたのみんな？」

神「ん・・・別に何でもないぞ」

光「？　まあいいや。牛乳でも飲もっと」

鼻歌交じりに冷蔵庫から牛乳を取り出す光明。その隙に、神奈達は改めて向かい合った。

神「では・・・早速明日決行するぞ。よいな?」

全員「・・・・・(コクン)」

光「んぐ・・・んぐ・・・・ぷはぁ!　やっぱり風呂上がりの牛乳は最高だな~~」

何も知らない光明は、幸せそうに牛乳を飲んでいた・・・

そして翌日。正午を過ぎた頃、光明は外出の為に玄関に向かった。

光「出かけて来ま~~す!」

足取り軽く玄関を出ていく光明・・・それを見送り、四人も動き出した。

刹「・・・行くぞ」

全員「了解!」

近過ぎず、かといって離れ過ぎない距離を保ちつつ、四人は光明の

後をつけ始めた。

男Ａ「なんだあの集団？」

男Ｂ「すげえ美人だけど・・・怪し過ぎる」

コソコソ移動する四人は当然目立った。しかも、全員とびっきりの美女、美少女である。目立たない方がおかしい。

警官「あー・・・もしもし？　キミ達、ちょっと話を・・・」

ドス・・・

警官「おふ・・・」

職務質問をしようとした山田　五郎巡査（三十五歳、独身）は、天音に首筋を打たれ気絶した。

天「・・・申し訳ありません。ですが、邪魔されるわけにはいきませんので」

光「？」

気配に気付いたのか、光明が後ろを振り向こうと首を動かした。

神「ッ！　まずい！　皆、すぐに隠れよ！」

シュバッ！

神奈は電柱の陰。天音は看板の裏。龍那は細道に身を隠し。刹那は・・・

刹「・・・・（キリッ！）」

とあるペットショップの前で、荒ぶる鷹のポーズをとっていた。

神・天・龍・雲「「「「（な、何やっ（とるのじゃ）（てるんですか）（てんだよ）！？）」」

モロ見えだった。それはもうモロ見えだった。

光「・・・・気のせいかな？」

神・天・龍・雲「「「「（えぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！？）」」」」

首を傾げ、光明は再び歩き出した。

刹「うまくいったな」

神「何を考えとるんじゃお主は！？」

天「あれで気付かれなかったなんて奇跡ですよ奇跡！」

刹「ふっ・・・奇跡ではない。あのポーズをとった我は、完全に気配を消せるのだ。何者であろうと我に気付く事など出来ん」

龍「マジかよ・・・あんなふざけたポーズで・・・・」

刹「教えてやろうか？」

＜え、遠慮しておきます・・・＞

刹「では追跡を続けるぞ」

再び光明を後を追い始める四人。・・・誰一人気付いていなかったが、刹那がポーズをとった時、ペットショップにいた動物達が、彼女を崇めるように伏せていた。

店員「こ、これは一体・・・」

動物たちのただならぬ様子に、店員はすぐさま原因究明のために動き出したが、本編には全くといっていいほど関係無いので割愛する。

さらに追跡を続ける事三十分。これといって特別な事は起きなかった。

刹「ふむ、今のところは異常無しだな」

龍「つーかよ、ただの散歩だってオチじゃないよな？」

神「・・・否定出来んの」

天「待って下さい・・・動きがありましたよ」

三人が一斉に視線を向ける。光明は、公園に入って行った。

神「なるほど、ここが待ち合わせ場所のようじゃな」

天「定番といえば定番ですね」

＜そ、それより、追いかけなくていいんですか？＞

龍「なんだよ雲母。お前も結構ノリノリじゃねえか」

＜そ、そういうわけじゃないよ・・・！＞

刹「おしゃべりはそこまでだ。ここからは慎重に行くぞ」

まるで潜入するかのような足取りで公園に入る四人。園内は思いの外広く、光明との距離が大きく離れていた。

刹「見失わないようにしなければな」

やがて、ベンチの近くまで進んだ光明は、その場にしゃがみこんだ。

神「何をしておるのじゃ？」

龍「いよいよもって怪しいな」

天「回り込んで様子を見ましょう」

茂みに入りこみ、少しずつベンチの後ろに近づく四人。近づくごとに、光明の声が聞こえて来る。

光「えへへ～。また来ちゃった」

天「やっぱり・・・私達の予想は正しかったみたいですね」

光「あはは。ちょっと、指舐めないでよぉ」

刹「何!?　こんな真っ昼間からそんなマニアックなプレイを・・・！」

神「ば、馬鹿者。もっと声を抑えんか」

光「はわわ！　そんな所に顔を突っ込まないで～～！」

＜あわわわわ・・・！＞

龍「お、おいおい・・・大丈夫なのかよ」

どう考えてもまともな会話じゃない。ベンチの裏に辿り着いた四人は。緊張の面持ちで覗きこんだ。

そこで見たものは・・・

子猫「にゃ～～」

光「あ～もう！　可愛いよ～～！」

神・天・刹・龍・雲「「「「「・・・・・へ？」」」」」

子猫を抱き上げ。幸せそうに顔をすり寄せている光明の姿だった。

彼女の足元には段ボールが置かれ、中にも子猫が三匹ほど入っていた。

子猫Ａ「にゃあ」

光「にゃ？」

子猫Ａ「にゃあにゃあ」

光「にゃあ！」

子猫Ａ「ふにゃあ・・・」

光「にゃんにゃん♪」

楽しそうに猫語をしゃべり始める光明。その微笑ましい光景に、四人は優しい表情を浮かべた。

刹「・・・なるほど、子猫に会いに来ていたのだな」

神「やれやれ、別に隠すような事でもないではないか」

天「それにしても・・・ふふっ、猫語を話すなんて可愛らしいですね」

龍「・・・・（ウズウズ）」

＜どうしたの龍那？　もしかして、子猫抱きたいの？＞

龍「ば、馬鹿言うなよ。オレはそんな事・・・」

刹「なんにしても、せっかくの光明の楽しみを邪魔するわけにもいかないな。我達はさっさと退散するか」

天「そうですね」

そのまま気付かれないようにその場を去ろうとした四人だが・・・

男「何やってんの彼女？」

光明に近づく集団に気付き、足を止めた。五人の男が、光明を囲むように立つ。

男Ａ「キミ可愛いね～。もしよかったら俺達と一緒に遊ばない？」

光「いきなり現れてなんなのあなた達？　私、今急がしいの。わかったらさっさと消えてくれない？」

至福の時を邪魔され、不機嫌さを隠そうともしない光明。

男Ｂ「きっついね～。けど、そういう女の子俺大好き」

男Ｃ「・・・あん？　捨て猫か？」

男D「汚ねえ。俺猫って嫌いなんだよな」

男E「俺も」

光「あら奇遇ね。この子達もあなた達の事が嫌いだそうよ」

男A「へ～～・・・そうかい。なら、もっと嫌われるような事してやろうか」

光「え？」

グイ！

一人が、子猫の首を掴んで持ち上げた。

光「な、何してるのよ！　そんな所持ったら危ないでしょ！」

すぐさま取り返そうとする光明だが、男との身長差で手が届かない。

男A「ほ～ら、パス」

男が子猫を放り投げ、別の男がキャッチする。

光「止めなさい！　それ以上やったら許さないわよ！」

男A「キミが、俺達に付き合ってくれたらすぐに止めてあげるよ」

男B「ほ～れ」

再び放り投げられる子猫。

男C「もういっちょ」

男D「そらよ」

男E「はいよ」

弄ばれる子猫。光明は、一人一人に掴みかかるが、止める事が出来ない。

光「止めて・・・止めてよぉ・・・・・」

涙を流し、崩れ落ちる光明。男達はそれを見て楽しそうに笑っている。

神・天・刹・龍・雲「「「「「・・・・・・（ブチ）」」」」」

その涙を見て、彼女達が動かないわけがなかった。

男A「さ～て、次は、子猫サッカーでもするか」

光「や、止め・・・！」

男A「ボールはもちろん・・・」

刹「貴様だ」

ゲシッ！！

男A「ほあぁぁぁぁぁぁぁ！？」

飛び出した刹那が、男の背を蹴り飛ばす。宙を舞った男は、数秒後、地面に熱烈なキスをした。

光「お・・姉様・・・・？」

突然の刹那の登場に、光明は呆然としていた。

男B「あ、相沢さんが吹っ飛んだ！」

男C「な、何だお前！？」

神「妾達もおるぞ」

続いて、神奈達が一斉に姿を現した。全員が、怒りの形相を浮かべている。

天「私達の家族を泣かせ・・・可愛らしい子猫をいたぶったあなた達は許しません」

龍「ポンポンポンポン放り投げやがって・・・とりあえずテメエ等はぶち殺す！」

＜今回ばかりは私も許しません！＞

男B・C・D・E「「「「「ひっ！？」」」」」

神・天・刹・龍・雲「「「「「三途の川で・・・反省し（ろ）（てください）！！！」」」」」

バキッ！　ドガッ！　グシャッ！

男B・C・D・E「「「「「みぎゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？！？！？」

男達は、数秒でボロ雑巾のようになった。龍那が近くにあったゴミ箱に放り込む。

龍「よし、ゴミ掃除完了だな」

光「み、みんな・・・どうして」

刹「実はな・・・」

刹那が事情を説明する。

光「そうだったんですか・・・。って、ちょっと待って下さいお姉様。もしかして・・・私が子猫達とお話・・・」

刹「ん？」

光「な、何でもないです。（よかった、あれは聞かれてない・・・）」

刹「・・・にゃん」

光「ッ！？」

神「にゃあ」

光「あ・・ああ・・・・」

天「にゃんにゃん♪」

光「止めて～～～！　あれは！　あれは一時の気の迷いなの～～～！！」

子猫「にゃ～～」

光「にゃ？」

龍「・・・・プッ」

条件反射のように猫語を話す光明に吹き出す龍那。

光「ッ～～～～～～／／」

湯気が出るのではないかというくらい光明の顔が赤くなった。

刹「さて、充分に弄ったところで、そろそろ帰るか」

天「そうですね。もう夕方になっちゃいましたし」

神「腹減ったのぉ」

龍「んじゃあ、行こうぜ」

光「うう・・・」

子猫「にゃ？」

光「バイバイ。また来るからね」

刹「何を言っている光明？　その猫達も連れて帰るぞ」

光「え？」

神「どうせ、明日からも通い続けるのじゃろ？　なら、家で飼えばよいではないか」

光「い、いいの？」

天「飼育費も問題無いですし、なにより、こんなに可愛い子猫達を、一人占めはずるいですよ」

龍「そうだ。オレだってモフモフしたいんだ！」

＜みんなでお世話すればきっと大丈夫だよ＞

光「・・・ありがとう。ありがとうみんな！」

こうして、秋月家に新たな住人が加わった。この四匹の子猫が、後に様々なトラブルを巻き起こすが、それはまた、別の話である・・・

第四話　光明ちゃんの秘密の楽しみ（後書き）

作「さて、今回の主役は光明の話だ」

光「猫可愛いよ～～」

作「本当に猫が好きなんだな」

光「うん！」

作「なるほどなるほど。なら・・・猫語の出る気持ちもわかるよ」

光「あれの話はしないでよぉ！！」

作「しばらく弄られると思うが我慢しろ」

光「そんなぁ・・・」

作「んじゃあ、今回の贈り物報告会始めるか」

光「まずは緋水様からだよ。世界の調味料一式を頂いたよ」

作「これで、料理に幅が広がるな」

光「そうだね・・・あの二人には絶対に渡せないけど」

作「・・・・ああ」

作「二次元最高様からは、前回出演して頂いた大和さんと天音宛てに、二人のツーショット写真を頂いたぞ」

光「あはは、大和さんガチガチに緊張してるね」

作「一枚は送ってと・・・よし、完了だ」

光「じゃあ、もう一枚は後で私が渡しておくね」

作「そうそう、清浦刹那様の所に出張に行った天音が、贈り物頂いて帰って来たぞ。ＩＳ学園の制服を全員分だ」

光「わあ、早速着てみよっと」

作「・・・・」

光「覗いたら・・・わかってるよね？」

作「はい！」

彼女達の日常編最終話　秋月家Ｎｏ．１決定戦（前書き）

季節が合ってませんが、ご容赦ください。

彼女達の日常編最終話　秋月家Ｎｏ．１決定戦

季節は夏、秋月家の五人は海にやって来ていた。

神「今日も暑いのぉ」

真紅のビキニに身を包み、神奈は気だるそうにそう漏らした。歩くたびに、その豊満な胸が大きく弾む。

天「だから海に来たんじゃないですか」

群青色のタンキニを着た天音が突っ込む。神奈ほどではないが、それでも充分過ぎるほどの双丘が揺れている。

刹「向こうの方に小島があるな。・・・遠泳でもするか」

薄銀色のセパレートを装備した刹那は、遠目にうっすら見える離れ小島を見つめている。

光「あ、あはは・・・お姉様、黙々と一人で泳ぐタイプだったんですね」

渇いた笑い声を出す光明が着ていたのは・・・スクール水着だった。しかも胸にはご丁寧に『こうみょう』というネームラベルが貼られていた。

雲「う、うう・・・」

＜なに恥ずかしがってんだよ。別に隠すモンでもないだろ＞

雲「でも・・・」

雲母はワンピースタイプの水着を着ていた。しかし、元来の性格から、恥ずかしがって上着を着ている。

神「うが～～！　もう我慢ならん！　妾は行くぞ！」

神奈が海に向かって駆け出した。が、そんな彼女を天音が引き止める。

天「待って下さい。まずは準備体操です」

神「なんじゃ、細かいヤツじゃのお」

天「何かあってからでは遅いですからね」

刹「では早速始めるか」

五人は準備体操を始めた。

神「一、二、三、四・・・・」

ブルンブルン！

天「五、六、七、八・・・・」

プルンプルン！

刹「一、二、三、四・・・・」

ボヨンボヨン！

雲「五、六、七、八・・・・」

ポヨンポヨン！

光「・・・・・」

ツルンペタン！

天「？　どうしました光明？」

光「・・・・チガウ。ワタシガチイサインジャナイワ。ミンナガオオキスギルダケダモン」

女性としての格の違いを見せつけられ、光明は自信に言い聞かせるようにブツブツと呟く。瞳は虚ろだった。

神「むう、この水着、ちと胸元がキツイの」

天「私もです。お店で試着した時はそうでもなかったんですが・・・」

刹「我もだ」

雲「わ、私もちょっと・・・」

光「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁん！！　これみよがしに自慢するなぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

ダダダダ！

滝のような涙を流し、光明は海に飛び込んでそのまま沖に向かって凄まじい速さで泳ぎ始めた。

天「あ、光明！　準備体操はまだ終わってませんよ！」

刹「ほう、お前も我と同じか。ならば・・・勝負だ光明！」

光明を追いかけ、刹那も海に飛び込んだ。

雲「あ、あんまり遠くに行ったら危ないですよ！」

神「なに、刹那なら問題無かろう。それより、妾達も行こうではないか」

準備体操を終えた三人も海に入った。熱くなった体を、海水が冷ます。

神「ふ～～・・・気持ちいいのお」

天「ふふ、まるでお風呂に入った様なセリフですね」

雲「龍那、代わりたくなったらいつでも言ってね」

＜オレの事は気にすんな。好きなだけ楽しめよ＞

神「・・・天音」

天「はい？　なんです・・・」

神「そりゃ！」

バシャ！

神奈は両手に水をすくい、天音の顔に向かって放った。

天「きゃっ！？　ちょっと！　いきなり何するんですか！」

神「海と言えば、やはりこれが定番じゃろ」

天「でしたら！」

バシャ！

神「うわっ！？」

天「お返しです」

神「ふ、上等じゃ！　ならば本気で行かせてもらうぞ！」

天「受けて立ちます！　雲母さん、援護をお願いします！」

雲「え？　は、はい！」

バシャバシャ！

神「くっ、二人がかりとは卑怯な・・・」

天「それそれ！」

雲「えい！」

神「おのれ！　こうなったら・・・」

神奈が両手を海中に突っ込み、思い切り振り上げようとしたその時・・・

天「ッ！？　危ない神奈！」

神「？　なん・・・・」

バシャァァァァァァン！！

突然、巨大な波が三人を襲った。天音と雲母は身構えていたが、沖に背を向けていた神奈は、気付く事なく波に飲み込まれた。

雲「神奈さん！」

雲母の呼びかけからキッチリ五秒後、神奈が海面から姿を現した。

神「・・・ぷはあっ！　流石に少し驚いたの・・・」

天「よかっ・・・」

安堵の息を吐こうとした二人は、神奈を見て同時に固まった。

神「どうした二人とも？」

雲「か、神奈さん・・・・水着が・・・・・」

神「水着？」

視線を下に向ける神奈。自身の胸を覆っているはずの水着が姿を消していた。

神「・・・・にょ」

天「にょ？」

神「にょわぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？！？！？」

すぐさま肩まで沈む神奈。その後方で、ビキニがプカプカと浮いていた。

天「凄い波でしたからね。水着が流されるのも無理ありません」

神「冷静に分析するヒマがあったらさっさと取って来てくれ！」

雲「は、はい！」

急いで雲母が水着を回収し、神奈に手渡す。もぞもぞと体を動かし、神奈は水着を着直した。

神「うう、何故妾がこんな目に・・・」

天「まあまあ、幸い、見られたようではないようですし、よかったじゃないですか」

神「当たり前じゃ！　妾は一成以外に見せるつもりはない！」

刹「どうした神奈、ポロリでもしたのか？」

満足したのか、刹那と光明が戻って来た。

神「う、うるさい！／／」

刹「図星か。基本に忠実なヤツめ」

光「でも、読者サービスは大切ですよお姉様」

雲「読者？」

光「気にしないで。こっちの話だから」

天「刹那達も戻って来ましたし、一度上がってお昼にしましょう」

刹「賛成だ。泳いだせいで腹が減ってしまったからな」

天音の作った弁当を堪能した五人は、ぼんやりと海を眺めていた。

神「平和じゃの・・・」

天「そうですね・・・。けど、やはり物足りませんね」

誰も何がとは聞かない。全員が同じ事を思っているからだ。やはり『彼』がいないと、どんな面白い事も心の底から楽しむ事は出来な

かった。

刹「ところで・・・・もし我が君がこの場にいたら、誰の水着姿に目を奪われると思う?」

そんな空気を変える為、刹那が口を開いた。が、彼女のこの言葉が、争いを呼ぶ事となる。

神「当然妾じゃろ。いくら一成でも、この乳を前に冷静でおれるはずがない」

天「大きいだけというのもどうかと思いますけどね。やはり、形やハリの良さといった所も重要です」

光「胸だけが全てじゃないもん。やっぱり全体的なバランスがよくないとね」

神・天「「・・・・・ふっ」

光「ああ!　今、鼻で笑ったなぁ!!」

＜・・・・何か言わねえのか?＞

雲「わ、私は別に・・・・・／／」

刹「ふっ、ならば、誰が一番魅力的か勝負してみるか。・・・・あれでな!」

刹那が指差したのは、大きな特設ステージだった。そして、ステージ上の看板には、大きな字でこう書かれていた。

『第二十六回　水着美女コンテスト』と・・・・

神・天・光「「「乗ったぁ！！」」」

雲「わ、私もですか？」

刹「当然だ」

雲「あうう・・・」

五人は早速エントリーを済ませ、係員に連れられ、ステージ裏の待合室のような場所へ通された。

係「では、コンテスト開始までここでお待ちください」

それから三十分後、いよいよコンテストが幕を開けた。

司会「さあ！　今年も始まりました水着美女コンテスト！　今年も、十人の選りすぐりの美女の皆さんがエントリーしてくれました！！」

『わぁぁぁぁぁぁぁ！！』

司会の煽りに、観客達が歓声をあげた。男性ばかりかと思えば、女性の姿も多く見える。

司会「早速始めましょう！　一番の方から好きなようにアピールしてください！」

一番の女性が前に出て、ポーズをとったり、笑顔を見せたりと、色々なアピールをしている。その度に、観客から歓声があがる。

司会「ありがとうございました！　では、二番の方どうぞ！」

神「おう！」

秋月家のトップバッターは神奈だった。堂々とした足取りで前に出る。

神「これでどうじゃ？」

そう言って、神奈は胸を突き出し、大胆なポーズをとった。

男A「うおお！　すげえ巨乳！！」

男B「眼福眼福！」

神「（ふっ、手応えは充分じゃ）」

満足気な笑みを浮かべ、神奈は下がった。

司会「いやあ！　とてつもない破壊力でしたね！　では、次の方お願いします！」

天「はい」

三番手は天音。前に出た彼女は、その場で舞うような動きを見せた。

男C「・・・なんかいいな」

男D「ああ、派手さはないけど、清楚な感じが出てて俺は好きだな」

天「ふふ、ありがとうございます」

自身を称賛してくれた観客に、天音はウインクしながら礼を言った。

男C・D「「ッ・・・・・!!」」

司会「おお！　すでにお二人ほど虜になってしまったみたいですね。では、次の方お願いします！」

四番目の女性がアピールを終え、五番目の刹那の番がやって来た。

刹「我の実力を見せてやろう」

どこで覚えたのか、モデル歩きで前に出る刹那。会場中の人間が、その姿に目を奪われる。

男E「や、やべえ・・・綺麗とか美しいとかいう言葉じゃ表現できねえ」

男F「・・・・（何故か拝んでいる）」

女性A「あんな女性がこの世にいるなんて・・・・」

女性B「な、なんで女性なのにドキドキしてるの私？」

刹「ポーズか・・・・なら、アレにするか」

そう言って刹那がとったのは・・・とてつもなく妖艶な女豹のポー

ズだった。その瞬間、観客達のボルテージは最高潮になった。

男G「ふおおお！　ふおおお！！」

男H「・・・・（謎の前屈み）」

女性C「きゃ～～～！！　素敵です～～～～！！」

女性D「お姉様と呼ばせて下さい！！」

刹「ふっ・・・・好きにしろ」

女性達「きゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

司会「・・・・はっ！　私とした事が、あまりの衝撃に一瞬意識を失っていたようです。なんと恐ろしい女性でしょうかぁ！」

すっかり戦意を喪失したのか、六番目、七番目の女性はあっさりとアピールを終えた。そして八番目、光明の番がやって来た。

男I「おお！　見事なツルペタ！」

男J「しかもスク水！　完璧だろ！！」

光「ちょ、ちょっと！　そんな事言われても嬉しくないんだからね！」

光明は腕を組み、照れた感じでそっぽを向いた。

男Ｊ「さらにツンデレだと！？　どこまで俺を萌えさせる気だちくしょう！！」

光「私はツンデレじゃないもん！」

男Ｉ「ぐはっ！　い、今のはクリティカルヒットだ・・・・」

ドサッ！

司会「可愛らしいですね。ぜひとも妹に欲しいです！」

コンテストも佳境に入った。九番目の女性が下がり、とうとう十番目・・・・雲母の番が来た。

司会「いよいよ最後の方ですね。では、お願いします！」

雲「は、はい・・・」

しかし、雲母はその場から一歩も動かなかった。

＜どうしたんだよ雲母？＞

雲「や、やっぱり私には無理だよぉ」

＜ここまで来たら腹くくれって。ほら、さっさと前に出る＞

雲「・・・・うん」

雲母は一歩一歩ゆっくりと前に進み・・・・

雲「きゃう！？」

ビタン！

思いっきりすっ転んだ。鼻を抑え、涙目になりながら立ち上がる。

雲「はうう・・・痛い・・・・」

『（ズキューーーーーン！！！）』

その庇護欲をそそらせる姿に、観客の心に何かが突き刺さった。

雲「えと・・・その・・・・・」

前に立った雲母は、顔を真っ赤にさせ、とぎれとぎれに喋り始めた。

雲「せ、仙道・・・雲母です。あの・・・よ、よろしくお願いしましゅ！！／／」

『（ドゴーーーーーーーン！！！！）』

雲母が噛んだ瞬間、観客の心は爆発した。刹那の時と同等・・・いや、それ以上の歓声が会場を包んだ。

男Ａ「いいぞ雲母ちゃーーーん！！」

女性Ａ「よく頑張ったわね！　偉いわよ～～～！！」

男Ｂ「ああ、汚れ切った俺の心が浄化されていく・・・」

女性Ｂ「ドジっ娘・・・まさか、ここまでの威力があるなんて」

司会「うおぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！　私の中のお兄ちゃん成分が天元突破したぞぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！」

最後のアピールタイムが終わり。集計が行われた。結果は・・・・

ぶっちぎりで雲母の優勝だった。

『可愛過ぎる』『守ってあげたい』『連絡先教えて』『結婚してください』等々、多くのメッセージが送られ、本人がさらに顔を赤らめた所で、再び会場が湧いた。

こうして、『第二十六回　水着美女コンテスト』は幕を閉じた。同時に、仙道　雲母の名は伝説として語り継がれる事になった・・・・

彼女達の日常編最終話　秋月家Ｎｏ．１決定戦（後書き）

作「みなさん、お久しぶりです。さて、今回は優勝者の雲母に来て頂きました」

雲「こんにちは」

作「改めておめでとう。どうだ今の気持ちは？」

雲「何で私なんだろうって感じです。転んじゃったし、あいさつで噛んじゃったし、みなさんみたいな、ぽ、ポーズも出来ませんでしたし」

作「それが良かったんだけどな」

雲「え？」

作「何でもない。これからもキミはそのままでいてくれ」

雲「は、はあ・・・？」

作「んじゃあ、贈り物報告会に移るか」

雲「まずは緋水さんからです。マブラヴの戦術機を頂きました」

作「原作は未プレイだが戦術機は知ってるぞ。カッコいいよな」

雲「とっても感動出来るゲームだそうですね。一度やってみたいです」

作「・・・・雲母は止めといた方がいいと思うぞ」

雲「？」

作「次はＷｈｉｔｅ　Ｓｅａｌ様からだ。修智館学院女子制服を頂いたぞ」

雲「これは、ＦＯＲＴＵＮＥ　ＡＲＴＥＲＩＡＬの制服ですね。とっても素敵です」

作「八月か」

雲「八月？」

作「こっちの話だ」

雲「二次元最高さんからは、キャットフードと秋刀魚を五匹。さらに猫用のトイレを頂きました。ありがたく使わせて頂きます」

作「前回保護した子猫達用だな。あれから様子はどうなんだ？」

雲「みんなとっても元気ですよ。名前もつけましたし」

作「へえ、どんな？」

雲「一成一号。一成二号。一成三号。一成四ご・・・」

作「改名しろぉぉぉぉぉぉ！！」

作「ｓａｓｕｒａｉ様からは、龍が如くの改良スタミナンスパークを一ダース頂いたぞ」

雲「す、凄く効きそうな名前ですね」

作「では早速・・・・ゴクッ」

雲「どうですか？」

作「あ、あれ・・・何だか体が痺れ・・・・」

雲「ちょ、ちょっと見せてください！　えっと・・・『この飲み物は常人の飲めるものではありません。常人の目に届かない場所に保管してください。常人が飲んだ場合効き目が強すぎて痺れてしまい効果が無くなります』・・・・との事です」

作「さ、先に・・・よよよ呼んでででで・・・・・」

雲「最後はマサさんですね。といっても、贈り物じゃなくて、エミヤさんをシェフ、ユーフィちゃんとカティマさんをウェイトレスに

して、私達に料理を振る舞ってくださるとの事です」

作「ユーフィのウェイトレス姿だと!?　これは・・・ぜひとも写真に収めなければ!」

?「やらせん!」

グシャ!

作「ああ!?　俺のカメラが!!」

雲「え、い、今、一成さんらしき人が・・・・」

作「ちくしょう!　世界を越えてまで邪魔する気か!!」

雲「それじゃあ、私はお迎えの準備をしますね」

作「・・・・高かったのにあのカメラ」

ＳｔｒｉｋｅｒＳ突入前のラスト（多分）アンケート

作「さて、これで四回目のアンケートだ。おそらく、これが最後になるだろうな」

一「ほお、だからわざわざ俺を呼び戻したというわけか」

作「やっぱり、お前とのやりとりが一番気楽だしな」

一「そいつはどうも。それで、今回はどんなアンケートなんだ？」

作「今回は二つだ。毎度のストーリー展開についてと、物語の最後についてのな」

一「最後？」

作「まあ待て、まずはストーリーについてだ。では・・・次の二つの中からお選びください」

１　どうせ最後なんだし、オリジナルも入れて派手にやろうや！

２　いや、ＳｔｒｉｋｅｒＳは原作通りにした方がいいって

一「おい、ＳｔｒｉｋｅｒＳでオリジナルは流石に止めといた方が・・・」

作「何とかなる。残りの原初存在の登場や、欠片との決着もつける

つもりだからな」

一「やれやれ、本当に終わらせられるのか？」

作「一つ目はこれでいいとして、次だ次。ＳｔｒｉｋｅｒＳ編のラストをどうするかのアンケートだ」

一「どういう意味だ？」

作「つまりだな・・・・個別エンドにするかどうかだ。もちろん、ＳｔｒｉｋｅｒＳからのキャラも含めて全員分のな」

一「なん・・・だと・・・・・」

作「さあ、選ぶがいい！　そなたが望む道を！！」

一「いきなりキャラ変えるなよ」

１　個別エンド？　面白そうじゃないか

２　別に見たくないし・・・

３　むしろバッドエンドが見たいです

４　ラッシーエンド一択で！

一「・・・・最後のは何だ？」

作「あ、そうそう。全員分書いた後、ハーレ・・・じゃなくて、トゥルーエンドも書こうと思ってます」

一「全員って・・・一体いつになったら終わるんだよ・・・・」

作「それだけ長く書けるからな。俺にとっての初めての小説だから思い入れがあるんだよ」

一「・・・そうか。なら、俺は何も言わん。読者の方に委ねるだけだ」

作「では、読者の皆様。以上のアンケートにぜひご協力をお願い致します。結果次第でガチで結末変わりますから」

一「そう言われると、何だか怖いな・・・」

作「ちなみに、期限は特に設けていません。まだ始められそうにありませんから」

一「活動報告で余計な事書いたからな」

作「・・・言わんとって」

ＳｔｒｉｋｅｒＳの予告っぽいヤツ（前書き）

これが１００話目て・・・

ＳｔｒｉｋｅｒＳの予告っぽいヤツ

作「みなさん、お久しぶりです。この度、ＳｔｒｉｋｅｒＳ編を新たに書かせて頂くにあたり、Ａ'ｓ編でもやった予告っぽいヤツをやろうと思います」

一「ああ、勢いのまま書いて総崩れしないか心配されたアレな」

作「う、うるさいな。結果的にＡ'ｓ編は無事に終了したからいいだろ」

一「次もうまくいくとは限らないだろ」

作「とにかく！　何と言われようと俺はやる！」

一「好きにしろ。・・・・俺は知らないからな」

作「では・・・・スタート！！」

紆余曲折を経て、ついに家族と仲間の元へ帰って来た旅人。それは同時に、最後の戦いの始まりでもあった。

駄神「おおそうじゃ。ただ送るのもつまらんし、せっかくなら色々介入してみんか？」

駄神の思いつきで様々な場所に跳ばされる『彼』。それが、悲しみを止める方法だとは知らずに。

は「お帰り一成君。そして・・・ようこそ機動六課へ」

別れから十年。時は少女達を立派な女性へと変えていた。そんな彼女達と共に、旅人は機動六課と呼ばれる部隊でロストロギア『レリック』を追う。

？「パパ～～～！」

その最中、一人の少女が機動六課に保護される。人造生命体である彼女は、とある重要なカギを握る存在だった。

？「初めまして秋月　一成君。・・・・と言っても、僕はキミの事をよく知っているけどね」

その少女を狙う狂気の科学者・・・・その魔の手が迫る。しかし旅人は、その背後に存在する闇に気付く。

？「この予言が真実なら、あなたの未来は・・・」

果たして旅人は、定められた運命を変える事が出来るのか・・・

？「あ、あの！　もしかしてあなたは・・・空港火災の時の？」

アリ「兄様、私も魔導師になったんだよ。これでいつでも兄様のお手伝いが出来るね」

美「え・・・ええ！？　一成君が一矢さんだったの！？」

ア「とりあえず・・・引っ叩かせなさい一成！」

？「・・・やっぱり、あの時兄さんを助けてくれたのは」

？「ドクターは、あの方は変わられてしまった・・・あの忌まわしき宝珠の所為で」

プ「そうよ。あの男がプロジェクトＦの基礎理論を構成させたの」

？「Ｆ計画の残滓か。何とも興味深いね」

フェ「私はフェイト・テスタロッサ！　それ以外の何者でもない！」

そして、旅人の、霊剣の、神剣の永きに渡る因縁を終わらせる事は出来るのか・・・

神「一成よ、今度こそ離れんからの」

天「もう、あんな思いはしたくありません」

刹「さあ我が君よ、これが最後の戦いだ」

光「一緒に行こう一兄。私達が力を合わせれば、絶対負けない！」

龍「後ろは任せて思いっきりやりな！」

雲「私の全力でみなさんを守ってみせます！」

ついでに、ヤツの正体もついに明らかとなる。

ラ「王様・・・いえ、若き旅人さん。これが、私の本当の姿です」

一「なん・・・だと・・・・」

全ての決着が着く魔法少女リリカルなのは　永遠の旅人　ｌａｓｔ　ｅｐｉｓｏｄｅ　Ｓｔｒｉｋｅｒｓ編・・・Ｃｏｍｉｎｇ　ｓｏｏｎ

な「ずっと伝えたかった。私は・・・高町　なのはは一成君の事が大好きです」

一「俺は・・・」

最後に彼の横に立っているのは・・・

一「お前・・・これ」

作「そうです！　毎度お馴染みの見切り発車です！」

一「気持ちいいくらい清々しく言い切ったな」

作「これで最後なんだ。俺の全てを注いで書き切ってみせる！」

一「まあ、途中で終わる事が無いように祈っておく」

作「任せろ！　あ、そうそう。アンケートの結果を載せていますので、まだご覧になっていない方は活動報告をチェックしてみてください」

一「では、今回はこの辺で失礼します」

作「・・・しまった。お前に嫌な二つ名つけるの忘れてた」

一「・・・・・」

ＳｔｒｉｋｅｒＳ編第一話　始まりは炎の中で（前書き）

とうとう始まってしまいました・・・

ＳｔｒｉｋｅｒＳ編第一話　始まりは炎の中で

何も存在しない閉ざされた世界・・・そこに、一人の老人が佇んでいた。

老人「・・・・ようやくか」

その世界に、突如小さな光が生じる。それは段々と大きさを増し、いつしか人の形を形成していた。

やがて光が収まると、そこには銀髪の青年が立っていた。

青年「・・・・」

老人「よくぞ戻って来たの旅・・・」

青年「ふん！」

バキッ！

老人「ぷきょっ！？」

両手を広げ、青年を抱きしめようとした老人の顔面に、渾身の右ストレートが放たれた。吹き飛んだ老人は、空中をきりもみ状に回転しながら舞い、地面に頭から落下した。

老人「ぐおぉぉぉぉぉ！！　首が！　首がぁぁぁぁぁ！！」

青年「気分はどうですか？」

老人「最悪に決まっとるじゃろうが！！　理由もわからずに必殺技レベルのストレート喰らったんじゃからな！」

青年「理由がわからない？　それ・・・本気で言ってるんですか？」

青年は笑っていた。・・・しかし、彼の全身から発せられている怒気は、それが上辺だけのものだという事を証明している。

老人「い、いや！　ちゃんとわかっておるぞ！　じゃが聞いてくれ！　あの世界に送ったのは故意ではなく、事故だったのじゃ！」

青年「事故ですか・・・。それなら、何故すぐに呼び戻してくれなかったんですか？　あなたならそれが出来たはずでしょう？」

老人「そ、それは・・・」

青年「それは？」

老人「そっちの方が面白いかな・・・と」

青年「・・・・発現」

青年が小さく呟くと、いつの間にか彼の右手に長銃が握られていた。

老人「ま、待ってくれ！　儂とお主の仲じゃないか！　な？　とりあえずその物騒な銃を下ろしてくれんか？　旅人・・・いや、秋月一成！！」

ようやく名前を呼ばれた青年は、先程とは違う心からの笑みを浮かべながら・・・

青年「だが断ります」

躊躇いなくその引き金を引いたのだった。

ＩＮ　ＳＩＤＥ

一「ふう・・・ようやく報復出来たな」

ブラスターの光に消えて行った駄神を思いながら、俺は長銃を消し

て深く息を吐いた。

一「・・・しまった。駄神を消してしまったら、あの世界に戻れないじゃないか」

駄神「勝手に殺すな!!」

全身ボロボロになりながら、駄神が這い寄って来た。

一「生きてたんですか。さすが、腐っても神ですね」

駄神「本気で死ぬかと思ったのは数百年ぶりじゃ」

一「これで、あの件については終わりにしてあげます」

駄神「どう考えても割に合わんのじゃが・・・（ボソ）」

一「何か?」

駄神「いやいや!　あれだけで許してくれるお主の優しさに感謝したくての!」

一「そうですか。それで・・・今度こそ俺は戻れるんですよね?」

駄神「その事についてなんじゃが・・・お主、また介入してみんか?」

一「介入ですか？」

駄神「さよう。お主があの世界に初めて跳んだ時も、物語の開始から数年前に跳んだじゃろ？　それによって、お主は一人の少女を孤独から救った」

一「なのはの事ですね」

駄神「どうじゃろう。今回も介入を行い、数名の定められた運命を変えてやってはくれんか？　これはお主にしか出来んのじゃ」

答えは決まっていた。俺の手で助けられる人がいるのなら、迷う必要などない。

一「わかりました。任せてください」

駄神「そうか！　お主ならそう言ってくれると信じていたぞ！」

一「では、また物語の数年前に跳んで、そのまま始まりまで過ごせばいいんですね？」

駄神「いや、今回は介入を行ったらまた別の場所に跳ばしてやろう。場所、時間関係無しにの」

一「え？」

駄神「お主も早く家族や仲間達と再会したいじゃろ？　全ての介入を終えたら物語の開始時点まで一気に跳ばしてやろう」

一「・・・ありがとうございます。初めて、あなたに感謝の気持ちを抱きました」

駄神「初めてて・・・」

一「では、早速跳ばしてください」

駄神「休まんでいいのか？」

一「はい」

駄神「わかった・・・。では、最初はあの場面じゃ」

駄神が詠唱を済ませると、俺の足元に大きな穴が出現し、俺は落下して行った。最早お決まりに様なものだったので、特に驚きはしなかった。

一「（待っててくれみんな。もう少しで会えるから）」

俺は目をつむり、来るべき時に備えた・・・

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

少女ＳＩＤＥ

少女「（熱い・・・苦しい・・・怖い）」

私の周りは火の海になっていた。空港の中をお姉ちゃんと一緒に歩いていたけれど、いつの間にかお姉ちゃんがいなくなっちゃってて、そのまま歩き回っていたら、突然大きな爆発が起こった。急いで逃げようとしたけれど、大人の人達に突き飛ばされちゃって、気がついたら広場のような所で一人ぼっちになっていた。

少女「助けて・・・お父さん・・・お母さん・・・お姉ちゃん・・・・」

バゴォォォォォォォン！！！

少女「きゃあぁぁぁぁぁぁぁ！！」

近くでの何度目かの爆発・・・私は大きく吹き飛ばされた。

少女「痛いよぉ・・・熱いよぉ・・・こんなのもうやだ・・・・」

私の目の前で、大きな女神様の像が私を見下ろしていた。

少女「助けて・・・神様・・・・・」

ピシッ・・・・

少女「え・・・・・」

小さな音がして、女神様の足元が崩れ始めた。そして、限界を迎えた女神様が私に向かって倒れて来た。

少女「ッ・・・・・！」

私・・・死んじゃうの？　嫌・・・嫌だよ！　こんな所で死にたくないよ！！

少女「誰か！　助けてよーーーーーっ！！」

ゴキッ！

？「ぐおっ！？」

少女「・・・・へ？」

突然、私と女神様の間に、銀色の髪をした男の人が現れた。女神様はその男の人にぶつかって、粉々に砕け散った。

？「ダガミめ・・・転送すらろくに出来んのか」

頭を血で滲ませながら、男の人はこっちに振り返った。

？「・・・あれ？　キミは・・・」

少女「あの・・・えっと・・・・」

？「？」

声をかけられ、私は戸惑いながらも一言・・・

少女「あの・・・血が出てますよ？」

と声を出した。

少女ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＩＮ　ＳＩＤＥ

目を開けた俺の眼前に、女神像が倒れ込んで来た。突然の事に呆気にとられ、そのまま像は俺に直撃した。

一「ふん！」

とりあえず、粉々に砕いておく。周囲は火の海になっており、もはや手のつけられない状況になっていた。

一「駄神め・・・転送すらろくに出来んのか」

火災現場という事は・・・もしかしてあの場面か？

一「・・・あれ？　キミは・・・」

振りかえると、倒れ込んでこちらを見ている少女と目が合った。

少女「あの・・・えっと・・・・」

一「？」

少女「あの・・・血が出てますよ？」

俺の頭を指差すので触ってみると、確かに血が滲んでいた。どうやら先程の像の所為で怪我したみたいだ。

一「ああ、すまない。見苦しい所を見せてしまったな」

すぐにアースプライヤーを唱え、傷を塞いだ。

少女「え・・・ええ！？　傷が・・・！」

一「とりあえず、ここから出ようか」

少女を立たせ、手を引いて走り出そうとしたが・・・

少女「ま、待って下さい！」

一「どうした？」

少女「あの、私、お姉ちゃんと離れ離れになっちゃって・・・・もしかしたら、お姉ちゃんもまだこの中に・・・！」

一「大丈夫。これだけの騒ぎだ、きっと逃げてるはずだよ」

少女「でも・・・でも・・・！」

なおも食い下がる少女。しかし・・・初対面なのに何故か見憶えがあるような・・・・

一「キミ、名前は？」

少女「え？　す、スバル・ナカジマです」

一「ッ・・・！　そうか、キミが・・・・」

少女「え？」

一「何でもない。じゃあ、スバルちゃん。今から俺がキミのお姉さんを探して来るから」

ス「で、でも、それじゃあお兄さんが・・・！」

一「俺なら大丈夫。ついでにお姉さんの名前も教えてくれないか？」

ス「ギンガです。ギンガ・ナカジマ」

一「ギンガちゃんだな。よし・・・」

俺はスバルちゃんの周りにディスペランススフィアを発動させた。

ス「ッ！？　な、何これ・・・」

一「その中に入っていれば安全だから。絶対出ては駄目だからね？」

ス「わ、わかりました」

一「もう少ししたら、栗色の髪の女の子が助けに来てくれると思うから、それまでの辛抱だからね」

スバルちゃんの頭を一撫でし、俺は彼女に背を向けた。

ス「あ、あの！　お兄さんの名前は・・・」

一「秋月　一成だ。機会があったらまた会おう」

手甲を発現させ、俺は火の海へ飛び込んだ・・・

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

なのはＳＩＤＥ

闇の書事件から数年・・・私は正式に管理局員として働いていた。
そして現在、私は燃え盛る空港内で逃げ遅れた人がいないか調べていた。

な「・・・・いた！」

私の視線の先で、一人の女の子が座り込んでいた。けれど、少し様子がおかしい。女の子の周りに全く火が回っていない。まるで、何かに守られているように・・・

な「大丈夫！？　助けに来たよ！！」

女の子「うわぁ・・・本当に来てくれた！」

な「え？」

どういう事？　まるで来る事を知っていたような口ぶりに、私は首を傾げた。

女の子「さっき私を助けてくれたお兄さんが言ってたんです。「もう少ししたら、栗色の髪の女の子が助けに来てくれると思うから、それまでの辛抱だからね」って」

栗色の髪・・・私の事だ！

な「ね、ねえ、そのお兄さんは？」

女の子「私のお姉ちゃんを探しに奥に・・・」

ドゴン！！

女の子「きゃっ！」

な「話してる場合じゃないね！　早く逃げないと！」

レイジングハートを天井に向け、私は大きく叫んだ。

な「ディバイィィィン・・・バスタァァァァーーーーッ！！！」

カッ・・・！

砲撃によって天井が貫かれ、外からの光が注がれる。

女の子「凄い・・・」

な「さあ、私に掴まって」

女の子「はい！」

女の子を抱きかかえ、私は空港内から脱出した・・・

なのはＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＩＮ　ＳＩＤＥ

一「ッ・・・！」

突如、空港内が揺れた。おそらく、なのはが砲撃を放ったのだろう。

一「さあ、後はギンガちゃんだけだな」

邪魔な瓦礫を破壊しつつ、空港内を走り回る。やがて、俺の耳にかすかな声が聞こえて来た。

一「・・・・こっちか」

声のした方へ向かうと、スバルちゃんによく似た少女を発見した。

一「無事か！」

少女「え・・・？」

ビキビキ・・・・ドガガガガガ！！！

少女がこちらを振り向いた瞬間、彼女のいる場所の天井が大きな音を立てて崩れた。

少女「きゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

一「（間に合え！！）爆砕いいいいいいいい・・・・！！」

両手にオーラを溜めつつ、少女の元へ全速力で駆け寄る。そして、地面に向かって拳を叩きつけた。

一「跳天昇おおおおおおお！！！」

ブワッ！！

俺と少女を中心に発生した六本の気柱が、崩れ落ちた天井を大きく吹き飛ばした。

一「どうにか間に合ったな・・・」

少女「あ・・ああ・・・・・」

恐怖が抜け切らないのか、少女は顔を真っ青にして震えていた。

ギュッ・・・

一「大丈夫・・・もう大丈夫だから」

少女を抱きしめ、優しく背中を撫で続ける。

どれくらいそうしただろうか。いつの間にか少女の震えは止まっていた。

一「落ち着いたかい？」

少女「は、はい。助けてくれてありがとうございます」

一「いきなりだが、キミの名前はギンガちゃん・・・で合ってるかな？」

少女「え？　そ、そうですけど・・・」

一「スバルちゃんに話を聞いてな、キミを探していたんだ」

ギ「そ、そうだ！　スバルは・・・あの子は無事なんですか！？」

一「ああ。今頃救助されているはずだ」

ギ「よかった・・・よかったよぉ・・・・」

スバルちゃんの無事を確認して緊張の糸が切れたのか、ギンガちゃんは大粒の涙をこぼしながら泣き始めた。

？「誰かいませんか！　いたら返事をしてください！！」

一「今の声は・・・」

≪フェイトじゃな≫

一「ッ！？」

突然、頭の中に駄神の声が響いた。

≪どうしたのじゃ≫

一「（何であなたの声が聞こえるんですか？）」

≪こっちの方が色々と都合がよいからの。さて、二人も助け出したし、次の介入場所に跳ばすぞ≫

一「（待って下さい。せめてフェイトと話を・・・！）」

≪じゃが断る≫

ギ「ッ！　お、お兄さんの体が・・・！」

あの最終決戦の時と同じように、俺の体は徐々に透けてきていた。

一「・・・嫌な事を思い出させてくれる」

ギ「大丈夫ですかお兄さん！」

一「ああ、大丈夫だよ。どうやら、俺は今から別の場所に跳ばされるらしい」

ギ「？」

一「それじゃあなギンガちゃん。またいつか、会えるといいな」

次の瞬間、俺の意識は闇に沈んだ・・・

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

フェイトＳＩＤＥ

フェ「要救助者を発見しました！　これより救助を行います！」

連絡を入れ、私は女の子の前に降り立った。

フェ「よく頑張ったね。もう大丈夫だから」

女の子「・・・・」

フェ「どうしたの？」

女の子「お兄さんが・・・消えちゃった」

フェ「お兄さん？　まだ残された人がいるの？」

女の子「ううん、違うんです。消えちゃったんです」

フェ「？」

女の子「違う場所へ跳ばされるって言って、そしたら急に姿が見えなくなって・・・」

どういう事？　この女の子が混乱しているだけなのだろうか？　それとも、本当に消えて・・・？

フェ「安心して。そのお兄さんも必ず助けるから。ねえ、どんな特徴だったか教えてくれるかな？」

女の子「えっと・・・銀色の髪で、青い目をしてて、とっても背の高い男の人でした」

フェ「そっか。わかった。他の人に頼んで探してみるよ」

女の子「お願いします。あの人は、私の命の恩人ですから」

女の子と共に脱出した私は、すぐになのはや他の局員に連絡し、再び空港内を捜索した。けれど、女の子の言っていた『お兄さん』は発見出来なかった。

フェ「きっと、一人で逃げる事が出来たんだろうな・・・」

それにしても、銀色の髪に青い目・・・か。

フェ「まさか・・・ね」

頭を振り、私は撤収作業に移った・・・

ＳｔｒｉｋｅｒＳ編第一話　始まりは炎の中で（後書き）

作「お待たせしました！　ＳｔｒｉｋｅｒＳ編のスタートです！」

一「その始まりで、まさか駄神をドツキ回す事になるとはな」

作「何で駄神がボコボコにされたのか、今回出て来た武器や技については、私の他の作品を読んで頂ければわかると思います。」

一「ここで宣伝かよ・・・」

作「しばらくは介入部が続いて、それからＳｔｒｉｋｅｒＳ本編の始まりだから、なのは達との再会はまだまだだぞ」

一「そこが納得いかないんだが。何故会わせてくれない？」

作「そっちのが面白いから」

一「・・・そうか。お前もブラスターを受けたいんだな」

作「なわけないだろうが！！」

第二話　子どもに手を出す輩は問答無用でぶちのめせ（前書き）

また随分と更新が遅れてしまいました。

第二話　子どもに手を出す輩は問答無用でぶちのめせ

≪ほれ、ついたぞ≫

駄神の声に目を開けると、俺は木々の生い茂った森の中に立っていた。

一「ここは・・・」

≪目的地から少し離れた森の中じゃ。今回は直接送るのは少々危険じゃったからな≫

一「（危険？）」

≪今回、お主には一人の少年をとある場所から救い出してもらいたい。・・・いや、その少年だけではない。子ども達がお主を待っておる≫

一「（子ども達・・・）」

≪今回お主に向かってもらうのは、幼い子ども達に非人道的な実験を行っておる違法研究所じゃ≫

そう言った駄神の語気には、抑える事のない怒りが込められていた・・・

駄神の案内の元、森の中をひたすら突き進むと、急に開けた場所に出た。そこにはいかにも怪しげな建物が建っている。

≪よいか？　建物に潜入し、実験の為に集められている子ども達を救出するのがお主の為すべき事じゃ。その際、研究員や魔導師達に出くわすかもしれんが・・・遠慮はいらん、全力でぶちのめすのじゃ！！≫

一「（ずいぶんお怒りのようですね）」

≪当然じゃ！　未来ある子ども達を、己の欲望の為に弄ぶ輩を許す道理はない！≫

一「（・・・ええ、同感です）」

≪お主に与えた腕輪があれば、マナが足りなくなる事もない。ブラスターでも何でも思いっきりぶっ放すがよい≫

右手の腕輪が光る・・・駄神に呼び戻された時に渡されたこの腕輪は、マナを自己精製する素材で出来ている。これがあれば、『あの力』を際限なく使える。

≪さあ、状況確認も終えた事じゃし、早速潜入するぞ≫

一「（はい）」

≪・・・しかし、こういうシチュエーションは燃えるのぉ！　スネーク！　スネェェェェェェェェェク！！≫

一「・・・・・・」

先程の発言で、俺の中で上がっていた駄神の評価が、今の一言で目に見えて下がっていった。

一「（見張りは二人か）」

木の裏に隠れ様子を伺うと、入口に二人ほど人が立っているのが見えた。魔力反応があるので、おそらく魔導師だろう。

≪どうする気じゃ？≫

一「（突破します）」

≪へ？≫

駄神の呆然とする声を聞きながら、俺は見張りの二人に向かって飛び出した。

見張りA「ッ！？　だ、誰だ！？」

一「ふんっ！」

ゴスッ！

見張りＡ「ぐはっ・・・！」

見張りＢ「き、貴様・・・！」

一「せいっ！」

ガツッ！

見張りＢ「があっ・・・！」

腹部と頸椎部をそれぞれ打ちすえると、見張りの男達は体を震わせながらその場に崩れ落ちた。

≪・・・む、無茶するの≫

一「（このような開けた場所では正面突破くらいしか方法がありませんから）」

≪お主の魔法で眠らせたりとか出来んのか？≫

一「（そういうのは雲母の専売特許ですから）」

気絶した二人をグラスプで縛り上げ、俺は建物内に侵入した。

一「（さて、子ども達は何処に・・・）」

発現させた刀を持ち、通路を真っ直ぐに進む。

≪儂が案内する。まずはその通路のつきあたりを右に曲がるのじゃ≫

一「（わかりました）」

駄神の指示に従い、つきあたりを右に曲がる。すると、前方に魔力反応を感じ、それがこちらに向かって近づいて来るのを感じた。

≪見回りが一人、お主に近づいておるぞ≫

一「（どうしましょう？）」

≪左手に扉があるじゃろ？　室内に人の気配はない。中に入ってやりすごすのじゃ≫

言われたとおりに扉を開けると、確かに中は無人だった。すぐに入って扉を閉める。

カツ・・・カツ・・・カツ・・・

足音が徐々に近づいて来る。息を殺し、ただ過ぎ去るのを待つ事数秒、足音は聞こえなくなった。

一「どうにかやり過ごせたな」

そこでやっと室内を見渡す。大量の本が本棚に並べられ、机にはレポートのようなものがいくつも散らばっていた。

≪読んでみろ。もしかすれば、子ども達について何かわかるかもしれん≫

一「（そうですね）」

レポートを一枚手に取り、それに目を通す。

『本日、新たな研究対象を手に入れた。名は『エリオ・モンディアル』。あのプロジェクトFによって生まれたクローンである。実に興味深い対象だ。他の対象とは魔力の質がまるで違う。これがプロ

ジェクトFの凄さなのだろうか。とにかく、これで我々の研究もさらにはかどる事だろう。今から楽しみである』

一「これは・・・」

書かれている名前に目を見張りつつ、さらに続きを読む。

『予想していた通り、この対象は驚くべき実験結果を次々と叩き出した。実験開始当初、頑なな態度を取っていたが、他の実験対象共を目の前で痛めつけると、ようやく協力的な姿勢を見せた。やはり、あの年齢の子どもにはこういった脅しが効果的である』

グシャ！

最後まで読まずにレポートを握り潰す。子ども達を名で呼ばず『対象』と呼び、暴力まで辞さない連中の腐った性根に狂おしいほどの怒りが込み上げてくる。

≪ど、どうしたのじゃ・・・・？≫

一「（決めました。ここにいる連中全員・・・施設ごと潰してやります）」

≪ヒィッ！？　なんというオリジナル笑顔。・・・マジギレしとる

なお主≫

一「（早く子ども達を見つけましょう。こんな下種共のいる場所から一刻も早く助けださないと）」

≪そ、そうじゃな。では、部屋を出て左に進むのじゃ≫

それから駄神のナビを頼りに入り組んだ通路をひたすら進み続ける事数分、未だに子ども達は見つからなかった。

一「（まだなんですか？）」

≪もう少しじゃ。もう少しで・・・≫

？「止めろ！」

突然、少年の怒鳴り声が聞こえて来た。それは、今歩いている通路の端の部屋から聞こえて来た。

≪そこじゃ！　その部屋じゃ！！≫

全速力で部屋の前まで駆け抜け、勢いのまま扉を蹴破ると、五人の子ども達と、その一人の腕を掴んでいる白衣の男がいた。

男「だ、誰だ貴様は・・・・！？」

一「黙ってろ」

ザシュ！

男「あう・・・」

ドサ・・・

刀ではなく、鞘の方で斬りつける。子ども達に悲惨な光景を見せるわけにはいかない。

一「大丈夫か？」

掴まれていた女の子に声をかける。すると、その子の前に男の子が立ちはだかった。

男の子Ａ「誰だお前！　お前もそいつの仲間か！？」

気絶した男を指差しながら俺を睨む男の子。どうやらさっきの声の主はこの男の子のようだ。

一「いや、違うよ。俺は、キミ達を助けに来たんだ」

男の子Ｂ「助けに来た？」

別の男の子が不安そうな声で聞き返して来る。

一「そうだよ。知り合いにキミ達が酷い事をされているって聞いてな、急いでやって来たってわけさ」

女の子Ａ「本当に？　本当に助けに来てくれたの？」

一「ああ、もう大丈夫だ。すぐにここから出してあげるからね」

一人ずつ頭を撫でながら優しく答えると、ようやく子ども達の顔から怯えが消えた。

一「他の子が何処にいるか知ってるかな？」

女の子Ｂ「ううん。ここには私達以外にはいないよ」

女の子Ｃ「待って。エリオ君がまだ・・・」

一「その子は？」

男の子Ａ「俺達の仲間だよ。今日の実験の為に別の部屋に連れて行かれちゃったんだ」

一「じゃあ、エリオ君を含めて六人で全員なんだね？」

女の子Ｃ「そうだよ」

一「わかった。今からエリオ君を助けに行って来るから、みんなはこの部屋で待っててくれ。必ず迎えに来るからね」

男の子Ａ「うん。気をつけてね兄ちゃん」

一「ありがとう」

≪おそらく、中には魔導師が複数おる。油断するでないぞ）」

子ども達の部屋を後にし、気絶した男を引き摺りながら最後の部屋に向かう。

やがて、辿り着いた俺の耳に、室内からの叫び声が届く。

？「うあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

？「反応、さらに上昇しています」

？「素晴らしい。薬の投与をさらに増やせ」

？「しかし、これ以上は精神に多大な負荷が生じる恐れがあります」

？「構わん。むしろそうなれば実験がしやすくなるというものだ」

ブチッ！

≪あ・・・キレた≫

一「フレイムレーザー！！！」

怒りが体現したかのような強力な熱線が、扉を跡形もなく燃やし尽くした。室内の視線が集中する中、俺はゆっくりと部屋に足を踏み入れた。

男Ａ「何者だ！？」

男Ｂ「侵入者か！？　見張りは何をやっている！！」

室内には実験機器のようなものが所狭しと配置され、その中心には椅子が配置されている。そして、そこには拘束され、苦しみの声をあげている一人の少年がいた。

一「五秒やる・・・その間に祈りを済ませろ」

男Ａ「取り押さえろ！」

魔導師Ａ「はっ！」

魔導師三人が俺を取り囲む。俺は刀を消し、手甲を装備した。

魔導師Ｂ「デバイスが変わった・・・？」

一「爆砕・・・跳天昇っ！！！」

ブワッ！

魔導師Ｃ「ぎゃあぁぁぁぁぁぁぁ！！」

四方に広がる気柱が、魔導師達を機器ごと吹き飛ばす。壁に叩きつけられた魔導師達は、そのままピクリとも動かなくなった。

男Ａ「ば、馬鹿な！？　ＡＡランクの魔導師三人が一撃だと！？」

男Ｂ「所長！　その男、オーバーＳです！！」

男Ａ「なっ！？」

一「貴様がここの所長か」

男A「な、何だ・・・何が目的だ?」

一「子ども達の救出。そして・・・・貴様等の駆逐だ!!」

ドゴッ!!

男A「かぺっ!?」

オーラを込めた拳が所長の顔面を捕える。殴り飛ばされた所長は、魔導師達と同じように壁に叩きつけられ、気絶した。

男B「ひ、ひいいいいいいい!」

一「逃げるな」

見張りの時と同じようにグラスプで縛る。そして、少年を拘束している器具を破壊した。

一「キミがエリオ君・・・で合ってるよな?」

エ「く、来るな!」

近づこうとする俺に、エリオ君は拒絶の言葉を投げて来る。

一「大丈夫。落ち着いてくれ。俺はキミを助けに・・・」

エ「来るなぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

それでも近づこうと試みると、エリオ君から強力な魔力波が放たれ、俺の全身を切り裂いた。

一「ぐっ・・・！」

エ「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

錯乱しているのだろう。エリオ君の瞳は危険な光を孕んでいた。とにかく落ち着いてもらわなければ彼の方が危ない。

一「大丈夫だ。俺は何もしないよ」

ギュ・・・

優しく抱き締める。魔力波は尚も俺の体を切り裂いているが、決して離してはいけないし、離すつもりもない。

エ「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

一「大丈夫・・・大丈夫だ・・・キミを傷付けるヤツはもういない。だから安心してくれ」

それからひたすらエリオ君の背を撫でながら声をかけ続ける事数分、ようやく魔力波が収まり、エリオ君は正気を取り戻した。

一「もういいのか？」

エ「は、はい・・・ご迷惑をおかけしました」

一「傷の事か？　これくらいなら問題ないさ」

回復魔法で傷を癒し、改めてエリオ君と向き合う。

一「エリオ君、俺はキミ達を助けに来たんだ。他の子達はあの部屋で待機している。すぐにここから脱出しよう」

エ「はい」

一「・・・貴様の方も仲間を連れて脱出しろ。俺は、この施設を破壊する」

男B「（コクコク！！）」

≪なんじゃ、こんな下種共まで助けるつもりか？≫

一「（別にそういうつもりじゃありません。脱出が遅れても、俺はそのまま施設を破壊します）」

グラスプを解除してやると、男は慌てた様子で所長を抱き起こしていた。それを一瞥し、俺はエリオ君を連れて子ども達の部屋に戻った。

一「お待たせ」

女の子B「エリオ君！」

男の子A「無事だったんだな！」

エ「お兄さんのおかげだよ」

一「さあ、全員そろった所で脱出だ」

全員「お～～～～！！」

≪脱出ルートはすでに把握しておる！　儂に任せるのじゃ！≫

一「（了解）」

脱出も駄神のおかげで問題無く完了し、俺は子ども達と共に、施設から大きく距離を取った。ちなみに、連中も脱出に成功し、今は俺達の傍らで縛られたまま項垂れている。

一「さて、仕上げだな」

俺は長銃を二丁発現させ、施設に狙いを定めた。

≪に、二丁じゃと・・・≫

一「（この一撃で・・・跡形も無く破壊します）」

長銃に溢れんばかりのオーラを注ぎ込み、裂帛の咆哮と共に引き金を引く。

一「デュアル・オーラフォトン・・・・ブラスタァァァァァァァーーーーーーッ！！！！」

カッ・・・！

放たれた二つの光は、混じり合いさらに巨大な一つの光となり、研究施設を飲み込んでいった。破壊音も何も無く、あらゆるものを滅

する絶対の光は、建物だけでなく、その後方に生い茂っていた木々まで消滅させ、その部分をただの平地にしていた。・・・・まるで、始めから何も無かったかのように。

一「・・・・ふう」

やはり二丁同時に扱うのは無理があったか。大量のマナを急に失った事で体が大きく疲労している。

エ「す、凄い・・・」

男の子A「すっげえ兄ちゃん!!　何今の?」

女の子B「眩しかった～～～」

子ども達は興奮した様子ではしゃいでいる。その反面、研究所の連中は顔面蒼白で震えていた。

男A「ば、化物・・・」

魔導師C「い、今の・・・オーバーSどころじゃねえぞ」

一「さて、連中の処遇はどうするか・・・」

≪安心せい。どうやら管理局が動いたようじゃ≫

複数の魔力反応が高速で接近して来るのを感じた。とりあえず、管理局に任せれば後は問題無いだろう。

≪それじゃあ、そろそろ跳ばすぞ≫

一「（・・・・待って下さい）」

≪どうした？≫

一「（今回のような違法研究所は他にもありますよね）」

≪そうじゃな。こういう輩は掃いて捨てるほどおるじゃろうて。それがどうかしたかの？≫

一「（では、しばらくは違法研究所を潰して回りたいと思うのですが）」

≪ほお・・・じゃが、それでは再会までの期間が延びてしまうが、それでもいいのか？≫

一「（はい）」

≪あいわかった。では、予定を変更して『違法研究所ぶっ潰しツアー』を敢行する≫

エ「どうしたんですかお兄さん？　さっきから難しい顔をしてますけど」

一「エリオ君、そろそろ俺は行くよ」

エ「え？　何処へですか？　それに、その人達は・・・」

一「もうすぐ管理局の人達がここにやって来る。その人達に任せれば大丈夫。キミ達もちゃんと保護してくれるはずだ」

女の子C「お兄ちゃん行っちゃうの？」

一「悪い事をしているヤツが他にもいるかもしれないからな、今からそいつらをやっつけに行って来る」

男の子B「お兄ちゃん、ヒーローみたい」

一「はは、ありがとう。でも、俺はそんなに大したヤツじゃないよ」

話している間にまた体が透けて来る。そろそろこの子達ともお別れだ。

一「それじゃあ、みんな元気でね」

エ「あ、あの、最後に名前を教えてください！」

一「秋月　一成・・・旅人さ」

その言葉を最後に、俺は二度目の転移を行った・・・

SIDE　OUT

この日を境に、各地の違法研究所や違法魔導師が次々に壊滅、逮捕されていく事になる。それを行ったのが、複数の強力なデバイスを扱う一人の銀髪の男だという噂がミッドチルダ全域に広まっていくのだが、真相のほどは定かではない・・・

第二話　子どもに手を出す輩は問答無用でぶちのめせ（後書き）

作「どうにか二話目も更新出来たぜ」

一「原作を知らないとここまで遅くなるものなんだな。だから素直に見とけって以前言ったのに」

作「いや、見たら負けかなと思って」

一「どこかで聞いたようなフレーズだな」

作「と、とにかく、次はもっと早く更新出来るよう頑張るぞ」

一「まあその前に、今回の勝手な自己解釈や毎度毎度の力押しについて謝罪しろ」

作「・・・・すみません」

作「あ、そうだ。ずいぶん前に頂いた贈り物まだ紹介出来てなかったから今回紹介するぞ」

一「まずは二次元最高様からだな。神奈に料理特訓用の食材と食器。天音に純白のドレス。刹那にランニングマシーン。雲母に薄いピンクのワンピース。光明には・・・・・ＰＡＤ」

作「ＰＡＤだってよ！　ひんぬーの光明にはピッタリだな！」

一「（そんな事言って・・・後々どうなっても知らんぞ）」

作「緋水様からは緋弾のアリア全巻を頂いたぞ。まだ一度も読んだ事ないからな、楽しみだ」

一「そして、気に入ったら二次書くつもりか？」

作「いや、流石に四つはきついです・・・」

一「清浦刹那様からは神奈宛てに弓と矢を頂いたぞ」

作「刀も使うし・・・まんま女武者だよな。だがそれがいい」

一「勝手に言って勝手に自己完結するなよ」

作「ＡＴＤ－Ｘ様からは凄いものを頂いたぞ。旧帝国海軍の防空駆逐艦、秋月。二つ目は海上自衛隊の初代あきづき型護衛艦。三つ目は同じく海上自衛隊の二代目あきづき型護衛艦だ！！　でも何で全部お前と同じ名前なんだろう？」

一「それはな・・・俺がいない間、代わりにお前をボコボコにするのに使うためだ」

作「・・・・へ？」

一「まあ、こうして俺は帰って来たわけだが、そんな事はどうでもいい。早速使わせてもらおう！」

作「ふ、ふざけるな！　止まれ！！」

一「あいにくだが、全てに人工知能が搭載されていて、お前の命令は聞かないように設定されているらしい」

作「何それぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！」

作「・・・なんだろう、このノリ、久しぶりだから楽しく感じる」

一「それはよかったな。それじゃあ最後はマサ様からだ。エミヤさんとユーフィー、そしてカティマをそれぞれシェフとウェイトレスとして送ってくれるそうだ」

ユ「こんにちは～～」

作「おお、我が天使ユーフィーちゃ・・・むぐっ！？」

カ「ど、どうされたのですか？」

一「ちょっとゴミ捨てて来ます。あ、エミヤさん、肉じゃがでお願いします」

エ「承知した。では、腕によりをかけて作らせてもらおう」

一「さて・・・じゃあ早速捨てて来るか」

作「～～～～！」

ユ「（あ、扱いが酷くなってる・・・）」

第三話　己の心に常に正直であれ・・・なんて言うけどこれが意外と難しい（前編）

今回もオリジナルな話が展開されます。そういうのがお好きでない方はスルー推奨です。

第三話　己の心に常に正直であれ・・・なんて言うけどこれが意外と難しい

三度目の転移で俺が跳んだのは、とある街の裏路地だった。

≪現在、この街に一人の違法魔導師が潜んでおる。そやつをどうにかするのが今回の目的じゃ≫

一「（違法魔導師？　誰かを助けるんじゃないんですか？）」

≪そやつの所為で失われる命がある。だからお主が介入し、その命を守るのじゃ。それが一人の少女を苦しみから救う事となる≫

一「（わかりました。とにかく、その違法魔導師を潰せばいいんですね？）」

≪そうじゃ。・・・・ん？　どうやら、その命がやって来たようじゃな≫

一「え・・・」

？「そこで何をしている？」

背後からの声に振り返る。そこには、管理局の制服を纏った青年が立っていた。年は・・・二十代前半くらいだろうか。

一「ああ。初めて来た街でな。迷ってしまったんだ」

？「そうですか。では、自分が表通りまでご案内します」

警戒するような視線から一変、青年は柔らかな笑みを浮かべてそう言った。

一「すまない。助かるよ。えっと・・・キミは？」

？「自分はティーダ・ランスター。時空管理局、首都航空隊所属の一等空尉です」

一「ッ・・・！」

≪これでわかったろ？　この者を救わなければならない理由が≫

一「（・・・はい）」

ティーダ・ランスター・・・違法魔導師の追跡中、その対象と交戦し、殉職する“はず”の人物。そして、その死が後に彼の妹に大きな影響を及ぼす事になる“はず”である。

ティ「どうかしましたか？」

一「いや、何でもないよ。俺は秋月　一成。よろしくティーダさん」

ティ「呼び捨てで結構ですよ。では、自分について来てください」

ティーダの後を追い、細い道を進む。せっかくなので、少し情報収集してみるか。

一「しかし、何で管理局の人間があんな路地裏に？」

ティ「すみませんがそれは言えません。守秘義務がありますから」

案の定断られてしまったが。粘り強く頼み込むと、観念したように教えてくれた。

ティ「・・・実は、現在この街に一人の凶悪な違法魔導師が潜んでいるという情報が入りまして。自分と他数名の魔導師で調査しているのです」

一「そうだったのか。それで・・・」

ティ「ですから、あまり人気の少ない場所にはいかないようにしてくださいね。襲われてしまってからでは遅いんですから」

一「わかった。気をつけるよ」

ティ「あ、そろそろ表通りに出ますよ」

道を抜けると、広場のような場所に出た。多くの人達が家族や恋人

と思い思いの時間を過ごしている。

一「いい街だな」

ティ「はい。だからこそ、必ず違法魔導師を捕まえて、みなさんの平穏を守らなければなりません」

そう言った彼の横顔はとても凛々しく見えた。こんなひたむきで真っ直ぐな青年を、違法魔導師などという下種な輩に殺させるわけにはいかない。

一「ティーダ。もしよかったら、俺にも探すのを手伝わせてくれないか？」

ティ「え？」

一「人手は大いに越した事はないだろ？　少しは役に立てると思うが・・・」

ティ「・・・いえ、お気持ちだけ受け取らせて頂きます」

俺の提案を、ティーダはやんわりと拒否した。

ティ「相手は凶悪な犯罪者。命の危険だってあるかもしれません。そんな危険な事に、民間人であるあなたを巻き込むわけにはいきま

せん」

一「しかし・・・」

ティ「大丈夫です。自分以外にも隊員はいます。きっとすぐに・・・・ッ！？」

突如、ティーダの顔が強張る。何やら念話を済ませると、早足で歩き始めた。

一「どうした？」

ティ「見つけました。例の魔導師です」

振りかえらずにティーダが答える。しかし、まさかこんな目立つ場所を堂々と歩いているとは。

ティ「すみませんがここで失礼します。自分はヤツを追います」

一「待つんだティーダ！」

ティーダはあっという間に人混みの中に消えて行った。

一「くそっ、見失った」

≪安心せい。あやつの魔力を辿ればすぐに追いつける≫

一「（すみません。何だか助けられてばかりですね）」

≪構わんよ。どうせ、今くらいしか出番も無いじゃろうしな≫

一「（出番？）」

≪気にせんでくれ≫

意識を切り替え、俺は急いでティーダの魔力を辿り始めた・・・

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ティーダＳＩＤＥ

一成さんと別れ、一定の距離を保ちながら魔導師の後を尾行する。

とにかく、応援が来るまでヤツを見失わないようにしなければ。

ダッ・・・！

ティ「（え？）」

突然、魔導師が走り始めた。まさか、尾行がばれてしまったのだろうか。慌てて自分も走り出す。

≪いいか、何があっても逃がすな！　必ず我が隊の手柄にするのだ！≫

連絡を入れた上司の言葉が頭をよぎる。正直手柄などどうでもいいが、逃がすつもりはない。ヤツは必ず捕まえてみせる。

追いかけ続ける事数分、気付けば街外れの一画にヤツを追い詰めていた。

ティ「ここまでだな。大人しく投降しろ」

魔導師「・・・管理局か？」

ティ「そうだ。応援も呼んである。無駄な抵抗はしない方がいいぞ」

銃型のデバイスを構えつつ、降伏勧告を行う。だが、男は小馬鹿にしたような口調でそれを拒否した。

魔導師「くくく、貴様のような若造に捕まるとでも？」

ティ「なんだと？」

魔導師「貴様がぺちゃくちゃしゃべってる間に完成したぜ。くらいな！！」

瞬間、大量の魔力球が一斉に襲いかかって来た。すぐさまデバイスで撃ち落としていく。

ティ「くっ！　舐めるな！」

ひたすら撃ち落としながら隙を見て反撃を繰り返す。互いに決定打を与えないまま、時間だけが過ぎて行った。

魔導師「チィッ！　しぶとい野郎だ！」

ティ「犯罪者に負けるわけにはいかない！」

睨み合いながらデバイスを構え直したその時・・・

？「う、うわぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

突然の背後からの悲鳴。振り返ると、ボールを持った少年がへたり

込んでいた。

魔導師「余所見してんじゃねえよ！！」

ドガッ！

ティ「ぐあっ！」

魔力球が腹部に直撃し、大きく吹き飛ばされる。魔導師は、跳躍したかと思うと、少年の前に降り立ち、そのまま右腕で少年を抱え寄せた。

魔導師「形勢逆転だな管理局さんよ」

ティ「その子は関係ないだろう！　今すぐ解放しろ！！」

魔導師「だが断る」

少年「うわぁぁぁぁぁん！　助けてお母さーーーーーん！！」

魔導師「うるせえ！　ぶち殺すぞクソガキ！！」

少年「ヒッ・・・！」

ティ「止めろ！　その子には手を出すな！」

魔導師「ならデバイスを捨てな」

言われた通りデバイスを地面に置く。これは完全に自分のミスだ。
あの少年は必ず助けなければ。

魔導師「このままおさらばしてもいいが・・・・せっかくだ、ゲームでもしようぜ」

ティ「ゲームだと？」

魔導師「今からお前に百発魔力球をブチ込む。最後まで立っていればお前の勝ち・・・ガキは解放してやるし、大人しく捕まってやるよ。だが、もし耐え切れなければ、今度はこのガキに魔力球をブチ込む」

ティ「・・・・いいだろう。百発だろうと二百発だろうと受け切ってやる」

少年「お、お兄ちゃん・・・・」

ティ「大丈夫。必ず助けるから待っててくれ」

魔導師「それじゃあゲームスタートだ。まずは一発目・・・・」

ドンッ！

ティ「ぐう・・・！」

魔導師「おいおい、足がふらついてるぞ。そんなんで残りを受け切れるのかよ？」

ティ「黙って続けろ」

魔導師「命令してんじゃねえよ」

ドゴッ！

ティ「がはっ・・・！」

魔導師「こんなのはどうだ？」

ブシュ！

ティ「うあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

弾丸のような魔力球に右足を撃ち抜かれる。非殺傷設定のされてない一撃で血が流れ始めた。

魔導師「次は左足・・・」

バンッ！

ティ「ぐあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

魔導師「いいぜいいぜぇ！！　盛り上がって来たな！！」

さらに両腕も撃ち抜かれる。出血部分が激しい熱を持ち、意識が遠くなる。しかし、倒れるわけにはいかない。

少年「お兄ちゃん！　しっかりして！！」

囚われの身でありながら、自分の身を案じてくれているあの少年を、あの男の手から救い出すまでは。

ティ「（妹と同じくらいの年かな・・・）」

そんな愚にもつかない事を考えながら、ゲームとやらが終了するのをひたすら待ち続けた。

・・・・・・・

・・・・・

・・・

ドゴッ！

魔導師「何だよ・・・何なんだよお前は・・・・！！」

苛立たしげに男が怒鳴る。今受けたのが九十九発目。あと一発受け切ればこっちの勝ちだ。

魔導師「何で倒れねえんだよ！！　クソッ！　クソッ！　面白くねえ！！」

ティ「はあっ・・・はあっ・・・どうした？　早く撃てよ」

魔導師「黙れ！！　こうなったら俺の全力で貴様をぶち殺してやる！！！」

男の周囲に無数の魔力球が出現する。どうやら約束を守る気は最初からなかったようだ。

少年「ひ、卑怯者!!　約束を破るのか!?」

魔導師「約束なんぞ知ったこっちゃねえ!!　死ねや若造ぉぉぉぉぉぉぉぉ!!」

男が手を振り上げると同時に、魔力球が自分に向かって殺到する。
それを人事のように眺めながら、最後の時が来るのを待つ。

?「オーラフォトンッッッバリアァァァァァァァ!!!」

ギィィィィィィィィィン!

ティ「・・・・え?」

目前に迫った死は、同じく目前に現れた不思議な紋様の刻まれた銀色の障壁によって届く事はなかった。

魔導師「何者だ!?」

最後の力を振り絞り、男の視線を追う。そこには・・・

一「貴様がやったのか・・・」

静かな口調とは裏腹に、明らかな怒りの表情で男を睨む一成さんが立っていた。

ティ「（今のは一成さんが？　彼も魔導師だったのか）」

彼の顔を見た途端、言いようもない安心感に包まれた。そのまま意識が闇に沈んでいく。

ティ「（だ、駄目だ。気絶するわけには・・・）」

ドサッ

最後に見たのは、迫り来る地面だった・・・

ティーダＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＩＮ　ＳＩＤＥ

ティーダが倒れた。全身の至る所から出血し、管理局の制服を真っ赤に染め上げている。

一「（こんなになるまで・・・）」

ティーダと魔導師の戦いの様子は駄神を通して伝わっていた。なぜ彼がこんな状態になっているのかも。なぜこんな目に遭ってしまったのかも全て・・・

≪早く回復してやれ！≫

一「・・・ヴァイタルエクステンション」

アースプライヤーよりさらに濃い緑色の光がティーダを包む。プレシアさんの病も直したこの魔法なら、必ず助けられる筈だ。

一「ディスペランススフィア」

さらにバリアで彼を包み込む。そこで改めて男と向き合った。

魔導師「貴様も管理局の人間か？」

一「だったらどうする」

魔導師「もちろん・・・・ぶち殺す！」

ティーダを痛みつけたのと同様の魔力球が右肩に直撃する。だが、それを気にする事無く、俺は男に向かって一歩踏み出した。

魔導師「おい、このガキが見えてないのか？　それ以上近づいたらこのガキ殺すぞ」

一「その前に貴様の首を折ってやる」

さらに一歩、二歩、三歩・・・魔力球は絶えず俺を打ちすえる。だが、それでも俺は男に向かって足を進ませる。

一「どうした？　俺を殺すんじゃなかったのか？」

俺がもっと早く辿り着いていたら、ティーダが傷つく事も無かったかもしれない。せめて、同じ痛みを味あわなければ、彼に申しわけが立たない。

魔導師「ち、近づくなって言ってるだろうが！　殺すぞ？　本当に殺すぞ！？」

≪ふん、この程度でビビるとは小物にもほどがあるな≫

魔導師「く、来るな！　来るなぁぁぁぁぁぁ！！」

少年「・・・・今だ！」

完全に及び腰になっている男の隙を突いて、少年は男の手から逃げだした。

少年「お兄ちゃん！　そいつ、そっちのお兄ちゃんにいっぱい酷い事したんだ！　お願い、やっつけて！！」

一「ああ、こいつだけは許してはおけない。キミは早くここから逃げるんだ」

少年「わかった！」

頷き、少年はその場から走り去って行った。

一「発現」

手甲を装備し、俺は目を閉じて体の力を抜いた。

一「・・・・降天昇地無伯」

・・・・プツン。

理性の鎖が解き放ち、俺は奥底に眠る本能を呼び起こした。全身に力を漲らせ、男に向かって飛び掛かる。

一「うおおお

一「・・・よかった。呼吸も安定している」

≪そ、それはよかったの≫

一「（？　どうしたんですか？）」

≪あ、あんなおっそろしいお主初めて見たぞ。まるで獣のような動きで、口にするのもはばかられるような攻撃を仕掛けて・・・正直ガクブルじゃよ儂は。というか、どういう攻撃したらデュクシなんて音が出るんじゃ！！≫

一「（あまり使いたくないんですけどね。発動中の記憶もあいまいですし。だから本当に屑と認識した相手にだけ使う事にしてるんです）」

≪そ、そうじゃな。儂もそれがいいと思うぞ。あんなもの毎回見せられたら確実にトラウマものじゃからな≫

？「動くな！！」

突如、複数の男に囲まれた。全員がティーダと同じ服装をしている。

≪ようやくお出ましかの≫

？「ランスター！　しっかりしろランスター！！」

？「お、おい！　こっちに例の違法魔導師が倒れてるぞ！！」

一「ティーダは無事だ。そっちの男は知らないがな」

？「お前がやったのか？」

一「そうだと言ったら？」

？「話を聞かせてもらうぞ」

≪どうする？　転移させてやろうか？≫

一「（いえ、ティーダの事が気になりますし、ここは従う事にします）」

こうして、俺は局員たちに連れられて管理局へ向かう事になった。

・・・・・

簡単な事情聴取を受け解放された俺は、ティーダが運ばれた病院へと向かった。受付で聞いた病室へ入ると、ベッドに寝かされたティーダと、その傍らでジッと彼を見つめてる少女がいた。

少女「だ、誰・・・？」

一「初めまして。俺はティーダの知り合いだ。キミは妹さんかな？」

少女「ティアナ・・・」

一「ティアナちゃんか。よろしくね」

挨拶を済ませると、ティアナちゃんは再びティーダに視線を戻した。
その顔には深い悲しみが見てとれる。

ティア「お兄ちゃん。このまま死んじゃうのかな」

一「え？」

ティア「・・・嫌・・・嫌だよ。お兄ちゃん、早く起きてよ・・・
一人ぼっちは嫌だよ・・・・」

突然泣き始めるティアナちゃん。溜まりきっていた不安がとうとう
爆発してしまったのだろう。

一「ティアナちゃん・・・」

ティア「うう・・・グスッ・・・・」

≪ええい！　お主何とかせんか！！≫

一「（何とかと言われましても）」

≪今こそナデポの力を見せる時じゃ！！≫

一「（ナデポ？）」

≪ええからほら！　その娘の頭をこれでもかというくらい撫で擦ってやるのじゃ！≫

一「（わ、わかりました）」

あまりに熱の入った口調に、言われるままティアナちゃんの頭に手を伸ばす。

ナデナデ

ティア「ふえ・・・？」

一「大丈夫。ティーダはキミを残して死んだりしないよ。必ず目を覚ましてくれるさ」

優しく語りかけながら、ティアナちゃんの頭を撫で続ける。すると、彼女の嗚咽が少しずつ治まって来た。

≪うむ、さすがじゃな。しかし・・・我ながらついメタな発言をしてしまったの≫

一「（さっきから何を言ってるんですか？）」

≪こっちの話じゃよ≫

ティア「あ、あの・・・もう大丈夫です／／」

言われて撫でるのを止めると、ティアナちゃんは頬を赤くして俺から離れた。

一「（・・・逆効果じゃなかったんですか？　怒ってるみたいですけど）」

≪お主は一度、眼科でしっかり診てもらった方がよいぞ≫

一「？」

？「ここか」

その時、突然病室の扉が開き、一人の男が入って来た。その男は、眠っているティーダに視線を向けると、憎々しげに口を開いた。

男「ふん、我が隊の面汚しめ。よくもまあ生きていられるものだな」

一「ッ・・・・！？」

いきなりの罵倒に愕然とする。今の言葉から察するに、この男はテ

ィーダの部隊の隊長のようだ。

男「満足な尾行も出来ず、人質を取られた揚句に手柄を民間人に奪われるなど役立たずにも程がある」

ティ「・・・・・」

もちろん、眠っているティーダには聞こえていない。それでも男の罵倒は続く。

男「貴様のような人間は我が隊に必要無い。復帰しても居場所はないと思え」

一「ふざけ・・・！」

ティア「お兄ちゃんを悪く言わないで！！」

我慢出来ず、男に食ってかかろうとしたその時、ティアナちゃんが声を荒げた。

ティア「お兄ちゃんは役立たずなんかじゃない！　お兄ちゃんは私が知ってる中で一番凄い魔導師なんだから！　馬鹿にしないでよ！！」

男「一番凄い？　私の中では一番の役立たずだがな」

ティア「違うもん！　お兄ちゃんは！　お兄ちゃんは・・・・！」

ティアナちゃんは再び大粒の涙を流し始めた。それを見て、俺の中の何かが完全に切れた。

一「・・・・いいかげんにしろ」

そこでようやく男の視線が俺に移る。すると、男は今までの不機嫌そうな顔から一変、にこやかな表情を浮かべて近寄って来た。

男「おお！　キミもいたのかね！　いや、今回はキミのおかげで助かったよ。あの役立たずに代わって例の魔導師を捕まえてくれた事、心より感謝する。そこで、ものは相談なのだが・・・あの役立たずに代わって我が隊でその力を振るってみないか？　キミほどの実力があればすぐに出世できるだろう。共にミッドの平和を守・・・」

一「失せろ」

男「え？」

瞬時に刀を発現させ、男の首筋に当てながら一喝する。

一「両断されたくなかったら、すぐにこの部屋から失せろ！！！」

男「ひっ！？」

腰を抜かした男は、情けない声を出しながら慌てて病室を出て行った。

≪ぶひゃひゃひゃひゃ！　見たかあの顔！！　マジザマァｗｗｗ≫

一「管理局にあんな屑がいたとはな・・・」

≪あの男絶対友達少ないぞ！　ロクな青春時代過ごして無いじゃろうて！≫

一「（興味ありません。それよりも・・・）」

ティア「違うもん・・・違うもん・・・・」

ティアナちゃんはその場で泣き崩れていた。この子にはちゃんと真実を話さなければならない。俺はティアナちゃんに話しかけた。

一「ティアナちゃん。キミの言う通りだ。ティーダは役立たずなんかじゃない。それどころか、命を懸けて一人の男の子を助けようとしたヒーローだよ」

ティア「え・・・？」

一「ティーダは、人質にされた男の子を助ける為に、違法魔導師の攻撃をずっと耐えていたんだ。全身ボロボロになりながらも、男の子を助ける為に必死に歯を食いしばって我慢していたんだ」

人命を優先したティーダは決して間違っていなかった。もしあの時、男の子ではなく魔導師捕縛を優先していたら、俺は彼を軽蔑していただろう。だが、彼はそうしなかった。任務ではなく、自分が正しいと思った事を実行したのだ。

一「手柄に固執し、体面ばかり気にするあの男より、ティーダの方がよっぽど隊長に相応しいと思うよ。キミの言う通り、彼は凄い魔導師だ。・・・役立たずだったのはむしろ俺の方さ。俺がもっと早く現場に着いていればティーダもこんな目には・・・」

ティア「・・・・・・」

沈黙が場を支配する。だが、その時・・・

ティ「う・・・・・」

ティア「お兄ちゃん!?」

かすかにティーダが呻いた。すぐさまティアナちゃんが呼びかける。

一「（・・・・行きましょう）」

≪挨拶せんでよいのか？≫

一「（俺にそんな資格はありません。それに・・・兄妹の時間を邪魔するほど野暮でもありませんから）」

≪・・・・そうじゃな。では、跳ばすぞ≫

気付かれないように部屋の端まで移動し、俺はその場から転移した・・・

第三話　己の心に常に正直であれ・・・なんて言うけどこれが意外と難しい（後編）

作「今回もオリジナル要素をたっぷり入れさせてもらったぞ」

一「どうしてこうなった」

作「頼りのｗｉｋｉにもあまり詳しい事、書かれてなかったからな。てきと・・・じゃなくて、いつもの様に他の方の作品を参考にさせてもらった」

一「しかし・・・時系列無茶苦茶だな。その所為で、前回原作との矛盾が発生しただろ」

作「時間も場所も関係無いのが駄神パワーなんだよ！」

一「つまり、強引な展開には目を瞑れって事か」

作「うん！」

一「うんじゃないだろ・・・」

作「それじゃあ、贈り物報告会を始めるか」

一「まずは清浦刹那様から俺宛てにガオガイガーを頂いたぞ」

作「はあ・・・いつ見ても雄々しい姿だな」

一「手紙がついてるぞ。『足のスイッチを押すと勝手に作者の心臓を・・・』との事だ」

作「あれか！？　地獄と天国か！？」

作「緋水様からは、前回の子ども達宛てに着替えと絵本。さらに、学校へ行けるように手続きをして頂いた上に、大人になるまで不自由する事無い額のお金を頂いたぞ」

一「俺が責任を持って届けて来る」

作「・・・金に手出すなよ」

一「それはお前だろうが」

一「マサ様からは、全員分の白玉ぜんざいと、お前宛てにユーフィーとカティマのウェイトレス姿を撮った写真を頂いたぞ」

作「ひゃっほう！　なんて素晴らしい物を送って下さったんだ！！　感激の涙が止まらねえぜ！」

一「変態は無視してぜんざいを頂くか・・・うん、美味い」

作「どこに貼ろっかな～～！　それとも、手帳にでも挟んどこうかな～～！」

一「さて、そろそろ暴走するだろうし止めるか」

ドゴッ！

作「な、何故にいきなりボディー・・・・」

第四話　再会（前書き）

もっと引っ張るべきだったか・・・

第四話　再会

駄神「ここまでよくやってくれたの旅人よ」

俺は駄神の世界に戻っていた。目の前では駄神が満足そうに笑っている。

一「これで全員なんですか？」

駄神「いや、まだもう少し残っておるが、それは他の者に任せておる」

一「？」

駄神「さて・・・いよいよお主を本編開始時に送る時が来たな。何か必要な物はあるか？　何でも用意してやるぞ」

一「いえ、特には」

駄神「相変わらず欲のないヤツじゃのお。ならば、ワシの助けが必要な時は遠慮なく言うがよい。心の中で『凄いよ駄神さん！』と唱えればいつでも話せるようにしておくからの」

一「わかりました、絶対使いません。というか、今自分で駄神って言いましたよね」

駄神「・・・・はっ！」

呆然とする駄神。・・・この顔を見れなくなると思うとほんの少しだけ寂しくなるな。

駄神「なんて思っておるのじゃろう？」

一「人の心を勝手に読まないでください。プライバシーの侵害で消しますよ」

駄神「そこは普通「訴えますよ」ではないのか！？」

一「訴えた所でここには俺とあなたしかいないじゃないですか。なら裁くのは必然的に俺という事になりますね。はい、極刑です」

駄神「おいいいいいいいいい！！　重すぎるじゃろ刑が！　弁護士の同席を要求する！！」

一「ではそれも俺が・・・すいません、弁護のしようがありません」

駄神「何この負のスパイラル！？　そんなにワシをいじめて楽しいのか！？」

一「元はと言えばあなたが原因でしょうが」

駄神「ええい！　冷静にツッコミ入れおって！　まるで三流芸人の漫才の様じゃ！」

一「でしたら、ちゃんとしたツッコミ入れましょうか？」

手甲を発現させて告げる。

駄神「そんなもんでツッコまれたら頭が吹き飛ぶわ！！」

一「吹き飛びはしませんよ・・・・破裂するだけです」

駄神「どっちにしろデスるじゃろうが！　もうよい！　さっさと行ってしまえ！！」

ブオン！

例の如く足元に穴が空き、これを抜ければようやくみんなと再会できる。

≪・・・・待って≫

一「え？」

声が聞こえたと思った次の瞬間周囲が大きく歪み、気付けば俺は荒野に立っていた。

一「もう着いたのか？　それにしては様子が・・・」

辺りを見渡す。そこには異様な光景が広がっていた。剣、刀、槍、斧、数え切れない武器が地面に散らばっている。そのどれもが例外なく破壊されており、武器としての命を終わらせている。

一「これは・・・まさか霊剣や神剣か？」

≪その通りです≫

一「誰だ！？」

声はするが周囲には誰もいない。しかし敵意はなく、むしろ慈愛に満ちた声だった。

≪ここは剣の墓場・・・戦いで散っていった剣達が行きつく場所・・・≫

一「剣の・・・墓場」

≪遠くない未来、あなたはこの場所で欠片と雌雄を決する事になるでしょう。その前に、私に会いに来て下さい。残りの原初存在達と力を合わせ、永きに渡る戦いを終わらせて下さい≫

一「あなたは・・・」

≪私は原初存在を生みし者。忘れないで・・・・私はあなたのすぐそばにいます≫

一「待ってください！　まだ話を・・・！」

≪待っていますよ・・・・王様≫

一「え・・・」

その言葉を最後に声は聞こえなくなった。それと同時に再び周囲が歪み始めた。

一「（今の場所は一体・・・？　それに、最後のあの言葉・・・・）」

≪そろそろ転移が完了するぞ。準備はよいか？≫

一「は、はい」

今は気にしてもしょうがない。俺は転移に備えた。

一「（・・・ん？　そういえば、何処に出るんだ？）」

転移が終了し、俺の目の前には広大な空が広がって・・・

一「・・・・空？」

おかしい、空とは普通見上げるものだ。それが目の前に広がっているという事は・・・

一「ああ、つまり俺は空に放り出されたというわけか・・・って」

ビュオォォォォォォォォ！！

一「ちょっと待てぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！」

自由落下が始まる。凄まじい風圧で目を開けていられない。

一「（駄神！　どういう事ですか！？）」

返事はない。そういえば、呼びだす時には心の中でキーワードを唱えなければならなかった。

一「（くそ・・・凄いよ駄神さん！）」

≪呼んだかの？≫

一「（この状況の説明を求めます！！）」

この時、顔は見えなかったが、駄神は笑っていただろう。何せ、喜色に満ちた声でこう答えたからだ。

≪サプラ～イズ♪≫

一「（ふざけるなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！）」

≪ほれほれ、早うせんと地面にぶつかってお陀仏じゃぞ≫

一「くっ・・・・！」

即座にウイングハイロゥを展開させる。落下が治まり、俺は空中をゆっくりと進み始めた。

≪楽しんでもらえたかの？≫

一「（・・・そうですね。次に会う時が楽しみです）」

≪お、落ち着け。ワシはこれが一番速いと思ってだな・・・≫

一「（今の内に決めておいてください。ブラスターで消されるか、手甲でボコボコにされるか、刀で両断されるか、大剣で叩き潰されるか）」

≪どれ選んでも死亡確定!?　そ、それより下を見るのじゃ!≫

駄神に言われて下を見下ろすと、小さな何かが大地を移動しているのが見えた。

一「あれは・・・列車か?」

≪そうじゃ、あそこにお主を待っておる者達がいる。さあ!　行くがよい!≫

一「・・・・はい!」

ハイロゥを羽ばたかせ、一気に下降する。自由落下時よりもさらに激しい風圧を受けながら、それでもなお加速する。

一「あれは・・・!」

まず目に入って来たのは巨大な竜。次に、その竜の傍にいる少女。そして最後に・・・その背後から少女を襲おうとしている機械兵器が見えた。

?「キャロ!　危ない!」

？「え？　きゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

誰かの叫び声でキャロと呼ばれた少女が振り返る。だが、恐怖で動けないのかその場から動かない。

一「てえぇぇぇぇぇぇぇぇやあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

ザシュ！

激突する勢いで機械兵器に斬りかかり、少女を抱えてその場から飛び上がる。

一「大丈夫か？」

少女「え・・・？」

状況が判断出来ないのか、少女は目を開いて呆けた表情で俺を見つめている。すると、今度は別の人物が声をあげた。

？「う、嘘・・・まさか・・・・」

忘れるはずのないその声に振り向くと、そこには大きく成長したあ

の娘がいた。

な「か、一成君!?」

一「久しぶりなのは・・・・約束通り帰って来たよ」

十年越しの再会だというのに、俺はそう返すしか出来なかった・・・・

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

なのはＳＩＤＥ

あれから十年の月日が流れた。私は、はやてちゃんが設立した『機動六課』の一員としての日々を送っていた。そして今日、フェイトちゃんや新しくデバイスを支給された新人達と共にリニアに搭載されたレリックの護送と、それを狙うガジェットを撃破する任務を受け出撃した。

現場に到着した私達を、早速ガジェットが襲って来た。初めての実践という事で緊張するかと思われた新人達だけど、それは杞憂に終わった。スバルもティアナもエリオもキャロも自身の実力を充分に発揮しながら戦っている。

ス「リボルバー・・・シューーーーット！！」

ティア「クロスファイヤー！　シュート！」

エ「キャロ！　下がって！」

キャ「あ、ありがとうエリオ君」

さらに戦闘の最中、エリオの危機にキャロが召喚竜のフリードの能力を解放し、見事エリオを守った。昔、“ある出来事”が切っ掛けで自分の力を恐れていたキャロだけど、ここに来てようやく力と向き合う勇気が持てたみたいでよかった。

ガジェットをあらかた片付け、後は護送するだけと思われたその時、事態が急変した。突如、新たなガジェットが出現し、再び襲いかかって来たのだ。

な「くっ・・・！　どうして・・・！」

スバル達も戸惑いながら再びガジェットと戦いを始める。私も急いでガジェットを撃破しようとしたが・・・

≪な、なのは隊長！　ライトニング４が！≫

な「ッ！？」

見ると、キャロの背後から大型のガジェットが忍び寄り、その手をキャロに伸ばそうとしていた。

エ「キャロ！　危ない！」

キャ「え？　きゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

エリオの叫び声にようやくキャロがガジェットに気付く。けれど、キャロはその場から動こうとしない。突然の事に体が動かないのだろう。

≪ら、ライトニング４に向かって空からさらに別の反応が接近！な、何これ・・・速い！！≫

な「え・・・？」

？「てえぇぇぇぇぇぇぇやあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

雄叫びと現れた謎の影がガジェットを両断し、キャロを抱きかかえてその場を離れる。

？「大丈夫か？」

キャ「え・・・？」

な「う、嘘・・・まさか・・・・・」

キャロを助けてくれた人物の顔を見た瞬間、私の時が止まった。だって、そこにいたのは、十年前に別れてから一日たりとも忘れた事のない“彼”だったのだから。

な「か、一成君!?」

一「久しぶりなのは・・・約束通り帰って来たよ」

そう言って私に向けられた笑顔は、十年前と何一つ変わらない優しい笑顔だった・・・

第四話　再会（後書き）

作「ようやく再会ですな」

一「長かった・・・本当に長かったぞ」

作「ここまで来るのに二つの世界に渡ったからな。そう考えると滅茶苦茶長かったな。次回以降は他のみんなとも会えるぞ」

一「・・・・」

作「何だ？　泣いてんのか？」

一「殴るぞ」

作「ご、ごめんなさい」

作「それじゃあ、再会祝いの贈り物報告会始めるぞ」

一「まずはマサ様からだ。夏野菜カレーとデザートとしてゼリーを頂いたぞ」

作「おお！　俺カレー大好きなんだよな！　これは嬉しいぞ！」

一「という割には、夕飯で出るカレーは好きじゃないんだよな」

作「レトルトで俺が満足すると思うな！」

作「グラムサイト2様からは、ティーダ宛てに翠屋のシュークリームと家族で行く海鳴観光。お前宛てに天音達のブロマイドとデフォルトされた１３０ｃｍほどのぬいぐるみを頂いたぞ」

一「よく出来てるな・・・これは嬉しい」

作「それとお願いという事で、前回出て来たあの隊長を駄神の力でティーダと同じ目に遭わせて欲しいとの事だ」

駄神「任せんしゃい！」

一「うおっ！？　駄神！？」

駄神「ふふふ、ようやくワシの出番が来たようじゃな」

作「はいはい。さっさと行って来てくれ」

駄神「ちょ、待っ、まだ話が・・・！」

一「緋水様からは世界の銃を頂いたぞ」

作「撃ち放題だな・・・」

一「撃つなよ？」

作「それはフリか？」

作「清浦刹那様からは俺宛てにＧＮソードビットを頂いたぞ」

一「宝の持ち腐れだな」

作「な、何だと！」

一「能無しヘタレのお前にそんな物が扱えるわけないだろう」

作「やってみなければわからんだろうが！　いけ、ＧＮソードビット！！」

シーン

一「・・・やっぱりな」

作「ちくしょお！！」

一「二次元最高様からはナル・イャガの衣装を頂いたぞ」

作「出た、聖なるかな最強の露出お姉さんの衣装。・・・つーかほぼ全裸だろこれ」

一「間違いなく即逮捕だな」

作「でも、刹那あたりに着せたら・・・」

一「少しでも想像してみろ。永遠に想像出来なくしてやる」

作「最後はＡＴＤ－Ｘ様からだ。えっと・・・俺をＶＦ－１に強制搭乗させて、９Ｍ３１ストレラ（ＮＡＴＯ名ガスキン）地対空ミサイル二千八本から逃げ切ってもらう・・・って、はい！？」

一「今回も名前繋がりの物を送って頂いたな。生き残ったらそのＶＦ－１はお前の物になるみたいだぞ。頑張れ」

作「頑張れるかあぁぁぁぁぁぁ！！　あ、ちょ、ミサイルらめぇぇぇぇぇぇぇ！！」

一「らめ言うな気色悪い！！」

第五話　どれだけ時が過ぎ去ろうと人っていうのは簡単に変わらない（前書き）

改めて見ると原作との違いが出るわ出るわ。・・・・そういう風に書いてたんだけどね！！

第五話　どれだけ時が過ぎ去ろうと人っていうのは簡単に変わらない

一「なのは、この娘を頼む。とりあえず、あの機械兵器を全て片付けてないと」

な「う、うん・・・」

呆けた感じのなのはに少女を預け、列車に纏わりついている他の機械兵器に向かって斬りかかる。

一「月輪の太刀！」

ザシュ！

すれ違いざまに次々に斬って捨てる。脅威と感じたのか、機械兵器が複数俺を取り囲む。

一「発現！」

刀を消し、手甲を装備した俺は、オーラを込めた拳を地に叩きつけた。

一「爆砕ぃ！　跳天昇ぉぉぉぉぉ！！！」

ブワッ！

放射状に広がる巨大な気柱が機械兵器を吹き飛ばす。吹き飛ばされた機械兵器は煙を噴かせ機能を停止させた。

な「みんな！　その人は味方だから気にせずガジェットを！」

俺の乱入で固まっていた少女達がその声で動き出す。ナックル型のデバイスを装備した少女が殴りかかれば、銃型のデバイスを持った少女がそれを援護するように銃弾を放つ。その向こうでは槍型のデバイスで機械兵器を貫いている少年の姿が見える。

一「俺も負けていられないな・・・！」

気合いを入れ直し、俺は手近の機械兵器に向かって拳を突き出した・・・

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

なのはＳＩＤＥ

な「やっぱり・・・本物の一成君だ・・・・」

声が震える。彼が目の前で戦っているのに、何だか現実感が無い。
もしかして・・・これは夢？

な「・・・・痛い」

頬をつねると痛い。という事は・・・夢じゃない。本当に・・・本当に帰って来たんだ！

キャ「あの人は一体・・・なのはさんのお知り合いですか？」

な「そうだよ。とても・・・とても大切な人」

≪す、凄い魔力・・・それに、あのデバイスは・・・≫

な「デバイスじゃないよ。あれは、一成君の力なの」

≪力？≫

な「後で本人から聞けばいいよ。それより、私も一成君の援護を・・・」

フェ「なのは！　キャロ！」

キャ「あ、フェイトさん」

な「フェイトちゃん、もう大丈夫なの？」

フェ「うん、あっちに出現したガジェットは全て片付けたよ」

な「そっか。ねえフェイトちゃん・・・落ち着いてあそこで戦っている人の顔を見てみて」

フェ「？」

フェイトちゃんが一成君に視線を移す。その途端、フェイトちゃんは大きく目を見開き声をあげた。

フェ「え・・・ッ！？　あ、あれってまさか・・・一成！？　一成じゃない！？」

な「そうだよフェイトちゃん・・・・一成君が帰って来たんだよ！！」

フェ「一成ーーーーーッ！！！」

フェイトちゃんが全速力で一成君に向かって飛んで行った。それに気付いた一成君が、ガジェットを相手にしながらフェイトちゃんの名前を呼んだ。

一「やあフェイト。元気そうで安心したよ」

フェ「一成！」

ギュ！

な「ッ！？」

いきなりフェイトちゃんが一成君に抱きついた。胸に顔を埋めるフェイトちゃんの頭を、一成君は困ったような表情を浮かべながら撫でている。

な「ディバイィィィィン！　バスタァァァァァーーーー！」

そんな二人に・・・ではなく、周りにいるガジェットに向かってディバインバスターを放つ。

な「二人とも！　まだ戦闘は終わってないんだから気を抜かないで

！！」

フェ「は、はいぃっ！」

キャ「あ、あの、なのはさん・・・怒ってます？」

な「なんで私が怒らないといけないのかなキャロ？」

キャ「ひうっ！？　な、なんでもありません」

一「助かったよなのは。相変わらずキミの砲撃は頼りになるな」

な「え・・・あ、ありがとう／／」

もう、こういう所も変わってないんだから。

一「フェイト、援護を頼む」

フェ「任せて！」

抜群のコンビネーションで瞬く間にガジェットを沈めていく二人。
それは、十年も離れていたとは思えないほどの完璧な動きだった。

キャ「凄い・・・あんな綺麗に合わせられるなんて・・・」

な「・・・私だってあれくらい」

キャ「（や、やっぱり怒ってる・・・？）」

な「だから怒ってないって」

キャ「私何も言ってませんよ！？」

な「とにかく、あの二人だけに任せておくわけにもいかない。私達も行くよキャロ！」

キャ「は、はい！　お願いフリード！」

フリードを呼び戻したキャロと共に、残りのガジェットを撃破していく。どうやらスバル達の方へ向かったガジェットは全て機能停止したようだ。あとは数えるくらいしかいない。

≪リニアの正面に再び魔力反応！　また転移です！≫

な「ッ！　大きい！」

大型のガジェットがリニアの正面に立ち塞がる。あれを撃破しなければリニアが進む事が出来ない。

ス「なのはさん！　こっちは全て倒しました！」

エ「お、大きい・・・」

ティア「全員で一斉攻撃を仕掛ければ・・・！」

やって来た三人と共に一斉攻撃の準備に入る。けれどその時、私達を制して一成君が前に出た。

一「俺に任せてくれ」

な「一成君？　他のガジェットは？」

フェ「私と一成で全部片付けたよ。あとはあの一体だけ」

一「そういう事だ。危ないから下がってくれ」

な「わかった。みんな、言う通りに下がって・・・」

ス・ティア・エ「「「・・・・・・」」」

フェ「どうしたの三人とも？」

ス「あ、あの人、もしかして・・・」

ティア「あの時の・・・」

エ「お兄さん・・・」

な「え？」

どういう事？　三人とも一成君の事を知っている？　けど、いつ、何処で知り合ったの？

一「発現」

一成君が何か呟く。すると、彼の手に装備されたガントレットのようなものが消え、右手にライフルみたいな長い銃が現れた。

一「オーラフォトン・・・ブラスタァァァァァァーーーーーッ！！！！」

カッ・・・！！

その瞬間、銃口から目を開いていられないほどの凄まじい光が放たれ、ガジェットはあっけなくその光の中に消えていった。

≪が、ガジェットの反応・・・消失≫

な「消失！？　機能停止じゃなく消失って言った！？」

≪は、はい。文字通り跡形も無く消失しました・・・≫

ス「あ、あはは・・・腰抜けちゃった」

ティア「出鱈目にもほどがあるわ・・・」

エ「・・・間違いない。僕は知っている・・・・あの光を知っている！」

キャ「エリオ君？」

エ「お兄さん！」

突然、エリオが一成君に駆け寄った。

エ「お兄さん！　僕です！　エリオ・モンディアルです！　あの時、違法研究所から僕を助け出してくれたのはあなたですよね！？」

一「ああ・・・ちゃんと憶えてるよ。大きくなったねエリオ君」

エ「はい！！」

まるで尊敬するヒーローに出会ったかのようなキラキラした目で一成君を見つめるエリオ。というか、今さらっととんでもない事を聞いたような・・・

フェ「え!?　エリオを助けたのって一成だったの!?」

エ「そうです！　違法研究所でずっと辛い目に遭っていたあの時、突然現れたお兄さんが研究員や魔導師達をあっという間にやっつけて僕や他の子ども達を助け出してくれたんです！　そして、最後に今の光で研究所を跡形も無く破壊してくれたんです！」

フェ「そうだったんだ・・・。あれ？　という事は、その時にはもう一成はこの世界に帰って来てたって事だよね。どうして私達の所に戻って来てくれなかったの？」

一「それは・・・」

な「待ってフェイトちゃん。まずは任務を終わらせないと。お話はその後で・・・ね？」

フェ「あ、そうだね」

一旦話を打ち切り、私達はレリック護送の任務に戻った。それから数十分後、無事に任務を終えた私達は、一成君を連れて機動六課の隊舎へ戻った。

一「フェイト、車の免許取ってたんだな」

フェ「うん」

一「今度ヒマな時にでも乗せてくれないか？」

フェ「も、もちろん！」

フェイトちゃん・・・抜け駆けは許さないよ。

なのはＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＩＮ　ＳＩＤＥ

なのはとフェイトに連れられ、隊舎の中を歩く。しばらく進むと、目の前に大きな扉が見えて来た。

な「この部屋に機動六課の部隊長がいるの」

一「誰なんだ？」

フェ「それは出会ってみてのお楽しみだよ。・・・きっと向こうも驚くと思うけど」

コンコン

？「はい？」

な「私だよ」

？「あ、なのはちゃん？　ええよ、入って」

な「失礼します」

フェ「一成はここで待っててね」

二人が室内に入る。聞き耳を立てなくても中の会話が聞こえて来た。

フェ「レリックの護送任務、完了しました隊長」

？「ご苦労様分隊長。モニターでしっかり見守らせてもらったで。・・・二人が隠し事しとる事もな」

な「え！？」

？「おるんやろ扉の向こうに？・・・一成君が！」

フェ「き、気付いてたの！？」

？「あたりまえや！　フェイトちゃんが抱きついとったのも、なのはちゃんが不機嫌そうにディバインバスター撃っとったのも全部見とったで！」

な「あ、あれは違うよ！　私はただ、二人に迫ってたガジェットを止めようと・・・！」

？「ちなみに、これが撃った時のなのはちゃんの顔や」

フェ「ッ！　め、目の光が・・・」

な「なんで静止画で撮ってるの！？」

？「これ、一成君に見せたらどんな反応するかな？」

な「それだけは止めて！」

一「（何時になったら入れるんだ？）」

それから十分ほど待たされ、ようやく入っていいと許可が出たので、扉を開けた。

一「・・・失礼します」

中に入ると、何故か汗を流しているなのはと苦笑いを浮かべているフェイト、そして・・・予想していた通りの人物が俺を出迎えた。

は「お帰り一成君。そして・・・ようこそ機動六課へ」

一「ああ・・・ただいまはやて」

十年越しに再会したはやては、とても美しい女性へと成長していた。
けれど、なのはやフェイトと同様に、その笑顔は十年前とまったく
変わっていなかった。

は「・・・ああ、もう我慢出来ん！」

ギュ！

な・フェ「「あっ！」」

いきなりはやてが抱きついて来た。突然の事で戸惑ったが、はやて
の肩が震えている事に気付く。

一「はやて・・・？」

は「待っとった・・・私、一成君が帰って来てくれるのずっと待
っとった・・・」

一「すまない、ずいぶん遅くなってしまったな」

は「許さへん・・・許さへんから・・・・十年分ギュってしたる」

一「・・・・」

俺は黙ってはやてに身を任せた。すると、彼女の腕にさらに力が込められ、密着度が増す。

ムギュ♪

一「はやて、ちょっとくっつき過ぎな気がするんだが」

は「・・・ドキドキした？」

一「は？」

は「なんやのその反応。せっかくさりげなく胸押し付けたりしたのに、相変わらず鈍いんやね一成君」

フェ「んなっ！？　何やってるのはやて！？」

な「セクハラだよセクハラ！」

は「セクハラちゃうよ。スキンシップや」

フェ「だ、だったら私も！」

ムギュ♪

な「ずるいよ二人とも！　なら、私だって！」

ムギュ♪

三人に抱きつかれる。全員が幸せそうな表情を浮かべていた。

一「・・・・暑い」

それから五分以上その状況が続き、満足したのかようやく三人が俺から離れた。

は「っと、ちゃんとお礼言わんとな。ありがとう一成君。機動六課を代表してお礼を言わせてもらうな」

一「俺は当然の事をしただけだよ。だからお礼なんて言わないでくれ」

は「あはは、一成君ならそう言うと思ったわ。でも、隊長としてお礼言うのも当然の事やから」

一「なら、お互い様という事で」

は「そうやね。ちなみに、なのはちゃんはスターズ分隊の隊長、フェイトちゃんはライトニング分隊の隊長なんよ」

一「へえ、凄いじゃないか二人とも」

な「そ、そうかな？」

フェ「そんな風に言われるとなんだか照れ臭いな」

は「それはそうと一成君、聞きたい事があるんやけど」

一「ん？　何だ？」

は「なんであの場におったん？　しかも、いきなり空から現れるやなんて・・・」

一「そうだな・・・フェイトの疑問と合わせてちゃんと答えないとな。とりあえず、話が出来る場所を探して・・・」

な「あ、じゃあ食堂に行こうよ。きっとエリオ達もいると思うよ」

一「そうだな。じゃあ案内頼んでいいかな？」

フェ「いいよ。じゃあついて来てね」

こうして、俺は三人と共に食堂へ向かう事になった。しかし・・・どう説明すればいいものやら・・・・

一「（なるようにしかならんか・・・）」

そんな事を考えている内に食堂に着いた。至る所から美味しそうな匂いが漂って来る。

ギュルルル！

一「あ・・・・」

腹が大きく鳴る。そういえば、休む間もなく転移していたので何も口にしていなかった。一旦自覚すると猛烈に食欲が湧いて来た。

な「凄い音・・・食べてないの一成君？」

一「ちょっと忙しくてな、そんなヒマもなかった」

フェ「じゃあ、ついでに何か食べたら？」

一「そうだな。そうさせてもらうよ」

は「その前に席を確保せんと。ええっと・・・どこか空いてへんかな・・・・」

？「みなさ～ん！　こっち空いてますよ～～～！」

すると、向こうの方から大きな声が聞こえた。とりあえず向かってみると、そこにはさっきまで一緒に戦っていた四人の少年少女がいた。

は「あ～、こんな場所で畏まらんでええよ」

立ち上がって敬礼する四人をはやてがやんわりと制した。

な「今日はみんなお疲れ様。初めての実戦だったけどよく頑張ってたね」

少女「ありがとうございます！」

は「元気やねスバル。その調子で報告書の方もよろしくな」

少女「う・・・頑張ります」

エ「あ、お兄さんもいらっしゃったんですね！」

エリオ君が俺に気付く。そのままフェイトに押され、俺は四人の前に立った。

な「みんな気になってたでしょ？　今から自己紹介してもらうから聞いててね」

一「初めまして・・・じゃない子もいるが。俺の名前は秋月　一成。なのは達とは幼馴染だ」

少女「秋月　一成・・・？」

な「どうしたのスバル？」

少女「あ、あの、違ってたらすみません。もしかして・・・空港火災の時に私を助けてくれた人ですか！？」

一「そういうキミは・・・まさか、スバルちゃんか？」

少女「やっぱり！　そうです！　スバル・ナカジマです！　あの時は本当にありがとうございました！！」

一「ギンガちゃんは元気か？」

ス「はい！　ギン姉も管理局で働いてます！」

一「そうなのか？　じゃあ、挨拶しておかないとな」

な「ちょ、ちょっと一成君！　エリオだけじゃなくてスバルとも知り合いだったの！？」

ス「なのはさんに助けてもらう前に、女神像に押し潰されそうになった所をこの人に守ってもらったんです」

唖然とする三人を尻目に、今度はエリオ君が自己紹介を始めた。

エ「エリオ・モンディアルです。よろしくお願いしますお兄さん！」

一「こちらこそよろしく。それにしても・・・エリオ君も魔導師に

なってたとはな」

エ「お兄さんみたいに人を助けられるようになりたかったから」

一「そうか。頑張ってるんだな」

エ「はい！」

な「それじゃあ、次はティアナの番だよ」

なのはに指名され、オレンジ色の髪を左右に纏めた少女が俺の前に立つ。

少女「・・・ティーダ・ランスターという名に心当たりがありませんか？」

ス「い、いきなりどうしたのティア？」

少女「ごめんスバル。ちょっと黙ってて」

一「ああ、知ってるぞ。それがどうかしたのか？」

少女「私の兄です。数年前、違法魔導師との戦闘で大怪我を負いましたが、その時、銀色の髪の男性に助けられたそうです。私も憶えています。病室にやって来たその人は、当時兄の上司だった人物が兄に対して暴言を吐いた時、私に代わって怒ってくれました。そして、兄がどれだけ必死に戦っていたかを私に教えてくれました」

フェ「ま、まさか・・・」

少女「兄の恩人の顔を忘れるはずがありません。秋月さん・・・あなたの事です」

は「どうなっとるん!?　ティアナまで一成君と会った事があるんか!?」

フェ「二度ある事は三度あるって言うけど・・・ここまで来ると何か作為的な物を感じるね。それか、何かの呪いとか・・・」

な「呪いって・・・（苦笑）」

一「あれからティーダはどうなったんだ?」

少女「すぐに復帰しました。例の隊長が一身上の都合とかで辞めたので、また航空隊で働いてます」

一「それはよかった」

そういえば、駄神が報いを受けさせてやるとか何とか言っていたな・・・一体何しでかしたんだ?

少女「ずいぶん遅くなってしまいましたが、兄に代わってお礼を言わせてもらいます。本当にありがとうございました」

一「ああ、どういたしまして」

少女「それから、自己紹介は不要と思いますが、改めて名乗らせてもらいます。私はティアナ・ランスター。どうぞよろしくお願いします」

一「よろしくティアナちゃん」

ティア「あ、あの、“ちゃん”付けは止めてもらっていいですか。もうそんな年でもありませんし」

一「はは、そうだな、じゃあティアナって呼ばせてもらうよ」

ティア「は、はい・・・／／」

頭を撫でながら名前を呼ぶと、ティアナは頬を赤く染めて俯いてしまった。顔見知りとはいえ、少し図々しかったか？

ティア「（あの時と一緒。大きくて温かな手・・・）」

ス「あ、私もスバルでいいですよ」

そして最後に、桃色の髪の少女が自己紹介を始める。

少女「最後は私ですね」

フェ「キャロも？　キャロもなの？」

少女「い、いえ、私は初対面です」

フェ「そ、そっか、そうだよね。これでキャロまで知り合いだったら本当に呪いを疑ってたよ」

少女「キャロ・ル・ルシエです。この子は使役竜のフリードです」

竜「キュクルー」

可愛らしい声を出しながら、小さな竜が顔を覗かせる。

一「よろしくキャロちゃん。フリード」

キャ「先程は助けて頂いてありがとうございました。フリードの力を解放出来て少し油断してました」

一「ん？　あの大きな竜がフリードだったのか？」

キャ「はい。『竜魂召喚』の魔法であの姿になるんです」

一「へえ、凄いんだなフリード」

フ「キュクルー！」

フリードが手を伝って俺の肩に乗る。

一「ん？　どうしたんだ？」

キャ「秋月さんの事が気に入ったみたいです」

フ「キュクルー！」

一「はは、くすぐったいよフリード」

キャ「（初対面であんなに懐くなんて。・・・きっと優しい人なんだ）」

フリードをキャロに返し、ようやく全員との自己紹介が終わったのでそろそろ本題に入る事にした。

一「さて、それじゃあ、いったい俺が今まで何をしていたか教えるよ。スバル達にも関係ある話だから聞いてくれ」

全員「・・・・（コクン）」

一「十年前の闇の書の暴走体との戦いで、俺は力を使い果たし消滅した・・・けど、実は完全に消滅する直前、ある人物に助けてもらったんだ」

な「ある人物？」

一「その人物に、もう一度なのは達の所へ戻るには時間が必要だと言われてな、その時間を利用して別の世界に跳ばされたりしたが・・・まあ、そこら辺は割愛させてもらう。それから色々あってよう

やく戻れるかと思ったら、今度は人助けをしてくれと頼まれたんだ。
それで最初に跳ばされたのがスバル達のいた空港だ。それからエリオ君が囚われていた違法研究所、違法魔導師が潜伏していた街と次々に跳ばされた」

フェ「という事は・・・一成が三人と出会ったのは偶然じゃなかったって事？」

一「そうだ。俺はここにいる三人とギンガちゃん、そしてティーダを助ける為にそれぞれの場所に跳んだんだ。エリオ君を助けた後に違法研究所の実態を見て腹が立ったから少し寄り道して潰して回ったりしたけどな」

は「そういえば、昔ちょっとした騒ぎになったな。隠れていた違法研究所や、指名手配されとった違法魔導師が突然壊滅、逮捕されたけど、それを行ったのが、複数のデバイスを所持した銀髪の男だって・・・」

一「ん？　そんな噂が立ってたのか？　なるべく目立たないように動いたつもりだったんだが」

な「目立たない方がおかしいよ。だって、局員だったら間違いなく勲章が授与されるくらいの功績だったんだもん」

一「話を戻そう・・・全てが終わってようやくなのは達の所へ戻してもらう事になったんだが・・・そう言って俺が放り出されたのはあの現場の遥か上空だった」

エ「空！？　いきなり空に放り出されたんですか！？」

一「サプライズだか何だか知らないが、慌ててハイロゥを展開して落下を防いだ。それから、キャロちゃんが襲われそうになっているのを見て急いで助けに入ったんだ。それからの事はみんなも知っての通りだ」

全員「・・・・・」

一「どうした？」

ティア「内容が滅茶苦茶過ぎて頭が追いつかない・・・」

ス「わ、私も・・・」

エ「とりあえずお兄さんは凄いって事ですよね？」

キャ「えっと、えっと・・・」

頭を捻らせる四人とは対照的に、なのは達は納得の表情を見せていた。

な「そっか、だから顔見知りだったんだ」

フェ「うん、納得だね」

は「なるほどな～」

ス「なのはさん達は驚かないんですか？」

な「そりゃあ少しは驚いたけど、それほどって感じじゃないな。だって、一成君が滅茶苦茶なのは今に始まった事じゃないから」

一「人を非常識の塊みたいな言い方しないでくれ・・・」

フェ「だって、実際滅茶苦茶だもん」

一「・・・・・」

俺、そんな風に思われてたのか。

は「一成君、話も終わった事やし、そろそろご飯でも食べる？」

一「そうだな。そうしよう」

席を確保し、俺達は料理を取りに向かう事にした・・・

第五話　どれだけ時が過ぎ去ろうと人っていうのは簡単に変わらない（後書き）

作「はあ、色々詰め込み過ぎて疲れたぜ」

一「今回は結構長めだったな」

作「でも、おかげで全員と絡ませる事が出来たしな。残りのキャラも次回以降にどんどん出す予定だし、まだまだ感動の再会は続くぞ」

一「感動だけで終わればいいんだが・・・」

作「それじゃあ贈り物報告会始めるぞ。最初はグラムサイト2様からだ。六課の隊長とフォワードメンバーにそれぞれあった花束、エリオに『一成が教える槍での戦い方』のＤＶＤを。一成には刹那達が海水浴に行った時の水着写真とリポビ○ンＤを2ダース頂いたぞ。なお、花束は全部一成の自腹な」

一「え？　いつの間に買ったんだ俺？」

作「何言ってんだ。さっき買いに行ってたじゃないか」

一「そう・・・だったか？」

一「清浦刹那様からは、お前に向かってフレイヤを三発撃ってもらったぞ」

作「はあっ！？　コードギアスの核兵器やないか！　しかも三発て・・・！」

一「よっぽどお前に消えて欲しいみたいだな」

作「俺なんかした！？」

作「な、何とか防いだぞ。次は緋水様だ。ケーキと酢豚を頂いたぞ」

一「酢豚に入ったパイナップルは邪道と言われているが、俺は好きだ」

作「俺も。むしろ真っ先に食う！」

一「ほお、初めてお前と気が合ったな」

一「マサ様からは高級うな重を全員分頂いたぞ。毎度の如くユーフィーが届けてくれた」

ユ「お待たせしました～～」

一「やあ、ご苦労様ユーフィー」

作「あ、向こうで雲母と光明が二人でお茶飲んでるから行って来なよ」

ユ「は～い」

一「二人がいるのか！？　なら俺も・・・！」

作「待て。女の子同士の会話に男が入っちゃいかんぞ」

一「ぐっ、正論だ・・・」

作「桜の木様からはお前宛てに精力剤、俺宛てにフルアーマーユニコーンガンダムを頂いたぞ」

一「ありがたいな。ちょうど疲れてたんだ」

作「ユニコーンか・・・・以前他の方に頂いたロリコーンガンダムと戦わせてみるか」

一「・・・相手にならんだろ」

一「最後は幻想殺し様からだ。ヒロイン達に一般男性程度なら一発で悩殺出来る衣装を複数と、俺宛てに・・・・女装用の服・・・だと・・・・」

作「よっし！　早速着てみろ！」

一「だが断る！」

作「おいおい、せっかく頂いた服を粗末にする気か？」

一「ぐっ・・・！」

着替え中・・・

一「・・・・着替えたぞ」

作「・・・・・」

一「な、何だ？」

作「・・・・美しい／／」

一「崩山槍拳ーーーーーーッ！！！」

ドバキィッ！！

作「ぎゃばら！？」

第六話　百見は一戦にしかず（前書き）

変なサブタイトルですが、別に間違いじゃありません。・・・・って、変じゃないサブタイトルって今まであったか？

第六話　百見は一戦にしかず

一「ごちそうさま」

食事を済ませ、ようやく一息ついたところで、新たな人物達がやって来た。

シ「主はやて、こちらにいらしたので・・・お前は!?」

一「お久しぶりですシグナムさん」

現れたのは、はやての守護騎士の四人と、人形のようにとても小さな少女だった。

シャ「一成君!?」

ヴィ「お、お前！　いつの間に帰って来てたんだよ!?」

一「ついさっきな。任務中のなのは達に遭遇してそのままここについて来たんだ」

ザ「驚いたな・・・だが、よくぞ戻って来たな。待っていたぞ一成」

一「ありがとうザフィーラ」

？「あ、あの・・・この方は？」

少女が俺を見て首を捻る。

は「この人は秋月　一成君。十年前、私達を助けてくれた恩人や。リィンにも映像見せた事あるやろ？」

少女「あ、思い出したのです！　そうですか、この人があの・・・」

一「初めまして。秋月　一成だ。キミは？」

少女「こちらこそ初めまして。リィンフォース？です。リィンと呼んでくださいね」

は「私の新しいユニゾン・デバイスや」

一「？？　待ってくれ、それじゃあリィンフォースは・・・」

十年前の“彼女”の事を思い出す。最後に雲母に頼んでおいたはずなのだが、まさか・・・

は「アインの事か？　それなら心配せんでええよ。だって・・・」

？「私は今もこうして存在しているからな」

一「ッ！　リィンフォース！」

ザフィーラの背後から、銀髪の女性・・・リィンフォースが姿を見せた。

は「あれからすぐに雲母さんにプログラムの修復してもらったんよ。その代わり、ユニゾン・デバイスとしての機能を失ってしもうたから、新しくこの子を作ったんや。アインには今、私の秘書として仕事を手伝ってもらっとるんや」

一「そのアインっていうのは？」

は「同じリィンフォースって名前じゃ紛らわしいやろ？　初代やからアイン・・・わかりやすくてええやろ？」

一「そうか・・・。何にせよ、無事だったんだな。リィン・・・じゃなくてアイン」

アイ「全てはお前と雲母のおかげだ。この感謝の思い・・・言葉では表現出来ない」

一「はは、とりあえず、改めてよろしくなアイン、リィン」

アイ「ああ」

リ「はい！」

ス「な、なんか、なのはさん達もそうだったけど。十年ぶりの再会だっていうのにずいぶんアッサリしてますね」

な「一成君が帰って来てくれた・・・その事実だけで充分なの」

は「そうそう。余計な言葉は必要ないんよ。ただ・・・こうやって抱きつくだけでええねん」

ギュ！

フェ「ああ！　また！！」

シャ「は、はやてちゃんずるいです！・・・じゃなくて、こ、こんな人目の多い所でそんな事しちゃ駄目ですよ！」

シ「シャマルの言う通りです！　隊長ともあろう方が、部下の前でその様な姿をさらしては示しがつきません！」

は「ええやんか別に」

ヴィ「お、おい一成。どうしてもって言うんなら抱きつかせてやってもいいぜ」

な「ヴィータちゃんまで！」

ス「き、聞いたティア！？　あのヴィータ副隊長が頬を染めながらあんな事を！」

ティア「ええスバル・・・これは由々しき事態よ」

アイ「・・・・（ソワソワ）」

ザ「どうしたアイン？　妙に忙しないな」

アイ「な、何でもない」

一「さて、それじゃあ俺はそろそろ・・・」

シ「何処へ行くのだ？」

一「もういい時間だし、今日の寝床を確保しないと」

ザ「宛てはあるのか？」

一「もちろん野宿・・・」

な・フェ・は「「却下」」

一「え？」

な「そんなの私達が許すと思う？　それに、またフラっと何処かへ行っちゃうかもしれないし、今日はここの仮眠室で休んでいいよ」

一「いや、それは・・・」

な「い・い・ね？」

一「・・・・了解」

フェ「なら、私が案内してあげる」

フェイトに案内され、仮眠室へ入った俺は、すぐに横になった。

一「・・・本当に帰って来たんだな」

さっきまで会話していた仲間達の顔を思い出し、妙な興奮を抱いたまま、俺は眠りについた。

その翌日、思いの外早く目が覚めたので、朝の空気を吸う為に隊舎の外に出た。

一「今日もいい天気だ・・・ん?」

ス「あ、お、おはようございます一成さん!」

一「やあ、おはようスバル。こんな朝早くからどうしたんだ?」

ス「自主練です。少しでも力をつけたいので」

一「そうか。スバルは努力家なんだな」

ス「い、いえ! そんな・・・」

一「はは、謙遜しなくてもいいじゃないか。それじゃあ、邪魔しな

いように俺は戻って・・・」

ス「あ、あの！　もしよかったら、私の自主練を見てもらえませんか？」

一「俺が？」

ス「駄目・・・ですか？」

一「いや、俺でよければつき合わせてもらうよ」

ス「あ、ありがとうございます！」

元気よく頭を下げるスバル。礼儀正しい娘だな。

一「キミは確か、格闘技の使い手だったよな？」

ス「はい。『シューティングアーツ』の事ですね」

一「それじゃあ、軽く組手でもしてみるか？　ただ見るよりそっちの方が為になると思うんだが」

ス「お願いします！」

それぞれ構える俺とスバル。

ス「こうして一成さんに組手をしてもらえるなんて・・・夢みたいです」

一「ん？　どういう意味だ？」

ス「だって、私の憧れだったから・・・。あの時、颯爽と現れて私を助けてくれた一成さんは、ずっと私の憧れだったんです。私も、いつかあんな風になりたいって・・・」

実際は、いきなり女神像にぶつかっただけなんだが・・・

一「なら・・・幻滅されないように頑張らないとな。さあ、いつでもかかって来てくれ」

ス「いきます！　うおぉぉぉぉぉぉ！！」

ブオン！　ガッ・・・！

力強い踏み込みからの突き・・・それを避け、続いて迫り来る右足の蹴りを受け止め、その反動で後ろに大きく下がる。

一「速度は中々だな。けど、一つ一つの動きがやや単調かな。コンビネーションを考えて動けばもっとよくなると思うぞ」

ス「わかりました！」

一「それじゃあ、次はそれを心がけて打って来てくれ」

ス「はい！　てやあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

ビシッ！　ブン！　ドガッ！

スバルの動きが目に見えてよくなった。流れるような連撃が俺の腕や肩、足を打ち据える。

一「凄いな・・・たったあれだけの言葉でここまでやれるなんて。今の連撃は見事だったよ」

ス「ありがとうございます！」

一「なら、次は俺が攻めるから、防御の練習をやってみようか」

ス「お願いします！」

それから三十分、ひたすらスバルと組手を続けた所で、ティアナがやって来た。

ティア「スバル。やっぱりここにいたのね」

一「おはようティアナ」

ティア「おはようございます秋月さん」

ス「どうしたのティア？」

ティア「どうしたのじゃないわよ。あと少しで朝練が始まるわよ」

ス「あ、いっけない。一成さんとの組手に集中してた所為ですっかり忘れてた」

一「朝練か・・・もしよかったら見学させてくれないか？」

ス「もちろんです！　ね、ティア？」

ティア「ええ。では秋月さん、私達について来てください」

一「わかった」

二人について訓練場に向かった。すでに来ていたエリオ君とキャロちゃんと共に、スバルとティアナは訓練を始めた。

一「それにしても・・・ずいぶんリアルだな」

廃ビルが立ち並ぶ訓練場で、四人は機械兵器を相手に戦っている。戦闘によってビルが音を立てて崩れる。まるで本当に街中で戦っているようだ。

シ「あれは空間シミュレーターだ」

一「あ、シグナムさん。それにヴィータ。おはようございます」

ヴィ「どうしたんだよこんな所で？」

一「見学させてもらおうと思ってな。二人は参加しないのか？」

シ「私は教えるのが苦手だからな」

ヴィ「昨日任務があっただろ。今日は軽めのメニューだから、なのはに全部任せてあるんだ」

一「ああ、なるほどそういう事か」

すると、爆発音がピタリと止んだ。どうやら訓練が終了したようだ。なのはが疲れ切った表情を浮かべた四人を連れて俺達の方へやって来た。

一「お疲れ様みんな」

エ「あ、お兄さん」

な「あれ？　どうして一成君が？」

一「スバルとティアナに頼んで見学してたんだ」

な「そっか。でもせっかくだから一成君も訓練してみる？」

一「いいのか？　なら、やらせてもらうよ」

シ「この十年でどれほど強くなったか見せてもらうぞ」

ヴィ「勉強になるかもしれないから、お前達もちゃんと見てろよ」

キャ「はい」

こうして、俺も訓練させてもらう事になった。全員の視線が集中する中、訓練場に足を踏み入れる。廃墟を進み、指定された場所で立ち止まる。

≪一成君、準備はいい？≫

目の前にモニター画面が出現し、そこになのはの顔が映る。凄い技術だな・・・

一「俺はどうすればいいんだ？」

≪今からターゲットを複数出すから、それを残らず撃墜してね≫

一「わかった。それで、ターゲットは？」

≪ガジェット・・・リニアを襲ってたあの機械兵器だよ≫

モニターが消え、代わりに俺の周囲に昨日も見た機械兵器が大量に出現した。数は・・・ざっと五十ほどか。

一「って、多過ぎだろ・・・」

俺を標的と定めたのか、ガジェットが一斉に動き出す。とりあえず、やるしかない。

一「発現！」

刀を発現させ、俺は襲い来るガジェットの一団に斬りかかった・・・

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

戦いが始まり、なのは達は一成の動きを見逃さないようにジッと訓練用のモニターを眺めていた。

一「発現！」

刀を持った一成が接近するガジェットを両断する。それを踏み超え、別のガジェットを瞬く間に切り捨てていく一成。

シ「刀か・・・それにしてもなんて速さだ」

ヴィ「おいおい、もう十機仕留めやがったぞ」

な「まだセーブしてる。昨日はもっと速かったもん」

その時、背後から一体のガジェットが一成に襲い掛かる。だが、すぐに反応した一成は、振り向き様に回し蹴りを叩き込んだ。

一「ブレードフラッド！」

蹴り飛ばされたガジェットが地面に落下する。さらに一成は追撃を行った。

一「オーラフォトンバリア！」

自身ではなく、ガジェットに向かってバリアを叩きつけるように展開させる一成。その凄まじい圧力によって、ガジェットはあっけな

く押し潰された。

ティア「ば、バリアをあんな風に使うなんて・・・」

ス「凄い回し蹴り・・・私のとはスピードもキレもまるで違う」

一「飛燕の太刀！」

距離を取っていた五機のガジェットに向かって刀を薙ぐ一成。すると、斬撃が衝撃波となって五機全てを斬り裂いた。

キャ「え？　何で・・・」

エ「斬撃を飛ばしたんだ。近距離用の武器なのに・・・」

一成の周囲を、十機のガジェットが取り囲む。それを見た一成は刀を消し、手甲を発現させた。

一「爆砕・・・跳天昇！！」

気柱に舞い上げられたガジェットが空中で爆発した。

ス「ねえティア、あの技って私にも出来るかな？」

ティア「いや、無理でしょ」

な「これで残りは後半分だね」

一瞬で包囲を抜け出した一成は、すぐさま手甲を消し、今度は身の丈を超えるほどの漆黒の大剣を発現させ、それを振りかぶったかと思った次の瞬間、思い切り投擲した。

一「いけぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！」

投擲された大剣は、高速回転しながら進行方向上のガジェットを巻き込んでいく。

一「これで終わりだ！」

最後に長銃を発現させた一成は、残りのガジェットに照準を合わせ、その引き金を引いた。

一「オーラフォトンブラスター！！」

閃光が辺りを包み込む。やがて、光が治まると、そこに立っていたのは一成ただ一人であった。

一「・・・・っと」

戻って来た大剣を掴み取り、それを地面に突き刺した所で、一成は一言・・・

一「終わったよなのは」

と言ったのだった。

第六話　百見は一戦にしかず（後書き）

作「今回は守護騎士達との再会と、訓練という名のガジェット狩りだ」

一「今まで使って来たほぼ全ての武器が出たな。けど、何であれだけなんだ？」

作「本当は槍とか弓とか色々出したいんだけど、これ以上増やすとそれぞれの出番が減るからな。気に入ったヤツしか出してないのだ」

一「なんだ、ちゃんと考えてるんじゃないか」

作「当たり前だろ。さて、次回はいよいよ地球へ向けて出発するぞ。楽しみにしてろよ」

作「それじゃあ、今回の贈り物報告会を始めるぞ」

一「まずは東雲葉月様からだ。お前宛てにどんな魔法でも吸収する（例外あり）木で出来た腕輪。俺宛てに禁書目録にも載っていない魔法が書かれた書物セットと、東雲葉月様の執筆中の小説に出て来る武器と能力をセットで頂いたぞ」

作「メッセージで詳細を送って頂いたが・・・どれもこれもチートという言葉を軽く凌駕してる物ばかりだったな。その内本編で出すかも」

作「緋水様からは、ブルーアイズ三体を俺にぶつけて・・・またかよ！？」

一「落ちつけ、その腕輪があれば何とかなるだろ」

作「そうか！　よっしゃ来いやブルーアイズ！」

一「あ、でも、魔法じゃなくて攻撃か・・・」

作「おい！　ちょ、待って・・・止めぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！」

一「マサ様からは、お前宛てにナル・イャガの衣装姿のカティマ、ナルカナ、希美、沙月の写真を頂いたが・・・これは封印する」

作「何でだよ！？」

一「お前のようなヤツにこんな写真を渡すわけにはいかん」

作「しょぼーん・・・」

作「グラムサイト2様からは、並行世界でも連絡がとれる携帯電話と、コードギアスR2でルルーシュが着ていた皇帝の服。それとアスクレピオスの杖を頂いたぞ」

一「これはまた珍しい物を頂いたな」

作「早速電話してみよう・・・もしもし？　オレオレ。ちょっと事故ちゃってさぁ・・・」

一「なに目の前で犯罪行為やってるんだ！！」

一「フリーダム様からは、Ｓｉｎサイバーエンド・ドラゴン。Ｓｉｎレインボー・ドラゴン。Ｓｉｎスターダスト・ドラゴンをお前にぶつけて頂いたぞ」

作「だから！　そのぶつけるって考えがわからねえんだよ！！」

一「愛されてる証拠だろ。黙って受け入れろ」

作「こんな愛情表現いらんわーーーーーッ！！！」

作「はあ・・・はあ・・・これで最後だ。清浦刹那様から、ヴァリスとＭ．Ｖ．Ｓ。俺宛てに紅蓮弐式を頂いたぞ」

一「ランスロットの主武装だな。どっちもかなりの威力を持ってるからな。扱いには気をつけないと」

作「輻射波動は男の浪漫じゃい！　くたばれブリキ野郎！」

一「誰だよお前・・・」

第七話　挨拶回りこそ基本中の基本である（前書き）

お待たせしました。さんざん引っ張って来ましたが、とうとう”彼女達”の元へ向かいます。

第七話　挨拶回りこそ基本中の基本である

朝練が終わり、俺達は食堂で朝食をとる事にしたのだが、シグナムさん達に質問攻めにされ、箸を進める事が出来なかった。

ヴィ「おい一成、最後のあのアホみたいなビームはなんだよ！」

シ「斬撃を飛ばしていたな・・・あれは魔法の類ではないのか？」

ス「あのガジェットを吹っ飛ばした技、私にも出来ますか？」

ティア「そもそも、秋月さんのデバイスは何なんですか？」

一「みんな、少し落ち着いてくれ」

な「そうだよ。今は食事中なんだから、ご飯を食べる事に集中しなきゃ」

なのはの一言で、ようやく俺は解放された。

な「ところで一成君、今日はどうするの？」

一「それなんだが。なのは、海鳴市に行くにはどうすればいいんだ？」

な「海鳴市に？　どうして？」

一「会いたいんだ、みんなに。・・・俺の家族に」

守る為とはいえ、一方的に別れを告げてしまった三人と、新しく家族に加わった一人、そして、昔からの仲間だったあの二人に・・・

な「・・・そうだね。“あの人達”もずっと待ってたんだもんね。なら、はやてちゃんに相談して・・・」

は「その必要はないで」

いつの間にか、はやてが俺達の席の前に立っていた。

シ「主はやて、おはようございます」

ヴィ「はやて、どういう意味なんだ？」

は「実はな、聖王教会から派遣任務の依頼が来たんや。とあるロストロギアを回収してくれってな。それで、その派遣先って言うんが・・・」

一「もしかして・・・」

は「９７管理外世界、地球・・・日本の海鳴市や！」

な・ヴィ「「な、何だってーーーっ！？」」

ス「ど、どうしたんですか二人とも？」

な・ヴィ「「いや、何故かこう言わなきゃいけない気がして・・・」」

は「どう、一成君？　これなら一緒に地球へ行けるで？」

一「いいのか？　俺は六課の人間じゃないのに」

は「一人くらいどうって事あらへんよ。それに、一成君を独占しとったら、“あの人達”に怒られてまうよ」

一「・・・ありがとうはやて。ぜひとも一緒に行かせてくれ」

は「ほな、そういう事で。出発は明日やから、みんなも準備しといてな」

ティア「了解しました」

そして翌日、集合時間になったので、隊舎の入口に向かうと、すでに俺以外の全員が集まっていた。

少女「おはようございますです一成さん！」

一人の見知らぬ少女が挨拶して来た。

一「キミは・・・？」

少女「む～、酷いです一成さん！　リィンの事忘れちゃったんですかぁ！？」

一「リィン？　キミが・・・？」

は「あのな一成君、リィンは自分の意思で身長を変える事が出来るんよ。ただ、魔力の消費量が増えるから、いつもはあのサイズなんよ」

一「そうなのか。すまないリィン」

リ「いえ、わかって頂けたのならいいんです」

は「さてと、全員が集まった所で、そろそろ出発するで～」

六課を後にした俺達は、転送ポートと呼ばれる場所にやって来た。別の世界に渡るにはこの場所を利用するらしい。

ス「なのはさん、よかったら地球の事について教えてくれませんか？」

な「いい所だよ。自然はあるし、街も綺麗だし」

ス「でも、魔法はないんですよね？」

な「うん。一般的には知られてないよ。渡しておいた資料にも書いてあったと思うけど」

ティア「でも、そんな所になのはさん達のような魔導師の適正者がいたなんて・・・」

な「う～ん、たまたまだと思うけどな。私もはやてちゃんも」

エ「そういえば、お兄さんも地球で暮らしてたんですよね？」

一「ああ、昔な。アザラシと格闘したり、ライオンと一騎打ちしたり・・・今となってはいい思い出だ」

キャ「な、何でそんな事になっちゃったんですか？」

一「・・・運が悪かったんだ」

あの動物園や水族館・・・今も残ってるんだろうか？

は「手続き終わったで。それじゃあ、地球へ向けて出発や」

こうして、俺は十年ぶりの地球へ向かって出発したのだった・・・

フェ「到着だね」

気付くと、俺は芝生の上に立っていた。周りには森林が広がり、近くには大きな湖がある。

ティア「ここはどこなんですか？」

は「ここはね、現地協力者の私有地なんだよ」

ス「へ～～、素敵な所ですね」

は「連絡しといたからそろそろ来ると思うんやけど・・・」

すると、俺達に向かって一台のリムジンが走って来た。

エ「誰か来たみたいですよ」

シ「あれが現地協力者だ」

全員の視線が集中する中、停止したリムジンの後ろのドアが開き、そこから二人の女性が姿を見せた。

女性Ａ「なのは！　フェイト！　はやて！」

女性Ｂ「久しぶりみんな！」

な「アリサちゃん！　すずかちゃん！」

フェ「久しぶりだね二人とも！」

は「元気そうでよかったわ！」

現れたのは・・・なのは達と同じく、十年という月日によってすっかり女性らしく成長していたアリサとすずかだった。

ア「それではやて、あの馬鹿が帰って来たって言ってたけど」

は「うん、ほら・・・」

はやてが俺を指差し、二人の視線がこちらに移る。その途端、二人の目が大きく見開かれた。

ア「か、一成・・・」

す「ほ、本当に帰って来てくれたんだね・・・」

一「その・・・かなり時間がかかったけど、ただいま二人とも」

ア・す「「一成（君）！！」」

アリサとすずかが俺に向かって走り出す。だが、次の瞬間、二人は腕を振り上げて大きく叫んだ。

ア「いくわよすずか！！　マグネット・パワープラァァァァァァァァスッ！！！」

す「ま、マグネット・パワーマイナァァァァァァァァァァスッ！！！」

一「え・・・」

ア・す「「クロス・・・ボンバァァァァァァァァァァーーーーーッ！！！！」」

ゴシャアァァァァァ！！！

一「ごはっ！？！？！？」

前後から首に強烈なラリアットを受け、俺はその場に崩れ落ちた。

ア「どうよ一成！　この日の為に、参考書を読み耽って、すずかと特訓した技の威力は！」

一「ゴホッ！　ゴホッ！　い、いきなり何をするんだ二人とも！？」

ア「ふん！　この程度ですませてもらえるだけ感謝しないさいよね！」

す「そうだよ！　私が・・・私達がどれだけ悲しんだかわかってるの！？」

一「それは・・・」

ア「バカ！　バ一成！！　ううう・・・うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

涙を流しながら、同時に俺の胸に飛び込んで来るアリサとすずか。
俺は、ひたすら謝りながら二人の背中を撫で続けた。

一「すまない二人とも・・・心配かけたな」

ア「うっさい、そんな言葉で許すと思ってんの？」

す「約束して。もう・・・絶対何処にも行かないって」

一「ああ、約束するよ」

落ち着いた二人と離れ、改めて初対面同士の自己紹介を行う事にした。

な「はい、みんな注目。こちらが今回の任務に協力してくれる現地

協力者の方達です」

ア「アリサ・バニングスよ。なのは達とは小さい頃からの友達なの。・・・ついでにそこの馬鹿ともね」

す「月村　すずかです。みなさん、よろしくお願いします」

ス「スバル・ナカジマです！　よろしくお願いします！」

ティア「ティアナ・ランスターです。お世話になります」

エ「エリオ・モンディアルです！」

キャ「キャロ・ル・ルシエです」

は「ほな、自己紹介も終わった所で早速任務開始や。スターズは市内に、ライトニングはそれ以外の場所に可能な限りサーチャーを設置してもらうで」

一「はやて、俺は？」

は「何言っとんの？　一成君は会わなあかん人達がおるやろ？　こっちの事は気にせず行ってかまへんよ」

ア「なら、ついでに乗って行きなさいよ。私達も一旦家に戻るから」

一「そうだな。それじゃあ乗せてもらうよ」

リムジンに乗り込み、行き先を告げる。

一「まずはすずかの家に頼む」

す「私の家？」

一「ああ、忍さん達に挨拶しておきたいんだ」

す「あ、お姉ちゃんは恭也さんと仕事の関係で今ドイツにいるの」

一「そうなのか？　じゃあ、ノエルさんとファリンさんは？」

す「二人なら今も家にいるよ」

というわけで、まずはすずかの家に向かった。

す「ノエル、ファリン」

ノ「すずかお嬢様？」

ファ「あれ？　なのはちゃん達のお迎えに行ったんじゃ・・・」

す「ねえ二人とも、この人誰だかわかる？」

一「お久しぶりです。ノエルさん、ファリンさん」

ノ・ファ「「？」」

す「一成君だよ」

ファ「え!?　か、一成君!?　うむむ、確かによく見ると昔の面影が・・・」

ノ「お帰りになられたのですね。私とファリンも待っておりました」

一「これからまたよろしくお願いします」

ファ「うん、こちらこそ。それにしても・・・カッコよくなったね一成君」

一「そうですか？」

ノ「ええ・・・その・・・とても凛々しいお顔で／／」

す「の、ノエル？」

ファ「あれ？　何だろう？　胸がドキドキして来た・・・／／」

ア「す、すずか！　一成！　そろそろ行くわよ！」

す「そ、そうだね。それじゃあまた出て来るね」

すずかの家を後にし、再び車に乗り込んだ。

ア「まさか、あの二人まで・・・」

す「ノエルのあんな顔、初めて見た」

一「それじゃあ、次はアリサの家に頼む。鮫島さんにご挨拶しないと」

ア「あんた、細かいわね」

一「お世話になった人達に挨拶するのは当然だろ」

それから、アリサの家で鮫島さんに挨拶した俺は、いよいよ“彼女達”の待つあの家へと向かった。

一「・・・・」

『秋月』という表札のついた家の前で、俺は立ち尽くしていた。

す「どうしたの？」

一「いや・・・いざこう目の前に立つと柄にもなく緊張してしまって」

ア「じれったいわね。こんな所でウダウダやってる場合じゃないでしょうが」

ピンポーン！

一「アリサ！？」

何を思ったのか、アリサがインターホンを鳴らした。

？「はーい！　どちら様です・・・か・・・・・」

玄関が開き、メイド服を纏った青い髪の女性が出て来た。その女性は、俺の顔を見るなり、震えながら口を開いた。

女性「一・・・成・・・様・・・・・・？」

一「ただいま・・・天音」

この日、俺はようやく大切な家族の元へ戻る事が出来たのだった・・・

第七話　挨拶回りこそ基本中の基本である（後書き）

作「はい。やっと帰って来ました。色々な方に「いつになったら出て来るの？」と言われていましたが、とうとう出す事が出来ました」

一「何という中途半端・・・」

作「もったいつけるのが好きなんだよ。まあ、あと一話くらい我慢しろ」

一「俺は別に構わんが、読者の方がなんと言うか・・・」

作「贈り物報告会始めるぞ～」

一「まずはグラムサイト2様からだ。ボンゴレボックスとボンゴレギアを頂いたぞ」

作「リボーンな・・・あそこまで路線が変わった漫画も他にないな」

一「俺は好きだけどな」

作「フリーダム様からは、お前宛てに、ヴォアチュールリュミエール推進システムと、アルミューレ・リュミエール。俺宛てにアークエンジェルとハロ１００００体を頂いたぞ」

一「スターゲイザーとハイペリオンの背部についてるヤツだな」

作「ふはは！　これだけの戦力が揃えば、そうやすやすとやられはせんぞ！」

一「そんな事言ってると、また何かぶつけられるぞ」

一「清浦刹那様からは、天音宛てにビギナ・ロナを頂いたぞ」

作「セブンランスのあの機体か。同じ槍繋がりで天音に頂いたわけだな」

一「それじゃあ、これは後書きに天音が戻って来た時に渡そう」

作「東雲葉月様からは大量に贈り物を頂いたぞ。まず、お前宛てに黄昏の大剣と宵闇の太刀、それと、斬った相手を癒す事の出来る治癒の刃。俺宛てに、物理と魔法の全てを反射する指輪と、従順な黒猫の使い魔（型月のレンモデル）。神奈、天音、刹那、光明にそれぞれ紅、藍、銀、白のドレスと、ルビー、サファイア、プラチナ、パールのネックレスとイヤリング。そして東雲葉月様お手製のダブルシューを全員分頂いたぞ」

一「凄いな・・・こっちも何かお返しした方がいいんじゃないか？」

作「そうだな・・・お前、いつぞやのようにオーラフォトンでアクセサリーでも作れや」

一「そんな物でいいのか？」

作「少なくとも、お前のセンスで選んだ物よりずっと上等なはずだ」

一「引っ掛かる言い方だが・・・了解」

一「最後はマサ様だ。俺宛てにドラゴンボール×7。お前宛てに平成仮面ライダー変身ツール一式。それから、全員分の特上寿司と、カティマの作ったオードブルを頂いたぞ」

作「僕はアギトが大好きなんです！」

一「願い事か・・・何にしようかな」

作「変身！　いや、もっと腹に力を入れて・・・・変ッ身ッ！！！」

一「何やってるんだ・・・」

作「俺・・・参上！」

一「それ、作品が違うぞ」

第八話　家出した子が帰って来たらまずは優しく抱きしめてあげてください（前）

似たような話が続いていますが、大事な所なのでお許しください。

第八話　家出した子が帰って来たらまずは優しく抱きしめてあげてください

天「ほ、本当に・・・一成様なのですか・・・・？」

一「はは、もしかして、忘れてしまったのか？」

天「あ・・ああ・・・・」

天音の目尻に見る見る内に涙が溜まっていく。それが決壊したその瞬間、彼女は両手を広げて俺に抱きついて来た。

天「一成様ぁ！　帰って・・・帰って来てくださったのですね！！！」

一「すまない。ずいぶん時間がかかってしまったけどな」

天「いいえ！　いいえ！　そんな事はどうでもいいんです！　お帰りなさい！　お帰りなさい一成様ぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

一「天音・・・」

す「・・・ねえ、アリサちゃん」

ア「そうね。一成、私達邪魔者みたいだから帰るわね」

一「わかった。連れて来てくれてありがとう」

ア「ちゃんとみんなに謝りなさいよ」

二人を乗せたリムジンが去っていく。それを見送りながら、天音の頭を撫で続ける。

天「ああ・・・これです。この手の温もり・・・あの頃と同じです!!」

一「天音、他のみんなは・・・」

？「何じゃ、玄関先で騒ぐでない天・・音・・・・」

続いて、赤い髪の和服を纏った女性が玄関から出て来た。

天「神奈！　一成様が・・・一成様がお帰りになられました!!」

神「一・・・成・・・・・」

？「我が君が帰って来ただと!?」

？「一兄が帰って来たの!?」

さらに、スーツ姿の銀髪の女性と、ワンピースを着た白髪の少女が顔を覗かせる。この四人こそ、俺がずっと会いたかった家族である。

一「ただいま、神奈、刹那、光明。三人とも元気そうでよかった」

神・刹・光「「「（一成）（我が君）（一兄）！！！」」」

それはあっという間だった。神奈が俺の右腕に抱きつき、刹那が左腕に抱きつく。そして、光明は背中にしがみついて来た。

神「この馬鹿者が！　いつまで妾達を待たせれば気が済むのじゃ！！」

一「すまない。本当はもっと早く帰りたかったんだが」

刹「忘れていないだろうな我が君！　我に対しての仕打ち。今こそ報いを受けさせてやるからな！」

一「憶えてるよ。どんな目に遭おうと全て受け入れるさ」

光「一兄！　あれからね、たくさんの人が私を受け入れてくれたよ！　でも、やっぱり一兄がいないと寂しかったよ！　だから・・・だから！　帰って来てくれて嬉しいよ！！！」

一「はは、それはよかったな光明」

泣きながら俺にしがみつく四人。俺は彼女達が落ち着くまで、黙って待ち続ける事にした。

五分後・・・

天「一成様・・・もう二度と、私達を置いて何処かへ行ったりしないでください」

一「もちろんだ。絶対みんなと離れない事を誓う」

三十分後・・・

神「妾は、この十年間、お主を思わなかった日は一度もなかったぞ」

一「俺も、ずっとみんなの事を思ってたよ」

一時間後・・・

刹「どうだ我が君？　このスーツ、中々似合っているだろう」

一「あ、ああ、よく似合っているよ。それはそうと、そろそろ離れてくれると助かるんだが・・・」

二時間後・・・

光「そうそう！　今猫飼ってるんだよ！　飼い始めた頃は子どもだったんだけど、今じゃすっかりおじいちゃんおばあちゃんになっちゃって、子どもや孫も合わせると十匹もいるんだよ！」

一「そ、そうか・・・なら是非とも見てみたいからとりあえず離れて・・・」

三時間後・・・

神「一成！」

天「一成様」

刹「我が君」

光「一兄♪」

一「・・・・・・」

もう、かれこれ三時間以上抱きつかれたままだ。ご近所様方の視線がビシビシ突き刺さって来るのを感じる。

？「はあ・・・いつまでやってんだよお前等」

いつの間にか、玄関前に一人の少女が立っていた。彼女は家族では

ないが、それと同じくらい大切な少女だ。俺は懐かしい彼女の名を呼んだ。

一「ただいま龍那。・・・ところで、いつからいたんだ？」

龍「お前等が抱き合った時から今までずっとだよ」

ということは、約三時間ずっと立ちっぱなしだったという事か。

一「す、すまない。けど、何で声をかけてくれなかったんだ？」

龍「再会を邪魔するほど野暮じゃねえよ。それより、雲母のヤツが挨拶したいみたいだから代わるぞ」

龍那が目を閉じる。すると、彼女の雰囲気が大きく変わった。目を開いたその時、彼女はもう龍那ではなかった。彼女は・・・

？「お帰りなさい・・・一成さん！」

一「ただいま・・・雲母」

雲母は笑顔を浮かべようとしていたが、その目からは涙が流れている。

雲「あ、あれ？　おかしいな・・・嬉しいのに、涙が止まらないです」

一「雲母・・・」

雲「ふ・・・ふえ～～～～ん！！」

雲母が大きな声で泣き始めた。その途端、突き刺さる視線がさらに強まる。

主婦Ａ「まあ！　雲母ちゃんまで泣かせてるわよあの男！」

主婦Ｂ「秋月さんの所はみんないい人達ばっかりなのに、何であんな女泣かせなんかと付き合いがあるのかしら？」

主婦Ｃ「まさか・・・脅されてるとか？」

主婦Ａ「それが本当なら、あの男・・・生かしておくわけにはいかないわ。通信教育で鍛えたムエタイの技・・・今こそ見せる時ね！」

主婦Ｂ「だったら私も！　ついこの間まで習っていたカポエイラで・・・！」

主婦Ｃ「私も刀を取って来るわ！　豪炎流免許皆伝の腕・・・見せてあげる！」

一「み、みんな！　とりあえず中に入ろう！」

このままこの場にいたら殺される・・・そう思った俺は、抱きつかれたまま家の中に入った。

一「忘れていた・・・この世界にはああいう人達が多くいるんだったな」

家の中は何一つ変わっていなかった。懐かしさを感じながら、リビングへと向かう。

一「改めて・・・ただいまみんな。そして・・・十年前の事も含めて、本当にすまなかった」

天「一成様。いったい、今までどちらに居られたのですか？」

一「なのは達にも話したよ。少し長い話になるけど、聞いてくれ」

俺は、なのは達に話したのと同じ内容をそのまま神奈達にも話した。

刹「そうか・・・あの四人を救う為に・・・」

一「ああ。そして、全てが終わった後、なのは達の所へ飛ばされたんだ」

＜へぇ・・・あの自称神のジイさん、本物だったんだな＞

天「マナは大丈夫なのですか？」

一「その点は心配いらない。駄神に渡されたこの腕輪が、マナを自己生成してくれるんだ。これがあれば、マナが切れる心配はない」

光「うわ～、それって、私達マナが必要な存在にとって凄いアイテムだね」

神「しかし駄神のヤツめ・・・何故妾達の元ではなく、なのは達の所へ送り込んだのじゃ。これでは再会の喜びも半減ではないか！」

天「そうですね・・・言われてみれば」

刹「ふむ・・・ならば、次に出会った時に少々痛い目に遭ってもらうか」

神・天「「賛成　（じゃ）（です）」」

光「ダガミって誰？」

雲「私達をこの世界に送ってくれた人の名前です。・・・本当はそんな名前じゃないんですけど（苦笑）」

一「「（・・・凄いよ駄神さん）」」

≪ん？　何かあったのかの？≫

一「「（今、あなたに死亡フラグが立ちました）」」

≪マジで何事じゃ！？≫

一「（それだけです。では・・・）」

≪ま、待ってくれ！　どうしてそうなったぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！≫

その言葉を最後に、駄神の声は聞こえなくなった。

グキュルルル！

俺の腹が大きく鳴る。毎度の事だが、どうしてこうタイミング悪くなるんだこの腹は？

天「あら、もうこんな時間じゃないですか！　何で気付かなかったんでしょう！」

＜抱きついてた所為だろう＞

天「では、一成様もお帰りになられた事ですし、今日の夕食は盛大に作らせて頂きます！」

光「私も手伝う！」

刹「我も手伝おう」

雲「わ、私もお手伝いさせてください！」

神「では妾も・・・！」

天・刹・光・雲・龍「「「「「却下　（です）（だよ）（だ）」」」」」

神「くう・・・」

一「天音・・・神奈の料理の腕って・・・」

天「残念ですが・・・十年前から何一つ変わっていません」

一「・・・・そうか」

神「一成～！　天音達が虐めるのじゃ！　慰めてくれ～～～」

一「神奈・・・大人しく座っていてくれ」

神「なん・・・じゃと・・・・」

崩れ落ちる神奈。心情的には手伝わせてあげたいが、ここは心を鬼にしなければならない。

天「では、すぐにとりかかりましょう」

神「おのれ・・・憶えておれよ」

それから数十分が経過し、完成した料理が次々とテーブルに運ばれた。和、洋、中、様々な料理が並んでいる。

一「凄いな・・・」

光「えへへ、ちょっと頑張り過ぎちゃった」

刹「さあ我が君、席についてくれ」

全員が席に着き、コップを掲げる。ちなみに、神奈は酒で、俺を含めた彼女以外のみんなはジュースだ。

雲「で、では・・・一成さんが帰って来た事を祝しまして・・・きゃんぱい！」

全員「乾杯！」

＜大事な部分で噛みやがった・・・＞

ジュースを一気に飲み干し、早速料理に手をつける。だが、どれもこれも美味しそうで、正直何から手をつけるべきかわからない。

天「一成様」

一「ん？」

天「はい、ア～～～ン♪」

天音が酢豚の肉を箸で掴み、俺の前に持って来た。

一「天音・・・それは・・・・」

天「私、一成様がお帰りになられたら、絶対やろうって決めてたんです」

一「ぐっ・・・そう言われると・・・・」

天「ですから・・・はい、ア～～～ン♪」

一「（ええい、ままよ！）」

パクッ！

天「どうですか一成様？」

一「・・・美味しいよ」

天「それは何よりです♪　この酢豚、私が作ったんですよ？」

刹「我が君、この唐揚げを食べてみろ。ほら、ア～～～～ンしてくれ」

一「刹那まで・・・」

刹「どうした？　天音はよくて我は駄目なのか？」

一「・・・ア～～～～ン」

パクッ！

刹「我が味付けしたのだ。味に間違いはなかろう？」

一「そうだな・・・うん、美味しいよ」

光「一兄！　この玉子焼きは私が作ったんだよ！　はい、ア～～～～ンして！」

雲「か、一成さん！　このサラダも美味しいですよ！」

＜おい一成、そこにある肉じゃがはオレのお手製だ。お前がどうしてもって言うんならオレが食わせてやってもいいぞ＞

突き出される箸をジッと見つめ、俺は覚悟を決めた。

一「わかった・・・食べさせてくれ」

それから食事が終わるまで、俺は何度もみんなの箸に首を伸ばした。
その最中、神奈が端の方で皿にひたすら『の』を書いているのが見えたが、俺はそっとしておく事にした。

そして、食事終了後・・・

ピンポーン！

刹「こんな時間に誰だ？」

一「俺が出て来るよ」

玄関を開けると、そこにはなのはが立っていた。

一「なのはじゃないか。どうしたんだ？」

な「様子を見に来たんだよ。どうやらちゃんと再会出来たみたいだね」

一「大変だったんだけどな・・・」

な「え？」

一「何でもないよ。それより、任務は終わったのか？」

な「うん、サーチャーも飛ばしたし、今日の仕事は終わったよ」

一「そうか。ご苦労様」

な「ありがとう一成君。それで、今から六課のみんなとアリサちゃん、すずかちゃんと一緒にスーパー銭湯に行くんだけど、もしよかったら一成君もどう？」

一「銭湯か・・・」

神「行こうではないか一成」

な「あ、神奈さん。お久しぶりです」

神「うむ、元気そうで安心したぞ」

一「そうだな、せっかく誘ってくれたんだし、みんなで行こう」

神「では、早速準備をせんとな」

こうして、俺は家族のみんなと一緒にスーパー銭湯へ行く事になった。何事もなく終わればいいのだが・・・・

第八話　家出した子が帰って来たらまずは優しく抱きしめてあげてください（後書き）

作「後書きに神奈達が帰って来ました」

神「久しいな作者」

天「日常編以来ですね」

一「やっぱり全員がそろってないとしっくりこないな」

刹「作者はいらんがな」

作「いきなりそれかよ刹那・・・」

龍「何にせよ、今回からまたこんな感じに戻るんだな」

雲「何だか嬉しいね」

作「では、次回は銭湯だ。またサービスシーンを考えないと・・・」

光「また必要無い事に力入れるんだね」

作「あ、新作の方もよろしくお願いします」

一「何の脈絡もなく宣伝するな！」

作「んじゃあ、全員そろっての贈り物報告会始めるぞ～～」

一「まずは仮面ライダーディケイド様からだ。お前にアルティメットストーム一千兆回お見舞いするとの事だ。・・・・だから前回の後書きであんな事言うなって警告したのに」

作「うばしゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

天「きっと、今回はこのまま戻って来なさそうですね」

刹「では次に移るか」

神「フリーダム様からは、一成宛てに、インパルスのシルエットを三つ。作者にゲルスゲーの下半身を頂いたぞ」

光「ええっと・・・下半身だけでどうするんだろう」

作「そ、それを寄越せ！！」

龍「あ、戻って来たぞ」

作「合体！！」

ガシィィィィィィィィィィン！

作「作者（ゲルスゲーバージョン）！　参上！　これで勝つる！！」

雲「だ、大丈夫なのかな・・・」

作「たわばぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

刹「やはり、作者が元では無理か」

天「清浦刹那様からは、神奈と刹那、それと光明に、・ｈａｃｋに出てくるデータドレイン出来る腕輪を頂きました」

一「よく考えると・・・データドレインって恐ろしい技だよな」

龍「撃つなよ。絶対撃つなよ」

光「それってフリってやつだよね？　この前テレビでやってたよ」

刹「グラムサイト2殿からは、我が君宛てに、我達と行く料理店のお食事券と、どこでもドア、天狗の抜け穴を頂いたぞ」

雲「いいですよね、どこでもドア。これがあったらいつでも好きな所へ旅行できますね」

刹「そして、不法入国で即刻逮捕だな」

光「・・・・それを言ったら駄目ですよお姉様」

光「緋水さんからはね～～、世界のお茶を頂いたよ」

天「ここで世界のお茶を飲めるのは嬉しいですね」

一「そういえば、今まで全員にって贈って頂いたお菓子や料理がたくさんあるんだ。今から持って来るよ」

刹「ふむ、ありがたい事だな」

龍「とか言って、作者が全部食っちまってたりしてな」

龍「東雲葉月って人からは、一成宛てにオリジナルデバイス（マルチタスク、高濃度マナ生成装置、オーラ付加機能、カートリッジシステム搭載、フォームはクロスからロングまで対応、さらには超長距離戦も可能）。作者に永遠神剣第四位の求めと、永遠神剣第二位聖賢。神奈に獄焔神奈っていう長刀。天音に天響氷音っていう槍。刹那に神銀白那っていう剣。光明に白光精明っていう小剣を頂いたぞ」

一「これは・・・俺なんかに扱えるのか？」

天「私達の名前が入った武器ですか。素敵ですね」

刹「あの作者に第二位を渡すのは宝の持ち腐れじゃないのか？」

雲「えっと、マサさんからは、作者さんにＦＦのバハムート零式と戦ってもらって、勝ったら作者さんにあげるという事です。それから、以前からこっちに滞在しているユーフィーちゃんが手料理をふるまってくれるそうです」

龍「おいおい、未だにボッコボコにされてんのに、そんなもん送ったらマジで死ぬぞアイツ」

一「死なないよ。だって作者だもの」

ユ「みなさ～ん！　何かリクエストはありますか～～？」

光「あ、ユーフィーちゃん。じゃあ、私、ハンバーグが食べたいな」

ユ「わかりました！　お任せ下さい」

神「さて、料理が完成する前に、最後の贈り物でも紹介するか」

一「最後は二次元最高様からだ。勇者シリーズの、黄金勇者ゴルドランから、ゴルドラン。同じく勇者シリーズからガオガイガー（ゴルディオンハンマー装備）。さらに同じ勇者シリーズからマイトガインを頂いたぞ」

神「作者ドストライクな作品じゃな。ここにおったら必ず食いついておったはずじゃが・・・」

天「仕方ありません。作者の分までしっかり鑑賞させてもらいましょう」

ユ「みなさ～ん！　できましたよ～～～！」

刹「料理が出来たようだな」

一「それじゃあ行くか」

作「誰も助けに来ないってどういう事だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

第九話　男の戦い（前書き）

こんな銭湯、絶対無いだろ・・・

第九話　男の戦い

なのはに案内され、神奈達と共にスーパー銭湯へ向かうと、すでに六課のメンバーは集まっていた。

な「お待たせ、連れて来たよ」

フェ「あ、神奈さん達も一緒なんだ。賑やかになりそうだね」

一「みんな、自己紹介を・・・」

初対面であるスバル達の為に、自己紹介をしてもらおうと思ったのだが・・・

神「久しぶりじゃなスバル」

天「ティアナちゃんも変わりないようで何よりです」

刹「元気にしていたかエリオ？」

光「キャロ、一緒に背中の流しっこしようね」

一「え？」

予想に反し、なんと全員が顔見知りだったようだ。驚いた俺に、龍

那が説明してくれた。

龍「なのは達が管理局に入ってから、オレ達も民間協力者として色々手伝ってたんだよ。だから、六課のヤツらとはとっくに顔を合わせてるってわけだ」

一「な、なるほど。そうだったのか」

は「ほらほら、いつまでも入口で固まっとったら、他のお客さんに迷惑やで。早う中に入ろう」

ア「そうね。けど・・・考えてみると凄い大人数よね」

アリサの言う通りだ。俺になのは、フェイトにはやて、アリサとすずか、シグナムさんにシャマルさん、ヴィータにアインとリィン、それからスバル、ティアナ、エリオ君とキャロちゃん、そして神奈、天音、刹那、光明、龍那（雲母）・・・・合計二十人だ。

一「修学旅行か・・・」

な「あはは、ホントにそんな感じだね」

中に入り、男湯へ向かおうとすると、エリオ君が女湯に引き摺り込まれそうになっていた。

エ「ま、待ってキャロ！　僕は男だよ！」

キャ「大丈夫だよ。十一歳以下ならどっちに入ってもいいって書いてあったから」

エ「そ、そう言う問題じゃないよ！」

フェ「いいじゃない。エリオも一緒に入ろうよ」

エ「フェイトさんまで・・・！」

一「二人とも、あまり無理強いさせたらエリオ君が可哀そう・・・」

神「そうじゃ。どうせなら一成も女湯に来ればいいのじゃ」

一「・・・は？」

エリオ君に助け船を出そうとしたら、とんでもない事を言われてしまい、一瞬呆けてしまった。

シャ「な、何言ってるんですか神奈さん！？　一成君が入れるわけないでしょう！」

神「なに、子どもの姿になれば問題無かろう」

天「なるほど！　それはいい考えですね！」

刹「ならば我が君、我が体を洗ってやろう」

一「行くぞエリオ君！！」

エ「え？　う、うわあ！」

エリオ君の手を掴み、逃げるように男湯の脱衣場に入った。

エ「あ、ありがとうございましたお兄さん」

一「気にしないでくれ。むしろ俺の為だから」

エ「え？」

一「いや、何でもないよ。さあ、早く入ろう」

エ「はい」

準備を済ませ、俺とエリオ君は浴場に足を踏み入れた。

一「先に髪と体を洗おう。エリオ君、そこに座ってくれ。俺が洗うよ」

エ「いいんですか？　お願いします」

まずは髪を流し、続いて体をしっかり洗ってやる。最後に湯を駆け、

泡を全て流した。

一「終わったよ」

エ「ありがとうございます。それじゃあ次は、僕がお兄さんを流してあげます」

一「ああ、頼むよ」

その場を入れ替わる。エリオ君は丁寧に俺の背中を洗ってくれたが、不意にその手が止まった。

一「どうした？」

エ「お兄さん、傷だらけですね」

一「ん、そうだな。回復魔法は使えるが、どうしても小さな傷は残ってしまうんだ。けど、仲間を守る為に負った名誉の負傷の様なものだから、特に気にしていないが」

エ「・・・僕も」

一「ん？」

エ「僕も・・・お兄さんの様に、仲間を・・・フェイトさんやキャロを守れるようになれるでしょうか？」

一「もちろんだ。そう思っている限り、キミはどこまでも強くなれるはずだ。だから、日々の訓練を大切にな。もし模擬戦がしたかったら、俺でよければいつでも相手になるから」

エ「は、はい！　頑張ります！」

体を洗い終えた俺達は、早速湯船に浸かった。スーパー銭湯と言うだけあって、電気風呂や泡風呂など、たくさんの種類の風呂があった。

一「はあ、気持ちいいなエリオ君」

エ「はい、とっても」

気持ち良く浸かっていると、三人組の男性が入って来た。

男A「いやあ！　やっぱり気持ちいいですなぁ！」

男B「ええ、一日の疲れが吹っ飛んでしまいます」

男C「それに、ここの風呂は傷にも効きますからな。私としては大助かりですよ」

男B「また奥さんにやられたんですか？」

男C「お恥ずかしながら、『豪炎流奥義、焔の太刀』をまともに食

らってしまいましたからな。まったく、靴下を脱ぎ散らかしただけでこの仕打ちは酷いですよ」

男A「いやいや、私なんて、朝のゴミ出しを断っただけで、『チャランボ（膝蹴り）』ですよ。下手したら内臓破裂してましたよ」

男B「それを言うなら私だって酷いですよ。家内より先に風呂に入ったからって、問答無用で『ケイシャーダ（アゴへの蹴り）』放ってくるんですよ。もうたまったもんじゃありませんよ」

男A「お互い、暴力的な妻を持つと苦労しますな」

男B・C「「いや、まったく！」」

一「・・・・エリオ君」

エ「なんですか？」

一「世間って・・・狭いんだな」

間違いない。この人達、あの主婦のみなさんの夫だ。という事は、もしかしてあの人達もここにいるのか？

男A「おや？　キミ達は見ない顔だね。もしかして、ここは初めてかい？」

三人が俺達に気付き、親しげに話しかけて来た。

一「え、ええ。そうです」

男B「若いね。兄弟かい？」

男C「ここの風呂はどれも気持ちいいからね、ぜひとも楽しんでいってくれたまえ。ちなみに、私のおススメは電気風呂だよ」

エ「うわあ、面白そうだな。教えてくれてありがとうございます」

男B「うんうん、礼儀正しい弟君だね。・・・それに引き換え」

一人が視線を別の方へ向ける。そこには、大声で騒ぎ立てている二人組の男がいた。周りの事をまるで考えていない、明らかなマナー違反だった。

男B「近頃は減って来たと思っていたが、まだあの様な輩がいたとはな」

男C「少しはこの二人を見習って欲しいものだがな」

男A「仕方ない・・・やりますか」

男B・C「「応」」

言い様もない雰囲気を醸し出しながら、三人が立ち上がった。先程

までの優しげな表情は消え、鋭い視線で二人組を見つめている。

一「何をする気ですか？」

男A「なあに、マナーを守らん若造にちょっとした説教をな」

男B「キミ達は気にせずにお風呂を楽しみなさい」

男C「弟君には刺激が強いだろうから、こっちを見せないようにしておきなさいよ」

そう言って、三人は男達に向かって行った。

男D「お、おい！　『泉守三人衆』が動き出したぞ！」

男E「何処の馬鹿だ！？　あの三人を動かすなんて・・・！！」

三人の姿に、他の客達がどよめく。とりあえず、尋ねてみた。

一「すみません、あの三人って有名なんですか？」

男D「ここの常連ならみんな知ってるよ。この銭湯が開いた頃から通っている三人で、ここに対する愛が半端ないんだ。それ故に、マナー違反をした者や、他人に迷惑をかけるヤツは絶対に許さない。何人もの違反者が、あの三人によってお仕置きされてるんだ」

エ「そ、そんなに凄い人達なんですか？」

一「エリオ君、この海鳴市ではこれが普通なんだ」

エ「普通！？」

男D「あの三人は、それぞれプロボクサーのライセンス所持者、柔道黒帯、元プロレスラーだ。目をつけられたら決して逃げられないのさ」

男A・B・C「「「天っ誅ーーーーーーッ！！！」」」

一「ッ！　見るなエリオ君！！」

地獄絵図が展開される前に、手でエリオ君の目を塞いだ。生々しい音と、男達の悲鳴が全体に響き渡った。

男D「ゴクッ・・・相変わらず容赦ねえぜ」

エ「ど、どうなったんですかお兄さん？」

一「エリオ君・・・今から俺と一緒に露天風呂へ行こう。うん、そうだ、そうしよう」

エ「え？　え？」

目を塞いだままエリオ君を抱きかかえ、俺は早足で露天風呂へ向かった。だが、俺は入口に書かれていた重要な部分を見逃していた。

そう・・・この露天風呂は時間制限があるのだという事を。そして・・・今は女性の時間だという事を。

一「やっぱり露天はいいな」

月を見上げながら、俺はそう漏らした。

エ「そうですね。それでお兄さん、さっきの人達は・・・」

一「忘れるんだエリオ君」

エ「わ、わかりました」

それからしばらく無言で浸かっていると、不意にエリオ君が気付いた。

エ「あれ？　ここって入口が二つあるんですね」

一「え？　あ、本当だ。俺達が通った所とは別の所からも入れたんだな」

エ「もしかして・・・女湯の方に繋がってたりして」

一「はは、まさか・・・」

？「あ、露天風呂だって！　行ってみようよ！」

一・エ「「ッ！？」」

一方の扉の奥から、明らかな女性の声が聞こえて来た。しかも、俺がよく知っている声だ。

エ「い、今の声って、なのはさんですよね！？　何で！？」

一「落ちつくんだエリオ君！　・・・ん、何だこの貼り紙？」

『トラブルの原因となりますので、入れ替え時間の十分前にはお戻りになるようお願い致します』

一「そうか！　この露天風呂は時間制だったのか！」

エ「は、早く出ましょう！」

一「ああ！　こんな所を見られでもしたら・・・！」

ガラッ！

な「うわ～～！　結構広いね～～！」

男湯へ戻ろうと立ち上がったその時、扉が開き、なのは達が露天風呂へと入って来た。

一・エ「「ッ・・・・」」

間一髪、岩場の陰に隠れる事に成功した。心臓が早鐘の如く鼓動しているのを感じる。エリオ君の方も同じ感じだった。

フェ「あれ？　今そこに誰かいたような・・・」

は「ん～～？　気のせいちゃう？」

エ「（フェ、フェイトさんもいるんですか！？）」

一「（動くなエリオ君！　とにかく、落ち着いて時が過ぎるのを待つんだ！）」

エ「（す、すみません！）」

息を殺し、様子を伺う。どうやら全員一緒に行動していたようで、十八人の賑やかな声が露天風呂に響いている。

は「はあ、相変わらず神奈さんの胸は凄いなぁ。それに引きかえ私は・・・」

神「シグナムやフェイトも中々ではないか」

フェ「え!?　そ、そうですか？」

シ「こ、こんな物、戦いの邪魔になるだけだ」

は「ッ！　ふ、ふふふ・・・言うてはならん事を言ってもうたなシグナム・・・」

シ「あ、主はやて？」

は「そんな生意気な事を言う胸は・・・この胸かぁ!!」

シ「ひゃう!?　や、止めてください主はやて・・・！」

ヴィ「けっ！　たかが脂肪の塊が大きいからってなんなんだよ」

リ「そうです！　その通りなのです！」

光「うん！　ヴィータはよくわかってる！」

刹「傷の舐め合いは見ていて哀れだぞ」

ヴィ「な、何だとぉ！」

光「ひどいですお姉様！」

リ「刹那さんには、私達の苦しみはわからないのです！」

ス「じ～～」

ティア「・・・スバル。そんなに胸元を凝視されると恥ずかしいんだけど」

ス「あ、ゴメンゴメン」

天「大丈夫ですよ。二人とも成長期ですし、規則正しく生活していれば、ちゃんと成長しますから」

ス「そ、そうですよね。これからですよね」

ティア「私は何も言ってないんですけど・・・」

ス「でも、ティアだって大きい方がいいでしょ？」

ティア「・・・否定はしないわ」

キャ「雲母さん。みなさん何の話をしてるんですか？」

雲「え、えっと・・・キャロちゃんにはちょっと早いかな」

キャ「？」

＜なんだよ、教えてやればいいじゃねえか＞

雲「（そんなの私には無理だよぉ！）」

シャ「ねえアイン。正直どうなの？」

アイ「何の事だ？」

シャ「何って・・・一成君の事に決まってるじゃない。好きなんでしょ、彼の事？」

アイ「な、ななな何を言っている!?　一成は私の恩人だぞ！その様な感情を抱くなど・・・」

シャ「わかりやすい反応ね。あ～あ、これでライバルが増えちゃったわね」

アイ「だから違うと・・・！　ん？　ライバルという事は、まさかシャマル・・・」

シャ「負けないわよアイン」

ア「何て会話してんのよみんな・・・」

す「あはは。でも、こうしてみんなで露天風呂に入ってると、昔を思い出すね。憶えてる？　旅行に行った時の事」

な「あ、そういえばそんな事もあったね」

す「あの時も神奈さんにからかわれたよね。『好きな人に揉んでもらうと、胸が大きくなる』って。あまりに衝撃的だったから、未だに憶えてるんだ私」

ア「今思うと、あれって完全なセクハラ発言だったわよね」

な・す「「うん・・・」」

途切れ途切れだが、岩場を挟んですぐ後ろに位置していたので、みんなの会話が聞こえて来た。その内容に、エリオ君の顔が赤くなっている。

エ「・・・・／／」

一「（エリオ君、こういう話を盗み聞きするのは最低な行為だ。すぐに頭から消して、素数でも数えるといい）」

エ「（素数ですか？）」

一「（一とその数以外に約数を持たない、一より大きな自然数の事だ）」

エ「（わ、わかりました。えっと・・・二・・・三・・・）」

一「（そうだ。その調子だ）」

エ「（七・・・十一・・・十三・・・・）」

それから、ひたすら素数を数えていると、いつの間にかなのは達はいなくなっていた。その隙に、俺達はようやく男湯へ退避する事が出来た。

エ「や、やりましたねお兄さん」

一「ここまで危険を感じたのは、光明との戦い以来だったな」

エ「もう出ましょう。僕、疲れちゃいました」

一「そうだな。エリオ君、コーヒー牛乳でも奢るよ」

エ「ありがとうございます」

一「気にしないでくれ。俺の所為だしな」

脱衣所で着替えを済ませ、休憩所でコーヒー牛乳を飲んでいると、なのは達がやって来た。

な「お待たせ・・・二人とも、顔真っ赤だよ？　のぼせちゃった？」

一「ちょっと・・・な」

エ「ええ、ちょっと・・・」

な「？」

一「（今回の事は、墓まで持って行こうな）」

エ「（もちろんです）」

その後、休憩時間を挟み、帰ろうとしたその時、キャロちゃんのデバイスがサーチャーに反応があった事を告げたので、このまま現場に向かう事になった。

一「俺も行って来る。みんなは先に帰っててくれ」

神奈達を先に家に帰し、俺もなのは達と共に現場に向かった・・・

第九話　男の戦い（後書き）

作「くそ、もう少しでタイーホだったのに、運のいいヤツだ」

神「別に一成じゃったら問題無いぞ」

天「ええ、むしろ望む所でした」

刹「お前だったら問答無用で消し飛ばしていたがな」

光「私も一兄と一緒に入りたかったな」

龍「よかったな一成」

雲「わ、私はそんな・・・でも、一成さんがどうしてもっておっしゃるなら・・・」

一「（見つからなくてよかった）」

一「そうだ、贈り物報告会だが・・・今回も覚悟しとけよ作者」

作「覚悟って・・・まさか！？」

神「まずは緋水様から、世界中の肉を纏めて頂いたぞ」

天「肉料理がお好きな一成様にはピッタリな贈り物ですね」

一「見てたら腹が減って来たな」

天「では、後で早速調理しましょう」

天「グラムサイト2様からは、一成様宛にＮＡＲＵＴＯの影分身の巻き物。私、刹那、光明、雲母さんに異世界での一成様の活躍シーンを纏めたＤＶＤ。龍那さんには、同じ様に一成様が異世界で戦った相手と疑似対決出来るマシーンを頂きました」

神「ちょっと待てい！　そんな垂涎ものなＤＶＤが何故妾だけないのじゃ！？」

天「まあまあ、後で焼き増ししてあげますから」

龍「これは面白そうだな。・・・・ん？　妙に女が多いな」

刹「フリーダム殿からは、我が君にガーベラ・ストレートと、タクティカルアームズを頂いたぞ」

光「カッコいい武器だね。一兄にピッタリ！」

雲「これで二刀流とかしてみたら面白いんじゃないですか？」

光「清浦刹那さんからは、・ｈａｃｋに登場した八つの碑文を頂いたよ」

一「大和さん曰く、俺は『再誕』らしい」

神「では、他の物を皆で分けるか」

龍「仮面ライダーディケイドって人からは、攻撃を吸収する吸収装置を貰ったぞ」

一「作者、これ持っておくといいぞ」

作「な、何だよ？」

一「いいから」

雲「マサさんからは、パスタを頂きました。それと、前回忘れていたユーフィーの令呪もここで紹介しておきます」

刹「パスタは我の好物だ。ありがたく頂いておく」

光「じゃあ、私が美味しいパスタ作ってあげますね」

作「東雲葉月様からは、一成宛てに初現の魔導書と、前回頂いたデバイスをユニゾン仕様に出来るプログラム。神奈、天音、刹那、光明、龍那、雲母の六人には、一成をモチーフにした人形。それから、東雲葉月様の小説のキャラの方から、俺に醤油ベースの塩豚骨ラーメン。一成にももいちごと、とちおとめを使ったストロベリーパイとイチゴ・オ・レ、タルトとストロベリーティー。神奈達には、太らずに痩せるショートケーキとシューを頂いたぞ」

一「これは美味しそ・・・」

神・天・刹・光・龍・雲「「「「「「「「「太らない！？」」」」」」」」」

作「なんという食いつき・・・」

神「アクセルロイ様からは、一成宛てにダイの大冒険に出ていた真ダイの剣を頂いたぞ」

作「うわ、懐かしい！　おい一成、大切に使えよ」

一「ずいぶん気に入ってるみたいだな」

作「当然！　ダイの大冒険は名作だぞ！」

天「アナザー様からは、小説の主人公であるリュウトさんの召喚獣の神器・・・刀身、バスターブレード（アメノムラクモ）。銃身、スナイパー（シヴァ　絶）。装甲、タワーシールド（ユミル　硬）を、作者にアナザー様作の『吉井明久召喚獣なりきりセット（木刀つき）』を頂きました」

一「・・・作者、今回は宣伝を許してやる。というか宣伝しろ」

作「おう！　本編での活躍が知りたい方は、ぜひアナザー様の小説『バカとテストとアノ人達』をご覧ください」

一「これくらいはさせて頂かないとな」

作「・・・あれ？　これで終わり？　初めに一成が物騒な事言ってたから身構えてたけど、何も無かったじゃないか」

一「何言ってるんだ？　これからが本番だぞ」

作「へ・・・・？」

一「ここからは贈り物ではなく、作者にお見舞いしたい物を纏めて紹介していく」

光「えっと・・・フリーダムさんから、パワーボンドとリミッター解除で攻撃力が１６０００になったサイバーエンド・ドラゴン三体のエターナル・エヴォリューションバーストを・・・」

天「仮面ライダーディケイド様からは、アルティメットバーストを９９９９兆９９９９億９９９９幡９９９９発・・・」

雲「マサさんから、オシリスの天空竜、オベリスクの巨神兵、ラーの翼神竜の三体と、作者さんが以前ユーフィーを襲おうとした事が『聖賢』と『永遠』のあの二人にばれちゃったので、魔王流のお話をしたいと・・・」

刹「前原圭一殿からは、Ｌ５発症のひぐらしメンバーと、一万人のドナルド、それから、ラピュタの雷を3兆発・・・」

神「アクセルロイ様からは、遊戯王の邪神アバター三セットじゃ。もし勝ったらそのままお主の物になるそうじゃぞ」

一「最後にアナザー様からだ。『創聖のアクエリオン』から、ソーラーアクエリオンの無限拳をプレゼントだと」

作「・・・うん、色々言いたいけど、まず一言・・・・桁おかしいでしょうがぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

光「やっぱり人気者だね作者さん」

天「ええ、愛されていますね」

刹「感謝するんだぞ」

作「んなわけ・・・！　って、落ち着け、これじゃいつものパターンと同じだ。・・・・そうだ、これだって贈り物なんだ。笑顔で受け取って・・・」

？「無限・・・拳ーーーーーーーッ！！！」

ボグシャアアアアアア！！！

作「やっぱ無理ぃ！！　ちょ、月が凄い勢いで迫って来てるって！！」

一「人類初の生身で月面着陸か・・・おめでとう作者」

第十話　年長者の言う事は聞くもの（前書き）

最近後書きのカオス度が増している・・・

第十話　年長者の言う事は聞くもの

現場の河川敷に辿り着き、なのは達隊長陣は空中へ、スバル達フォワードメンバーは地面に降り立った。今回はフォワードメインに展開させるらしい。

シャ「（空から結界で閉じ込めるわ！　中で捕まえて！）」

ス・ティア・エ・キャ「「「「はい！」」」」

一「・・・ん？　この場所は確か・・・・」

そうだ、思い出した。十年前、士郎さんのサッカーチームが試合をした場所だ。ずいぶん懐かしい場所へやって来たものだな。

一「それで、目標のロストロギアって言うのは・・・」

ス「うわ、何あれ？」

スバルが指差した方向には、スライムの様な形をしたロストロギアが飛び跳ねていた。しかも、大量に。

ティア「何て数・・・」

キャ「・・・・ちょっと可愛いかも」

エ「あ、あれが全部本体なんですか？」

は「（いや、本体は一つだけや。危険を感じると、ああやって分裂してダミー体を作るんや）」

≪本体を封印すれば、ダミーは全て消えるはずです！≫

な「（私達は広がったダミーを回収するから、そっちはみんなに任せるよ）」

フェ「（落ち着いて、練習通りやれば大丈夫だからね）」

ス・ティア・エ・キャ「「「「了解！」」」」

隊長達に励まされ、四人は気合いを入れ直してロストロギアと対峙した。俺はもしもの時の為、すぐにサポート出来るよう少し離れた場所で待機しておく事にした。

ス「いっくぞぉ！　せやぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

ポヨン

ス「はれ？」

エ「でやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

ポヨヨン

エ「うわわ！？」

スバルがリボルバーナックルで、エリオ君がストラーダでそれぞれ攻撃する。だが、ロストロギアには全く効果が無く、何事もなかったかのように飛び跳ねている。

ス「打撃が効かない！」

エ「斬撃も駄目です！」

ティア「だったら私が！」

キャ「お願いフリード！」

続いて、ティアナとキャロちゃんが魔力弾とフリードの火炎で攻撃したが、それも効果が無かった。

キャ「こっちも効果がありません！」

ティア「くっ、さすがロストロギアって所ね」

エ「ど、どうすれば・・・」

予想外の事態に戸惑う四人。ここは助け船を出すべきか・・・

一「（なのは、アドバイスくらいはしても大丈夫か？）」

な「（そうだね・・・なら少しだけ）」

一「（わかった）」

俺は四人に駆け寄った。

エ「あ、お兄さん」

一「みんな、落ち着いて。はやてとリィンの言葉を思い出してみるんだ」

ティア「・・・そうよ、別に倒す必要はないんだわ。本体を見つけて封印さえすれば」

一「そうだ。焦る気持ちもわかるが、戦いでは常に冷静になる事が大切だ。さあ、これからどうする？」

ティア「スバル！　エリオ！　これ以上ダミーが広がらないようになんとか抑えてて！　キャロ！　私と一緒に本体を特定して封印す

るわよ！」

ス「わかった！」

エ・キャ「「はい！」」

一「うん、それでいいんだ」

再び動き出す四人。スバルとエリオ君がダミーを相手している間に、ティアナは魔力弾を撃ちながら、反応が異なる対象を探していた。

ティア「・・・・見つけた！　キャロ！」

キャ「捕まえます！　練鉄召喚！　アルケミック・チェーン！！」

ティアナの指示した対象を、キャロちゃんが召喚した鎖で拘束しようとしたその時、突然ロストロギアがバリアを展開させた。

ティア「バリア！？」

キャ「くうっ・・・強い・・・・」

思いの外強力なバリアに、キャロちゃんの体が徐々に押され始める。

そこへ、スバルとエリオ君が駆け付けた。

ス「エリオ！　アサルトコンビネーション、いくよ！」

エ「はい！」

≪Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ．≫

ス「マッハキャリバー！」

≪Ｌｏａｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ．≫

カートリッジをロードし、魔力を引き上げた二人は、交差するようにロストロギアへ連携技を繰り出した。

ス・エ「「ストライク・・・ドライバーーーッ！！」」

バキィィィィィィン！

渾身の一撃に、ロストロギアが展開させていたバリアが甲高い音を立てて砕け散った。続けて、ティアナとキャロちゃんが動いた。

ティア「バリア破壊を確認！　クロスミラージュ！　バレットＦ！」

≪Ｌｏａｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ．≫

キャ「我が乞うは捕縛の檻、流星の射手の弾丸に封印の力を！」

≪Ｇｅｔ　Ｓｅｔ．≫

キャロちゃんが魔法を発動させると、クロスミラージュの弾丸が大きさを増した。

ティア・キャ「「シーリング・・・シューーーート！！」」

放たれた弾丸がロストロギアに命中した瞬間、周囲を跳ねていた大量のダミーがあっという間に消えて行った。

ヴィ「（よし、よくやったぞお前ら）」

シ「（なかなかの動きだったな）」

上空にいるヴィータとシグナムさんが四人に労いの言葉をかけた。

実際、持ち直した後の動きはかなりのものだったと俺も思う。

は「よし、動作停止確認。完全封印処理しよか」

シャ「わかりました」

キャ「あ、あの、八神部隊長、シャマル先生」

は「どしたんキャロ？」

キャ「私に封印処理をやらせてください。練習しておきたいんです」

は「そうか！　よう言ったわキャロ！」

シャ「いい心がけです。では、しっかり見てますからやってみてください」

キャ「ありがとうございます！」

封印の為に下り立った二人に、キャロちゃんが自分で封印する事を伝えた。すると、二人は嬉しそうに頷いた。

一「お疲れ様みんな。よく頑張ったな」

頃合いを見計らって、俺もスバル達に声をかけた。

ティア「いえ、秋月さんの助言が無ければ、もっと苦戦していまし

た。情けない限りです」

一「それは違う。むしろ、あれだけの言葉で気付けたんだから大したものだ。もっと自信を持っていいんじゃないかな」

エ「ありがとうございます」

一「しかし・・・見事な連携技だったな。あれだけ息を合わせられるなんて凄いじゃないか」

ス「そ、そうですか？　何か照れちゃいますね」

一「俺にはそんな技・・・いや、昔一回だけ即興で出した技があったな」

エ「どんな技なんですか？」

一「それは・・・」

な「お疲れみんな、よく頑張ったね」

なのは達も下りて来た。

一「そうだ。十年前の戦いで、なのはと協力して放ったんだったな」

フェ「なんの話？」

一「スバル達の協力技を見て、俺も昔やったなって話をな。確か・・

・ディバイン・ドライブだったか？」

ティア「な、なんか名前だけでどんな技か予想がつくんですけど」

は「封印終わったで。これで出張任務も終了やな」

封印を済ませた三人も合流し、任務を達成した六課の面々は、アリサのコテージに戻った。

は「さて、無事に任務は果たせたわけやけど、もう夜も遅いし、今日はこのままアリサちゃんのコテージで一泊させてもらう事になりました」

ア「ここでよければいつでも使っていいからね」

フェ「ありがとうアリサ」

一「明日はどうするんだ？　すぐに戻るのか？」

な「ううん。明日は一日お休みにする予定だよ」

一「そうか、よかった。まだ挨拶出来てない人達がいるからな」

ヴィ「それより一成、お前早く家に帰った方がいいんじゃねえのか？」

アイ「せっかく帰って来たんだ。久しぶりに家で休むのがいいだろう」

一「・・・そうだな。じゃあお言葉に甘えて、俺は家に帰るよ」

みんなに見送られ、俺はハイロゥを展開させて自宅へと舞い戻った。

一「・・・ただいま」

もうみんな寝ているだろうと思い、静かに玄関を開けたのだが・・・

天「お帰りなさいませ一成様」

神「こんな遅くまでご苦労じゃったな」

刹「ロストロギアは封印出来たのか？」

光「私もついて行けばよかったな～」

龍「風呂入ってすぐだったのに・・・お前も大変だな」

＜お疲れさまでした一成さん＞

予想に反し、みんな起きていた。それどころか出迎えまでしてくれた。

天「お疲れでしょう？　すぐに休まれますか？」

一「あ、ああ。もう寝ようと思ってるけど・・・」

龍「あー・・・その・・・悪い、お前の部屋ねえんだわ」

一「え？」

＜そ、その・・・今は私達が使わせてもらってるんです＞

一「そうなのか？　じゃあ、ソファーで」

光「それじゃ体痛めちゃうよ」

一「む、ならどうしようか・・・」

刹「・・・我にいい考えがあるぞ」

・・・・・・・

・・・・・

・・・

神「ええい！　大人しく一成の隣を妾に明け渡すのじゃ！」

天「それは私のセリフです！」

刹「我の言い出した事なのだから、ここは我に譲るのが当然だろう！」

光「私だって一兄の隣がいいもん！」

一「・・・どうしてこうなった」

刹那の考えとは、リビングに全員分の布団を敷きつめ、みんなで一緒に寝るというものだった。各自が部屋から布団を持って来て敷いたまではよかったのだが・・・俺の隣に誰が寝るかで四人が争いを始めた。

一「お、落ち着けみんな。どこで寝るかなんてどうでもいいじゃないか」

神・天・刹・光「「「「よくない（です）（よ）！！！」」」」

一「・・・・」

龍「やれやれ、帰って来た途端この騒ぎかよ。悪いが先に寝させてもらうぞ～」

そう言って、龍那は俺の右隣の布団に横になった。

神「んなっ!?　どこで寝るつもりじゃ龍那!」

光「ずるい!　さすが龍那ずるい!」

刹「ならば、左は我が頂く!」

天「させません!」

さらにヒートアップする四人。最早止める事は不可能と判断した俺は、スルーして寝る事にした。

一「・・・お休み」

意識のなくなる直前まで、俺の耳には神奈達の争いの声が聞こえ続けていた・・・

＜か、一成さんの隣・・・はう・・・／／＞

第十話　年長者の言う事は聞くもの（後書き）

一「ん？　ずいぶん人が少ないな」

龍「神奈達なら寝てるぞ。あれから朝までずっと起きてたみたいだからな」

雲「起こすのも可哀そうなので、今回はお休みです」

作「次回で全員と再会を済ませられそうだ。それから本編の方を進めるからな」

雲「翠屋とテスタロッサ家ですね。・・・あれ？　クロノ君達は？」

作「クロノ達は本編の方で絡ませられるから後回しだ」

龍「・・・全員じゃねえじゃん」

作「よし、それじゃあ贈り物報告会始めるぞ」

一「まずは緋水様からだ。作者宛てに亜空間物質転送装置を頂いたぞ」

龍「ずいぶん立派な物もらったな。試しに何か転送してみるか」

雲「でも、丁度いい物が見つからないよ？」

龍「作者を転送してやればいいじゃねえか」

作「は？」

一「それはいいな。よし、早速装置に入れ作者」

作「嫌に決まってんだろうが！」

一「仕方ない・・・」

作「ッ！？　ぐ、グラスプは卑怯だぞ！！」

龍「入ったな・・・よし、スイッチオン」

作「待っ・・・！」

雲「き、消えちゃった・・・」

龍「グラムサイト2って人からは、六課で一成にフラグが立ってるメンバーと、神奈、天音、刹那、光明、雲母宛てに、自分の思い描く妄想が撮れるカメラ（現像枚数制限無し）と、一成宛てに、同じく六課のメンバーと神奈達とそれぞれ二泊三日のペア温泉旅行券と、ＮＡＲＵＴＯの螺旋丸、螺旋手裏剣、コンタクトレンズ型の写輪眼、白眼、輪廻眼を貰ったぞ」

一「温泉か・・・また行きたいな」

雲「・・・・」

一「？　どうしたんだ雲母？」

雲「ひう！？　な、何でも無いです」

龍「ああ、こいつこんな性格のくせに結構激しい妄想するからな。こんなカメラ貰ったらそりゃ固まるさ」

雲「い、言わないでよ龍那！」

雲「アナザーさんからは、一成さん宛てに『テイルズオブヴェスペリア』のギルド『天を射る重星』おすすめの蜜蜜ザッハトルテと、『ゴッドイーター』から『初恋ジュース』を頂きました。それと、私達オリジナルキャラの女性陣には、霧島翔子さんから拘束具と拷問用の道具を・・・って、ええ！？」

龍「・・・またエグいのが来たな」

一「な、何でそんな物が・・・」

雲「め、メッセージがついてます。『・・・・・これで彼も浮気しない』・・・・との事です」

一「まさか・・・俺に？」

龍「みたいだな」

雲「と、とりあえず、これは置いておきましょう。最後に、作者さ

ん宛てに、回復アイテムである『ハートの器』と、ユーリ・ローウェルさんの漸毅狼影陣を追加で・・・って、これ秘奥義ですよ！？」

ユ「よお、来てやったぞ」

一「本人来たぞ・・・」

龍「おいユーリ、この転送装置に入ってくれ」

ユ「ここに入ればいいのか？」

龍「ああ。今から作者の所に跳ばすから」

ユ「また移動かよ。仕方ねえ・・・行って来ますか」

雲「ま、また消えちゃった・・・」

一「フリーダム様からは、俺宛てにマガノイクタチとバヨネット装備型のビームライフル。作者には五十体融合とリミッター解除で、攻撃力が１６００００になったキメラテック・オーバー・ドラゴンのエヴォリューション・レザルト・バーストを五十連打して頂いたぞ」

龍「よし、これも転送だな」

雲「ま、待って龍那！　ユーリさんもいるんだよ！？」

龍「あいつは死なねえよ。何せ、主人公だからな」

雲「り、理由になってない・・・」

龍「前原圭一って人からは・・・凄えなこりゃ。ゴルディオンクラッシャーを二兆回、スペースコンビネーションを十八億回、超重炎皇斬を二十八兆回、セブンスウェルを二十八万回、ザ・グローリー・スターを二億回、イオン砲を二千回。止めにアバンストラッシュとメドローア、ギガストラッシュに猛虎破砕拳、星皇十字剣、グランドクルス、フィンガーフレアボムズ、ブラッディスクライドを作者にお見舞いだと。ついでに一成には、ブラッククロッドと超重剣、それとロンベルクの作った武器の一式と、ニルヴァーシュｓｐｅｃ３をもらったぞ」

一「なんだろう・・・最近お見舞いするものの桁が滅茶苦茶過ぎて感覚がマヒして来たんだが」

龍「これはさすがにヤバいな。とりあえずユーリを呼び戻すか」

ユ「・・・ん？　戻って来たのか」

雲「だ、大丈夫でしたかユーリさん？」

ユ「いやあ、驚いたぜ。急に見た事もないドラゴンが現れたからな。けど、俺には見向きもせずにおたくの作者に襲い掛かってたけど・・・ありゃなんだ？」

雲「き、気にしないでください。他の方からの贈り物ですから」

ユ「あれがか？　・・・・大変だな」

雲「無さんからは、作者さんにトラップカードの『マジックアームシールド』と、世界樹の葉を頂きました」

龍「早速送ってやるか。きっと喜ぶぞ」

一「・・・・焼け石に水じゃないのか？」

雲「わ、私もそう思います・・・」

一「最後はマサ様からだ。作者宛てにセラエノ断章（ハヅキ）、俺宛てにワンピースに出ていた恐竜の肉、女性陣には一口食べると一キロ痩せるチョコレートを頂いたぞ」

龍「これは送れねえな。ハヅキが可哀そうだ」

雲「じゃあ、帰って来たら渡してあげようよ」

一「帰って来れたらな・・・」

第十一話　アニメキャラっていうのは何年経ってもほとんど老けない　前編（前）

もう少しだけ日常を書かせて頂きます。

第十一話　アニメキャラっていうのは何年経ってもほとんど老けない　前編

ピピピピピ！

一「ん・・・」

目覚ましを止め、体を起こす。隣では龍那が幸せそうな表情で寝ていた。

一「そういえば、神奈達は・・・」

もう一方に視線を移すと、そこには一枚の布団に重なりあうようにして眠っている四人がいた。

神「ううん・・・石が・・・石が・・・・・」

天「や、止めてください。私なんかをサンドイッチの具にしても美味しくありませんよ・・・」

一番下の神奈が苦しそうに呻いている。続いて、神奈と刹那に挟まれている天音がどんな夢を見ているか一発でわかる寝言を呟いていた。

刹「・・・・」

光「すう・・・すう・・・・」

それに比べ、負担の少ない刹那と、一番上に乗っている光明は気持ち良さそうに寝ている。・・・・いったい、あれから何があったんだろう。

一「・・・っと、とりあえず顔でも洗ってこよう」

神奈達を一人ずつ別の布団に移し、俺は洗面所に向かった。手早く顔を洗い、歯を磨いてリビングに戻ると、龍那が起きていた。

龍「ふわあ・・・おはようさん一成」

＜おはようございます＞

一「おはよう二人とも。・・・もしかして、起こしてしまったか？」

龍「オレも雲母も物音には敏感だからな。でもまあ、気にすんな。・・・雲母の方は不満かもしれねえけどな」

＜ええ！？　わ、私不満になんて思ってないよ！＞

龍「（そうか？　てっきり自分より早起きされて、一成の寝顔が見

れなかったのが残念とか思ってたんじゃないかと・・・）」

＜そ、そそそそんな事ないってば！！＞

龍「（へいへい、そういう事にしといてやるよ）」

一「？　結局どういう事なんだ？」

雲「で、ですから！　私は不満になんて思ってませんよ！」

＜あ、こら、勝手に入れ替わるなよ＞

雲「（龍那が適当な事言うからでしょ！）」

＜（からかい過ぎたか）＞

雲「じ、じゃあ、私も顔を洗って来ますね」

そう言って、雲母はそそくさと洗面所へ向かって行った。

一「・・・・朝食でも作るか」

・・・・・

朝食を済ませ、まったりしていると、時間は十時をまわっていた。

相変わらず神奈達は眠っている。

一「しかし・・・いつまで眠っているつもりなんだろう」

雲「よっぽど疲れてらっしゃるみたいですね」

一「・・・何してたんだ？」

雲「さ、さあ・・・？」

ピンポーン！

雲「あ、私行ってきます」

チャイムが鳴り、雲母が玄関に向かう。数十秒後、複数の足音と共に戻って来た。

な・フェ「「おはよう一成（君）」」

やって来たのはなのはとフェイトだった。

一「おはよう二人とも。休みなのにわざわざ来てくれるなんて、どうしたんだ？」

な「今から私達も久しぶりに家に帰ろうと思ってるんだけど、一成君もどうかなって」

フェ「桃子さん達や母さん達にも挨拶するつもりなんでしょ？　なら一緒に行ってもいいかなって二人で話したの」

一「そうだな。二人がいてくれた方が俺としても助かる」

な「決まりだね。それじゃあ早速行きたいけど、一成君、準備とか大丈夫？」

一「ああ。問題ない。雲母、龍那、悪いけど神奈達の事お願いしていいかな？」

雲「はい、わかりました」

＜起きたらまた騒ぎになりそうだけどな・・・＞

後の事を二人に任せ、俺は玄関を出た。

一「そういえば、他のみんなは？」

フェ「みんなも街に出てるよ。はやてが案内してる。お昼にはコテージに戻ってみんなでバーベキューするから、その買い出しも兼ねてるんだけどね」

な「私も翠屋のケーキを差し入れにしようと思ってるの」

一「それはみんな喜ぶな。・・・・何だか俺も食べたくなって来た」

な「一成君もおいでよ。神奈さん達も誘ってさ」

フェ「だったらさ、いっそみんな呼べばいいんじゃない？」

な「あ、それいいね！」

そうこう話している間に、俺達は翠屋に到着した。なのはが先頭になって扉を開ける。

な「ただいま～！」

なのはの声に、店内にいた女性がふり向く。十年前からほとんど変わっていないその人は、嬉しそうに声をあげた。

女性「あら、なのは！　いつ帰って来たの？」

な「昨日だよ。今回の任務が終わって休みになったから寄りに来たの」

フェ「こんにちは桃子さん」

女性「フェイトちゃんも、元気そうで安心したわ。・・・・あら、そちらの方は？」

女性が俺に気付く。なのははいたずらっぽく微笑みながら女性に尋ねた。

な「誰だと思う？　お母さんも知ってる人だよ」

女性「私も知ってる？　言われてみれば・・・見覚えがあるような・・・」

な「ヒントは十年前だよ」

なのはのヒントに、女性は指を口元に当てながら考える仕草を見せた後、自信なさげに答えた。

女性「もしかして・・・一成・・・君？」

な「せいか～い！」

女性「まあ！　本当に一成君なの！？」

一「はい。お久しぶりです桃子さん」

女性・・・桃子さんは、開いた口が塞がらないといった表情を浮かべた。

男性「どうしたんだい桃子？　そんな驚いた声を出して」

桃子さんの声に、奥から一人の男性が出て来た。

桃「あ、あなた！　一成君よ！　一成君が帰って来たの！」

一「士郎さん、お元気そうですね」

俺を見た途端、男性・・・士郎さんは目を見開いた。

士「ッ・・・ああ、キミも元気そうだな」

な「あれ、あんまり驚かないんだね」

士「これでも充分驚いてるぞ。十年前に突然いなくなった男の子が、こうして立派に成長して帰って来たんだからな」

一「何も言わず、消えてしまって本当にすみませんでした」

士「なに、キミの事だ。何か事情があったんだろう？　それに、こうして帰って来てくれたのだから充分さ」

桃「そうね。本当に・・・」

一「・・・ありがとうございます」

暖かく迎え入れてくれた二人の優しさに、俺は心の底から感謝した。

な「お母さん、お姉ちゃんは？」

桃「美由紀なら・・・」

？「か、一矢さん！？」

奥からまた別の女性・・・美由紀さんが姿を現した。この人も全然変わっていない。

美「やっぱり一矢さんだ！　どうしてこんな突然・・・それに、十年前から全然変わってないじゃないですか！？」

桃「何を言ってるの美由紀？　彼は一成君よ」

美「へ・・・？」

一「いえ、美由紀さんの言う通り、一矢は俺の事です」

フェ「どういう事なの？」

一「全てお話しします。十年前、何があったのか・・・」

俺は自分の秘密を話した。今の姿が元々であり、十年前は子どもの

姿に変身していた事。ちょっとした理由で元の姿に戻った時に美由紀さんに出会った事。本当の事を話すわけにもいかないのでとっさに偽名を名乗った事など、包み隠さず全てを。

士「そうだったのか・・・」

桃「あなたも魔法関係者だったのね」

一「魔法の事知ってるんですか？」

士「ああ。十年前に教えてもらったよ。当時は衝撃だったよ。ウチの娘がそんな事に関わっていたなんて夢にも思わなかったからな」

美「という事は、私はずっと一成君に騙されてたって事だよね」

な「お姉ちゃん、それは・・・」

一「いいんだなのは。美由紀さんの言う通りなんだから」

俺は美由紀さんに頭を下げた。

一「俺は男として最低な事をしてしまいました。本当にすみませんでした」

美「駄目、許してあげない」

一「・・・・」

美「・・・でも、どうしても許して欲しかったら・・・・」

一「ゆ、許して欲しかったら？」

美由紀さんは俺に詰め寄ると、鋭い表情から一変、笑顔で告げた。

美「今度私とデートして。そしたら許してあげる」

一「で、デート・・・ですか？」

美「うん、デート♪」

あまりに予想外な言葉に、俺は呆けた声を出してしまった。

な「に、にゃはは・・・こんな時に冗談言わないでよお姉ちゃん」

美「あら、私は本気よ？　一矢さんが一成君だったんなら、私も躊躇いなくデートに誘え・・・」

一「？」

美「誘え・・・誘・・・・あう／／」

俺と目を合わせた美由紀さんが、見る見る内に顔を赤らめて俯いて

しまった。

桃「あらあら、美由紀ったら」

美「だ、だって・・・初恋の人が目の前にいるんだもん（ボソ）」

一「はい？」

美「な、何でもない！」

一「そ、そうですか・・・。わかりました、今度お時間がある時にでも一緒に出かけましょう」

美「う、うん。楽しみにしてる」

な・フェ「「む～～」」

一「どうした二人とも。リスみたいに頬を膨らませて」

フェ「一成、そろそろ私の家の方に行こうよ」

な「そうだね。それがいいよ。お昼の事とかは私がお母さん達に話しておくから」

一「え、でも、せっかく来たんだからもう少し話を・・・」

な・フェ「「い・い・よ・ね？」」

一「・・・わかった」

何とも言えない迫力を出す二人を前に、断れる気にはならなかった。
というよりなれなかった・・・

第十一話　アニメキャラっていうのは何年経ってもほとんど老けない　前編（後）

前編終了。後編はテスタロッサ家の訪問です。今回頂いた贈り物は、後編の後書きで纏めて紹介させて頂きます。

第十二話　アニメキャラっていうのは何年経ってもほとんど老けない　後編（前）

前後編に分けた意味は特にないです。

フェ「それじゃあ、また後でね」

な「うん」

翠屋に残ったなのはと別れ、俺とフェイトはテスタロッサ家のあるマンションに向かう事にした。

フェ「桃子さん達驚いてたね」

一「この調子じゃ、プレシアさん達も同じ反応するだろうな」

フェ「・・・むしろ一成の方が驚くかも（ボソ）」

一「何か言ったか？」

フェ「ううん、何でもないよ」

しばらくして、マンションに辿り着いた俺達は、エレベーターに乗り、テスタロッサ家の扉の前に立った。

フェ「ただいま」

ドアを開けると、数秒後、奥から一人の少女が出て来た。見た目十歳ほどのその少女には、なんと犬耳と尻尾がついていた。

少女「フェイトじゃないか！　どうしたんだい急に！？」

フェ「今回の任務先が地球だったの。その任務が終わって休暇になったから、久しぶりにみんなに会いたくなっちゃって」

少女「ううん、嬉しい事言ってくれるね・・・」

一「フェイト、この子は？」

少女の事を聞こうとしたと同時に、少女が俺を見て声をあげた。

少女「ッ！？　あ、あんたまさか・・・一成！？　一成かい！？」

一「何で俺の名を・・・」

そこで、ふと俺は初対面であるこの少女に、“彼女”の面影を見た。

少女「あたしだよ一成！　アルフ・・・」

一「・・・そうか！　キミはアルフの娘さんだな！」

俺がそう言うと、フェイトと娘さん（仮）がズッコケた。

少女「何でそうなるんだい！」

フェ「あ、あのね一成。・・・・この子がアルフだよ」

一「え？」

フェ「使い魔は主の魔力で生きている事は知ってるよね？　その魔力供給の負担を減らす為に、アルフは子どもの姿になってるの」

一「という事は・・・本当にこの子がアルフなのか？」

アル「だから、さっきからそう言ってるじゃないか」

一「す、すまない。まさかそんな事になってたとは思わなかったから」

アル「だいたい、あたしに子どもなんて・・・そんな相手もいやしないのにさ」

一「そうなのか？　アルフほどの魅力的な女性なら、いないほうがおかしいような気がするけど・・・？」

アル「んなっ！？　な、何馬鹿な事言ってんだい！／／」

俺は別に変な事を言ったつもりはない。だが、アルフは尻尾を左右に振りながら顔を赤らめてしまった。

フェ「ふうん・・・一成はアルフみたいな女性が好みなんだ・・・」

一「フェイト？」

アル「ど、どうしたんだいフェイト？　そんなジト目で一成を見つめるなんて」

フェ「それよりアルフ、母さんと姉さんは？」

アル「あ、ああ。二人なら買い物に行ってるよ。もう少ししたら帰って来ると思うけど」

フェ「そっか。じゃあ帰って来るまでお茶でも飲んで待ってようかな」

アル「じゃあすぐに準備するよ」

一「俺も手伝うよ」

それから十五分くらい経った頃、不意に玄関が開く音が聞こえ、続けて二人の女性の声が聞こえた。

？「ただいま～」

？「あら、この靴は・・・？」

フェ「帰って来たみたいだね」

フェイトが玄関の方へ向かうと、女性達の驚いた声が聞こえて来た。

？「フェイトじゃない！？　いつ帰って来たの！？」

フェ「ついさっきだよ。時間が出来たから会いに来たの」

？「驚いたわ・・・。でも、よく帰って来てくれたわね。嬉しいわ」

フェ「ふふ、これからもっと驚く事になるかもね」

？「？　どういう事？」

フェ「とりあえず中に入ろうよ」

フェイトが女性達を連れて戻って来た。十年前から変わっていない“あの人”と、十年前からすっかり成長していた“あの娘”を。

女性Ａ「あら、玄関に見慣れない靴があると思ったら、やっぱりお客さんがいたのね」

女性Ｂ「初めまして・・・って、あれ？　何でだろう、この人、どこか懐かしい感じがする・・・」

一「お邪魔してますプレシアさん、アリシアちゃん」

女性B「ッ・・・！　そ、その呼び方・・・もしかして！」

女性A・B「「一成（兄様）！？」」

二人の女性・・・プレシアさんとアリシアちゃんの声が見事に重なった。

一「十年ぶりですね。お元気そうでなによりです」

アル「もっと気の利いたセリフ思いつかなかったのかい？」

フェ「ふふ、私の時もこんな感じだったよ」

アリ「兄様！！」

ギュ！

抱きついて来たアリシアちゃんを、俺も抱きしめ返した。

アリ「お帰り・・・お帰りなさい、兄様・・・・」

一「ただいま。大きくなったねアリシアちゃん」

プ「そう言うあなたは変わってないわね一成」

一「プレシアさんこそ、お綺麗なままじゃないですか」

プ「ッ・・・。そ、そういう所も変わってないわね」

一「はい？」

プ「な、何でもないわ。それより、こんないきなり戻ってくるなんて・・・今まで何処にいたのかしら？」

一「そうですね。そこをちゃんと説明しないと。アリシアちゃん、そろそろ離れてくれると助かるんだが」

アリ「やだ」

一「やだって・・・」

フェ「ね、姉さん。一成も困ってるから」

プ「話が終わったら好きなだけさせてあげるから、今は我慢しなさい」

アリ「・・・・うん」

一「フェイトには二回目の説明になってしまうけど、我慢して聞いててくれ」

フェ「ううん。私ももう一度聞いて整理したかったから」

一「ありがとう。・・・それじゃあ、話を始めます」

今までに再会した人達にしたのと同じ様に、俺はテスタロッサ家の面々に、十年前の別れから今までの流れを包み隠さず全て説明した。

アル「そんな事があったのかい・・・」

プ「その“ある人物”っていうのは、どうして事前にエリオ達の事を知っていたのかしらね」

一「詳しくは話せませんが、信用・・・出来ない事もない人物ですから、安心・・・出来ないな・・・」

アリ「どっちなの？」

一「と、とりあえず、その話は置いておこう。そうだ、フェイトは六課で働いているけど、プレシアさん達はどうされてるんですか？」

プ「私もアリシアも神奈さん達と同じよ。民間協力者として、たまに手伝ってるわ」

一「そうなんですか？　てっきり一緒に管理局に勤めていると思ってたんですが」

アリ「私はそうしようと思ったんだけど、母様が・・・」

プ「私はあまり管理局を信用してないの。いざという時の為に、外から動ける人間も必要でしょ？」

一「そうですね。一理あります」

アル「もし、管理局の上層部が、フェイトやなのは達を利用しようとしたら、その時はあたし達が潰してやるって決めてるんだよ」

一「その時は、俺も喜んで協力するよ」

正直言って、俺も管理局は信用していない。・・・もちろん例外もいるが。

一「（“彼等”は元気にやってるだろうか・・・）」

プ「・・・あら？　もうこんな時間じゃない。一成、よかったらお昼ご飯でも食べていきなさい」

フェ「その事なんだけど、母さん、よかったら一緒にアリサのコテージに行かない？」

十二時をさした時計を見てそう言うプレシアさんに、フェイトが話を持ちかけた。

プ「アリサちゃんのコテージ？」

フェ「うん。そこでみんなでバーベキューをするつもりなの。せっかくだし、母さん達もどうかなって・・・」

アリ「楽しそう！　行こうよ母様！」

アル「あたしも賛成だよ！」

プ「そうね。じゃあ参加させてもらいましょうか」

フェ「そうこなくっちゃ。一成、母さん達は私が連れていくから、神奈さん達に話して来なよ」

一「そうだな。それじゃあコテージで会おう」

フェ「うん」

テスタロッサ家を後にした俺は、駆け足で家に戻った。

神「一成、どこに行っていたのじゃ？」

一「高町家とテスタロッサ家にあいさつにな。それでなんだが、実は今からアリサのコテージでバーベキューをするという事で誘われたんだが、みんなも行かないか？」

光「もっちろん！　ですよねお姉様？」

刹「むしろ断る理由が無いな」

天「かなりの大所帯になりそうですね。こちらもお肉やお野菜を持参した方がよさそうですね」

＜なら、行く途中にでもどっかで買えばいいんじゃねえの？＞

雲「そうだね。一成さん、龍那の言うように、お買い物してから向かうのがいいと思います」

一「確かに、そうした方がよさそうだな」

神「では、奮発して高い肉を買うべきじゃな」

天「ふふ、そうですね」

みんなを連れて再び家を出た俺は、近くの店で肉と野菜を大量に購入し、コテージに向かった。

な「あ！　一成君達が来たよ！」

すでに高町家とテスタロッサ家も到着していたようだ。全員の視線がこちらに向けられた。

一「すまない。待たせてしまったか？」

フェ「ううん。私達もついさっき来たばかりだから」

天「お肉とお野菜を買って来ました。足しにしてください」

は「ありがとうございます。けど、実はなのはちゃんとフェイトち

ゃん達にも持って来てもろたんですよ」

な「かなりの大人数になるし、足りなくなるかもしれないって思ったから」

一「考える事はみんな同じって事か」

フェ「ふふ、そうだね」

ス「ううー・・・お腹空いた・・・」

ティア「ちょっと、みっともない声出さないでよスバル」

エ「僕も・・・」

キャ「大丈夫エリオ君？」

ア「全員そろったし、そろそろ始めましょう」

こうして、バーベキュー大会が始まった。桃子さん、ノエルさん、ファリンさん、天音、雲母が焼く肉を、他の面々が食べていく。

エ「美味しいねキャロ」

キャ「うん」

ス「ああ！　ティア！　それ私が狙ってたのに・・・！」

ティア「知らないわよそんなの」

仲良く食べているエリオ君とキャロちゃん。それとは対照的に、不満そうに声をあげるスバルと、呆れ顔のティアナ。

は「ほらリィン、この肉食べごろやで」

リ「ありがとうございますはやてちゃん！」

シャ「桃子さん達大変そうね・・・。よし、ここは私がお手伝いを・・・」

アイ「何をする気だシャマル！？」

シャ「何って・・・一緒に焼き係をしようかと」

ヴィ「駄目に決まってんだろ！　あたし達を殺す気か！」

シ「ヴィータの言う通りだ！　大人しく食べる側に徹しろ！」

シャ「ちょ、ちょっと、そこまで言わなくてもいいじゃない」

アイ「そこまで言わないと意味がないから言っているのだ！」

ザ「・・・美味い」

はやてに渡された肉を嬉しそうに食べるリィン。シャマルさんの前

に立ち塞がるアインとヴィータとシグナムさん。その隣では、ザフィーラが黙々と肉を食べている。

アル「う～ん！　美味しいねぇ♪」

フェ「大勢で食べるといつもよりずっと美味しく感じるよね」

アリ「そうそう。何でなんだろう」

プ「あら、あなた達の場合、“大勢”じゃなくて、“彼”がいるからじゃない？」

アル「んぐっ！？」

フェ・アリ「「・・・・／／」」

プレシアさんがこっちを見て何か言った途端、アルフが咳き込み、フェイトとアリシアちゃんが焦ったように顔を逸らした。・・・・何言ったんだ？

士「なのは、仕事の方はどうなんだ？」

な「大変だけど、充実してるよ」

美「この前恭ちゃんから国際電話がかかって来たけど、相変わらずなのはの事ばっかり聞いて来てさ、困っちゃったよ」

な「そっか。お兄ちゃんにも会いたいな」

士「なに、心配しなくてもその内会えるさ」

な「うん」

久しぶりに家族と会話を楽しむなのは。そういえば、恭也さんと忍さんは海外なんだよな。俺も会いたかったのだが、残念だ。

神「美味い飯に、周りには美しい風景・・・これで酒があれば完璧なのじゃが・・・惜しいの」

刹「ならば、さっきの買い物の時に買っておけばよかったではないか」

神「ッ！　しまった！　ううう・・・妾はなんと愚かなのじゃ」

光「な、なにも泣かなくても・・・」

刹那に指摘され、泣きだす神奈。それを見て、光明は苦笑いを浮かべている。

ア「みんな楽しそうね」

す「計画してよかったねアリサちゃん」

ア「ええ。少しでもみんなの息抜きになったのなら私も嬉しいわ」

周りを見て嬉しそうに微笑むアリサとすずか。

一「（・・・・帰って来れて、本当によかった）」

みんなの笑顔を見て、俺は心からそう思った。

な「どうしたの一成君？　ほら、お肉焼けたよ」

一「いや、何でもないよ。それじゃあ、俺も貰うよ」

美「一矢さ・・・じゃなくて一成君。こっちも焼けてるよ」

アリ「兄様、私が取ってあげるね」

フェ「わ、私も取ってあげる！」

こうして、俺達は心ゆくまでバーベキューを楽しんだのだった・・・

第十二話　アニメキャラっていうのは何年経ってもほとんど老けない　後編（後）

作「今回もまったりした面白げの無い話だったな」

一「書いた本人が言ったら世話無いな」

天「ようやく自覚したのですね」

刹「前後編に分ける必要も無かったはずなのだがな」

光「いっぺんに書くのが面倒・・・大変だったからだって」

龍「面倒だったんだな」

雲「い、言っちゃ駄目だよ」

作「・・・色々言ってやりたいが、今回は贈り物報告会がメインだからさっさと移るぞ」

一「というわけで、贈り物報告会に移るぞ。まずは清浦刹那様から、前々回の贈り物として、クロノにクロスボーンガンダムＸ２改、光明にクロスボーンガンダムＸ１フルクロス、刹那にクロスボーンガンダムＸ３、天音に清浦刹那様お手製クッキーを。それから前回分として、すずかにガンダムＤＸとサテライトシステムの設計図を頂いたぞ」

刹「ムラマサブラスターは立派な浪漫武器だと思うのは我だけか？」

光「これって『鋼鉄の七人』出てた機体だよね。カッコいいな～」

一「しかし、すずかに設計図なんて・・・」

神「作れって事ではないのか？」

神「グラムサイト2様からは、前々回の分として、一成宛てに幽☆遊☆白書の「呪霊錠」と「書」。それと、女性に核心に迫られた時の上手い言い訳の仕方。エクスカリバーの鞘、ルールブレイカー、ゴーゴンの牙。前回分として、プレシア、アリシア、美由紀にデフォルメされた一成のぬいぐるみ。一成宛てに、望むだけ出て来る結婚指輪と、一夫多妻制の国の永住権利書、ゼロの使い魔の使い魔召喚魔法、シスコンとフェレットもどきとの居酒屋での同窓会、マグダラの聖骸布、斬り抉る戦神の剣（フラガラッハ）、後より出でて先に断つもの（アンサラー）を頂いたぞ」

一「シスコンとフェレットもどきって・・・クロノとユーノか？」

天「本妻は私ですからね！」

神「寝言は寝て言え！　本妻は妾じゃ！」

天「フリーダム様からは、前々回の分としてシンケンジャーのゴールド寿司と、作者宛てにハングリーバーガーを１００００ほど頂きました」

作「こっちが食われるわ！」

天「いえ、この中に一つだけ本物のハンバーガーが隠れているそうです。それを見つければ襲われる事はないそうです」

作「そ、そうか。それなら・・・」

天「ただし、ハズレを引くと、残りが一斉に襲い掛かるそうです」

作「先に言え！」

刹「緋水殿からは、ポーションと仮面ライダーオーズのベルトとメダルを頂いたぞ」

一「そういえば、オーズって最終回を迎えたんだよな」

龍「新しいヤツが始まったんだろ。確か・・・フォーゼだったか？」

神「どうせ、作者は観んのじゃろ」

雲「見ないんじゃなくて、見れないんだと思いますよ」

光「そうだね。日曜はいっつも昼前に起きるもんね」

光「二次元最高様からは、雲母宛てに一兄の寝顔写真と、作者宛て

にＭＨのいにしえの秘薬を２０個頂いたよ」

一「これでもっと無茶・・・じゃなくて、いざという時にも安心だな」

雲「あ、あわわわ・・・・はうっ／／」

ドサッ！

天「ど、どうしました雲母さん！？」

龍「まあ、そりゃこうなるよな・・・」

龍「マサって人からは、前々回分として、作者宛てにＭ２。一成に使い魔の卵とドールハウス、それに全使い魔のコスチューム。全員にもグローランサーのコスプレ服。前回分として、マーキュレイ、デュルクハイム、イグレジアス、ヴァルカニアの料理を貰ったぞ」

一「活動報告でグローランサー？の事書いたから贈って頂いたんだな」

神「作者にＭ２は勿体無いと思うのじゃが」

龍「一成が使い魔作ったら、何型になるんだろうな」

光「それよりコスプレしてみようよ！　私、イライザの服ね！」

刹「光明・・・お前では胸に部分がスカスカになってしまうぞ」

光「ッ・・・！」

龍「おい雲母、起きろって」

雲「う、ううん・・・あれ。私・・・」

龍「気絶してたんだよ。それより、次はお前の番だぞ」

雲「わ、わかった。えっと・・・アナザーさんからです。前に来て頂いたユーリさんから一成さん宛てに明星弐号。女性陣には、食べたら痩せるケーキ。それと、私宛てにムッツリーニさんから一成さんの等身大の抱き枕・・・え？」

光「いいなあ雲母。私も欲しい」

雲「えと・・・えと・・・その・・・あ、ありがとうございましゅ／／」

龍「だから、大事な所で噛むなっての」

雲「ご、ごめん。あ、それと、作者さん宛てに、ダウンロードミッション限定のアラガミ（カリギュラ、ヴィーナス、ラーヴァナ、ヤクシャ・ラージャ、ヤクシャ）を頂きました」

刹「・・・ん？　すぐに作者のツッコミが入るかと思ったが・・・

・どうしたんだ？」

神「作者なら、未だにハンバーガーの前で唸っておるぞ」

一「とりあえず、放つか」

作「むむむ・・・悩むな。あれ？　何の音・・・って！　アラガミ！？」

一「聖なる夜天様からは、メダジャリバー、バースとプロトバースのベルトとバースバスター×2、それとセルメダルを頂いたぞ」

神「これまでも色々なライダーのベルトを贈って頂いたが、そろそろ全員変身できるくらい集まったのではないか？」

天「そうですね。いつかやってみたいですね」

神「最後じゃ。ｓａｓｕｒａｉ様から射影機を頂いたぞ」

光「某ホラーゲームに出て来るあれだね」

龍「作者にでも使わせてみるか・・・とは言っても、今は忙しそうだけどな」

作「止めっ・・・こっち来るなぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7809k/

魔法少女リリカルなのは　永遠の旅人

2011年11月9日05時19分発行